岡山県埋蔵文化財発掘調査報告　81

山陽自道車道建設に伴う発掘調査 5

(本　文)

1. 中山1、2号貝塚
2. 酒津八幡山平谷遺跡
3. 酒津一水江遺跡
4. 菅生小学校裏山遺跡
5. 三田散布地
6. 二子14号墳

1993・3

日本道路公団広島建設局岡山工事事務所

岡山県教育委員会

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告　81

山陽自道車道
建設に伴う発掘調査
5

(本　　文)

1. 中山１、２号貝塚
2. 酒津八幡山平谷遺跡
3. 酒津一水江遺跡
4. 菅生小学校裏山遺跡
5. 三田散布地
6. 二子14号墳

１９９３・３

日本道路公団広島建設局岡山工事事務所

岡山県教育委員会

1．縄文時代　土壙－3（北東から）

2．窯　　址（北東から）

1．溝－1　出土遺物（442）

1．銅　　印

二子14号墳全景（南から）

序

日本道路公団広島建設局岡山工事事務所は、山陽自動車道の建設に伴い、その予定路線敷地内にある遺跡について、岡山県教育委員会と協議し、記録保存のため発掘調査を実施しております。

昭和59年度からは、浅口郡船穂町以東の27遺跡の発掘調査を実施いたしました。

本書はこのうちの６遺跡の発掘調査の記録であり、これが埋蔵文化財に対する認識と理解を深めるとともに、教育・学術のため広く活用されることを期待するものであります。

なお、この発掘調査および本書の編集は、岡山県教育委員会に委託して実施したものであり、ここに関係各位の御尽力に対し、深甚なる謝意を表するものであります。

平成５年３月

日本道路公団広島建設局岡山工事事務所

所長　佐伯博三

序

山陽自動車道は、瀬戸内圏域をむすぶ東西交通の大動脈であり、建設後の交通量の緩和および文化的・経済的波及効果については図りしれないほど大きいものがあると期待され、各方面から早期建設の要望がだされていたところであります。

岡山県教育委員会では、これらの大規模開発事業と埋蔵文化財の保護・保存の調整をはかるため日々努力を重ねておるところです。このたびの山陽自動車道関係では、関係当局と繰り返し協議、調整をはかってまいりましたが、やむなく記録保存の処置を講じなければならない遺跡がありました。これらの遺跡につきましては、すでに4分冊の報告書を刊行しております。今回の第5分冊には、船穂町中山貝塚、倉敷市菅生小学校裏山遺跡など6箇所の遺跡について収載しております。この中には、古墳時代終末期の貴重な古墳である二子14号墳のように移築保存を講じたもの、古墳時代の朝鮮半島との交流を示す豊富な遺物が出土した菅生小学校裏山遺跡など、学術的には多くの貴重な成果を得ることができました。この報告書が今後の古代吉備の解明の資料として、また文化財保護の一助として活用されることを希望します。

発掘調査の実施、報告書の作成にあたっては、『高速自動車国道山陽自動車道建設に伴う埋蔵文化財保護対策委員会』の各先生方から種々の御教示、御指導を得、また日本道路公団をはじめ地元の関係各位からも御協力を賜りました。関係各位に対し、記して深甚の謝意を表するしだいであります。

平成5年3月

岡山県教育委員会

教育長　竹　内　康　夫

例　　言

1．本書は、山陽自動車道建設に伴い、日本道路公団より委託を受けて、岡山県教育委員会が発掘調査を実施した報告書である。

2．本書に収載した遺跡は、中山１、２号貝塚（船穂町）、酒津八幡山平谷遺跡（倉敷市）、酒津－水江遺跡（倉敷市）、三田散布地（倉敷市）、菅生小学校裏山遺跡（倉敷市）、二子14号古墳（倉敷市）である。

3．発掘調査および報告書作成にあたっては、山陽自動車道建設に伴う埋蔵文化財保護対策委員会を設け、下記の方々に委員を委嘱した。対策委員会各位からは終始有益なご指導と助言をいただいた。記して深く感謝の意を表す次第である。

水内　昌康（岡山県文化財保護審議会委員）
鎌木　義昌（岡山理科大学）
近藤　義郎（岡山大学）1984年３月まで
西岡憲一郎（岡山県遺跡保護調査団）1991年５月まで
西川　　宏（山陽女子高校）
間壁　葭子（倉敷考古館）
高見　周夫（岡山県遺跡保護調査団）1985年４月～1991年３月
根木　　修（岡山市教育委員会）
藤田　憲司（倉敷考古館）1984年３月まで
新納　　泉（岡山大学）1985年４月～1991年５月
稲田　孝司（　〃　）1991年５月から
土井　基司（　〃　）1991年５月から

さらに、多数の県内外の研究者の方々から、ご助言、ご教示を得た。記して深く感謝の意を表わす次第である。

4．特殊な遺物および自然科学分野における鑑定、同定等については下記の諸氏、機関に依頼し、有益な教示を得、一部の成果については報告文をいただいた。記して深く感謝の意を表す次第である。

・石材同定　　三宅　　寛（岡山理科大学）
・C_{14}年代測定　山田　　治（京都産業大学）
・樹種鑑定　　畦柳　　鎮（岡山商科大学）
・丹・赤色顔料鑑定　安田　博幸、森　眞由美（武庫川女子大学）

・鉄・鉄滓の分析　　大澤　正己（新日本製鉄ＫＫ）

・考古地磁気法による年代測定　伊藤　晴明、時枝　克安（島根大学）

・土器付着の有機質分析　川野邊　渉（東京国立文化財研究所）

・種子同定　　パリノ・サーヴェイＫＫ

・胎土分析　　白石　　純（岡山理科大学）

・輸入陶磁器の産地同定　大橋　康二（九州陶磁文化館）

・緑釉陶器の産地同定　　京都市埋蔵文化財研究所

5．報告書の作成は、岡山県古代吉備文化財センター津寺事務所で実施した。

6．報告書に記載された高度値は海抜高であり、方位は特に示さないかぎり磁北である。

7．報告書に掲載する遺構、遺物の縮尺比率は基本的には共通するが、細部は各遺跡ごとに統一を計った。

8．報告書で用いる時代区分は、一般的な政治史区分に準拠し、それを補うため文化史区分、世紀を併用した。

9．本文の執筆は、担当者が分担し文末に文責を記した。

10．本書の編集は中野雅美が担当した。

11．報告書の関係する遺物、実測図、写真、マイクロフィルム等は、岡山県古代吉備文化財センター（岡山市西花尻1325－３）に保管している。

目　　次

Ⅰ　収載遺跡の地理的・歴史的環境……1
Ⅱ　調査に至る経緯と調査体制……6
Ⅲ　発掘調査報告……15
1　中山１、２号貝塚……15
2　酒津八幡山平谷遺跡……27
3　酒津－水江遺跡……45
4　菅生小学校裏山遺跡……53
5　三田散布地……419
6　二子14号墳……427

図 目 次

第１図　収載遺跡の位置図……1
第２図　収載遺跡の周辺遺跡分布図（１／50,000）……4～5
第３図　発掘調査遺跡位置図（１／200,000）……7

表 目 次

表－１　山陽自動車道関係遺跡一覧表(1)……8
表－２　〃　(2)……9

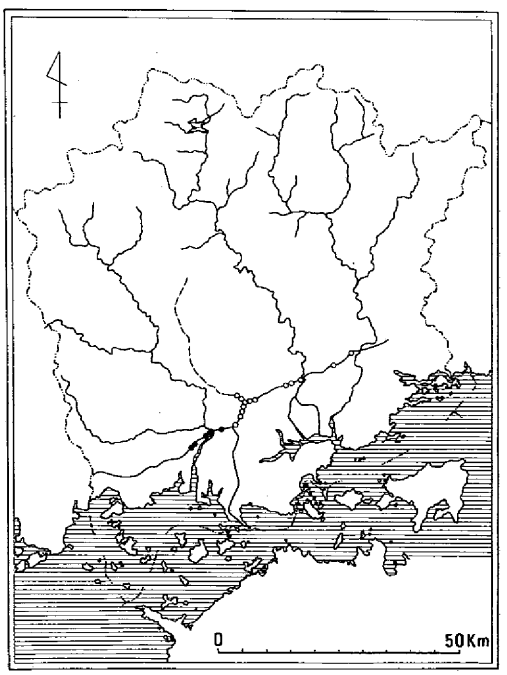
巻頭カラー図版目次

巻頭カラー図版　１－１　縄文時代　土壙－３(北東から)
－２　窯址　(北東から)
〃　２－１　溝－１　出土遺物(442)
〃　３－１　銅印
〃　４　二子14号墳(南から)

Ⅰ　収載遺跡の地理的・歴史的環境

本報告書に収載している遺跡は中山１号・２号貝塚・酒津八幡山平谷遺跡・酒津－水江遺跡・菅生小学校裏山遺跡・三田散布地・二子14号墳である。中山貝塚は船穂町・その他は倉敷市に所在する。菅生小学校裏山遺跡は現在山陽自動車道の倉敷インターチェンジの料金所になっている。発掘した順番と収載順は異なっていて、収載順は地理的に西から並べたものである。山陽新幹線と山陽自動車道は船穂町では新幹線が南東の平野部分を通過し、自動車道が北西の丘陵部分を通過している。しかし、愛宕山でクロスして、酒津八幡山にいたると南北逆になり、高梁川橋脚は自動車道が 300ｍほど下流に架かっている。中山貝塚のある丘陵地から酒津－水江遺跡のある高梁川河床迄の距離は直線で北東に６㎞を測る。

なお船穂町丘陵は海抜80～ 110ｍ程あり、その丘陵にはぶどう・スイトピー等のハウス栽培が盛んである。船穂町の平野部は高梁川の氾濫源を中世から近代まで開墾し干拓した水田に改良したものである。対岸の倉敷市街地に行くには船穂橋一本が架かっているのみ。酒津八幡山東方は高梁川河川改修のため人家はなく酒津焼窯・緑亀養殖地と酒津八幡神社があるだけの寂しいところである。酒津八幡山西方は河川改修後は河跡湖を呈していて、柳井原貯水池と呼ばれ、将来大規模な本格的な貯水池が計画されている。酒津八幡山自体は海抜138ｍを測る。



第１図　収載遺跡の位置図

この間の重要遺跡としては、船穂町に縄文時代の人骨を出土した涼松・里木貝塚がある。縄文時代の貝塚は海抜10ｍ以下の緩斜面に存在する。高梁川河床には弥生時代から古墳時代にかけての標式土器となる酒津式土器を出す酒津・水江遺跡がある。また実態は明らかではないが弥生時代の高地性集落説のある酒津八幡山遺跡・平安時代の多数の石帯を出土した酒津山腹遺跡等が認められる。

次に酒津・水江遺跡から菅生小学校裏山遺跡迄の距離は直線で東へ2.5㎞ある。自動車道は高梁川を渡るとすぐ海抜100ｍ

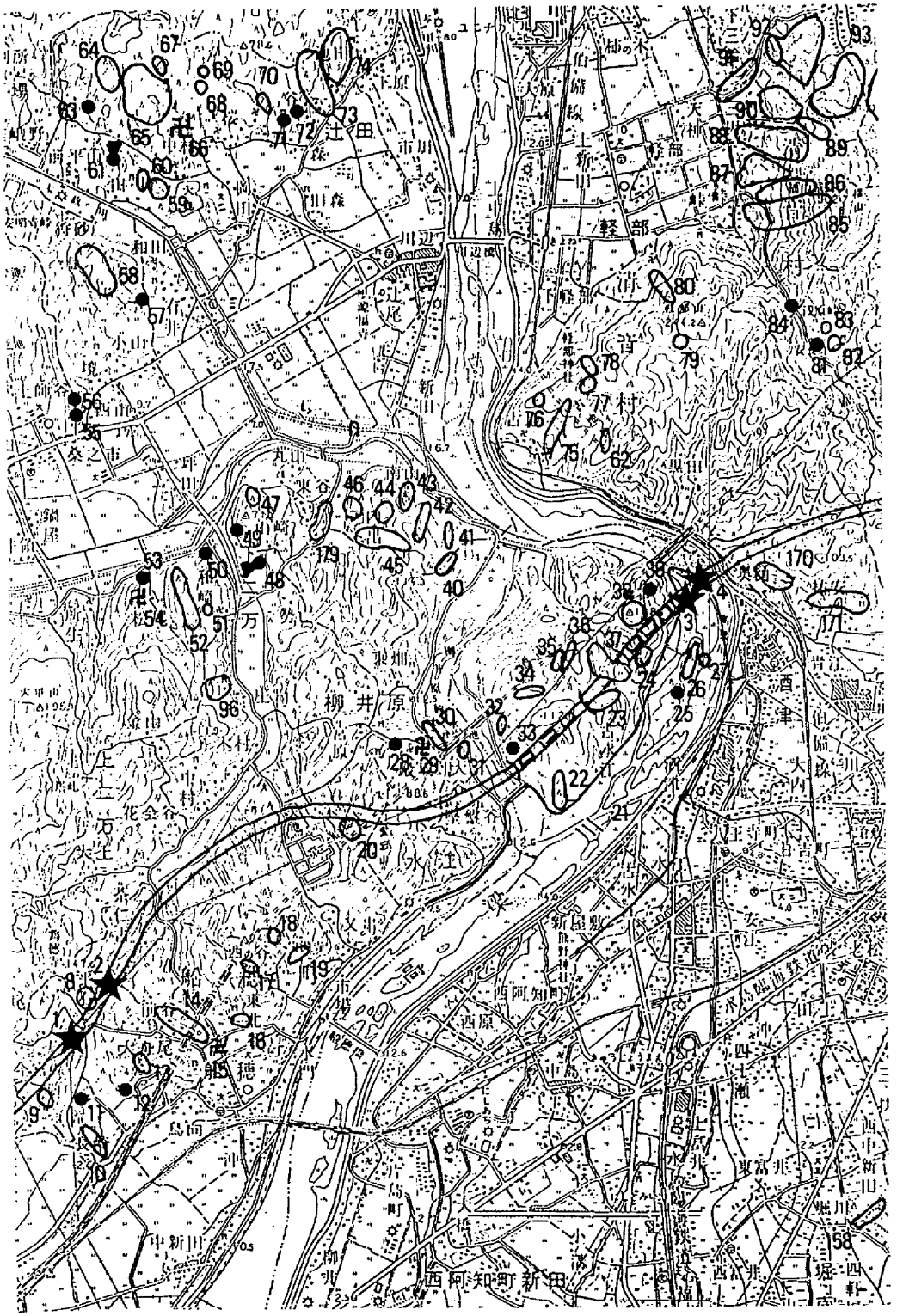
前後の山林に入り、赤松林をオープンカットしている。この間の遺跡としては旧石器時代では用地内に可能性のあった菅生小学校裏山遺跡、縄文時代では１㎞南に海抜10ｍ以下の南向きの緩斜面に存在する。西岡貝塚が平安時代では 1.7㎞北の安養寺裏山経塚があげられる。

菅生小学校裏山遺跡から三田散布地迄の距離は直線で東へ2.5㎞ある。この間は岡山県通史によると条里に準ずる地形として掲載されている水田地帯である。三田散布地北 300ｍには奈良時代の三田廃寺がある。

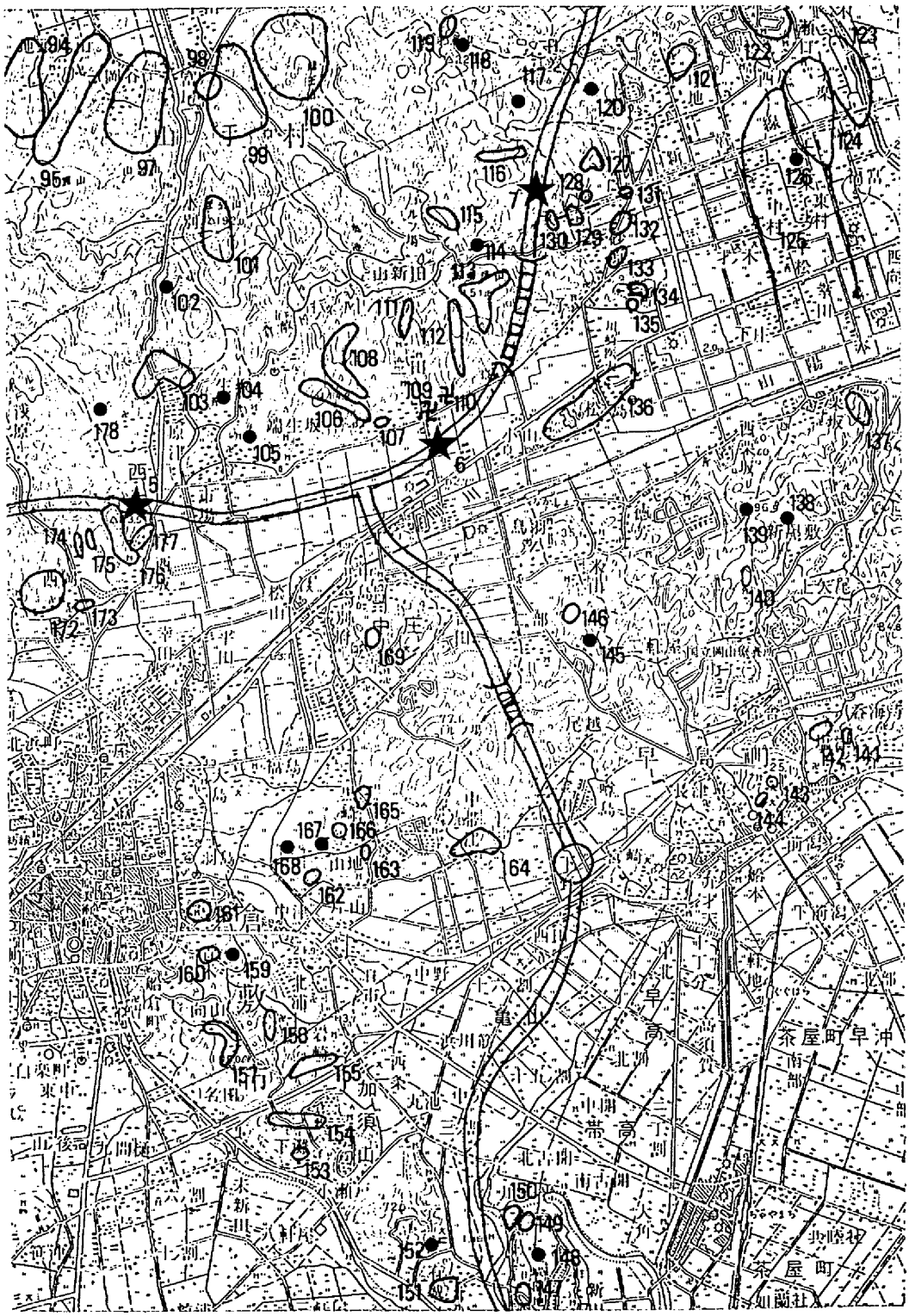
三田散布地から二子14号墳迄の距離は直線で北北東に 2.1㎞ある。この間ほぼ 900ｍの二子トンネルが掘削され、結果的に何基かの古墳が保存された。二子では新幹線のトンネルのすぐ上方を通過している。周辺には古墳時代から平安時代までの二子窯跡がある。　　（浅倉）

１．中山貝塚１号　２．中山貝塚２号　３．酒津八幡山平谷遺跡　４．酒津・水江遺跡　５．菅生小学校裏山遺跡　６．三田散布地　７．二子14号古墳　８．中山貝塚３号　９．涼松貝塚　10．長崎貝塚　11．長崎古墳　12．葛渕古墳　13．葛渕貝塚　14．前谷貝塚　15．宝蓮廃寺　16．里木貝塚　17．西の谷貝塚２号　18．上の山散布地　19．西の谷貝塚１号　20．愛宕十一塚古墳群　21．酒津・水江遺跡　22．酒津山水江渡古墳群　23．酒津山相生坂南古墳群　24．酒津八幡山南古墳群　25．酒津妙見山南端古墳　26．酒津妙見山古墳群　27．酒津妙見山散布地　28．山上山古墳　29．水徳寺跡　30．梁場山古墳群　31．池の内遺跡　32．酒津山相生坂西下古墳群　33．酒津山柳井原東古墳　34．酒津山入会Ｂ古墳群　35．酒津山入会Ｃ古墳群　36．酒津山入会Ａ古墳群　37．酒津山相生坂古墳群　38．大辻山遺跡群Ｄ　39．大辻山遺跡群Ｂ　40．城址　41．南山東古墳群　42．南山中古墳群　43．南山古墳群　44．天狗山古墳　45．南山西古墳群　46．矢形小坑陪塚古墳群、矢形小坑古墳　47．山崎遺跡　48．二万大塚古墳　49．山崎１号墳　50．外和崎古墳　51．金峯寺所蔵石斧出土地　52．大谷大塚古墳　53．松尾古墳　54．松尾廃寺　55．剣塚古墳　56．古墳　57．竜王塚有井１号墳　58．有井古墳群　59．宮造田遺跡　60．１号墳　61．田中塚古墳　62．古墳群　63．寺在古墳　64．室奥古墳群　65．山之谷古墳群　66．金剛寺址　67．妙見古墳群　68．山之谷製鉄遺跡　69．古池遺跡　70．古墳　71．東薗神社境内　72．稲荷塚古墳　73．西之谷古墳群　74．池田古墳群　75．古池古墳群　76．軽部城跡　77．軽部城跡　78．王子古墳群　79．軽部遺跡　80．大覚寺古墳群　81．安養寺西古墳　82．浅原寺跡　83．安養寺裏山経塚群　84．浅原峠古墳　85．峠古墳群　86．堂屋敷古墳群　87．万貫古墳群　88．天神古墳群　89．山地古墳群　90．妙蓮寺古墳群　91．北山古墳群・鋳物師谷古墳群　92．持坂古墳群　93．西群古墳群　94．地頭古墳群　95．津坂古墳群　96．萱原古墳群　97．岡谷古墳群　98．鎌戸原遺跡　99．平山古墳群　100．竜王古墳群　101．狸岩山古墳群　102．原津古墳群11号墳　103．原津古墳群　104．肥後池南西古墳　105．

端生坂古墳群６号墳　106.端生坂古墳群　107.三田散布地　108.三田古墳群　109.三田廃寺址　110.東光寺址・東光寺跡大榎　111.三田古墳群　112.二子高鳥居山古墳群　113.二子高鳥居山古墳群　114.二子古墳群12号墳　115.二子古墳群　116.二子古墳群　117.日差山古墳群９号墳　118.日差山古墳群７号墳　119.日差遺跡　120.日差山古墳群１号墳　121.山地遺跡　122.王墓山古墳群　123.才楽遺跡　124.岩倉遺跡　125.上東遺跡　126.荒神古墳　127.二子古墳群　128.岩部奥池東遺跡　129.御堂奥遺跡　130.二子御堂奥古窯址群　131.砂原北遺跡　132.砂原南遺跡　133.中袋遺跡　134.才公山古墳群　135.舟渡貝塚　136.松島城址　137.東栗坂古墳群　138.矢尾古墳　139.西栗坂古墳　140.矢尾神社遺跡　141.無津貝塚　142.津中遺跡　143.千光寺貝塚　144.城山貝塚　145.仁部古墳　146.仁部遺跡　147.鳳山遺跡　148.鳳山古墳　149.川子岩遺跡　150.ドンドン山古墳群　151.有城貝塚　152.多津美中学校古墳　153.下灘貝塚　154.十文字谷南古墳群　155.十文字谷北古墳群　156.日間山古墳群　157.向山ハツ塚古墳群　158.足高山古墳群　159.青木古墳　160.羽島貝塚　161.うしぐそ山遺跡　162.五日市西貝塚　163.五日市東貝塚　164.中帯江貝塚群　165.黒崎貝塚　166.黒崎南貝塚　167.黒崎古墳群２号　168.黒崎古墳群１号　169.帯江銅鉱山跡　170.祐安古墳群、祐安青江山遺跡　171.祐安古墳群　172.西岡古墳群、西岡廃寺及墓地　173.西岡貝塚　174.明見谷池西遺跡　175.明見谷池東古墳群　176.菅生小学校裏山遺跡　177.下西坂古墳群　178.笹池東古墳　179.矢形古墳群、東谷古墳



第2図　収載遺跡の周辺遺跡分布図（1／50,000）


茶屋町
茶屋町

Ⅱ　調査に至る経緯と調査体制

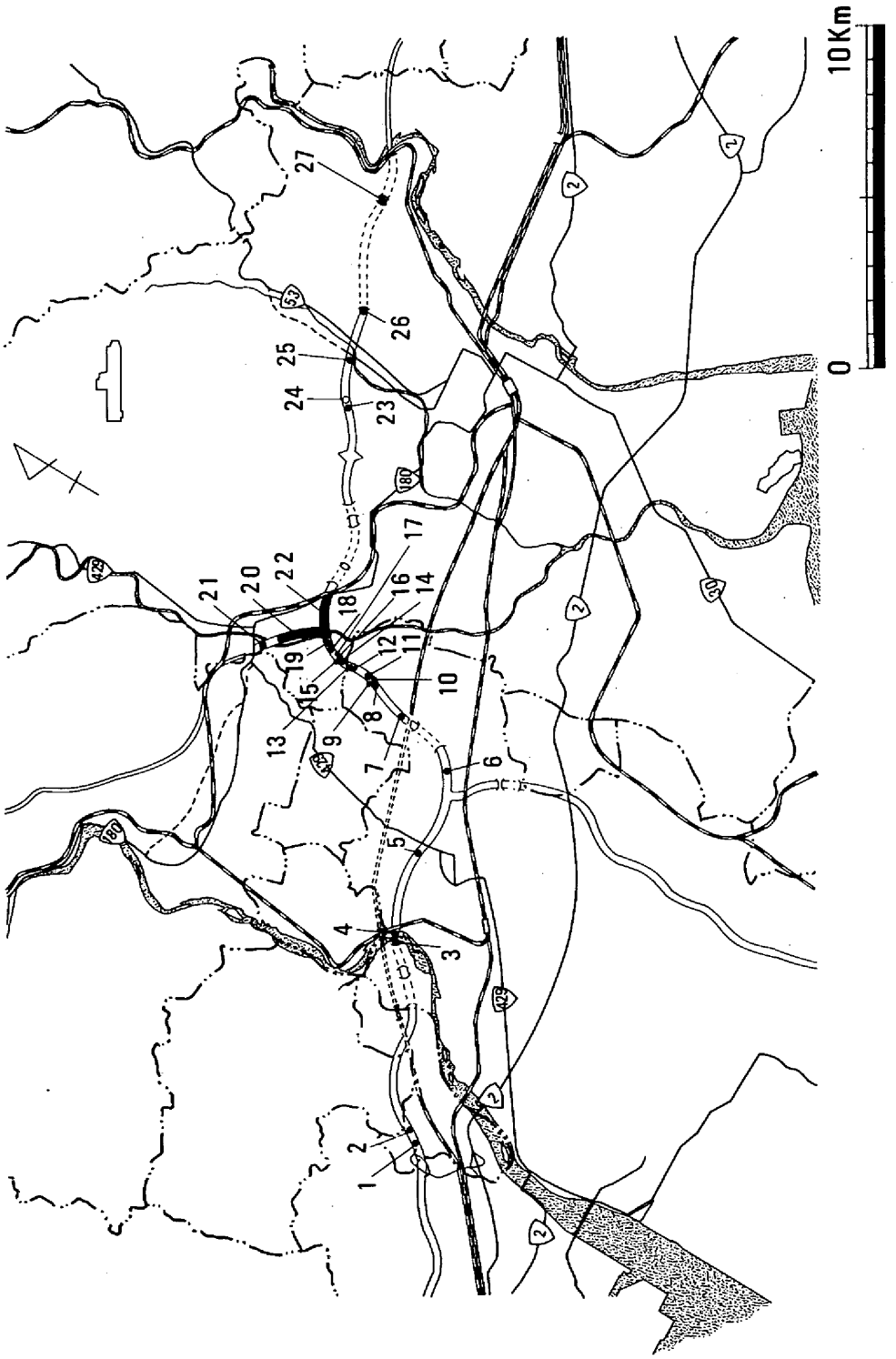
1．発掘調査の経緯

山陽自動車道は、1971年に基本計画が策定された。翌年には、ルートが決定し、周辺の文化財の分布状況について建設省内で検討が行われた。その後、建設省から予定ルートが示された。これに基づき、岡山県教育委員会は、1972年に国庫補助を受け、岡山県遺跡保護調査団の協力を得て、岡山県内の発表された路線の約 500m幅について遺跡分布調査を実施した。その結果、181カ所の遺跡が存在することが判明した。1973年には、姫路～備前八木山インター間の路線発表が行われ施工命令が出された。これを受けて、岡山県教育委員会は日本道路公団と協議を重ね、1972年に変更ルート上で発見された荒神社遺跡の発掘調査を実施し、報告書を刊行した。（註１）。

1972年には、福山市～倉敷市玉島間のルート決定が行われ、日本道路公団から委託を受けた建設省中国地方建設局岡山国道工事事務所と協議を行い、1979～1980年度にかけて、浅口郡鴨方町内の５遺跡について発掘調査を実施し、報告書を刊行した（註２）。その後、1981～1987年度に浅口郡金光町、倉敷市玉島および笠岡市内の遺跡について、第一次調査、全面調査を実施した。引き続き1988年度に報告書を刊行した（註３）。

1977年には、倉敷市玉島～岡山間のルート決定が行われた。これに基づき、日本道路公団と協議を重ね、1984年度から倉敷市以東の遺跡について第一次調査および全面調査を実施することとなった。まず、1984年５月から酒津八幡山平谷遺跡（倉敷市酒津）の第一次調査から行った。この遺跡は、当初古墳状の高まりが数カ所と土師器の散布地であるとの理解であった。第一次調査および一部全面調査の結果、古墳状の高まりは、自然地形が浸食を受けた残存部であることが判明した。土師器の散布は、丘陵状の古墳・集落址からの流入であることが明らかとなった。このため山裾部に検出された近世の神社関係遺構を検出するに留まった。また、並行して調査を行った酒津－水江遺跡（倉敷市酒津）は、第一次調査で路線内には遺跡が存在しないことが明らかとなった。さらに、同年７～８月に中世貝塚の中山１、２号貝塚（浅口郡船穂町）の第一次調査を実施した。貝塚の存在する丘陵一帯は、果樹のための掘削で大規模な削平を受けており、貝の集積地点は数カ所確認できたものの、原位置をとどめるものではなく、集落址および貝塚は破壊されていた。

1984年９月からは、倉敷市矢部地内の分布調査と第一次調査を行い、遺跡の存在、範囲、性格の把握に努めた。矢部奥田遺跡では、縄文中期から後期の残存状態の良好な貝塚を確認したのをはじめ、矢部堀越遺跡、矢部古墳群Ａ、Ｂ、大坑遺跡と1984年度末まで第一次調査を実施



第3図　発掘調査遺跡位置図（1／200,000）

表－1　山陽自動車道関係遺跡一覧表（1）

地点	遺跡名	所在地	内容	面積	調査地区と面積								備考	報告書
					59年度	60	61	62	63	H1	H2	H3		
1	中山1号貝塚	浅口郡船穂町中山	中世(平安～鎌倉)貝塚包含層	850	850									81
2	中山2号貝塚													
3	酒津八幡山平谷遺跡	倉敷市酒津	古墳時代	770	770									〃
4	酒津－水江遺跡	〃	弥生時代～中世	260	260									〃
5	菅生小学校裏山遺跡	倉敷市西坂	旧石器時代～中世集落、中世墓公的施設	21,450		7,900	10,000	3,550						〃
6	三田散布地	倉敷市三田	中世～現代水田	200			200							〃
7	二子14号墳	倉敷市二子	古墳時代終末墳墓	1,700			1,100	600						〃
8	矢部古墳群A	倉敷市矢部	古墳時代全期間古墳群	4,760	360		4,400							82
9	矢部古墳群B	〃	弥生時代～古墳時代集落址、墳墓群	2,820	400		2,000	400						〃
10	矢部大坎遺跡	〃	弥生時代～中世集落址、祭祀遺構	1,200				1,200						〃
11	矢部奥田遺跡	〃	縄文～中世古墳時代前半の粘土採掘穴及び縄文～中世の集落址	3,200	400		2,800							〃
12	矢部堀越遺跡	〃	旧石器～中世弥生中期～中世のつ集落址と古墳群	7,400	400		7,000							〃
13	郷境墳墓群	岡山市津寺	弥生時代末～古墳時代初頭墳墓	1,365			125	1,240						
14	前池内遺跡	岡山市津寺前池内	弥生～中世集落、墓	6,835			385	6,450						

表－2　山陽自動車道関係遺跡一覧表（2）

地点	遺跡名	所在地	内　容	面積	調査地区と面積								備考	報告書
					59年度	60	61	62	63	H１	H２	H３		
15	前池内３号墳	岡山市津寺　前池内	古墳時代後期　墳墓	1,675				1,675						
16	前池内４～７号墳	〃	弥生時代～中世　集落、墓	990					990					
17	後池内古墳	岡山市津寺	５世紀後半	240						240				
18	黒住・鍋山遺跡	〃	縄文～中世　集落、水路、墓	24,463			456	23,050	957					
19	甫崎天神山遺跡	〃	縄文時代～近世　弥生墳墓群、古墳群、中世山城址、中世集落址	15,729			300	12,070	3,093	266				
20	三手・津寺遺跡	岡山市三手　岡山市津寺	弥生時代～近世　集落、墓、水田、館、公的施設	88,271			328	920	57,620	29,403				
21	高塚遺跡	岡山市高塚	弥生時代～近世　集落、墓、旧河道　館	16,195				124	140	15,931				
22	政所遺跡	岡山市加茂	弥生時代中期～中世　集落	754						754				
23	富原西奥古墳	岡山市富原	古墳時代終末期　墳墓	300					300					
24	富原大池奥山遺跡	〃	トレンチ調査の結果、富原大池奥山遺跡は遺構、遺物が全く検出されなかったため、遺跡では無いということが判明したことである。 しかしながら、調査地点から西に約70m程の位置で直径約10～12m、高さ約１m程の古墳（円墳？）を１基確認。	300				300						
25	田益遺跡	岡山市田益	弥生前期～３									5,440		
26	白壁古墳	岡山市横井上	古墳時代後期　墳墓	600							300			
27	平廻古墳	岡山市玉柏	古墳後期の横穴式石室	1,000						H1.12.1～2.3.31　1,000				

した。また、順次行っていた分布調査において、倉敷市二子の丘陵上に新たな横穴式石室をもつ古墳（二子14号墳）が発見された。さらに、倉敷市三田地内に土器の散布地（三田散布地）を確認した。

1985年４月からは、調査担当２名で菅生小学校裏山遺跡（倉敷市西坂）の第一次調査に着手した。この遺跡は、倉敷インターチェンジ内にあたり旧石器時代の散布地として周知されていて、その北端一部が路線内に入るため、丘陵上にトレンチ調査を行った。その結果、旧石器時代の遺跡は路線内に伸びていないことが明らかとなった。しかしながら、丘陵東斜面～山裾部に土器の散布が認められたため、第一次調査を行ったところ、山裾部一帯に古墳時代～中世に至る集落址の存在が確認され、その対象面積は15,000㎡を越えるものであった。さらに丘陵東斜面に横穴式石室をもつ古墳（西坂古墳）が１基存在することも判った。このため引き続き全面調査を実施することとなった。遺跡の規模は、再度の範囲確認調査の結果最終的には18,000㎡となり、1987年９月まで発掘調査が続いた。

1986年度からは、調査員の増員が計られ、複数の遺跡に対応することとなった。1986年度は、菅生小学校裏山遺跡、三田散布地、二子14号墳、矢部古墳群Ａ、矢部古墳群Ｂの発掘調査を調査員５名をもって実施した。菅生小学校裏山遺跡は、昨年より引き続き２名の調査員で調査を実施した。西坂古墳が明らかになった時点で、現地説明会を行い多数の見学者が参加された。また、西坂古墳については、地元有志の熱意ある要望により周辺の墓地内に移築保存された。三田散布地は、第一次調査を行った結果、予想された中世の集落址等は確認されなかった。二子14号墳は、当初径10数ｍの横穴式石室をもつ円墳と考えられていたが、調査の進行に伴い、７世紀代の二段築成の方墳であることが判明した。このような古墳時代終末期の二段築成の方墳は、県内でも例が少ないものである。このため随時行われた対策委員会で、現状保存等の意見が委員各位より出された。これに基づき、岡山県教育委員会は再々の協議を日本道路公団と行うとともに、対策委員会委員各位との意見の調整に努めた（経過については後述）。その結果、地権者の好意もあって、古墳に隣接する地権者の用地に移築保存することとなった。調査は、1986年５月～８月まで行い調査員１名で行ったが、その間、菅生小学校裏山遺跡の担当調査員一人が２カ月間応援に出向いた。また、古墳の状況が明らかになった時期に見学会を催したところ、多数の参加があった。

倉敷市矢部地区では、矢部古墳群Ａ、Ｂの調査が行われ、多数の古墳、集落等が確認された。1987年度は、前年の調査員５名から15名に大幅増員され、主に倉敷市東部地内および足守川以西の岡山市津寺地区の各遺跡の調査が実施された。また、本報告掲載の菅生小学校裏山遺跡が用地内病院等の立ち退き問題が進まず、７月まで調査が継続された。さらに、二子14号墳の移築に際しての若干の補助調査が行われた。

その後調査は、大規模なものになり、岡山市津寺地内、同市高塚地内、同市加茂地内などの沖積地の大集落址の調査などを行い1991年３月に一部を残し終了した。

報告書は、1991年度から専従調査員６名の担当を中心に、第５分冊（中山１、２号貝塚、酒津八幡山平谷遺跡、酒津－水江遺跡、菅生小学校裏山遺跡、三田散布地、二子14号墳）、第６分冊（矢部古墳群Ａ、矢部古墳群Ｂ、矢部大坑遺跡、矢部奥田遺跡、矢部堀越遺跡）、第７分冊（富原古墳、平瀬古墳、白壁古墳）を1992年度に刊行する。　（中野）

２．二子14号墳の保存について

二子14号墳は、発見当初径10ｍ程度の横穴式石室を主体部とする円墳と考えられていた。しかし、調査が進行するにしたがい予測外の状況を呈してきた。円墳と考えられていたものが外面には石積みを施した１辺約12～13ｍの２段築造の方墳であることが判明した。また、天井石の落下したものと考えていたものも、石室の閉塞石であることが知られた。さらに、石室内から出土した須恵器により７世紀中頃の古墳であることが明らかとなった。このように、二子14号墳は古墳時代の終末期の貴重な古墳であることが確認された。

昭和61年６月19日に『高速自動車国道山陽自動車道建設に伴う埋蔵文化財保護対策委員会』が開かれ、古墳についての説明と現地視察の後、同対策委員から古墳を現状保存するよう強く要請された。早速、文化課はこの保存について日本道路公団と協議した。

古墳を現地に保存するためには、山陽自動車道の路線を変更するか、トンネル工法にするかの何れかの方法が考えられた。日本道路公団は、路線変更の場合は、新たに用地の取得が必要になってくるうえ、買収が既に完了している用地の一部が不用となるとともに隣接の本線工事が既に着工済みであることから強い難色を示した。また、トンネル工法については、地形土質から判断して難工事になり、工期が長くなるとともに多大な経費増ともなり、その上、当該地の南には二子トンネルが計画されており交通安全上好ましくないなどの問題点が示された。以上のような状況を昭和61年10月６日に開いた同対策委員会において説明したが、対策委員からは、現状保存の努力を続けるよう再度要請された。文化課はこれらの意見をうけて文化庁をはじめ関係機関とも再三協議を重ね、保存方法について検討を行った。昭和61年12月23日に同対策委員会を開いたが、さらに保存についての協議を重ねるようにとの要請が確認された。

その後も、文化課と道路公団の間で保存について協議が重ねられたが、「現状での保存は出来ない」との道路公団の最終の意向が示された。昭和62年１月22日に同対策委員会を開き、これまでの検討内容等を説明し、やむをえず移築の方向で保存を図る旨を提示したが、協議の結果、対策委員各位は遺憾とされた。岡山県教育委員会としては、対策委員会の意見をふまえつつも止むを得ぬ保存措置として移築保存を実施せざるをえないものと判断した。そして、移築

にあたっては奈良国立文化財研究所の指導助言をいただくと共に補足調査を実施した。移築先については、地権者の御好意により隣接地に用地の提供を受けた。移築工事は、日本道路公団が担当し、調査担当者が指導を行い、文化財保存修理の経験ある地元業者の施工により昭和63年11月に完成した。こうして、二子14号墳は移築保存が図られた。　　(井上)

3．調査の体制

発掘調査は日本道路公団と岡山県の委託契約に基づき岡山県教育委員会が当たった。なお、昭和59年（1984）11月1日には文化課から独立して岡山県古代吉備文化財センターが設置され、契約事項は文化課が行い、発掘調査はセンターが担当することとなった。

昭和59年度（4月1日～10月31日）

岡山県教育庁文化課

課　　長　松元昭憲　　参　　事　橋本泰夫
課長代理　逸見英邦・吉本唯弘　　文化財主幹　佐々木清
課長補佐　河本　清　　主　　任　古瀬　宏・遠藤勇次
文化財保護主査　浅倉秀昭（調査担当）　主　　事　楢原充二
文化財保護主事　中野雅美（　〃　）

昭和59年度（11月1日～3月31日）

岡山県教育長文化課

課　　長　松元昭憲　　課長代理　逸見英邦・吉本唯弘
課長補佐　河本　清　　主　　任（兼）遠藤勇次

岡山県古代吉備文化財センター

所　　長（兼）松元昭憲　　次　　長　橋本泰夫
（総務課）課　長　佐々木清　　主　　任　古瀬　宏・遠藤勇次
主　　事　楢原充二
（調査課）課　長（兼）河本　清　　文化財保護主査　浅倉秀昭（調査担当）
文化財保護主事　中野雅美（調査担当）

昭和60年度

岡山県教育庁文化課

課　　長　松元昭憲（12月15日まで）・高橋誠記（12月16日から）
課長代理　逸見英邦・吉本唯弘　　埋蔵文化財係長　正岡睦夫
主　　査（兼）遠藤勇次

岡山県古代吉備文化財センター

所　　長　松元昭憲（12月15日まで）・高橋誠記（12月16日から）
（総務課）課　長　佐々木清　　主　　査　　遠藤勇次
主　　任　花本静夫　　主　　事　　楢原充二
（調査課）課　長　河本　清　　文化財保護主任　浅倉秀昭（調査担当）
文化財保護主事　中野雅美（調査担当）

昭和61年度

岡山県教育庁文化課

課　　長　高橋誠記　　課長代理　　逸見英邦
埋蔵文化財係長　正岡睦夫　　主　　任　　仁宮秀博

岡山県古代吉備文化財センター

所　　長　橋本泰夫　　（総務課）課　長　佐々木清
主　　査　遠藤勇次　　主　　任　　花本静夫
主　　事　片山淳司
（調査課）課　長　河本　清　　文化財保護主査　井上　弘（調査担当）
文化財保護主任　浅倉秀昭（調査担当）文化財保護主事　中野雅美（　〃　）
主　　事　亀山行雄・大智　浩（調査担当）

昭和62年度

岡山県教育庁文化課

課　　長　高橋誠記（12月15日まで）・吉尾啓介（12月16日から）
課長代理　河野　衛　　課長補佐（埋文係長）伊藤　晃
主　　査　藤川洋二

岡山県古代吉備文化財センター

所　　長　橋本泰夫　　（総務課）課　長　佐々木清
総務主幹　藤本信康　　主　　任　　花本静夫・岡田祥司
主　　事　片山淳司
調査第二課長　葛原克人　　文化財保護主幹（第一係長）正岡睦夫
第二係長　松本和男　　文化財保護主査　山磨康平
文化財保護主任　浅倉秀昭・中野雅美・内藤善史
文化財保護主事　川崎　肇・宇垣匡雅・片山泰輔
主　　事　　亀山行雄・佐守　学・大智　浩・小松原基弘・石田善人

平成３年度

岡山県教育庁文化課

課　　長　鬼澤佳弘（1月20日まで）・渡辺淳平（1月21日から）

課長代理　大橋義則　　課長補佐（埋文係長）柳瀬昭彦

主　　査　時長　勇

岡山県古代吉備文化財センター

所　　長　横山常實　　次　　長　　河本　清

（総務課）課　長　藤本信康　　課長補佐　　小西親男

主　　査　平松郁男（1月31日まで）・石井　茂（2月1日から）

主　　任　坂本英幸　　主　　事　大西治郎・亀山幸治・渡邊徹也

調査第二課長　正岡睦夫（報告書担当）　文化財保護主幹　高畑知功（報告書担当）

第二係長　浅倉秀昭（　〃　）　文化財保護主査　中野雅美（　〃　）

文化財保護主事　亀山行雄（　〃　）主　　事　　古市秀治（　〃　）

註

註1　岡山県教委「山陽自動車道建設に伴う発掘調査」Ⅰ『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』25　1978年

註2　岡山県教委「山陽自動車道建設に伴う発掘調査」2『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』42　1981年

註3　笠岡市教委「山陽自動車道建設に伴う本谷遺跡」『笠岡市埋蔵文化財発掘調査報告』1　1987年

岡山県教委「山陽自動車道建設に伴う発掘調査」3、4『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』69、70　1988年

Ⅲ　発掘調査報告

1．中山1、2号貝塚

例　言

1．本報告は、山陽自動車道建設に伴い、日本道路公団の委託を受けて、岡山県教育委員会が昭和59年度に発掘調査した、浅口郡船穂町中山所在の中山１、２号貝塚の発掘調査報告書である。

2．発掘期間は、昭和59年７月３日～８月29日である。

3．発掘調査は、岡山県教育委員会文化課職員浅倉秀昭、中野雅美が担当した。

4．報告書の作成は浅倉が行った。

5．出土遺物、図面、写真等は、岡山県古代吉備文化財センターに保管している。

目　　次

１．地理的・歴史的環境……19
２．調査の経過……20
３．調査の概要……21
(1)トレンチ調査の概要……21
(2)貝塚の概要……23
４．まとめ……26

図　目　次

第１図　遺跡地図（1/25,000）……19
第２図　中山貝塚周辺地形図（1/2,000 ）……21
第３図　トレンチ・グリッド配置図（1/2,000 ）……23
第４図　１・２号貝塚断面図（1/40）……24
第５図　１・２・４号貝塚出土遺物（1/4 ）……24

図版目次

図版１－①中山貝塚遠景（南から）　②貝散布状況
③貝塚内の貝類　④対策委員会８月８日
図版２－①Ｔ－８　②Ｔ－９
③Ｔ－10　④Ｔ－12
図版３－①１号貝塚　②２号貝塚
③４号貝塚
図版４－①１号貝塚出土遺物　②２号貝塚出土遺物
③４号貝塚出土遺物

1．地理的・歴史的環境

中山貝塚は浅口郡船穂町中山に所在する中世貝塚である。遥照山塊から派生する海抜70m前後の低丘陵上の瀬戸内海を見下ろす南緩斜面に1号から3号まで記載されている。（註1）しかし、1・2号貝塚は現地を踏査したところ、ぶどうを中心とする果樹園の中に直径5mばかりハイガイの広がりを見せて所在していたが、3号貝塚は既に消滅していた。

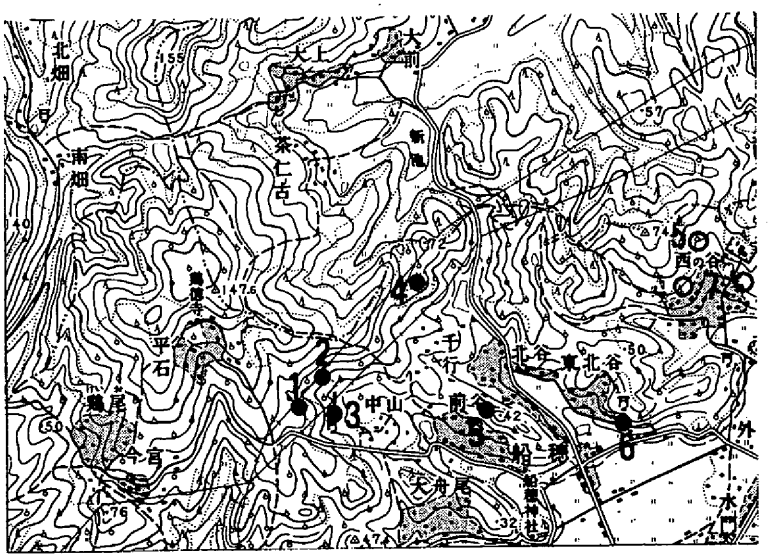
付近の山麓には縄文時代の里木貝塚・涼松貝塚がある。里木貝塚は1922年と1969年の2回発掘調査されている。涼松貝塚も1944年・1950年・51年に発掘調査されている。（註2）弥生時代の遺跡としては大谷に池の内遺跡がある。古墳時代には前方後円墳（？）の后王古墳・円墳の梁場山古墳群・横穴式石室の王子古墳等がある。中世貝塚としては西の谷貝塚（註3）と上の山貝塚（註4）が調査されている。

（註1）「岡山県遺跡地図」第1分冊　昭和48年　岡山県教育委員会

（註2）間壁忠彦他『里木貝塚』「倉敷考古館研究集報」第7号　昭和44年　倉敷考古館

（註3）小野一臣『浅口郡船穂町西谷貝塚』「古代吉備」第7集　昭和46年　古代吉備研究会

（註4）江見正巳『上の山貝塚確認調査』「岡山県埋蔵文化財報告12」昭和56年岡山県教育委員会



第1図　遺跡地図（1／25,000）

1．中山1号貝塚　2．中山2号貝塚　3．王子古墳　4．千行貝塚
5．前谷貝塚　6．里木貝塚　7．西の谷貝塚

2．調査の経過

発掘調査は7月3日に開始した。現地は雑草が背たけよりも高く茂っていた。草刈りから作業を始める覚悟をしていたところ、公団がタイミング良く用地整備のためもあって、草刈りを一気に行い、焼却処分してくれた。その後の調査上の問題点は畑地灌漑用パイプラインと保安林の存在であった。前者は2本の所在を十分確認し、後者は貝塚とはほとんど無関係と考えられるので、どちらも大きな支障にならなかった。

調査対象は1号・2号の2基の貝塚であり、これらは地表に貝が既に散布している所が2ヵ所あって、所在地が明らかである。しかしその他の貝塚の存在の有無と遺跡の有無を確認するために、調査対象地域の全長 250m・幅 100mの広大な範囲をトレンチを主体に調査した。

以下調査の経過を日誌抄で見ていこう。なお最終発掘面積は 810㎡となった。

日誌抄

昭和59年

7月3日（火）器材搬入・テント設営
7月4日（水）T－1調査開始・遠景写真撮影
7月10日（火）T－1調査終了・T－2調査開始
7月14日（土）T－3・4調査開始
7月18日（水）T－2調査終了・T－5調査開始
7月19日（木）T－4調査終了・T－6調査開始
7月23日（月）T－3調査終了・T－7・8調査開始
7月24日（火）T－5・6調査終了・T－9・10調査開始
7月25日（水）T－11調査開始
7月27日（金）T－7・8調査終了
7月31日（火）T－9・10調査終了
8月1日（水）T－11調査終了・T－12調査開始
8月6日（月）T－12調査終了・T－13・14調査開始
8月8日（水）対策委員会開催
8月9日（木）T－13・14調査終了・T－15～20調査開始
8月10日（金）T－15～20調査終了・1号・2号貝塚調査開始
8月28日（火）1号・2号貝塚調査終了・断面剝ぎ取り
8月29日（水）器材撤収

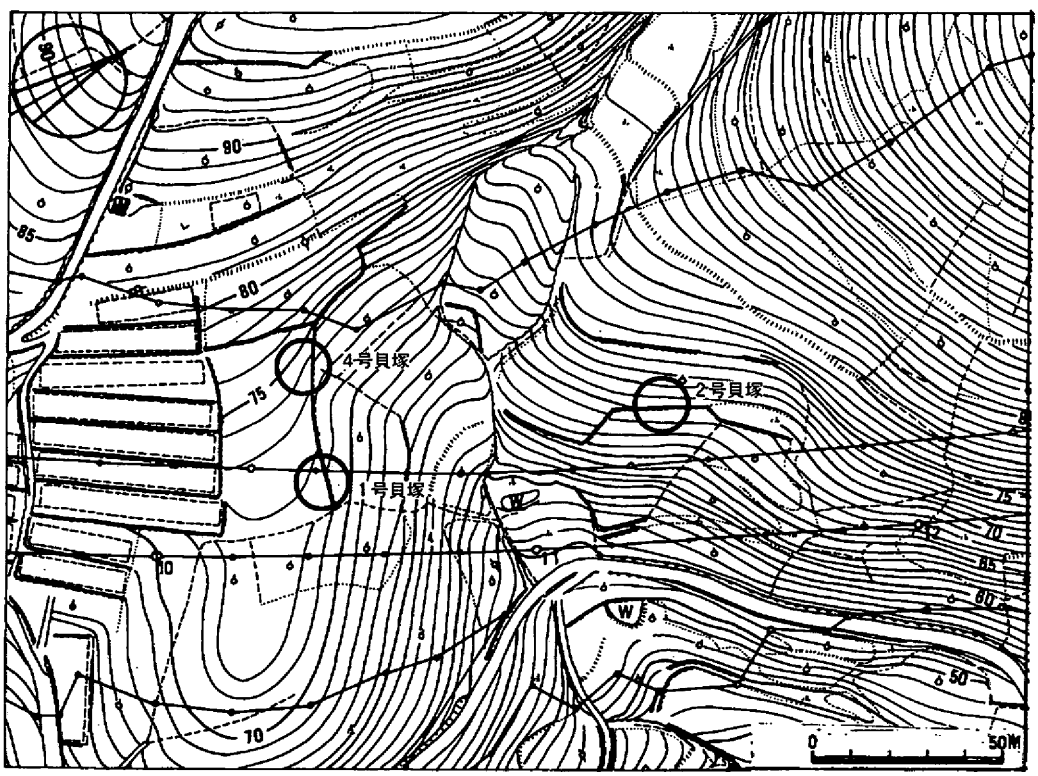
3．調査の概要

(1)トレンチ調査の概要

本貝塚では合計20本のトレンチを設定し、発掘した。長さは地形によって様々で、長いもので55mに達し、短いもので７mを計る。幅は２mのものが17本、１mのものが３本になった。すべてのトレンチで地山が現れるまで掘り下げている。深さは平均していて70cm程度である。ちょうどこれはぶどう畑の天地返しの深さでもある。地山の面で遺構の検出を行った。遺物の採集と土層の観察を行った後、必要に応じて断面実測し、全てのトレンチを写真撮影している。トレンチの総面積は726 ㎡になっている。以下各トレンチを説明する。

Ｔ－１はぶどう温室移転跡の畑地に設定した。南北47m・幅２m・深さ20～ 100cmある。土層は表土20cm・造成土０～ 100cm・地山で、遺物は全然ない。

Ｔ－２は東に伸びる尾根筋の中央に当たるぶどう畑にほぼ東西方向に長く設定した。長さ55m・幅２m・深さ70cmある。土層は表土20cm・攪乱土50cm・地山で、少量の貝が出土した。



第２図　中山貝塚周辺地形図（1／2,000）○印貝散布

中山１．２号貝塚

Ｔ－３はＴ－２の東に延長して設定した。長さ15ｍ・幅２ｍ・深さ30～80㎝ある。土層は表土20㎝・撹乱土60㎝・地山で、帯状の貝層を検出した。

Ｔ－４はＴ－３に直交して設定した。長さ15ｍ・幅２ｍ・深さ80㎝ある。土層は表土20㎝・撹乱土60㎝・地山で、地山面には天地返しの際の階段状地形が見える。遺物は全然ない。

Ｔ－５はＴ－４を延長した線上にあり、一段下の畑に設定した。長さ21ｍ・幅２ｍ・深さ80㎝ある。土層は表土20㎝・撹乱土60㎝・地山で、遺物は全然ない。

Ｔ－６はＴ－３の東南で尾根筋に直交する。長さ18ｍ・幅２ｍ・深さ70㎝ある。土層は表土20㎝・撹乱土60㎝・地山で、天地返しが明らか。遺物は全然ない。

Ｔ－７はＴ－５と同じ畑で、１号貝塚と呼ばれている貝の表面散布しているところに設定した。長さ20ｍ・幅２ｍ・深さ70㎝ある。大量の貝類と若干の中・近世土器が出土した。

Ｔ－８はＴ－３の帯状の貝層を南北に拡張した。長さ18ｍ・幅２ｍ・深さ20㎝ある。貝層は幅30㎝・厚さ３㎝で、畑の境に薄く帯状に散布している。耕作の結果であろう。

Ｔ－９はＴ－７の１号貝塚南端を確認するため設定した。長さ７ｍ・幅２ｍ・深さ50㎝ある。大量の貝類と若干の中・近世土器が出土した。後で拡張した。

Ｔ－10はＴ－４の西上方で貝の散布が見える部分に石垣に沿って設定した。長さ22ｍ・幅２ｍ・深さ 100㎝ある。大量の貝類と若干の中・近世土器が出土した。新発見の貝塚である。

Ｔ－11はＴ－７に直交する長さ15ｍ・幅２ｍ・深さ70㎝のもの。土層は表土20㎝・撹乱土50㎝・地山で、大量の貝類と若干の中・近世土器が出土した。貝塚の範囲を確認した。

Ｔ－12は二号貝塚の中央部分に設定した。長さ10ｍ・幅２ｍ・深さ70㎝ある。大量の貝類と若干の中・近世土器が出土した。ハマグリが多い。

Ｔ－13はＴ－12の下の段の畑に設定した。長さ12ｍ・幅２ｍ・深さ70㎝ある。地表に少量の貝と中世土器が散布していた。

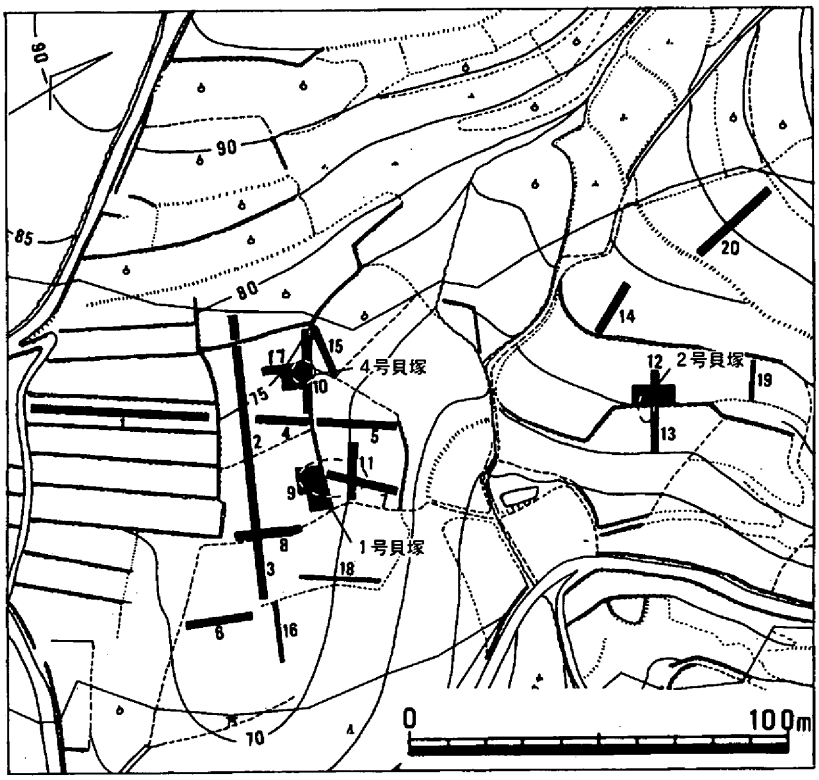
Ｔ－14はＴ－12の上の段の畑に設定した。長さ15ｍ・幅２ｍ・深さ80㎝ある。地表に少量の貝が散布していた。アサリである。

Ｔ－15はＴ－10の下の段の畑に設定した。長さ14ｍ・幅２ｍ・深さ60㎝ある。地表に少量の貝が散布していた。

Ｔ－16は保安林になっていた山林に設定した。長さ16ｍ・幅１ｍ・深さ20㎝ある。遺構・遺物を全く検出しない。地山は洪積世の山砂利である。

Ｔ－17はＴ－10に直交する長さ10ｍ・幅２ｍ・深さ80㎝のもの。遺構・遺物を全く検出しない。地山面は天地返しの階段状地形を呈する。

Ｔ－18はＴ－３に直交する長さ22ｍ・幅１ｍ・深さ60㎝のもの。ここも地山面は天地返しの階段状地形を呈する。



第3図　トレンチ・グリッド配置図（1／2,000）

T－19はT－12と同じ畑で、長さ10m・幅2m・深さ70cmのもの。ここも地山面は天地返しの階段状地形を呈する。

T－20はT－14の上の段の畑で、長さ25m・幅2m・深さ70cmのもの。ここも地山面は天地返しの階段状地形を呈する。遺構・遺物を全く検出しない。

(2)貝塚の概要

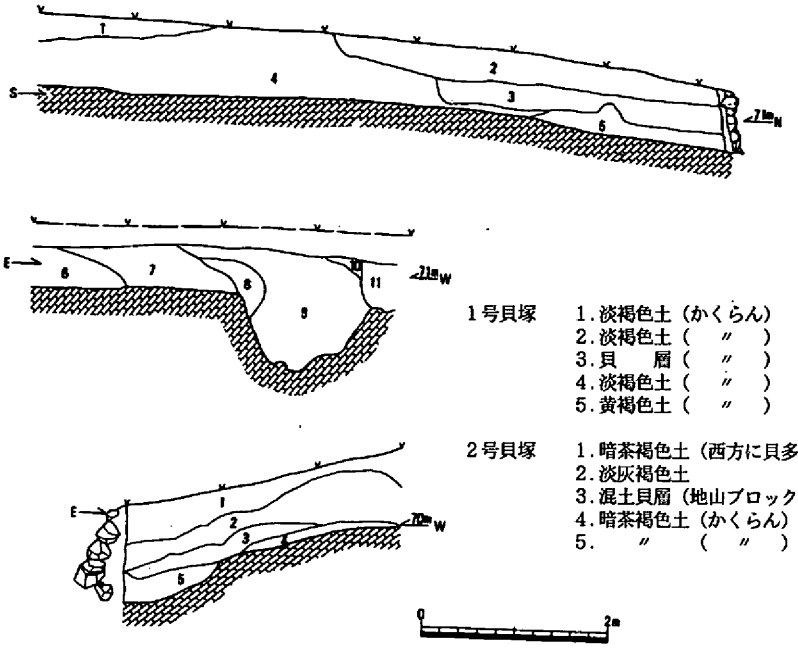
1号貝塚

当初から位置の確かな貝塚で、地表面に少量のハイガイが散布していた。T－7･9･11の3本のトレンチと拡張区の発掘によって貝塚の大きさは長径12m・短径5mの長楕円形を呈していた事が判明した。しかし、全体に亘って完全にぶどう栽培のために天地返しを受けていることも分かった。なおこの貝塚の海抜高は71mである。

貝の種類はハイガイとハマグリがほぼ同数でこの2種だけで99％を占め、その他オオノガイ・タマガイが少量認められる。

土器は全て実測し、掲載した。11点しかない。1～3は土師器椀で、口径10.5cmとかなり小さい。4～6は土師器土鍋の口縁部細片で、口径は不明である。7は須恵器の甕の体部片で、

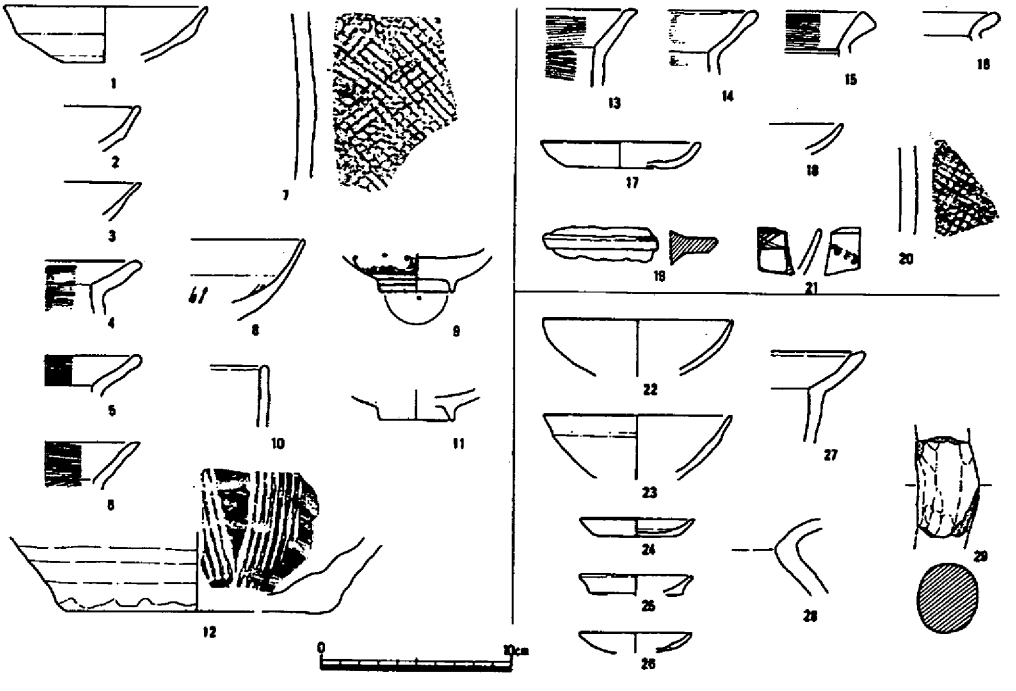
中山１．２号貝塚



１号貝塚
1.淡褐色土（かくらん）
2.淡褐色土（　〃　）
3.貝　　層（　〃　）
4.淡褐色土（　〃　）
5.黄褐色土（　〃　）
6.＝3.混土貝層（かくらん）
7.　　〃
8.　茶褐色土（かくらん）
9.　土管埋土
10.＝11.暗茶褐色土

２号貝塚
1.暗茶褐色土（西方に貝多い）
2.淡灰褐色土
3.混土貝層（地山ブロック入る）
4.暗茶褐色土（かくらん）
5.　〃　（　〃　）

第４図　貝塚断面図（1／80）



第５図　１・２・４号貝塚出土遺物（¼）

亀山焼と考えられる。8は陶器椀で、肥前産と考えられる。9は磁器椀で、肥前産であろう。10は唐津焼の鉢であろう。11は肥前陶器椀であろう。12は備前焼すり鉢である。

これらの土器群からこの貝塚の形成された時期は近世と考えることができる。

2号貝塚

当初から位置の確かな貝塚で、地表面に少量のハマグリが散布していた。T－12・13の2本のトレンチと拡張区の発掘によって貝塚の大きさは長径10m・短径3mの長楕円形を呈していた事が判明した。しかし、全体に亘って完全にふどう栽培のために天地返しを受けていることも分かった。なおこの貝塚の海抜高は70mである。

貝の種類はハマグリが圧倒的に多く95%を越え、ハイガイが5%程度で、その他の貝としてカキが認められる。

遺物としては、若干の土器が出土している。13～16は土師器土鍋の口縁部細片で、口径は不明である。17は土師器皿で、口径 8.4cm・器高 1.4cmを測る。18も土師器皿である。19は瓦器質の羽釜の羽の一部である。20は7と同じ亀山焼の甕である。21は肥前産磁器の椀である。

これらの土器群からこの貝塚の形成された時期は近世と考えることができる。

3号貝塚

先に述べたようにこの貝塚は岡山県遺跡地図では破壊・消滅と記載されている。現地でも地図と照合してみると、該当地には痕跡も見当たらない。

4号貝塚

トレンチにより新規に発見できた貝塚である。あるいは岡山県遺跡地図では破壊・消滅と記載されている3号貝塚の本当の位置だった可能性もある。T－10で発見したが、貝塚そのものは1号・2号と同様に、全体に亘って完全にふどう栽培のために天地返しを受けている事も判明した。元の貝塚の範囲を推定してみると、長さ5m・幅2mあったであろう。海抜高72～73mの位置にある。

貝の種類はハイガイとハマグリがほぼ同数でこの2種だけで99%を占め、その他オオノガイ・タマガイが少量認められる。すなわち1号貝塚と同じ割合である。

遺物としては、少量の土器が伴っている。22は土師器椀で、口径10cmを測る。23も土師器椀で、口径10cmを測り、22より深く、口縁部の形態が違う。24～26は土師器小皿である。24は口径 6.0cm・器高 1.0cmを測る。口縁部の形が外傾するだけのもの。外反するもの。内湾するものと別れる。27は瓦器質の土鍋である。蓋の乗せやすい受け部になっている。28は須恵器の甕の口頸部である。亀山焼かもしれない。29は土師器三足鍋の足の一部である。

これらの土器群からこの貝塚の形成された時期は中世と考えることができる。

４．まとめ

発掘調査の概要については既に述べた。ここでは調査の結果判明したいくつかの点について考察してみたい。以下箇条書きしていく。

１．中山貝塚は発見当初には３ヵ所存在した。それを１～３号と呼んでいた。遺跡地図を作成する時点におそらく３号貝塚の位置が確かめられず破壊・消滅と記載されたのではないだろうか。この調査によって新発見した４号貝塚が実は幻の３号貝塚の可能性が高い。

２．１号・２号・４号の３基の貝塚はいずれも昭和初期のぶどう畑の天地返しと言う大地盤改良工事により平均70㎝も攪乱を受けている。つまり位置的にも範囲的にも深さにおいても貝塚形成時の現状を留めていないのである。とは言うものの大体の位置と範囲は推定できる。

３．時期については少量ではあるが土器の出土があったので１号貝塚が近世、２号貝塚が近世、４号貝塚が中世に比定できた。４号貝塚では近世の遺物が出土していないが、たまたま無かったと言う事も考えられる。１号貝塚・２号貝塚でも中世の遺物の方が多い。

４．貝塚以外の遺跡は用地内に限って言えば全く無いことが判明した。貝塚を作った人々の住居・集落は用地外に存在するのであろうか。今後の検討課題である。

５．天地返しの工事は船穂町全域のぶどう畑に行われているので、地下70㎝までの遺構はほとんど消滅していると考えられる。

６．貝塚出土の中世土器は鎌倉時代に遡るものは無い。室町時代のものである。また近世土器は江戸時代後期の物である。

７．貝の種類を見て見よう。ハイガイは浅い海の泥海底の干潟の発達した地域にのみ生息する貝類である。ハマグリは満潮時水深１ｍ前後、干潮時には干潟となった海岸からその時の汀線付近までが生息地域である。カキは汽水性の貝類で、淡水の混入する塩分の強くない大河の河口付近や、奥深い入り江でも良く生育する。（註５）このように現在の高梁川河口付近で十分採集できる貝類である。ハイガイはしかし1930年代に日本近海では採れなくなったという。

８．貝の大きさにはかなりばらつきがある。このことから大量に無差別に採集したことが分かる。また左右の貝殻が合わさったものが多い。これは焼いたものか、茹でたものか、いずれにしても、加工したことを推測させる。土鍋の破片を伴うことも示唆的である。

最後に、発掘調査に際して便宜を図っていただいた日本道路公団・船穂町教育委員会には深く感謝します。

（浅倉）

（註５）江坂輝彌『貝塚の貝』「化石の知識」考古学シリーズ９　昭和58年　東京美術

2．酒津八幡山平谷遺跡

例　言

1．本報告は、山陽自動車道建設に伴い、日本道路公団より委託を受けて、岡山県教育委員会が昭和59年度に実施した倉敷市酒津に所在する酒津八幡山平谷遺跡の発掘調査報告書である。

2．発掘期間は、昭和59年４月24日～６月11日である。

3．発掘調査は、岡山県教育委員会職員浅倉秀昭、中野雅美が担当した。

4．報告書の作成は浅倉が行った。

5．出土遺物、図面、写真等は、岡山県古代吉備文化財センターに保管している。

目　　次

1．地理的・歴史的環境……31
2．調査の経過……32
3．調査の概要……33
(1)トレンチ調査の概要……34
(2)遺構の概要……37
(3)遺物の概要……39
4．まとめ……43

図　目　次

第1図　遺跡地図（1/25,000）……31
第2図　酒津八幡山平谷遺跡周辺地形図（1/1,000）……33
第3図　トレンチ・グリッド・遺構配置図（1/1,000）……34
第4図　遺構平面図（1/200）……38
第5図　G－6他出土遺物（1/4）……40
第6図　SK－1出土遺物（1/4）……41

図版目次

図版1　①　酒津八幡神社正面　②　同背面　③　上酒津墓地内建物跡
図版2　①酒津八幡山平谷遺跡全景（川から）　②同（山上から）
図版3　①古墳状の高まり　②作業風景　③T－1　④T－2
図版4　①T－3　②T－4　③T－5　④T－6
図版5　①T－7　②T－8　③T－9　④T－10
図版6　①T－11　②T－12　③T－13
図版7　①　建物群と水路　②SB－1
図版8　①SB－2　②SB－3　③SC－1　④SC－2
図版9　①SD－1　②SD－2　③SK－1
図版10　G－6他出土遺物
図版11　SK－1出土遺物

1．地理的・歴史的環境

本遺跡は、倉敷市酒津に所在し、高梁川を東に見下ろす海抜20ｍ前後の緩斜面に位置する。ここから倉敷市街地が一望できる。酒津八幡山は、現在は陸の孤島になっている。酒津八幡神社（無住）と酒津焼窯が建物として残るだけである。これは大正２年の高梁川河川改修により酒津八幡山が中洲町から切り離されたためである。東に鎧山と明見山と言う小丘陵があった。河川改修のため、鎧山は完全に削平され、明見山にあった明見神社と荒神社２社の３社が八幡神社に合祀された。かつては中州町の中心だったところである。（註１）

歴史的環境は弥生時代には酒津八幡山遺跡と呼ばれる中期の高地性集落跡があり、高梁川の現在の中洲に酒津・水江遺跡と呼ばれる後期の集落跡がある。（註２）

古墳時代には酒津八幡山古墳群・明見山古墳群がある。酒津八幡山古墳群では現状で箱式石棺の側石が露出している。

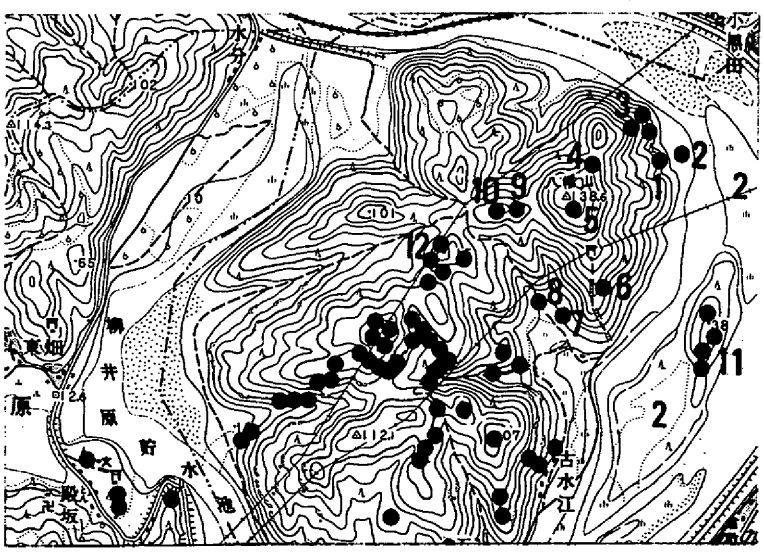
古代では酒津山腹遺跡と呼ばれる石帯を多数出土した火葬墓跡がある。（註３）

中世から近世には酒津八幡神社を中心とした門前町が想定できる。

（註１）中洲町誌より

（註２）間壁葭子他『酒津－水江遺跡』「倉敷考古館研究集報」第８号　昭和48年　倉敷考古館

（註３）鎌木義昌『酒津山腹遺跡』「岡山の古墳」岡山文庫４　昭和51年　日本文教出版



第１図　遺跡地図（1／25,000）

1．酒津八幡山平谷遺跡　2．酒津・水江遺跡　3．酒津八幡山北古墳群　4．酒津八幡山北古墳
5．酒津八幡山山頂遺跡　6．酒津八幡山南古墳群　7．同　１号　8．同　２号
9．酒津八幡山西尾根古墳群１号　10．同　２号　11．酒津明見山古墳群　12．酒津山狼谷西尾根古墳群

2．調査の経過

本遺跡は新発見の遺跡である。昭和47年（1972）に行った山陽自動車道予定ルート周辺500m幅の遺跡分布調査ではまだ発見していない。昭和56年（1981）に行った遺跡分布調査で、山林の中に古墳状の高まりを5カ所認めた。中世土器が若干採集できたが、古墳時代の土器ではなかった。周辺には古墳群があり、弥生遺跡もあることからこれを酒津八幡山東古墳群と仮に称して、昭和59年（1984）に日本道路公団と発掘調査の受託契約を交わした。4月中旬から現地調査を開始する予定であったが、保安林であることから、その解除が許可されるのが7月末になるということだった。しかし、4月下旬には保安林内作業許可が降りた。連休中に立ち木を伐開し、5月7日から調査を開始した。古墳の有無を確かめるため最初に古墳状の高まりのある尾根筋をトレンチで切断してみた。つづいて遺跡の有無を確かめるため平坦地にトレンチを設定した。トレンチ総数は17本になった。その結果遺構・遺物が検出できた所を拡張し、6月11日をもって調査を完了した。

調査体制

岡山県教育委員会文化課　課長　松本昭憲

調査員　　文化財保護主査　　浅倉秀昭

　　文化財保護主事　　中野雅美

発掘作業員　中原寿喜次・中原鈴太郎・武政　修・小山三郎・武政一民・清水甚吉・兼高岩市・赤森富喜一・藤田忠志・武野君子・藤田艶子・武野治子・梶谷君江・吉沢喜代子・富士川美代子

日誌抄

昭和59年　4月24日（火）保安林内作業許可を受ける。

4月28日（土）立ち木伐開開始・遠景写真撮影

5月7日（月）器材搬入・テント設営

5月8日（火）T－1調査開始

5月23日（水）SB－1・SK－1調査

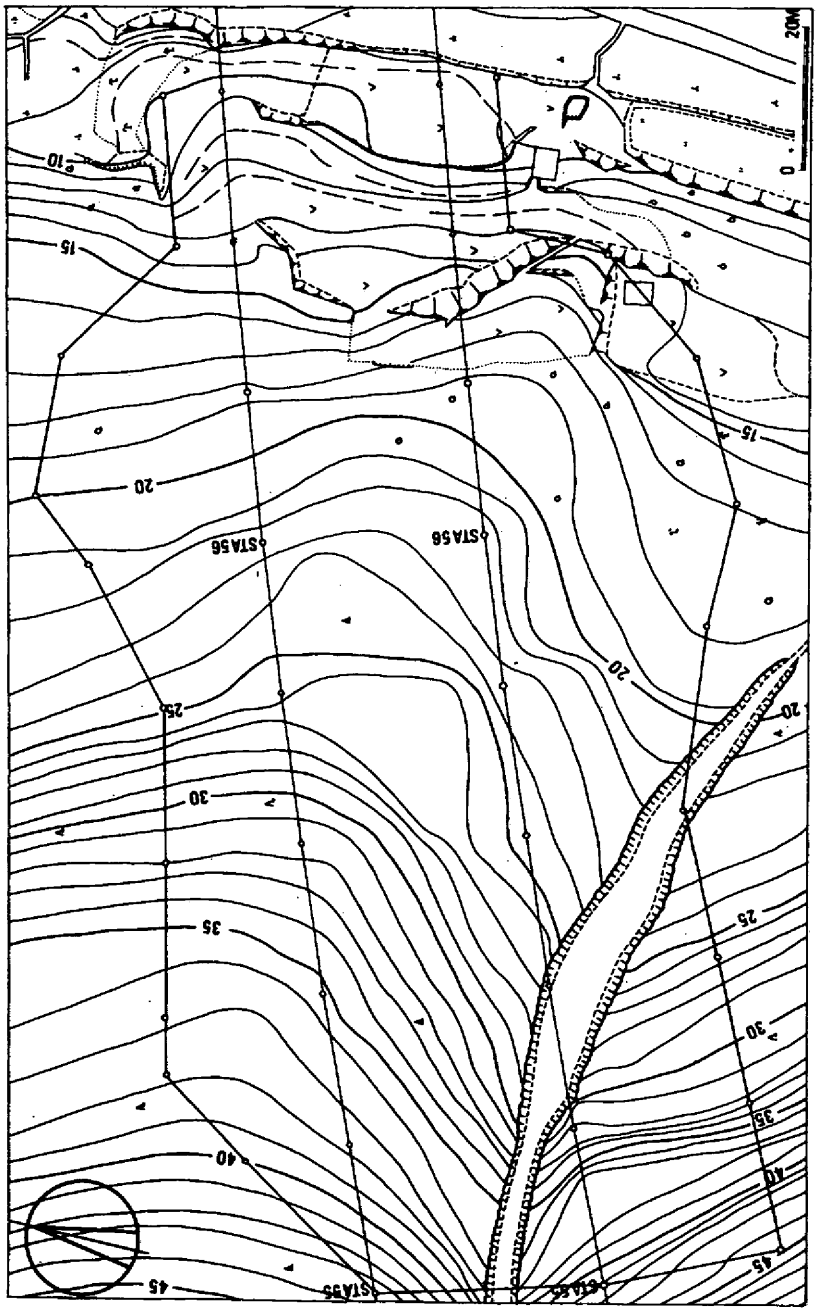
5月25日（金）T－17調査終了・テントの移動

5月28日（月）SB－1～3調査終了・SD－1調査開始

6月4日（月）G－6調査

6月11日（月）調査終了

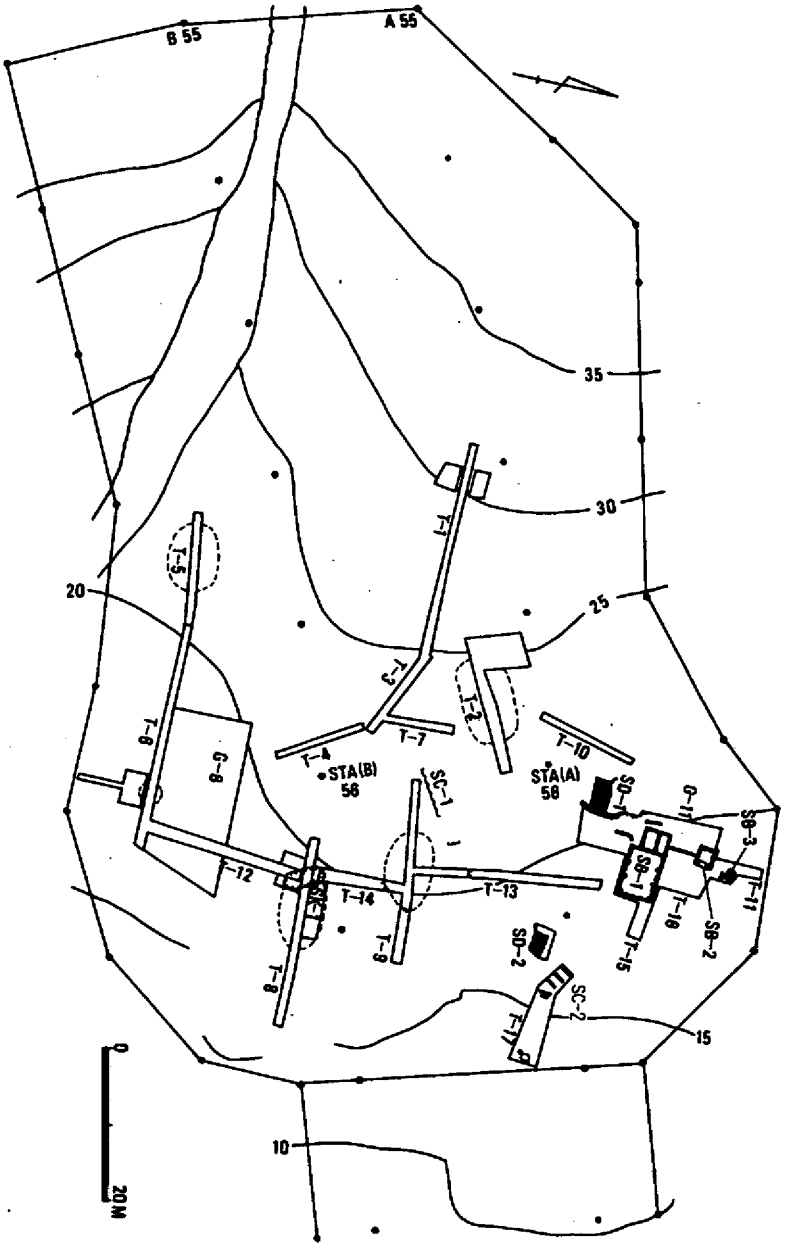
3．調査の概要



第２図　酒津八幡山平谷遺跡周辺地形図（1：1,000）

(1)トレンチ調査の概要

本遺跡では合計17本のトレンチを設定し、発掘した。長さは地形により様々で、長いもので30mに達し、短いもので5mを測る。幅は1mにほぼ統一した。例外もある。すべてのトレンチで地山が現れるまで掘り下げようと試みてみたが、花崗岩の風化した真砂土が地山となってい



第3図　トレンチ・グリッド・遺構配置図（1／1,000）

る所もあり、そのため深さについては、２ｍを越えるものもある。遺構に当たった部分は拡張している。遺物の採集と土層の観察を行った後、必要に応じて断面実測し、全てのトレンチを写真撮影している。第３図の中で、トレンチはＴ、拡張区はＧの記号を使用、点線の囲いは古墳状の高まりを示している。以下各トレンチについて説明する。

Ｔ－１はやや緩傾斜の尾根上に設定した全長30ｍ・幅１ｍ・深さ１ｍのものである。海抜高25ｍ～32ｍに位置する。西端から５ｍの所で、地表下10cmにおいて須恵器甕の頸部と体部の破片が数点出土した。土器は古墳時代のものと考えられるが、山から流れ下ったものと思われる。北側と南側に拡張して遺構の確認をしてみたが、同様の土器片が１点増えただけであった。

Ｔ－２は東に伸びる主たる尾根筋から北東へ派生する枝尾根上に長方形の古墳状の高まりがあるので、この中央を貫通するように設定した。全長18ｍ・幅 1.5ｍ・深さ２ｍある。海抜高23ｍ～25ｍに位置する。地表下30cm迄に近世の平瓦・丸瓦片が数点と、 100cmの所で近世の土師質土鍋片が１点出土した。その下はいくら掘っても真砂土である。

Ｔ－３はＴ－１の東に延長して設定した。全長13ｍ・幅１ｍ・深さ30cmある。海抜高23ｍ～25ｍに位置する。地山は岩盤である。東端で流れ込みと考えられる平安時代の土師器椀片１点と、同じく須恵器甕片２点が出土した。

Ｔ－４はＴ－３の端から南東に伸ばして設定した全長12ｍ・幅１ｍ・深さ50cmあるトレンチ。遺物は全然ない。

Ｔ－５は用地内にあるもう１本の小尾根の先端部で、下から見ると巨大な古墳の墳丘に見える高まりに設定した。全長15ｍ・幅１ｍ・深さ 100cmある。海抜高21ｍ～23ｍに位置する。地表で近世の平瓦片が数点採集できただけで、遺構は全然ない。

Ｔ－６はＴ－５を延長したもの。平坦部に経塚らしき土盛りが見られるのでその中心を通るトレンチを設定した。全長30ｍ・幅１ｍ・深さ70cmある。海抜高17ｍ～21ｍに位置する。経塚らしき土盛りからは何も出土せず、その周辺の地表下40cmまでが黒味を帯びた土で、古代～近世の遺物が少量出土した。そのためこの付近を拡張して調査することにした。

Ｔ－７はＴ－３の東から北のほうに向けて設定した。全長10ｍ・幅１ｍ・深さ50cmある。海抜高24ｍに位置する。遺構・遺物は全然ない。

Ｔ－８はSTA(B)56とSTA(B)56＋20の間に一つの古墳状の高まりがあり、これを調査するために設定した。全長25ｍ・幅１ｍ・深さ70cmある。海抜高16.5ｍ～20ｍに位置する。西の端で近世陶磁器が整理箱３杯分出土する大型の土壙ＳＫ－１を検出した。

Ｔ－９はＴ－８と平行し、今一つの古墳状の高まりを調査するため設定した。全長25ｍ・幅１ｍ・深さ20cmある。海抜高18ｍ～23ｍに位置する。中央よりやや東寄りに地山の岩盤が急に深くなるが、自然地形である。遺構・遺物は全く出ない。

Ｔ－10はＴ－２の北側にほぼ南北のトレンチを設定した。全長14ｍ・幅１ｍ・深さ 100㎝ある。海抜高21ｍ～24ｍに位置する。遺構・遺物は全く出ない。このトレンチの東には比高３ｍ程度の急斜面があり、この斜面に石造の工作物が一部露出していたので、後に調査した。

Ｔ－11は北の端に 400㎡程度の平坦地があり、祠の基盤と考えられる石組みがあるため、実態を調査するべく南北に設定した。全長25ｍ・幅 1.5ｍ・深さ20㎝のもの。海抜高20ｍに位置する。南端で花崗岩の割石による石組みが検出できた。伴う遺物は、近世陶磁器と瓦片である。後でこの地区を拡張してＧ－11と呼んだ・

Ｔ－12はＴ－６とＴ－８を結んで南北に設定した。全長21ｍ・幅 1.5ｍ・深さ70㎝ある。海抜高17.5ｍ～20ｍに位置する。北端でＳＫ－１・南端で近世包含層を検出した。それぞれ拡張し、Ｇ－12・Ｇ－６と呼んだ。

Ｔ－13はＴ－９の中央から北へ伸ばしたトレンチで、全長25ｍ・幅１ｍ・深さ70㎝ある。海抜高19ｍ～21ｍに位置する。ＳＫ－１以外何もない。

Ｔ－14はＴ－８とＴ－９を結んで南北に設定した。全長12ｍ・幅２ｍ・深さ70㎝ある。海抜高20ｍに位置する。ＳＫ－１以外何もない。

Ｔ－15はＴ－11と直交し、露出している一つの割石を掛けて平坦地の東端まで設定した。全長10ｍ・幅２ｍ・深さ30㎝ある。海抜高20ｍに位置する。Ｔ－11で検出した石組みの東側に石列が検出できた。その石列の南側に、 180㎝間隔で３個の割石が石列と平行して並んでいた。当然一対のものなので、拡張して調査した。

Ｔ－16はＴ－11と平行し、Ｔ－15に直交する長さ５ｍ・幅１ｍ・深さ30㎝のもの。遺構・遺物は全く検出しない。

Ｔ－17はＴ－15の東10ｍの緩斜面に設定した。長さ10ｍ・幅３ｍ・深さ30㎝のもの。海抜高13～15ｍに位置する。花崗岩の延べ石による石段が４段検出でき、東端では鳥居の基礎と考えられる一辺１ｍの大平石が検出できた。伴う遺物は近世陶磁器で、他に流れ込みの遺物として良く磨滅した埴輪片がある。

(2)遺構の概要

トレンチの概要で述べたように、本遺跡で検出できた遺構には下記の物がある。すなわち建物（ＳＢ）３棟・水路跡（ＳＤ）２カ所・石段跡（ＳＣ）２カ所・土壙（ＳＫ）１基・焚き火跡３カ所である。以下それぞれについて説明していく。

ＳＢ－１

拡張区Ｇ－11の中央に位置する石組基壇を持つ礎石建物である。石組基壇は東西に長く600cm・南北に短く 480cmの長方形の石囲いと、更に西側に南北 350cm・東西 320cmの石囲いが連結している。前者の内側には南側石列と北側石列に接して 200cm間隔で一辺30cm程度の上面が平坦な割石を４個づつ並べている。これは３間×１間の建物の礎石である。後者にはやや北寄りに石列が１本入って南北が分けられている。石囲いの石の上面の高さは後者の南を囲む石が最も高く、次に北側の石、最後に前者となっている。また礎石の高さは石囲いよりも10cmほど高い。神社関係の建物跡と考えられる。周辺から出土した遺物から江戸時代末期に廃棄されたものであろう。

ＳＢ－２

ＳＢ－１の北方 400cm離れて検出した東西に少し長い長方形の石囲いである。東西 270cm・南北 210cmを測る。東側の中央の石は他の石より大きく平らである。このＳＢ－２と先のＳＢ－１との間には人頭大の石が一列に東に面を合わせて並べられている。同時に存在していたものであろう。この遺構もまた神社関係の建物跡と考えられる。

ＳＢ－３

ＳＢ－２から北へ 200cm離れて検出した東西に少し長い長方形の石囲いである。東西150cm・南北90cmを測る。一部発掘前から露出していた。荒神様が発掘直前まで祭られ、公団の手により用地外に移転した物である。他の石組と方向がずれている。

ＳＣ－１

Ｔ－９の西北で検出した石列である。一辺30cm程度の花崗岩の割石を使用して、長さ 500cm連続している。南東の面を揃えている。八幡神社の参道の一部と考えられる。遺物はない。

ＳＣ－２

Ｔ－17の西で検出した石段である。花崗岩の延べ石を使用している。４本が検出できた。平均値は 150×20×15cm³を測る。八幡神社への石段になるかＳＢ－１への石段になるか不明。

ＳＤ－１

ＳＢ－１とＴ－10の間で検出した石垣状をした石作りの工作物である。急な斜面に一辺20～30cmの花崗岩の割石を石垣状に組み上げその両側には薄い板状のちょうどすべり台の手すり状に並べ立てている。全長 500cm・幅 200cm・高さ 400cm・傾斜角60°を測る。更にその下方に

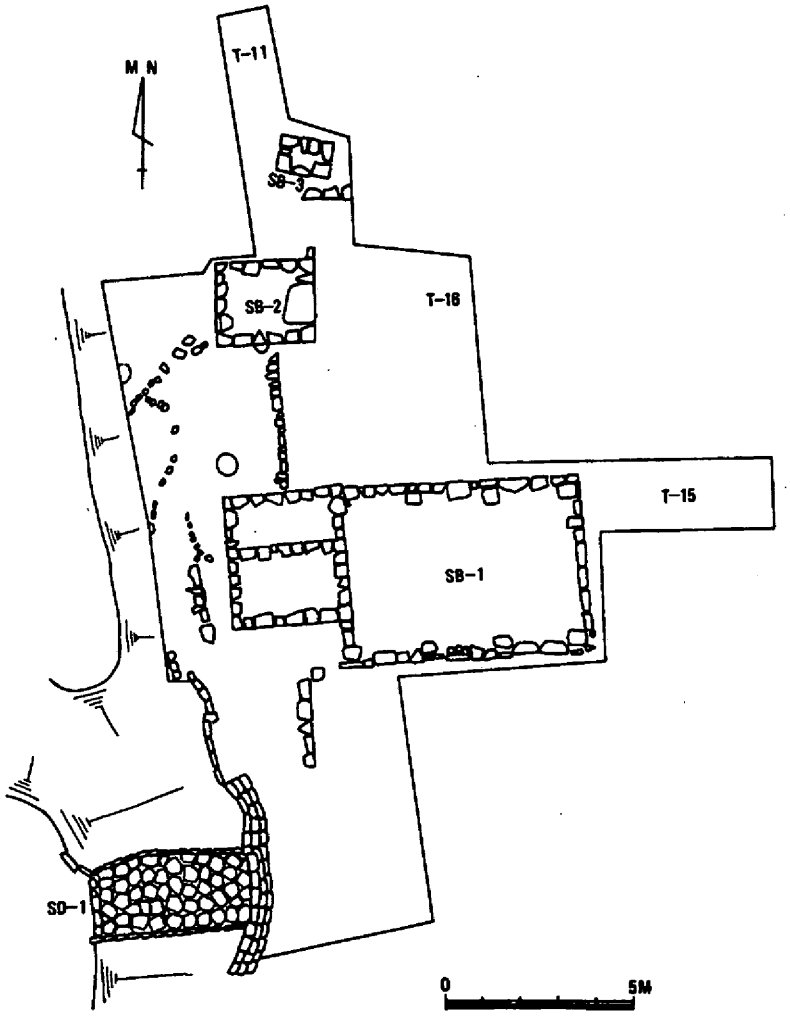
は三段の石垣がこの遺構を中心にして 500cmの幅で支えている。この遺構の西は平坦になっている。その更に奥は谷になっている。つまり谷を関止める堤防を超えて出る水出し水路と考えることができる。岡山市百間川の荒手と同じ施設と考えている。遺物はない。

ＳＤ－２

ＳＤ－１から約15ｍ東で検出したＳＤ－１と同様な石敷きの水路である。全長 200cm・幅150cmを測る。傾斜角度は30℃しかない。ＳＤ－１との間は平坦面で石もない。

ＳＫ－１

Ｔ－8･12・14の交点にある。ほぼ南北に長い小判形の土壙である。長さ 300cm・幅 200cm・深さ70cmを測る。粘土採掘穴と考えられ、その粘土はＳＢ－１の壁土になったのかもしれない。その後ごみ穴として使用されたもの。近世陶磁器が一括出土した。



第４図　遺構平面図（1／200）

(3)遺物の概要

本遺跡から出土した遺物は整理箱に6杯分ある。その内訳は、G－6から2箱、SK－1から3箱、その他から1箱である。G－6から弥生土器・須恵器・土師器・陶磁器・煙管・一文銭が出土し、SK－1から陶磁器・瓦質土器・瓦・砥石が出土し、その他から陶磁器・瓦・埴輪が出土している。第5図は主としてG－6から出土した遺物を掲載している。

1は本遺跡唯一の弥生土器である。小さい破片で、良く磨滅していて調整は見えない。ラッパ状に開く口縁の端部は上下に拡張し、端面を持つ。壺と考えているが、高杯の脚裾部の可能性もある。後期前葉の物か。赤褐色を呈す。

2は本遺跡唯一の土師器である。小さい破片で、良く磨滅していて調整は見えない。高杯の杯部と考えている。古墳時代の物か。

3～5は初期須恵器である。口縁部の極細片である。口径を推定するのが困難なほどである。表面は灰色だが断面が茶褐色を呈している。胎土はかなり良質の粘土を使用している。口唇部外面に断面三角形の凸帯を1本巡らしている。5世紀前半のものか。6はG－6から出土した須恵器の杯蓋である。天井部にカキメを施し、体部との境目は鋭い稜線を持つ。5世紀前半のものか。

7は須恵器の杯身である。受けと立ち上がりがあり、立ち上がりは内傾し、途中から折れて垂直になる。6世紀後半の物か。高杯なら5世紀前半の可能性もある。

8・9は須恵器の高台付き杯身である。高台はあまり高くなく、やや外に広がっている。張り付けた跡がはっきりしているものもある。

10は淡い灰褐色を呈し、土師質土器である。古代末の物か。緑釉陶器の可能性もある。

11はT－17から出土した埴輪片である。良く磨滅していて調整は見えない。凸帯は5㎜の高さしかない。赤褐色を呈する。古墳時代中期のもの。

12は軒丸瓦の瓦頭である。中央に浮き彫りの三巴文があり、その外回りに浮き彫りの珠文がある。瓦頭の直径は14cmを測る。江戸時代以降のもの。

13は軒平瓦の瓦頭である。唐草文が認められる。江戸時代以降のもの。

14・15は肥前陶器の鉢である。釉薬は緑色で透明である。

16は土師質の土鍋である。表面は淡い茶色で、媒が付着している。断面は黒色である。

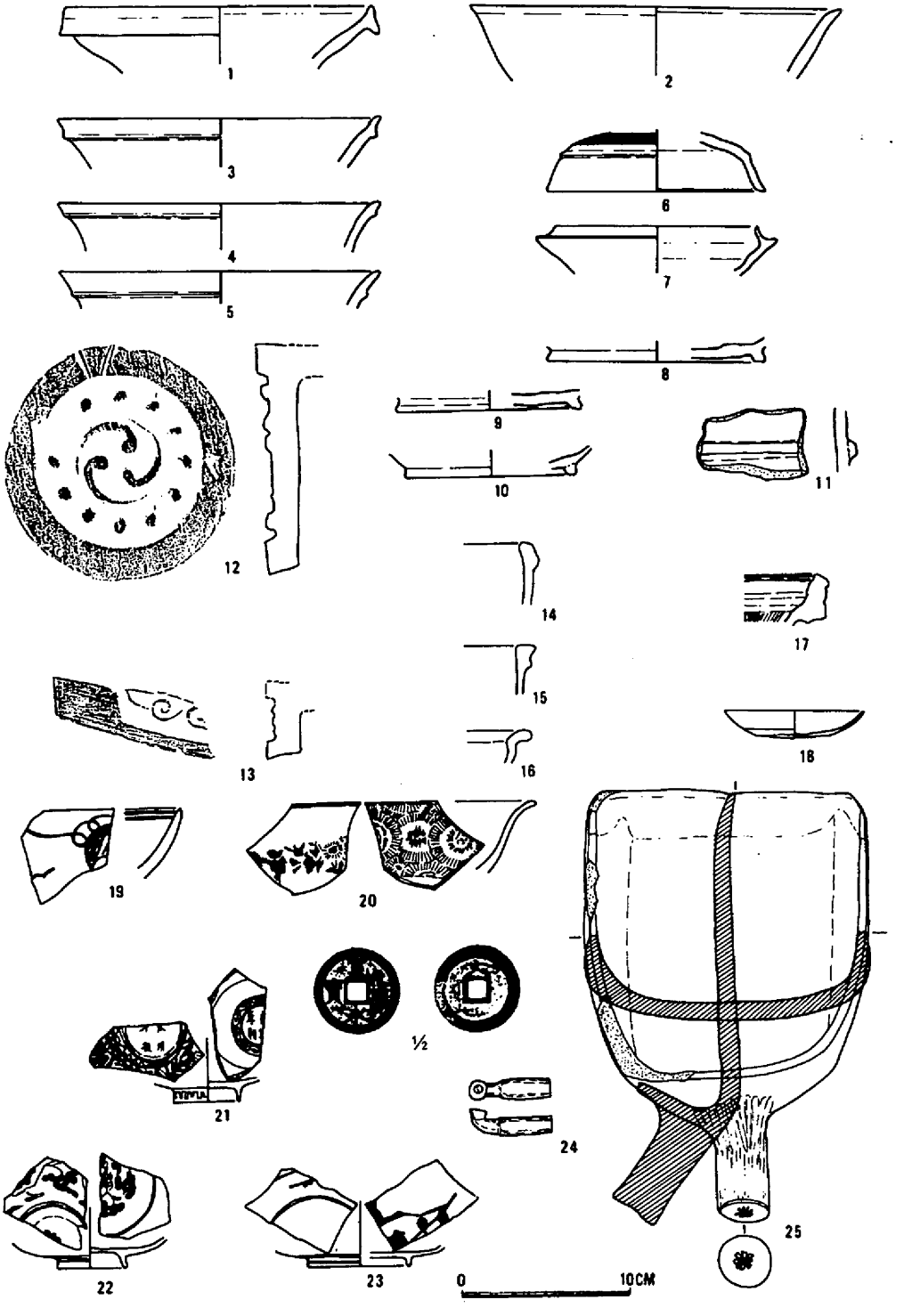
17は備前焼のすり鉢で、口縁外面に2条の沈線と体部内面に全面の条線を施している。

18は備前焼の皿で、赤褐色に良く焼きしまっている。1/4 の破片である。

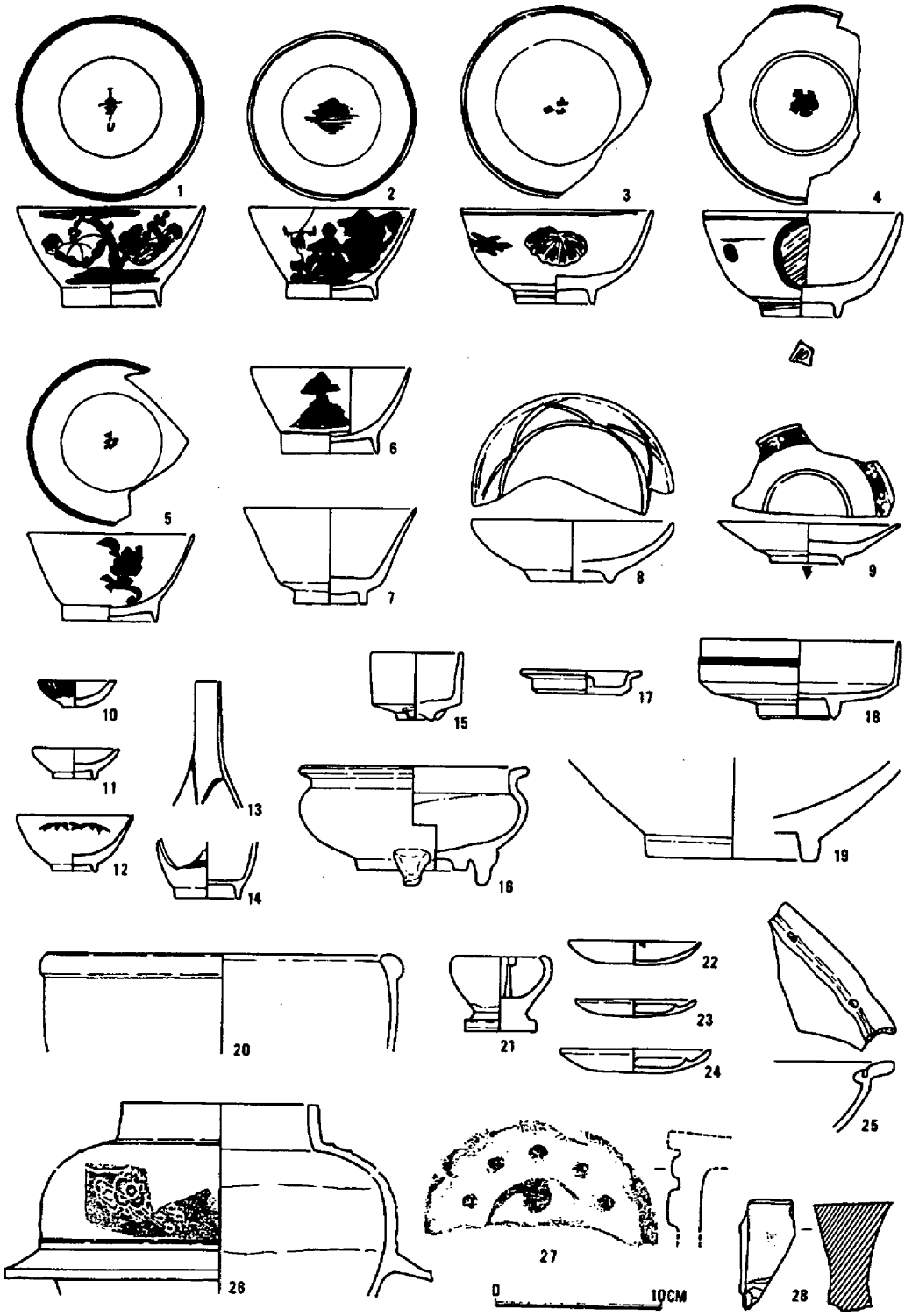
19～23は肥前磁器の椀である。染め付けは手書きのものと版型の物がある。

25は瓦質の十能と呼ばれるもの。焼けた炭を乗せて運ぶもの。ほぼ完成品である。

他に煙管の雁首と一文銭「寛永通宝」が出土している。煙管の吸い口の方は出土していない。



第5図　G－6他出土遺物（¼）



第6図　ＳＫ－１出土遺物（¼）

「寛永通宝」の裏面には「文」の字が鋳出されている。

第６図はＳＫ－１で一括して出土した遺物を掲載した。

１は肥前磁器の椀で、内面に２本の同心円と見込みに「寿」の略字、外面に藤を簡略化した絵画を青色に染め付けている。

２は肥前磁器の椀で、内面に２本の同心円と見込みに水上の島影、外面に庭園の中の御堂を風景画にしたものを青色に染め付けている。

３は肥前磁器の椀で、内面に２本の同心円と見込みに３点模様、外面に「井」と蓮の葉の模様をデザイン画にしたものを青色に染め付けている。

４は肥前磁器の椀で、内面に２本の同心円と見込みに五弁花模様、外面に円の模様をデザイン画にしたものを青色に染め付けている。底面にNOと読める模様も染め付けている。

５は肥前磁器の椀で、内面に２本の同心円と見込みに５点模様、外面に椿の模様をデザイン画にしたものを青色に染め付けている。

６は肥前磁器の椀で、外面に島上の松を風景画にしたものを青色に染め付けている。

７は肥前磁器の角張った椀で、内面薄緑色、外面白色を呈す。無文である。

８は肥前磁器の皿で、口縁内面に弧状の模様を青色に染め付けている。

９は肥前磁器の皿で、口縁内面に斜格子と４点の模様を青色に染め付けている。

10は肥前系白磁の紅皿で、口径 4.7cm・器高 1.6cm・底径 1.3cmを測り、完形品である。外面に条線が多数刻まれている。

11は白磁の小杯で、完形品である。口径 5.3cm・器高 1.8cm・底径 2.5cmを測る。

12は染め付けのある白磁の小杯で、口縁外面だけに笹の葉の模様がある。

13は14と同一個体と考えられ、一輪挿であろう。何らかの染め付けがある。

15は小型青磁の香炉である。高台が付いているのに、その上尖り足が３個付いている。

16は青磁の香炉である。15と同様高台が付き、尖り足が３個付いている。口縁は外反する。

17は陶器の蓋である。中央に丸いつまみが付いている。上面に茶色の釉薬。

18は鉄釉陶器の盤である。高い高台が付く。外面に２条の凸帯を削り出す。

19は肥前陶器の鉢である。高い高台が付く。内面に白色のハケナデ施釉がある。

20は肥前陶器の鉢である。玉縁になる。内外面に灰緑色の施釉がある。

21は鉄釉陶器の燭台である。底面は非常に安定している。中央に燭立てが付いてある。

22～24は備前焼の灯明皿である。内面に凸帯の付くものは凸帯に３カ所刻み目がある。

25は土師質土器の内耳鍋で、内耳がほとんど退化して装飾化している。穴が貫通していない。

26は瓦器の茶釜である。体部外面に梅の花の版型を押している。

27は軒丸瓦の瓦頭である。第５図の12と同じ三巴文である。

4．ま と め

(1)古墳の有無と遺跡の存在

山陽自動車道用地内の遺跡分布調査実施時点ではこの地区の現状は地形を読むこともできないくらいの雑木林であった。その中で５基の古墳状の高まりを発見し、その下の畑で中世土器を採集した。したがって岡山県教育委員会は５基の古墳として調査することにした。再度現地踏査を行ったところ、古墳説は薄くなってきた。続いて立ち木伐開後の踏査では２基は古墳・１基は経塚・２カ所は近代の人工的な土地改変だろうという知見を得た。そして本調査が終了したので、下記の結論を述べることができる。

１．５基の古墳状の高まりの内Ｔ－２に掛かるものは、酒津八幡神社の参道の右側に位置し、幾らかの盛り土を施して、神社関係の建物を建てていた可能性がある。

２．５基の古墳状の高まりの内Ｔ－５に掛かるものは、南北を自然による開析を受け、東は自然崩壊した崖面、西は山道でたまたま方形の高まりに見えたもの。実態は山砂ばかりだった。

３．５基の古墳状の高まりの内Ｔ－６に掛かるものは、経塚でもなく、単に砂を盛り上げたもの。水神か地神を祭っていた物か。時期は江戸時代以降であろう。

４．５基の古墳状の高まりの内Ｔ－８に掛かるものは、尾根筋の先端部に当たり、北側は自然の開析、西側はＳＫ－１の土取りで出来た地形である。全く古墳とは無関係。

５．５基の古墳状の高まりの内Ｔ－９に掛かるものは、尾根筋の先端部に当たり、西側は参道のために地形の改変を受けている。

６．Ｇ－６から出土した遺物の中に弥生後期の土器が１点ある。良く磨滅していることからかなり上のほうから土砂と一緒に流れてきたものと思える。酒津八幡山の頂上かあるいは山腹には弥生後期の集落があると言える。高地性集落を考えている人もいる。

７．Ｇ－６から出土した遺物の中に初期須恵器が若干あり、埴輪もある。埴輪は良く磨滅していることからかなり上のほうから土砂と一緒に流れてきたものと思える。酒津八幡山の頂上に箱式石棺が露出している。これとの関係が考えられる。５世紀代の古墳は倉敷市では珍しい。菅生小学校裏山遺跡は５世紀代の初期須恵器が多量に出土しているが、ここから直線距離で約３㎞ある。この２地点を結ぶとすれば５世紀代は船によって交通していただろう。

８．奈良時代の須恵器の出土から石帯の出土遺跡との関係が考えられる。その遺構は火葬墓といわれているので、ここも墓地からの流れ出しかもしれない。

このように古墳ではなかったものの、弥生～中世遺物散布地であることに違いない。遺構としては建物・土壙・水路等が検出できたので、江戸時代の遺跡と言う事が出来る。

(2)本遺跡の性格

近世の遺構を持つ本遺跡の性格について述べてみたい。

建物ＳＢ－１は棟行３間 600cm・桁行１間 400cmあって、床面積は24㎡を測る。畳で言えば６帖の大きさの部屋が取れる。３間×２間の大きさである。桁行１間は２間分であって、１本柱を省いて部屋を大きく使うことを考えたものである。現存している酒津八幡神社の本殿が３間×２間の大きさである。しかもこの本殿にはＳＢ－１のような付属の石囲いも見られる。ところが、柱が１本抜けていることと、西側に 300cmの石囲いが追加していると言う違いがある。したがって酒津八幡神社の本殿の造りとはだいぶ違うことがわかる。西側の石囲いは２つに分かれてる。南側のものが独立しているように石の高さが高い。このものが東の建物の西辺の中央に位置している。北西の石囲いは後で付け足したように見える。

建物ＳＢ－２はＳＢ－１の西側石囲いの真北に位置し同じ東西方向に長い軸を持ち、しかも石列で結ばれている。同時存在を意味している。この二つは規模もあまり変わらない。ＳＢ－２は東西 270cm・南北 210cmである。ＳＢ－１の西側石囲いの南部分は東西 300cm・南北 210cmである。後者の測り方を少し変えると東西　270 cmに測ることもできる。酒津八幡神社の荒神社の石囲いの規模と同じである。

建物ＳＢ－３はＳＢ－２と方向が少しずれている。作られた時期が異なるのであろう。しかし、ＳＢ－３の南に３個残っている石列の方向はＳＢ－２と同じである。このことから同時に使用されていたことを想像できる。その他周辺の石列は建物に直角か平行関係にあることから同時存在・同時使用を推定させられる。

江戸時代のものと思われる酒津付近の絵図面を土地の人に見せてもらったことがある。その図面ではここは「平谷」に当たる。周辺の地名は北に「荒神谷」を記入していた様に思う。南の谷はここよりもかなり平坦で、奥の深い谷であるが、地名がなかった。この絵図面の地名の記入が現地とずれている可能性が高い。私はここが「荒神谷」で、南の谷が「平谷」だと考えたい。そうだとすれば、建物群は荒神社である。鳥居跡と考えられる石や、石段、出土遺物の陶磁器の中に神棚に祭る道具もあることからＳＢ－１の機能は神楽殿または拝殿であろう。西側出っ張りは荒神様の神座に当たる。ＳＢ－２・３の機能は末社・若宮に当たる。

建物群は荒神社であると言う私見を述べたが、更に南西で検出している石敷きの構造物ＳＤ－１とＳＤ－２について私見を述べて置きたい。この施設は西にある谷を南北に堰止めた堤防の南に作られ、水が流れ落ちても崩れないよう、特に下方の石垣がしっかり造ってある。現代の河川の護岸の造りと同じである。現状ではこの堤防はＳＤ－１の３ｍほど北で決壊している。西の池の溢れた水を出すための「荒手」という施設であろう。洪水調節のため考えられたもので、江戸時代に作られた大規模なものが百間川荒手である。　　(浅倉)

3．酒津一水江遺跡

例　言

1．本報告は、山陽自動車道建設に伴い、日本道路公団より委託を受けて、岡山県教育委員会が昭和59年度に実施した酒津－水江遺跡発掘調査報告書である。

2．発掘期間は、昭和59年４月１日～４月30日である。

3．発掘調査は、岡山県教育委員会職員浅倉秀昭、中野雅美が担当した。

4．報告書の作成は浅倉が行った。

5．出土遺物、図面、写真等は、岡山県古代吉備文化財センターに保管している。

目　次

1．はじめに……49
2．調査の概要……50
3．遺物の概要……51
4．まとめ……52

図　目　次

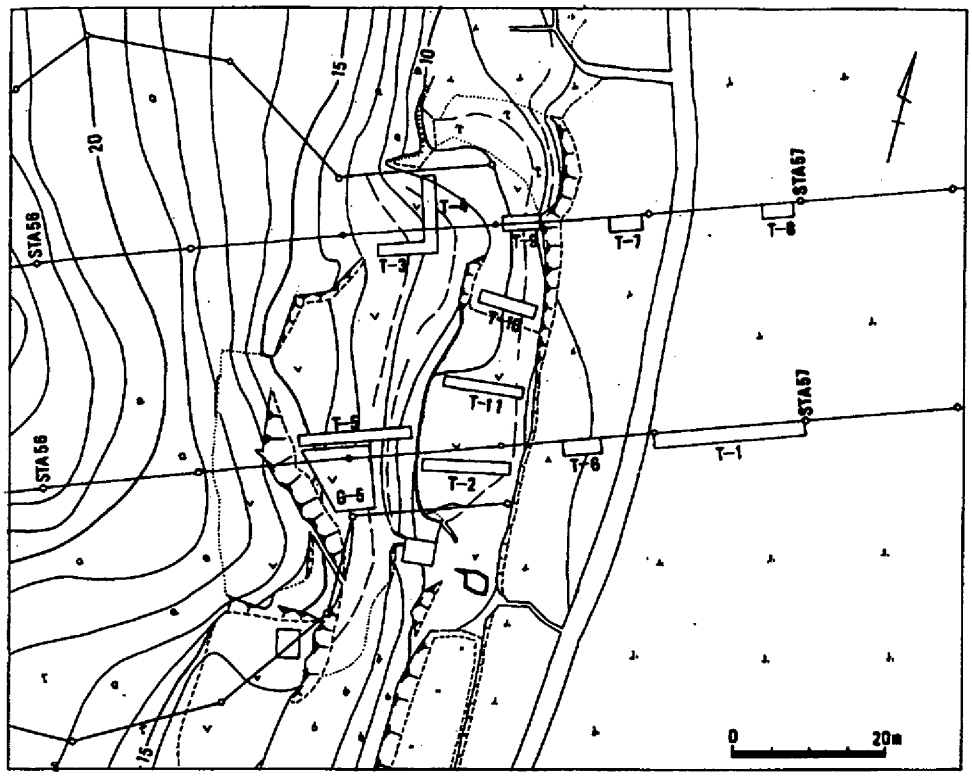
第１図　トレンチ・グリッド配置図（1/1,000）……49
第２図　出土遺物（1/4）……51

図版目次

図版１　①酒津・水江遺跡　②Ｔ－１大溝断面　③Ｔ－１畔平面　④Ｔ－１畔・大溝
図版２　①Ｔ－２　②Ｔ－３・４　③Ｔ－５・Ｇ－５　④Ｔ－11
図版３　①Ｔ－６掘削作業　②Ｔ－６　③Ｔ－７　④Ｔ－８
図版４　出土遺物

1．はじめに

本遺跡は、倉敷市酒津・水江に所在し、高梁川の中洲にある鎧山と明見山と言う小丘陵を含めた広い範囲を囲んでいる。酒津遺跡は弥生後期から古墳時代の標識土器である酒津式土器を出土する遺跡である。過去数度の発掘調査が行われている。（註１）この度の調査は山陽自動車道の高梁川橋の直下の高梁川河川敷き内での第一次調査である。発掘直前の現状は西方は緩斜面で畑として利用されている。先に調査した酒津八幡山平谷遺跡と連続している。東方は平坦地で柳の木が広範に繁茂して林になっている。調査は橋脚の建設位置に限らず、用地内すべてを対象としてトレンチを設定した。当初は東平坦地に「キ」の字にトレンチを設定して柳の木を伐開してもらった。Ｔ－１を調査すると、拳大の河原石が数十cmも堆積していることが判明し、人力で掘り下げることを諦め、重機を使用することに決めた。Ｔ－１・６～８の４本のトレンチは重機を使用して深さ 2.5ｍまで掘り下げている。他のトレンチは西の畑に設定したので、人力で掘り下げることが出来た。調査期間は昭和59年６月11日から６月21日まで掛かっている。実働日数は９日である。トレンチ11本・拡張区１カ所で、発掘総面積は 260㎡を測る。



第１図　トレンチ・グリッド配置図（1／1,000）

2．調査の概要

先の述べたようにトレンチ11本のうち東平坦地に設定したものは４本で、Ｔ－１・６～８である。西の緩斜面に設定したものは７本で、Ｔ－２～５・９～11である。拡張区１カ所はＴ－５の南にあるのでＧ－５と称した。以下若干の説明を加えたい。

Ｔ－１

海抜８～９ｍの平坦地に全長20ｍ・幅２ｍのトレンチを設定。STA-56＋80からSTA-57までのセンター杭を使用した。STA-57から西に５ｍの位置で、幅５ｍ・深さ１ｍの大溝を検出した。大溝の東側には幅70cmの畔があり、その東には水田層が認められた。大溝の西側には護岸用の杭が２列検出できた。この遺構を検出できる面は現地表から 100cmのところである。時期は現代である。

Ｔ－２

現状は畑で麦を植えつけていた。海抜９～10ｍの傾斜地に全長11ｍ・幅２ｍのトレンチを設定。表土20cmを除去すると攪乱土が出てきた。耕作によるものであろう。数条の南北に走る溝が検出できたが、現代の物である。遺物は攪乱土中から少量の陶磁器片が出土している。

Ｔ－３・４

現状は畑でお多福豆を植えていた。海抜10～13ｍの傾斜地に全長18ｍ・幅２ｍのトレンチをＬ字に設定した。交点部分で現代のごみ穴を当てただけですぐ地山になった。Ｔ－４の北の端で少量の陶磁器片が出土している。

Ｔ－５・Ｇ－６

現状は畑でお多福豆を植えていた。大正２年（註２）まで屋敷が在ったと言う。（開墾者に聞く）Ｔ－５は海抜11～15ｍの傾斜地に全長15ｍ・幅２ｍのトレンチを設定した。表土20cm・攪乱土20cm・地山となっている。前２層から弥生土器・須恵器・陶磁器片が少量出土した。そこで南側を拡張してＧ－５の調査をした。約63㎡ある。ここでも若干の遺物が出たが、遺構は全く検出できなかった。

Ｔ－６

現状は草地である。海抜９ｍの地に全長５ｍ・幅２ｍトレンチを設定。重機によって 2.5ｍも掘り下げた。大量の湧水が出た。地表下２ｍまで砂礫層で、それ以下は粘土になる。粘土層の内上部10cm程度がやや黒く、水田層の可能性もある。時期はかなり新しそうである。

Ｔ－７

現状は竹林である。海抜 8.5ｍの地に全長５ｍ・幅２ｍのトレンチを設定。重機によって

2.5ｍも掘り下げた。大量の湧水が出た。地表下 1.5ｍまで砂礫層で、それ以下は粘土になる。全くの無遺物・無遺構である。

Ｔ－8

現状は柳林である。海抜 8.5ｍの地に全長５ｍ・幅２ｍのトレンチを設定。重機によって2.5ｍも掘り下げた。大量の湧水が出た。地表下70cmまで砂礫層で、 100cmまで砂層、それ以下は粘土になる。全くの無遺物である。しかし溝状遺構が東端に掛かった。Ｔ－１の大溝に続くものであろう。

Ｔ－9

現状は竹林である。海抜９～10ｍの緩斜面に全長５ｍ・幅２ｍのトレンチを設定。上層は重機によって削り、下層は人力によった。深さは１ｍの部分もある。表土直下が地山である。遺構なし。近世陶磁器が若干出土。

Ｔ－10

現状は畑である。海抜 9.5～10.5ｍの緩斜面に全長８ｍ・幅２ｍのトレンチを設定。40cm掘る。表土直下が地山である。遺構なし。近世陶磁器が若干出土。

Ｔ－11

現状は畑である。海抜９～10ｍの緩斜面に全長11ｍ・幅 1.5ｍのトレンチを設定。40cm掘る。表土・攪乱土・地山である。遺構なし。近世土器が出土。

3．遺物の概要

この調査で出土した遺物は整理箱に１杯分しかない。その大半がＴ－５・Ｇ－５において表土・攪乱土から出土した陶磁器類である。実測したのは16点になる。図の番号に従って若干の説明を加えたい。

１はＴ－１から出土した。緑色の釉薬を施した陶器の椀で、見込みの中央に花形の押し型文が見られる。時期は不明。２はＴ－10から出土した。早島式土器の椀で、黄褐色を呈し、

第2図　出土遺物（¼）

口縁部が薄い。中世後期からある。３はＴ－11の西端から出土した。三脚付きの土師質土器の甕で、内面ハケメ・外面格子タタキとハケメで調整している。近世である。４はＧ－５から出土した。弥生後期の特殊壺である。体部中央に断面三角形の凸帯を２本張りつけている。外表面は丹塗している。角閃石を含む。５はＧ－５から出土した。青色に染め付けされた肥前産磁器の小杯である。両面に模様が描かれている。６もＧ－５から出土した。青色に染め付けされた肥前産磁器の湯飲み碗である。内面に模様が描かれている。７もＧ－５から出土した。青色に染め付けされた肥前産磁器の碗である。内面に模様が描かれている。８もＧ－５から出土した。白色の縞模様が両面に見える。肥前産陶器の鉢である。9･10もＧ－５から出土した。土師質土器の土鍋である。どちらにも口縁外面に媒が付着している。11はＴ－11から出土した。軒丸瓦である。三巴文の周囲に珠文を巡らしている。12・13はＧ－５から出土した。備前焼のすり鉢である。12の方が大型である。14はＧ－５から出土した備前焼のすり鉢の底部である。底径は約20cmある。15はＧ－５から出土した備前焼の灯明皿である。口径８cmあり、内側に１本の土手を持ち、その土手には３カ所切り込みがある。16もＧ－５から出土した。備前焼の灯明皿である。口径10cmを測る。

４．まとめ

この確認調査で判明したことをまとめてみたい。

１．倉敷市の遺跡分布地図に示されている酒津・水江遺跡の範囲に線引きされている高梁川内の中洲の最も北端部に入っているけれど、今回の調査では弥生から古墳時代の遺構は皆無であった。この時期にはこの付近まで遺跡は広がっていない事が判明した。

２．Ｔ－２の状況から、河川改修前は水田が存在していたことが分かった。改修の時に１ｍ近い盛り土していることも分かる。

３．緩斜面については倉敷市の遺跡分布地図に酒津・水江遺跡の範囲に線引きされていない。まさにその通りで、むしろ酒津八幡山平谷遺跡の範囲に入れるのがよい。地形的にも、遺物の上で全く同様である。

酒津八幡山平谷遺跡と酒津・水江遺跡に分離して調査に入ったために報告書も分けてしまったが、一つに纏めて編集すべきであった。この調査を纏めるに当たって後悔しているところである。

最後に調査に当たって、船で渡って来なければならないのに終始協力して頂いた酒津の方々や、関係者・関係機関に深く感謝の意を表したい。

（註１）間壁葭子「酒津－水江遺跡」『倉敷考古館研究集報告第８号』昭和48年　倉敷考古館

（註２）高梁川河川改修の年である。

4．菅生小学校裏山遺跡

例　言

1．本書は、山陽自動車道建設に伴い、日本道路公団の委託を受け、岡山県教育委員会が昭和60年度～62年度に発掘調査を実施した倉敷市西坂（にしさか）所在の菅生小学校裏山遺跡の発掘調査報告書である。

2．発掘調査は、昭和60年４月１日～昭和62年９月７日まで岡山県古代吉備文化財センターが行った。調査は、昭和60年度（浅倉秀昭、中野雅美）、昭和61年度（中野、亀山行雄）、昭和62年度（中野、小松原基弘）が担当した。

3．特殊な遺物および自然科学分野における鑑定、同定等については下記の諸氏、機関に依頼し、有益な教示を得、一部の成果については報告文をいただいた。記して深く感謝の意を表わす次第である。

・石材同定　三宅　寛（岡山理科大学）
・C_{14}年代測定　山田　治（京都産業大学）
・樹種鑑定　畦柳　鎮（岡山商科大学）
・丹・赤色顔料鑑定　安田博幸・森　真由美（武庫川女子大学）
・鉄・鉄錆の分析　大澤正己（新日本製鉄ＫＫ）
・考古地磁気法による年代測定　伊藤晴明、時枝克安（島根大学）
・土器付着の有機質分析　川野邊　渉（東京国立文化財研究所）
・種子同定　パリノ・サーヴェイＫＫ
・胎土分析　白石　純（岡山理科大学）
・輸入陶磁器の産地同定　大橋康二（九州陶磁文化館）
・緑釉陶器の産地同定　京都市埋蔵文化財研究所

4．報告書の作成は、浅倉、中野、亀山が担当し、平成３年４月～平成４年３月に岡山県古代吉備文化財センター津寺事務所で行った。

5．報告書の作成にあたっては、主に浅倉が遺構図の浄書、亀山が西坂古墳、縄文土器、木器および弥生土器の実測、浄書、それ以外を中野が担当した。出土遺物の実測には、久保恵里子、岡本智子、阿部美代子、神原さちみ、渡辺弘子、山元尚子、原田美佐子、山本恵美子、三垣小夜子、石器の実測には、三垣佐知子、平井典子の助力を得た。出土遺物の写真撮影は、政田孝が行った。また、遺物整理には、山内順子、角谷保子、練尾隆子、酒井美智子、高草洋子、宮崎美枝子の協力を得た。深謝。

6．本文の執筆は、各担当者が行い、文責を文末に記した。石器については、平井が執筆した。全体の編集は中野があたった。

7．本書に用いている高度値は、標準海抜高度である。また、遺構平面図等の北方位は磁北である。

8．本書に掲載した遺構図、出土遺物実測図は基本的にはそれぞれ統一しており、例外については縮尺を明記した。(土器:1/4 、土製品、石製品:1/2 、土錘、硯、鉄器:1/3)

9．遺物番号は、土器、陶硯、瓦を通し番号とした。石器、石製品:S、鉄器:I、木器:W、土製品:C (土錘のみ“土”) の各々略号の番号の前に付した。

10．本書の第1図に掲載した地図は、建設省国土地理院発行1／25000 地形図（倉敷）の一部を複製した。

11．報告書に関係する出土遺物、図面、写真、マイクロフィルム等は岡山県古代吉備文化財センターに保管している。

目　次

第１章　地理的・歴史的環境……67
第２章　発掘調査の経緯……71
　第１節　発掘調査の経緯と経過……71
　第２節　調査の方法と日誌抄……74
　（１）　調査の方法
　（２）　日誌抄
第３章　発掘調査の概要……77
　第１節　調査の方法と各調査区の概要……77
　（１）　各調査区の概要
　（２）　層位
　第２節　旧石器時代の遺物……88
　第３節　縄文・弥生時代の遺構・遺物……90
　（１）　土壙
　（２）　杭列
　（３）　縄文時代の土器
　（４）　弥生時代前期の土器
　（５）　谷
　（６）　斜面堆積
　（７）　包含層
　（８）　縄文・弥生時代の石器
　第４節　古墳時代の遺構・遺物…… 145
　（１）　溝
　（２）　落ち込み
　（３）　窯址
　（４）　谷
　（５）　包含層
　第５節　古代・中世の遺構・遺物…… 209
　（１）　建物

（2）　柱穴列
（3）　井戸
（4）　土壙
（5）　鍛冶炉
（6）　溝
（7）　谷
（8）　包含層
第4章　西坂古墳…… 339
第1節　調査の概要…… 339
（1）　立地
（2）　墓壙
（3）　石室
（4）　墳丘
（5）　石室の堆積
（6）　出土の遺物
（7）　その他の遺構
第2節　まとめ…… 360
第5章　まとめ…… 365
第1節　まとめ…… 365
第2節　縄文時代の土器…… 370
第3節　石器…… 376
付載1　菅生小学校裏山遺跡より出土の縄文土器に付着の赤色顔料物質の微量化学分析
安田博幸・森眞由美（武庫川女子大学薬学部）…… 383
付載2　土器に使用された接着材様物質の分析　川野邊　渉（東京国立文化財研究所）…… 385
付載3　菅生小学校裏山遺跡・西坂古墳出土鉄滓の金属学的調査
大澤　正巳（新日本製鉄K.K）…… 392
付載4　菅生小学校裏山遺跡・出土遺物の胎土分析　白石　純（岡山理科大学）…… 400
付載5　菅生小学校裏山遺跡出土縄文土器の胎土分析　白石　純（岡山理科大学）…… 415
付載6　菅生小学校裏山遺跡　種子同定報告　パリノ・サーヴェイ株式会社…… 418

図目次

第１図　周辺遺跡分布図（１／25000）…68
第２図　周辺地形図及びトレンチ・調査区位置図（１／2000）……72
第３図　遺跡全体図と区分図（１／2000）74
第４図　調査区全体図（１／800）…79～80
第５図　調査区部分図（１）（１／600）…81
第６図　調査区部分図（２）（１／600）…82
第７図　調査区部分図（３）（１／600）…83
第８図　調査区部分図（４）（１／600）…84
第９図　低位部東壁土層断面図（１）（１／100）……86
第10図　低位部南壁土層断面図（２）（１／100）……87
第11図　旧石器時代出土石器……89
第12図　縄文時代遺構配置図（１／150）出土遺物（１／６）……90
第13図　縄文時代土壙配置図（１／60）…91
第14図　土壙－１．２（１／30）出土遺物…92
第15図　土壙－３（１／20）出土遺物……93
第16図　土壙－４（１／30）……94
第17図　土壙－５（１／30）出土遺物……94
第18図　土壙－６（１／30）出土遺物（１／６）……95
第19図　土壙－７～13（１／30）……96
第20図　杭列（１／150）……97
第21図　杭列出土遺物（１／６）……98
第22図　縄文時代の土器（１）…… 100
第23図　縄文時代の土器（２）…… 101
第24図　縄文時代の土器（３）…… 102
第25図　縄文時代の土器（４）…… 103
第26図　縄文時代の土器（５）…… 104
第27図　縄文時代の土器（６）…… 105
第28図　縄文時代の土器（７）…… 106
第29図　縄文時代の土器（８）…… 107
第30図　縄文時代の土器（９）…… 108
第31図　縄文時代の土器（10）…… 109
第32図　縄文時代の土器（11）…… 110
第33図　縄文時代の土器（12）…… 111
第34図　縄文時代の土器（13）…… 112
第35図　縄文時代の土器（14）…… 113
第36図　縄文時代の土器（15）…… 114
第37図　弥生時代前期土器（１）…… 116
第38図　弥生時代前期土器（２）…… 117
第39図　弥生時代前期土器（３）…… 118
第40図　ピート層周辺出土遺物…… 119
第41図　谷－Ｃ出土遺物…… 121
第42図　中洲東斜面断面図（１／80）… 122
第43図　斜面堆積出土遺物（１）…… 123
第44図　斜面堆積出土遺物（２）…… 124
第45図　包含層出土遺物…… 125
第46図　石器（１）…… 129
第47図　石器（２）…… 130
第48図　石器（３）…… 131
第49図　石器（４）…… 132
第50図　石器（５）…… 133
第51図　石器（６）…… 134
第52図　石器（７）…… 135
第53図　石器（８）…… 136

第54図　石器（9）…… 137
第55図　石器（10）…… 138
第56図　石器（11）…… 139
第57図　石器（12）…… 140
第58図　石器（13）…… 141
第59図　石器（14）…… 142
第60図　石器（15）…… 143
第61図　石器（16）…… 144
第62図　古墳時代遺構図（1／800）… 145
第63図　溝－1（1／30）…… 146
第64図　溝－1出土遺物（1）…… 153
第65図　溝－1出土遺物（2）…… 154
第66図　溝－1出土遺物（3）…… 155
第67図　溝－1出土遺物（4）…… 156
第68図　溝－1出土遺物（5）…… 157
第69図　溝－1出土遺物（6）…… 158
第70図　溝－1出土遺物（7）…… 159
第71図　溝－1出土遺物（8）…… 160
第72図　溝－1出土遺物（9）…… 161
第73図　溝－1出土遺物（10）…… 162
第74図　溝－1出土遺物（11）…… 163
第75図　溝－1出土遺物（12）…… 164
第76図　溝－1出土遺物（13）…… 165
第77図　溝－1出土遺物（14）…… 166
第78図　溝－1出土遺物（15）…… 167
第79図　溝－1出土遺物（16）…… 168
第80図　溝－1出土遺物（17）…… 169
第81図　溝－1出土遺物（18）…… 170
第82図　溝－1出土遺物（19）…… 171
第83図　溝－1出土遺物（20）…… 173
第84図　溝－1出土遺物（21）…… 174
第85図　溝－1出土遺物（22）…… 175
第86図　溝－1出土遺物（23）…… 176
第87図　溝－1出土遺物（24）…… 177
第88図　落ち込み（1／100）…… 178
第89図　落ち込み出土遺物（1）…… 179
第90図　落ち込み出土遺物（2）…… 180
第91図　落ち込み出土遺物（3）…… 181
第92図　窯址（1）（1／80）…… 183
第93図　窯址（2）（1／80）…… 184
第94図　焼土土壙－1、2（1／30）… 184
第95図　焼土土壙－3（1／30）出土遺物 185
第96図　焼土土壙－4（1／30）…… 185
第97図　谷－A（1／80）…… 186
第98図　谷－A古墳時代出土遺物（1） 188
第99図　谷－A古墳時代出土遺物（2） 189
第100図　谷－A古墳時代出土遺物（3） 190
第101図　谷－B（1／80）…… 191
第102図　谷－B出土遺物（1）…… 192
第103図　谷－B出土遺物（2）…… 193
第104図　谷－B出土遺物（3）…… 194
第105図　谷－B出土遺物（4）…… 195
第106図　谷－C（1／80）…… 196
第107図　谷－C出土遺物（1）…… 198
第108図　谷－C出土遺物（2）…… 199
第109図　谷－C出土遺物（3）…… 200
第110図　谷－C出土遺物（4）…… 201
第111図　谷－C出土遺物（5）…… 202
第112図　谷－C出土遺物（6）…… 203
第113図　包含層古墳時代出土遺物（1） 205
第114図　包含層古墳時代出土遺物（2） 206
第115図　包含層古墳時代出土遺物（3） 207
第116図　建物－1（1／80）…… 209
第117図　建物－2（1／80）…… 210

第118図　建物－3（1／80）出土遺物　210
第119図　建物－4（1／80）…… 211
第120図　建物－4（溝）出土遺物 …… 212
第121図　建物－5（1／80）…… 212
第122図　建物－6（1／80）…… 213
第123図　建物－6周辺（1／80）…… 214
第124図　銅印（1／2）…… 215
第125図　建物－6周辺出土遺物（1）　215
第126図　建物－6周辺出土遺物（2）　216
第127図　建物－7（1／80）…… 216
第128図　建物－8（1／80）…… 217
第129図　建物－9～12周辺（1／200）218
第130図　建物－9～12周辺出土遺物 … 219
第131図　建物－9（1／80）…… 220
第132図　建物－10（1／80）…… 221
第133図　建物－11（1／80）…… 222
第134図　建物－12（1／80）…… 222
第135図　建物－13～17周辺（1／200）　223
第136図　建物－13（1／80）出土遺物　224
第137図　建物－14（1／80）…… 225
第138図　建物－15（1／80）…… 226
第139図　建物－16（1／80）出土遺物　227
第140図　建物－17、18（1／80）…… 228
第141図　建物－19～21（1／80）…… 230
第142図　建物－22（1／80）…… 231
第143図　建物－22（1／80）…… 232
第144図　建物－23（1／80）…… 232
第145図　建物－24（1／80）…… 233
第146図　柱穴列1～3（1／80）…… 233
第147図　柱穴列4～6（1／80）出土遺物
……235
第148図　井戸－1（1／30）…… 236
第149図　井戸－1（1／30）…… 237
第150図　井戸－1出土遺物（1）…… 238
第151図　井戸－1出土遺物（2）…… 239
第152図　井戸－1出土遺物（3）…… 240
第153図　井戸－2、3（1／30）…… 242
第154図　井戸－2、3出土遺物 …… 243
第155図　井戸－4（1／30）…… 244
第156図　土壙－14（1／40）出土遺物　245
第157図　土壙－15（1／30）出土遺物　246
第158図　土壙－16（1／30）…… 247
第159図　土壙－17（1／30）…… 247
第160図　土壙－18（1／30）…… 247
第161図　土壙－19（1／30）…… 248
第162図　土壙－20（1／30）…… 248
第163図　土壙－21（1／30）…… 249
第164図　鍛冶炉－1（1／30）…… 249
第165図　溝－2～6周辺（1／600）　250
第166図　溝－2、3（1／30）…… 251
第167図　溝－2出土遺物（1）…… 252
第168図　溝－2出土遺物（2）…… 253
第169図　溝－2出土遺物（3）…… 254
第170図　溝－2出土遺物（4）…… 255
第171図　溝－2出土遺物（5）…… 256
第172図　溝－2出土遺物（6）…… 257
第173図　溝－2出土遺物（7）…… 257
第174図　溝－2出土遺物（8）…… 258
第175図　溝－2出土遺物（9）…… 259
第176図　溝－2出土遺物（10）…… 260
第177図　溝－3出土遺物（1）…… 261
第178図　溝－3出土遺物（2）…… 262
第179図　溝－4、5（1／30）…… 263
第180図　溝－6（1／30）…… 263

第181図　溝－7（1／100）…… 263
第182図　溝－8～17周辺（1／200） 264
第183図　溝－8～17（1／30）…… 265
第184図　溝－18～28（1／30）…… 267
第185図　溝－29（1／100, 1／30）… 268
第186図　溝－30（1／60, 1／30）… 269
第187図　溝－31～49周辺（1／200） 270
第188図　溝－31～49（1／30）…… 271
第189図　溝－35, 36, 40, 42出土遺物 272
第190図　溝－50～66（1／30）…… 274
第191図　溝－67～76周辺（1／400） 277
第192図　溝－67～76（1／30）…… 278
第193図　谷－A古代～中世出土遺物（1）……280
第194図　谷－A古代～中世出土遺物（2）……281
第195図　谷－A古代～中世出土遺物（3）……282
第196図　谷－A古代～中世出土遺物（4）……283
第197図　谷－A古代～中世出土遺物（5）……284
第198図　谷－A古代～中世出土遺物（6）……285
第199図　谷－A古代～中世出土遺物（7）……286
第200図　谷－A古代～中世出土遺物（8）……287
第201図　谷－A古代～中世出土遺物（9）……288
第202図　谷－A古代～中世出土遺物（10）……289
第203図　谷－A古代～中世出土遺物（11）……291
第204図　谷－A古代～中世出土遺物（12）……292
第205図　谷－A古代～中世出土遺物（13）……293
第206図　谷－A古代～中世出土遺物（14）……294
第207図　谷－A古代～中世出土遺物（15）……295
第208図　谷－A古代～中世出土遺物（16）……296
第209図　谷－A古代～中世出土遺物（17）……297
第210図　谷－B古代～中世出土遺物（1）……299
第211図　谷－B古代～中世出土遺物（2）……300
第212図　谷－B古代～中世出土遺物（3）……301
第213図　谷－B古代～中世出土遺物（4）……302
第214図　谷－B古代～中世出土遺物（5）……303
第215図　谷－B古代～中世出土遺物（6）……304
第216図　谷－B古代～中世出土遺物（7）……305
第217図　谷－B古代～中世出土遺物（8）……306
第218図　谷－B古代～中世出土遺物（9）……307

第219図　谷－Ｂ古代～中世出土遺物（10）……308
第220図　谷－Ｂ古代～中世出土遺物（11）……309
第221図　谷－Ｂ古代～中世出土遺物（12）……310
第222図　谷－Ｂ古代～中世出土遺物（13）……311
第223図　谷－Ｂ古代～中世出土遺物（14）……312
第224図　谷－Ｂ古代～中世出土遺物（15）……313
第225図　谷－Ｃ古代～中世出土遺物（１）……315
第226図　谷－Ｃ古代～中世出土遺物（２）……316
第227図　谷－Ｃ古代～中世出土遺物（３）……317
第228図　谷－Ｃ古代～中世出土遺物（４）……318
第229図　谷－Ｃ古代～中世出土遺物（５）……319
第230図　谷－Ｃ古代～中世出土遺物（６）……320
第231図　谷－Ｃ古代～中世出土遺物（７）……321
第232図　包含層古代～中世出土遺物（１）……323
第233図　包含層古代～中世出土遺物（２）……324
第234図　包含層古代～中世出土遺物（３）……325
第235図　包含層古代～中世出土遺物（４）……326
第236図　包含層古代～中世出土遺物（５）……327
第237図　包含層古代～中世出土遺物（６）……328
第238図　包含層古代～中世出土遺物（７）……329
第239図　包含層古代～中世出土遺物（８）……330
第240図　包含層古代～中世出土遺物（９）……331
第241図　包含層古代～中世出土遺物（10）……332
第242図　包含層古代～中世出土遺物（11）……333
第243図　包含層古代～中世出土遺物（12）……334
第244図　包含層古代～中世出土遺物（13）……335
第245図　包含層古代～中世出土遺物（14）……336
第246図　包含層古代～中世出土遺物（15）……337
第247図　周辺地形測量図（１／500）　340
第248図　墳丘測量図（１／250）……341
第249図　墳丘下地形測量図（１／250）342
第250図　石室上面図（１／100）……343
第251図　墓壙平面図（１／100）……343
第252図　石室平・側面図（１／60）…345～346
第253図　墳丘断面図（１／50）…347～348

第254図　石室内遺物出土状況図(1)(1／60)……350
第255図　石室内遺物出土状況図(2)(1／60)……351
第256図　古墳に伴う遺物（1）…… 352
第257図　古墳に伴う遺物（2）(1／6)……353
第258図　古墳に伴う遺物（3）(1／3)……354
第259図　石室再利用の遺物(1)…… 355
第260図　石室再利用の遺物(2)…… 356
第261図　石室再利用の遺物(3)(1／3)357
第262図　骨蔵器出土状況図、出土遺物（1／6）(1／3)……358
第263図　木棺墓上の石組み（1／40)　359
第264図　木棺墓平・断面図（1／20)　359
第265図　木棺墓出土遺物（1／3）… 360
第266図　編年図（深鉢）…… 371
第267図　編年図（浅鉢）…… 372
第268図　中部瀬戸内における縄文晩期の土器編年……373
第269図　石鏃形態分類図 …… 376
第270図　石錐形態分類図 …… 377
第271図　スクレイパー形態分類図 …… 379
第272図　楔形石器分類図 …… 379
第273図　打ち欠き石錘形態分類図 …… 380
第274図　敲石形態分類図 …… 380

図版目次

図版1　1．遺跡遠景(東から)
2．第1次調査地遠景(北から)
図版2　1．丘陵上第1次調査状況(北から)
2．第1次調査状況(北東から)
図版3　1．縄文時代土壙検出状況(南から)
2．土壙－5(南東から)
図版4　1．土壙－6(南東から)
2．土壙－2(南東から)
図版5　1．調査区西端微高地下り(南から)
2．落ち込み木器出土状況(西から)
図版6　1．溝－1(南から)
2．溝－1土層断面(南から)
図版7　1．溝－1木器出土状況(南から)．
2．溝－1遺物出土状況(南西から)
図版8　1．窯址及び焼土土壙1～4(北から)
2．窯址及び焼土土壙1～4(南から)
図版9　1．焼土土壙－1(南から)
2．土壙－21（南東から)
図版10　1．谷A周辺(南東から)
2．谷A土層断面(東から)
図版11　1．谷B(北東から)
2．谷B土層断面(北東から)
図版12　1．谷－C周辺(東から)
2．谷－C土層断面(東から)
図版13　1．建物－3、4周辺(南から)
2．建物1～4周辺(北西から)
図版14　1．建物－1(南東から)
2．建物－2(南東から)

図版15　1．建物－3柱穴内土器出土状況（南から）
2．建物－6周辺(東から)
図版16　1．建物－9～12周辺(北から)
2．建物－9～12周辺(東から)
図版17　1．建物－17～21周辺(南から)
2．建物－17～21周辺(北東から)
図版18　1．建物－18～21周辺(北東から)
2．建物－22井戸－4周辺(北から)
図版19　1．建物－23、24周辺(北西から)
2．建物－23柱穴列－b周辺（東から)
図版20　1．建物－24カジ炉（北東から)
2．カジ炉（北東から)
図版21　1．井戸－1（南西から)
2．井戸－2（東から)
図版22　1．井戸－3（東から)
2．井戸－3（東から)
図版23　1．溝－2・3（北から)
2．溝－4・5（南東から)
図版24　1．遺構出土の縄文土器
2．後期以前の縄文土器
図版25　1．深鉢B類
2．深鉢B類
図版26　1．深鉢口縁部1
2．深鉢口縁部2
図版27　1．深鉢口縁部3
2．深鉢口縁部4
図版28　1．深鉢口縁部5
2．深鉢文様（爪形文)
図版29　1．深鉢頸部
2．深鉢胴部
図版30　1．深鉢文様（爪形文)
2．深鉢文様（突帯文)
図版31　1．浅鉢口縁部1（表)
2．浅鉢口縁部1（裏)
図版32　1．浅鉢口縁部2（表)
2．浅鉢口縁部2（裏)
図版33　1．底部
2．底部
図版34　縄文土器の調整
図版35　弥生時代前期
図版36　弥生時代～古墳時代
図版37～41　石器
図版42～51　溝－1出土土器
図版52　落ち込み－1出土土器
図版53～55　谷－A（古墳時代）出土遺物
図版56～58　谷－C（古墳時代）出土遺物
図版59～61　各調査区（古墳時代）出土遺物
図版62　各調査区（古墳時代）石製品　土製品
図版63　建物、土壙、溝出土遺物
図版64～69　溝－2出土遺物
図版70～74　谷－B出土遺物
図版75　谷－C出土遺物
図版76　谷－B出土遺物
図版77　各調査区出土遺物
図版78　各調査区出土遺物
図版79　各調査区出土遺物
図版80　緑釉（各調査区)
図版81　1．白磁（各調査区)
2．青磁（各調査区)
図版82　瓦（各調査区)
図版83　陶硯（各調査区)
図版84　羽口・土製品・石製品(各調査区)

図版85　1．土錘（弥生前期）
　　2．土錘（溝－1）
図版86　1．土錘（各調査区）
図版87　　土壙・杭列出土土器
図版88　　溝3出土木器
図版89　　溝3出土木器
図版90　　落ち込み－1、谷－C出土木器
図版91　　溝1・2出土木器
図版92　　溝1・2出土木器
図版93　　溝1・2出土木器
図版94　　井戸状遺構出土木器
図版95　　井戸・包含層出土木器
図版96　1．調査時の状況
　　2．古墳全景（南から）
図版97　1．石室内部
　　2．左側壁
　　3．右側壁
図版98　1．墳丘断ち割りの状況
　　2．石室の石組み（南から）
図版99　1．石室の石組み（南西から）
　　2．石室の石組み（北西から）
図版100　1．墓壙全景（南から）
　　2．据え方の状況
図版101　1．石室内の遺物出土状況
　　2．石室内の遺物出土状況（部分）
図版102　1．開口部の須恵器出土状況
　　2．骨蔵器の出土状況
図版103　1．木棺墓の検出状況
　　2．木棺墓の遺物出土状況
図版104　1．解体工事風景
　　2．調査参加者
図版105　　古墳時代の遺物（1）
図版106　　古墳に伴う遺物（2）
図版107　　石室再利用時の遺物（1）
図版108　　石室再利用時の遺物（2）
図版109　　石室再利用時の遺物（3）
図版110　　石室再利用時の遺物ほか

表　目　次

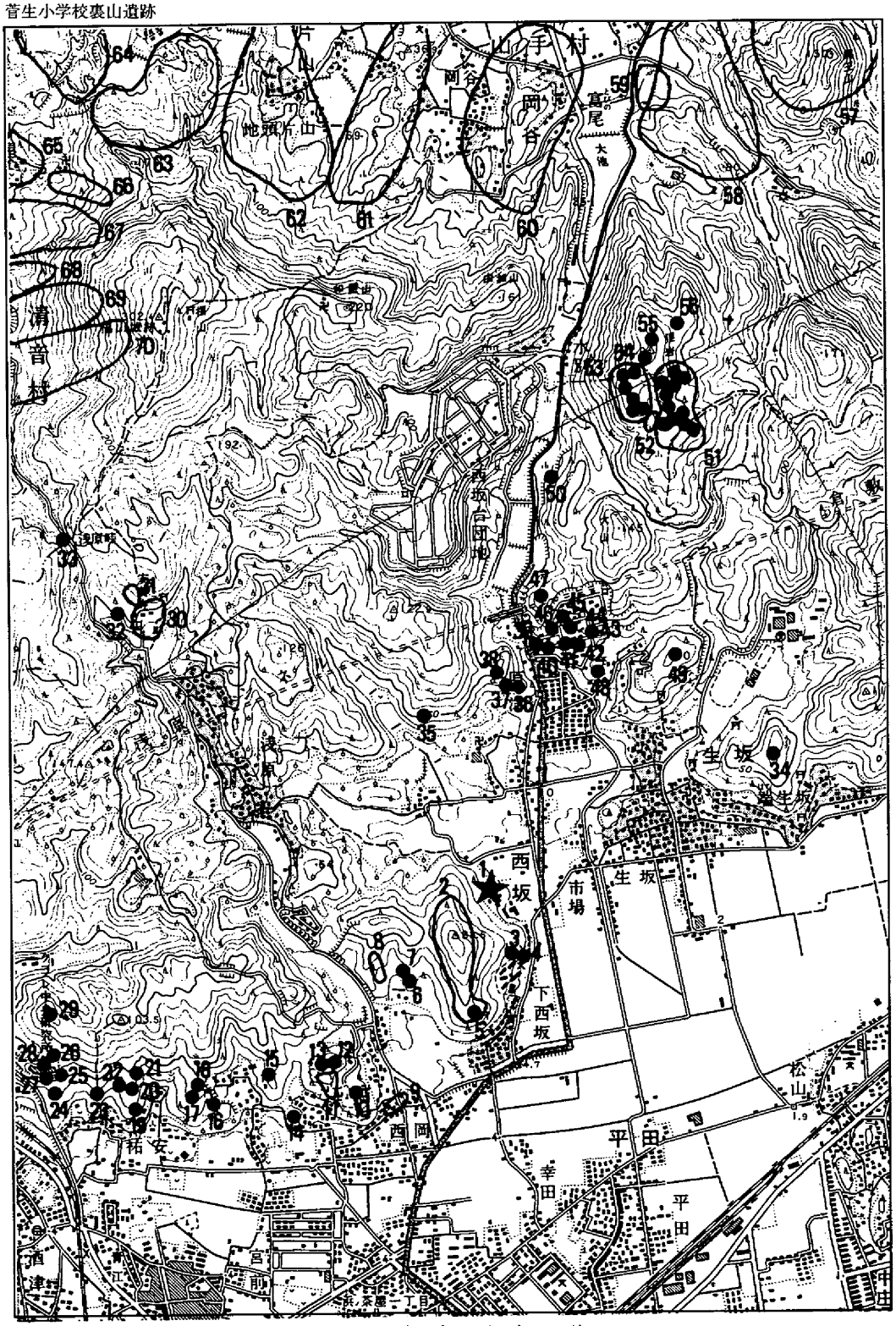
表－1　層位別の傾向
表－2　出土石器一覧表
表－3　旧石器時代出土石器一覧表
表－4　建物・柱穴列一覧表
表－5　緑釉一覧表
表－6　土錘一覧表
表－7　土器一覧表
表－8　石器一覧表

第１章　地理的、歴史的環境

菅生小学校裏山遺跡の所在する倉敷市西坂は、倉敷市の北部にあたり合併前は旧都窪郡菅生村と称していた。さらに、その前は西坂村で、「備中誌」によれば西坂村の古名を「神村」と伝えている。また、西坂の北側の丘陵には「甘南備」形の山が有り、「神村山」と称したと有る。この旧菅生村は、東の足守川、西の高梁川との中間位置にあたり、北側には標高302mの福山を頂点として東西方向に丘陵が横たわり、南側は、広大な水田地帯が広がっている。この南側の水田地帯は、中・近世の新田開発により水田化された地帯で、かつては「吉備の穴海」として丘陵近くまで海岸線が迫っていたと考えられる。和名抄によると高梁川下流左岸の倉敷市阿知から当遺跡が所在する倉敷市西坂、生坂あたりは、「阿智潟（あちのあがた）」と呼ばれていたと記されている。遺跡の位置する倉敷市西坂地区は、海岸線が北側に凹状に入り込んで谷部地形を呈しており、北側丘陵からその小河川を中心に、狭小な扇状地地形を形成しており、当遺跡はその扇状地南側末端の東側丘陵斜面に位置している。

遺跡の東丘陵上には、旧石器時代の散布地が存在しており、さらに丘陵西側の山裾部には縄文時代中期を中心とする西岡貝塚があり、当時が海岸線近くであったことを裏付けている。弥生時代は、遺跡の東、西側の高梁川、足守川の下流域は沖積化が進み大集落址が存在するものの、当遺跡周辺では土器の散布地が若干認められるに留まっている。これは、遺跡の周辺域に居住域、可耕地としては丘陵前面にしか求めることができない地形を示しており、当時はまだ海水が入り込んでおり、海岸部は葦原の状況を呈していたと考えられる。古墳時代に入ると遺跡周辺部にも古墳を中心にその存在が明らかとなっている。古墳時代前半期としては、北側丘陵頂部には積石塚を中心とする狸岩古墳群がある。このような積石塚古墳は、県内でも例が少なく、古墳北側には吉備中枢の中核を成す平野が拡がっている。この丘陵北側の平野部には、宿寺山古墳、作山古墳をはじめ備中こうもり塚古墳、備中国分寺、国分尼寺などが存在している地である。当遺跡からは、北側丘陵部の谷部を抜けると「水別（みずわかれ）の乢（たわ）」と称し容易に吉備中枢の地に到達できる地形である。また、狸岩古墳群もその中間地点に位置しており、古くからルートとして存在していた可能性が強いと考えられる。さらに、のちの旧国では旧菅生村は吉備中枢と同一の備中国窪屋郡に属している。

古墳時代中期には、当遺跡の東側丘陵部上に家形埴輪、古式須恵器を伴う小規模な古墳が西側の高梁川までの間に点在している。このころには、丘陵南側の前面も陸地化が徐々に進行していたと思われる。古墳時代後期になるとその集落址はいまだ確認されていないものの横穴式



第1図　周辺遺跡分布図（1／25,000）

石室を主体とする古墳は当遺跡周辺にも数多くその存在が知られている。原津古墳群と呼ばれる15基前後の古墳群は、当遺跡の北側の扇状地の付根部に位置している。また、菅生小学校周辺にも下西坂古墳群が存在している。しかし、先にも述べたように古墳の存在にかかわらず集落址はいまだ確認されていないが、当遺跡の存在する狭小な扇状地上を中心に集落址が存在すると思われる。

古代以降の遺跡はほとんど確認されていなく、唯一北側丘陵には、平安時代の浅原寺が周知されている。古代末から中世以降は、周辺地域は荘園化され新田開発がさかんに行われたと考えられ、「備陽国志」には旧菅生村は萬寿庄に属したとされている。さらに、近代にも新田開発の記録が数多く残っている。　（中野）

1．菅生小学校裏山遺跡（調査地点）　2．菅生小学校裏山遺跡　3．下西坂古墳群2号墳　4．下西坂古墳群1号墳　5．下西坂古墳群3号墳　6．明見谷池東古墳群2号墳　7．明見谷池東古墳群1号墳　8．明見谷池西遺跡　9．西岡貝塚　10．西岡古墳群3号墳　11．西岡廃寺及墓地　12．西岡古墳群5号墳　13．西岡古墳群4号墳　14．西岡古墳群2号墳　15．西岡古墳群1号墳　16．祐安古墳群2号墳　17．祐安古墳群3号墳　18．祐安古墳群1号墳　19．祐安古墳群4号墳　20．祐安古墳群6号墳　21．祐安古墳群5号墳　22．祐安古墳群7号墳　23．祐安古墳群8号墳　24．祐安古墳群10号墳　25．祐安古墳群9号墳　26．祐安青江山遺跡B　27．祐安青江山遺跡A　28．祐安古墳群11号墳　29．祐安古墳群12号墳　30．浅原寺跡　31．安養寺裏山経塚群　32．安養寺西古墳　33．浅原峠古墳　34．端生坂古墳群6号墳　35．笹池東古墳　36．原津古墳群12号墳　37．原津古墳群13号墳　38．原津古墳群14号墳　39．原津古墳群1号墳　40．原津古墳群2号墳　41．原津古墳群4号墳　42．原津古墳群7号墳　43．原津古墳群8号墳　44．原津古墳群6号墳　45．原津古墳群5号墳　46．原津古墳群3号墳　47．原津古墳群10号墳　48．原津古墳群9号墳　49．肥後池南西古墳　50．原津古墳群11号墳　51．狸岩山古墳群　52．狸岩山遺跡　53．狸岩山古墳群　54．狸岩山古墳群11号墳　55．狸岩山古墳群12号墳　56．狸岩山古墳群14号墳　57．竜王古墳　58．平山古墳　59．鎌戸原遺跡　60．岡谷古墳　61．津坂古墳　62．地頭古墳　63．西群古墳　64．持坂古墳　65．妙蓮寺古墳群　66．山地古墳群　67．天神古墳群　68．万貫古墳群　69．堂屋敷古墳群　70．峠古墳群

第２章　発掘調査の経緯

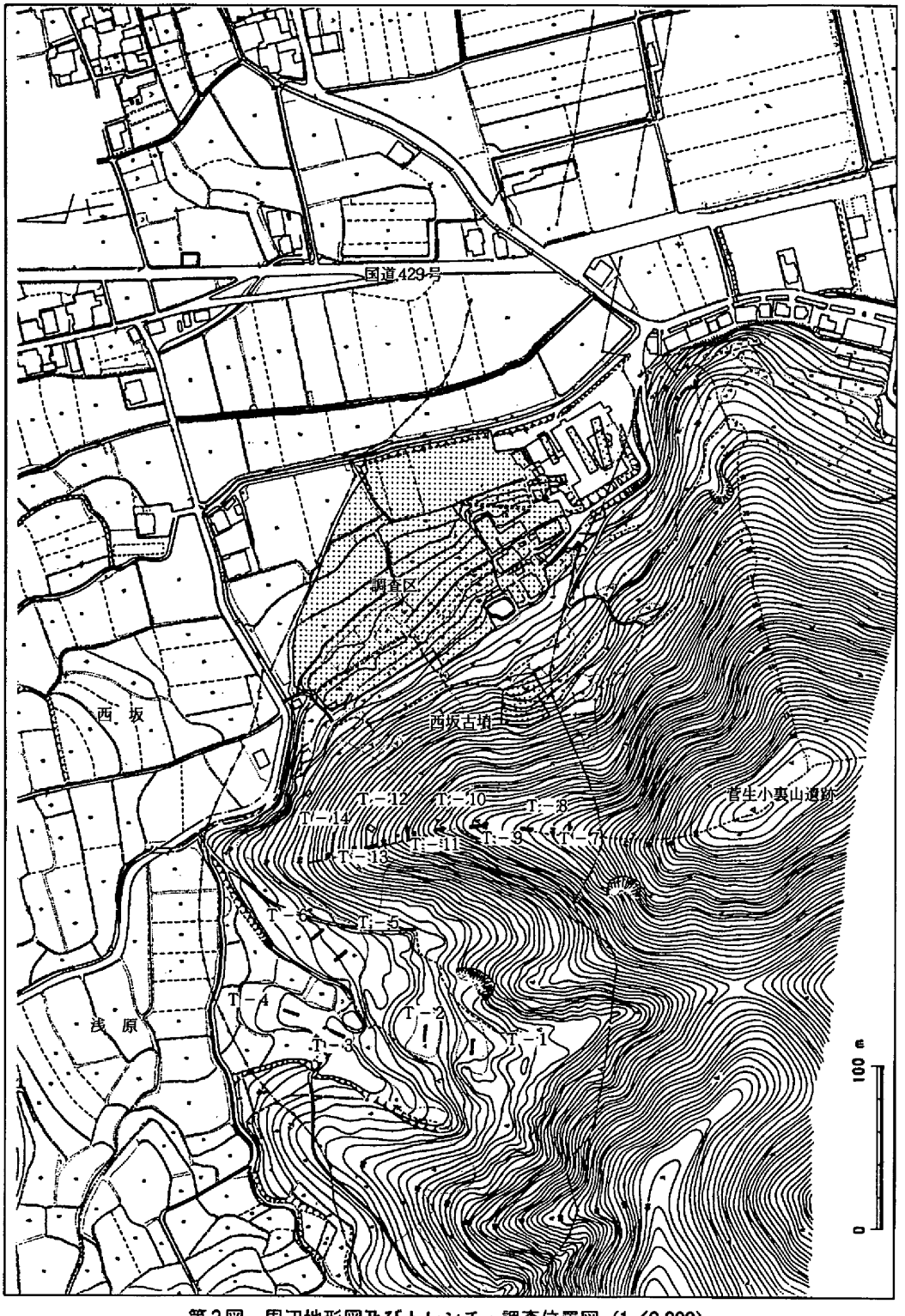
第１節　発掘調査の経緯と経過

菅生小学校裏山遺跡は、倉敷市立菅生小学校の西側丘陵上に位置し、丘陵上からは従来旧石器時代の石器が採集されており、倉敷市文化財分布図には散布地として周知されていた。

岡山県教育委員会は、昭和60年山陽自動車道の建設に伴う倉敷インターチェンジ用地内に、この菅生小学校裏山遺跡の丘陵上の西側一部がかかるため、日本道路公団から委託を受けて発掘調査を実施することになった。調査は、昭和60年５月から用地内の丘陵屋根上を中心に遺跡の範囲と規模の確認のための第一次調査（トレンチ）を行った。調査の結果、用地内の丘陵尾根には、遺跡が広がらないことが明らかになった。遺物等も確認できなかった。また、丘陵上の調査と相前後して周辺の分布調査を実施した。これらの調査の結果、丘陵東斜面から山裾部に古墳時代～中世の遺物が広範囲に散布していることが認められた。このため日本道路公団側と協議を行い丘陵東斜面から山裾部についても第一次調査を実施することとなった。さらに、丘陵西側の谷部および低丘陵周辺で、地域住民からかつて瓦などが出土したとの情報を得て、この地点も第一次調査を行った。これらの第一次調査は、丘陵上の調査終了後引き続いて実施した。丘陵西側の谷部、低丘陵については、地形等を勘案しトレンチを設定（Ｔ１～Ｔ６）し調査を行ったが、遺構、遺物の存在は認められなかった。

丘陵東斜面から山裾部については、調査時においてなお未買収地が多く残っていたため、限定的な確認調査となった。しかしながら、調査の結果、各トレンチに柱穴、溝等の遺構が検出され丘陵東斜面から山裾一帯に古代～中世に至る大規模な集落址の存在することが明らかとなった。さらに、丘陵東斜面と丘陵尾根の間を詳細に分布調査を行った結果、丘陵東斜面中腹に、横穴式石室をもつ古墳（西坂古墳）１基が新たに確認された。

これらの第一次調査の結果を踏まえて、日本道路公団との協議を重ねた結果、昭和60年７月から引き続き丘陵山裾部、および西坂古墳の記録保存の処置を講ずるため全面調査を実施した。全面調査は、第一次調査の結果を基に比較的買収が進んでいた山裾部北側から調査を開始した。調査区は、山裾部の比較的段差の少ない地点に調査区を設定し調査を順次進めた。また、当初の第一次調査において丘陵東斜面から山裾一帯に集落址の存在が確認されたものの、詳細な遺跡の範囲については必ずしも明確ではなかった。このため、全面調査と並行して調査対象地の



第2図　周辺地形図及びトレンチ・調査位置図（1／2,000）

北側水田部、北西部の丘陵斜面にトレンチを設けて調査範囲の確定に努めた。

昭和60年度は、１～７区の山裾部を中心に調査を行ったが、調査区北側の中央部（３区）には、墓地が１区画存在していたため、後年次に調査を行うこととなった。また、調査区の東側は、現状で約1.5mの段差が山裾部に並行して認められ、当初これは山裾部と低位部との境目であると判断し、遺跡も山裾部に存在するものと考えていた。発掘調査の結果、段差が生じていた調査区（１、６区）でも東側に大きく下る傾斜面を検出していた。しかしながら、土層観察のため設定した調査対象地の東側低位部のトレンチに大きく落ちる斜面が東側で再び上がり、用地外の北側から延びて来た微高地末端部（中洲）と判断された。この微高地上には、柱穴、溝等が検出されたため、日本道路公団と協議を行い調査区の拡幅を行った。

昭和61年度は、60年度に引き続き低位部（11、12区）、丘陵東斜面（８．９区）および西坂古墳を中心に調査を進めた。61年度の調査対象地には、用地問題が解決していない地点が多く残っており、調査区の確保および円滑な調査計画に多分の支障を来たした。西坂古墳の一角にも墓地が存在し、調査は一部後年次送りとした。さらに、調査予定地南側には、広大な敷地を有する病院が存在し、業務が継続されていた。このため敷地内の空閑地へのトレンチ調査と速やかなる病院の移転問題の円滑かつ順調な進行を日本道路公団に要望した。この結果、敷地内のトレンチ調査を行うことができ、遺跡の範囲確認を実施し、病院敷地内にも遺構が検出された。61年度末には、病院内の空閑地（10区）の一部についても調査を実施した。

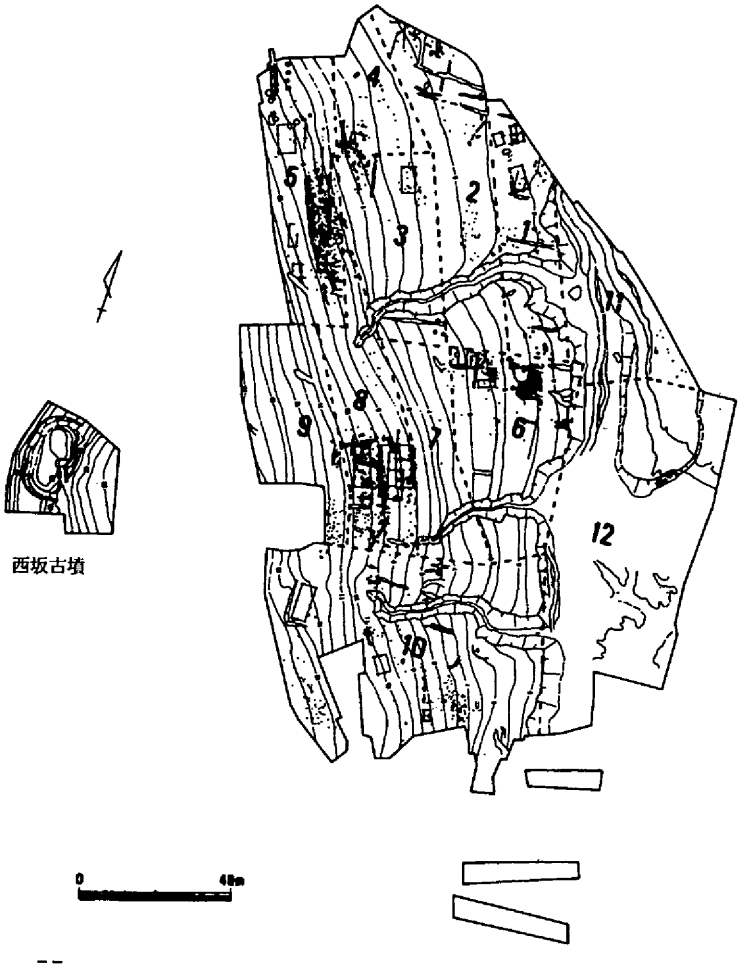
また、西坂古墳については、当地域では傑出した規模の横穴式石室で保存状態も良好であることが調査の結果判明した。この西坂古墳の内容が明らかになった時点で倉敷市教育委員会から、地元住民の要望を受ける形で日本道路公団に対して移築保存についての要望書が出された。その結果、地元住民の熱意により用地内に存在した墓地の移築先（用地に隣接）の一角に用地を確保し、移築保存されることとなった。さらに、60、61年の調査結果を通して、数々の遺構や重要遺物の出土などから、対策委員会委員から発掘調査の慎重な対応とともに遺跡の現状保存についての意見が出された。遺跡の現状保存問題については、対策委員会での意見を日本道路公団側に伝え善処を求めた。しかし、遺跡の存在する地点は、倉敷インターチェンジにあたり、水平な造成面を確保しなければならなかったため現状保存はできなかった。

昭和62年度は、その調査対象地は病院の敷地内が大半を占めた。また、墓地移転で後年次送りとなっていた３区、西坂古墳の一部についても対応した。また、調査対象地の南側の西部丘陵斜面についてもトレンチを設定し遺跡の範囲確定を急ぎ調査区を設けた。調査区南側に位置する病院主要建物跡については、現状からも丘陵部の大規模な掘削が認められたため調査の必要性はないものと判断していたが、補足的に大規模なトレンチを３ヵ所に設けて状況を確認した。昭和62年８月をもって発掘調査は終了した。

第２節　調査の方法と日誌抄

(1)調査の方法

前節で述べたように、全面調査域は当初から調査対象地ではなかったため、対象地内には買収問題の未解決な地点、および移転が進まない墓地などが多数点在していた。このような状況のため、調査区全体を念頭に置いた調査計画も描けなかった。さらに調査の手順、全調査区を対象とした区割（グリッド割）についても困難であった。このため調査区の設定は、水田化されていた山裾部から丘陵斜面に東西に延びる水路で大きく南北を３分し、さらに段差の少ない



第3.図　遺跡全体図と区分図 (1／2,000)

地形に沿った水田部を南北に長い1区画を1調査区として調査を実施した。また、山裾部から約1.5mの段差がある東側についても2分し調査区を設定した。調査は、買収が順調に進んでいた山裾部北側から行ないその調査区から1区とした。その後順次2区～12区とした。また、10区～12区については病院敷地内および病院所有地がその大半を占めたため、調査区は分割してしか確保できず、調査もまた分断された状況の中でしか行うことができなかった。（中野）

(2)日誌抄

昭和60年度

4月1日(月)　調査準備
5月10日(金)　第1次調査開始
6月5日(水)　第1次調査終了
6月20日(木)　1区調査開始
8月6日(火)　1区調査終了、2区南調査開始
8月29日(木)　2区南調査終了
9月4日(水)　2区北調査開始
9月27日(金)　2区北調査終了、3区調査開始
11月1日(金)　3区調査終了、6区調査開始
12月12日(木)　6区調査終了、7区調査開始
12月25日(水)　7区調査終了、4区調査開始
1月13日(月)　4区調査終了、5区調査開始
1月17日(月)　5区調査終了、11区調査開始
3月14日(金)　60年度発掘調査終了
3月31日(月)　昭和60年度事業終了

昭和61年度

4月1日(火)　調査準備
4月5日(土)　11区調査開始
5月23日(金)　11区調査終了
5月24日(土)　12区調査開始
7月10日(木)　西坂古墳調査開始
7月11日(金)　12区調査終了
7月12日(土)　8区調査開始
9月13日(土)　12区調査開始
9月24日(水)　8区調査終了
11月4日(火)　9区調査開始
11月15日(土)　西坂古墳調査終了
12月6日(土)　9区調査終了
2月23日(月)　10区調査開始
3月18日(水)　10、12区調査終了、61年度発掘調査終了
3月31日(火)　昭和61年度事業終了

昭和62年度

4月1日(水)　調査準備
4月6日(月)　10区調査開始
5月25日(月)　3区調査開始
5月26日(火)　西坂古墳調査開始
5月29日(金)　西坂古墳、3区調査終了
5月30日(土)　12区調査開始
6月18日(木)　12区調査終了
8月26日(水)　10区調査終了
9月7日(月)　事務所撤収

第3章　発掘調査の概要

第1節　調査区の概要と層位

(1)各調査区の概要

1区

この調査区では、山裾部の末端にあたり傾斜はゆるやかであった。基盤層上面には、東側の傾斜面に向けて包含層が堆積していた。調査区の南側には、谷部がやや蛇行気味に検出した。この谷部には、古墳時代～中世の遺物が多量に出土した。谷部の北側は、掘立柱建物4棟を含む柱穴、溝、土壙等が確認された。これらの遺構は、いずれも古代～中世と考えられる。

2区

調査区全体に後世の削平を受けており、遺構の残存状態は悪かった。調査区南側は谷部の続きと、部分的に柱穴が集中して検出された。調査区北側では、規則性をもった溝群、掘立柱建物などが確認された。時期は、中世を中心とするものである。

3区

この調査区も削平を大きく受けていたが、部分的には包含層が残存していた。調査区北側では、「コ」の字状の溝に伴なう掘立柱建物周辺からは、多数の緑釉とともに銅印が出土した。いずれも平安時代のものである。

4区

調査区全域が削平を大きく受けていた。一部柱穴、溝等が集中して検出された。時期は、古代～中世のものである。

5区

他の調査区に比べて比較的遺構の残存状態が良かった。この調査区は、1区から2区、3、4区と途々の傾斜度が高くなってきている。5区の西側にもトレンチを設けたが、傾斜度が変わり遺構は存在しなかった。この調査区では、中世の集落址と、7世紀前後の窯址が検出された。集落址は、斜面を掘削し水平面に造成して居住域を形成していた。また、窯址は窯の側壁に横口を多数もつ特殊な窯である。この窯址には、窯の側壁前部の平坦部に長方形土壙が4基検出された。土壙は、窯址と同時期と考えられ、土壙壁面だけが焼けていた。

6区

この調査区では、1区と同様に山裾部から低位部に下る傾斜面が調査区東側に検出された。調査区の南側には、1区などで検出された谷部よりやや小規模な谷部が確認された。谷の堆積土には8世紀代を中心に古墳時代～中世の遺物が大量に出土した。調査区北側では、比較的残存状態もよく一部包含層も認められた。検出された遺構は、掘立柱建物、土壙、溝などで、古代を中心とするものであった。

7区

調査区は、全体にわたって大きく削平を受けていた。検出された遺構は、柱穴が数基と、6区から続く谷部のみであった。

8区

調査区北側半分は、削平のためほとんど遺構は検出できなかった。北側に比べて南側では、掘立柱建物を中心に柱穴、溝等の多数の遺構が存在していた。掘立柱建物は、2×5間を基本とするもので建物の配列に規則性が認められた。建物の掘り方も方形のものも含み、柱穴からは黒色土器等が出土した。これらの建物群は、一定地点に集中的に位置しており、この丘陵東斜面部では最も好位置を占めている。

9区

丘陵斜面は、9区から徐々に傾斜度を高めるため、遺構は調査区南側の8区寄りに限られた。遺構は柱穴、土壙などでいずれも古代～中世のものであった。

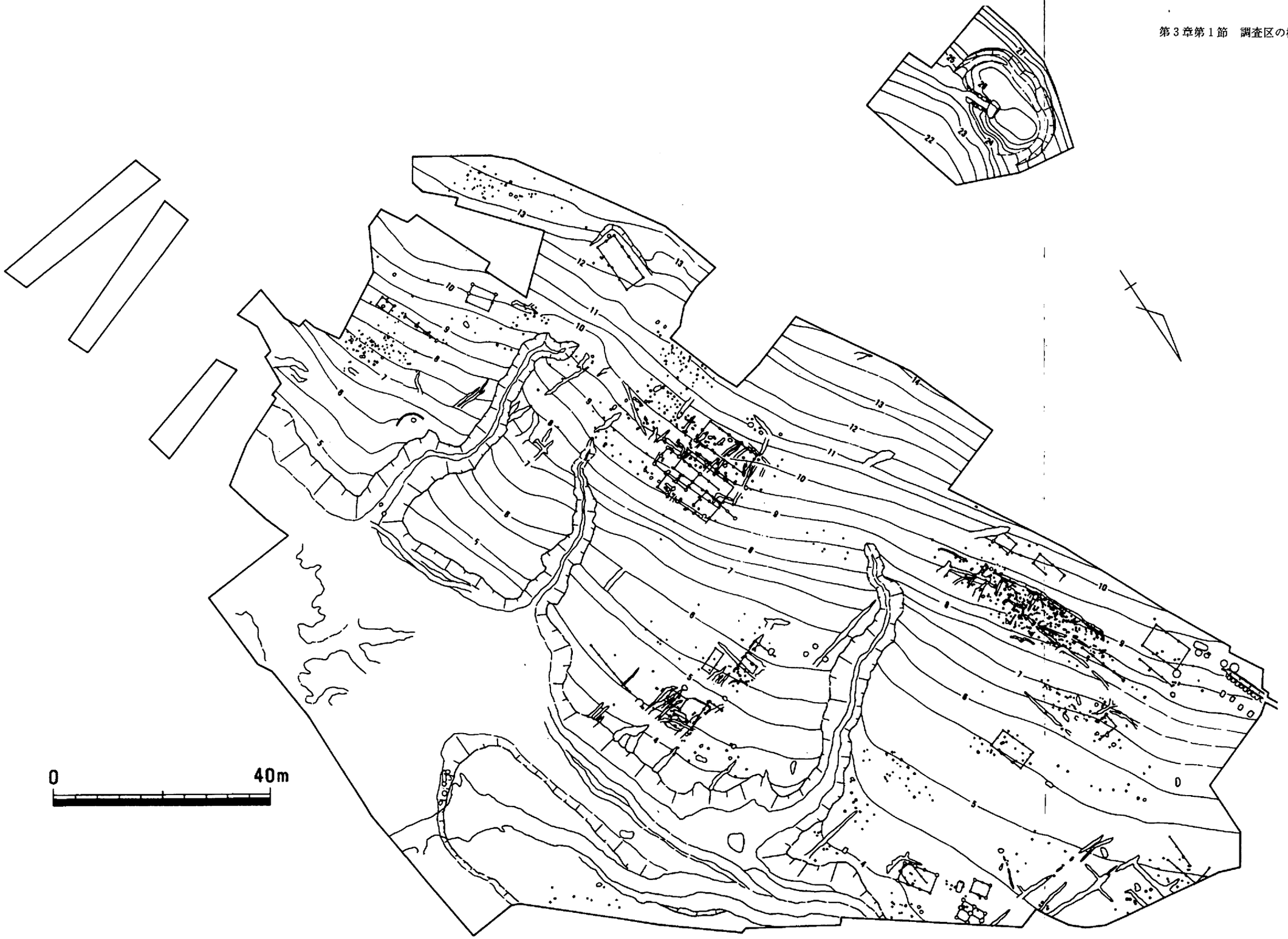
10区

この調査区は、病院の敷地であったため地形の改変が著しく、遺構の残存状態も悪かった。しかし、部分的に遺構が残存しており、中世を中心とする掘立柱建物、井戸、溝などが散在して検出された。また、調査区中央には、大規模な谷部が存在し、その堆積土からは古墳時代を中心に弥生時代中期～中世の遺物が大量に出土した。

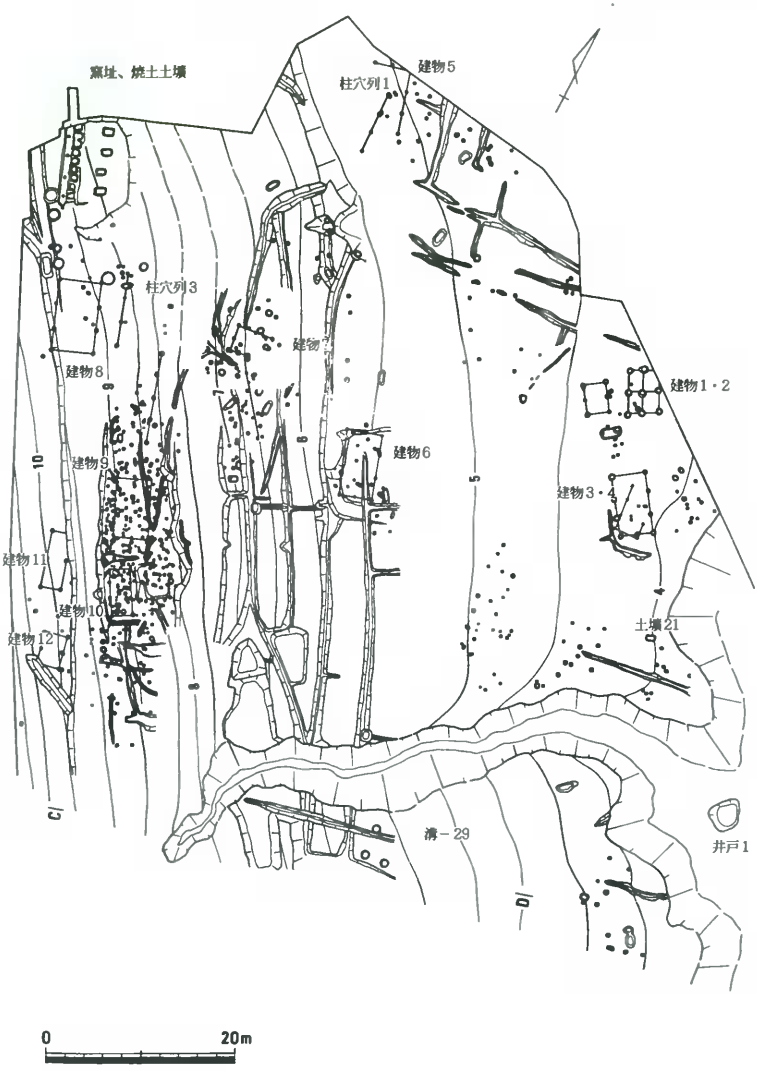
11、12区

この調査区は、山裾部から傾斜した低位部に当る。調査区の北側には、用地外から延びてきた微高地（中洲）が存在する。中洲の南端の斜面下部には、縄文時代晩期の土壙、包含層（ピート層）が確認され大量の遺物が出土した。また、弥生時代前期の遺物も混在していた。中洲上には、古墳時代中頃の溝が検出され、多量の土師器とともに朝鮮半島軟質系土器、初期須恵器、木器などが出土した。

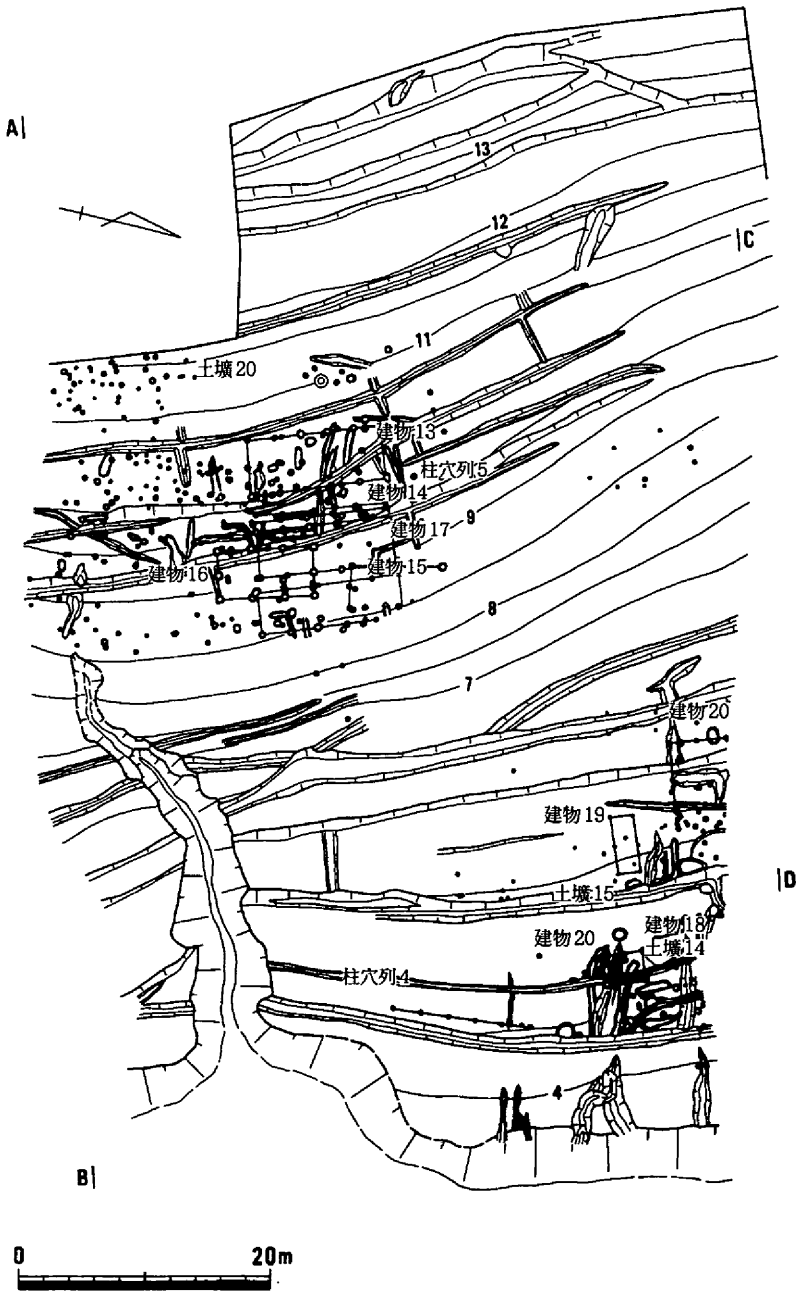
この中洲上は、古代までは柱穴などの遺構が存在することから居住域として占地されていたと思われる。また、調査区の南側は、古代の段階で水田化された状況を示していた。また、山裾部からの傾斜の落ち際には、奈良時代の流路が2条検出され多量の遺物が出土した。



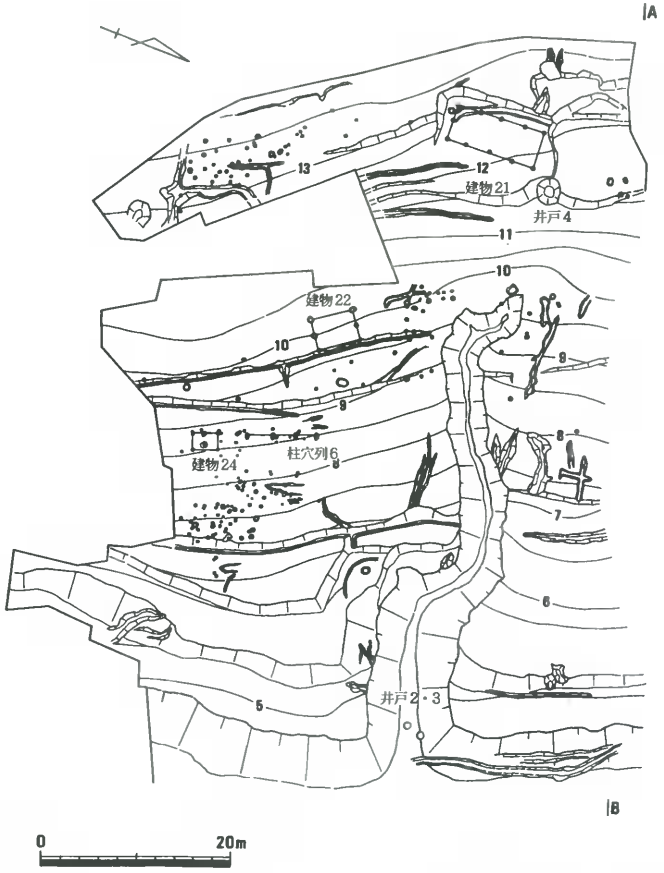
第４図　調査区全体図（1／800）



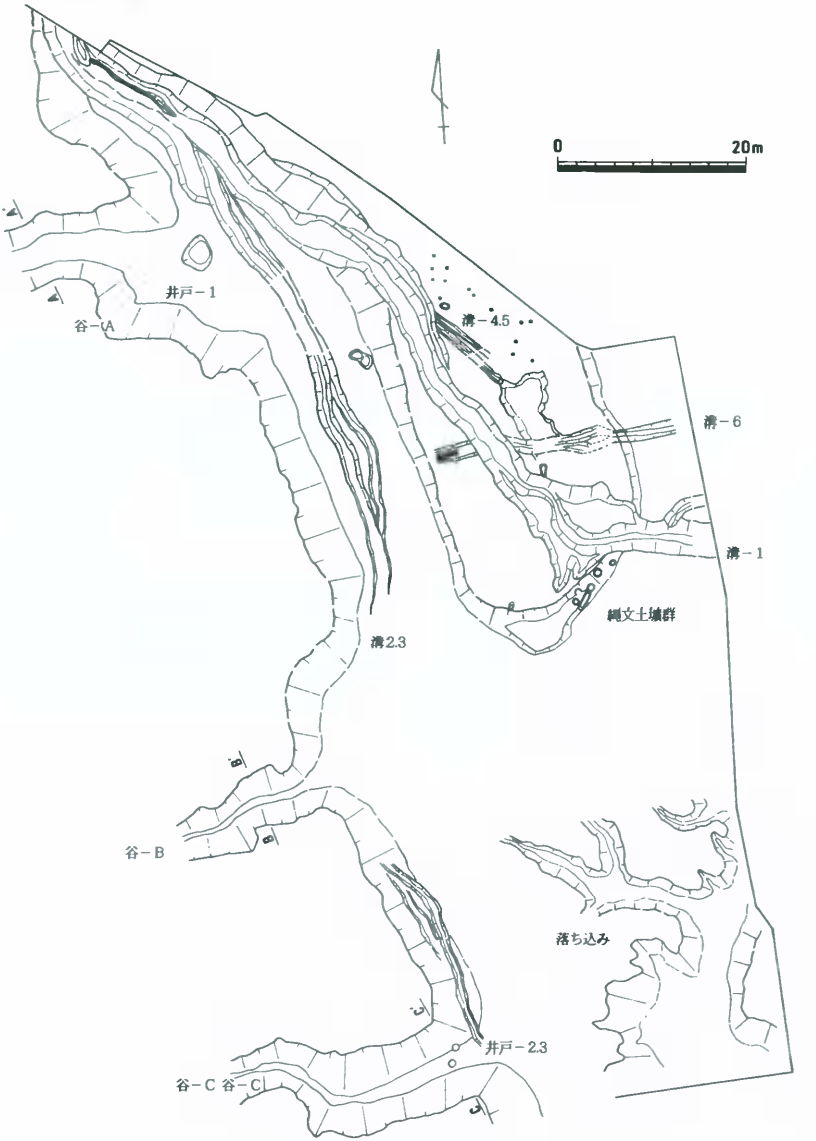
第５図　調査区部分図（1）（1／600）



第6図　調査区部分図（2）（1／600）



第7図　調査区部分図（3）（1／600）



第8図　調査区部分図（4）（1／600）

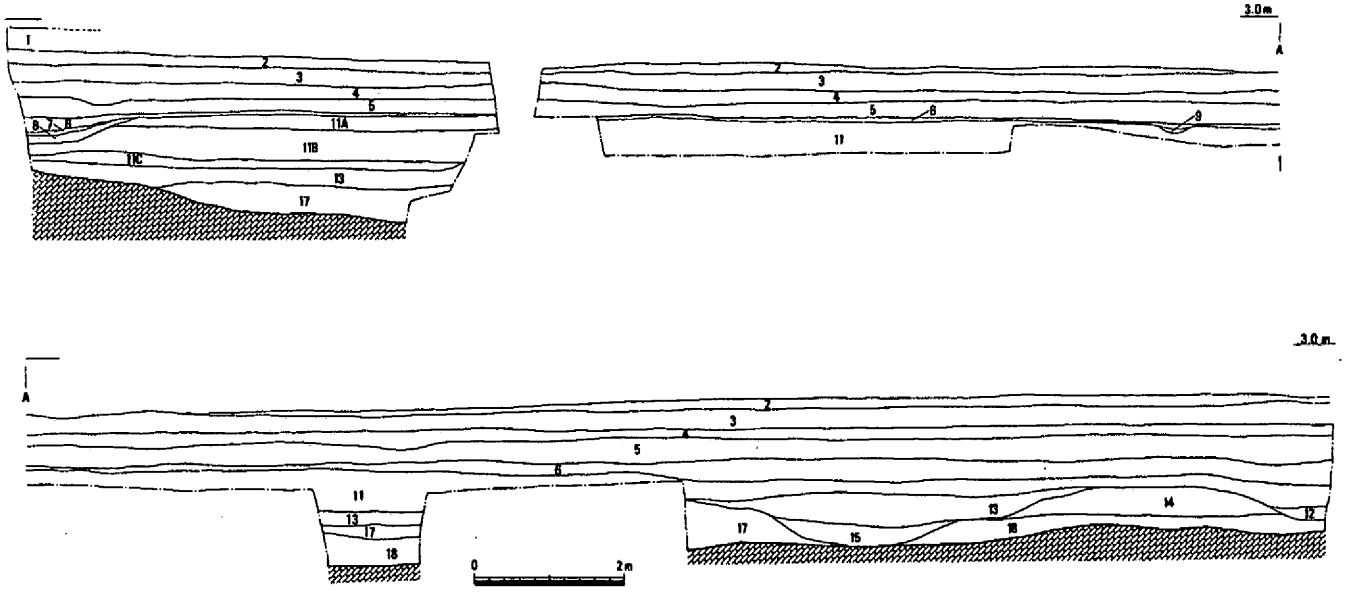
(2) 層位

今回の調査では、丘陵斜面から山裾部と山裾部の東側の低位部に大きく分かれた。丘陵東斜面から山裾部は、後世に水田および畑地として使用されたため、削平を著しく受けており遺構、包含層の残存してたいのは部分的なものであった。耕土直下は、基盤層にあたり、遺構の大半も基盤層で検出されたものである。包含層は部分的に残存していたが、その多くは中世の包含層で、３、６区の一部には古代の包含層が認められた。しかし、山裾部に検出された３筋の谷は、丘陵上部の先端部周辺では削平を受けていたものの、出入口部では深さがかなりであったため良好な状態で堆積層が残存していた。各々の谷は、層位は基本的には同様で、上部から中世、古代後半期、古代前半期、古墳時代（５世紀前半）の堆積層が認められた。

山裾部東側の11、12区の低位部は、山裾部からの斜面堆積とそれに続く東側には厚く堆積層が認められた、この11、12区の低位部には、北側の用地外から中洲（微高地）が張り出してきており、さらに山裾部斜面の下端部には古代前半期の溝が存在したりやや複雑な状況を呈していた。しかし、斜面堆積層は、基本的には各々の谷部と層位関係は同様で古墳時代から中世に至る包含層が堆積していた。特に、山裾部の斜面堆積には、古代前半期の遺物が多量に包含していた。

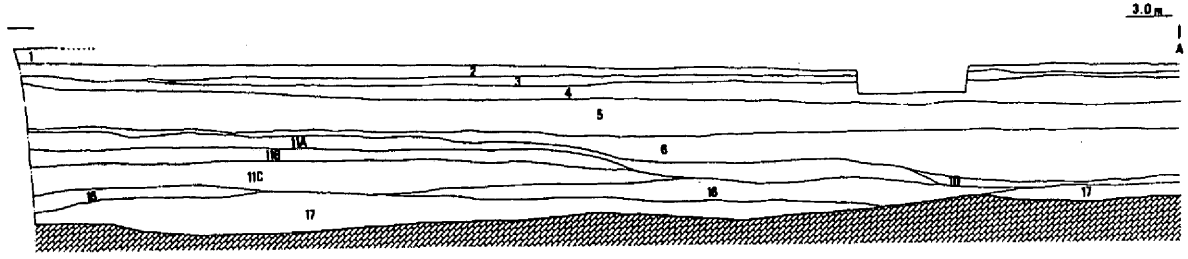
中洲（微高地）上の北側では、古代後半期～中世の柱穴等が存在し、南～東側には斜面堆積層が形成されていた。第９、10図は、中洲の南側の堆積層で、第１層が現在の水田耕作土、第２、３層が中世、第４層が古代後半期～中世、第５層が古代前半を中心とする時期と考えられた。第11層の上面からは、５世紀前半の遺構が切り込まれており、その上層の第６層は同時期の遺物を包含している。この第11層の灰白色粘土層は、厚く堆積するが部分的には３層（Ａ～Ｃ）に分かれ、基本的には土質はかわらないが分層ができる可能性がある。この第11層の下層では、中洲南端の南東側では縄文晩期と弥生前期の土器が混在して包含していた。また、その下層のピート層である第13層では、第11層の状況と同様に中洲南端の南東側（第12図の網目部）を中心に縄文晩期の遺物が多量に出土した。さらに、同地点の下層の灰褐色砂層（第42図第19層）からも多くの遺物が出土した。しかし、この灰褐色砂層と、第９、10図の第16、18層の灰褐色砂は同質ながら、部分的な堆積状況を示しているため同様でない可能性が考えられる。この第４、５図の灰褐色砂層には、遺物等は認められなかった。第４、５図の第13層以下の層は、灰褐色砂層と黒灰色のピート層が互層に堆積しており、流木、木葉などが包含していた。しかし、土器等の遺物は確認できなかった。

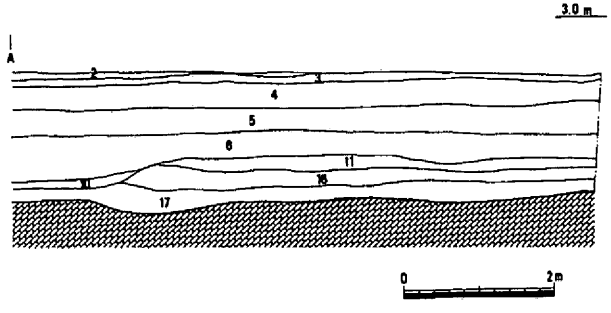
このような状況は、第42図の調査区北東部の中洲東側でも認められ、第19層の下層にはピート層、砂層が互層に堆積していたものの、出土遺物は認められなかった。　　（中野）



1. 耕土
2. 灰褐色砂質土
3. 灰茶褐色砂質土
4. 灰色砂質土
5. 黄灰褐色粘質土
6. 黒色粘質土
7. 黒褐色粘質土
8. 黒色粘質土
9. 黒褐色粘質土
10. 黒褐色粘質土
11. 灰白色粘土
11A グライ化（淡青灰色）
11B グライ化（青灰色）
11C グライ化（暗灰色）
12. 黒褐色粘質土（ピート質、砂質）
13. 暗灰褐色砂質土（ピート質）
14. 黒灰色砂質土
15. 黒灰褐色砂質土（ピート質）
16. 灰色色砂
17. 黒灰色砂礫（ピート質）
18. 灰褐色砂

第9図　低位部東壁土層断面図（1）（1／100）





1. 耕土
2. 灰褐色砂質土
3. 灰茶褐色砂質土
4. 灰色砂質土
5. 黄灰褐色粘質土
6. 黒色粘質土
7. 黒褐色粘質土
8. 黒色粘質土
9. 黒褐色粘質土
10. 黒褐色粘質土
11. 灰白色粘土
11A グライ化（淡青灰色）
11B 〃 （青灰色）
11C 〃 （黒灰色）
12. 黒褐色粘質土（ピート質、砂質）
13. 暗灰褐色砂質土（ピート質）
14. 黒灰色砂質土
15. 黒灰褐色砂質土（ピート質）
16. 灰色色砂
17. 黒灰色砂礫（ピート質）
18. 灰褐色砂

第10図　低位部南壁土層断面図（2）（1／100）

第２節　旧石器時代の遺物

今回の調査で出土した旧石器時代に属する確実な遺物としては、図示した８点が挙げられる。石材は、いずれもサヌカイトを用いており、表面は風化による白色化の進行したものが多い。この他、剥片等で旧石器時代の所産かと思われるものも若干みうけられるが、確定することはできなかった。

器種は、ナイフ形石器、尖頭器、有舌尖頭器に加え、石核や翼状剥片と考えられる剥片も認められる。このうちナイフ形石器は４点出土しており最も多く、いずれも横長の剥片を使用している。

Ｓ１は一側縁加工のナイフ形石器で、腹面側から急斜なブランティングを施し、打面を除去している。先端を大きく欠き、基部も僅かに欠損する。

Ｓ２は二側縁加工のナイフ形石器で、先端と基部を欠いており、薄手の剥片を使用している。調整はすべて背面側から行なっている。背部の基部付近以外は、比較的緩やかな調整を施している。

Ｓ３は二側縁加工のナイフ形石器で、先端と基部が欠損する。背部は、腹面から急斜なブランティングを施しているが、刃部側の基部調整は、浅く、角度も緩やかである。

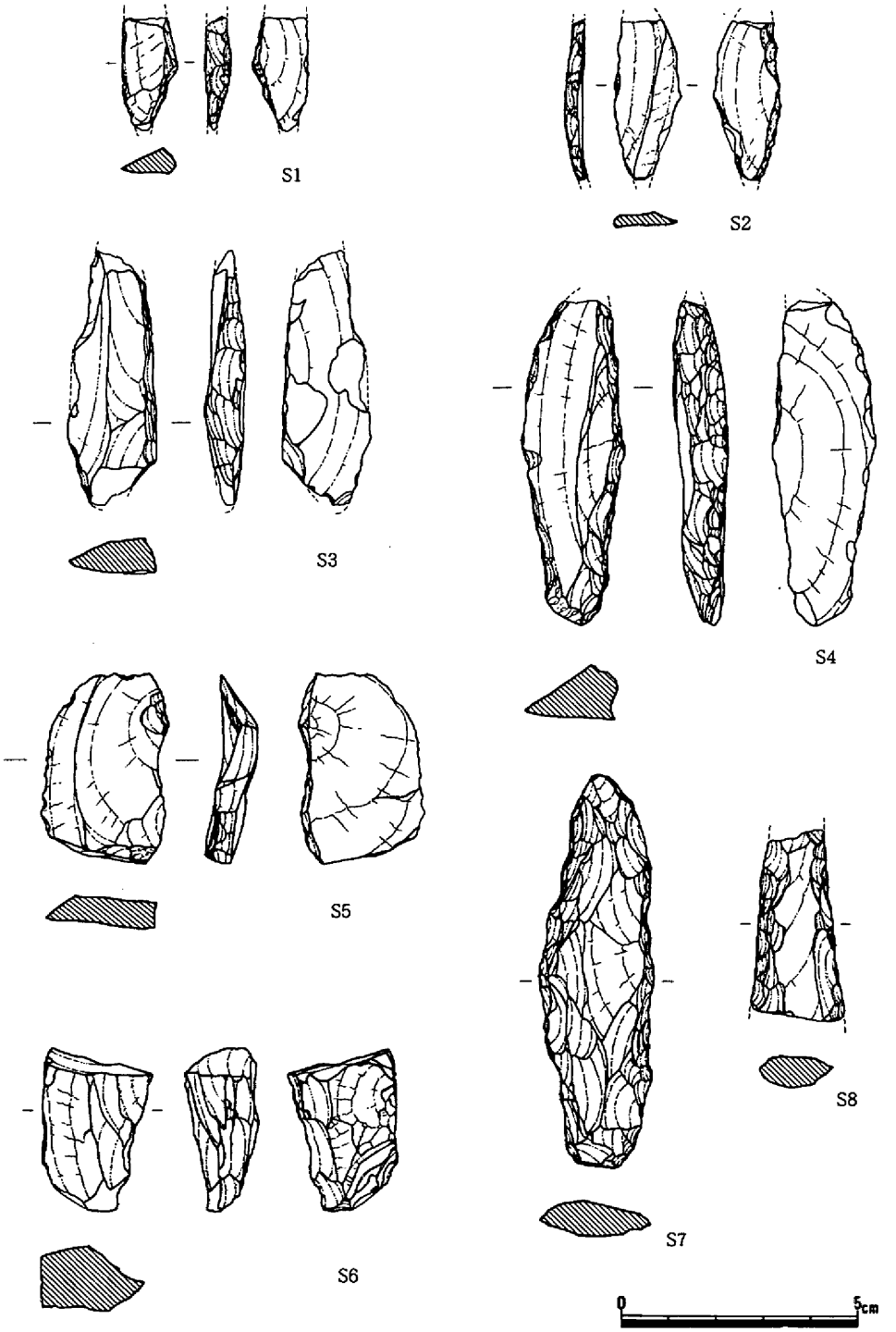
Ｓ４も二側縁加工のナイフ形石器で、肉厚である。背部のブランティングは急斜で、腹面側から入念に行われている。刃部側の基部加工は緩やかで、基部端には調整が及ばず自然面を残す。刃部には刃こぼれがみられる。

Ｓ５は、底面を持ち、山形に打面調整が施されており、石核からの連続的な剥片剥離が看主されることから、翼状剥片と思われる。表裏面の打点からみると、稜上加撃を施している。剥片の縁辺には、刃こぼれが認められる。

Ｓ６は上半が欠損しているが、板状剥片の上部を打面調整し、そこから連続的に横長の剥片を作出していることから、翼状剥片石核ではないかと思われる。剥片剥離が相当進んだ段階で放棄したものと思われる。

Ｓ７は両面加工の尖頭器である。表面の調整は深く、中央部を除いてほぼ全面に及んでいる。裏面の調整も比較的深いが縁辺のみで、主要剥離面を大きく残す。基部端には自然面が残存する。

Ｓ８は先端・基部共に欠くが、有舌尖頭器と思われる。胴部は細く、基部に向かって広がっており、縁辺にのみフリーフレーキングによる調整を施している。　　（平井）

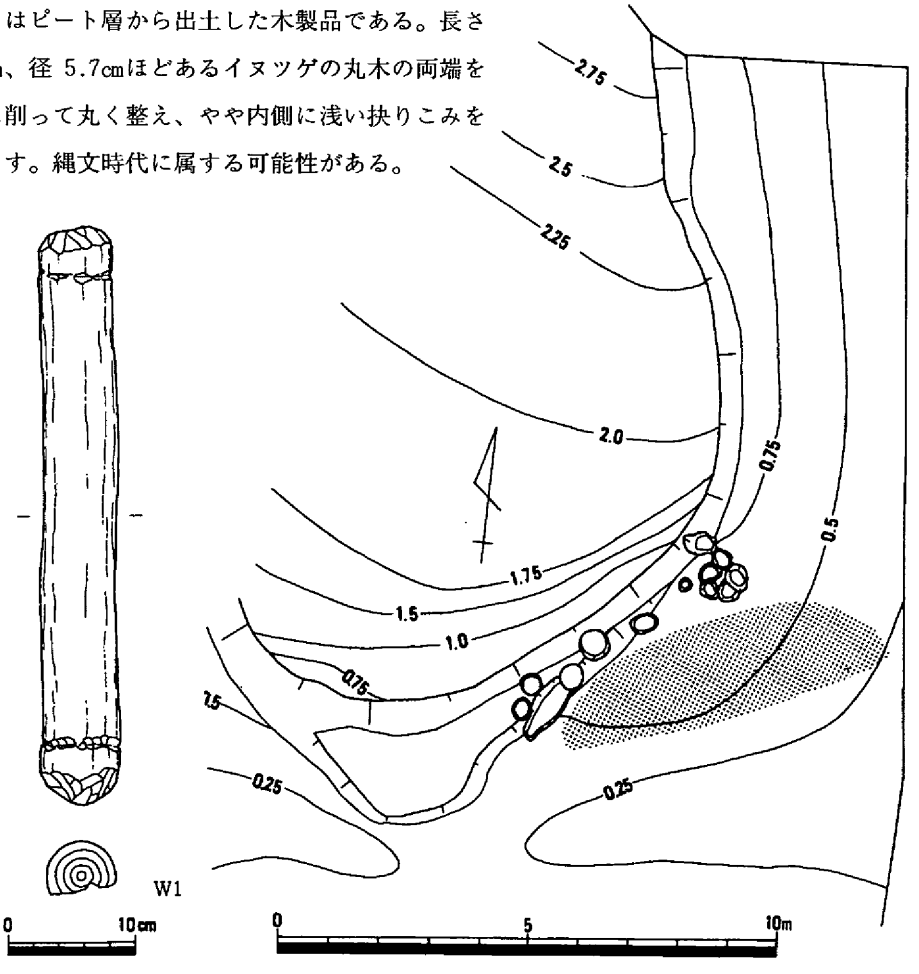


第11図　旧石器時代出土石器

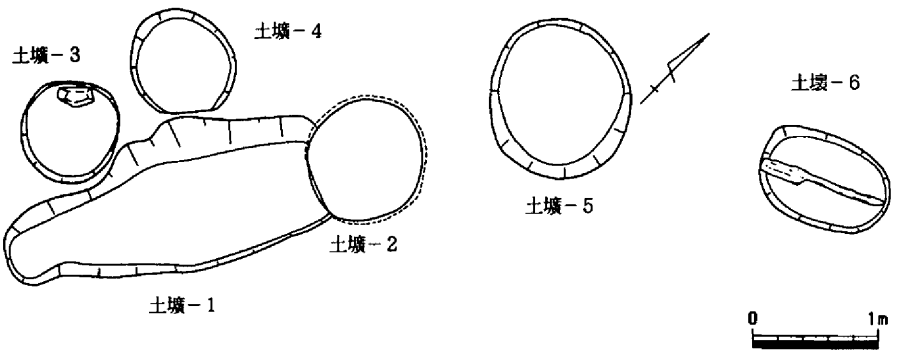
第３節　縄文・弥生時代の遺構・遺物

今回の調査では、縄文、弥生時代の遺構は希薄であった。しかし、出土遺物は縄文時代晩期～弥生時代前期を中心に縄文時代中期～弥生時代後期の遺物が相当量出土した。遺構としては、調査区東側部（11、12区）に拡がる低湿地部に存在する中洲（微高地）斜面裾部に土壙群を検出した。遺物は、縄文時代土壙群の南東部を中心に縄文時代晩期～弥生時代前期の土器を大量に包含するピート層および砂層の堆積層が存在した。また、中洲の北側の斜面堆積には、弥生時代後期を中心とする包含層、さらには、谷－Ａ～Ｃの下層などからも縄文・弥生時代の土器、石器が検出され、縄文、弥生時代集落が周辺域に存在すると考えられる。

Ｗ１はピート層から出土した木製品である。長さ46.2cm、径 5.7cmほどあるイヌツゲの丸木の両端を丁寧に削って丸く整え、やや内側に浅い抉りこみをめぐらす。縄文時代に属する可能性がある。



第12図　縄文時代遺構配置図（1／150）出土遺物（1／6）



第13図　縄文時代土壙配置図（1／60）

(1)土壙

調査区東部の11、12区には、丘陵東斜面から段差をもって低湿地が拡がる。その低湿地部の北側に、調査区外の北から伸びてきた中洲状の高まりが存在する。その中洲の南端の南東斜面裾部に土壙が集中して検出された。

土壙－1（第13、14図）

調査区東部中央（12区）の中洲南端の南東斜面裾部に位置している。この周辺は、上層の縄文時代晩期～弥生時代前期の遺物が多量に混在するピート層および砂層の下部の基盤層（淡黄褐色砂質土）で検出した。土壙は、北側を土壙－2に切られ、西側の一部も土壙－3に切られている。規模は、長さ約 260cm、幅約 120cmで、やや不整形な長楕円形を呈する。深さは約20cmを測る。土壙内は、ピート層と砂層の互層で、最下層に灰白色の微砂層が堆積していた。

出土遺物としては**1～4**がある。**1**、**2**は深鉢で、**1**、**2**は外面をケズリ、ナデ、内面をナデ調整していた。**3**は、浅鉢で外面をミガキ、内面をケズリ、ミガキを施す。底部の**4**は、あげ底で、外面をケズリ、内面を条痕、ナデで調整している。これらの土器は、縄文時代晩期と考えられる。

また、土壙の性格については、他の土壙と形態も違うことから不明である。

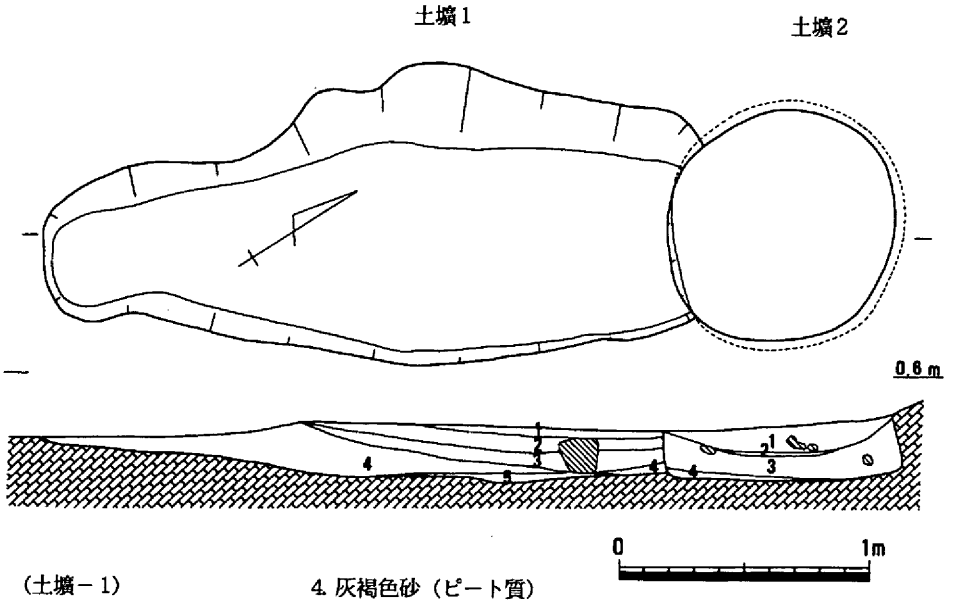
土壙－2（第13、14図）

土壙－1の北側に、土壙－1を切って検出された。土壙は、直径約90cmの円形を呈し、深さ約20cmを測る。断面形は、一部を除き袋状を呈している。土壙内は、土壙－1と同様に底部に灰白色微砂層が認められ、上層にはピート層と砂層が互層に堆積していた。

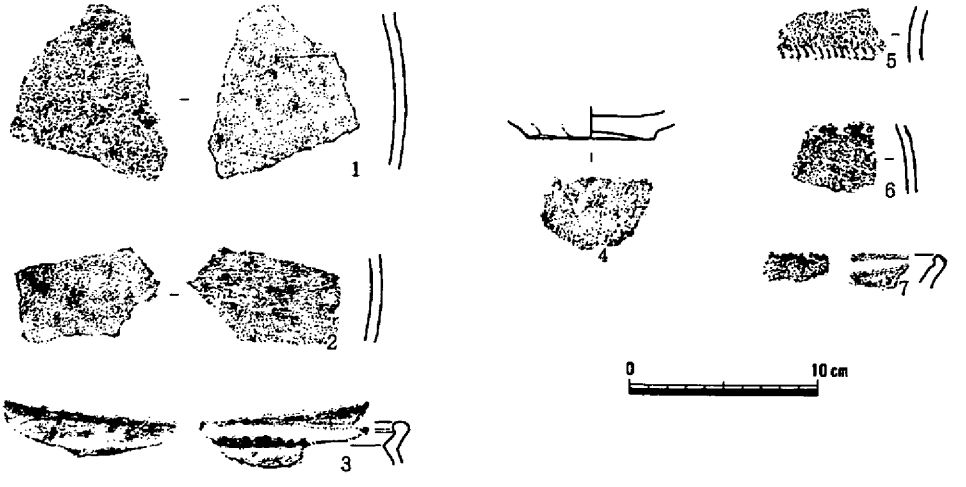
土壙からは、**5～7**の土器が出土した。**5**、**6**は深鉢である。**5**は、外面に逆「C」字状の連続爪形文を施し、内外面をナデている。**6**は、外面をケズリ、「C」形の爪形文を連続して

施文している。7は、外面をミガキ、内面をケズリ、ミガキを施す浅鉢である。これらの土器は、いずれも縄文時代晩期の特徴を示している。

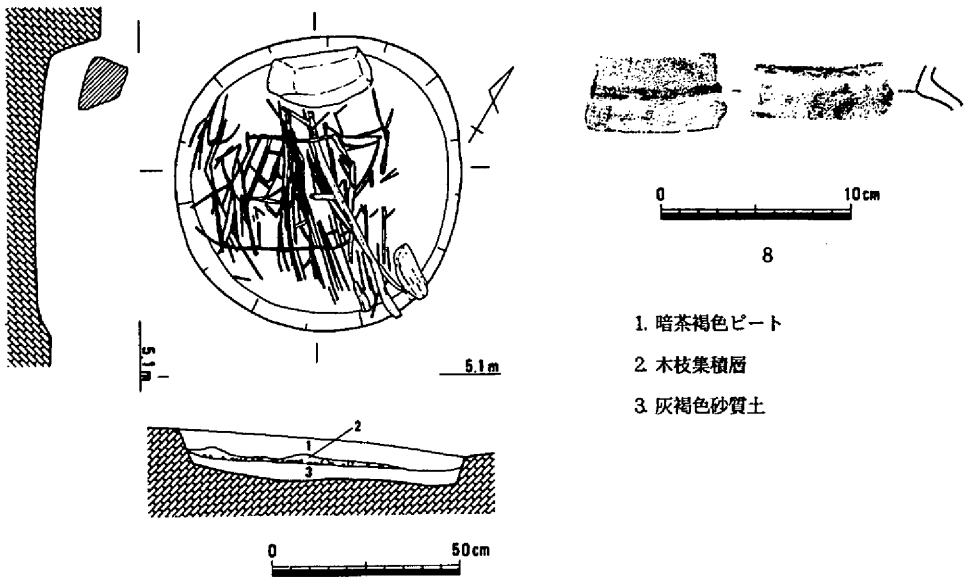
土壙の性格は、この土壙からカシ類の実などは出土していないものの、その立地条件などから土壙－3、4と同様の果実の灰汁抜きのための土壙と考えられる。



（土壙－1）
1. 茶褐色ピート質粘土
2. 灰褐色砂（ピート少量含む）
3. 1と同じ
4. 灰褐色砂（ピート質）
5. 灰白色砂
（土壙－2）
1. 暗茶褐色ピート質砂
2. 茶褐色ピート質粘質土
3. 茶褐色ピート質砂
4. 灰白色砂



第14図　土壙－1. 2（1／30）出土遺物



第15図　土壙－3（1／20）出土遺物

土壙－3（第13、15図）

土壙－1の西側に、一部土壙－1を切って検出された。土壙は、直径約78cmの円形を呈し、深さ約12cmを測る。土壙内は、上層にピート層が堆積しており、そのピート層の下層に直径2.5～5mm を中心とする木の小枝を敷きつめた状況を検出できた。小枝は、中洲側の北西から南東にやや扇状に開くように覆われていた。小枝の大半は北西～南東を指しているが、数本それと直交するような位置にも認められた。また、土壙の北西の端部中洲側には30×15cmの河原石が置かれていた。これらの下層の灰褐色微砂層中には、多数のアラガシの実が炭化した状態で検出した。木の実は、アラガシばかりで、残存していたその数は 200～300 個と考えられる。

このような状況、さらには、立地条件などから、この土壙はアラカシの実の灰汁抜きのためのもので、それらの実を覆うための小枝であったと考えられる。また河原石については、目印的なものであろうか。

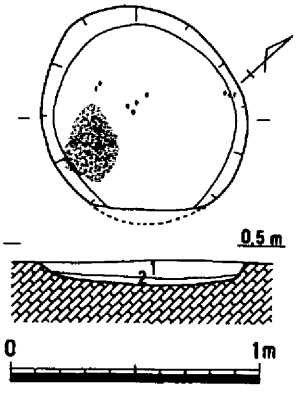
土壙内からは、**8**の土器が唯一出土した。この土器は、浅鉢で外面をミガキ、内面をケズリ、ナデで調整している。この土器は、その特徴から縄文時代晩期と考えられる。

土壙－4（第13、16図）

土壙－1の西側、土壙－3の北側に位置する。土壙は、土壙－1と一部切り合って検出されたが新旧は不明である。規模は、直径約83cmの円形を呈し、深さは約9cmと残存状態は悪かった。土壙内は、上層に暗茶褐色ピート層、下層に灰褐色微砂層が堆積していた。灰褐色微砂層

中には、図で示したようにアラカシの木の実が認められた。特に土壙の南側では、木の実が集中した状況が検出され、約120個前後数えることができた。全体では、約 135個までは、確認することができた。

出土遺物は、認められなかったが、周囲の状況から土壙－1～3と同時期と考えられる。また土壙の性格についても、アラカシの木の実なども出土していることなどから、土壙－2、3と同様のものであろう。

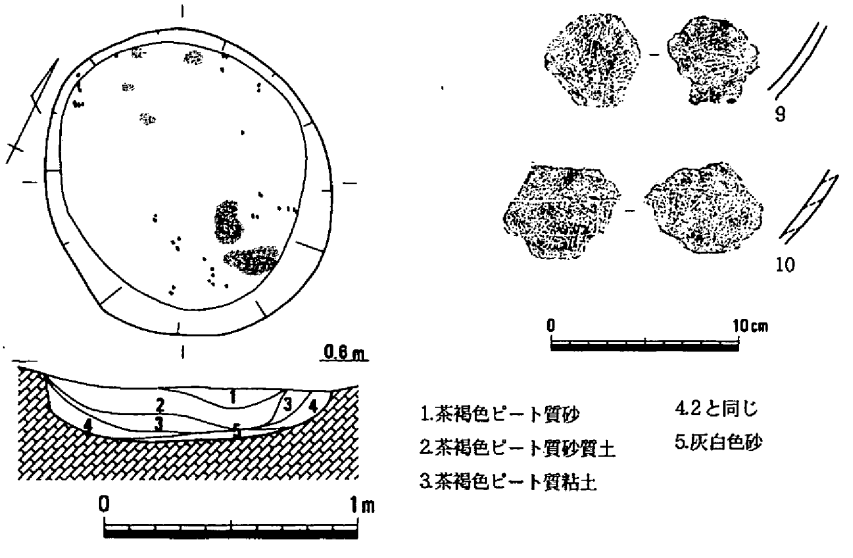


第16図　土壙－4（1／30）

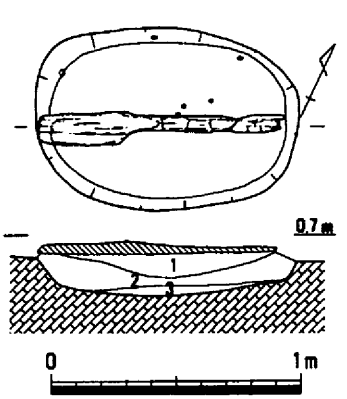
土壙－5（第13、17図）

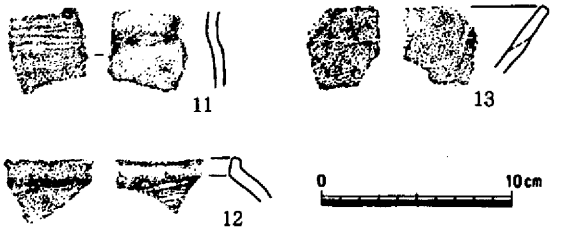
土壙－2の北側に隣接して検出された。土壙は、直径 110×124 cmのほぼ円形を呈し、深さは、約20cm前後を測る。土壙は、やや袋状を呈していた。土壙内には、いずれもピート質の砂層、砂質土が互層に堆積しており、最下層には、他の土壙で認められたように灰白色の微砂層が薄く堆積していた。この最下層の灰白色微砂層および土壙底部には、土壙－3、4と同様にアラカシの木の実が炭化した状態で多数検出された。このアラカシの木の実は、土壙底部一面に一部集中するなどして、 116個まで数えられた。

出土遺物は、図示した**9**、**10**がある。**9**、**10**は、いずれも粗製の鉢である。**9**は、外面をケズリ、内面ナデ。**10**は、内外面ナデ。これらの土器は、縄文時代晩期と考えられる。



第17図　土壙－5（1／30）出土遺物

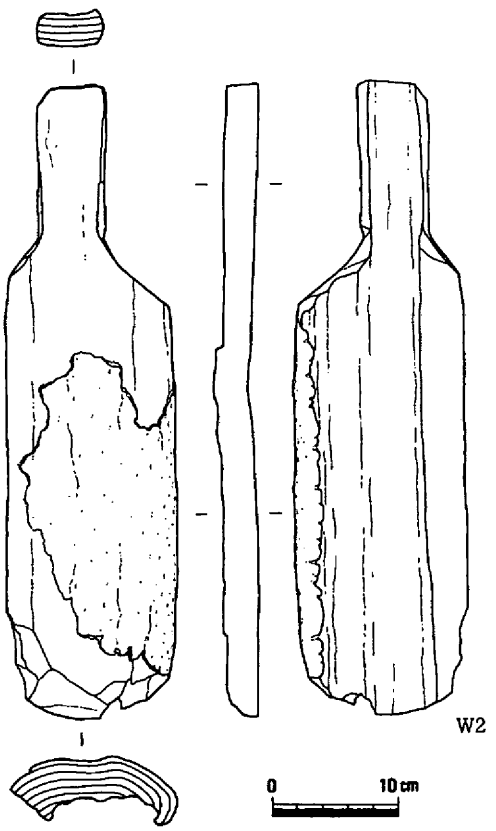




1. 茶褐色ピート質砂質土
2. 茶褐色ピート質粘土
3. 灰白色砂

土壙－６（第13、18図）

土壙－５の北東約１ｍに位置する。土壙の規模は、長さ約 105×73cmの楕円形を呈し、深さは約16cmを測る。土壙の上面には、土壙の長軸の中央に加工木が置かれたような状態で検出された。土壙底部には、６個の炭化した木の実が残存していた。（アラカシ１個、クルミ５個）この土壙も、他の土壙と同様な性格であろう。11～13の縄文晩期の土器が出土した。W１は、発見時の長さは１ｍを測る。身の幅は13.5cmあり、身の先端や柄の基部に加工痕を残す。未製品ないし加工を断念し遺棄されたもののようである。



第18図　土壙－６（1／30）出土遺物（1／6）

土壙－７（第19図）

中洲の斜面に位置する。土壙７～13が集中する北側端に検出された。土壙は、125×85cmの不整楕円形を呈する。深さは、約35cm残存していた。土壙内は、土壙１～６と同様に上層にピート層、下層に薄く微砂が堆積していた。

土壙－８（第19図）

土壙－７、９の間に位置する。土壙は、約82×72cmの楕円形を呈し、深さは約５cmを測る。

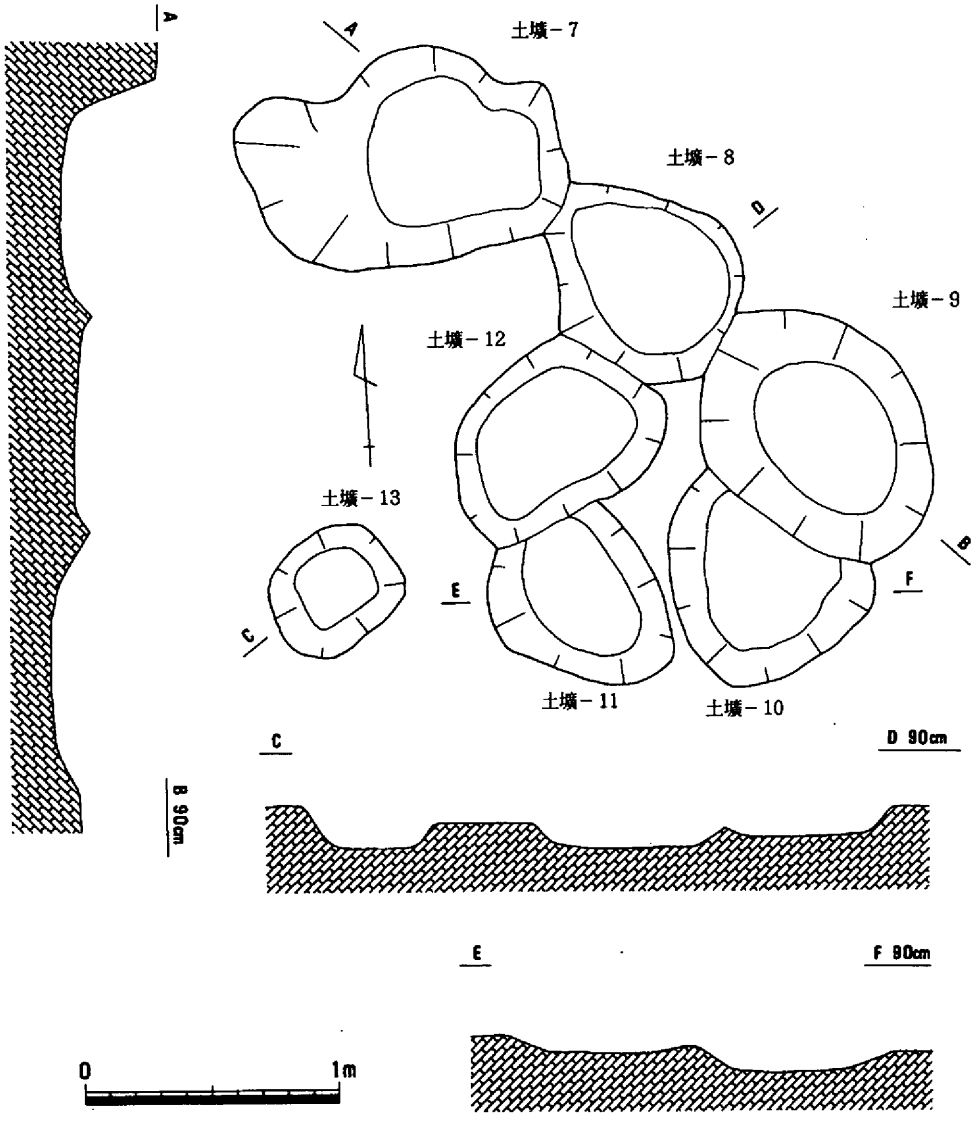
出土遺物は認められなかった。

土壙－9（第19図）

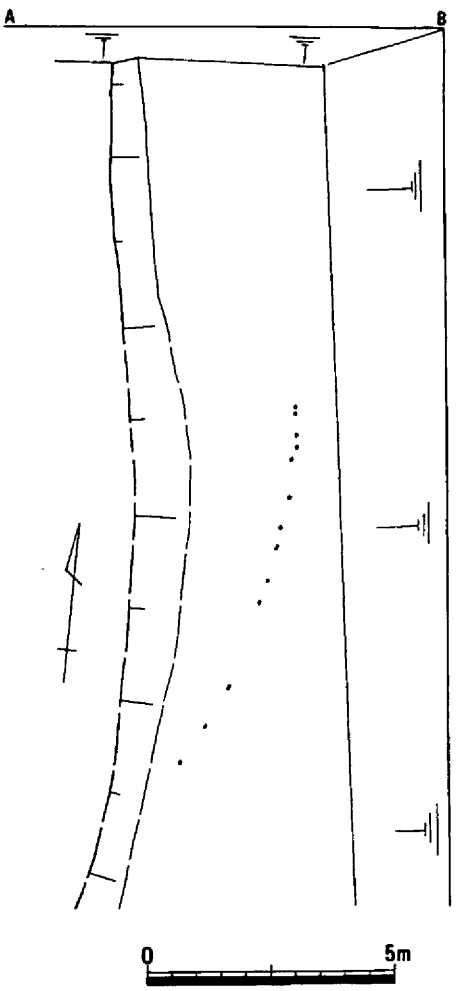
土壙－8の南東部に接する。土壙は、約 105×84cmの楕円形を呈する。深さは、約15cmを測る。土壙内の堆積土は他の土壙と同様であった。土壙底部には、アラカシ、クルミの実が3～4個残存していた。

土壙－10（第19図）

土壙－9の南側に接する。土壙の北側が土壙－9に切られていた。規模は、約90cm前後の円



第19図　土壙－7～13（1／30）



第20図　杭列（1／150）

形もしくは楕円形を呈すると推察される。深さは、約10cm残存していた。出土遺物は認められなかった。

土壙－11（第19図）

土壙－10の東側に隣接する。北側の一部は、土壙－12に切られているものの約85×65cmの楕円形を呈すと思われる。深さは約5cmを測る。出土遺物はない。

土壙－12（第19図）

土壙－11の北側に接して検出された。土壙は、約90×65cmの楕円形を呈し、深さ約10cmを測る。土壙底部には、炭化したクルミが3個確認できた。

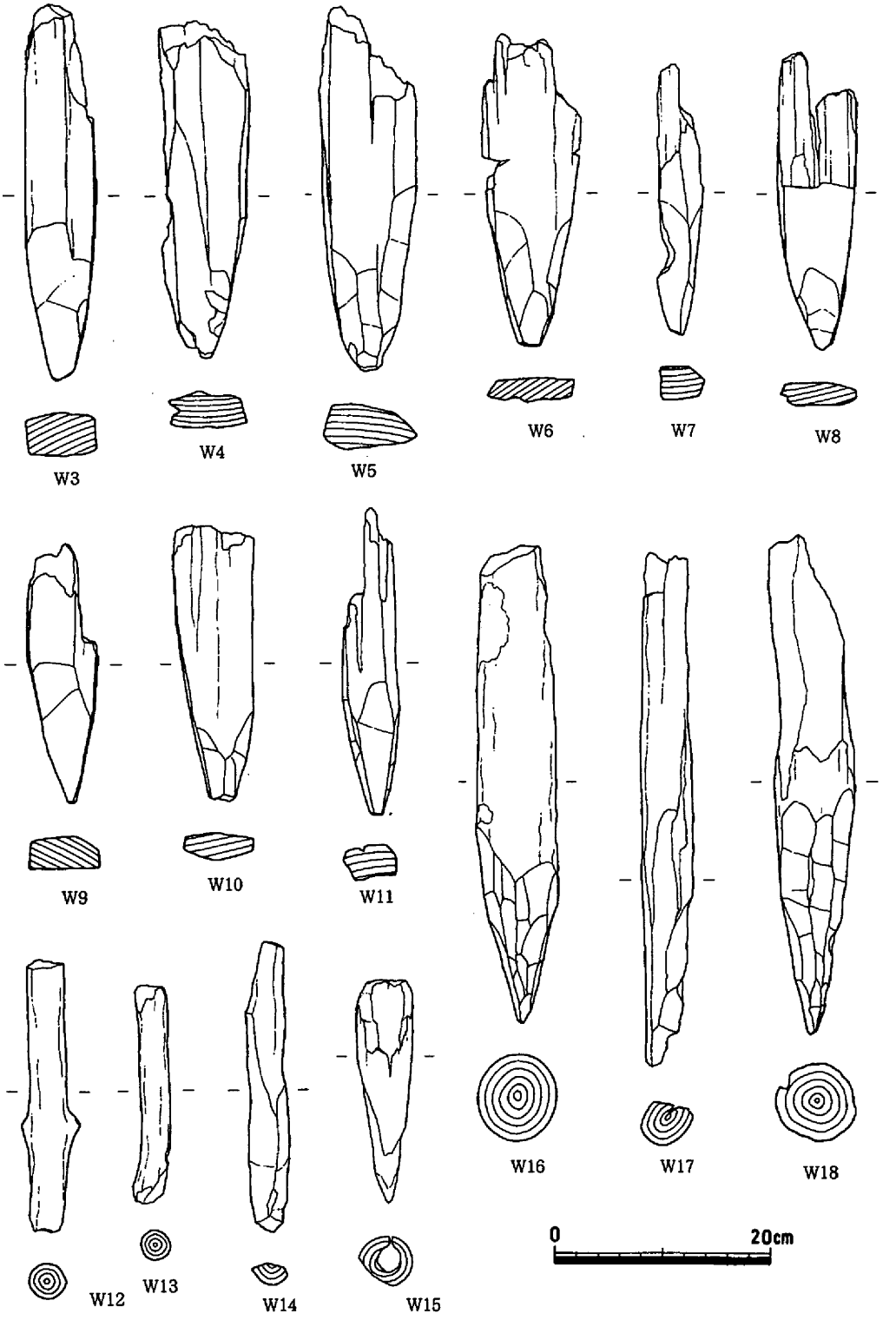
土壙－13（第19図）

土壙－11の西側に位置する。土壙は、約50×45cmの楕円形を呈していた。深さは、約18cm残存していた。土壙底部にはクルミが4個炭化した状態で検出できた。

これらの土壙－7～13は、土壙－2～6と同様な性格なものと考えられる。また時期についても同様であろう。

(2) 杭列（第20、21図）

調査区中央の東端部、縄文時代土壙群の北側に位置する。杭列は、中洲東斜面の東側に中州の落ちとほぼ平行に検出された。杭は、数cmから約70cmの間かくで打たれ、約7m列を成していた。杭は総数13本確認でき、長さ約25～45cm残存していた。杭は、割り材のものと、丸木の両者が認められた。いずれも鋭利な利器で先端を尖らしていた。多くがアラカシで、ほかにイヌツゲ、アベマキが混じる。この杭列は、第42図の第18層の縄文時代晩期の包含層下に検出されたものである。しかしながら、杭の残存状態等の状況からみて、この杭列が縄文時代晩期以前と確定するには疑問が残る。上層には、斜面堆積の弥生時代後期～古墳時代初頭の包含層が存在し、この時期に伴う可能性も考えられる。このような状況のため、ここでは杭列の時期については留保する。また、杭のW14～W18は中洲南端に検出したものである。　（中野）



第21図　杭列出土遺物（1／6）

(3)縄文時代の土器

後期以前の土器

出土した縄文土器は、中期～晩期にわたっている。後期以前の土器はピート層から灰褐色砂層にかけて出土しており、灰白色粘土層では出土していない。これらは何れも磨滅が激しく、その時期については明らかではないものが多いが、晩期の土器とは一見して識別ができる。

14は浅鉢の胴部で、ＬＲの縄文を施す。15～23・25は磨消縄文を施す縄文土器である。15は波状になる深鉢の口縁部で、端部は角張り、波頂部には押圧を加える。外面にはＲＬの磨消縄文を施している。16も磨消縄文を施す深鉢の口縁部で、端部を平らに面取りする。17～19は深鉢の胴部で、17はＲＬの磨消縄文を施す。22は鉢の口縁部で、内側に拡張した端部には磨消縄文を施す。24は深鉢の口縁部で、肥厚した波頂部には孔を穿ち、端部に沈線文を飾る。25は鉢の底部で、外面にＲＬの磨消縄文を施す。26・27は平底で、深鉢になるものと思われる。26は外面をナデで調整し、27は二枚貝で仕上げている。

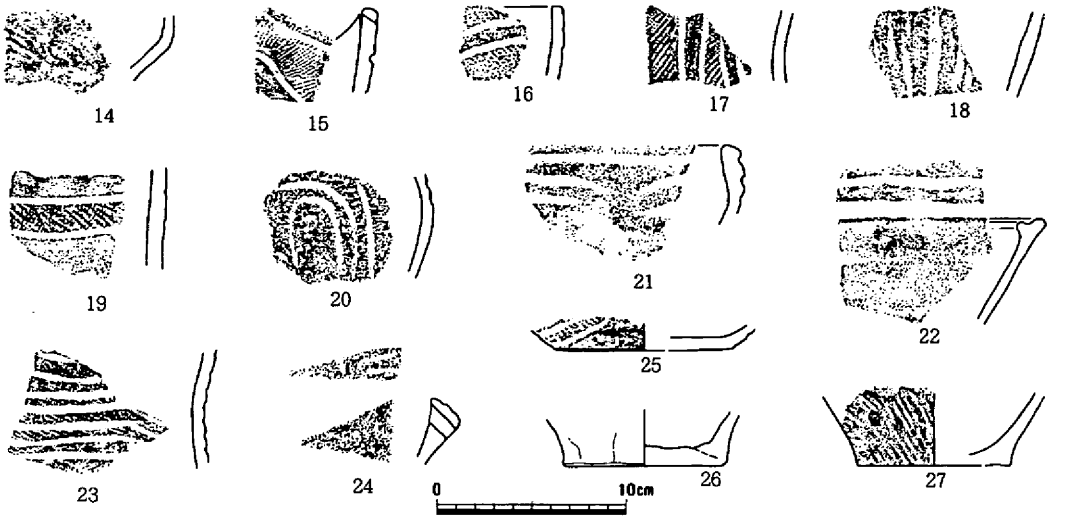
晩期の土器

晩期の土器は、灰白色粘土層から灰褐色砂層にかけて出土しており、本遺跡の縄文土器の主体をなす。上層の灰白色粘土層では弥生前期の土器を混じえており、下層の灰褐色砂層では大形破片の出土が目立っている。何れも流水による摩滅をほとんどうけておらず、近傍からの廃棄、流入を予想させる。晩期の土器には器種として深鉢・鉢・浅鉢があり、全体の８割を深鉢が占める。この割合はどの土層においてもほぼ一定している。

１．深鉢

深鉢には、口頸部が直立ないしやや内湾するＡ類と、口頸部がくびれるＢ類に分類できる。Ａ類には口径13～14cmの小形のものと、25～30cmのもの、そして40cmにちかい大形のものとがある。28～30はこのうちの小形に属し、丸底になるものと思われる。28は外面を縦方向の条痕を残し、口縁端部は水平な面をもつ。29は胴部を横にケズリ調整し、ナデで仕上げる口縁部は端部を丸くおさめる。30は全体をナデで調整するが、外面には接合痕を残している。31～35は中形の深鉢である。31は胴部から口縁部へ直線的に開く器形をもつ。口縁端部は外傾する面をもち、外面を二枚貝で調整する。32は口縁端部にユビによる刻目を施し、外面を二枚貝で調整する。34、35は外面を上方にケズリ上げるが、34では口縁端部に面をもつのに対し、35では尖り気味におさめている。33は大形の深鉢で、外面を横にケズリ調整し、平らな口縁端部には階段状の浅い刻目を施す。Ａ類の深鉢は、灰色粘土層からの出土が比較的多い。

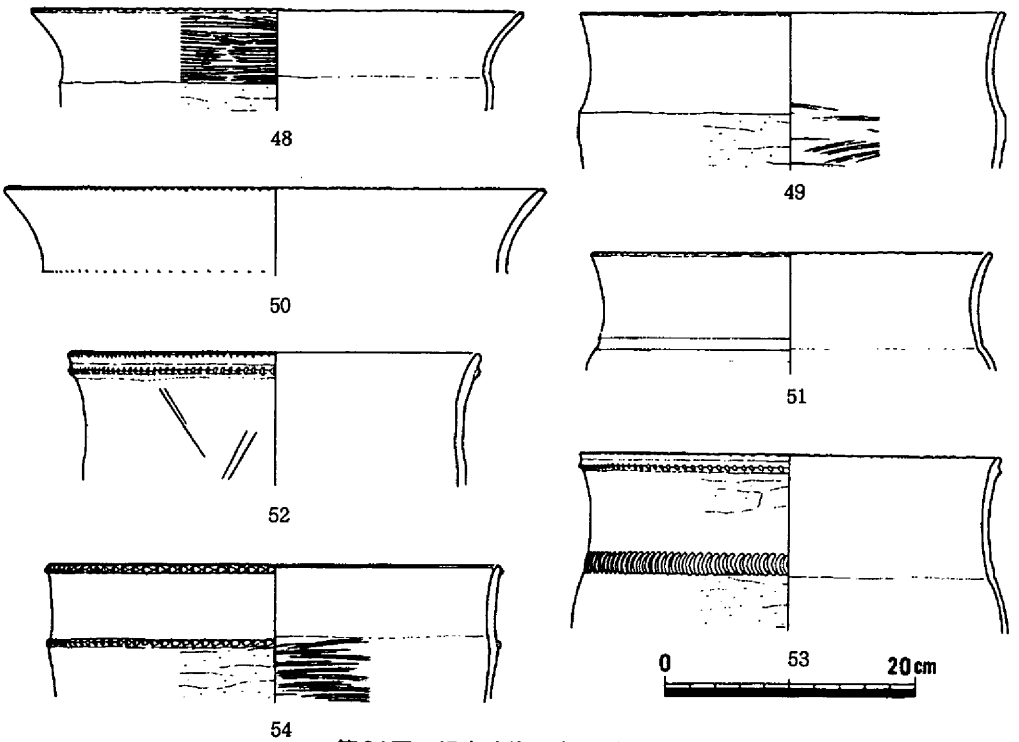
Ｂ類も口径によっていくつかに分けられる。36～38は口径20cm以下と小形で、大きく開く口縁部をもつ。36、37は外面を二枚貝で調整し、口縁端部は丸くおさめている。39～41は口径25



第22図　縄文時代の土器（1）

～30cmを測る。**39**は口縁部を二枚貝で調整し、胴部はケズリで仕上げる。**40**は強く外反する口縁部をもち、その端部は丸くおさめている。二枚貝をもちいて調整し、内面にはナデを加えている。**41**は口縁部がわずかに外反しながら上方へ大きく広がる鉢形をなす。口縁部は二枚貝で調整し、胴部はケズリで仕上げる。口縁端部にはヘラ状工具によりＶ字形の刻目を施す。**44～54**は口径30～40cmを測る大形の深鉢である。**42**、**43**は短い口縁部とやや張りのある胴部からなる。外面は二枚貝で横位に調整したのち、頸部に強いナデを加えている。42では口縁端部は平らに面取りする。**46**も短い口縁部をもつが、外反が強く、端部を丸くおさめる。口縁部を二枚貝で、胴部を多数の擦痕を残すケズリで調整する。**45**は大きく開く口縁部をもち、やや肩の張る胴部との間で強く屈折する。口縁端部は平らで、外面を二枚貝で調整する。**44**は長い口縁部をもつが、胴部に張りがなく屈折は弱い。外面を二枚貝で調節する。**47**もこれと似た形態をとるが、胴部はケズリで調整され、二枚貝で仕上げる口縁部との境界は明瞭である。面をもつ口縁端部にはＶ字形の刻目を施している。**48**は強く外反する口縁部をもち、その端部にはＯ字形の刻目を施す。**49**はケズリ調整する胴部と、ナデで仕上げる長い口縁部をもち、口縁端部には刻目を施す。**50**の大きく開く口縁部はナデ調整され、頸部には逆Ｃ字形の爪形文をめぐらし、口縁端部にはＤ字形の刻目を施す。**51**はわずかに外反する口縁部と張りのある胴部をもつ。口縁端部には刻目を施し、ケズリで調整する胴部との間には凹線をめぐらす。**52～54**は突帯文を飾る深鉢である。**52**は口縁端部とその下にめぐらす突帯に小形の竹管によるＣ字形の刻目を施し、ナデで調整する長い頸部にはヘラ描きの沈線を飾る。**53**もナデ調整する口縁部に、竹管に

第23図　縄文時代の土器（2）



第24図　縄文時代の土器（3）

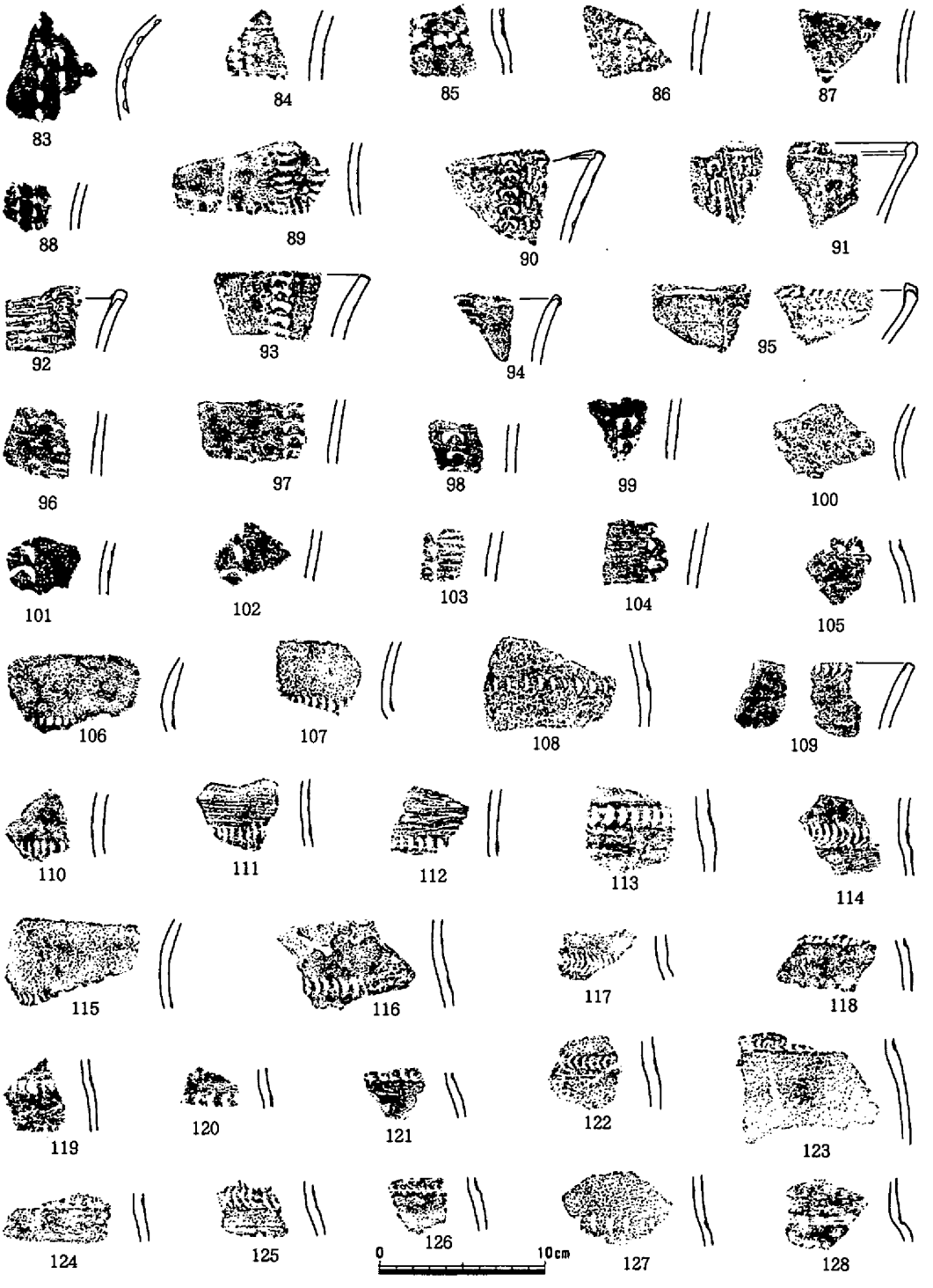
よる刻目を施した突帯をめぐらし、面をもつ端部にはO字形の刻目を施す。胴部はケズリで調整し、頸部との間にC字形の爪形文をめぐらす。54は口縁部の上下に、D字形の刻目を施す2条の突帯をめぐらすもので、胴部外面をケズリで調整する。

55～82は深鉢の口縁部である。55は波状口縁をもつ深鉢で、波頂部の下には円形の押圧を施し、頸部には4条の沈線をめぐらす。56の口縁部は短く、二枚貝で調整したのち頸部に強いナデを施す。57～66は外面を二枚貝で調整し、端部はあまい面取りを施す。60には穿孔が認められる。67は外面を巻貝で調整するもので、ほかに4点出土している。68～70は方形の突起をもつ口縁部で、69～70には端部にV字形の刻目が施される。71～76は外面を二枚貝で調整し、73・75の端部にD字、その他にはO字形の刻目を施す。77は外面をケズリで調節するもので、端部は平らに面取りする。78～82は外面をナデで調整するもので、端部にV形の字刻目を施す。

83～131は爪形文や刺突文で飾る深鉢である。83～85は口縁部から縦に刺突文を施したもので、85には頸部にD字形の爪形文がともなう。刺突文はピート層や灰褐色砂層から出土しており、灰白色粘土層ではみとめられなかった。86・89～90は口縁部から垂下する爪形文に刺突文を組み合わせたもので、89には逆C字形の爪形文がともなう。92～104は口縁部から縦に爪形文を施すもので、91～92・94～95のように施文部の上に突起がつくものがある。98には頸部に

第25図　縄文時代の土器（4）

Ｃ字形の爪形文がともなう。縦に施される爪形文のうち、刺突文と組み合うものはやや小形である。またＵ字形となる爪形文は**89**のみである。外面はナデ調整となるものが多いが、二枚貝による条痕を残すものもある。口縁端部は面取りがなされ、浅い刻目が施されている。**105～131**は頸部に施された爪形文である。このうち**105～118**は竹管の外側を押圧したＤ字・逆Ｃ字形の爪形文であり、**119～131**は内部を押圧したＣ字形の爪形文である。Ｄ字形の爪形文はピート層や灰褐色砂層からの出土であり、灰白色粘土層では知られていない。これに対しＣ字形爪形文はすべての層から出土しているが、とくに灰白色粘土層からの出土が多い。またＤ字



第26図　縄文時代の土器（5）

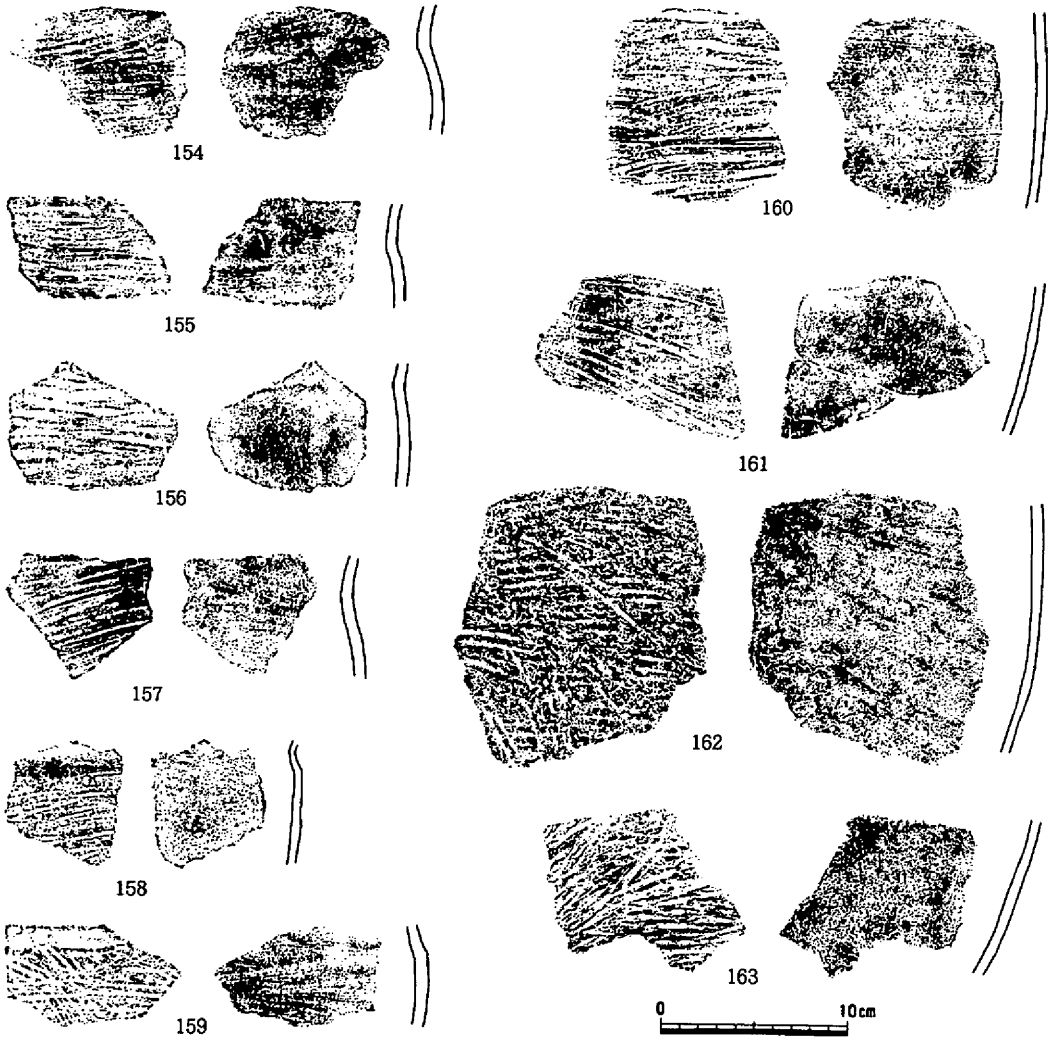
第27図　縄文時代の土器（6）

や逆C字のものに比べて大形になるものが多く、匚形の押し引き状になるものもある。口縁部はナデで調整するものが多いが、条痕を残すものもある。胴部はいずれもケズリで仕上げる。

132～134 は口縁部にヘラ描き沈線を施すもので、**132**では刻目突帯をともなっている。

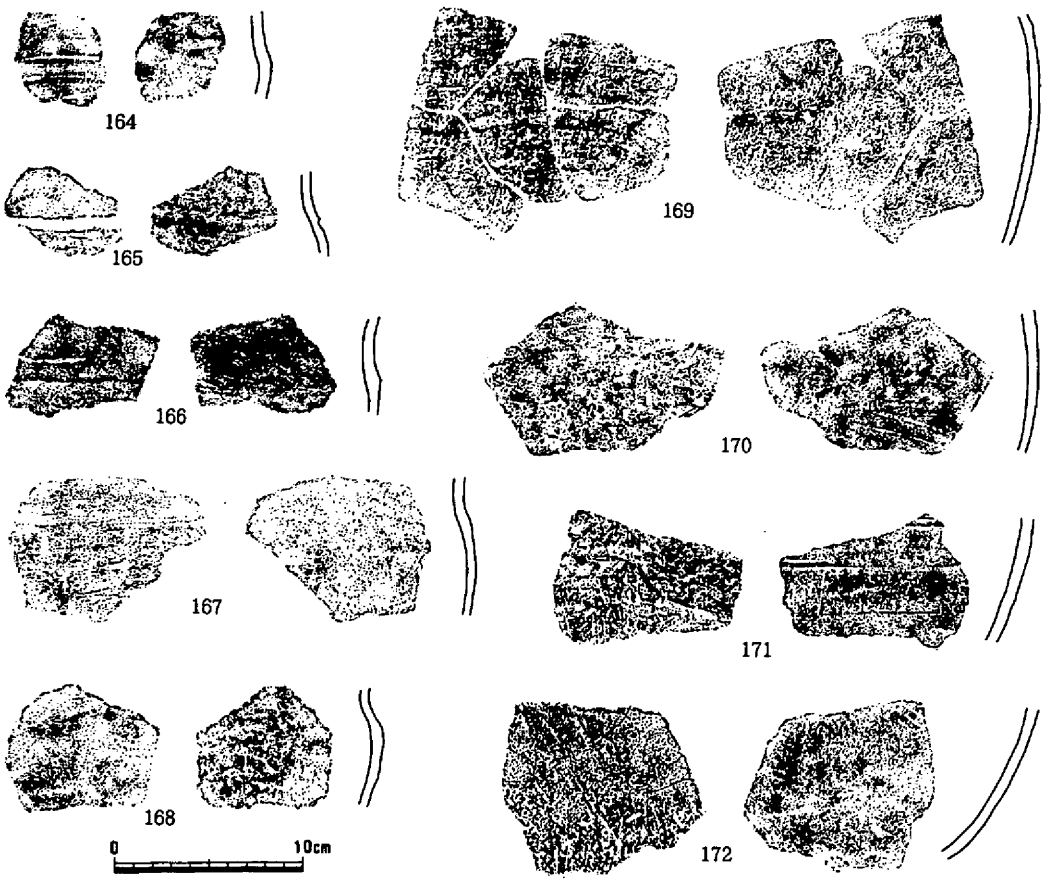
137～153は口縁部に突帯を貼り付ける突帯文の深鉢である。**137～139・141～144**の突帯は断面台形で、**137・139**には刻目がないが、**141～144**にはV字形の刻目が施されている。口縁端部はいずれも平坦で、V字形の刻目が施されている。また**143・144**のように内面に凹線をめぐらすものもある。**145～153**の突帯は断面三角形で、突帯を口縁部の直下に貼り付ける**149・150**を除いてV字ないしD字形の刻目を施している。**145～147**の口縁端部は丸く、V字形の刻目が施されている。**147**では波状口縁となり、**146**は内面に沈線をめぐらす。これに対し**148～153**の端部は尖り気味で、刻目は施されていない。これらの多くは外面をナデで調整するが、**145・149**のように条痕を残すものも認められる。

154～172は深鉢の胴部である。このうち**154～163**は外面を二枚貝で調整する深鉢の胴部



第28図　縄文時代の土器（7）

で、154～159はその肩部にあたる。154～157は頸部から胴部にかけて二枚貝をもちいて横位に調整するのに対して、158～159では頸部をナデで調整し、胴部を二枚貝で仕上げている。胴部の上半にあたる160～162は二枚貝で横方向に調整するが、下半の163では斜め方向に変わっている。164～172は胴部をケズリで調整する深鉢である。164～168は肩部の破片で、頸部はナデで調整し、胴部を横方向にケズリあげる。このうち164・165では頸部との境に沈線をめぐらしている。胴部の上半にあたる169・170ではケズリは横方向であり、下半の171ではこれに縦方向が加わり、底部に近い172では専ら縦方向となっている。



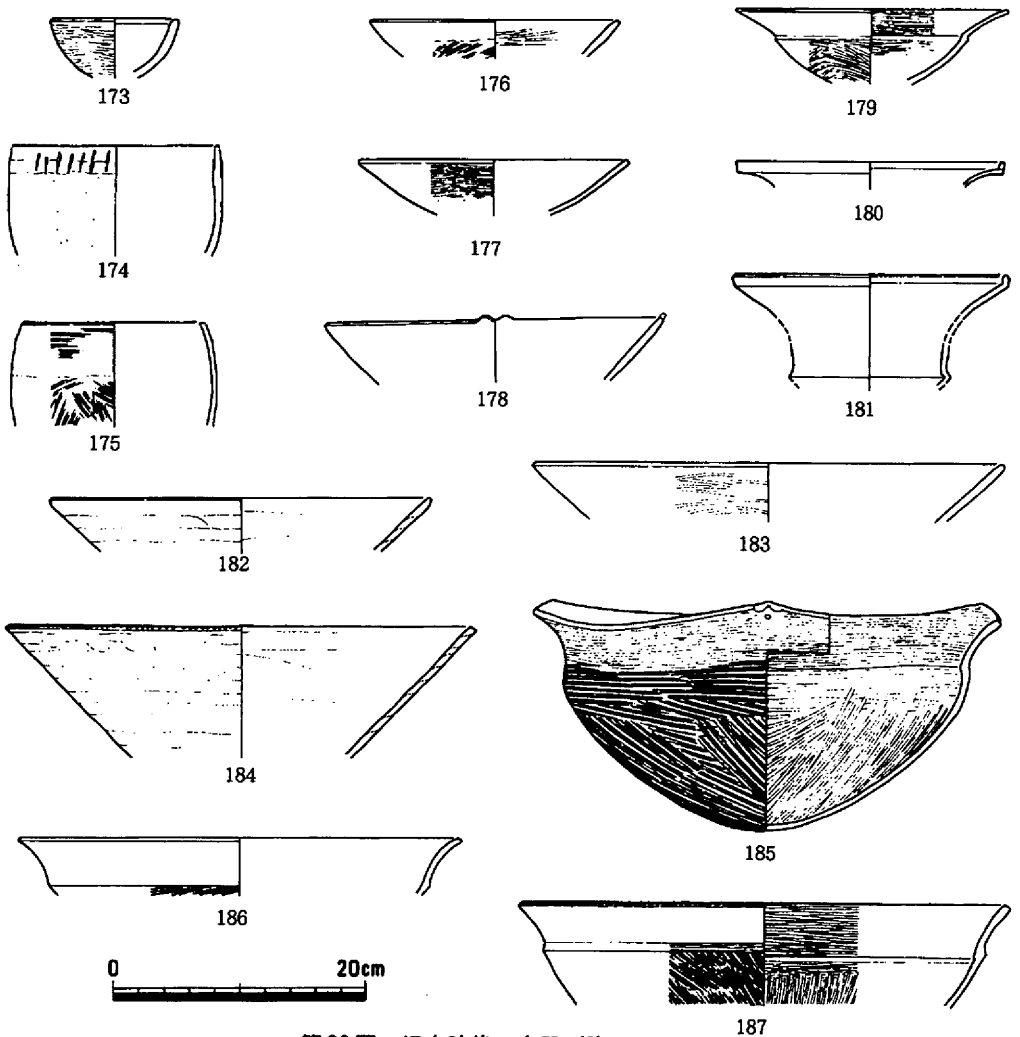
第29図　縄文時代出の土器（8）

2．椀・鉢

椀形となる173は口径10cmで、外面を横にヘラミガキする。ピート層から出土した。174・175は鉢で、いずれも口縁端部を欠いているが、口径15cm前後になる。175では二枚貝をもちいて口縁部を横に、胴部を斜めないし縦方向に調整する。174は胴部を横にケズリで調整し、ナデで仕上げる口縁部にはヘラ状工具による刺突文を飾る。底部は不明であるが、丸底になる可能性が強い。いずれも灰白色粘土層から出土している。

3．浅鉢

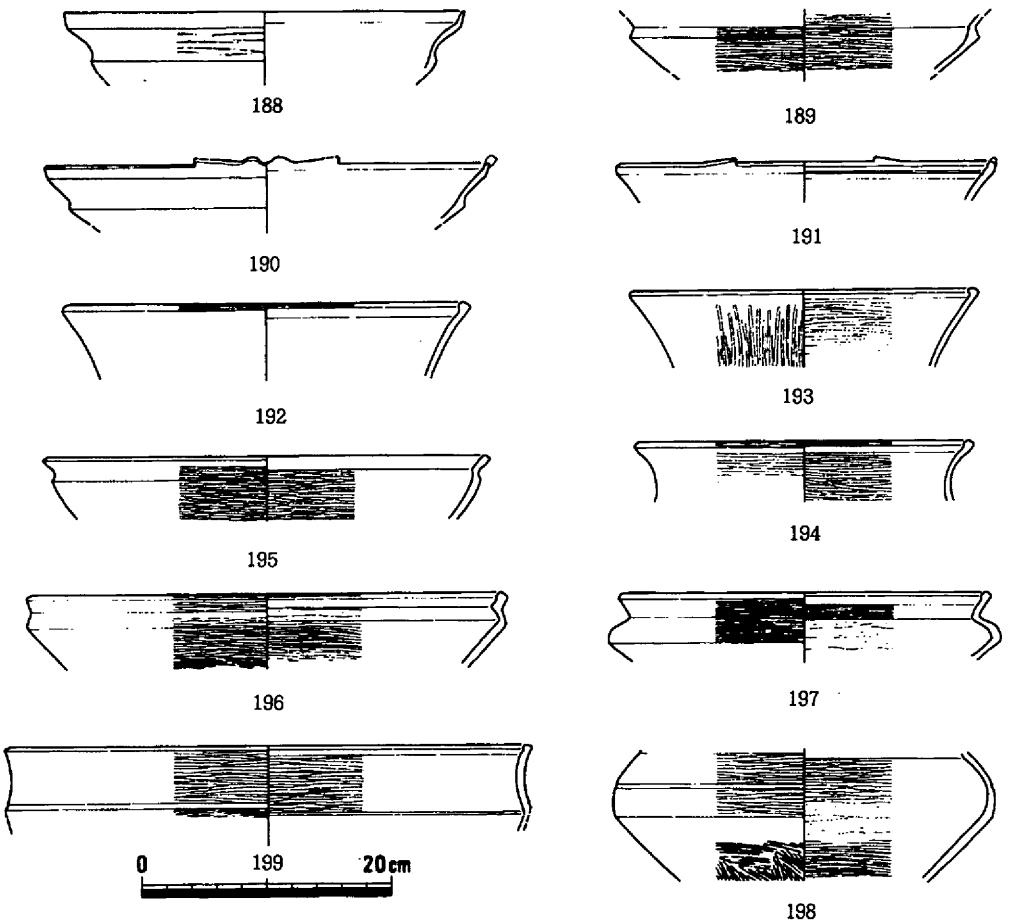
浅鉢はその形態からA～G類に分類できる。A類は皿形ないし浅い鉢形となるもので、その法量からいくつかに区分することができる。176・177は口径20cm前後で、177では外面をヘラミガキし、176では底部付近を二枚貝で調整する。177には赤色顔料が認められた。178は口径27cmとやや大きく、口縁部に突起をもつ。183は口径37cmの大形の皿で、内外ともヘラミガキ



第30図　縄文時代の土器（9）

で丁寧に調整されている。**182・183**は底部から直線的に開く鉢形である。**182**は口径30cmで**178**にちかいが、外面はナデで粗く調整し、接合痕を明瞭にとどめる。**184**は口径37cmで、**182**と同様の作りであるが、平らに面取りした口縁端部にはV字形の刻目を施す。A類はピート層を中心とし、一部灰白色粘土層に及んでいるが、灰褐色砂層からは出土していない。

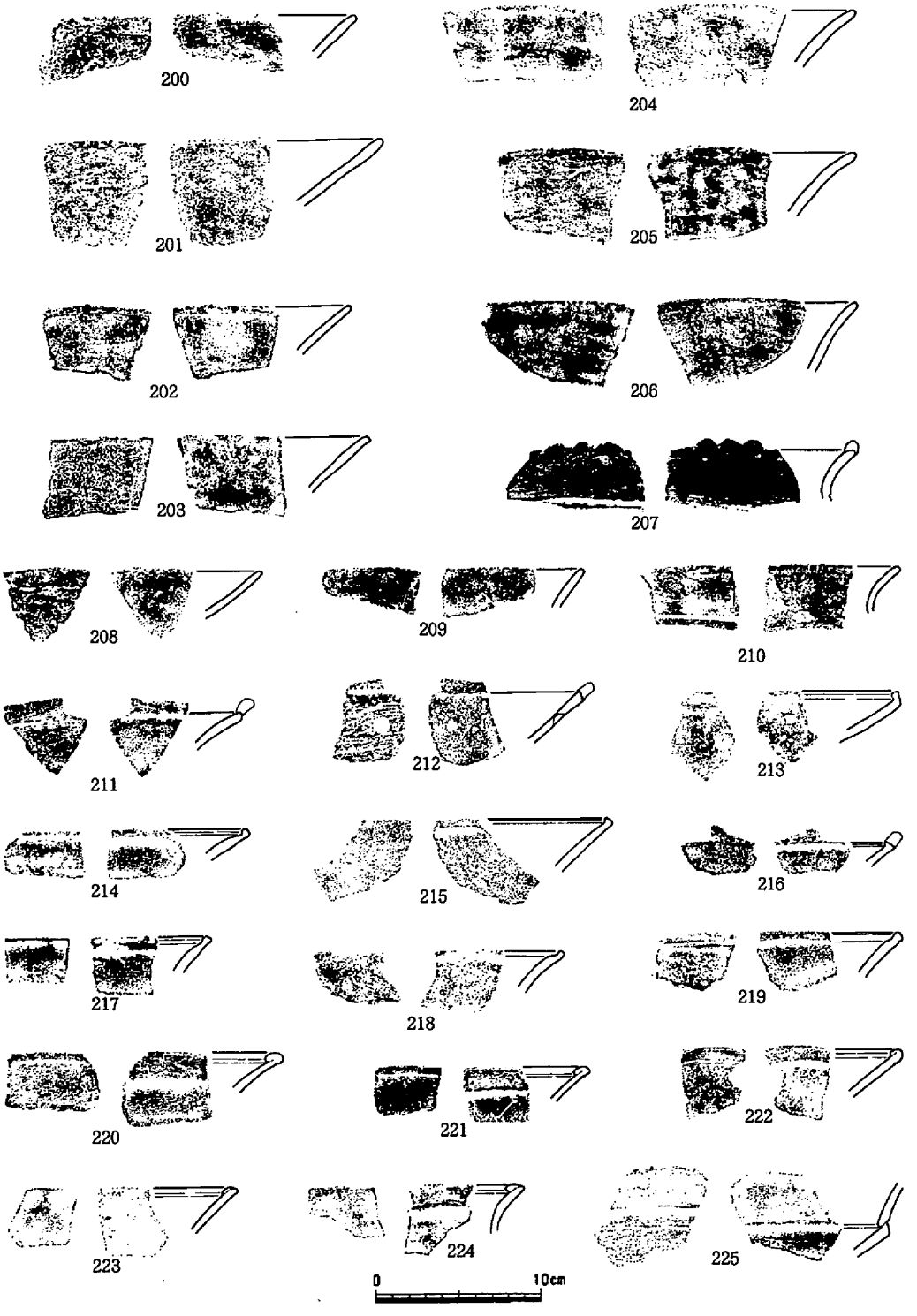
B類は、浅い体部と、外半しながら広がる口縁部からなる浅鉢である。**179**は口径20cmと小形で、浅い体部と水平気味に開く口縁部をもつ。内外をヘラミガキで調整し、一部に油脂状の光沢がある。**185**は丸底で、緩やかに屈曲する肩部から大きく外反する波状口縁にいたる。3つの波頂部は指で軽くつまみ、そのうち一つには小孔を穿つ。体部外面を二枚貝で調整するほかは、ヘラミガキで丁寧に仕上げている。口径は37cmあり、ほぼ完形に復元できた。**186・187**



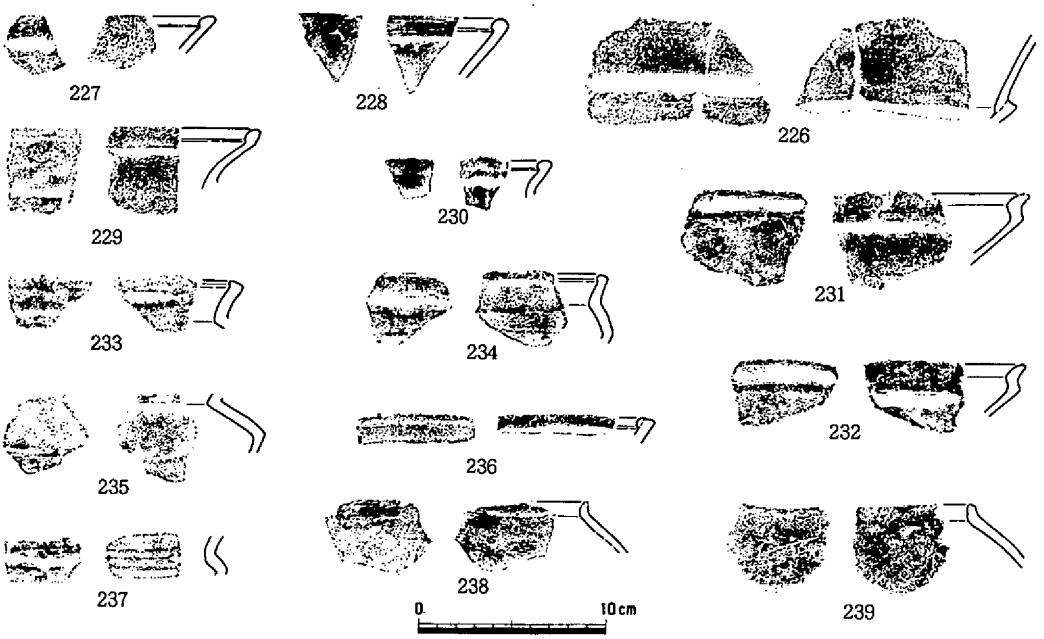
第31図　縄文時代の土器（10）

は口径35～39と大形で、体部から屈折して広がる口縁部をもつ。いずれも体部外面を二枚貝で調整し、口縁部をナデで仕上げている。口縁端部は面をもち、**187**ではＶ字形の刻目を施す。**188・190**は**186・187**と似た形態をとるが、口縁端部を上方に拡張している。いずれもナデで調整するが、**188**は二枚貝条痕をかすかに残している。また**190**は口縁部にリボン状の突起を貼りつけている。Ｂ類はすべての層位にわたっているが、灰褐色砂層での出土が多い。

Ｃ類はＢ類に比べて口縁部が長く、端部には突帯をつくりだしている。**180・181**は口径20cmと小形で、強く外反する長い口縁部を備えている。口縁端部には粘土を貼りつけ、上方に拡張している。**191**は口縁部に三角形の突起をもち、端部の内面に２条の沈線をめぐらして段をつくりだす。**192・193**は口径30cm前後で、大きく広がる口縁端部の内面に断面カマボコ状の突帯を貼りつけている。**192**は口縁部をナデで調整し、端部をヘラミガキする。**193**は外面を縦方向に、内面を横方向にヘラミガキしている。**194**は口縁部の外反が強く、端部の内面を削り出し

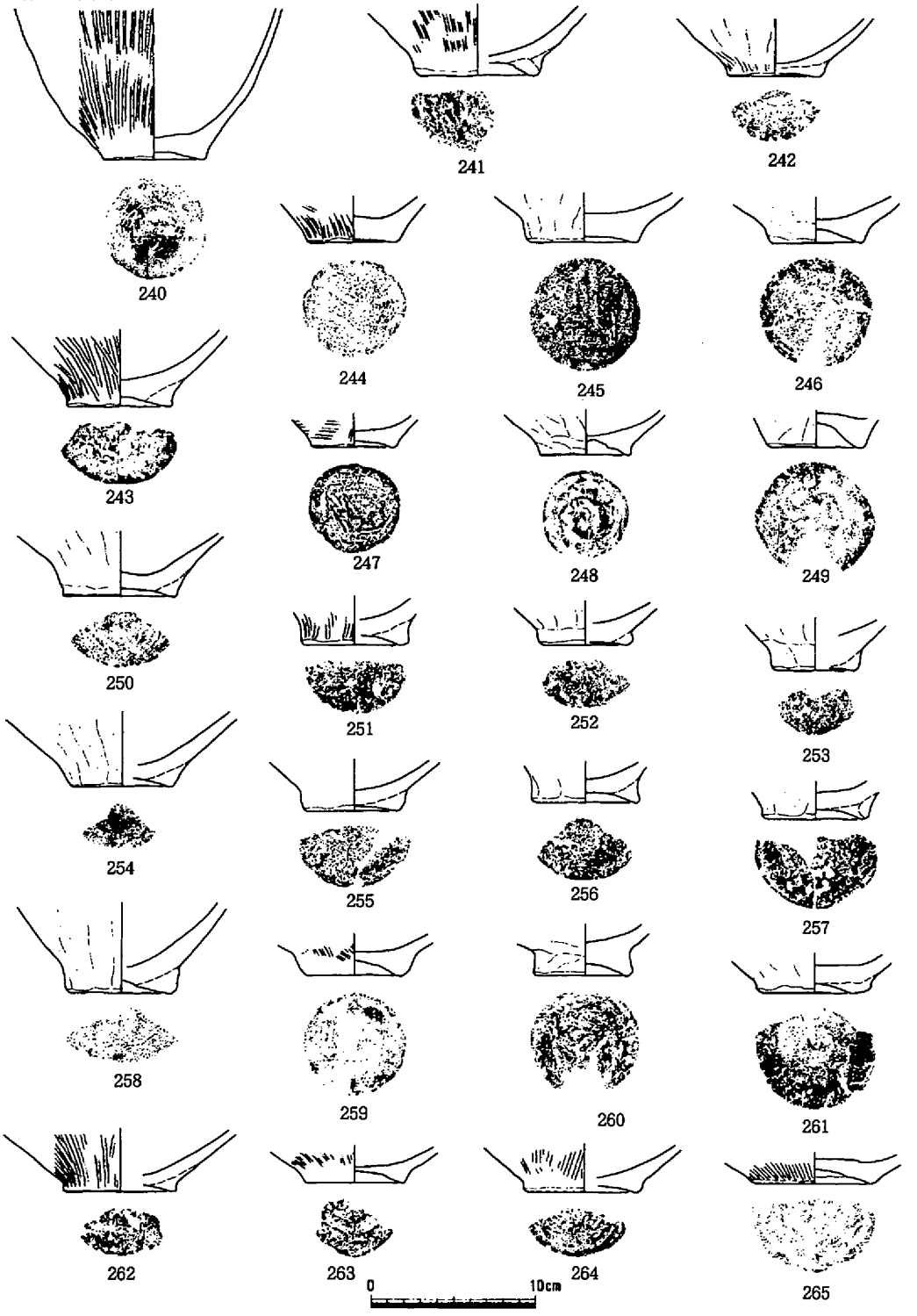


第32図　縄文時代の土器（11）

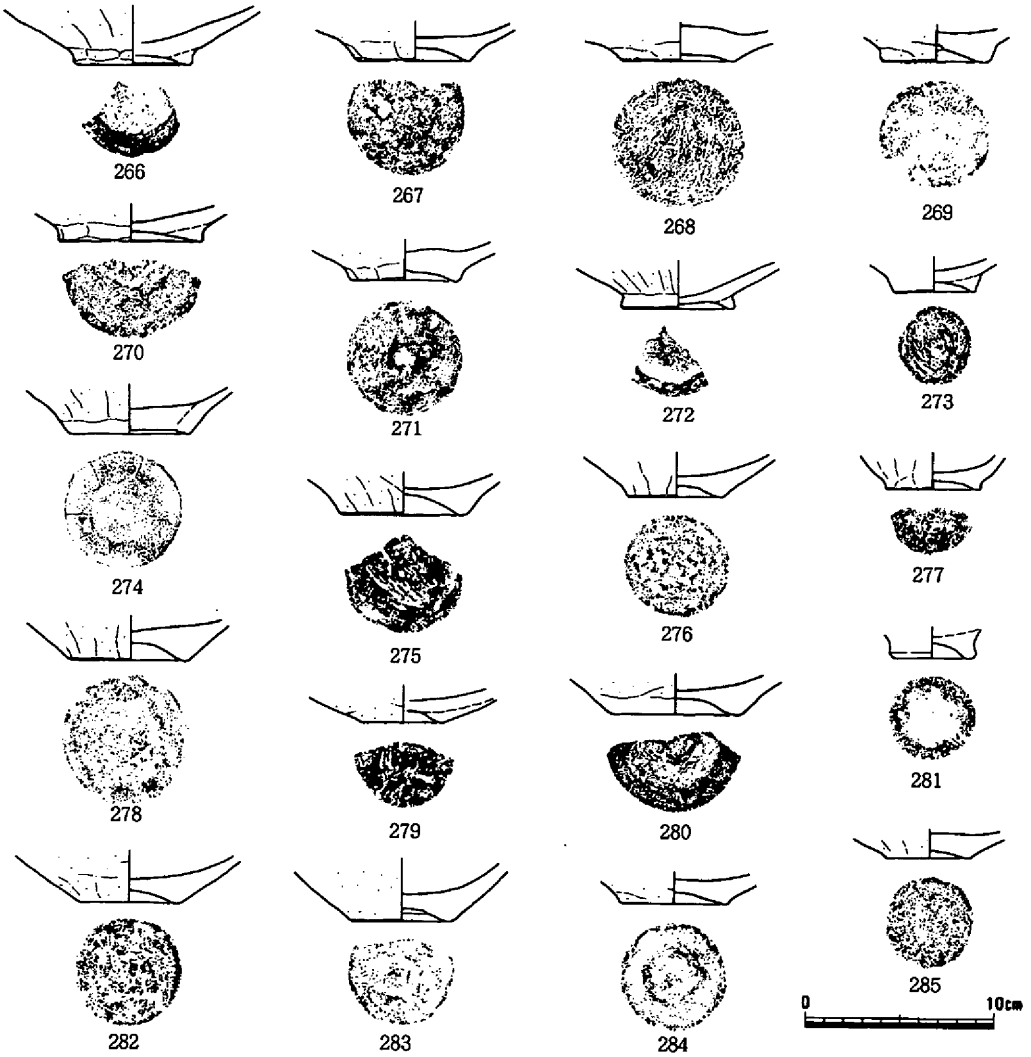


第33図　縄文時代の土器（12）

て幅広い突帯をつくりだす。C類のうち口縁端部に突帯を削り出すものはピート層や灰褐色砂層に多く、突帯を貼り付けるものは灰白色粘土層に主として認められる。D類は口径35cmで、短い口縁部は体部と強く屈折して段をなす。端部は195のように平面をなすものと、丸くおさめるものがある。内外ともヘラミガキで調整している。ピート層出土。E類は体部が屈折して肩をなすもので、口径は38cmあり、短い口縁部の内面には突帯を削り出している。外面は体部下半を二枚貝で調整し、それ以上をヘラミガキで仕上げている。灰褐色砂層から出土した。F類は。た類にみられた体部の肩が屈曲しながら強く出したもので、口縁部は短く斜めに立ち上がる口径は30cm前後で、胴部最大径を越えることはない。主として灰褐色砂層から出土している。197は外面をヘラミガキで調整し、体部の内面をケズリで仕上げている。198は体部の屈曲が緩やかで、肩部に1条の沈線をめぐらす。体部下半は二枚貝で調整し、そのほかをヘラミガキで仕上げている。G類はわずかに外半する口縁部が、体部と屈折して上方にたちあがるもので、口径が40cmをこえる大形の浅鉢である。体部は外面を二枚貝で調整し、口縁部をヘラミガキで仕上げている。屈折する体部との境には沈線をめぐらし、口縁端部の内面を削り出して突帯をつくりだす。ピート層からの出土である。200～239は浅鉢の口縁部である。201・208は皿形となるA類で、内外ともヘラミガキで丁寧に調整している。200・202～207・209～212はわずかに外反しており、B類の浅鉢によるものと思われる。このうち207は瘤状の、211・212

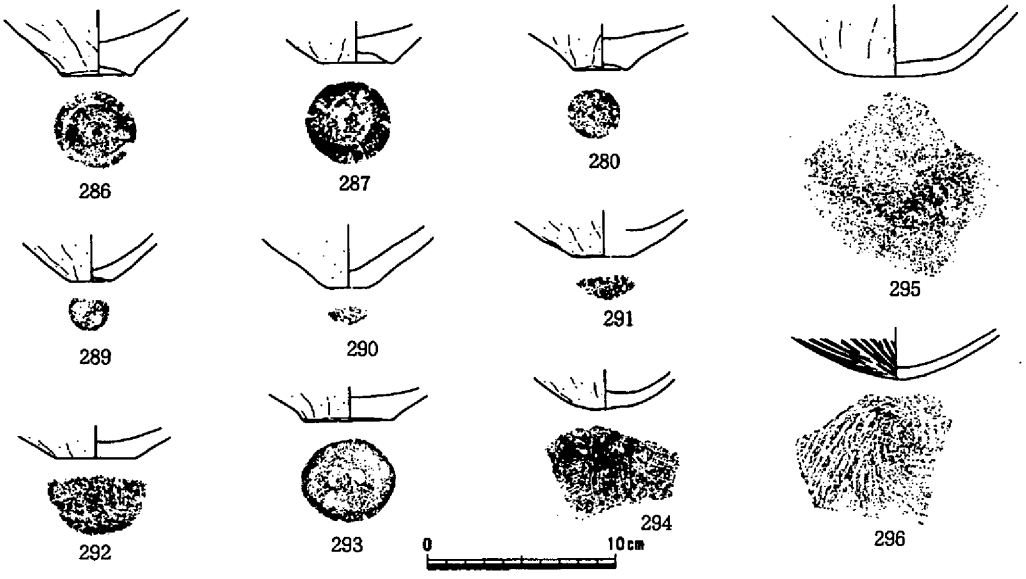


第34図　縄文時代の土器（13）



第35図　縄文時代の土器（14）

は三角形になる突起をもち、212には穿孔が認められる。213～229はC類の浅鉢である。213では口縁端部を上方に拡張し、214～219では端部を削り出して突帯をつくりだす。さらに220～229では端部に粘土を貼り付け突帯としており、220～222の外面には沈線をめぐらす。このように口縁端部に突帯を削り出すものはピート層や灰褐色砂層など下層に多く、突帯を貼り付けるものは上層の灰白色粘土層に集中している傾向がある。131・132はD類で、短い口縁部の端は丸く収めている。233～237はE・F類の口縁部である。233・234では端部に突帯を削り出し、236では突帯を貼り付けている。238・239は内傾する肩部から短く直立する口縁部をもつ浅鉢である。いずれもピート層から出土している。



第36図　縄文時代の土器（15）

4．底部

240～285は底径5～7cmの凹底である。深鉢の底部と考えられるものに240～258があり、これらはその形態により、2つに分類される。底部から直線的ないしわずかに屈折して広がるⅠ類には、240・243・245・247・248・250がある。このうち外面を二枚貝で調整するものは底面の凹みが浅く、主にナデで仕上げている。また外面をケズリで調整するものには、底面をケズリで調整するものとナデを施すものがある。底部が高台状になるⅡ類には252・253・255・256・258がある。外面はケズリで調整するが、底部付近を横に削るものやナデを施すものがある。底面はいずれもナデで調整する。262～285は浅鉢の底部と思われるもので、深鉢と同様にⅠ・Ⅱ類に区分できる。Ⅰ類には、262～265・274～280・282～285がある。外面をケズリで調整し、深く凹んだ底面にナデを施すものが多い。外面に二枚貝の条痕を残すものでは、底面の凹みがやや浅くなっている。Ⅱ類は266～273・281などで、底部付近を横に削って高台状に整え、底面にナデを施すものが多い。また272・273・281では高台状になった底部全体をナデで調整している。286～289は底径2～4cmの凹底であるが、深鉢と浅鉢の区別は明瞭でない。いずれも外面をケズリで調整し、狭い底面はナデで仕上げる。291～293は平底で、いずれも外面はケズリで調整している。294～296は丸底で、294・295は外面をケズリで調整し、296は二枚貝をもちいて調整している。底部では、凹底（Ⅰ・Ⅱ類）、平底、丸底といった形態のうえでの層位の偏りは認められなかった。しかし、外面を二枚貝で調整するものは灰褐色砂層やピート層のような下層に多く、底面をケズリで調整するものは上部の灰白色粘土層に多いといった傾向はうかがわれる。

(4) 弥生時代前期の土器

今回の調査では、弥生前期の土器は調査区東側（12区）の中洲の南端から南東部に存在したピート層およびピート層の上層から出土した。このピート層は、当初前述した縄文晩期を多量に包含する層として認識していたが、一部弥生前期の遺物も混在することが明らかとなった。しかしながら、弥生前期のどの段階の土器が、縄文晩期と混在するかの詳細については明確ではない。また、第40図の土錘もピート層およびピート層上層から出土したものである。

壺（297～310）

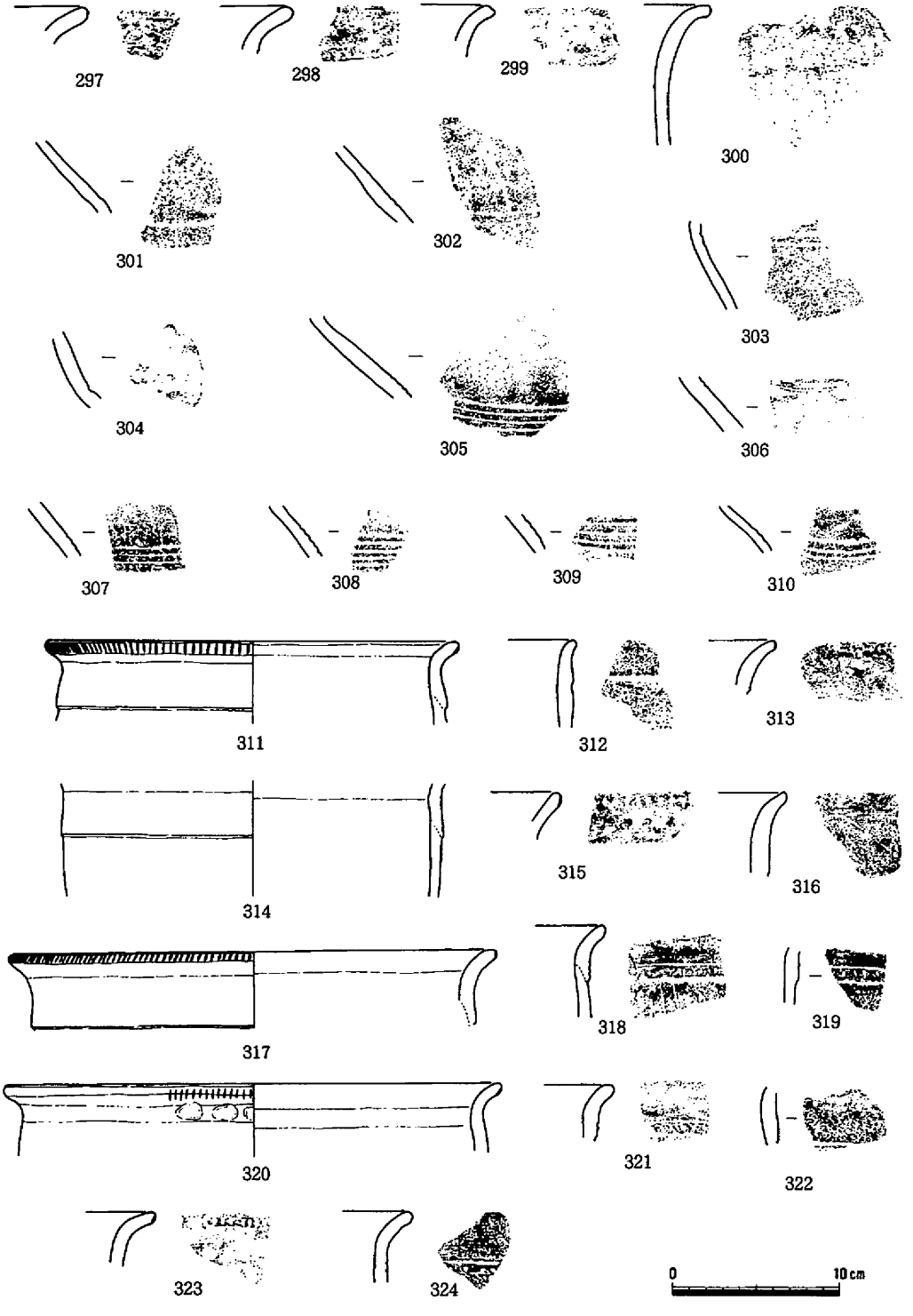
壺の口縁部としては、297～300の4点だけであった。297～299は、器壁が厚く、外反する口縁部をもつ。口縁端部は、丸くおさめるもの（297、298）と、端部がやや凹むもの（299）がある。口縁部は、内外面ともヘラミガキののち、ヨコナデを施す。300は、胎土、焼成とも他の土器と同様なものである。頸部は、立ち気味でゆるやかに外反する口縁部である。口縁部外面は、横方向にハケ状工具による調整を行っており特徴的である。他に壺としては、301～310があり、いずれも頸部～胴部の部位のものである。301、304は頸部と胴部の界に段をもち、その段の上部には幅約0.5cmの凹部が存在する。

308～310は、頸部と胴部の界を削り出し、突帯部に数条のヘラ描き沈線を施す。305、307は、削り出し突帯か否かが判別しにくいが数条のヘラ描き沈線が認められる。302は、2条のヘラ描き沈線を施す。303、306は、頸部にヘラ描き沈線が認められる。306は上下の断面は外傾接合で破損している。

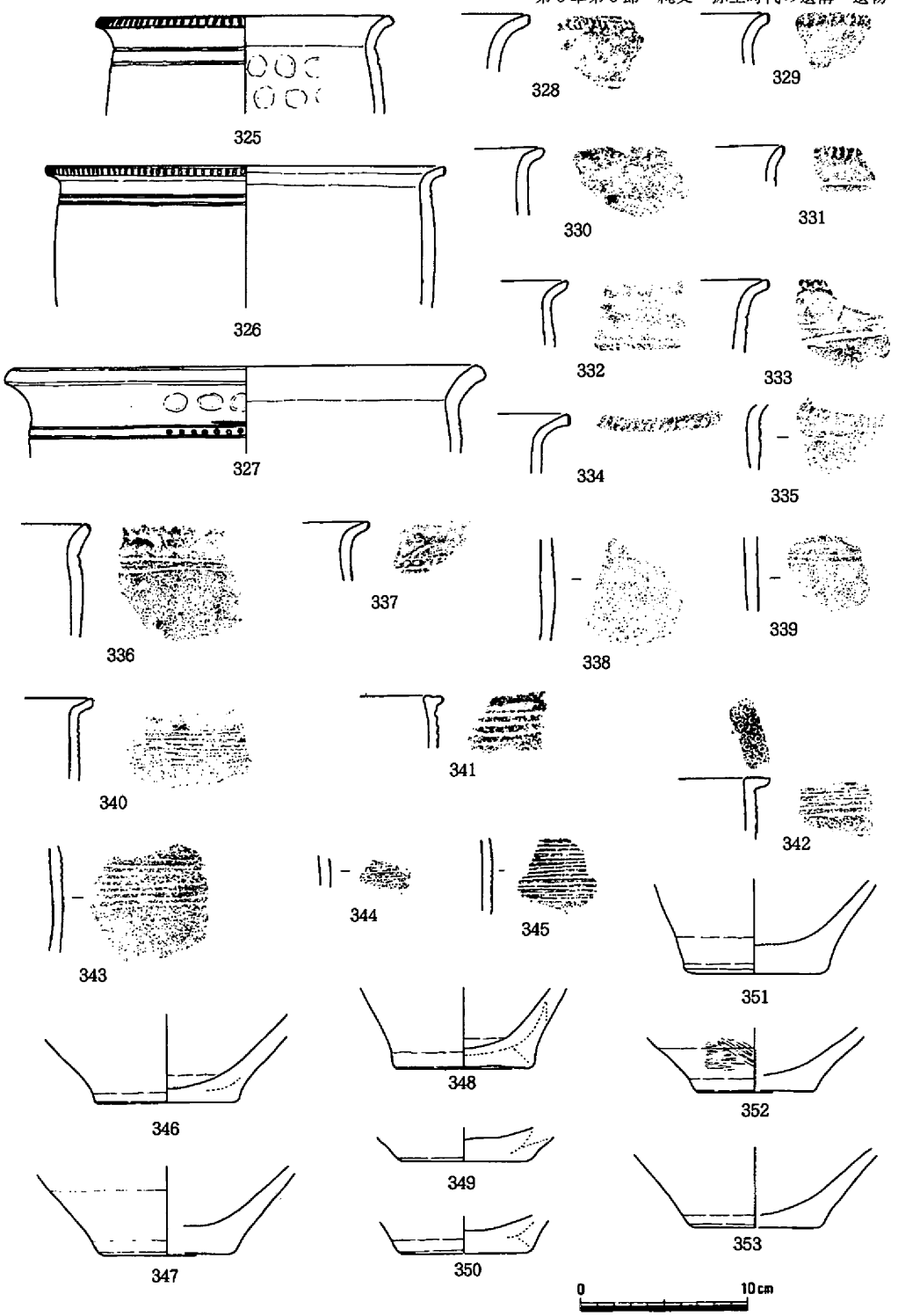
これらの壺は、その特徴から298が古段階に属すると考えられ、301も298に近いものと思われる。308～310は、中段階の削り出し突帯の特徴を示す。また、302、305、307は、やや後出的であろうか。297、299の口縁部も中段階は下らないものと思われる。300についても同様である。

甕（311～345）

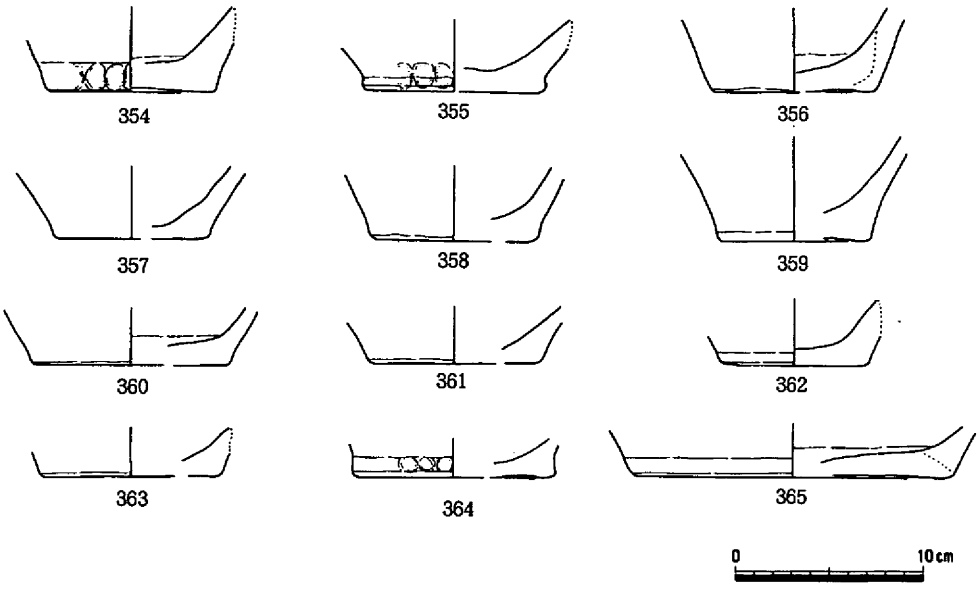
甕の中で口縁部下の頸部との界に段が付されるものは、311～314、316～319、321、322がある。いずれも外傾接合を利用した成形段の手法をとっている。これら段を有する土器の口縁部は、屈曲気味に外反するもの（311）、ゆるやかに外反するもの（313、317、318、321）があり、さらに口縁端部を短かく外反する（312、316）も認められる。特に、312は端部のみを外反するにすぎない。口縁端部のキザミ目は、有するものが多く（判別できないものもある）、311、343などは、端部の外面に付している。315、320も同様である。318、319、321は、段の上部1cm弱にヘラ描沈線を入れ、その間にヘラによるキザミ目状の刺突文を施す。316は、口縁部外面を横方向にハケ状工具により調整を加えている。これは、壺の300と共通したものである。古段階のものと考えられる。



第37図　弥生時代前期土器（1）



第38図　弥生時代前期土器（2）



第39図　弥生時代前期土器（3）

320、323～340は、口縁部下の頸部との界に段成形が認められないものである。口縁部下には、数条のヘラ描き沈線を施す。320、323、329、330、334については、沈線が認められなかった。また、340は多条化しており、後出的である。

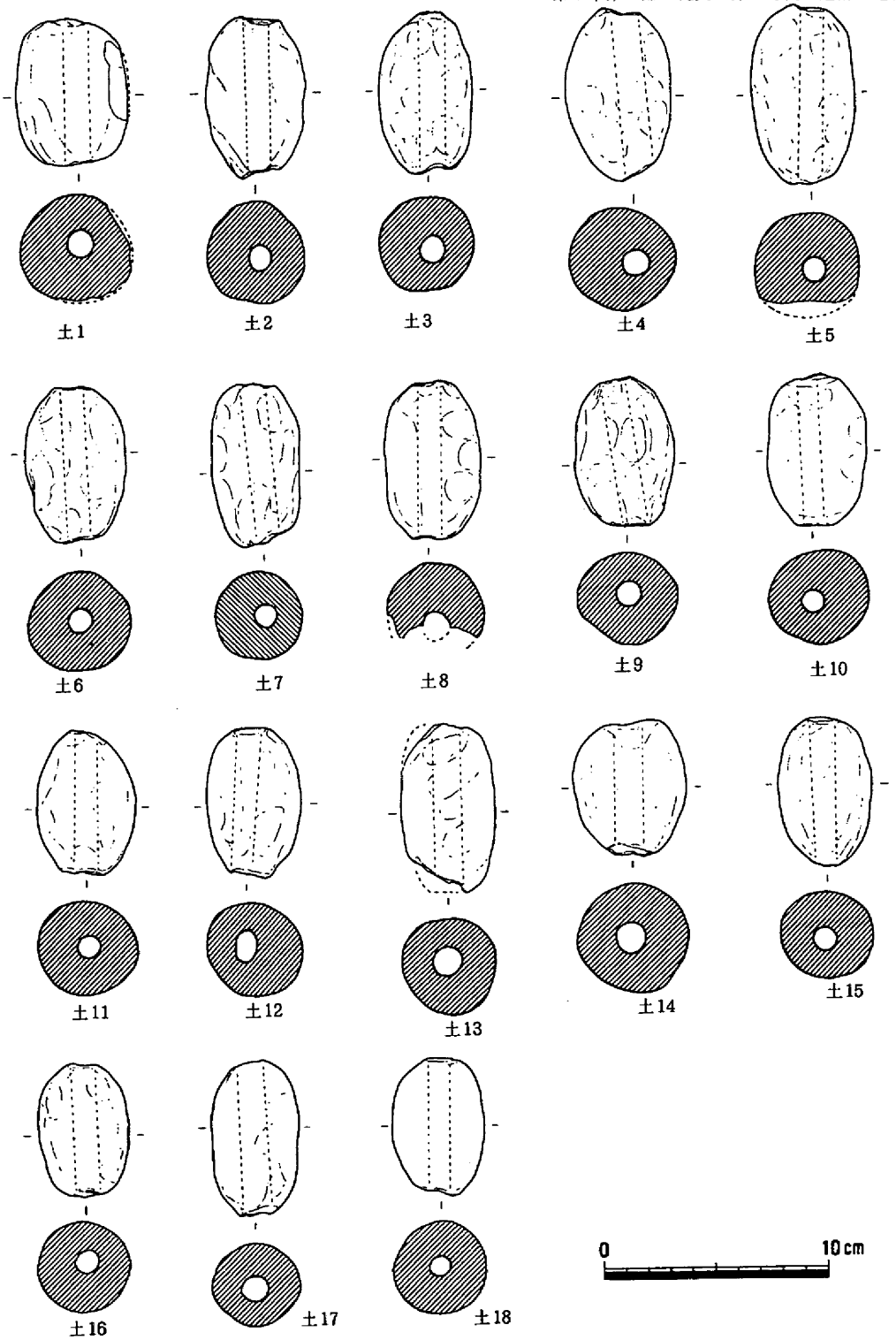
口縁部は、屈曲気味に外反するもの（326、334、340）とゆるやかに外反するものがある。これらの320、323～339は、中段階を中心とするものであろう。（320、323、330）についてはやや古相の可能性がある） 341、342は、いわゆる逆L字形の口縁部で、口縁部下の沈線は多条に施しており、新段階に属する。

底部（346～365）

壺、甕の判別しがたいものもあるため底部として報告する。底部は、一様に器壁が厚い。内外面の調整は、外面底部近くは指によるオサエ、ナデによっている。また底部から数cm上部からは、外傾接合と確認できるが、底部は複雑な接合が認められた。

土錘（土1～土18）

土錘は、12区の中洲南端部下に確認されたピート層およびピート層上層から出土した。形態は、両端部が丸味のある大形の管状を呈する。外面は、オサエとナデによって調整している。この土錘は、一握の粘土塊を平たくしたものを棒状のものに巻き込み、引き抜いて成形したものと考えられる。重量は、軽いもので100g弱で、重いものは約150gを測る。平均は約120gである。



第40図　ピート層周辺出土遺物

(5) 谷－C出土遺物

第41図の弥生土器は、いずれも谷－Cから出土したものである。谷－Cは、調査区南側の10区の中央部に検出された。谷は、10区の丘陵斜面から始まり、ほぼ東方向にやや蛇行して延び、12区の低位部に流れ込む、詳細は後述するが、規模は幅約9m、深さ約3m測る規模の大きなものである。谷の堆積土は、大きく下層から古墳時代、古代、中世と大別でき、特に古墳時代（5世紀前半期）の遺物を多量に含んでいた。図示した土器は、主に谷の下層を中心に出土したものであるが、弥生時代としての堆積層は確認しえなかった。土器は、いずれも磨滅気味のものが多く含まれており、周辺地域からの流れ込んだものと考えられる。

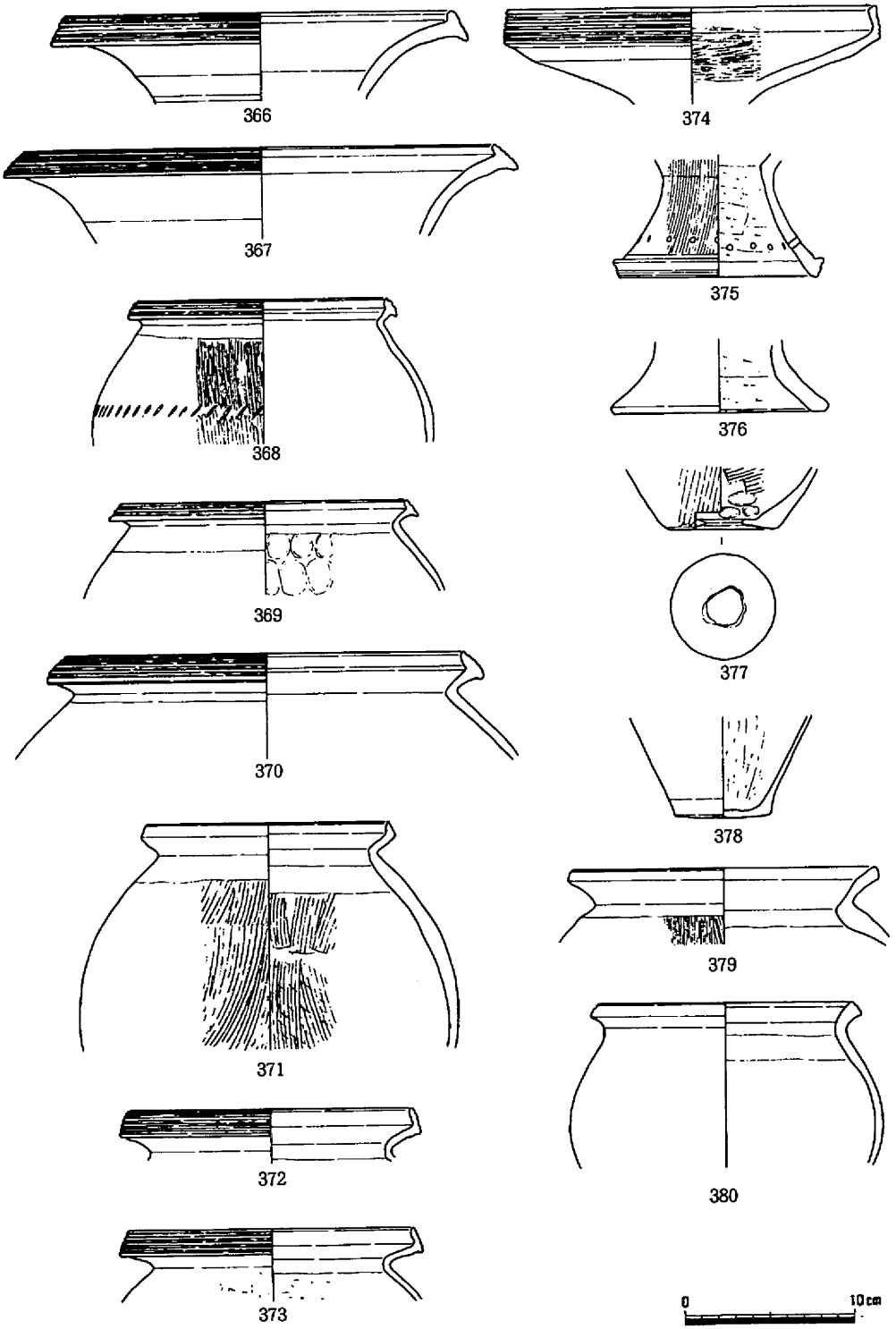
図示した366～380は、大きく弥生中期と後期のものに大別できる。366～371、374～378は中期、372、373、379、380は後期と考えられる。

366、367は、壺と考えられ、口縁部は大きく外反し、端部を上下に拡張して端面を成す。端面には、凹線文を施す。366の頸部には、凹線が認められる。368～370は、甕で口縁部は「く」の字に屈曲し、さらに端部を上下に拡張して凹線文を施す。368は、外面肩部にハケメを残し、その下方にタテ方向のヘラミガキを施す。さらに肩部に櫛状工具により刺突文を連続して施文している。371は、「く」の字口縁をさらに上方をつまみ出している。内面は肩部近くまでヘラケズリをして、さらにハケメを施す。

高杯374は、口縁部をやや内傾気味に立ち上がり、外面に凹線文を施す。杯部内面はヘラミガキ、375、376の脚部は、円盤充填法が用いられており、内面はヘラケズリで、脚部端部は上下に肥厚する。375は、脚裾部に円形の透し孔が連続する。377は、内面ハケメ、外面ヘラミガキで、底部に穿孔している。378は甕の底部で、底部はやや丸味をもつ。これらの土器は、いずれも弥生中期後半の特徴を示すものである。379は、「く」の字に口縁部が屈曲し、端部は器壁が厚い。外面はハケメ。380は、外反する口縁部で、端部は器壁が厚く、上下を肥厚する。これらの土器は、弥生後期中頃を中心とするものであろう。

372、373は、口縁部が屈曲気味に外反し、内傾して上方に立ち上がる。口縁部外面には、4－5条の擬凹線が廻る。外面はタテ方向のハケメで、内面はヨコ方向のヘラケズリを施す。これらの土器は、弥生後期の終末期に属するものである。

以上の土器は、弥生中期後半～後期終末のものであるが、今回の調査では遺構としては検出されていない。しかし、後述する調査区東側端の12区の中洲東斜面、包含層遺物として、調査区各区より少量ながら、弥生中期後半～古墳初頭までのものが出土している。さらには、谷－C南側に存在する溝－70は、竪穴住居址の壁体溝である可能性もあるが、断定的なものではない。


366
367
368
369
370
371
372
373
374
375
376
377
378
379
380
0
10cm

第41図　谷－Ｃ出土遺物

(6) 斜面堆積

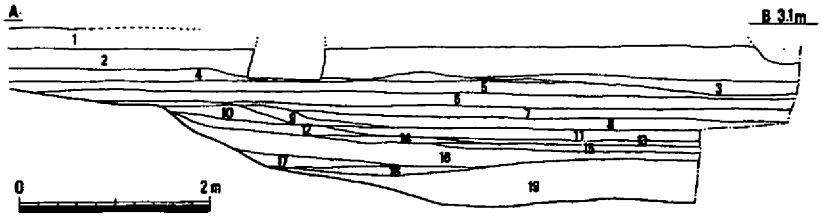
調査区中央東端部お中洲の東側（第20図Ａ－Ｂ）には、東方方向に下る斜面堆積（第42図）が認められた。この斜面堆積は、中洲を中心に東～南側に認められ、各時期の層位を示していた。第42図をみてみると、第１～４層は近世、近代～現在の水田層で、第５～８層が中世および古代～中世の水田層と考えられる。さらに、第９～11層が古代を中心とする水田層、第12～15層が古代～古墳中頃の斜面堆積および水田層と理解している。第16層は、第43、44図に図示した弥生後期～古墳初頭の土器が斜面堆積下端の凹部状から出土した。第16層は、その出土遺物から古墳初頭と考えられ、東側は水田層と考えられる。

第19層は、縄文晩期の遺物を含んでおり、中洲先端の南東部では縄文晩期（弥生前期も含む）の遺物の多量の包含していたピート層が、この第16層の上部に堆積していた。また、第19層の下部にもピート質の堆積層が約80㎝前後の堆積層が認められたが遺物等は確認できなかった。このピート質の堆積層は、第４、５図の最下層に認められた層と同一と考えられる。

394の甕は、外面肩部にヘラ描による直弧文関連文様が線刻されている。この線刻文は、分銅形の図形で、やや粗く文様が描かれている。この土器は、その特徴から古墳時代初頭のものである。

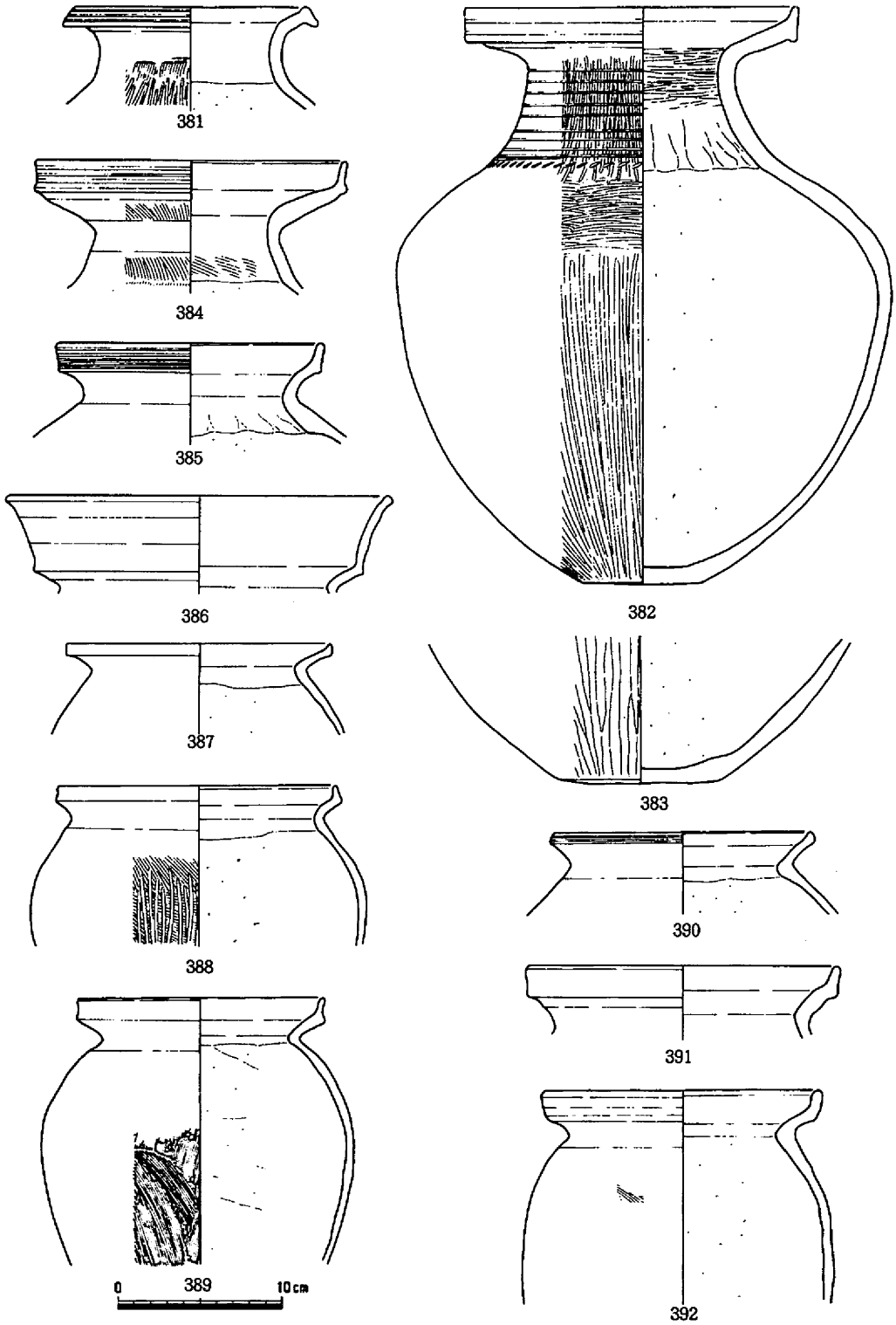
(7) 包含層出土遺物

409～434の弥生中期末から古墳時代初頭の土器は、その大半が溝－１の下層から出土したものでここでは包含層遺物として取り扱った。溝－１の下層は、洪砂層と考えられ、洪水時に、

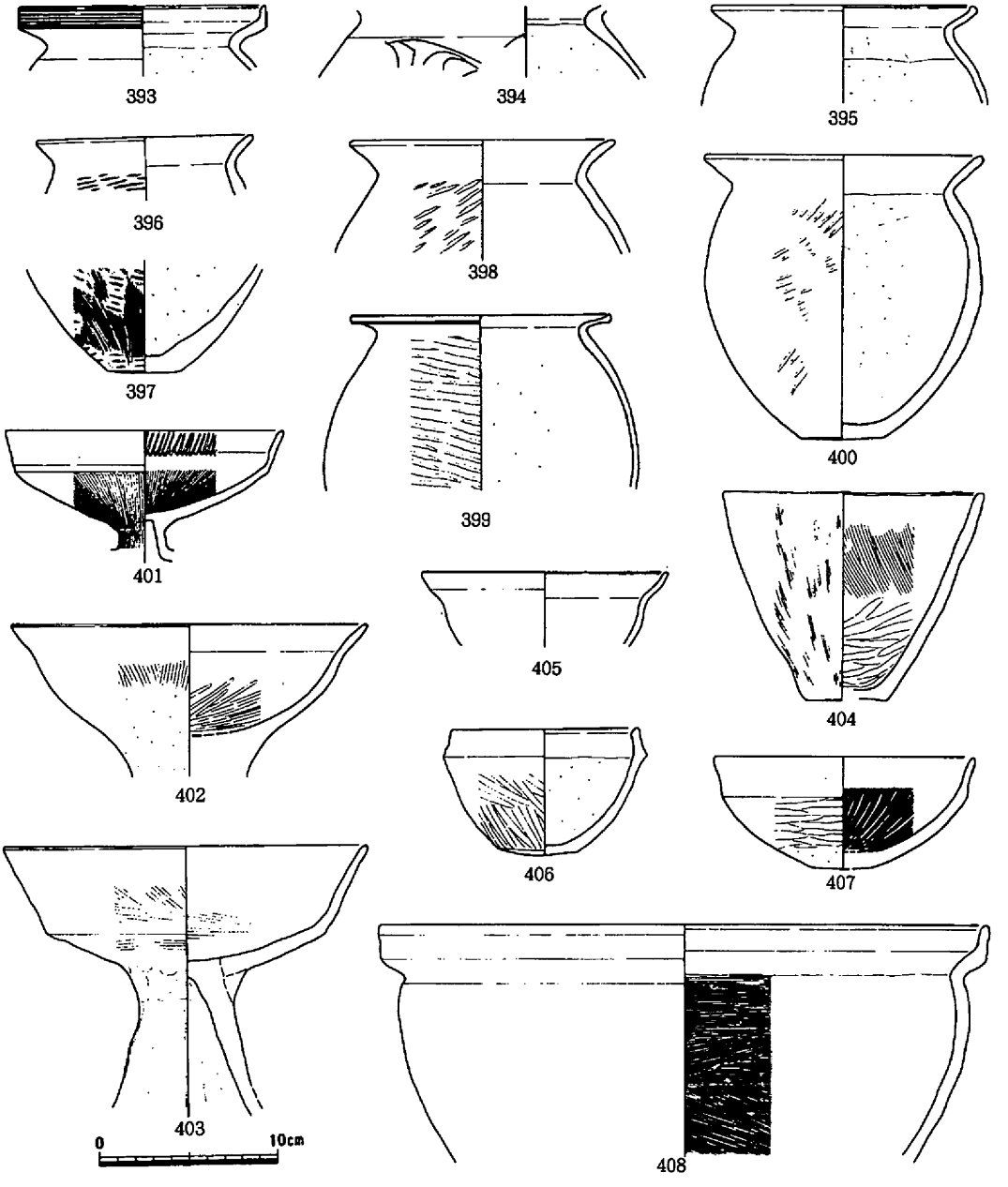


1. 耕土
2. 水田層（数層あり）
3. 茶灰色粘質土
4. 茶灰褐色砂質土
5. 淡茶灰色粘質土
6. 茶灰褐色粘質土
7. 淡茶灰褐色粘質土
8. 淡灰褐色粘質土
9. 暗茶褐色砂質土
10. 暗茶灰色砂質土
11. 暗灰色粘質土
12. 暗灰色砂質土
13. 暗灰褐色砂質土
14. 暗茶灰褐色粘質土
15. 暗灰色粘質土
16. 黒色砂質土
17. 茶灰褐色粘質土
18. 暗灰色粘土
19. 青灰色砂、灰褐色砂

第42図　中洲東斜面断面図（1／80）



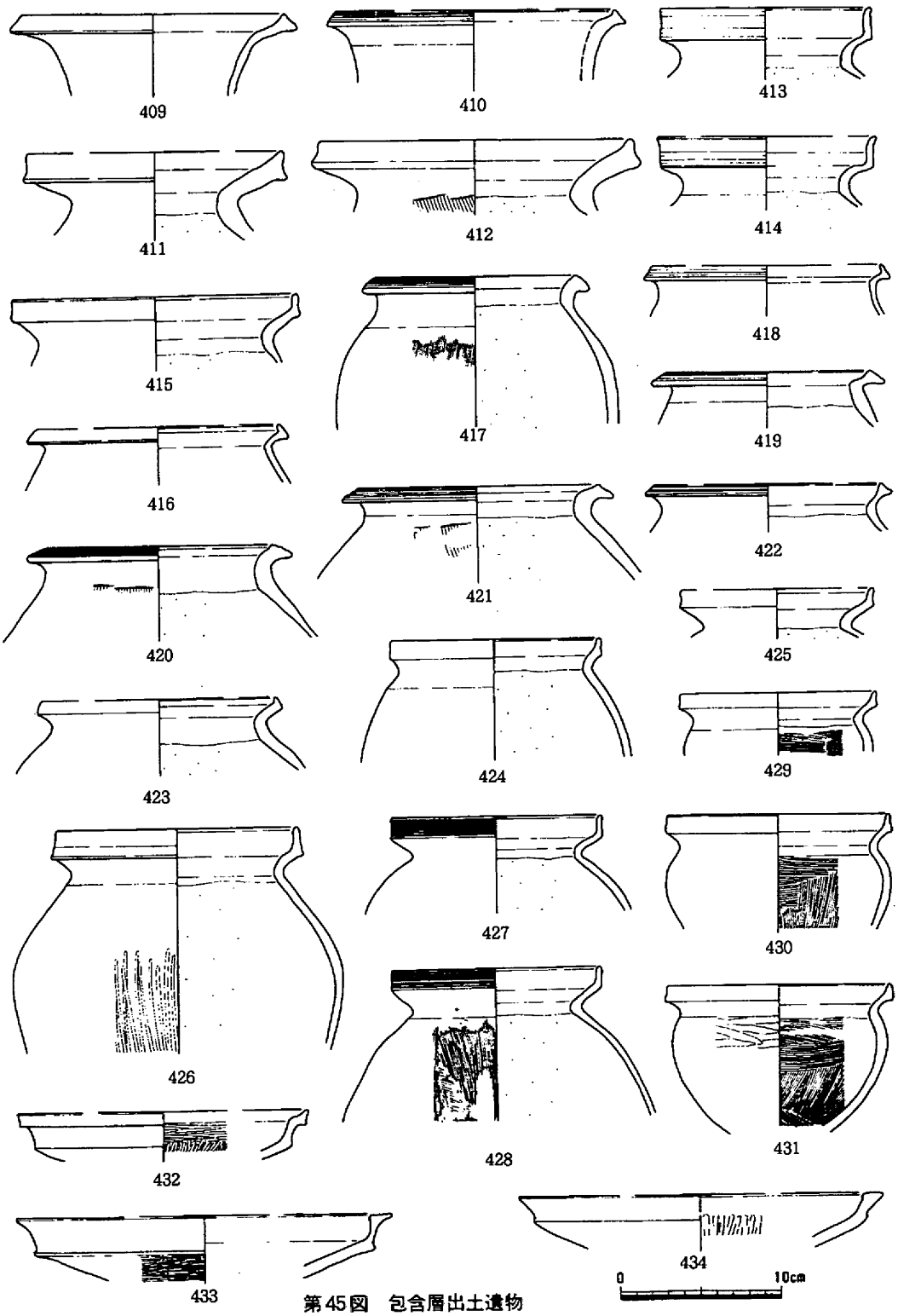
第43図　斜面堆積出土遺物（1）



第44図　斜面堆積出土遺物（2）

上流部の集落址から流入したものと考えられる。

土器は、**409**、**410**の弥生中期末のものから**427**、**428**の古墳時代初頭のものまで含んでいた。



第45図　包含層出土遺物

(8) 縄文、弥生時代の石器

石鏃（第46図S 9～S21）

S 9～S11は、三角形を呈し基部がほぼ直線的なⅠ類(各類別は第5章第3節参照)で、いずれもⅠa類にあたる。S12は基部の多くを欠くが、Ⅰa類、あるいはⅡa類かと思われる。S13～S18はⅡ類で、S13はⅡa類、S14～S16はⅡb類である。S17、S18は両方の脚を欠くが、Ⅱ類に属するものである。形態や風化の度合いから、いずれも縄文時代の所産と考えられる。S19は、先端と基部の一部を欠くがⅢ類と思われる。S20、S21は五角形鏃で、S20はⅤa類、S21はⅦb類にあたる。いずれも縄文時代に属するものと思われる。

石錐（第46図S22～S24）

S22はⅠ類である。錐部は短いが、頭部との境は明瞭である。

S23、S24はⅡ類に分類できる。S23は縦長剝片、S24は横長剝片を使用しているが、いずれも先端の尖がった部分に短い錐部を作出している。頭部は、剝片の形状を大きく変えず、S23が下半部両側縁に、S24が右側縁に浅い調整を施すのみである。

石匙（第46図S25～S28）

S25、S26はⅠ類で、横長の剝片を利用している。S25は先端縁辺と右側縁が、S26は右側縁が刃部としての機能を有する。刃部はいずれも両面から調整を施している。

S27、S28はⅡ類に分類される。S27の刃部は片面調整で、刃部の角度は急斜である。S28は頭部を欠損しており、刃部は両面調整を施す。

石槍状石器（第46図S29・S30）

いずれも横長の剝片を使用しており、表裏共に縁辺部にのみ調整を施している。S31はやや薄手である。

石包丁（第47図S31～S35、第48図S36・S37）

S31～S36は成品で、S37は未製品である。成品はすべて長方形に近い抉りを有するもので、S36はサヌカイト製であるが、他はいずれも頁岩製である。S31・S32は背部調整の際、顕著な敲き潰しは行なっていない。S36の表面には、ポリッシュが認められる。未製品S37は粘板岩製で、背部は敲き潰している。刃部は未調整で、打製か磨製かの判別はしがたい。

スクレイパー（第48図S38～S41、第49・50図、第51図S58～S62）

S38～S49はⅠa類である。背部に自然面を有するもの（S38～S46)、剝片剝離面をそのまま使用するもの（S47)、折断面を利用するもの（S48・S49）がある。S49は、残核を利用したものと思われる。S39・S42～S46の刃部調整は浅い。Ⅰb類S50～S55は、背部調整を施すが、敲き潰しは顕著でない。S50は背部調整・刃部調整共に浅い。

S56～S60はⅡa類である。片面調整のためS57、S58以外は刃部角が急斜であり、掻器的な機能が考えられる。S61、S62はⅡb類で、背部を若干敲き潰している。S61は表面刃部に自然面が若干残る。

楔形石器（第51図S63・S64）

S63がⅡ類に、S64がⅠ類に属する。S63は折断面を打面としており、裏面には細かい敲打痕がみられる。S64は裁断面を有するもので、上端は敲打により潰れている。

有肩石斧（第51図S65・S66、第52図S67）

両側縁に抉りを持ち、基部に比べ刃部が広がる定型化した石器が出土しており、有肩石斧と呼ばれるものの範疇に入るものと思われる。S65は抉り部が比較的下方に位置する。刃部の調整は裏面にはほとんどみられない。S66は風化が著しく進行している。表裏に自然面が残存し、その残存状況からみて、幅の狭い原石から素材となる剝片を剝離したものと思われる。抉り部は若干敲き潰している。刃部は両面調整を施す。S67は抉り部の敲き潰しは顕著である。刃部は欠損部分が多いが、両面調整と思われる。基端には、平坦な折断面を利用している。

打製石鍬（第52図S68～S71）

S68は凝灰岩製である。河原石を利用した礫器で、表面と両側面の頭部付近に自然面が残存する。使用痕はみられない。S69～S71はサヌカイト製で、剝片を加工している。S69は右側縁に自然面が若干残る。刃部付近は使用による磨耗が著しい。S70は、左側面から基端にかけて自然面をそのまま利用している。刃部、特に表面側には、使用による磨耗痕が顕著にみられる。S71は頭部を若干欠く。刃部付近には使用による磨耗が認められ、特に刃部縁辺は顕著である。表面基部付近にも、磨耗痕が若干みられる。

石核（第53図S72～S74）

S72は、右側縁以外の縁辺部すべてに自然面を残す。風化が進行しているが、剝離面の風化の度合いはすべて同じである。原石から板状の剝片を剝ぎ取って石核としたもので、右側縁は交互剝離によって剝片を作出しており、左側縁は自然面を打面として剝片剝離を行なっている。

S73は偏平な打面を作出し、そこから連続的に剝片を剝離している。打面には打痕が多数みられ、打面中央部にまで及ぶものもある。左側縁に敲打痕があり、これは石核素材剝片の先端部にあたるので、台の上に置いて石核素材を剝ぎ取った際の痕跡ではないかと思われる。S74は、板状剝片の自然面を打面として、裏面のみ剝片剝離を行なっているが、あまり進行しない段階で放棄している。表面左側辺の剝離面は、他の面に比べ風化が著しく、より古い時代の剝離痕跡と思われる。

磨製石斧（第54図S75～S77）

S75は、縄文時代の乳棒状石斧である。刃部付近は丁寧に磨いているが、他の部分、特に側

縁には敲打痕が多く残る。

小型方柱状片刃石斧S76は、一部に剝離による凹部が残るが、全体に入念な研磨を行なっており、刃部は鋭利である。刃部付近には、研磨による斜め方向の擦痕が走る。

S77は太型蛤刃石斧の基部で、断面は厚手である。丁寧な研磨を施しており、製作時の敲打による凹凸はほとんどみられない。

石棒（第54図S78）

頭部もなく、棒状部の一部、それも表面$\frac{1}{3}$程度しか残っていないが、形態や石質等から石棒と思われる。結晶片岩製で、表面は丁寧に磨かれている。

砥石（第54図S79～S83、第55図、第56図S89）

S79～S84は小型の砥石である。S85～S88は中型のもので、S85とS87の表面には、工具を砥いだ際の痕跡が線状の溝となって残る。S88は細長い河原石を使用している。S89は大型の砥石で、現存では左側面を除きすべてに使用が及んでいる。

石皿（第56図S90、S91）

S90は細粒閃緑岩製で、表裏共によく使用している。S91は裏面の凹んだ箇所にも磨痕がみられ、また表面も縦断面ではよみとれないが、横断面では中央部がやや凹みぎみになることから、磨石ではなく、石皿的な機能が考えられる。

石錘（第56図S92～S96、第57・58・59図）

すべて打ち欠きの石錘である。S92～S107は、長軸方向を打ち欠いたⅠ類である。上下対称に打ち割っているものが多いが、S97とS100はやや軸がずれる。またほとんどのものが、中央部を打ち欠いているが、S104のように上下端辺を広く打ち欠いているものもある。S102は、本遺跡出土品の中では最も大きく、重量も最大である。S108～S112はⅡ類で、いずれも対称的に打ち欠いている。S113・S114はⅢ類である。S114は対称的に打ち欠くが、S113は長軸方向の打ち欠きがややずれる。

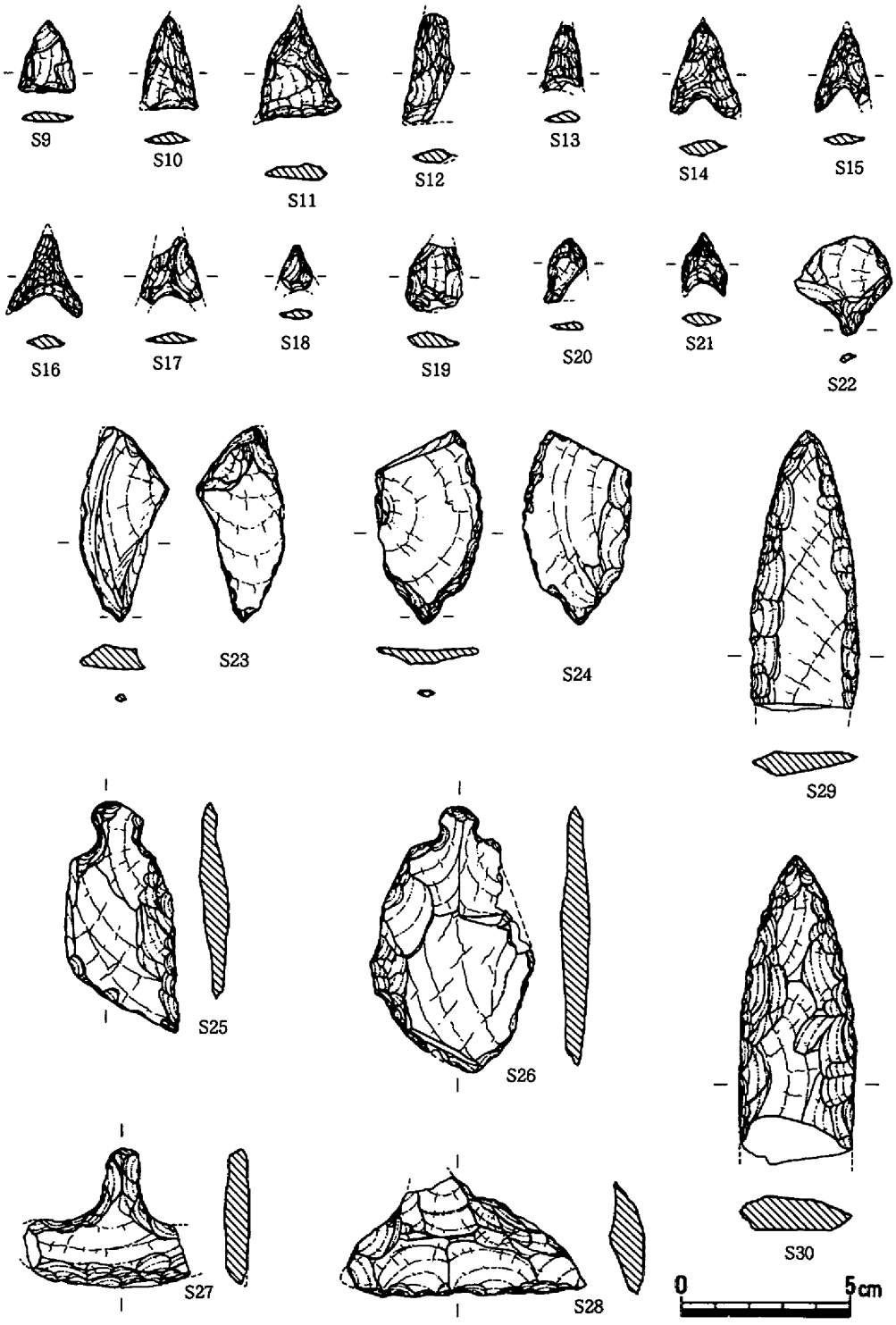
凹石（第60図）

S115は、2個1対の凹みが表裏対称に認められる。S116・S117は表裏対称に1個ずつの凹みを持つ。いずれも、全周縁に敲打痕がみられる。

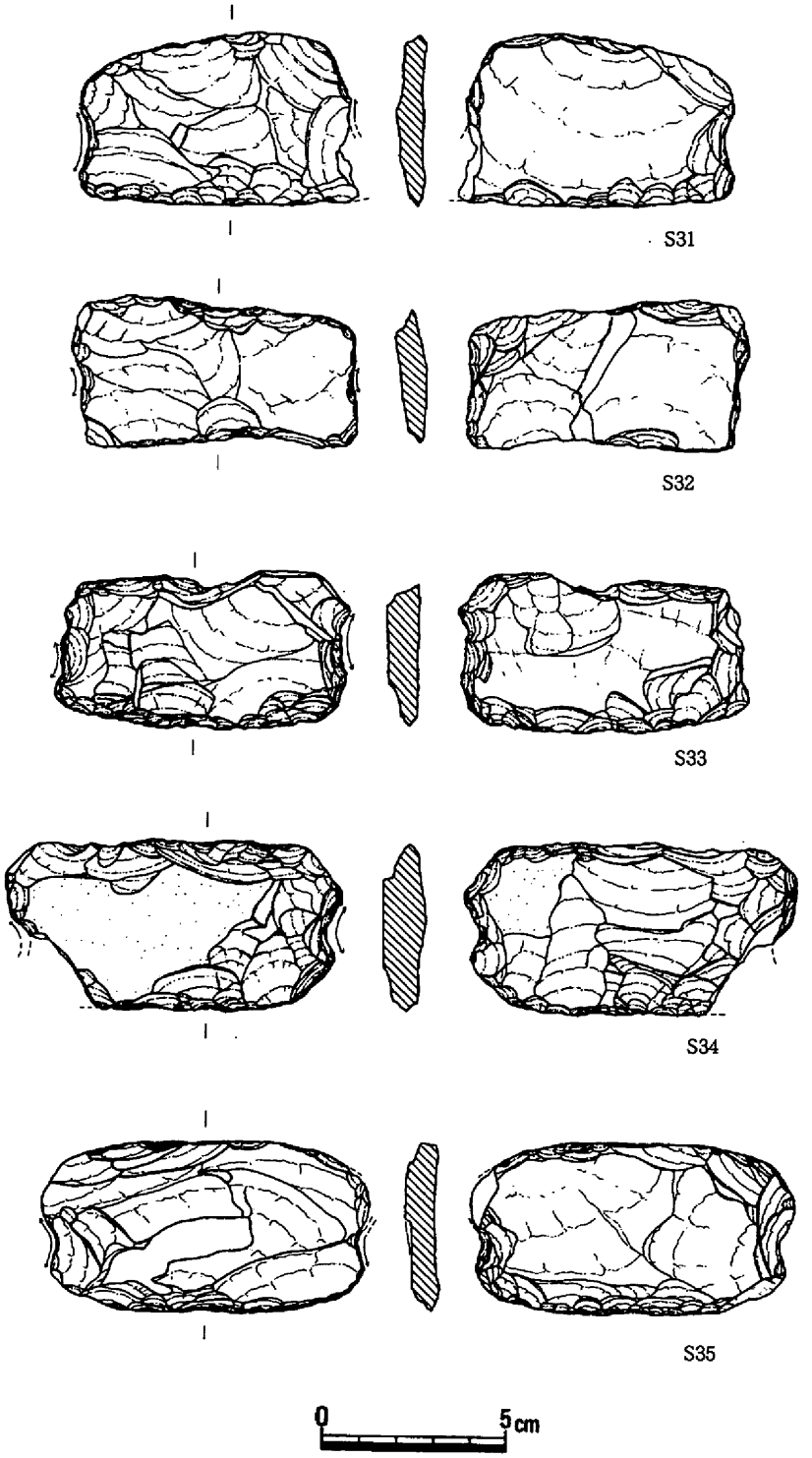
敲石（第61図）

S118・S119はⅠ類で、S118は残存部周縁すべてに敲打痕が認められ、面を形成している。S119は、周縁以外にも表裏面中央部に僅かに敲打痕がみられ、凹石的な様相を呈する。

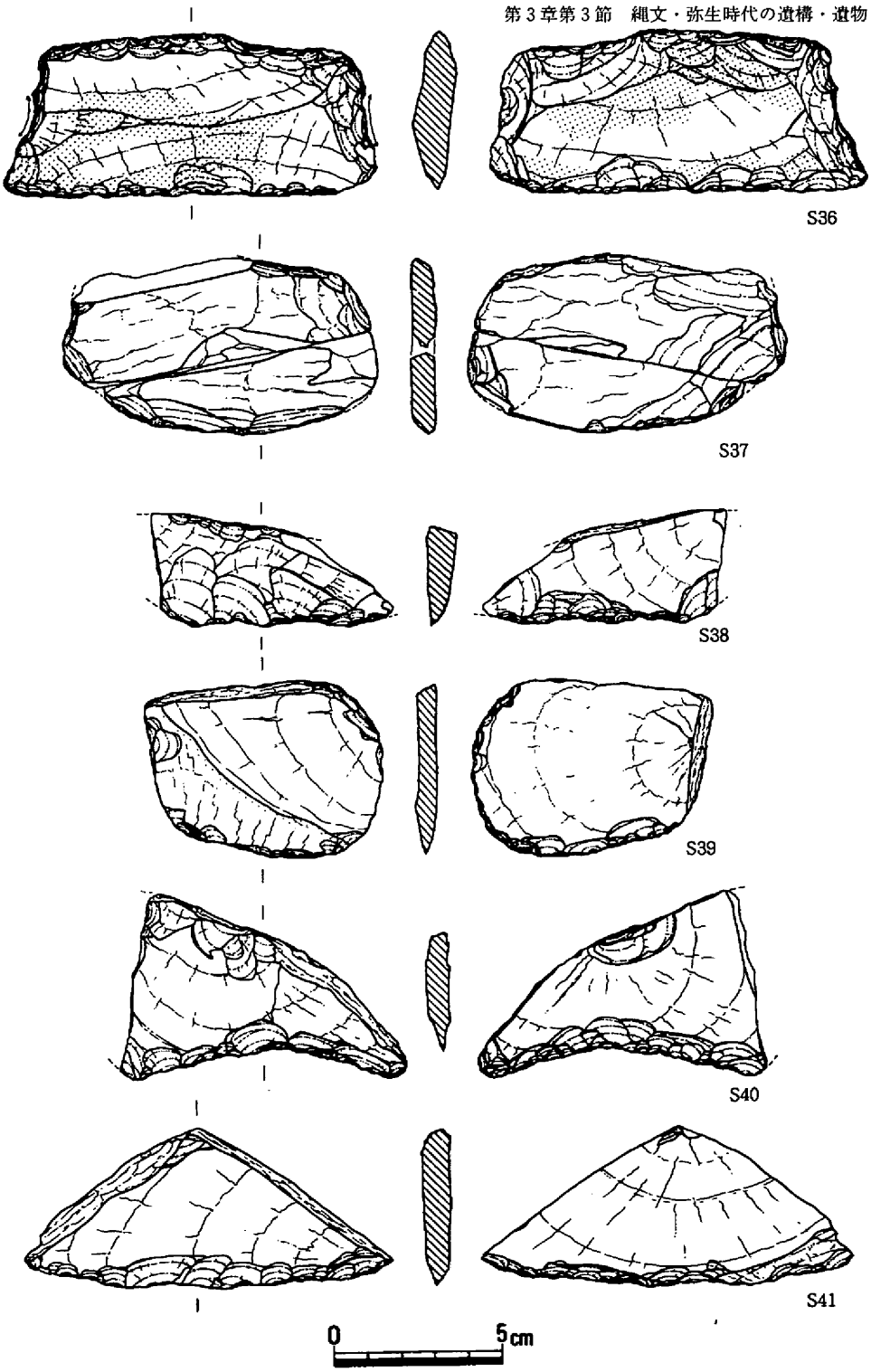
S120、S121は細長い河原石を利用したⅡ類である。S120は長軸の両端を使用しており、S121は側縁の一部のみ使用している。


S9
S10
S11
S12
S13
S14
S15
S16
S17
S18
S19
S20
S21
S22
S23
S24
S29
S25
S26
S30
S27
S28
0
5cm

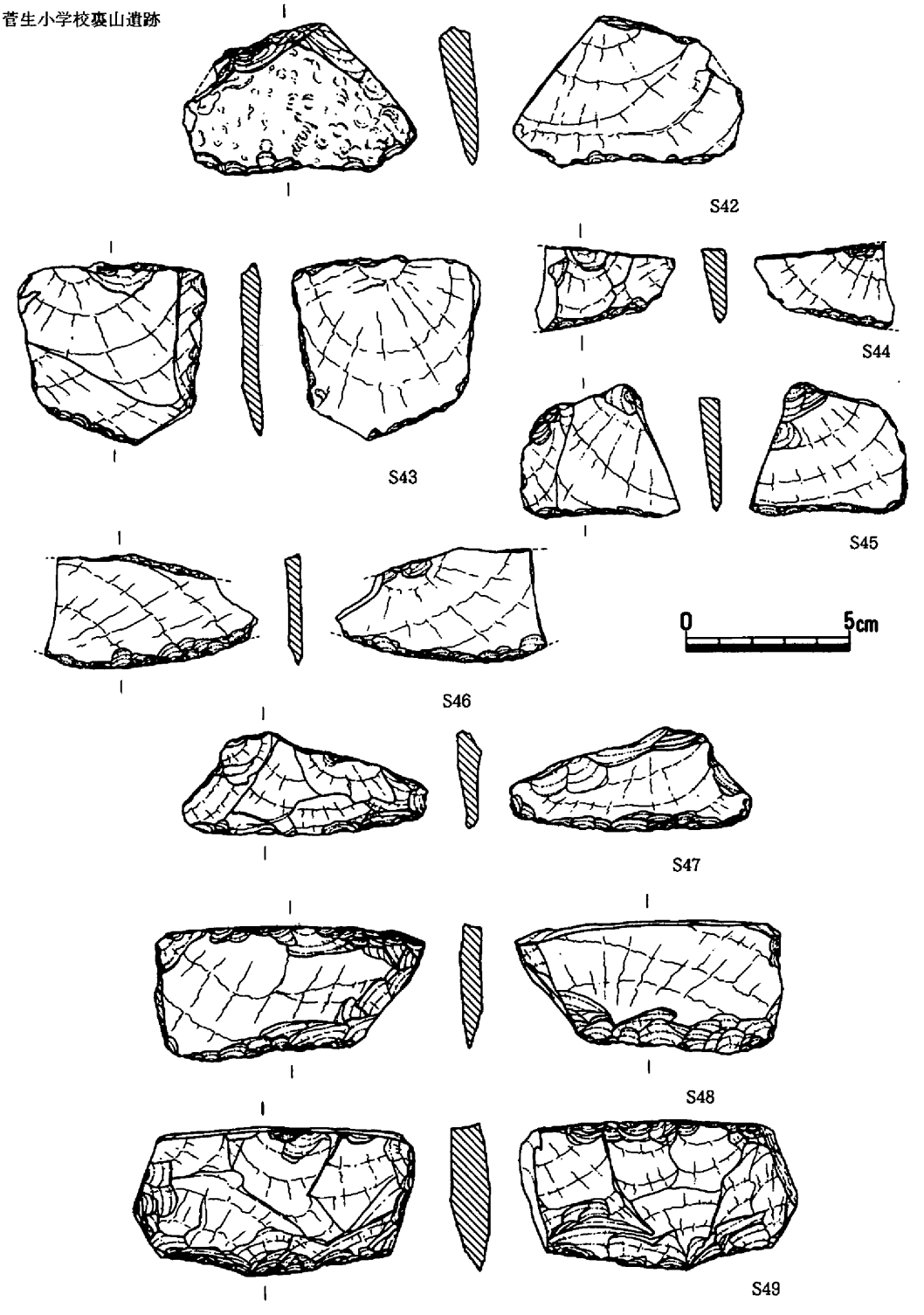
第46図　石　　器 (1)



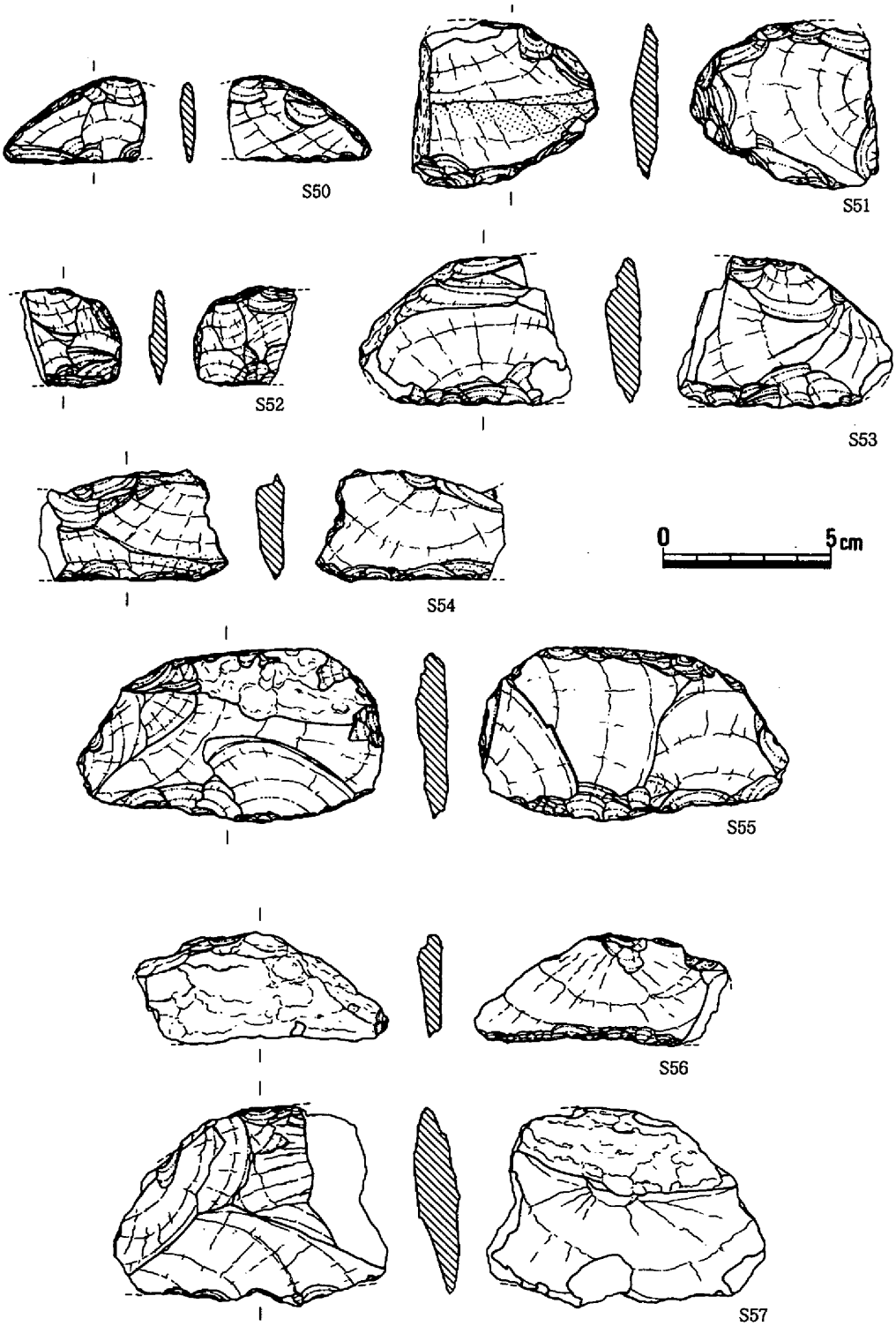
第47図　石　　器 (2)



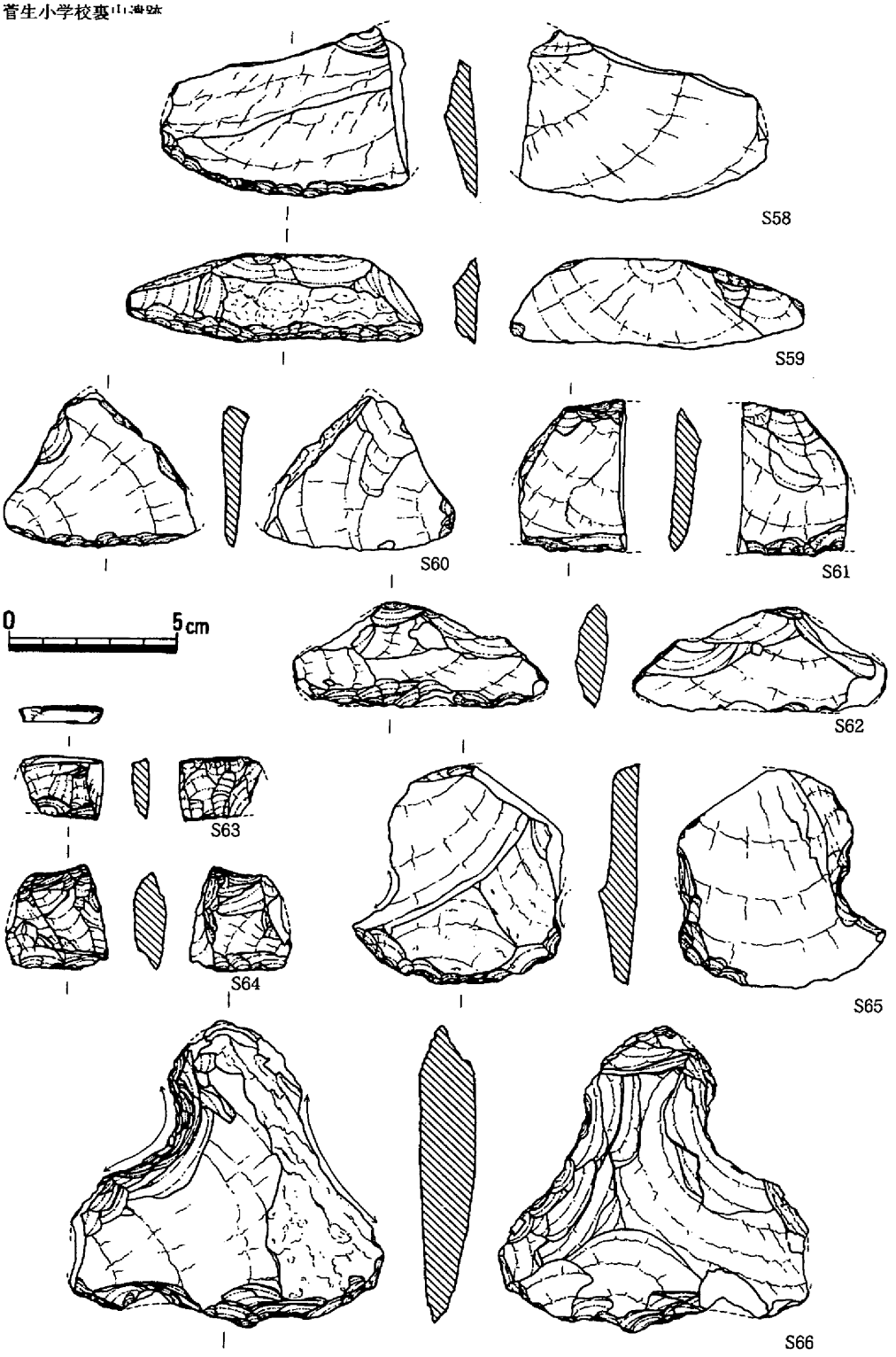
第48図　石　　器 (3)



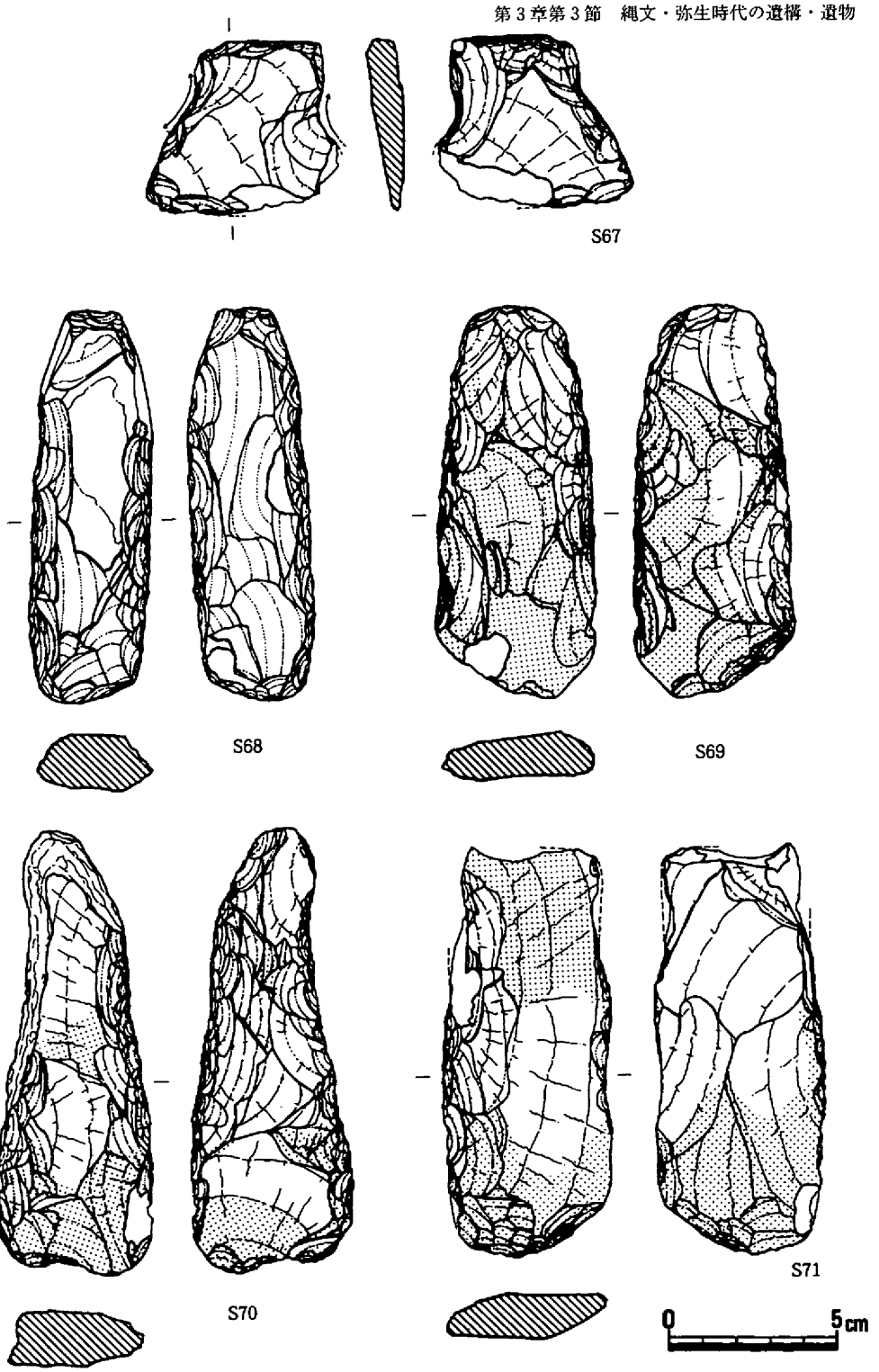
第49図　石　　器 (4)



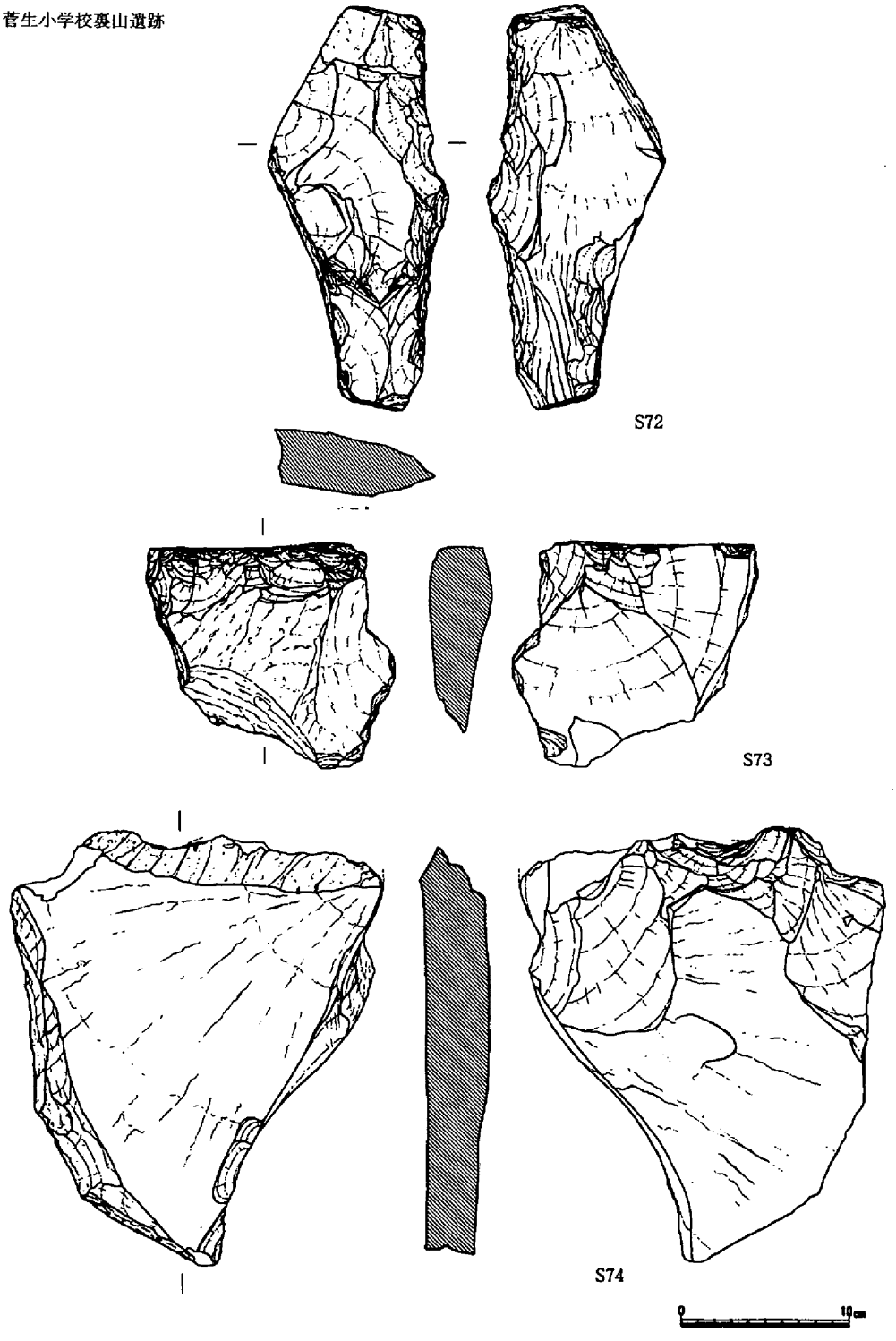
第50図　石　　器 (5)



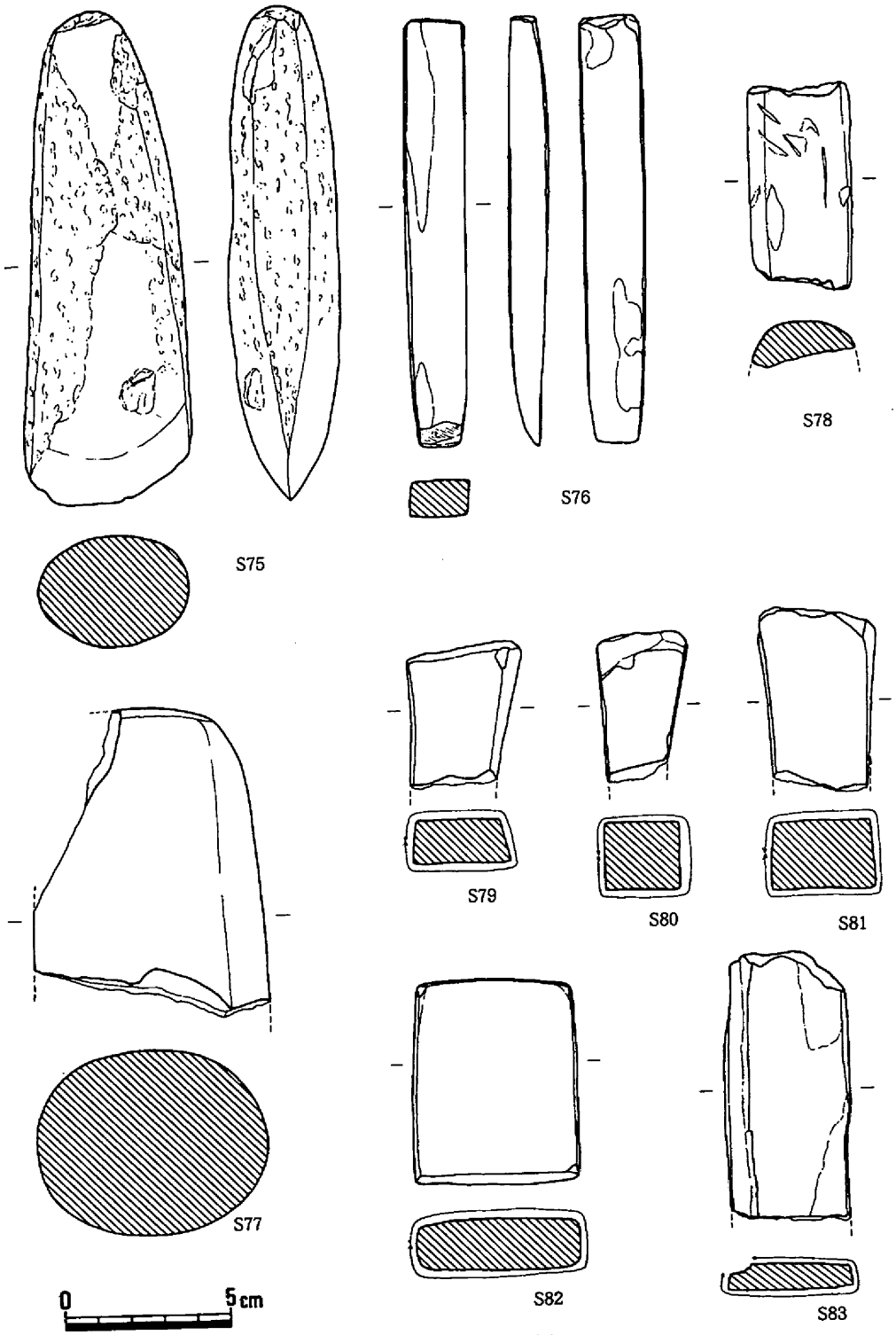
第51図　石　　器 (6)



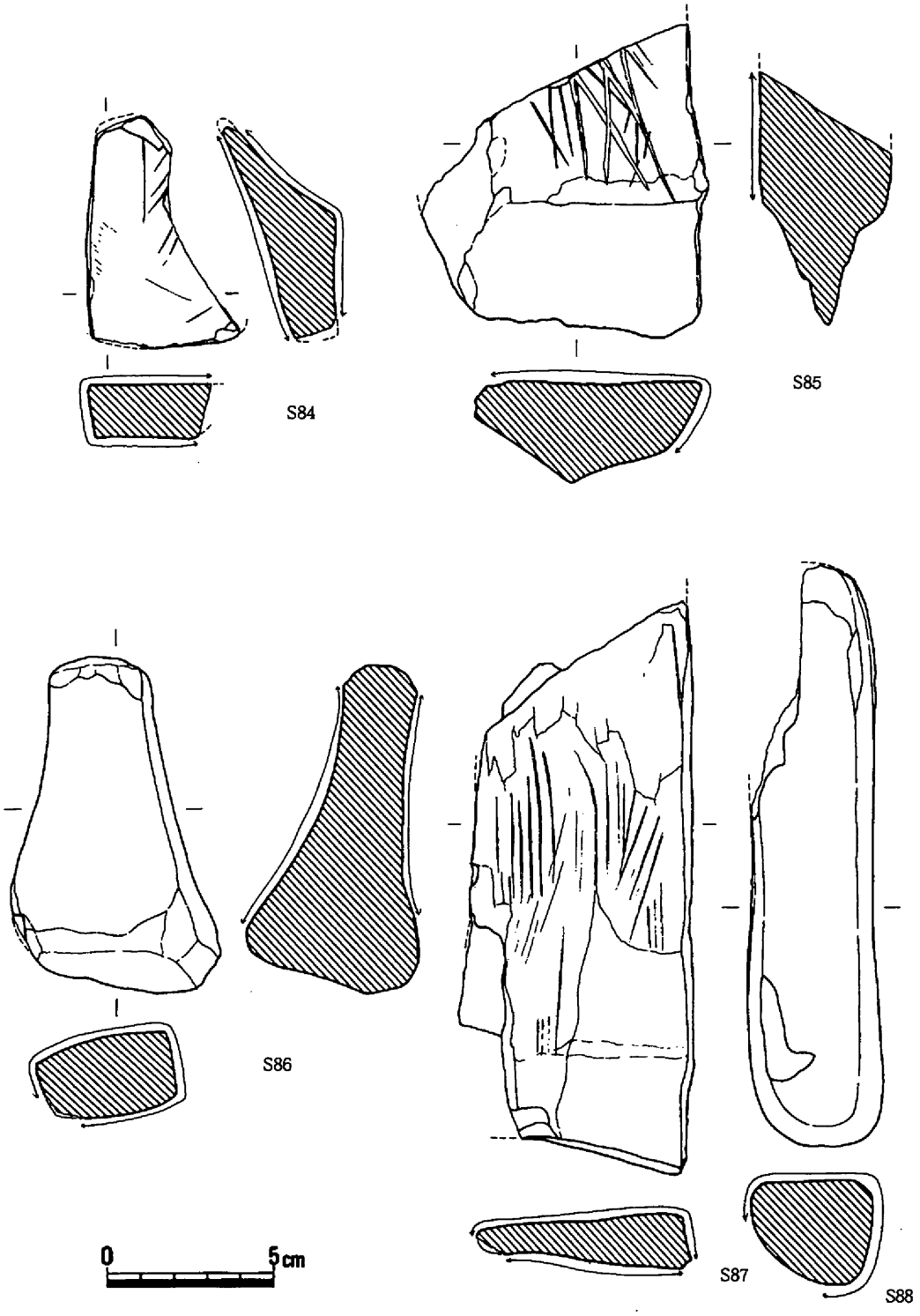
第52図　石　　器 (7)



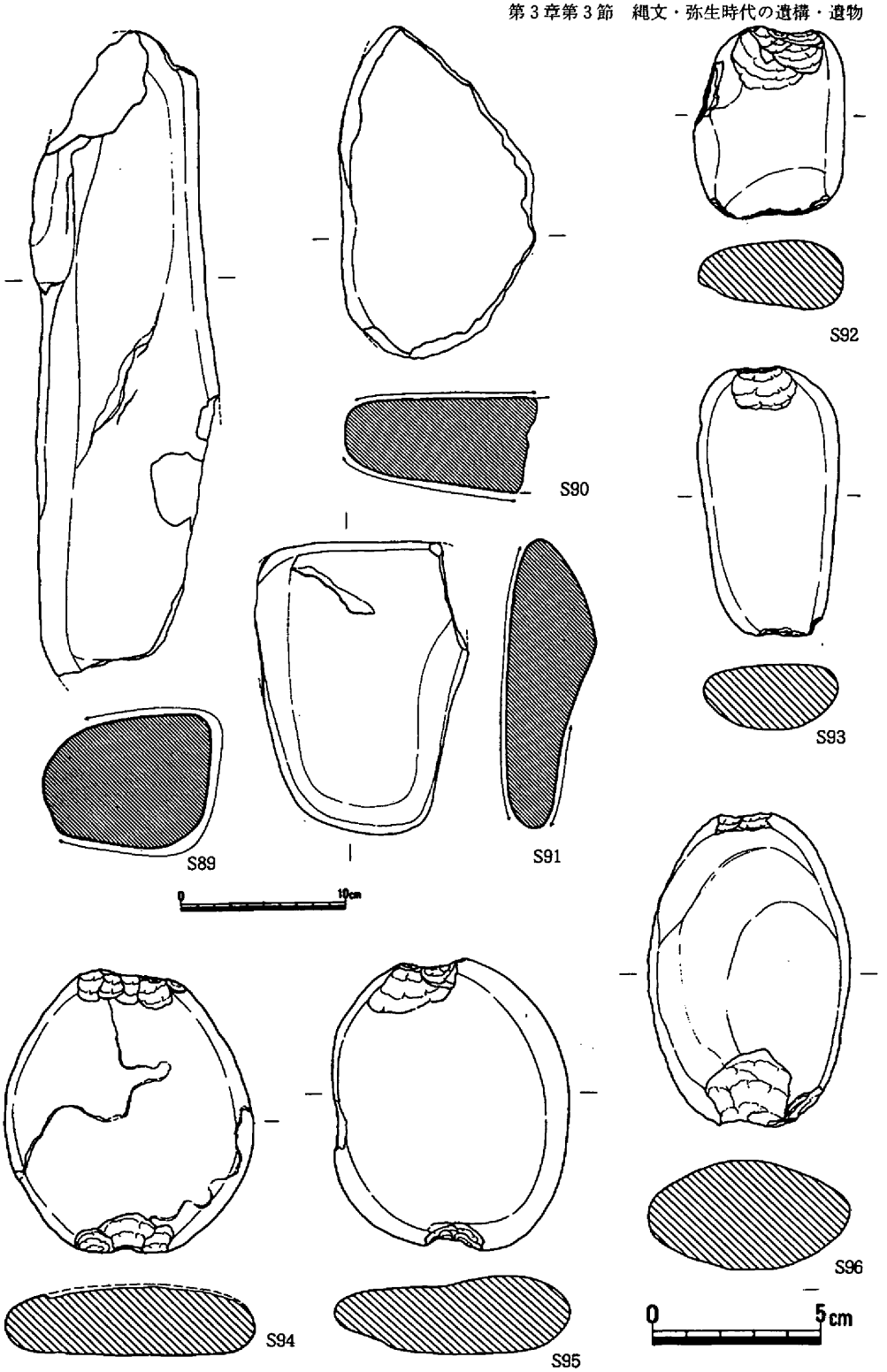
第53図　石　　器 (8)



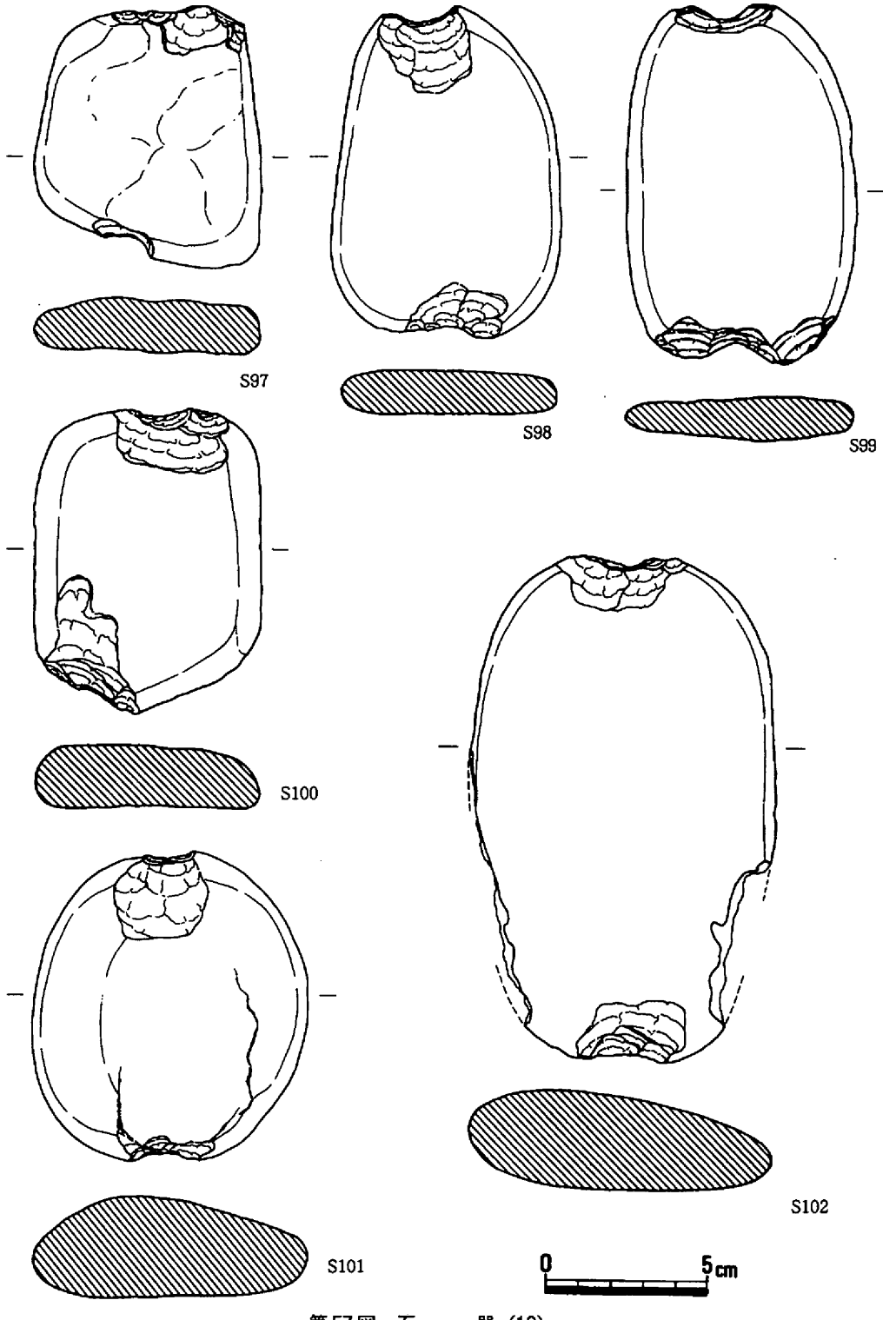
第54図　石　　器 (9)



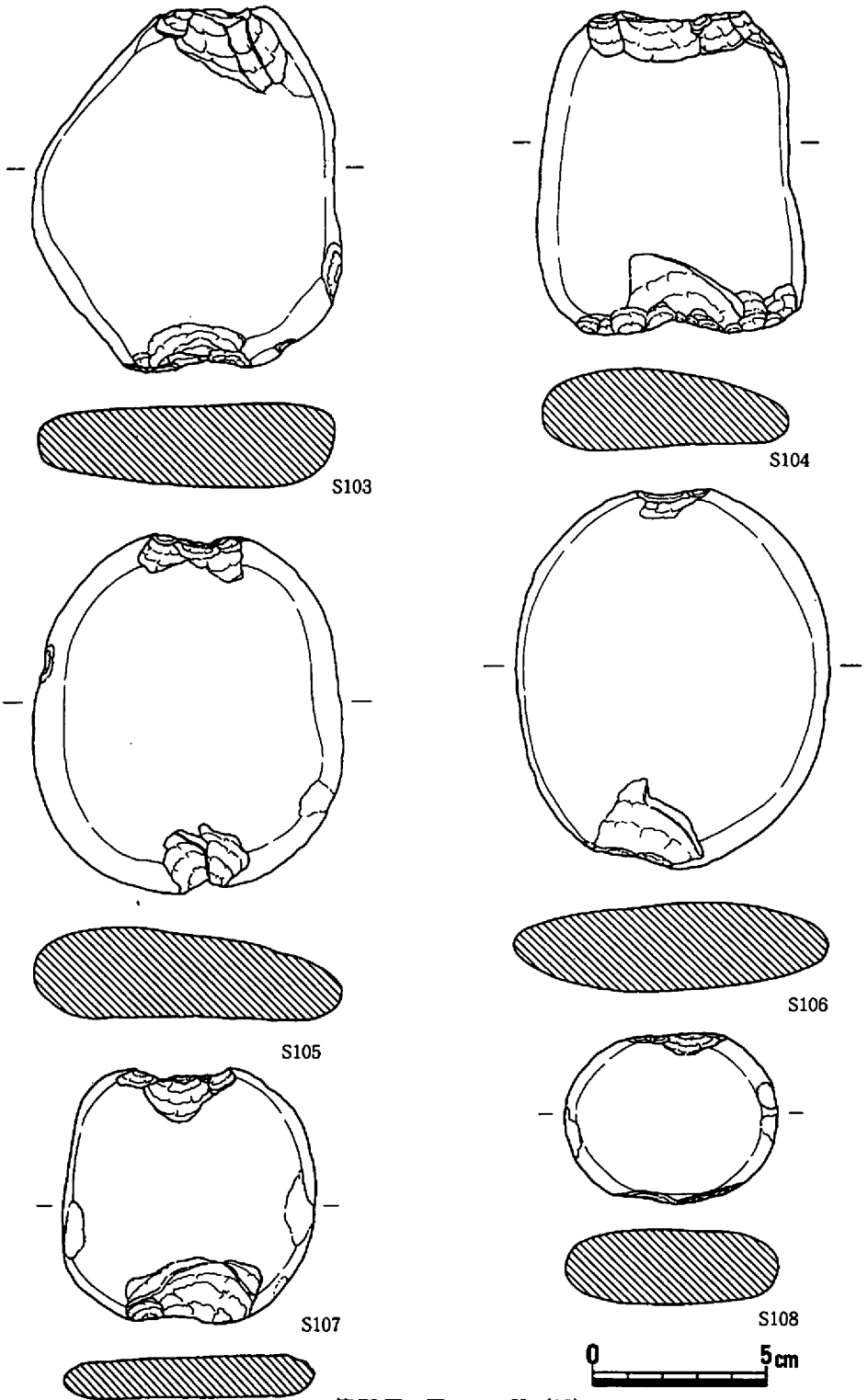
第55図　石　　器（10）



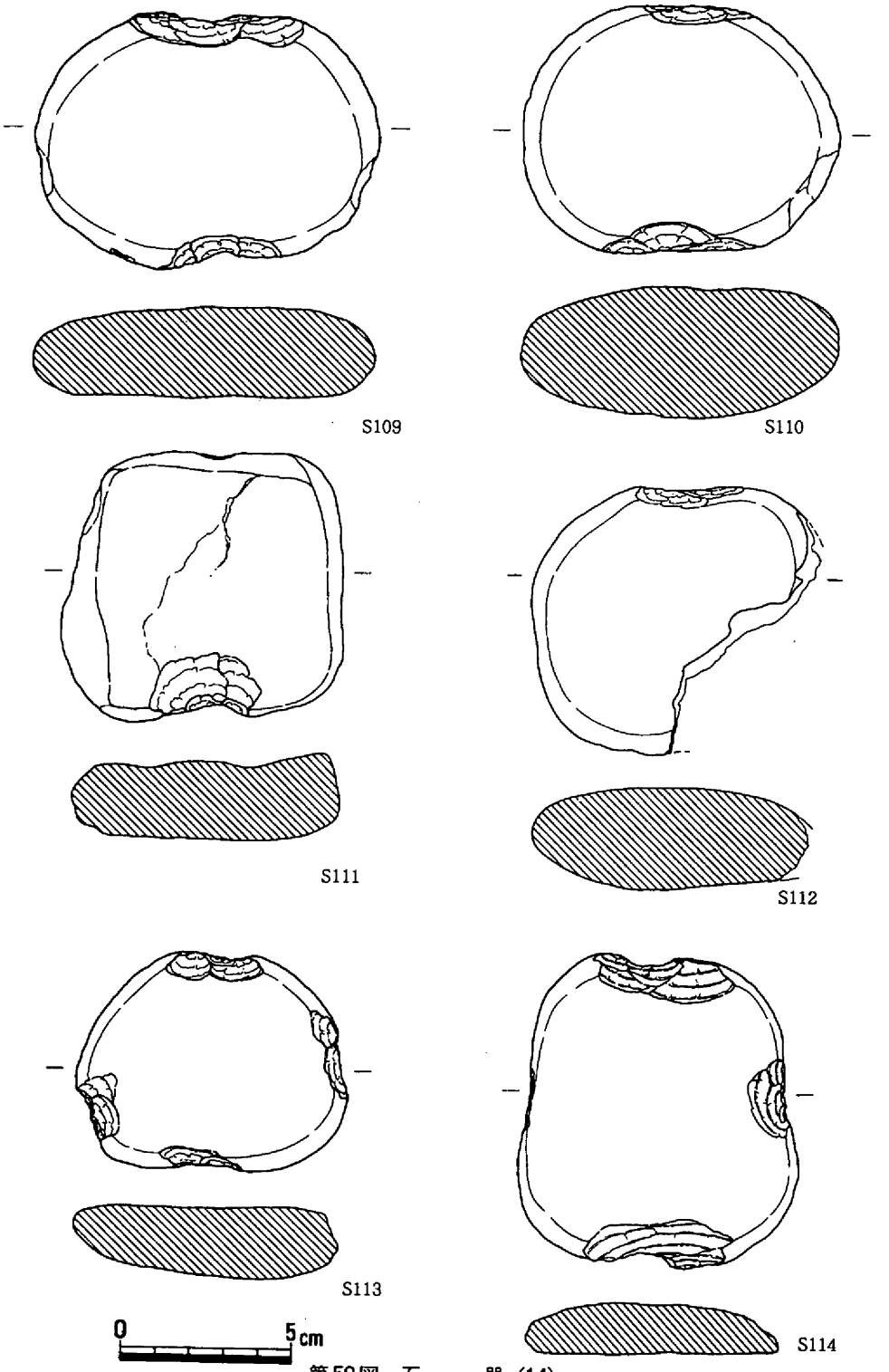
第56図　石　器 (11)



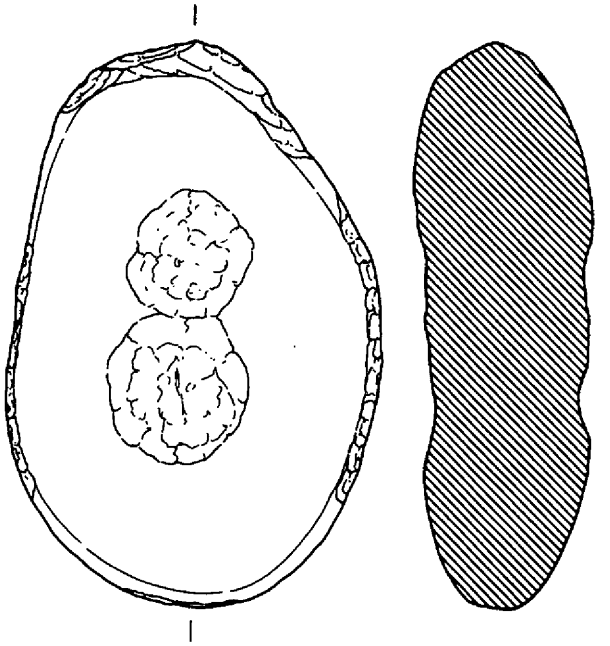
第57図　石　　器（12）



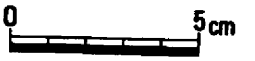
第58図　石　　器（13）

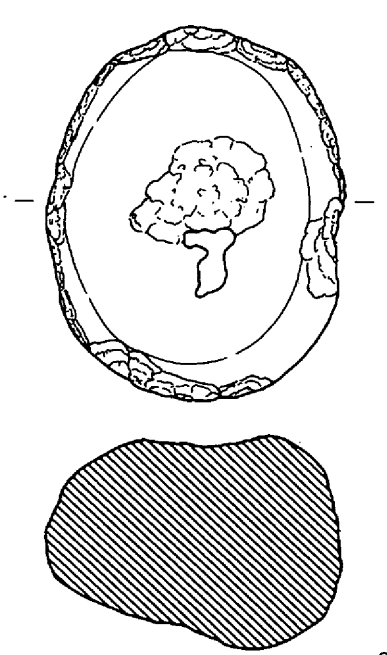


第59図　石　　器 (14)

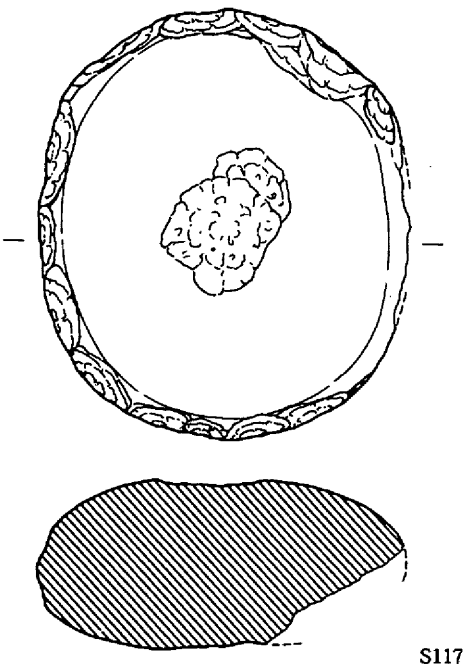


S115



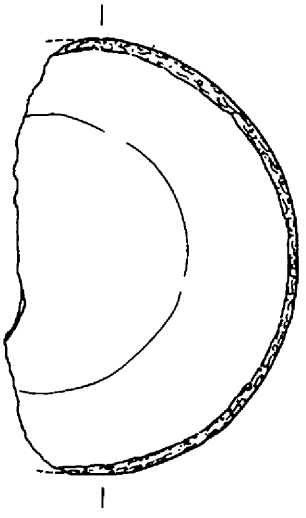


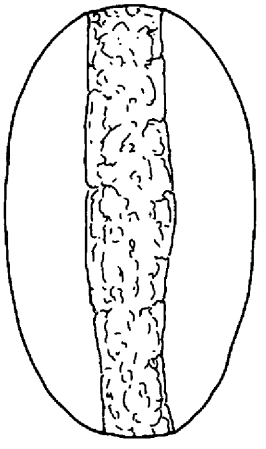
S116



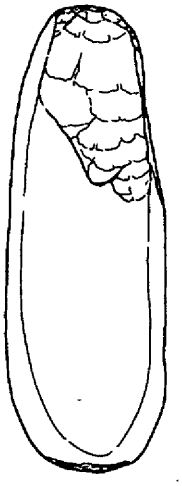
S117

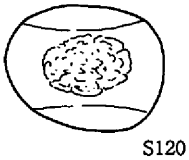
第60図　石　　器 (15)



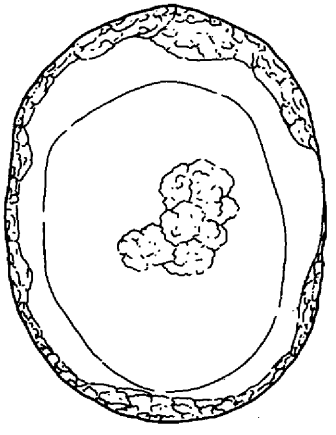


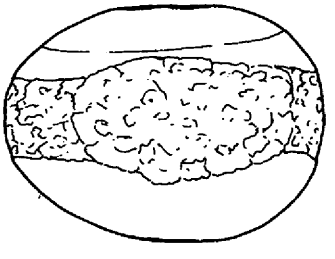
S118



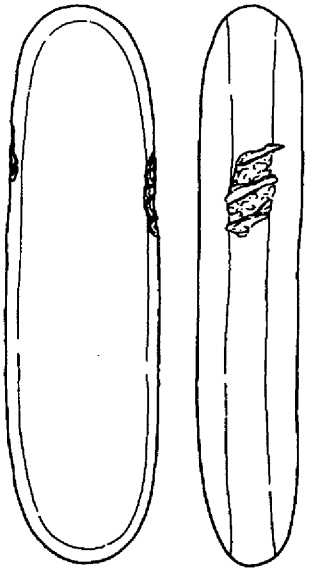


S120





S119

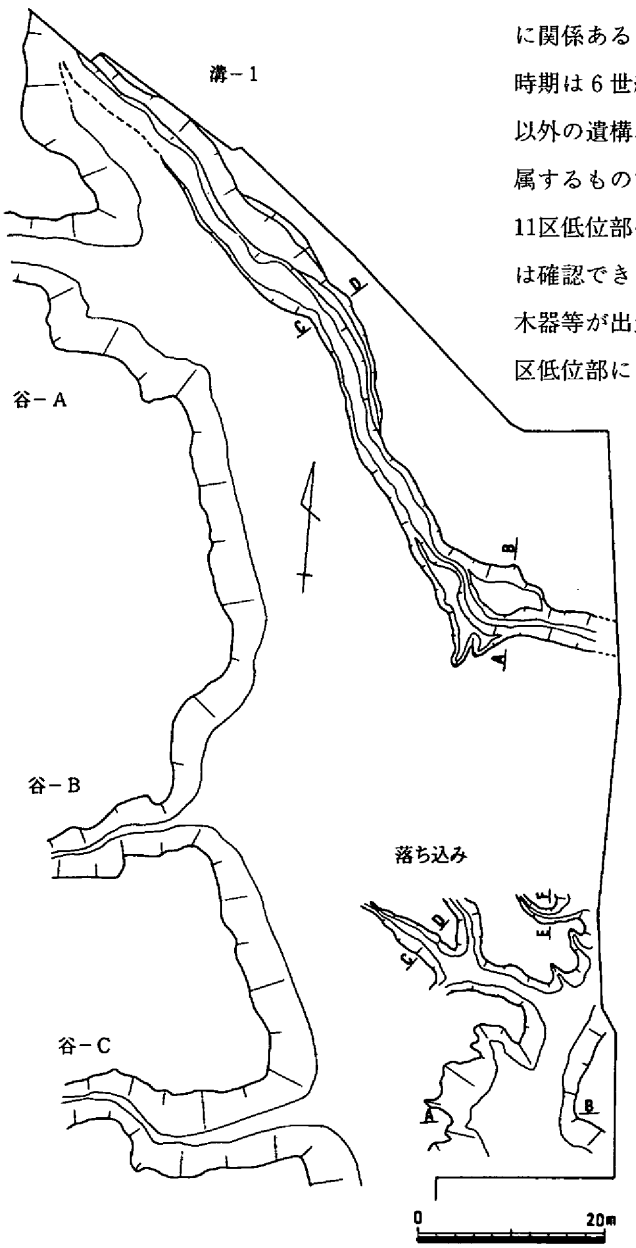


S121

第61図　石　　器（16）

第4節　古墳時代の遺構・遺物

今回の調査では、古墳時代の遺構は窯址、溝が若干数確認されたにすぎない。丘陵斜面および山裾部では、調査区北西端部に鉄生産と密接に関係あるとされる窯址が1基確認されたが、時期は6世紀末～7世紀前半である。この窯址以外の遺構、遺物は、いずれも5世紀前半期に属するものであった。明らかな遺構としては、11区低位部の溝－1だけで、丘陵斜面には遺構は確認できなかった。溝－1には、多量の土器、木器等が出土した。　また、溝－1の東側の12区低位部には落ち込み状の溜まりが存在し、木器および土器が出土している。



第62図　古墳時代遺構図（1／800）

遺物は、5世紀前半期のものが大半であった。遺物は、11、12区の低位部の堆積層および谷－A、B、Cからのものである。各谷の中流から下流の下層には、単一時期の包含層が良好な状態で残存していた。特に谷－Cでは、多量の手捏土器とともに初期須恵器（陶質土器）、石製模造品などが出土し、祭祀的様相の強い状況が認められた。

これらの5世紀前半期の遺物は膨大な量で、大量の土師器に混在して、朝鮮半島系軟質土器、陶質土器（初期須恵器）などが認められた。また、渡来人との接触を想起させる土師器などが出土している。今回の調査では

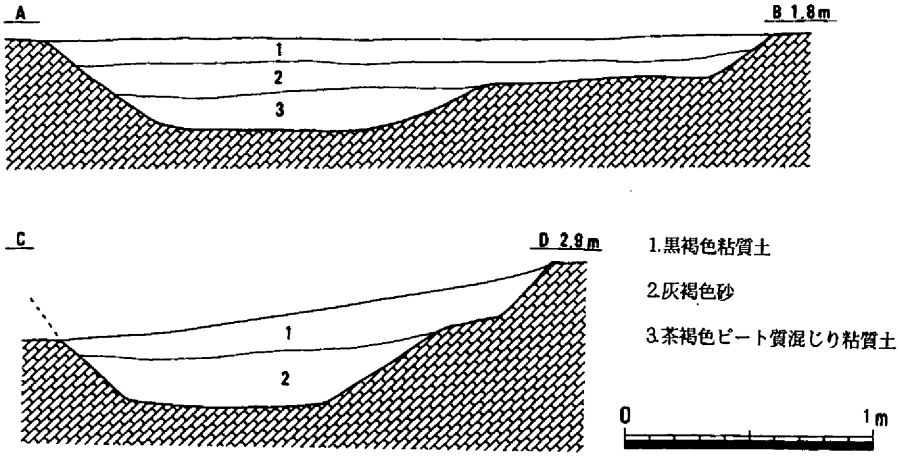
集落址などは確認できなかったが、遺構、遺物の出土状況からみて、用地外東側の微高地上に集落址が展開すると思われる。

（1）溝

溝－1（第62－87図）

調査区北東部の11区および12区の低位部に位置している。溝は、1区の山裾部から低位部の斜面裾部を南東方向へやや蛇行しながら流走し、さらに角度をかえて東方向に伸びる。溝は、幅の広いところで300cm前後を測るが、通常では約200cm前後の規模で、深さ50～70cmである。溝内は、基本的には上下2層で、上層に黒褐色粘質土、下層に灰褐色砂が堆積しており、調査区東側の下流部では下層の下に茶褐色ピート質混じりの粘質土が部分的に堆積していた。下層の灰褐色砂は、20cm前後の堆積で、洪水等により一気に埋まったものと考えられ、上層はその後の淀み状の堆積の状況を示している。特に流路の角度が南東方向～東方向にかわる地点では、溝の肩部が著しく浸食を受けており、第63図の二段掘りの状況の示す上部は、その際の浸食と考えられる。また、流路の角度変換地点では、木器を大量に含む材木、流木が大量に集積していた。

出土遺物は、下層の砂層にその大半が包含していた。遺物としては、大量の土師器をはじめとして、初期須恵器（陶質土器）、朝鮮半島系軟質土器、土錘、土製模造品、石製模造品さらに、木器が出土した。尚、上層、下層の出土遺物は、検証した結果時期的差違は認められなく、一括して以下に報告する。さらに、初期須恵器、朝鮮半島系軟質土器さらに特徴的な土師器については図示したが、土師器は図化した以外にも多量にある。



第63図　溝－1（1／30）

初期須恵器（陶質土器）：溝－１からは、初期須恵器は**435～445**の10個体が出土した。**435**の甕は、頸部から外反し、端部で屈曲気味に外側に開く口縁部をもち**689**、**692**と共通している。口縁端部は、上部がやや肥厚し、端部は「コ」の字状の断面を呈する。体部は球形を呈する。外面は口縁部下をタテ方向の平行タタキをおこない、体部中位には螺旋状に細くて浅い沈線を廻らす。底部には、径２～３㎝の円形状の単位に、タタキ工具の当具痕が明瞭に残っている。口縁部はヨコナデで仕上げており、内面はハケ（板）状工具による調整ののちナデで仕上げている。焼成は良好であるが、胎土中には砂粒を多く含み、当地域の特定地域に限定的認められるものである。**436**の甕は、外反する口縁部をもち、端部を上下に肥厚させている。体部は、やや胴長である。外面は、頸部下にタタキ痕（状）が認められる。このタタキ痕は、体部下半を右下りの斜方向に、体部上半をヨコ方向に施したのちナデで仕上げている。このタタキ手法は、従来土師器的手法のものとされているもので指差的技法である。口縁部の内外面はヨコナデを施しており、内面は部分的に**435**と同様にハケ（板）状工具で調整したのちオサエ、ナデを施す。**437**は、玉葱状の体部から口縁部を逆「ハ」の字に開き、やや内湾して斜上方に立ち上がる。口縁端部は、細くつまみ出すようにおさめている。焼き上がり、釉の発色は、**440**と類似する。**438**は直口壺の口縁部と考えられ、図の上部は直ぐに口縁端部でおさまると思われる。口縁部下には、７本の櫛描き波状文を施文し、その直下に突帯を廻らす。焼成は甘く、外面は暗茶灰色に帯び、表面に何らかを着色したかのようなものである。また、**913～915**は、同一個体と考えられる。胎土中には、**435**と同様に多くの砂粒を含むものである。**439**は朝鮮半島の洛東江周辺に認められる小型把手付高杯に酷似している。杯部は、丸味のある底部からゆるくＳ字状に立ち上がり、口縁端部は細くおさめている。体部には、凹線を伴う突線を上半と下半に廻らしている。把手は、幅約1.8㎝の板状のものが付く。透しは、５ヵ所で底部および脚部はヘラケズリで調整されている。この**439**と酷似するものとして、総社市小寺２号墳出土のものがある。器形、焼成など同一工人による製作と想起させるほど類似するものの、小寺古墳の須恵器は四方透しである。**440**の高杯は、杯部が底部から内湾して立ち上がり、口縁部近くでＳ字状に湾曲する口縁部で、口縁端部は、外側に肥厚する。脚部は、「ハ」の字に開き、脚裾部に１条の断面三角突線が廻る。脚端部は、上下に肥厚して口唇部が沈線状に凹む。

441－Ａ、**Ｂ**は同一個体の甕で、**436**と同様に器壁が薄い。**441－Ａ**は、肩部にあたり内外面ヨコナデ、**441－Ｂ**の体部は、外面はタテ方向の平行タタキ、内面は無文（木目）当具痕が残る。内外面ともタタキののちヨコナデで仕上げている。**441－Ａ**、**Ｂ**の外面は、表面に何か塗ったように暗茶色に発色している。内面には、指先の指紋が２本分残っていたが、その指紋は器表と同様の暗茶色で、内面の暗灰色とは違いが認められた。このことは、器表に何らかの着色したものが指先に付き、それが内面にも付着したとも考えられる。このように器表面にあ

たかも着色しているかのような状態を示すものとしては、438、913～915がある。さらに、岡山市川入遺跡、総社市小寺２号墳、総社市法蓮古墳群にもその例をみいだせる。これらの土器は、いずれも造山古墳、作山古墳を中心に足守川と高梁川の下流域の備中南部地域に限定的に認められる胎土中に多くの砂粒を含み、焼成が甘いものの中に特定される。

442は、大型の器台で脚部は欠損している。杯部は、口径43.0cm、深さ15.1cmを測る。底部から内湾して立ち上がり、口縁部で大きく外反する。口縁端部は、上下に肥厚し、口唇部は凹む。外面体部には、凸帯２条と凸帯の上下に３条の凹線に区画された文様帯に、櫛描きの波状文（10本前後）を２条が１単位で３帯に施文している。体部下半から底部は、やや細めの平行タタキ（凹凸が５単位）が残り、脚部接合部直上では櫛状工具による刺突列点文を羽状に連続させ、その下に櫛描き波状文を１条廻らしている。脚部との接合部は、ヘラ状工具で同心円状に狭い単位で切り込みを幾重にも入れたのち、さらに放射状に切り込んで接着しやすいようにしている。焼成、胎土とも良好で、精良で堅緻である。また、この器台には、破断面および破断面から内外面とも約２cm幅位に有機質が付着していた。この有機物は、「付載」での報告のように漆であることが結論付けられた。このことは、器台が一度破損した段階で、杯部破断面に漆を塗り、さらに破断面の内外面を繊維質のもの（幅４cm前後）を当てて漆を浸り込ませて補強して鉢としてなお使用したものと考えられる。

443は、胎土、焼成とも442と類似している。外面は、肩部下を格子タタキで、内面は無文（木目痕）当具痕が残り、タテ方向にハケ（板）状工具で調整を行なっている。444、445は同一個体で、外面をタテ方向の平行タタキ、内面には無文（木目痕）当具痕が残り、ナデで調整している。この個体は、溝－１以外にも破片が散在していた。また、諸条件からみてこの土器の口縁部は、包含層出土の910の可能性が強い。

土師器：溝－１での出土遺物の大半は土師器で、手捏土器、壺、甕、高杯、さらに鉢、甑など各器種が網羅されていた。これらの中には、渡来人の手法によるもの、渡来人の手法の影響を受けたものなど多様なものであった。

ミニチュア土器は、小型の壺、甕などとの判別が難しく、ここでは異論もあろうが、447～448をミニチュア土器として報告する。ミニチュア土器は、図示した以外にも数十個体が出土している。447～448は、446～448、451、453、454などの特徴的な器形のものが相当数認められるが、その多くは、449、458、479のような口縁部をオサエで整形して、やや外反させる口縁部をもつ器形が多くを占めた。また、465～467の鉢形のものもある。さらに、やや器形が大きくなると473～475、482、483のような屈曲気味に外反する口縁部をもつものが多い。これらのミニチュア土器の多くは、オサエ、ナデ、ユビナデアゲで調整、仕上げられている。中には、ハケメ、ヘラケズリで調整しているものも認められる。また、447、486の台付のもの、464、

468などの平底のものも含まれる。489～551は、504、507を除くものは小型の壺である。この壺は、屈曲および外反する口縁部をもつ。口縁部は、やや内湾気味に立ち上がるもの、直線的に斜上方に伸びるものがある。この中には、497、501のように複合口縁部的なものも含んでいる。これらの小型壺の外面は、おおむねハケメ、オサエ、ナデを主体とする調整が多い。503の体部上半には、右上がりの平行タタキが施されている。490、501は、底部を手持ちのヘラケズリが認められる。内面は、ユビナデアゲ、ヘラケズリ、さらにユビナデアゲとヘラケズリによるものが認められた。口縁部内面は、ハケメのちヨコナデが多い。490、496は、体部やや上半に、焼成前の円孔が1ヵ所存在する。またこれらの土器には、黒斑が付くものが多いことを指摘しておく。505、506は、器種の断別がしにくいもので、大きく外反する口縁部をもつ。506は、今回の調査で相当数検出されているカゴメ痕が外面体部下半から底部に付いている。体部下半には、不整形の穿孔が体部下半に焼成後にあけられている。

512～534は、439～511の小型壺よりやや用量の多い壺で、513、515、516、520、531は、器形的には甕に類するものであろうか。これらの壺は、「く」の状に屈曲する口縁部をもつが、さほど屈曲角度は深くなく、直立気味のものも含んでいる。口縁部は、内湾して立ち上がるもの、外反気味に湾曲するもの、直線的に伸びる形態などがある。外面は、ハケメ、オサエ、ナデによるものが多い。内面は、ユビナデアケ、ヘラケズリでおさめるものの他に、517、519、529、534のように、体部上半をユビナデアゲ、下半ヘラケズリで調整する土器が多く認められる。これは、明らかにユビナデアゲののち、下半部をヘラケズリとしているものである。このような3例の内面調整方法が、ヘラケズリ→ユビナデアゲ＋下半ヘラケズリ→ユビナデアゲの順で手法の時間的推移として理解すべきであろうか。

535は、口縁部が内傾して立ち上がり、内面は、ハケ状工具、オサエ、ナデで調整している。この土器は、他の器形とは異なるもので、短頸壺形を成すものである。536～538は、底部がやや丸味をおびるが平底的で、いわゆる朝鮮半島系土器の平底鉢の影響を受けた土器（模倣）で在地工人による製作であろう。これらの土器は、内外面にハケ状工具を使用しており、537、538は、長胴気味である。538の底部には、前述した506と同様にカゴメ痕が付いている。539、540の底部にも、木葉痕が残り、539、541にはカゴメ痕が付いている。このような状況は、カゴの底部に木葉を敷き粘土紐を巻き上げ、丸底の体部下半を作った成形段階が存在した可能性が考えられる。

542～548の壺は、542～545、547、548が複合口縁をもつ。542、543は、頸部から外傾して立ち、さらに内湾して立ち上がる口縁部である。543の内面体部上半には粘土紐痕が明瞭に残る。542、543ともていねいに仕上げられている。544、545は、大型の壺で、545は屈曲気味に外反しさらに上方に内湾して立ち上がる口縁部で、口縁端部は外側が肥厚する。545の体部下半に

は、立ち上がりの角度の変換点が認められ、成形上のものと考えられる。547は、438に近い焼き上がりで、著しく砂粒を含む。548は、頸部からゆるやかに外反して、さらに斜上方に立ち上がる口縁部で、やや異質な形態を示す。546の壺は、口縁部が大きく外反し、口縁部中位には凸線状のものが廻る。外面体部下半には、545と同様に器面がやや凹部を呈しており、底部にはカゴメ痕が一部残っている。

甕（550～590）は、大きく複合口縁をもつものと屈曲気味に外反、外傾するものに大別できる。明瞭な複合口縁をもつものは全体的には少なかった。しかし、外反、外傾する口縁部の中には、微妙に変化するものが多く多様である。また、壺との判断しがたいものも一部認められる。複合口縁をもつものは、550～556、558などで、550は壺の形態であろうか。552は、わずかに口縁内面に段をもち複合口縁の呈を成している。口縁端部下には、凹線状のものが1条廻り、端部は外方向に肥厚させている。553は、866と同類の複合口縁で、端部外側を斜上方に肥厚する。554は、焼成は良好で須恵質に近い。口縁部は特徴的で、内外面ともハケメで調整している。内面をハケメで調整している土器は、554、557、558の3点であった。また、554、557、558、の外面体部下半にも546と同様の凹部が認められた。559は頸部から屈曲し、さらに角度を変えて外傾する口縁部で、端部内面は凹状に窪み、543、689、692、733の初期須恵器、軟質土器の口縁部に類似する。また、外面の口縁部から肩部にかけてはタテ方向の平行タタキが認められる。

560～590は、口縁部が外反するもの、「く」の字に屈曲するもので、571、572上方に立ち上がる口縁部をもつもので壺との判別がつきにくい器形もある。562、563などは、口縁部外面の中位には突線状の稜線をもつものもある。口縁端部は、各種の変化を示すものが多く認められる。これらの甕の体部は、球形に近いものとやや胴長の両者が存在する。外面は、ほとんどのものがタテ方向のハケメで調整しており、567はヨコ方向のハケメである。ハケメには、細かいものと荒いものがあり、全体的には細かいハケメが多い。また、586のように、全体に荒いハケメを施したのち、体部下半を細かいハケメを重ねているものもある。口縁部内面は、一様にハケメののちヨコナデを施すものが大半を占める。内面は、ヘラケズリを基本としている。ヘラケズリは、頸部までおこなうものと564、568、569、571、581など肩部までヘラケズリをおこないその上部はユビナデアゲ、オサエなどを残す両者がある。さらに、粘土紐痕を明瞭に残すものもある（555、564、574、588）。580の体部下半には、554と同様に器表面が凹み、その凹部には横約1㎝、縦約2～3㎜の押圧痕が連続して廻っている。これは、前述したカゴメ痕と同一のカゴ状の容器の口部の縁の押圧痕の可能性が強いと考えられる。このように体部下半が凹状に認められるものは、546、554、557、558、572、573、579、580、587などが明瞭に認められ、底部から、4～5㎝の上部に集中している。また、凹状に稜線として入らないもの

でも、底部より約5㎝前後上部にその変化を認めることができる。このことは、前述したように、高さ5㎝前後のカゴに、底部に木葉を敷いて粘土紐を丸底状に巻き上げたものか、もしくは、粘土紐を巻き上げ底部から体部下半を作った段階で、カゴに入れ丸底の維持と、カゴを固定してその安定を保ったのちさらに上部を製作したと考えられるが、現状では後者の可能性が強いと考えている。このような土器製作での補助的なカゴの使用は、他に報告を聞かないが、今回の相当量の出土例からは可能性が高いものと思われ、地域的な事象であるか否かは今後の課題としたい。

鉢（591～599）は、口縁部が外反する**591～595**と内湾しながら立ち上がる口縁部をもつ**596～599**がある。**592、595**は平底で、内面をユビでナデアゲている。**591、592、594**は、口縁部を短く外反させている。**592、599**の外面底部には木葉痕が残っている。

600も底部は平底で、木葉痕が付き、内面の調整からみて鉢の可能性のが強い。底部外面には、螺旋状の粘土紐痕が残っており、幅約2㎝の粘土紐を右廻りに巻き上げた状況が明瞭である。この時期の土器製作については、当地域での伝統的輪積み成形の意見があり、さらに胴上半部の紐作り成形である布留型の口縁部整形の導入の報告もある。しかしながら、上記の**600**や**557**にみる体部下半の粘土紐使用の例を上げることができ、さらには前述したカゴメ痕の状況などからみて、底部より粘土紐巻き上げ成形が行われたと考えられる。さらに、内面のユビによるナデアゲは、小単位で残るで粘土紐接合の活着的手法であると考えられ、当地域でのユビナデアゲ手法は、粘土紐成形との深い関わりが指摘できる。

601は、朝鮮半島系軟質土器の平底鉢である。平底から胴張りに立ち上がり、口縁部を外側に屈曲させている。口縁端部は丸くおさめ、端部内面はヨコナデにより凹状になっている。内面は、オサエ、ナデで仕上げており、外面は頸部下を格子タタキで底部にもタタキを施す。この底部までのタタキは全国的にも例をみない。さらに底部には、一辺約3㎝のロクロ台痕跡がわずかに認められる。

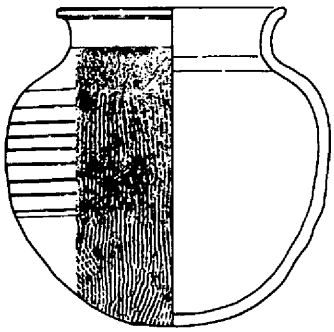
高杯は**602～647**があり、その中で**602～611**は、初期須恵器（陶質土器）の技法を有する土器である。**602～608**は、須恵器の技法で製作され、土師器に焼成されたものである。**602**は、内湾する体部からゆるやかに外反し、口縁端部でさらに内湾する口縁部をもつ。口縁端部は、丸くおさめ、杯部外面には2条の突線が廻る。脚部との接合面は、ヘラ先により螺旋状に3重に切り込みを入れている。**603、604**は、杯部はゆるやかに外反する口縁部で、外面には2条の突線が廻る。この形態は、総社市樋本遺跡での出土例がある。脚柱部は、やや絞りこみ「ハ」の字状に脚柱部が開く。裾部には、突線が1条廻り、**668**も同様である。**605、606**は、胎土、調整などから同一固体と考えられる。**606**の脚裾部は、端部がやや肥厚しており、口唇部は凹部状になる。裾部には、**604、607、608**のように突線にはならなく、段状を呈する。**607**は、器壁

の厚い脚柱部で、裾部に突線が1条廻る。杯部との接合面には、ヘラ先により螺旋状に円形に切り込み、さらに放射に溝を入れている。これらの602～608は、いずれも砂粒を多く含んでおり、609～611は、602～608とは違い、土師器の形態を有しているものの、一部に須恵器の手法を使用しているものである。609～611の脚部との接合面には、ヘラにより螺旋状に円を描き、さらに放射状に切り込みを入れており、須恵器の接合手法を使用している。しかし、須恵器にみる杯部と脚部との接合方法は基本的には輪状に接合するものであり、切り込みも442、602にみるように、底部中央部には切り込みは認められないのが常である。609～611の接合のための切り込みは、面として接合している。610の脚柱部にみるように、接合手法だけを須恵器手法を使用していることが理解できる。

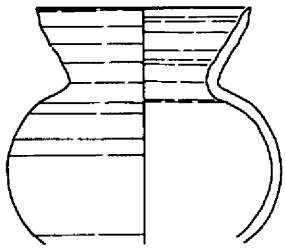
612～647の高杯は、612～619、625の杯部が椀（鉢）形のもの、621～624、626～644の杯部の底部と口縁部の境に稜をもつものに大別できる。前者の高杯には、杯部が深く鉢状を呈し、口縁端部で短く外反する（612～615、617）と618、619のように椀形を呈し、ゆるく内湾するものがある。612～615、617は、脚部はやや短く、孔の付くものは認められなかった。618は、ゆるやかに内湾する杯部で、内面には暗文状のヘラミガキを施している。この高杯は、定型化する須恵器に伴って顕著に認められる高杯の古相のもので、杯部の内湾度はまだ高くない。脚部には、618、619とも脚柱部と裾部の境に3ヵ所に円孔を穿っている。620～624、626～644の高杯は、杯部の底部と口縁部の境には突線、凹線状が存在する。この突線、凹線状は、明瞭に残しているものと、わずかに凹線状を残すものなど多様な形態が認められた。杯部は、内湾気味に立ち上がるものが多く、直線的に斜上方に伸びるものもある。口縁端部は、その大半が短く外反する。620は、杯部外面にタテ方向に暗文状にヘラミガキを施し、622、623の外面には、縦長の楕円形の浅い押圧痕が連続して認められた。杯部の内外面は、ハケメを施しているものも多くあった。脚部は、脚柱部から屈曲気味に裾部が開くものと脚柱部から「ハ」の字に開くものがあるが、前者の方が圧倒的にその数は多かった。

高杯は、602～611のものを除くと、350個余りの数があった。その中で、612～619などの椀（鉢）形の杯部をもつものは、10個体余りで全体の3.4％で、620～624などの杯部に稜をもつものは340個体余りを数えることができ全体の96.6％の数値を得た。また、脚部の円孔透しは、孔の有無の判断ができるものが250個体あり、その内孔を有するものが34個体で13.6％で、孔のないものは216個体で86.4％であった。

645、646は、脚柱部内面に螺旋状の粘土紐が残っている。これは、脚部を接合部から600と同様に右回りに粘土紐を巻き上げて製作している状況を示すものである。粘土紐は、約2㎝の幅のもので内傾接合で巻き上げている。また、646の脚柱部中位には1カ所の円孔が穿たれていた。

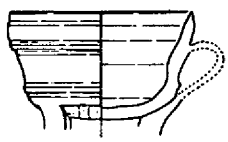


435

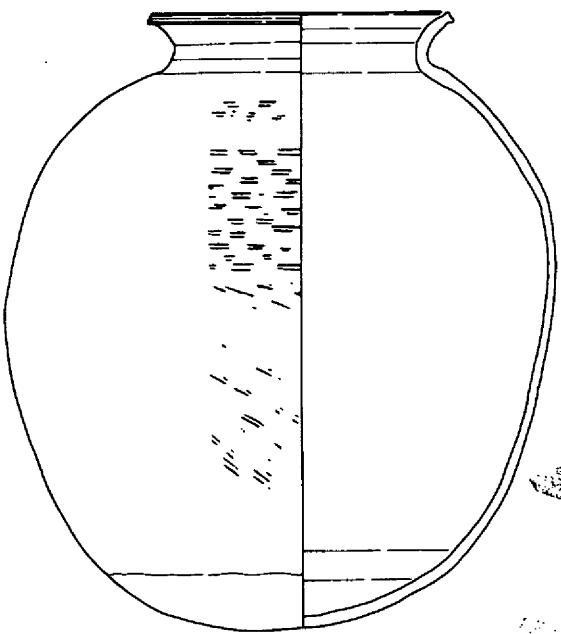


437

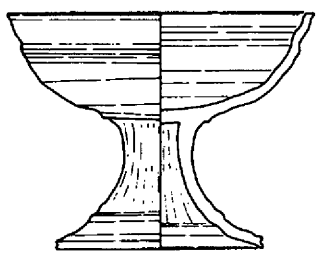
438



439

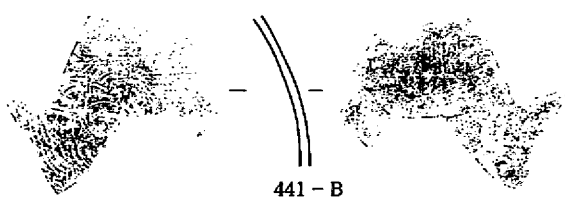


436



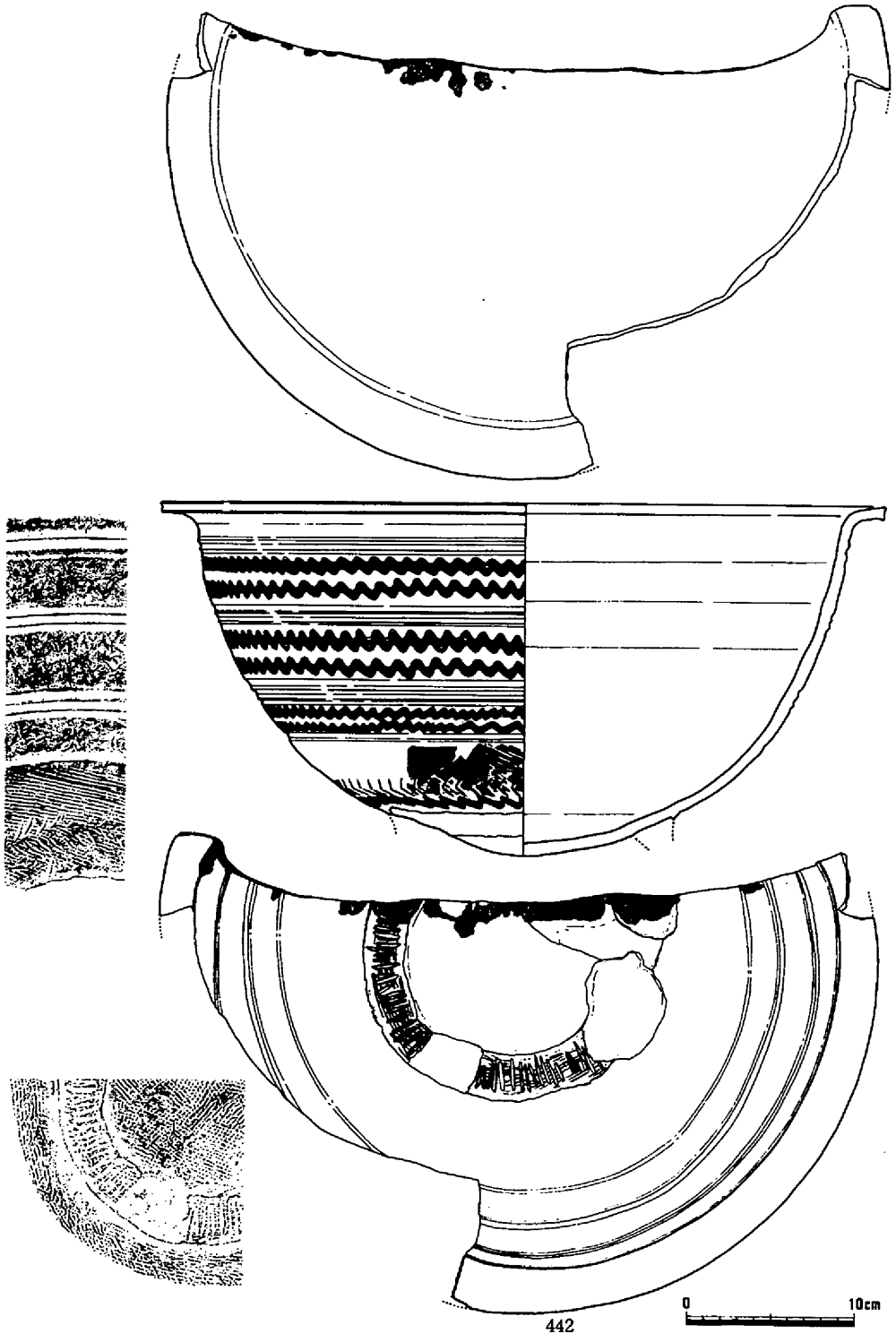
440

441－A



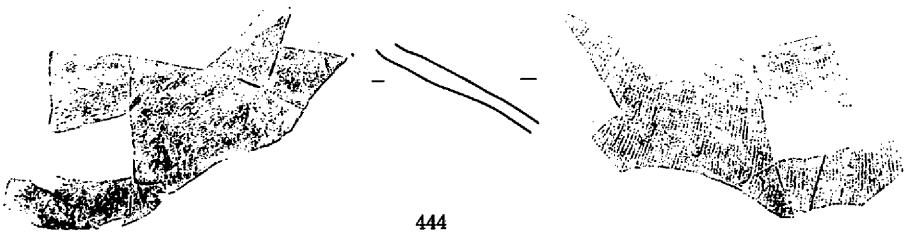
441－B

第64図　溝－1 出土遺物（1）

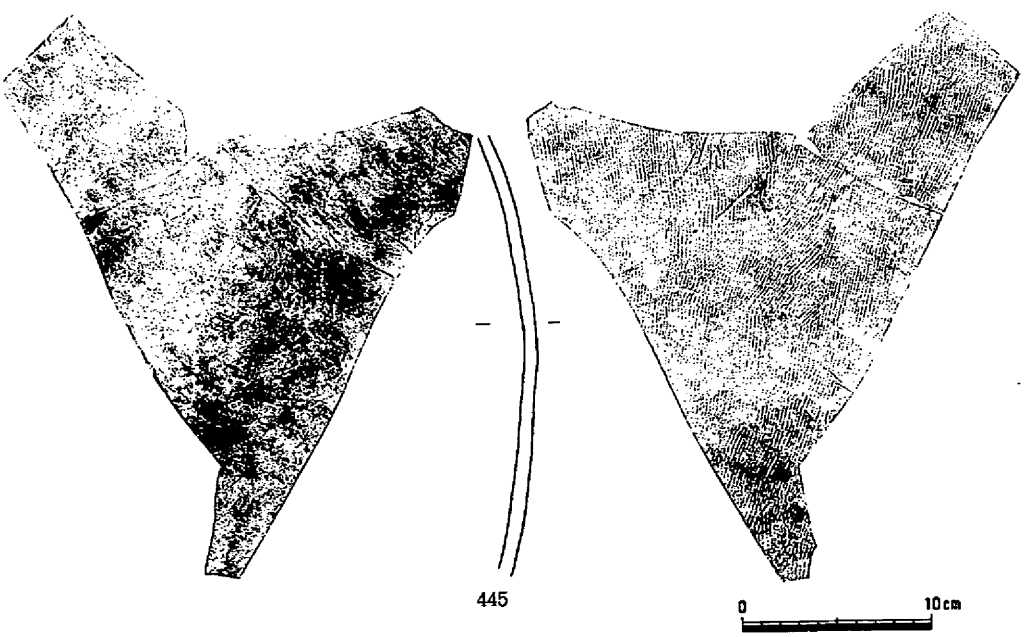


第65図　溝－1 出土遺物 (2)

443

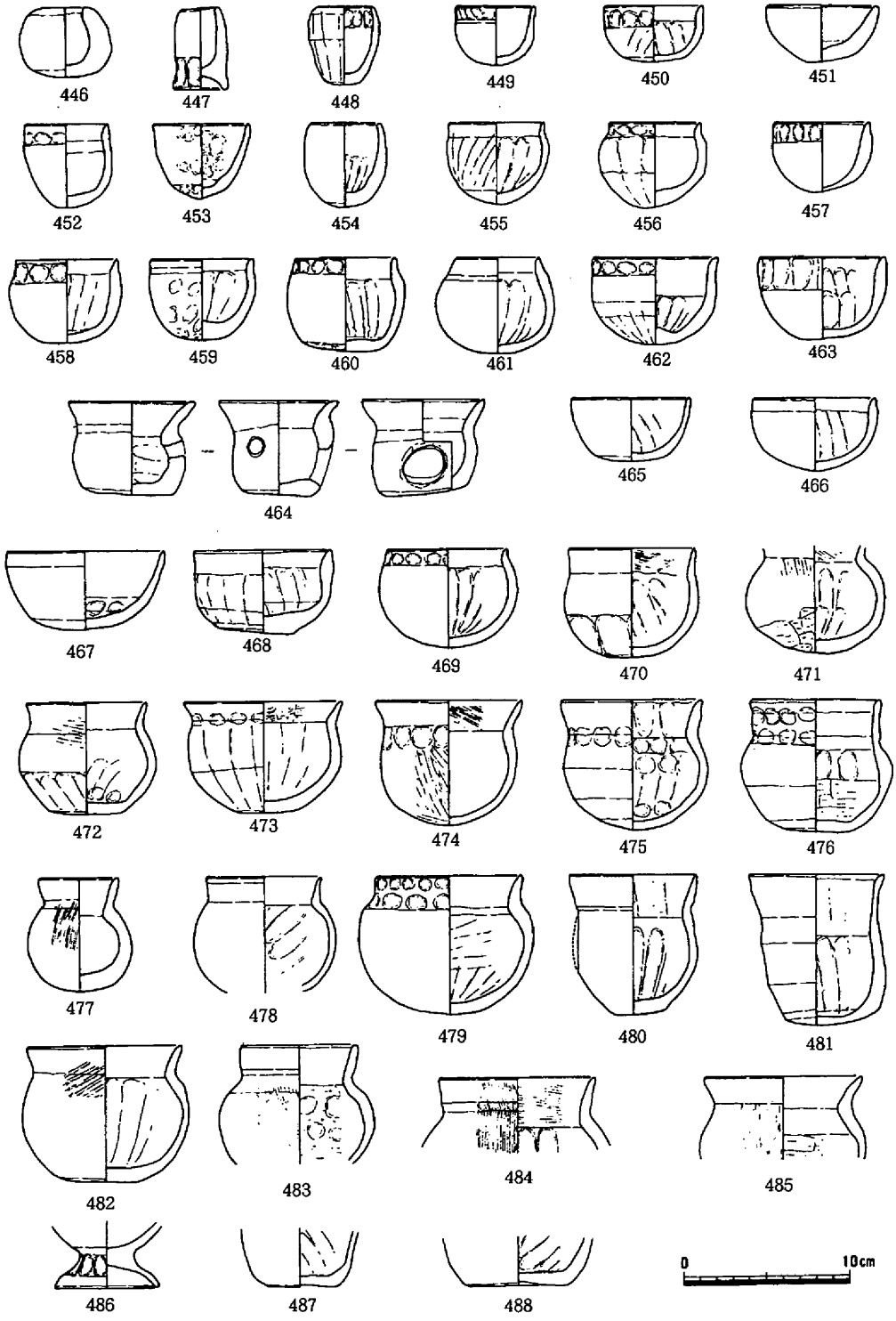


444

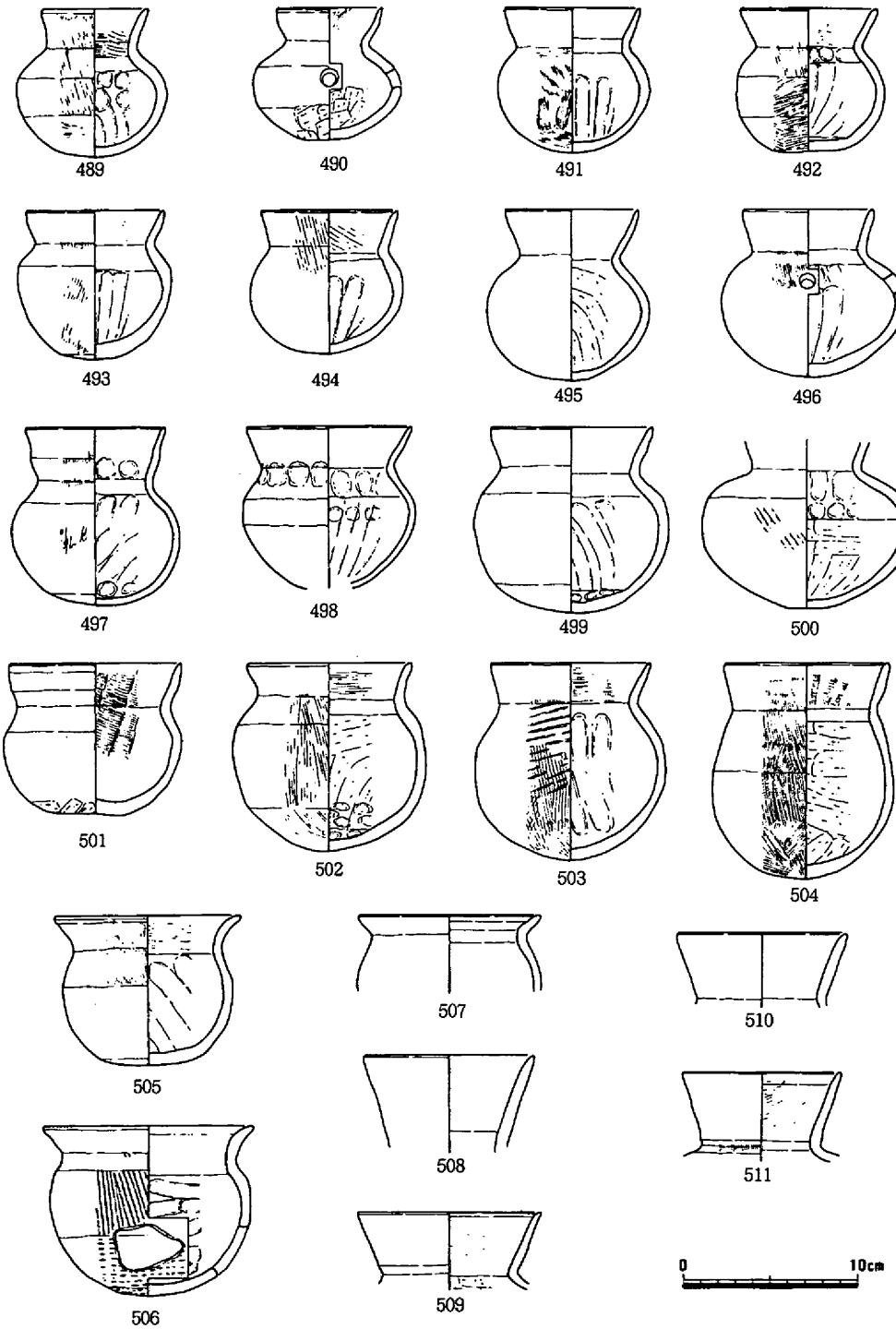


445

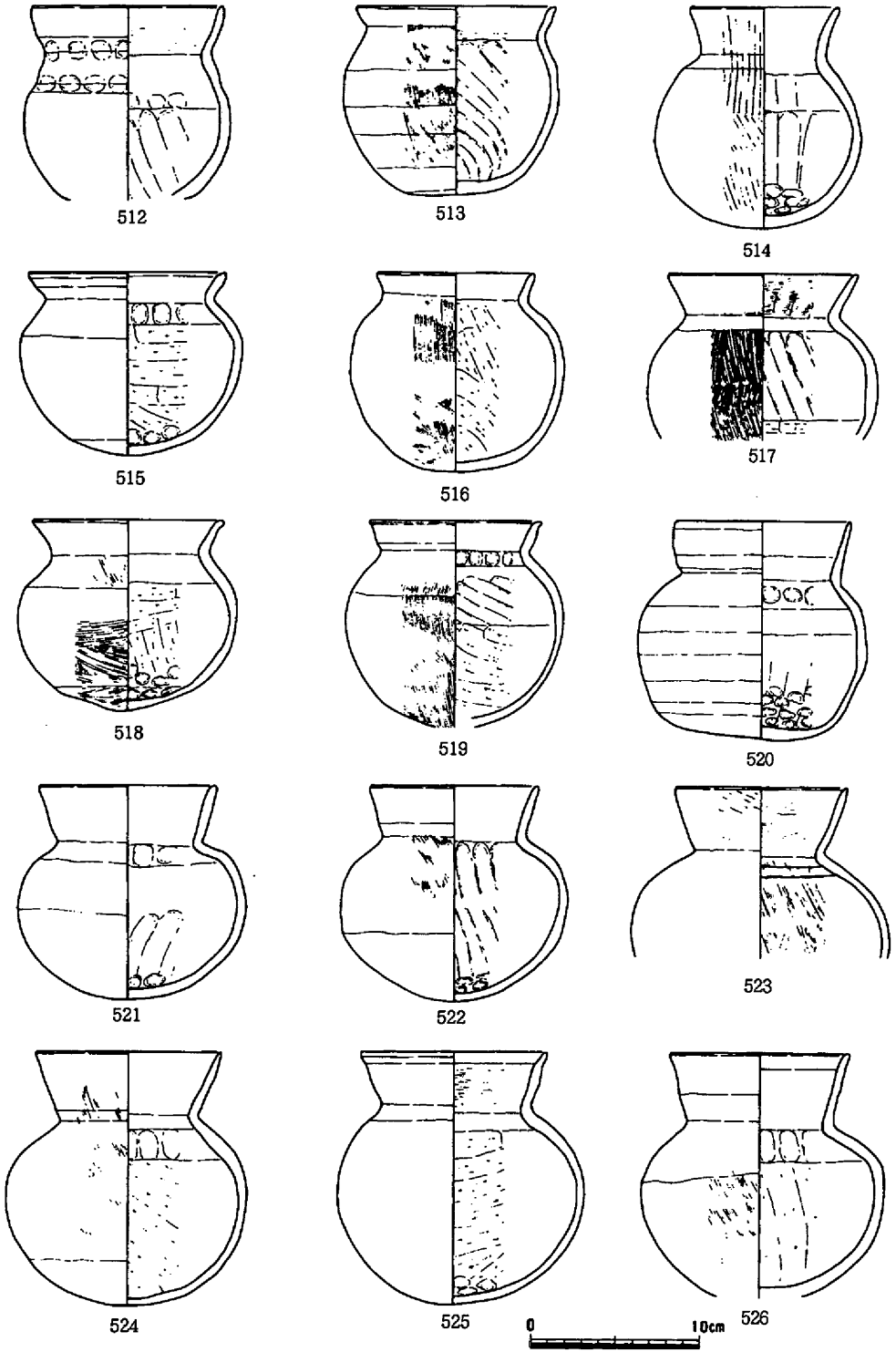
第66図　溝－1 出土遺物 (3)



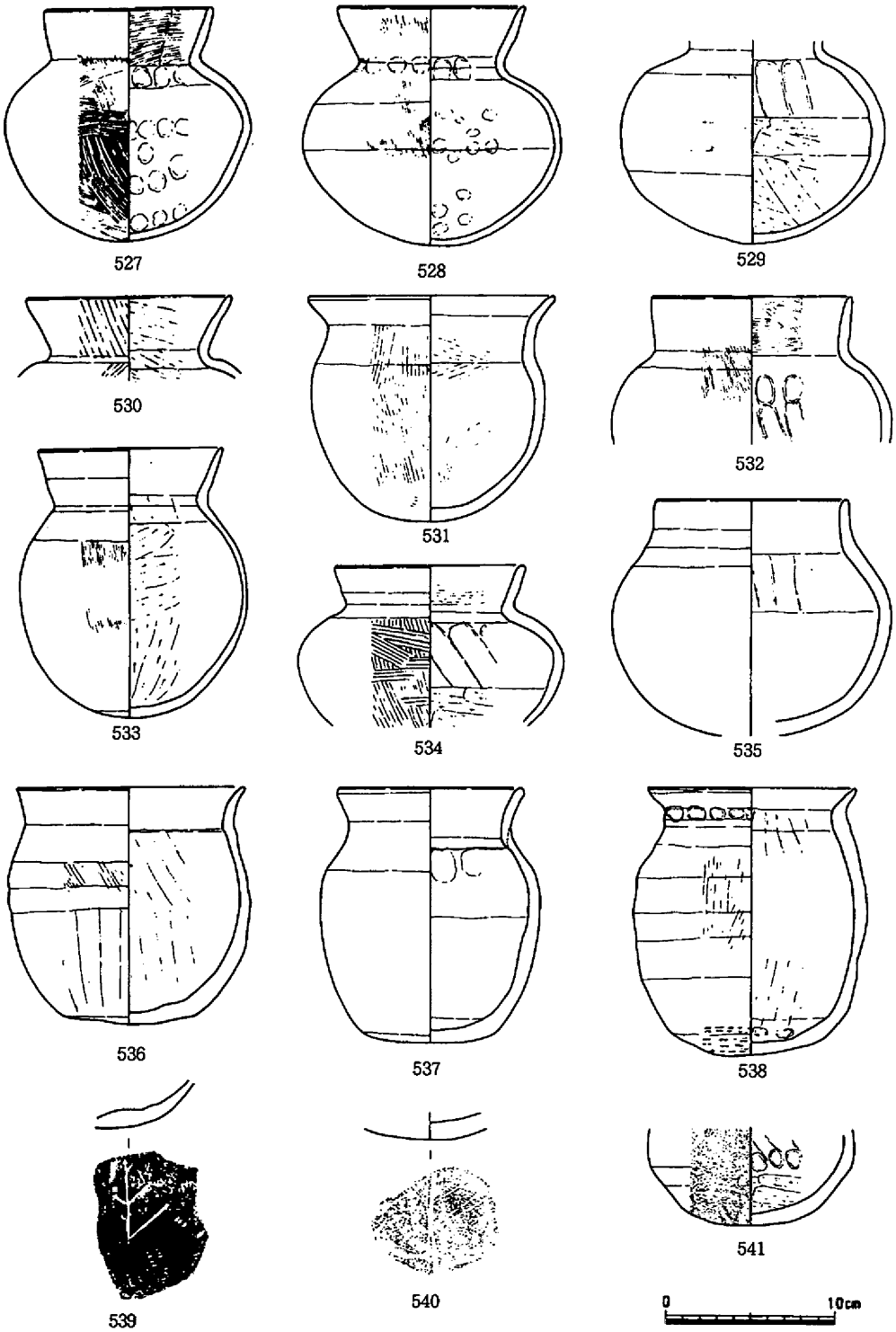
第67図　溝－1 出土遺物 (4)



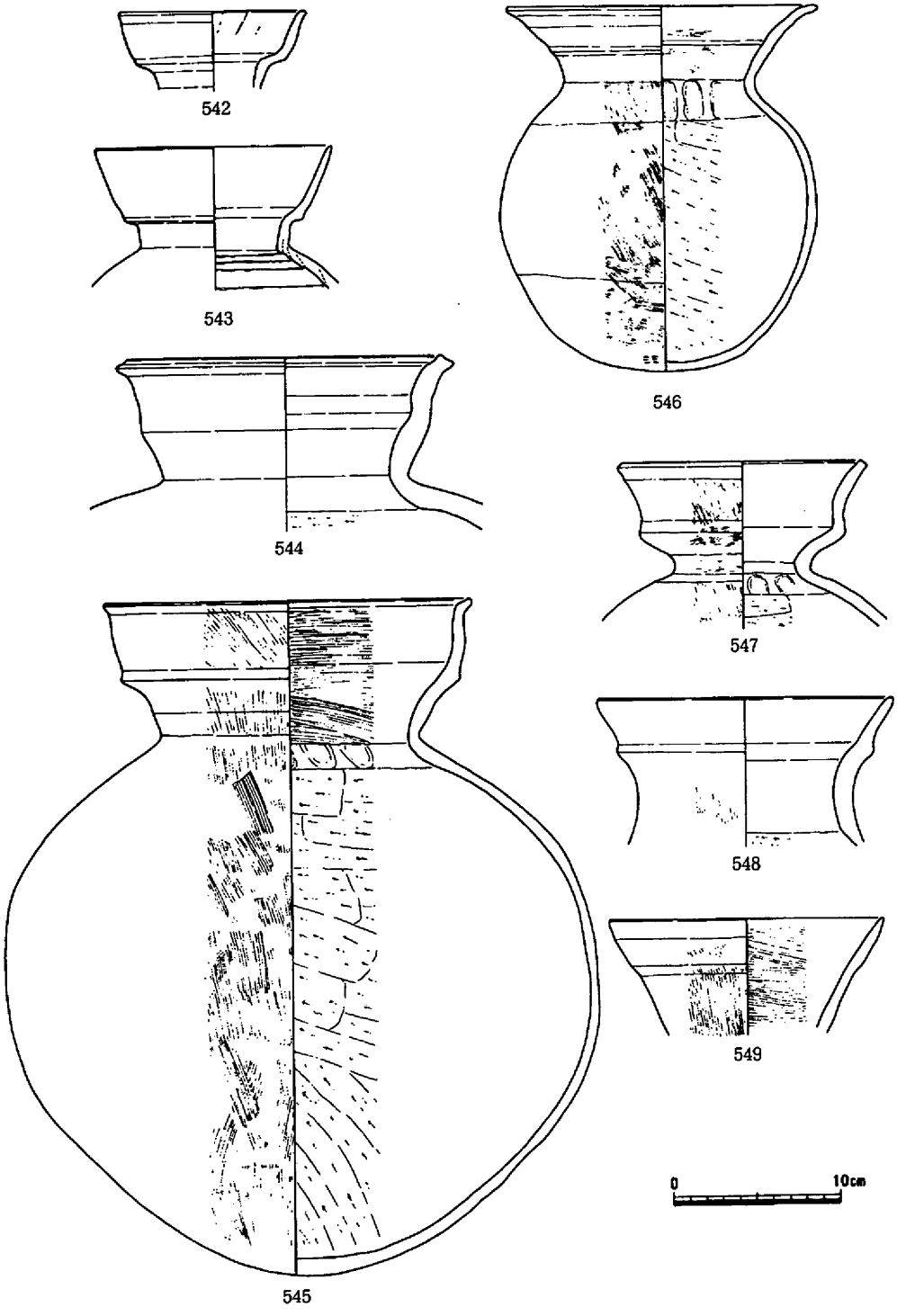
第68図　溝－1 出土遺物 (5)



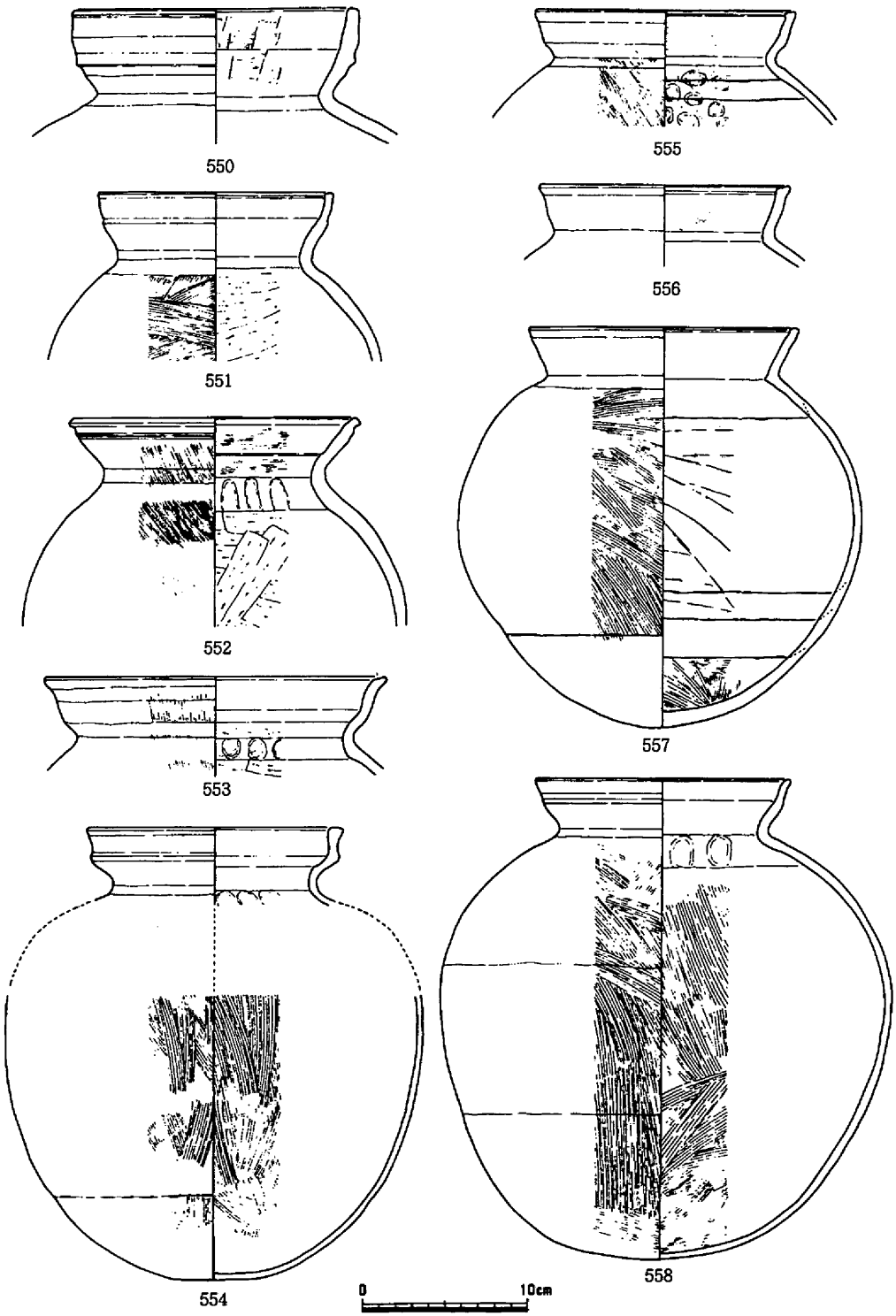
第69図　溝－1 出土遺物 (6)



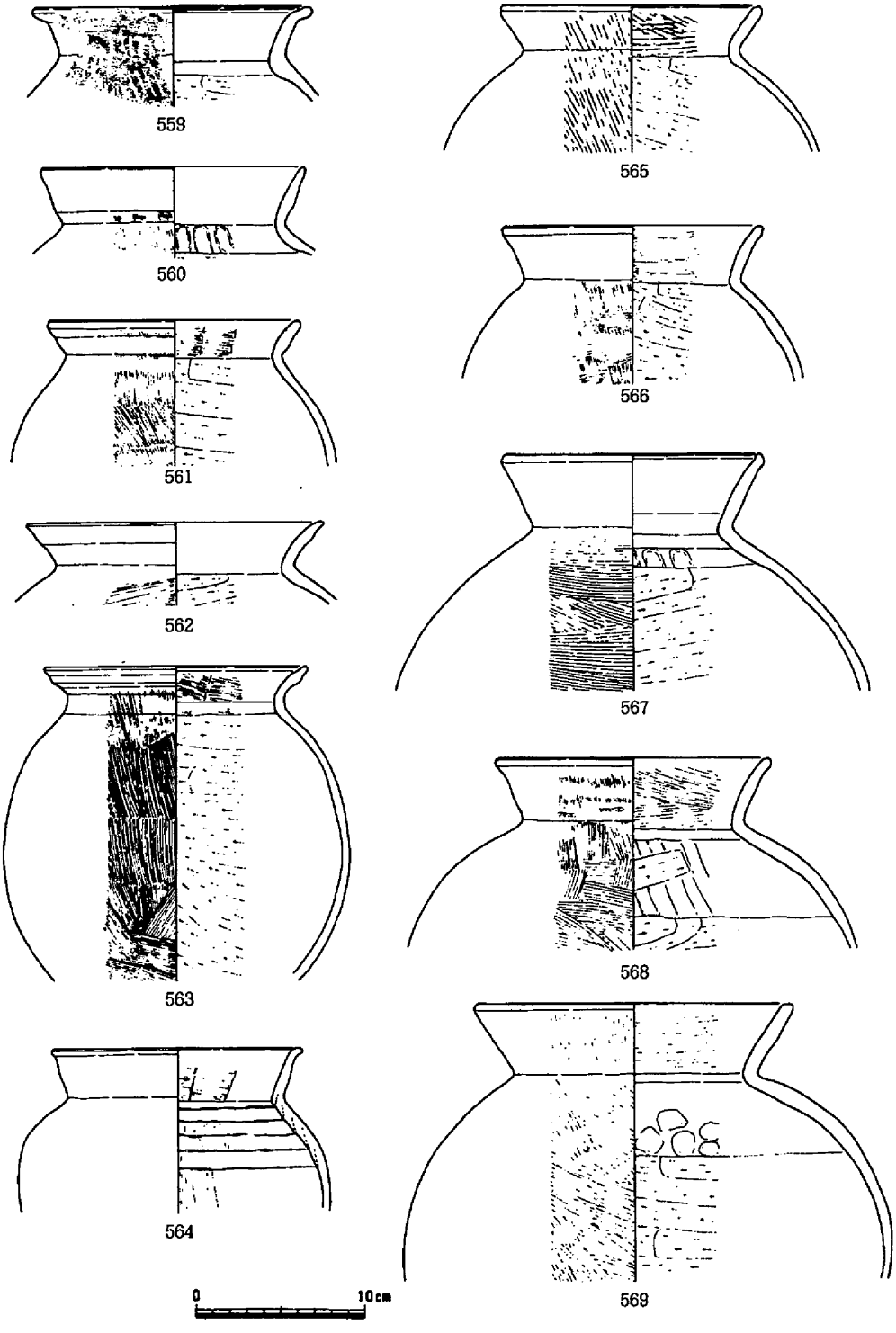
第70図　溝－1 出土遺物（7）



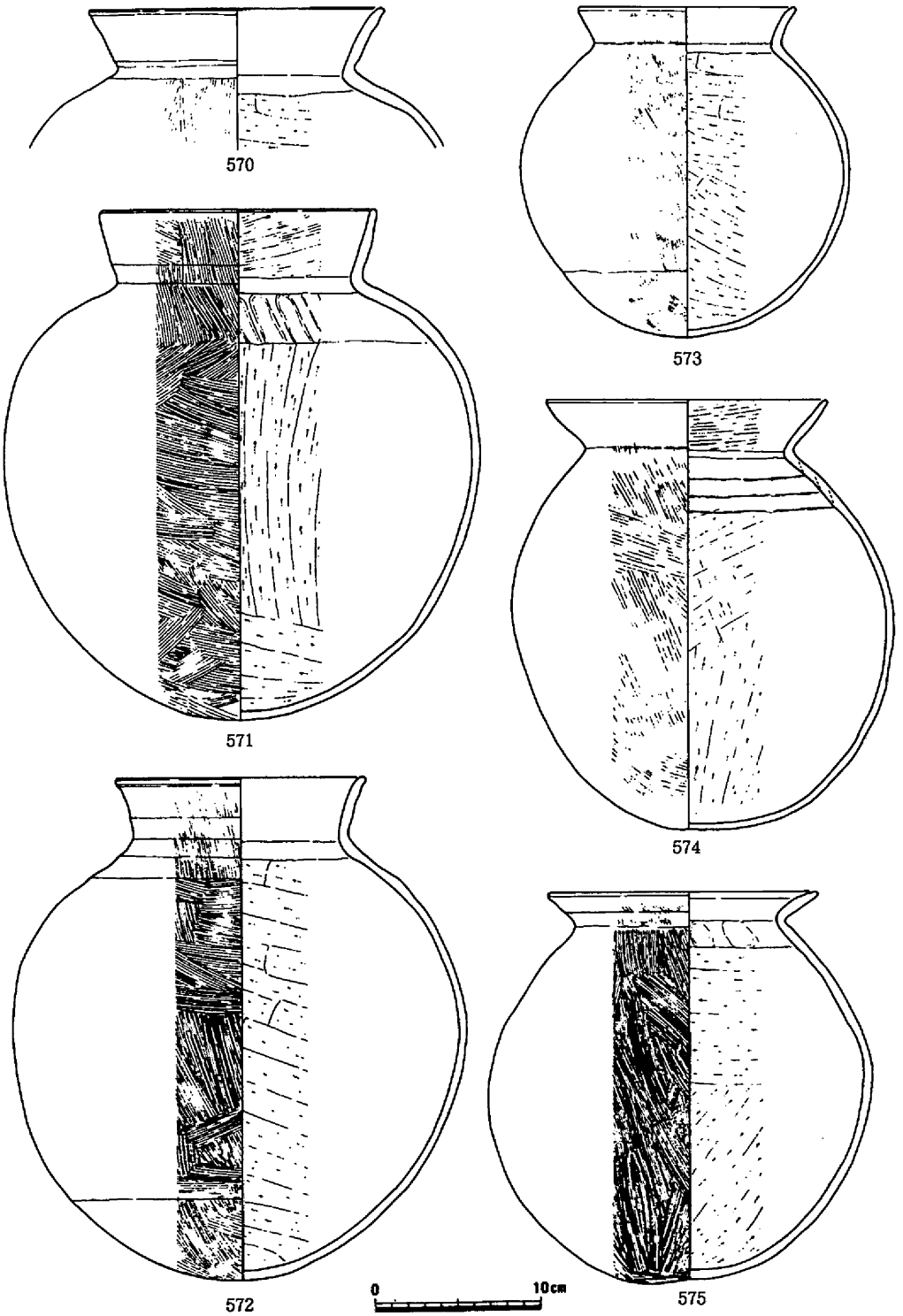
第71図　溝－1 出土遺物 (8)



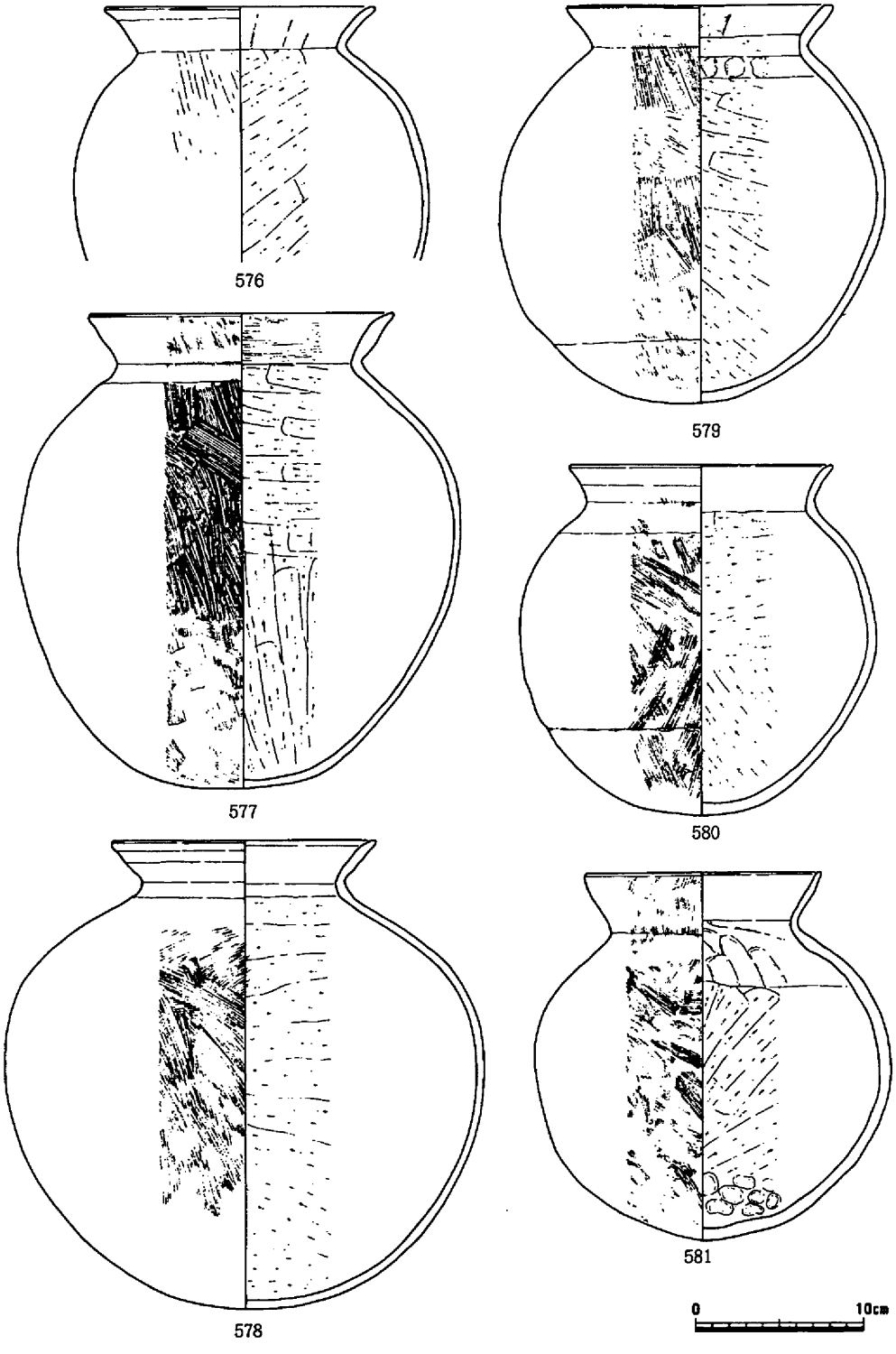
第72図　溝－1 出土遺物 (9)



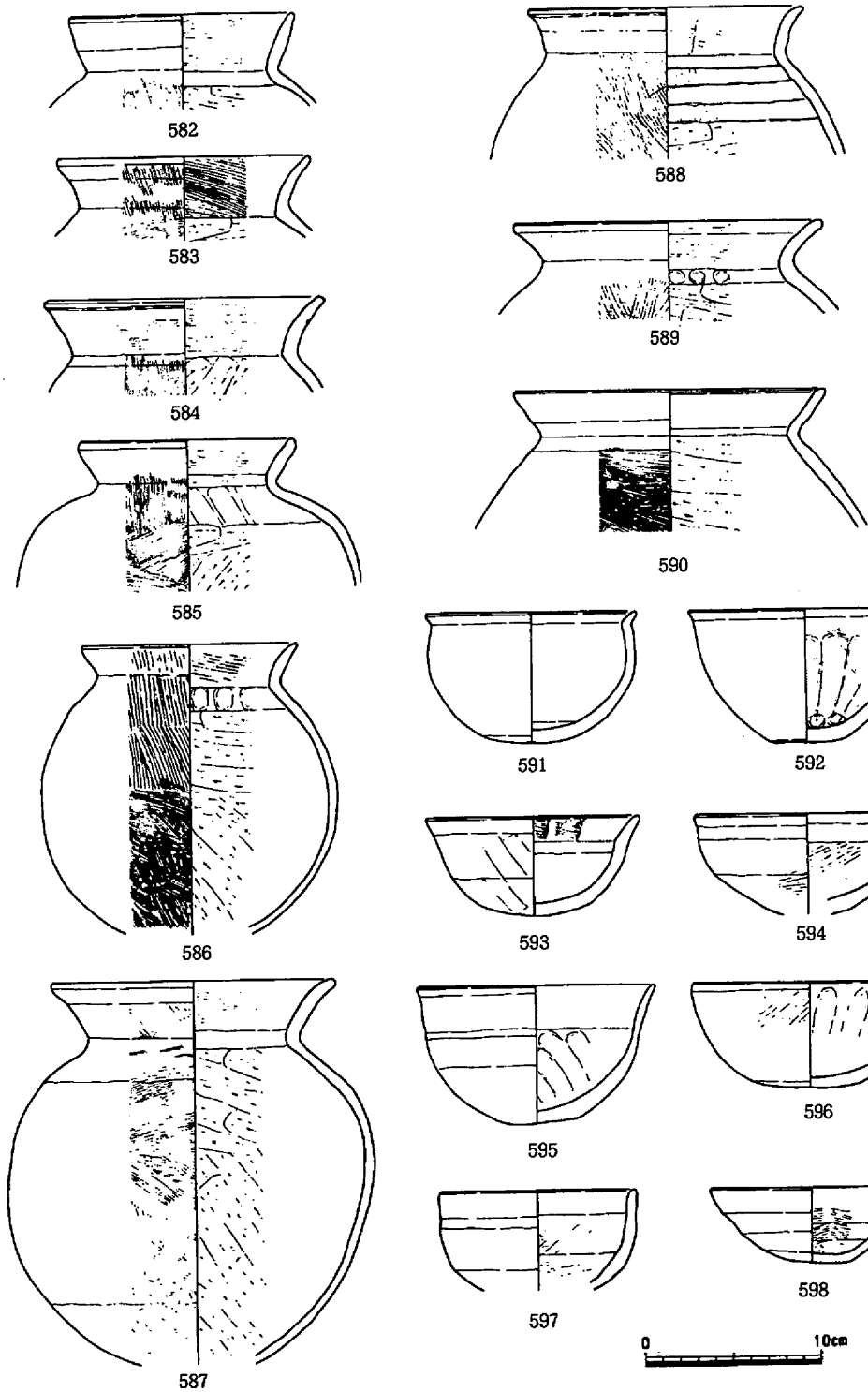
第73図　溝－1 出土遺物（10）



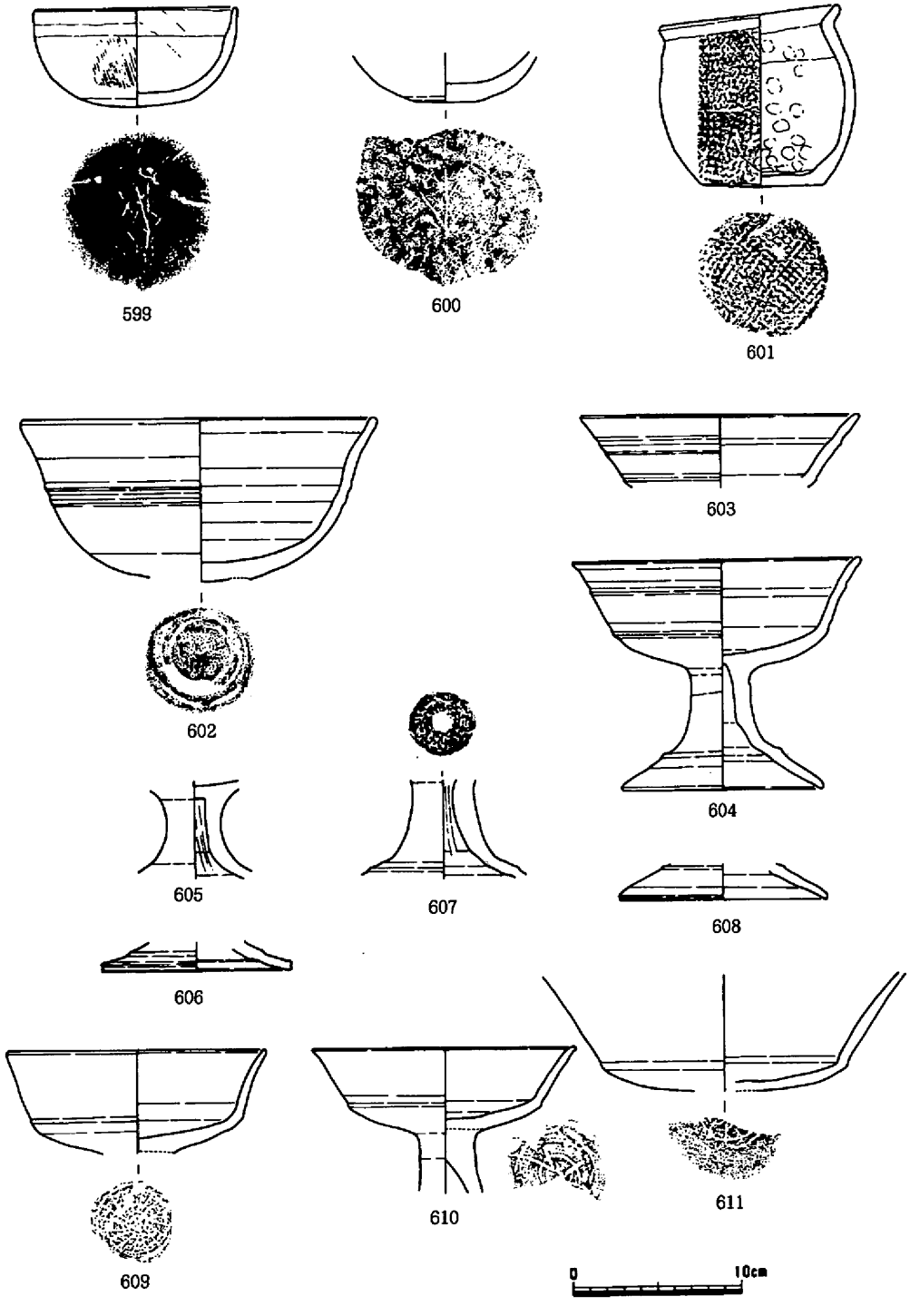
第74図　溝－1 出土遺物（11）



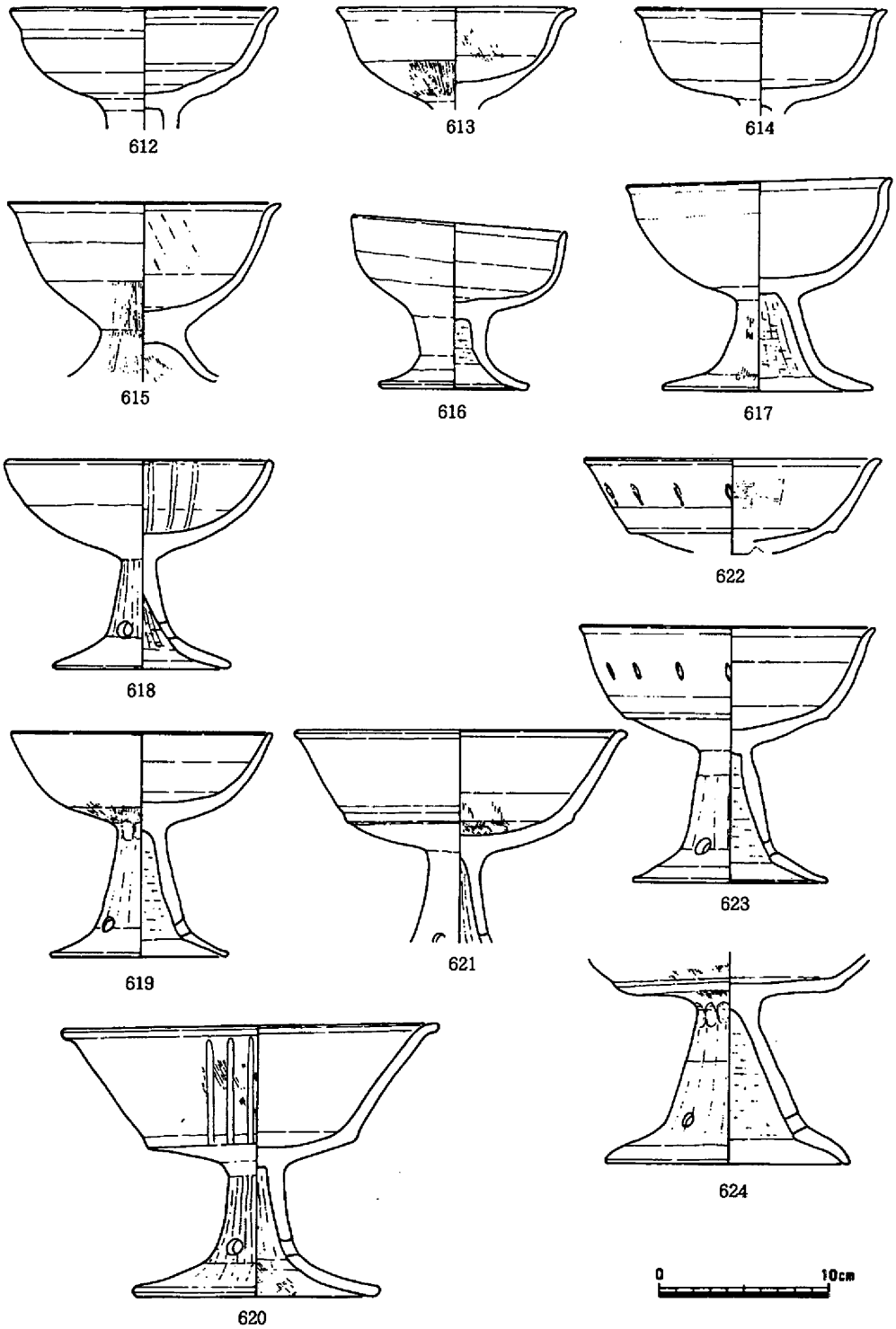
第75図　溝－1 出土遺物 (12)



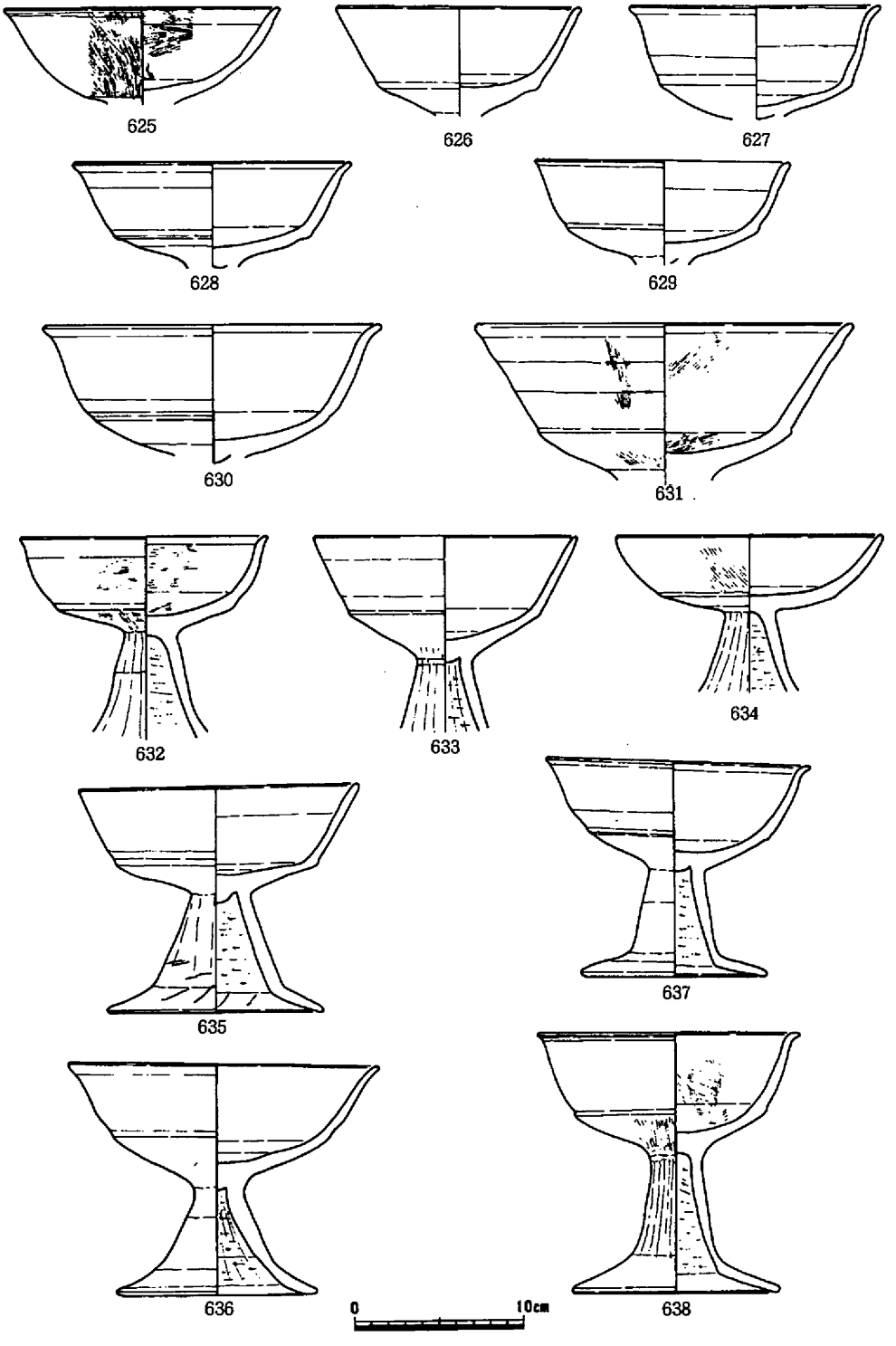
第76図　溝－1 出土遺物（13）



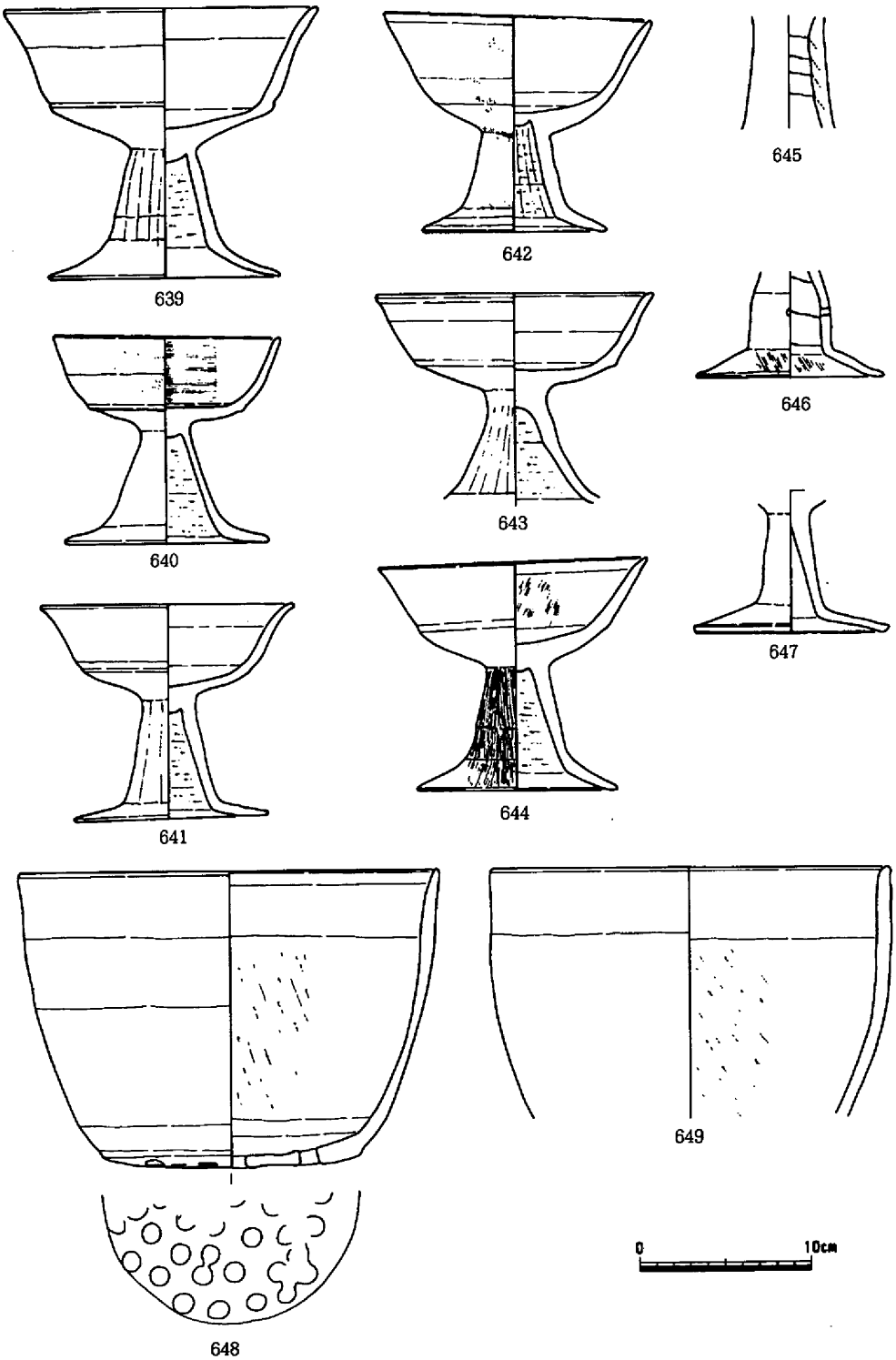
第77図　溝－1 出土遺物（14）



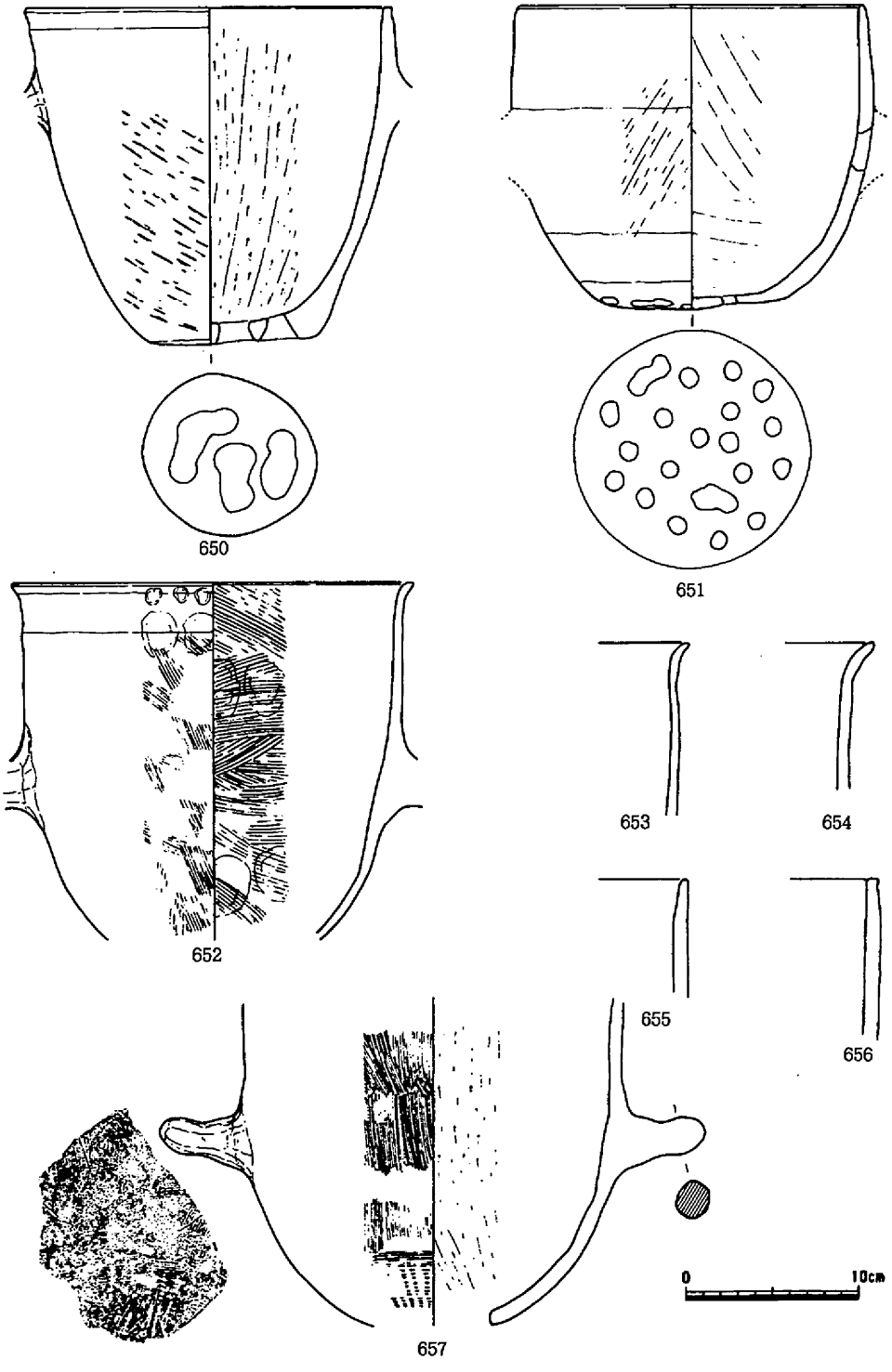
第78図　溝－1 出土遺物 (15)



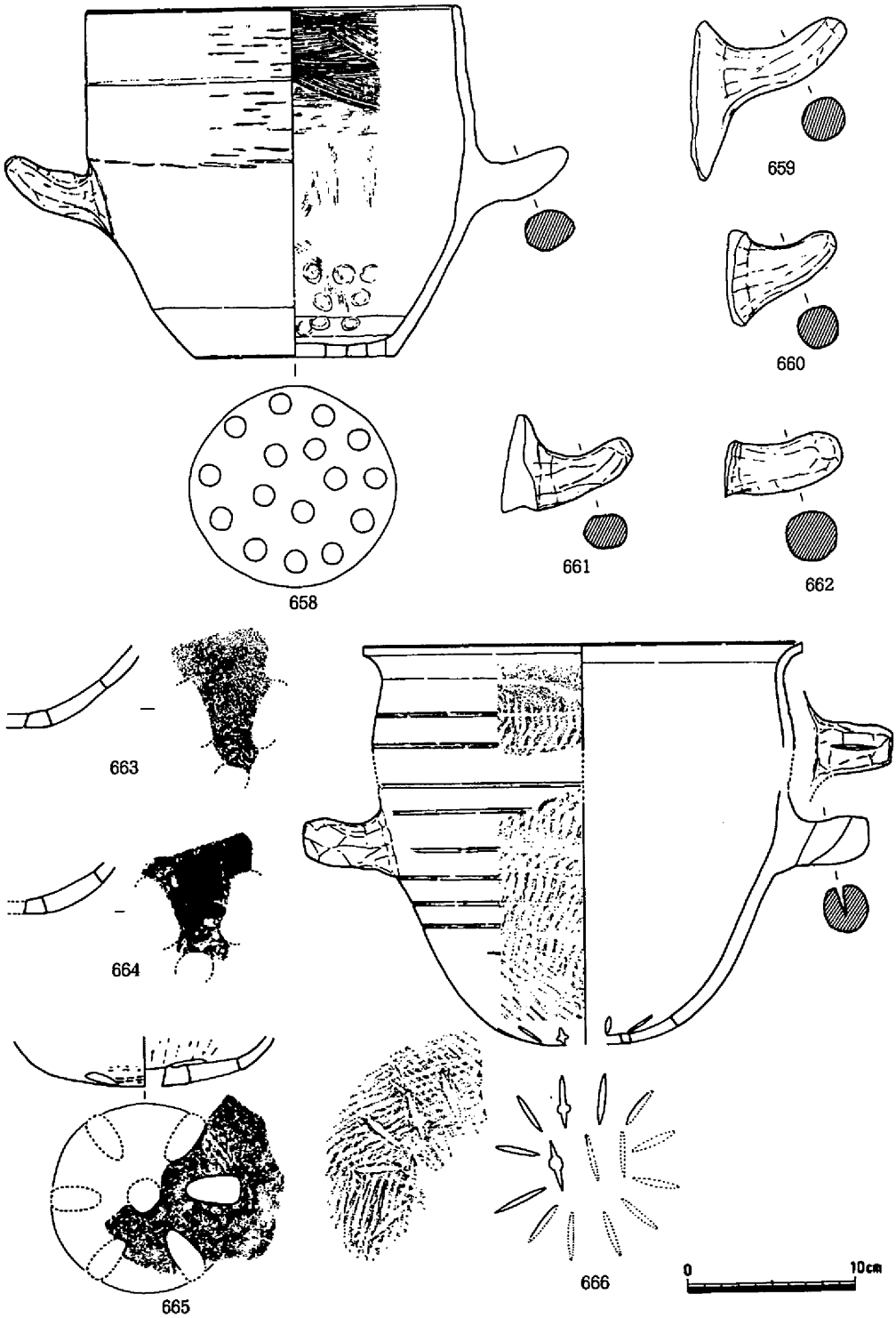
第79図　溝－1 出土遺物（16）



第80図　溝－1 出土遺物（17）



第81図　溝－1 出土遺物（18）

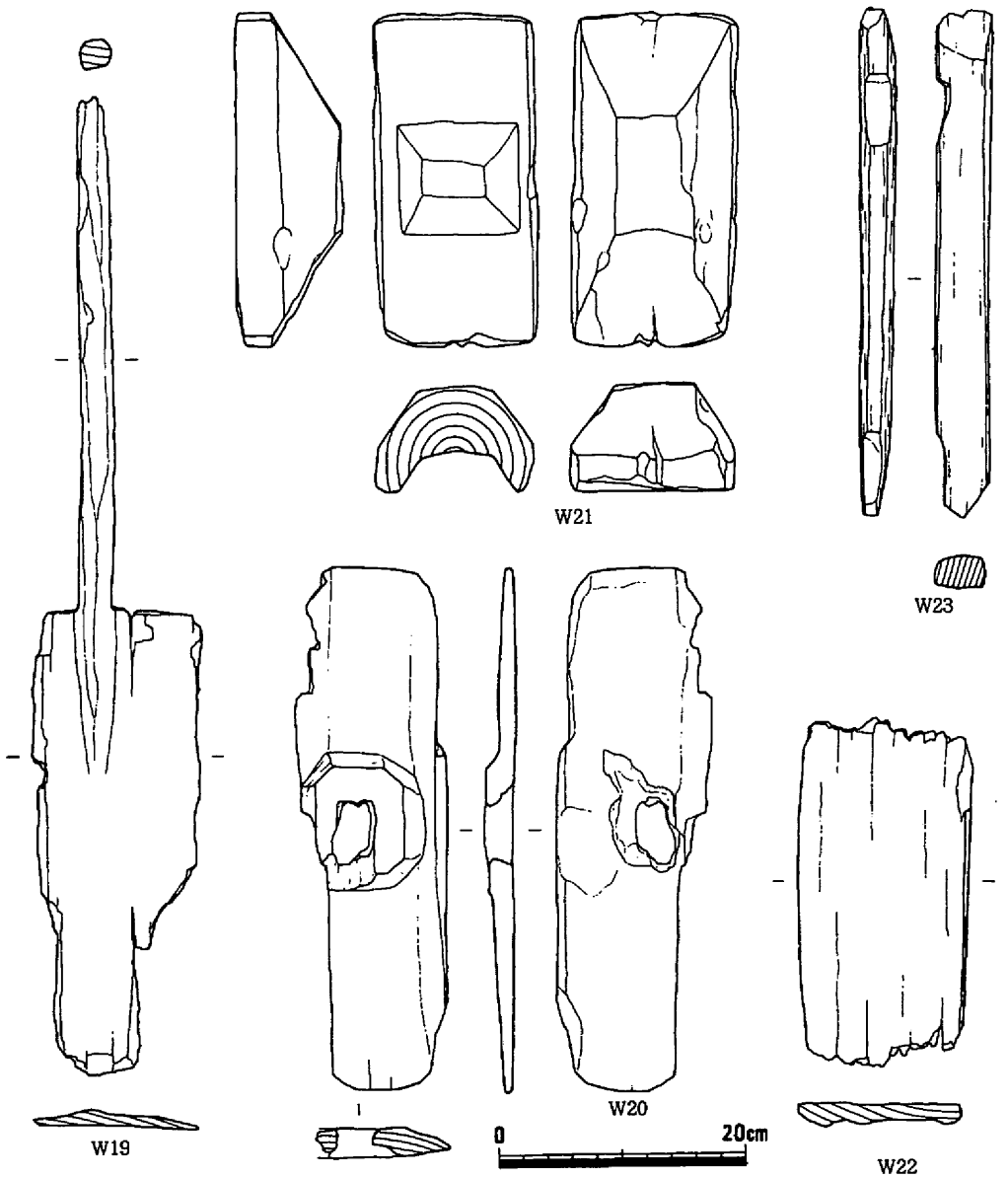


第82図　溝－1 出土遺物 (19)

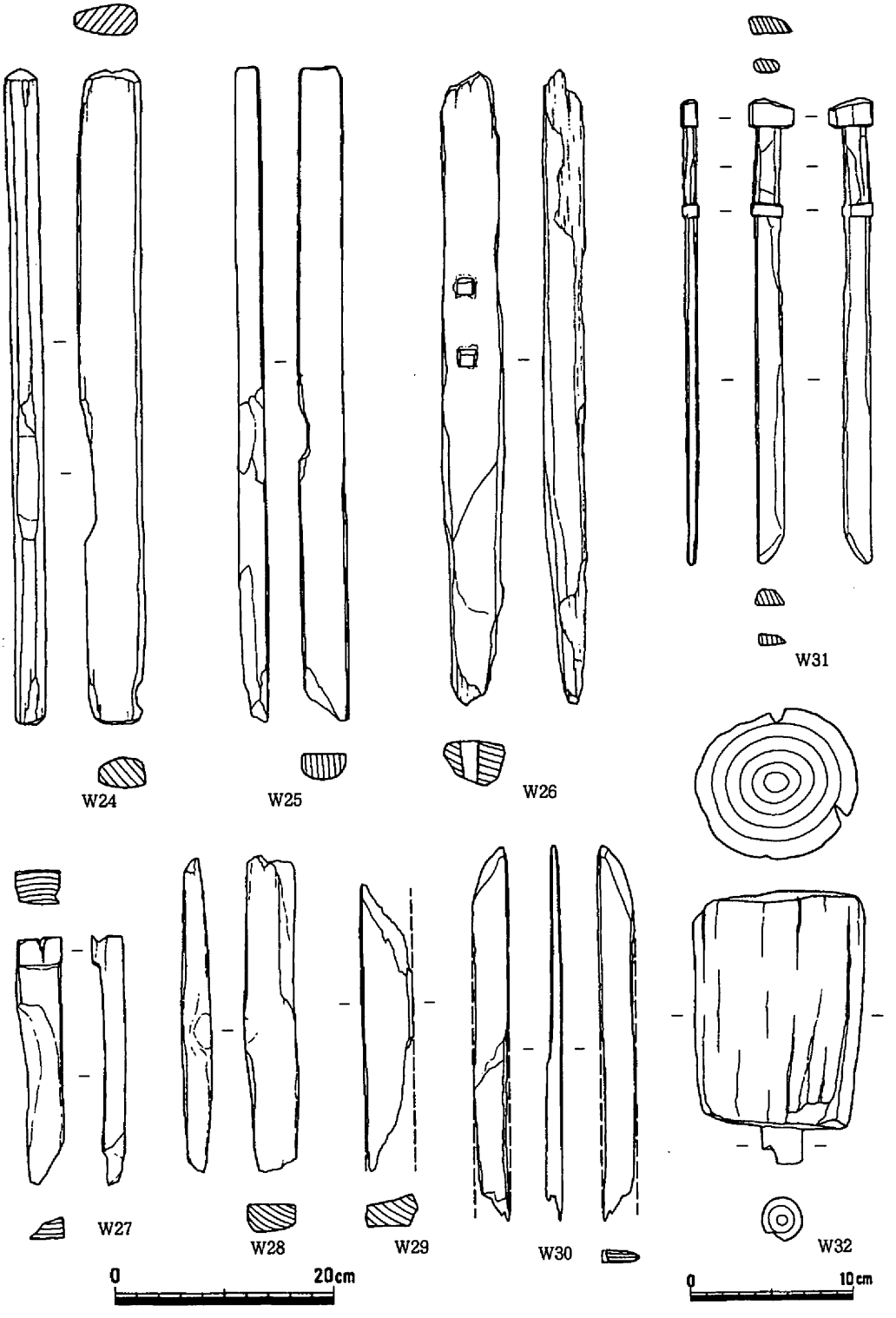
甑（648～665）には、底部が平底のもの（648、650、651、658）と底部が丸底を呈するもの（652、657、663～665）に分類できる。また、口縁部は、上方に立ち上がるものと口縁部で外反するものがある。外面は、ハケメ（652、657）やハケ（板）状工具（651）およびナデで調整している。650、658には、平行タタキ（状）痕が認められるが、ヨコ方向、斜方向のタタキ（状）である。内面は、口縁部下をヘラケズリを施すもの（648～651、657、663～665）とハケメとオサエで調整する（652、658）がある。また、657、663～665の底部外面には、壺、甕、鉢などに認められたカゴメ痕が付いている。底部の孔は、平底のものが円孔で、丸底のものは中央に円孔を開けてその外側に放射状に砲弾形の孔を配している。把手は、651のように体部に円孔を開けて差し込んでおり、体部中位に付くものが多い。666は、他の甑とはやや異なるもので、外反する口縁部で、端面をもちやや上下に肥厚している。丸底で体部中位に把手が付く。把手は、上部から切り込みが入り下部まで突き抜けている。底部は、やや丸みを呈し、中央に推定３カ所の平行する切り込みを入れ、さらにその外側に放射状に切り込みを復元12カ所に配しており、さらに切り込みの一部には、その切り込みの中央に円孔を重ねている。このような蒸気孔は、朝鮮半島では認められるものの、日本においてはまだその例は非常に少ない。外面は、荒いタテ方向の平行タタキののち、螺旋状に沈線を廻らしている。（中野）

木器：溝－１からは日常用具、祭祀用具、そのほか用途不明の部財、加工材が出土している。W19は一本鋤で、現存長78.4cmを測る。身は長方形で、長さ37.5cm、幅は推定で17cmある。W20は広鍬の身で、長さ43.2cm、幅は推定で15cmを測る。中央の柄壺部分には円形の隆起をつくりだす。柄孔は方形のようであるが保存が悪く、着柄角度は明らかでない。W19、W20ともカシ類を素材としている。W21は長さ26.9cm、幅13.3cm、高さ8.5cmのスギを利用した刳物で、外形は槽に似るが内刳は３cmと浅く、容器とは考えにくい。W22は幅13.9cm、厚さ1.4cmの板材である。W23～W29は部材と考えられるものである。W23、W24には浅い刳りこみがあり、W26は２カ所に方孔を穿っている。素材にはスギが多く使われている。W30、W31は刀形模造品である。W30は現存長23cm、幅1.1cmで基部を欠損している。厚さ0.4cmの板材の半ばから削りこんで刀形に加工しており、総じて雑なつくりである。W31は長さ23.4 cmの完形品、極めて忠実に模倣している。W32は横槌で、渡辺誠のＡタイプに属す。身は径10.5cm、長さ14.7cmあり、柄は径2.5cmでその半ばを欠いている。カシ類の一木を利用してつくられたものである。W33～W35は部材と思われるものである。W33は長さ59cm、幅16.4cm、厚さ5.7cmを測り、下縁は緩やかな弧を描く、平面をなす上端の中央を方形に刳りこみ、その両脇に方孔を穿つ。W34は厚さ3.5cmのスギの板材で、一端は斜めに裁断されている。長方形の孔を穿つ。W35もやはりスギの板材で、厚さは1.4cmを測る。W37～W45は丸木材である。W39は径53.7cmのヒサカキの丸太の両端を裁断したものである。W40、W42は径6cmの丸木の一端を裁断したもの

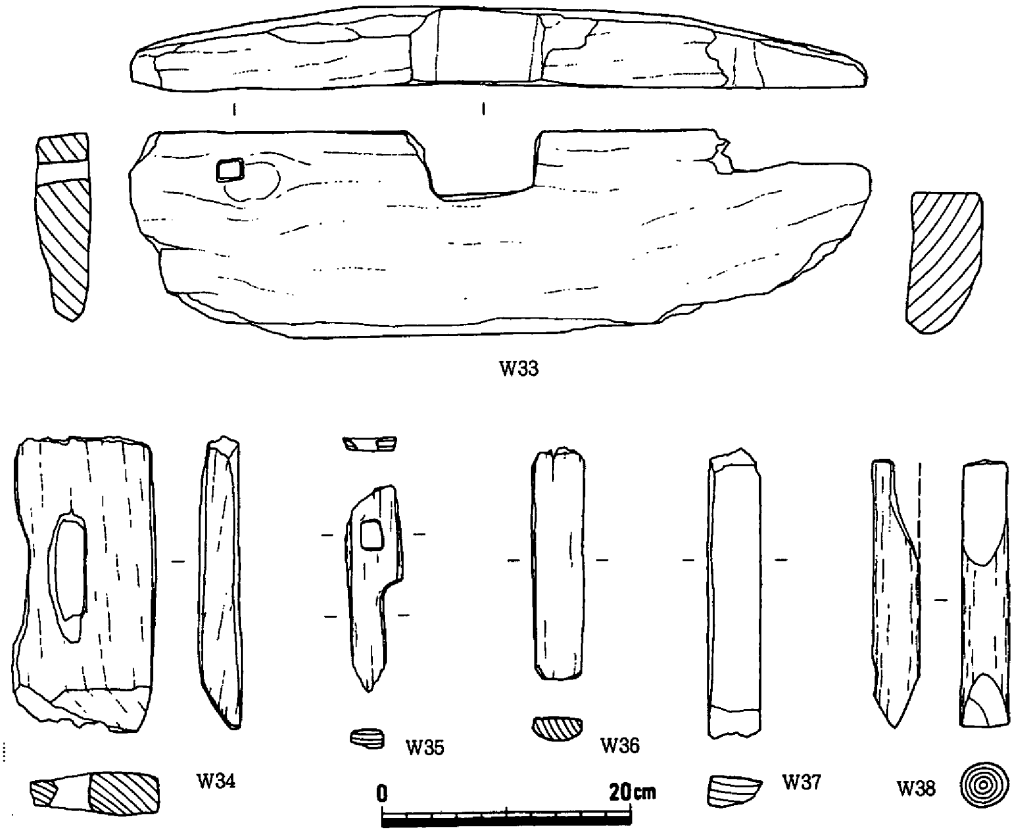
で、**W40**はネズミサシを、**W42**はアラカシを使用している。**W43**、**W44**は径7～9cmの丸木の両端を加工したもので、長さは25cmを測る。このうち**W43**はクロマツを利用したもので、両端を丸く収めており、木錘として使われた可能性がある。**W46**、**W47**は杭である。**W46**は径5.3cmのコナラの丸木を半裁し、先端を尖らせて杭としている。**W47**は径6.3cmのアベアキの丸木を使用したものである。　（亀山）



第83図　溝－1 出土遺物（20）



第84図　溝－1 出土遺物（21）

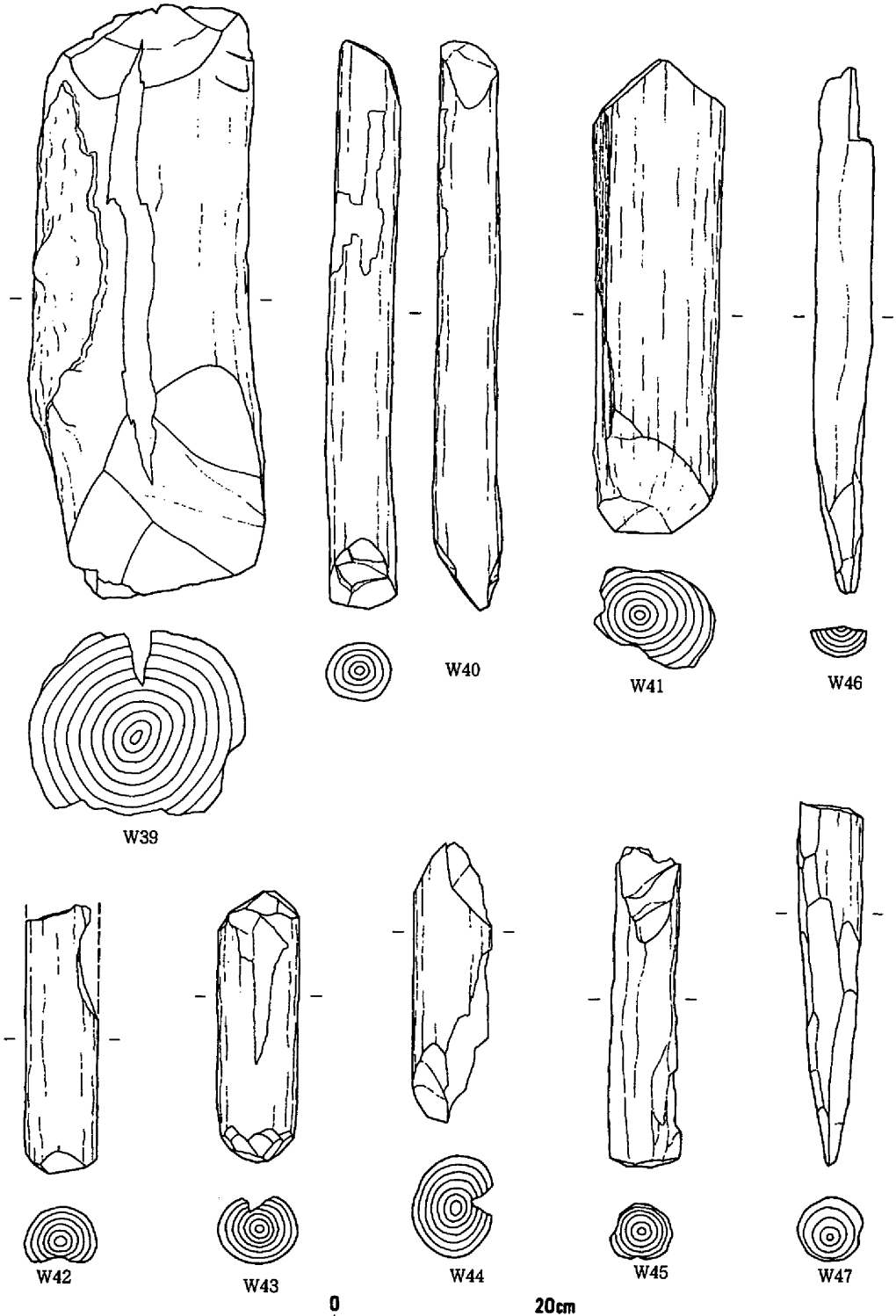


第85図　溝－１ 出土遺物（22）

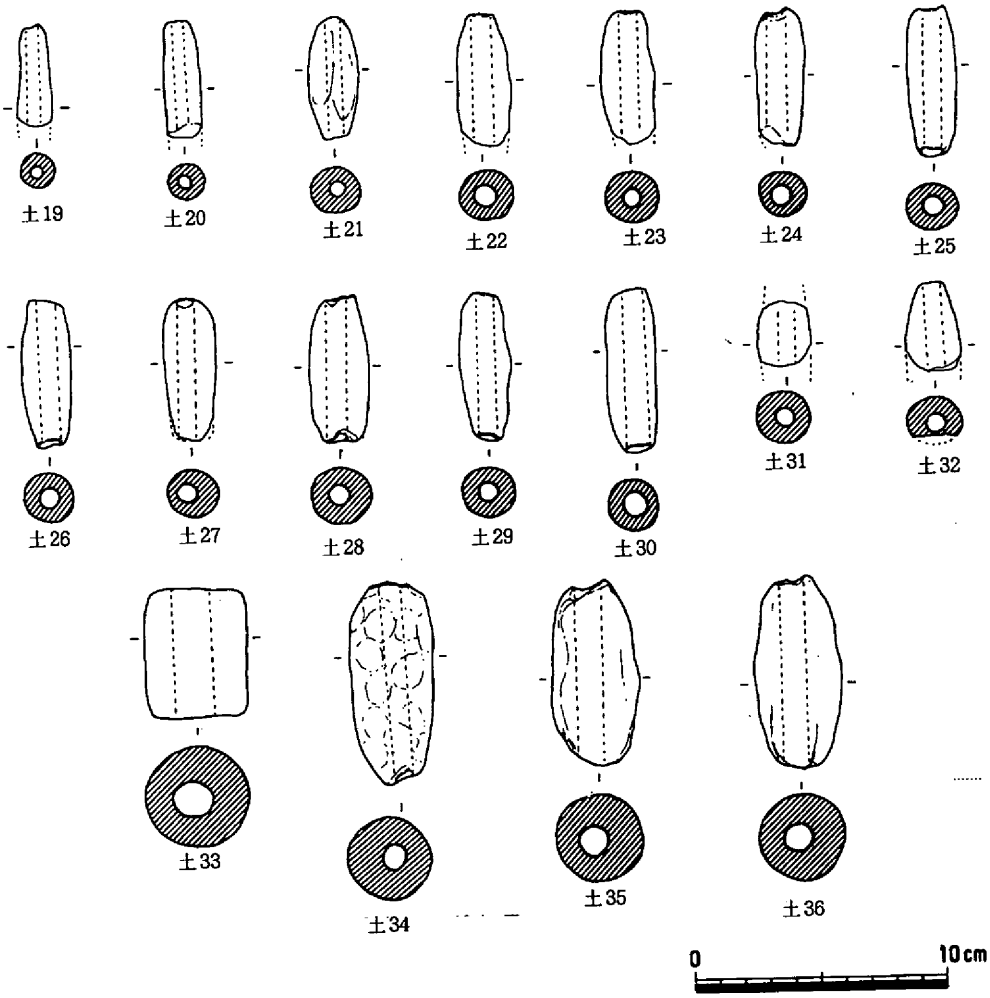
土錘：18点が出土した土錘は、**土19～土32**の中型のもの、**土34～土36**のやや大型のものと、さらに土錘端面の水平なもの（**土33**）がある。**土19～土32**の完形品だけの平均重量は約21ｇを測る。**土34～土36**の平均重量は約82ｇである。**土33**は重量約104ｇを測る。**土24～土26**には網での使用痕が残存していた。此の遺跡の11、12区の低位部の東側は、海辺の「葦原」と考えられ、良好な環境にあったと思われる。

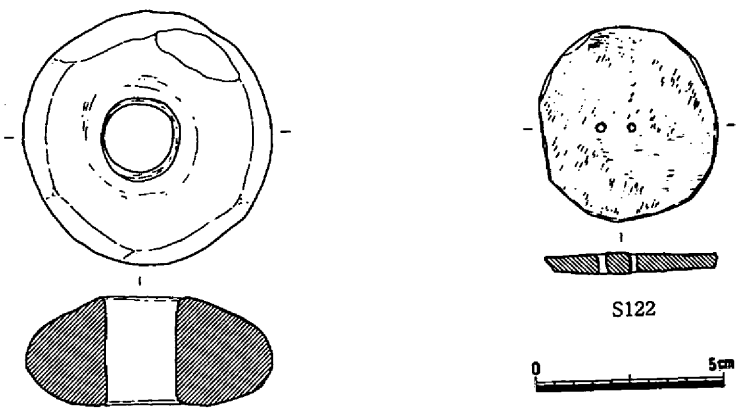
土製品：Ｃ１は、径約6.5㎝の円形を呈し、厚さは約2.9㎝を測る。断面形は、長楕円形である。中央には、径約1.9㎝円孔が穿たれている。朝鮮半島南部および九州北部で陶質土器などに伴って認められる紡錘車は、径4.5～５㎝とやや小さく、円孔は小さいものであるが、形態等からみて紡錘車と考えられる。

石製品：Ｓ122は、双孔円盤で径約5.15×4.60㎝の楕円形を呈し、厚さ約0.55㎝を測る。中央やや外寄りに、径約２㎜の孔が約８㎜離れて穿たれている。両面とも不定方向に研磨されている。また、側面は面取りに研磨され丸味を出している。



第86図　溝－1 出土遺物 (23)





C1

第87図　溝－1 出土遺物 (24)

（2）落ち込み

落ち込み－1（第62図、88～90図）

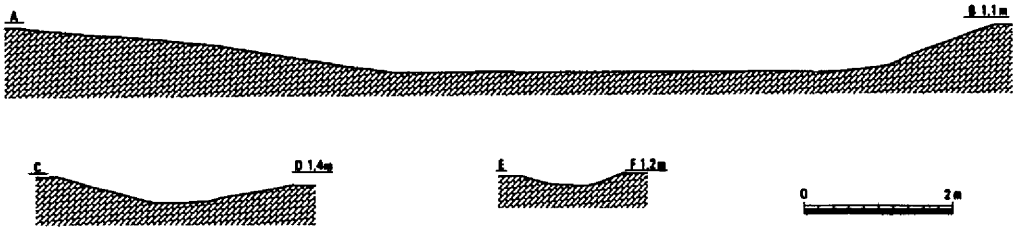
調査区南東端部（12区）の低位部に位置する。この落ち込みは、形も不定形なもので、深さは約60cmである。落ち込み内には、大量の流木を含むピート層および黒灰色粘質土が堆積していた。特に、第62図断面「Ｅ～Ｆ」の溝状を呈するあたりでは雑木などが大量に上流から流れこんだような状況が検出できた。これら流木に混じって図示した土器、木器などが出土した。出土した遺物は、図示した以外にも相当量の土師器が検出され、これらの土器はいずれも５世紀の前半の特徴を示すものであった。

この落ち込みは、いずれにしても周辺の状況からみて、人工的な遺構とは考えられず上流の低湿地部、各々の谷から流れこんだ自然の落ち込みと考えられる。また同時期と考えられる溝－１にも溝肩部の崩れもあり、下層に砂層が堆積していることなどから一時期洪水にみまわれたことが考えられ、その時期にも符合する可能性も考えられる。

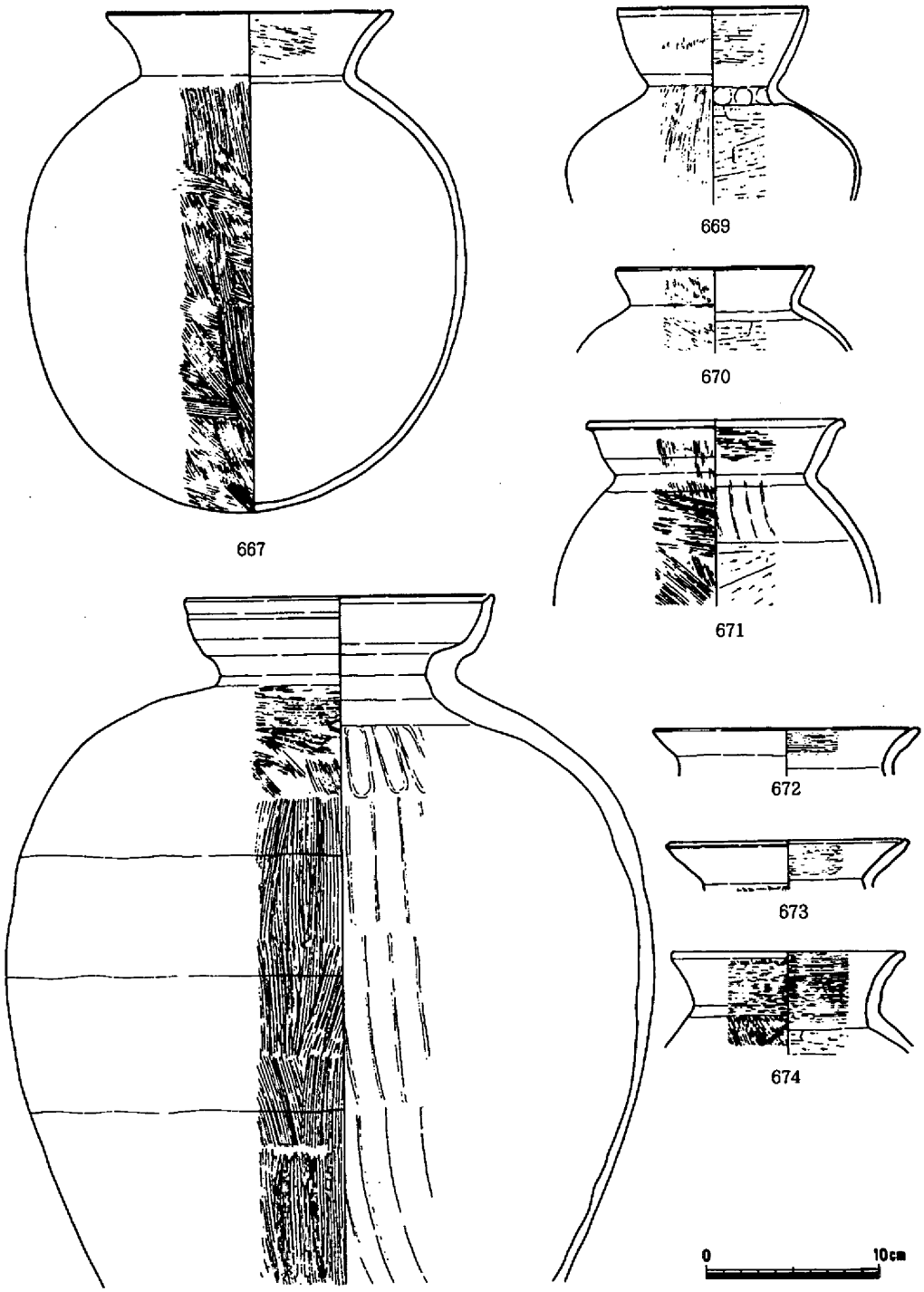
土器：**668**、**669**は壺である。**668**は大形のもので複合口縁をもつ。外面は頸部下をハケメを施す。内面は、ユビによるナデアゲが顕著である。甕は、**454**、**443～456**で、口縁部はいずれも外反する。口縁端部は、まだ端面を意識しているものが多い。外面は、基本的にはハケメにより調整である。内面は、頸部および頸部近くまでヘラケブリである。

676～679は、いずれも外面に格子タタキをもつ朝鮮半島系土器である。**676**、**677**は、外面に煤が付着しており長胴甕と思われる。**678**は、落ち込み－１周辺の堆積層から出土した**385～382**と類似するもので深鉢と考えられる。格子タタキは**934～943**より小さめである。**679**も深鉢で、外面はタタキののちナデ調整を行っているためタタキは明瞭でない。内面は、**676～679**ともナデを施している。

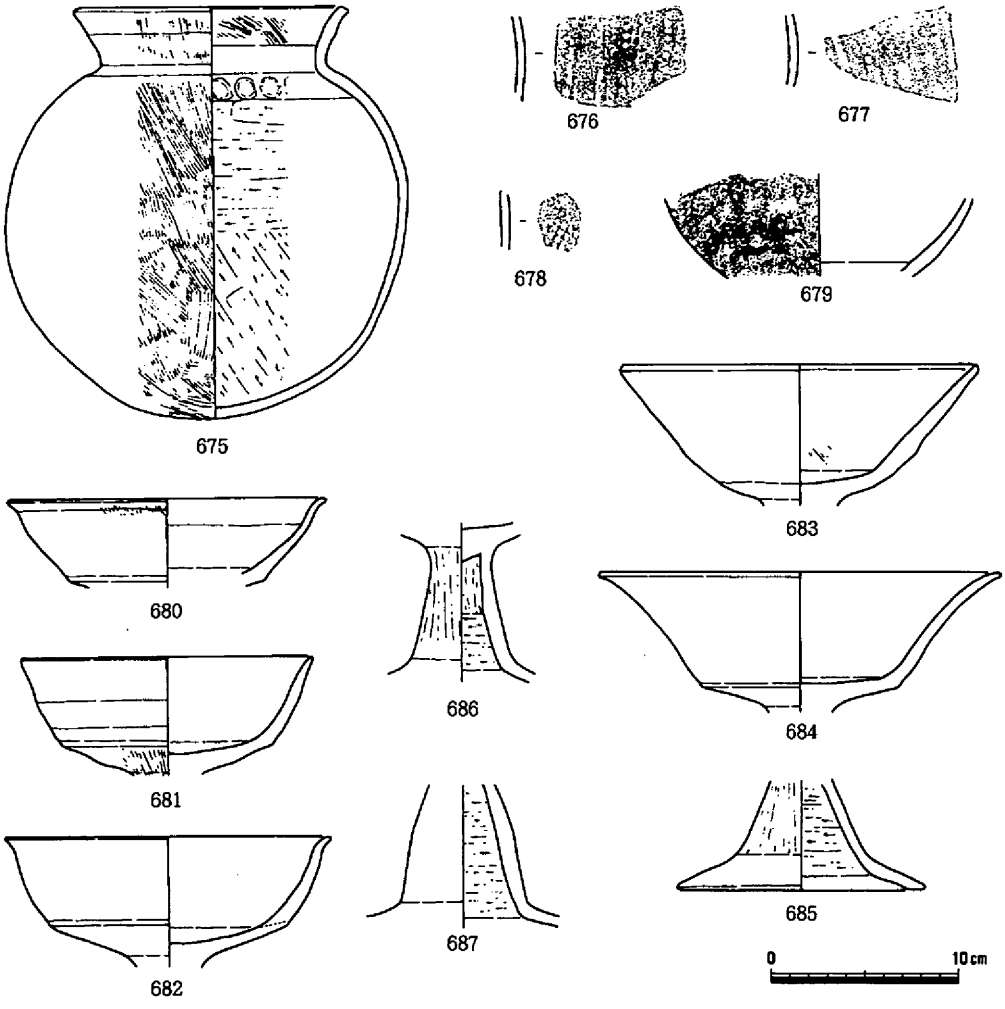
680～685の高杯は、杯部には各種含まれていた。杯部は、小さくなり、段をもつもの**433**、**434**、**682**と稜が甘くなるもの683がある。口縁部は、**684**を途くと受部から内傾して立ち上がる。**683**は、口縁部を少しつまみ出している。



第88図　落ち込み（1／100）

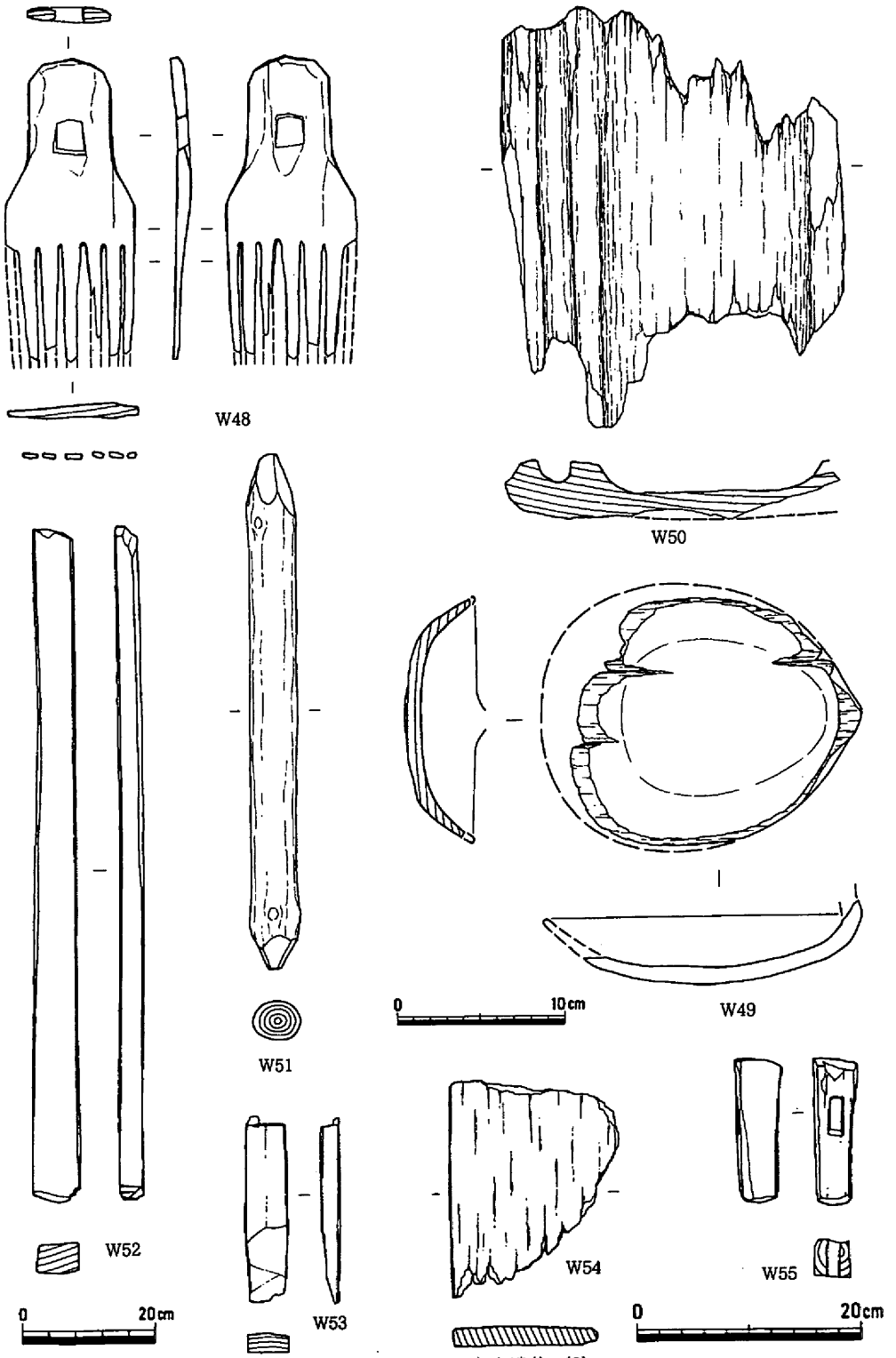


第89図　落ち込み出土遺物（1）



第90図　落ち込み出土遺物（2）

木器：W48はカシを使った六又鍬の身で、刃先を欠いているが現存長27cm、幅11.8 cm、厚さ1.2cmを測る。幅狭になった頭部には方形の柄孔が穿たれており、着柄角度は約58°である。**W49**は杓子形の刳り物で周縁を欠いているが、復元すると長さ9.5cm、幅８cm、深さ２cmほどのものと思われる。スギ材でつくられている。**W50**は用途不明の部材で、厚さ５cmの板の中央を幅20cm、深さ３cmにわたって削りこみ、端には幅２cm、深さ２cmの溝を彫りこむ。**W51**はネズミサシの丸木の両端を尖らせ、長さ46.9cm、径５cmを測る。**W52**は７×3.5 cmのスギの角材で、長さは99.6cmを測る。両端は切断され、表面に虫食いの痕を残す。**W54**は厚さ1.7cmのコウヤマキの板で、現在の長さは19.2cmある。**W55**は３cm角の角材で、長さは12.8cmを測る。端部は一方は平らであるが他方はやや丸く、敲打の痕が見られる。中央には方孔が貫通している。



第91図　落ち込み出土遺物（3）

（3）窯址と焼土土壙

窯址（第92、93図）

調査区北西部（5区）に位置する。窯址は耕作土直下に検出された。

窯体はN－17°－Wに主軸を持ち、全長820cm残り、まだ北へ伸びる。床は灰褐色を呈すほど還元焼成されている。床の幅は平均70cmを測る。床からの壁の立ち上がりは、やや外傾している。そして最も残りの良いところで30cmを測る。横口のところは少し凹む外ほぼ平坦な床面であり、その傾斜角度は北に向かって4°下がっている。この窯では床中央にほぼ200cmの等間隔に直径20cm、深さ10cm程の柱穴状の穴が検出できたことである。しかもその一つには炭化した木が立っていた。窯築造時の天井を支える柱の痕であろう。窯内部には、天井と壁の崩れた塊で充填されていた。

横口は東側だけに9カ所も開けられている。焼成直後の真っ赤に焼けた木を掻き出す口である。北から二番目のそれは天井まで残存していた。口の内面は窯の床と同じように良く焼けている。その床と天井の高さは、40cm弱である。

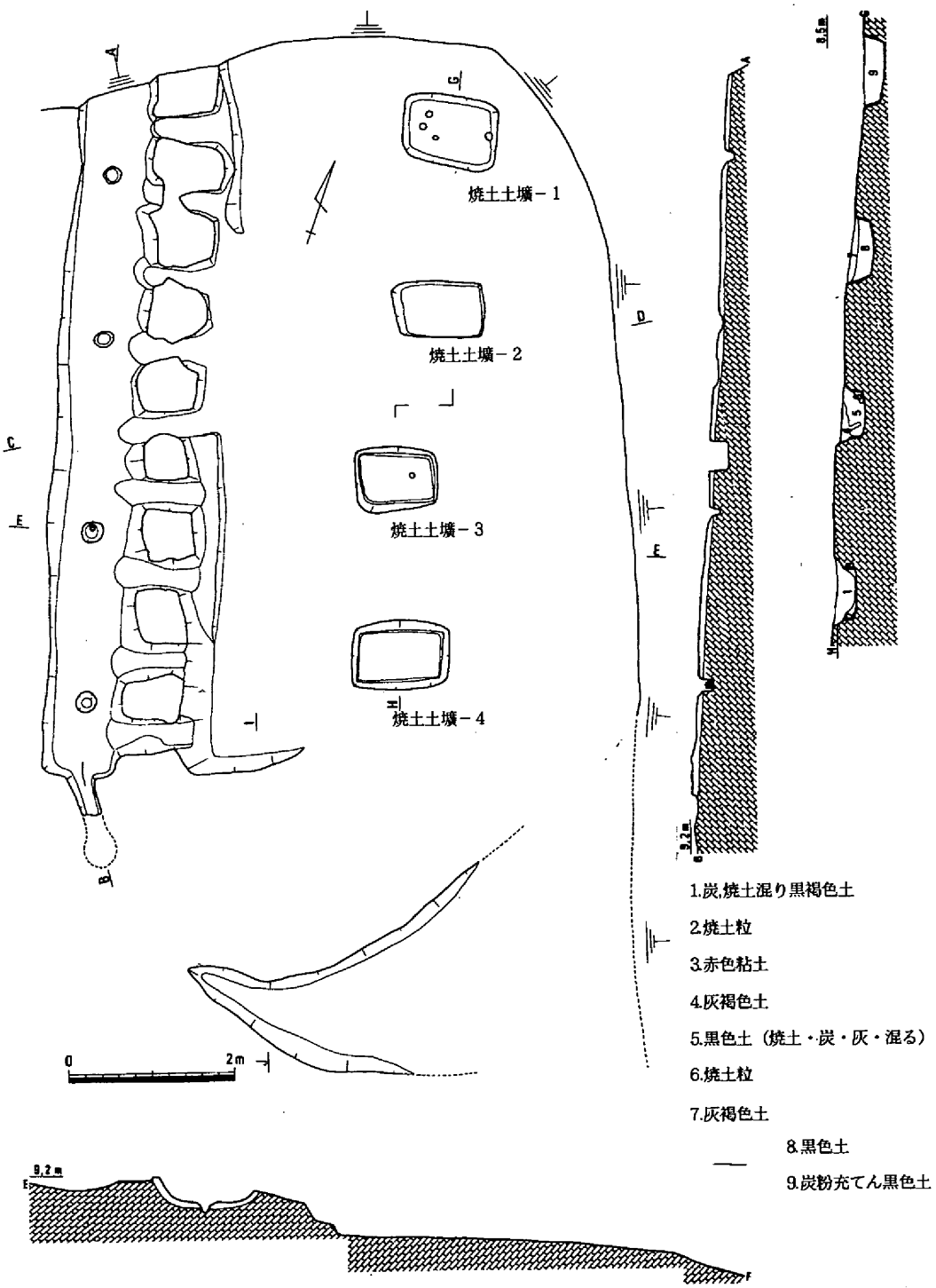
焚き口は完全に削平されて消滅していた。煙道は床と壁がわずかに残り、窯主軸より東に歪んでいる。煙突は丸く赤く焼けていることでその位置が分かる。

窯の東側には、地山を削平し平坦地を設け、作業場が存在する。この作業場の中に4基の長方形土壙がほぼ等間隔に平行して並んでいる。壁には1cmの厚さで粘土を張り付け、それは良く焼けている。床は全く焼けていない。焼けた木材を掻き出して、この土壙に放り込んで、灰を被せて急冷したものであろう。白炭を作るために必要な土壙と考えられる。この土壙を焼土土壙と呼ぶ。焼土土壙－3から須恵器平瓶（**688**）の破片が出土している。焼土土壙の規模は平均長さ100cm、幅60cm、深さ30cmを測る。

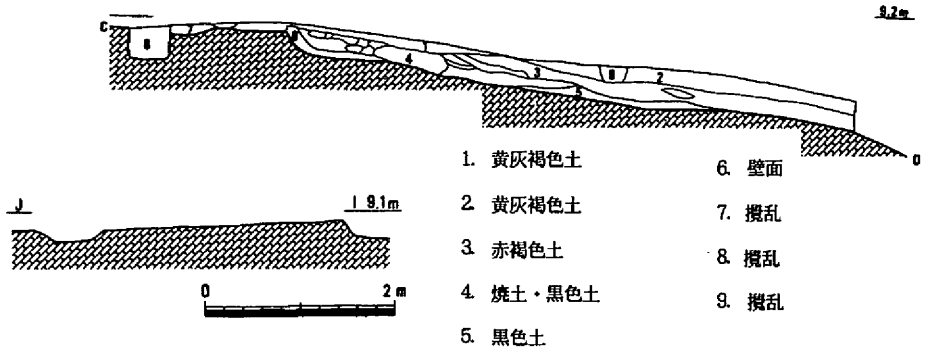
溝は山側にあったようであるが、後世の溝と重複しているので規模は不明である。しかし平坦地の南に谷状地形が検出されている事から、溝は山側から煙突の南にL字形に掘られていたのではあるまいか。

この窯の用途は白炭を焼く炭窯であり、県内各地で既に数十列発掘されている。県内の初例は中国縦貫道の調査で北房町備中平遺跡である。中国縦貫道の調査で新見市岩倉遺跡では4基も検出した。津山市の調査では9基も検出している。当初北部で発掘できたが、近年南部でも続々発掘されている。総社市では16基検出した遺跡もある。製鉄の為の炭生産施設で、6～8世紀に盛況し、間もなく衰退したものらしい。

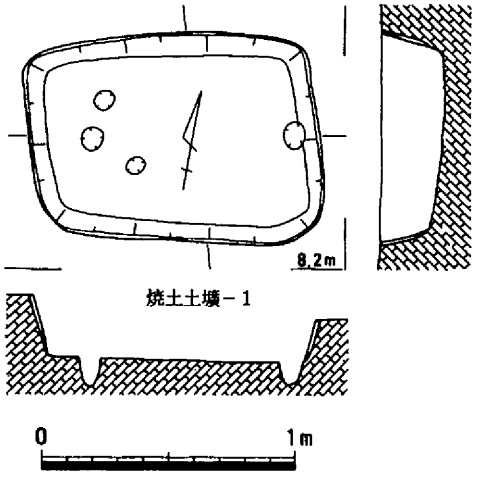
熱残留磁気年代測定法でも、この窯はAD590年頃、AD740年頃になっている。窯の立地も幾つかの条件があるようだ。斜面であること。等高線とほぼ平行すること。したがって床の傾斜が10°以下であること。横口が斜面下方にあることなどである。そして遺物が皆無ということもある。

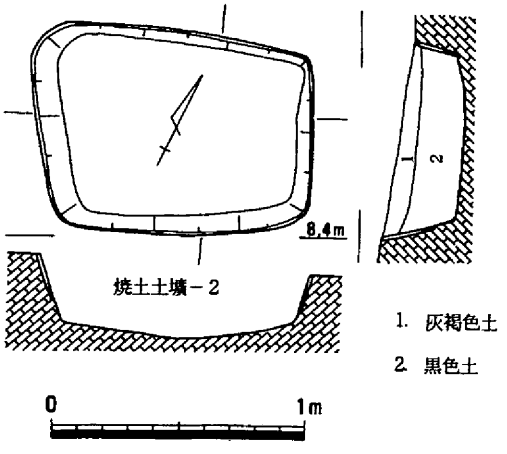

焼土土壙－1
焼土土壙－2
焼土土壙－3
焼土土壙－4
A
B
C
D
E
F
G
H
0
2m
8.2m
8.5m
1.炭,焼土混り黒褐色土
2.焼土粒
3.赤色粘土
4.灰褐色土
5.黒色土（焼土・炭・灰・混る）
6.焼土粒
7.灰褐色土
8.黒色土
9.炭粉充てん黒色土

第92図　窯　　址（1）（1／80）



第93図　窯　　址（2）（1／80）





第94図　焼土土壙－1・2（1／30）

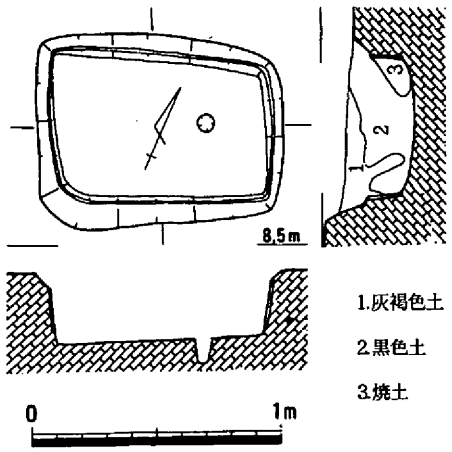
焼土土壙－1（第92.94図）

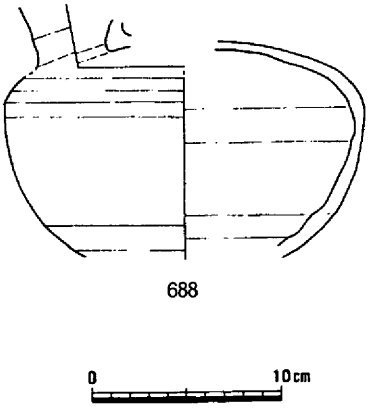
窯の東の作業場にある4基の内の最も北に位置する。

長辺をほぼ東西に持つ西の狭い長方形の平面形である。検出面での規模は長辺110cm、短辺80cm、深さ25cmを測る。底面は4カ所直径10cm以下の浅い凹みがある、ほぼ平坦で、北側に少し傾斜している。壁面は1cmの厚みで4方とも粘土を張り付け、その粘土だけが赤く焼け、表面は灰色に還元している。埋土は黒色土で炭の粉が混じっている。熱残留磁気年代測定をしているが、窯と同時期になっている。出土遺物は認められなかった。

焼土土壙－2（第92、94図）

焼土土壙－1の140cm南に平行する。平面形は長辺をほぼ東西に持つ東の狭い長方形である。検出面での規模は長辺110cm、短辺80cm、深さ25cmを測る。底面はほぼ平坦で、中央が少し窪む。壁面は1cmの厚みで4方とも粘土を張り付け、



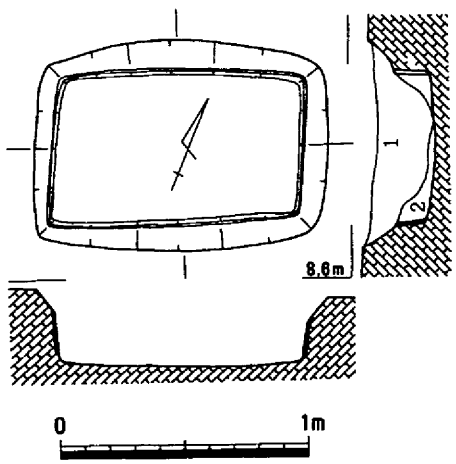


第95図　焼土土壙－３（1／30）出土遺物

その粘土だけが赤く焼け、表面は灰色に還元している。埋土は２層に別れる。上層は灰褐色土で、下層は黒色土で炭の粉が混じっている。

焼土土壙－３（第92、95図）

焼土土壙－２の140cm南南西に平行する。平面形は長辺をほぼ東西に持つ東の狭い長方形である。焼壁面での規模は長辺90cm、短辺60cmを測る。底面はほぼ平坦で、１ヵ所少し窪む。焼壁面の高さ15cmは１cmの厚みで４方とも粘土を張り付け、その粘土だけが赤く焼け、表面は灰色に還元している。埋土は３層に別れる。１層は灰褐色土で、２層は黒色土で、３層は焼土粒が多い。２層から須恵器の平瓶が出土した。７世紀前後か。



第96図　焼土土壙－４（1／30）

焼土土壙－４（第92、96図）

焼土土壙－３の140cm南に平行する。平面形は長辺をほぼ東西に持つ長方形である。焼壁面での規模は長辺100cm、短辺60cmを測る。底面はほぼ平坦である。焼壁面の高さ15cmある。その粘土だけが赤く焼け、表面は灰色に還元している。埋土は２層に別れる。上層は黒褐色土で、下層は黒色土で焼土粒、炭の粉が混じっている。（浅倉）

（4）谷

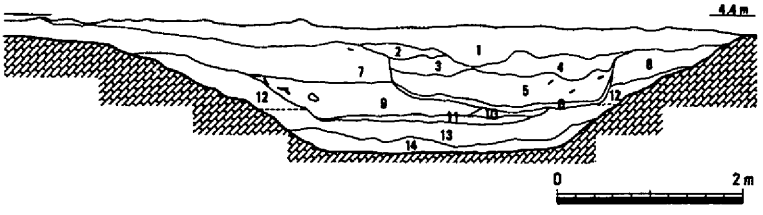
谷－A（第９、10、97～100図）

谷－Ａは、調査区中央に検出され、８区の丘陵斜面から始まり、３、２、１区と南西方向から北東方向にやや蛇行しながら、低位部の11区に至る。検出した全長は約60ｍを測る。幅は、８区の先端部で約３ｍ、１区の出入口部では約15ｍと規模を増す。深さは、先端部近くでは約1.2ｍ、出入口部では約2.2ｍを測る。断面形は、先端部では「Ｖ」字形に近く、徐々に幅が広くなり、出入口部では逆台形を呈する。

堆積土は、谷の性質上単純な層堆積は示さず、各々の箇所で観察した結果、それぞれ若干異なった堆積状況が認められた。第８図Ａ－Ａ'の断面は、第97図のように14層に堆積していた。堆積層は、複雑な状況を示していたため、遺物も十分な層位的取り上げはできなかった。このため、第97図で残した幅約１ｍのセクションでの検証で補完した。その結果、第１層が中世、第２～６層が中世（～古代後半）、第７、８層が古代後半、第９～11層が古代前半、第13層が古墳時代（５世紀前半）と考えられる。この谷－Ａでは、特に８世紀代を中心とする大量の須恵器が出土した。

この項では、第13層を中心に出土した古墳時代の遺物を取り上げる。（第98～100図）これらの古墳時代の遺物は、第13層およびその上層の各層に混在した土器である。

須恵器（陶質土器）:須恵器は、**689～698**が出土した。壺は**689～692**がある。**689**は、外反する口縁部で、端部をやや肥厚気味である。肩部は、初期須恵器（陶質土器）によく認められる怒り肩で、外面はタテ方向の平行タタキののち沈線を等間隔（螺旋状）に施す。内面には、タタキ痕跡？が残り、不定方向のナデ調整である。胎土は精良であるが、焼成は瓦質気味である。



1. 灰色泥砂
2. 灰褐色泥砂
3. 茶褐色泥砂
4. 〃
5. 淡茶褐色砂
6. 鉄分堆積層
7. 茶灰褐色泥砂
8. 淡茶褐色泥砂
9. 黒褐色粘質土
10. 〃
11. 暗茶褐色砂
12. 暗灰褐色粘質土
13. 暗灰色粘土
14. 暗青灰色砂質土

第97図　谷－Ａ（1／80）

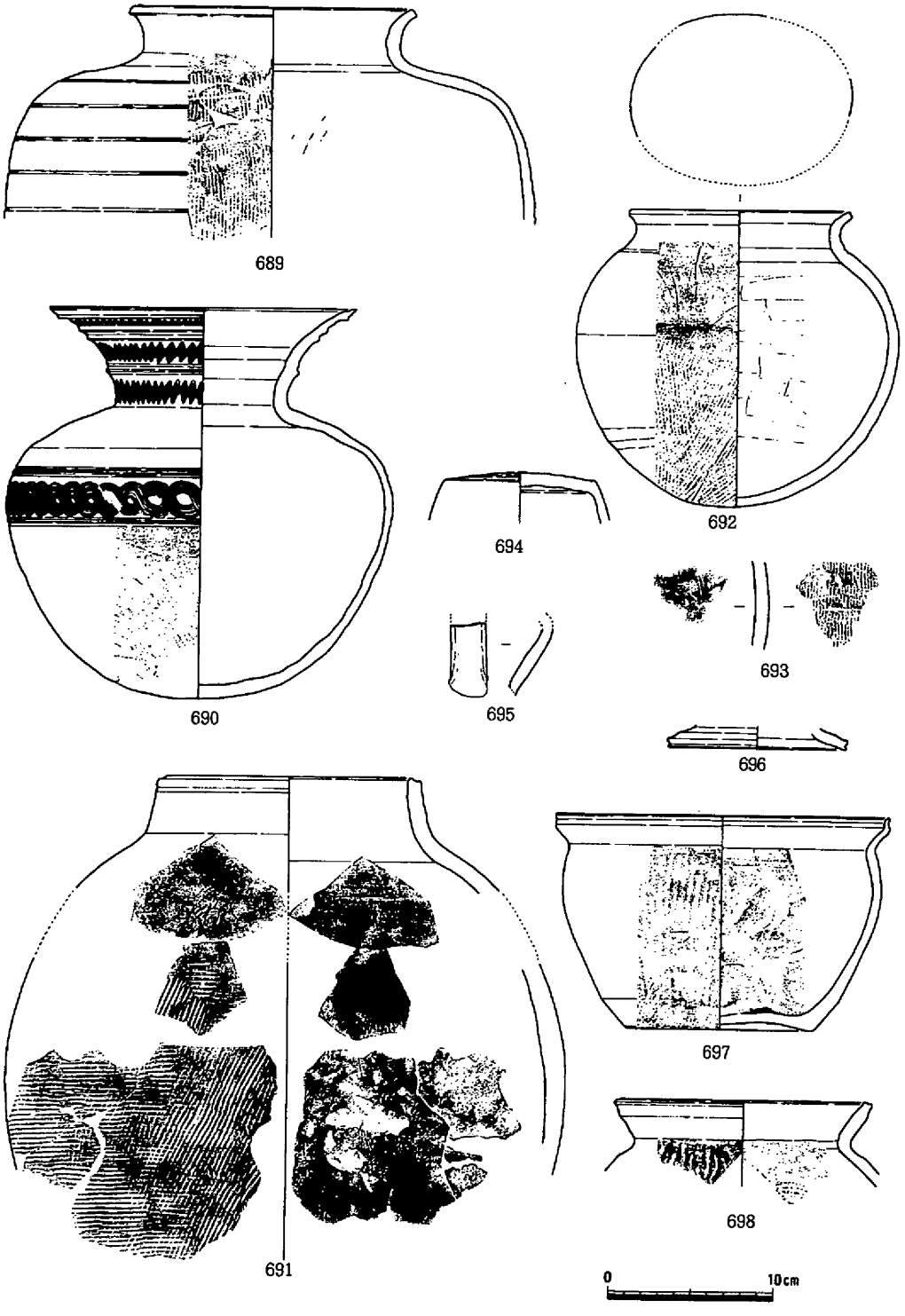
690は、大きく外反する口縁部に、4条の稜線があり、その稜線間を10本の櫛描波状文を3帯に施文する。肩部には、沈線で区画された中に上部の波状文と同じ原体で組紐文を施す。胎土は精良で、焼成は堅緻で自然釉がかかっている。691は、40数個体の破片が各調査区より出土したもので、谷－Aからの破片量が最も多かったのでここで報告する。茶灰色～茶褐色の焼き上がりで、693と共通し、胎土は精良である。口縁部は、内傾して上方にたち上がり端部は凹んでいる。外面は、肩部下を平行タタキ、内面はヨコナデと不定方向のナデを施す。692は、肩部から外反し、さらに端部で屈曲気味に外傾する。端部は、「コ」の字形に端面をもつ。外面は、平行タタキを施し、内面はヘラ状工具による調整を行っている。口縁部は、楕円形を呈しており、朝鮮半島南部での陶質土器に時々認められるが、意識的か否かについては判断しかねる。694は、蓋状を呈しており、ていねいなヘラケズリののちナデで仕上げている。695は、439より大型の把手である。439も同様な器形と考えられ、胎土は悪い。696は、440と同様の高杯の脚部と考えられる。697は、平底の鉢である。頸部から外反し、さらに上方に立ち上がり、短かく外反する口縁部をもつ。外面は、荒い平行タタキ、底部近くはヘラケズリを施す。内面には、タタキ痕を残す。底部は上げ底である。698は、「く」の字口縁で、口縁部上部にくせをもつ。端部は内外にやや肥厚させる。698は、器形は土師器の形を呈しており、外面は荒いタテ方向の平行タタキ、内面は無文当具（木目）を施している特徴的な土器である。

以上の初期須恵器（陶質土器）は、数量的には少なかったが器形、胎土、焼成など多種、多様にわたっており、県内でも例をみないものがその大半を占めた。また、これらの初期須恵器の中には、杯の器形が認められなかった付記しておく。

土師器：谷－Aでの古墳時代の土師器は、他の谷－B、Cに比べて量的には少なかった。土師器は、第99、100図に図示した以外には少量であった。

701～710は、手捏土器で、オサエ、ユビナデアゲによる調整のものである。699、700は、大型の壺である。いずれも複合口縁部をもつ。699は、頸部から屈曲気味に外反し、さらに内傾して上方に立ち上がる口縁部をもつ。外面および口縁部内面はハケメ、内面は、ハケメののちヘラケズリを施す。700は、頸部からゆるやかに外反して立ち上がり、さらに内傾して上方にのび、口縁端部で短かく外反する。口縁部内外面とも細かいハケメで調整している。711～713は、小型の壺である。いずれもていねいなヨコナデで仕上げている。711には、体部に黒斑が1カ所認められる。

甕（715～722）には、複合口縁（715、716）と「く」の字口縁（717～720、722）さらには外反する口縁（721）のものがあった。715、716は、いわゆる二重口縁の退化したものである。716は、外面ハケメ、内面オサエ、ナデで調整している。「く」の字口縁、外反する口縁をもつ甕は、基本的には、外面および口縁内面がハケメ、内面がヘラケズリを施す。「く」の字口縁



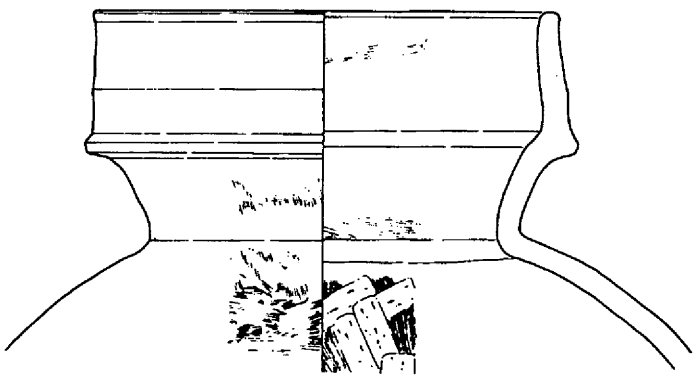
第98図　谷－A 古墳時代出土遺物（1）

の甕には、口縁端部に端面を残すもの（719）も含まれていた。719は、須恵器の技法で須恵質に焼成されていた698に類似する器形である。

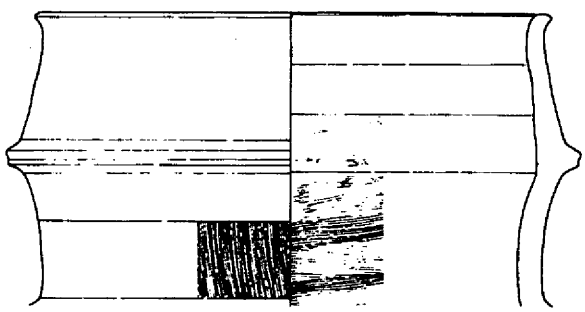
高杯は、723、724と量的には少なかった。723は、杯部の底部と口縁部の境に段を残している。724の脚部は短かく、ゆるやかに広がる裾部をもつ。内面はヘラケズリ。また、図示できなかったが甑が少量出土している。口縁部はなく底部の破片であったが、底部は丸く、円形および楕円形の透し孔をもつものであった。

以上の土師器は、それらの特徴から5世紀前半期の時期を示しており、高橋編年の12－9期に相当すると思われる。

初期須恵器（陶質土器）（689～698）は、ＴＫ－73型式にも認められない器形も存在し、杯の器形も伴なっていない。さらに、695、698は、吉備の特定地域によく認められる砂粒を多く含む胎土である。さらには、698は土師器の器に須恵器技法が用いられており、示唆的な土器である。これらの689～698の土器は、ＴＫ－73型式とはやや趣を異にする。



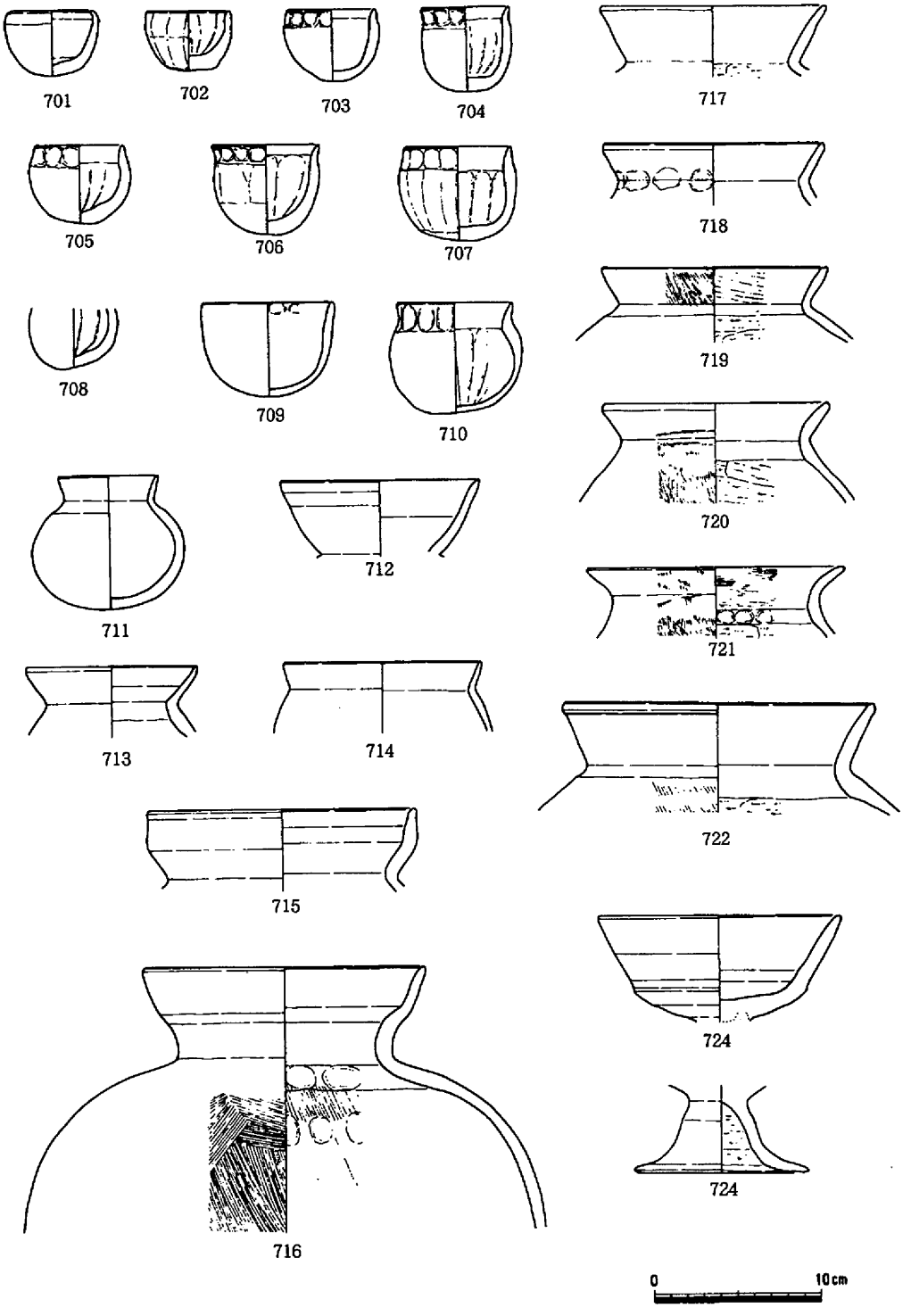
699



700

0　10cm

第99図　谷－Ａ 古墳時代出土遺物（2）



第100図　谷－A 古墳時代出土遺物 (3)

谷－B（第８、101～105図）

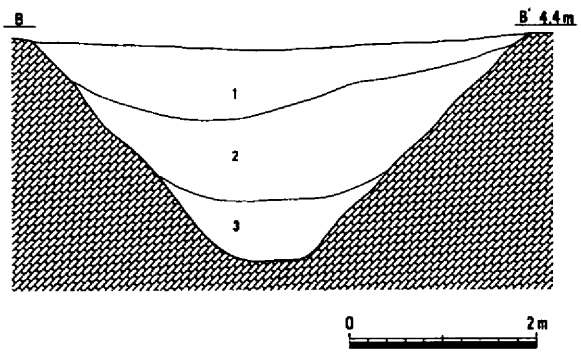
調査区の中央に、谷－Ａ、谷－Ｂの中間やや南側寄りに検出された。谷－Ｂは、谷－Ａと同様に丘陵斜面の７区に端を発して、６区と続き、さらに12区の低位部に流れ込む。谷は、ほぼ南西方向から北東方向に蛇行して伸びており、全長約40ｍを測る。規模は、先端部付近で幅２ｍ、深さ約1.3ｍ、出入口部では幅5.3ｍ、深さ約2.2ｍ徐々に広く、深くなっている。谷－Ｂは、谷－Ａ、Ｃに比べると規模はやや小さい。

堆積土は、第10図地点の断面である第101図では、大きく３層に分かれ、各層は細分される。上層は、鎌倉時代を中心とする中世の遺物が包含されていた。中層からは、７世紀～平安時代の遺物が出土したが、中層上部では古代後半の遺物が多く認められ、中層上部は古代後半の層として分離できた可能性が強い。下層は、古墳時代（５世紀前半）と考えられる。このような堆積状況は、基本的には谷－Ａと層位、時期とも一致する。

ここでは、以下古墳時代の遺物について述べる。

Ｃ２は、鏡形土製品である。大きさは、約4.8×4.2㎝で、やや楕円形を呈する。粘土塊を平たく円形に延ばし、紐部をつまみ出して、棒状のもので差し込み紐孔を作っている。

須恵器（陶質土器）:谷－Ｂでは、他の谷に比べて須恵器（**725～731**）の量は少なかった。**732**は、下層ではなく上層から出土したもので、一連の土器とはやや新しいと考えられる杯身である。ほぼＴＫ208型式に併行するものである。**725～728**は、同一個体と考えられ、谷－Ａの**693**および各調査区（**916～925**）に点在していた。この土器は、**689**と同様な器形を呈すると考えられる。胎土は精良で、焼成やや甘く茶灰色を呈する。外面は、タテ方向の平行タタキのち沈線（螺旋状？）廻らす。内面には、凹凸があるものが認められ、当具痕跡の可能性がある。**729～731**は、同一個体と考えられ、さらに**906～909**も同様であろう。この土器は、頸部の沈線間に波状文を２帯、頸部下の肩部に列点文、さらにその下部の肩部に２帯の波状文を施文



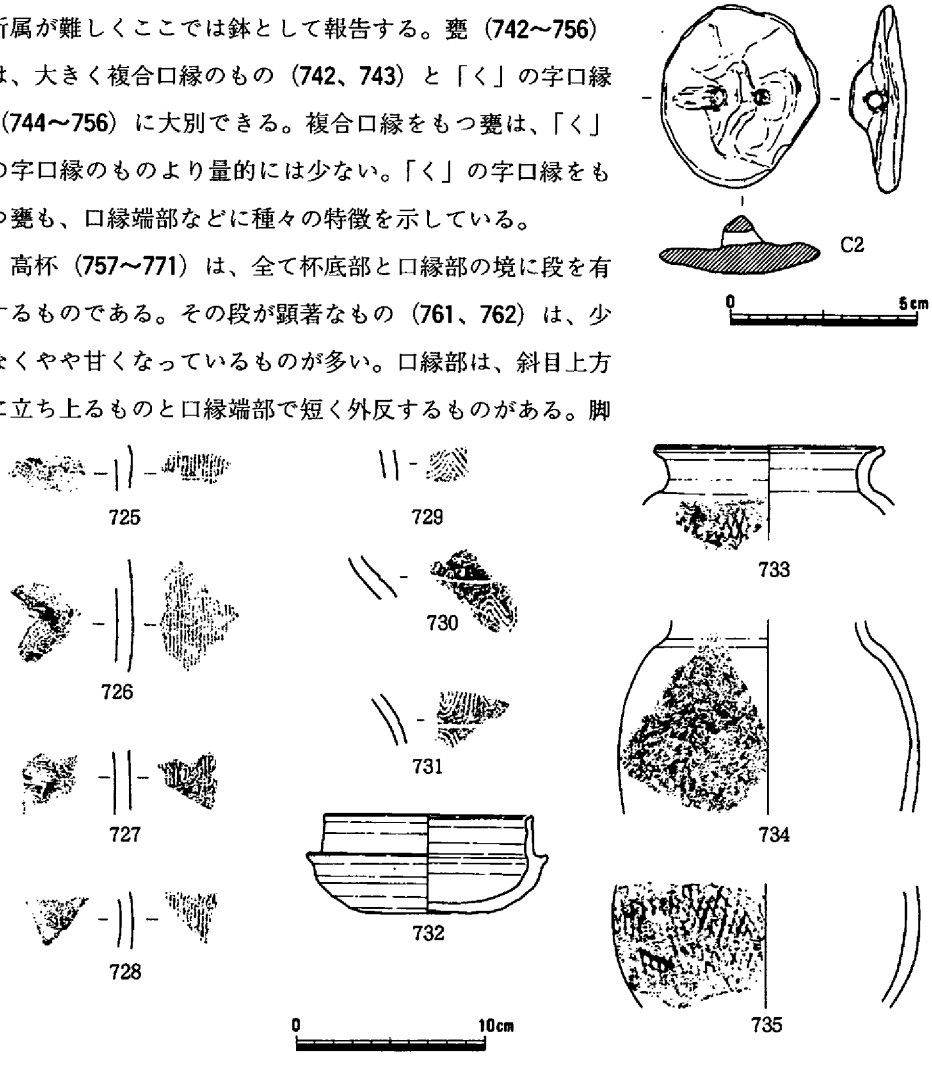
第101図　谷－B（1／80）

している。器形はおそらく長頸気味の壺と考えられる。この土器は、胎土に砂粒を非常に多く含んでおり、いわゆる造山古墳を中心とする一定地域に認められる特徴的な初期須恵器である。

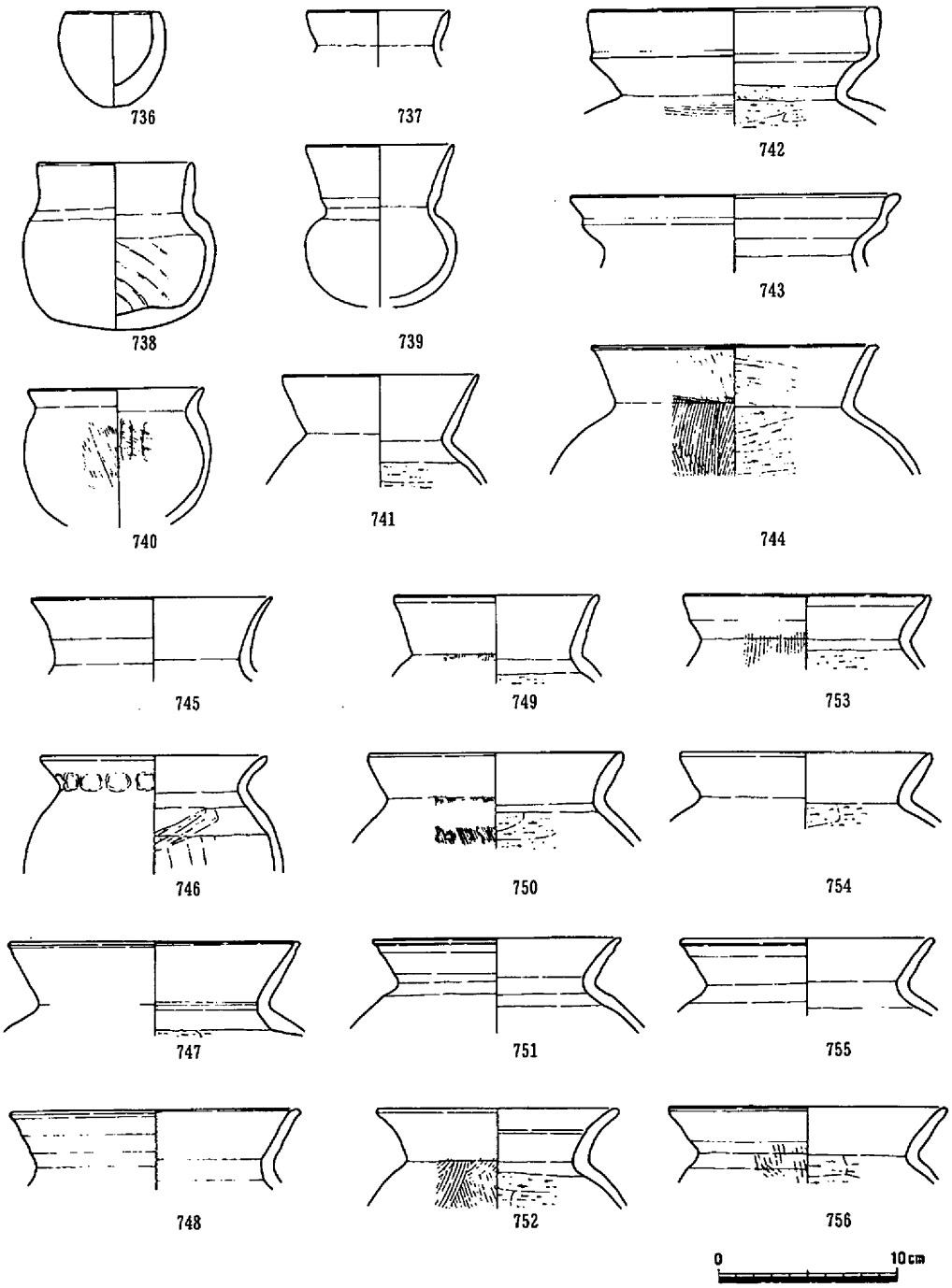
軟質土器：733～735は、外面に斜格子タタキをもつ朝鮮半島系軟質土器である。胎土は精良である。733は、頸部から外反し、さらに外側に屈曲気味に外傾する口縁部をもつ。口縁端部は、端面気味で、中央がやや凹んでいる。口縁端部内側は、ユビをオサエており、やや凹む。この口縁部の形態は、692の初期須恵器と共通している。

土師器:手捏土器は、736の他は数的には少なかった。737～739、741は壺で、口縁部および外面はていねいなナデ、ヨコナデで仕上げている。741は、内面をヘラケズリ、738は、器種の所属が難しくここでは鉢として報告する。甕（742～756）は、大きく複合口縁のもの（742、743）と「く」の字口縁（744～756）に大別できる。複合口縁をもつ甕は、「く」の字口縁のものより量的には少ない。「く」の字口縁をもつ甕も、口縁端部などに種々の特徴を示している。

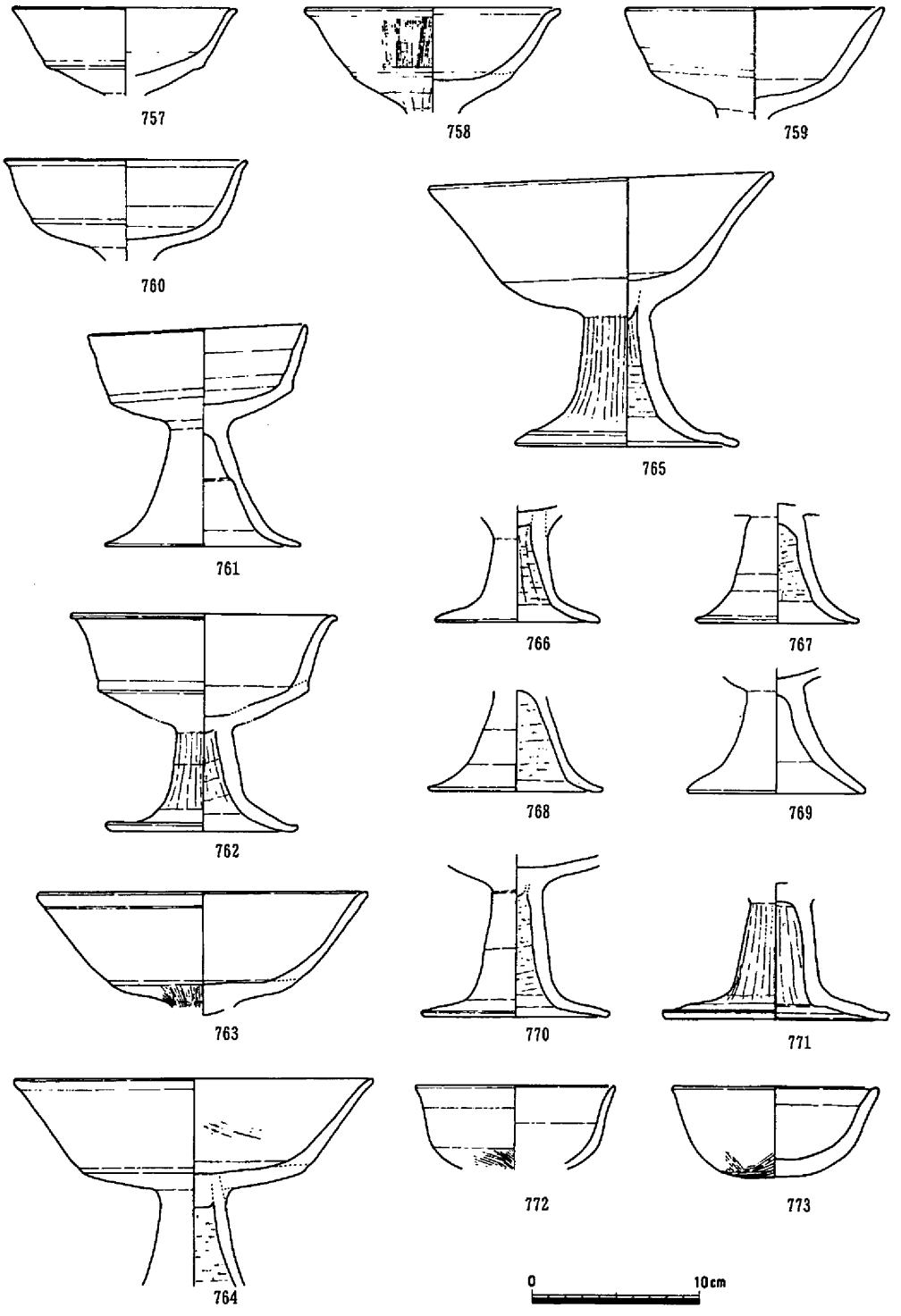
高杯（757～771）は、全て杯底部と口縁部の境に段を有するものである。その段が顕著なもの（761、762）は、少なくやや甘くなっているものが多い。口縁部は、斜目上方に立ち上るものと口縁端部で短く外反するものがある。脚



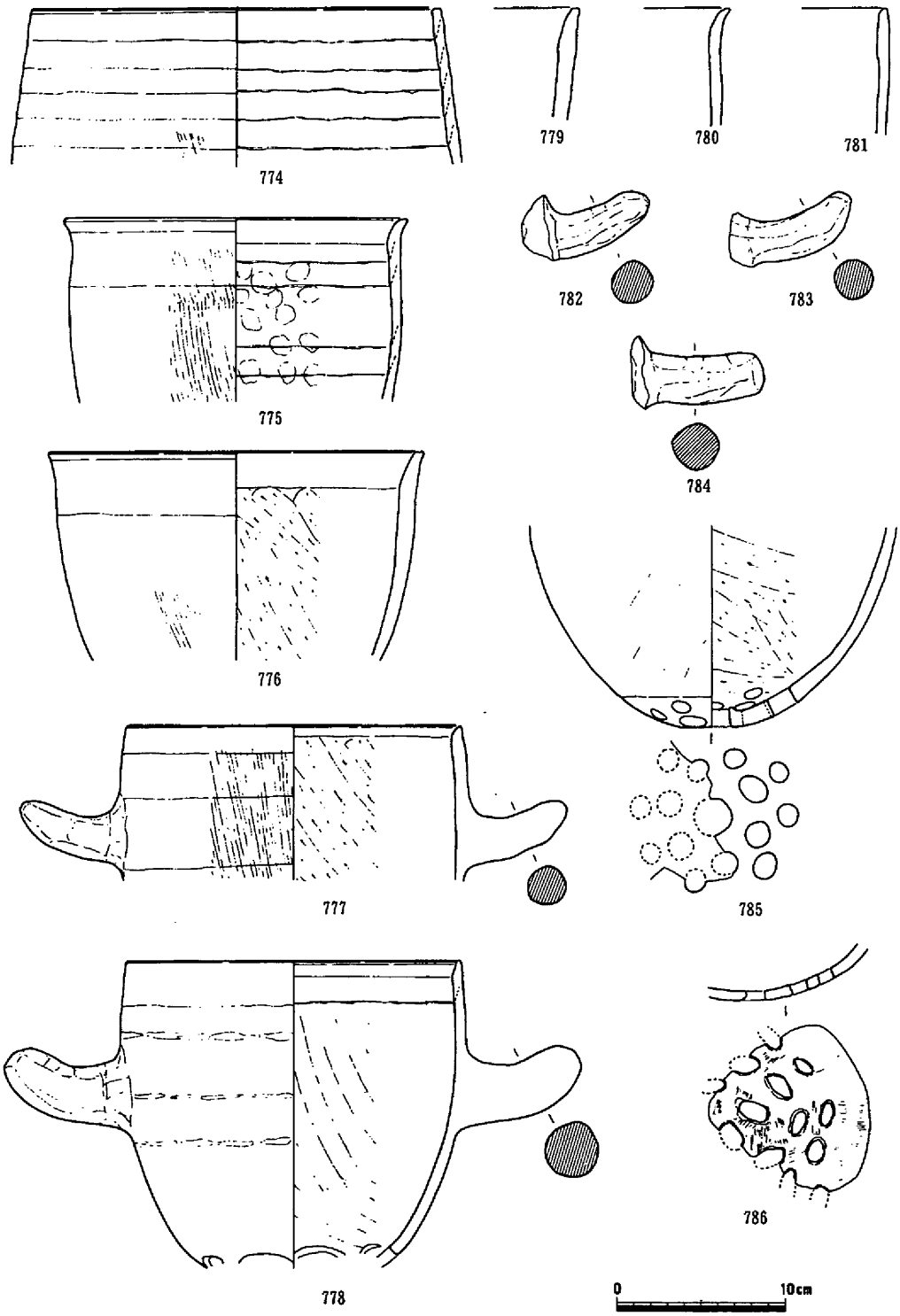
第102図　谷－B 出土遺物（1）



第103図　谷－B 出土遺物 (2)



第104図　谷－B 出土遺物（3）



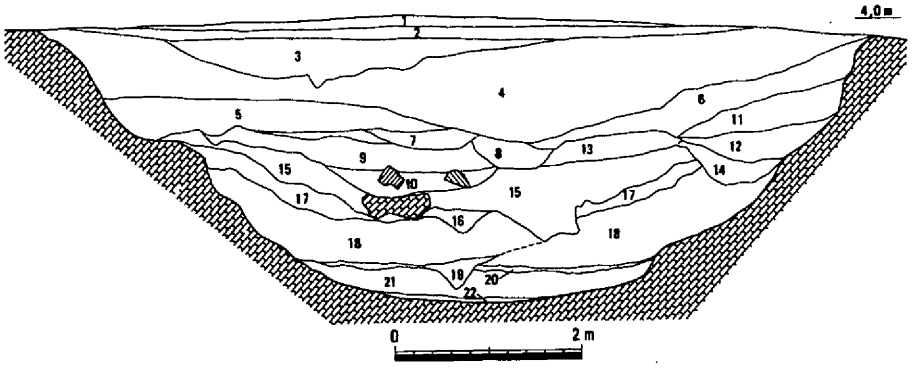
第105図　谷－B 出土遺物（4）

部は、脚裾部が屈曲する770、771や「ハ」の字形に開くものがあり、765の裾端部には稜線上の凸部が認められた。772、773の鉢は、ゆるやかに外反する口縁部をもつ。外面底部は、ヘラケズリで調整している。量的には少なかった。774～786の甑は、高杯などとともに、谷－Bではその数的多さが目立った。口縁部は、口縁部が立つもの（781、777～779）、口縁端部が短く外反する（775、776、780）がある。さらには、774の内傾するものも認められた。774は、他の土器とはやや胎土等を異にするもので、内面には775とともに粘土紐痕が明瞭に残る。外面は、ハケメのものが多く、内面はヘラケズリを施すもの（776～778）とオサエ、ナデによる（774、775）がある。把手は、器形本体に比べて大きめのである。底部は、丸底のがほとんどで、孔は円形のもの（785、786）と楕円形の778がある。

以上の土器は、732はやや新相と考えられるが、他は谷－Aのものと同時期と考えられ5世紀前半期の特徴を示す。

谷－C（第9、10、106～112図）

谷－Cは、調査区南側の丘陵斜面から山裾部に位置している。先端部は、標高約9.5m前後の地点から始まり、やや蛇行しながら、西方向から東方向に進み、12区の低位部に接続する。



1 黒褐色土
2 黄褐色土
3 灰褐色土（鎌倉）
4 茶褐色砂質土
5 灰茶色砂
6 褐色土（平安）
7 淡褐色砂
8 灰色砂
9 淡灰褐色砂
10 黒色砂
11 灰褐色土
12 暗青灰色土
13 黒褐色土
14 黒灰色土
15 黒色土（古墳）
16 暗灰色砂
17 黒灰色土
18 青灰色砂（弥生）
19 暗灰褐色砂
20 青灰色粘土
21 暗灰褐色砂
22 黒茶色土

第106図　谷－C（1／80）

規模は後の削平を受けているものの、先端部付近で幅約４ｍ、深さ約1.2ｍで、出入口部では幅約９ｍ、深さ約３ｍを測る。

谷の堆積層は、第10図Ｃ－Ｃ'地点では、第106図のように22層の堆積が認められた。第１、２層は近世の層であろう。第３層は、鎌倉時代の遺物を多量に包含してした。第４層は平安時代～鎌倉時代、第６層は平安時代、第７～14層は古代、第15層は古墳時代（５世紀前半）の包含層で、手捏土器を中心に多量の土器が出土した。第15層からは、第41図の弥生時代の土器が確認された。

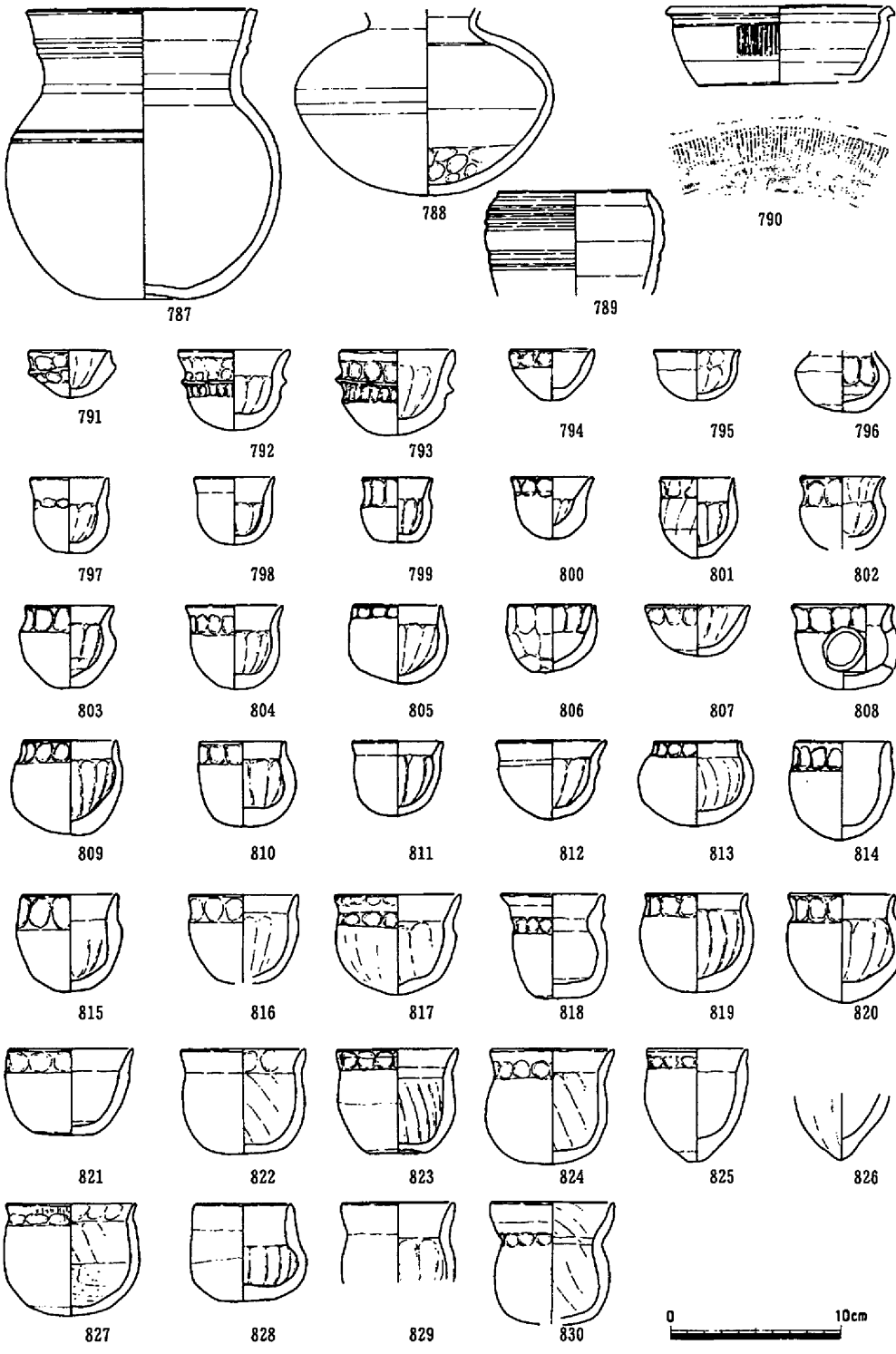
谷－Ｃでは、谷－Ａ、Ｂに比べて８世紀代の遺物が非常に少なかった。また、後述する井戸２、３は、第９、10層前後から切り込まれており、古代の段階でなお谷－Ａは約1.5ｍの深さの開析部として存在していた。此の開析部に湧き出る水を利用して井戸が構築されたと思われる。また、古墳時代では、約２ｍ前後の深さがあり、多量の手捏土器の出土および石製の剣形模造品の出土などの状況から、この開析部に湧く水を対象とし祭祀が行われていた可能性が想起できる。

ここでは、古墳時代の遺物について以下述べる。以下の土器はいずれも第15層から出土したものである。

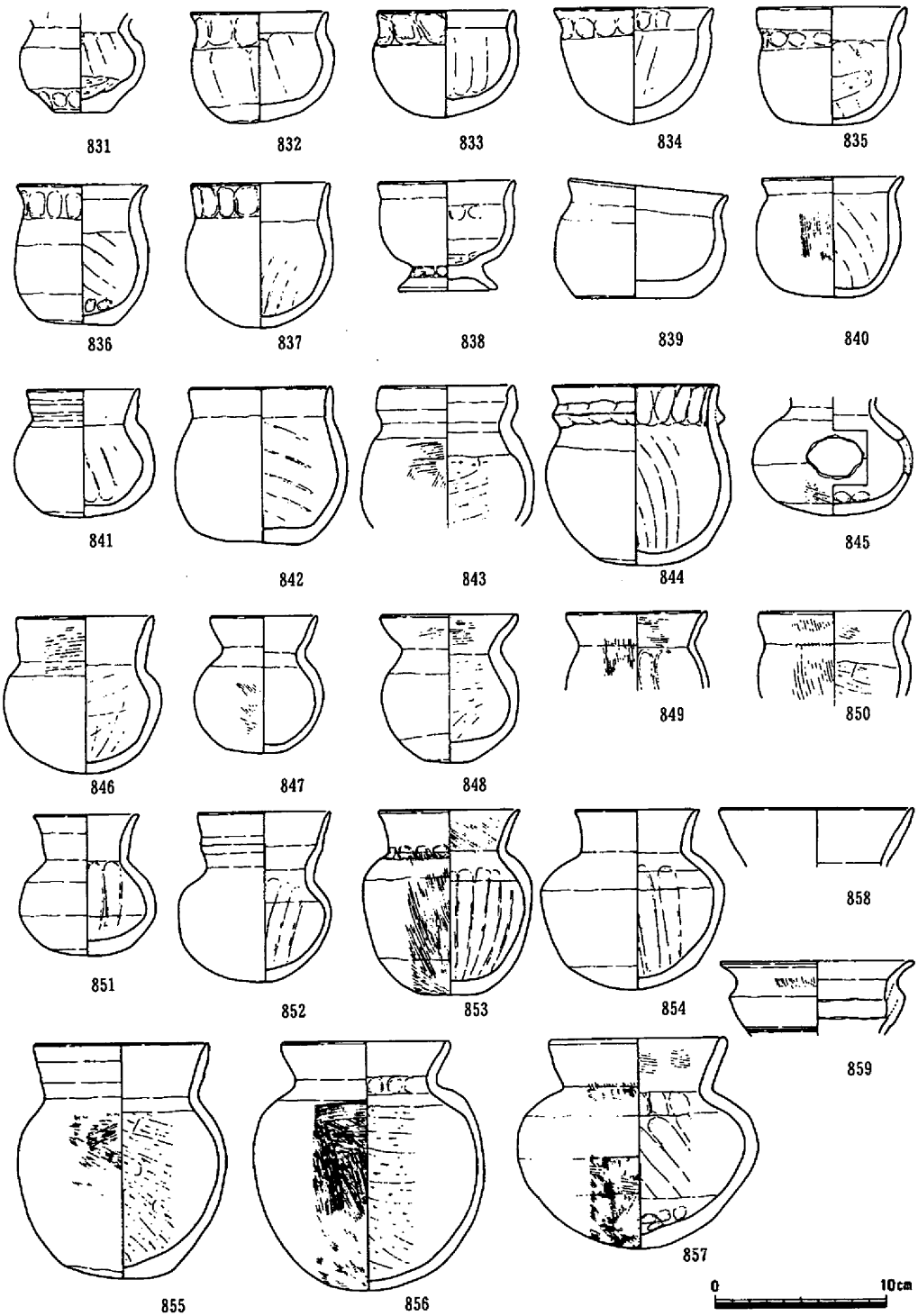
須恵器（陶質土器）:谷－Ｃで出土した初期須恵器は**787～790**の４点のみであった。**787**、**789**は、直口壺である。**787**は、丸味のある体部からやや外反気味に上方に立ち上がる。口縁部には２条の稜線がある。口縁部と頸部との境に凸部、肩部の沈線は、釉が厚くかかっているため不明瞭である。内面体部には、凹凸痕があり当具痕（無文木目）らしきものが認められる。底部は、上げ底になっている。**789**は、玉葱形の体部をもつ。体部下半は、ヘラケズリののちヨコナデで仕上げている。内面底部は、オサエ、ナデで調整している。胎土は精良である。**789**は、断面円形の把手が付く鉢である。県内では、総社市小寺古墳の例がある。内湾する体部から、口縁部は短く外反する。外面上部には多条の沈線を廻らす。**790**は、浅鉢で県内にはその例は認められれない。やや内湾する体部から、短かく外反する口縁部で、口縁端部は下方に肥厚する。外面体部は、上半および頸部をタテ方向の平行タタキを施し、のちヨコナデで仕上げている。体部下半は、ヘラケズリを施す。底部は、上げ底気味になると考えられる。外面下半には、一部煤の付着が認められた。焼成は、瓦質気味で淡灰色を呈する。

以上の須恵器は、初期須恵器と呼ばれるもので陶質土器の可能性もあり識別は難しい。

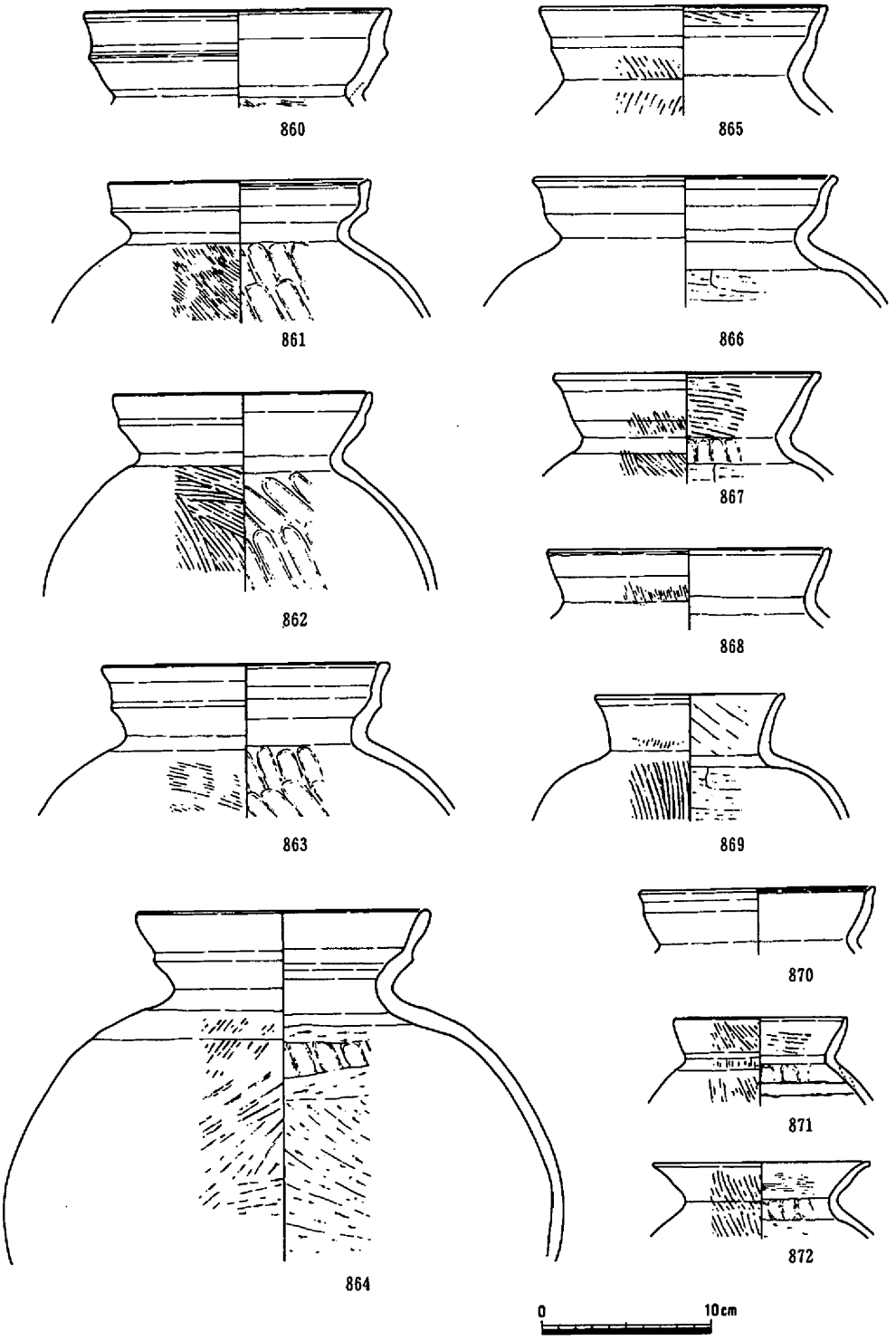
土師器：**791～900**の土師器は、手捏土器を中心に多量に出土した。手捏土器は、小形の壺、甕類との識別が困難であるため、ここでは**791～840**を手捏土器として報告する。**791～793**は、いわゆる釜形の土器である。口縁部下をつまみ出して鍔状のものを造り出している。その他の手捏土器は、形の大小、形態の違いはあるものの、おおむね口縁部をオサエ、ナデ、内面をユ



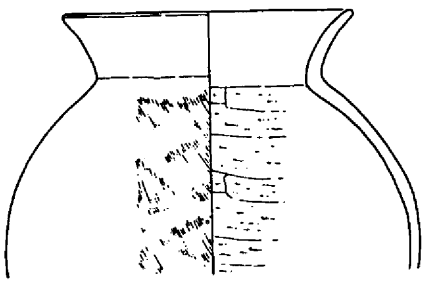
第107図　谷－C 出土遺物 (1)



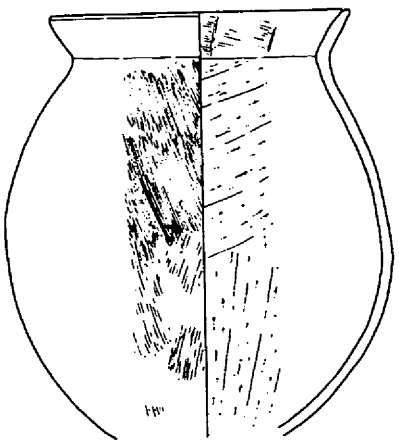
第108図　谷－C 出土遺物 (2)



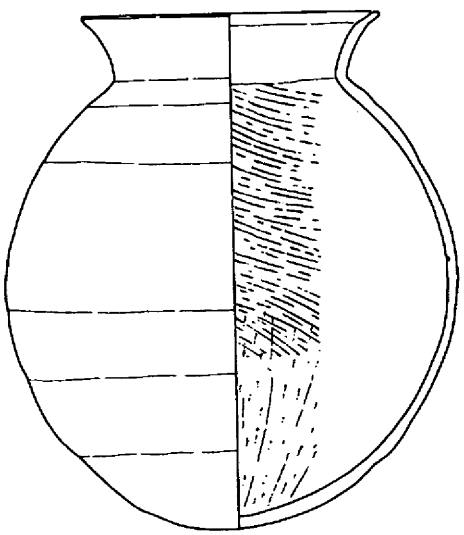
第109図　谷－C 出土遺物 (3)



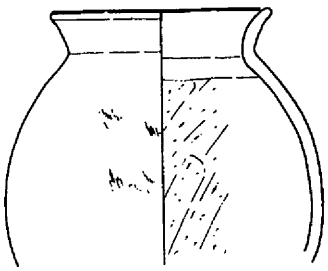
873



874

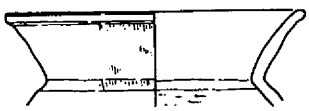


875

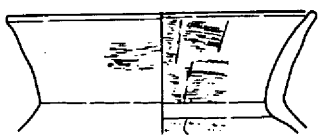


876

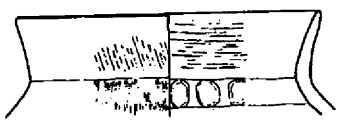
877



878

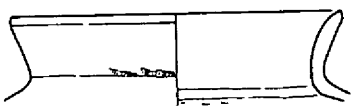


879



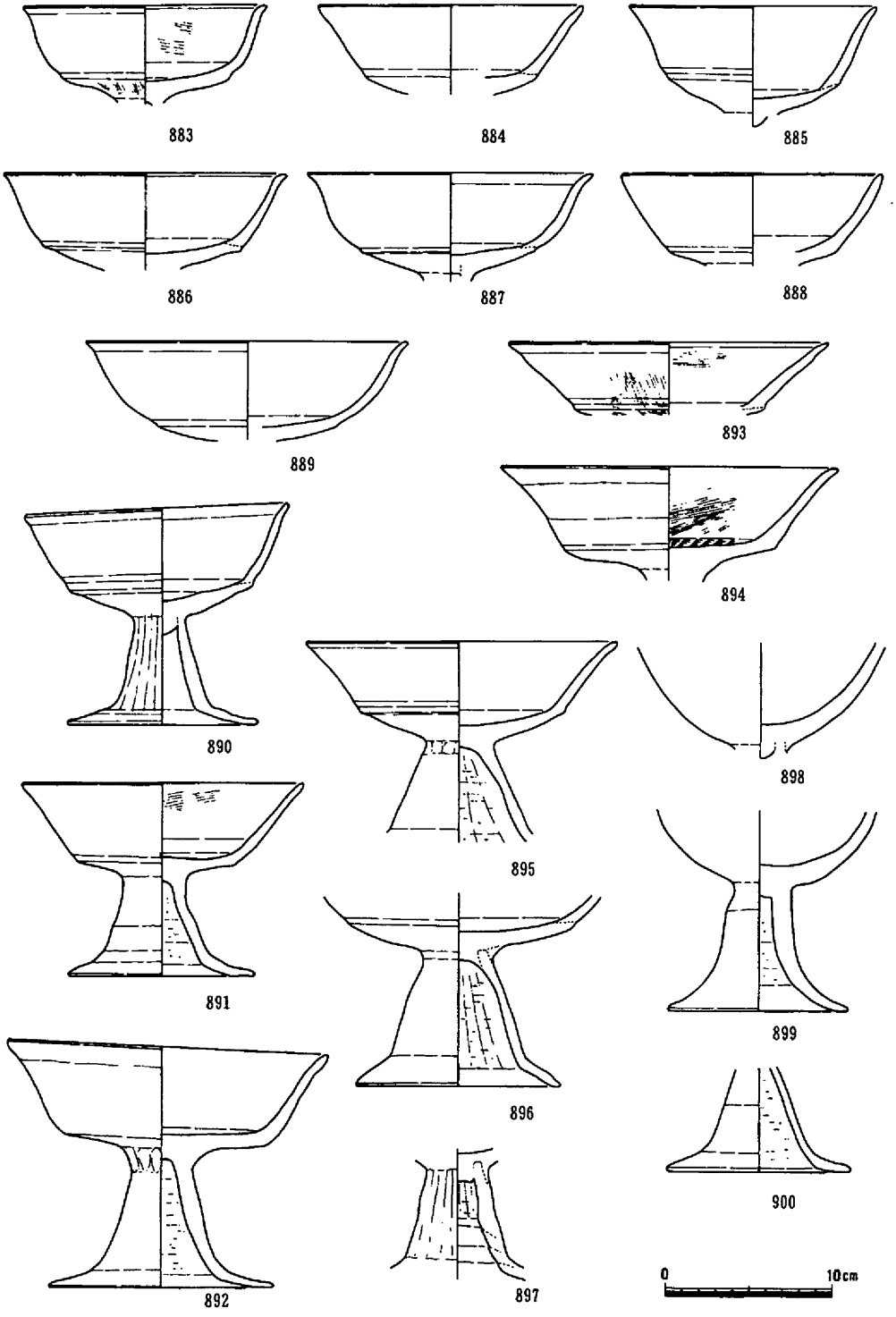
880

881

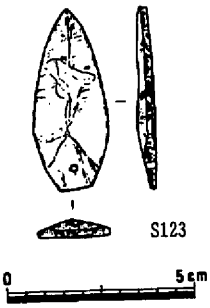


882

第110図　谷－C 出土遺物 (4)



第111図　谷－C 出土遺物 (5)



第112図　谷－C
出土遺物（6）

ビナデアゲで整形している。825、826は、尖底状を呈しており、831、839は平底である。また、838は台が付く。802は、845と同様に体部を焼成後に穿孔している。841～858は、小形の壺および甕である。手捏土器と同様に壺と甕の識別は難しい。口縁部は、大半のものが「く」の字を呈するもので、843、852のように複合口縁をも若干数含まれる。844は、ゆるやかに外反する口縁部に貼り付け突帯を有するものである。体部は、853、855、856のようにやや胴長気味のものが混じっている。外面の調整は、ハケメを施すものが多く認められ、内面はユビナデアゲが大半を占めるが、ヘラスゲリのものも若干数ある。859は、下部が欠損しているため器形は不明である。内面には粘土紐痕を明瞭に残す。

甕（860～882）は、溝－1、谷－A、Bと同様に、大きく複合口縁のもの（860～866）と「く」の字口縁（867～882）に大別できる。複合口縁のものには、口縁部の形態が種々ある。また、867、868、870などは、口縁部に複合口縁的要素が若干残っている。外面は、ハケメを施すものが多く、口縁部内面にもハケメを残すものもある。内面は、ユビナデアゲによるもの（861～863）ヘラケズリを施す864、866、867がある。「く」の字口縁をもつ甕（867～882）は、複合口縁をもつ甕よりも数量的にも圧倒的に多い。体部は、やや面長のもの（874～876）が目立ち、最大径は体部中央やや下半にある。外面は、ハケメによるものが多く、内面はヘラケズリがほとんどである。875は、下半はヘラケズリであるが、上半をハケ状工具により調整している。

高杯（883～900）は、手捏土器、甕などとともに数量的には多く出土した。高杯には、杯部の底部と口縁部の境に段を有するもの（883～896）と段がなく内湾する（898、899）がある。段がなく杯部が内湾するものは量的には少ない。杯部に段を有するものも内湾して立ち上がる888や内湾して立ち上がり口縁部で短く外反する（883～887、889、890）がある。さらに杯部口縁がゆるやかに外反気味に立ち上がる（891～895）がある。全体的には、杯部の底部が小さく、丸味をもつものが多い。脚部は、短脚気味で脚柱部は太く、末広りの裾部である。897は、脚柱部内面の上部はヘラケズリを施していたが、下半はヘラケズリを省略しており、粘土紐痕が螺旋状に良く残っていた。この粘土紐痕は、図では外傾接合を呈するが、それは逆で、実際には杯部と脚部を分離して整作する時に、脚部は反対に杯部側から内傾接合により粘土紐を巻き上げてつくったものと思われる。897の場合は、粘土紐を右回りに巻き上げていた。溝－1の645、646も同様である。

以上の土器は、その時期等は谷－A、Bと同様なものと考えられる。しかし、前述したよう

に谷－Cには、非常ともいえる手捏土器が出土しており、谷－Cを対象とした何らかの祭祀か行われていたといえよう。

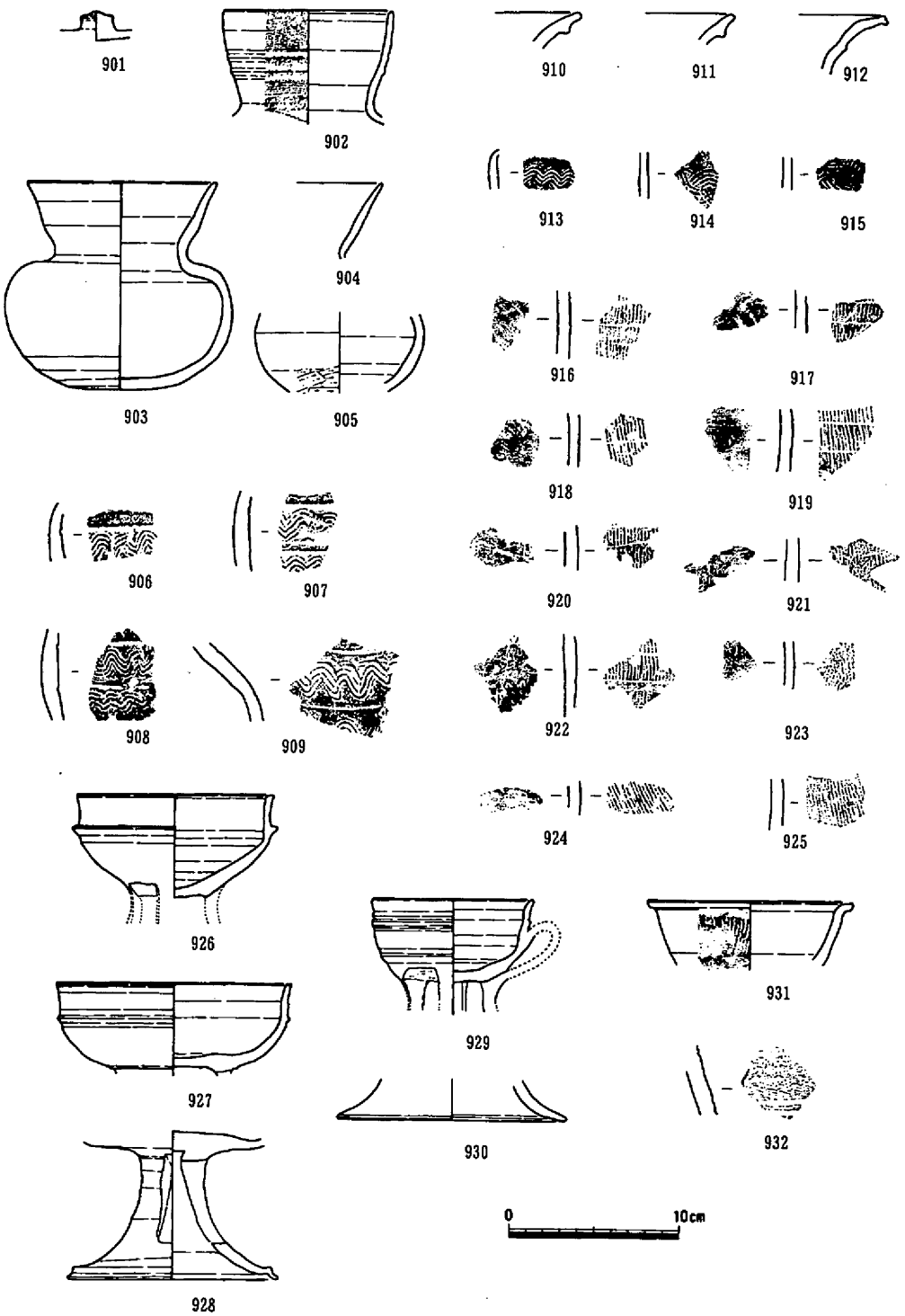
S123は、以上の土器と伴って出土したものである。全長48㎜、最大幅20㎜、厚さ4.5㎜の石製の剣形模造品である。片面には、縞が逆Y字形にはいり、付根には径約2.0㎜の孔が穿たれている。全面に不定方向に研磨されている。

（5）包含層出土遺物

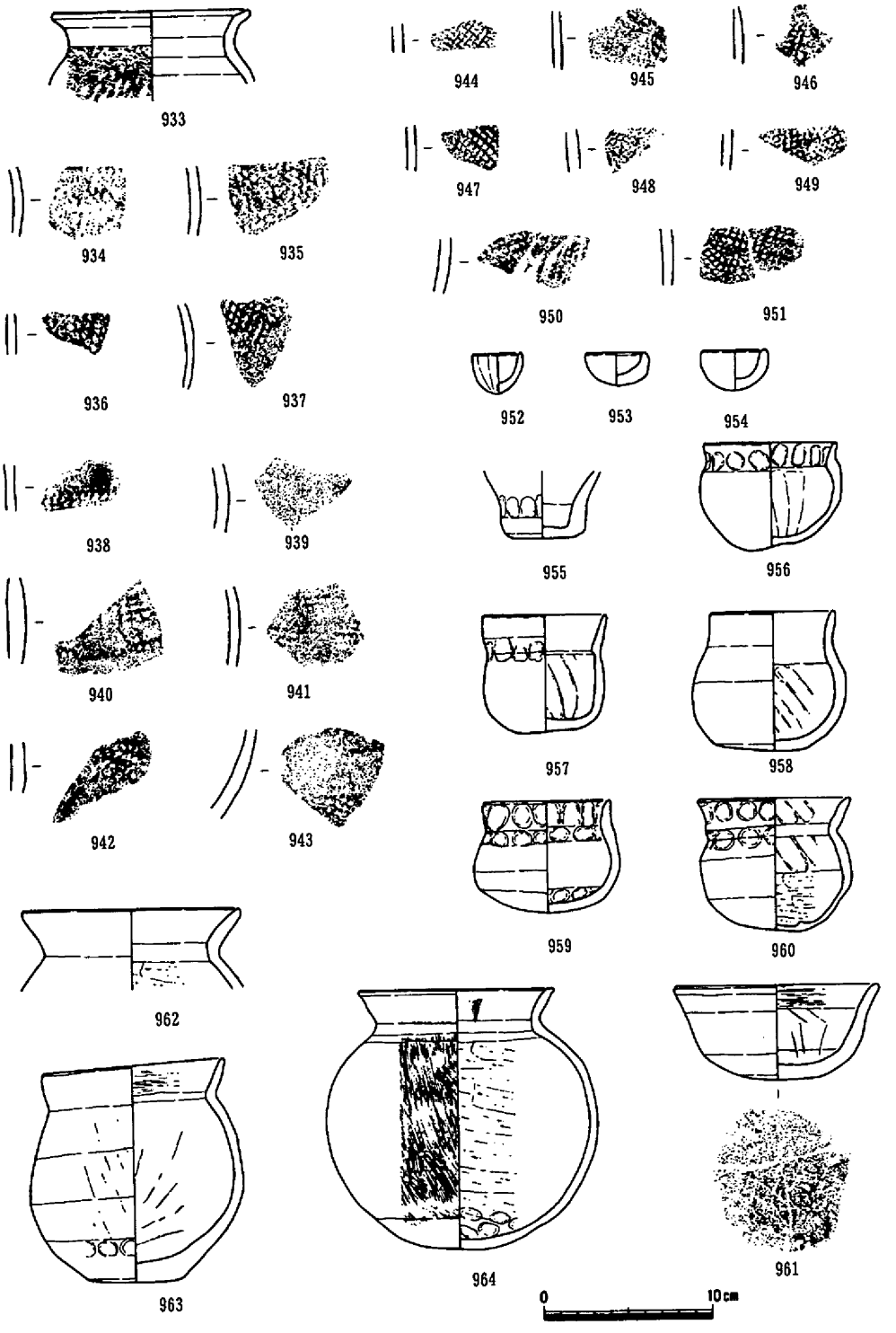
ここでは、丘陵斜面および山裾に若干残存していた包含層、11、12区の低位部の堆積層に包含していたものなど、遊離した古墳時代の遺物について報告する。特に古墳時代の遺物は、低位部の堆積層に多く混在していた。

須恵器（陶質土器）:壺類は、902～909、913～925がある。902は、頸部から外反し、さらに内湾して上方に立ち上がる口縁部をもつ。口縁部中央には、2条の稜線があり、その上下に波長の短い波条文を施文している。903は、口縁部に癖をもって斜上方に立ち上がり、体部は玉葱形を呈している。904は、437と器形、焼成が類似する。905は、底部に手持ちのヘラケズリが認められる。906～909は、同一個体と考えられ、729～731も同様であろう。この土器は、胎土中に著しいほどの砂粒を含んでいる。913～915は、酷似した胎土、焼成であるため同一個体の可能性が強く、438も同様である。913は、口縁部に近い破片で、波状文を施す。914、915は、特徴的な櫛描の組紐文を施している。これらの土器も、906～909と同様に砂粒を多く含んでおり、焼成は甘く暗灰褐色を呈する。906～909、913～915は、前述したように造山古墳を中心とする特定地域に認められる初期須恵器の一群と同様の特徴を示している。916～925は、それぞれの特徴から同一個体と考えられる。谷－A、Bから出土の683、725～728も同様であると考えられる。外面にタテ方向の平行タタキを施したのち沈線を廻らす（螺旋状）ものである。甕には、910～912がある。910～911は、類似しているが同一個体ではない。口縁部は大きく外反し、口縁端部は端面をもつ「コ」の字状を呈する。口縁部下には、稜線をもち、口縁端部内面は指でオサエでやや凹む。910は、444、445と胎土、焼成が酷似しており、同一個体の可能性が強いと考えられる。912は、口縁部は2重に外反し、口縁端部が上下にやや肥厚する。焼成は、生焼けで瓦質気味である。また、912の体部は910と同様に溝－1から出土している。

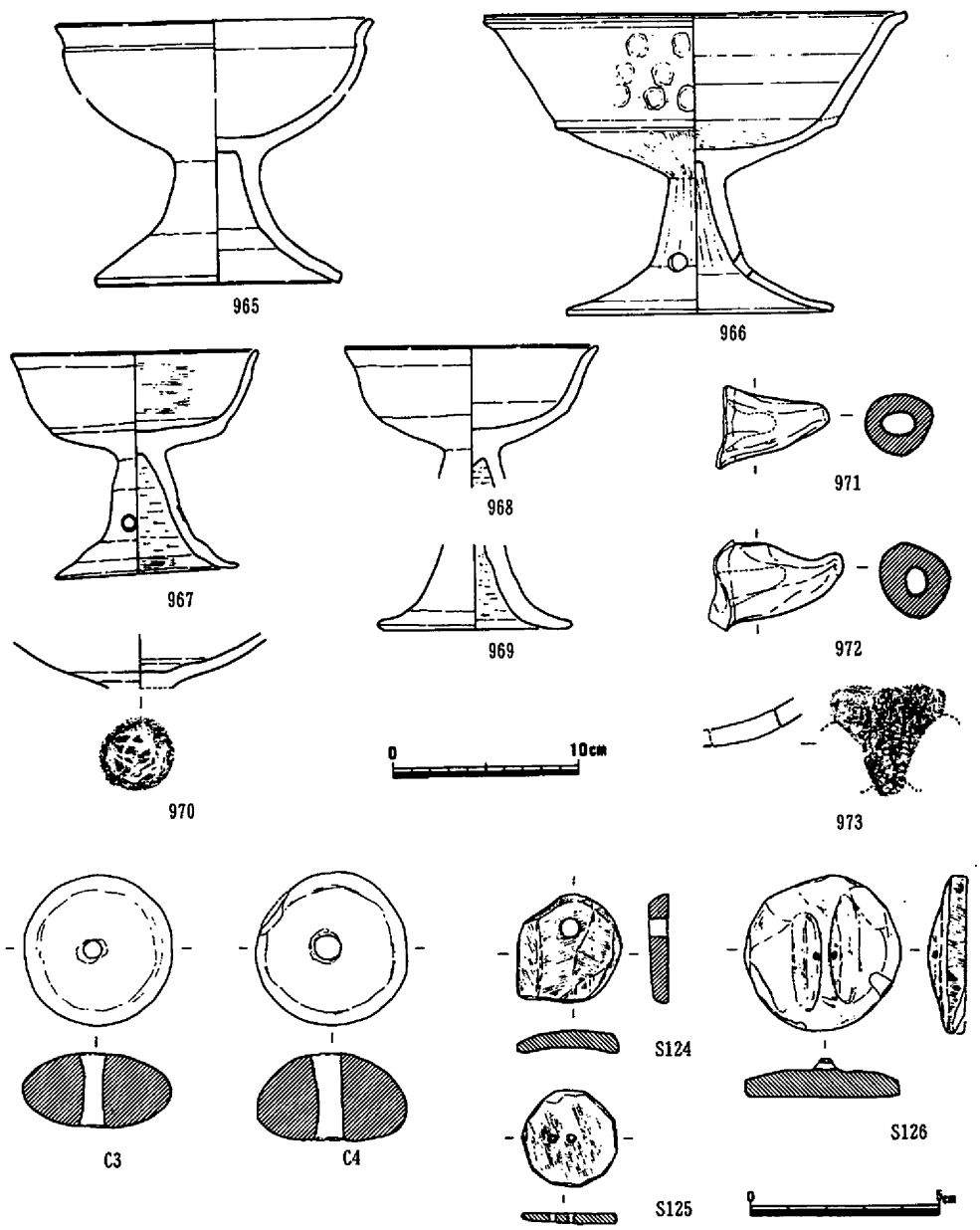
高杯は、926～928がある。928は古墳時代後期のものである。926は、杯部体部は角度をもっており、口縁部は外反気味に立ち上がる。口縁端部は、端面をもち、やや外に肥厚させている。口縁部と体部境の稜線は、受部状に外に延びる。脚部は、三方に透しが切られている。蓋の可能性も考えられる。927は、口径がやや大きく、丸味をもつ体部からやや外反する口縁部をもつ。端部は、端面をもち、外側に肥厚させている。透しは、4～5カ所と思われる。929は、



第113図　包含層　古墳時代出土遺物（1）



第114図　包含層　古墳時代出土遺物（2）



第115図　包含層　古墳時代出土遺物（3）

板状の把手が付き、脚は4カ所に透しを開けている。口縁部は短かく外反する。この器形は、439と類似しており、胎土は906～906などと同様に砂粒を多く含む特徴的なものである。脚部の931は、胎土が精良で、焼成も良好である。932～は、器台の脚部と考えられ、沈線間にやや雑な波状文を施している。

軟質土器：930、933～951は、外面にタタキを施す朝鮮半島系土器である。930は、790と類似する浅鉢である。790は、須恵器に焼成されているが、930は土師質に焼き上げられている。口縁部は、短かく屈曲して外側にのびる。外面は、930と同様にタテ方向の平行タタキ、体部下半はヘラケズリで仕上げている。933～935は、733～735と酷似しており、胎土が精良で、外面に斜格子のタタキがつく。

933は、口縁部の形態が689、692、733などと共通している。936～943は、同一個体の可能性が強い。外面には格子目タタキを施す。944～951も同一個体と考えられる。936～943の格子目タタキよりやや小さめのタタキが付く。

土師器：952～960の手捏土器には、その大半に黒斑が認められる。963は、平底気味で、体部はやや面長を呈し、536～538と類似している。内外面は、ハケ状工具により調整している。底部には、538と同様にカゴメ痕が残る。

963は、その特徴から朝鮮半島系土器の影響を多分に受けたものと考えられる。961の底部には木葉痕が残る。

高杯の965は、杯部は丸味のある体部から、短かく外反する口縁部をもつ。脚部の杯部との接続部は、他に比べて太く、その特徴からみて970と同様に、須恵器的接続方法をとっていると考えられる。脚裾部は、「ハ」の字形に開き、端部には端面をもっている。966は、杯部が大きく、口縁端部を屈曲させて、外側に開き、端部をさらに上方に肥厚させている。甑の973は、丸底の底部に楕円形の孔が放射状に穿たれている。底部外面には663～665と同様にカゴメ痕が残る。

971、972は、把手部の中が空洞化したものである。これらの把手は、当初甑の把手部の変形と考えられたが、再考の結果カマドの把手の可能性が強く、新相のものであろうか。

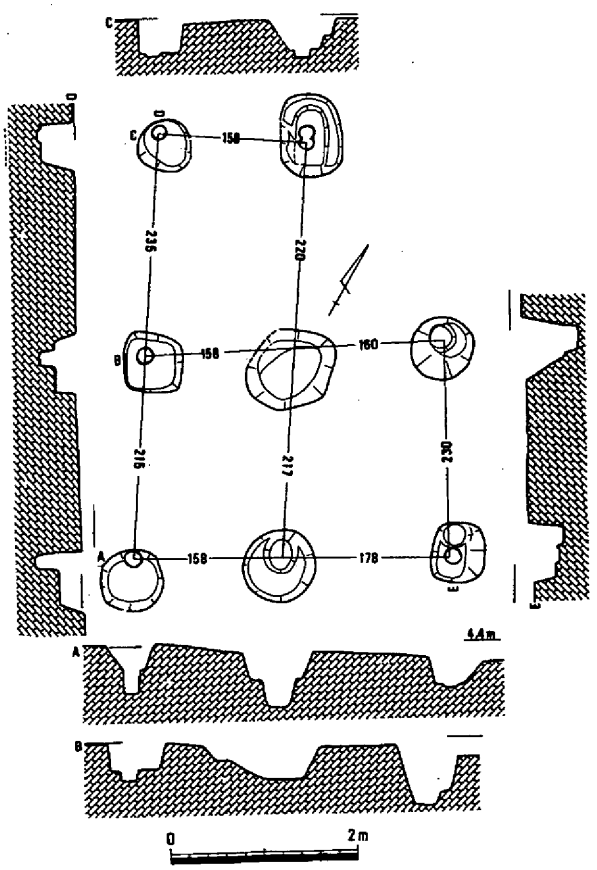
以上、各調査区の包含層出土土器を図示したが、図示したものは特徴的なもので、その他普遍的な遺物は多量に出土している。

土製品：C３、C４は、紡錘車と考えられる。いずれも11、12区の古墳時代（５世紀前半）の包含層から出土したものである。C３は、断面形が楕円形を呈し、重量約31.7ｇを測る。C４は、断面形が一方は水平面で、片方はやや脹らみ気味に丸味をもつ。重量約37.5ｇである。

石製品：S124は、全体に反りをもち、表面を面取りに研磨している。ペンダント形を呈している。S125、S126は、鏡形の模造品である。S125は、側面を面取りに研磨して、円形に整えている。中央やや外寄に、孔を２ケ所に開けている。S126は、滑石製品で、S125と同様に側面を研磨して円形に作っている。鏡面側は、ていねいに研磨して水面にしている。裏面は、やや凸状になり、「〆」字状に鈕部を削り出している。鈕部には、細い円孔を穿っている。いずれも５世紀前半のものと考えられる。

第５節　古代・中世の遺構・遺物

今回の調査では、古代、中世の遺構、遺物が調査区全域にわたって検出された。丘陵緩斜面での遺構は、建物、井戸、土壙、溝を中心とする居住域を示すものが中心で、その大半が古代～中世のものであった。遺構は、海抜12ｍ前後より下部の丘陵緩斜面に存在し、12ｍより高所には、傾斜度が急になり遺構は存在しなかった。しかしながら、丘陵緩斜面の大部分は、後世の削平が著しく、遺構の残存状態は良くなかった。１、５、６、８、10区の一部が、局部的に包含層や遺構の残存が比較的良好であった。しかし、遺構は断続的、断片的にしか把握できなかったため、遺構の本来の構成を復元するのに大きな障害となった。それに比べて、11、12区の低位部では、溝などの遺構および大量の土器を包含する堆積層、さらにその上層の水田層などが残存していた。また、調査区北西端部には、中洲状の一部の存在が確認された。（中野）

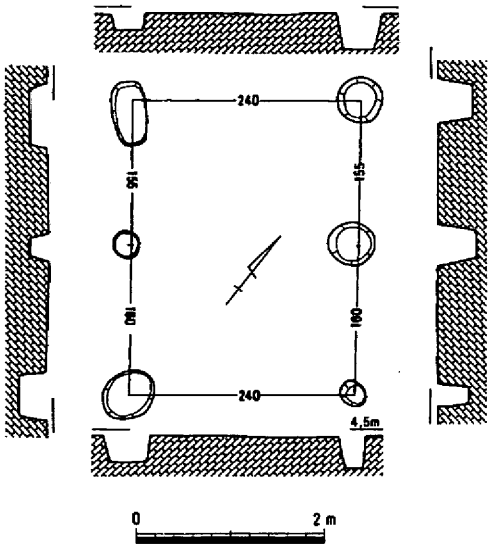


第116図　建　物－１（1／80）

（１）建物

建物－１（第116図）

１区の北端で建物－２の東で検出した２間×２間の総柱建物であると考えられる。北の隅の１本は道路用地外のため検出不可能であった。柱間寸法は桁が215～235cm、梁が158～178cmを測る。棟方向はＮ－36°－Ｗを示すし、建物－２とは平行ではない。建物の規模は、桁行450cm・梁行336cm・面積15.12㎡の長方形建物である。柱穴の平面形は大体方形で、一辺60cm内外・深さ40cm～60cmを測る。柱痕の認められるものは８本中７本もある。柱穴検出面の海抜高は4.4ｍである。柱穴から遺物は出土していない。古代のものであろうか。



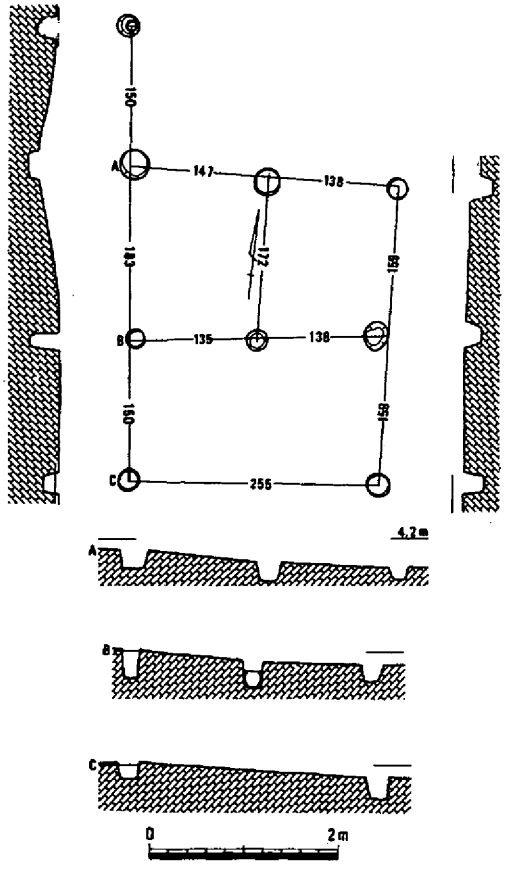
第117図　建　物－2（1／80）

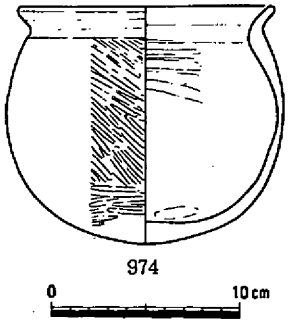
建物－2（第117図）

1区の北端で検出した2間×1間の建物である。周辺の柱穴は少なく、2間より伸びる可能性は少ない。柱穴の平面形は北西隅を除き円形で、直径22～45cm・深さ20～40cmを測る。柱痕の認められるものはない。柱間寸法は桁が155～160cm、梁が240cmを測る。棟方向N－37°－Wを示す。桁行315cm・梁行240cm・面積7.56㎡の長方形建物である。柱穴から遺物は出土していない。時期は不明であるが、古代と考えておきたい。

建物－3（第118図）

建物－4と重複して検出した3間×2間の建物である。棟方向はN－2°－W、桁行483cm・梁行255cm・面積12.35㎡である。柱穴は9本あって、その平面形は不整円形で、大きさは直径20～30cm・深さ5～30cmを測る。南から2列目の中央の柱穴に完形の土師器甕（974）が置かれたような状態で検出できた。974は、古代のものと考えられる。（浅倉）

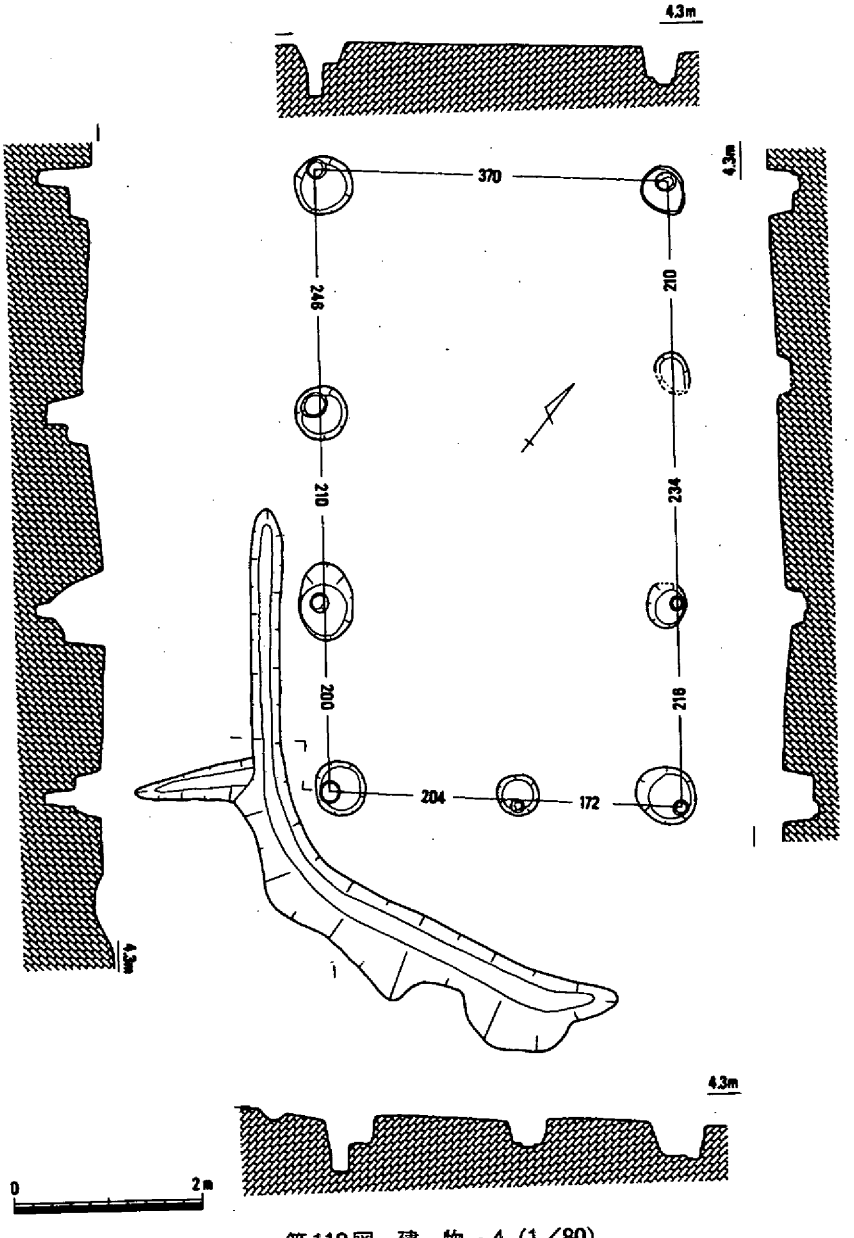




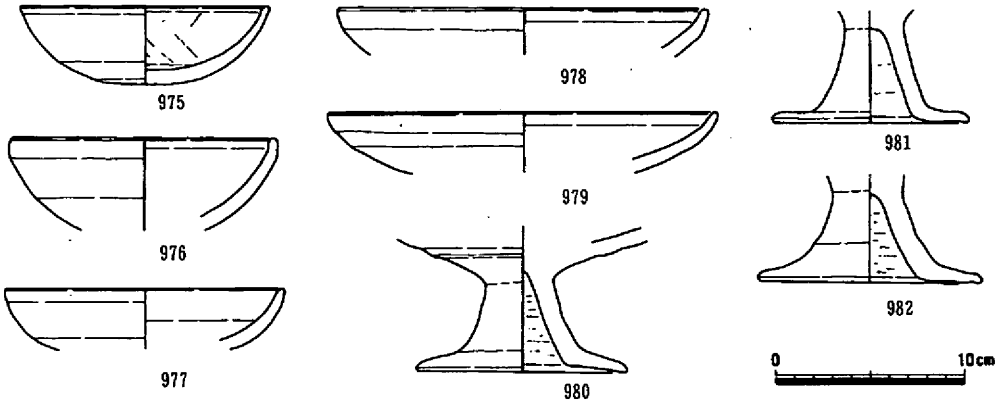
第118図　建　物－3（1／80）出土遺物

建物－４（第119、120図）

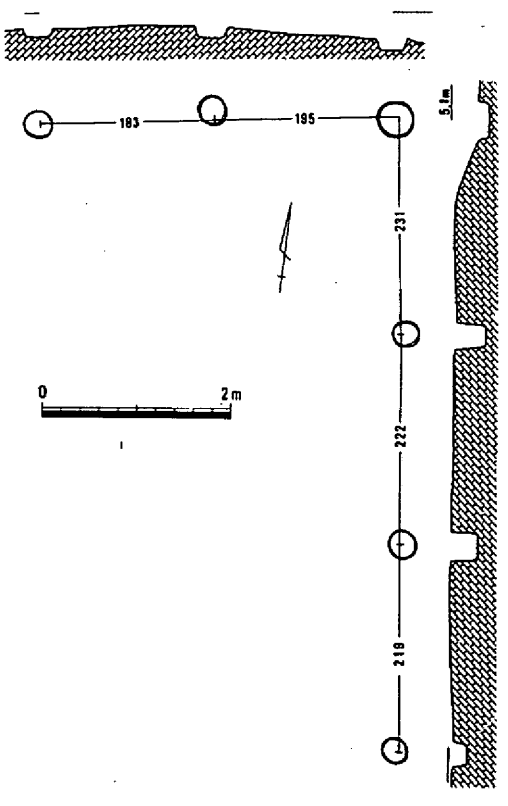
１区の北部で検出した３間×２間の長方形の建物である。棟方向はＮ－38°30′－Ｗを示す。桁行660cm、梁行370cm、面積24.42㎡である。柱穴の平面形はほぼ円形で、直径40～60cm、深さ10～60cmを測る。柱痕の認められるものは９本中８本もある。この建物の南にＬ字形に溝が検出できた。溝は、幅70～100cm、深さ約10cmを測る。溝の位置からみて建物に付随すると考



第119図　建　物－４（1／80）



第120図　建　物－4（溝）出土遺物



第121図　建　物－5（1／80）

えられる。溝からは、図示した以外に相当量の須恵器、土師器が出土した。図示した土師器は、**975～977**が、椀、**978～982**が高杯である。高杯には、**978～980**の杯部の大きいものが認められた。特に、**978**、**979**の内面はていねいなナデによって仕上げられていた。これらの土器は、いずれも７世紀末～８世紀の前半の特徴を示す。（中野）

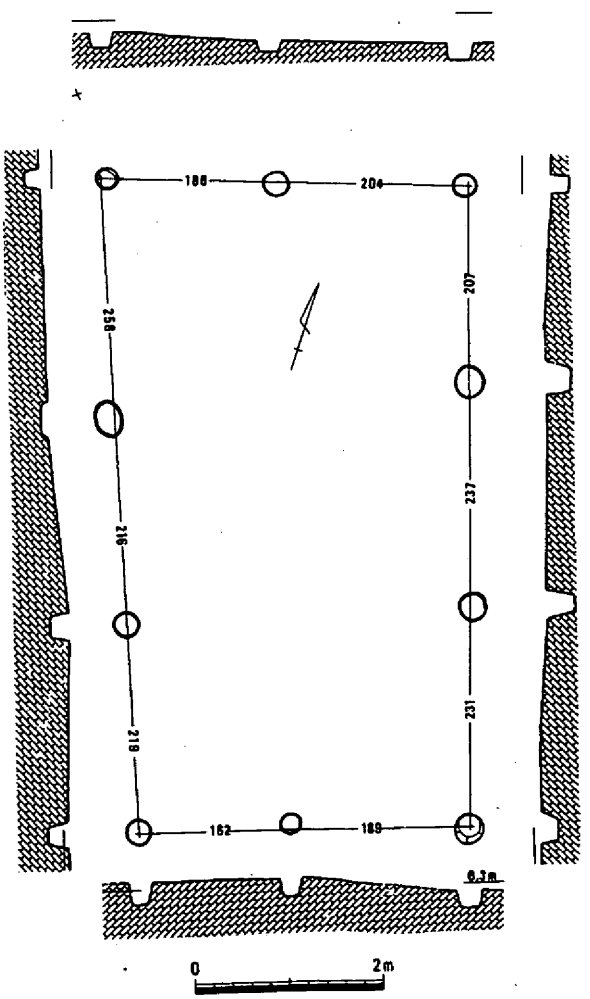
建物－５（第121図）

２区の北端部で検出した３間×２間の長方形の建物である。建物－３から40ｍ北東に位置する。棟方向はＮ－８°－Ｗを示す。桁行672cm・梁行378cm・面積25.40㎡である。柱穴の平面形はほぼ円形で、直径22～40cm・深さ５～30cmを測る。柱痕の認められるものはない。逆Ｌ字状に北と東の柱穴列が検出できたが、西と南の柱穴は既に削平を受けていた。遺物は出土していないものの、周辺の状況から古代～中世と考えたい。（浅倉）

建物－6（第122～126図）

・調査区北部の中央（3区）に位置し、建物－5の南約30mに検出した3間×2間の掘立柱建物である。建物は、棟方向をN－18°－Wを指し、桁行693cm、梁間390cm、床面積27.22m²を測る。柱間寸法は、桁216～257cm、梁162～204cmと不揃いで、建物自体少し歪んでいる。柱穴は、いずれも円形で、直径25～30cmで深さは20～30cmであった。建物の周囲には、北、西、南の三方に「コ」字状に溝が検出された。溝は、北、西側では外側の肩部が削平を受けていたが、南側では幅170～200cm、深さ約20cm残存していた。建物は、この「コ」字形の溝のやや西側に寄る位置（第123図）を占めている。

溝の堆積土（暗茶褐色泥砂土）、およびその上層に部分的に残存していた包含層からは、銅印、**983～1010**の遺物が出土した。

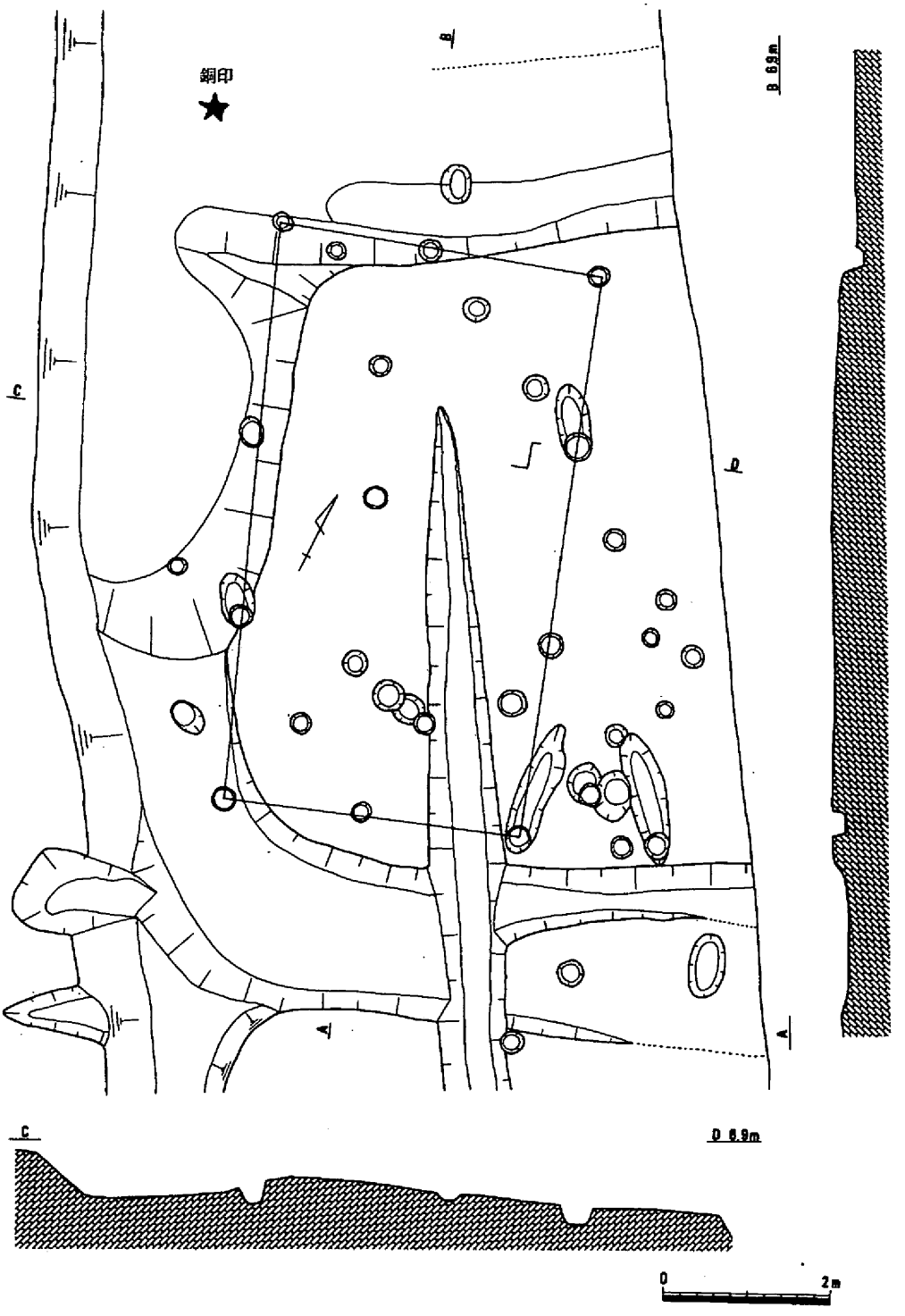


第122図　建　物－6　(1／80)

銅印は、建物の北西隅の柱穴から北西約1.5mの包含層中から検出された。銅印は、一部欠損しているが、印面の大きさ一辺32mmの正方形で、印高は28mm、重さは40gを測る。つまみの形状は鶏頭鈕で、中央に直径約2mmの紐通しの円孔がある。

印字は厝と観察できるが、字の意味、読みについては諸説を聞くが、いまだ明解な答えは出ていない。しかし、印の形状から平安時代と考えられ、さらにその大きさから私印に属すると思われる。

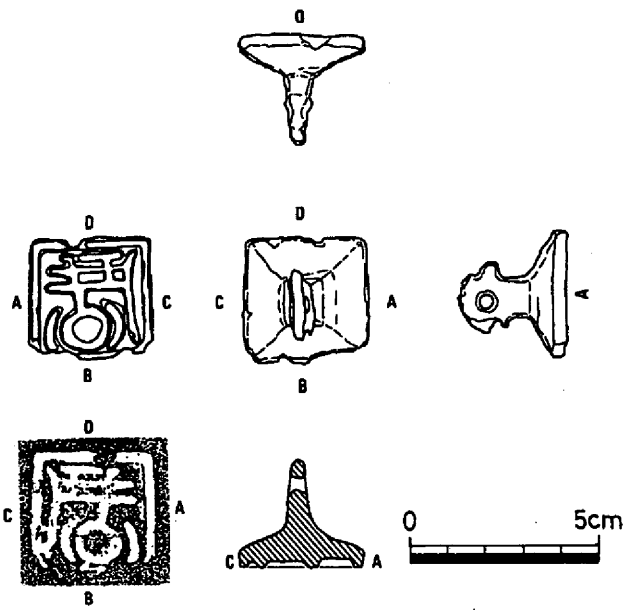
983～987は黒色土器で、口径が大型で、高台も大きい（**984**、**987**）もの、やや小型の**983**などがある。いずれの黒色土器も内面をヘラミガキを施す、黒色土器Bに属するものである。**989**は、土師器の台付の盤である。**990～1004**は緑釉で、図示した以外にも6点



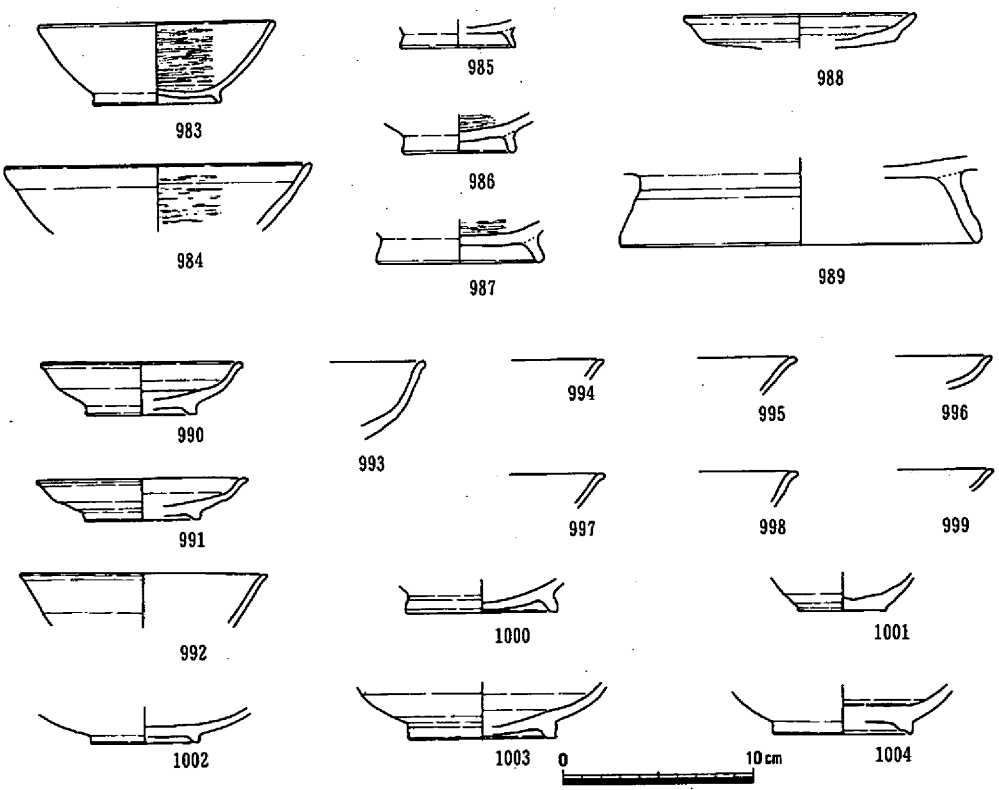
第123図　建　物－6 周辺（1／80）

の体部もあり、今回の調査で出土した90点中の21点がこの地点で検出された。990～1003はいずれもその諸特徴から京都産のものと考えられ、1004は滋賀県で生産したものと酷似している。1005は円面硯で透しがある。1006、1007は、壺の底部および甕腹の転用硯である。1008～1010の風字硯は、1008がていねいなつくりに比して、1009は全体が器壁が厚く、凹凸がある。

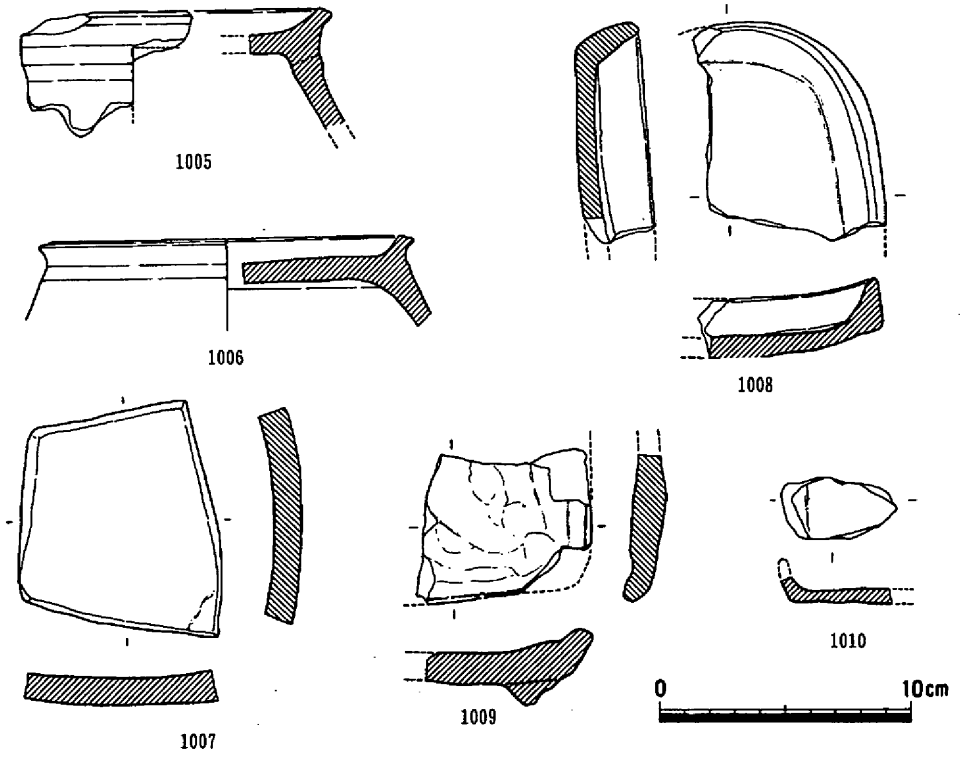
（浅倉、中野）



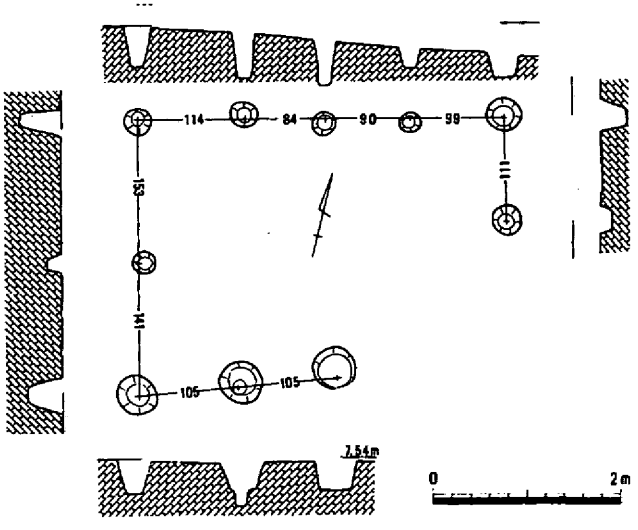
第124図　銅印（½）



第125図　建　物－6 周辺出土遺物（1）



第126図　建　物－6 周辺出土遺物（2）



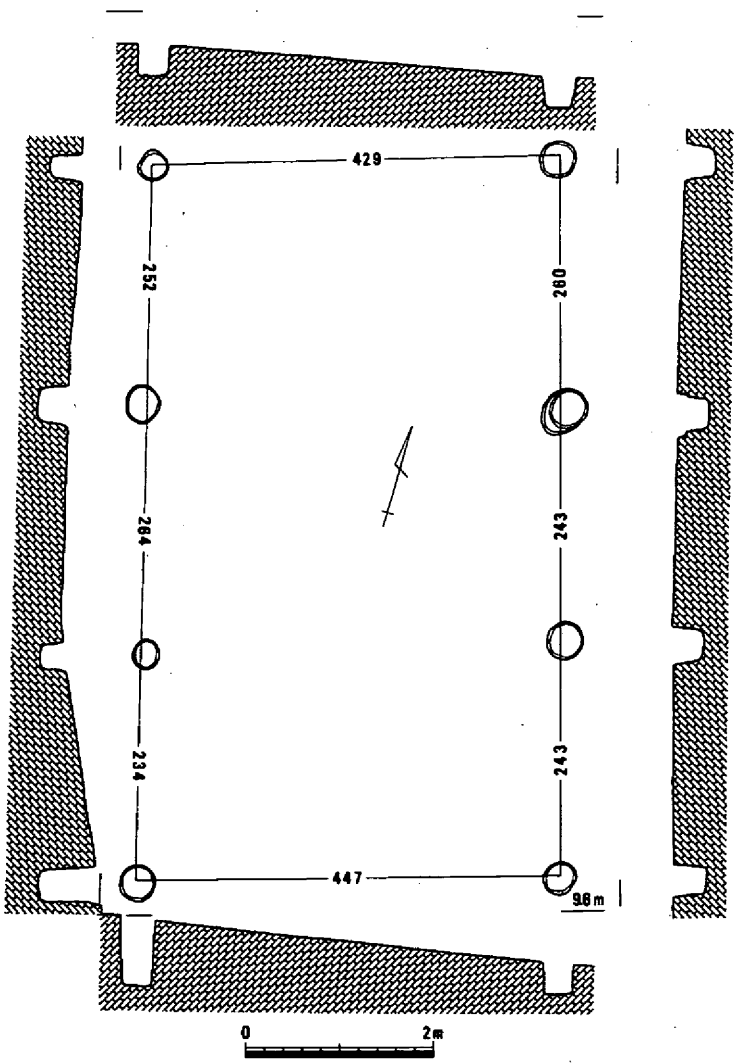
第127図　建　物－7（1／80）

建物－7（第127図）

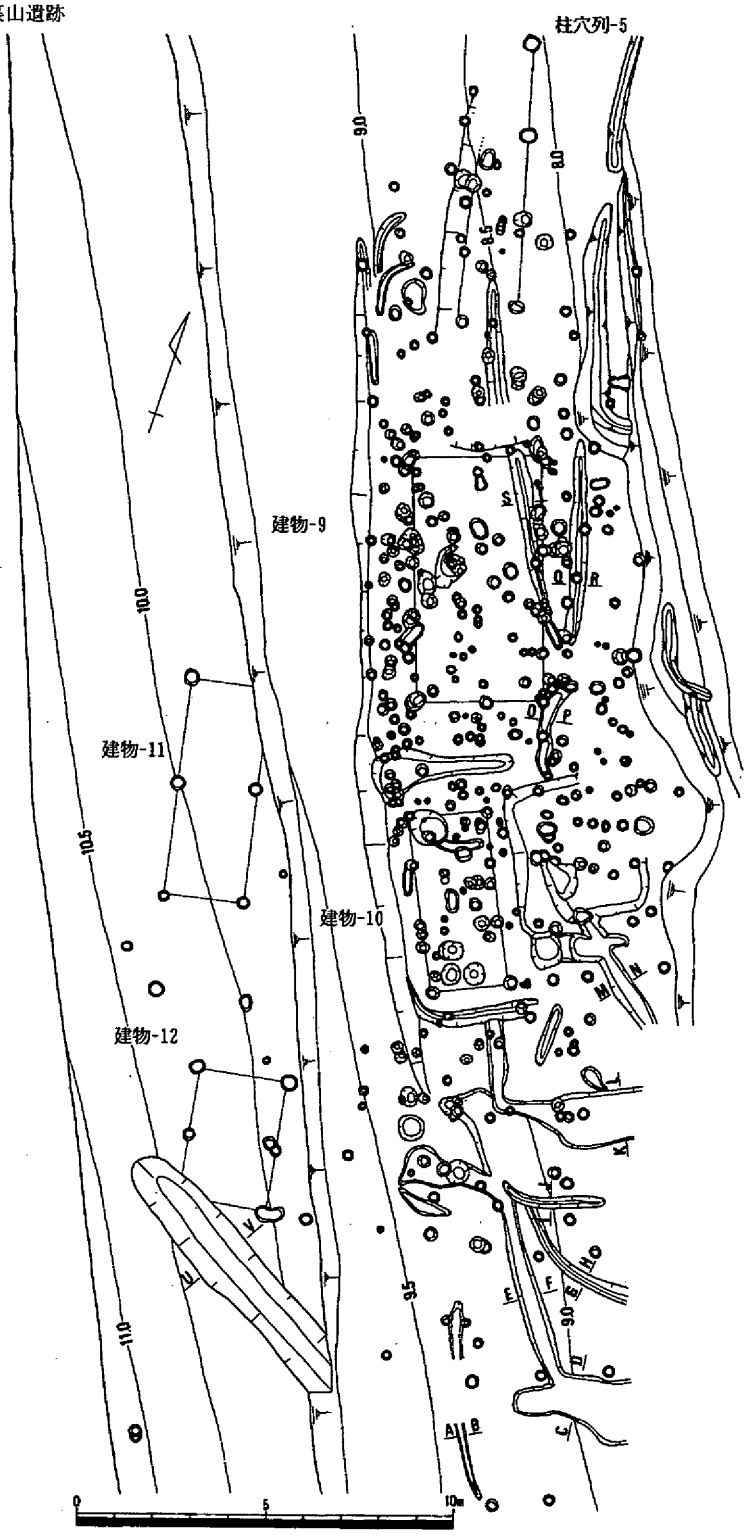
4区で検出した4間×2間の歪な長方形の建物である。棟方向はE－18°30′－Nを指す。桁行387cm・梁行294cm・面積11.38㎡である。柱穴は円形で直径22～42cm・深さ10～50cmを測る。柱痕の認められるものは10本中1本だけである。柱間寸法は桁が84～114cm、梁が111～153cmを測り、変則である。遺物は柱穴から出土していないが、古代～中世と考えたい。

建物－８（第128図）

調査区北西端部（５区）で検出した３間×１間の長方形の建物である。建物－７から10ｍ西に位置し、窯址から３ｍ南にある。棟方向はＮ－60°30′－Ｗを指す。桁行748㎝・梁行438㎝・面積32.76㎡である。建物の方位は建物－６、11、12とほぼ同一である。柱穴の平面形は大体円形で、直径25～45㎝・深さ30～60㎝を測る。柱痕の認められるものはない。柱間寸法は桁が234～264㎝、梁が429～447㎝を測り、梁が長すぎる。しかし間に柱穴は検出できなかった。遺物は出土していないが、古代～中世と考えたい。（浅倉）



第128図　建　物－８（1／80）



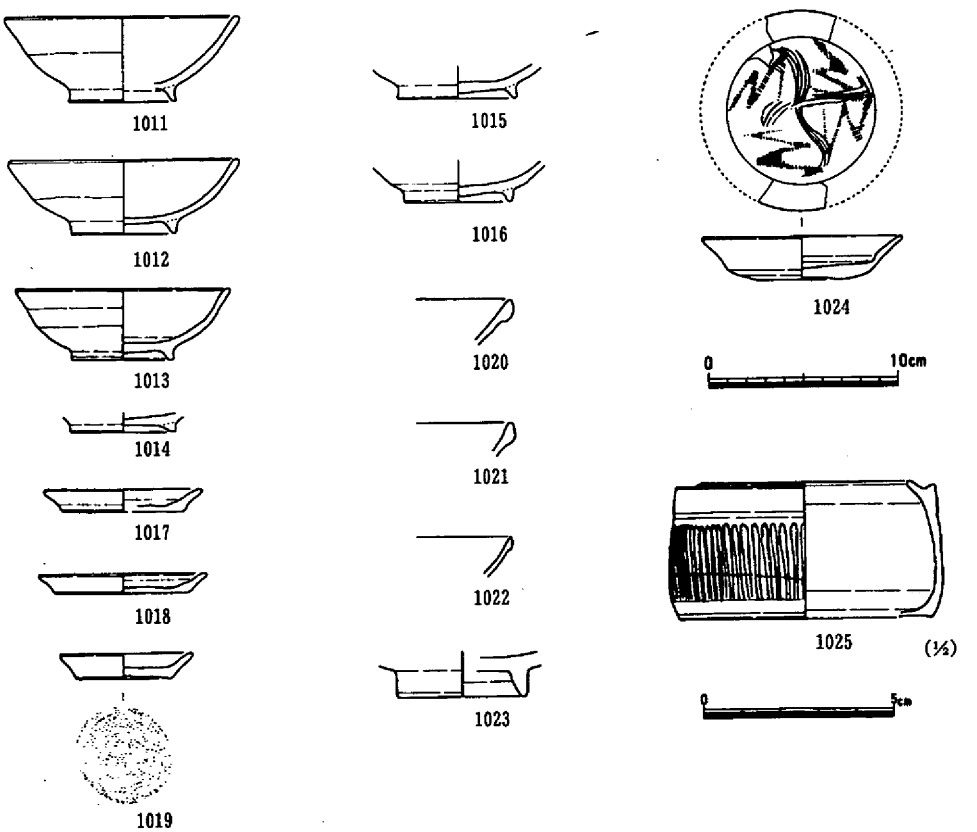
第129図　建　物－9～12 周辺（1／200）

調査区の北西部（５区）の丘陵斜面には、地形に沿って長さ約40ｍ、幅約８ｍにわたって、地山を削平した平坦部が検出された。この平坦部には、平坦部に沿う溝、平坦部に直交する溝、さらには380基余りの柱穴が確認された。

この溝や柱穴は、平坦部中央にやや集中する傾向が認められた。また、柱穴が密集しているため、柱穴間の構成は判別しにくい状況であった。しかしながら、建物－９、10の２棟の建物としての構成が明らかになった。このような状況からみて、他に建物が多数存在すると思われるが、現状では２棟以外の柱穴構成はまとめることができない。

この平坦部上層の包含層および溝、柱穴等からは、鎌倉時代を中心とする遺物が多数検出された。(1011～1025)

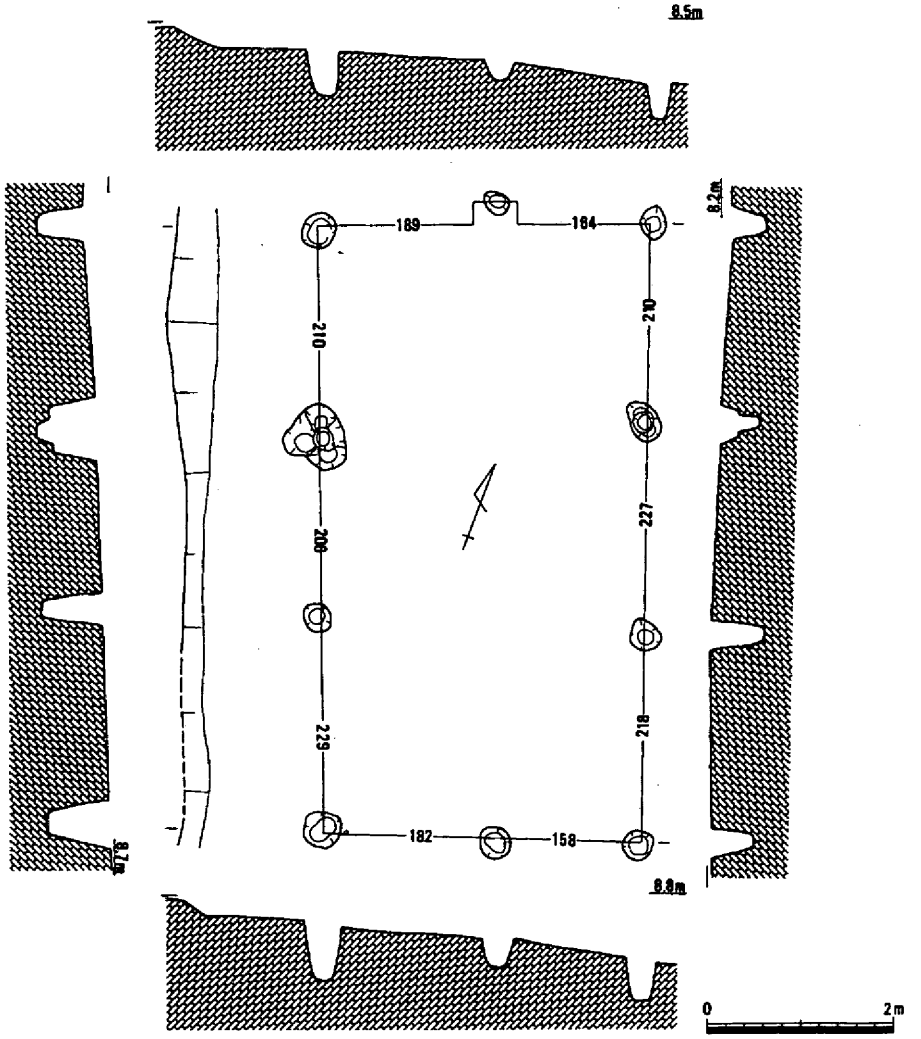
1011～1016は、土師器の椀で、いわゆる早島式土器と呼ばれているものである。1017～1019は、早島式土器の小皿である。1020～1022は玉縁口縁をもつ白磁の碗である。1023も白磁の碗で玉縁口縁をもたないものである。1014は、同安窯系の青磁の皿。1025は、青白磁の合子である。いずれも12～13世紀のものである。



第130図　建　物－9～12 周辺出土遺物

建物－9（第129、131図）

調査区北西部（5区）の、丘陵斜面を造成した居住域内に位置する。周辺域は、柱穴が多数検出されており、柱穴の構成が難しかったが、3間×2間の掘立柱建物にまとまった。建物の規模は、桁行645～655cm、梁間338～353cmを測り、床面積22.5m²である。棟方向はN－19°30′－Wである。柱間寸法は、桁が206～229cm、梁が158～189cmで若干の差違が認められる。柱穴は、一部重複しているものもあるが直径30～40cmで、深さは桁行が60cm前後と深いが、梁間の中央の柱穴は20cm前後と浅い。出土遺物はなかったが、周辺の遺構は、鎌倉時代の土器が散見でき、この建物と同時期のものであろうか。

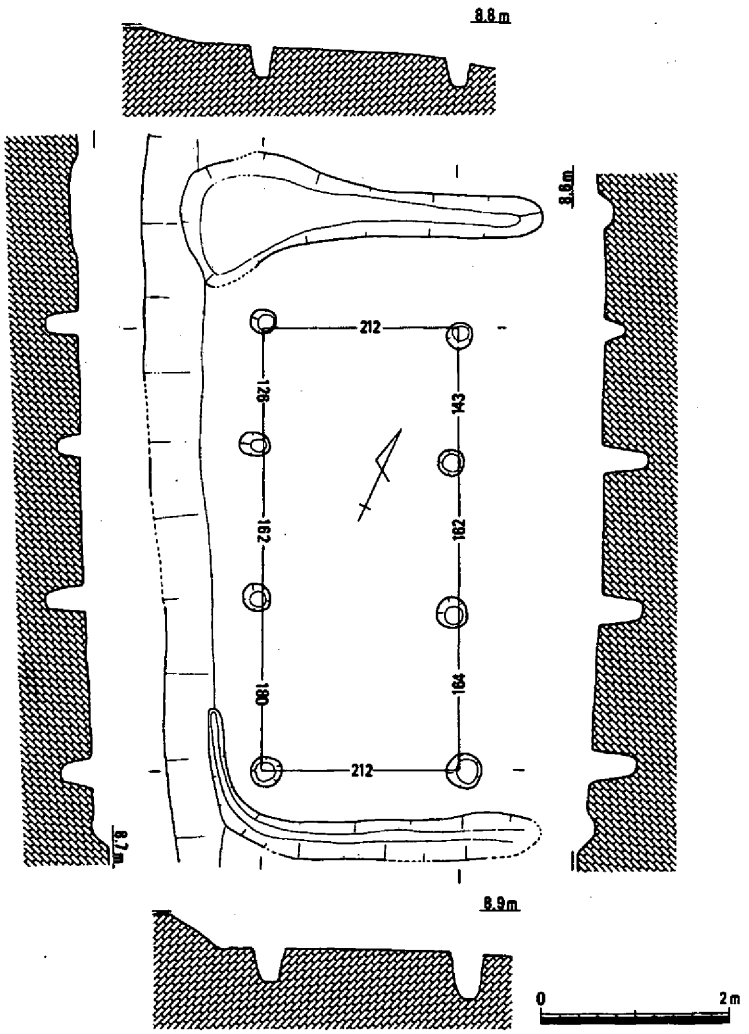


第131図　建　物－9（1／80）

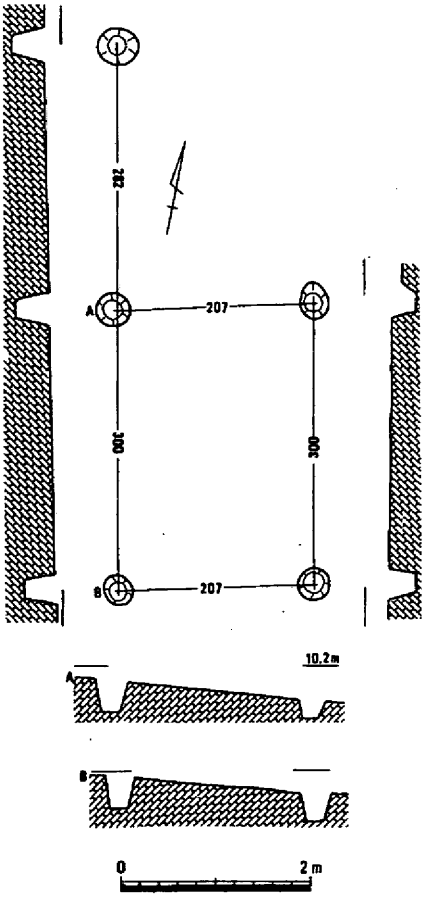
建物－10（第129、132図）

建物－９の南側に位置する。桁行３間×梁間１間の建物で、棟方向はＮ－25°30′－Ｗである。規模は、桁行468cm（東辺）469cm（西辺）、梁間は212cmと長方形を呈する。床面積は、9.94㎡を測る。柱間寸法は、梁間は等間であるのに対して、桁行は126～180cmと不揃いである。柱穴は、30～40cmの円形もので、深さは20～40cmであった。

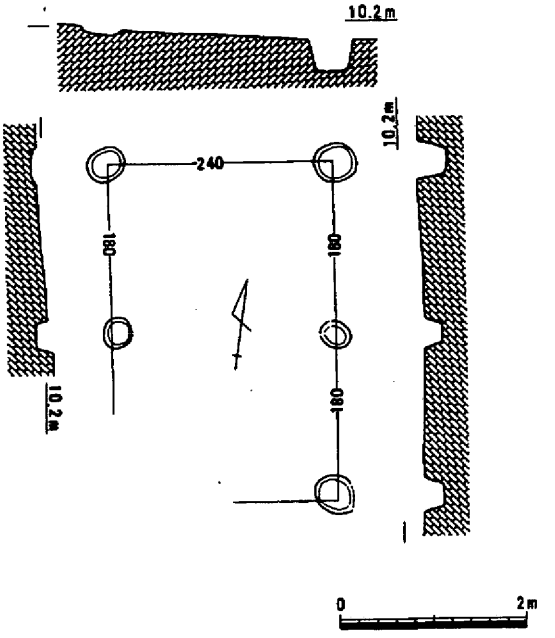
建物の両側および西側一部に溝が存在する。この溝は、おそらく「コ」字形にめぐり、雨落ち溝的なものと考えられる。出土遺物は柱穴から土師器が少量検出されたが、時期を判定できるものではなかった。しかし、建物－９とはさほど時間差はないと考えられ、この建物－10も鎌倉時代であろうか。



第132図　建　物－10（1／80）



第133図　建　物－11（1／80）



第134図　建　物－12（1／80）

建物－11（第129、133図）

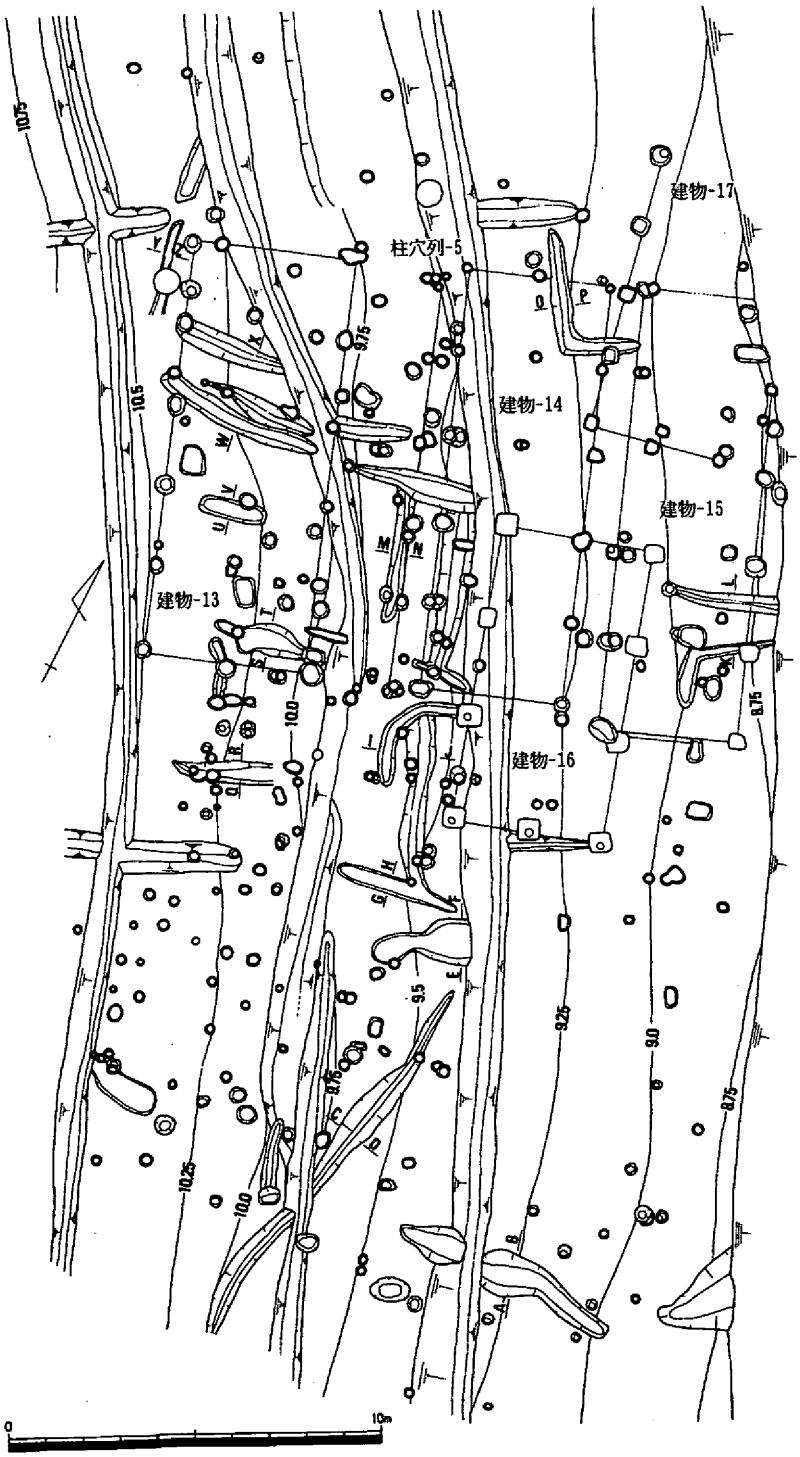
建物－10の西側に検出した２間×１間の長方形の建物である。棟方向はＮ－11°30′－Ｗを指す。桁行582cm、梁行207cm、面積12.05㎡である。柱穴の平面形は、ほぼ円形で直径30～40cm、深さ20～40cmを測る。柱間寸法は、桁282～300cm、梁が207cmを測る。柱穴は５本で、北東隅の柱穴は削平のため検出できなかった。また、建物の東側は、段差をもって大きく削平を受けているため、建物が北および東に延びていた可能性が考えられる。遺物は出土していないが古代～中世と考えたい。

建物－12（第129、134図）

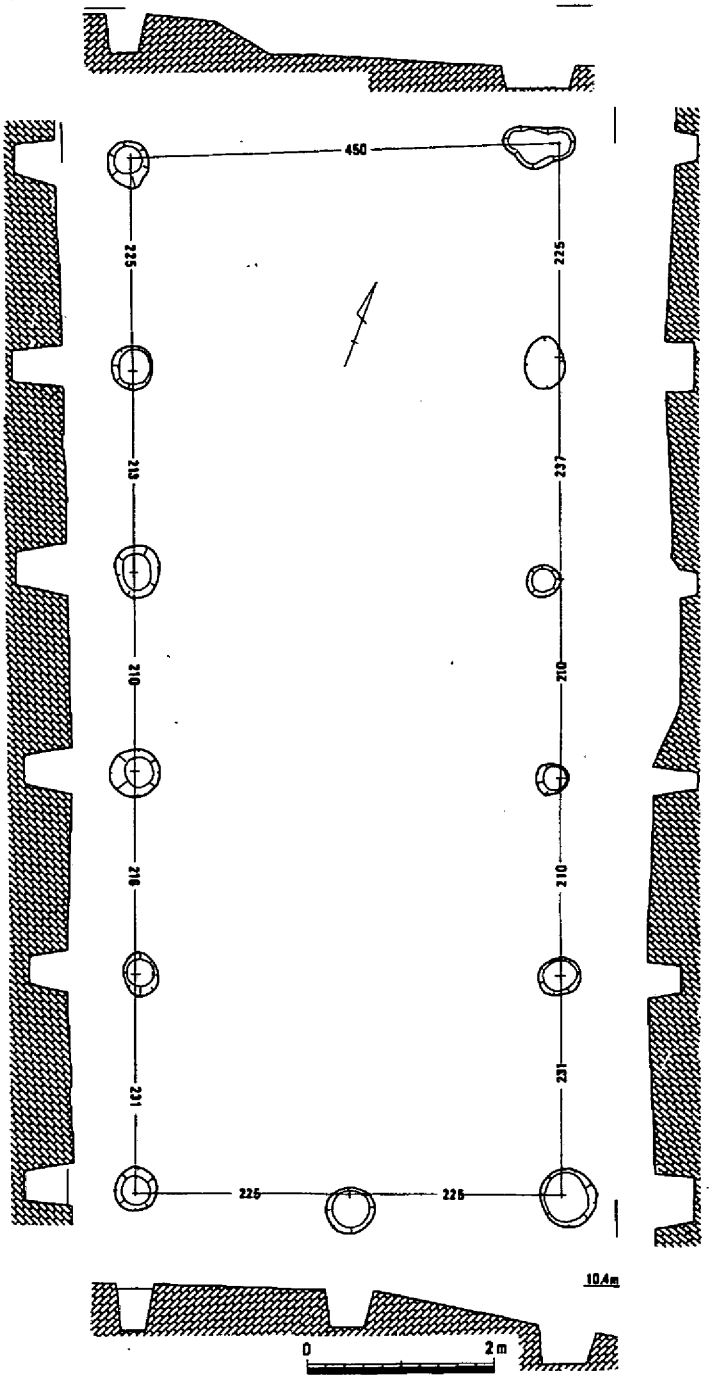
調査の北西部（５区）の建物－11の北側に位置する掘立柱建物である。２間×１間で、南東隅の柱穴は溝－28に切られており確認できなかった。棟方向はＮ－９°－Ｗを指している。桁行360cm、梁間240cm、床面積8.65㎡を測る。柱間寸法は、桁行180cmと均等である。

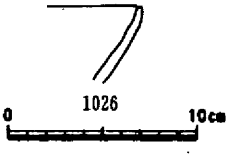
柱穴は、いずれも直径約20cm前後で、深さは、東側桁行と西側桁行で差違があり、斜面高所の西側が浅い。出土遺物はなく時期は不明である。しかし、周辺の状況からみて古代～中世と考えられる。

（中野）



第135図　建　物－13～17 周辺（1／200）

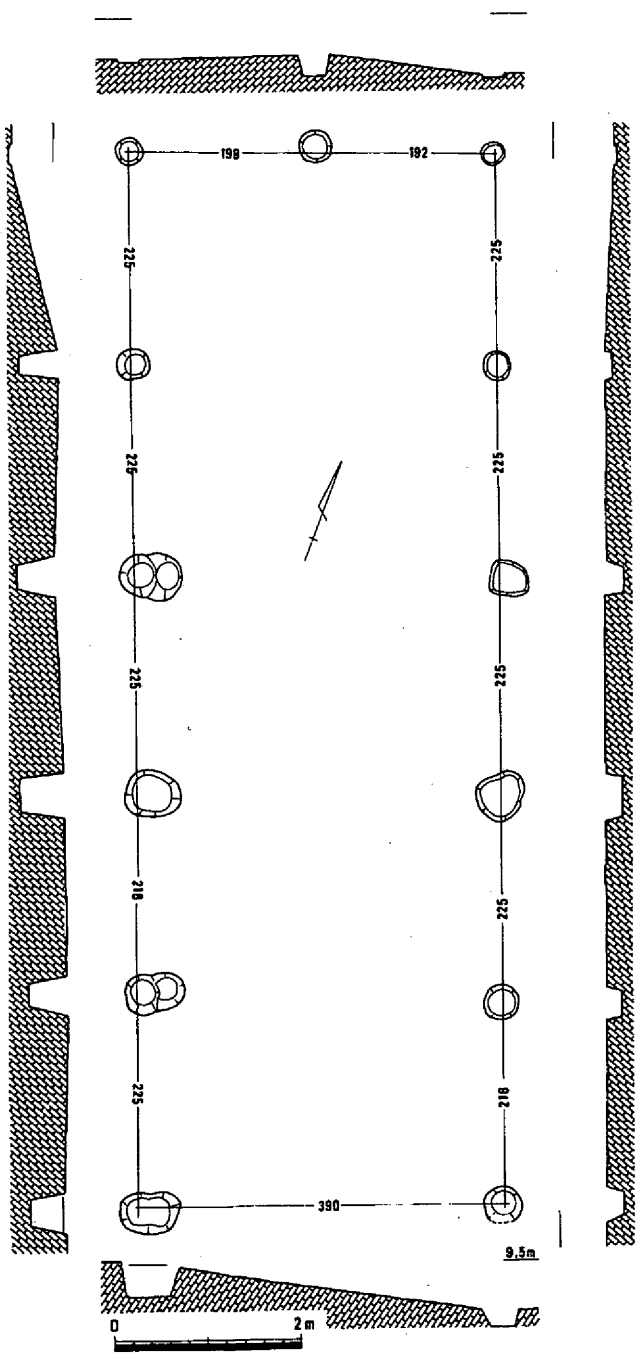




第136図　建　物－13（1／80）出土遺物

建物－13（第135、136図）

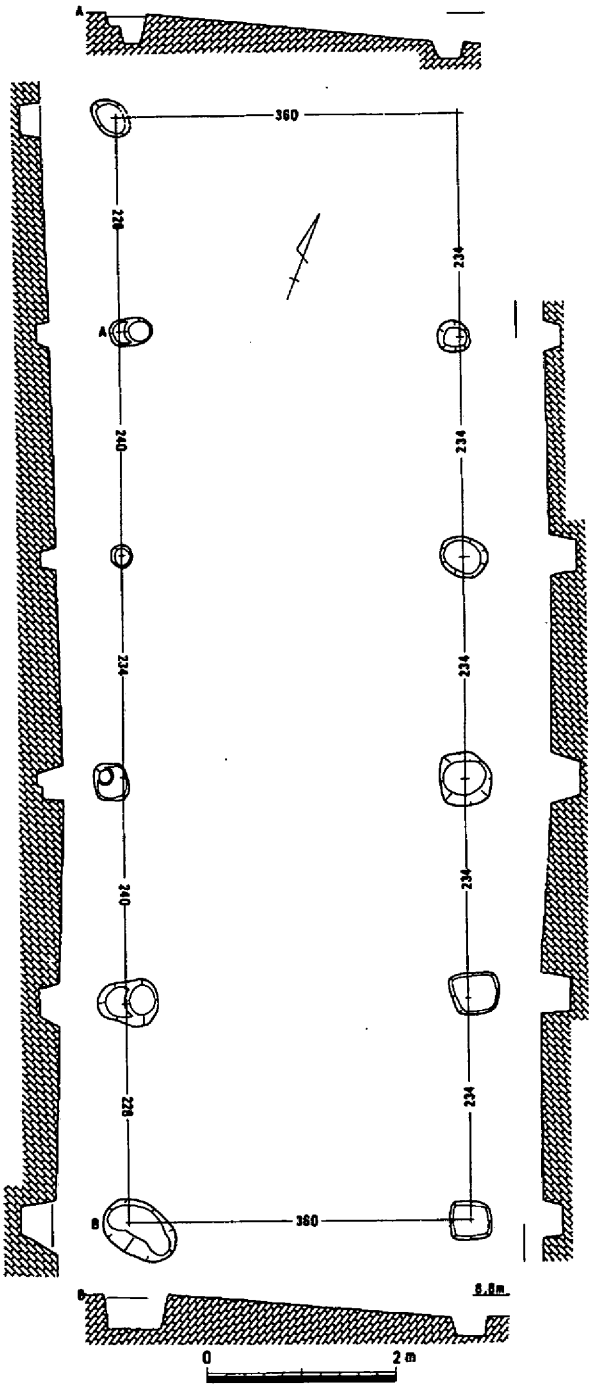
8区の中央部で検出した5間×2間の長方形の大型建物である。建物－14と2m離れて平行関係にある。棟方向はN－20°30′－Wを指す。桁行1104cm・梁行450cm・面積49.68㎡である。また、柱穴列－5とは、平行かつ等距離であるため、建物が拡大する可能性が考えられる。柱穴の平面形は円形あるいは不整円形である。柱穴の直径36～60cm・深さ22～50cmを測り、大きさにばらつきがある。柱穴は全部で13本検出しているが、柱痕の認められるものはない。柱間寸法は、桁が210～237cm・梁が225cmを測る。柱間寸法の225cmの所が13カ所中4カ所ある。南中央柱穴があって、北中央の柱穴がない。出土遺物は**1026**の黒色土器が出土している。この土器は、平安時代と考えられる。



第137図　建　物－14（1／80）

建物－14（第137図）

8区の中央東部で検出した5間×2間の長方形の大型建物である。建物－15と北の端は接して、南の端は1mほど柱穴は離れている。したがって同時に立つことはできない。棟方向はN－21°－Wを指す、桁行1116cm・梁行390cm・面

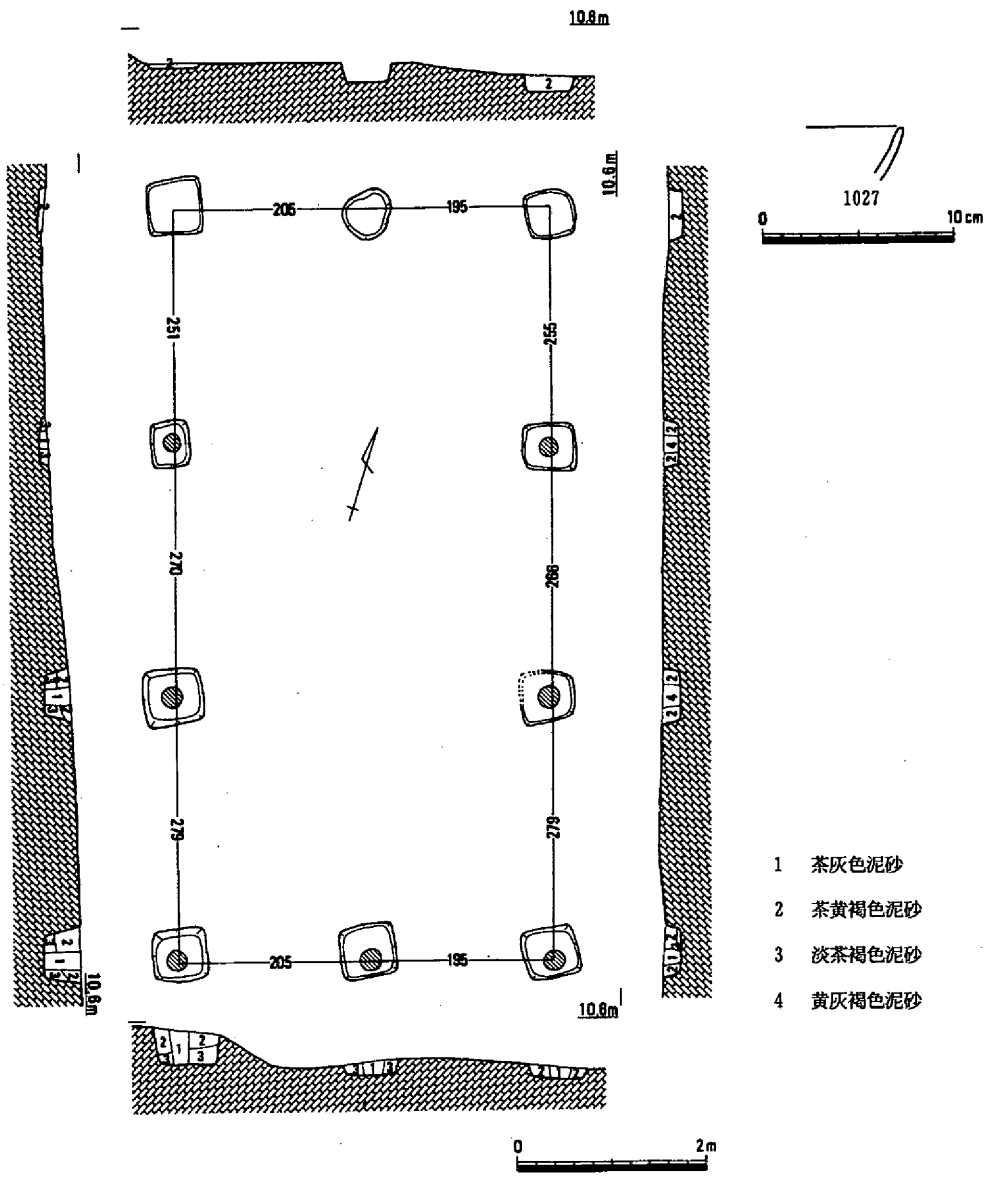


第138図　建　物－15（1／80）

積43.52㎡である。柱穴の平面形は方形のものもあるが、円形のものが多い。方形のものは１本あって、一辺38cm・深さ20cmを測る。円形のものは直径22～40cm・深さ５～20cmを測り、いずれも小さくて浅い。柱穴は全部で13本検出しているが、柱痕の認められるものはない。柱間寸法は桁が216～225cm・梁が192～198cmを測る。柱間寸法の桁が225cmの所が10カ所中８カ所もある。北中央の柱穴があって、南中央の柱穴がないことから、建物が南へ伸びる可能性もある。柱穴検出面の海抜高は9.5～8.9mである。遺物は出土していないが、建物14と相前後する時期と考えられる。

建物－15（第138図）

調査区中央の西側で検出した５間×１間の長方形の大型建物である。棟方向はＮ－21°－Ｗを指す。桁行1170cm・梁行360cm・面積42.12㎡である。柱穴の平面形はほぼ方形のものと不整円形のものがある。方形のものは一辺38～50cm・深さ20～30cmを測る。不整円形のものは直径22～44cm・深さ10～22cmを測り、いずれも小さくて浅い。柱穴は全部で11本検出しているが、柱痕の認められるものは２本しかない。柱間寸法は桁が



第139図　建　物－16（1／80）出土遺物

228～240cm・梁が360cmを測る。北東隅の柱穴は耕作による削平で検出できない。柱穴検出面の海抜高は8.8mである。

遺物は出土していないが、建物13～15と相前後すると考える。

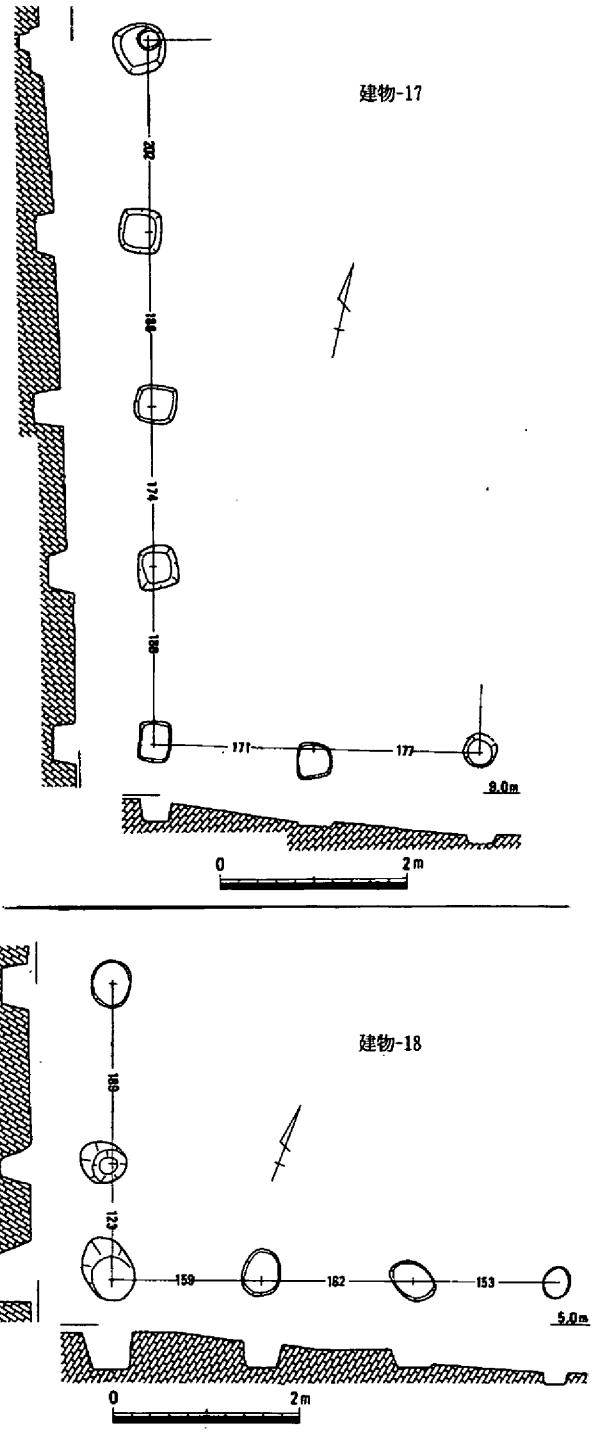
建物－16（第135、139図）

8区の中央部に検出した3間×2間の長方形の掘立柱建物である。建物－14、15と重複する。

棟方向は、N－17°30′－Wを指し、大型建物の建物－13～15とはやや方位を異にする。桁行800cm、梁行400cm、面積32.00㎡を測る。柱間寸法は、桁251～279cm、梁か各々195、205cmと対応する。柱穴の平面形は、いずれも方形を呈し、柱痕は約20cmを測る。出土遺物は、1027の黒色土器が柱穴から出土しており、平安時代と考えられる。また、建物北辺の中央の柱穴は建物－14と重複するか先後関係は明らかでない。

建物－17（第140図）

8区の中央東部で検出した4間×2間の長方形の大型建物である。建物－13から20m南西に位置する。棟方向はN－13°－Wを指す。桁行748cm・梁行348cm・面積26.03㎡である。柱穴の平面形はほぼ方形で、一辺34～44cm・深さ5～30cmを測る。柱穴は7本検出しているが、柱痕の認められるものは1本しかない。柱間寸法は桁が174～202cm・梁が171～177cmを測る。北東の柱穴は耕作による削平で検出できない。建物が北へ伸びる可能性はないようである。遺物は出土していないが、形態から見て古代と考えたい。



第140図　建　物－17・18（1／80）

建物－18（第140図）

6区の北端部で検出した3間×2間の長方形の建物である。棟方向はE－20°－Nを指す。桁行474cm・梁行312cm・面積14.79㎡である。柱穴の平面形は不整円形で、直径30～60cm・深さ10～40cmを測る。柱痕の認められるものはない。柱間寸法は桁が153～162cm、梁が123～189cmを測る。柱穴は6本検出している。北東の柱穴は後世の畑境の溝により深く削り取られて検出できなかった。柱穴検出面の海抜高は5.0mである。6区の北端部では柱穴は非常に少なく、この建物周辺では杭程度の小さなものしかないので、まとめられた。遺物は出土していないが、古代～中世と考えたい。（浅倉、中野）

建物－19（第141図）

6区の北部で検出した2間×1間の長方形の建物である。建物－10から3m南に位置する。棟方向はN－19°30′－Wを指す。建物－10と直行関係にあるから、同時建立の可能性がある。桁行316cm・梁行228cm・面積7.20㎡である。柱穴の平面形は不整円形で、直径30～80cm・深さ30～50cmを測り、かなり大きい。柱痕の認められるものはない。柱間寸法は桁が144～168cm、梁が222～234cmを測る。柱穴は6本検出している。北西隅の柱穴は特に小さくて、浅い。柱穴検出面の海抜高は5.0mである。6区の北部では柱穴は非常に少なく、この建物の柱穴は周辺のものより大きいので、まとめられた。遺物は出土していないが、古代～中世と考えたい。

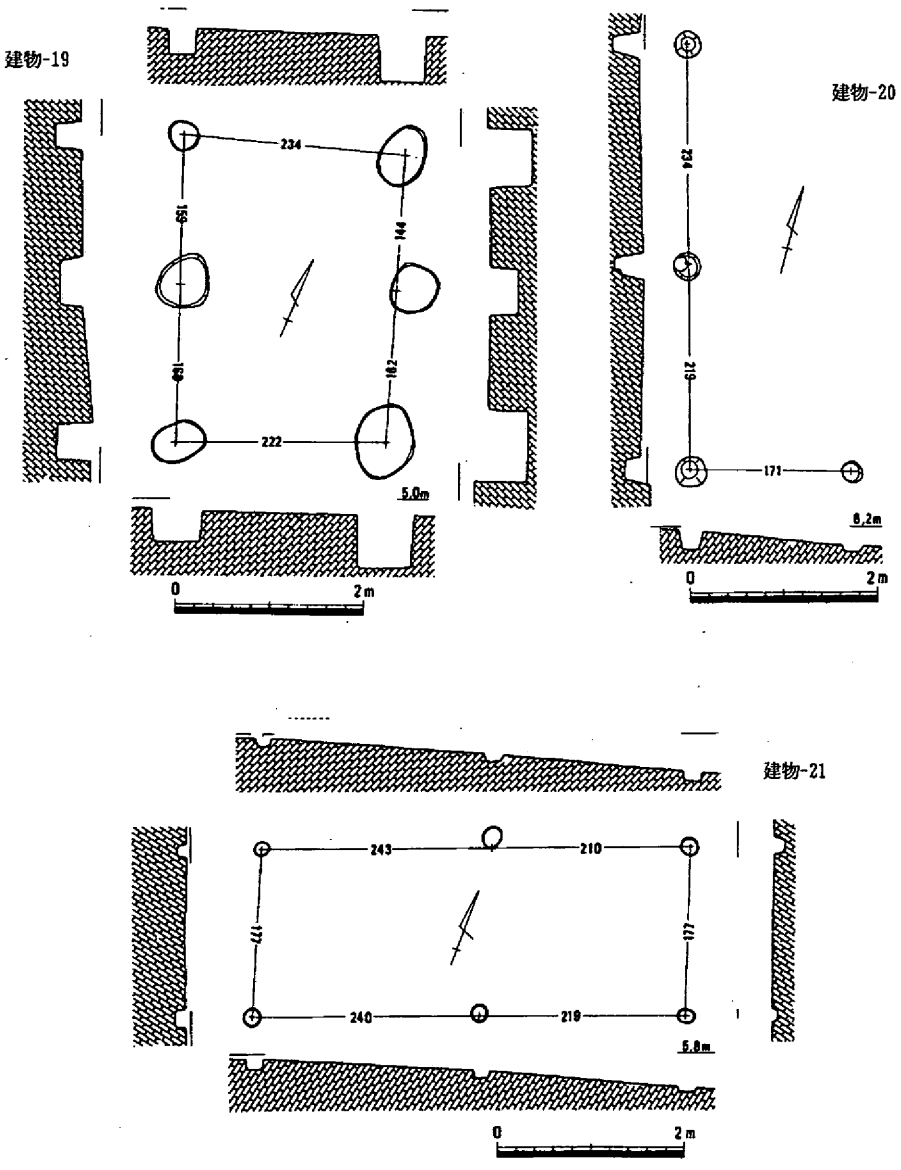
建物－20（第141図）

6区の北端部で検出した2間×1間の長方形の建物である。建物－10から11m西に位置する。棟方向はN－16°－Wを指す。建物－10と直行関係にあるから、同時建立の可能性がある。桁行453cm・梁行171cm・面積7.75㎡である。柱穴の平面形はほぼ円形で、直径20～30cm・深さ5～30cmを測り、かなり小さい。柱痕の認められるものはない。柱間寸法は桁が219～234cm、梁が171cmを測る。柱穴は4本検出している。北東の柱穴は検出できない。柱穴検出面の海抜高は6.2mである。この建物周辺の柱穴は東側に多く、建物が東へ伸びる可能性も十分ある。しかし東方は畑の段が数10cmあって、一つの建物にまとめるのは不自然な気がした。遺物は出土していないが、古代～中世と考えたい。

建物－21（第141図）

6区の北部で検出した2間×1間の長方形の建物である。建物－12から5m南東に位置し、建物－11から6m西にある。棟方向はE－21°－Nを指す。桁行450cm・梁行177cm・面積7.97㎡である。

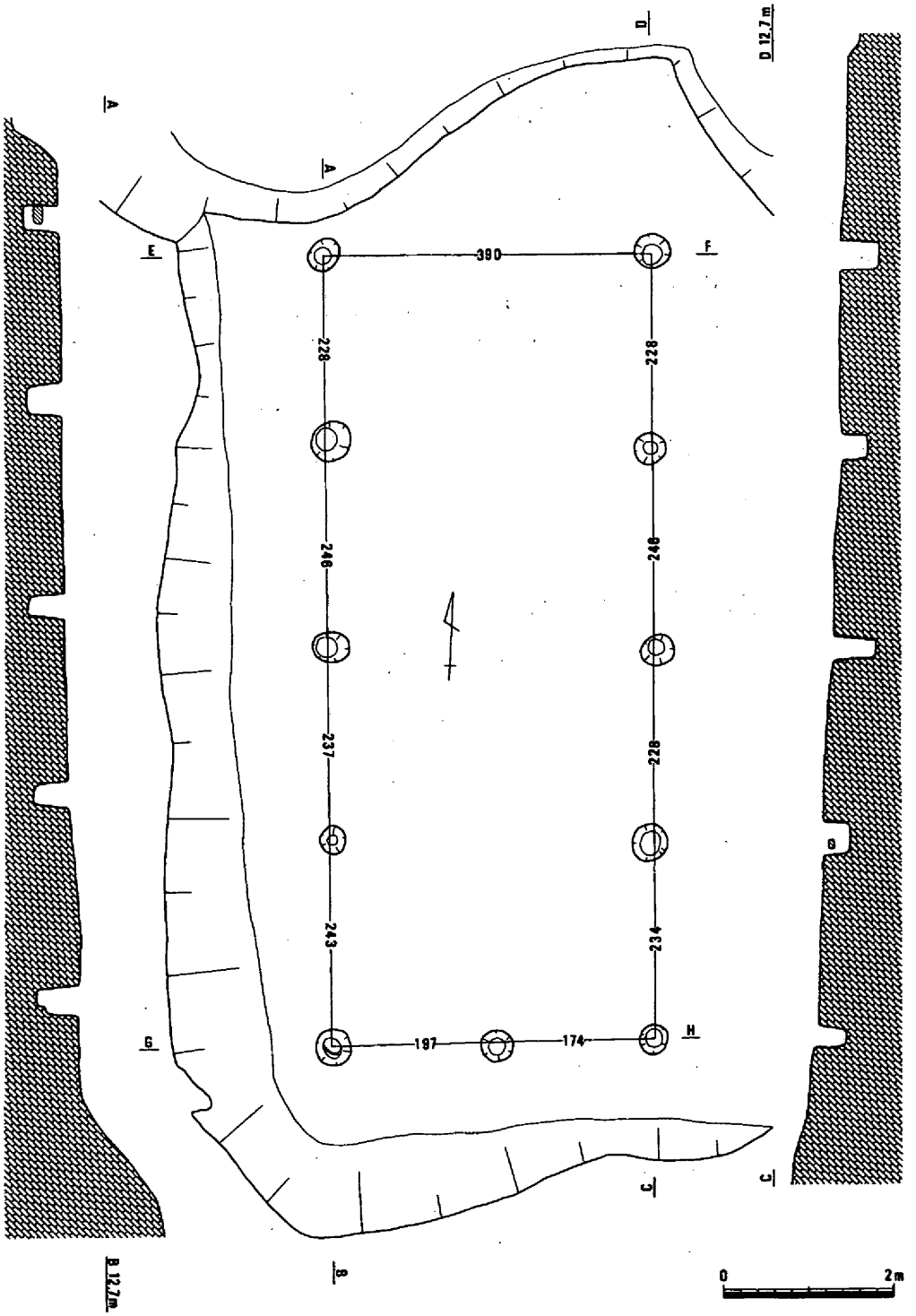
柱穴は6本検出した。柱穴の平面形はほぼ円形で、直径16～20cm・深さ5～10cmを測る。いずれも小さくて浅い。柱痕の認められるものはない。柱間寸法は桁が210～243cm、梁が177cmを測る。遺物は出土していないが、古代～中世と考えたい。



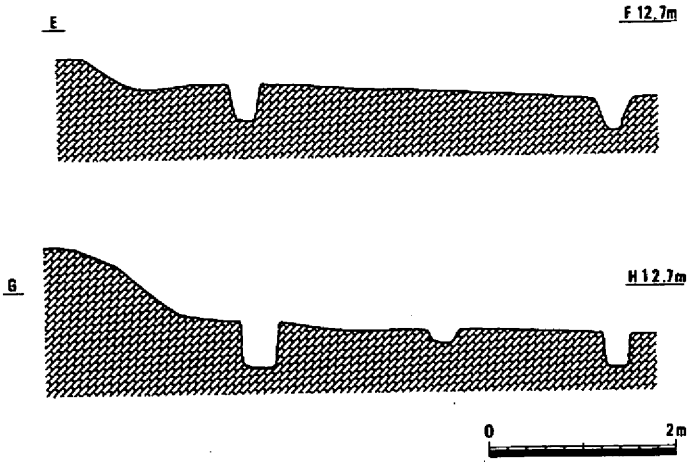
第141図　建　物－19～21（1／80）

建物－22（第142、143図）

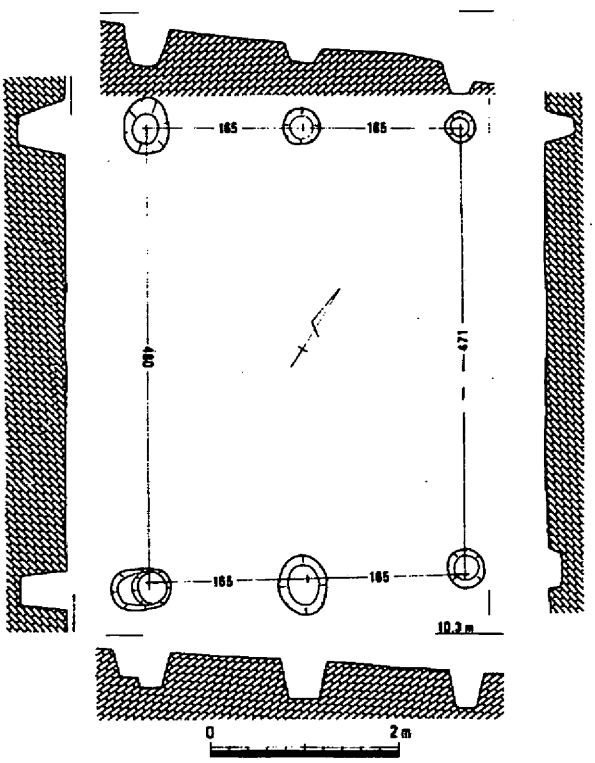
調査区北西部の丘陵斜面に位置する。建物は、斜面部を掘削し平坦部を造成して、4間×2間の長方形の大型掘立柱建物である。棟方向は、N－3°－Wを指す。桁行954cm、梁行390cmを測り、面積は35.95㎡である。柱間寸法は桁228～246cm、梁174～197cmを測る。柱穴は、ほぼ円形で、直径30～45cm、深さ16～50cmを測る。建物の北辺の中央柱穴は検出してもないため、



第142図　建　物－22（1／80）



第143図　建物－22（1／80）

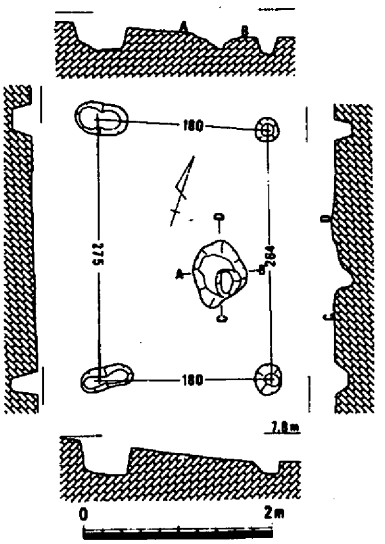


第144図　建　物－23（1／80）

北に延びる可能性も考えられる。また、建物の北東約２ｍには井戸－４があり、関連性が考えられる。出土遺物はないが、古代～中世か。

建物－23（第144図）

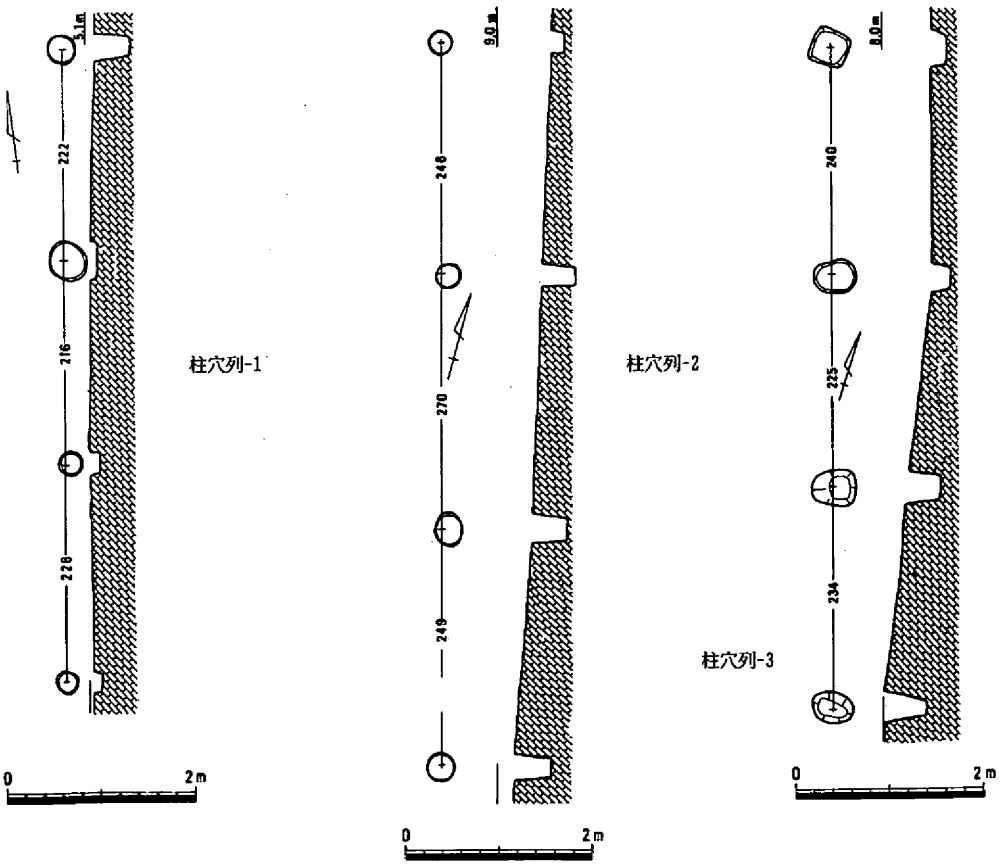
10区で検出した１間×２間の長方形の建物である。建物－19から14ｍ北西に位置する。棟方向はＮ－32°－Ｗを指す。桁行475㎝・梁間165㎝・面積7.85㎡である。柱穴の平面形はほぼ円形で、直径30～60㎝・深さ10～50㎝を測る。柱間寸法は桁が471～480㎝、梁が165㎝を測る。柱穴は６本検出している。他の建物と違うのは桁行が２間分の長さがあること。遺物は出土していないが、古代～中世と考えたい。



第145図　建　物－24（1／80）

建物－24

調査区南端の中央部（10区）で検出した1間×1間の長方形の建物である。棟方向はN－19°－Wを指す。柱穴列Ⅵと直線状に並び、同一建物の可能性がある。桁行275cm・梁間180cm・面積4.85m²である。柱穴の平面形は不整円形で、直径22～30cm・深さ10～30cmを測り、西のものは2本重複している。柱間寸法は桁が264～275cm、梁180cmを測る。建物中央からやや南東より土壙が検出できた。長径70cm・短径60cm・深さ20cmある。鍛冶炉と考えられ、この建物に伴うかどうか不明である。遺物は出土していないが、古代～中世と考えられる。



第146図　柱穴列1～3（1／80）

（2）柱穴列

柱穴列－1（第7、146図）

調査区北端中央（2区）で検出した3間の柱穴列である。建物－5と重複している。主軸はN－7°30′－Eを指す。全長666cmで建物の一部と思われる。柱穴の平面形は円形で、直径25～40cm・深さ5～40cmを測る。遺物は出土していないが、古代～中世と考えたい。

柱穴列－2（第7、146図）

調査区北西部（5区）で検出した3間の柱穴列である。建物－8の2m東に位置する。主軸はN－15°30′－Wを指す。建物－8の主軸とはわずかにずれている。全長765cmである。柱穴の平面形は円形か不整円形で、直径25～35cm・深さ10～40cmを測る。柵及び建物の一部かは断定できない。遺物は出土していないが、古代～中世と考えたい。

柱穴列－3（第7、146図）

調査区北西部（5区）で検出した4間の柱穴列である。柱穴列－2の南東近くに位置する。主軸はN－18°－Wを指す。全長699cmである。柱穴の平面形は方形か不整円形で、直径30～40cm・深さ10～40cmを測る。柵ではなく、建物の一部と思われる。遺物は出土していないが、古代～中世と考えたい。

柱穴列－4（第8、147図）

調査区中央部西側（6区）で検出した6間の柱穴列である。主軸はN－5°－Wを指す。全長1530cmである。柱穴の平面形は円形で、直径35～40cm・深さ10～25cmを測る。北の1間が特別長い。5間の建物の一部か、あるいは柵列かも知れない。遺物は出土していないが、古代～中世と考えたい。

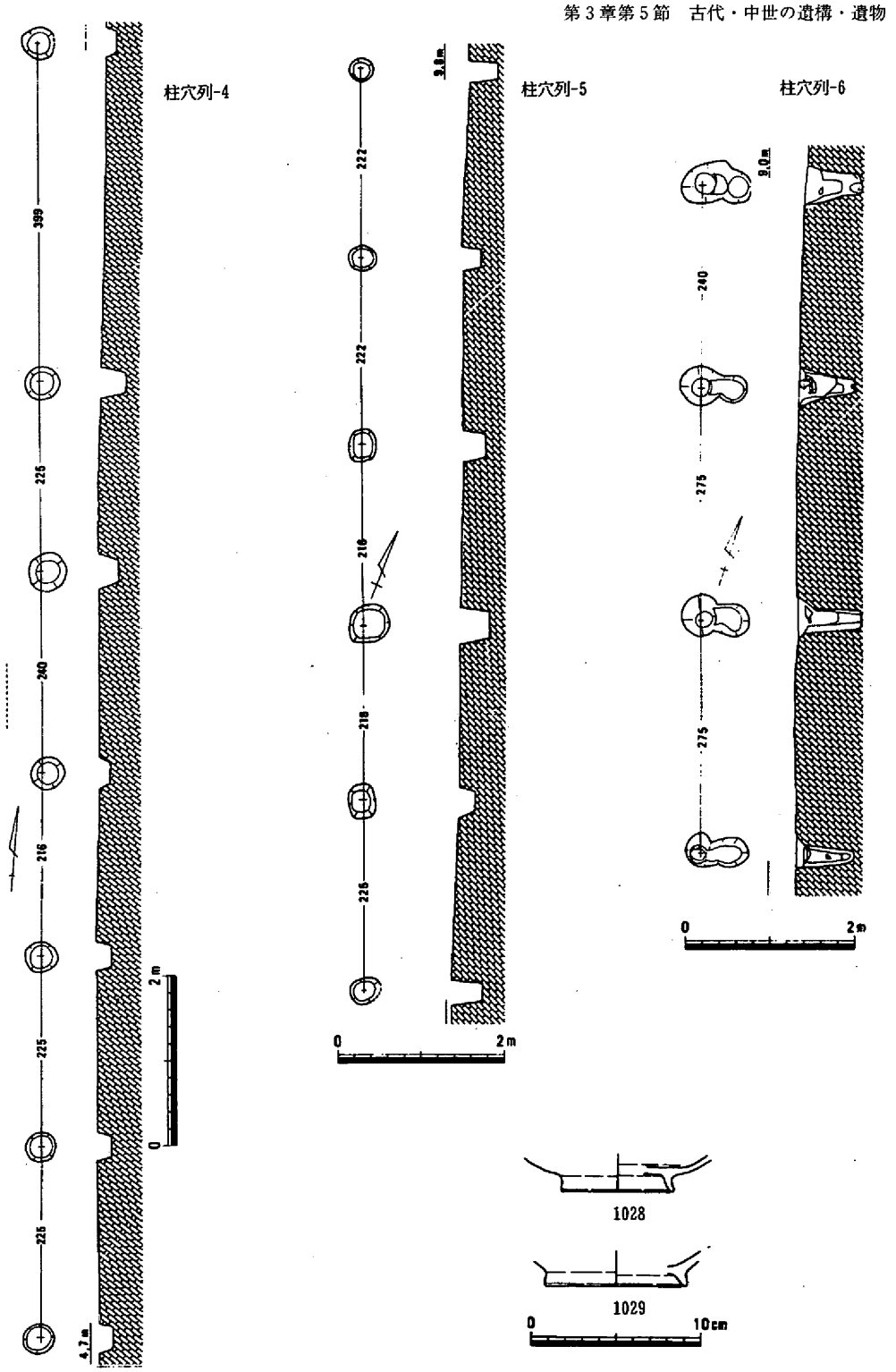
柱穴列－5（第135、147図）

調査区中央西側（8区）に位置する。柱穴列は、建物－13の東側に検出された。建物－13とは約230cm離れてほぼ平行位置にある。柱穴列は5間で、主軸をN－22°－Wを指し、全長約1101cmである。柱穴の平面形は方形と円形で、直径15～45cm、深さ20～35cmを測る。柱間はほぼ等間隔である。この柱穴列は、建物－13の一部か、柵列状のものであろう。いずれにしても建物－13との関係が深い。出土遺物は、1028、1029の黒色土器などが検出されている。

柱穴列－6（第9、147図）

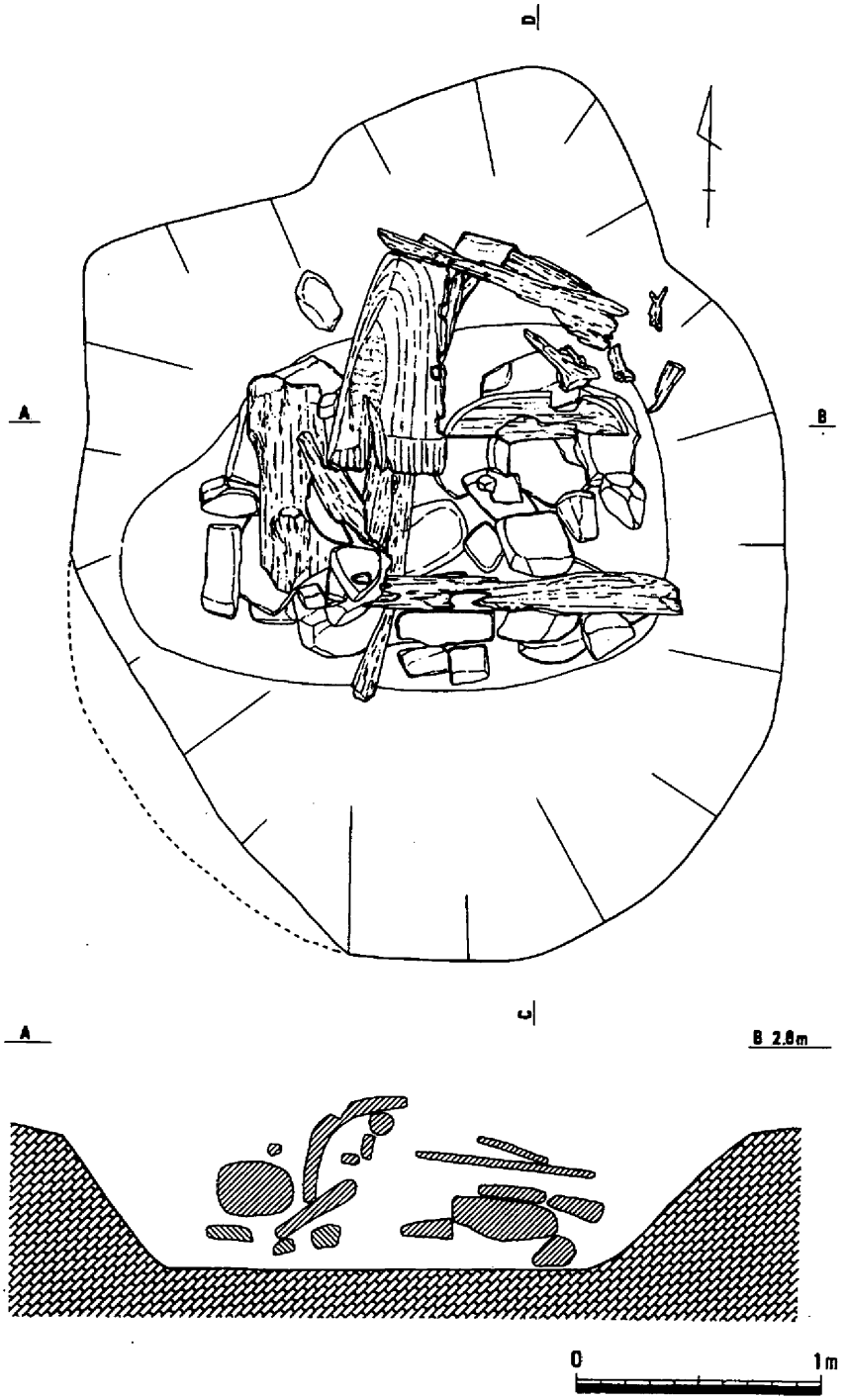
調査区北端の中央部（10区）で検出した3間の柱穴列で、建物－24の北に位置する。建物－24と同一線上に乗る。主軸はN－19°－Wを指す。全長790cmである。柱穴の平面形は瓢箪形で、長径70cm・短径45cm・深さ70cmを測る。2列重なる。建物の一部か、柵列か。遺物はないが、古代と考えたい。

（浅倉、中野）

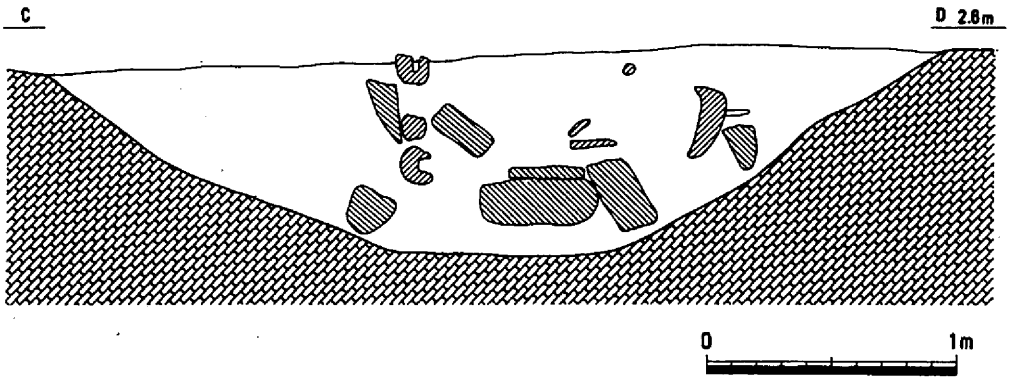


第147図　柱穴列4～6（1／80）出土遺物

（3）井戸



第148図　井戸－1（1／30）



第149図　井戸－１（1／30）

井戸－１（第148～152図）

調査の北東部の11区に位置している。井戸－１は、谷Ａの低位部への出入口地点で検出された。掘り方の形状は、約360㎝×285㎝の不整形を呈しているが、当初は楕円形と考えられる。深さは、検出面から約70㎝残存していた。断面形は、逆台形を呈しており、底部は水平面を成す。

この掘り方の中央部には、下部に石、上部に木（木材）が集積している状況が検出できた。下部の石は、大きさが約20～40㎝で、面をもつものが多く認められた。石は、掘り方の底部よりやや浮いた状態で、約150㎝×130㎝の範囲に、ほぼ長方形状に敷きつめられている状況を示していた。さらに、東辺、西辺および南辺の一部では、その石敷状の上部にさらに石を積み上げられていた。

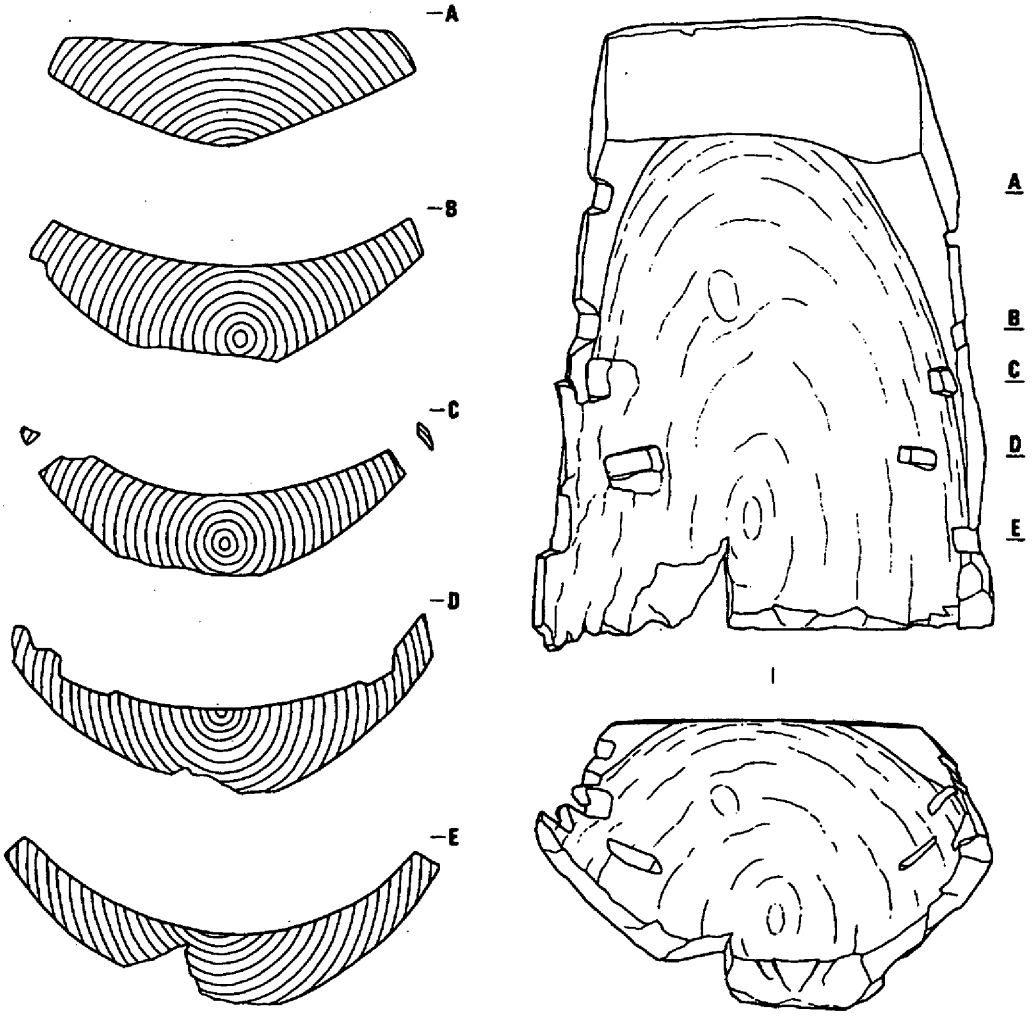
上部の材木は、木器、加工木、丸太材などで、中央部の石敷状の上部に散在していた。木材の一部は、下部の石を積み上げた上部の辺に沿うような状態で検出された。このような状況からみて、掘り方中央部に石を敷きつめ、さらにその上部に石を１～２段積み上げ、その上部に廃材などを利用して、方形に井戸の囲いを構築したものと考えられる。

この地点は、谷の出入口部にあたり、湧水にも恵まれていたと思われ、井戸の立地としては最も好条件の位置を占めている。また、井戸－２、３も同様に谷－Ｃの出入口付近に構築している。

出土遺物としては、井戸囲いに利用されていた木器、加工木があるが、土器は須恵器、土師器の細片が少量出土した。しかしながらこれらの土器は、細片であったため、時期的特徴を示すものではなかった。ここでは、古代として捉えておく。　（中野）

木器W56は、井戸の西辺の囲いに用いられていたと考えられる船の部材である。マツの大木を利用した刳り船で、現状で長さ84.3cm、幅61.6cm、高さ38cmあり、転用に際して途中から切断されている。船体から反りあがった先端は水平となり、幅40cm、厚さ５cmほどの平面をなして終わることから、船尾にあたる部分と考えられる。

舷側には、10～20cmの間隔で３対の枘溝が切られ、これと重なるように方形の枘穴が１対穿たれている。これらに側板などを固定するための施設とみられ、この船が構造船であったことを示している。また船底にも一対の方形の抉りこみがあり、仕切り板を固定していたものと思われる。底部外面には加工痕を明瞭に留めており、中央には主軸にそって鈍い稜がつくりだされている。



W56

第150図　井戸－1 出土遺物（1）

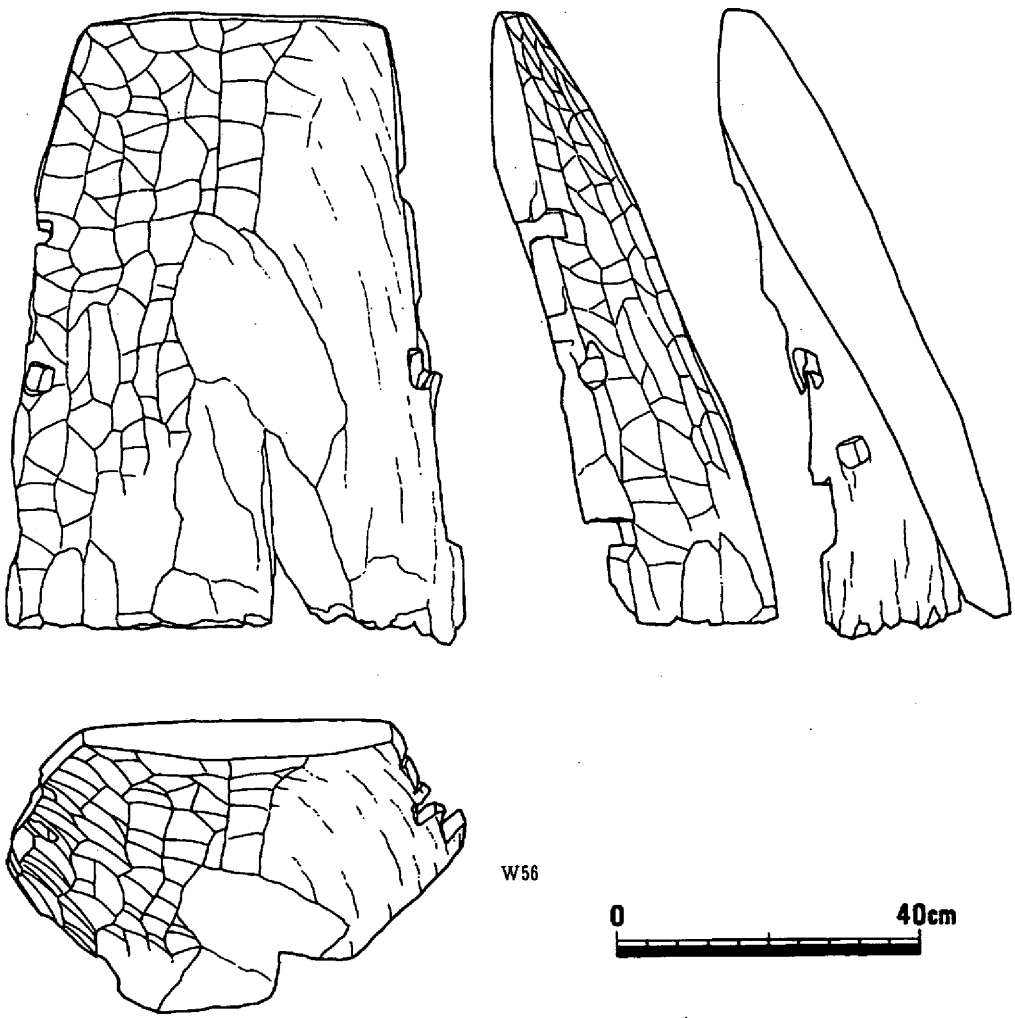
W57はコナラの大木から割り出した板材で、長さ153.5cm、幅37.8cm、厚さ11.4cmあり、外面には樹皮をそのまま残している。

W58は長さ74.8cm、幅16.6cm、厚さ3.4cmを測るコウヤマキ製の部材で、半円形の板状を呈す。下端は両面から面取りされており、船などの仕切り板として用いられていた可能性がある。

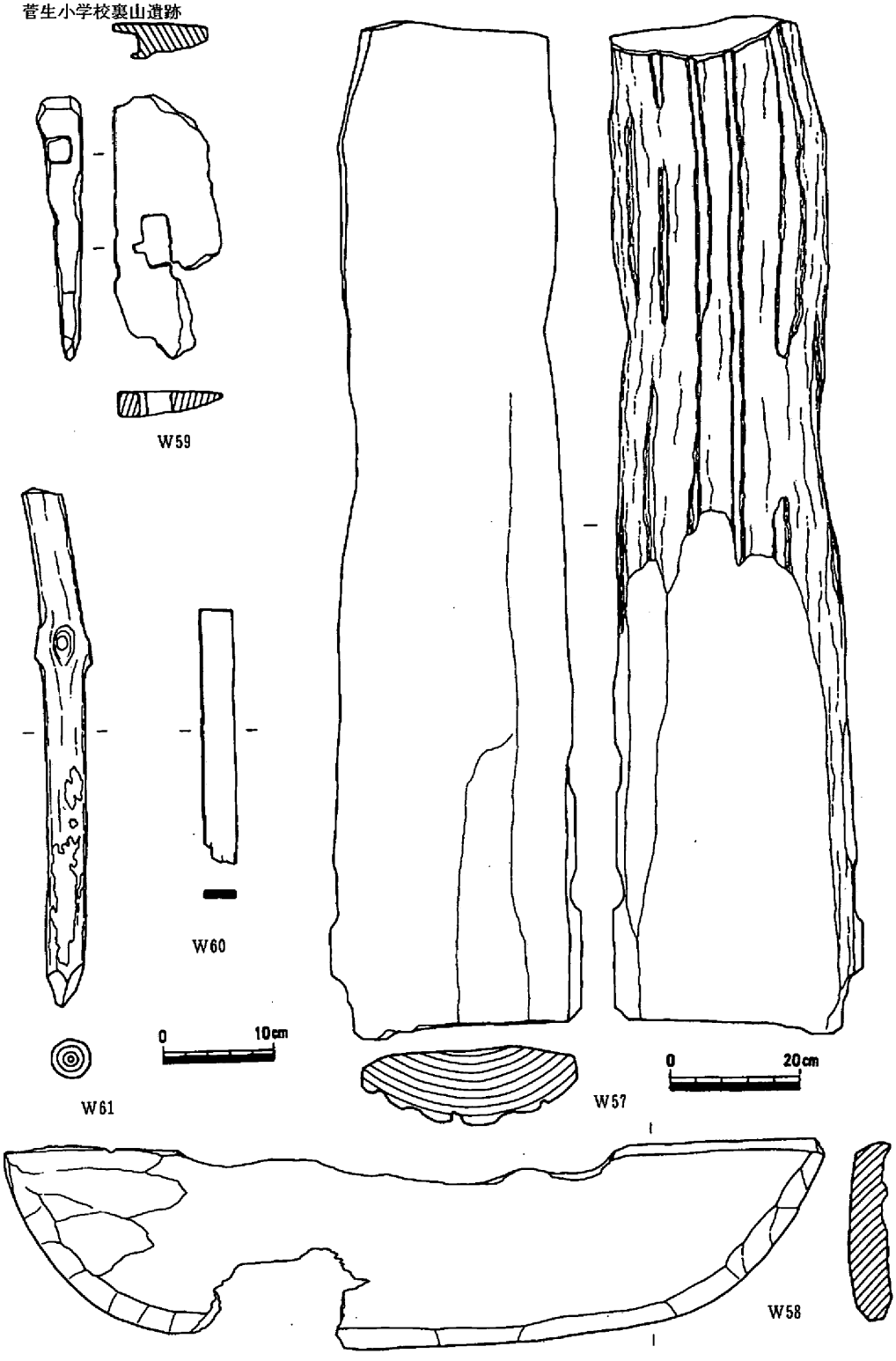
W59は囲い内から出土した部材で、長さ24.2cm、幅9.5cm、厚さ4cmを測る。側面には方形の孔が開けられ、上面にも方形の枘が穿たれる。

W60は長さ22.9cm、幅2.9cm、厚さ0.7cmの板材である。

W61は径5.2cmのコジイを使った杭である。長さは47.1cmあり、枝を落として先端を尖らせている。　（亀山）



第151図　井戸－1 出土遺物（2）



第152図　井戸－1 出土遺物 (3)

井戸－２（第153、154図）

調査区南端中央（10区）の谷－Ｃ中に検出された。井戸－２は、井戸－３と約１ｍに隣接している。その位置は、谷部の出入口部付近に当たり、湧水の面からも好位置を占めている。井戸は、谷－Ｃの堆積土の中位ぐらいの第106図の第10層上面で検出された。

井戸の掘り方は、直径約60cmと規模は小さく、円形を呈する。深さは、約35ｍ残存していた。断面形は逆台形を呈しており、底部の径は約35cmを測る。

この掘り方の中には、直径約30cmの曲物を底部に接して据え、さらに上部には、底部から約10cm浮かして、径約36cmの曲物を重ねて積んで井筒を構成していた。この下部の曲物は、高さ約20数cmのもので、上部の曲物も高さ約20cmを測るものであった。上部の曲物には、曲物外側の上部と下部に幅約４～５cmの帯を廻らしていた。また、両方の曲物とも、内面を鋭利な刃器で斜格子状に切り込みをいれていた。さらに、桜の皮で板材を綴じていた。

井筒内は、第153図のように灰褐色砂層と茶褐色ピート層が互層に堆積していた。また、裏込めは、灰褐色砂層で埋っていた。出土遺物としては、掘り方内から**1033**の須恵器甕腹片が一点出土した。

また、井戸の東側には第153図のように、平らな石を面的に配している状態が認められた。石は、50～60cmの大きな板状の石を中心に、井戸－２を取り囲むように、敷かれたような状態で存在し、東側に張り出すように拡がっていた。また、この敷石は、井戸－３にも好位置にあり、井戸－３にも利用された可能性が考えられる。

この敷石が、井戸－２の付属施設とするならば、敷石の上部から井戸の底部までは約55cmと浅い。これは、この井戸が谷の堆積土中に存在しており、湧水点も高い位置にあったものと考えられる。また、敷石もこのような条件の位置であるため、足場自体も不安定であったための施設であろう。

井戸の時期については不明であるが、井戸－３との位置関係、敷石の状況などのことから、井戸－３と同時期もしくは相前後する時期だと考えられる。

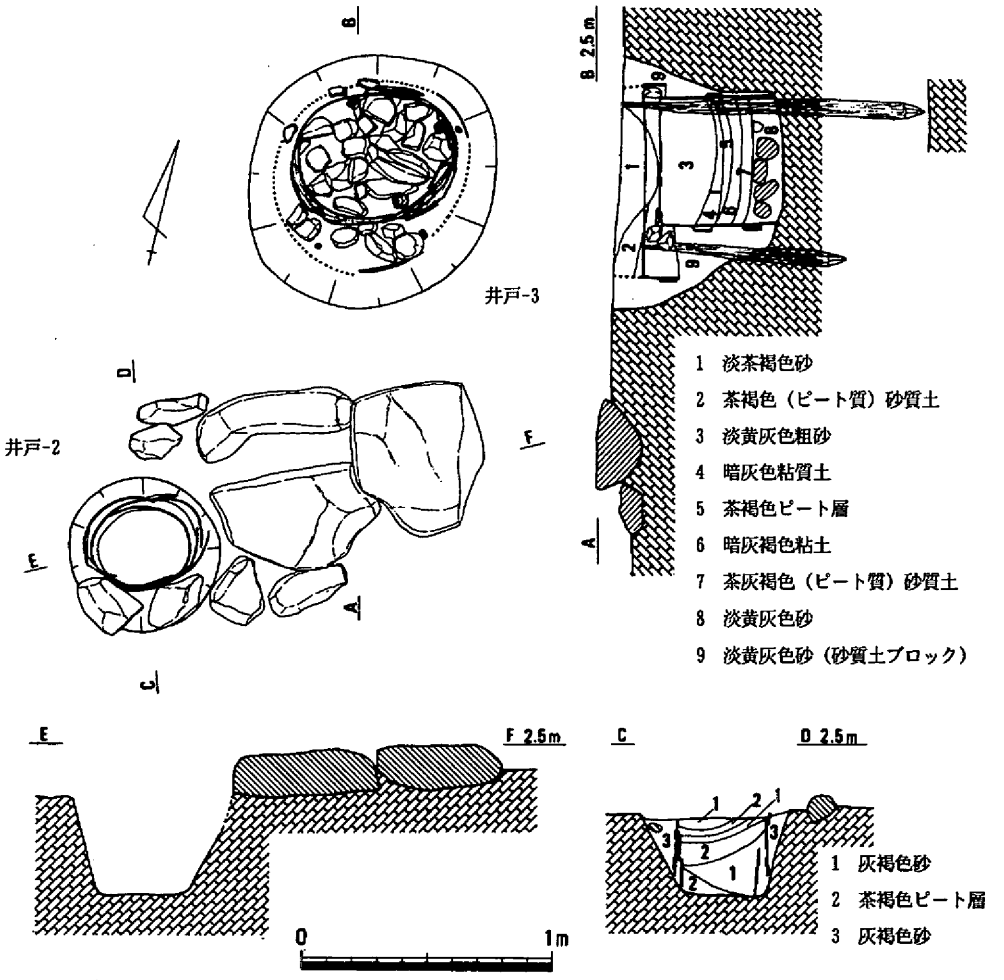
井戸－３（第153、154図）

井戸－２と同様に谷－Ｃ中の出入口部付近に位置する。井戸－２のほぼ北１ｍに検出された。掘り方は、直径約１ｍの円形を呈し、深さは約70cm残存していた。断面形は、上部からやや内湾気味に斜下方に掘り下げ、さらに約25cm程はやや角度を変えて下方に掘られている。

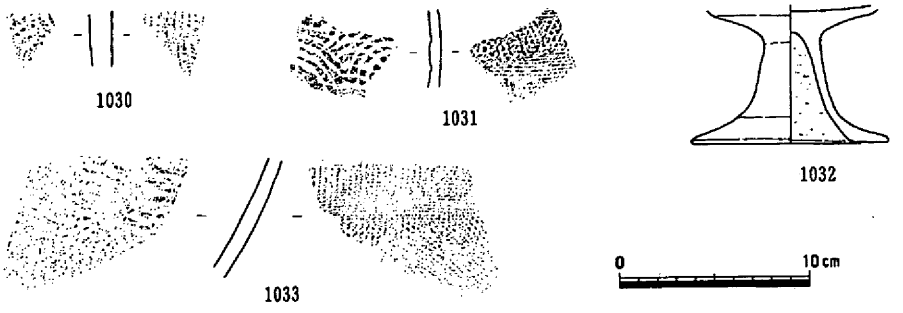
掘り方底部には、径50～60cm、高さ約47cmの曲物を置き、さらに径約75cmの曲物を、底部より約25cm上部の掘り方変換点に据えるように重ね積みをして井筒を構築している。上部の曲物は、南西方向にずらして据えられている。下部の曲物の底部には、約10cm前後の石を敷いている。また、下部の曲物上端部と上部の曲物の間にも石を敷いている。さらに、上下の曲物の内

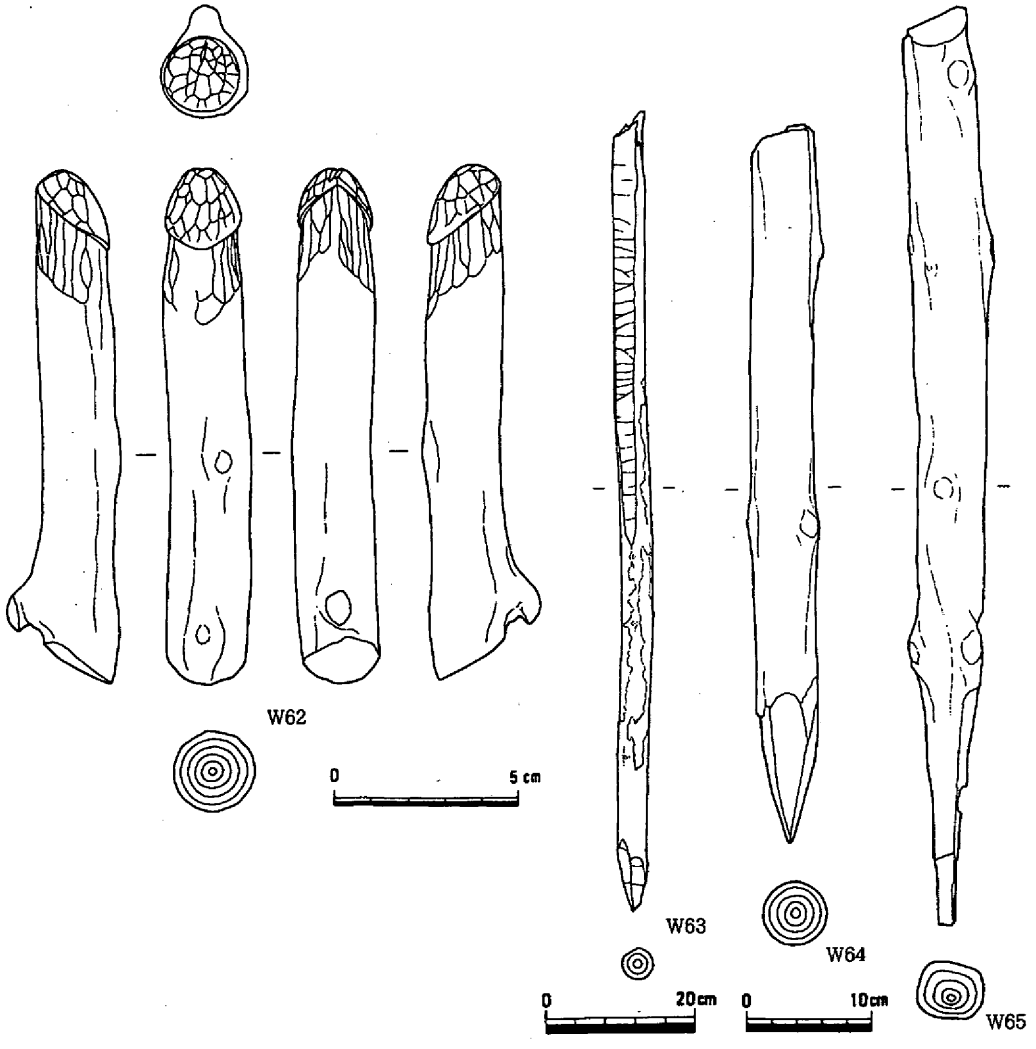
側には、井筒を固定するために、径約５cmの杭を打っている。井筒内側の杭は、谷－Ｃの底部の基盤層まで打ち抜かれていた。出土遺物は、井戸底部の第153図第７層から陽物形木製品が出土した。これは、井戸の祭祀と関連する遺物である。また、1030～1032が井戸の掘り方から出土している。井戸は、これらの遺物から古代と考えられる。　（中野）

W62は井戸内から出土した陽物形木製品である。長さは13.7cmあり、径２cmほどのツバキの丸木の一端を削り出して亀頭形に加工している。加工は精巧で、先端には刻目をいれて尿道を表現するなど極めて写実的なつくりとなっているが、基部は小枝を切り落とすほか特に手を加えていない。W63～W65は、井戸枠を固定するのに使用されていた杭である。W63は長さ126.4cmあり、径4.9cmのヒサカキの丸木の一端を尖らせて杭としている。W64、W65は、ネズミサシの丸木を利用した杭で、径は５cmを測る。　（亀山）



第153図　井戸－2・3（1／30）

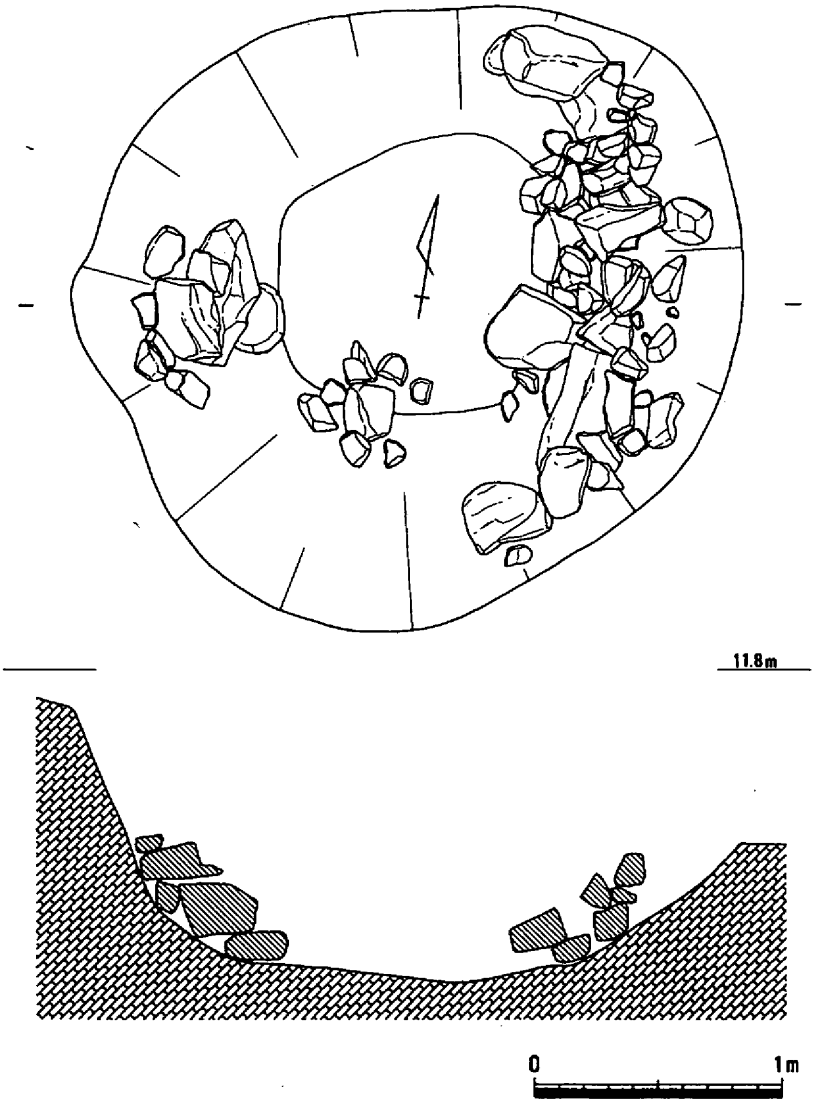




第154図　井戸－2・3 出土遺物

井戸－4（第155図）

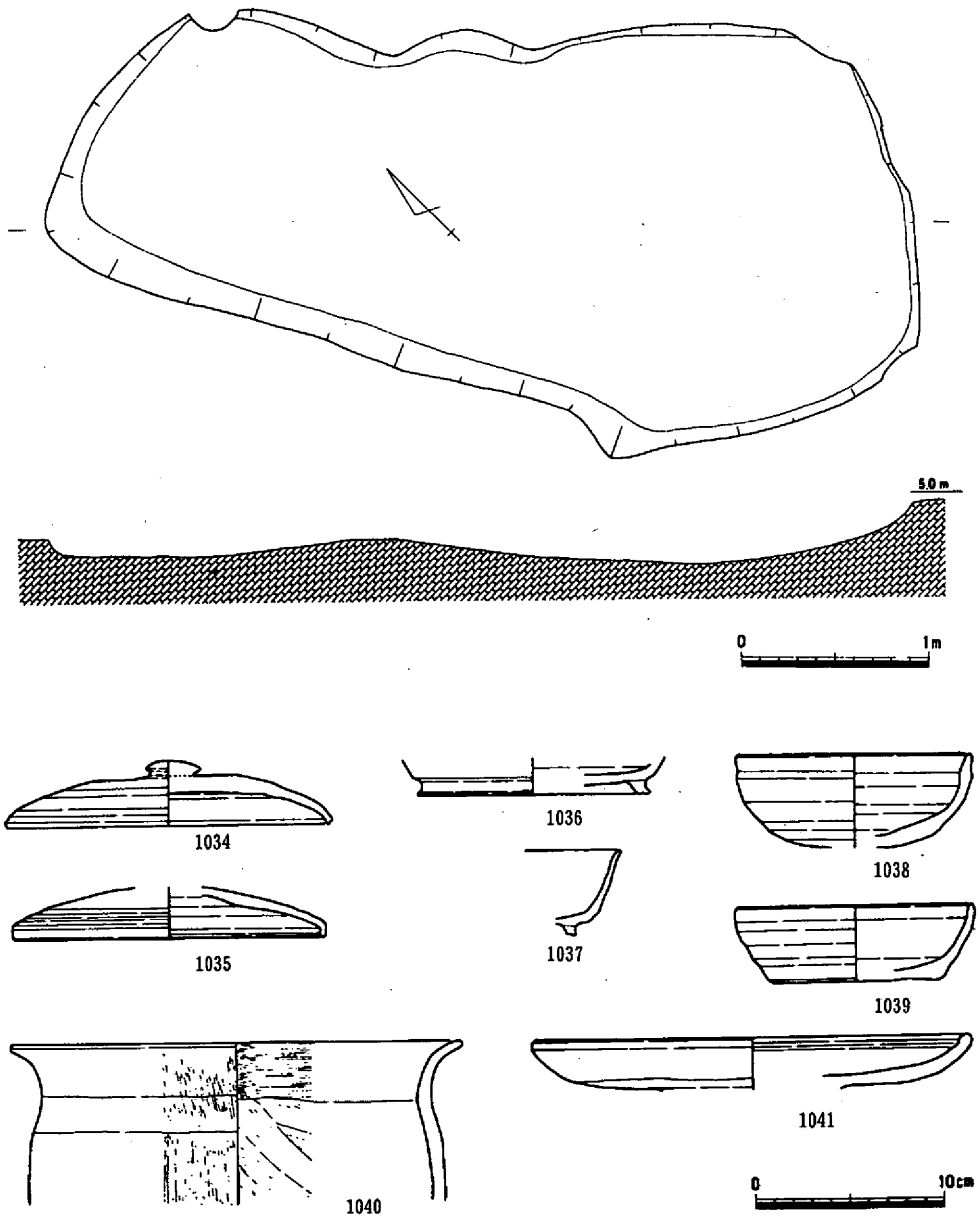
調査区南西部（10区）の建物－21の北東部に隣接して検出された。井戸は、平面形が270×245cmのほぼ円形を呈する。深さは、約110cmを測り、断面形は逆台形であった。井戸の掘り方には、東側と西側一部に石組が検出できた。石組は、やや乱れているものの、割石を２～３段積み上げている状況が残存していた。東側石組では、掘り方に沿うように外開に割石を階段上に積み上げていた。　井戸からは、出土遺物は検出されなかったため時期不明である。しかし、建物－22との関連および周囲の状況から古代～中世のものと考えられる。



第155図　井戸－4（1／30）

（４）土壙

今回の調査では、土壙の検出は以外に少なかった。これは、遺構の性格にも関わると思われるが、本遺跡では、調査の主体を占める丘陵斜面の大規模な後世の削平を受けたためと考えられる。他の遺構の残存状態などをみるときそれは明らかである。



第156図　土壙－14（1／40）出土遺物

わずかに検出された土壙は、大部分が調査区中央部の東側（6区）に集中する。

土壙－14（第156、187図）

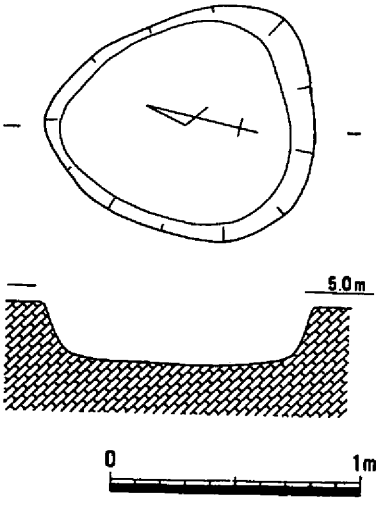
調査区中央部東側（6区）に位置する。土壙は、建物－18と建物－19の間に検出された。規模は、長さ約465cm、幅は160～240cmを測り、平面形は長楕円形を呈する大規模なものである。深さは約25cmで、底部は凹凸が認められた。土壙内には、暗茶灰色泥砂土が堆積しており、出土遺物は須恵器、土師器が相当量検出された。

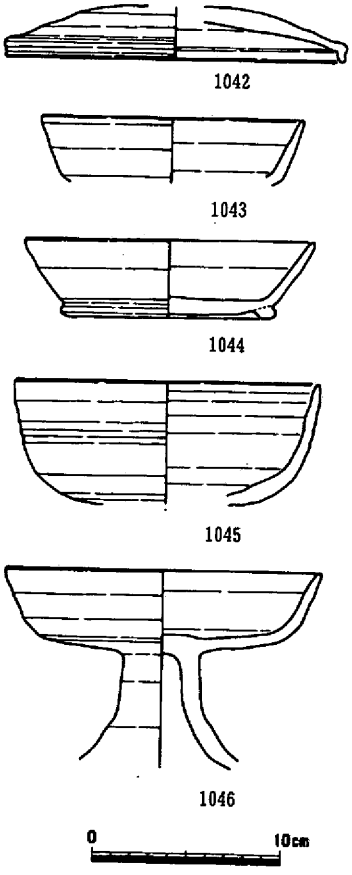
須恵器の**1034～1039**は、**1035**、**1039**は胎土、焼成とも良好であるが、**1034**、**1036**、**1038**は、焼成が甘く、胎土は砂粒を多く含む。**1041**は、丹塗土器で高台付の皿である。図示した以外の土器も、いずれも7世紀後半～8世紀初頭の特徴を示すものであった。

土壙－15（第157、187図）

調査区中央の東側（6区）に位置する。土壙は、土壙－14の南に隣接して検出された。平面形は、110cm×95cmの楕円形を呈する。深さは、約25cmを測り、断面は逆台形である。土壙内には、暗茶灰色泥砂土が堆積していた。

出土遺物は、図示した**1042～1046**以外にも、須恵器、土師器が認められた。須恵器は、相対的に焼成の甘いものが目立ち、**1046**は瓦質の焼上りである。**1045**は、やや立ち上がりの高い杯である。**1042**は、口縁端部が短く外反する。これらの土器は、いずれも8世紀前半の特徴を示すものである。



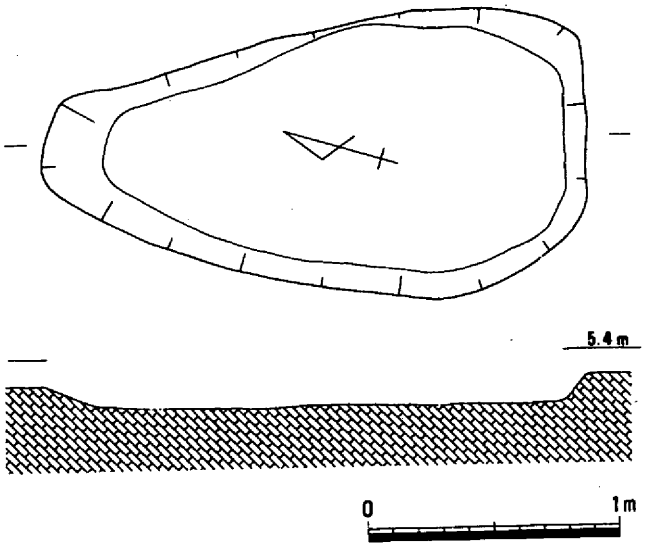


第157図　土壙－15（1／30）出土遺物

土壙－16(第158、187図)

この土壙は、調査区中央部東側（６区）の、土壙－14の西側に検出された。土壙の平面形は、約220cm×約115cmのやや不整の楕円形である。深さは、約10cmを測り、断面形は浅い皿状を呈する。

出土遺物は、須恵器、土師器が少量ながら認められた。いずれの土器も細片であったが、８世紀前半期の特徴をもつものであった。

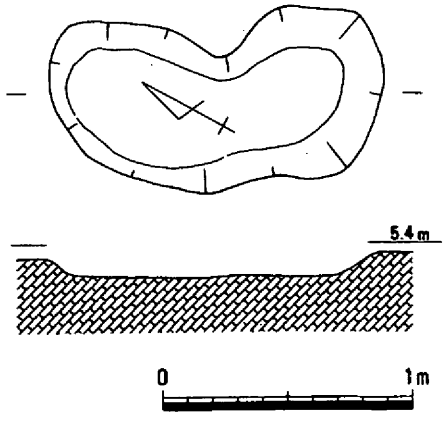


第158図　土壙－16（1／30）

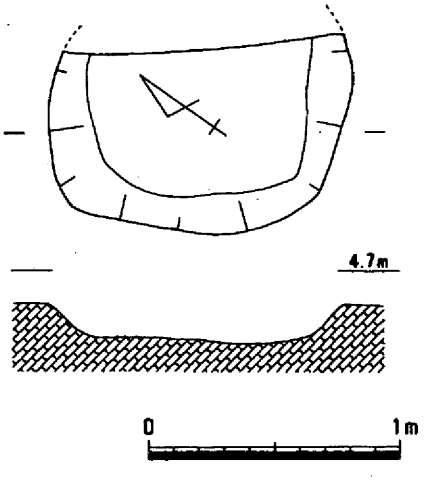
土壙－17（第159、187図）

土壙－４の北側、建物－21の東側に隣接して検出された。土壙は、やや歪な平面形を呈しており、134cm×65cmを測る。深さは、約10cmと浅く、断面形は皿状を呈する。土壙内には、暗茶灰色泥砂土が堆積していた。

出土遺物は、須恵器、土師器が少量認められた。土器は細片などから、土壙－16と同時期のものと考えられる。



第159図　土壙－17（1／30）



第160図　土壙－18（1／30）

土壙－18（第160、187図）

この土壙は、調査区中央の東側（６区）に位置する。土壙－１の東約2.5ｍに、溝－39に土壙の東側を切られて検出された。土壙の平面形は、径約120㎝の円形と考えられる。深さは約15㎝を測る。土壙内は、暗茶灰色泥砂土が堆積していた。

出土遺物は、須恵器、土師器が少量あったが時期の特徴を示すものはなかった。しかし、土壙内の堆積土および周辺の状況から奈良～平安時代と考えられる。

土壙－19（第161、187図）

土壙－１の南東約８ｍに位置する。土壙は、東側の一部が後世の溝の削平を受けているものの、平面形は、径約240㎝の円形と考えられる。深さは、約15㎝を測り、断面形は逆台形を呈する。

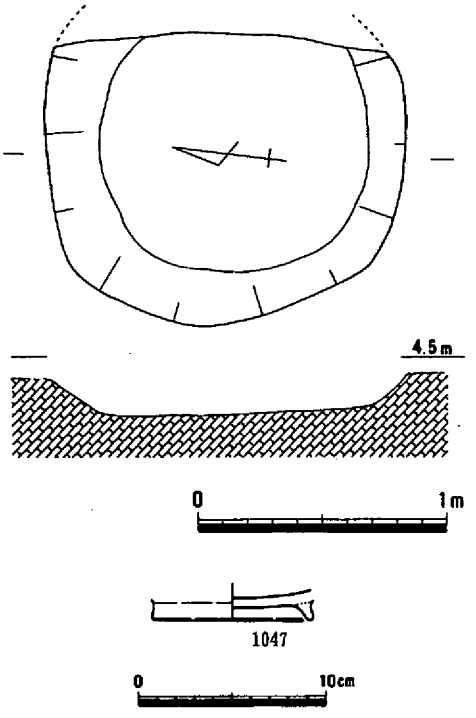
出土遺物は、図示した**1047**の黒色土器を含む土師器を少量出土した。時期は、平安時代と考えられる。

土壙－20（第162図）

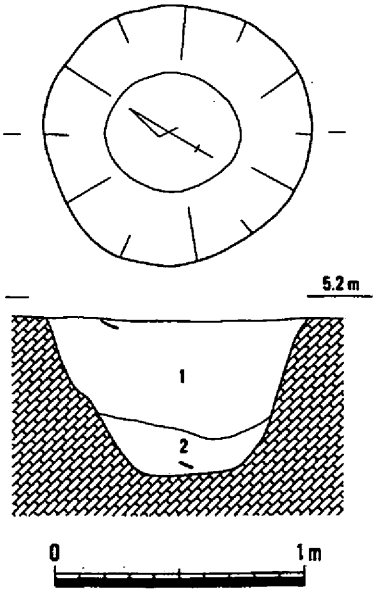
調査区中央のやや西側（９区）の建物－13の西約４ｍに位置する。土壙は、径約107㎝の円形を呈する。深さ約60㎝を測り、断面形はＵ字形である。土壙内からは、須恵器、土師器が少量出土した。時期は、平安時代～中世と考えられる。

土壙－21（第163図）

調査区北東部東側（１区）の、建物－３、４の南約10ｍに位置する。平面形は、長辺をほぼ東西にもつ長方形で、土壙南東部に大きな崩れがある。土壙内は、南側を除く

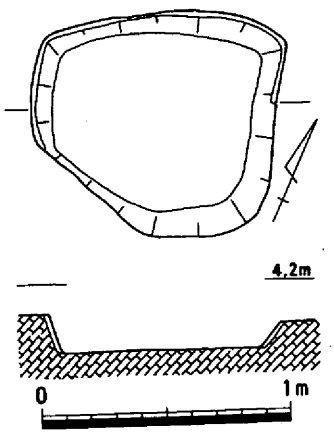


第161図　土壙－19（1／30）



1. 暗褐色土　　2. 暗茶褐色土

第162図　土壙－20（1／30）



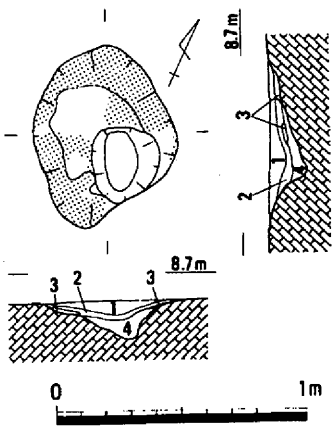
第163図　土壙－21（1／30）

三辺の壁が焼壁面で高さ約15cm残存していた。焼壁面での規模は、長辺約100cm、短辺約50cm以上を測る。焼壁面は、表面が灰色に還元していた。埋土は、黒褐色砂質土が堆積しており、出土遺物はなかった。この焼土土壙は、前述した窯址に伴った焼土土壙に類似しているが、時期が不明のためこの項で報告した。

（5）鍛冶炉

鍛冶炉－1

調査区南端部のほぼ中央に位置する。前述したように、建物－24の中央からやや南東よりに不正楕円形の焼けた土壙を検出した。土壙は、二段に掘りくぼめられ、全面が焼けており鍛冶炉と考えられる。規模は、長径約70cm、短径約60cm、深さ約20cmを測る。土壙内には、焼土塊、炭が堆積していた。出土遺物はなく時期不明である。しかし、土壙周辺の遺構は、平安、鎌倉時代のものが多く認められ、この鍛冶炉もその時期のものであろう。また、建物－24との位置関係から、建物－24が鍛冶炉の覆屋とも考えられる。



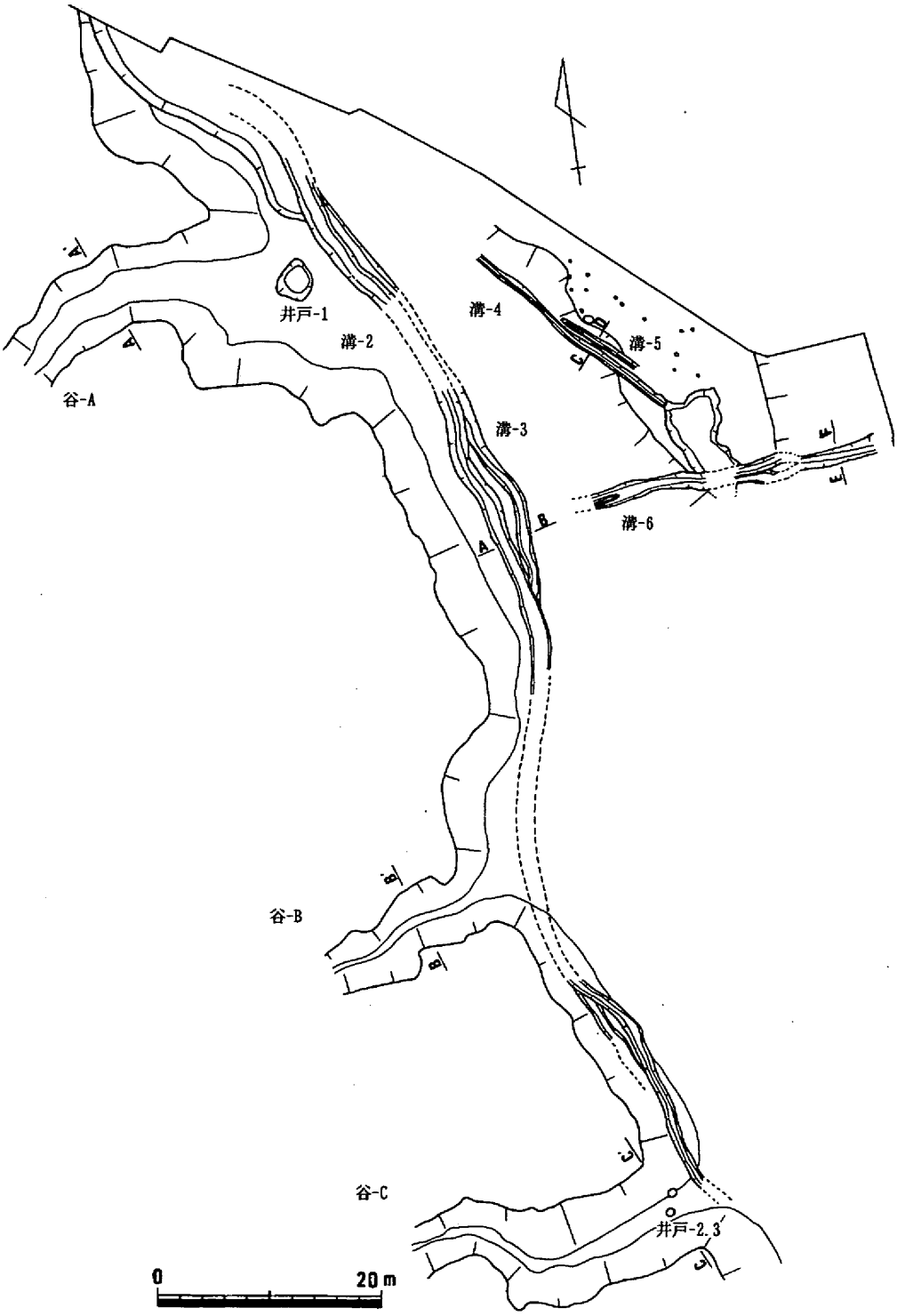
1 灰褐色土　　3 灰褐色粘質土
2 炭化層　　4 黄褐色土

第164図　鍛冶炉－1（1／30）

（6）溝

今回の調査では、調査区全域に溝が検出された。調査区の丘陵斜面では、前述しているように階段状に大規模な開墾が行われており、遺構の残存状態は良くなかった。検出された溝も、断続的、断片的なものであり、溝間の関連、他の遺構の関係など溝の性格について不明な点が多かった。また、開墾の際の溝も多数検出でき、明らかに後世のものについては省略した。

また、調査区東部（11、12区）の低位部では大量の土器を包含する奈良時代の溝など数条検出した。



第165図　溝－2～6 周辺 (1／600)

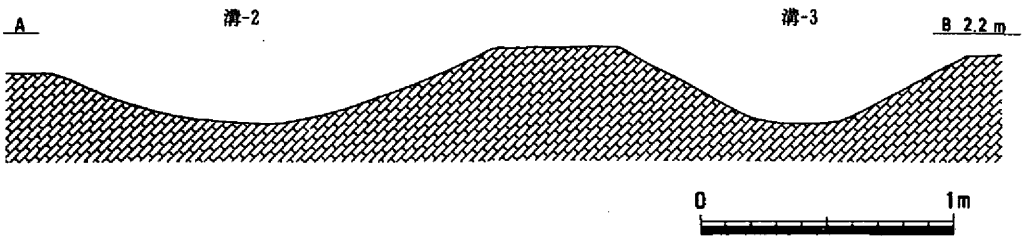
溝－２（第165～176図）

調査区西側（11、12区）の山裾部から低位部への斜面際に検出された。溝は、山裾部からの斜面に沿うように、ほぼ南北方向に溝－３と重なり合いながら、蛇行して流走する。溝－２は、溝－３より新しく、幅約175cm、深さ約28cmを測る。溝内には、淡黄褐色砂層が堆積しており、多量の遺物が出土した。

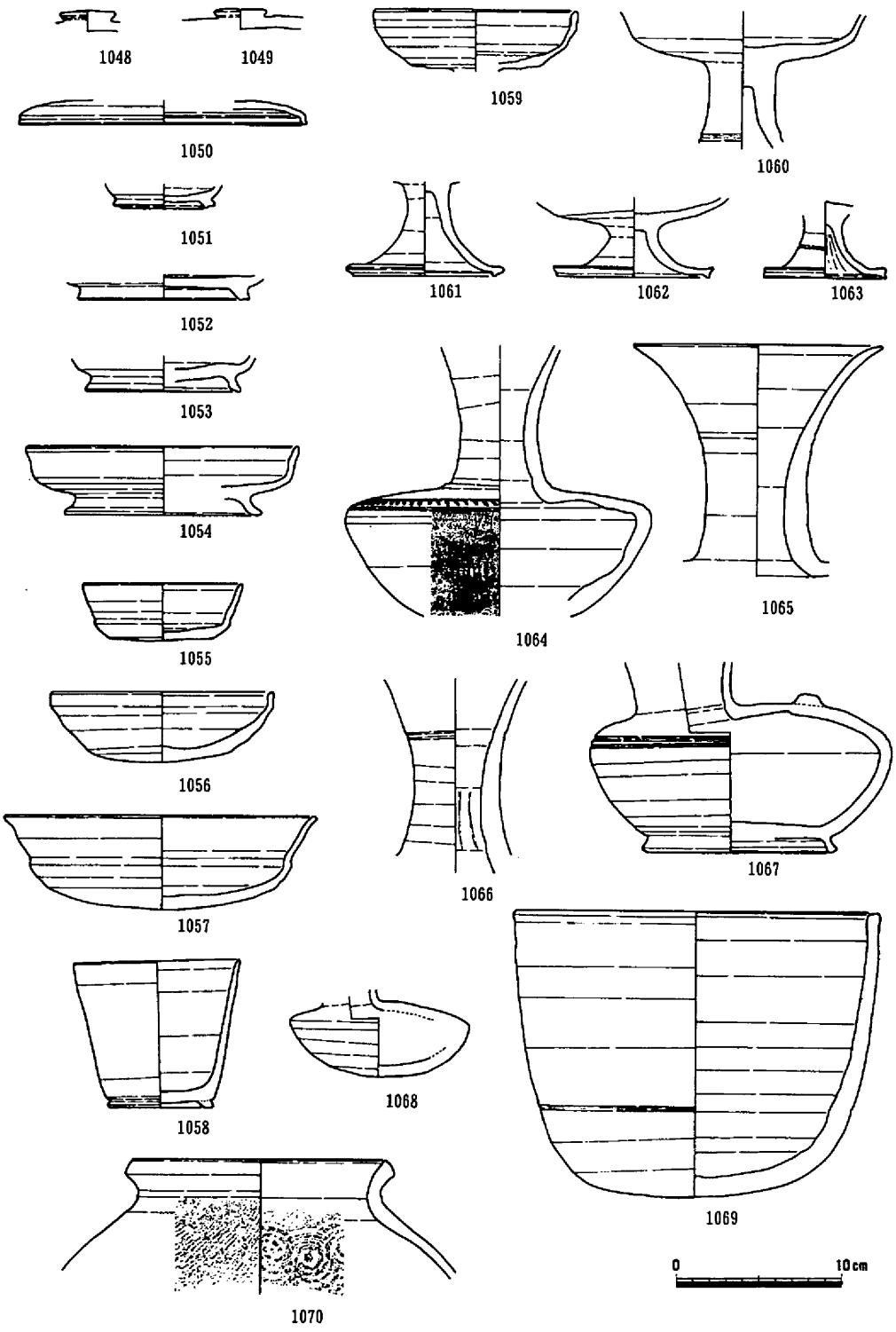
須恵器：各種の須恵器（(1048～1070）が出土した。杯蓋（1048～1050）は、つまみは碁石状で、口縁部は屈曲させている。杯身は、高台の付くもの（1051～1054）、高台の付かないもの（1055、1056）がある。高杯は、短脚のもの（1062）、小型のもの（1063）も含んでいる。1057は、鉢でていねいに仕上げてあり、県内では例は少ない。1069も鉢で、焼成が不良で体部下半に１条の沈線をもつ。甕（1071～1075）は、いずれも外反する口縁部である。1073は、「く」の字状に外反しており、やや新相のものであろう。以上の須恵器は、おおむね８世紀前半期を中心とするもので、やや新相のものが一部混在する

土師器：1077～1079は、内面に放射状の暗文をもつ杯である。1080～1092は、皿、鉢で、いずれもオサエ、ヨコナデにより仕上げている。1080、1081は上層から混入したもので古代後半期のものである。高杯の1093～1102は、杯部がいずれも底部から丸味をもっており、内湾して口縁部に立ち上がる。杯部内面は、ヘラミガキ状にていねいに仕上げている。脚部は、「ハ」の字形に開き、裾部は屈曲して接地する。甕（1103～1115）には多種がある。その他把手付鍋、甑などが出土している。1120は、器面は凹凸が激しく、製塩土器である。以上の土師器は、須恵器と同様にその中心は７世紀末－８世紀の前半の特徴を示している。　（中野）

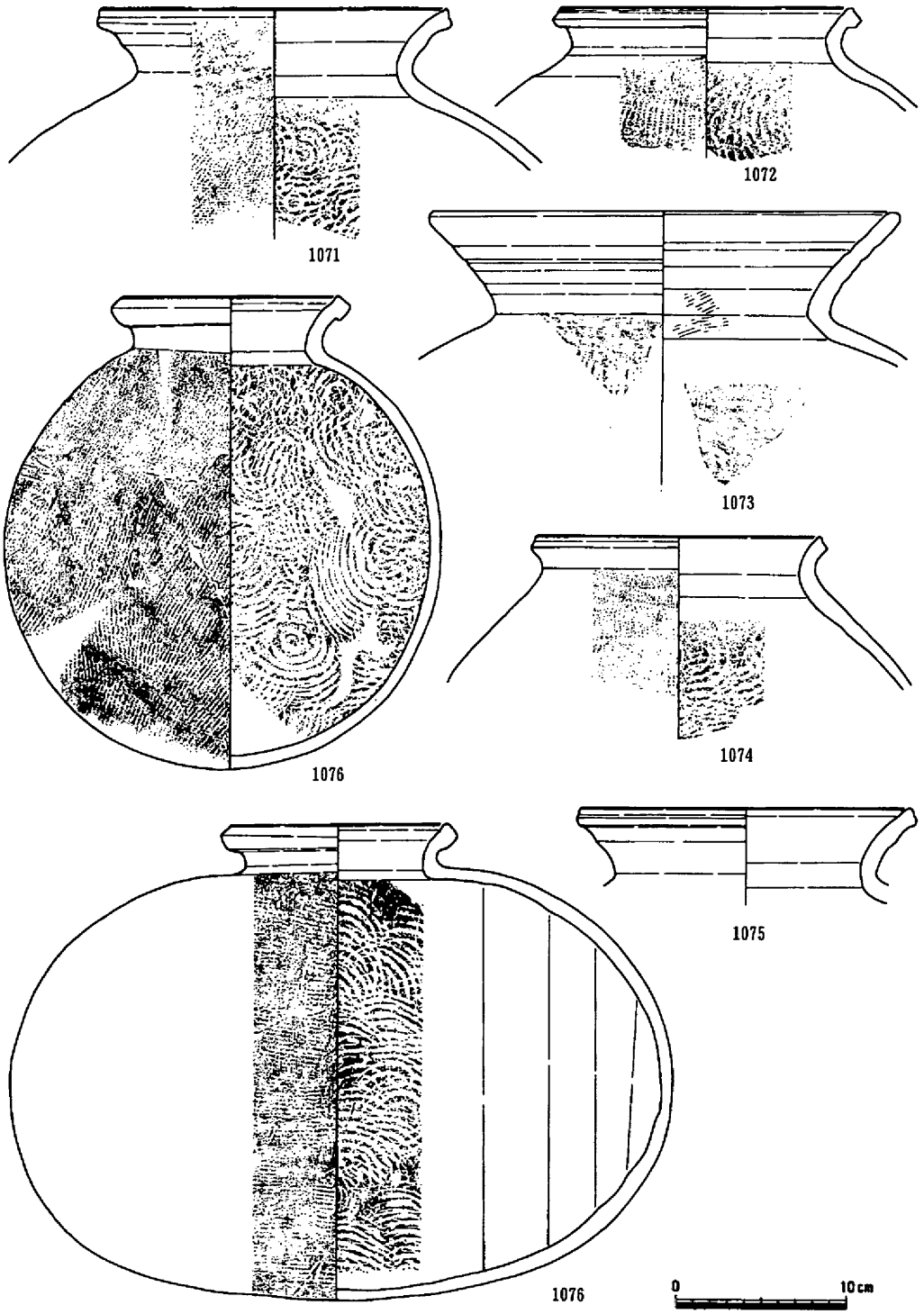
木器：W67は二又鋤で長さ42.2cmを測り、幅は14cmほどになるものと思われる。厚さは2.8cmあり、アラカシを素材としている。W68もアラカシ製で組み合せ鋤ないし鍬の身になるものと思われる。長さは40.1cmあり、幅は14cm前後になるものと思われる。W69は長さ19.5cm、幅５cm、厚さ0.8cmの身に、長さ13.5cm、径２cmの柄をつけた木製品で、杓子形木器である。W72は田舟ないし大形の槽と思われる刳物である。遺存状態はあまりよくないが、本来は長さ



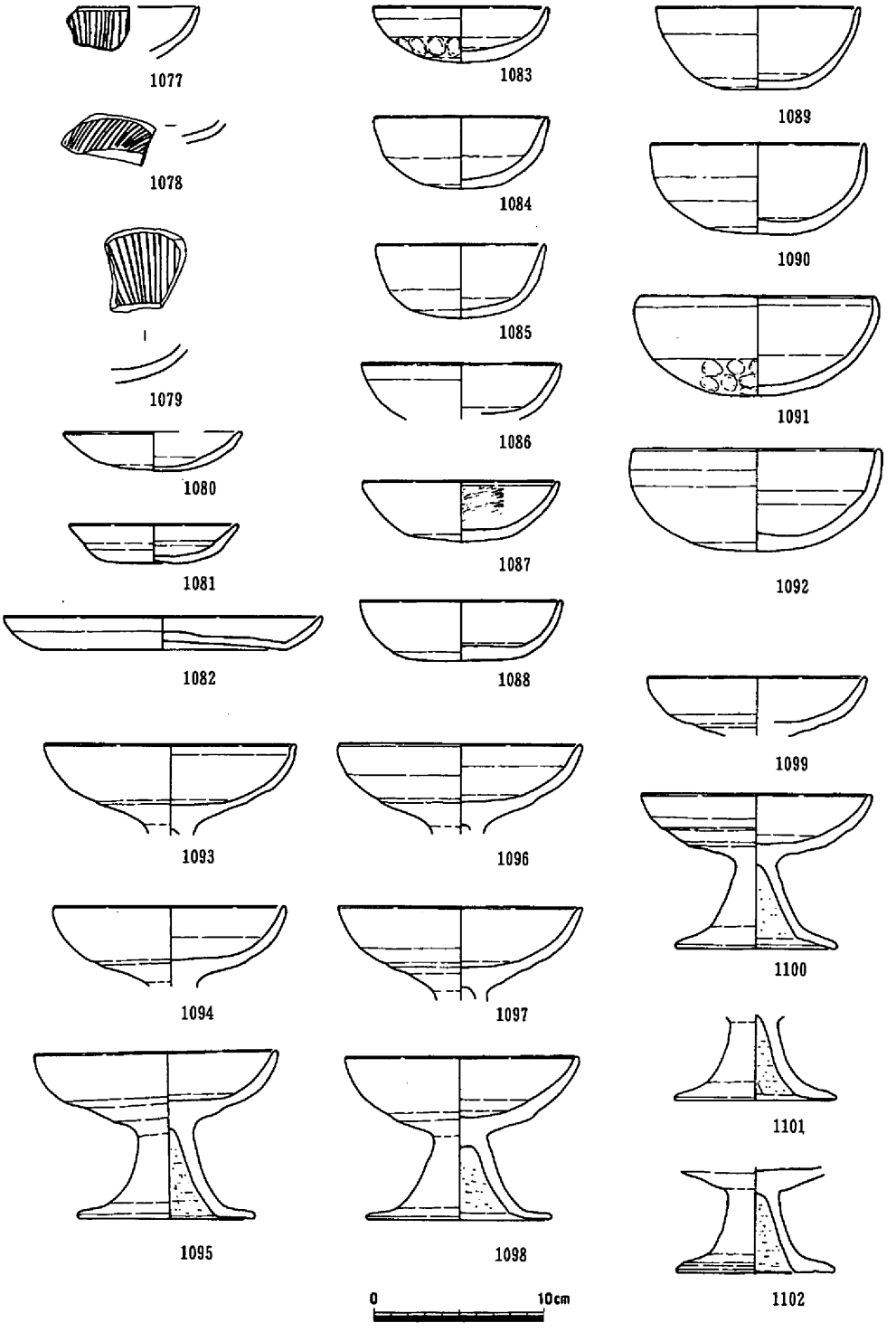
第166図　溝－2. 3　　(1／30)



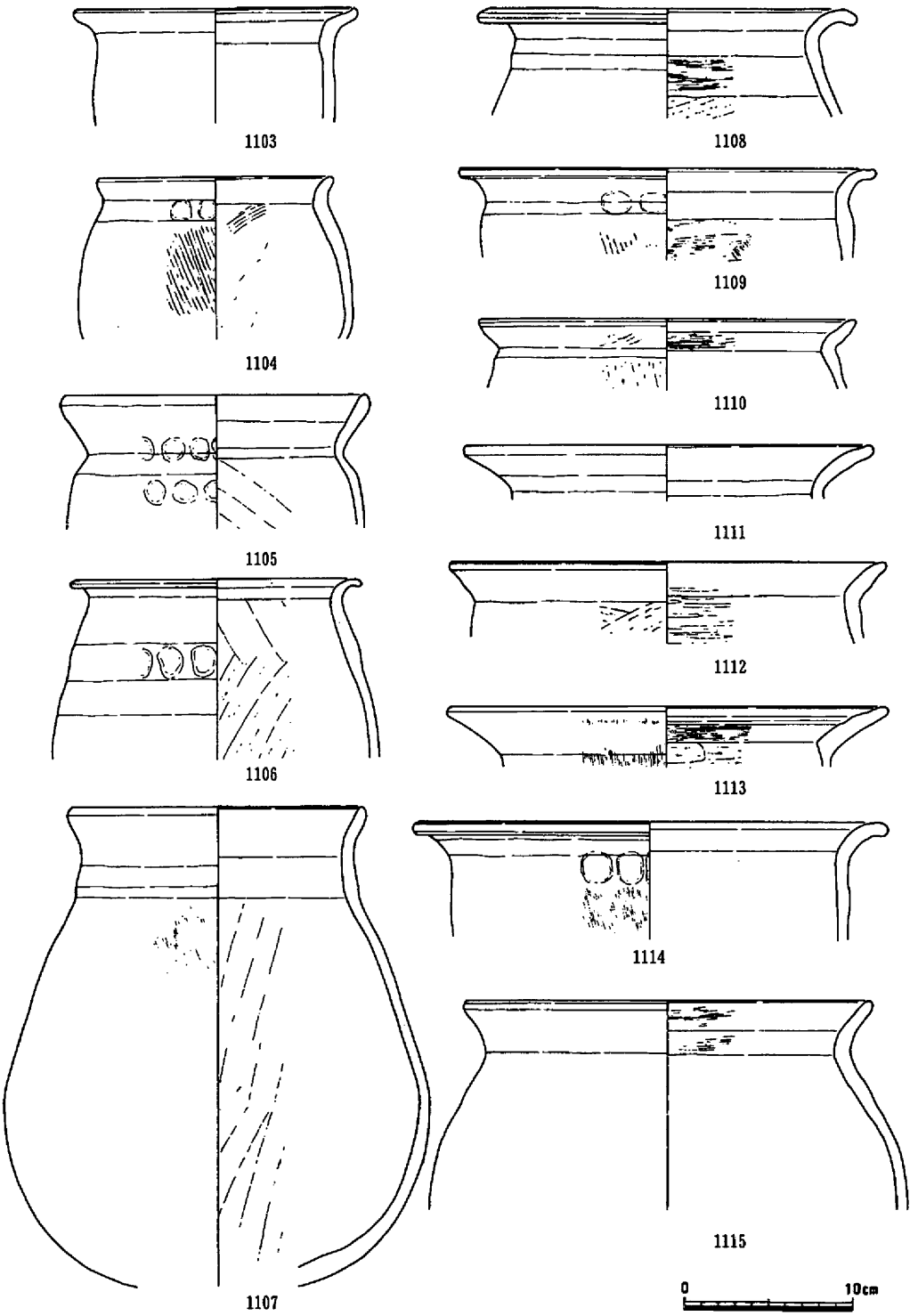
第167図　溝－2 出土遺物（1）



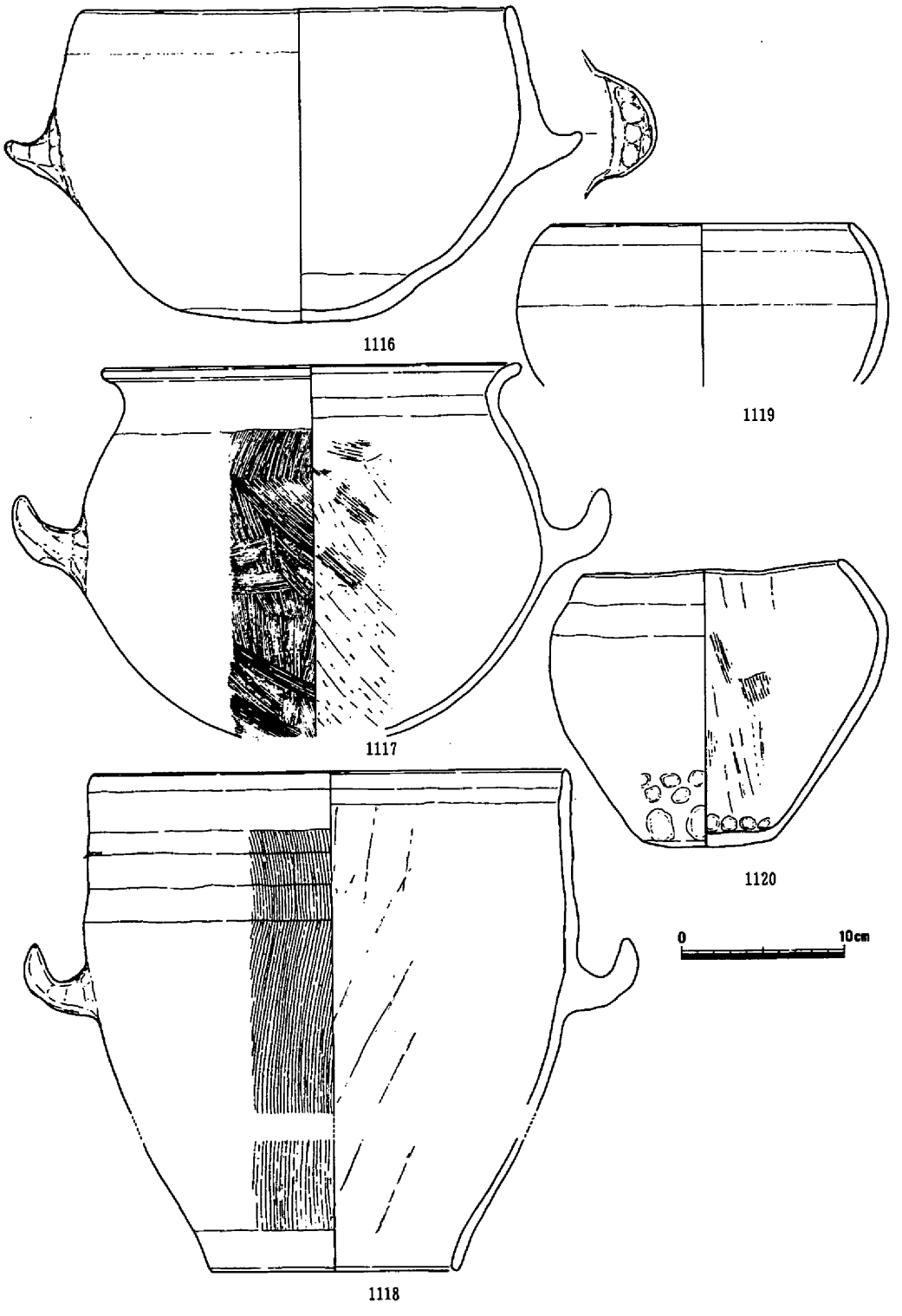
第168図　溝－2 出土遺物 (2)



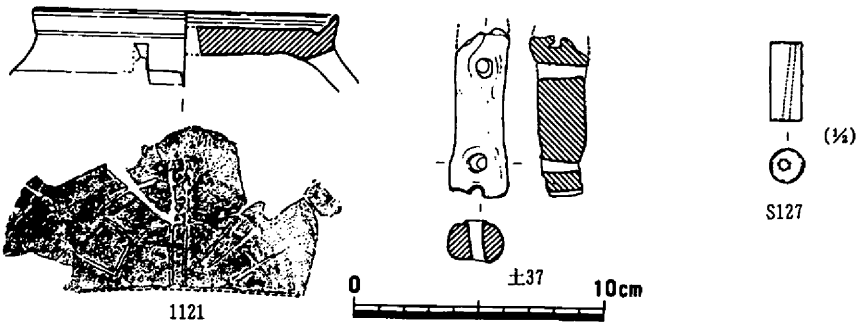
第169図　溝－2 出土遺物 (3)



第170図　溝－2 出土遺物 (4)

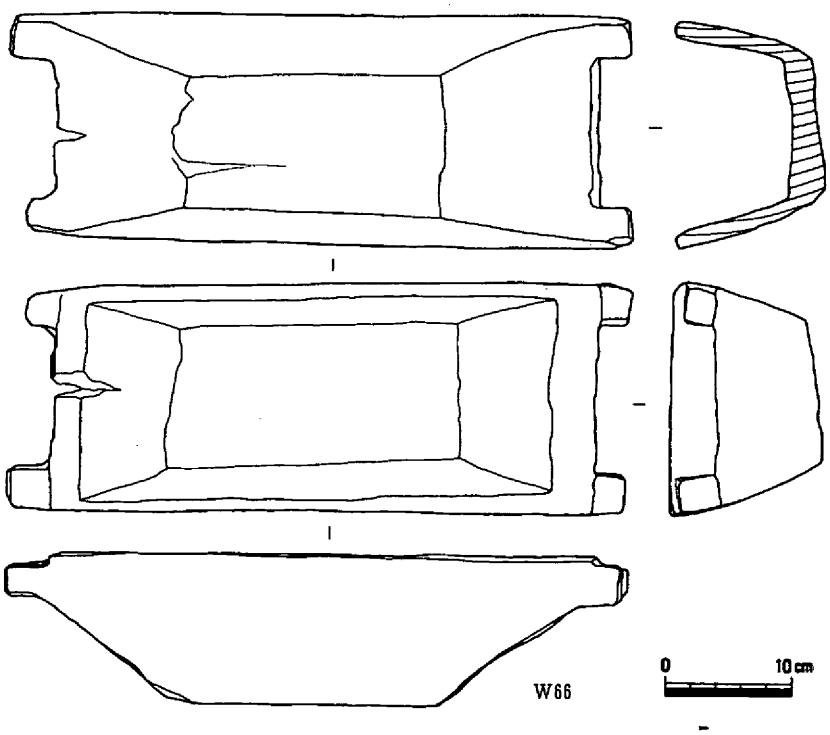


第171図　溝－2 出土遺物 (5)

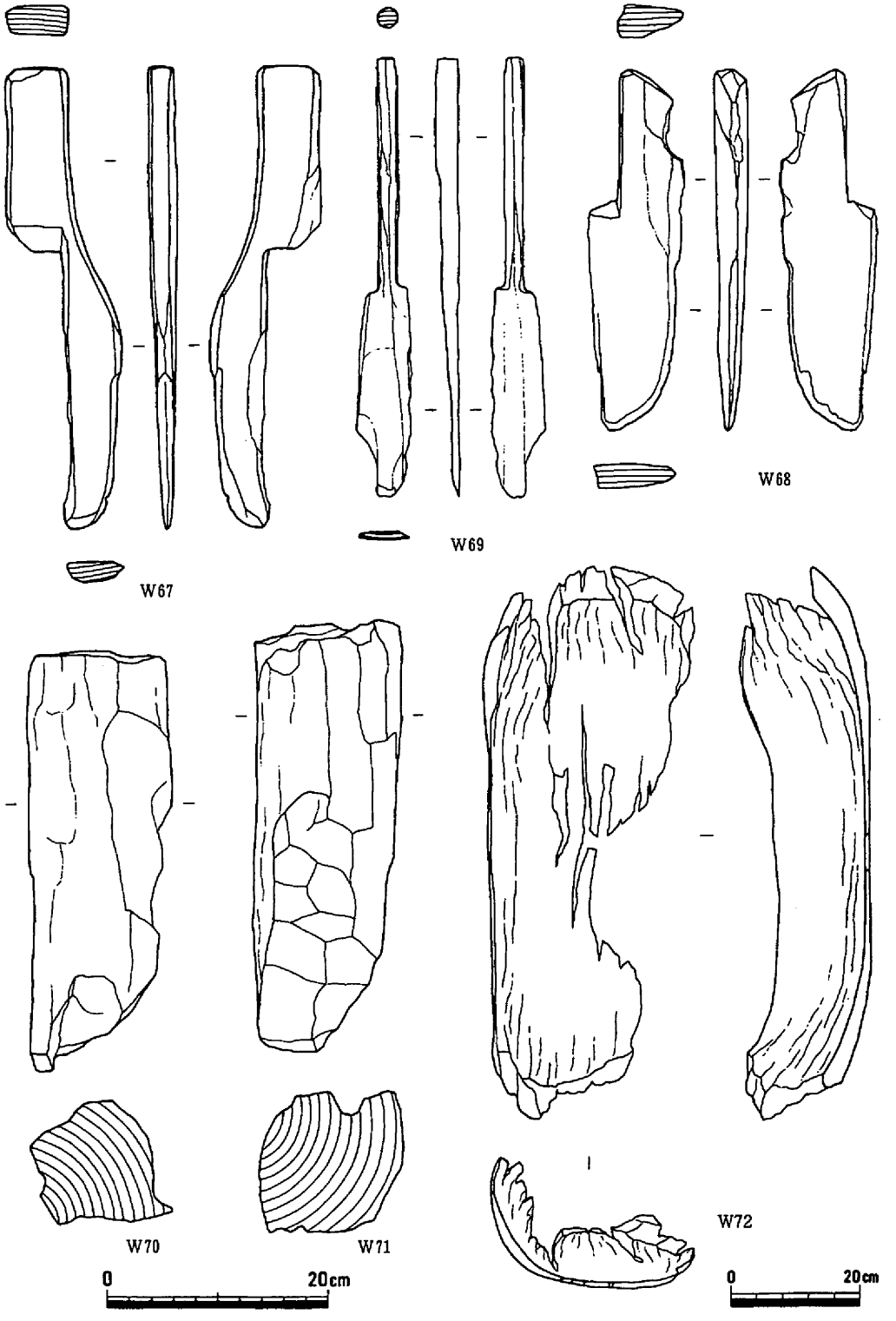


第172図　溝－2 出土遺物 (6)

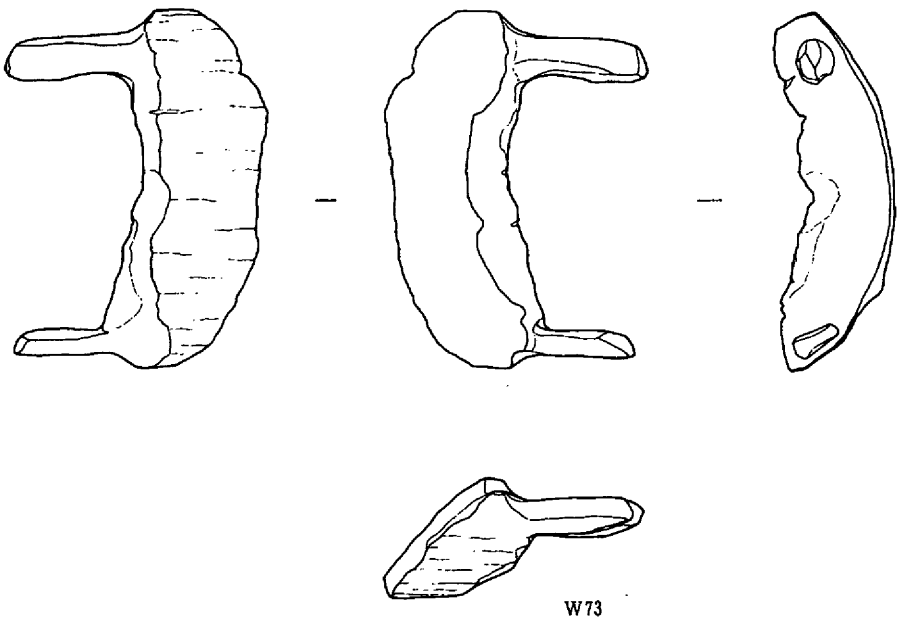
90cm、幅35cm、高さ20cmほどの長楕円の平面形のものと思われる。コジイの一木を刳り抜いてつくられている。**W73**、**W74**はクスの丸太を半裁し刳り抜いた容器の両端と考えられる。**W73**は、幅28.4cm、高さ9.7cm、**W74**で幅36.8cm、高さ12cmを測り、それぞれ一対の突起をつくりだしている。突起は長さ8～10cm、幅3.5cmの円形ないし隅丸方形で、先端がやや太くなっている。容器の外側には枝を落とした瘤を残しており、樹皮を剝いだのみの粗い仕上げとなっている。また内側には斜めに裁断した痕が残り、本体を木樋などに転用するため、両端を切断し



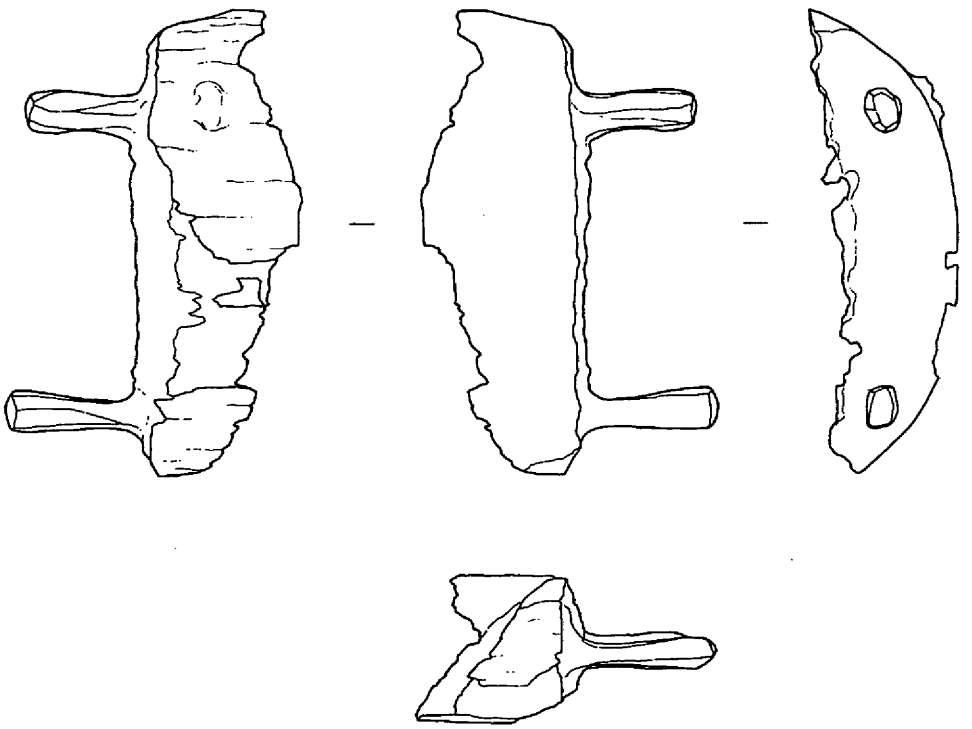
第173図　溝－2 出土遺物 (7)



第174図　溝－2 出土遺物 (8)



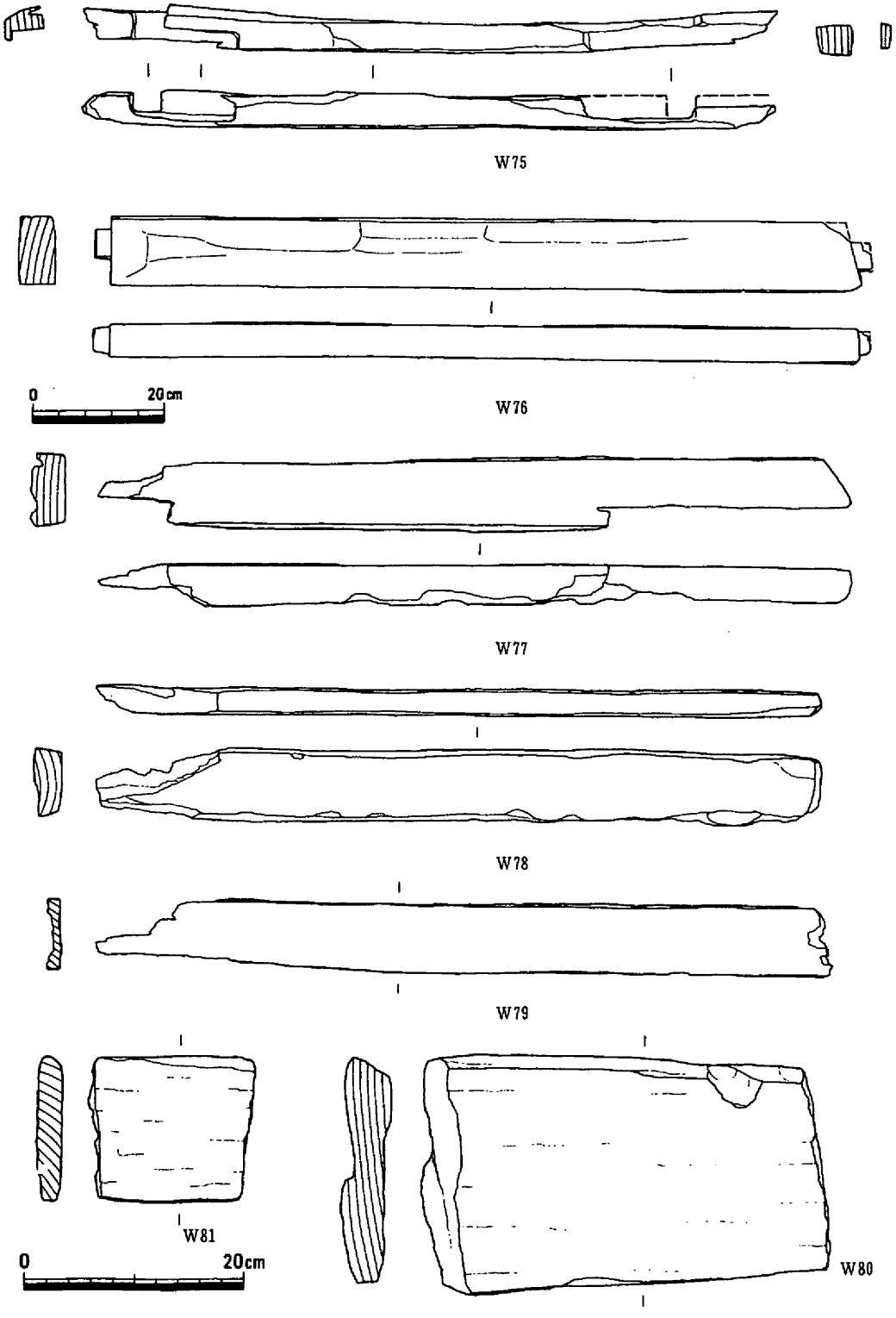
W73



W74

0　20cm

第175図　溝－2 出土遺物 (9)

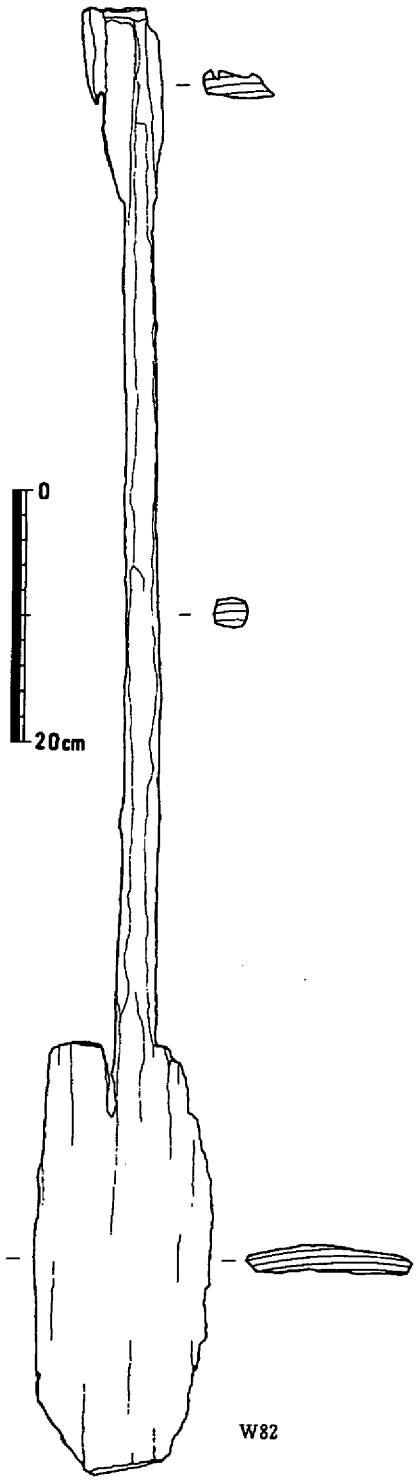


第176図　溝－2 出土遺物 (10)

遺棄したものと見られる。このような容器は類例に乏しく、刳り抜き式の船や木棺とも考えられるが確証はない。**W66**は槽で、長さ50cm、幅17cm、高さ12cmを測る完存品である。平面は長方形で、底部が口縁部より狭く、側面は逆台形となる。短辺の口縁部には方形の短い突起がそれぞれ一対つくりだされている。**W75、W76**は建築材である。**W75**は5.5×4.5cmのネズミサシを使った角材で長さ106cmあり、両端近くに2段になった方形の抉りこみを施す。**W76**は10.5×5.5cmのヒノキの角材で長さ115.5cmあり、両端に長さ3cm、幅4cmの枘をつくりだしている。**W77～W81**は加工材である。**W77**は6.8×4.1cmのネズミサシを使った角材で、長さは69.5cmある。**W78**も6.4×2.6cmの角材で、長さは67cmあり、アベマキを素材としている。**W79**はネズミサシの板材で、長さ68cm、幅6.5cm、厚さ1.4cmを測る。**W80**は長さ37cm、幅22cmの長方形で、厚さ4.6cmの板材である。素材はアラカシで、片面に樹皮を残している。**W81**は厚さ2.4cmのコウヤマキの板材で、長さ15cm、幅13.3cmの方形を呈する。　　(亀山)

溝－3（第166、177、178図）

溝－2と同様に、山裾部から低位部斜面際に検出された。溝は、調査条件等により断続的にしか検出できなかったが、溝－2とほぼ重なり合うように、ほぼ南北に流走する。規模は、幅約135cm、深さ約26cmを測る。溝は、砂層が堆積し、底部には一部粘土層が認められた。また、溝からは木器、



第177図　溝－3 出土遺物 (1)

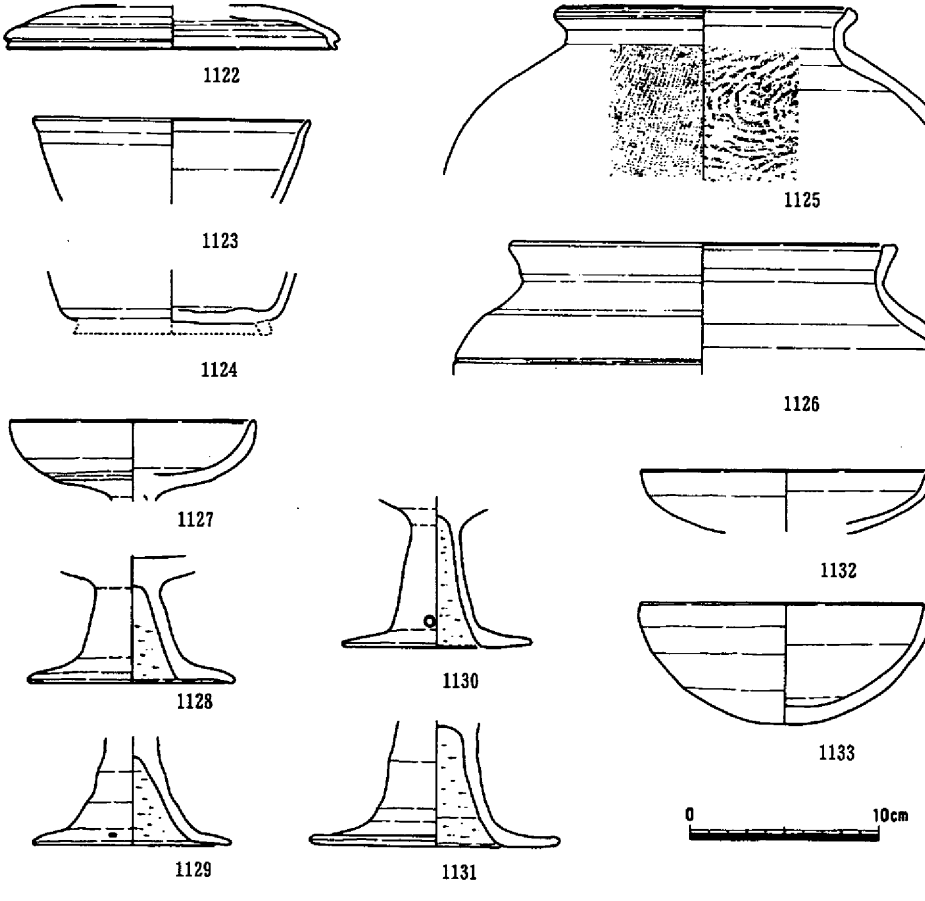
須恵器、土師器が出土した。

須恵器：1122の杯蓋は、丸味を残す天井部で、口縁部は鋭く、短く外反する。1123、1124は杯身で1124は高台が付く。甕の1125は、外反する口縁部で、端部が肥厚してさらに端部内側をつまみ出している。1126の鍋は、ゆるく外反する口縁部で、端部を肥厚さす。肩部には2条の沈線が廻る。

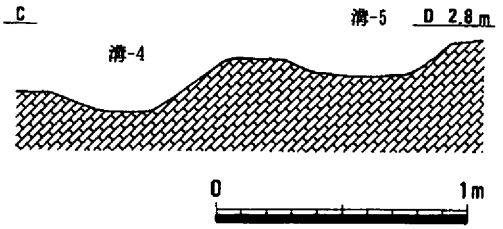
土師器：1127～1131は高杯で、杯部は内湾して立ち上がる。脚部は、脚柱部から屈曲する裾部で、裾部全体は接地気味である。1132、1133は、内湾する口縁部の鉢である。

以上の土器は、おおむね8世紀前半を中心とする特徴を示していると考えられる。（中野）

W82はカシの一木の鋤である。長さは116.4cmあり、身や把手の一部を欠損しているもののほぼ全形を知り得る。身は長さ34.3cm、幅15cm余りの長方形で、厚さは2cmを測り、鉄刃の装着痕は認められない。柄は長さ82.1cmで、その断面は径3cmほどの円形をなし、先端に逆三角形の把手がつく。把手には柄から続くT字形の隆起をつくりだすが、孔は穿たれていない。（亀山）



第178図　溝－3 出土遺物（2）



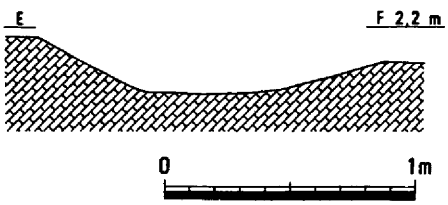
第179図　溝－4・5（1／30）

溝－4（第165、179図）

調査区北西部（11区）の中洲状の高まり部の西側斜面に検出された。溝は、北西から南西方向に流走し、南側で落ち込み状の凹地に流れ込んでいる。幅約65cm、深さ約20cmを測り、溝内には黒灰褐色泥砂土が堆積していた。出土遺物は、黒色土器を含む土師器が少量出土した。

溝－5（第165、179図）

溝－4の北側に平行に接して検出された。溝は残存状態が悪く、一部しか確認できなかった。幅約65cm、深さ約12cmを測る。堆積土は、溝－4と同じである。出土遺物も溝－4と同様で平安時代の特徴を示すものであった。



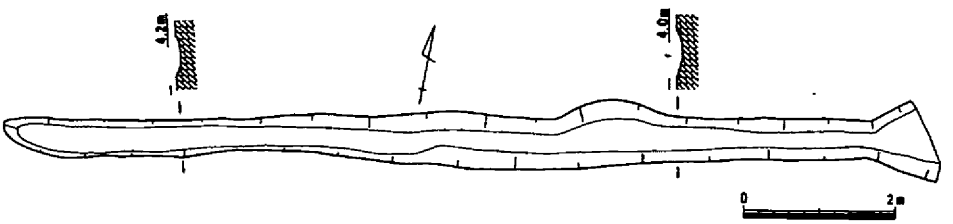
第180図　溝－6（1／30）

溝－6（第165、180図）

調査区中央の西端部（11区）に溝－4を切ってほぼ東西方向に検出された。溝は何回か掘りなおされているのか、部分的2本になっているところもあった。幅は約135cm、深さは約20cmを測る。溝内には、灰褐色砂質土が堆積しており、間層として淡黄灰色砂層が認められた。出土遺物は、平安時代～中世の土師器が少量検出された。なお、この溝が、溝－4の地形に沿って存在するのに対して、東西方向に掘られていることに注目したい。

溝－7（第165、181図）

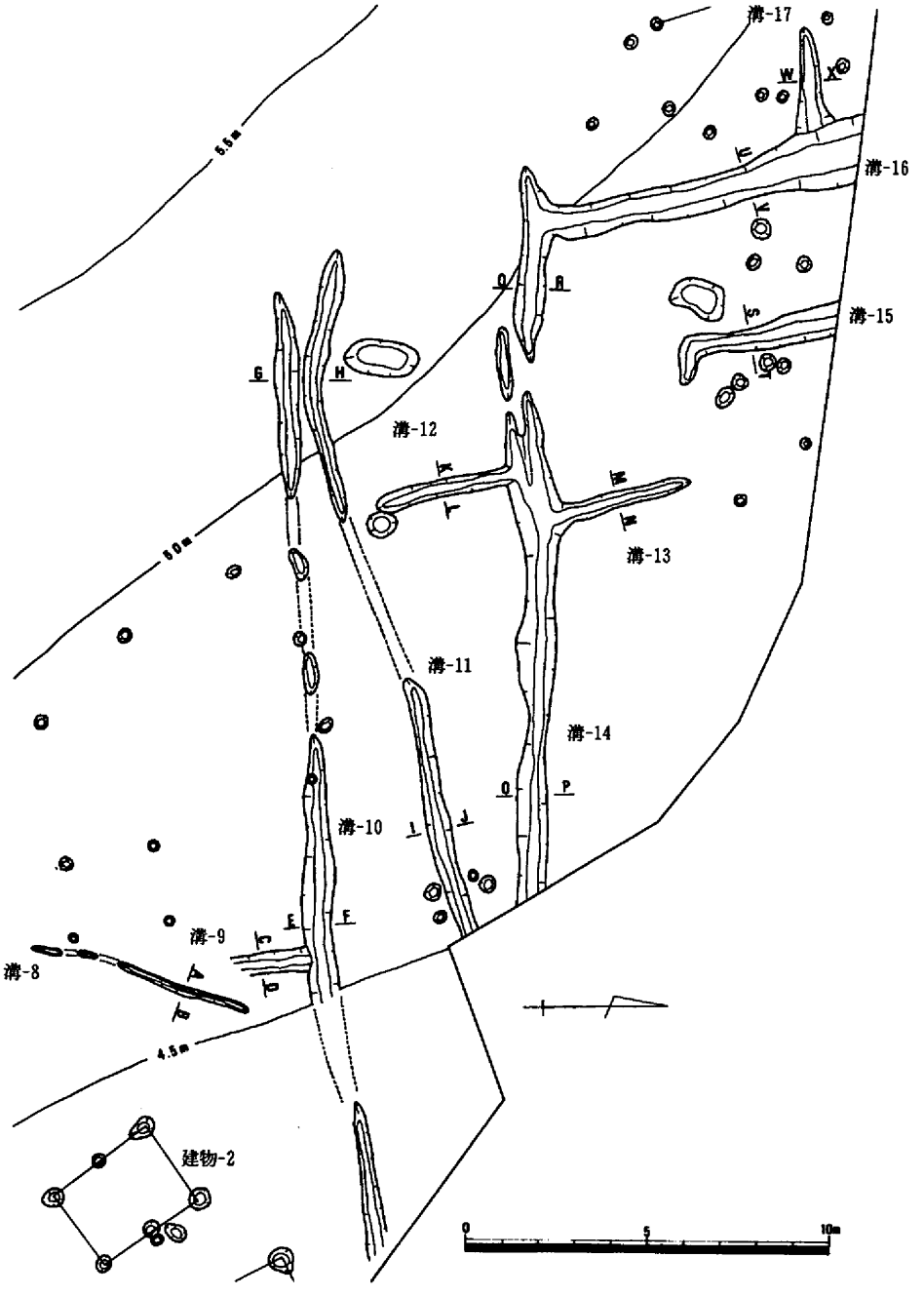
調査区北西部（1区）の谷－Aの北側に位置する。溝は、ほぼ東西方向に延びている。幅は約75cm、深さは約10cmを測る。溝内は、暗茶灰色泥砂土が堆積していた。出土遺物としては、古代～中世の土器が少量出土した。



第181図　溝－7（1／100）

溝－8（第182、183図）

この溝は、調査区北端部（２区）に位置し、ほぼ南南西－北北西方向に延びる。溝は、残存状態が悪く断続的に約６ｍ検出された。幅は約28cm、深さ約５cmを測る。



第182図　溝－8～17周辺（1／200）

出土遺物は、少量の土師器を出土したが、時期は不明である。

溝－９（第182、183図）

調査区北端の溝－８の北側に位置する。溝－10から南に分かれている。溝は、幅約45cm、深さ約７cmを測る。埋土は、灰褐色砂質土が堆積しており、溝－10～17と共通する。出土遺物は認められなかった。

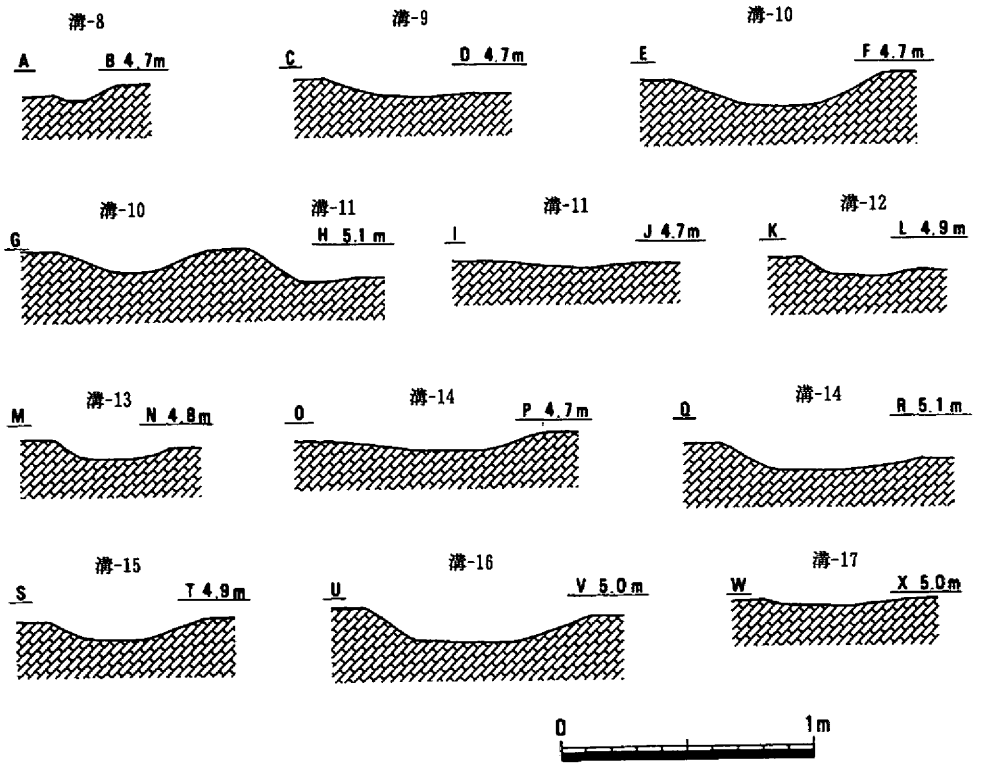
溝－10（第182、183図）

調査区北端部の溝－９北側に位置する。溝は、ほぼ東西方向に延び、断続的に約20cm前後検出できた。溝の東側は、用地外に続く。幅は、約70cm、深さ約10cmと残存状態は悪い。

出土遺物は、土師器高台付椀（早島式土器）を少量出土した。土器は、鎌倉時代の特徴を示すものである。

溝－11（第182、183図）

この溝は、溝－10の北側に検出された。やや蛇行しているもののほぼ東西方向に延びる。溝は、西側で溝－10と同地点から始まり、東側は用地外に続く。幅は、約60cm、深さ約７cmを測る。出土遺物は、早島式土器が少量出土した。



第183図　溝－8～17（1／30）

溝－12（第182、183図）

溝は、溝－14から南側に直角に派生するように南北方向に全長約3.5m検出された。幅約45cm、深さ約5cmを測る。出土遺物はない。

溝－13（第182、183図）

溝は、溝－12と同様に溝－14から直角に北方向に派生する。幅約45cm、深さ約7cmを測る。堆積土は、溝－9～12と同様に灰褐色砂質土である。出土遺物はない。

溝－14（第182、183図）

調査区の北端部の溝－10の北側に位置する。溝－10とは、5～6m隔ててほぼ平行に東西方向に延びる。溝は、西側で2本に分かれる状況を示している。幅は、最大で120cm、深さ約10cmを測る。出土遺物は、少量の早島式土器が検出された。

溝－15（第182、183図）

溝は、調査区北端に位置する。溝－9、12、13、16とほぼ平行する。溝の北側は、用地外に延びるが、南側では直角に東方向にまがりかけて終る。幅は、約45cm、深さ約7cmを測る。出土遺物はない。

溝－16（第182、183図）

溝－15の西側に位置し、溝－15と約4m隔ててほぼ平行に検出された。溝は、北側は調査区外に延び、南側は溝－14に接続する。幅は、80～180cmで、深さ約13cmを測る。出土遺物は、早島式土器が少量認められた。

溝－17（第182、183図）

この溝は、溝－16から西方向に派生する。溝－10、14と平行関係にある。幅は、50cm前後で、深さは約3cmと浅い。出土遺物はない。溝－9～17は、いずれも平行ないし直行する位置にあり、また堆積土も同様であったことから、一連の溝として考えるべき性格のものと思われる。出土遺物からみて、鎌倉時代と考えられる。

溝－18～28は、調査区北西部（5区）に位置する。この地点は、建物－9、10を中心に丘陵緩斜面を整形し、居住域を確保している。各々の溝は、その居住域周辺に検出されたもので、居住施設に付随するものも多く含まれると思われるが、各々の溝に対しての柱穴の配置が良好なものが認められないため、個々の溝として報告する。

溝－18（第129、184図）

この溝は、建物－10の南側に位置している。溝の残存状態は悪く、地形に沿って全長約5.5m検出できた。溝は、東向にやや弧を描く状況を示している。幅は約20cm、深さ約5cmを測り、埋土は茶褐色泥砂土であった。出土遺物が土師器を少量認められたが、時期を確定できるものではなかった。

溝－19（第129、184図）

溝－18の東側に位置する。溝は、ほぼ東西方向に延び、約３ｍ検出された。東側は、削平を受けている。幅約110cm、深さ約５cmを測る。出土遺物は、早島式土器を少量出土した。

溝－20（第129、184図）

溝は、溝－19の北側に接続し、やや蛇行して検出された。幅は、約60cm、深さ約15cmで、茶灰色混砂土が堆積していた。出土遺物は、古代～中世の土器を少量出土した。

溝－21（第129、184図）

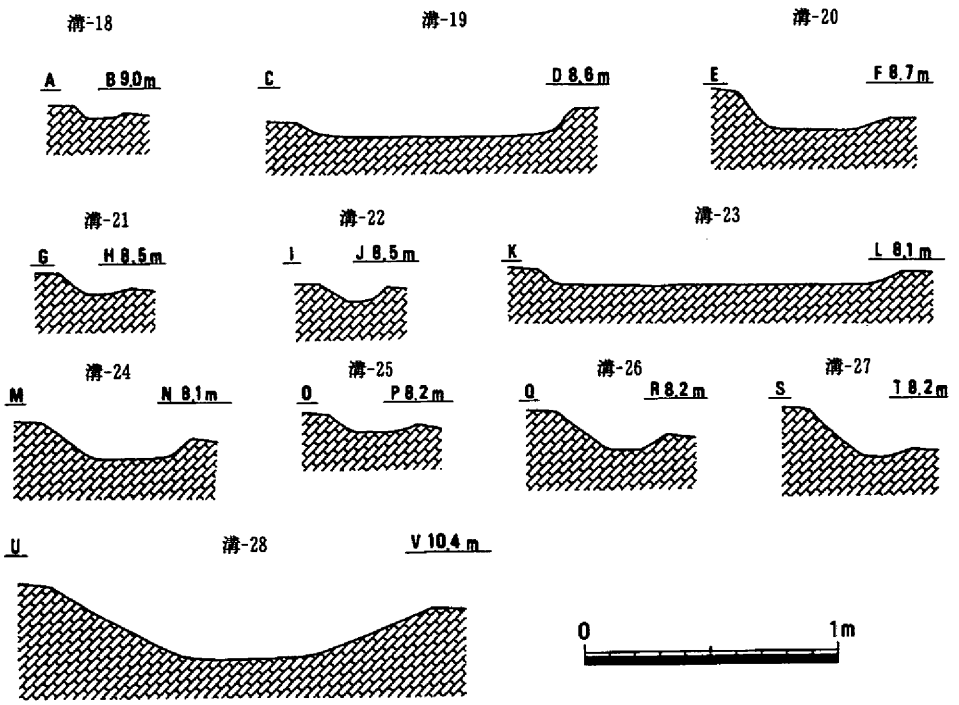
この溝は、溝－20の東側に位置している。やや弧を描きながら、北西～南東方向に延びている。溝の北側は、溝－22によって切られ、東側は新しい削平を受けている。幅約30cm、深さ約８cmを測る。出土遺物はない。

溝－22（第129、184図）

溝－21の北側に検出された。溝は、東西方向に約３ｍ残存しており、幅約25cm、深さ約７cmを測る。この溝は、周辺の状況からみて、建物－10に伴う両側の溝と類似する性格のものと考えられる。しかし、溝に伴う柱穴の配列は認められなかった。

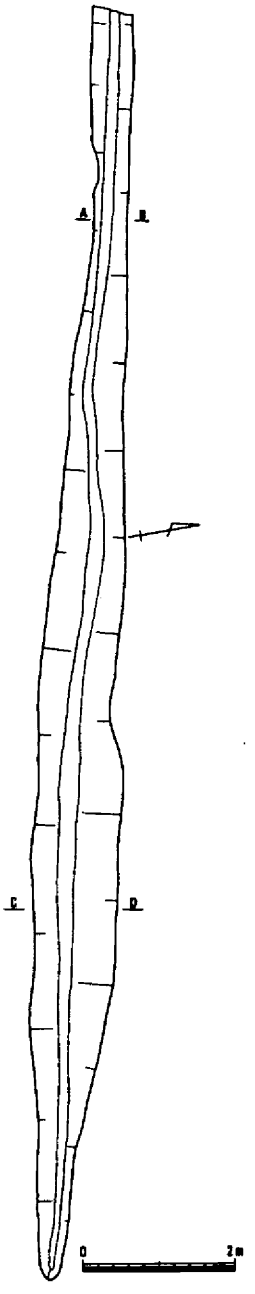
溝－23（第129、184図）

この溝は、溝－22の北側に位置し、「Ｌ」字状に検出された。溝の北側は、建物－10に伴う



第184図　溝－18～28（1／30）

溝に切られており、東側では、新しい時期の削平を受けている。溝は、幅が45－145cmで、深さは5～10cmを測る。この溝もまた、溝－22と同様に、居住施設に伴うものと考えられるが、良好な柱穴の配置は認められなかった。出土遺物はない。



溝－24（第129、184図）

建物－10の東側、溝－23の北側に位置する。溝は、北西～南東方向に延びる。北側は、方形状の落ち込みに切られている。規模は、幅約60cm、深さ約15cmを測るもので、暗茶灰色泥砂土が堆積していた。

出土遺物としては、古代～中世の土師器が少量出土した。

溝－25（第129、184図）

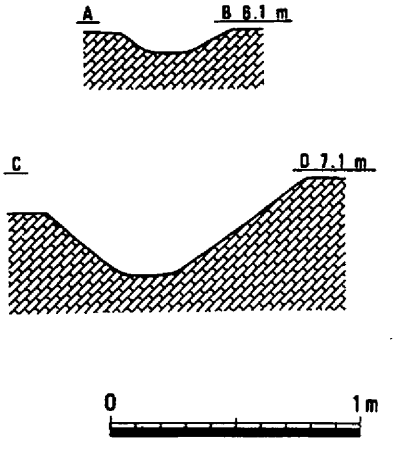
溝－24の北側に位置している。溝は、やや弧状に約2.5m検出された。幅は、約35cm、深さ約7cmの規模である。出土遺物は検出されなかった。

溝－26（第129、184図）

この溝は、溝－25の北側に位置し、地形に沿うように全長約5.5m検出された。幅は、40cm前後で、深さ約15cmを測り、茶褐色泥砂土が堆積していた。出土遺物は、少量の土師器が検出された。

溝－27（第129、184図）

溝－26の西側に位置している。溝は、地形に沿って北北西～南南東方向に、全長約10m検出され、幅は、40cm前後、深さ20cm前後を測る。この溝もまた、居住施設との関連が考えられる。出土遺物は認められなかった。



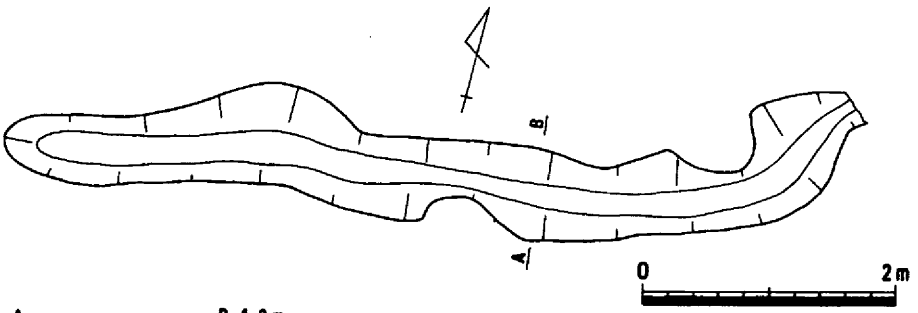
第185図　溝－29（1／100、1／30）

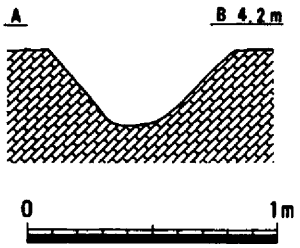
溝－28（第129、184図）

建物－12の南側に位置している。溝は、北西～南東方向に延び、全長約8m検出された。幅は約150cmで、深さ約28cmを測る。埋土は、茶灰色泥砂土が堆積していた。

溝－29（第15、185図）

調査区中央（3区）、谷－A上部の南側に位置して





いる。溝は、ほぼ東西方向に全長約17m検出できた。幅は、60～110cm、深さ10～35cmを測る。溝の底部は、凹凸が激しく谷の小規模なものである可能性が考えられる。出土遺物は、認められなかった。

第186図　溝－30（1／60・1／30）　**溝－30**（第186図）

溝は、谷－Aの南側に位置している。やや蛇行しながら山裾の緩斜面から低位部にそそぎこむ様に、ほぼ東西方向に検出された。溝の底部は凹凸があり、さらに底部高度差も大きく、溝－29と同様の性格のものと考えられる。また、この溝は、西側延長上に溝－29が存在することから、同一の溝の可能性も考えられる。出土遺物は認められなかった。

溝－31～49は、調査区中央東側（6区）の山裾部に位置する。この地点（6区）は、部分的に包含層が残存しており、遺構の残りは他に比べて比較的よかった。しかしながら、後世の削平も部分的に受けており、遺構は断続的にしか検出できなかった。

溝－31（第187、188図）

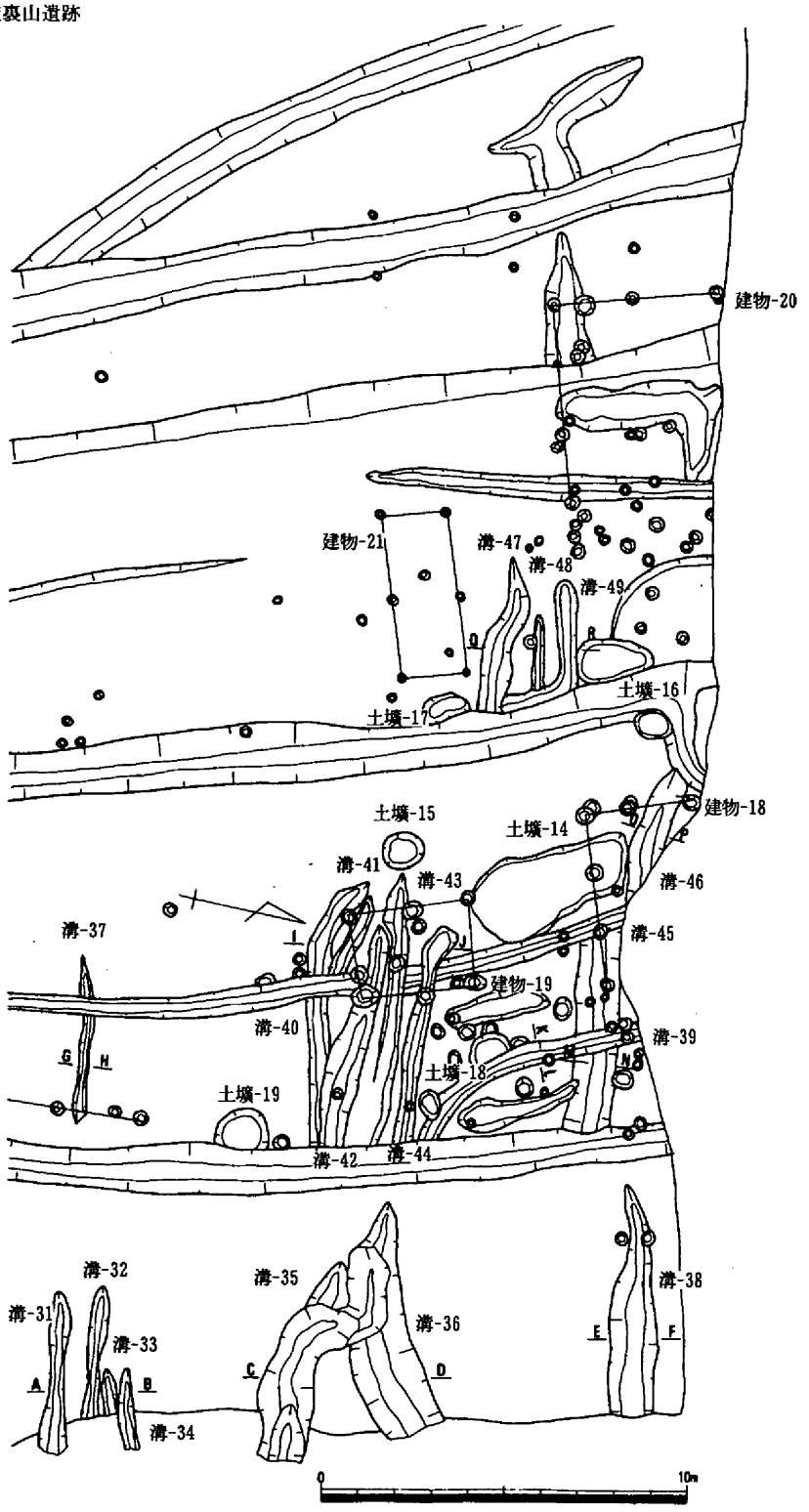
調査区中央東側の山裾の末部部に位置する。溝は、東西方向に約4m前後検出された。幅は40cm前後、深さ15cm前後を測る。出土遺物は、少量の須恵器、土師器が認められた。土師器の中には、黒色土器が含まれており平安時代の特徴を示すものである。

溝－32（第187、188図）

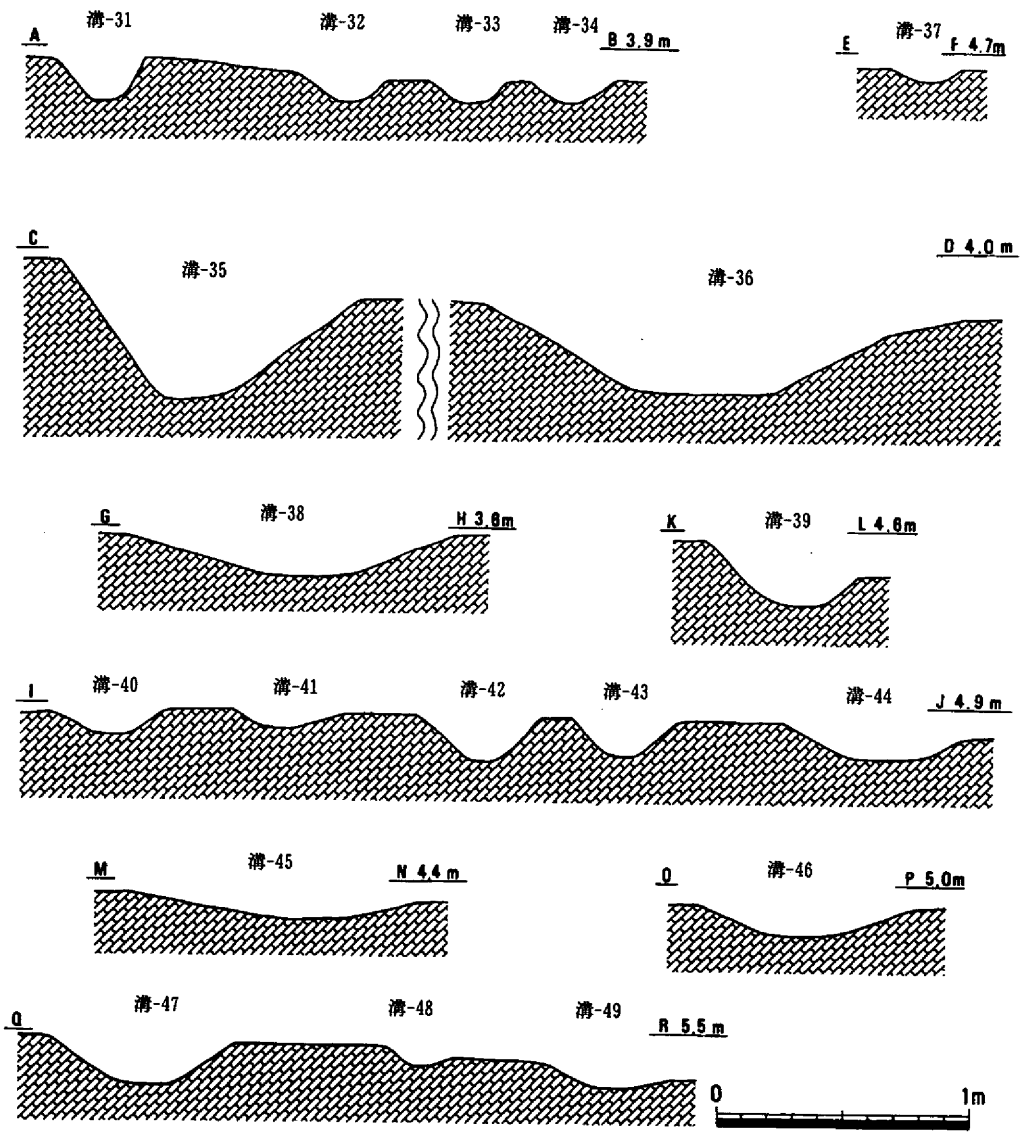
溝－32の北側にほぼ東西方向に検出された。幅は約30cm、深さ約12cmを測る。遺物は、少量出土したが時期を示すものはないものの、諸状況からみて溝－32と同時期と考えられる。

溝－33（第187、188図）

溝－32の北側に検出された。溝の残存状態は悪い。幅約30cm、深さ約10cmを測る。出土遺物はない。



第187図　溝－31～49 周辺（1／200）



第188図　溝－31～49（1／30）

溝－34（第187、188図）

溝－31～33の北側に位置する。溝－33と同様に残存状態は悪く、約2.3m検出できたにすぎない。出土遺物はない。

溝－35（第187～189図）

溝－31～34の北側に溝－36と接して検出された。幅は120～150cm、深さは60cm前後と測る。溝の底部は、凹凸が激しく、底部高度差もある。このような状況からみて、谷の小規模なもの

と考えられる。堆積土は、暗茶灰色泥砂土で、須恵器、土師器が出土した。図示した1134は、緑釉である。1135、1136は、内面をヘラミガキを施し、付高台は比較的径の大きい黒色土器である。これらの土器は、平安時代と考えられる。

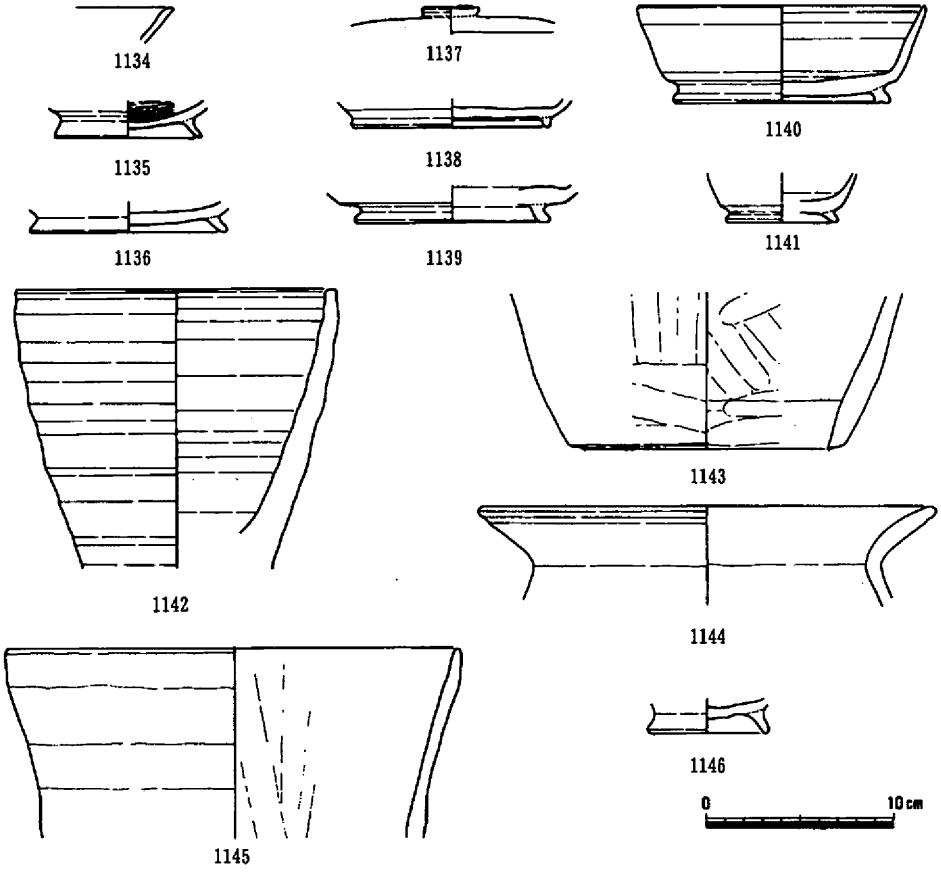
溝－36（第187～189図）

この溝は、溝－35の北側に位置し、西側では一部溝－35に切られている。幅は190cm前後、深さは35cm前後を測る。溝は、溝－35と同様に底部は凹凸が認められ、性格も溝－35と共通するものと考えられる。

出土した遺物は1137～1144でいずれも奈良時代中頃を中心とする時期である。図示した以外には、相当量出土したが、いずれも同様の時期のものであった。

溝－37（第187、188図）

溝－31、32の西側に位置する。溝は、溝－31、32の高所の延長上に位置していることから、どちらかの溝に繋がっていた可能性がある。幅約30cm、深さ約5cmを測る。出土遺物はない。



第189図　溝－35, 36, 40, 47 出土遺物

溝－38（第187、188図）

溝－36の北側に位置する。溝の特徴は、溝－35、36と類似している。幅は約130cm前後、深さ約15cm前後を測る。出土遺物は、須恵器、黒色土器を含む土師器が少量検出された。時期は、溝－35と同時期と考えられる。

溝－39（第187、188図）

溝－38の西側高所に位置する。溝は、東向に弧を描く状況で検出された。北側および、東側は、後世の削平によって残存していなかった。幅約55cm、深さ約25cmを測る。埋土は暗茶灰色泥砂土が堆積していた。出土遺物はなかったが、周辺の状況からみて古代と考えられる。

溝－40、41、42、43、44（第187～189図）

これらの溝は、溝－35の西側の高所に集中して検出された。いずれの溝とも、ほぼ東西方向に延び、規模、埋土なども類似している。出土遺物としては、図示した**1145**（溝－40）、**1146**（溝－42）以外に奈良～平安時代の土器が少量出土した。

溝－45（第187、188図）

溝－40～44の北側に位置する。溝は、ほぼ東西方向で、溝－39を切って検出された。溝の東、西側は、後世の削平を受けている。幅約120cm、深さ約15cmを測る。須恵器、土師器を少量出土しており、奈良～平安時代の時期と考えられる。

溝－46（第187、188図）

溝－45の西側に一部検出した。溝は、やや蛇行気味ながら東西方向に延びる。幅は約85cm、深さ約10cmを測る。出土遺物はないものの、周囲の状況からみて、奈良～平安時代と考えられる。

溝－47（第187～189図）

溝－40～44の西側の高所に東西方向に検出された。幅約80cm、深さ約20cmを測る。出土遺物はない。

溝－48（第187、188図）

溝－47と溝－49の間に位置している。溝は、ほぼ東西方向で、幅約25cm、深さ約8cmを測る。土器が少量出土した。

溝－49（第187、188図）

溝－48と土壙－16の間に、溝－48と平行に検出された。溝は、幅約40cm、深さ約8cmを測る。遺物としては、黒色土器を含む土師器が少量出土した。時期は、溝－47、48を含めて平安時代と考えられる。

溝－50～66は、調査区中央のやや西側（8区）に位置する。これらの溝が存在する8区は、建物－13～17が検出されるなど、比較的遺構の残存していた地点である。しかしながら、地形

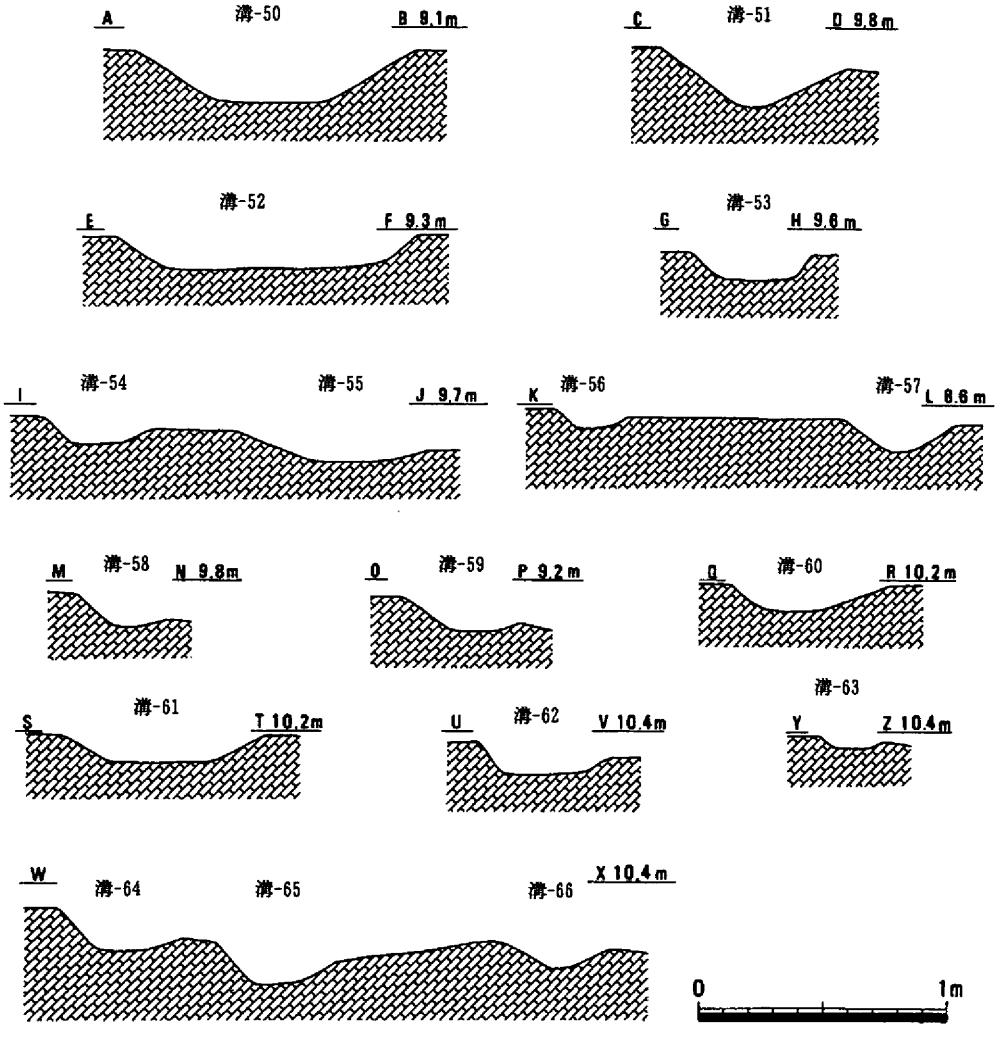
に沿って幾段にも後世の削平が行われているため、遺構は断続的にしか残っていない。

溝－50（第135、190図）

溝は、谷－Ｂの先端部の西側に位置する。東西方向に約６ｍ検出できた。幅は約105cm、深さ約22cmを測る。溝底部の高度値は一定でない。これらのことや、位置関係および堆積土などから、この溝は谷－Ｂの一端と考えられる。出土遺物としては、奈良～平安時代の土器が少量認められた。

溝－51（第135、190図）

溝－50の西側に位置する。溝は、南から北方向に約11ｍ延び、幅は約75cm、深さは約23cmを



第190図　溝－50～66（1／30）

測る。埋土は、暗茶灰色泥砂土で、土師器が少量出土した。土器には、土師器杯が含まれており、平安時代の特徴を示すものであった。

溝－52（第135、190図）

溝－51の北側に位置する。溝は、南西～北東方向に延び、約2.5m残存していた。幅約120cm、深さ約14cmを測る。出土遺物はない。

溝－53（第135、190図）

溝－52の北側に、ほぼ東西方向に検出された。溝は、約3.3m残存していただけで、幅約48cm、深さ約10cmを測る。溝の北側に存在する遺物群と方位が近いため、建物との関連が考えられる。溝からは、建物群と同時期と思われる黒色土器などが少量出土している。

溝－54（第135、190図）

溝－53の北側に、弧状に検出された。溝の東側は、後世の削平を受けている。幅は約40cm、深さ約10cmを測る。出土遺物はない。

溝－55（第135、190図）

溝－53の北側、建物－16の西側に位置する。幅は60～100cm、深さは約10cmを測る。溝は、建物－16の西側を約80cm前後隔てて平行に存在し、溝の南側（建物－16の南西隅）で弧を描き東方向に曲がる。この溝は、このような状況からみて、建物－16に付随する可能性が考えられる。出土遺物は、奈良～平安時代の土師器が少量認められた。

溝－56（第135、190図）

溝－55の東側に、「L」字状に検出された。溝の残存状態は悪く、東側が後世の削平を受けている。幅約25cm、深さ約8cmを測る。溝からは、奈良～平安時代の土師器が少量出土した。

溝－57（第135、190図）

溝－56の北側に、ほぼ東西方向に検出された。溝は、東側は削平を受けており、全長約3m残存しているだけだった。幅約40cm、深さ約13mを測る。出土遺物は、黒色土器を含む土師器が少量出土した。

溝－58（第135、190図）

溝－55の西側に、ほぼ平行に検出された。溝は、残存状態は悪く全長約3.5m検出できたにすぎない。幅約45cm、深さ約13cmを測る。溝は、建物－13～15と平行して存在し、位置関係としては、建物－14との関係が考えられる。出土遺物はない。

溝－59（第135、190図）

建物－16の北側に位置している。溝は、「L」字状に検出され、幅約47cm、深さ約13cmを測る。周辺の状況からみて、建物などに伴なう可能性が考えられるものの、溝の位置する地点から北側は、大きく後世の削平を受けているため柱穴等は残存していない。出土遺物はない。

溝－60（第135、190図）

溝－54の西側に、南西～北東方向に検出された。溝は、東側で削平を受けており、約2.8m残存していた。幅約60cm、深さ約10cmを測る。出土遺物は少量検出されたが、時期を判別できるものではなかった。

溝－61（第135、190図）

溝－60の北側に検出された。溝は、東側は削平を受けており、約2.5m残存していた。幅約80cm、深さ約10cmを測る。出土遺物はない。

溝－62（第135、190図）

溝－61の北側に位置し、溝－60、61と平行に検出された。残存状態は悪く、約1.8m検出したにすぎない。幅は約50cm、深さは約12cmを測る。出土遺物としては、黒色土器を含む土師器を少量出土した。

溝－63（第135、190図）

溝－62の北側に、ほぼ東西方向に検出された。溝は、断続的にやや北向に弧を描き、全長約9m程残存していた。幅約50m、深さ約15cmを測る。諸状況からみて、溝－57と同一の溝になる可能性が考えられる。出土遺物はない。

溝－64、65（第135、190図）

溝－63の北側に隣接し、ほぼ平行して検出された。溝－64は幅約60cm、深さ約15cm、溝－65は幅約65cm、深さ約10cmを測る。出土遺物は、溝－65から奈良～平安時代の土師器が少量出土した。

溝－66（第135、190図）

溝－65の北西に、南北方向に検出された。溝－63～65とは、ほぼ直行する位置関係にある。幅は25～50cm、深さは約10cmを測る。出土遺物はない。

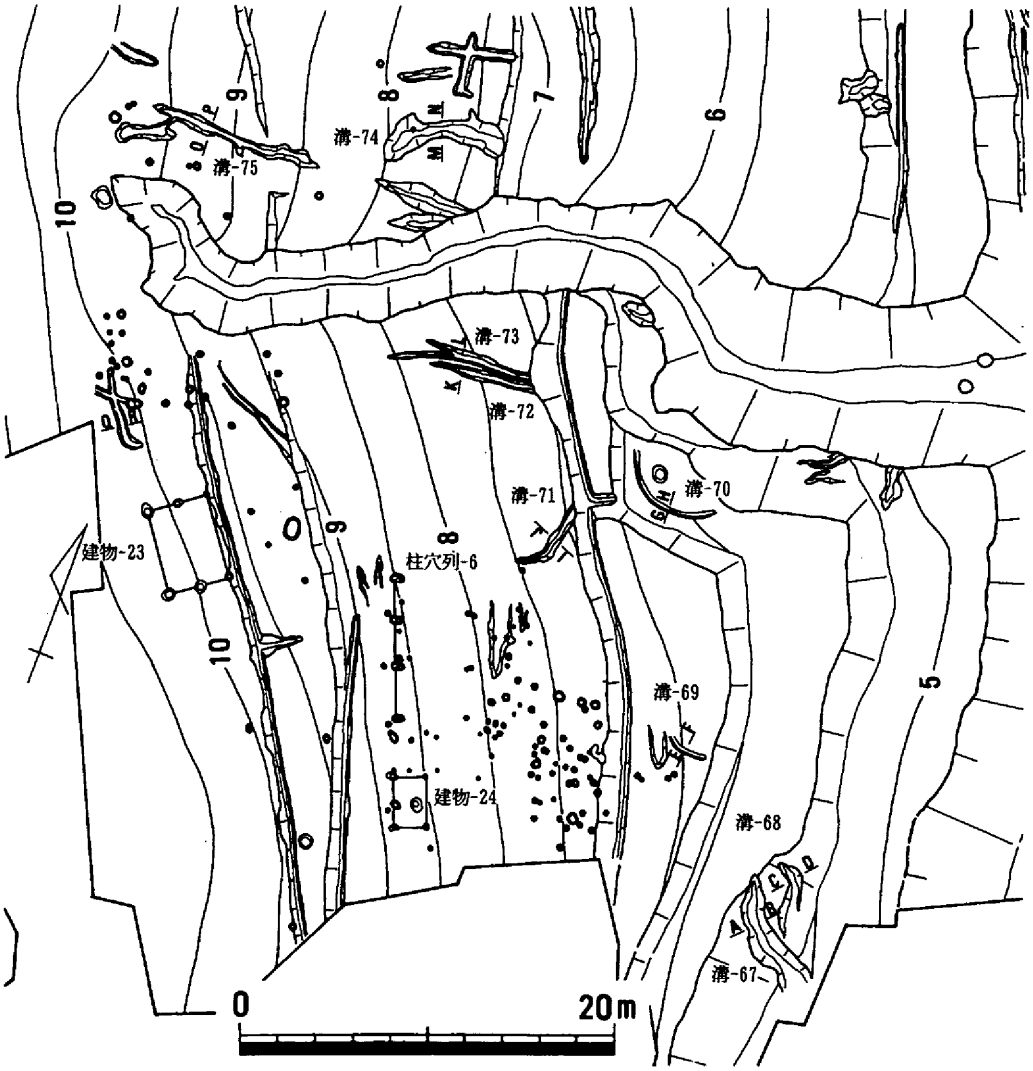
溝－67～76は、調査区中央から西部（10区）に位置する。この地点も、他の調査区と同様に後世の開墾による削平、さらには病院の建築物による大規模な削平を受けており、遺構の残存状態は非常に悪い。

溝－67、68（第191、192図）

調査区南端の中央部に位置する。溝は、いずれも蛇行しており、溝底部は凹凸が激しい。規模は、溝－67が幅約130cm、深さ約80cmで、溝－68は幅約80cm、深さ約20cmを測る。いずれの溝とも谷部の小規模なものと考えられる。出土遺物は、古代～中世の土器が少量検出された。

溝－69（第191、192図）

溝－67、68の北西約4mに位置する。溝は、やや弧状に約1.2m検出できた。幅は約23cm、深さ約10cmを測る。溝には、茶灰色泥砂土が堆積していた。出土遺物はなく、この溝の時期を



第191図　溝－67～76（1／400）

断定できない。しかしながら、谷－Ｃの底部には、第41図に示したように弥生時代の遺物が確認されており、この調査区の丘陵緩斜面にも弥生時代の遺構が存在した可能性が考えられるところから、この溝－69が竪穴住居址の壁体溝の残存部である可能性については否定できない。

溝－70（第191、192図）

溝－69の北側に検出された。幅は約20cm、深さ約８cmと小規模な溝である。この溝は、弧状を呈しており、出土遺物はなかった。しかし、この溝は、溝－69と同様に竪穴住居址の壁体溝の一部である可能性がある。柱穴および弥生時代の遺物等は、認められなかったものの、弧状の溝を復元すると、約６ｍ前後の円形にもなりその可能性は高い。

溝－71（第191、192図）

溝－70の西側に、やや蛇行して検出された。溝は、幅約55cm、深さ約15cmを測る。溝底部は、凹凸があり、溝－67、68と同様な性格の溝と考えられる。出土遺物はない。

溝－72、73（第191、192図）

これらの溝は、溝－71の北側に、隣接してほぼ平行に検出された。溝の東側は、削平を受けており、残存状態は悪い。溝－72は幅約54cm、深さ約25cm、溝－73は幅約60cm、深さ約15cmを測る。出土遺物はない。

溝－74（第191、192図）

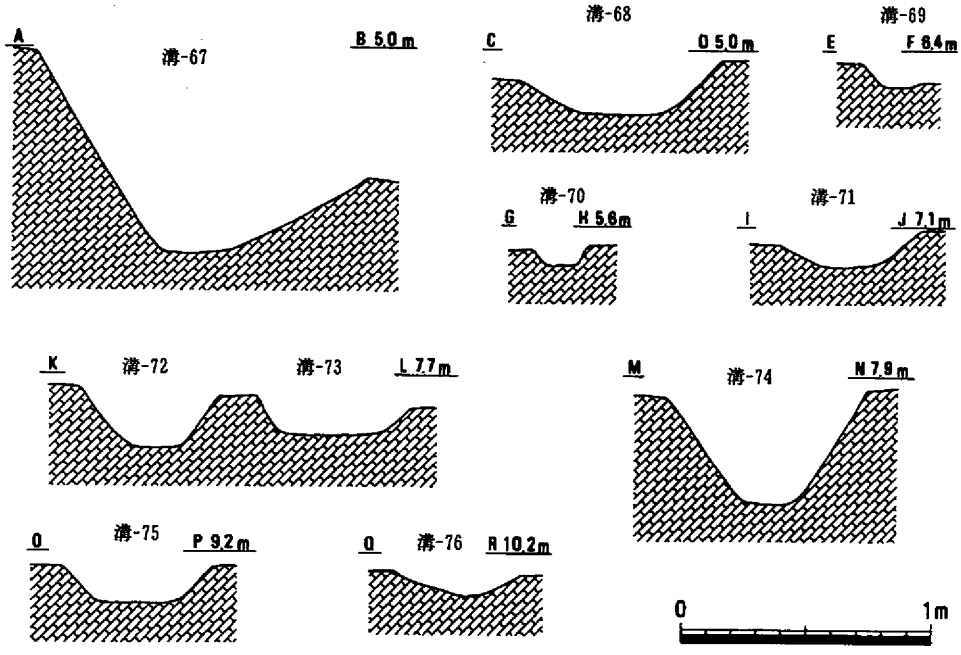
谷－Cの北側に、約7m残存して検出された。溝は、蛇行しており、溝底部も一定でない。幅約80cm、深さ約45cmを測る。埋土は、茶灰色泥砂土が堆積しており、出土遺物はない。

溝－75（第191、192図）

谷－Cの先端部の北側に位置する。溝は、断続的に全長約18m残存していた。幅は約80cm、深さ約20cmを測る。出土遺物はない。

溝－76（第191、192図）

建物－23の北側北西～南西方向に位置する。南端部で弧状を描く。幅約50cm、深さ約10cmを測る。溝の周辺には、柱穴が散在していることなどからみて、建物に伴なう溝であった可能性も考えられる。出土遺物はない。



第192図　溝－67～76（1／30）

（7）谷

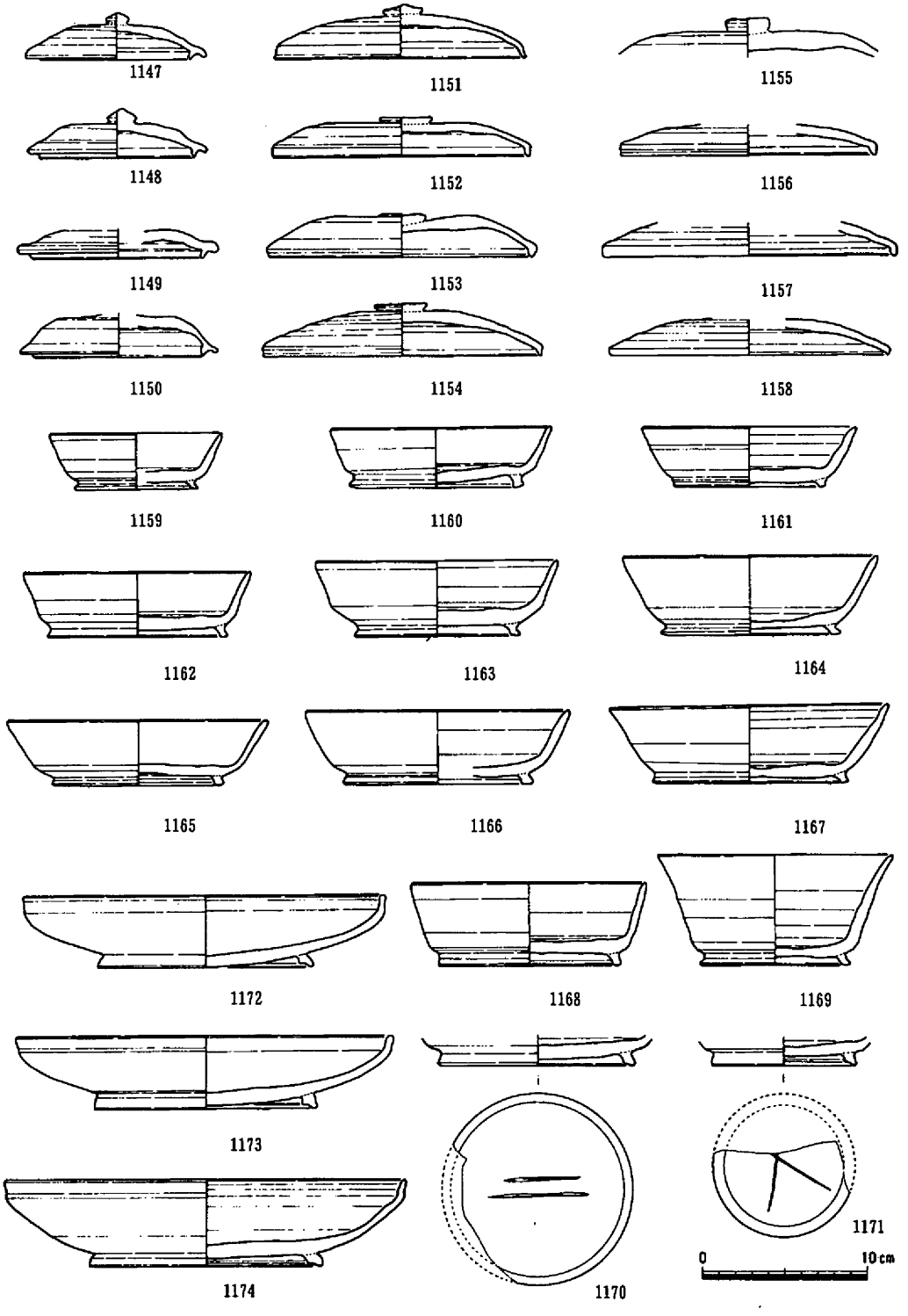
谷－A（第97、193～209図）

谷－Aについては、先の古墳時代の項で説明したが、ここでは古代～中世について報告する。前述したように、第97図の断面図で、第1層は中世、第2～6層が古代後半～中世、第7、8層が古代後半、第9～11層が古代前半（7世紀代も含む）と考えられる。谷－A堆積層については、前記のように各層の時期がおおむね明らかになったが、調査時の層位的な遺物の取り上げについては、十分とはいえなかった。このため、古代～中世の遺物を一括して図示し、各々の時期別に遺物について説明を加える。

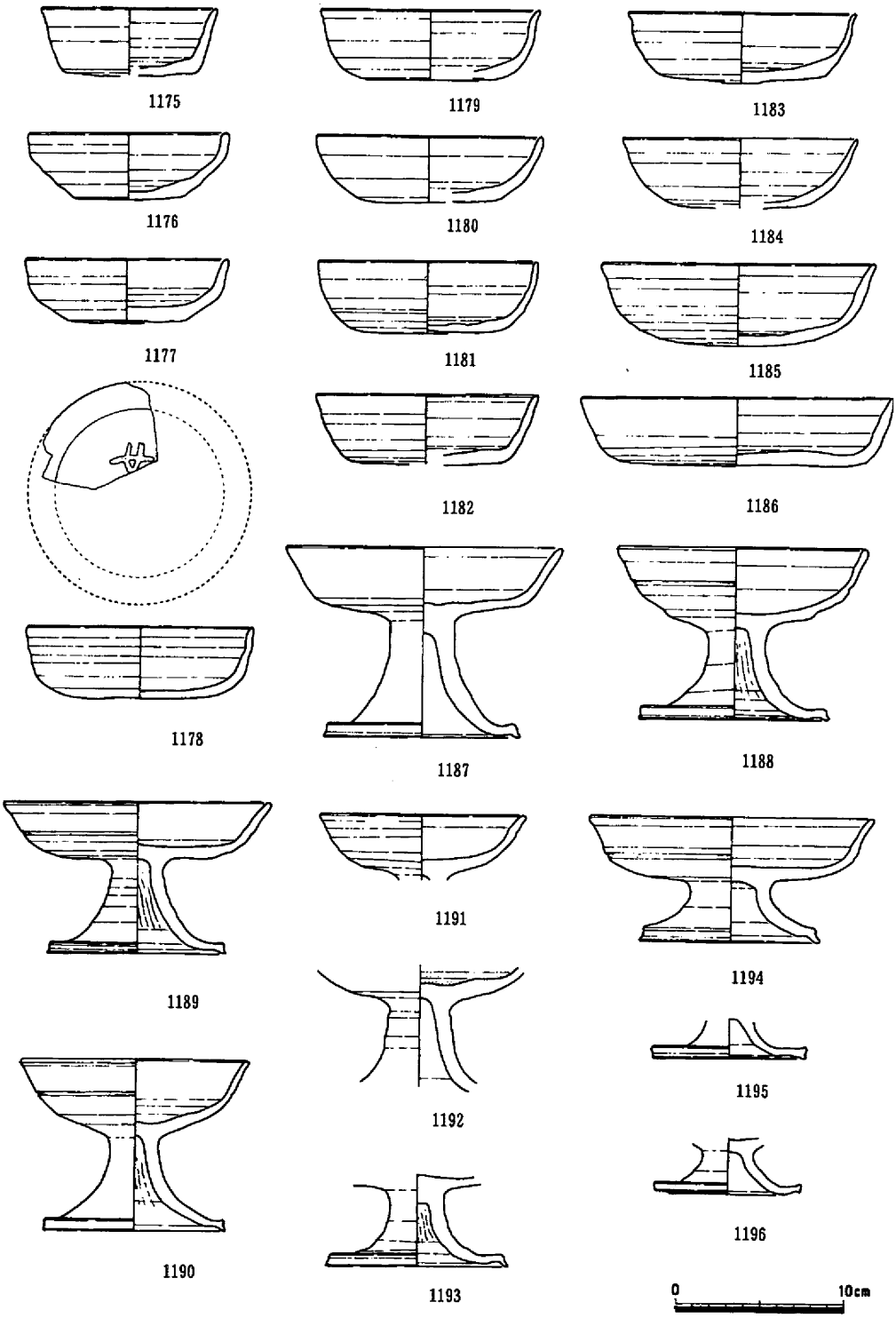
須恵器：杯蓋には、**1147～1158**がある。**1147～1150**は、径が小さく、内側にかえりをもつ。かえりは、まだ口縁部との一体感を保っている。これらの特徴は、陶邑編年のＴＫ－217型式との共通したものである。**1151～1158**は、径は大きく、疑宝殊状のつまみは退化現象にあり、碁石状に扁平になりやや中央部が凸形になる。天井部は、丸味をもつもの（**1151、1154**）や天井部が平たいもの（**1152、1153**）がある。口縁部は、体部から屈曲させてつくっているものの、端部を肥厚されるもの（**1126**）、屈曲させずに端部の内側をつまみ出している**1158**がある。いずれも8世紀初頭を前後するものである。**1155**は、つまみの形状などからみてやや新相であろう。

杯身は、高台を有するもの（**1159～1174**）と高台の無いもの（**1175～1186**）がある。**1159**は、やや小型品で、高台は踏ん張り気味で端部を内外に肥厚させている。**1160～1167**は、体部が内湾して丸味を帯び、さらに斜上方に立ち上がる口縁部をもつ。口径は、器形の高さに対して大きい比率である。**1168**は、口縁部の立ち上がり角度が**1160～1167**に比べて大きく、上方に立ち上がり、やや新相のものであろう。**1169**は、口縁部が長く、ゆるやかに外反する。この土器は、従来からの編年観でいえば9世紀初頭ごろに比定されているものである。**1172～1174**は、口径約20数cmと大きく、底部から体部は丸味をもち、さらに屈曲気味に上方に立ち上がる口縁部で、口縁部では短かく外反する。口縁端部は丸くおさめている。高台部は、外方向に踏ん張り、端部の外側は著しく肥厚し、接地面である。**1172～1174**とも、口縁部、高台部に共通の特徴をもっており、同一窯址での生産品と思われる。また、この形態のものは他に類例が少ない。**1170、1171**は、外面底部にヘラ描の記号が認められた。**1171**の高台は、**1172～1174**と類示している。高台の付かない**1175～1186**には、口縁部が体部から内湾気味に立ち上がるものや直線的に斜上方に伸びるものなどがある。さらに、**1179、1183**など口縁端部で短かく外反するものが多く存在する。**1178**の外面底部には、『女』と読みとれる墨書が認められた。

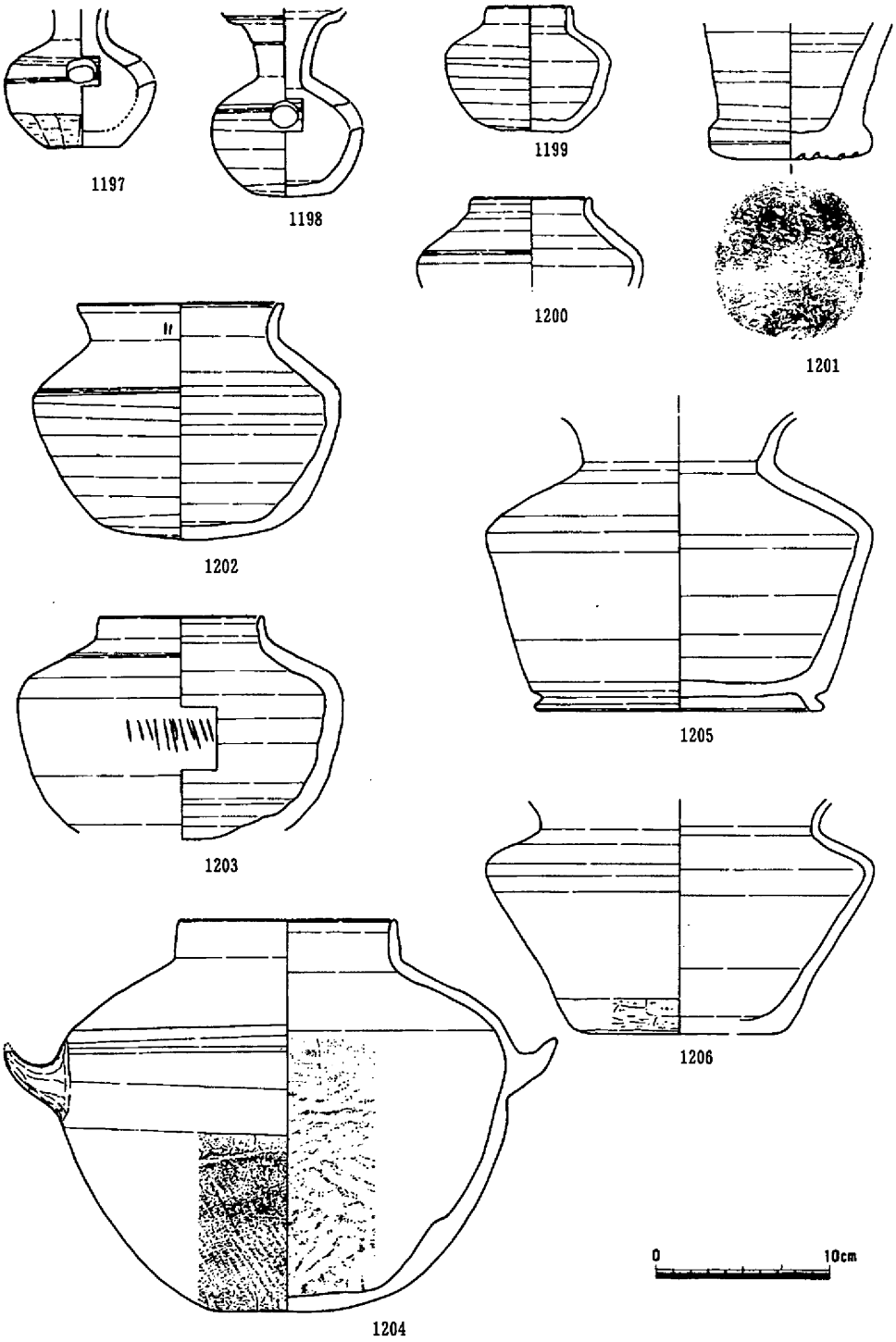
高杯（**1178～1196**）は、全て無蓋である。杯部には、底部が丸味をもち、深いもの（**1188、1190**）、底部が平らで、径の大きいもの（**1187、1189、1194**）がある。脚部は、短脚、小型の



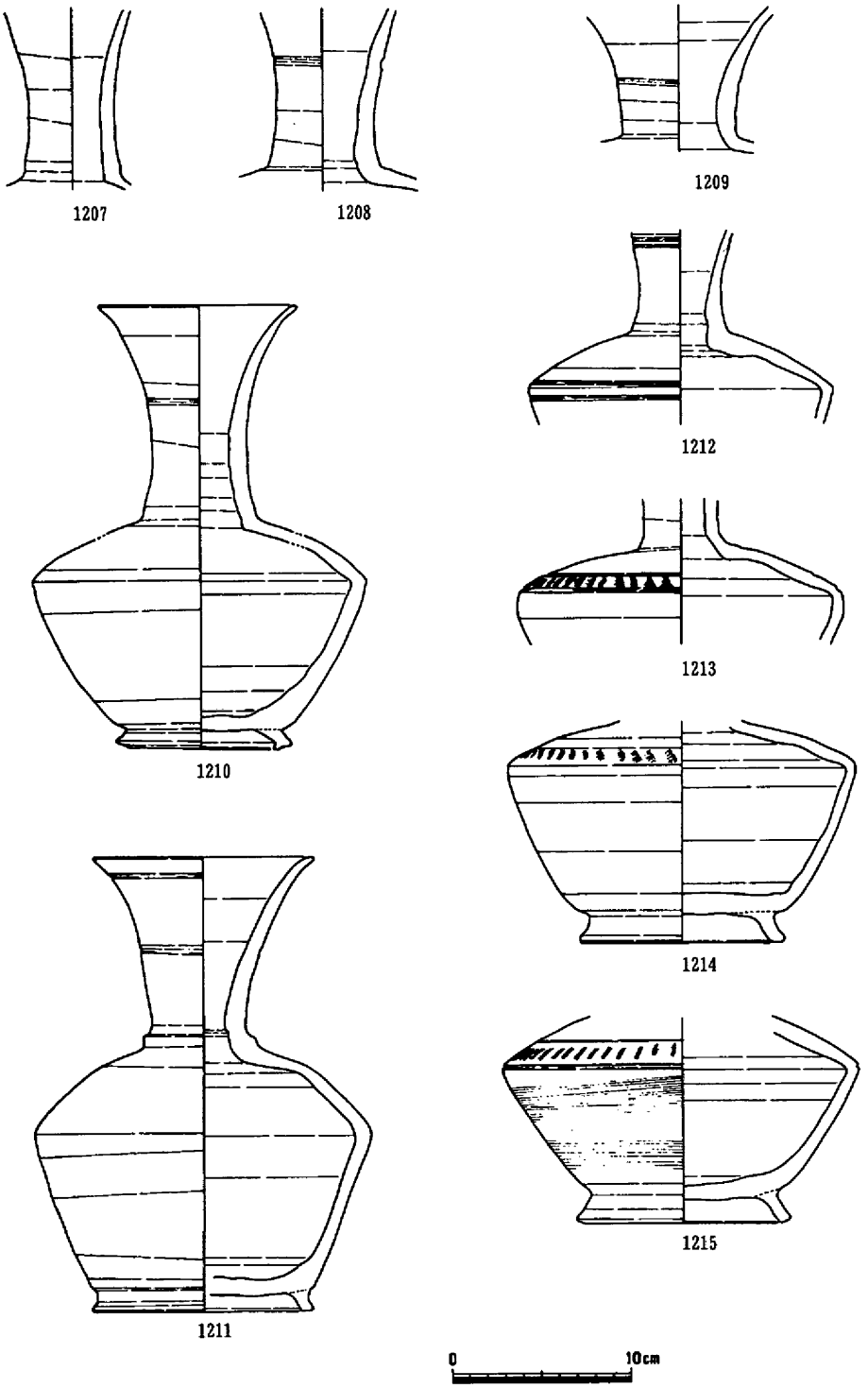
第193図　谷－A 古代～中世　出土遺物（1）



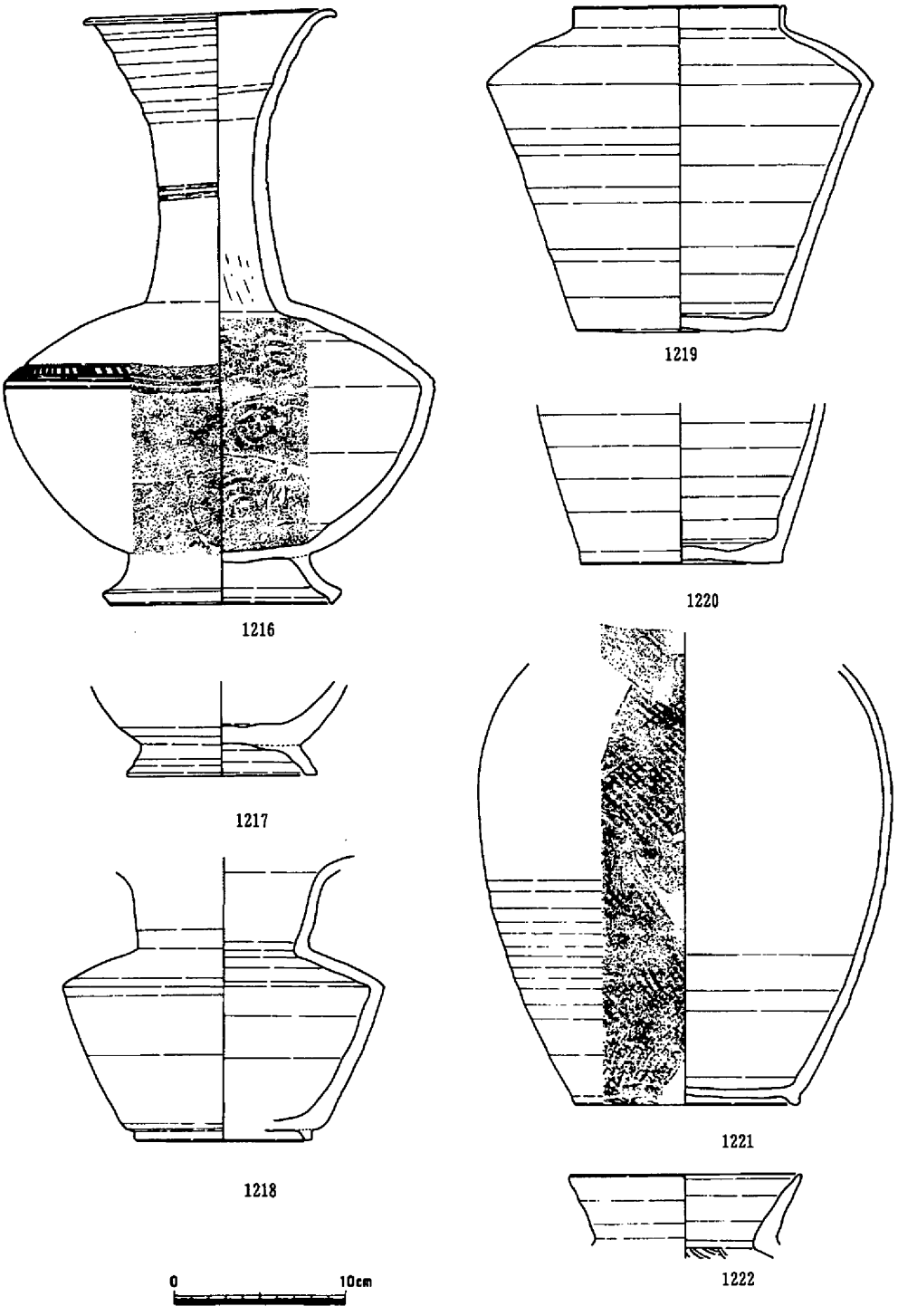
第194図　谷－A 古代～中世　出土遺物 (2)



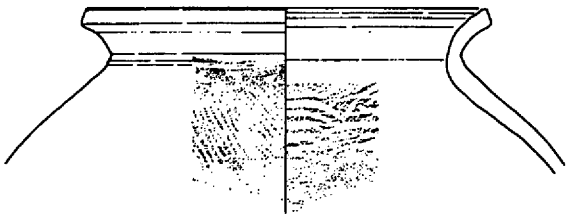
第195図　谷－A 古代～中世　出土遺物（3）



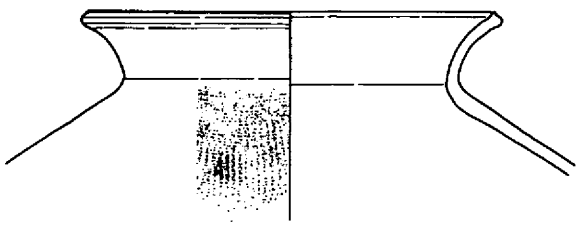
第196図　谷－Ａ 古代～中世　出土遺物（4）



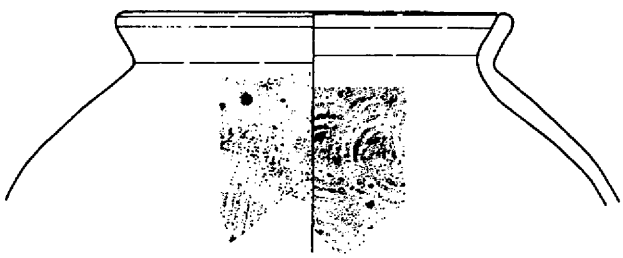
第197図　谷－A 古代～中世　出土遺物 (5)



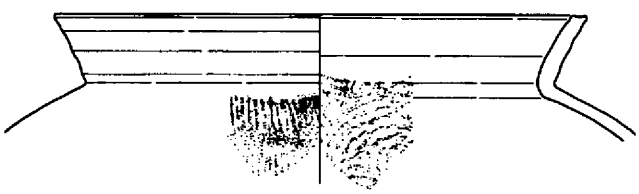
1223



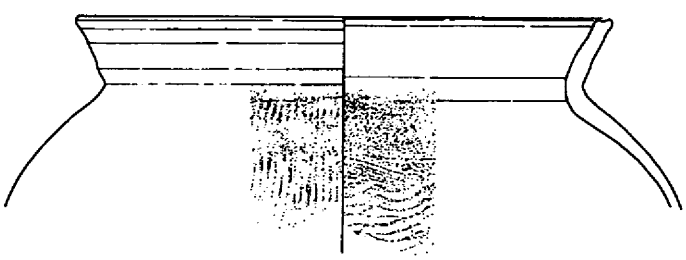
1224



1225



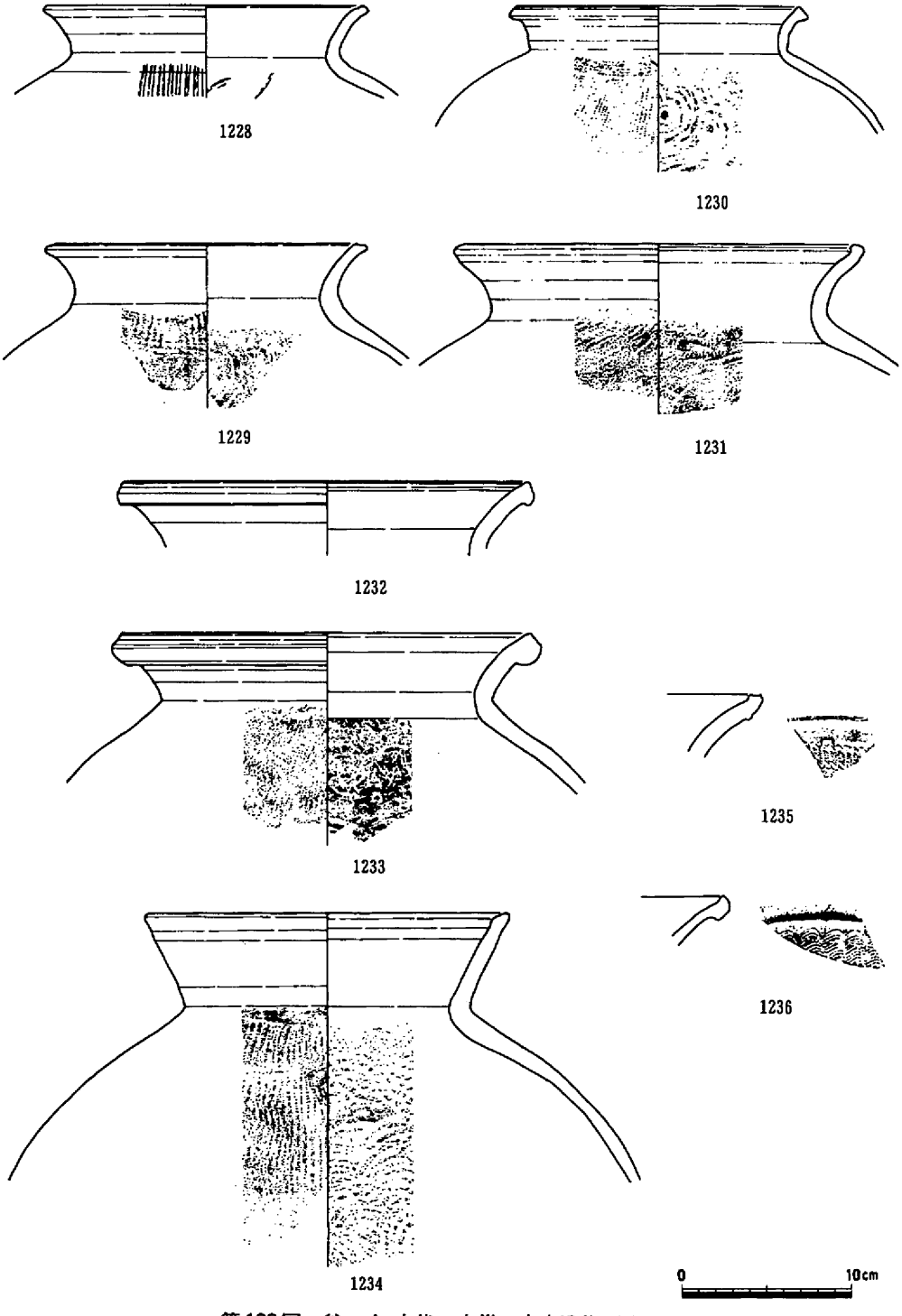
1226



1227

0　10cm

第198図　谷－A 古代～中世　出土遺物 (6)

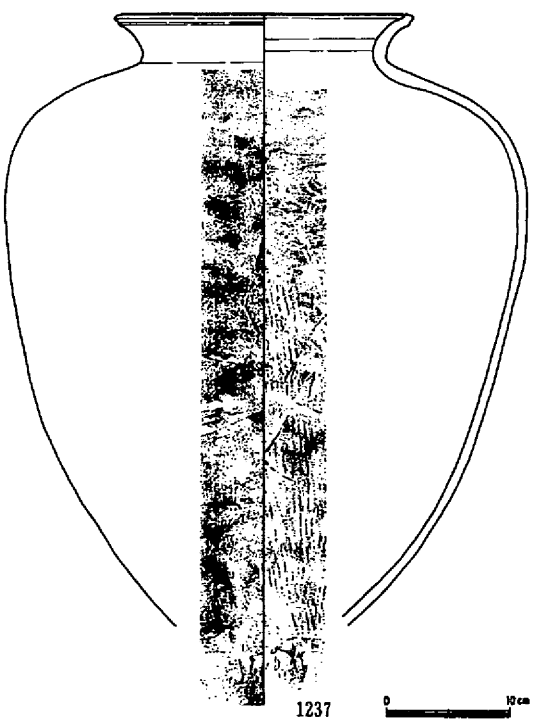


第199図　谷－A 古代～中世　出土遺物 (7)

もの（1194～1196）も含んでいる。甕の1197、1198は、頸部は細く、体部は球形を呈する。1197の体部下半は、手持ちのヘラケズリが認められる。1197は平底で、1198は平底気味である。1201のこね鉢は、底部に刺突による小孔が多く付く。

壺（1199～1221）には、各種が認められた。短頸壺（1199～1204、1219）には大小があり、1202はやや外反する口縁部である。1202の頸部には、「ハ」の字のヘラ描、1203の体部にもヘラ描が認められた。1219は、肩部が角張り、平底になる。広口壺は、頸部から大きく外反する口縁部の1205、1206と、頸部が立ち、さらに外反する1218がある。長頸壺（1207～1216）は、肩部が角張り気味で、肩部下端に櫛状工具による刺突を連続に施文するもの（1213～1215）と、付かないもの（1210～1212）がある。頸部には、1～2条の沈線を施すものが多い。1211は、頸部と肩部の屈曲部に突帯を有する。1221は、上層からの出土したもので、外面を格子タタキを全面に施している。底部は、平底で低い高台を有している。形態等からみて、古代後半と考えられる。

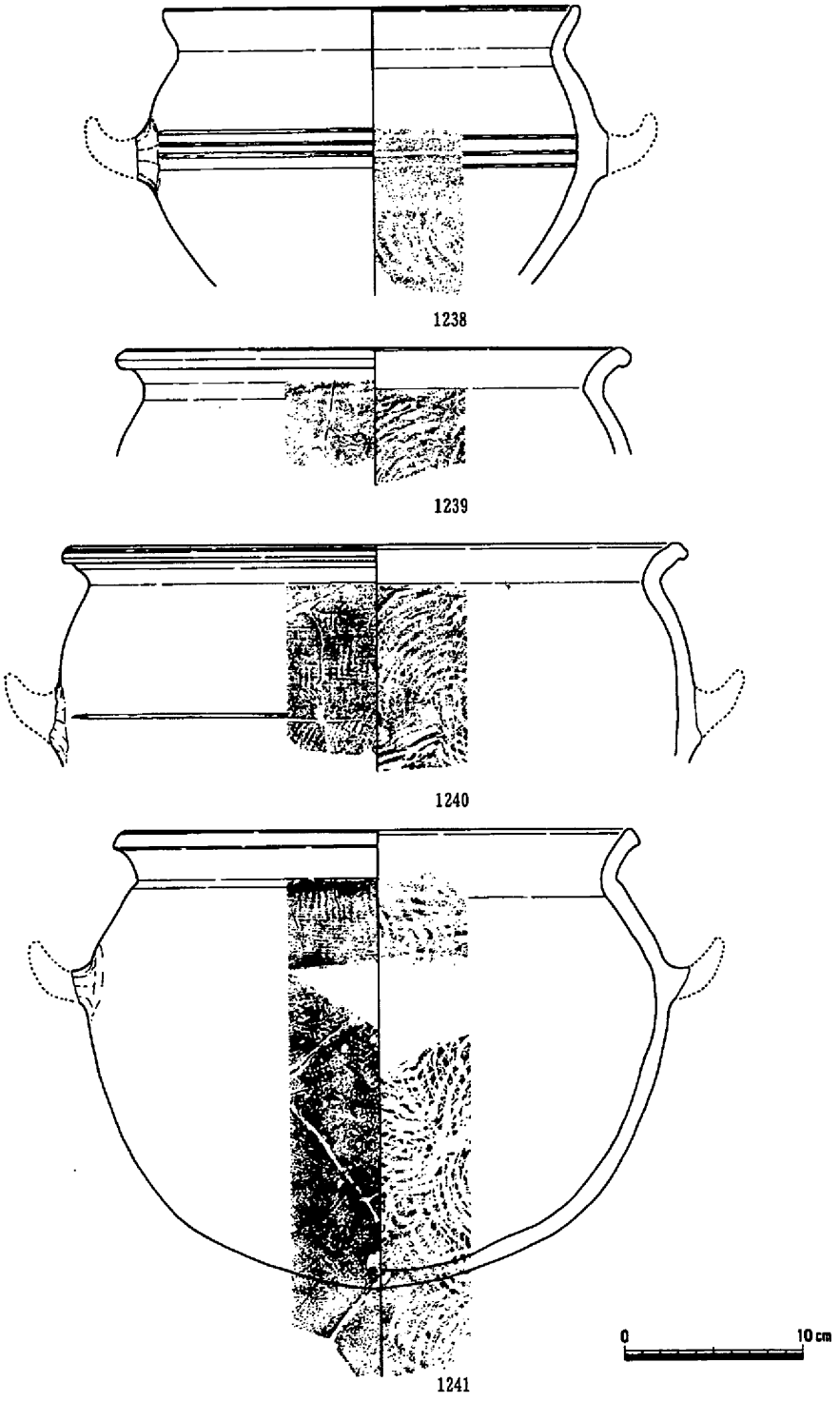
甕（1228～1237）は、大きく外反する口縁部をもつものと「く」の字口縁部をもつものがある。口縁部端部は、各種の変化を示している。基本的には、外面を平行タタキ、内面を同心円タタキが認められる。1237は、外面を平行タタキを施しているものの、内面は、同心円タタキののち中位から下半を荒い平行タタキを重ねている。1238～1241は、把手付の鍋である。外面の体部中位には、1～3条の沈線を入れている。甑（1242～1244）には、把手が付き、体部上半に沈線を1～2条廻している。1243の体部下半には格子タタキが残る。



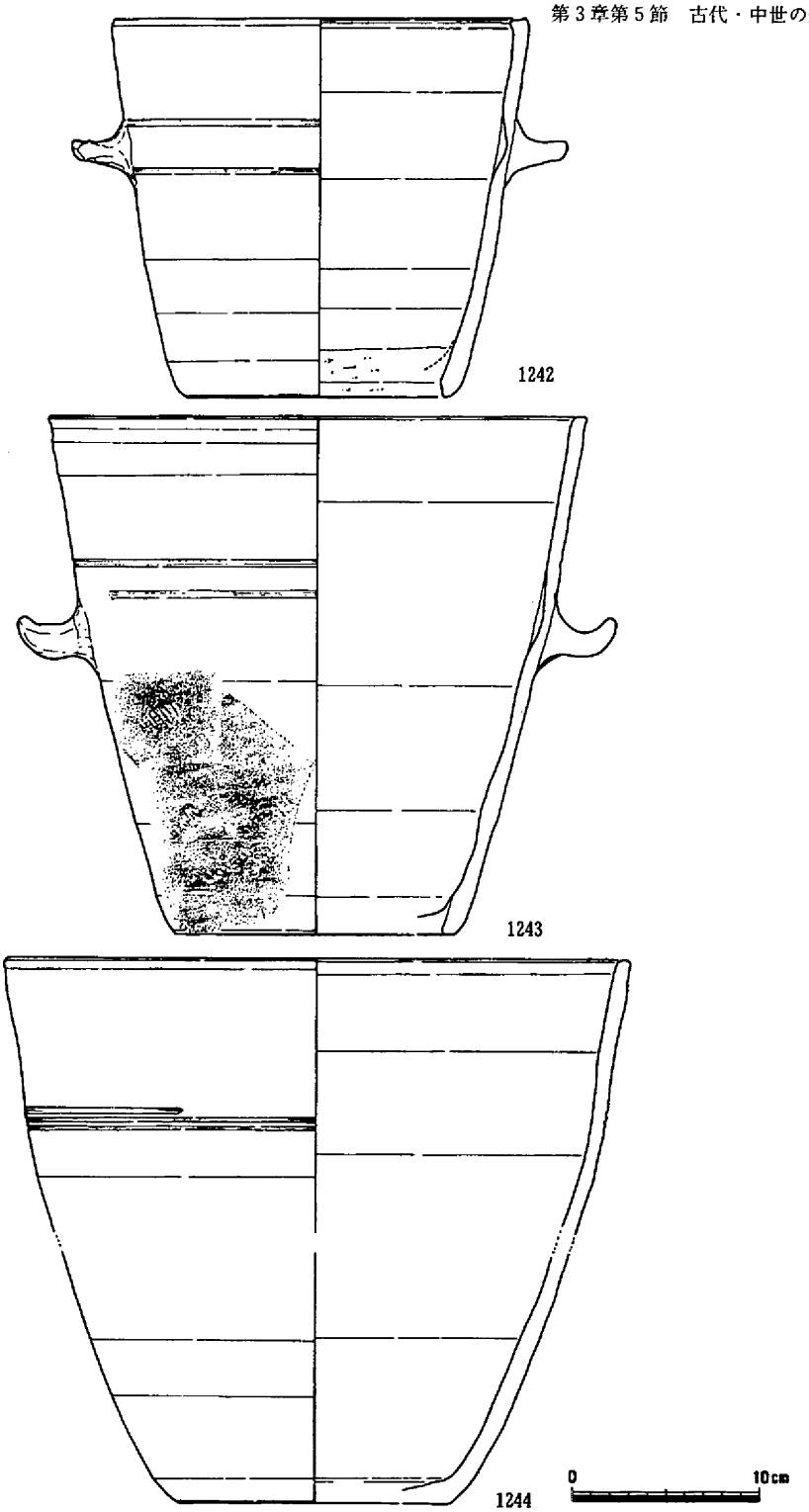
第200図　谷－A 古代～中世　出土遺物（8）

以上の須恵器は、7世紀中頃から9世紀代まで含んでいるが、その大半は7世紀後半から8世紀初頭に位置づけられるものである。

土師器は前述した須恵器に対応する7世紀後半か8世紀前半期の杯、皿、鉢、高杯などのものと、10世紀代の杯、皿、などと黒色土器の高台付椀などがその大半を占めた。また、



第201図　谷－A 古代～中世　出土遺物 (9)



第202図　谷－A 古代～中世　出土遺物（10）

白磁、青磁などの輸入陶磁に対応する早島式土器の椀、皿などの鎌倉時代の土師器も上層から出土している。

丹塗土器（1245～1249）は、1245、1247、1249、の上記の須恵器に対応するものと、1246、1248の10世紀前半に属するものがあった。大小の皿の1250～1258は、1252、1253が前者の丹塗土器と同時期と考えられる。1252、1253の外面底部には、巻き簀の痕跡が認められた。1254～1258の杯、皿は、ほぼ同時期と考えられ、10世紀中頃を中心とする特徴を示している。また、1250、1251の小皿は、やや小型化したものでやや新相の10世紀末にその時期を求められる。

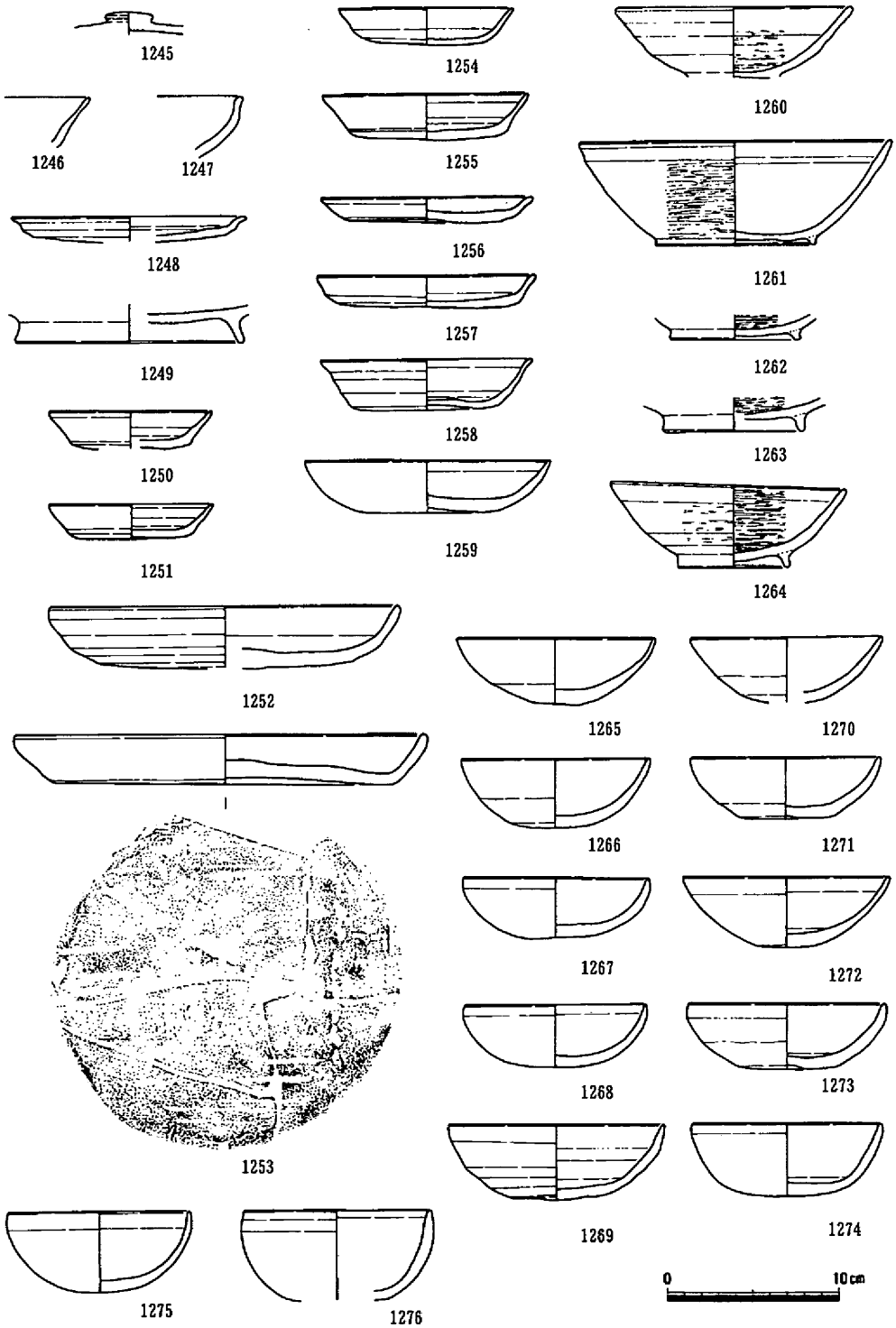
黒色土器である1260～1264は、黒色土器A類のもので、内外面ヘラミガキを施す。器形は大小あるものの、時期的には差はなく10世紀中頃から後半に属するものと考えられる。

1265～1276の鉢、杯は、内面をていねいなナデを施し、外面体部はオサエ、ナデ、口縁部はヨコナデで仕上げている。形態、調整の特徴から、ここでは1245、1247などと同様な時期としておく。

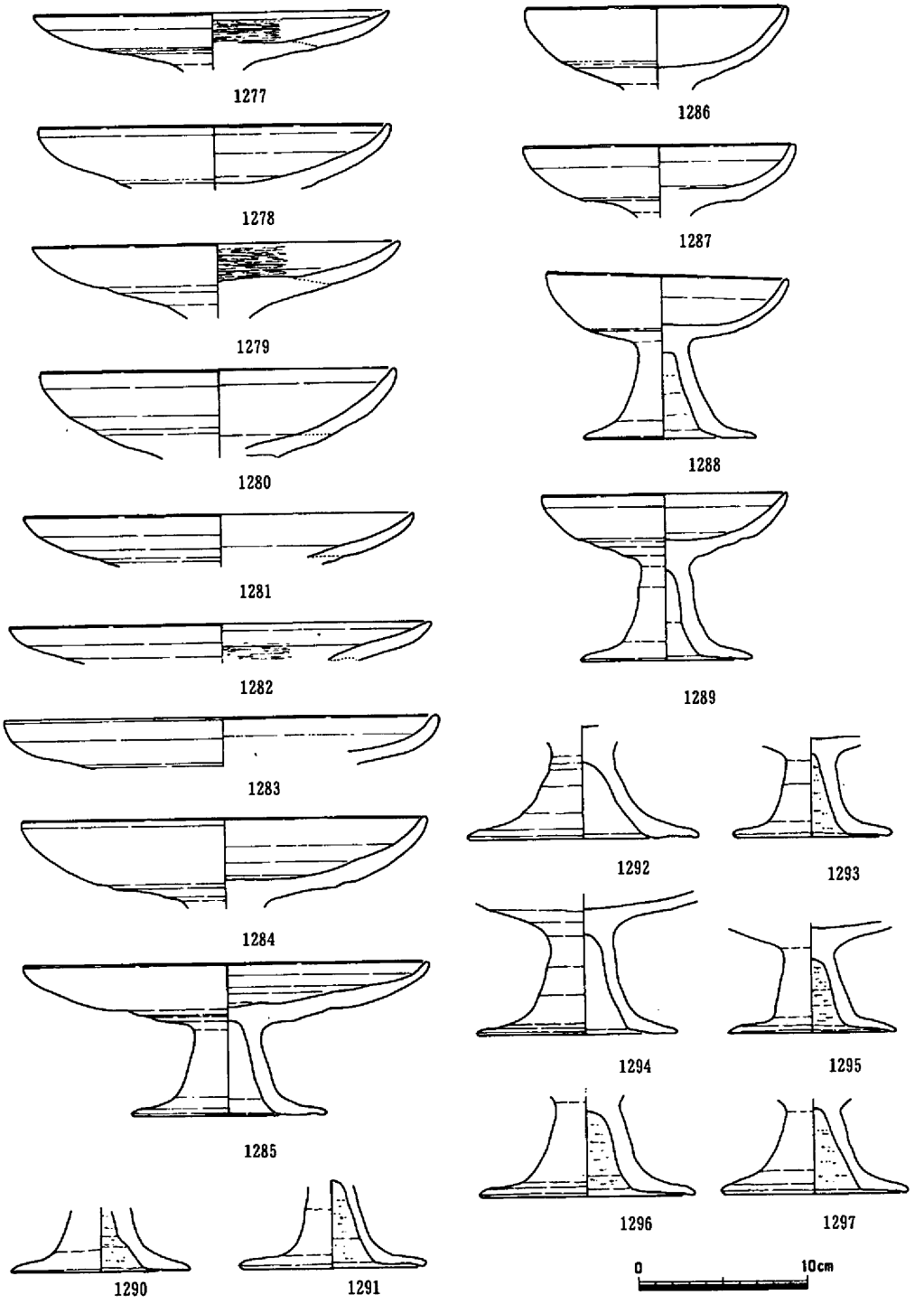
1277～1297の高杯には、杯部が底部から内湾して立ち上がるもの（1286～1289）と、浅くて皿状の杯部が付く1277～1285に大別できる。前者の1286～1289の高杯は、内面をていねいなナデを施しており、脚部は「ハ」の字に開く脚柱部から屈曲して裾部を作り出している。これらの高杯は、7世紀後半を中心とする時期と考えられる。また、1277～1285の高杯は、杯部がやや深めのものと浅めのものがあり、杯部内面はヘラミガキを施すものも認められる。脚部は、1286～1289の脚部の形態、調整、胎土等が類似しており、ほぼ同時期に存在したものと思われる。

1298のカマドは、上部が残存しており、外面はハケメ、ナデ、内面はヘラケズリで調整している。このカマドは、貼り付りの庇はなく、焚口部上部を張り出してまげ庇様に作っている。このような形態のカマドは県内でも例はない。古代前半期のものか。

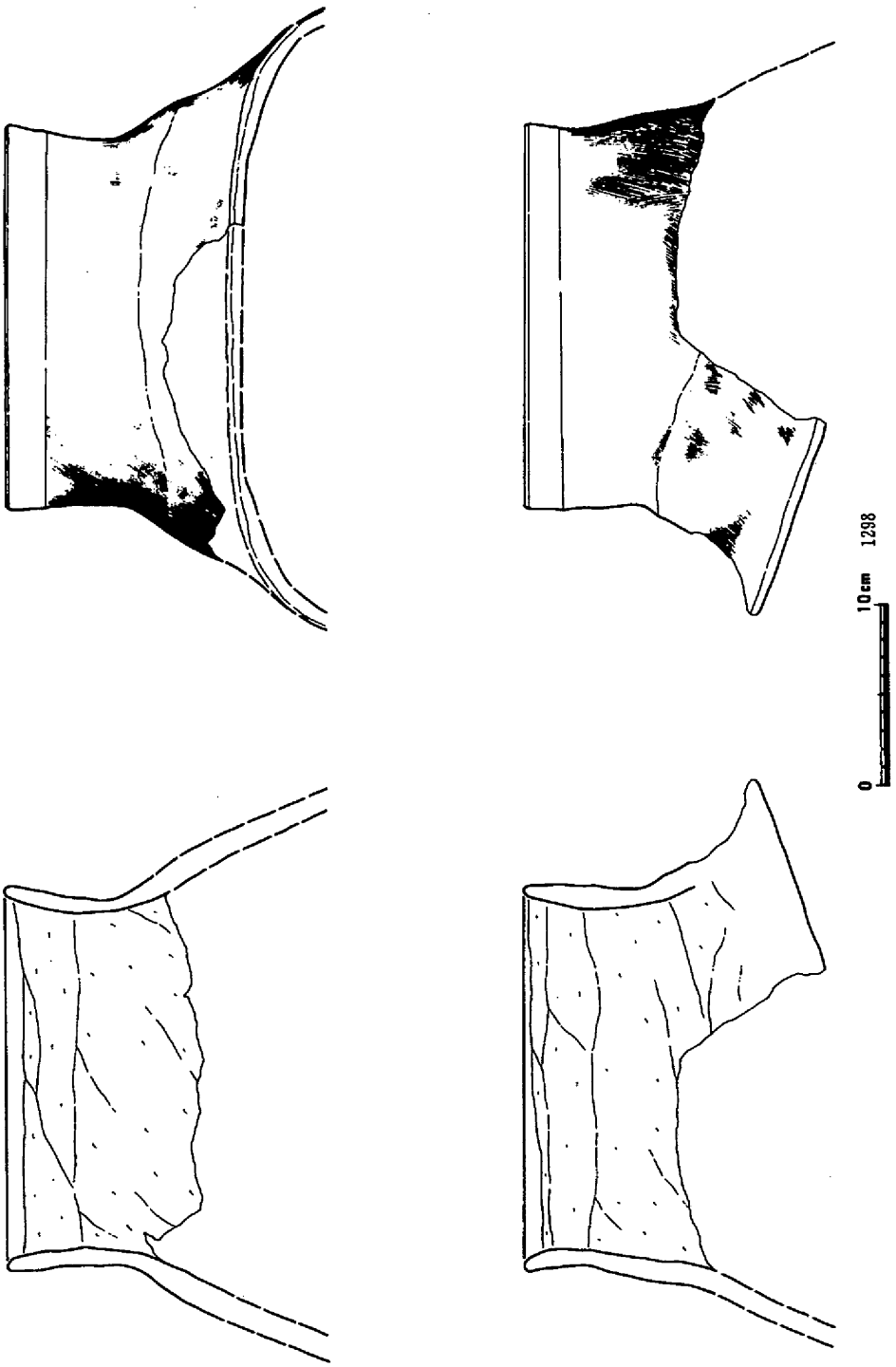
1299～1306の甕は、多様な口縁部形態がある。外面は、ハケメを施す1299、1303～1306、オサエ、ナデによる1301、1302がある。内面は、ハケメを施す1305、1306やヘラケズリで調整する1299、1303がある。これらは、おおむね古代前半期に属するものと考えられる。1303～1328は、特徴的に外面体部を平行タタキ、内面を同心円タタキが認められる。これらの土器は、須恵器の技術を多分に利用しており、1307、1311、1312の口縁部の形態をみると土師器の器形を示している。焼成は、明らかに土師器に焼き上がり、胎土等も悪い。これらの内、1309、1310、1327、1328は、その特徴からカマドで、他は甕と考えられる。これらの土器は、各調査区から総数100 数十片の土器が出土している。しかしながら、同一個体と思われるものも多く、個体数はさほど多くはないと考えられる。このような土器は、他遺跡では類例はほとんどなく、例外的な土器であろう。



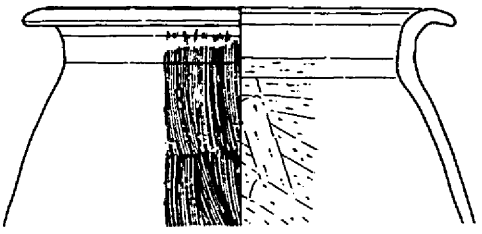
第203図　谷－A 古代～中世　出土遺物（11）



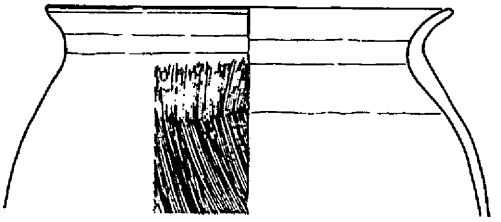
第204図　谷－A 古代～中世　出土遺物 (12)



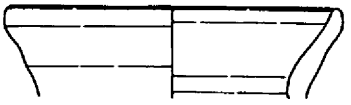
第205図　谷－A 古代～中世　出土遺物（13）



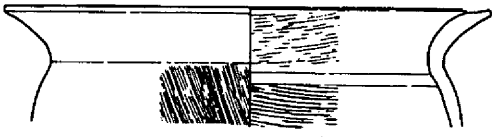
1299



1304



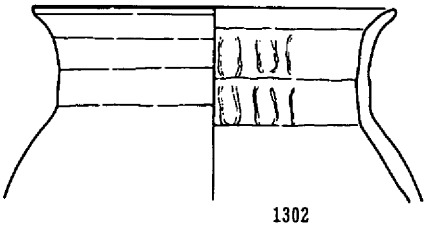
1300



1305

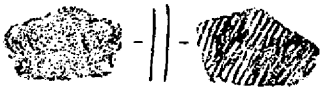
1301

1306

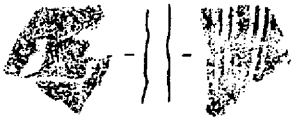


1302

1307

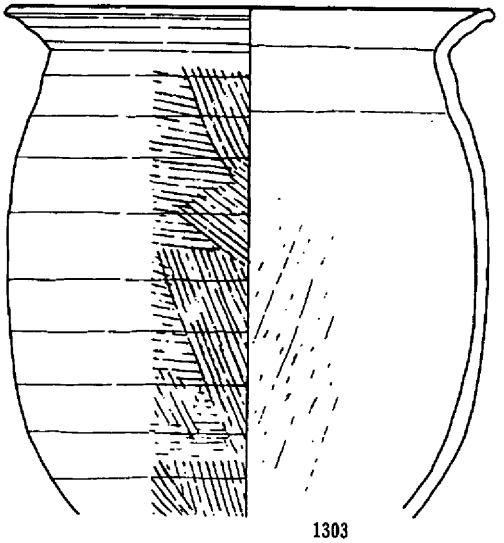


1308

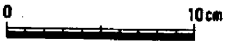


1309

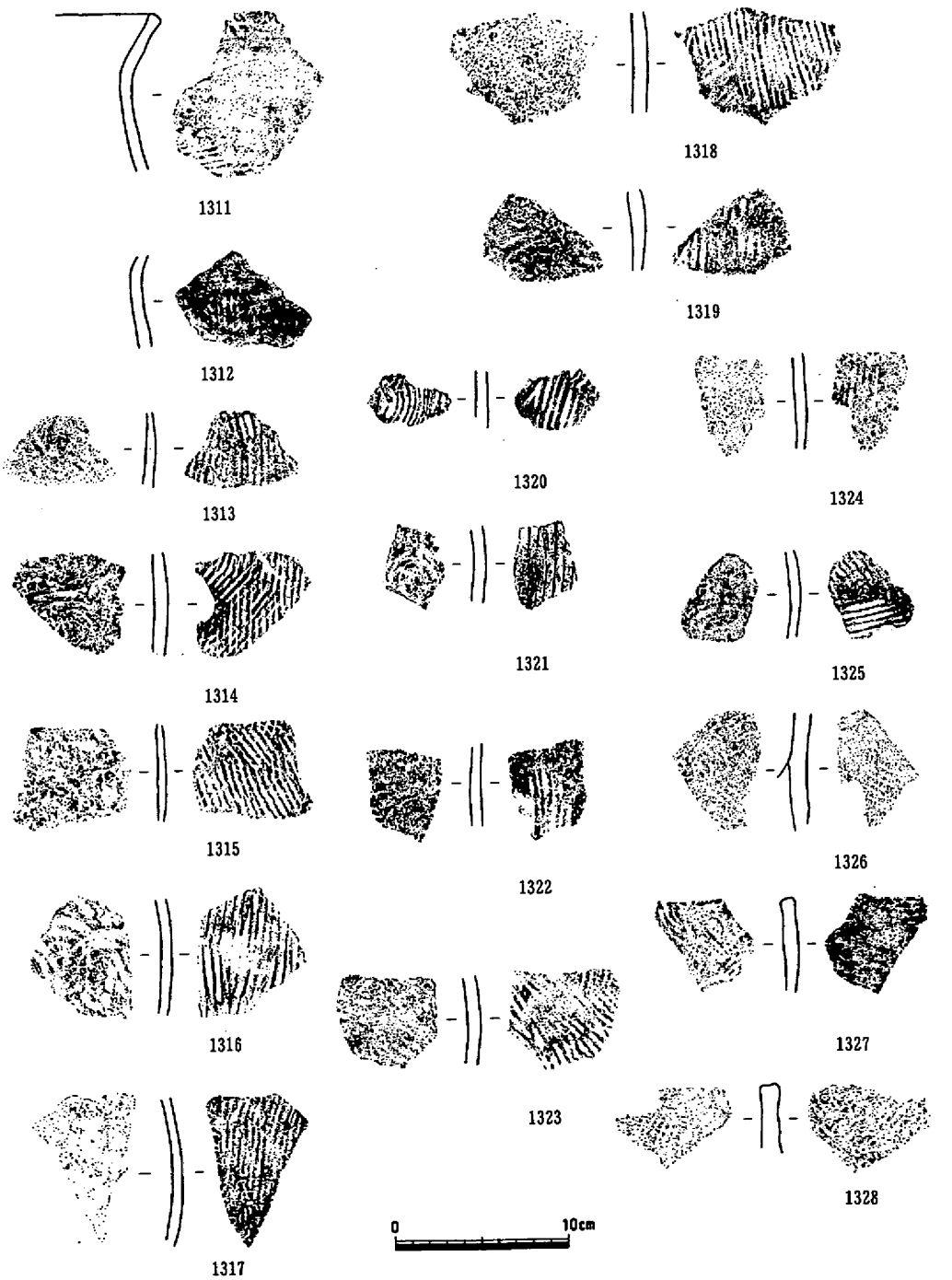
1310



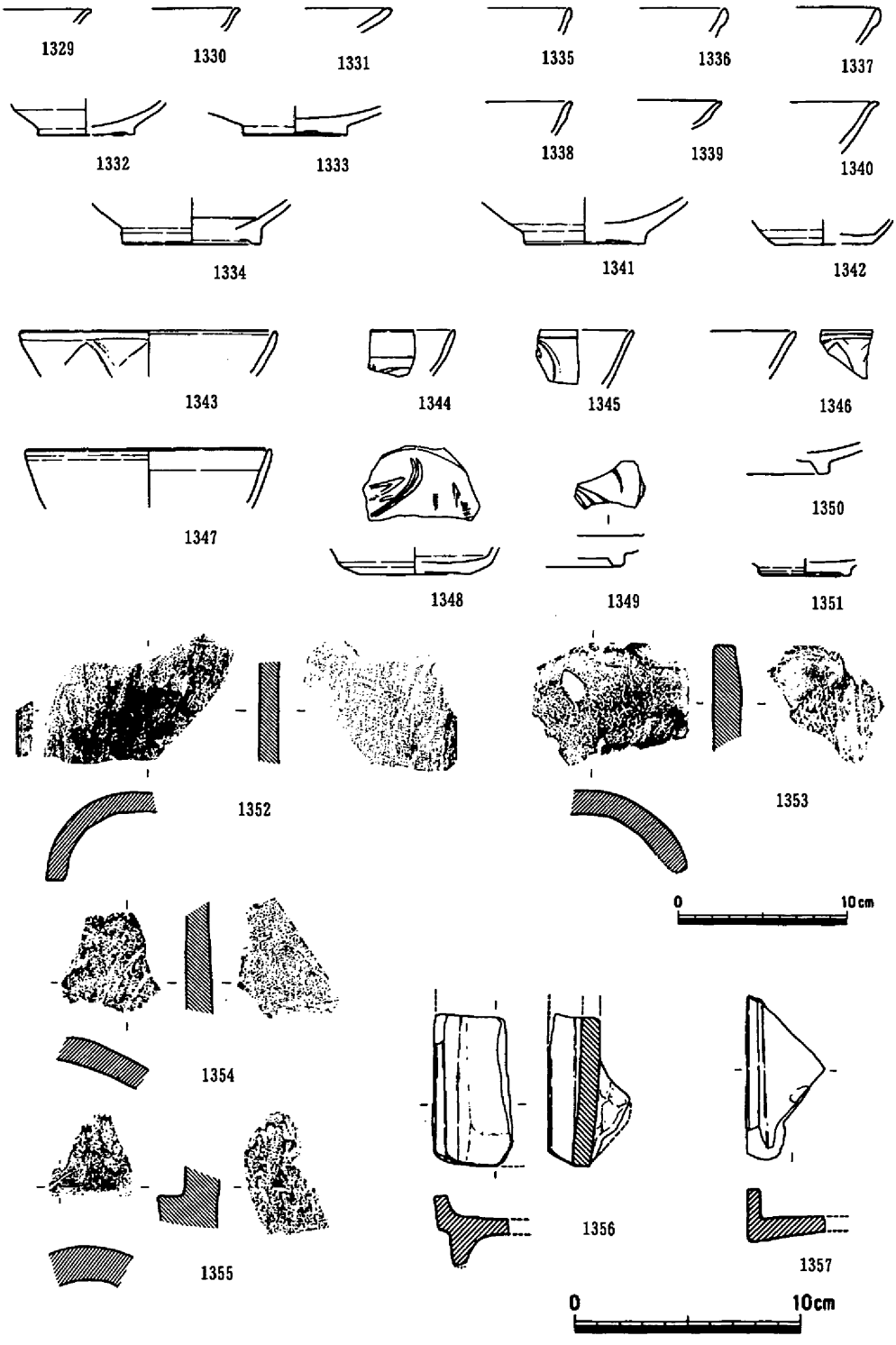
1303



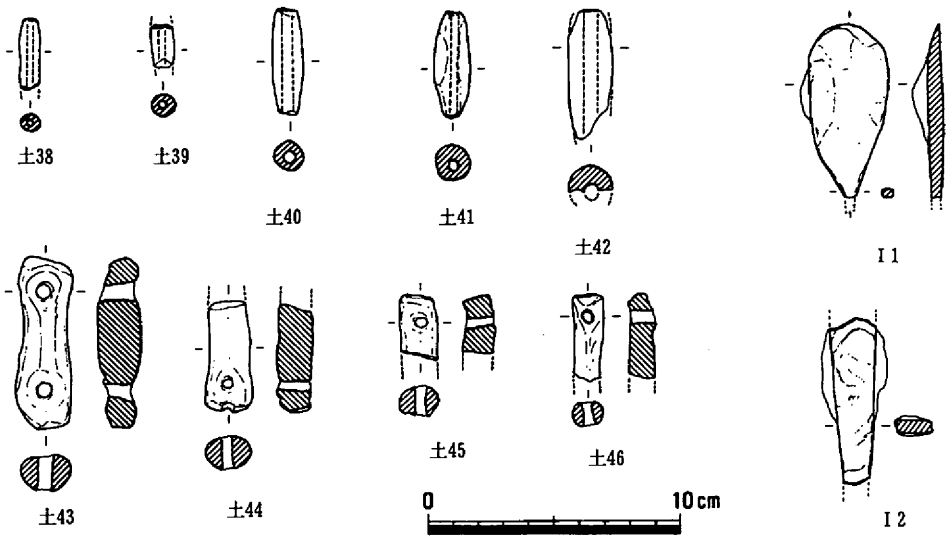
第206図　谷－A古代～中世　出土遺物（14）



第207図　谷－A 古代～中世　出土遺物（15）



第208図　谷－A 古代～中世　出土遺物（16）



第209図　谷－A 古代～中世　出土遺物（17）

緑釉：1329～1344は、第97図第１～８層から出土した、椀、皿である。1329、1330は、口縁端部で短く外反する。1331は、壁がやや厚く、口縁端部内側に沈線状のものが廻る。1332～1334は、いずれも高台をもち、1334は幅広の高台である。1329～1331、1333、1334は、淡緑黄色の釉がかかり、現在の知見ではその諸特徴から、京都での緑釉窯のものと類似しており、10世紀前半と考えられる。1332は、緑釉がかかっていなく無釉である。

白磁：1335～1337は玉縁の口縁部を有する。1341は、削り出し高台で1335～1337の口縁部に対応する。1338は立ち縁の口縁部、1340は反り縁の口縁部である。以上の碗は、12～13世紀と考えられる。1339、1342は、口ハゲの平底の皿で、13～14世紀中頃であろう。

青磁：1343～1351には、龍泉窯系のもの（1343、1345、1346、1349）と同安窯系の1344、1348がある。1343、1346は、外面に鎬蓮華文、1345、1349は、蓮弁がなく、画花文が付く。

瓦：1352～1355は、谷の上層からの出土でいずれも丸瓦である。凹面は、布目であるが、1353だけは縄目が付く。

陶硯：1356、1357とも風字硯で、谷の上層から出土した。1356は、側壁と上面はヘラケズリ、裏面はオサエ、ナデで調整している。1357は、側壁内外および裏面をヘラケズリで内面はナデを施す。1356、1357とも使用痕が認められた。

土錘：土38～土42は、小型の管状のものである。土43～土46は、棒状の両側に孔を穿っており、さらに土44は片側の端面に抉りを入れている。土43～土46の土錘は古代と考えられる。

鉄器：谷の上層の中世の層から出土した。Ｉ１、Ｉ２はいずれも用途不明のものである。

谷－B（第101、210～224図）

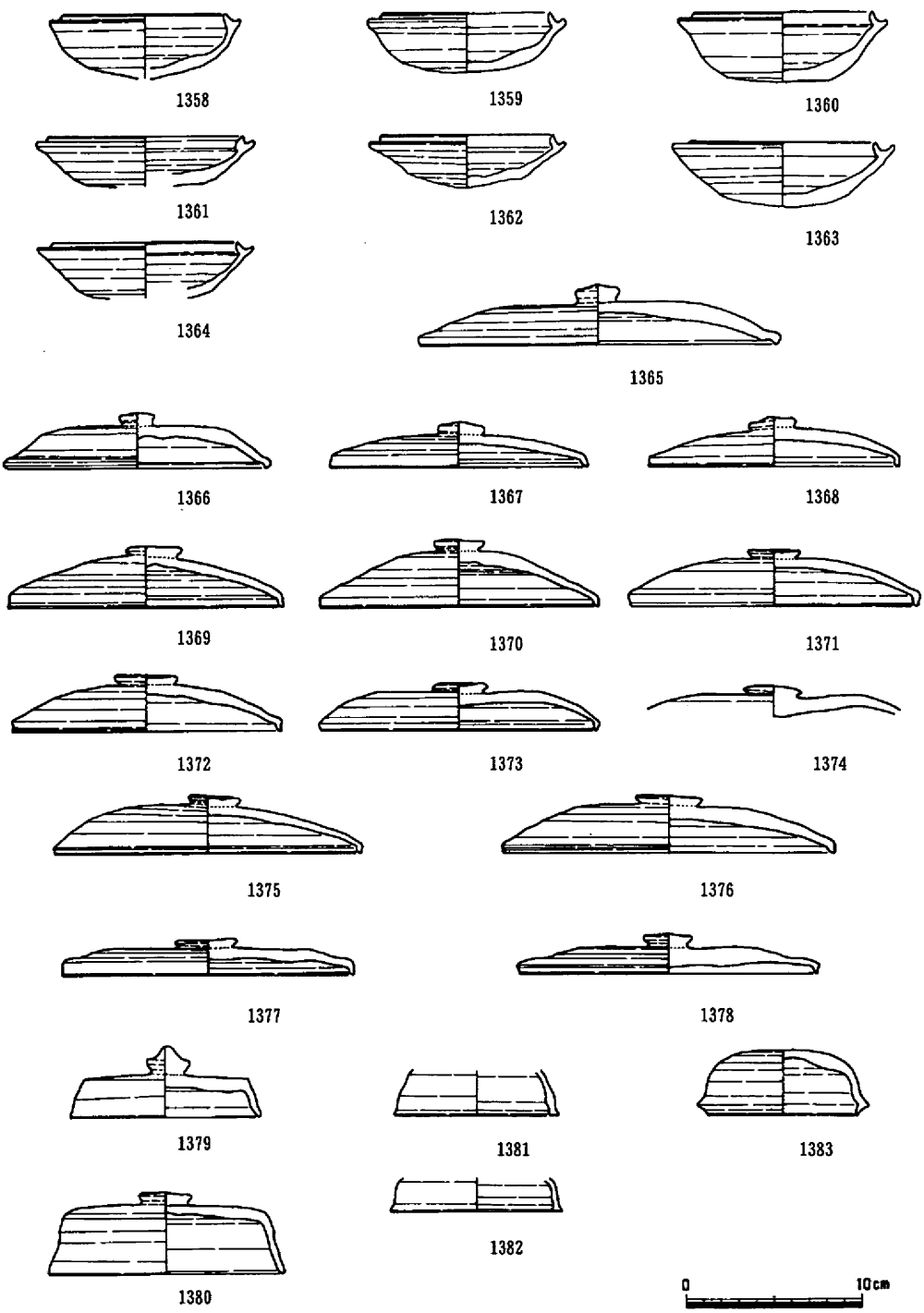
谷－Aと同様に、ここでは中層、上層の古代～中世の遺物について報告する。谷の中層には、出入口部付近を中心に、大量の須恵器を包含していた。その須恵器は、7世紀後半～8世紀初頭がその中心で、谷－Aと同様の様相を示していた。この中層は、何層かに分層でき、中層の下部は、7世紀後半から8世紀前半期の遺物が、上部は平安時代を中心とする遺物がその主体を占めた。しかしながら、遺物の取り上げは良好な形では難しく十分とはいえなかった。

須恵器：1358～1364の杯身は、報告の都合上この項で取り扱った。これらの杯身は、いずれもＴＫ217 型式に属するもので、底部外面はヘラオコシ、ナデの未調整のものである。

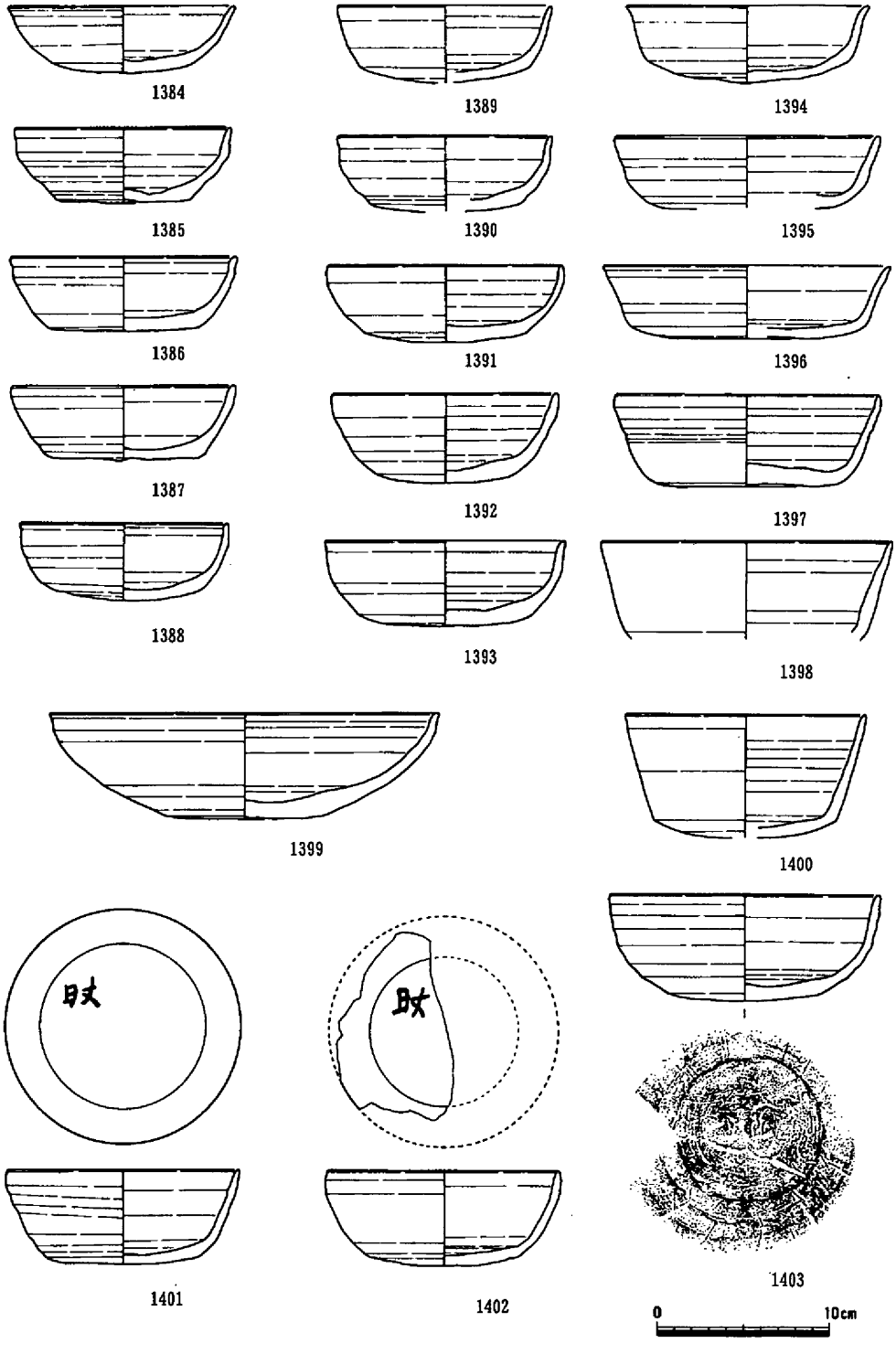
杯蓋（1365～1378）は、1367～1376の丸味のある天井部をもち、屈曲させる口縁部のものがその大半を占めた。1369、1370は、顕著にその特徴を表している。これらの杯蓋は、県内の7世紀後半を中心としてよく認められる器形である。1377、1378は、器高は低く、水平な天井部をもち、屈曲された口縁部をつくりだしている。1378の天井部の器壁は厚く、やや後出のものと考えられる。1365、1366は、壁高は高く、口縁部はやや丸味のある天井部から角度を変え湾曲し、さらに口縁端部を肥厚させており、1367～1374より新相の奈良時代中頃と考えられる。なお、1371は、胎土、焼成とも良好で、備前・寒風窯の製品と酷似するものである。1379～1383は、蓋と考えられ、1379、1380は擬宝殊が付く。1381、1382は、口縁端部を内外に肥厚させている。1383は、胎土、焼成とも良好で、口縁部を折り返し、端部をつまみ出している。

杯身には、高台の付かない1384～1403、高台の付く1404～1429の両者がある。1384～1403には、底部をヘラケズリを施すものと未調整のものがある。おおむね7世紀後半～8世紀初頭のものが多く、奈良時代前半期のものを一部含んでいる。1399は、やや大形のもので、谷－Aの1172～1174の高台が付かない器形だと考えられる。1400は、胎土も精良で、他と比べて、形態、胎土など異なっている。やや新相のものか。1401、1402は、内面底部に同様のヘラ描の文字がある。両者の文字は筆感が酷似するものである。1401、1402は、底部外面は未調整で、整形、胎土、焼成とも同様で、同一人物の手で作られたものと考えられる。文字は、一文字ならば「旼」、「旼」と読めるが意味が不明である。二文字であると、右から「大日」と読める。この土器は、その特徴から7世紀後半～8世紀初頭と考えられる。

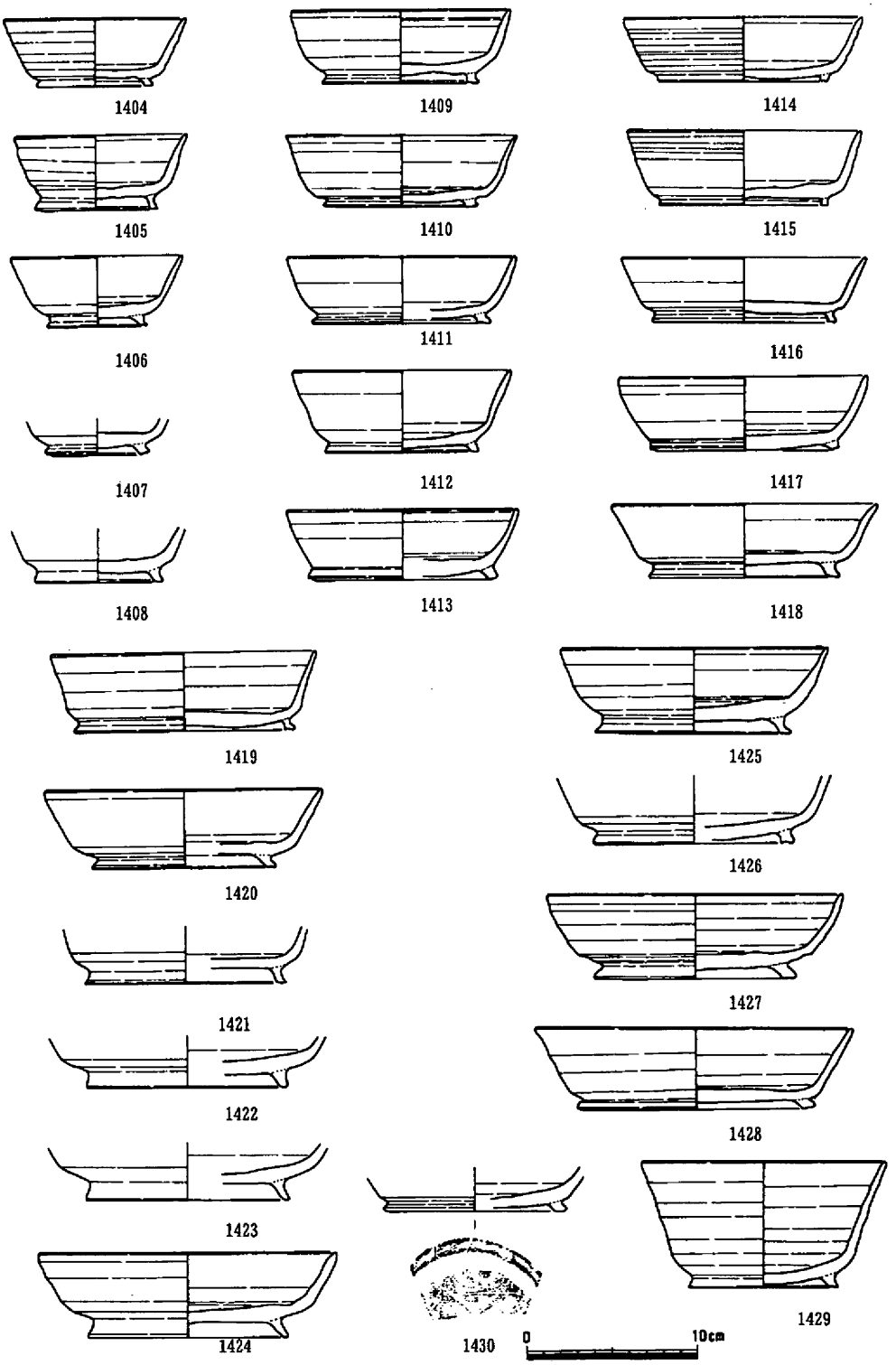
1404～1429の高台が付く杯身は、口径10～11㎝の小型のもの（1404～1408）から口径が18㎝以上の1428までである。口縁部は、直線的に斜上方に立ち上がるものや内湾して立ち上がるものが大半である。これらの土器は、1367～1376に対応するものである。高台は踏ん張り、端部が内外に肥厚する高台が通常で、1423、1424のようにやや細く、丸くおさめるものもある。この1423、1424は、窯工人の違いも考えられるが、やや新相であろう。1429は、立ち上がりが長く、やや外反気味に立ち上がり、1169と同時期であろうか。



第210図　谷－Ｂ 古代～中世　出土遺物（1）



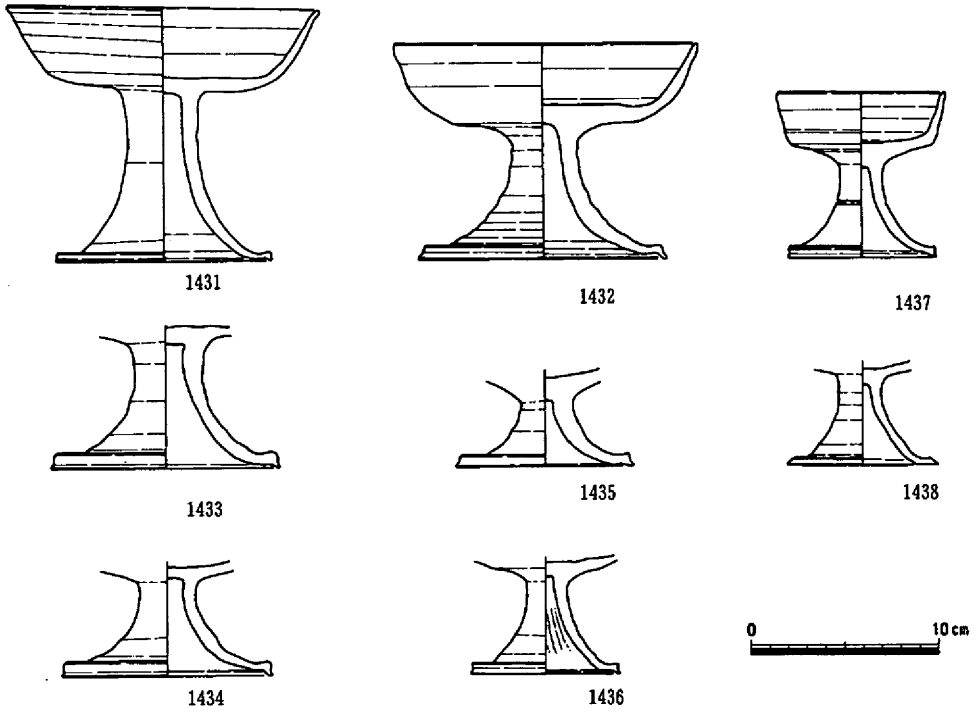
第211図　谷－B 古代～中世　出土遺物 (2)



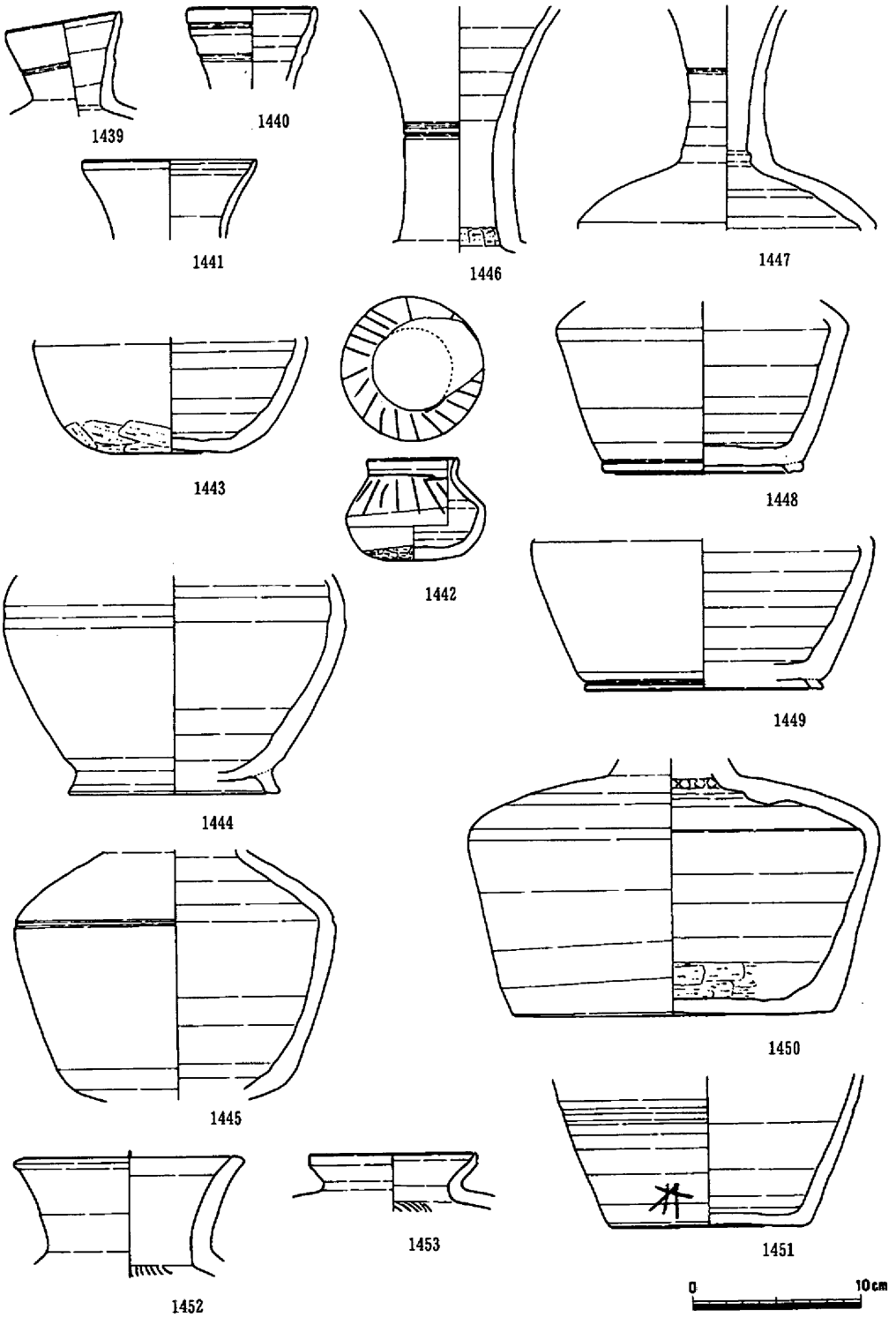
第212図　谷－B 古代～中世　出土遺物 (3)

高杯（1431～1438）は、1435～1438の小型のものも含んでいる。脚裾部端部は、「ハ」の字に開く脚裾部から端部を上下に肥厚させている。1439～1441は、平瓶の口縁部と考えられる。1442は、小型の短頸壺で、外面上半にヘラ描を施文している。ヘラ描きは、頸部に1条廻らし、さらにその下部を放射状に描いている。1444、1445も短頸壺と考えられる。1446～1448の長頸壺は、頸部に1～2条の沈線が廻る。1449、1450、1451は、上部の形態が不明な壺である。1451の体部下半にはヘラ描の記号が認められた。この土器は、胎土、調整からみて、後出的なものと考えられる。1453は、横瓶の口縁部か。

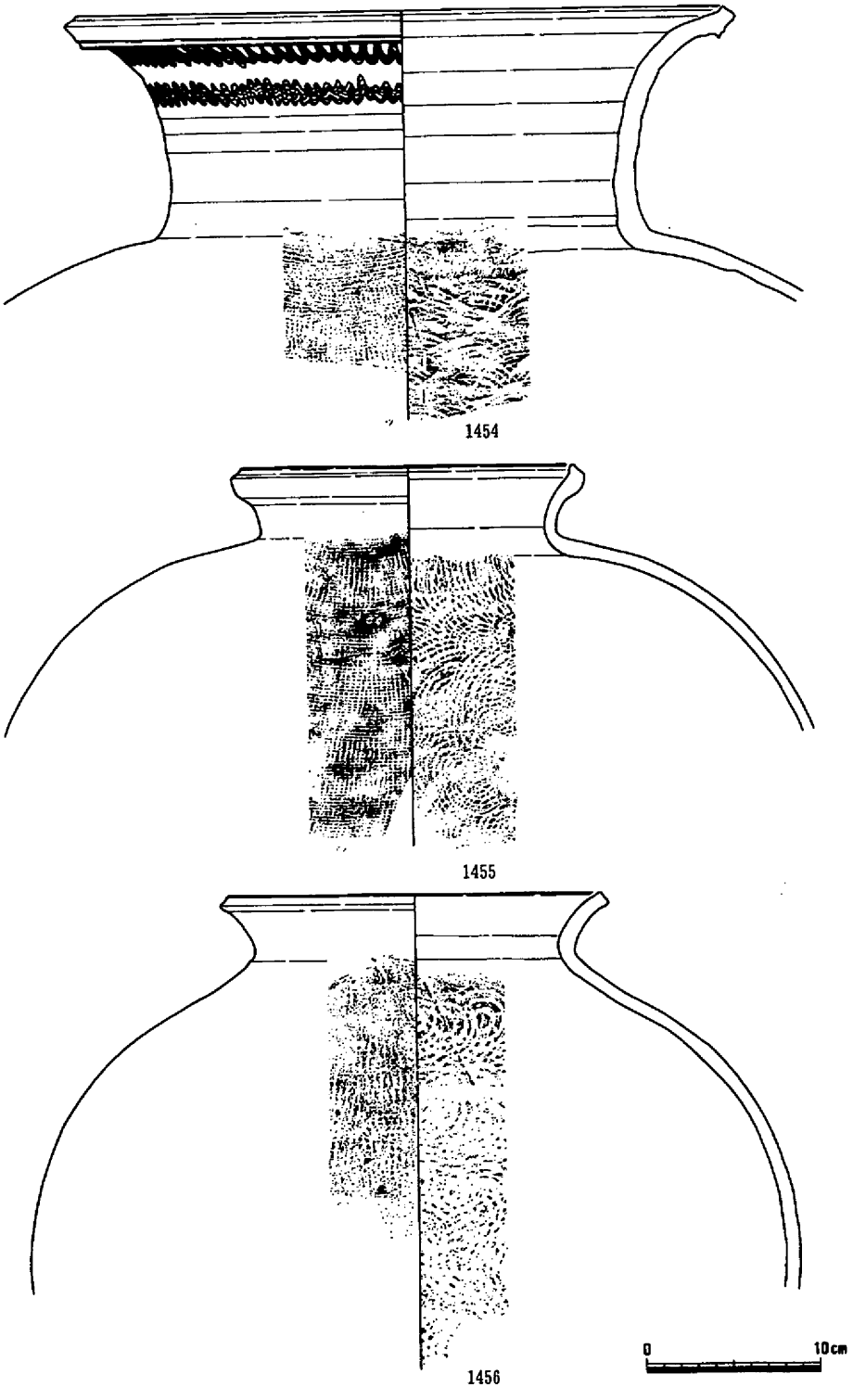
甕（1454～1474）は、各種の口縁部を呈しており、1454、1465は頸部に施文する7世紀前半期のものも含んでいる。1458、1463には、ヘラ記号が付く。1466、1467の内面には、同心円タタキ中央に「十」字形の当具痕が認められる。1468～1474は、同一個体で、内面は同心円タタキののち、上半だけ平行タタキを重ねている。同心円タタキの中央部は、「米」字形の当具痕が残る。1475は、横瓶、1476は把手付の鍋である。1477は、大形の鉢で内面に同心円タタキ痕が残る。甑の1478～1484は、外面体部中位よりやや上部に把手が付き、1～2条の沈線を廻らす。谷－Bでの須恵器は一部新相のものも含んでいるものの、谷－Aと同様に7世紀後半～8世紀初頭がその大半を占める。



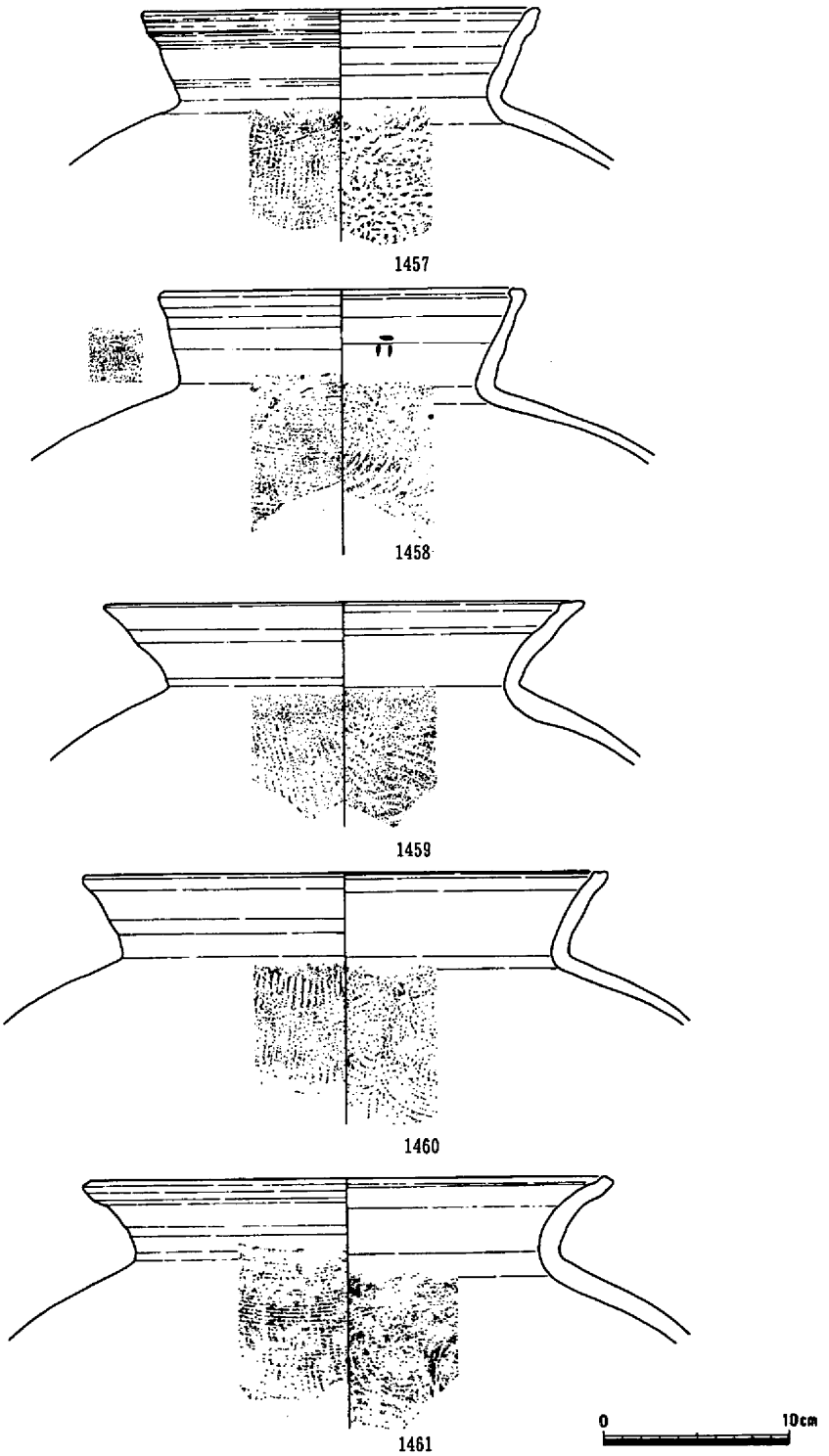
第213図　谷－B 古代～中世　出土遺物（4）



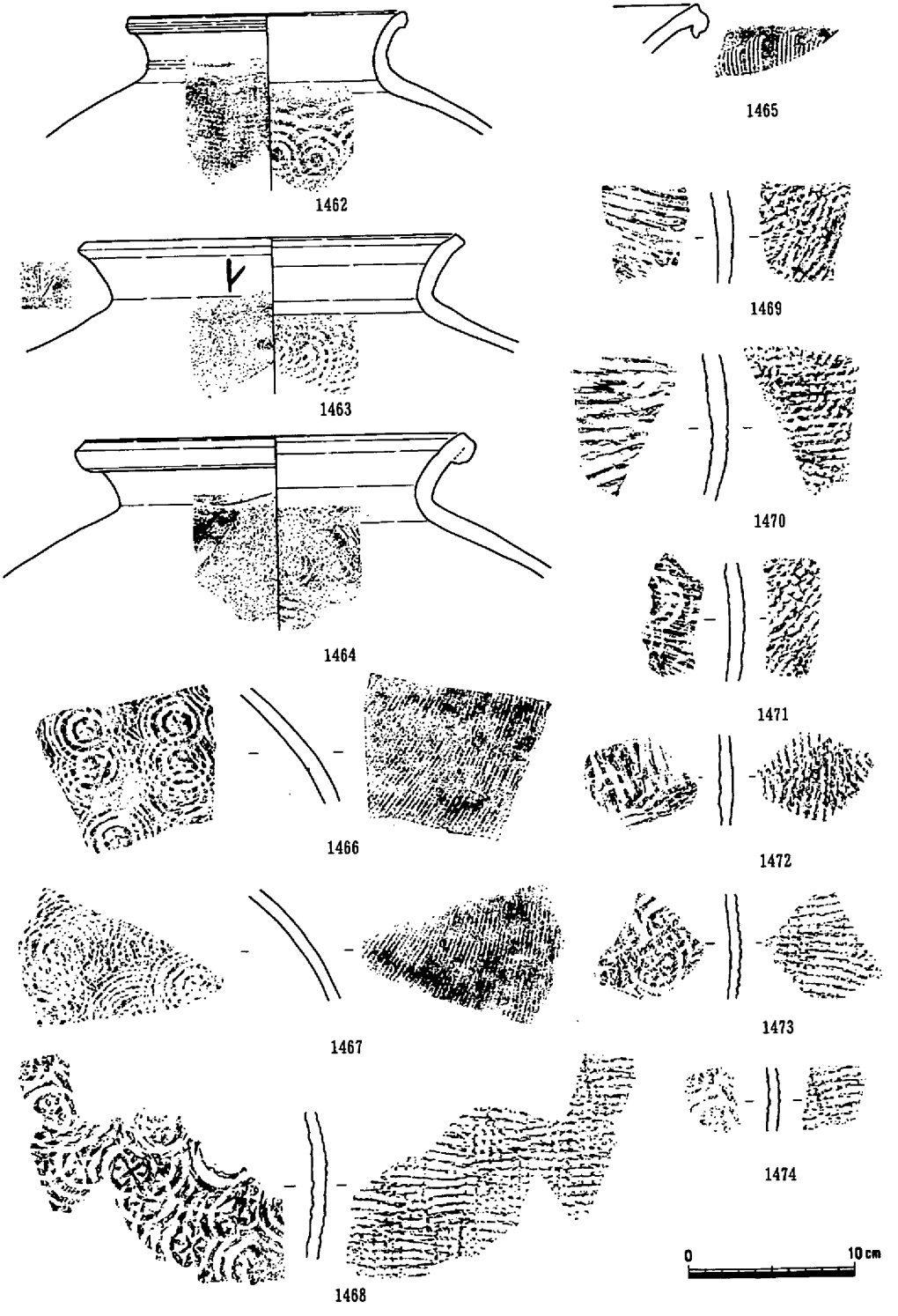
第214図　谷－Ｂ 古代～中世　出土遺物 (5)



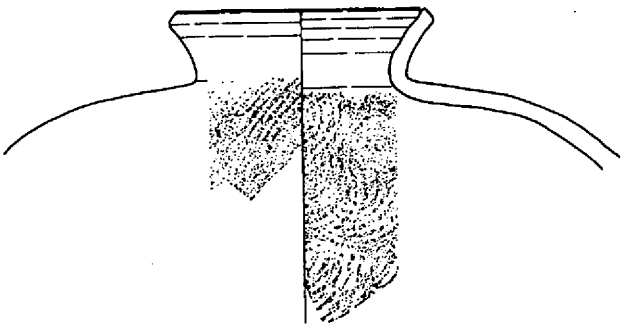
第215図　谷－B 古代～中世　出土遺物 (6)



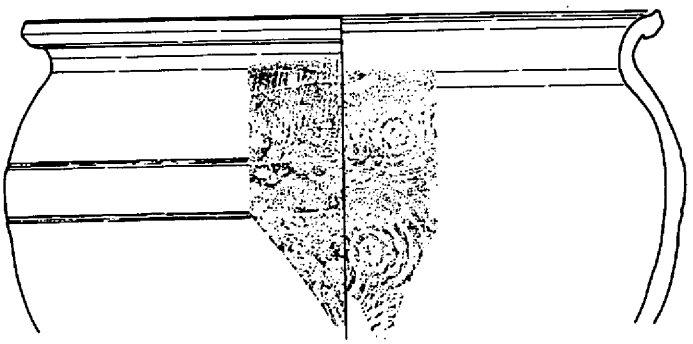
第216図　谷－B 古代～中世　出土遺物（7）



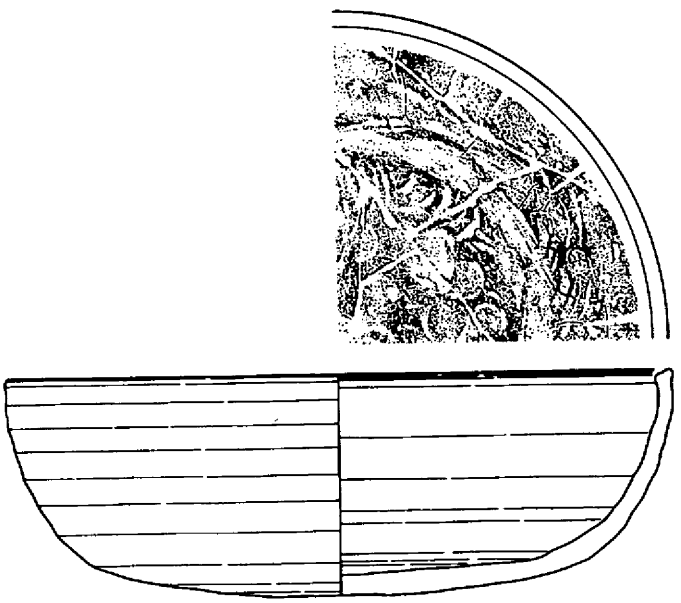
第217図　谷－B 古代～中世　出土遺物 (8)



1475



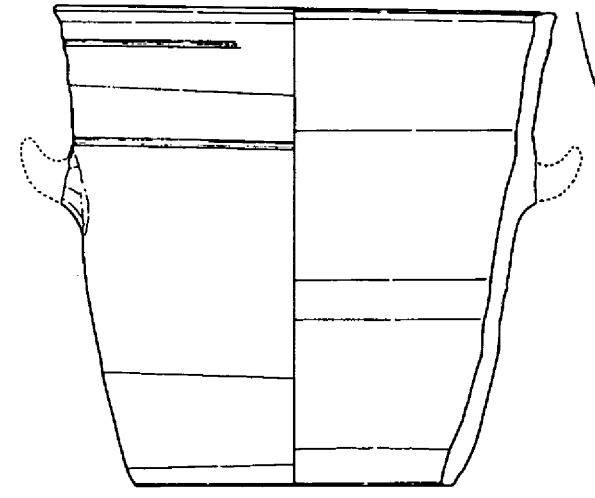
1476



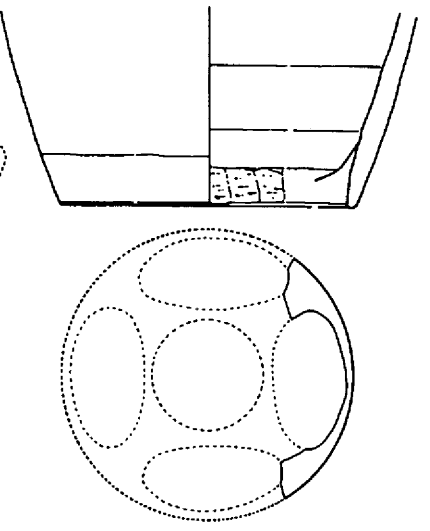
1477

0　10cm

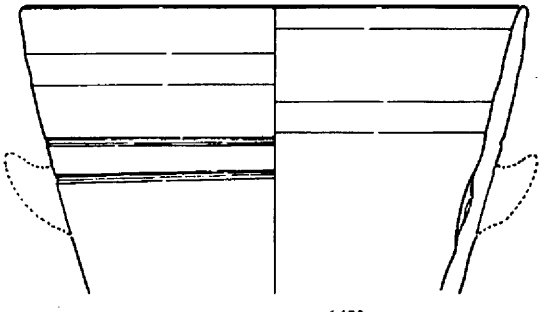
第218図　谷－B 古代～中世　出土遺物 (9)



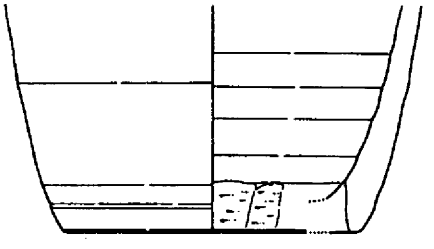
1478



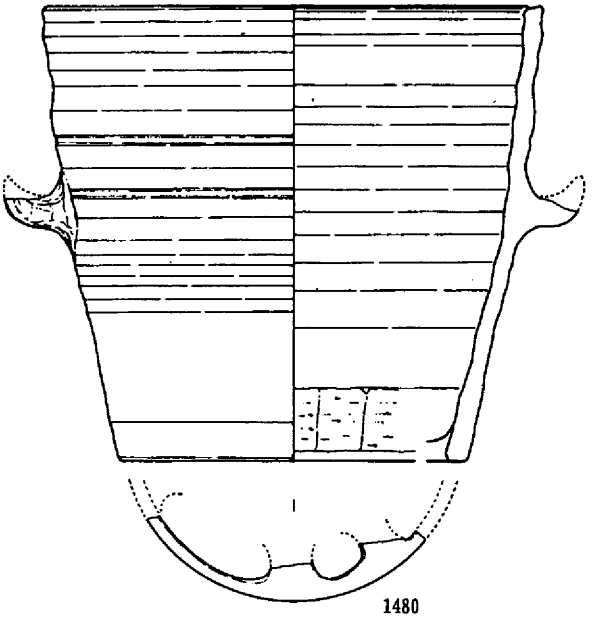
1481



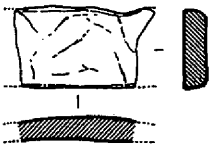
1479



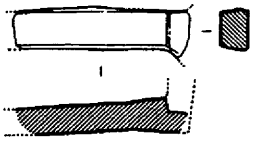
1482



1480

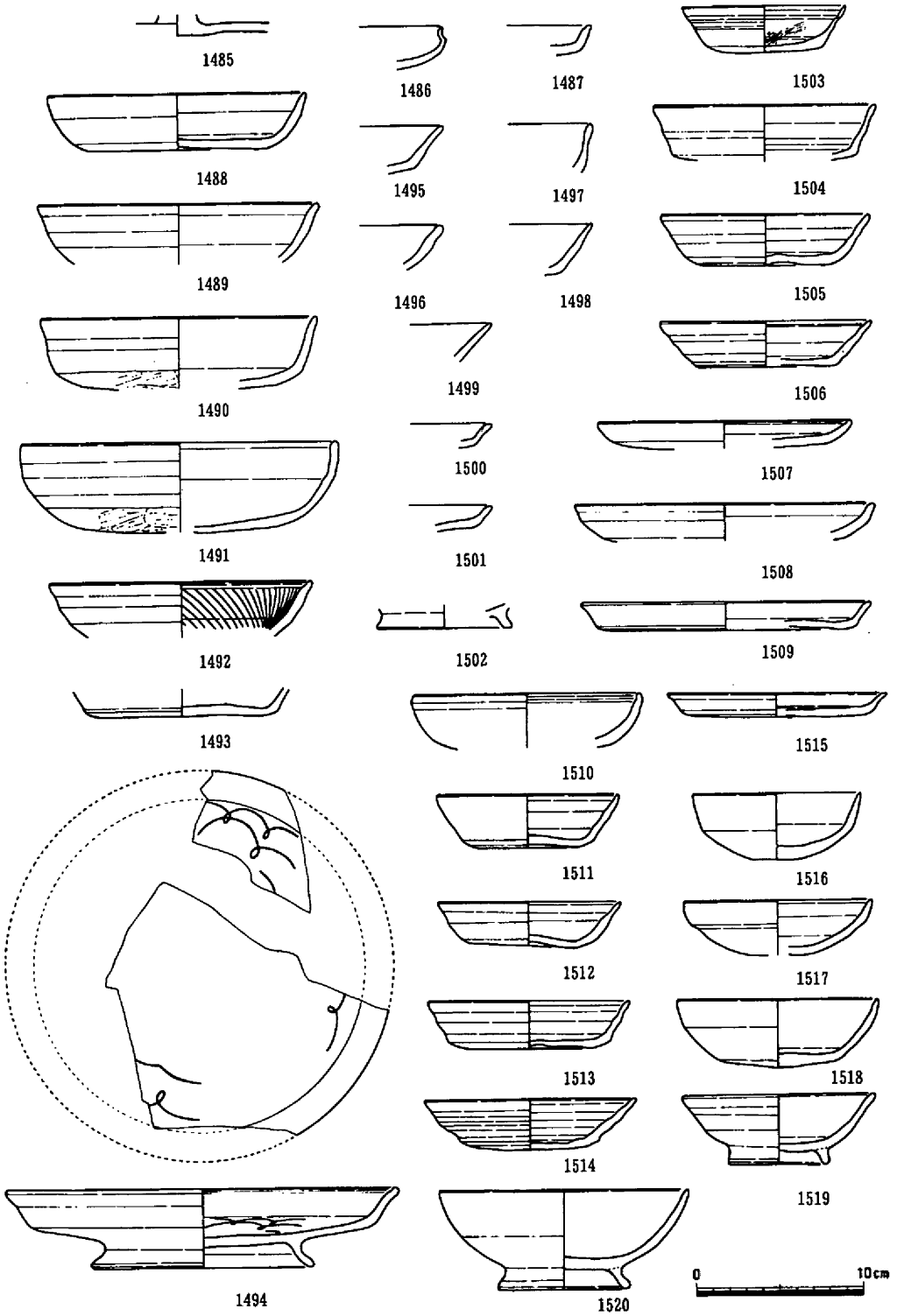


1483

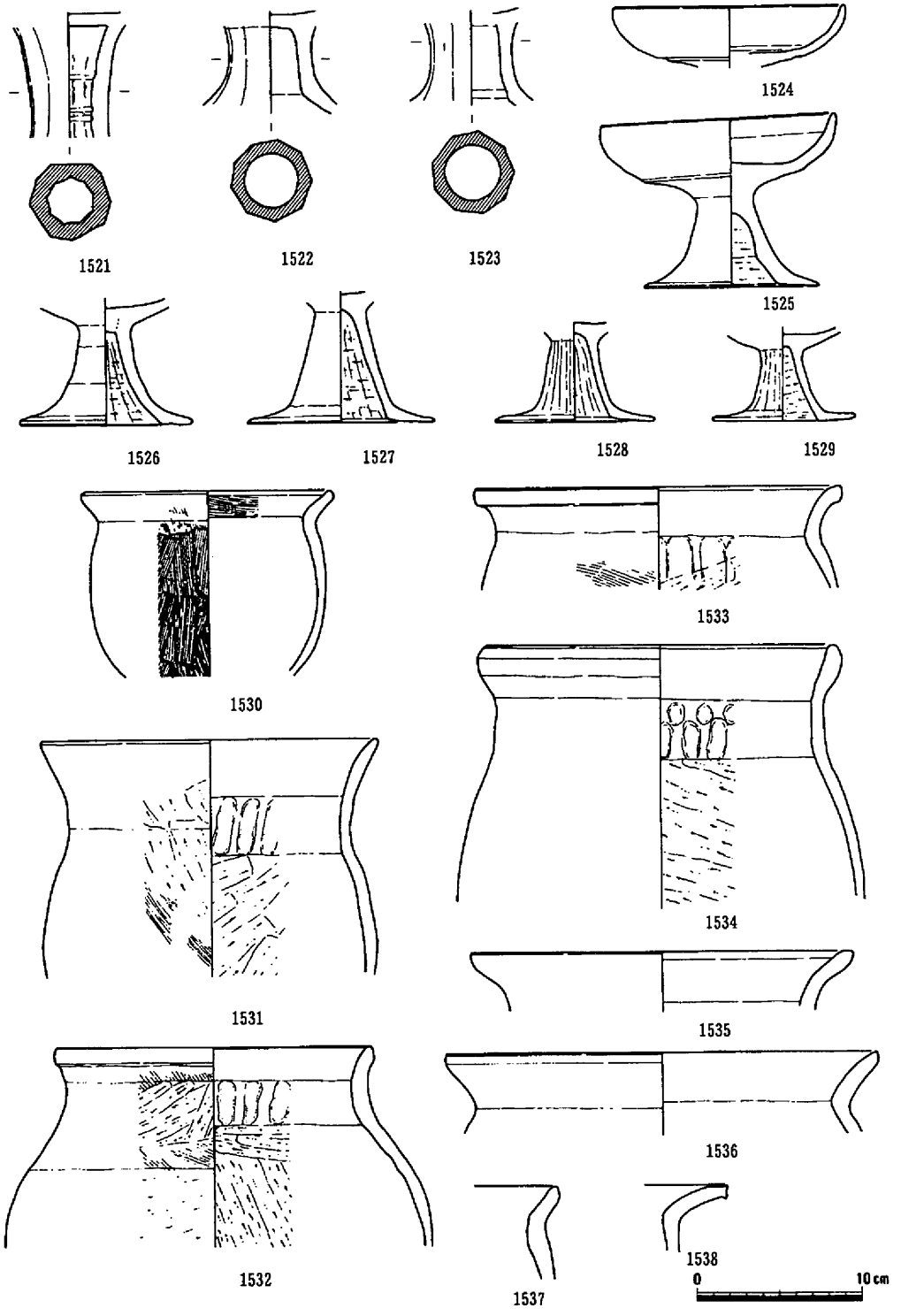


1484

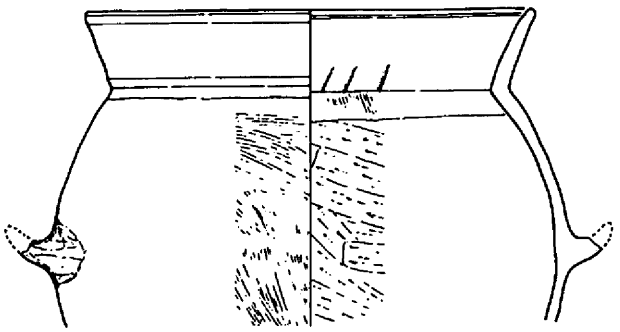
第219図　谷－B 古代～中世　出土遺物（10）



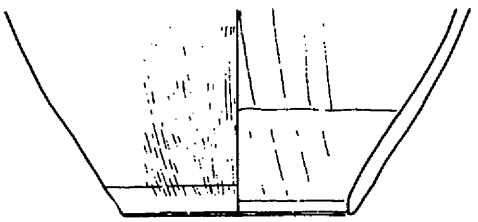
第220図　谷－Ｂ 古代～中世　出土遺物（11）



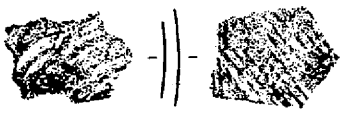
第221図　谷－B 古代～中世　出土遺物（12）



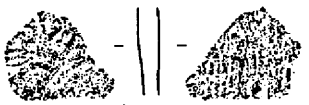
1539



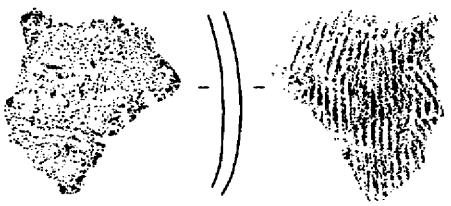
1540



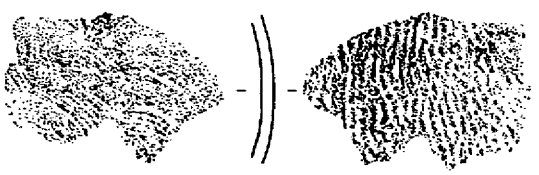
1541



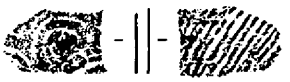
1542



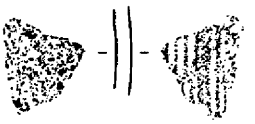
1543



1544

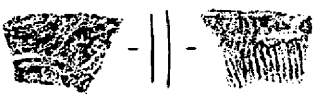


1545



1546

1547

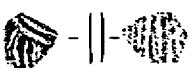


1548

1549

1550

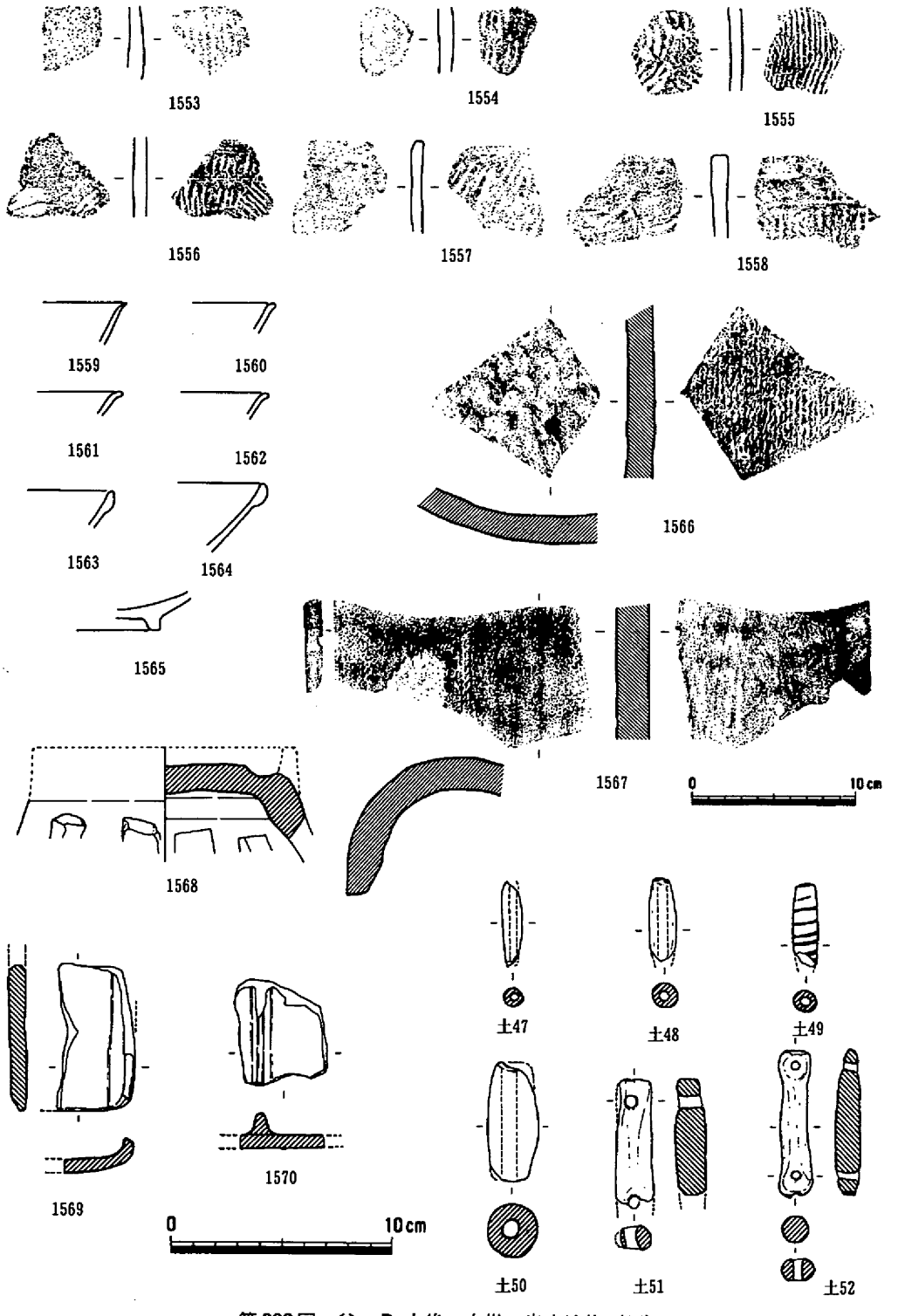
1551



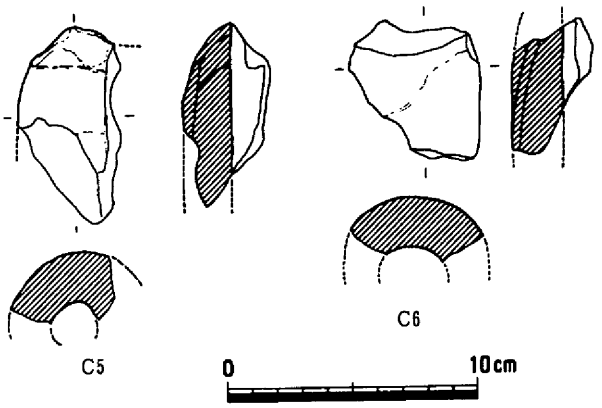
1552

0　10cm

第222図　谷－B 古代～中世　出土遺物（13）



第223図　谷－B 古代～中世　出土遺物（14）



第224図　谷－B 古代～中世　出土遺物（15）

土師器：1485は、丹塗のつまり付きの杯蓋である。1486も丹塗土器で、口縁部は短かく外反する。1487～1515の杯、皿は、1487～1502、1505～1508が丹塗土器である。1494の高台付皿は、口縁部ゆるく、外反し、端部内側に凹線をもつ。内面には、3帯の螺旋状の暗文が施されている。これらの内1488～1492、1510は、7世紀後半から8世紀初頭を中心に奈良時代前半まで含んでいる。1495、1497、1498の杯、1500、1501、1507、1515の皿は、いずれも10世紀中頃を中心とする時期で、他の杯、皿と同様である。なお、1509の皿は、口径もやや大きく、口縁部の立ち上がりも斜上方に伸びており9世紀末の特徴を示している。また、1514の皿、1519、1520の黒色土器の椀は、いずれも11世紀に入るものである。1516～1518の鉢（椀）は、内面をていねいなナデで仕上げており、丹塗土器の古相のものと同時期であろう。

高杯（1521～1529）は、1521～1523が丹塗土器である。1521～1523は、いわゆる面取りの高杯で、いずれもヘラケズリで9面に面取りをしている。1522、1523は、短脚のものである。1524、1525は、内湾して立ち上がる口縁部をもつ。脚部は、「ハ」の字に開き、屈曲して裾部を作る。以上の高杯は、7世紀後半～8世紀前半期に属する。

甕（1530～1538）は、多種の口縁部が認められた。当地域では、甕の編年的位置付けが十分でないため、個々の詳細な時期は明らかではないが、おおむね古代前半期を中心とするものである。1539は、把手付の鍋で、内面をヘラケズリで調整している。1540は甑である。

1541～1558は、谷－A出土の1311～1328と同様の、外面平行タタキ、内面同心円タタキを施す特徴的な土師器焼成の土器である。1541～1555は甕で、1556～1558はカマドと考えられる。

以上の土師器は、その主体が7世紀後半～8世紀前半期と10世紀代を中心に9世紀末－11世紀のものであった。このような状況は、須恵器と対応するものである。

緑釉：1559～1562は、口縁部が端部で短かく外反する椀である。その特徴は京都の緑釉窯の製品と類似する。

白磁：谷の上層から出土した。1563、1564は、玉縁の口縁部をもち、1565は玉縁の口縁でない碗に対応する高台である。12～13世紀と考えられる。

瓦：1566は平瓦、1567は丸瓦である。1566は、凸面に縄目、凹面にはオサエ、ナデが残る。1167は、凸面に縄目、凹面に布目が付く。

陶硯：1568は、円面硯で、10単位ぐらいの透しが入る。1569、1570は、風字硯で、1570には仕切りが付く。

土錘：土47～土50は管状土錘で、土49には螺旋状の沈線が入る。土51、土52は、棒状の両側に孔を入れており、さらに土52には片側の端面に抉が入っている。土51、土52は中層から出土した。

羽口：C5、C6は谷の中層から出土した。羽口はいずれも復元径約6cm程で、C5の端部は暗灰色、灰色に良く焼けている。

谷－C（第106、225～236図）

谷－Cについては、古墳時代の項で報告しているため、ここでは7世紀～中世の遺物について報告する。前述したように第106図では、第3～14層にあたり、第3層は鎌倉時代、第4層は平安～鎌倉時代、第6層が平安時代。第7～14層に奈良時代～平安時代の遺物が包含していた。谷－A、Bと同様に、一括して以下報告する。

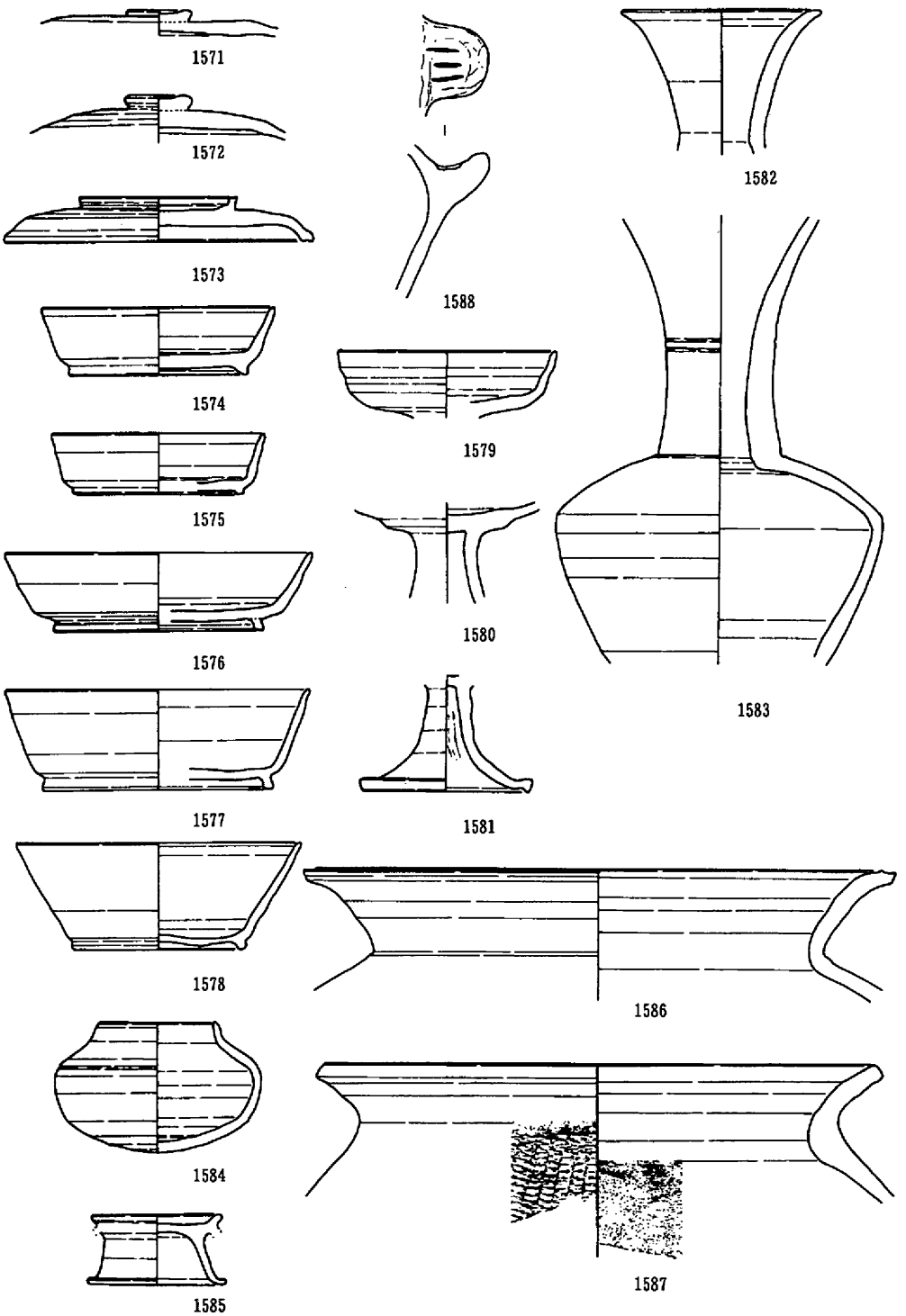
須恵器：谷－Cでは、谷－A、Bで多量の8世紀代の須恵器が出土したのに比べて非常に少なかった。

杯蓋（1571～1573）は、扁平で中央部が凹むつまみをもつ1571、1572、高台風の輪状のつまみの1573がある。前者は8世紀前半期、後者は県内では例は少なく口縁部の形態からみてやや新相のものと考えられる。1574～1578の高台付の杯身は、1576は径が大きく、底部から体部に内湾気味に丸味をもつ。1571、1572に対応すると考えられる。他はやや新相で、1578は凹凸の著しい底部、直線的に斜上方に立ち上がる口縁部などの特徴は9世紀末のものである。1582、1583の長頸壺は、外反する口縁部で、頸部に沈線をもつ。1584の短頸壺は、内傾する口縁部で、肩部下端に1条の沈線を廻らす。これらの壺も、8世紀前半期と考えられる。1585は、小型品で足高の脚部に皿状の杯部が付く。杯部外側には、垂れ下がりの突帯状のものが付くと思われる。時期は不明。甕の1587は、谷上層から出土したもので古代末～中世か。

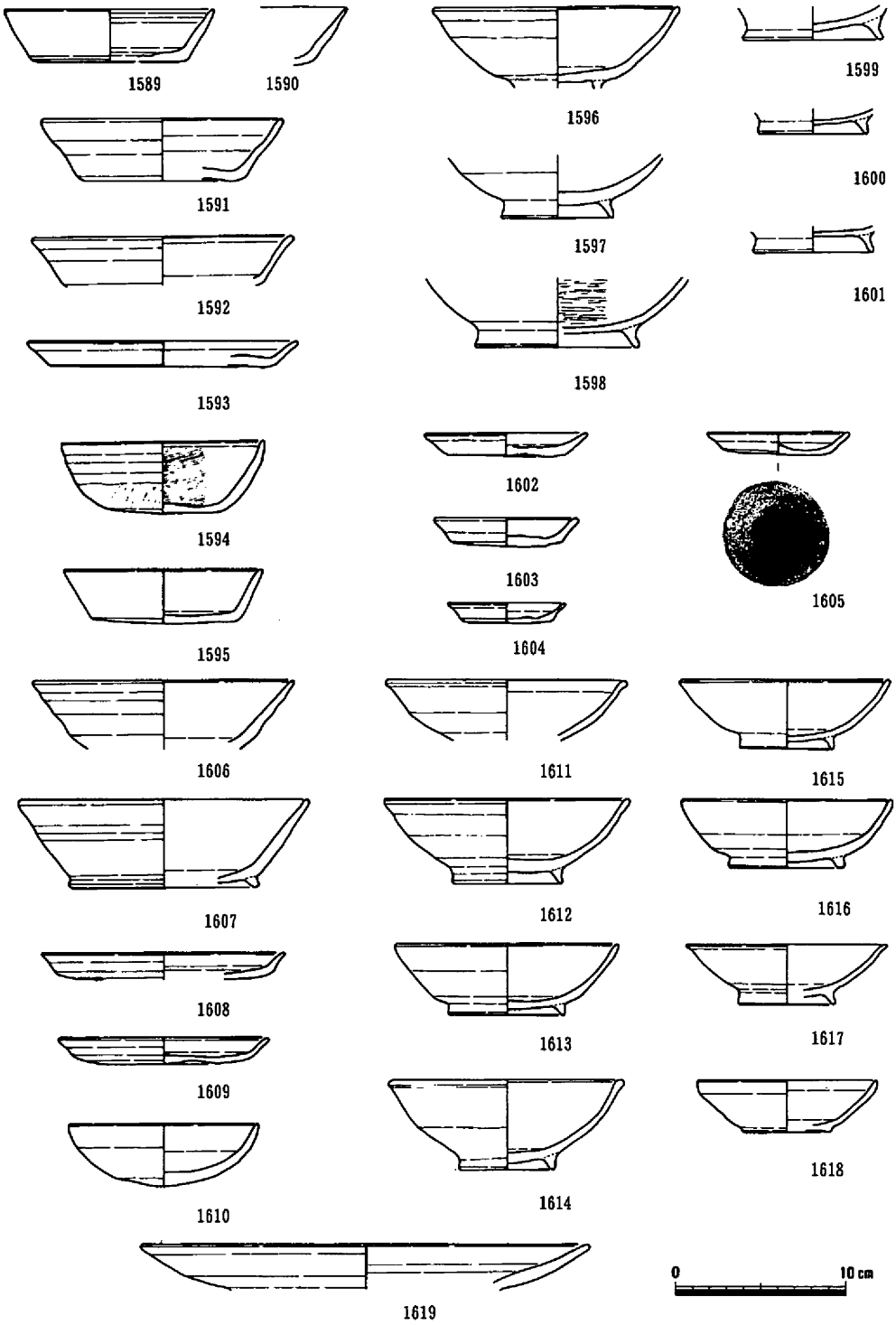
土師器：須恵器の出土状況と同様に、7世紀後半～8世紀前半期の土器は少なく、9世紀末から中世のものが大半を占めた。

1571、1572などの7世紀後半～8世紀初頭の時期の土師器としては、1594および1610が考えられる。1589、1595の杯は、いずれも新相で9世紀代のもので、1591、1593、1607はまだ後出的なもので9世紀末と考えられる。1590、1608は、10世紀中頃を中心とする時期の杯、皿である。また、1596～1601の黒色土器は、その特徴から10世紀後半に位置付けられよう。

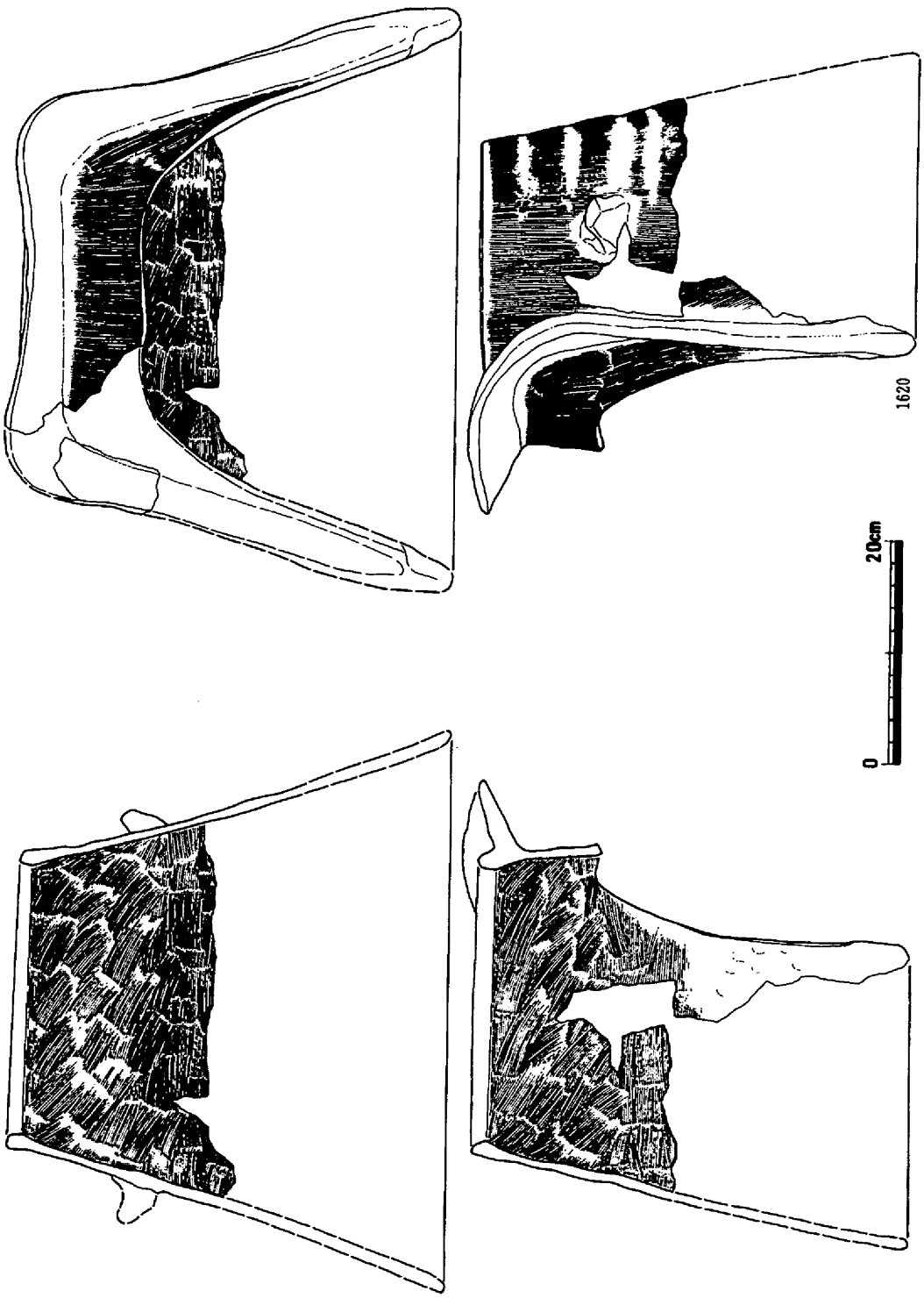
1611～1618は、いわゆる早島式土器と呼ばれる高台付の椀である。1602～1605は、早島式土



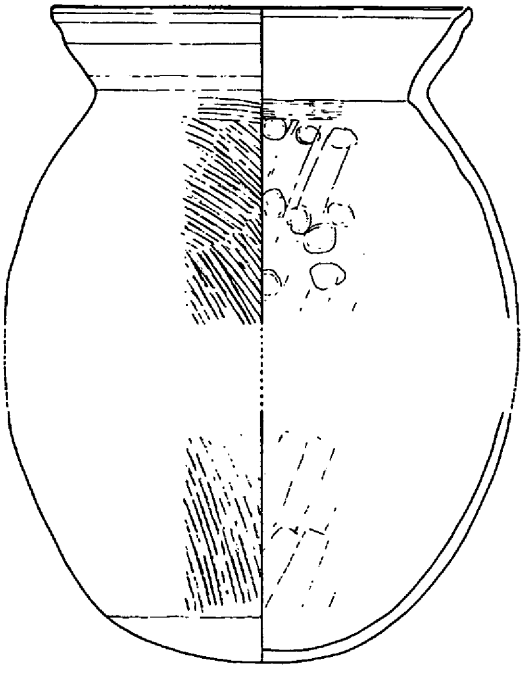
第225図　谷－Ｃ 古代～中世　出土遺物（1）



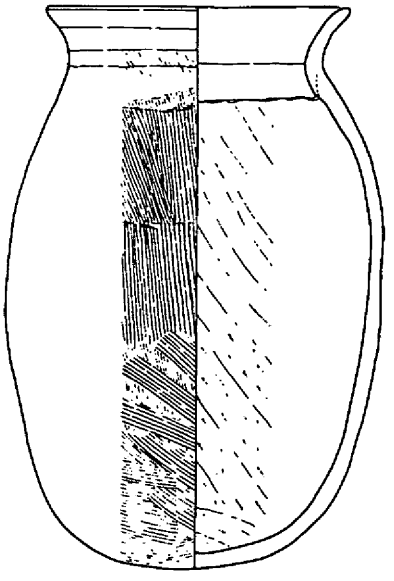
第226図　谷－C 古代～中世　出土遺物 (2)



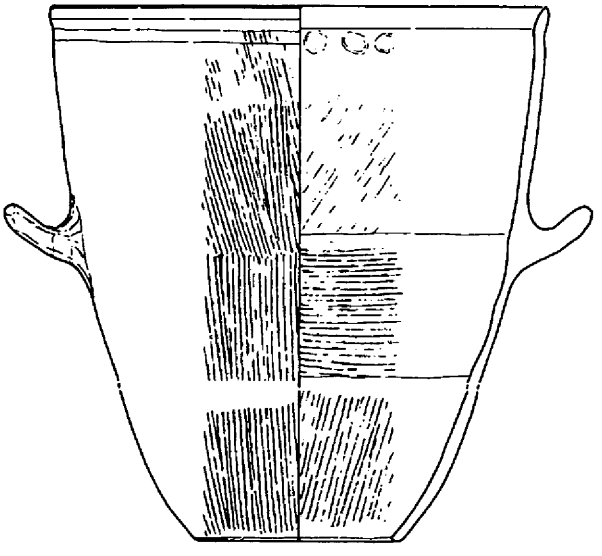
第227図　谷－C 古代～中世　出土遺物 (3)



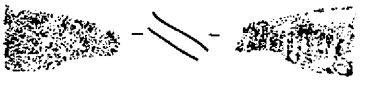
1621



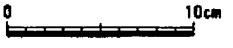
1622

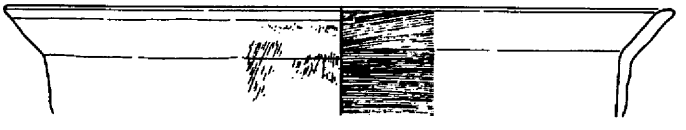


1623



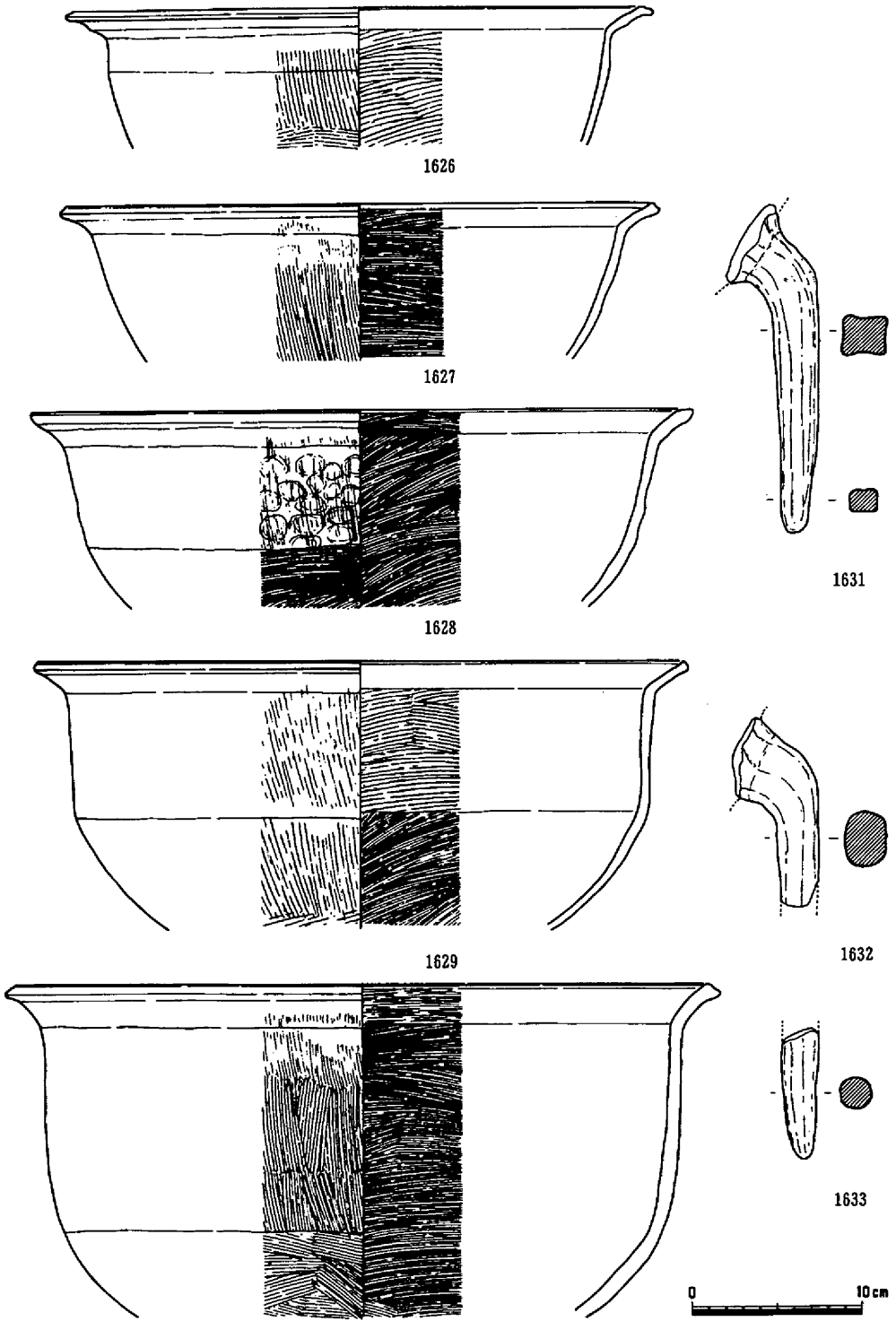
1624



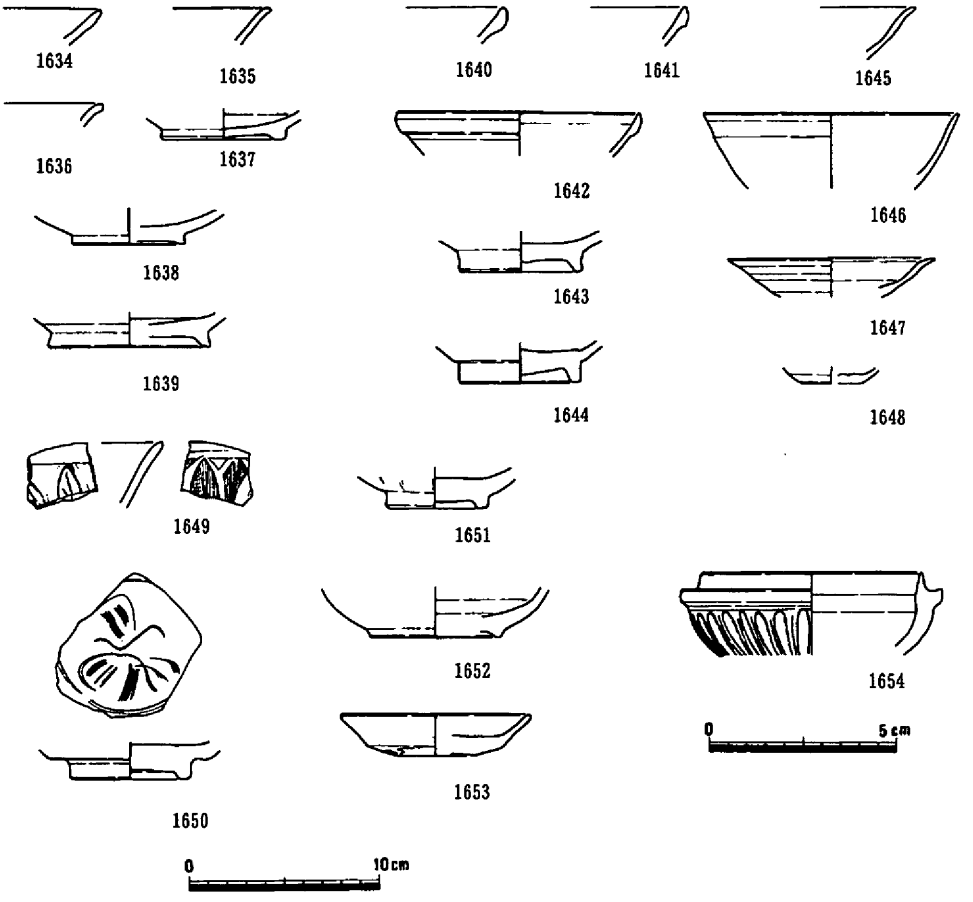


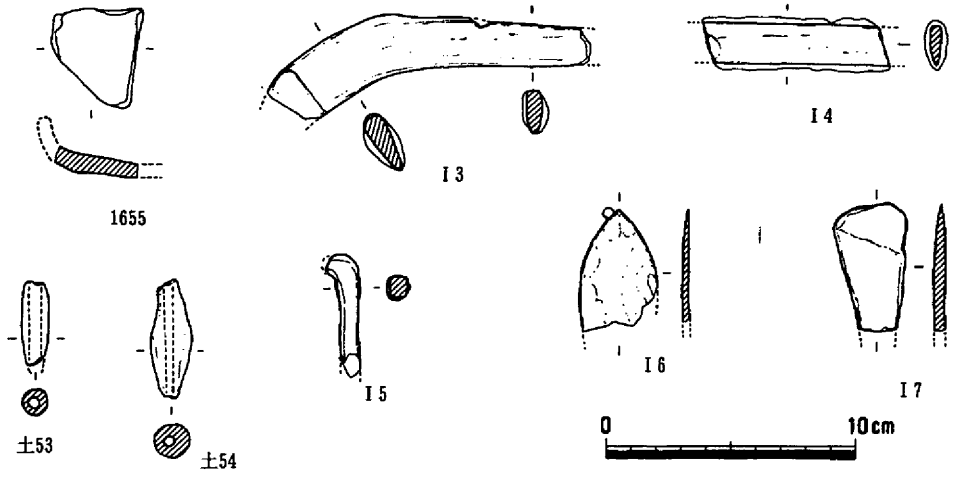
1625

第228図　谷－C 古代～中世　出土遺物 (4)

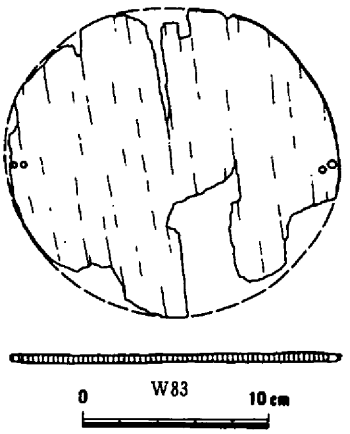


第229図　谷－C 古代～中世　出土遺物 (5)





第230図　谷－C 古代～中世　出土遺物 (6)



第231図　谷－C 古代～中世
出土遺物（7）

器の皿で、椀とセットになるものである。これらの土器は、鎌倉時代前半期のもので、1618の小型のものは新相である。カマドの1620は、口径26.2cm、底径47.7cm、器高40.1cmの大きなものである。カマドの前部には、幅約5cmの庇が付き、側面には把手が存在する。内外とも荒いハケメで調整している。第4層を中心に出土した。1621、1622は長胴甕で、外面は荒いハケメを施す。内面は、1621がハケメで、1622は上半がハケ状工具によるナデ、下半がヘラケズリで調整している。1622は、本来古墳時代の層から出土したものであるが、形態、調整等に理解できない点があり、この項での報告とした。1623は、把手付の甑で、1624は谷－A、Bで出土した特徴的な、内外面にタタキを施す甕である。

1625～1630は鍋（三足付）で、内外面ハケメで調整している。中には、荒いハケメと細いハケメを使い分けているものも認められた。1611～1618に伴うものであろう。

緑釉：1634～1639は谷の上層から検出された。口縁部は、斜上方に直線的伸びる1634と口縁端部で短かく外反する1635、1636がある。1637の内面には1条の沈線が廻る。1634～1638は、いずれも京都の緑釉窯で明らかになっている製品と類似する。1639は、高台端部に段をもつ特徴的なもので滋賀県での製品と酷似している。

白磁：1640～1642は玉縁の口縁部をもつ。1645、1646は反り縁の口縁部をもつ。1643、1644は、口縁部が玉縁でない碗に対応する。1647は口ハケの皿で、1648は小壺の底部である。1647は13世紀～14世紀中頃で、その他は12世紀～13世紀と考えられる。また1652は水注の底部で12世紀～14世紀中頃であろう。

青磁：1649は、外面に蓮花があり、内面には画花文を施す。1650は画施文、1651は鍋蓮花文が付く。1653の皿は、櫛描が付かない。また、1654は、青白磁の合子の身で、いずれも谷上層から検出された。

陶硯：1655は風字硯で、内面ともオサエ、ナデで仕上げている。使用痕が認められる。

土錘：土53、土54とも小型の管状土錘で、谷上層から出土した。

鉄器：Ⅰ3～Ⅰ7は谷上層から検出された。いずれも用途不明である。

木器：W83は、谷の古代～中世の層から出土した曲物の蓋である。曲物は、一部が欠損しているが長径17.8cm、短径16.3cmのやや楕円形で、長軸の両端には側板を結合するための2個1対の小孔が穿たれている。

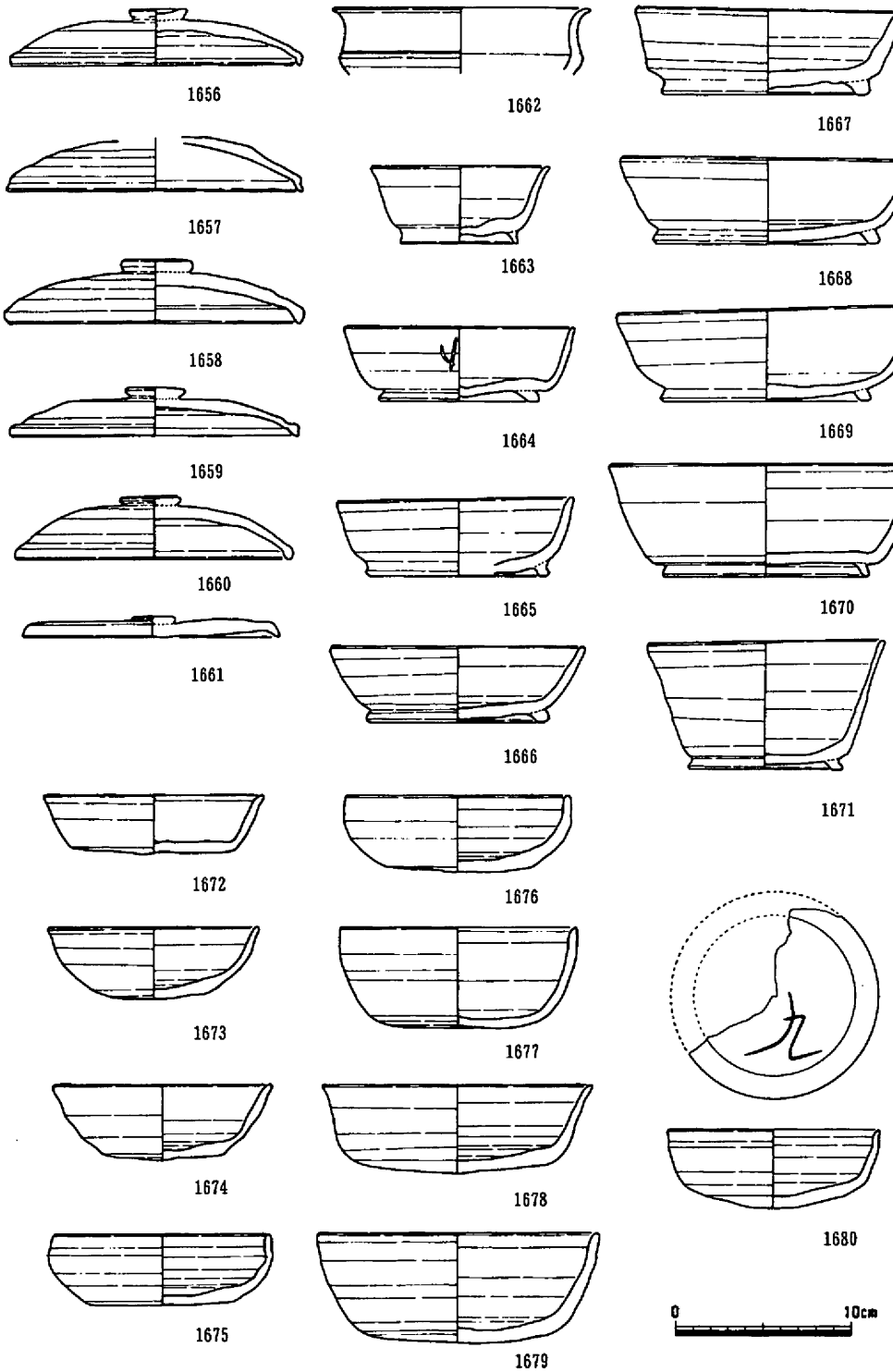
（8）包含層

前述したように、丘陵斜面、山裾部は後の大規模な削平を受けているため、遺構も残存状態が悪く、包含層も部分的にしか残っていなかった。このような状況のため、ここで報告する遺物は11、12区の低位部の各層から出土したものがその大半を占める。

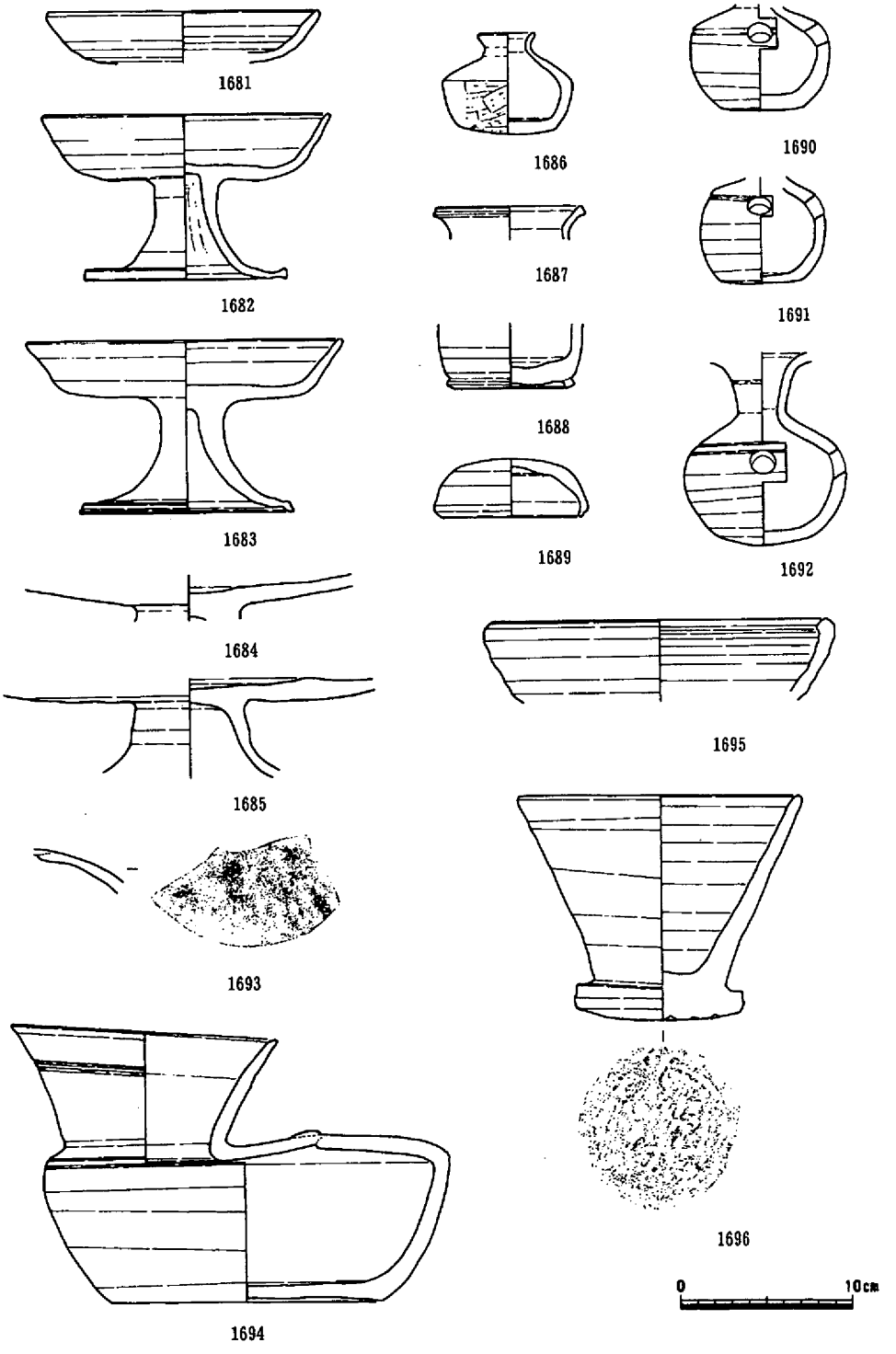
須恵器：1656～1660の杯蓋は、器高が比較的高く、口縁部も下方に屈曲されている。1661は、杯蓋としてでなく壺類の蓋としての器形であると考えられる。高台の付く1663～1671には、小型の1663や1664～1670の内湾しながら立ち上がる口縁部をもつものがある。これらは、7世紀後半～8世紀前半のものである。1664の外面体部には、「V」墨書が認められた。1671は、立ち上がりが長く、やや新相である。1672～1680の杯身は、口縁部形態が多種認められるが、いずれも7世紀後半～8世紀前半におさまるものである。1680の内面には、ヘラ描きで「九」の文字が記されていた。

高杯（1681～1683）は、杯部が浅くて、口径が大きい。1684、1685は、台付盤が高杯で、短かい脚部に口径の大きい杯部が付く。1686は、小壺で、体部下半を手持ちのヘラケズリで調整している。1689は、焼成、胎土とも良好で「寒風」窯の整品と酷似する。1690～1692の甕は、体部上半に1～2条の沈線が廻り、1690、1691は平底気味である。1693、1694の平瓶は、肩部がやや角張り気味で、大きめの口縁部をもつ（1694）。1693の外面体部にはヘラ描きの線刻が認められた。1676のこね鉢は、斜上方に直線的に立ち上がる口縁部をもつ。

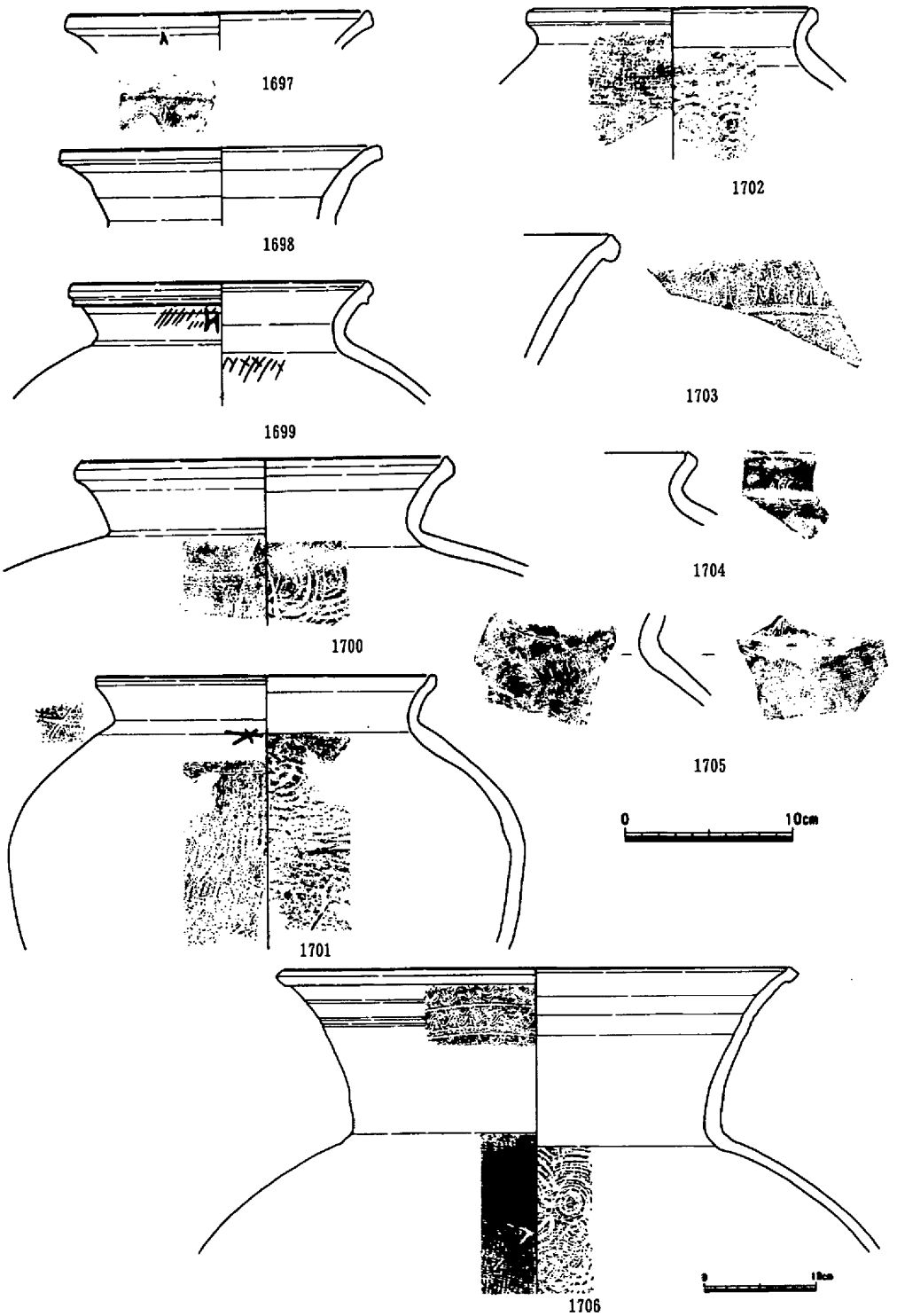
1697～1706の甕には、7世紀代のものも含み、1703、1706には口縁部外面には波状文の施文がほどこされていた。ヘラ描きの記号の付くものも多く、口頸部に付く。1697は「∧」、1699は「N」の逆N字で、1701、1705にも認められた。1707の横瓶は、頸部直上に1条の沈線を廻らしている。甑の1708、1709は、体部下半をヘラケズリで調整され、1708の内面はハケ状工具によるナデが施されていた。1710～1715は、内面の同心円タタキ中央部に特徴的な線刻を施すものである。1710～1712、1715は、同一個体と考えられ同心円中央に「☆」の星形の線刻が入っている。1713は、「十」の字が入る。1714は、1468～1474と同一個体であり、古代後半期のものである。1716、1717は、把手付の鍋で、内外面にタタキ痕が残っている（1716）。1717は、谷－C出土の1588と同一個体と考えられる。把手部の上部に、ヘラ先により3本の平行する溝を切り込んでいる。1719の双耳付の短頸壺は、底部は上げ底で、内湾してゆるく立ち上がり、頸部で角度をかえて、短かく内傾して立ち上がる口縁部をもつ。口縁部外面は、ハケ状工具による調整ののちヨコナデ、内面には粘土紐痕が残る。把手外側は、ヘラケズリにより面を整えている。この1719は、本来溝－1からの出土品である。しかし、形態、調整などに理解できない点があり、あえてここで報告するものである。



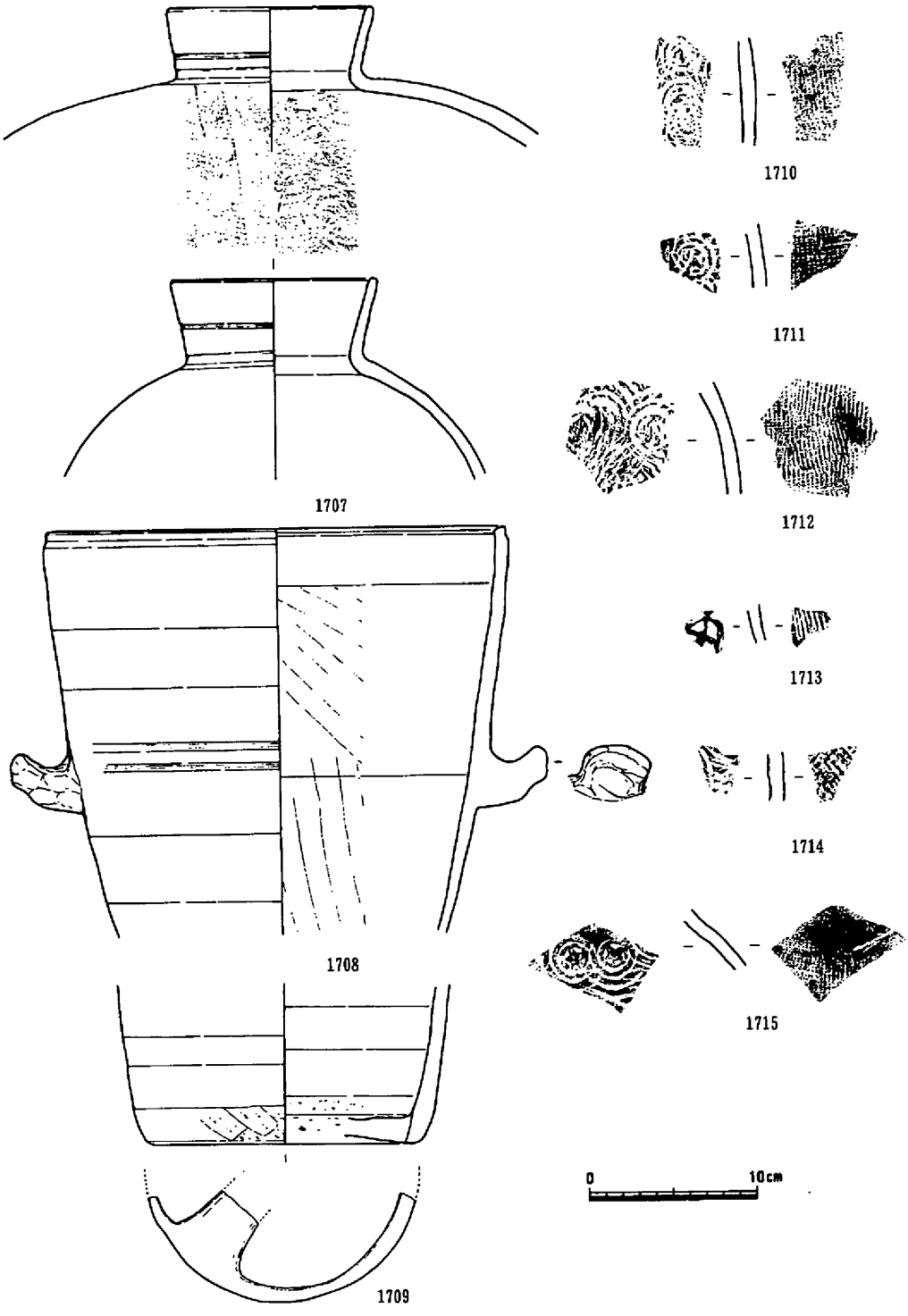
第232図　包含層　古代～中世　出土遺物（1）



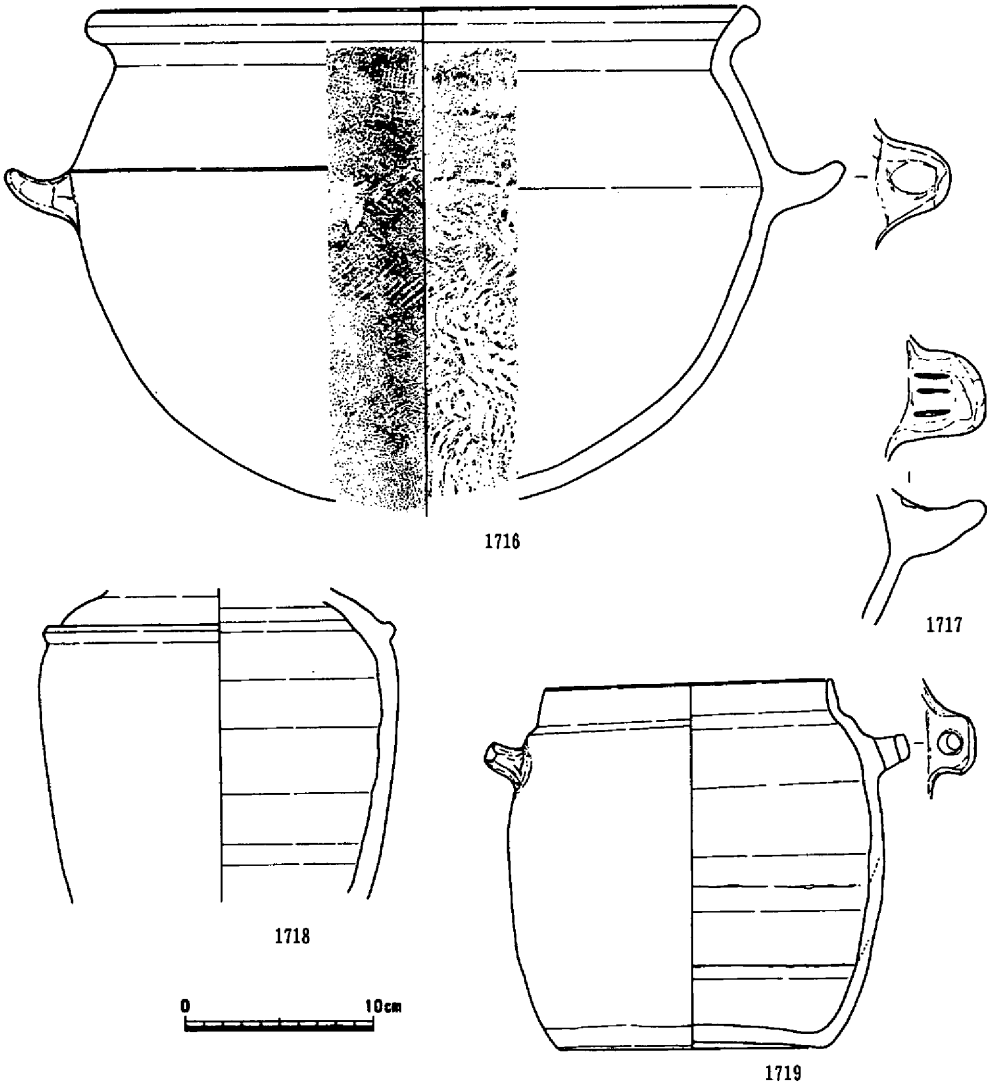
第233図　包含層　古代～中世　出土遺物（2）



第234図　包含層　古代～中世　出土遺物（3）



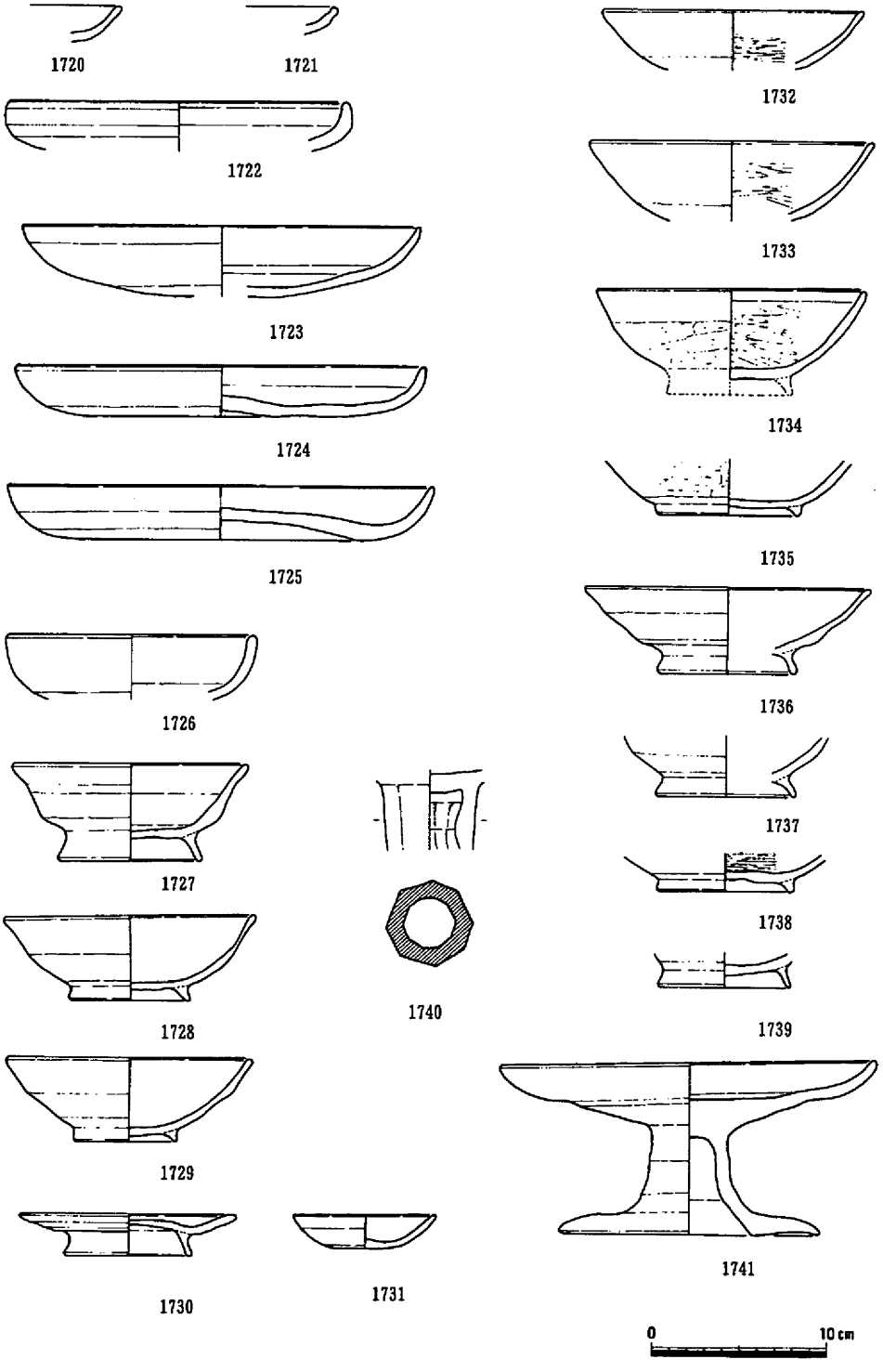
第235図　包含層　古代～中世　出土遺物（4）



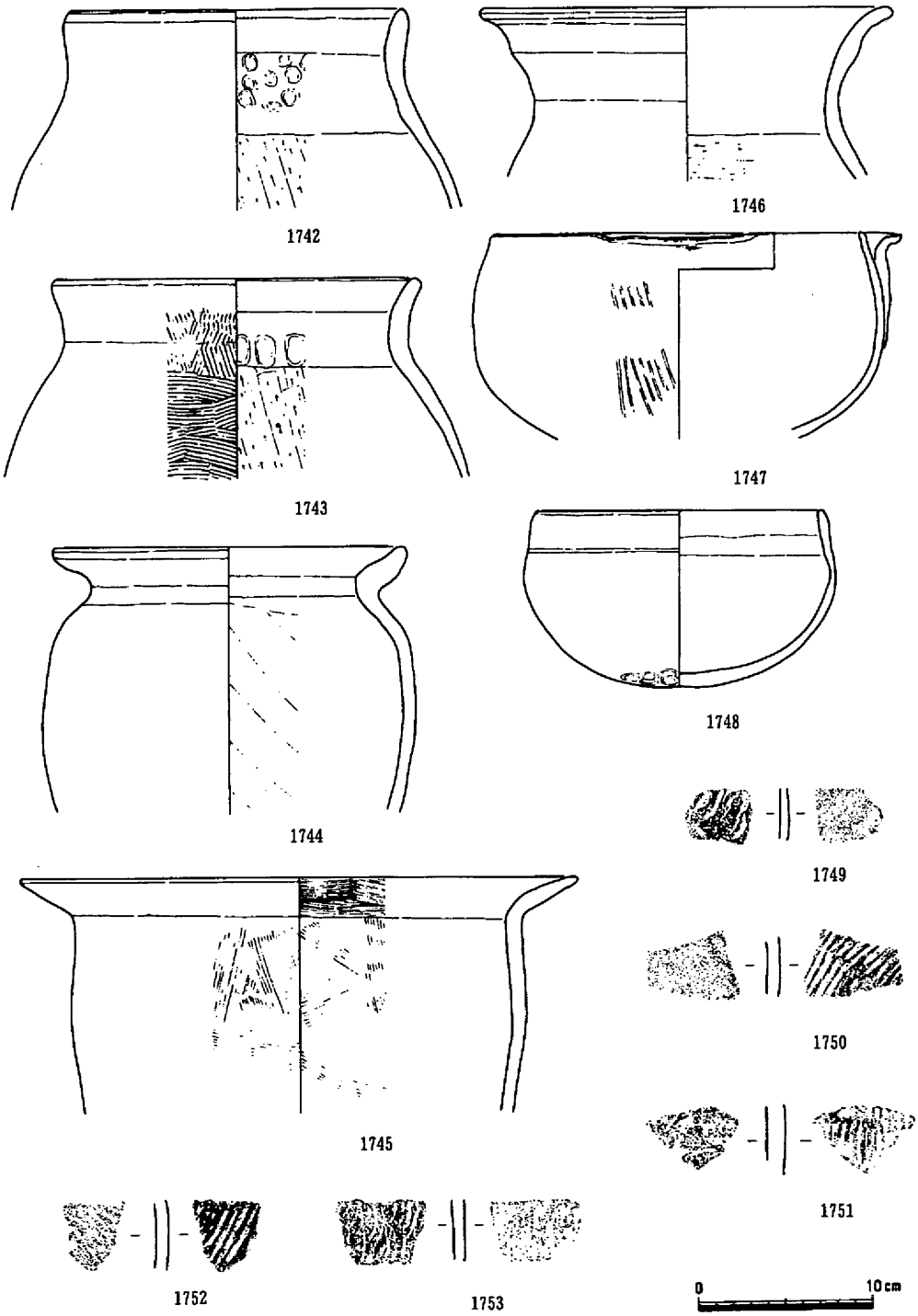
第236図　包含層　古代～中世　出土遺物（5）

土師器：1720、1721は、丹塗の皿である。1722～1725はやや径の大きい皿で、8世紀前半期と考えられる。1727、1736は、やや高めの高台をもち、体部から外反する口縁部で、1730の台付皿と同様に11世紀初頭の特徴を示す。1732～1734、1737～1739の黒色土器も同時期のものであろう。1728、1729は、早島式土器の椀で鎌倉時代前半のものである。

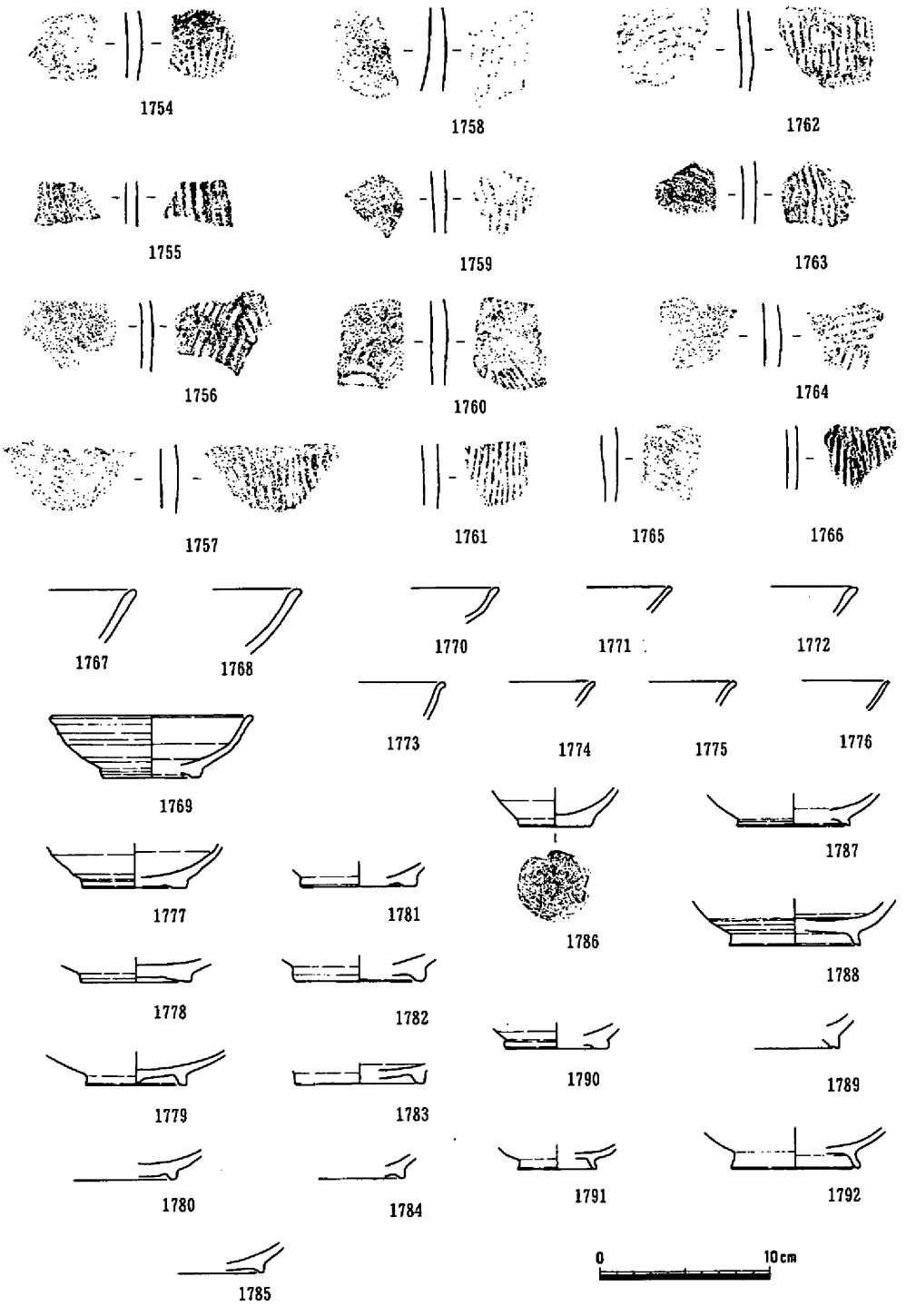
1740の高杯は、脚柱部を8面に面取りをしている。1741は、皿状の杯部をもち、1740と同様に8世紀前半期であろう。1742～1746の甕は、ゆるく外反する口縁部をもつものと「く」の字に屈曲する口縁部がある。1747、1748の鉢は、口縁部は内傾しており、1747には片口が付く。1749～1766は、谷－A、Bで多く認められた内外面にタタキを有する土師器である。



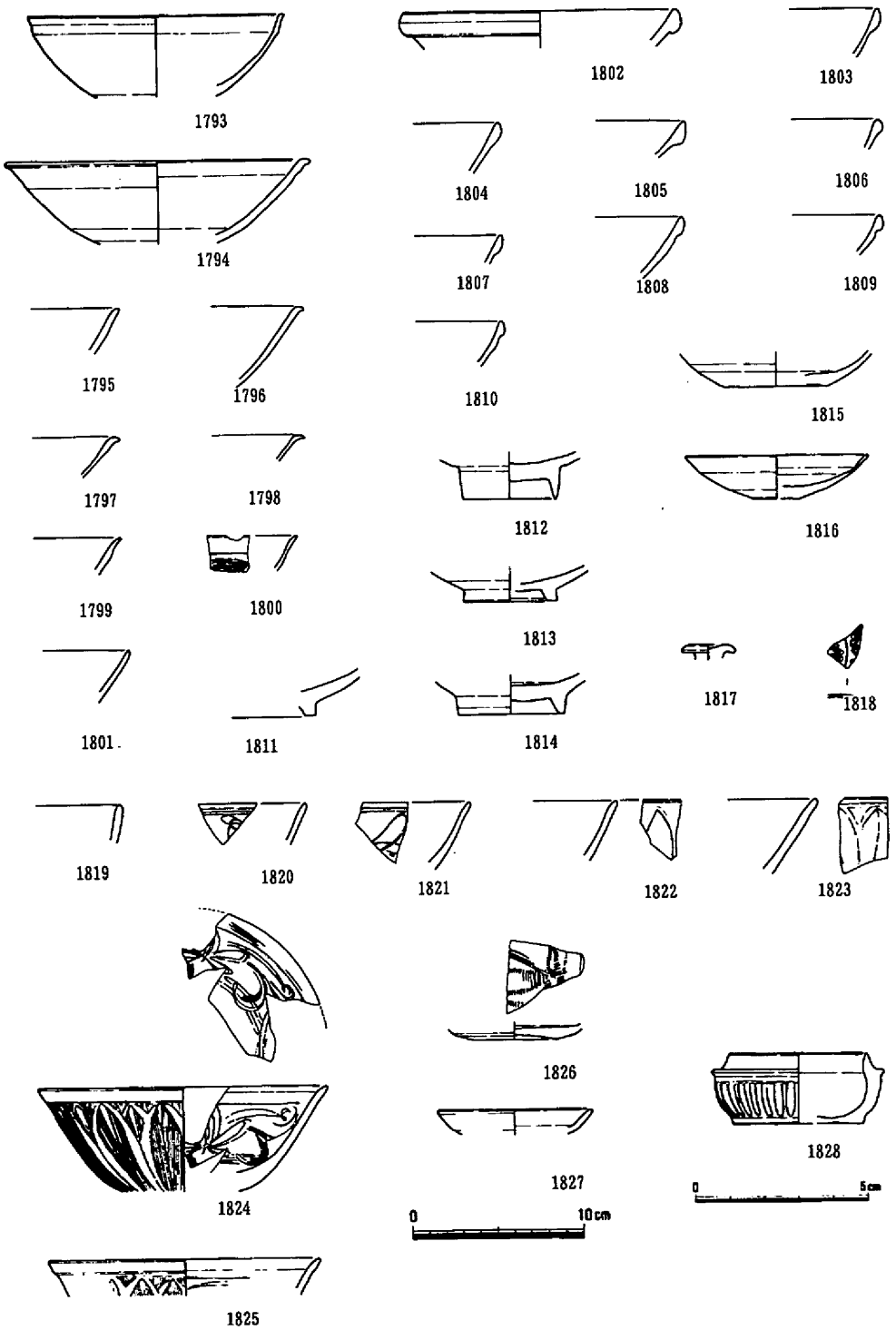
第237図　包含層　古代～中世　出土遺物 (6)



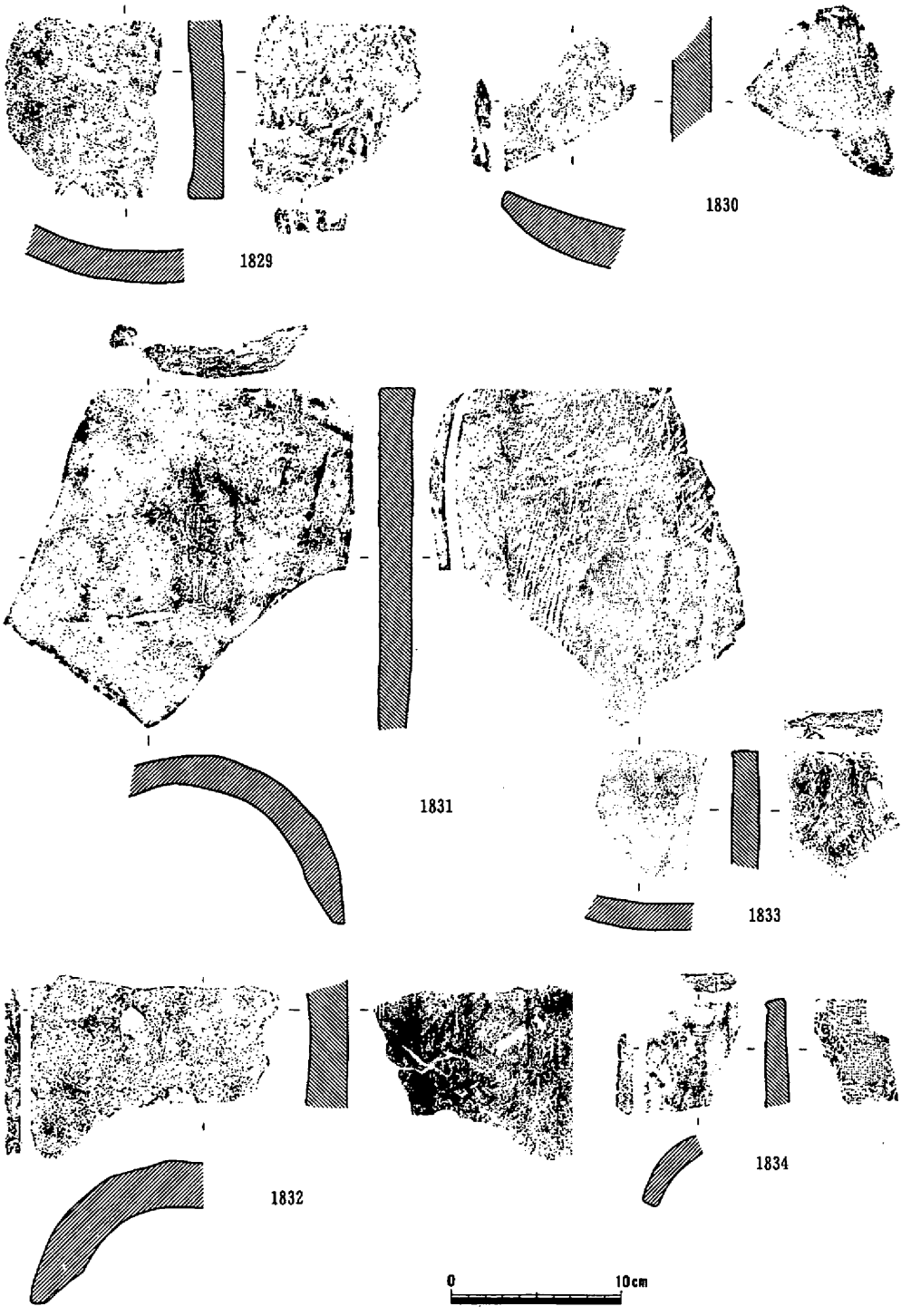
第238図　包含層　古代～中世　出土遺物（7）



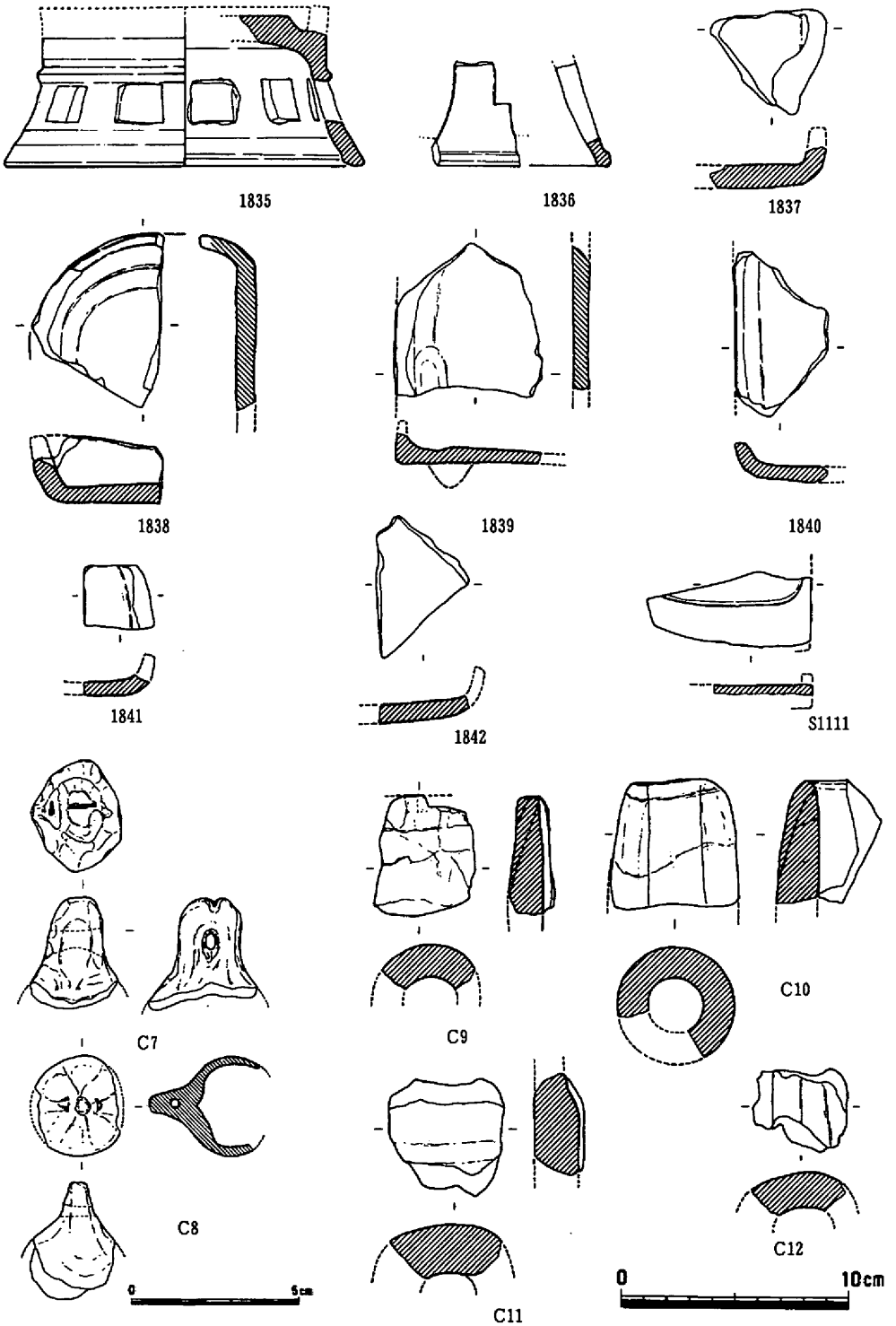
第239図　包含層　古代～中世　出土遺物（8）



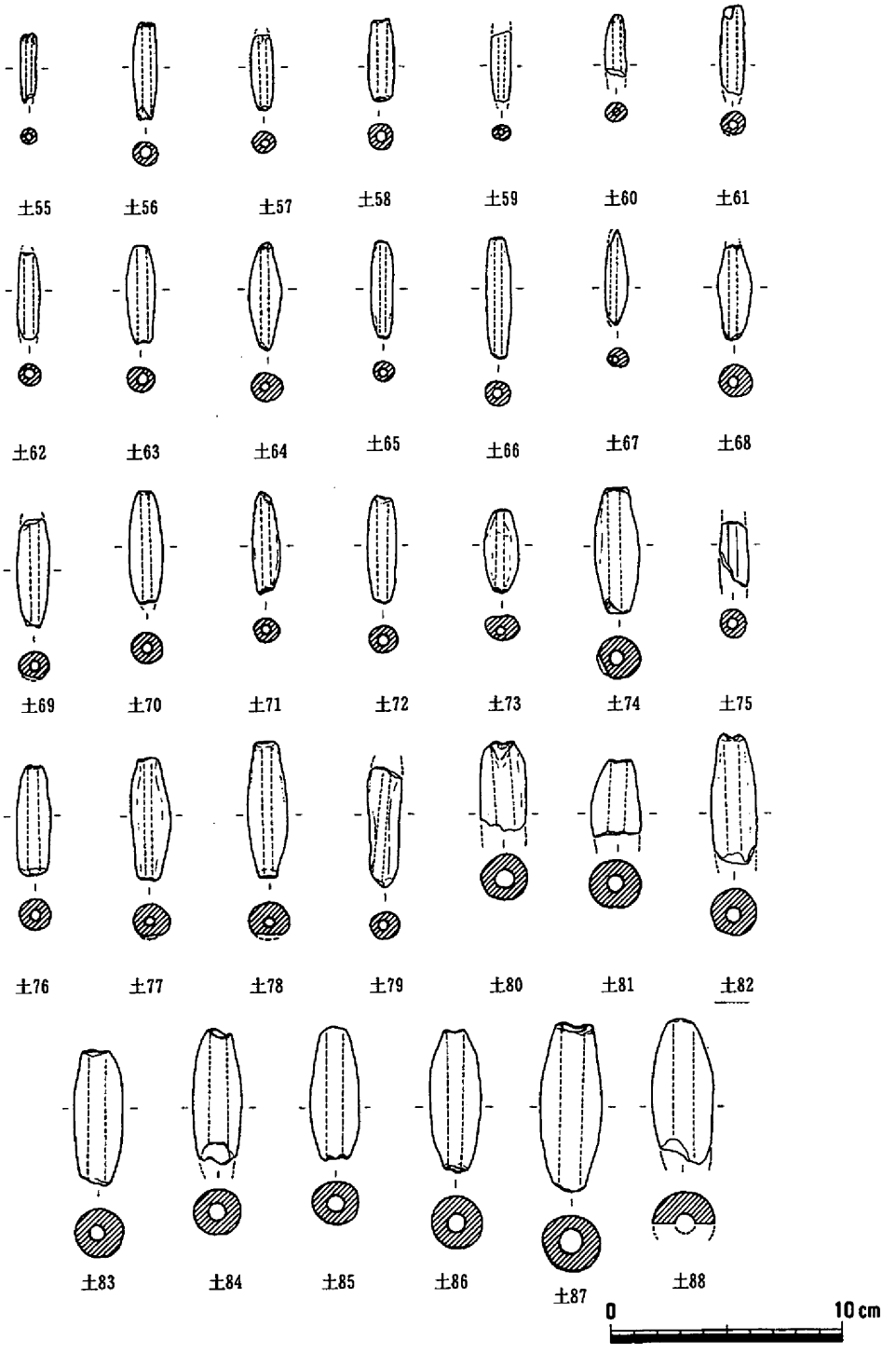
第240図　包含層　古代～中世　出土遺物（9）



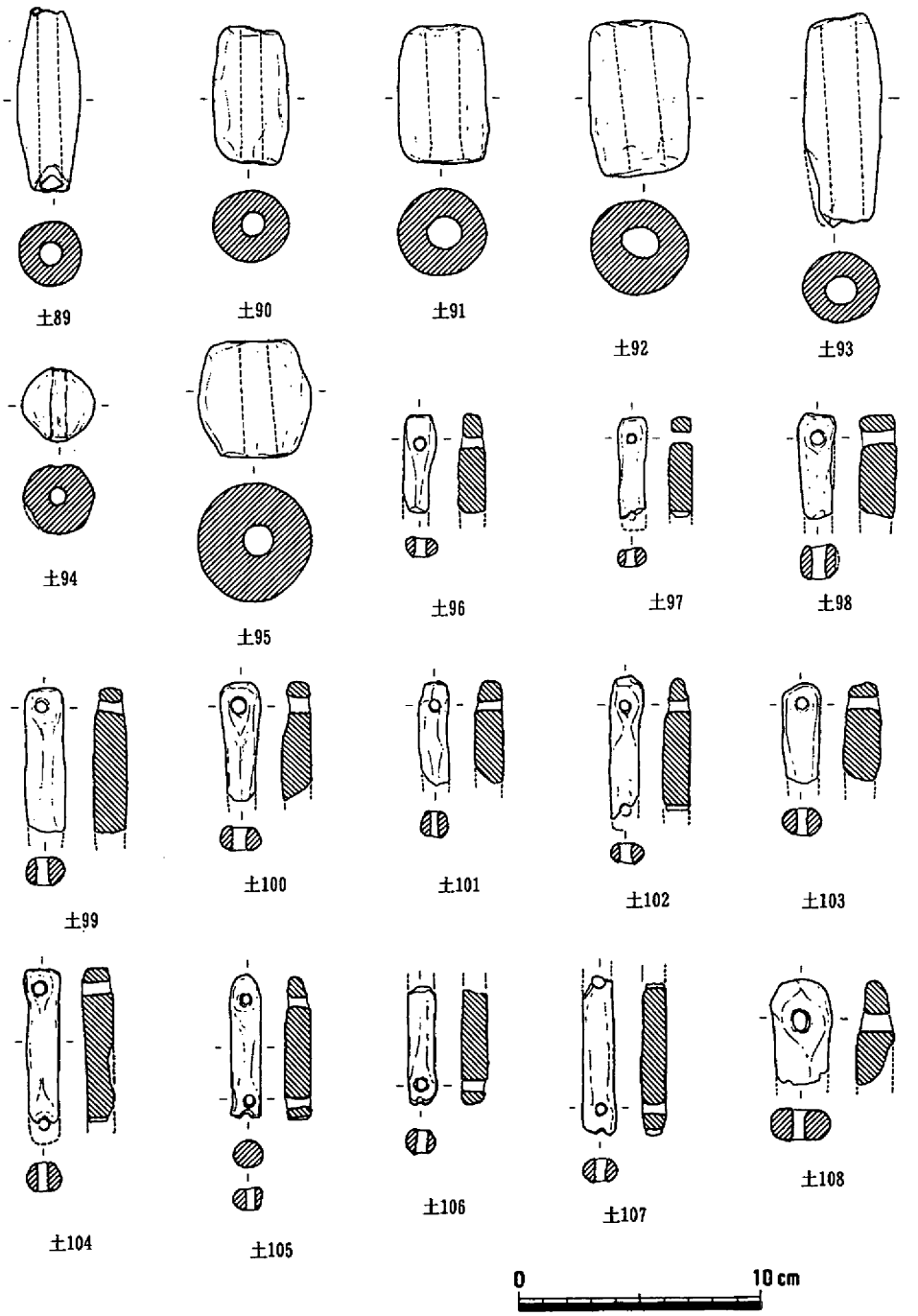
第241図　包含層　古代～中世　出土遺物（10）



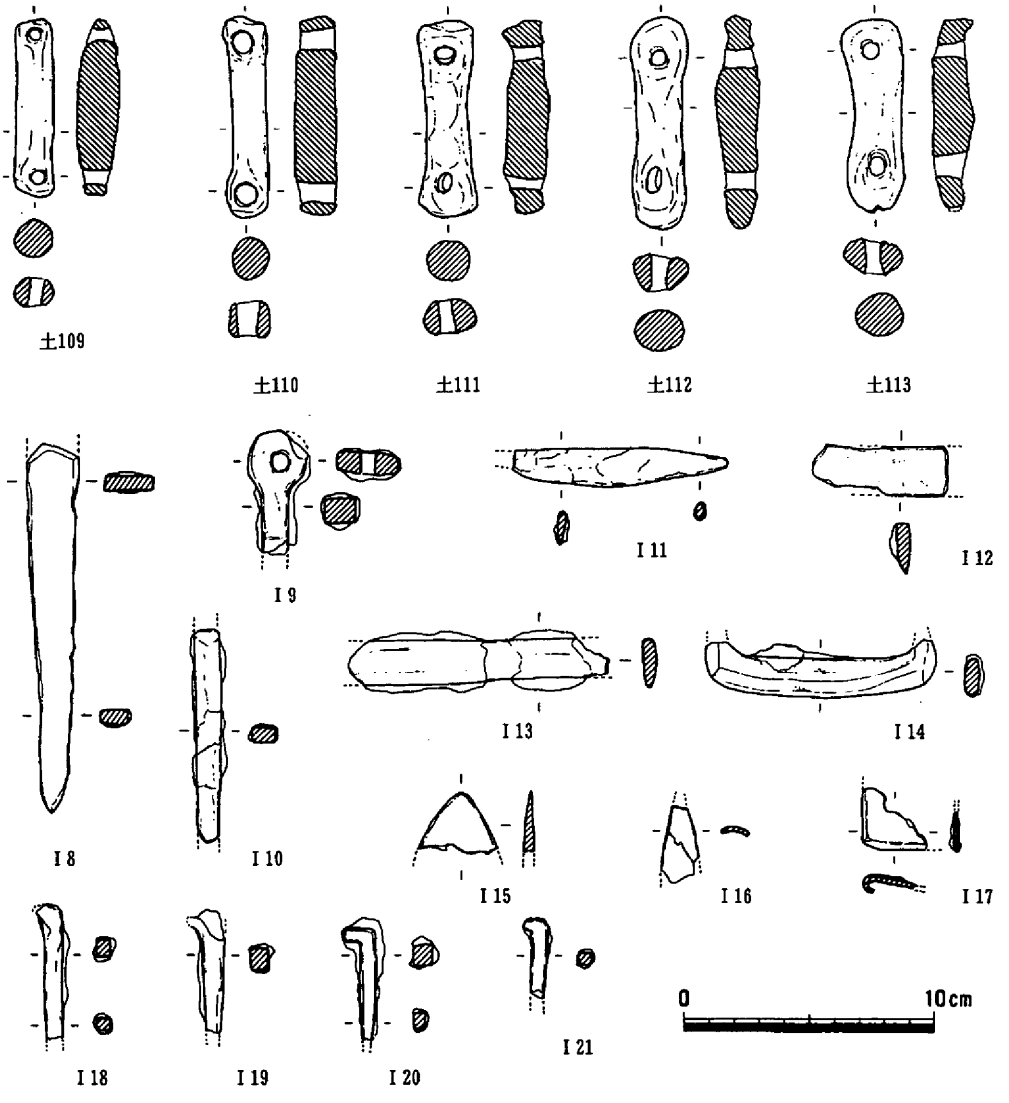
第242図　包含層　古代～中世　出土遺物（11）



第243図　包含層　古代～中世　出土遺物（12）



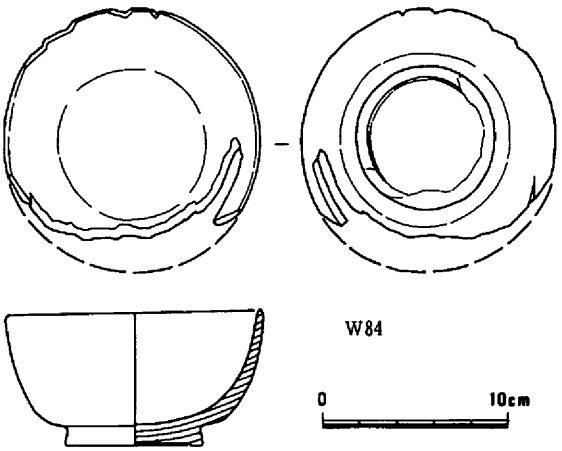
第244図　包含層　古代～中世　出土遺物（13）



第245図　包含層　古代～中世　出土遺物（14）

緑釉：1767～1792は、椀と皿の判別ができないものもある。口縁部は、端部で短く外反するものが多い。1786の糸切底を除くと、高台を成すものが大半である。1788、1789は、高台端部に段が付き滋賀県産のものと類似する。1791、1792は、高台は「ハ」の字に開き、細くて端部を丸くおさめており、美濃での生産緑釉と類似する。

白磁：1795は、口縁部を丸くおさめており、1793、1794、1796～1800は、反り縁の口縁部をもつ。1801は、口縁端部を上方につまみ出している。1802～1810は、玉縁の口縁部をもつ。1811～1814の高台は、玉縁でない椀に対応する。1815、1816は皿で、1815は内面に沈線が廻る。



第246図　包含層　古代～中世　出土遺物（15）

1817は、小壺の蓋と思われる。1818は、上物の合子の蓋で、花文を施しており、12～14世紀のものと考えられる。1793～1817はいずれも12～13世紀である。

青磁：1819は、明代の15～16世紀前半の椀である。1820～1823は、龍泉窯系の碗で、1820、1821は内面に画花文、1822、1823は外面に鎬蓮華文を施す。1824、1825の碗は、外面に蓮弁が有り、内面に画花文を施文している。1826、1827、の皿は、同安窯系のもので、1826には櫛描を施す。1828は青白磁の合子の身である。1820～1828はいずれも12～13世紀と考えられる。

瓦：1829、1830、1833は平瓦で、1829の凸面には荒い平行タタキが付く。1831、1832、1834は丸瓦で、凸面に面取り痕が残り、ナデで仕上げ、凹面は布目痕を残している。

硯：1835～1842は陶硯、石Sは、石製の硯である。1835、1836は円面硯で、1835は方形、1836は丁形の透しが入る。1838～1842は風字硯で、1838、1839はていねいにつくっている。

土鈴：C7の土鈴はやや大型のもので、鈕の上端に切り込みを入れている。12区の古代～中世の包含層中から出土した。C8は、やや小型で、内面にしぼり痕を残している近代か。8区の上層から検出された。

羽口：C9～C12の羽口は、11、12区の古代の堆積層から検出され、他に6個の破片がある。羽口には、復元径が5.5 ～6.0 cmで、中の孔の径は約2.5 cmを測る。C10の端部は、よく火を受けており淡灰色の還元化されていた。

土錘：土55～土108は各調査区から出土したものである。その大半は、管状の土錘で、球形のものに外側片面に溝を有する土94などがある。さらに、土96～土108は棒状の両側に孔をもつ。その中には、片側の端面に抉りが入るものもある。　（中野）

第4章　西坂古墳

第1節　調査の概要

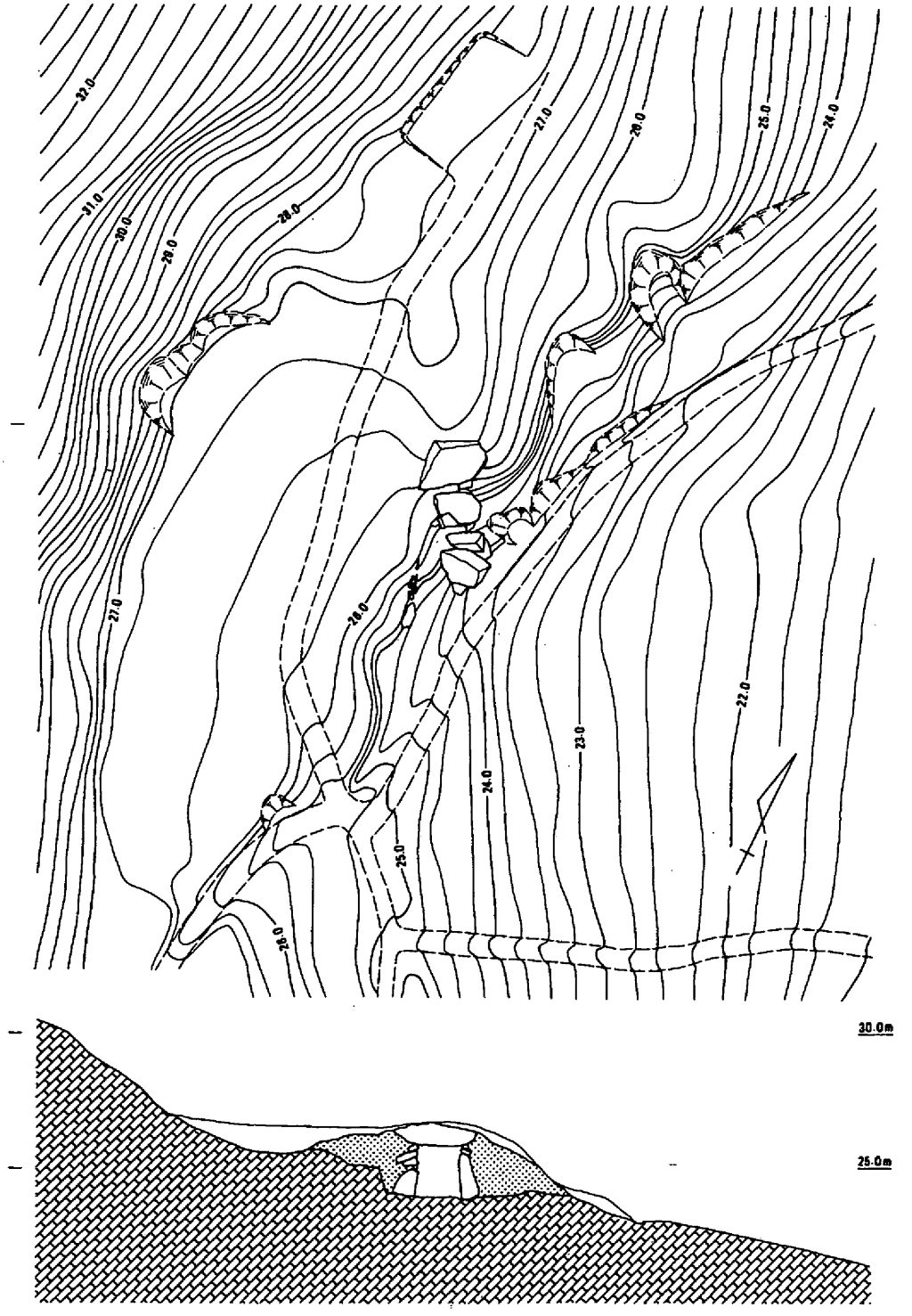
（1）古墳の概要

西坂古墳は、倉敷市西坂字入道山の丘陵東斜面を利用して築かれた、南北17m、東西14m、高さ 2.5mのややいびつな形をした円墳である。主体部は南に開口する片袖式の横穴式石室で、全長は 9.3mを測る。玄室は長さ5.35m、幅1.75m、高さ 1.7mの長方形で、奥壁には一枚石を立て、側壁は石材を3段に積んで構築している。羨道は長さ 2.9m、幅 1.6mで、玄室と同様に3段積みで構築している。玄室と羨道の間には、左側壁に幅1mの石を建てて玄門としている。天井には3～5 tの石材を5枚構架していた。床はほぼ水平で、玄室の奥側には平石を敷いている。石室や前庭部などから土師器（椀・高杯）、須恵器（平瓶・𤭯・甕）、鉄器（鏃・鉸具）が出土しており、7世紀初頭の築造と思われる。

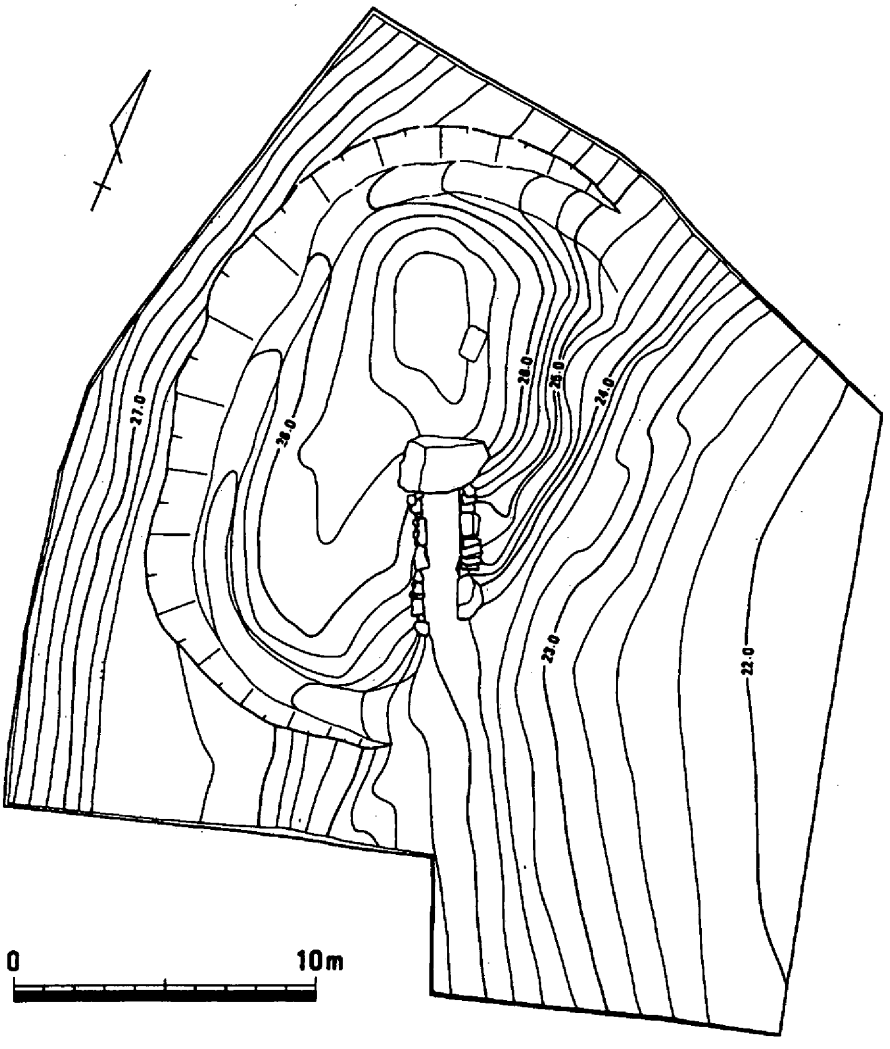
また石室内には後世に再利用されており、古代～近世にわたる遺物が出土している。さらに開口部や墳丘上からは、骨蔵器や木棺を納めた中世の墳墓を検出した。

（2）立地

西坂古墳は、標高83mあまりの山頂から北へ延びる丘陵の東斜面に位置している。南側には東に向かって丘陵が張り出しており、その南斜面には2基の古墳が存在する。また北側に連なる丘陵の南斜面にも10基ほどの古墳が群集する。しかしこの付近には、現在までほかに古墳の存在は知られておらず、単独の立地となっている。古墳の位置する場所は、山頂からつづく急峻な斜面がやや傾斜をかえて緩やかにくだり始める部分にあたり、標高は26mである。古墳の前面には浅い谷が広がっており、この部分から南東へ傾斜し始める。西側の斜面は、古墳の築造によって傾斜を変えており、地形を大幅に取りこんで築造されたことがうかがわれる。調査の時点で、古墳の上部は削平され、幅20mほどの平坦面が造成されており、その一部は墓地として利用されていた。また南東部は南北に走る小径によって削りとられ、高さ1mほどの崖をなしている。石室の前方も封土を失い、露出した天井石の一部は転落していた。石室の内部は土砂が厚く堆積し、わずかな空間を残すのみであった。



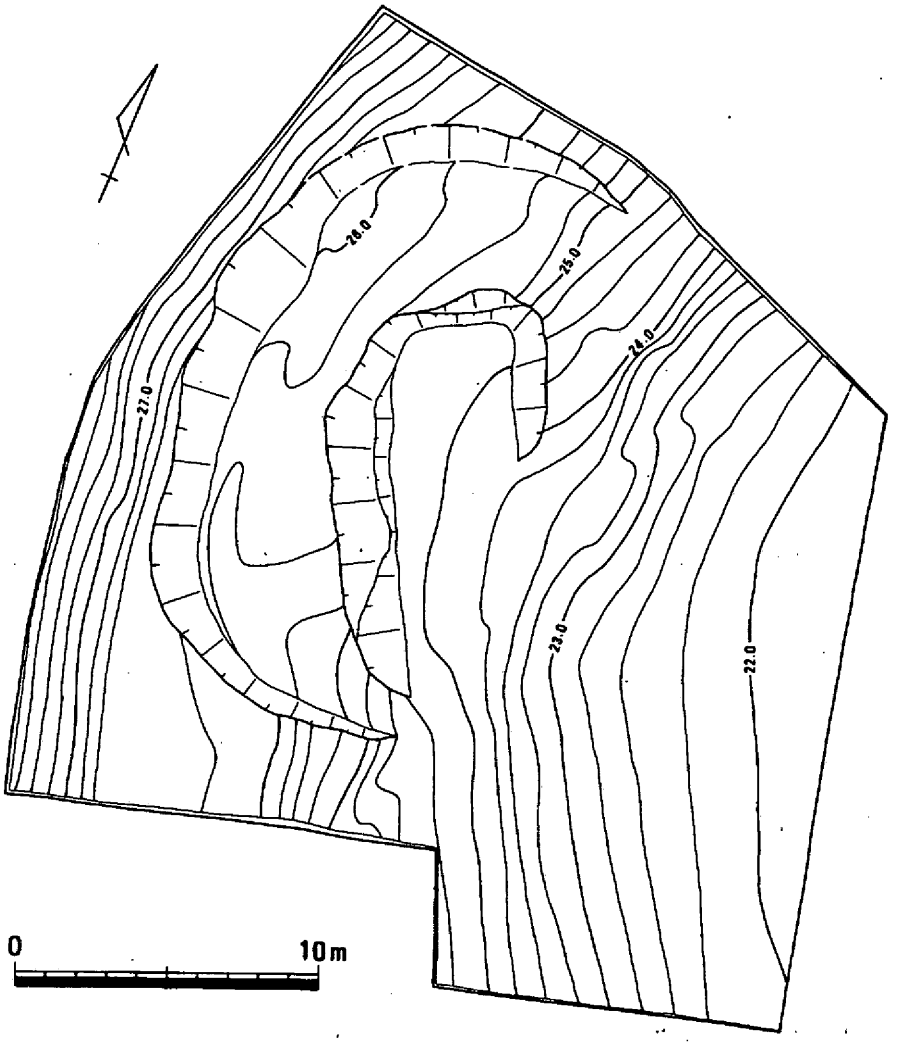
第247図　周辺測量図（1／500）



第248図　墳丘測量図（1／250）

（3）墓壙

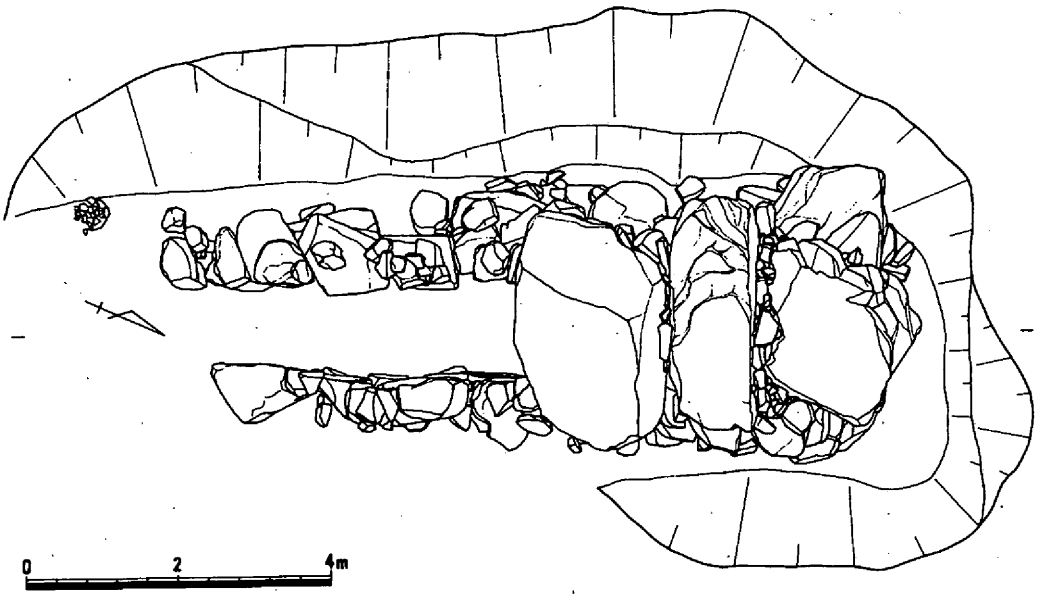
石室を納める墓壙は、掘り方上面で南北13.5m、東西 7.3mのコ字形をなす。浅い谷頭に面しているためか、東南方向は開放した形となっている。深さは尾根に近い西側で 0.9m、北側で1.25mを測り、西側ではやや緩やかに17°の傾斜をもって、北側では 5°とやや急な傾斜で掘りこまれている。墓壙底面の規模は、南北12.4m、東西 3.9mで、面積は48㎡ほどある。底面はほぼ水平に整えられ、構築する石室の根石にあわせて据え方を掘りこんでいる。据え方は全体として墓壙底面の西側にやや偏って掘りこまれているが、これは石材の搬入に都合がよく、



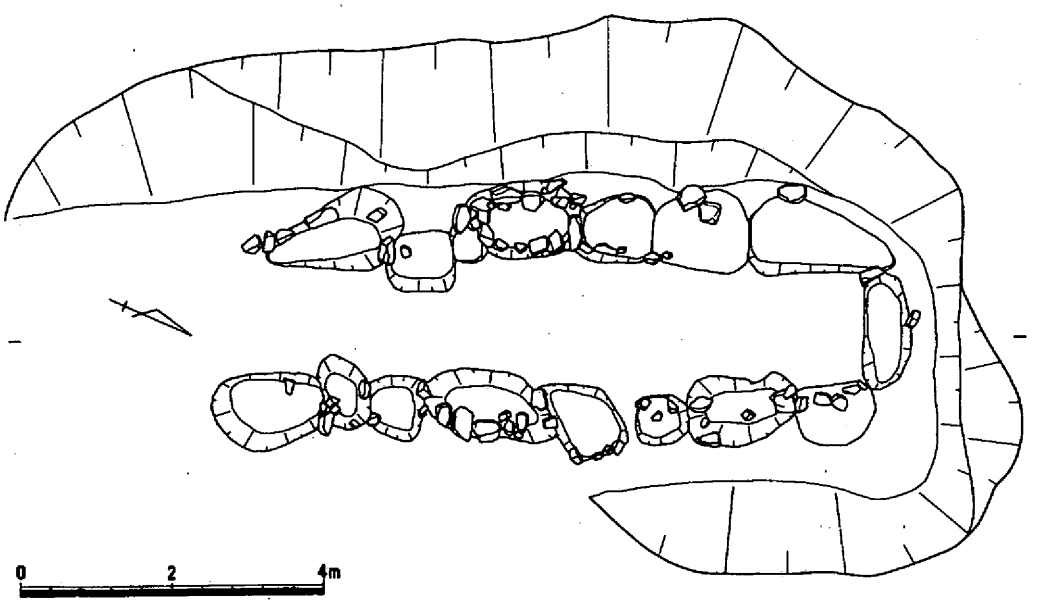
第249図　墳丘下地形測量図（1／250）

墓壙壁の高い西側に石室を寄せることで簡便に石材を積み上げることができたことによるものと思われる。また墓壙の開放する東側では、広範にわたって盛土を行いながら石室を構築する必要があり、そのために広い空間が求められたとも考えられる。

据え方はそれぞれ石材の形や規模によって異なるが、おおむね長さ１～ 1.5m、幅１mの楕円形をなし、石材の形状にあわせて深さを調整し、広口面が垂直となるように小形の石を底にあてがっている。なかでも開口部東側の石材の据え方は最も深く、南東に傾斜する地形に対応するものと思われる。この墓壙の掘削によって得られる土量は約50㎥ほどで、推定される盛り土量の約３分の１あまりとなる。



第250図　石室上面図（1／100）



第251図　墓壙平面図（1／100）

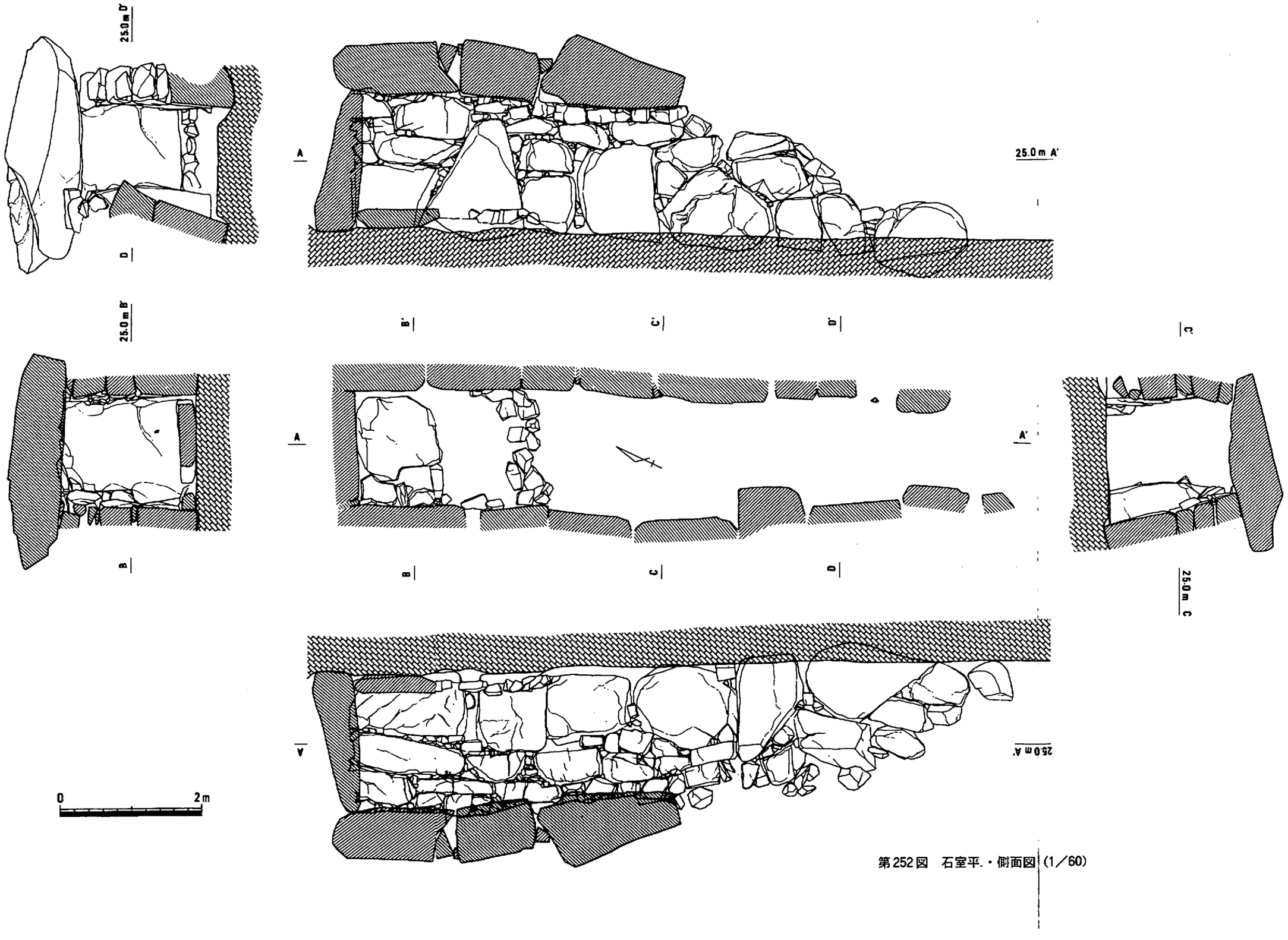
（4）横穴式石室

墳丘の中央に築かれた横穴式石室は、花崗岩の転石や割石を積み上げて構築した全長 9.3m の片袖式で、南に開口している。N24°Eに主軸をおき、奥壁よりの床には平石を敷いている。

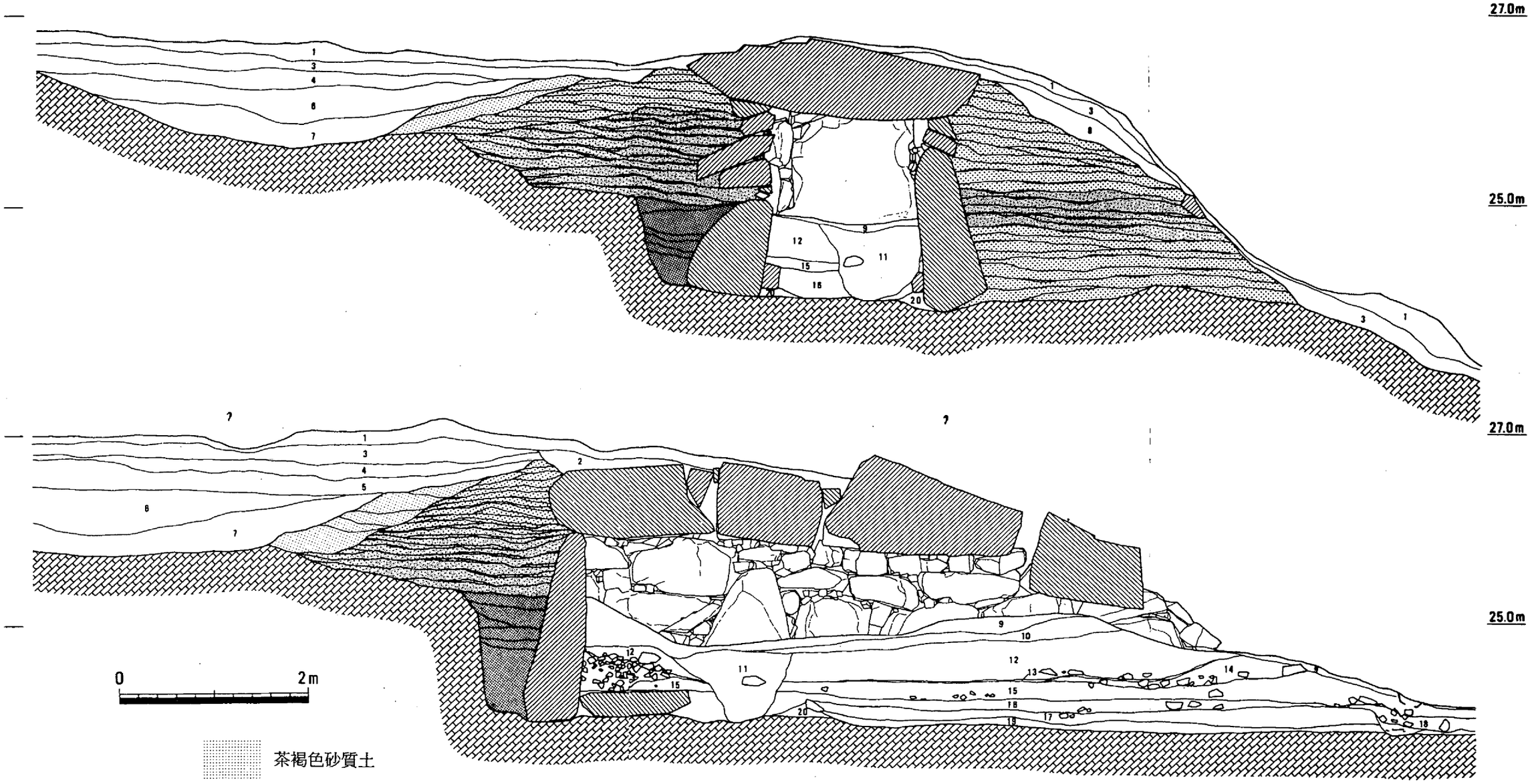
玄室の長さは左側壁で5.35m、幅は奥壁で 1.6m、前壁で 1.7m、最大で1.75mを測る。床面は後世の攪乱によって旧状をとどめていないが、現状の高さは奥壁で 1.9m（敷石からの高さは 1.7m)、前壁で 1.8mを測る。奥壁には長さ 2.0m、幅 1.5m、厚さ 0.6mの一枚石をわずかに内傾させて据えている。左側壁は石材を３段に積み上げて構築している。左側壁の基底には長さ１～ 1.5m、幅１～ 1.2m前後の石材を４つ据えている。このうち高さの低いものについては塊石を一段積み上げて高さをそろえている。そのうえには長さ１～ 1.5mほどの石材を一段積み上げて袖石の高さにそろえている。そして３段目には長さ 0.5m、幅 0.3mの石材を積み上げて天井石を架構している。石材の隙間には拳大の石を詰めて調整しているが、全体として雑然とした感を受ける。壁面の傾斜は５～15°で、やや内傾する。右側壁も基本的に３段積みで構築されている。右側壁の基底に置かれた５つの石材は、長さ 0.8～ 1.6m、幅 0.8～ 1.7mとふぞろいである。とくに奥から二つ目の石材は大きく、ここでは２段積みとなっている。このため左側壁では横目地がとおるのに対し、右側壁では縦目地がとおる結果となっている。２～３段目の石材は、長さ 0.8～１．1.2 m、幅 0.3～ 0.6mで、基底の石の上部にそれぞれ積み上げられている。壁面の傾斜は２°余りで、ほぼ垂直に近い。玄室の天井は長さ２～３m、幅１～２mの石材を４つ架構しているが、玄門にかかる１石は調査前に転落していた。玄室の床面は前述したように後世の攪乱を受けているがほぼ水平で、中央から奥には平石を敷いていた。敷石のうち奥壁に接して置かれたものは最大で、長さ 1.2m、厚さ0.25mを測るが、後述するように下部から土器を出土しており、築造当初のものかどうか明らかでない。

玄室と羨道の境には、石材を玄室の左側壁から 0.5m、羨道の左側から 0.3mほどせりださせて玄門を設けている。玄門は長さ１m、幅 1.2m、高さ 1.7mを測り、長さ 1.5m、幅１mの石材を立てたうえに幅 0.4mほどの石材を積み上げている。

羨道は、左側壁で長さ 2.9m、幅 1.6mを測る。高さは天井石が転落しているため明らかではないが現状で 1.5mである。左側壁は基底に長さ 1.8m、幅 1.1mの石材を据え、そのうえに長さ１m、幅 0.6mの石材を１段積み上げている。また右側壁は玄室から続いて、基底に長さ 0.8～ 1.3m、幅 0.8mの石材を据えたうえに、長さ１m、 0.3～ 0.5mの石材を２段積み上げている。壁面の傾斜は土圧などにより変化しているが、玄室と同じくほぼ垂直であったものと思われる。天井は長さ1.9m、幅１mの石材を１つ架構していたようであるが、玄門部の



第252図　石室平.・側面図 (1／60)



1. 黒土色土
2. 黄褐色砂質土
3. 灰黄褐色砂質土
4. 明茶褐色砂質土
5. 茶褐色砂質土
6. 褐色砂質土
7. 暗褐色砂質土
8. 黄褐色砂質土
9. 黒褐色土
10. 淡黄褐色砂質土
11. 暗黄褐色砂質土
12. 黄褐色砂質土
13. 黒色土（灰層）
14. 黄褐色砂質土
15. 黄茶色砂質土
16. 明茶褐色砂質土
17. 褐色砂質土
18. 茶褐色色砂質土
19. 暗褐色砂質土
20. 褐色土

第253図　墳丘断面図（1／50）

ものと同じく、調査前に転落、割裂していた。羨道の床面は、玄室からわずかな傾斜をもって開口部へと下っており、後世に再利用されたためか閉塞施設は認められなかった。

（5）墳丘

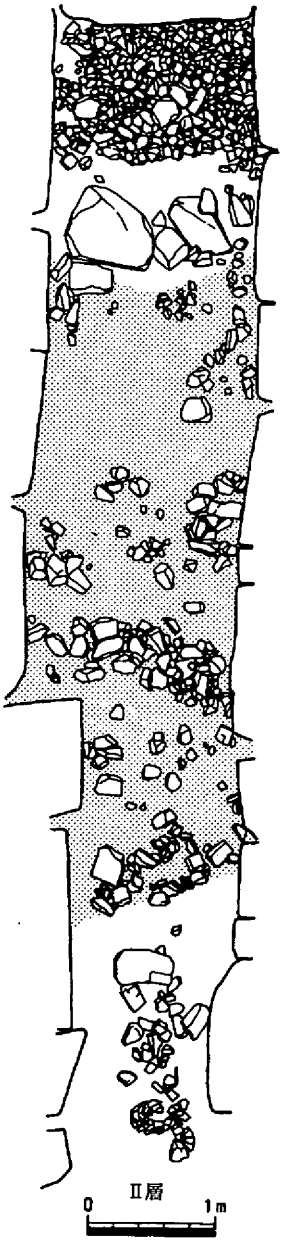
墳丘は南北17m、東西14mで、南側の膨れたややいびつな楕円形を呈する。上部は後世の改変により大幅に削平されており、天井石が一部露出している。現状での高さは周溝のめぐる西側で1m、斜面側にあたる東側で 2.8mを測る。

墳丘の構築にあたっては、まず丘陵の斜面を半径30mの範囲にわたって削り込む。この掘削によって、南北20m、東西15mの平坦面をつくりだしているが、このとき東側は地形の制約をうけて掘削が浅くなり、その結果平坦面は南北に長い楕円形となる。墓壙はこの面から掘り込まれるが、開口部を地形の開放する南東方向に設定したため、南側で平坦面との間に広い空間を生じている。このことが、南側が膨れるいびつな墳形をなす原因と考えられる。

墳丘の築成は石室の構築と平行してなされており、4つの段階にわけられる。第1段階は石室の基底に石材を据え、墓壙との間に地山ブロックを含む茶褐色土を充填している。墓壙の埋土は、北側では奥壁の半ばにあたり、西側では基底の石材の上端に達する。これに対し墓壙が開放する東側では、黄茶褐色土を盛り上げながら、基底の石を据えている。このことは、右側壁に認められた基底石のばらつきとも深く関わっているものと思われる。墓壙の埋土は硬度が弱く、粘質である。第2段階は石室の上端に達する土盛で、基底石のうえに積み上げた石材を固定するように、厚さ10cmの灰褐色土を、あいだに薄い砂層を挟みながら何層にも盛り上げている。このとき左側壁に見られた横目地からすると、少なくとも2回の工程が想定される。炭化物が含まれるこの土層は、古墳の築造にあたって焼き払われた旧地形の表土層に由来するものと思われる。第3段階は天井石を被覆するように施される盛土で、厚さ10cmの黄茶褐色土層を何層にも重ねている。この段階で南北15m、東西10m、高さ3mあまりの第一次の墳丘が完成する。第4段階は、第一次墳丘を覆うように暗褐色土が盛り上げられ、第二次墳丘が完成する。この土層には地山ブロックを含んでおり、その硬度は高い。これによって墳丘の築成が完了する。

（6）周溝

古墳と丘陵の間には、幅2－3mの溝がめぐっている。周溝の西壁は37°の傾斜をもっており、古墳の築造にあたって切り崩された法面から連続している。盛土によって形成される東壁は25°の傾斜をもち、その傾斜は墳丘と一致する。溝底は西側で最も高く、東に向かって下っている。溝内には上層から茶褐色土、褐色土、暗褐色土が堆積し、底から須恵器（甕）、鉄滓



第254図　石室内
遺物出土状況図1
(1／60)

が出土している。

（7）石室内の堆積状況

石室内は、調査の時点で1ｍ近くの土砂が堆積していた。最上部のⅠ層（第253図9・10層）は、腐植土を含む表土層である。Ⅰ層を除去した段階で、奥壁近くに径 1.2m、深さ 0.7m ほどの盗掘壙が掘り込まれていたことが明らかになった（第253図11層）。壙内には敷石に使用されていたと考えられる大形の石材が含まれていた。

Ⅱ層（第253図12層）は黄褐色砂質土で、薄い粘土層を幾重にも挟みながら厚さ30～40cmにわたって堆積している。この層の下面には、厚さ数cmの灰層（第253図13層）が玄室の中程から羨道部にかけて広がっている。また奥壁よりには拳大の礫が40cmほど積み上げられており、その中には河原石と思われる円礫も含まれていた。この層からは近世の陶器（皿）や中世の青磁（椀）、平瓦などが出土している。

Ⅲ層（第253図15層）は淡黄褐色砂質土で厚さ20cmにほど堆積しており、径10cmあまりの地山の礫を多数含んでいる。この層の下面からは、礫に混じって古墳時代の須恵器片（甕）が出土したほか、玄室の南西隅から中世の土師器（椀・鍋）が出土している。また開口部では、Ⅲ層を切り込んで亀山焼を使用した骨蔵器が納められていた。

Ⅳ層（第253図16層）は暗黄褐色を呈する砂質土で、10cmほどの土層のなかにはⅢ層と同じく地山の礫を多数含んでいる。下面からは玄門部を中心に中世の土師器（椀・小皿・鍋）や白磁（椀）、刀子、宋銭など多数の遺物を出土した。

Ⅴ層（第253図16・17層）は厚さ20cmほどの褐色砂質土である。この層の下面では、玄門付近で長さ90cmほどの焼土の広がりが認められ、玄室の南半から玄門にかけて古代の土師器（椀・皿・鍋）が多数出土した。

また、開口部付近で古代の土師器がまとまって出土している。器種には杯・皿・鉢があり、その多くに丹が塗られていた。

第255図　石室内遺物出土状況図2（1／60）

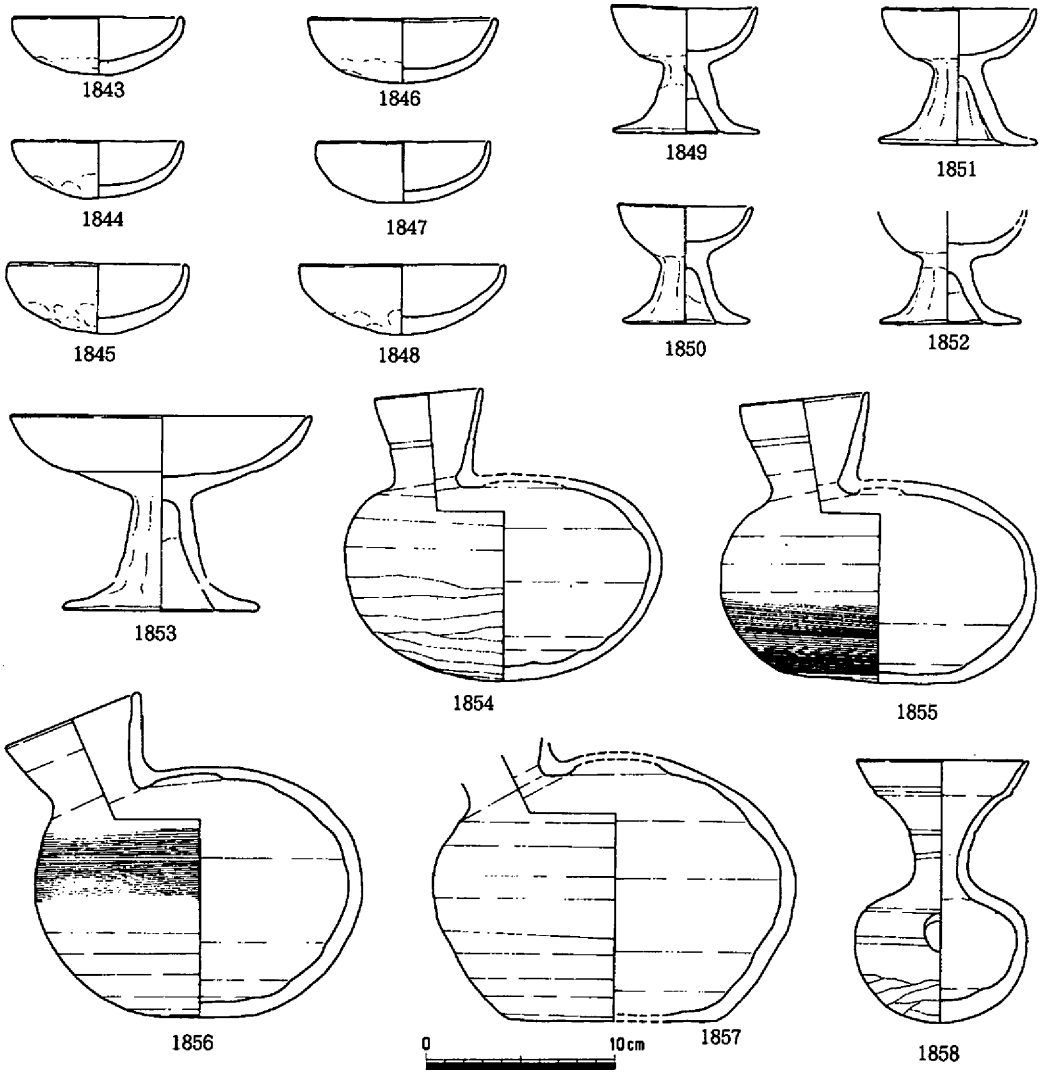
（8）出土遺物

古墳にともなう遺物

古墳時代の遺物には土師器（椀・高杯）、須恵器（平瓶・甕・甕）、鉄器（鏃・釘・馬具）がある。これらは石室内の下層からも出土しているが、その多くは前庭部の撹乱土層からの出土である。

1．土師器（第256 図1843～1853）

椀（1843～1848）は口径９～11cm、高さ３～４cmで９個体出土している。丸い底部から緩やかに湾曲し口縁部にいたる。いずれも外面に指頭圧痕を残し、内面をナデで調整している。高杯は小形の**1849～1852**と大形の**1853**がある。小形の高杯は９個体あり、口径７～８cm、脚径７～ 8.5cm、器高 6.5～７cmを測る。やや深い杯部は緩やかに湾曲し、内外ともナデで調整する。脚部は下方に向かって広がり、裾部はわずかに屈折して水平方向へ伸びる。脚部は外面を縦方向になで、杯部に差し込んで接合する。大形の高杯は２個体出土している。**1853**は、口径16cm、脚径10cm、器高10.5cmを測る。浅い杯部は口縁部とわずかに段をなし、内外ともナデで調整す



第256図　古墳に伴う遺物（1）

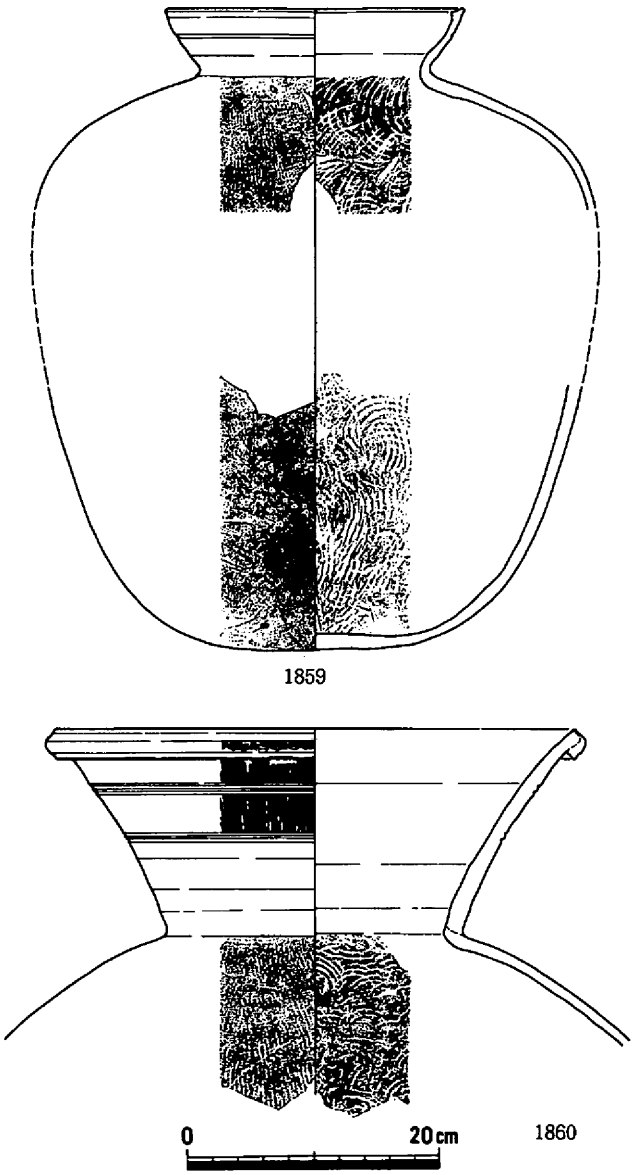
る。脚部は小形のものに比べて開きが弱く、裾部の屈折が強い。外面を縦方向になで、内面をヘラケズリする。

2．須恵器（第256・257図1854～1857）

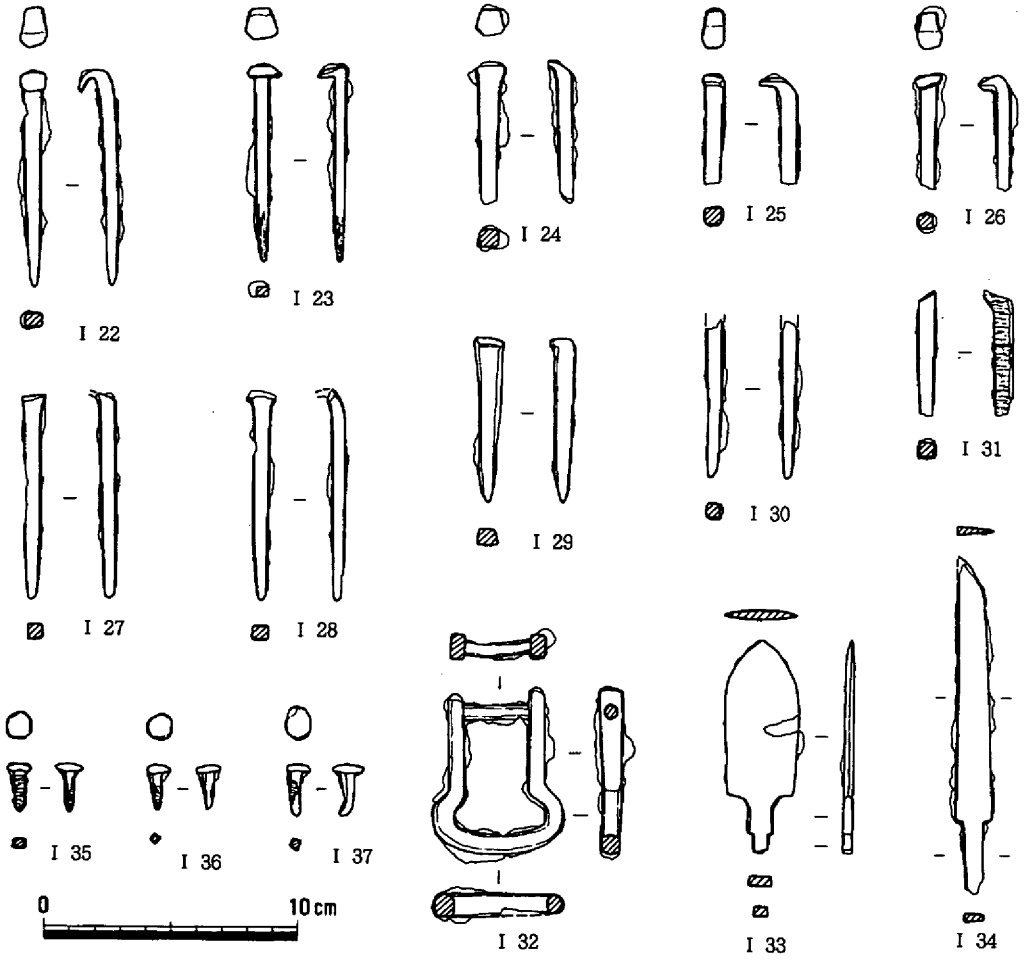
平瓶は6個体出土している。**1854・1855**は偏球形の体部に上方に向かって開く口縁部を取り付けたもので、**1854**は底部を不整方向にヘラケズリし、**1855**は右方向にヘラケズリしたのちカキ目を施す。**1856**は膨隆した体部に大きく広がる口縁部をそなえており、底部を右方向にヘラケズリしたのちカキ目を一部に施す。平坦な底部をもつ**1857**は、下半に右方向のヘラケズリを施し、底面は未調整のままとする。

1858の甕は、やや肩の張る体部に上方に開く口縁部をもつ。頸部には2条の沈線をめぐらし、底部を不整方向にヘラケズリする。

甕は4個体出土した。**1859**は周溝から出土したもので、ほぼ全形を知りうる。上方に開く口縁部はわずかに内湾し、端部は凹面をなす。外面に1条の沈線を施し、ヨコナデで調整する。やや肩の張る胴部は、外面を平行タタキで調整したのち、平坦となる底部にかけてカキ目を施す。**1860**は開口部に据えられていたもので、破片の一部は礫とともに石室内へ持ちこまれていた。口縁部には、櫛状工具で縦方向に施紋したうえに、2本を一対とした沈線を2条めぐらしている。端部には粘土帯を貼りつけ、櫛状工具による波状文を施す。



第257図　古墳に伴う遺物（2）　（1／6）



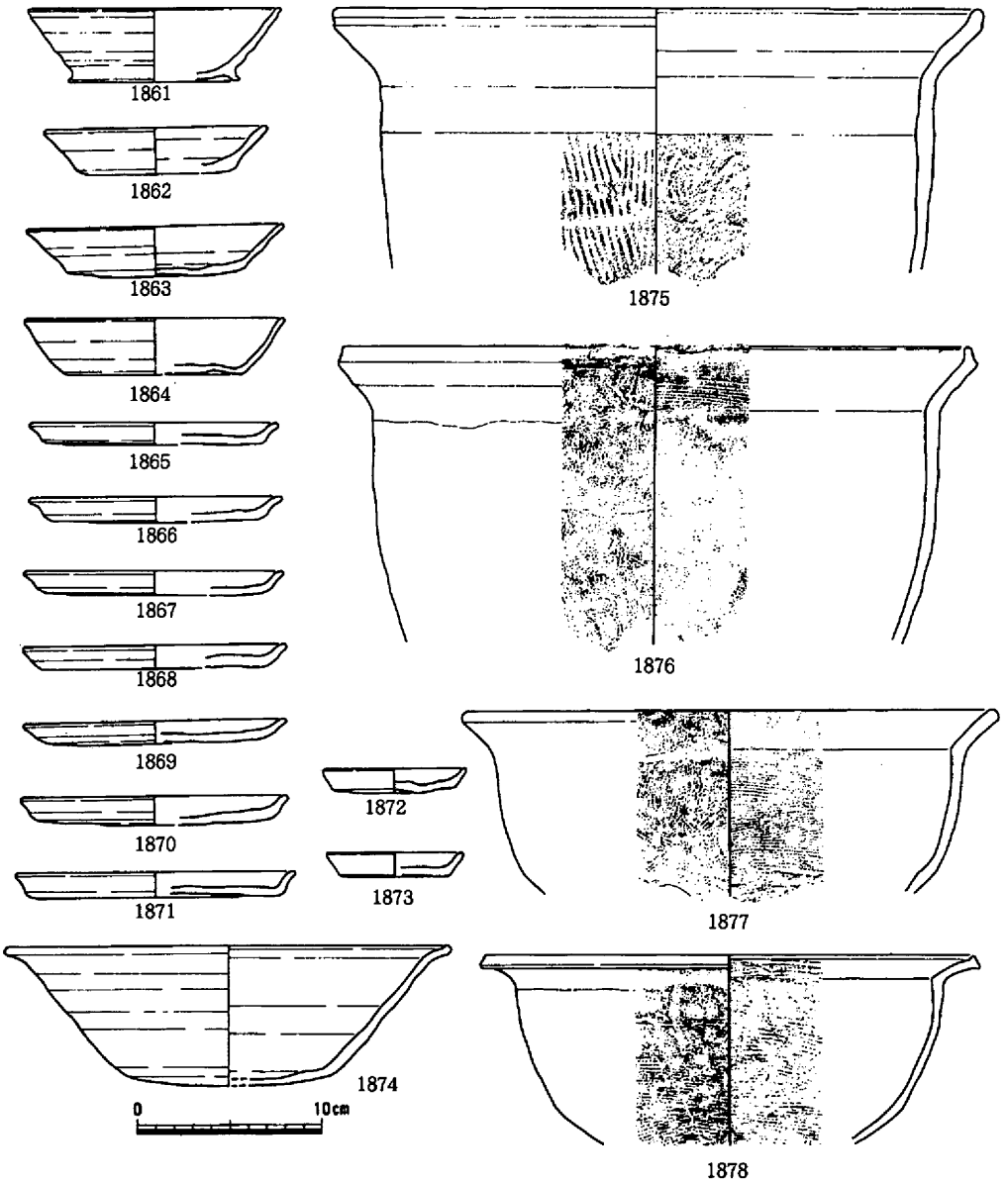
第258図　古墳に伴う遺物（3）　（1／3）

3．鉄器（第258図Ⅰ22～Ⅰ31）

Ⅰ22～Ⅰ31は釘で、石室内から10本分出土している。完存しているものは少ないが、長さは7.8～ 8.6cm、幅 0.5～ 0.6cmほどで、いずれも頭部を平らに打ち延ばしたのち折り曲げている。全体に木質の遺存は悪く、打ち付けられた部位について明らかでないものが大半を占める。

Ⅰ32の鉸具はC字形をなす縁金をもち、刺金は失われているが、基部に通した断面円形の横棒に取り付けられていたものと思われる。

Ⅰ33は、玄室から出土した三角形の身をもつ平根鏃で、茎の先を欠いている。身は長さ6.2cm、幅3cm、厚さ 0.4cmの丸造りで、断面方形となる頸部は角関をもって終わる。

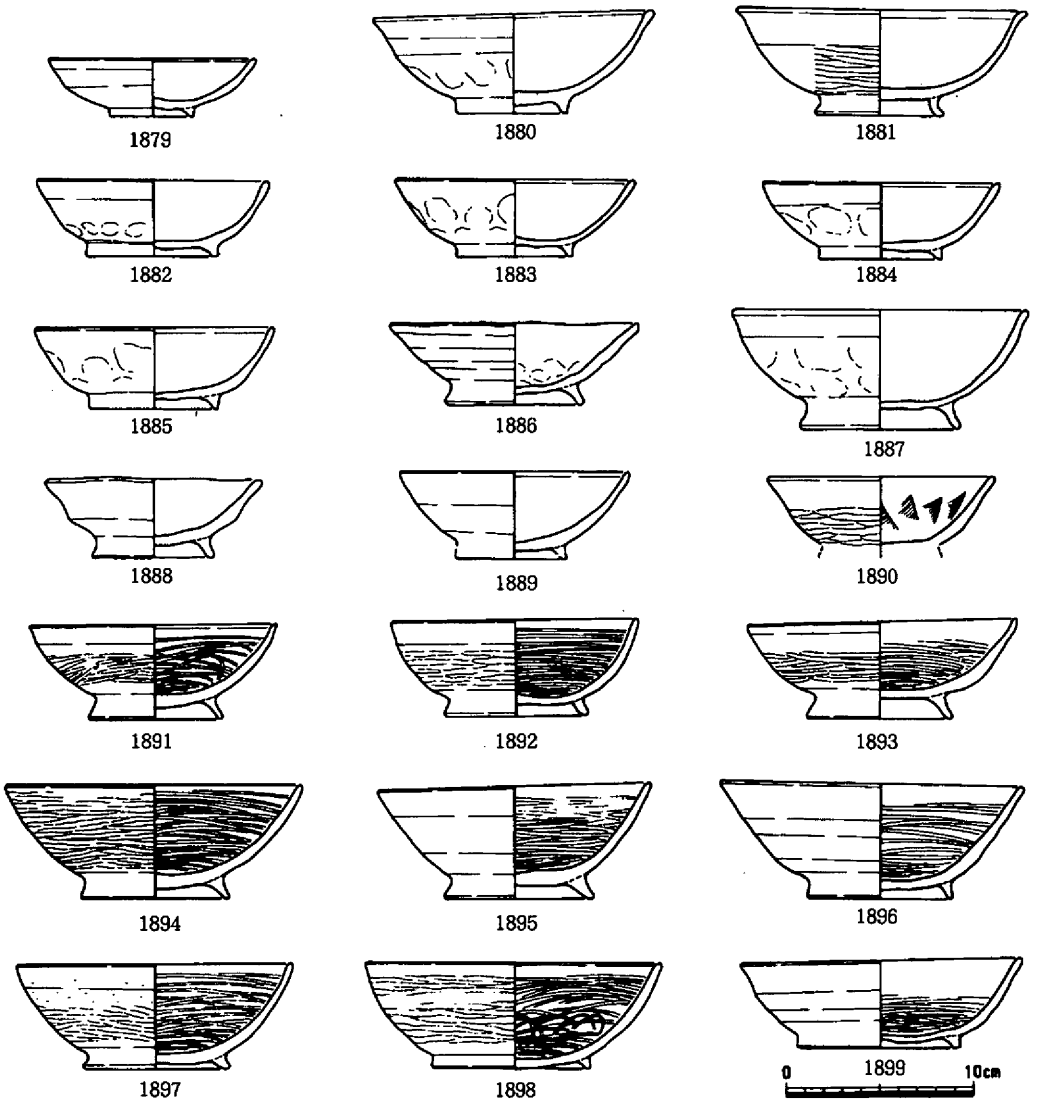


第259図　石室再利用時の遺物（1）

石室再利用時の遺物

１．開口部の遺物（第259図1861・1865～1874、第256図1856～1858）

開口部からは土師器（杯・皿Ｂ・鉢）、鉄器（鋲）がまとまって出土した。杯は２個体出土している。**1861**は口径13.5cm、器高４cmで、体部は直線的に開き、底部には高台を貼り付ける。皿Ｂは20個体以上が確認できる。口径13.5～15cm、器高 1.2～ 1.5cmで、底部はヘラ切りされ、内外に丹塗りを施す。**1874**は口径24cm、器高 7.5cmの鉢で、大きく開く口縁部はわずかに外反



第260図　石室再利用時の遺物（2）

し、端部を上方に拡張する。あまり類例のない器形であり、蓋になる可能性もある。**1875**の鍋は口径34.5cmで、体部下半を欠失している。胴部から斜め上に延びる口縁部は、端部をわずかに上方へ拡張する。胴部は外面を平行タタキで調整し、内面に同心円の当具痕を残す。

鉄（Ⅰ35～Ⅰ37）は4点出土している。長さは 1.8～ 2.1cmで、径1cmほどの円形に整えた頭部をもつ。身には木質が遺存しているが、木材の結合には不向きであり、飾り鉄と思われる。

2．Ⅴ層の遺物（第259図1862～1864・1876、第260図1887～1899）

Ⅴ層の遺物には土師器（椀・皿A・鍋）がある。椀は22個体出土しているが、このうち内面

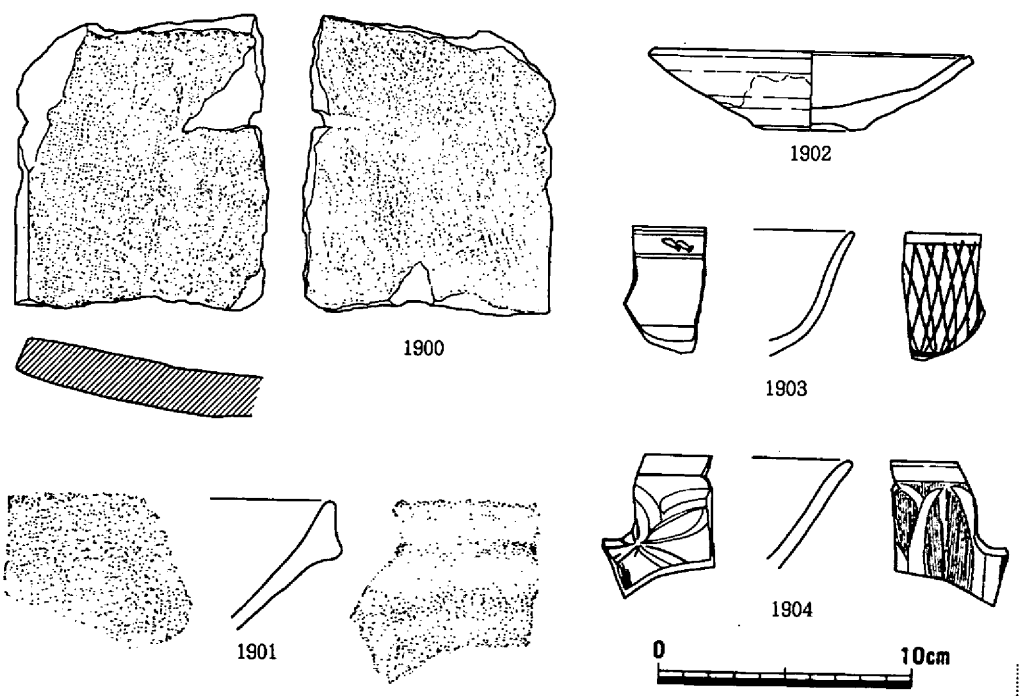
を黒色処理する黒色土器Bは12個体ある。これらはその法量から口径11～12cm、器高4～5cmの小形の**1888～1890**と、口径13～14cm、器高5cm前後の**1891～1893**と、口径15～16cm、器高5～6cmの**1894～1899**に分かれる。また器形についてみると、体部が直線気味に開く**1895～1896**と、緩やかに湾曲する**1892・1894**、中程で屈折し稜をもつ**1888**がある。高台も長く延びるものが多いが、**1897～1899**のように短いものもある。調整は内外面ともヘラミガキするものが多く、**1890**では板状工具による調整痕が認められる。しかし**1897**では外面にユビオサエの痕を残している。皿Aは口径11.6～13.8cm、器高 2.5～ 4.6cmで、8個体出土している。直線的に延びる口縁部はヨコナデで調整され、底部はヘラ切りのままである。**1876**の鍋はⅤ層の焼土面の周辺から出土した。外方へ開く口縁部は端部を上方に拡張し、内面をハケメで調整する。胴部は外面を粗くハケメで調整し、内面を丁寧なナデで仕上げている。

3．盗掘壙の遺物（第260図1886）

敷石に接して出土したもので、直線的に開く杯部に斜めに延びる高台を備えている。口縁部は歪みをもち、内面中央にはユビオサエの痕を残す。

4．Ⅳ層の遺物（第259図1872～1873・1877、第260図1881～1885）

Ⅳ層の遺物には土師器（椀・小皿・鍋）や白磁（椀）、金属器（刀子・銅銭）がある。土師器の椀は16個体あり、その多くは伏せた状態で出土した。**1882～1885**のように口径12cm前後、



第261図　石室再利用時の遺物（3）（1／3）

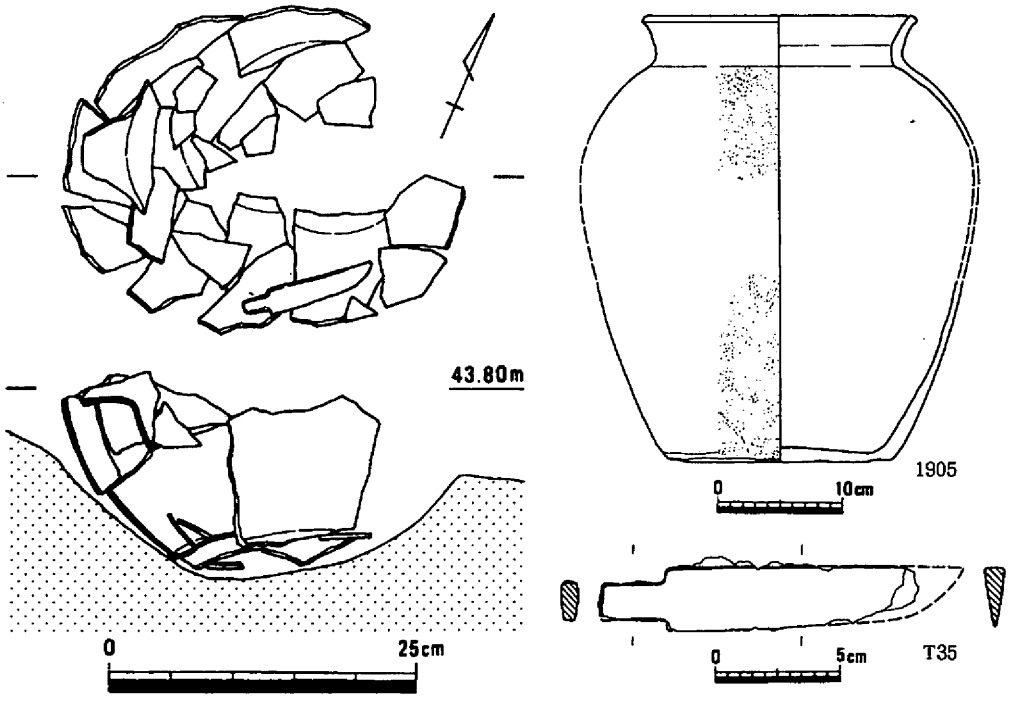
器高４㎝になるものが多く、これらは体部にユビオサエの痕を残し、底部に低い高台を貼り付ける。これに対し**1881**は口径15㎝、器高 5.7㎝と大形で、緩やかに湾曲する体部から続く口縁部は、わずかに肥厚しながら外反する。底部には外反する長い高台をそなえており、体部の外面をヘラミガキする。**1872・1873**の小皿は口径 7.5～８㎝で、底部をヘラで切り離している。1877は口径28㎝を測る鍋で、上方に開く口縁部はヨコナデで調整し、端部を丸く収めている。胴部は浅く、内外を粗くハケメで調整する。白磁は椀の高台部分が出土した。１点出土した銅銭は「淳化元寶」で、初鋳は北宋の淳化元年（990年）である。

５．Ⅲ層の遺物（第259 図1878、第260 図1879～1880）

Ⅲ層からは土師器（椀・鍋）が出土している。**1880**の椀は口径14.7㎝、器高 5.5㎝で、内湾する体部から延びる口縁部はわずかに肥厚する。高台は矩形に近く、体部の外面にはユビオサエの痕を残す。**1879**は口径10.8㎝、器高 3.4㎝と小形で、底部には断面三角形の高台を貼り付ける。**1878**の鍋は、底部付近で屈折する浅い胴部と、水平に延びる口縁部をもつ。内外を粗いハケメで調整する。

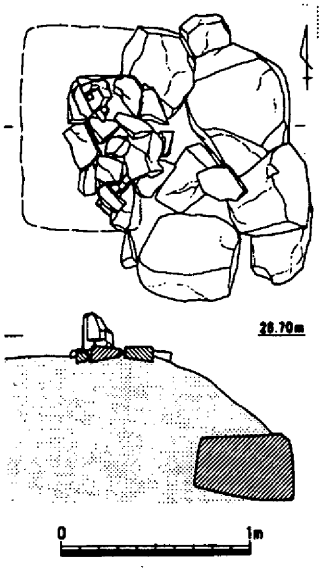
６．Ⅱ層の遺物（第261図）

Ⅱ層の遺物には陶器（皿）、染め付け（椀）、青磁（椀）、すり鉢、平瓦などがある。**1902**は



第262図　骨蔵器出土状況・出土遺物（1／6、1／3）

口縁端部の内面に沈線をめぐらす皿である。釉は火度が低いためか白色をなす。内面には砂目の痕を残す。肥前系の陶器である。1903の椀は伊万里系の染め付けで、外面には網目文を飾る。1904は櫛描き蓮弁を飾る青磁の椀である。1900は平瓦で、上面に布目を残し、下面は縄タタキを施す。



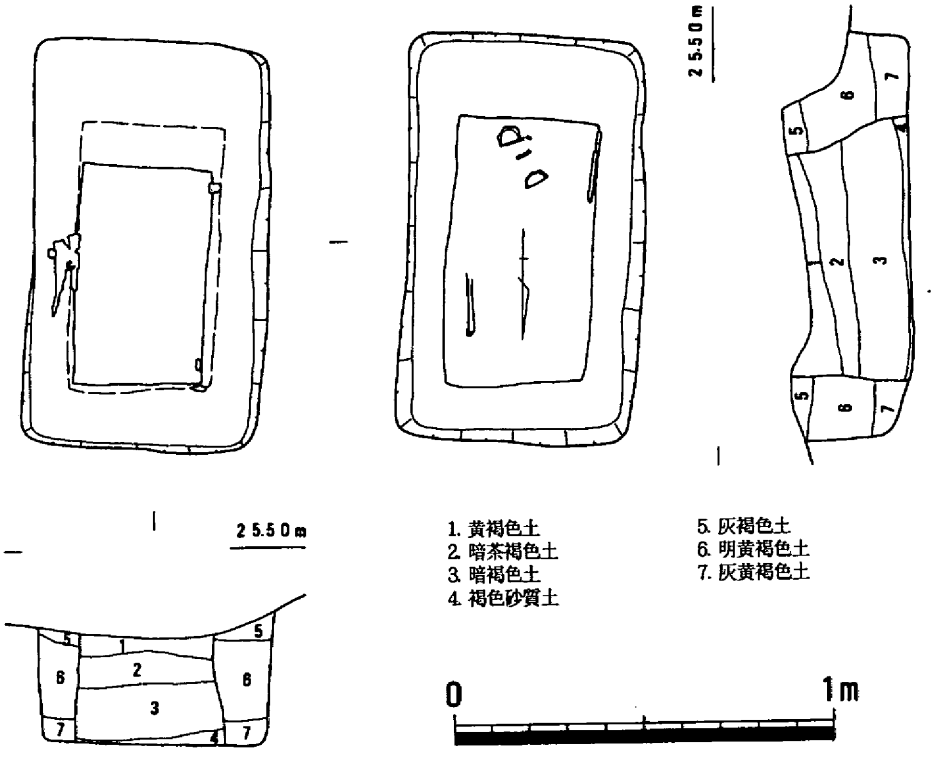
第263図　木棺墓上の石組み
(1／40)

（9）その他の遺構・遺物

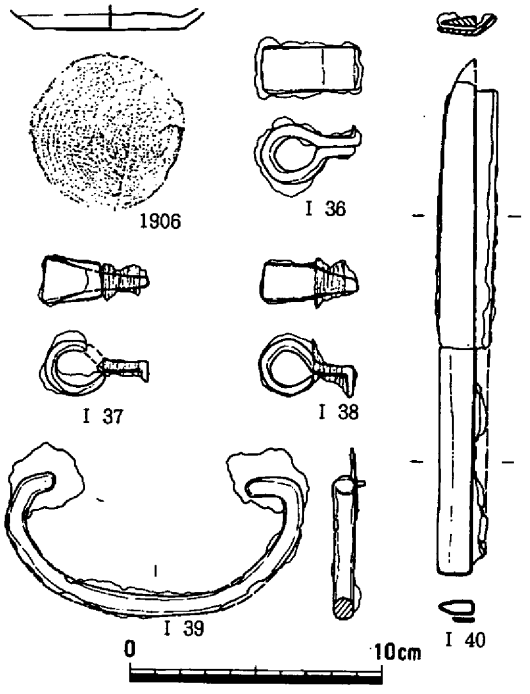
骨蔵器（第262図）

開口部から出土した骨蔵器は、Ⅲ層を掘りこんで据えられていた。底部はやや傾いているが後世の攪乱を受けており、当初のままかどうか明らかでない。検出した段階では下半を残すのみで、口縁部は破片となって内部に落ち込んでいた。また残存部分も土砂の流出などにより一部外側に倒壊していた。

骨蔵器の内部からは副葬品と考えられる刀子のほか土師



第264図　木棺墓平・断面図（1／20）



第265図　木棺墓出土遺物　(1／3)

器の椀・小皿の破片が出土した。

骨蔵器は亀山焼の壷を利用したもので、口径11.2cmを測る。口縁部はわずかに外反し、端部は面をなす。やや張りのある胴部は外面に格子目タタキを施す。刀子は長さ13cm、幅 2.5cmで、切先を欠く。

木棺墓（第263～265図）

墳頂の北東部に位置しており、調査前から、この地方特有の家形をした墓塔の一部が残存していた。斜面側に石をもちいて、南北 1.5m、東西１mの基壇を築いており、その下部に掘り込まれた長さ1.1m、幅0.65mの墓壙には、長さ0.7m、幅 0.4mの木棺がおさめられていた。木棺には引き手や環状の金具が取り付けられており、木櫃を転用したもの考えられる。棺内の南側からは半分に割れた土師器の皿があり、その下には歯が遺存していた。また南西の隅には金銅の柄をもつ刀子がおかれていた。**1906**は頭部付近にあった土師器の小皿で糸切り底をもつ。**I 36～I 39**は木棺の金具である。**I 36～I 38**は環状をなし、木棺西辺の両端や東辺中央に取り付けられていた。**I 39**は引き手で、棺の上部ないし東辺にとりつけられていたものと思われる。**I 40**は刀子で、長さ19cm、幅２cmほどのく字形に折り曲げた鉄板のうえにおかれていた。身は切っ先を欠いているが、長さは11.5cmあまりになるものと思われる。柄は銅製で、長さは９cmある。

第２節　まとめ

立地と墳丘

西坂古墳は丘陵の東斜面に単独で築かれている。このような立地を取る古墳には大形のものが多く、群集墳にあっては主墳に相当する。墳丘は中規模でいびつな円形をなすが、これは地形を取り込むあまりその制約を強く受けた結果であり、７世紀の古墳にはしばしば認められるところである。厚さ10cmほどの土層を積み重ねて築かれており、その間には薄い砂層が認められた。このように異なった質の土層を交互に積み重ね、堅固な墳丘を築く方法は総社市江崎古

墳（註1）や緑山古墳1号墳(註2)でも知られており、寺院建築に際して導入された版築とは異なる工法である。

横穴式石室

この古墳の石室は全長 9.3m、幅 1.7mで、この周辺に分布する古墳のなかでは大形に属する。奥壁は一枚石を立て、側壁は3段積みで構築しており、特に腰石の発達が著しい。壁面はほぼ垂直で傾斜はほとんど認められない。玄室は細長い長方形で、玄室の長さは幅の3倍となる。左側壁に石材を立てて設けられた玄門は総社市沖田奥2号墳(註3)においても認められるところであるが、この地域では一般的なものではなく、むしろ備後地域とのつながりをうかがわせる。

出土遺物

西坂古墳から出土した須恵器は平瓶・瑞・甕などあまり多くはない。**1855**の平瓶は偏平な体部をもち、提瓶と共通する形態をとっている。底部はヘラ切りのままであるが、体部下半にカキ目を施しており、このような平瓶は稼山2式に類例が求められる(註4)。また器高が高く、やや肩の張る**1856**は稼山3式に比定される。稼山2式の杯蓋は口径12.5～13.5cmで、天井部をヘラ切りしたのちナデを加えている。このような杯蓋は畿内のＴＫ209型式ないしＴＫ217型式に併行するものと考えられる(註5)。また稼山3式の杯蓋は口径10～11.5cmで、天井部はヘラ切りの後調整を行っていない。畿内のＴＫ217型式に併行する可能性が強い。瑞は体部に比べて口縁部の開きは小さく、総社市板井砂奥10号墳のものに類似している。これに伴う杯蓋は口径11～12cmで、天井部を未調整のままとしており、やはりＴＫ217型式に併行するものと思われる。開口部に据えられた甕もＴＫ217型式のなかに類例が認められる。

鉄器についてみると、釘は長さ8cm前後で、赤井西2号墳(註6)や土井2号墳(註7)の釘のなかでも小形のものに近い。赤井西2号墳は6世紀末～7世紀初頭、土井2号墳は7世紀前半に使用されたものと考えられており、この古墳の鉄釘は概ね7世紀前半のものと思われる。鉸具Ⅰ32は鞐ないし鞍鞘頭と見られるもので、坂本美夫のＣ字形鉸具に属す。縁金のＣ字は偏平で基部が長く、このような形態をとるものは7世紀に多いとされている(註8)。

以上のことから、この古墳の築造は7世紀初頭とみて大過ないものと思われる。

古墳の性格

西坂古墳は、丘陵の斜面に単独で立地するが、これに似た立地をとるものに笹池東古墳がある。この古墳は、西坂古墳の北約 800mの位置にあり、後期の群集墳である原津古墳群とは北西に 600mほど離れている。直径15mほどの円墳で、南に開口する横穴式石室を主体部としている。現在石室の前側は破壊され、内部は墓地として利用されているが、かつて永山卯三郎により大寺塚として紹介されている(註9)。それによると、石室は左に袖をもつ片袖式で、全長

8.6m、玄室長5m、玄室幅1.65mを測る。側壁は、大形の石を立てた上に横長の石を置く。2段積みで構築されている。玄室の長幅比は西坂古墳と一致し、その構造や採集遺物から西坂古墳に続く7世紀前半の築造と考えられる。系譜的に繋がるこの二つの古墳は、この地域のなかでは大形の石室を有しており、その独立した立地からしてもこの地域で中心的位置を占めることは間違いない。ところでこの古墳から見下ろすことのできる低位部には、当時自然流路がいく筋も走り、極めて不安定であった様子がうかがわれる。この地域は後の窪屋郡阿智郷に比定されているが、「備中国大税負死亡人帳」によれば、天平11年当時美和郷に属していたことが知られる。このことは、総社平野に通じる現行の街道が当時から重視されていたことを示すとともに、立郷をもたらすような低位部の開発が遅れていたことをうかがわせる(註10)。以上のことから西坂古墳の被葬者は、総社平野から瀬戸内海へ通じる交通の要衝を拠点とした有力首長であったものと思われる。

石室の再利用

西坂古墳では石室内から再利用時にもちこまれたと見られる遺物が多数出土した。Ⅱ層から出土した染め付けの椀は18世紀のもので、肥前系の皿は17世紀に属す。Ⅲ層から出土した1879の椀は総社市樋本遺跡の椀Gに相当し、14世紀前半になるものと思われる(註11)。Ⅳ層の土師器はいわゆる早島式土器で、灰白色の胎土をもつ。口径の大きい1881は岡山市鹿田遺跡のA期のものに類例があり(註12)、12世紀前半と考えられる。同様に1882～1885はB期に類例が認められるところから、12世紀後半のものと思われる。また1877の鍋は13世紀にまで下る可能性がある。このことは伴出した白磁の年代とも矛盾しない。Ⅴ層の土師器は黒色土器Bが主体を占める。黒色土器については、最近、武田恭彰によって編年が試みられている(註13)。それによるとⅤ層の土器は、10世紀後半から11世紀前半にわたるものと思われる。開口部の土師器には丹塗りの施されるものが多い。これについても武田の年代観にしたがえば、9世紀後半から10世紀前半の年代を与えることができる。開口部の骨蔵器に用いられた亀山焼は、14世紀前後のものと見られ、墳頂に掘り込まれた木棺墓は出土遺物から概ね16世紀前後のものと思われる。

このように西坂古墳の石室は、古代後半以降近世に至るまで利用されていた。石室を何らかの目的をもって再利用している例は、最近多く知られてきた。このうち8～9世紀の再利用については墓として使用されたものが多いことが指摘されている。しかし石室の再利用が最も活発に行われた10～13世紀においては、その目的について不明な点が多い。

10～13世紀における石室の再利用は、今のところ岡山県では南部に多く見られ、それも当時の生活の場と比較的近接した位置にあるものに一般的である。内部にもちこまれる土器には土師器の杯・椀のほか、甕や鍋があり、西坂古墳のように内部で火が焚かれた痕跡の認められるものもある。しかし墓塔や骨蔵器など、墓を思わせるものは見つかっていない。甕や鍋はこの

ころの墳墓に副葬ないし供献されることの少ない器種であり、これにともなう焚火の痕も認められるところから、一時的な生活の場とする意見も出されている。確かに「今昔物語集」などの説話に見られるように石室を住居として利用することもあったに違いない。しかし近世以降現代でもしばしばみられるように、古墳が信仰の場として利用されているのも見逃せない事実である。現段階ではいずれとも判断し難い。ただ、この古墳が再び墓地として確かに利用されるのは、骨蔵器が埋納された14世紀以降のことである。

註

註1．近藤義郎ほか「江崎古墳」『総社市史　考古資料編』総社市、1990

註2．近藤義郎ほか「緑山古墳群」『総社市埋蔵文化財発掘調査報告』1987

註3．村上幸雄ほか「水島機械金属工業団地協同組合西団地内遺跡群」『総社市埋蔵文化財発掘調査報告9』総社市教育委員会、1991

註4．村上幸雄ほか「稼山遺跡群Ⅱ」『久米開発事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告2』久米開発事業に伴う文化財調査委員会、1980

註5．田辺昭三「陶邑古窯址群Ⅰ」平安学園考古クラブ、1966

註6．間壁忠彦・島巡賢二「赤井古墳群2号」『倉敷考古館研究集報10』倉敷考古館、1974

註7．平井勝「土井2号墳」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告29』岡山県教育委員会、1979

註8．坂本美夫「鉸具考」『考古学叢考　中』1988

註9．永山卯三郎「祇園塚」『岡山県史跡名勝天然記念物調査報告1』岡山県史跡名勝天然記念物調査会、

註10．間壁忠彦「高梁川沖積地と古代の郷」『倉敷の歴史1』倉敷市、1981

註11．高畑知功「樋本遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告65』岡山県教育委員会、1987

註12．鈴木康之「鹿田遺跡出土の中世土器について」『鹿田遺跡Ⅰ』岡山大学埋蔵文化財調査研究センター、1988

註13．武田恭彰「岡山県における古代末期の土器様相」『土器からみた中世社会の成立』中世土器研究会、1990
武田恭彰「岡山県における古代土器様相の再検討」『古代吉備14』古代吉備研究会、1992

第5章　まとめ

第1節　ま　と　め

今回の調査では、丘陵斜面部の大半は後世の大規模な掘削を受けていたため、検出された遺構は断片的なものであった。しかし、削平を免れた丘陵部の一部に残存していた包含層、谷部および11、12区の低位部には、膨大な量の遺物が出土した。この膨大な量の出土遺物から推定される遺構についても、その全容は明らかにすることはできなかった。このような限定的状況の中で、一部に残存していた遺構とその豊富な出土遺物から、当遺跡の各時代の様相を述べて今回の調査のまとめとしたい。

旧石器時代

旧石器時代の遺物としては、尖頭器、有舌尖頭器、ナイフ形石器、翼状剥片など8点（第11図）が出土した。石器は、丘陵斜面、低位部などの古墳時代～中世の遺構、包含層から検出されたもので、旧石器時代の遺構、包含層は確認していない。丘陵稜線上は、従来から旧石器時代の散布地として知られており、これらと一連の遺物と理解される。当遺跡は、海岸部に立地しており県内南部海岸地域の各地に点在する遺跡と同様のものであろう（石器については後述する）。

弥生時代

弥生前期は、遺物は量的には少量ながら全般にわたって認められ、小規模ながら周辺域に占地していたことが窺える。しかしそののちの弥生中期に入ると土器はほとんど認められなくなり、弥生中期末までは土器としては中断する。しかしながら、石器は石包丁、石斧をはじめ相当量が出土している。これらの石器は、岡山県南部域においては、後期の前半まで残存しており、中期末～後期前半の土器に伴う可能性が考えられ中期初頭から中期後半までは別地点に居住域を移していたと思われる。中期末から古墳時代初頭（下田所式）までは、継続する土器が認められている。しかし、弥生前期と同様にその量は少ない。出土遺物だけで、居住域の規模を論じるわけではないが、この遺跡が存在する狭小な扇状地形から推察しても可耕地はさほど広くなく小規模であったと考えられる。これらの居住域の中心は、調査区北側の国道429号線を中心に両側に広がる微高地部と考えられる。神古墳時代初頭の斜面堆積層が認められた11区の中洲東斜面では、その層は東側では水平堆積層を示していた。この中洲（微高地末端）は、

縄文晩期～弥生前期までは中洲状の高まりとしての地形が残存していたが、その後は水平堆積層が厚く堆積しており、徐々に南側（海岸）方向に沖積化が進行していたと考えられる。古墳時代初頭でもその中洲の高まりは段差をもつ地形として存在していたと思われるが、その東側には徐々に開田化されていった可能性が考えられる。

古墳時代中期

この古墳時代前半期の遺構、遺物は、今回の調査では遺構の残存状態が良くなかった中で、古代の遺構、遺物とともに相当量まとまって検出された。遺構としては、11、12区の低位部の溝だけであったが、遺物は溝および各々の谷の下層などから膨大な量の土器、木器、石製品、土製品などが出土した。

11、12区での溝－１は、下層の洪水による堆積層と思われる砂層には完形品を含む遺物が大量に包含されており、その出土状況からみて周辺域の用地外北側の微高地上にはこれらの大量の土器を消費した集落址の存在が予想される。また、山裾部には同時期の遺構は認められなかったものの、各々の谷の下層には遺物を大量に包含する層があり、その土器の検出状況からも山裾部には遺構がかつて存在した可能性が考えられる。溝－１および各々谷、包含層からの遺物は、その大半が５世紀前半期の土師器であったが、その土師器に混在して朝鮮半島系軟質土器、陶質土器（初期須恵器）などが認められ、朝鮮半島からの渡来人の存在、渡来人との交流が考えられる。さらに、陶質土器（初期須恵器）の器形で土師器質に焼成されたもの、土師器の製作に陶質土器の技法が一部に用いられた土器など、種々の土師器と須恵器の異なる技法、焼成などが併用された土器が存在する。このような特異な土器の様相は、日用雑器と考えられる朝鮮半島系軟質土器の存在と併せて渡来人との接触、交流というものではなく、隣接地域、周辺地域に渡来人の集団の定住地を考え、その集団と在地人とのより密接な交流が進行しつつあったことが想起できる。

また、これらの大量の土師器の中には大量の手捏土器、石製模造品、土製模造品などが出土している。特に谷－Ｃに最も顕著で、この谷部の湧水に対しての祭祀行為が行われていたものと考えられる。また、溝－１の中にも手捏土器をはじめ、木製刀形模造品なども認められ盛んに集落址周辺でも祭祀行為が行われていたと思われる。

この遺跡の位置は、縄文時代には海岸が内陸部の奥深く入り込んでいたと考えられ、縄文後、晩期より沖積化が進んで当遺跡に認められた縄文晩期と弥生前期が混在する状況は、よく臨海性の遺跡に認められるもので、当遺跡でも海岸部に近い位置にあったと理解できる。

この５世紀段階では、後に「阿智潟」と称せられる入江状況になっていたと考えられ、当遺跡はその入江の最深部に当たる。また、当遺跡の北側丘陵を越えると作山古墳をはじめとする吉備中枢に至る。この吉備中枢部へは、「水別越え」と称し、谷部を抜けると容易に越えるこ

とができる位置関係にある。また、このルートの中間地点の丘陵頂部には古墳時代前半期と考えられる積石塚が群集しており、このルートの存在を裏付けている。このように、吉備中枢への容易なルートの存在と、入江の好位置を占める状況からみて、彼地からの渡来人もまた当遺跡に近接したであろう“泊”に上陸したと考えられる。

古墳時代後期～終末期

今回の調査では、5世紀前半期の数多くの遺構、遺物が認められたのち5世紀後半期～6世紀後半までの遺構、遺物はほとんど確認されていない。周辺地域においては、当遺跡から高梁川までの海に面する丘陵部には5世紀後半の小規模古墳が点在するものの、当遺跡が存在するこの狭小な扇状地域にはいまのところこの時期の遺構、遺物の報告はない。おそらくは、扇状地形中央部の微高地部に占地していたと思われる。7世紀前後になると、調査区北西端部に検出した窯址、丘陵東斜面中腹の西坂古墳がある。周辺地域でも、当遺跡北側の丘陵斜面を中心に横穴式石室を主体部とする小規模古墳が群集墳を形成している。また、遺跡南側にも数基の古墳の存在が確認されている。

今回検出したこの窯址は、特徴的な構造を示しており、製鉄関連の炭窯と考えられているもので、県内各地で検出している。今回の調査で検出された窯址は、他遺跡ではいまだ認められない側壁が強く焼けた焼土土壙が4基伴っていた。焼土土壙は、窯址の前庭部に2基1対で位置しており、窯址が炭窯だとすれば窯址から取り出された燃焼過程にある炭を土壙内に入れ、土を被せ鎮火させ消し炭にするためのものと考えられる。この焼土土壙は、出土した須恵器から7世紀前後の時期を示すものであった。この窯址は、県内ではこれまで美作地域、備中北部など県北部を中心に数多く検出されており、県南域では備中西部の鴨方町和田遺跡、沖ノ店遺跡で確認されているに留まっていた。しかし、最近では吉備中枢の中核的一角を占める総社市の丘陵部や岡山市津高地域にも数多くのこの窯址の存在が報告されている。時期もまた7世紀以前からと報告されており、当遺跡と同様の時期を示している。現在のところこれらの製鉄関連の遺構は、いずれも6世紀後半～7世紀初頭の時期のものが最も古いとされており、これらの遺跡が吉備中枢の周辺部に存在することは示唆的な状況を示している。

西坂古墳もこの窯址とさほど時期差のない構築と考えられ、周辺域でも傑出した規模を有しており、古墳の被葬者と鉄生産との関わりの深さが窺い知れる。

古代

古墳築造以後の7世紀代は、遺構は認められなく、遺物が若干量出土しているだけである。しかし、7世紀後半～8世紀初頭に入ると、遺構、遺物が爆発的に増加する。遺構は、山裾部中央（6区）を中心に建物、土壙、溝が確認されている。遺物は、山裾部末端の包含層、11、12区の低位部、さらに各々の谷の堆積層に膨大な量の遺物が出土した。低位部、谷の遺物出土

状況からみて、周辺域からの流入とは考え難く、山裾部にこれらの膨大な量の遺物に見合う施設を求めるべきと考えられる。しかし、出土遺物に対応する時期の遺構は、山裾部中央（谷－Aと谷－Bの間）に一部残存していただけであった。これら残存していた遺構は、建物の一部、土壙等で、到底出土した遺物に対応するものではなかった。その遺物の出土状況は、谷－A、谷－Bの出入口部、低位部の北部など、谷－A、Bの間の山裾部にその中心を求めることができる。したがって、調査時には後世の大規模な削平を受けて遺構の大半は消滅したと考えられるが、この谷－A、B間の山裾部を中心に、多量の遺物を消費した施設を想定すべきであろうと考えられる。これらの出土遺物は、須恵器を中心に、丹塗土器なども含むもので、須恵器は各器種のものがそろい上質のものも多量に含んでいた。これらの遺物は、質、量とも通常の居住域からの出土遺物とは異なるもので、公的施設および公的施設に類する遺構の存在を想起できる。尚、当遺跡が所在する地域は、先に述べたように吉備中枢と同一の窪尾郡三和郷に属し、『菅生里』に比定されている。この吉備中枢とは、当遺跡の北側丘陵とは谷部にルートが存在したと考えられる。さらに、当遺跡南側近くまで「阿智潟」と呼ばれる入海であったと考えられ、縄文晩期～弥生前期、古墳時代前半期の渡来人の存在などにみる臨海性の位置と性格を考える時、7世紀後半～8世紀初頭に存在したであろう公的施設に類する遺構もまた“泊”と密接に関連をもつものと考えられる。

以後、奈良時代～平安時代にかけての遺物は、量的には少なくなるものの継続して認められる。この時期の遺構は、明確なものはないものの、小規模ながら存在したと考えるべきであろう。

平安時代になると再び丘陵斜面、山裾部を中心に遺構、遺物が多く検出された。特に10世紀代に顕著で、8区の巨大建物をはじめ、1区、3区などで建物、井戸等が確認されている。8区の建物群は、丘陵東斜面の好位置に存在し、2×5間の大型建物が3棟以上残存していた。これらの2×5間の建物が存在する位置には、方位を異にする方形掘方の建物など数棟の建物が切り合って存在し、時期的な幅をもっていたことが明らかである。1区には、総柱の倉庫の建物も認められ、遺構の検出状況から考えて東斜面。山裾部には相当量の建物を中心とする施設が存在したと考えられる。この大型建物は、方位を共にしており、その位置と規模からみて、周辺域にも存在した同時期での中心的建物と理解できる。さらに、3区の建物－6周辺からは、銅印をはじめ多量の緑釉、硯などが出土している。銅印は、印面の文字の意味については不明であるが、その形態、大きさなどから平安時代の私印と考えられた。また、緑釉は今回の調査では3区を中心に各調査区から総数90点にもおよび、陶硯、丹塗土器など多量の出土遺物があった。

以上のように8区の大型建物を中心にこの山裾部一帯には、銅印を持ち得た階級層の存在、

大量の上質の土器などからみて、10世紀を中心にかなりの地方豪族層や公的関連の施設の存在が考えられる。また、このような状況は11世紀にはいっても認められる。さらに、中世にはいっても、丘陵斜面の5，10区を中心に遺構、遺物が数多く存在している。建物については、出土遺物も少なくその時期を確定しがたいものの、調査区北西部（5区）の建物－9、10を中心とする柱穴群は明らかに鎌倉時代の居住域として認められるものである。この建物－9、10を中心とする居住域は、遺構密度も高いものの、限定的かつ固定的な様相の居住域の状況を示している。建物については、8区等で認められたものよりやや小規模なもので、遺物についても少量の輸入陶磁器類を含むが大半は日常雑器が主体を占めている。10～11世紀に認められた状況に比べるとやや質的低下の様相を示していると見るべきであろう。その後、鎌倉時代の終末段階までは遺物の存在が認められるものの、以後の丘陵斜面の住居域としての占地は絶える。また、11、12区の低地部は、古代後半期以降水田化された状況を示している。

以上のように、今回の調査で明らかとなった当遺跡の性格は、縄文時代以降常に臨海性という位置に置かれ、この状況に規定された遺跡の性格を常に帯びていた。これ故、縄文時代晩期には瀬戸内でも最も早い段階に弥生文化の足跡を残し、古墳時代においては朝鮮半島の新しい技術と渡来人を受けいれた。さらには、7世紀後半以降には「阿智潟」の泊との深い関係が想定できる公的施設の存在など、常に当地域においてなお先進的、重要拠点の位置を占めた。

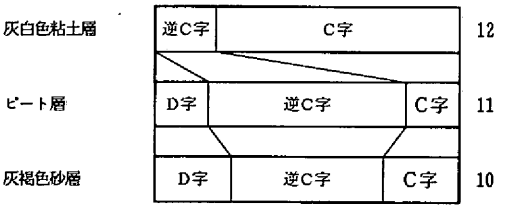
（中野）

第2節　縄文時代の土器

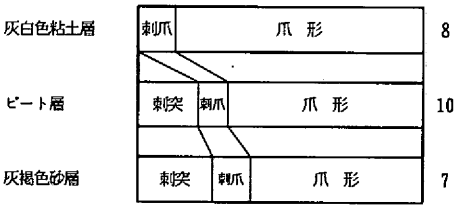
菅生小学校裏山遺跡から出土した縄文土器は2000点に及ぶ。出土した層位は上層から灰色粘土層、ピート層（植物遺体集積層）、灰褐色砂層の3層にわたっており、特にピート層からの出土が多かった。縄文土器相互の接合関係は、これを包含する層位のうちにおさまるものが多く、異なる層位にわたる場合でもその境界に集中しており、層位的には連続している。このことは堆積後に著しい改変をうけなかったことを示しており、調査時の所見もこれを裏付けている。ただし堆積層の性格上、時期を異にするものも含まれており、一括遺物として取り扱えるものではない。今回出土した縄文土器は、中期から晩期にわたっているが、ここではその主体をなす晩期のものについて検討する。

晩器の器種には深鉢・鉢・浅鉢があり、その割合は8：2と3層にわたってほぼ一定している。深鉢A類とB類の間では、上層でA類の占める割合が若干高くなっている。口縁端部に施

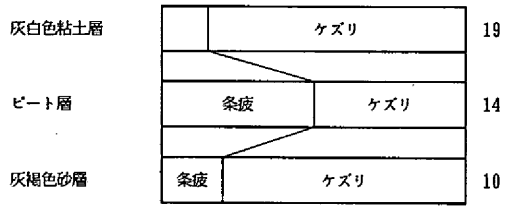
深　鉢



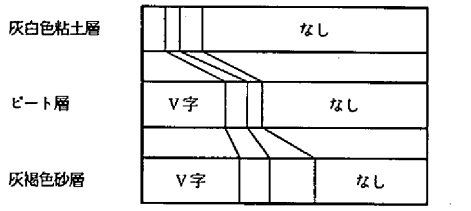
口縁部の文様（よこ）



口縁部の文様（たて）

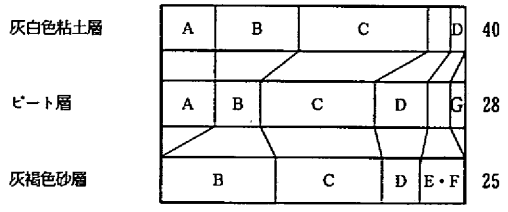


胴部の調整

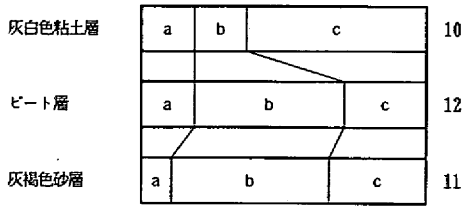


口縁部の刻目

浅　鉢

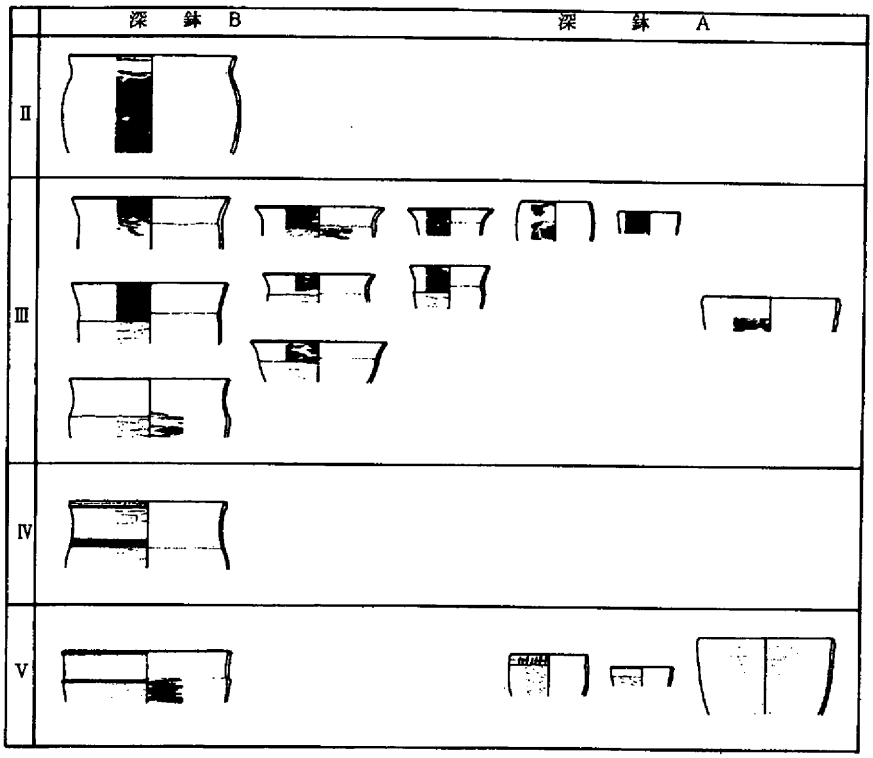


浅鉢の形態



口縁端部の突帯

表1　層位別の傾向

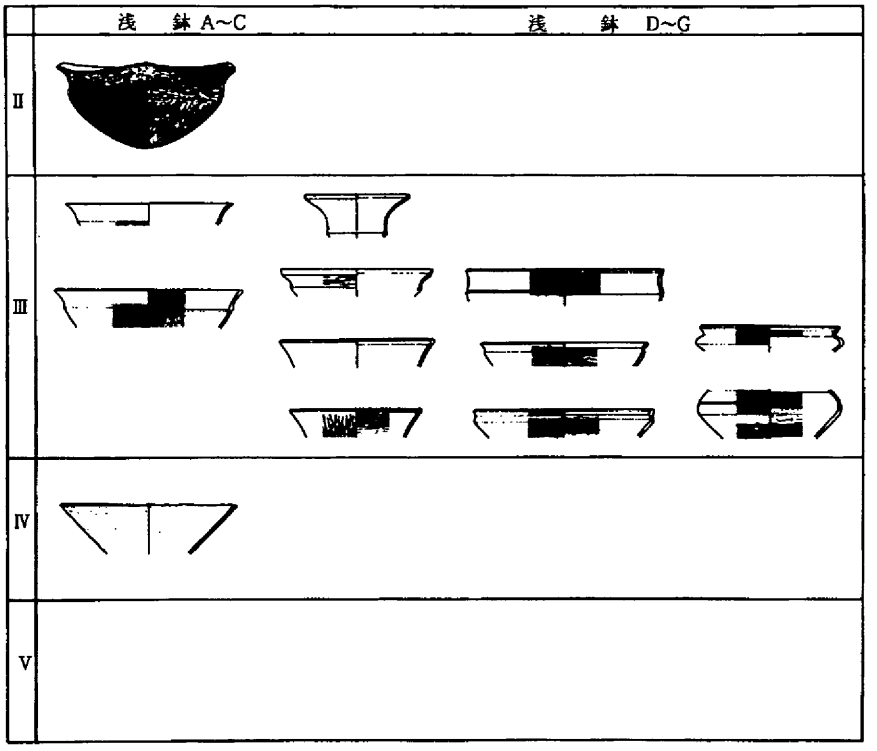


第266図　編　　年　　図（深　鉢）

された刻目は下層のものに多く認められ、その種類もＶ字形になるものが多い。口縁部の文様では、口縁部から縦に刺突文を施すものは下層のみ出土しているのに対し、爪形文は上層で多く出土している。また爪形文のうちＤ字形になるものは下層で出土しており、逆にＣ形になるものは上層で多く出土している。外面の調整は二枚貝によるものは中・下層に多く、ケズリ調整になるものは上層に多い。

浅鉢はＡ～Ｇ類に分けられ、Ａ類は上層から、Ｆ類は下層から多く出土している。口縁端部が直立するａ類は３層にわたって僅かながら認められるが、口縁端部につくりだされた突帯は、削り出しによるｂ類は下層に多く、粘土貼りつけによるｃ類は上層に多い傾向が認められた。深鉢や浅鉢に認められたこうした傾向は、これまでの研究の成果とおおむね一致する。

次に菅生小学校裏山遺跡の縄文土器の編年的位置について考えてみたい。岡山県の縄文晩期の編年的研究は、最近の資料の増加にともない精力的に進められてきた。とくに後半に位置付けられる突帯文土器については、平井勝(註１)や岩見和泰(註２)によって整理され、詳細に検討が行われている。しかし、この遺跡の中心となる晩期前半については、資料の乏しいこともあって、いまだ十分な検討がなされていないのが実情である。したがってここでは、家根祥多らによって進められている畿内の編年研究の成果を参考にしながら検討を進めることにする(註３)。

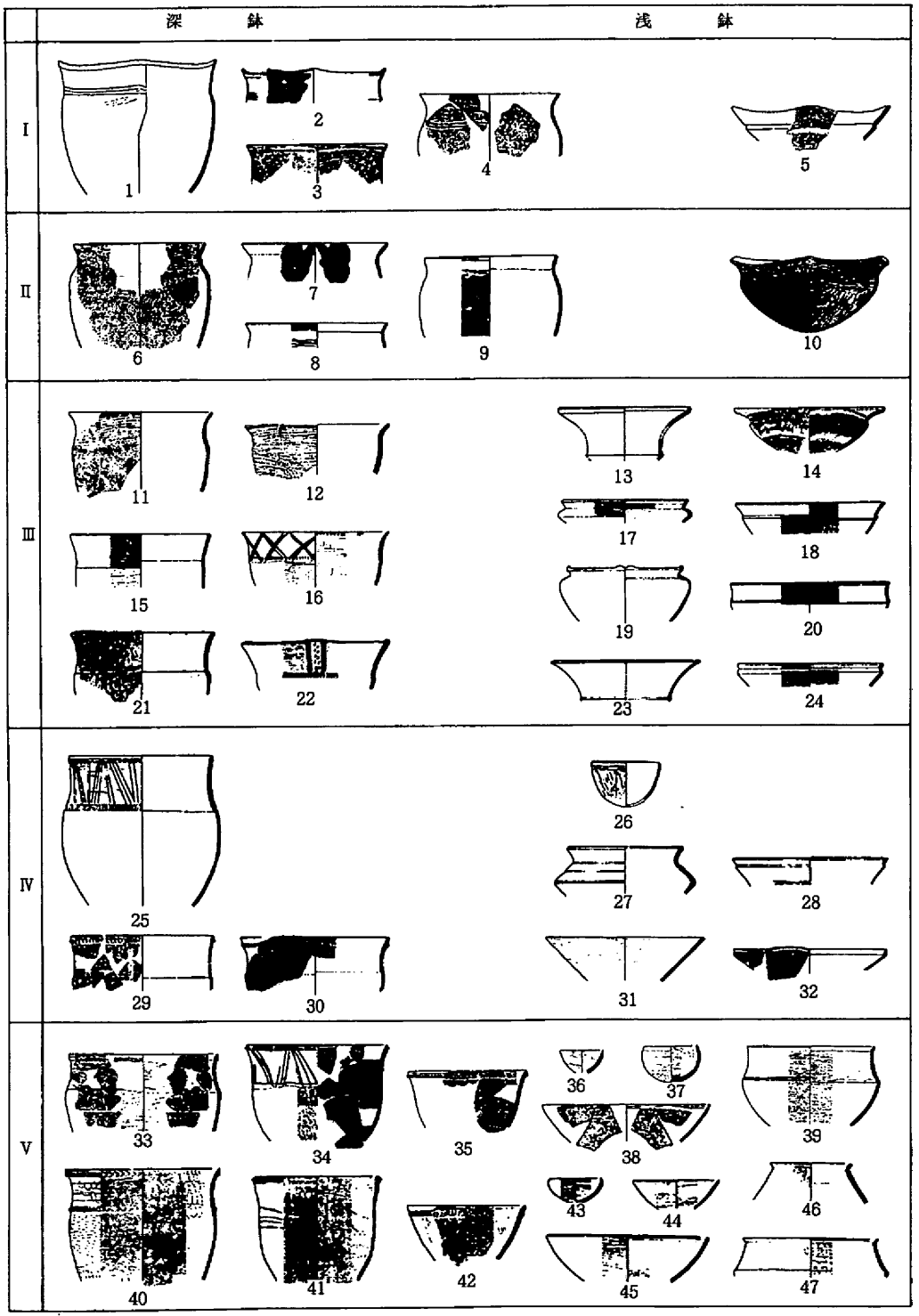


第267図　編　　年　　図（浅　鉢）

Ⅰ期　この時期のものは、55の深鉢のみである。波状の口縁部には円形の圧痕を施し、頸部には４条の沈線をめぐらしている。

Ⅱ期　深鉢42・43は、口縁部が強く屈折し、胴部はやや張りがある。口縁端部は平らに面取りし、外面全体を二枚貝で調整したのち頸部に強いナデを加えている。この時期の浅鉢185は、口縁部に三つの波頂部をもち、胴部の外面を二枚貝で調整する。

Ⅲ期　この遺跡の主体をなす時期である。深鉢36～41、44～51は、屈曲する長い口縁部と、張りの弱い胴部からなる。口縁端部は、丸くおさめる36～40、44～46と、刻目を施す47～51があり、後者がやや新しい様相を示す。口縁部から縦に施された文様では、刺突文が古く、爪形文でも粗大なものは新しい。また頸部に施された爪形文では、D字形になるものが古くなる。これらはいずれも口縁端部に刻目が伴うところから、この時期の古い段階までは逆上らない。外面の調整は、全面を二枚貝で調整する36・37・44・45が古く、口縁部をナデで仕上げる49～51や、胴部をケズリ調整する38～41、46～51はやや新しい。この時期の浅鉢は、口縁端部に突帯をつくりだすものが多く、181のように口縁部を上方に拡張するものから変化したと考えられている。197・199では突帯が削り出されており、粘土を貼りつけて突帯とした192・193に先行するものと思われる。



第268図　中部瀬戸内における縄文晩期の土器編年

Ⅳ期　この時期の深鉢52・53は、口縁部に突帯を貼りつけ、平らに面取りした端部には刻目を施している。また内面に沈線をめぐらすものもある。137～139では突帯の断面は台形となり、刻目が施されないところから、突帯文でもやや古い様相を示している。これに対し、144・146では口縁部と突帯の刻目が同時に施されており、新しい要素と考えられる。頸部に施された爪形文は大きなC字形で、押引き状になる129もこの時期のものと思われる。口縁部はナデで調整するものが多いが、二枚貝による条痕を残すものもある。また、この時期には突帯をもたない深鉢も知られており、Ⅲ期の新段階としたもののなかにはこの時期まで下るものが含まれている可能性がある。Ⅳ期の浅鉢は明確ではないが、184の鉢などが伴う可能性がある。

Ⅴ期　深鉢54は、口縁部の上下に2条の刻目突帯をめぐらしている。口縁端部は尖り気味で刻目はなく、内面の沈線も認められない。口縁部はナデで調整され、胴部はケズリで仕上げている。148～153もこの時期と考えられるが、149は二枚貝条痕を残しており、Ⅳ期に逆上る可能性がある。このほかに、椀や鉢、皿などが伴うと考えられるが確実ではない。

次に他地域との並行関係について見てみたい(註第268図)。Ⅰ期の資料はあまり多くないが、笠岡市津雲貝塚や倉敷市浜遺跡の出土資料にこの時期のものがある。深鉢1・2の口縁部は波状となり頸部に3条の沈線をめぐらす。端部の内面には下から抉るように沈線を施す。この沈線は、福田KⅢ式にも認められたところであり、時間的連続性がうかがわれる。また香川県永井遺跡の深鉢3は、頸部の沈線が失われているようで、やや後出する様相を示す。浅鉢は倉敷市福田貝塚の5がこれに伴う可能性がある。これらは山口県岩田遺跡のⅣ類のなかでも古相に相当し(註4)、畿内の滋賀里Ⅰ・Ⅱ式に並行するものと考えられる(註5)。Ⅱ期の資料は舟津原Ⅰ類、岩田Ⅳ類の新相に相当し、滋賀里Ⅲa式のなかに類例が認められる。香川県永井遺跡の深鉢6・7ではⅠ期で認められた口縁部内面の沈線は失われているが、口縁部が肥厚して頸部との区別は明瞭であり、菅生遺跡のものより先行する可能性が強い。Ⅲ期は、前半が舟津原Ⅱ類に、後半が舟津原Ⅲ類や谷尻・原下層式にあたる。このうち、舟津原Ⅱ・Ⅲ類の間を埋めるものとして、総社市南溝手遺跡の資料がある。これは口縁部を二枚貝ないしナデで調整し、体部をケズリで仕上げるもので、口縁部には刻目や爪形文などの文様は認められない。口縁端部に突帯を削り出す浅鉢を伴っている。これに近い内容をもつものは、岡山市原尾島遺跡丸田地区の調査でも出土しており、谷尻式に先行する段階として位置付けることが可能である。Ⅲ期はその特徴から、畿内の滋賀里Ⅲb式に並行するものと思われる。Ⅳ期は、突帯文の出現期であり、前池式に相当する。山陽町南方前池遺跡では、突帯の断面は台形になるものが多く、刻目のないものが見受けられる。また爪形文は粗大なC字形になるものが多いが、逆C字形も一定量存在する。この点で前池遺跡の資料は、同じ前池式である倉敷市浜遺跡のものより古相を呈している。これらは畿内の滋賀里Ⅳ式に並行する。Ⅴ期は沢田式にあたり、畿内の船橋式

に並行する。平井勝は沢田式に先行するものとして岡山大学構内遺跡出土資料をあて、畿内の口酒井式に並行するものと考えているが、報告者の山本悦世は、沢田式の古段階としてとらえている。確かに前池式と沢田式との間には新型式が存在すると思われるが、その内容については意見の別れるところである。ここでは二条突帯の出現をもって、Ⅴ期の指標とするに止めておくことにする。

これまで菅生遺跡の縄文土器について検討してきたが、冒頭でも述べたように、包含層の性格から一括遺物として取り扱えるものではない。したがってここで行った時期区分も、今後より一括性の高い資料の増加を待って、再度検証する必要があろう。

註

註1、平井勝「岡山県における縄文晩期突帯文土器の様相」『古代吉備10』1988

註2、岩見和泰「刻み目突帯文土器の成立と展開」『古代吉備14』1992

註3、家根祥多「近畿地方の土器」『縄文文化の研究4』1981

〃　「縄文土器から弥生土器へ」『縄文から弥生へ』1984

註4、潮見浩「山口県岩田遺跡出土縄文時代遺物の研究」『広島大学文学部紀要18』1965

註5、田辺昭三ほか「湖西線関係遺跡調査報告書」1973

第268図出典（一部改変）

1、春成秀爾「中国・四国」『新版日本考古学講座3』1969

2・4・19・29・30・32、間壁忠彦ほか「広江・浜遺跡」『倉敷考古館研究集報14』1979

3・6・7・11・14、渡辺明夫「永井遺跡」『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告9』1990

5、鎌木義昌「福田古城貝塚」『岡山県史　考古資料編』1986

12、下沢公明「阿津走出遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告71』1988

16、岡田博「百間川原尾島遺跡2」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告56』1984

21、二宮治夫ほか「宮の前遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告12』1976

22、鎌木義昌「備前原遺跡」『岡山県史　考古資料編』1986

23、高畑知功ほか「谷尻遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告11』1976

25～28、近藤義郎「南方前池遺跡」『岡山県史　考古資料編』1986

33～39、山本悦世「津島岡大遺跡3」『岡山大学構内遺跡発掘調査報告5』1992

40～47、岡田博ほか「百間川沢田遺跡2」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告59』1985

第3節　石　　器

菅生小学校裏山遺跡からは、603 点の石器と、多量のサヌカイトの剥片、砕片、原材等が出土している。石器の内訳は表2に示すとおりであるが、すべての石器を図化することができないため、形態分類し、一覧表に示した。その中で、石器片としたものは、特定はできないものの、石鏃、石庖丁、スクレイパー等の破片と思われるもので、不明石器としたものは、既存の石器の範疇に入らないものをこれに含めた。

しかし、これら多量に出土した石器は、石器を使用した当該期の遺構に確実に伴うものがなく、その所属時期を明らかにすることはできない。そのため、各時期の器種構成や様相を捉えることは困難であり、ここでは、各器種の分類基準を中心に述べていきたい。

石鏃

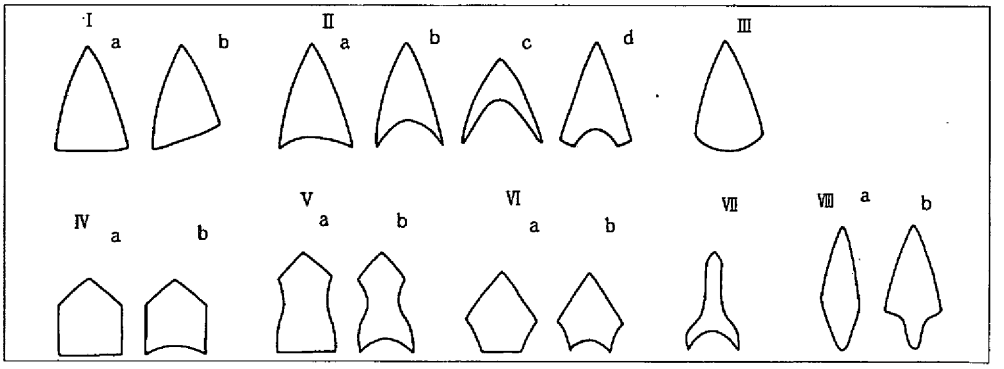
平面形態によって、大きく8類に分類できる。

Ⅰ類　三角形を呈し、基部が直線的なもの。基部が中心軸に対して垂平なものをⅠａ類、斜めになるものをⅠｂ類とする。

Ⅱ類　三角形を呈し、基部が内湾するもの。内湾の形態・度合によりさらに細分され、内湾度が非常に小さいものをⅡａ類、全長の⅕～⅓前後のものをⅡｂ類、身の長さが脚の長さと同程度か、あるいは短いものをⅡｃ類、基部の中央部のみを抉り、脚端部が張り出すものをⅡｄ類とする。

Ⅲ類　略三角形を呈するが、基部は外湾し丸味を持つ。

Ⅳ類　五角形を呈するもので将棋の駒の形に似る。さらに基部の形態によって、直線的なもの（Ⅴａ類）と、内湾するもの（Ⅴｂ類）とに分けられる。



第269図　石鏃形態分類図

Ⅴ類　ほぼ五角形を呈するが、両側縁が内湾するもの。Ⅴ類も基部が直線的なもの（Ⅴａ類）と、内湾するもの（Ⅴｂ類）に分かれる。

Ⅵ類　五角形ではあるが、先端に比べ側縁が短くなる一群である。Ⅵ類もやはり、直線的な基部をもつもの（Ⅵａ類）と、内湾する基部を持つもの（Ⅵｂ類）に細分される。

Ⅶ類　身の部分が細長く、基部が張り出す形態を持つもの。

Ⅷ類　茎を持つもので、鏃身と茎の境が不明瞭なものをⅧａ類、境が明瞭なものをⅧｂとする。

これらの中で、Ⅰ～Ⅲ類には鏃身の幅が極端に狭いものがあり、将来的にはⅠ－Ⅲ類とは別に分類する必要があるかもしれない。

以上石鏃を分類したが、そのうちのいくつかはある程度時期を特定することができる。Ⅱｃ類は、縄文時代でも比較的古い時期の所産である。またⅣ～Ⅵ類は、縄文時代後、晩期に盛行する鏃で、中部瀬戸内に特徴的に現われ、弥生時代には、ほとんどみられなくなる。

Ⅷ類は、この地域では、縄文時代にはほとんどみられないことから磨製石鏃の影響を受けて、弥生時代に出現したものと思われる。

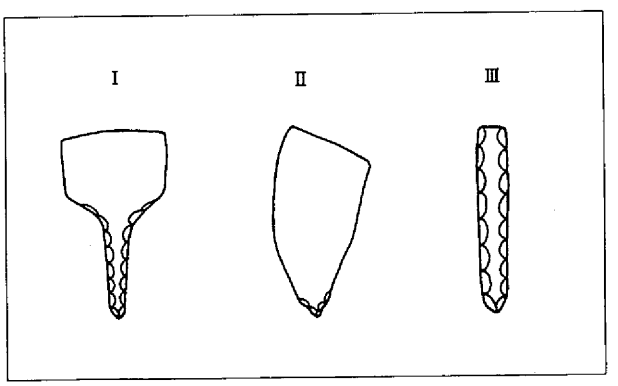
菅生遺跡からは、Ⅰａ類が4点、Ⅰｂ類が1点、Ⅱｂ類3点、Ⅲ類1点、Ⅳａ類1点、Ⅵｂ類1点、破損のため形態の不明瞭なものが5点出土しているが、形態的に縄文時代に属するものが多いのではないかと思われる。

石錐

石錐は、形態・調整等から大きく3つに分類する。

Ⅰ類　錐部が伸び、頭部と錐部の境が明瞭なもの。

Ⅱ類　剥片先端の尖がった部分に僅かに調整を加え、短い錐部を作出するもの。他の部分にも調整はあまり施されず、剥片の形状を大きく変えない。



第270図　石錐形態分類図

Ⅲ類　棒状を呈し、錐部と頭部の境が不明瞭なもの。

県内ではⅠ類は多く見られるが、Ⅱ・Ⅲ類は非常に少ない。Ⅱ類は今回の調査で初めて確認され、本遺跡から2点、堀越遺跡（註1）から1点出土している。

石匙

つまみ部に対して刃部が横に長い横型のものをⅠ類とし、縦に長い縦型のものをⅡ類とした。Ⅱ類は、一方の側縁に背部を作出している。

菅生小学校裏山遺跡からは、Ⅰ類が3点、Ⅱ類が2点出土している。

打製石庖丁

菅生小学校裏山遺跡からは8点の打製石庖丁と、3点の未製品と思われるものが出土しており、未製品については磨製・打製の判別はできない。打製石庖丁はいずれもほぼ長方形を呈し、両側縁に抉りを有するものである。

岡山県南部の遺跡では、磨製石庖丁の出土例は極めて少なく、打製のものが主流を占め、そのほとんどがサヌカイトで作られている。菅生小学校裏山遺跡での打製のみという点では他の遺跡と共通するが、サヌカイト製の1点を除き他はすべて頁岩製である。サヌカイト製のものは使用頻度が高く、磨耗痕跡が顕著で光沢もみられる。それに対し頁岩製のものは、遺存状態の悪いものが多いこともあるが使用痕がみられず、石材の性質からか刃部の作りも粗雑なものが多い。やはりサヌカイト製のものが重宝されたようである。

菅生小学校裏山遺跡では、石器が盛行した時期の遺物として、縄文時代後期～弥生時代中期の土器が出土しており、これらの石庖丁は弥生時代に属する可能性が極めて高いが、広島県福山市洗谷貝塚では、抉りを有する打製石庖丁状の石器が縄文時代後期の土器に伴って出土している（註2）。さらに近年、百間川沢田遺跡からも、縄文時代後期の土器と共に抉りを持つ打製石庖丁状の石器が出土しており（註3）、形態のみでの時代確定は困難になりつつある。また、弥生時代には打製石庖丁が盛行しない地域ではあるが、九州でも縄文時代後晩期に抉り入りの打製石庖丁状石器が散見されるようである（註4）。

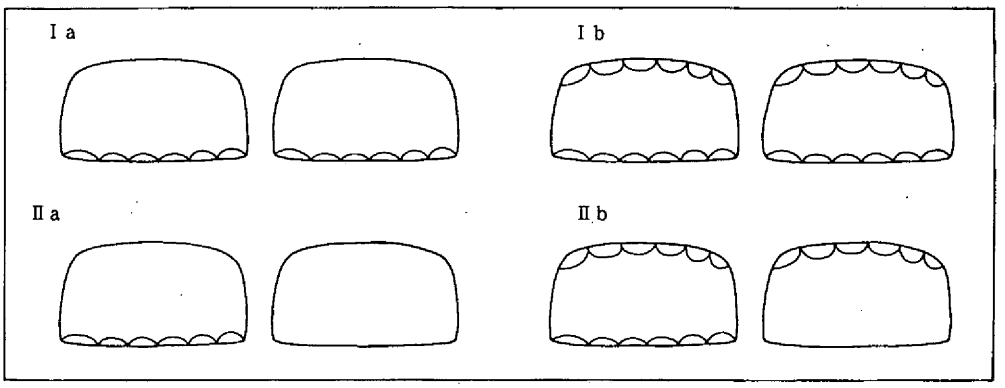
従来瀬戸内地域においては、打製石庖丁は弥生時代に属するもので、大陸系磨製石器である磨製石庖丁の影響下に生まれたものと考えられてきた。しかし、このように縄文時代後期から打製石庖丁と同形態の石器が存在することは、打製石庖丁が磨製石庖丁とは系譜を異にするものと考えられ、水稲農耕を受け入れる際に磨製石庖丁を選択せず、従来から存在した収穫具を踏襲したのではないかと思われる。

スクレイパー

刃部の調整により大別でき、刃部を両面加工するものをⅠ類、片面加工のものをⅡ類とした。さらに背部に調整を施さないものをa類、背部を加工し素材の形状を変えるものをb類として細分した。Ⅱ類は、一方の面からのみ調整を加えるため、刃部の角度が急斜になるものが目立ち、掻器的な機能を持つものが多いのではないかと思われる。a類は、背部に自然面、折断面、

前段階の剝離面をそのまま利用している。

菅生小学校裏山遺跡からはⅠ類が144点出土しており、そのうちⅠａ類は52点、Ⅰｂ類は40点である。Ⅱ類は61点で、Ⅱａ類が32点、Ⅱｂ類が13点を数える。圧倒的にⅠ類が多く、これらは大きさや形状もさまざまである。また刃部の調整にも深浅があり、鋸歯状に刃をつけるも



第271図　スクレイパー形態分類図

の、凹凸がほとんどなく直線的な刃部を持つものなど多種多様で、「切る」「削る」等のさまざまな用途に使用されたものと思われる。

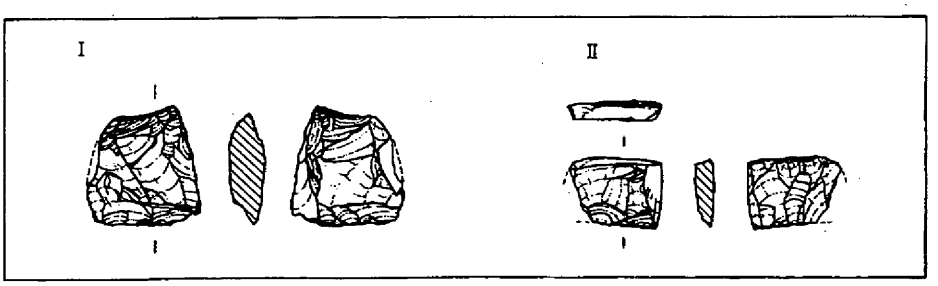
スクレイパーは、最も多く出土する石器の１つではあるが、定形化していないことからあまり研究はすすんでいない。用途を一定程度限定していくためにも、刃部の調整の施し方等、さらに細かな分類が必要かもしれない。

楔形石器

百間川兼基・今谷遺跡の分類（註５）に準ずる。

Ⅰ類は、上下の縁辺に両極技法によると考えられる階段状の剝離痕が多く見られ、縦断面が凸レンズ状を呈するものである。裁断面を有するものもある。

Ⅱ類は、折断面や自然面等の平坦面を有し、相対する一辺が、刃部調整を施したのではなく

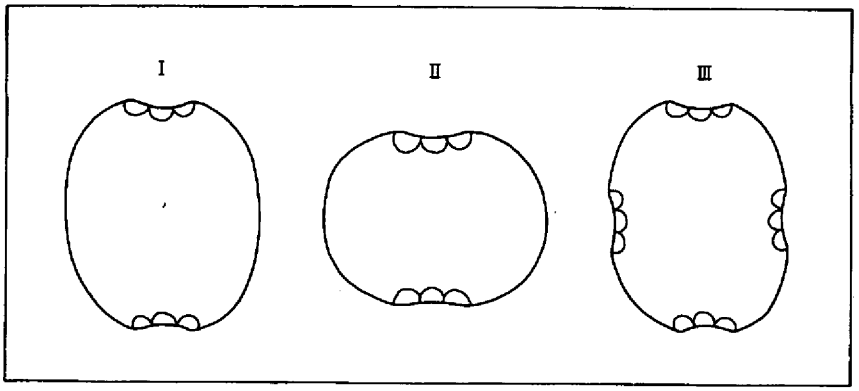


第272図　楔形石器分類図

階段状の比較的細かい剝離痕を持つものが多く、エッジが直線的に潰れているものも少なくない。また打痕を多く残す。

Ⅱ類をクサビのような機能を有する石器とみるか、石核と考えるかは、Ⅰ類と同様判別しにくいものである。石核にもⅡ類と類似するものもあるが、Ⅱ類としたものには、小型で、平坦面には打痕が多く見られるが平坦面から目的的な剝片はとられておらず、そのため素材を剝離した際の剝離面を大きく残し、相対する一辺には細かい階段状の剝離痕がみられるものも多く、石核とは考えにくい。また平坦面からの剝離がみられるものも、石器の素材とするには小さすぎるものが多い。このようなことから、一部石核も含まれる可能性もあるが、クサビのような機能を有したものも多いのではないかと考えられる。

Ⅰ類は3点、Ⅱ類が3点出土している。



第273図　打ち欠き石錘形態分類図

石錘

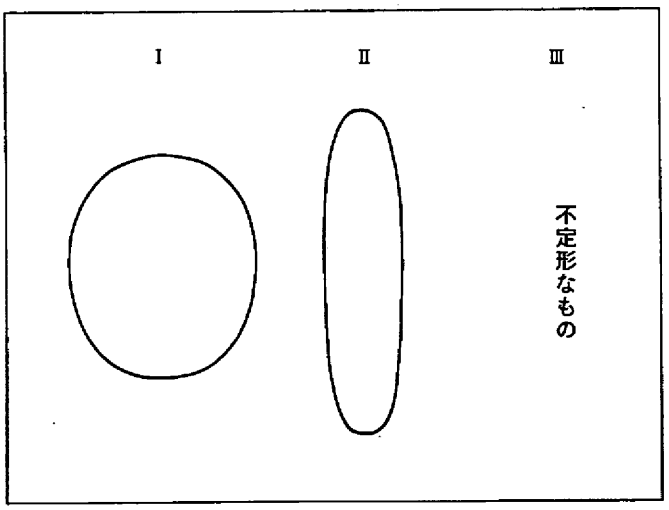
菅生小学校裏山遺跡からは、56点の石錘が出土しており、すべて偏平な礫を打ち欠いたものである。これらの打ち欠き石錘は、打ち欠きの位置から3つに分類できる。

Ⅰ類　長軸方向に打ち欠いたもの

Ⅱ類　短軸方向に打ち欠いたもの

Ⅲ類　長・短軸両方向に打ち欠いたもの

打ち欠き石錘は縄文時代に盛行し、弥生時代に入っ



第274図　敲石形態分類図

てからは「瀬戸内型（註6）」と呼ばれる、やや厚手の円礫に敲打による溝を巡らせたものが主流となるため、菅生遺跡出土のものはすべて縄文時代の所産と思われる。

Ⅰ類が44点、Ⅱ類が10点、Ⅲ類が2点とⅠ類が圧倒的に多いが、他の遺跡に比べ、Ⅱ類も目立つ。これらの石錘は、重量が70ｇ強～550ｇ強までとバラツキがあるが、150ｇ～350ｇくらいまでのものが多いようである。

敲石

その形態によって3つに分類する。

Ⅰ類　円形、または楕円形の平面形態を有し、上下両端や側縁、あるいは全周縁に敲打痕を持つ。稀に表裏面中央部に浅い敲打痕を有するものもある。

Ⅱ類　細長い河原石を利用したもので、上下両端に敲打痕を有するものが多い。また側縁の一部に敲打痕のみられるものもある。

Ⅲ類　Ⅰ・Ⅱ類の範疇に入らない不定形な礫を使用したものを一括する。

菅生小学校裏山遺跡からはⅠ類が20点、Ⅱ類が8点、Ⅲ類が1点出土している。

以上、出土石器をみてきたが、この他サヌカイトの剥片、砕片等も多量に出土しており、製品も含めると約41.5kgにも及ぶサヌカイトが搬入されている。それらのサヌカイトは、最後まで細かく使用されたのではなく、大型の剥片が多数みられ、また石核も、剥片剥離があまり進行しない状態で放棄されたものが多い。このような大型の剥片、石核、一部の石器等は、ピート層上層からまとまって出土しており、縄文時代後期～弥生時代前期に属する可能性が高いものと思われる。縄文時代のサヌカイトの流通や使用の仕方を捉えられる遺跡としては、倉敷市阿津走出遺跡（註7）や福山市洗谷貝塚（註8）等があげられるが、前者は製品を除くサヌカイトの総量が約252.4kgと多量に入っており、後者も集石遺構から45.3kgものサヌカイトと考えられる石材が検出されている。サヌカイトの総量もさることながら、加工されない剥片等が多いことも特徴としてあげられる。

弥生時代中期後半の石器が多数出土している旭川流域の百間川兼基・今谷遺跡（註9）では、剥片、石核共に可能な限り使用されている。また、弥生時代中期の山陽町用木山遺跡から（註10）は、40kgを越えるサヌカイトが出土しており、原材等も見られるが、加工されたものが多い。折損品等も「－さらにより小形の石器に再生加工を施そうとする、積極的な意志が働いたもの－」と考えられており、ここでもサヌカイトが重要なものとして、可能な限り使用しようとする傾向がみられ、菅生小学校裏山遺跡や他の縄文遺跡の状況とは異なっている。

このような傾向から、縄文時代と弥生時代では、サヌカイトの搬入の仕方が異なり、弥生時代には縄文時代に比べサヌカイトがより入手しにくいものとなった可能性も高い。

表－2　出土石器一覧表

器種	石鏃	石錐	石匙	石槍状石器	石包丁	石包丁未製品	スクレイパー	楔形名器	有肩石斧	石鍬	石鍬未製品	石核	乳棒状石斧	小型方柱状片刃石斧	
点数	16	3	5	2	8	3 (2?)	214 (3?)	6 (4?)	3	5	1?	67 (7?)	1	1	
器種	太型蛤刃石斧	石棒	砥石	石皿	石錘	凹石	敲石	敲石&磨石	磨石	台石	不明石器	石器片	RF	UF	計
点数	1	1	31	4	56	7	29	14	2	2	15	14	32	51	594

表－3　旧石器時代出土石器一覧表

器種	ナイフ型石器	翼状剥片	翼状剥片石核?	尖頭器	尖頭器未製品	有舌尖頭器	計
点数	4	1	1	1	1	1	9

註

註1　同時刊行予定「堀越」に収録

註2　小都隆「洗谷貝塚」福山市教育委員会1976

註3　1992年月刊行予定の「百間川遺跡群沢田遺跡3」『岡山県埋蔵文化財調査報告』84に収録

註4　高木正文「九州縄文時代の収穫用石器」『古文化論攻』鏡山猛先生古稀記念論文集刊行会1980

註5　平井典子「第7節　石器－百間川遺跡群兼基遺跡Ⅰ・今谷遺跡Ⅰ」『岡山県埋蔵文化財調査報告』51　岡山県教育委員会1982

註6　和田晴吾「7漁猟具　Ⅰ土錘・石錘」『弥生文化の研究第5巻道具と技術』1985

註7　下澤公明「阿津走出遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』71　1988

註8　前掲註2に同じ

註9　高畑知功他「百間川遺跡群兼基遺跡Ⅰ・今谷遺跡Ⅰ」『岡山県埋蔵文化財調査報告』51　1982

註10　神原英朗編「用木山遺跡」岡山県山陽町教育委員会　1977

付載１　菅生小学校裏山遺跡より出土の縄文土器に付着の赤色顔料物質の微量化学分析

武庫川女子大学薬学部
安田博幸　森 眞由美

倉敷市西坂に所在する菅生小学校裏山遺跡は、山陽自動車道倉敷I.C.工事にともなって調査された15,000㎡以上の規模の、縄文晩期から鎌倉時代にわたる複合遺跡であるが、遺跡の調査区の東端にあたる12区で、縄文晩期の遺構からの出土品中に、赤色顔料が付着している土器が検出された。

今回、この縄文土器に付着の赤色顔料について、化学分析による鑑定を依頼されたので、筆者らの常法[1]とするろ紙クロマトグラフ法と検出試薬による微量化学分析を行い、所見を得たので報告する。

試料の外観および分析用試料の採取

試料　菅生小学校裏山遺跡12区Ｂピート層出土の縄文土器に付着の赤色顔料。鋼針を用いて、注意深く削り取った３ｍを分析用試料とする。

試料検液の作製

上記の分析用試料をガラス尖形管に移し、濃硝酸１滴と濃塩酸３滴を加え、加温して酸可溶性成分溶解させたのち、適当量の蒸留水を加えて遠心分離機にかけ、酸不溶性成分から分離した上澄液を加熱濃縮して、ろ紙クロマトグラフ用の試料検液とする。

ろ紙クロマトグラフ法と検出試薬による呈色反応からの赤色顔料成分の確認

東洋ろ紙No.51Ｂ（２㎝×40㎝）を使用し、ブタノール硝塩酸を展開溶媒として、試料検液と、対照の鉄イオン（Fe^{3+}）と水銀イオン（Hg^{2+}）の標準液を同条件下で展開した。

展開の終わったろ紙を風乾かしてから縦に二分し、その一方は検出試薬として１％ジフェニルカルバジドのエタノール溶液を噴霧してからアンモニア蒸気に曝し、もう一方には、検出試薬として0.05％ジチゾンのクロロホルム溶液を噴霧して、それらの際に、ろ紙上に発現するそれぞれの呈色スポットの位置（Rf値で表現する）と色調を検した。

上記試料検液、ならびに対照イオンの標準液について得られたろ紙上のスポットのRf値と色調は、下記の表１、２のとおりである。

（１）ジフェニルカルバジド・アンモニアによる検出：（Hg^{2+}は紫色、Fe^{3+}は紫褐色のスポットとして検出される。）

表１　ジフェニルカルバジドによる呈色スポットのRf値と色調

試　　料	Rf値（色調）
試料検液	0.15（紫褐色）0.89（紫色）
Fe^{3+} 標準液	0.15（紫褐色）
Hg^{2+} 標準液	0.89（紫色）

（２）ジチゾンによる検出：（Hg^{2+}は橙色スポットとして検出され、Fe^{3+}は反応陰性のため呈色せず。）

表２　ジチゾンによる呈色スポットのRf値と色調

試　　料	Rf値（色調）
試料検液	0.89（橙色）
Fe^{3+} 標準液	呈色スポット発現せず
Hg^{2+} 標準液	0.89（橙色）

判　　定

以上のように、菅生小学校裏山遺跡12区Bピート層出土の縄文土器に付着の赤色顔料の試料検液からは、Hg^{2+}とFe^{3+}の呈色スポットがともに検出された。ただし、Fe^{3+}のスポットは呈色がごく薄く、その由来としては、分析用試料の採取の際に混入した、土器の胎土中の鉄成分（Fe_2O_3）が考えられるから、土器に付着の赤色顔料の主体は水銀朱（辰砂、HgS）であると判定する。なお、一言付言したいのは、今回の分析例のように辰砂が縄文土器に付着して出土した例は珍しい事象であって、この辰砂が当時どこから入手できたかが、興味ある問題点として指摘できよう。　　（1991年12月分析）

〔註〕

1）安田博幸：「古代赤色顔料と漆喰の材料科学」『斎藤　忠編集　日本考古学論集１　考古学の基本的諸問題』吉川弘文館 pp.389-407（1986）

安田博幸：「古代赤色顔料と漆喰の材質ならびに技法の伝流に関する二、三の考察」『橿原考古学研究所論集　第七』吉川弘文館 pp.449-471（1984）

付載２　土器に使用された接着材様物質の分析

東京国立文化財研究所修復技術部・主任研究官
川野邊　渉

１．はじめに

分析した試料は、破損した土器の断面に付着していた黄褐色～黒色のタール状物質であり、やや弾性を有する硝子状を呈している。その形態から、土器の接着のために用いられたことが推測されたので、本試料は、コールタールあるいは、漆などの樹脂類ではないかと推定し分析を行った。

２．分析

ａ．分析試料

本試料同定のために、比較試料として、コールタール、木タール、日本産漆（硬化皮膜）、中国産漆（硬化皮膜）を用いた。

ｂ．予備実験

試料、比較試料それぞれを空中で燃焼させ、燃焼状態、燃焼生成物などを比較し、さらにＴＨＦ可溶成分をガスクロマトグラフィーの予備分析にかけた。

この結果から、本試料は、タール類を含まないことがほぼ明らかとなったので、さらに、本試料、日本産漆および中国産漆をＦＴＩＲと熱分解ガスクロマトグラフィーを用いて比較を行った。

ｃ．ＦＴＩＲ（フーリエ変換赤外分光光度計）分析

本試料、日本産漆および中国産漆をＡＴＲ法によってフーリエ変換赤外分光光度計を用いて赤外スペクトルを測定し比較を行った。結果を図１～３に示した。

使用装置：スペクトラテック社製赤外顕微鏡ＩＲ－Ｐｌａｎ

ｄ．熱分解ガスクロマトグラフィー分析

本試料、日本産漆および中国産漆をヘリウム気流中600 ℃で熱分解を行い、ガスクロマトグラフィーによって分析を行った。結果を図４、５に示す。

使用装置：島津社製ＲＹＲ－２Ａ、ＧＣ－７Ａ

分析条件：カラムCBP1-M25-025、検出器：ＦＩＤ、キャリア：ヘリウム

3．結論

図１～３に示したように、ＦＴＩＲスペクトルからは、日本産漆（図２）および中国産漆（図３）は、よく一致を示し、これらの主要な特徴を試料のスペクトル（図１）も有していることから、本試料は、漆類似の物質であることが推測された。図１と図２、図３との相違は、試料が硬化反応を起こしてから経過した時間が非常に異なるために、架橋密度や、一部の官能基の酸化反応などによる部分構造の違いを反映していると考えられる。また、比較試料は、純粋なものを用いたために、それぞれの吸収がより強く出ている。

図４と図５に示したように、試料の熱分解によって生じる分解生成物の組成は、非常によく一致した。これらのことから、本試料は、漆であることが結論付けられる。

---------- PARAMETERS OF SPECTRUM -- 1992/01/28 15:33:30 ---
MEASURING MODE ; %T
RESOLUTION ; 8.0 cm-1
ACCUMULATION ; 100
AMP GAIN ; AUTO
DETECTOR ; DETECTOR 2 (9 mm/sec)
APODIZATION ; HAPP-GENZEL
REMARKS ; M1 土器の接着剤
ANALYST ;

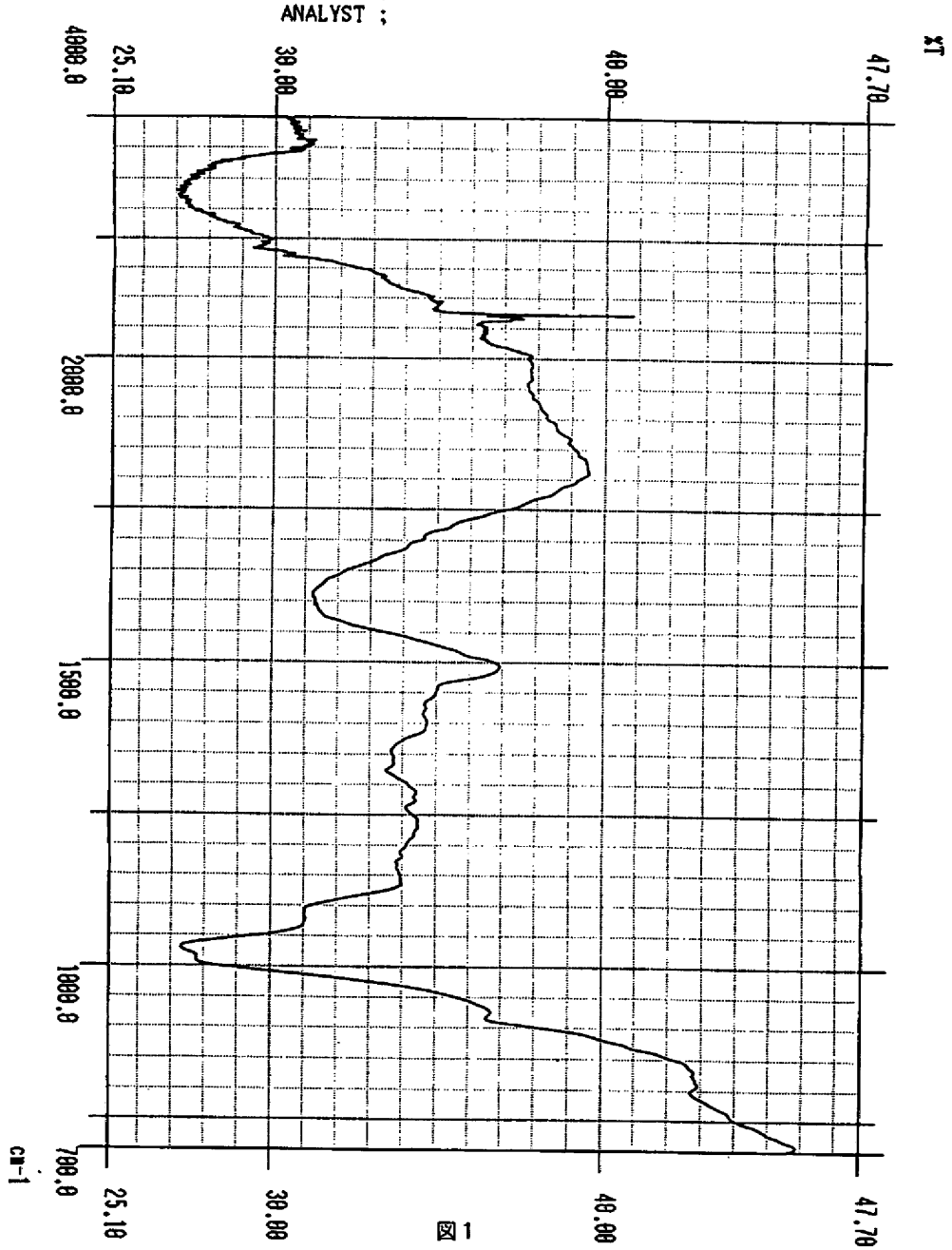


図1

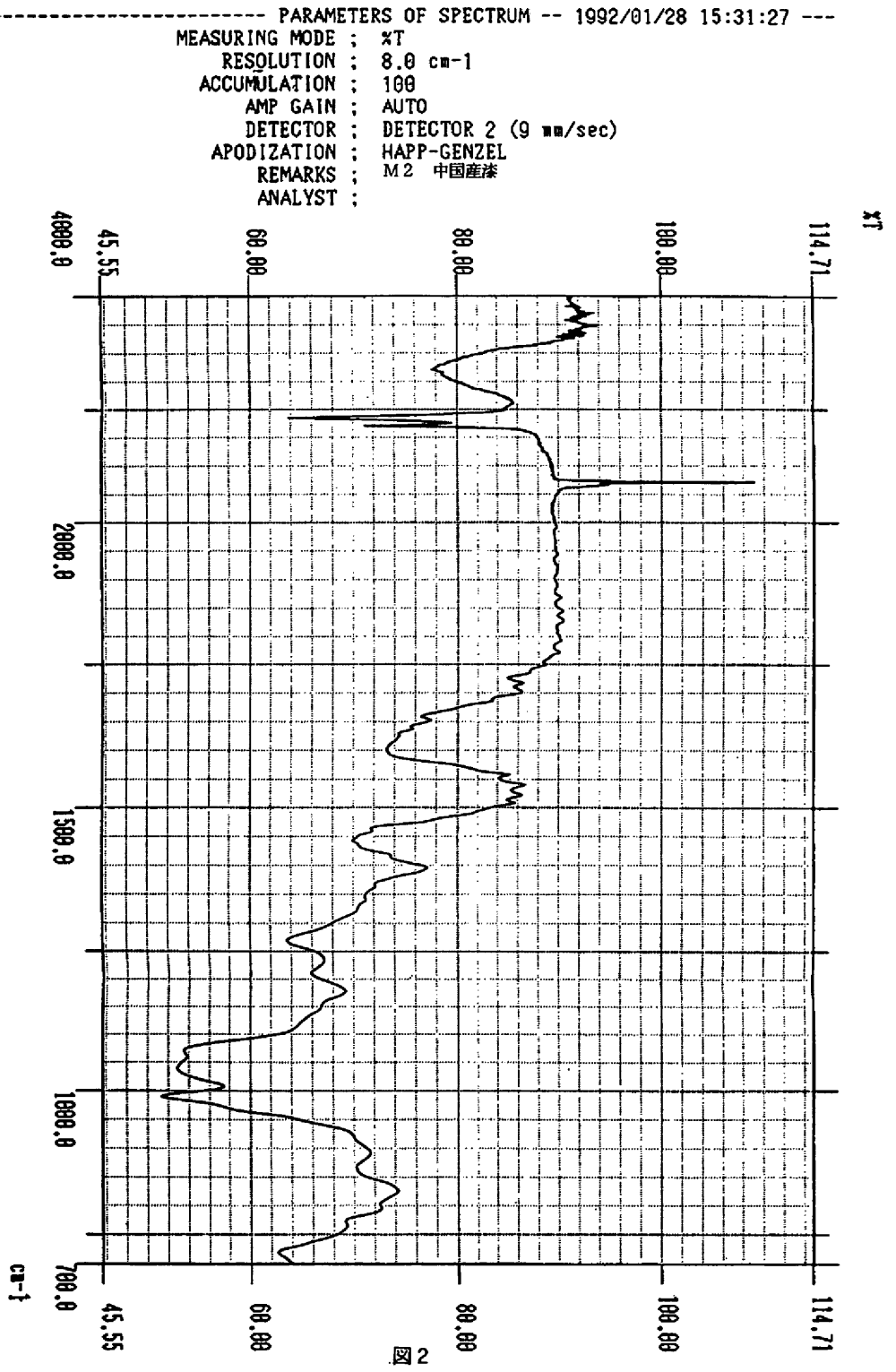

---------- PARAMETERS OF SPECTRUM -- 1992/01/28 15:31:27 ---
MEASURING MODE ; %T
RESOLUTION ; 8.0 cm-1
ACCUMULATION ; 100
AMP GAIN ; AUTO
DETECTOR ; DETECTOR 2 (9 mm/sec)
APODIZATION ; HAPP-GENZEL
REMARKS ; M2 中国産漆
ANALYST ;
%T
4000.0
2000.0
1500.0
1000.0
700.0
cm-1
45.55
60.00
80.00
100.00
114.71

図2

---------- PARAMETERS OF SPECTRUM -- 1992/01/28 15:29:38 ---
MEASURING MODE ; %T
RESOLUTION ; 8.0 cm-1
ACCUMULATION ; 100
AMP GAIN ; AUTO
DETECTOR ; DETECTOR 2 (9 mm/sec)
APODIZATION ; HAPP-GENZEL
REMARKS ; M3 日本産漆
ANALYST ;

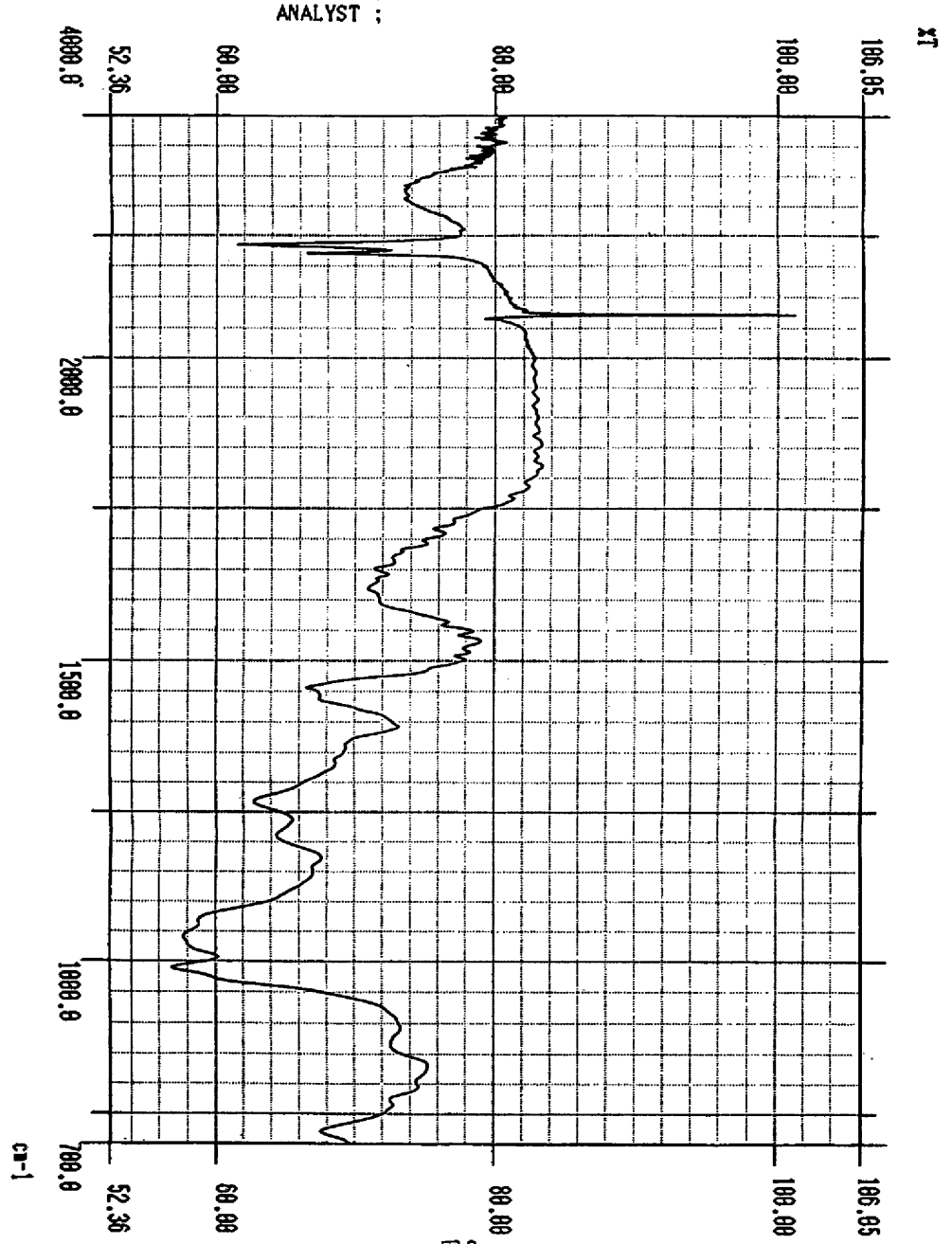


図3

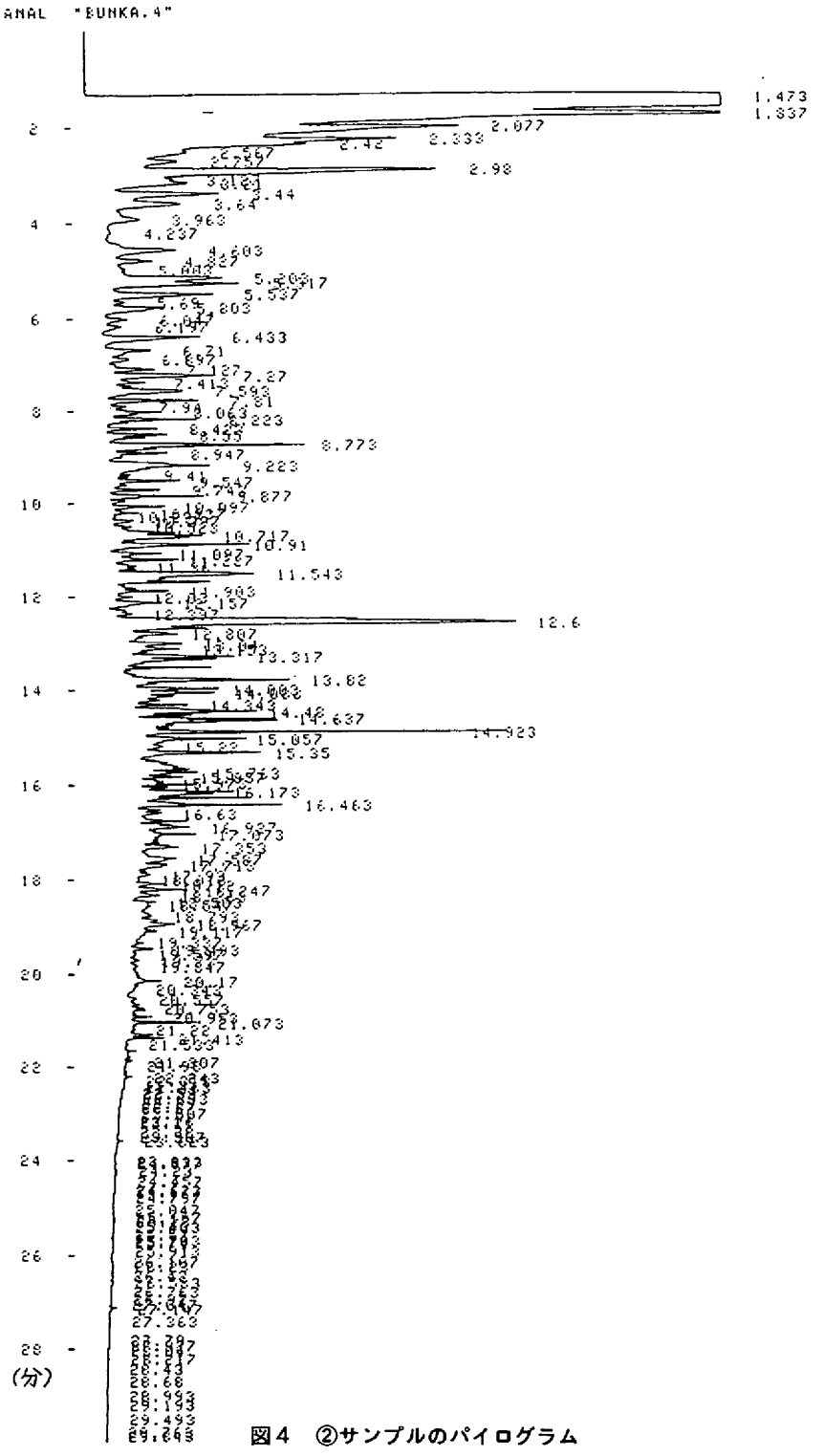


図4　②サンプルのパイログラム

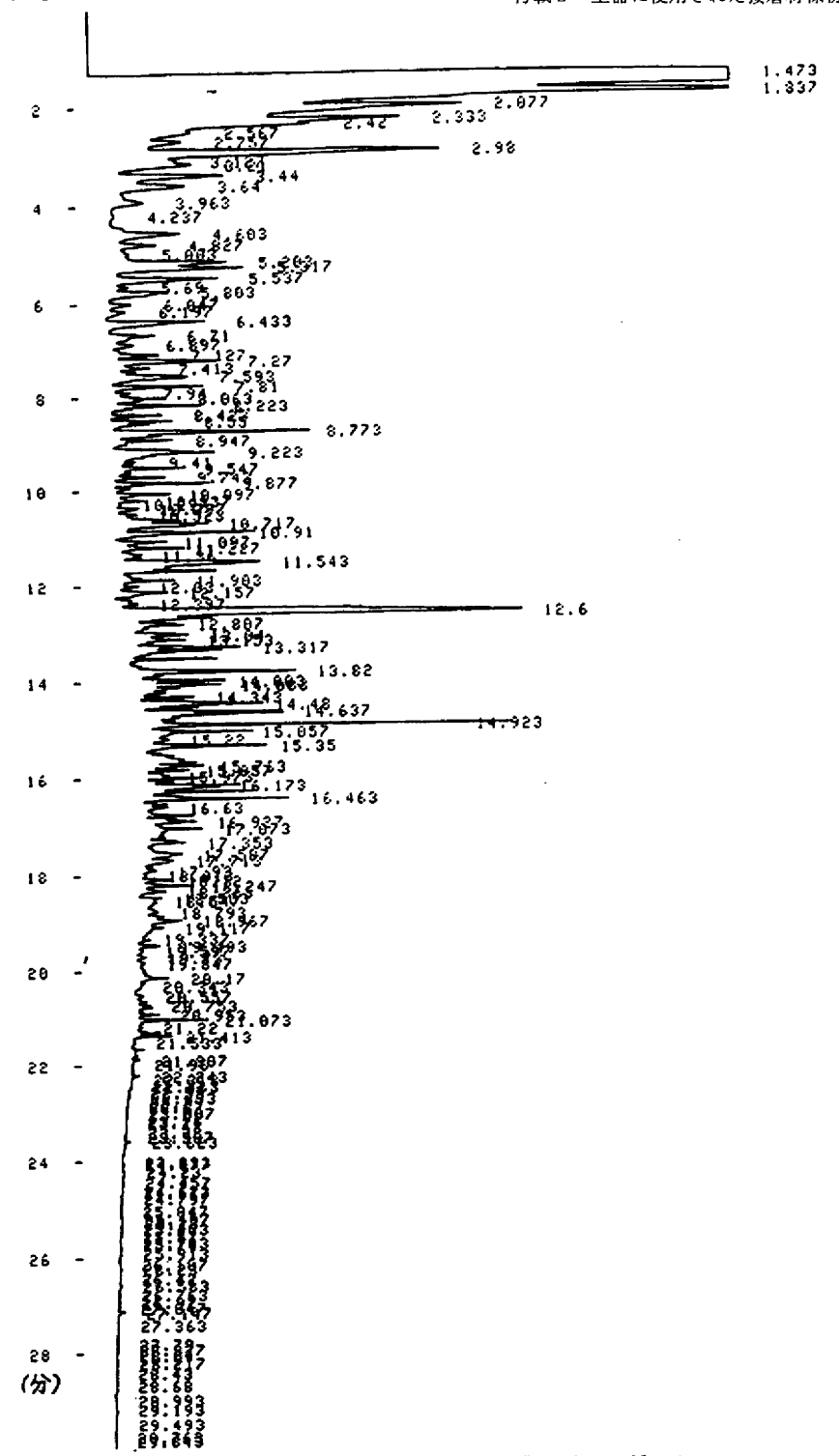


図５　①中国産うるし塗膜のパイログラム

付載3　菅生小学校裏山遺跡・西坂古墳出土鉄滓の金属学的調査

新日本製鉄K.K
大澤　正巳

概　　要

菅生小学校裏山遺跡と西坂古墳出土鉄滓を調査して次の事が明らかになった。

＜1＞　菅生小学校裏山遺跡出土鉄滓は、酸性砂鉄（真砂系）を始発原料とした精錬滓であった。炉壁溶着ガラス質スラグからも半還元砂鉄粒子が検出された。奈良時代～平安時代の製鉄跡の存在が推定される。

＜2＞　西坂古墳周溝出土鉄滓は、炉壁粘土の溶解したガラス質滓である。これからも半還元砂鉄粒子を懸だくさせて、7世紀前半での製鉄操業を示唆する。

1．いきさつ

菅生小学校裏山遺跡と西坂古墳は、倉敷市西坂に所在する。倉敷インターチェンジ工事に伴って調査された遺跡で、弥生時代後期から飛鳥時代～平安時代の複合遺跡である。遺物は緑釉陶器から円面硯、風字硯、墨書土器、刻書土器、石帯、銅印等を出土した。更に遺構としては掘立柱建物群の所在などあって律令体制での中央管理に絡む性格が読みとれる。

一方、西坂古墳は、菅生小学校裏山遺跡を見下ろす丘陵東斜面中腹に位置している。石室は片袖式であるが破損が激しく、石室内は平安～鎌倉時代に再利用されている。調査鉄滓は、周溝出土で7世紀前半が比定される。

なお、菅生小学校裏山遺跡の5区では、6世紀末～7世紀初の横口付炭窯1基と鍛冶様伏焼き炭窯4基が検出されており、この時期の製錬が西坂古墳出土鉄滓に関係する可能性も考えられる。

以上の背景をもつ4点の鉄滓についての専門調査を岡山県古代吉備文化財センターより要請されたので金属学的調査を行った。

2．調査方法

2－1、供試材

Table.1 に示す。供試材は菅生小学校裏山遺跡出土鉄滓３点、西坂古墳出土鉄滓１点の計４点である。

Table. 1　供試機の履歴と調査項目

符号	遺跡名	試料	出土位置	推定年代	計測値		調査項目				
					大きさ(㎜)	重量(g)	顕微鏡組織	ビッカース断面硬度	CMA	化学組成	耐火度
SSU-1	菅生裏山遺跡	ガラス質鉄滓	2区谷	奈良~	50×60×25	105	○			○	
2	〃	〃	10区B谷C	〃	70×50×40	32	○		○	○	
3	〃	砂鉄製鉄滓	11区南砂層	〃	40×60×25	93	○	○		○	
NSK-1	西坂古墳	ガラス質鉄滓(砂鉄製鉄滓)	周溝	7C前半	125×140×90	1350	○			○	○

２－２、調査項目

(1)　肉眼観察

(2)　顕微鏡観察

(3)　ビッカース断面硬度

(4)　CMA（Computer Aided X-ray Micro Analyzer）調査

(5)　化学組成

3．調査結果

３－１、菅生小学校裏山遺跡出土品

(1)　SSU-1 炉壁付着ガラス質鉄滓（２区谷出土）

①　肉眼観察

炉壁粘土に溶着した黒色無光沢のガラス質鉄滓である。肌は荒れ凹凸大で、気泡を露出する。炉材粘土はスサ入りである。

②　顕微鏡観察

Photo.1 の①－④に示す。鉱物組成は、暗黒色ガラス質スラグで局部的に半還元砂鉄粒子を含む。製鉄炉の炉壁と判定される。

③　化学組成

Table.2 に示す。炉壁溶解であるので鉄分少なくガラス質成分の多い成分系となっている。

全鉄分（Total Fe）は、5.86％このうち金属鉄（Metellic Fe）0.16％、酸化第１鉄（FeO）1.73％、酸化第２鉄（Fe_2O_3）6.23％の割合である。ガラス質成分（$SiO_2+Al_2O_3+CaO$

$+MgO+K_2O+Na_2O$）は90.67 %と大半を占める。炉壁の溶融物とすれば酸化アルミニウム（Al_2O_3）が11.52 %と低く、粘土の耐火度はあまり高くなかった事が予測される。しかし、鉄と滓の分離に寄与する塩基性成分の酸化カルシウム（CaO ）は3.58%と高めであるので、この点で、該粘土の使用根拠が伺われる。二酸化チタン（TiO_2）は0.61%で粘土中には、二酸化チタンはあまり含有されていない。

(2) SSU-2 、ガラス質小鉄滓（10区B谷C出土）

① 肉眼観察

赤褐色を呈する粘土状滓で表裏共に気泡を多発する。

② 顕微鏡観察

Photo.1 の⑤～⑦に示す。鉱物組成の大部分は暗黒色ガラス質スラグで、その中の局部にファイヤライト（Fayalite：$2FeO \cdot SiO_2$）を晶出する個所⑤と、マグネタイト（Magnetite ：Fe_3O_4）⑥や半還元砂鉄粒子を懸だくするところ⑦が散見される。砂鉄精錬滓に分類される。

③ ＣＭＡ調査

Photo.3 のSE（２次電子像）に示したファイヤライト（Fayalite：$2FeO \cdot SiO_2$）の結晶とその間隙のガラス質スラグの分析結果である。高速定性分析結果がTable.3 にある様に検出元素は鉱物組成に見合ったもので、珪素（Si)、鉄（Fe)、カルシウム（Ca)、アルミ（Al)、マグネシウム（Mg)、カリウム（K)、マンガン（Mn)、ナトリウム（Na）らであった。極く微量のチタン（Ti）も存在する。

この結果を視覚化した面分析がPhoto.3 の特性Ｘ線像である。分析元素の存在は白色輝点の集中度で表わされる。例えば、ファイヤライトは化学式が$2FeO \cdot SiO_2$で示されれ様に鉄（Fe）と珪素（Si）に白色輝点が重なって検出される。

次に暗黒色ガラス質にマグネタイト（Magnetite ：Fe_3O_4）を晶出した個所の分析を行った。Table.4 に高速定性分析結果を示す。検出元素は珪素（Si)、アルミ（Al)、鉄（Fe)、カルシウム（Ca)、カリウム（K)、チタン（Ti)、マグネシウム（Mg)、ナトリウム（Na)、マンガン（Mn）らである。

特性Ｘ線像をPhoto.4 に示す。マグネタイト（Magnetite：Fe_3O_4）結晶の鉄（Fe）には、弱くチタン（Ti）が重なって白色輝点が認められる。この結果より製鉄原料は、チタン分の比較的低い酸性砂鉄（真砂系）が装入されたと想定される。

④ 化学組成

Table.2 に示す。全鉄分（Total Fe）は16.95 %、そのうち、金属鉄（Metallic Fe ）は0.38%、酸化第１鉄（FeO ）.6.17%、酸化第２鉄（Fe_2O_3）16.75 %、ガラス質成分（$SiO_2+Al_2O_3+CaO+MgO+K_2O+Na_2O$）は74.47 %である。該品の酸化カルシウム（CaO）は

多くて5.95％を含む。二酸化チタン（TiO_2）は0.42％と低めであって半還元砂鉄粒子の混在は極く微量であろう。

(3) SSU-3 砂鉄精錬滓（11区南砂層出土）

① 肉眼観察

表裏共に赤褐色の鉄錆を発し、その直下には黒色皮膜を有する丸味を帯びた炉内残留滓である。木炭痕と気泡露出が認められた。

② 顕微鏡観察

Photo.2 の①－⑤に示す。鉱物組成は淡茶褐色多角形状のウルボスピネル（Ulvöspinel：$2FeO \cdot TiO_2$）と白色粒状のヴスタイト（Wüstite：FeO）、淡灰色盤状結晶のファイヤライト（Fayalite：$2FeO \cdot SiO_2$）、基地の暗黒色ガラス質スラグらから構成される。砂鉄精錬での炉内滓（炉底滓）でみられる晶癖である。なお、該滓は金属鉄の錆化したゲーサイト（Goethite：α－FeO・OH）もかなり含有していて、④の左側にその残存状況を示す。

③ ビッカース断面硬度

Photo.2 の⑤にウルボスピネル結晶の硬度測定を行った時の圧痕写真を示す。硬度値は627Hv あった。マグネタイト（Magnetito：Fe_3O_4）の文献硬度値が500 ～600Hv である。これにチタン（Ti）を固溶すれば硬度値は上昇する。627Hv は妥当な数値である。

④ 化学組成

Table.2 に示す。鉄分は多くガラス質成分が少ない鉄滓である。全鉄分（Total Fe）53.74％に対して、金属鉄（Metallic Fe）は0.09％、酸化第１鉄（FeO）32.34 ％、鉄錆を多く包含するので酸化第２鉄（Fe_2O_3）40.77 ％と多い。その為、ガラス質成分（$SiO_2+Al_2O_3+CaO+MgO+K_2O+Na_2O$）は12.426％と逆に少なくなっている。

砂鉄特有元素の二酸化チタン（TiO_2）は、9.16％含有され、バナジウム（V）は0.24％であった。砂鉄精錬滓の成分系である。他の随伴微量元素らは低目傾向にあり、酸化マンガン（MnO）0.25％、酸化クロム（Cr_2O_3）0.17％、硫黄（S）0.024 ％、五酸化燐（P_2O_5）0.29％、銅（Cu）0.009 ％であった。

３－２、西坂古墳出土品

(1) NSK-1 炉壁付着ガラス質鉄滓（周溝出土品）

① 肉眼観察

炉壁の溶着したガラス質鉄滓である。灰黒色に小豆色が混じる。裏面の粘土側には石英が多数認められた。

② 顕微鏡観察

Photo.2 の⑥－⑧に示す。鉱物組成の大半は、暗黒色ガラス質スラグと、少量の半還元砂鉄

粒子に小棒状結晶のファイヤライト（Fayalite：$2FeO \cdot SiO_2$）が晶出する。製鉄炉の炉壁である。

③化学組成

Table.2 に示す。全鉄分（Total Fe）は11.9%に対して、金属鉄（Metallic Fe ）は0.16%、酸化第１鉄（FeO）5.04%、酸化第２鉄（Fe_2O_3）11.363%の割合である。ガラス質成分（$SiO_2+Al_2O_3+CaO+MgO+K_2O+Na_2O$）80.86 %である。このうち、酸化アルミニウム（Al_2O_3）は10.45 %と、これも低目傾向を呈している。耐火度は低目が予想される。二酸化チタン（TiO_2）は0.38%と少なく、バナジウム（V）も0.01%と低値であった。

④ 粘土の耐火度

製鉄炉の炉材粘土として具備すべき条件は、（ｉ）高温度に加熱されても軟化しない事。（ii）温度の急変にあっても膨張収縮を起こさぬ事。（iii）鉄と滓の分離を促進する媒溶剤的成分（CaO、MgO）を適当に含有する事らである。

炉材粘土の耐火度測定を行った。耐火物の加熱に耐える温度とは、溶融現象が進行の途上で軟化変形を起こす状態の温度で表示することを定め、これを耐火度とよんでいる。試験には三角コーン、つまりゼーゲルコーンが溶倒する温度と比較する方法を用いた。耐火度は1200℃であった。低値である。化学組成でみた酸化アルミニウム（Al_2O_3）が10.45 %と低含有であったので、耐火度は低目を予測したが、その通りであった。箱形製鉄炉であれば、このレベルでもさほど問題ないと考えられる。在地の有合わせの粘土を用いて築炉したのであろう。

4．まとめ

７世紀前半の西坂古墳周溝出土鉄滓は、砂鉄精錬に使用された製鉄炉の一部と推定される。該壁が７世紀前半のものと確定できれば菅生小学校裏山遺跡５区で検出された横口付炭窯（焚口削平で現存長さ8.8 m、南北に向けて築造。東側壁に横口９個が設けられる。）が６世紀末～７世紀始め頃と推定されていて、両者の関係が強まる。製鉄には還元剤の木炭が必須の原料となる。また、横口付炭窯の２ｍほど離れて４基の鍛冶用炭供給の伏焼き炭窯（長さ１ｍ、幅0.8 m、深さ0.3 m）に想定できる長方形土壙（内面よく焼けている）も検出されている。

当地では、鉄生産の精錬操業から鉄器製作の鍛冶までの製鉄一貫体制が間接的に予測された。

更に、奈良時代以降においても製鉄操業のあった事を菅生小学校裏山遺跡出土の鉄滓や炉壁溶着ガラス質鉄滓らが証明する。此の製鉄作業を管理したのは、石帯を付け、円面硯や風字硯を使って書類を作成し、銅印を捺した役人であったろう。緑釉陶器を使い、多くのミニチュア土器を奉納し、滑石製剣形構造品を用いて祭祀を主催したことも想定される。軒を連ねた掘立柱建物群の一隅には生産された貢鉄も納められていた事だろう。

註

① 菅生小学校裏山遺跡・西坂古墳調査概要については、岡山県古代吉備文化財センター『岡山県埋蔵文化財報告』16、17、1986、1987を参考にした。

② 日刊工業新聞社『焼結鉱組織写真および識別法』1968。

※１　日刊工業新聞社『焼結鉱組織写真および識別法』1968他。

※２　滋賀県草津市野路小野山遺跡出土遺物　７Ｃ末～８Ｃ初

※３　兵庫県川西市小戸遺跡出土鍛冶滓　４Ｃ後半

※４　新潟県豊栄市新五兵衛山遺跡出土砂鉄製錬滓　Ulvöspihel　平安時代

※５　大阪府東大阪市西之辻16次調査出土鋳造鉄斧　古墳時代前期

※６　埼玉県大宮市御蔵山中遺跡鉄鏃　５Ｃ中頃

参考資料			
符号	硬度測定対象物	硬度実測値	文献硬度値※１
	Fayalaite ($2FeO \cdot SiO_2$)　※２	560,588	600～ 700Hv
	磁鉄鉱※２	513,506	530～ 600Hv
	マルテンサイト※２	641	633～ 653Hv
	Wüstite (FeO)　※３	481,471	450～ 500Hv
	Magnetite (Fe_3O_4)　※４	616,623	500～ 600Hv
	白鋳鉄※５	563,506	458～ 613Hv
	亜共析鋼（C：0.4%）※６	175	160～ 213Hv

POS. NO. 4

COMMENT : SSU-2 (その1)
ACCEL. VOLT. (KV): 15
PROBE CURRENT : 5.000E-08 (A)
STAGE POS. : X 40000 Y 40000 Z 11000

06-FEB-92

	CH(1) TAP				CH(2) PET				CH(3) LIF			
	EL	WL	COUNT	INTENSITY(LOG)	EL	WL	COUNT	INTENSITY(LOG)	EL	WL	COUNT	INTENSITY(LOG)
	Y -l	6.45	125	**********	▲ TI-k	2.75	95	**********	DI-l	1.14	45	*********
	RE-m	6.73	328	**********	BA-l	2.78	79	*********	PB-l	1.18	50	*********
	SR-l	6.86	145	**********	CS-l	2.89	58	********	TL-l	1.21	41	********
	W -m	6.98	118	**********	SC-k	3.03	68	*********	HG-l	1.24	50	*********
◎	SI-k	7.13	6469	**********	I -l	3.15	54	**********	AU-l	1.28	44	*********
	TA-m	7.25	117	**********	TE-l	3.29	47	*********	PT-l	1.31	50	*********
	RB-l	7.32	87	**********	◎ CA-k	3.36	1451	**********	IR-l	1.35	37	*********
	HF-m	7.54	76	**********	SB-l	3.44	46	*********	OS-l	1.39	39	*********
	LU-m	7.84	58	**********	SN-l	3.60	34	*********	ZR-k	1.44	37	*********
	YB-m	8.15	52	*********	◦ K -k	3.74	180	**********	CL-k	1.54	33	*********
◦	AL-k	8.34	787	**********	IN-l	3.77	35	*********	NI-k	1.66	24	*********
	RR-l	8.37	219	**********	U -m	3.91	26	*********	TM-l	1.73	29	*********
	ER-m	8.62	35	*********	CD-l	3.96	29	*********	CO-k	1.79	28	*********
	SE-l	8.99	29	*********	TH-m	4.14	17	********	◎	FE-k	1.94	3227
	HO-m	9.20	31	*********	AG-l	4.15	19	********	GD-l	2.05	11	******
	DY-m	9.59	32	*********	PD-l	4.37	18	********	◦	MN-k	2.10	59
	AS-l	9.67	22	********	RH-l	4.60	10	*****	EU-l	2.12	13	*******
◦	MG-k	9.89	306	**********	CL-k	4.73	15	******	SM-l	2.30	10	*****
	TB-m	10.00	27	*********	RU-l	4.85	9	*****	CR-k	2.29	13	*******
	GE-l	10.44	20	********	S -k	5.37	10	*****	ND-l	2.37	9	*****
	GA-l	11.29	11	******	MO-l	5.41	6	****	PR-l	2.46	6	****
◦	NA-k	11.91	26	*********	NB-l	5.72	7	*****	V -k	2.50	6	****
	**	14.72	6	****	ZR-l	6.07	5	****	CE-l	2.56	5	****
	F -k	18.32	4	****	P -k	6.16	7	*****	LA-l	2.67	5	****

RESULTS:

THE FOLLOWING ELEMENTS ARE PRESENT
NA MG AL SI K CA MN FE ←検出元素

THE FOLLOWING ELEMENTS ARE PROBABLY PRESENT
TI

photo. 3のSE（2次電子像）に示したファイヤライト（Fayalite: $2FeO \cdot SiO_2$）と暗黒色ガラス質スラグの分析結果である。検出元素の強度（Count）順に並べると次の様になる。珪素（Si）6469、鉄（Fe）3227、カルシウム（Ca）1451、アルミ（Al）787、マグネシウム（Mg）306、カリウム（K）180、マンガン（Mn）59、ナトリウム（Na）26となる。微量のチタン（Ti）も存在する。鉱物組成に見合った検出元素であった。

Table. 3 菅生小学校裏山遺跡出土炉壁付着ガラス質滓中ファイヤライト（SSU-2その1）のコンピュータープログラムによる高速定性分析結果。

POS. NO.　3

COMMENT　: SSU-2 (№2)
ACCEL. VOLT. (KV):　15
PROBE CURRENT : 4.762E-08 (A)
STAGE POS. :　X　40000　Y　40000　Z　11000

06-FEB-92

CH(1)　TAP

EL	WL	COUNT	INTENSITY(LOG)
Y -l	6.45	137	**********
RE-m	6.73	418	**********
SR-1	6.86	173	**********
W -m	6.98	162	**********
◎SI-k	7.13	9767	**********
YA-m	7.25	196	**********
RB-1	7.32	125	**********
HF-m	7.54	82	**********
LU-m	7.84	73	**********
YB-m	8.15	73	**********
◎AL-k	8.34	2931	**********
BR-1	8.37	838	**********
ER-m	8.82	44	**********
SE-1	8.99	35	**********
HO-m	9.20	44	**********
DY-m	9.59	32	**********
AS-1	9.67	37	**********
∘MG-k	9.89	253	**********
TB-m	10.00	34	**********
GE-1	10.44	18	**********
GA-1	11.29	15	**********
∘NA-k	11.91	72	**********
**	14.72	7	**********
F -k	18.32	2	**********

CH(2)　PET

EL	WL	COUNT	INTENSITY(LOG)
∘TI-k	2.75	257	**********
BA-1	2.78	82	**********
CS-1	2.89	64	**********
SC-k	3.03	63	**********
I -1	3.15	53	**********
TE-1	3.29	43	**********
◎CA-k	3.36	1762	**********
SB-1	3.44	63	**********
SN-1	3.60	36	**********
∘K -k	3.74	505	**********
IN-1	3.77	29	**********
U -m	3.91	24	**********
CD-1	3.96	21	**********
TH-m	4.14	22	**********
AG-1	4.15	22	**********
PD-1	4.37	22	**********
RH-1	4.60	15	**********
CL-k	4.73	12	**********
RU-1	4.85	9	**********
S -k	5.37	7	**********
MO-1	5.41	5	**********
NB-1	5.72	3	**********
ZR-1	6.07	4	**********
P -k	6.16	11	**********

CH(3)　LIF

EL	WL	COUNT	INTENSITY(LOG)
BI-1	1.14	50	**********
PB-1	1.18	58	**********
TL-1	1.21	49	**********
HG-1	1.24	51	**********
AU-1	1.28	55	**********
PT-1	1.31	50	**********
IR-1	1.35	46	**********
OS-1	1.39	43	**********
ZN-k	1.44	42	**********
CU-k	1.54	36	**********
NI-k	1.66	32	**********
TM-1	1.73	23	**********
CO-k	1.79	24	**********
◎FE-k	1.94	2718	**********
GD-1	2.05	13	**********
∘MN-k	2.10	30	**********
EU-1	2.12	9	**********
SM-1	2.20	13	**********
CR-k	2.29	8	**********
ND-1	2.37	8	**********
PR-1	2.46	8	**********
V -k	2.50	3	**********
CE-1	2.56	5	**********
LA-1	2.67	2	**********

RESULTS!

THE FOLLOWING ELEMENTS ARE PRESENT
　NA　MG　AL　SI　K　CA　TI　MN　FE　←検出元素

THE FOLLOWING ELEMENTS ARE PROBABLY PRESENT
　SI

photo. 4のSE（2次電子像）に示した暗黒色ガラス質スラグ中に晶出するマグネタイト（Fe_3O_4:Magnetite）の分析結果である。検出元素を強度（Count）順に並べると次の様になる。硅素（Si）9767、アルミ（Al）2931、鉄（Fe）2718、カルシウム（Ca）1762、カリウム（K）505、チタン（Ti）257、マグネシウム（Mg）253、ナトリウム（Na）72、マンガン（Mn）13である。マグネタイトのチタン（Ti）濃度はうすく、製鉄原料砂鉄はチタンの低い酸性砂鉄（真砂）が想定される。

Table. 4　菅生小学校裏山遺跡出土炉壁付着ガラス質滓中マグネタイト（SSU-2その2）のコンピュータープログラムによる高速定性分析結果。

付載4　菅生小学校裏山遺跡出土遺物の胎土分析

白石　純

Ⅰ．はじめに

この胎土分析の目的は蛍光X線分析法により、菅生小学校裏山遺跡出土の7～8世紀の須恵器が岡山県南部地域のどの窯跡群（6世紀後半から8世紀ごろまで）と対比できるかを明らかにすることである。また、時期は異なるが前記した在地の窯跡群須恵器と菅生小学校裏山遺跡出土の初期須恵器、陶質土器、軟質土器、軟質系土器、土師器の胎土も比較検討した。

今回分析した岡山県南部の窯跡は西から浅口郡金光町上竹西の坊遺跡1号窯[1]、倉敷市寒田5号窯跡[2]、都窪郡山手村末の奥窯跡[3]、都窪郡山手村道金山窯跡[3][4]、倉敷市二子御堂奥窯跡[5]、邑久窯跡群（邑久郡牛窓町寒風[6]、長船町佐府池上池[3]、長船町奥池中池[3]、邑久町さざらし中池[3]）である。

Ⅱ．分析方法

蛍光X線分析法の装置・測定試料の作製・測定方法・条件などは、現在まで筆者が分析した方法であった。[7]

測定した元素はSiO_2.TiO_2.Al_2O_3.Fe_2O_3.CaO.K_2O.MgOの7元素である。

Ⅲ．分析結果

1．窯跡群の分析

岡山県南部の6世紀後半から8世紀代の窯跡資料について検討した。

分析した窯跡名、器種、測定個数は第1表に記載したとおりである。また、各窯跡群が立地する地質基盤も第1表に記載している。この表から地質基盤層を検討すると、花崗岩類を基盤にする上竹西の坊1号窯、末の奥・道金山窯跡、二子御堂奥窯跡窯跡と流紋岩類を基盤にする邑久窯跡群（寒風、佐府池上池、奥池中池、さざらし中池）窯跡群の大きく二つに分かれる。また、寒田5窯跡が立地する場所は花崗岩類と流紋岩類の両方の基盤で形成されている。

各窯跡群の分析結果では、7元素の成分を使って各窯跡群の判別を試みた。

まず、第1表の各窯跡の平均値をみると、SiO_2、Al_2O_3、Fe_2O_3、TiO_2、K_2O、MgO の

元素に各窯跡で特徴が見られる。そして、今回測定した全元素を使って、窯跡推定を行うのが望ましいことはいうまでもない。

そこで、SiO_2/Al_2O_3、Fe_2O_3/TiO_2、K_2O/CaO 、K_2O/MgO の各元素比から散布図を作成し、各窯跡群の判別を行った。

この結果、第1図$SiO_2/Al_2O_3-K_2O/CaO$ 散布図では二子御堂奥、上竹西の坊、末の奥、道金山がほぼ重なり識別できない。そして、二子御堂奥、上竹西の坊、末の奥、道金山のグループと邑久（寒風、佐府池上池、奥池中池、さざらし中池）グループと寒田グループの3つに分かれる。ただし、3グループとも一部重なる部分がある。

第2図$SiO_2/Al_2O_3-Fe_2O_3/TiO_2$散布図でも、第1図と同様の3グループに分かれるが、それぞれ1／3ほど重なる部分があり、第1図より各窯跡の識別が難しいようである。

第3図$K_2O/MgO-SiO_2/Al_2O_3$の散布図では二子御堂奥、上竹西の坊、末の奥、道金山グループと邑久グループと寒田グループの3つに分かれる。ただ、上竹西の坊はほぼ半分が邑久と重なっているし、邑久グループと寒田グループも半分ほど重なっている。しかし、二子御堂奥、末の奥、道金山グループと邑久、寒田グループの間では、はっきり分かれる。

2．遺跡出土遺物の分析

第2・3・4・5表に分析した遺物の一覧表を掲載した。このうち、遺物番号No1～No35は、7世紀以降の遺物である。また、遺物番号No36～No66は初期須恵器、陶質土器？、軟質土器？、土師器などである。そして、遺物番号No77～No86は西坂古墳、酒津八幡山遺跡、二子14号墳である。

遺跡出土遺物の分析結果を第4・5・6図の各窯跡群の範囲を示した散布図にプロットし、どの窯跡群に属するか検討した。この結果、大きく3つに分けた窯跡群が重なるところに出土土器が集中し、窯跡推定を困難にしている。

そこで、第6表のように、該当する窯跡群別に●印を付け推定を行った。また、該当しない遺物は－印で表した。

そして、以下のような5段階に分け窯跡推定を試みた。

①遺物番号No2、13、19、20、21、22のように各散布図とも二子御堂奥、上竹西の坊、末の奥、道金山に推定できるもの。

②遺物番号No14、15、26、29のように邑久か寒田のどちらかに推定できるもの。

③遺物番号No1、2、3、8、9、10のように3つの散布図のうち1つないし2つで可能性の高い窯跡が推定できるもの。（窯跡推定の項目で窯跡名の後に？印がある遺物）。

④遺物番号No5、7、11、16、17、18、25、30、31、32、33、34のように2つないし3つの散布図で2つ以上の窯跡群と重複するもの（窯跡推定の項目では推定不可能としている遺

物)。

⑤遺物番号No６、12、23のように１つでも、どの窯跡にも入らない散布図があるもの（窯跡推定の項目では不明としている遺物)。

以上のように分けた。第７・８表についても同様の判定方法で窯跡推定を行った。

第７表の遺物番号No36～No66は初期須恵器、陶質土器、軟質土器、軟質系土器、土師器などであるが、圧倒的に不明の土器が多い。また、一応元素比で対応しているものは推定地を記入したが、現在までに、わかっているこの時期の窯跡および他の遺跡の遺物なども分析していないので、対比するには無理があり、性格には推定にならないと思われる。ただ、今回分析した窯跡群によく似た化学組成を示している遺物もあることを付け加えておく。

第８表の西坂古墳、二子14号墳の須恵器はほとんどが二子御堂奥、上竹西の坊、末の奥、道金山の窯跡群に推定できる。また、酒津八幡山遺跡出土の須恵器は胎土が他の須恵器に比べて粗粒であったが、窯跡推定でも不明であった。

また、菅生小学校裏山遺跡出土の遺物の間でまとまり（グループを作ること)、があるかどうか検討した。この結果、第４・５図から遺物番号No45、51、53、62とNo43、44、49、50の二つグループにまとまるようである。45は初期須恵器、51、53は土師器（タタキ)、62は土師器である。また、43、44は初期須恵器、49、50は土師器である。

Ⅲ．まとめ

１．岡山県南部の６世紀後半から８世紀代の須恵器窯跡の胎土分析を行い、二子御堂奥、上竹西の坊、末の道、道金山グループと寒田グループと邑久グループの３つ窯跡群にわかれた。ただ、寒田グループと邑久グループの窯跡群は一部で重なるところがある。

また、これらの窯跡群が立地する地質基盤層が二子御堂奥、上竹西の坊、末の奥、道金山では花崗岩類で、寒田は花崗岩類と流紋岩類、邑久は流紋岩類で形成されている。このことは胎土分析には窯跡が立地する基盤層が関係することが改めてあきらかになった[8]。

２．菅生小学校裏山遺跡出土遺物の分析では遺物番号No１～No35の７世紀以降の遺物のうち、半分ほどがほぼ窯跡と推定できた。

また、遺物番号No36～No66の初期須恵器、軟質土器、軟質系土器、土師器などは半分以上が不明となった。また、中には６世紀後半から８世紀代の須恵器窯跡とよく似た元素比を示す土器もある。この事については、初期須恵器などの窯跡資料を分析し、改めて対比、検討する必要がある。

今回、時間の関係で大阪陶邑窯跡群の資料を分析できなかった。特に、遺物番号No36～No66の資料については陶邑窯跡群との比較が不可欠であり、次の機会に検討したい。

最後になりましたが小稿をなすにあたり、終始ご教示、ご指導いただいている鎌木義昌先生、

亀田修一先生ならびに、須恵器資料では正岡睦夫、高畑知功、中野雅美、古市秀治の各氏にお世話になった。記して深謝の意を表します。

註

（1）井上　弘・武田恭彰「上竹西の坊遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』69　岡山県教育委員会　1988・10

（2）柳瀬昭彦・伊藤　晃・岡本寛久「黒土窯址・寒田窯址」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』31　岡山県教育委員会　1979・3

（3）西川　宏「末の奥窯跡群」『岡山県史　考古資料』第18巻　1986. 7

白石　純「蛍光X線による須恵器の胎土分析－備前・備中・美作の須恵器窯跡資料について」『鎌木義昌先生古稀記念論集　考古学と関連科学』鎌木義昌先生古稀記念論文集刊行会　1988・12・18

（4）亀田修一・伊藤　晃・和泉弘幸・石田義人「官逆字押印須恵器について－備中道金山窯跡採集資料を中心に－」『鎌木義昌先生古稀記念論集　考古学と関連科学』鎌木義昌先生古稀記念論文集刊行　会　1988・12・18

（5）葛原克人・池畑耕一「二子御堂奥窯址群」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』2　岡山県教育委員会　1974

（6）山磨康平「寒風古窯址群」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』27　岡山県教育委員会　1978・3

（7）白石　純「蛍光X線による考古学遺物（石器・土器）の化学分析（Ⅰ）『岡山理科大学蒜山研究所研究報告』10　1984

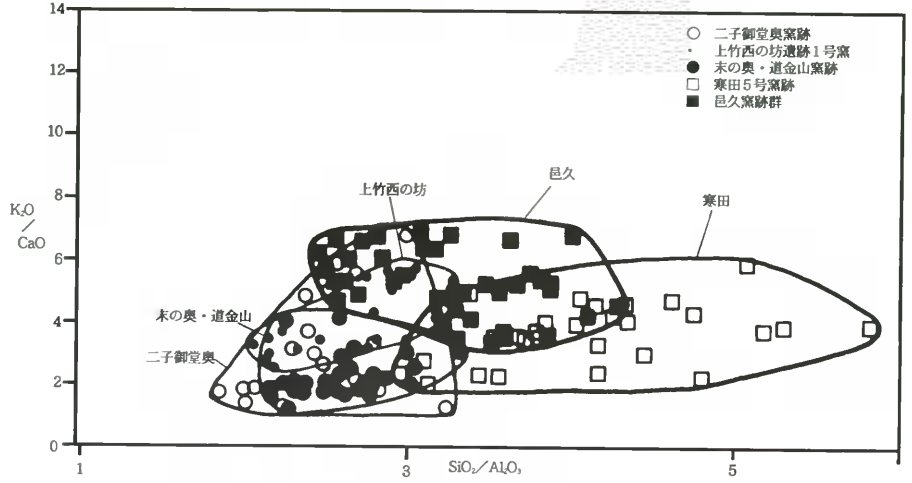
白石　純「蛍光X線による考古学遺物（石器・土器）の化学分析（Ⅱ）『岡山理科大学蒜山研究所研究報告』12　1986

白石　純「蛍光X線による考古学遺物（石器・土器）の化学分析（Ⅲ）『岡山理科大学蒜山研究所研究報告』13　1987

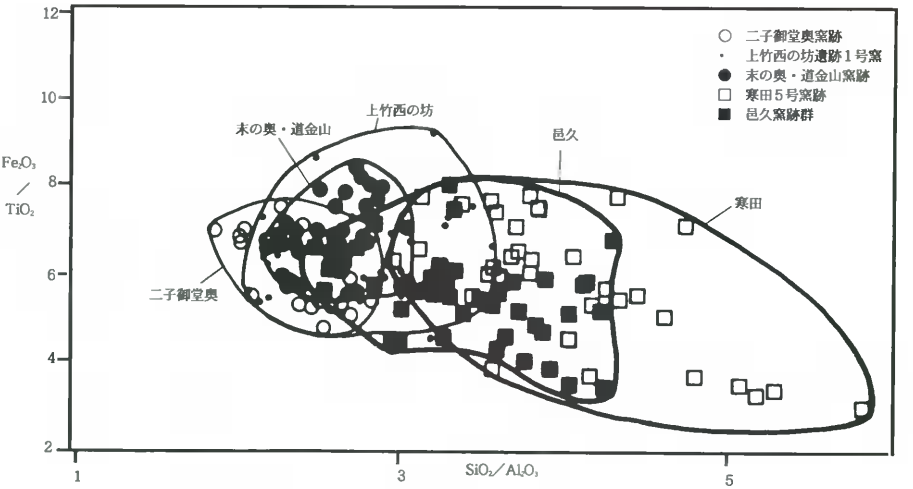
（8）飯島賢治・亀田修一・白石　純・直原伸二「蛍光X線分析法による胎土分析に関する基礎的研究　－備前地方の須恵器窯跡資料を中心に－」『岡山理科大学蒜山研究所研究報告』17　1991

第1表　胎土分析した窯跡名および化学組成の一覧表

窯跡名	所在地	器種					器種合計	化学組成(%)平均値±標準偏差値							備考
		杯	高杯	壺	甕	平瓶		SiO_2	Tio_2	Al_2O_3	Fe_2O_3	MgO	CaO	K_2O	
上竹西の坊1号	浅口郡金光町上竹	12	8	2	5	3	30	63.26 ±3.43	0.84±0.08	23.11 ±3.02	5.55±1.14	0.71±0.15	0.54±0.09	2.11±0.26	花崗岩類の基盤に立地
寒田5号	倉敷市玉島陶	12	6	6	6	5	35	71.32 ±3.57	0.80±0.08	18.15 ±2.12	4.74±1.45	1.32±0.35	0.64±0.17	2.23±0.16	花崗岩類・流紋岩類の基盤に立地
末の奥	都窪郡山手村宿	13			11		24	62.04 ±1.67	0.72±0.04	24.17 ±1.64	5.07±0.75	0.79±0.12	0.96±0.15	1.97±0.28	花崗岩類の基盤に立地
道金山	都窪郡山手村平山	13			5		18	61.94 ±2.57	0.73±0.06	24.29 ±2.11	4.97±0.63	0.69±0.09	0.87±0.14	1.97±0.28	花崗岩類の基盤に立地
二子御堂奥	倉敷市二子	6	6		8	4	24	63.34 ±3.43	0.82±0.10	25.35 ±3.09	4.88±0.97	0.89±0.21	0.79±0.28	2.06±0.39	花崗岩類の基盤に立地
邑久窯跡群寒風	邑久郡牛窓町長浜	2	2		2		6	71.62 ±2.47	0.68±0.10	18.35 ±1.09	2.87±0.25	0.99±0.14	0.46±0.08	2.10±0.14	流紋岩類の基盤に立地
佐府池上池2号	邑久郡長船町西須恵	15			10		25	65.16 ±2.87	0.66±0.03	22.47 ±2.01	3.98±0.56	1.15±0.16	0.53±0.10	2.99±0.30	流紋岩類の基盤に立地
奥池中池1号	邑久郡長船町西須恵	15			10		25	69.55 ±3.00	0.69±0.07	20.08 ±1.69	4.10±1.17	1.23±0.22	0.57±0.25	2.46±0.38	流紋岩類の基盤に立地
さざらし中池	邑久郡邑久町庄田				10		10	66.60 ±3.06	0.56±0.07	21.20 ±1.65	2.97±0.63	0.84±0.18	0.62±0.28	2.89±0.47	流紋岩類の基盤に立地

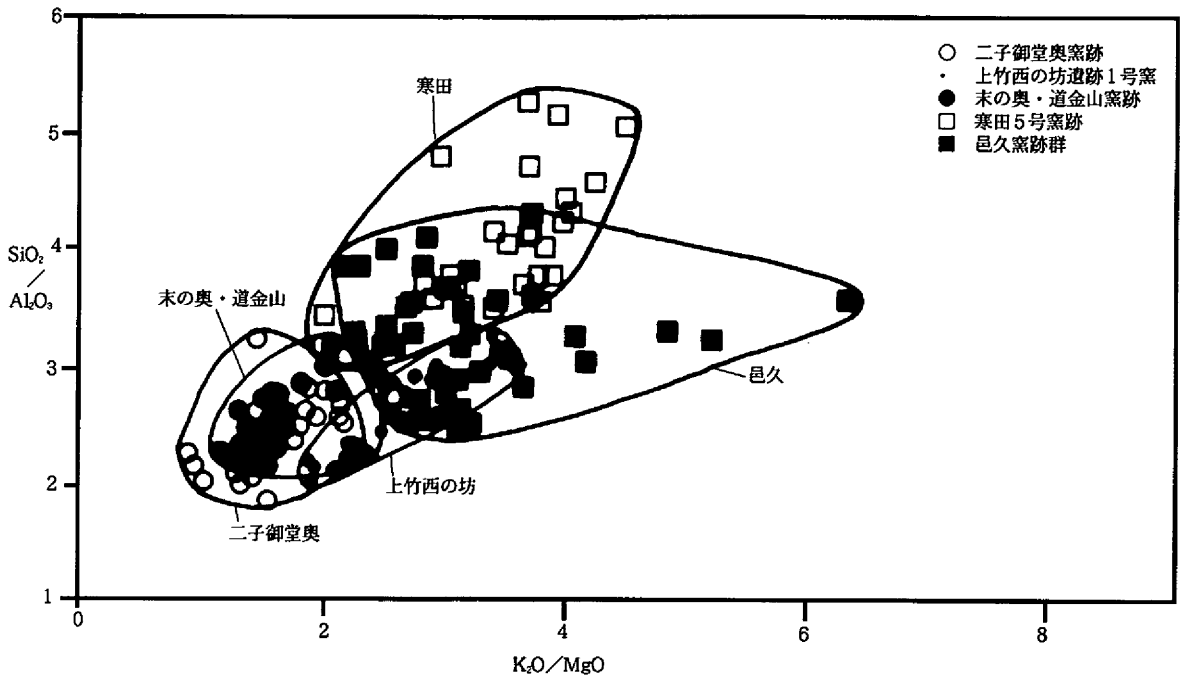


第1図　$SiO_2／Al_2O_3－K_2O／CaO$窯跡群散布図

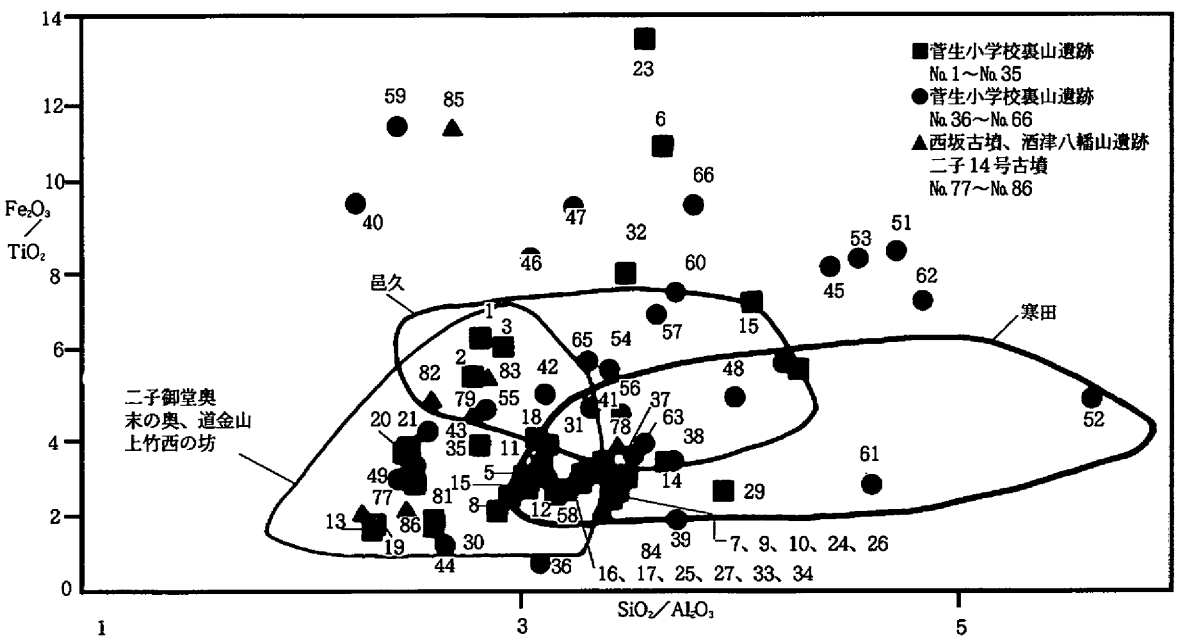


第2図　$SiO_2／Al_2O_3－Fe_2O_3／TiO_2$窯跡群散布図

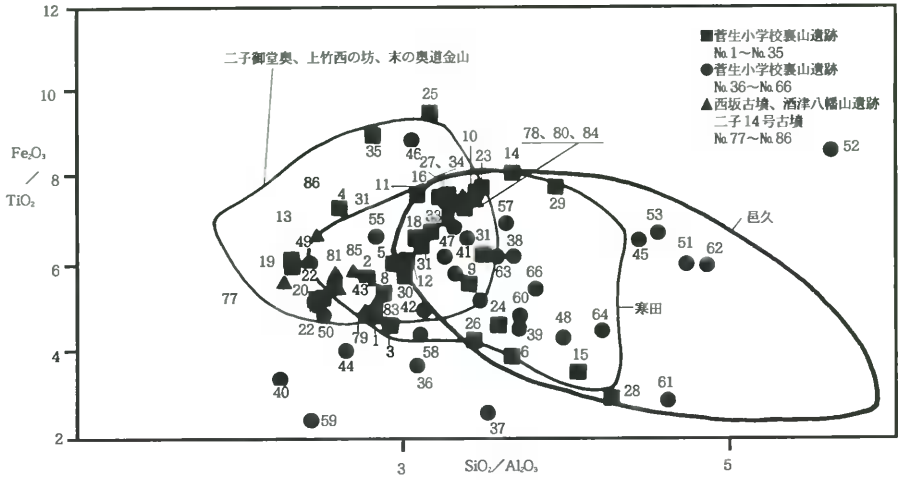
菅生小学校裏山遺跡



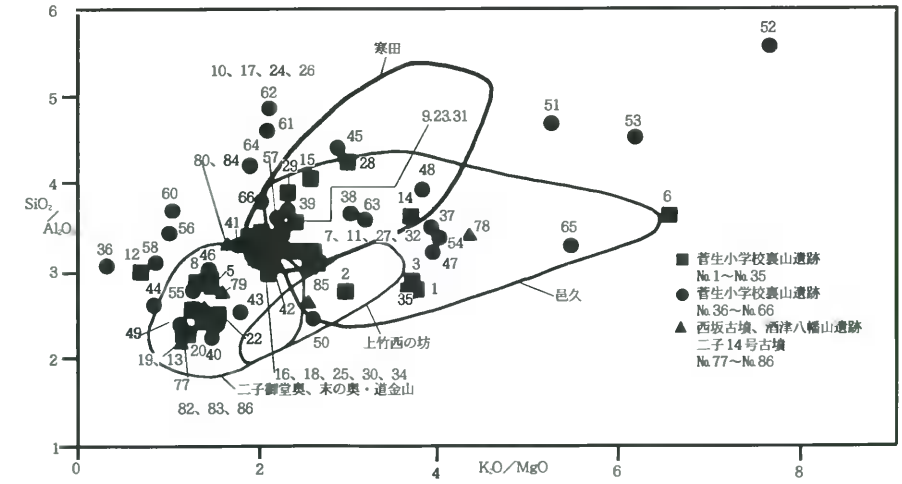
第3図　$K_2O/MgO - SiO_2/Al_2O_3$ 窯跡群散布図



第4図　$SiO_2/Al_2O_3 - Fe_2O_3/TiO_2$　窯跡群と遺跡出土遺物との対比散布図



第5図 $SiO_2/Al_2O_3 - Fe_2O_3/TiO_2$　窯跡群と遺跡出土遺物との対比散布図



第6図 $K_2O/MgO - SiO_2/Al_2O_3$　窯跡群と遺跡出土遺物との対比散布図

第2表　胎土分析試料一覧表

遺物番号	遺跡名	出土地点	種類	技法	胎土	焼成	色調	備考
1	菅玉小学校裏山遺跡	1区谷	須恵器 杯蓋		1㎜以下の白色砂粒を含む	良好	外・内・断 灰白	
2	〃	1区谷（南）	〃		2㎜前後の石英、白・黒色砂粒を多く含む	〃	外・内・断 淡灰青	
3	〃	2区谷	〃		2～3㎜の石英を含む	やや悪い	外・灰黒 内・断淡灰	
4	〃	6区包含層（下）	〃		1㎜以下の石英を多く含む	良好	外・内灰黒 断・淡灰青	
5	〃	〃	〃		5㎜以下の石英を含む	〃	外灰黒 内・断灰白	
6	〃	〃	〃		2㎜以下の石英、白色砂粒を含む 緻密	堅緻	外・内・断 白灰	外面に自然釉付着
7	〃	7区谷	〃		2㎜以下の石英、白色砂粒を含む	良好	外・内・断 灰青	
8	〃	1区谷（南）	須恵器 杯		1㎜以下の石英を含む	良好	外・暗灰 内・断灰白	
9	〃	6区包含層（下）	〃		2㎜以下の石英、白黒色砂粒を含む	良好	外・灰黒 内・断灰白	
10	〃	〃	〃		1㎜以下の石英、白色砂粒を含む	良好	外・内青灰 断・明茶	
11	〃	〃	〃		〃	良好	外・内・断 淡灰青	
12	〃	1区谷	須恵器 杯身（高台）		1㎜以下の白・黒色砂粒を含む	良好	外・内・断 淡灰青	
13	〃	1区包含層	〃		2㎜以下の石英・白色砂粒を含む	やや悪い	外・内・断 淡灰黄	
14	〃	1区谷	〃		3㎜以下の石英、白色砂粒を含む	良好	外・内・淡灰青 断・明茶	自然釉付着
15	〃	1区包含層（南）	〃		1㎜以下の白・黒色砂粒を含む	良好	外・内・断 白灰	
16	〃	2区谷	〃		1㎜以下の白色砂粒を少し含む	良好	外・内・断 淡青灰	
17	〃	〃	〃		〃	良好	外・内・断 暗灰	
18	〃	1区谷（東）	須恵器 高杯		〃	やや悪い	外・内・灰黒断 灰白	
19	〃	〃	〃		1㎜以下の白色砂粒を含む	堅緻	外・内・断 青灰	
20	〃	2区谷	〃		〃	良好	外・内・断 灰青	
21	〃	6区包含層（下）	〃		2㎜以下の石英、白色砂粒を含む	良好	外・内・断 灰白	
22	〃	6区谷（中）	〃		1㎜以下の石英、白色砂粒を含む	良好	外・内・灰黒 断・灰白	
23	〃	1区南包含層	須恵器 甕		〃	良好	外・内・断 淡灰青	図面番号319
24	〃	1区谷（南）	〃		1㎜以下の白・黒色砂粒を含む	堅緻	外・内・断 淡灰	
25	〃	6区包含層（下）	須恵器 甕		1㎜以下の白・黒色砂粒を含む	堅緻	外・断・内 淡灰	図面番号191

遺物番号	遺跡名	出土地点	種類	技法	胎土	焼成	色調	備考
26	菅生小学校裏山遺跡	6区　包含層(下)	須恵器　甕		1㎜以下の白・黒色砂粒を含む 緻密	堅緻	外・断・内 淡青灰	図面番号181
27	〃	〃	〃		1㎜以下の石英、白色砂粒を含む	堅緻	外・内・青灰 断　明茶	図面番号サ・58
28	〃	1区谷	須恵器 長頸壺		1㎜以下の白色砂粒を含む	堅緻	外・断・内 灰白	外面自然釉付着
29	〃	〃	須恵器 壺		1㎜以下の白・黒色砂粒を含む	堅緻	外・内暗青灰 断・暗茶	自然釉付着
30	〃	2区南包含層（谷）	〃		1㎜以下の白色砂粒を含む	堅緻	外・内青灰 断　明茶	
31	〃	3区谷	〃		1㎜以下の白色砂粒を含む 緻密	堅緻	外・断・内 淡灰青	自然釉付着
32	〃	6区包含層（下）	須恵器 平瓶		2㎜以下の白色砂粒を含む 緻密	堅緻	外・断・内 淡灰青	自然釉付着
33	〃	〃	須恵器 壺		3㎜以下の石英、白色砂粒を含む	堅緻	外・断・内 淡灰青	自然釉付着
34	〃	〃	〃		1㎜以下の白色砂粒を含む	堅緻	外・灰青 断・内暗青灰	自然釉付着
35	〃	〃	須恵器 甑		3㎜以下の石英、白色砂粒を含む	堅緻	外・内黒灰 断・灰黒	図面番号202
36	〃	11区南溝3下層	土師器 高杯		1㎜以下の石英、白色砂粒を多く含む	良好	外・内淡灰黄 断・灰黒	須恵質ぎみ
37	〃	〃	土師器 甕	外面タタキ	3㎜以下の石英、白色砂粒を含む	良好	外・断・内 淡灰	軟質系土器
38	〃	12区溝3下層	土師器 高杯		1㎜以下の石英、白色砂粒を多く含む	良好	外・断・内 明灰黄	
39	〃	11区溝3	土師器 甑	外面タタキ、沈線	2㎜以下の石英、白色砂粒を含む	やや悪い	外・断・内 明灰赤	軟質土器
40	〃	〃	須恵器 双耳付短頸壺		2㎜以下の石英、白色砂粒を含む 緻密	堅緻	外・断・内 淡灰青	
41	〃	〃	須恵器 甕	外面斜格子タタキ	1㎜以下の石英、白色砂粒を含む 緻密	堅緻	外・内暗青灰 断・暗茶	
42	〃	〃	須恵器 器台	外面、波状紋、沈線	1㎜以下の白色砂粒を含む 緻密	堅緻	外・暗青灰 内・断暗茶	初期須恵器
43	〃	11区南溝3	須恵器 直口壺		2㎜以下の石英、白色砂粒を含む	堅緻	外・暗青灰 内・断暗茶	図面番号53 初期須恵器
44	〃	12区溝3下層	須恵器 甕		1㎜以下の石英、白色砂粒を含む	堅緻	外・断・内 青灰	初期須恵器
45	〃	〃	〃	内面指紋付	1㎜以下の石英、白色砂粒を含む	堅緻	外・断・内 淡青灰	図面番号52 初期須恵器
46	〃	11区溝3他	〃	外面平行タタキ	1㎜以下の白色砂粒を含む 緻密	堅緻	外・断・内 青灰	初期須恵器
47	〃	3区谷	土師器 高杯		3㎜以下の石英、白色砂粒を含む	やや悪い	外・断・内 灰白	図面番号258
48	〃	6区包含層 (下)	〃		3㎜以下の石英、白色砂粒を含む	普通	外・断・内 白灰	

菅生小学校裏山遺跡

遺物番号	遺跡名	出土地点	種類	技法	胎土	焼成	色調	備考
49	菅生小学校裏山遺跡	6区包含層（下）	土師器 高杯		1㎜以下の石英、白色砂粒を含む 緻密	良好	外・淡桃 断・内灰白	
50	〃	6区谷（中）下層	土師器 甕？		3㎜以下の石英、白色砂粒を多く含む	普通	外・断・内 灰白	
51	〃	3区谷上層	土師器 甕	外・内面タタキ	3㎜以下の石英、白色砂粒を多く含む	普通	外・断・内 暗黄灰	
52	〃	12区B包含層	土師器 甕	外・内面タタキ	3㎜以下の石英、白色砂粒を多く含む	普通	外・断・内 暗黄灰	
53	〃	3区包含層	土師器 器型不明	外・内面タタキ	3㎜以下の石英、白色砂粒を多く含む	普通	外・断・内 明灰黄	
54	〃	11、12区包含層	須恵器 壺		2㎜以下の石英、白色砂粒を多く含む	良好	外・断・内 青灰	図面番号305～310
55	〃	12区包含層	須恵器 高杯		3㎜以下の石英、白色砂粒を含む	堅緻	外・内暗青灰 断・暗茶	図面番号388
56	〃	11区南砂層	須恵器 器型不明		1㎜以下の石英、白色砂粒を含む	堅緻	外・断・内 暗青灰	図面番号353
57	〃	12区C包含層	須恵器 直口壺	外面波状紋	1㎜以下の石英、白色砂粒を含む、緻密	堅緻	外・内暗青灰 断暗茶	図面番号328
58	〃	1区谷	須恵器 短頸壺	外面平行タタキ	1㎜以下の石英、白色砂粒を含む 緻密	堅緻	外・断・内 明茶	図面番号300
59	〃	3区谷	須恵器 甕	外面タタキ、沈線	1㎜以下の石英を含む 緻密	やや悪い	外・断・内 白灰	図面番号405
60	〃	11区溝2他	須恵器 甕		1㎜以下の石英を含む 緻密	良好	外・断・内 灰白色	図面番号404
61	〃	12区D落ち込み	土師器 高杯		1㎜以下の石英を含む 緻密	良好	外・断・内 灰色	
62	〃	〃	土師器 高杯		3㎜以下の石英、白色、砂粒を含む	良好	外・断・内 明茶色	
63	〃	〃	土師器 高杯		1㎜以下の石英、白色砂粒を含む	良好	外・断・内 灰白色	
64	〃	6区包含層（下）他	土師器 甕	外面斜格子タタキ	1㎜以下の石英を含む 緻密	良好	外・断・内 明灰桃色	軟質土器
65	〃	12区包含層	土師器	外面斜格子タタキ	2㎜以下の石英、白色砂粒を多く含む	良好	外・灰黒色 断・内暗茶色	軟質系土器
66	〃	〃	須恵器 直口壺		1㎜以下の石英、白色 砂粒を含む	堅緻	外・内黒灰色 断・暗黄茶色	
77	西坂古墳	石室内	須恵器 平瓶A		1㎜以下の石英、白色砂粒を含む	良好	外・断・内 灰白色	
78	〃	前庭部	須恵器 平瓶B		1㎜以下の石英、白色 砂粒を含む	良好	外・断・内 淡青灰色	
79	〃	〃	須恵器 平瓶C		1㎜以下の石英、白色砂粒を含む	良好	外・断・内 淡青灰色	
80	〃	〃	須恵器 平瓶D		2㎜以下の石英、白色砂粒を含む	良好	外・断・内 淡青灰色	

付載4　菅生小学校裏山遺跡出土遺物の胎土分析

遺物番号	遺跡名	出土地点	種類	技法	胎土	焼成	色調	備考
81	西坂古墳	石室内	須恵器 甕A		1㎜以下の石英、白色砂粒を含む	良好	外・断・内 淡青灰色	
82	〃	前庭部	須恵器 甕B		1㎜以下の石英、白色砂粒を含む	良好	外・断・内 灰白	
83	西坂古墳	前庭部	須恵器 甕C		1㎜以下の石英、白色砂粒を含む	良好	外・断・内 青灰色	
84	〃	周溝内	須恵器 甕D		1㎜以下の石英、白色 砂粒を含む	良好	外・断・内 青灰色	
85	酒津八幡山平谷遺跡	トレンチ	須恵器		3㎜以下の石英、白色砂粒を多く含む	良好	外・断・内 青灰色	
86	二子14号墳		須恵器 高杯		1㎜以下の石英、白色砂粒を含む	良好	外・断・内 青灰色	

第6表　菅生小学校裏山遺跡出土遺物の産地推定

遺物番号	遺跡名	器種・備考	Si/Al-K/Ca散布図			Si/Al-Fe/Ti散布図			K/Mg-Si/Al散布図			窯跡産地推定
			邑久	寒田	二・上	邑久	寒田	二・上	邑久	寒田	二・上	
1	菅生小学校裏山	須恵器　杯蓋	●		●	●		●	●			邑久？
2	〃	須恵器　杯蓋	●		●	●		●	●			邑久？
3	〃	須恵器　杯蓋	●		●	●		●	●			邑久？
4	〃	須恵器　杯蓋			●			●			●	二、上、末
5	〃	須恵器　杯蓋		●	●	●		●			●	推定不可能
6	〃	須恵器　杯蓋	−	−	−		●		−	−	−	不明
7	〃	須恵器　杯蓋		●	●	●	●	●	●	●		推定不可能
8	〃	須恵器　杯			●	●		●			●	二、上、末？
9	〃	須恵器　杯		●		●	●	●	●	●		寒田、邑久？
10	〃	須恵器　杯		●		●	●	●		●		寒田、邑久？
11	〃	須恵器　杯		●	●	●	●	●	●	●		推定不可能
12	〃	須恵器　杯身（高台）		●	●	●	●	●	−	−	−	不明
13	〃	須恵器　杯身（高台）			●			●			●	二、上、末
14	〃	須恵器　杯身（高台）	●	●		●	●		●	●		邑久、寒田
15	〃	須恵器　杯身（高台）	●				●		●	●		邑久、寒田
16	〃	須恵器　杯身（高台）		●	●	●	●	●	●	●		推定不可能
17	〃	須恵器　杯身（高台）		●	●	●	●	●		●		推定不可能
18	〃	須恵器　高杯	●	●	●	●	●	●	●	●	●	推定不可能
19	〃	須恵器　高杯			●			●			●	二、上、末
20	〃	須恵器　高杯			●			●			●	二、上、末
21	〃	須恵器　高杯			●			●			●	二、上、末
22	〃	須恵器　高杯			●			●			●	二、上、末
23	〃	須恵器　甕	−	−	−	●	●	●	●	●		不明
24	〃	須恵器　甕		●		●	●			●		寒田？
25	〃	須恵器　甕		●	●			●	●	●	●	推定不可能
26	〃	須恵器　甕	●	●		●	●			●		邑久、寒田
27	〃	須恵器　甕		●	●	●	●	●	●	●		推定不可能
28	〃	須恵器　長頸壺	●	●			●		●	●		邑久、寒田
29	〃	須恵器　壺		●		●	●		●	●		邑久、寒田

遺物番号	遺跡名	器種・備考	Si/Al-K/Ca散布図			Si/Al-Fe/Ti散布図			K/Mg-Si/Al散布図			窯跡産地推定
			邑久	寒田	二・上	邑久	寒田	二・上	邑久	寒田	二・上	
30	菅生小学校裏山	須恵器　壺		●	●	●		●		●	●	推定不可能
31	〃	須恵器　壺	●	●	●	●	●	●	●	●		推定不可能
32	〃	須恵器　平瓶	●			●	●	●	●	●		推定不可能
33	〃	須恵器　壺		●	●	●	●	●		●	●	推定不可能
34	〃	須恵器　壺		●	●	●	●	●		●		推定不可能
35	〃	須恵器　甑			●			●	●			二、金、末？
36	〃	土師器　高杯　須恵質ぎみ	—	—	—	—	—	—	—	—	—	不明
37	〃	土師器　甕多面タタキ軟質系土器	●	●		—	—	—	●			不明
38	〃	土師器　高杯	●	●		●	●		●	●		邑久、寒田
39	〃	土師器　甑タタキ、沈線軟質土器		●		●	●		●	●		邑久、寒田
40	〃	須恵器　壺	—	—	—	—	—	—			●	不明
41	〃	須恵器　甕　斜格子タタキ	●	●		●	●	●		●	●	推定不可能
42	〃	須恵器　器台　初期須恵器	●		●	●		●	●	●	●	推定不可能
43	〃	須恵器　直口壺　初期須恵器			●	●		●			●	二、上、末？
44	〃	須恵器　甕　初期須恵器			●	—	—	—			●	不明
45	〃	須恵器 甕 内面指紋付初期須恵器	—	—	—		●		●			不明
46	〃	須恵器 甕 外面タタキ初期須恵器	—	—	—			●			●	不明
47	〃	土師器　高杯	—	—	—	●	●	●	●			不明
48	〃	土師器　高杯	●	●			●		●	●		邑久、寒田
49	〃	土師器　高杯			●	●		●			●	二、上、末？
50	〃	土師器　甕？			●			●			●	二、上、末
51	〃	土師器　甕　外面タタキ	—	—	—		●		—	—	—	不明
52	〃	土師器　甕　外面タタキ		●		—	—	—	—	—	—	不明
53	〃	土師器　外面タタキ	—	—	—		●		—	—	—	不明
54	〃	須恵器　壺	●			●	●	●	●			邑久？
55	〃	須恵器　高杯	●		●	●		●			●	二、上、末？
56	〃	須恵器	●	●		●	●	●	—	—	—	不明
57	〃	須恵器　長口壺　外面波状紋	●			●	●		●	●		邑久、寒田
58	〃	須恵器　短頸壺　外面平行タタキ		●	●	●			—	—	—	不明

二・上・末・金は二子御堂奥、上竹西の坊、末の奥、道金山の各窯跡の略である。

遺物番号	遺跡名	器種・備考	Si/Al-K/Ca散布図			Si/Al-Fe/Ti散布図			K/Mg-Si/Al散布図			窯跡産地推定
			邑久	寒田	二・上	邑久	寒田	二・上	邑久	寒田	二・上	
59	菅生小学校裏山	須恵器 甕 外面タタキ、沈線	−	−	−	−	−	−			●	不明
60	〃	須恵器 甕	●			●	●		−	−	−	不明
61	〃	土師器 高杯		●			●		−	−	−	不明
62	〃	土師器 高杯	−	−	−		●		−	−	−	不明
63	〃	土師器 高杯	●	●		●	●		●	●		邑久、寒田
64	〃	土師器 甕 斜格子タタキ軟質土器	●	●			●		−	−	−	不明
65	〃	土師器 斜格子タタキ軟質系土器	●			●	●	●	●			邑久？
66	〃	須恵器 直口壺	−	−	−	●	●		●	●		不明
77	西坂古墳	須恵器 平瓶			●			●			●	二、金、末
78	〃	須恵器 平瓶	●	●		●	●	●	●			邑久、寒田？
79	〃	須恵器 平瓶	●		●	●		●			●	二、金、末？
80	〃	須恵器 平瓶		●	●	●	●	●		●	●	推定不可能
81	〃	須恵器 甕			●			●			●	二、金、末
82	〃	須恵器 甕	●		●	●		●			●	二、金、末？
83	〃	須恵器 甕	●		●	●		●			●	二、金、末？
84	〃	須恵器 甕		●		●	●	●		●		寒田？
85	酒津八幡山遺跡	須恵器	−	−	−	●		●	−	−	−	不明
86	二子14号墳	須恵器 高杯			●			●			●	二、金、末

二・上・末は二子御堂奥、上竹西の坊、末の奥、道金山の各窯跡の略である。

付載５　菅生小学校裏山遺跡出土縄文土器の胎土分析

白石　純

Ⅰ．はじめに

菅生小学校裏山遺跡より出土した縄文土器のなかに、中部地方の縄文時代晩期にみられる文様で浮線網状文、沈線文などがある（第９表の遺物番号67、68、69)。そして、これらの土器と同遺跡で多く出土している条痕文、ケズリ痕、ミガキ痕のある土器との間で胎土に差があるかどうか検討した。

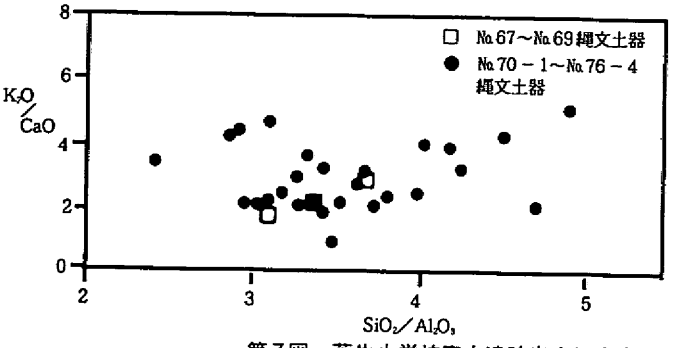
なお、分析方法、装置、試料調整法、測定方法などは菅生小学校裏山遺跡の須恵器胎土分析で述べた分析方法と同じである。

Ⅱ．分析結果

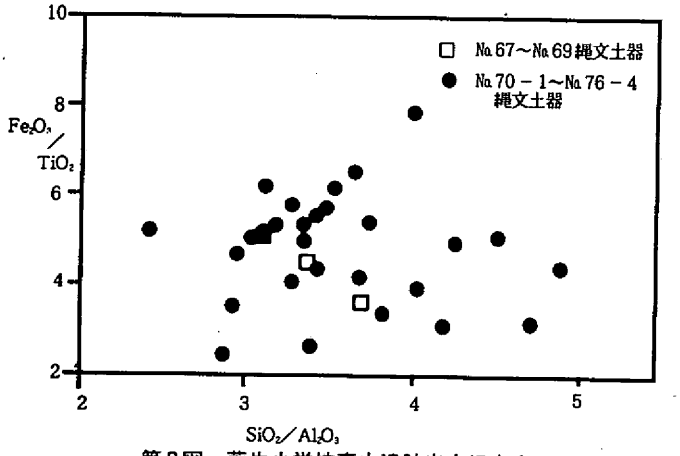
分析資料は遺物番号No67～No69の３点と遺物番号No70－１～No76－４までの28点の合計31点である。

第７・８・９図の各散布図とも遺物番号No67、68、69がすべて遺物番号No70－１～No76－４の範囲内に入っており、主要成分７元素では胎土に違いはみられなかった。ただ、この結果は遺物番号No67～No69の３点が、他の28点と同じ粘土で作られた可能性を含むものの、中部地方の在地の土器を分析していない現状では他の地域の粘土で作られた可能性も考えられることを明記しておく。

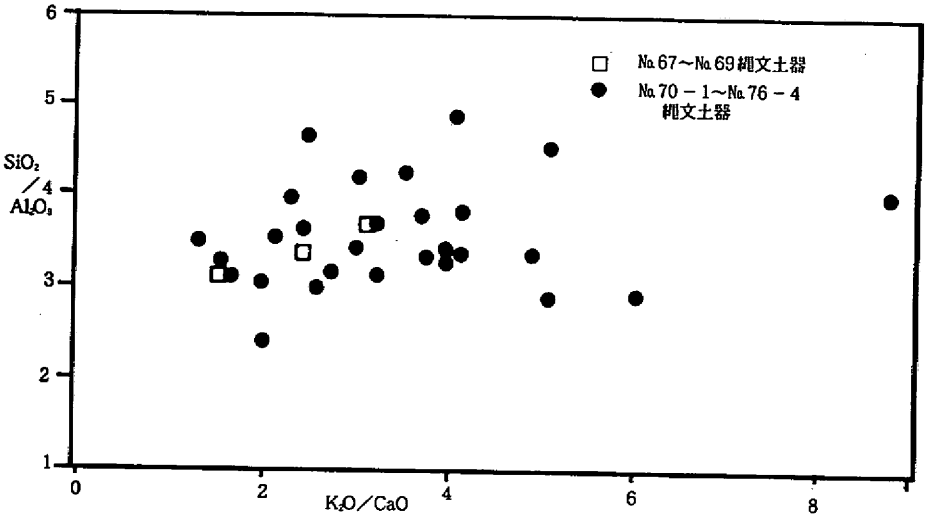
なお、縄文土器資料では亀山行雄、古市秀治の両氏にお世話になった。



第7図　菅生小学校裏山遺跡出土縄文土器
$SiO_2/Al_2O_3 - K_2O/CaO$　散布図



第8図　菅生小学校裏山遺跡出土縄文土器
$SiO_2/Al_2O_3 - Fe_2O_3/TiO_2$　散布図



第9図　菅生小学校裏山遺跡出土縄文土器
$K_2O/CaO - SiO_2/Al_2O_3$　散布図

胎土分析試料一覧表

遺物番号	遺跡名	出土地点	種類	技法	胎土	焼成	色調	備考
67	菅生小学校裏山遺跡	12区Ｂ灰褐色砂	浅鉢Ａ	浮線網状文	3㎜以下の石英、白色砂粒を含む	普通	外・断・内 灰黒色	
68	〃	〃	浅鉢Ｂ	沈線文	2㎜以下の石英、白色砂粒を含む	〃	外・内暗黄灰色 断灰黒色	
69	〃	〃	浅鉢Ｃ	条痕文	3㎜以下の石英を含む	〃	外・内暗黄灰色 断　灰黒色	
70-1	〃	12区Ｂ灰白色粘土	深鉢	条痕文	1㎜以下の石英を含む	普通	外・断・内 灰白色	
70-2	〃	〃	〃	〃	〃	〃	外・断・内 灰白色	
70-3	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃　灰黒色	
70-4	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃　黒色	
71-1	〃	12区Ｂ灰白色粘土	深鉢	ケズリ痕	〃	〃	〃　黒色	
71-2	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃　黒色	
71-3	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃　黒色	
71-4	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃　黒色	
72-1	〃	12区Ｂピート層	深鉢	条痕文	〃	〃	〃　淡灰黒色	
72-2	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃　黒灰色	
72-3	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃　灰黒色	
72-4	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃　灰黒色	
73-1	〃	12区ピート層	深鉢	ケズリ痕	〃	〃	〃　灰白色	
73-2	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃　灰白色	
73-3	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃　灰黒色	
73-4	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃　灰黒色	
74-1	〃	12区Ｂ灰褐色砂層	深鉢	条痕文	〃	〃	〃　黒灰色	
74-2	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃　灰黄色	
74-3	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃　黒色	
74-4	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃　灰黒色	
75-1	〃	12区Ｂ灰褐色砂層	深鉢	ケズリ痕	〃	〃	〃　灰黄色	
75-2	〃	〃	〃	〃	〃	〃	外・断・内 灰黄色	
75-3	〃	〃	〃	〃		〃	外・断・内 黒灰色	
75-4	〃	12区Ｂ灰褐色砂層	深鉢	ケズリ痕		普通	外・断・内 黒灰色	
76-1	〃	12区Ｂピート層	浅鉢	ミガキ痕		〃	外・断・内 灰黒色	
76-2	〃	〃	〃	〃		〃	外・断・内 灰黒色	
76-3	〃	〃	〃	〃		〃	外・断・内 灰黒色	
76-4	〃	〃	〃	〃		〃	外・断・内 灰黒色	

付載6　菅生小学校裏山遺跡　種子同定報告

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

菅生小学校裏山遺跡は、これまで旧石器時代の遺物の散布地として知られているが、今回の調査では古墳時代の溝、奈良時代の井戸が検出されている。溝や井戸内からは種実などの大型植物遺体が採取された。

今回の分析試料は、10区谷Ｃ井戸１・２および12区溝３より出土した種子３試料である。

１．方法

肉眼および実体顕微鏡を用いて同定を行い、写真撮影（図版１）も行った。

２．結果および考察

本遺跡から得られた大型植物遺体の種実は表１に示した。

表１　菅生小学校裏山遺跡出土種子同定結果

出土位置	10区谷Ｃ井戸１		10区谷Ｃ井戸２		12区溝３	
種名（部位）	完形	破片	完形	破片	完形	破片
オニグルミ（核）						3
コナラ属（果実・果皮） （殻斗）		7 1				
カナムグラ（種子）	6	14				
カラマツソウ属（果実）		2				
ウメ（核）			1			
モモ（核）					7	2
サクラ属（核）	1					
カラスサンショウ（核）				1		
ノブドウ属（種子）	1	1				
ブドウ属（種子）	11	4				
メロン仲間（種子）	2	3		1		
ヒョウタン類（種子）	6	3				
オオムギ（炭化胚乳）	3	1				
合計	30	36	1	2	7	5

以下に種類の特徴を述べる。

・オニグルミ（*Juglans mandshurica* MAXIM subsp. *sieboldiana* MAKINO）クルミ科　核

核は茶褐色。側面観は円形、上面観は円形に近い楕円形。長さ22㎜、幅22㎜、厚さ19㎜程度。側面には明瞭な縦の縫合線が2本みられ、表面には不規則な隆起がある。上端はすべて破損している。核は厚く硬い。

・コナラ属（*Quercus* sp.）　ブナ科　果実・殻斗

果実は果皮が破損状態・破片状態で得られた。淡灰褐色～褐色。図版に用いた個体は、長さ13㎜、径6㎜程度。果実上部の柱頭、花柱の部位は不明である。

殻斗は破片状の1個体が得られたのみである。灰茶褐色。殻斗の鱗片が覆瓦状に並ぶ。したがって、殻斗はコナラ亜属（*Quercus* subgen. *Lepidobalanus*）であると思われる。

・カナムグラ（*Humulus scanolens* MERRILL）　クワ科　種子

種子は灰色～淡褐色。側面観は円形、上面観は両凸レンズ形。径3.5 ～4.0 ㎜程度。一端に心形の「へそ」がある。種皮は薄く柵状構造をとり、やや硬い。

・カラマツソウ属（*Thelictrum* sp.）　キンポウゲ科　果実

果実は淡褐色。上部・下部は欠失している。表面には縦方向に隆起が片面に6～7本程度存在する。やや厚く、やや硬い。

・ウメ（*Prunus mume* SIEBOLD et ZUCCARINI）　バラ科　核

核は茶褐色。側面観・上面観とも楕円形。長さ14㎜、幅11㎜、厚さ9㎜程度。一側面には縫合線が発達し、下部に発達した「へそ」がある。表面には円形の凹部が分布する。核は硬い。

・モモ（*Prunus persica* BATSCH）　バラ科　核

核は淡茶褐色～茶褐色。側面観は楕円形、上面観は両凸レンズ形。長さ18～23㎜、幅16～20㎜、厚さ12～15㎜程度。一側面に縫合線が発達し、下部には「へそ」がある。表面にはモモ特有のしわ状の隆起構造が発達する。核は硬い。

なお、核の形態はやや小型で丸み・厚さのある個体と、やや卵形で長さに対して厚さの小さい個体が混ざる。大きさは小～中程度のものである。

また、げっ歯類による食害を受けた個体が1つ得られている。

・サクラ属（*Prunus* sp.）　バラ科　核

核は淡茶褐色。側面観は楕円形、上面観は両凸レンズ形。長さ4.5 ㎜、幅3.3 ㎜。一側面に縫合線がやや発達し、下部に「へそ」がある。表面は滑らか。核は硬い。

・カラスサンショウ（*Fagara ailanthoides* ENGLER）　ミカン科　核

核は黒色。側面観・上面観とも卵形。長さ3.6 ㎜、幅2.5 ㎜。表面に大きな網目模様があり、一方の側面に長く、核の長さの2/3 に達する「へそ」がある。核は硬い。

・ノブドウ属（*Ampelopsis* sp.）　ブドウ科　種子

種子は黄褐色。側面観・上面観とも卵形。長さ4.3 ㎜、幅3.5 ㎜程度。背軸面にさじ状の「へそ」がある。向軸面には縦方向に細長い凹部が２列ある。種皮はやや薄く、やや硬い。

・ブドウ属（*Vitis* sp.）　ブドウ科　種子

種子は淡褐色、茶褐色。側面観・上面観とも卵形。長さ４㎜、幅2.5 ㎜程度。背軸面にさじ状の「へそ」があり、この部分の周囲はややくぼむ。向軸面には２本の縦方向に細長い凹部がある。種皮はやや薄く、やや硬い。

・メロン仲間（*Cucumis melo* Linne）　ウリ科　種子

種子は黄褐色。側面観は長楕円形、上面観は薄い両凸レンズ形。長さ８㎜、幅3.3 ㎜程度。上部はハの字状にややくぼみがある。種皮はやや薄く、弾力がある。種子の大きさ・形からは、マクワウリ類に属するものと考えられる。

・ヒョウタン類（*Lagenaria siseraria* Standley）　ウリ科　種子

種子は淡黄褐色に赤褐色の筋がある。側面観は細長い台形状、上面観は偏平。長さ14㎜、幅は中央部で６㎜程度。種皮はやや厚く、やや弾力がある。

・オオムギ（*Hordeum vulgare* Linne）　イネ科　胚乳

胚乳は炭化し、黒色。側面観は長楕円形、上面観は楕円形。長さ4.5 ～5.4 ㎜、幅３㎜程度。一側面下部には胚が欠落した凹部があり、一側面には中央に縦方向に１本の溝がある。

なお、小型の丸みのある個体はコムギである可能性も考えられることから、両者が混ざっているのかもしれない。

今回得られた大型植物遺体について、人間の利用という面から分類すると次のようになる。

・食用となるもの　（ ）内は食用となる部位

オニグルミ（子葉）、コナラ属（子葉）、ウメ（果実）、モモ（果実）、ブドウ属（果実）、メロン仲間（果実）、オオムギ（胚乳）

・食用以外に利用されるもの　（ ）内は用途

ヒョウタン類（容器）

・栽培種とされるもの

ウメ、モモ、メロン仲間、オオムギ、ヒョウタン類

今回得られた大型植物遺体は、上記のような用途で当時利用されていたものと推測される。とくに、ウメ、モモ、メロン仲間、オオムギ、ヒョウタン類の大型植物遺体は、栽培されていたものに由来するのではなかろうか。また、人間に利用される種類が多いことから、今回検出された大型植物遺体は利用した後の不要な部分を、井戸内に投棄したものと考えられる。

5．三田散布地

例　言

1　本報告は山陽自動車道建設工事に伴い岡山県教育委員会が実施した倉敷市三田に所在する三田散布地の調査報告である。

2　発掘調査期間は、昭和61年４月１日から同月30日である。

3　発掘調査は、岡山県古代吉備文化財センター職員井上弘が担当した。

4　報告書の作成にあたっては、津寺事務所において洗浄、注記、復元、実測を行った。

5　本文は、井上弘が執筆した。

6　出土遺物、図面、写真類は岡山県古代吉備文化財センターに保管している。

図 目 次

第１図　遺跡位置図…… 425
第２図　トレンチ設定図（１／2000）…… 426
第３図　トレンチ土層断面図（１／80）…… 427
第４図　出土遺物（１／４）…… 428

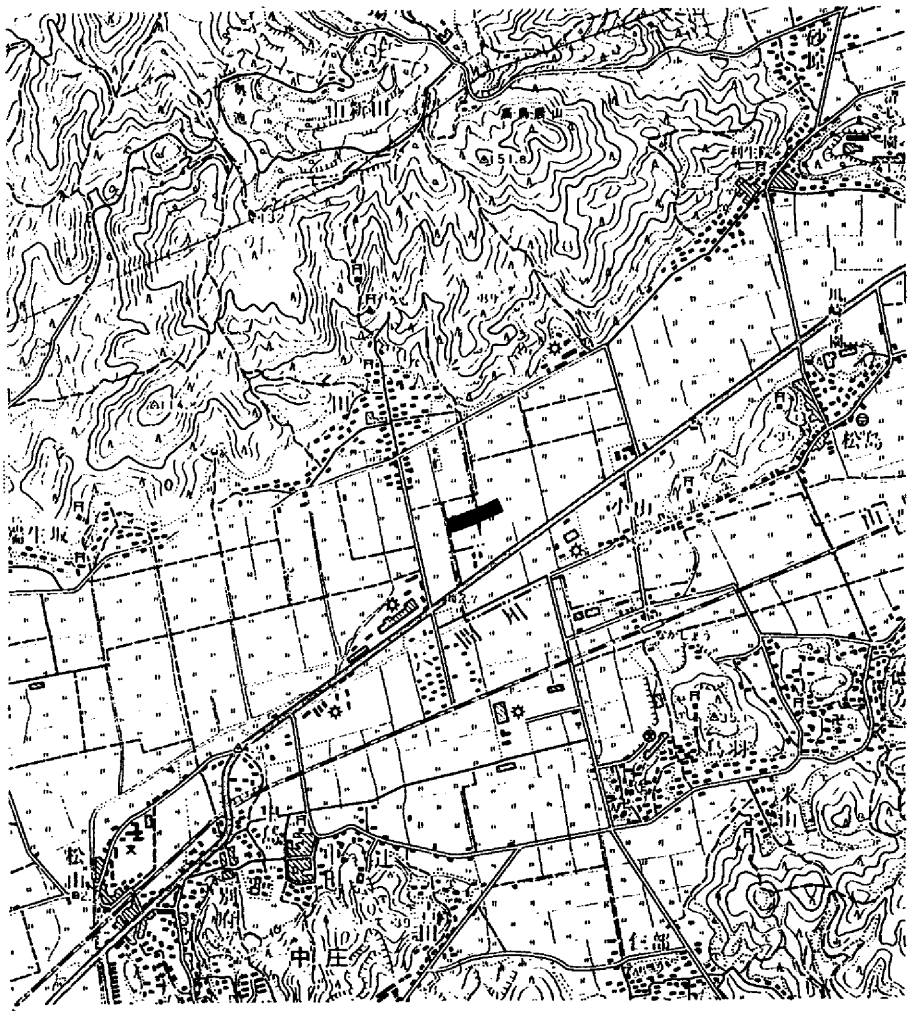
図版目次

図版１－１　遺跡の近景（東から）
　　２　遺跡の近景（西から）
図版２－１　トレンチ１
　　２　トレンチ２
図版３－１　トレンチ３
　　２　トレンチ４
図版４－１　トレンチ４
　　２　トレンチ５

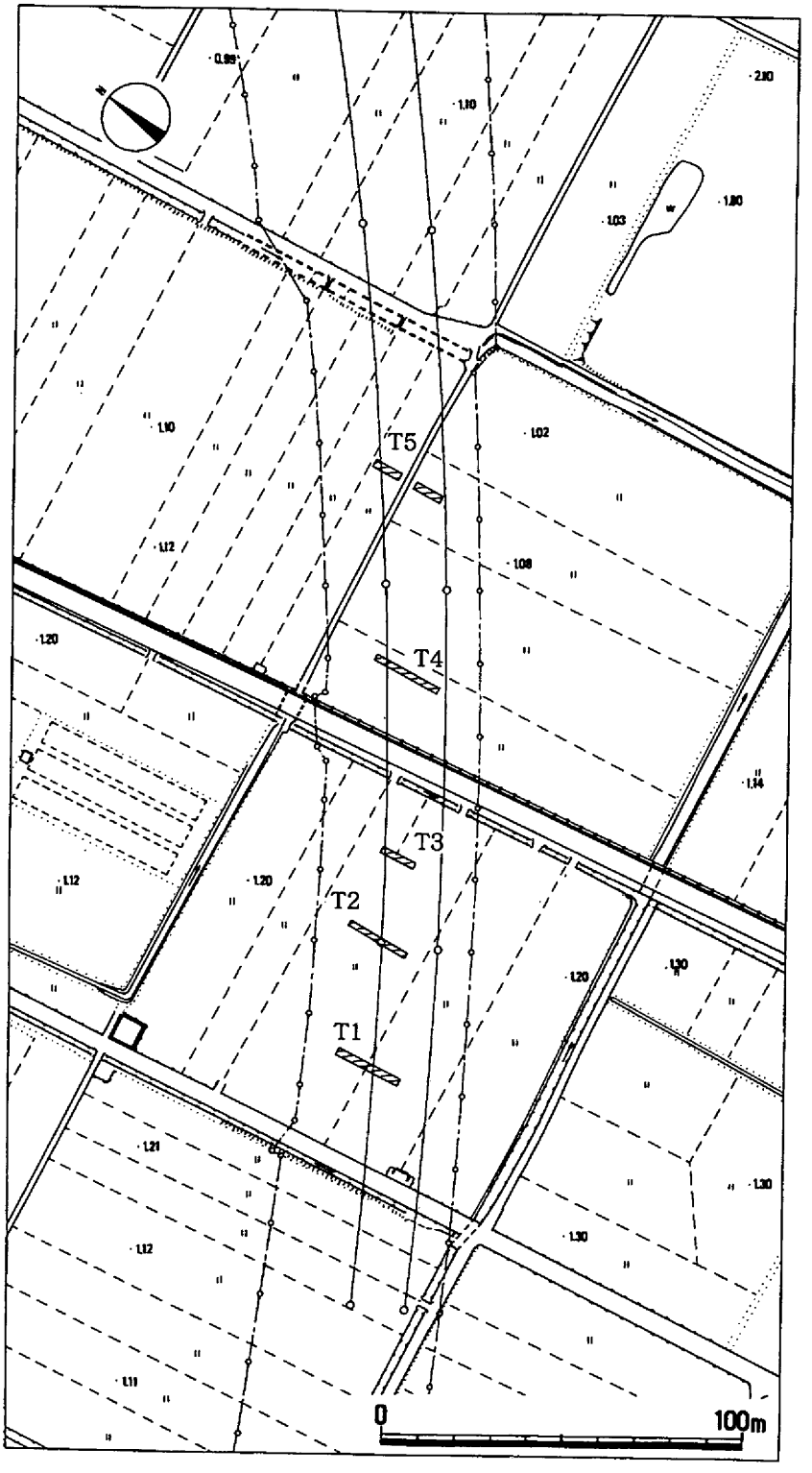
1　調査に至る経過と結果

遺跡は、倉敷市三田に所在するもので、倉敷市街地より東に位置する。高鳥居山の南側麓に三田はあり、その集落のほぼ中央には、平安時代の瓦を出土する寺院跡と推定される遺跡がある。この遺跡の南側に広がる水田の中に山陽自動車道が建設されることになった。一帯は、少し南に下るものの平坦な水田地帯を形成している。そのため、寺院跡に関連する遺跡が想定されるとして一次調査を実施した。

調査は、遺跡の推定範囲内にトレンチを設定し、遺構の有無の確認をすることから始めた。



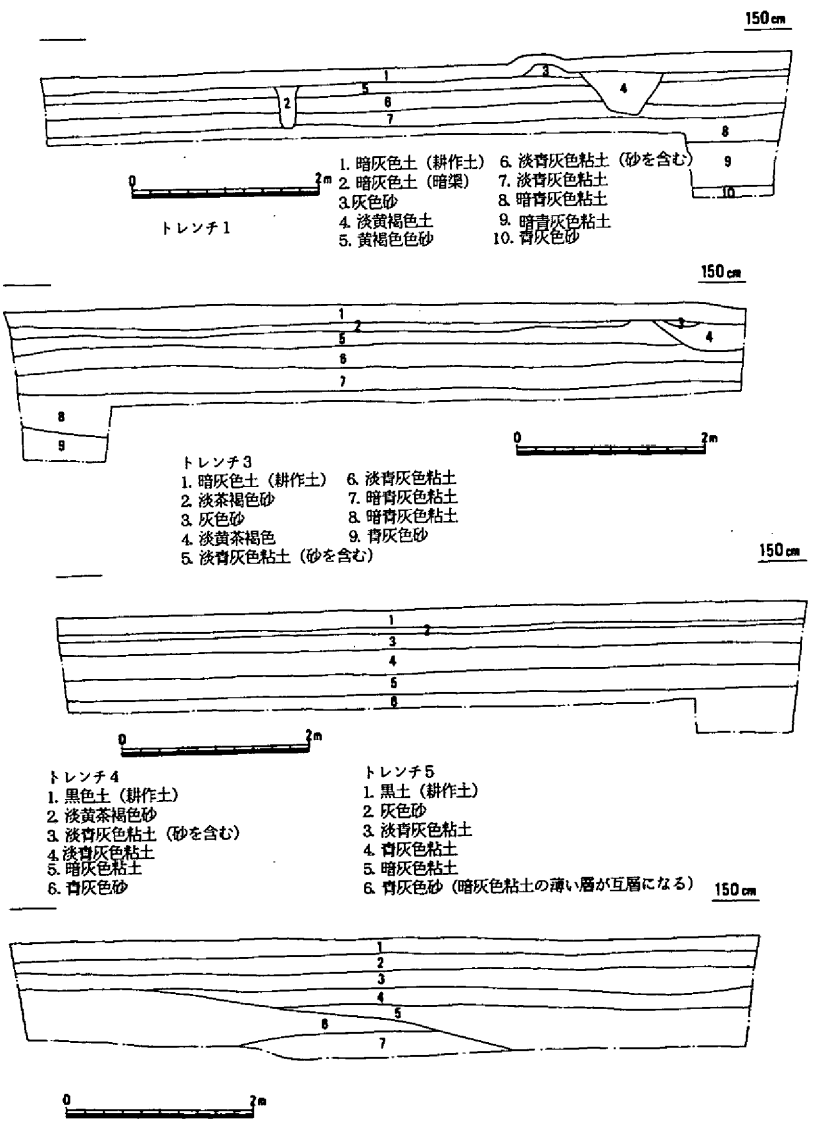
第1図　遺跡位置図



第22図　トレンチ設定図（1／2000）

トレンチ１

遺跡推定範囲の西端に設定したものである。トレンチを掘り下げた結果、遺構は検出されなかった。遺物としては中・近世の土器片数点が出土したのみである。層位を見ると、最上層が現在の耕作土、その下層に床土となる鉄分を多く含んだ層がある。床土層の下には、灰色の強い粘土層がある。この粘土層は、二層に分けられる。上層は砂を含むが、下層にはそれを全く含まない。遺物もこの二層から出土している。灰色の粘土層の下は、灰色の色が濃くなるが、粘土の硬さは軟らかくなる。さらに下層は、黒色に近い色になり、粘土もさらに軟らかくなる。この粘土層の下層には砂の堆積が見られる。



第３図　トレンチ土層断面図（1／80）

トレンチ３

トレンチ１と基本的には同じである。最上層には現在の耕作土があり、その下層は床土となる層である。第５層以下はトレンチ１と全く同じ粘土層が続き、その下層は砂の層となる。

トレンチ４

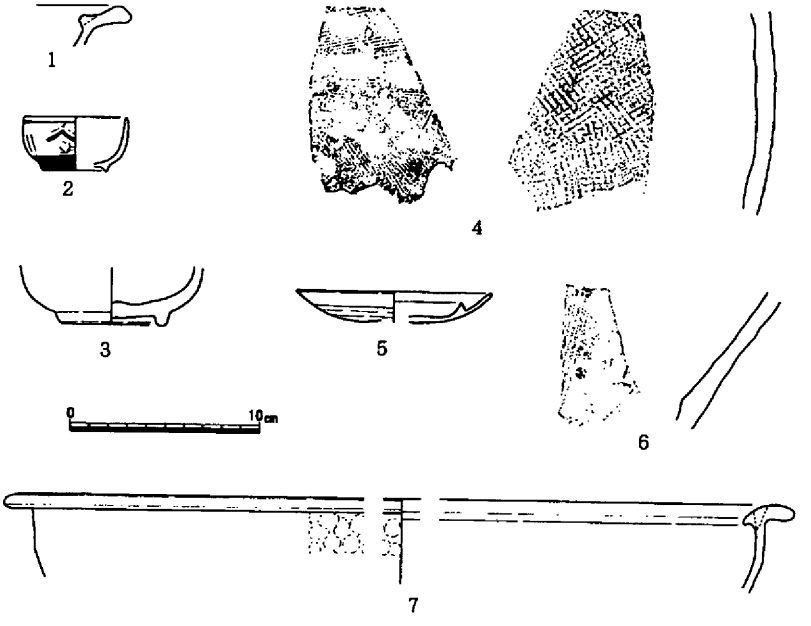
トレンチ３とほとんど同じ状況を呈しており、上層から耕作土、床土、灰色粘土層、暗灰

色粘土と続き、青灰色を呈する砂の層となる。

トレンチ5

第5層まではトレンチ4と同じ状況を呈している。6層も同じ砂層であるが、砂層中に粘土の薄い層が互層に堆積している。

出土遺物



第4図　出土遺物（1／4）

遺物の出土量は非常に少なく、小破片がほとんどであり、図示できた遺物も7点のみである。1は内耳の土鍋である。7も同じく内耳の土鍋で内耳の部分に小孔が穿たれたものである。2、3は染め付け磁器である。4は亀山焼の甕の破片で、外面に格子の叩きが施されるものである。5は備前焼の灯明皿である。6は亀山焼のすり鉢の破片で、数本単位の条線が施される。

2　まとめ

各トレンチに共通して見られる灰色粘土層からは、少量の遺物が出土しており、また、水田耕作の跡と推定されるような鉄分の水平な堆積が見られた。この灰色粘土層の下に見られる粘土層は軟らかく、その状況からして低湿地の状況を呈すものと推測される。つまり、灰色粘土層が堆積する以前は、一帯は湿地帯であり人の住める状況ではなかったと思われる。この地において耕作が可能になったのは、灰色粘土の堆積が進んでからと考えられる。その時期は、中世以降、それもむしろ近世に近い時期と推測される。

6．二子14号墳

例　言

1．本書は倉敷市二子1019番地に所在する、二子14号墳の報告書である。
2．発掘調査は、山陽自動車道の建設に先立ち、日本道路公団の委託を受けて、岡山県教育委員会が実施した。
3．発掘調査は、岡山県古代吉備文化財センターがあたり、昭和61年４～８月の第１次調査は井上弘、亀山行雄が、昭和62年４～６月の第２次調査および昭和63年７月の第３次調査は亀山が担当した。また第１次調査に際しては大智浩の協力を得た。
4．発掘調査の実施にあたっては、埋蔵文化財保護対策委員会の指導を受けた。また近藤義郎・吉田晶・古瀬清秀・広瀬和雄の各氏からは有益な助言を受けた。
5．発掘調査の記録は調査担当者があたった。ただし、墳丘外護列石については写真測量を実施している。
6．報告書の作成は、津寺事務所で実施し、政田孝の協力を得た。
7．報告書は、第１・２章を井上が、第３・４章を亀山が執筆し、亀山が編集を担当した。
8．挿図の方位には磁北をもちい、レベルは海抜高によっている。
9．地形図には、国土地理院および日本道路公団作成のものを用いた。
10．横穴式石室の記載には、奥壁に向いた場合の左右を用い、挿図との一致を図った。
11．遺物の実測図は、土器を1/4 、鉄器を1/3 の縮尺に統一した。
12．木棺の樹種については岡山商科大学畔柳鎮氏の鑑定を得た。
13．発掘調査および報告書に関する一切の記録は、岡山県古代吉備文化財センターで保管している。
14．古墳は調査終了後、岡山県教育委員会の指導のもとに隣接地に移築復元し、史跡公園として一般に公開している。
15．古墳の移築復元にあたっては、文化庁および奈良国立文化財研究所の指導を受けた。

目　次

第１章　地理的・歴史的環境…… 435
第２章　発掘調査の経緯…… 437
　第１節　発掘調査の経緯と経過…… 437
　第２節　調査の方法と日誌抄…… 438
第３章　発掘調査の概要…… 443
　第１節　古墳の概要…… 443
　第２節　古墳の立地…… 443
　第３節　墳丘…… 444
　　（１）　外護列石
　　（２）　墳丘の築成
　第４節　横穴式石室…… 446
　　（１）　墓壙
　　（２）　横穴式石室
　　（３）　閉塞施設
　第５節　出土遺物…… 457
　　（１）　遺物の出土状況
　　（２）　出土遺物
　第６節　その他の遺構…… 460
　　（１）　土壙
　　（２）　配石遺構
第３章　まとめ…… 461
付　章　二子14号墳の移築復元…… 465

図目次

第1図　周辺遺跡分布図（1/25000）…… 435
第2図　古墳位置図（1/2000）…… 439
第3図　地形測量図（1/400）…… 440
第4図　墳丘測量図（1/200）…… 441
第5図　墳丘側面図1（1/50）……447～448
第6図　墳丘側面図2（1/50）……449～450
第7図　墳丘断面図（1/60）…… 451
第8図　横穴式石室上面図（1/80）…… 453
第9図　横穴式石室平・側面図（1/50）……455～456
第10図　閉塞施設平・断面図（1/50）…… 454
第11図　遺物出土状況図（1/40）…… 457
第12図　出土遺物実測図1（1/4）…… 458
第13図　出土遺物実測図2（1/3）…… 459
第14図　土壙平・断面図（1/20）…… 460
第15図　配石遺構平・断面図（1/30）…… 460
第16図　墳丘平面企画図（1/100）…… 462
第17図　復元工事断面模式図…… 465
第18図　復元計画平面図（1/400）…… 466
付　図　墳丘平面図（1/50）

図版目次

図版1－1　古墳からの遠望
　　－2　調査前の状況
図版2－1　古墳の全景（南から）
　　－2　古墳の全景（北から）
図版3－1　古墳の全景（東から）
　　－2　古墳の全景（西から）
図版4－1　外護列石（下段南辺）

二子14号墳

－2　外護列石（下段西辺）

図版5－1　外護列石（下段南西隅）

－2　外護列石（下段北東隅）

図版6－1　外護列石（上段北東隅）

－2　外護列石（下段西南隅）

図版7－1　閉塞施設（南から）

－2　閉塞施設（東から）

図版8－1　羨道左側壁

－2　羨道右側壁

図版9－1　横穴式石室

－2　遺物出土状況

図版10－1　周溝内の配石

－2　配石遺構

図版11－1　石室解体風景

－2　石室解体風景

図版12－1　復元後の古墳（南から）

－2　復元後の古墳（北西から）

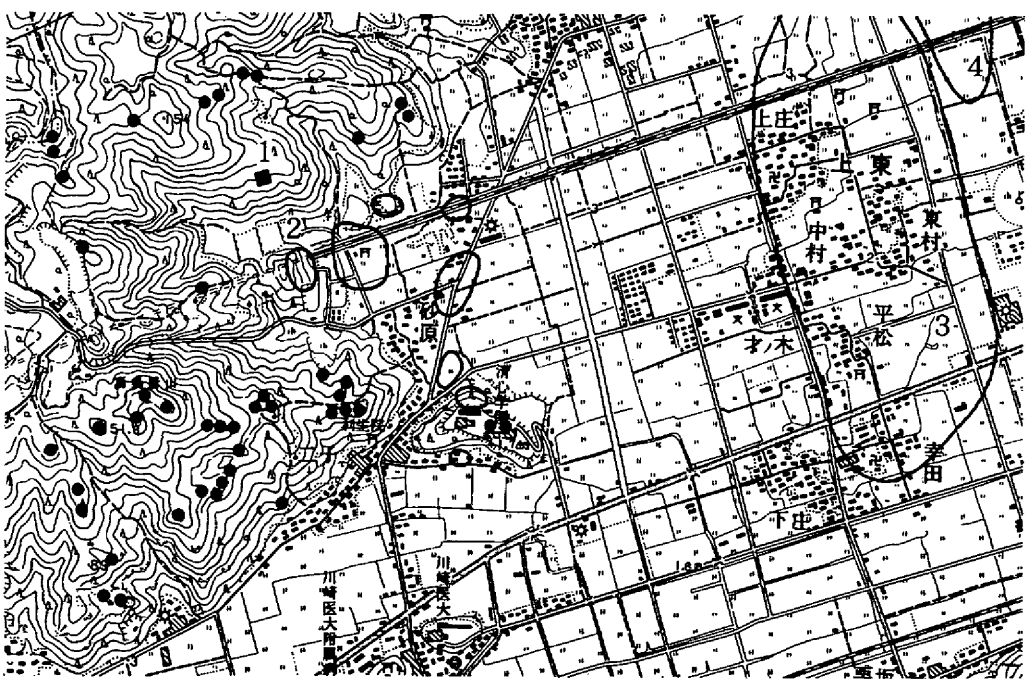
図版13　出土遺物（須恵器）

図版14－1　出土遺物（須恵器）

－2　出土遺物（鉄釘）

第１章　地理的・歴史的環境

古墳からの眺望には素晴らしいものが有る。上東遺跡を眼下に見下ろし遠く岡山市街地までが一望の元である。南は早島、児島の丘陵に遮られるがその間に広がる平野はそのほぼ全体が見渡せる。この平野に流れ込む川は、現在は足守川のみであるがかつては高梁川の分流も流入しており、弥生時代には沖積地が広がり平野も安定してきた。その平野の微高地に人が進出し始めるのは弥生時代中期頃からで、上東遺跡、川入遺跡、藤の木遺跡、岩倉遺跡、惣爪遺跡等の遺跡にその様子を見ることができる。これらの遺跡に囲まれる丘陵から特殊器台を出土した墳墓である楯築弥生墳丘墓等があり、弥生時代後期にかけて大集落群を構成していたと考えられる。古墳時代に入ると、14号墳の所在する二子古墳群、その南に有る二子高鳥居山古墳群、王墓山古墳群、奥谷古墳群がこの平野を取り囲むように存在する。14号墳の立地する丘陵の麓には二子御堂奥古窯跡があり、須恵器と瓦を生産した窯跡が有る。時期的には14号墳と同時期の遺跡と考えられる。この窯跡から瓦が供給された日畑廃寺が上東遺跡の北に所在する。古墳を古代の行政区画で見ると、備中国都宇郡深井郷に属するものと考えられる。



第１図　周辺遺跡分布図（1／25000）
1. 二子14号墳　2. 二子御堂奥窯跡　3. 上東遺跡　4. 岩倉遺跡

第２章　発掘調査の経緯

第１節　発掘調査の経緯と経過

この古墳は、倉敷市文化財分布図には記載されていない。また、道路予定地内の遺跡分布調査においても発見されることなく調査対象外の遺跡であった。その後、日本道路公団による中心杭、幅杭の設置に関った人よりその地区に古墳が存在する旨を聞いた職員が現地調査を実施した。その結果、杭打ち時に見た古墳は新発見の古墳ではあるが道路公団の用地外に所在することが判明した。しかし、同時に他の１基の古墳を発見した。この古墳を、二子14号墳として調査対象遺跡に組み入れて、発掘調査は昭和61年度に実施することで公団との協議ができた。調査は、同年５月に着手することにし、それまでに道路公団により調査範囲内の立ち木、下草等の伐開を完了させておくことになった。

調査着手後の古墳の観察では、全体を見渡せることもあって立木等の伐開以前とは異なるものが有った。溝の存在状況、古墳前面の平坦面、墳丘上の石等について新たな知見を得るものが有った。調査着手直後の墳丘の清掃中に移動していない石の観察から方墳の可能性が強くなった。また、天井石の落下したものと思われていた板状の石は閉塞石であることも判明した。調査が進行するに従い二段築成の方墳であること、築造された時期は７世紀中頃で終末期の古墳であることが解ってきた。その様な状況のもと、６月19日に遺跡保護対策委員会が開かれた。二子14号墳の説明の後、対策委員会から同古墳の保存に対する要望が出された。保存問題は、文化課が対応することになり公団との協議に入った。調査は、墳丘の検出と周辺の表土除去等の作業は進めたが保存問題が解決するまでは古墳の解体は中止することにし、検出した状態での遺構の実測を完了した段階で一時調査を中断することにした。また、周辺にトレンチを設定して同様の遺構の存在の有無を確認することにしたが、新たなものは発見されなかった。初年度の調査は８月中旬に終了し、保存協議の結果を待つことにした。

文化課と道路公団との協議により、古墳は現地での保存はできないが移築して保存することに決まった。そこで、昭和62年度に残りの調査を実施することにした。また、移築保存に必要な資料も収集することにした。石室の墓壙の調査など一部は移築工事中に実施した。古墳の移築先は、旧地権者の好意により隣接地に用地の提供を受けた。

第２節　調査の方法と日誌抄

二子14号墳は、全面調査と言うことで発掘に着手した。伐開の終わった現地は古墳の周辺に意外と思えるほど平坦面が広かった。特に古墳の前面と背後にその感じが強かった。そこで、発掘調査ではその部分も含めて掘り下げることにした。

測量の基準線は、横穴式石室の中心軸を基軸とし、中心点を基準に方形のグリッドを設定した。海抜高については、道路公団が設置する基準杭より引いてきた。また、基準線は国土座標に載るように測量会社にその数値を読んでもらった。

古墳の調査が進行するに従い貼石の残存状態の良好な部分のあることが判明してきた。そこで、調査が迅速に進行するために貼石の立面図は写真測量によることにした。

日誌抄

昭和61年（第１次調査）

５月１日　調査着手
12日　地形測量、方墳と判明
19日　墳丘掘り下げ開始、外護列石検出
26日　石室掘り下げ開始

６月23日　外護列石実測
30日　石室実測

７月21日　墳丘断ち割り開始

８月４日　周辺のトレンチ調査
12日　調査終了

昭和62年（第２次調査）

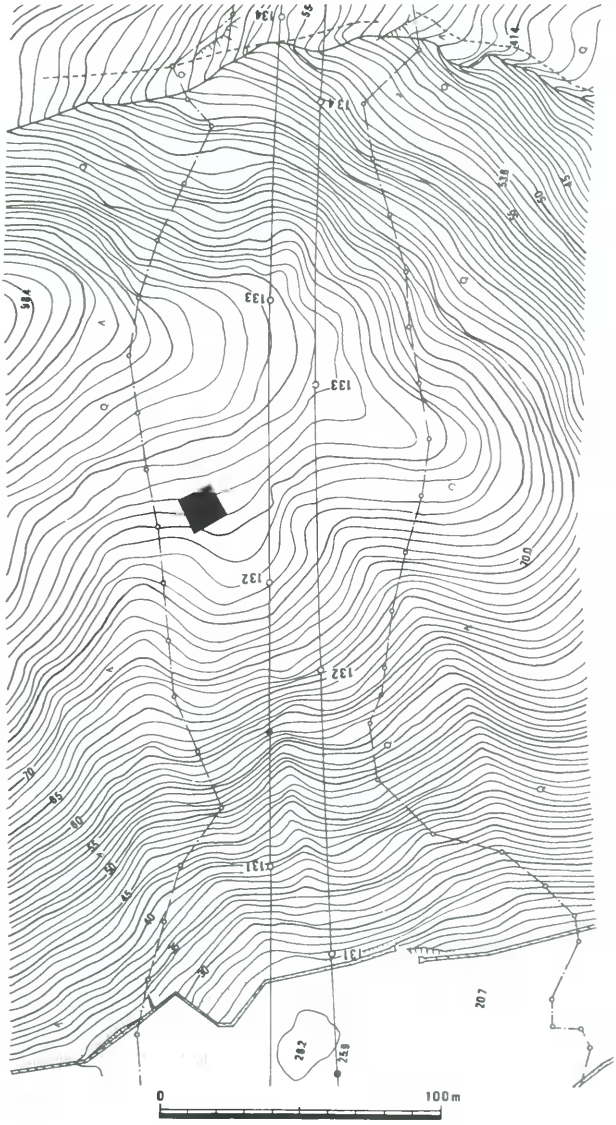
４月20日　調査着手、閉塞石除去
23日　墳丘断ち割り開始

５月19日　配石遺構検出

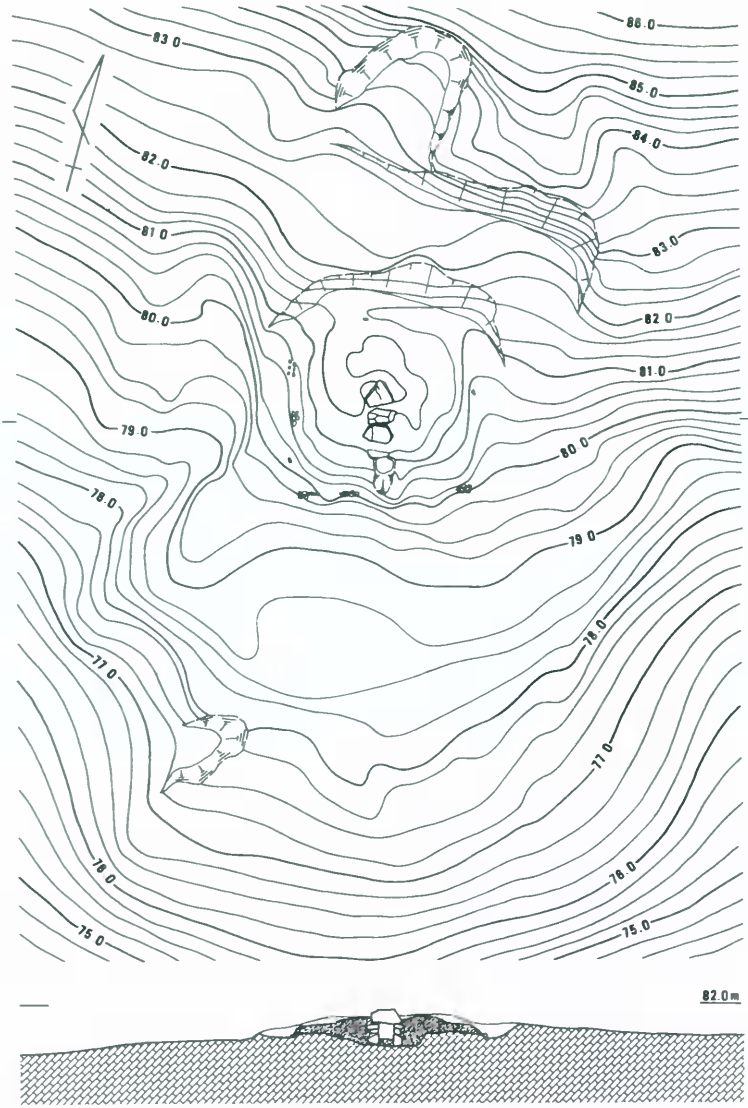
６月２日　調査終了

昭和63年（第３次調査）

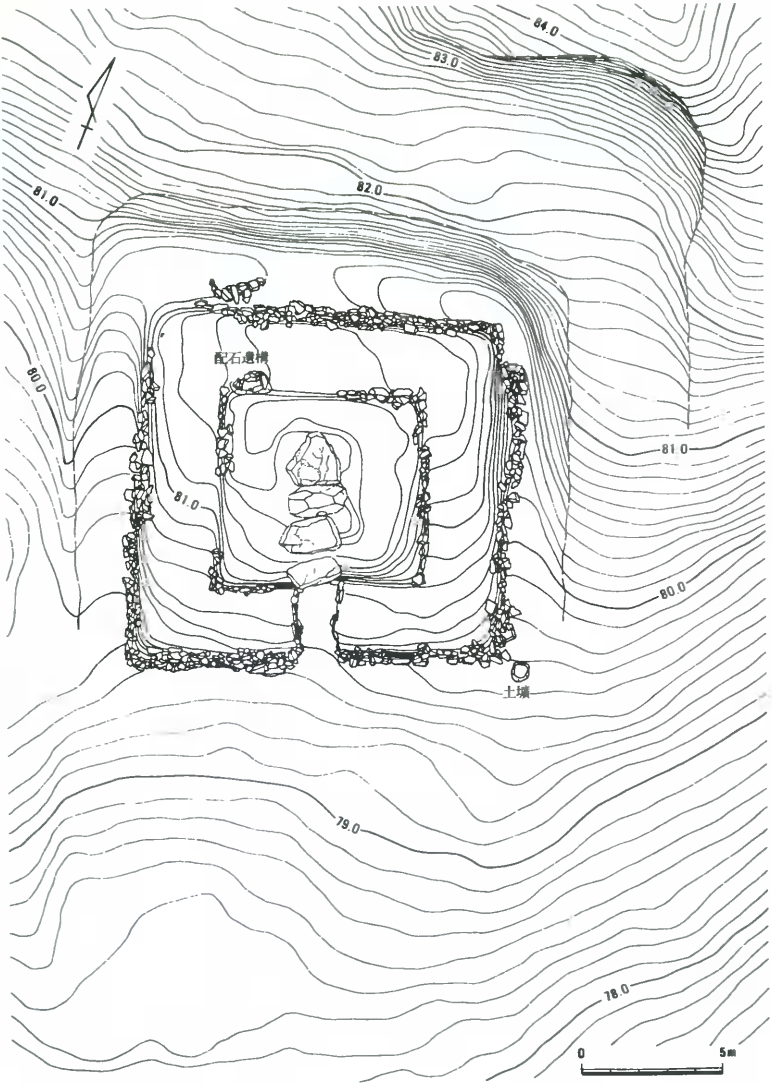
７月25日　調査着手、盛土除去
26日　石室解体、墓壙実測
28日　調査終了



第２図　古墳位置図（1／2000）



第3図　地形測量図（1／400）



第４図　墳丘測量図（1／200）

第３章　発掘調査の概要

第１節　古墳の概要

二子14号墳は、倉敷市二子に所在する方墳である。墳丘は二段築成で、下段は南北12.75 m、東西13.2m、高さ1.2 mあり、上段は南北6.6 m、東西7.65m、高さ0.8 mを測る。各段の周囲には、石材を４～５段ほど積み上げた外護列石をめぐらしている。墳丘のまわりには、幅２～３mの周溝がコ字形にめぐり、その前面には南北25m、東西30mの平地が広がる。また古墳の背後にも南北10m、東西30mにわたる平地が造成されている。

主体部は南に開口する横穴式石室で、全長7.4 mを測る。玄室は長さ4.7 m、幅1.4 m、高さ1.4 mで、奥壁には一枚石を立て、側壁は大形の石材を２段に積んで構築している。天井には大形の石材を４つ架構し、床には平石を敷いている。玄室の入り口は長さ1.5 mあまりの一枚石で閉塞する。羨道は、長さ2.7 m、幅1.6 m、高さ1.2 mで、外護列石と同様に石材を５～６段積み上げて構築している。

石室からは須恵器（高杯・蓋）、鉄器（釘）が出土しており、７世紀中頃の築造と考えられる。

第２節　古墳の立地

二子14号墳は、足守川の西岸に連なる日差山山塊の南端、仕手倉山から東に延びる丘陵の南斜面に位置している。標高153 mの山頂から続く尾根がなだらかな傾斜をもって下る、標高80mの緩斜面に築かれている。丘陵からの眺望はすこぶるよく、上東遺跡や川入遺跡などの集落址がひろがる平野を見渡すことができる。しかし古墳は、緩斜面のやや奥まった位置にあるため、麓から見上げることはできない。

山頂から東西に走る尾根筋には、直径10mほどの円墳が点在している。また谷を隔てた東の丘陵には２基の横穴式石室墳が存在する。しかしこの古墳が位置する丘陵には、今のところ他に古墳の存在は知られておらず、単独の立地となっている。

第３節　墳丘

（１）外護列石

この古墳は２段に築成された墳丘の周囲に外護列石をめぐらしている。外護列石に用いられた石材は石室と同じ花崗岩であるが、大形の石材を除いて細粒花崗岩が使われている。

下段の列石

正面にあたる南辺は、基底の長さが132ｍある。その標高は東端で79.5ｍ、西端で79.8ｍを測り、東側がやや高くなっている。開口部の東側では、基底に長さ0.3 ～0.5 ｍ、幅0.3 ～0.6 ｍの平石を立て並べ、そのうえに長さ0.3 ～0.5 ｍ、幅0.1 ～0.2 ｍの石材を４段ほど積み上げている。基底の石の多くは上部の重みで前側に倒れており、総じて遺存状態はよくない。残存部分での高さは１ｍあり、その傾斜は概ね80°である。開口部の西側も基底に平石を立て並べているが、その長さは0.6 ～1.5 ｍと東側にくらべて大形で、横長に据えられている。基底の石の上部には長さ0.3 ～0.6 ｍ、幅0.1 ～0.2 ｍの石材を４～６段積み上げている。開口部側では基底の石が倒れ、上部の石積みが沈みこんでいる。また西側では土圧により孕みだしが認められ、旧状をとどめていない。

東辺の基底は、長さ11.65 ｍあり、標高は南端で79.8ｍ、北端で80.2ｍを測る。下段をめぐる外護列石のなかでは最も遺存が悪い。基底に長さ0.3 ～0.5 ｍ、幅0.3 ～0.4 ｍの石材を据え、そのうえに長さ0.3 ～0.4 ｍの石材を数段積み上げていたようであるが、旧状を残す部分は少なく、特に中央付近ではすべての石材が転落している。現状での高さは0.8 ｍあり、その傾斜は58°を測る。

西辺は、北端の列石を失っているため正確を期し難いが、基底の長さは12.75 ｍを測る。標高は南端で79.5ｍ、北端で80.8ｍを測り、その傾斜は四辺のなかで最も急である。基底の石は、長さ0.3 ～0.5 ｍ、幅0.2 ｍとやや小さく、そのうえに２～４段ほど積み上げられる石材も、長さ0.2 ～0.4 ｍあまりの塊状になるものが用いられている。現状での高さは0.6 ～0.9 ｍあり、上段の列石との関係から、標高の高い北側に向かって低くなっていたものと思われる。壁面の傾斜は56°あまりである。

北辺も西端の列石を欠いているが、基底の長さは12.35 ｍになるものと思われる。標高は東端で80.2ｍ、西端で80.8ｍを測るが、他の辺と異なり基底は曲線を描く。厚い堆積に覆われたためか遺存状態は比較的よい。基底には長さ0.3 ～0.6 ｍ、幅0.3 ～0.5 ｍの石材を据え、そのうえに長さ0.3 ～0.5 ｍ、幅0.1 ～0.3 ｍの石材を１～４段ほど積み上げている。高さは

0.5 ～1mあり、傾斜の下る東側で高くなっている。壁面の傾斜は西側では58°であるが、東側になると80°と急になる。

上段の列石

南辺の列石は、基底の長さが7.65mある。標高は東端で80.75 m、西端で80.5mを測り、下段で認められた比高がそのまま反映されている。石室の天井石前面から左右にのびているが、東側の遺存は悪く、石材がほとんど残っていない。西側では基底に長さ0.3 ～0.5 m、幅0.2 mの石材を並べ、そのうえに長さ0.2 ～0.3 mの小形の石材を2～3段積み上げている。高さは現状で0.5 mほどあり、73°あまりの傾斜をもって築かれている。

東辺の基底は、長さが6.6 mあり、標高は南端で80.75 m、北端で81.1mを測る。ここでも下段で認められた比高が維持されている。部分的に石材を失っているが、上段列石のなかでは最も保存がよい。基底の石は長さ0.3 ～0.5 m、幅0.2 ～0.3 mで、そのうえには長さ0.3 m、幅0.1 ～0.2 mほどの石材が1段積まれている。現状での高さは0.4 mあり、壁面の傾斜は57°を測る。

西辺は、北端の列石を失っているため基底の長さは明らかではないが、おおよそ7.1mになるものと思われる。標高は南端で80.5m、北端で81.2mを測り、下段で認められた1.3 mもの比高はほぼ半分に克服されている。基底には長さ0.3 ～0.4 m、幅0.2 ～0.3 mの石材を立て並べたうえに、長さ0.3 m、幅0.2 mほどの石材を1段積み上げている。高さは0.4 mほどあり、その傾斜は67°を測る。

北辺も、西端の列石が失われており、正確は期し難いがおおよそ7.1mになるものと思われる。基底の標高は東端で81.1m、西端で81.2mとほぼ水平で、ここでは下段の比高が完全に克服されている。基底には長さ0.4 ～0.6 m、幅0.3 mの石材をならべ、そのうえに同様の石材を積み上げている。高さは0.5mで、54～62°の傾斜をもっている。

列石の構造

これまで述べてきたように、この古墳の外護列石は、基底に石材を据え、そのうえに石材を数段積み上げて構築されている。基底の石は掘り方をもたず、削り出した地山に直接据えているものが多い。また上段の列石は、墳丘の築成と同時に築かれており、その基部は墳丘に埋め込まれていたようである。列石の石組みは各辺でもその場所によりやや趣を異にする。とくに南側では基底の石材が大形で、上部に積み上げられる石材も横長のものが用いられている。また壁面の傾斜も他辺が60°前後であるのに対し、南辺では80°と急な傾斜をもって築かれている。四隅には直角に近い角をもった石材を積み上げているが、塊状の石が用いられるためか他の石と組み合うことはなく、独立した構造となっている。

（2）墳丘の築成

墳丘の築成にあたっては、まず丘陵の斜面を南北50m、東西30mにわたって削平し、平地を造成する。このなかを南北15m、東西17mの範囲で、幅2～3m、深さ0.5～0.8mの周溝をコ字形に掘り込み、南北12m、東西12mの方形をなす墳丘基壇を形成する。その中央には南北10.5m、東西7mの墓壙が掘り込まれ、石室の構築を行いながら墳丘が築成される。

墓壙にはまず敷石が置かれ、赤褐色土を用いて固定される。続いて石室の基底石が据えられ、墓壙は灰褐色土で埋め戻される。この灰褐色土層中には厚さ数cmからなる赤褐色土の間層が認められる。これらが意図的なものかどうか不明であるが、石室石材との対応関係から、石室構築にあたっての工程を示ものであることは間違いない。

次に石室では天井に達する石積みがなされ、墳丘の周囲に外護列石を築きながら、赤褐色土による厚さ50cmほどの土盛が行われる。この段階で、墳丘の下段はほぼ完成する。

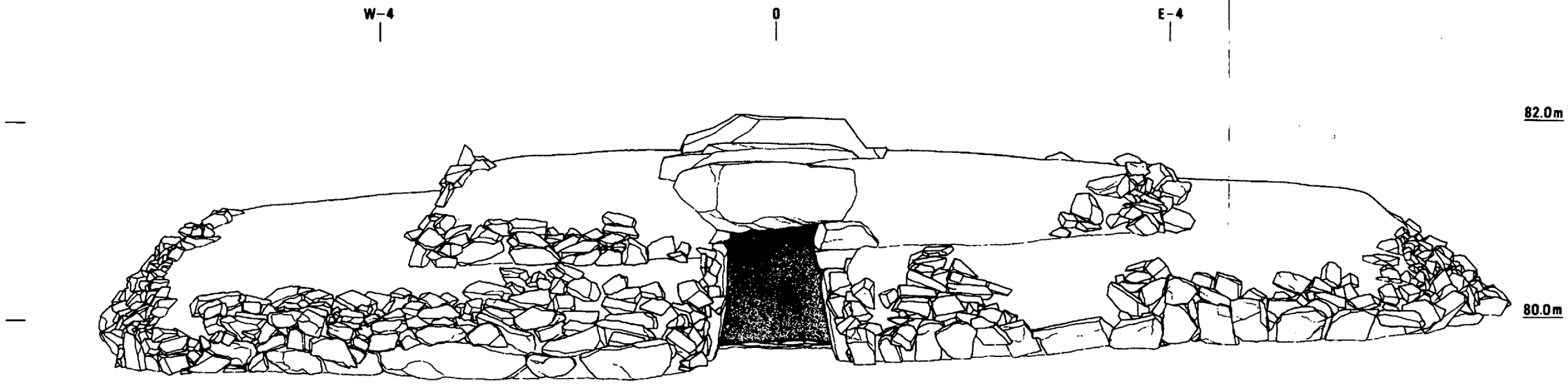
続いて石室の天井石が架構され、これを覆うように赤褐色土の盛土がなされる。その周囲には外護列石が築かれ、墳丘の上段が築成される。こうして墳丘の築成が完了する。

第4節　横穴式石室

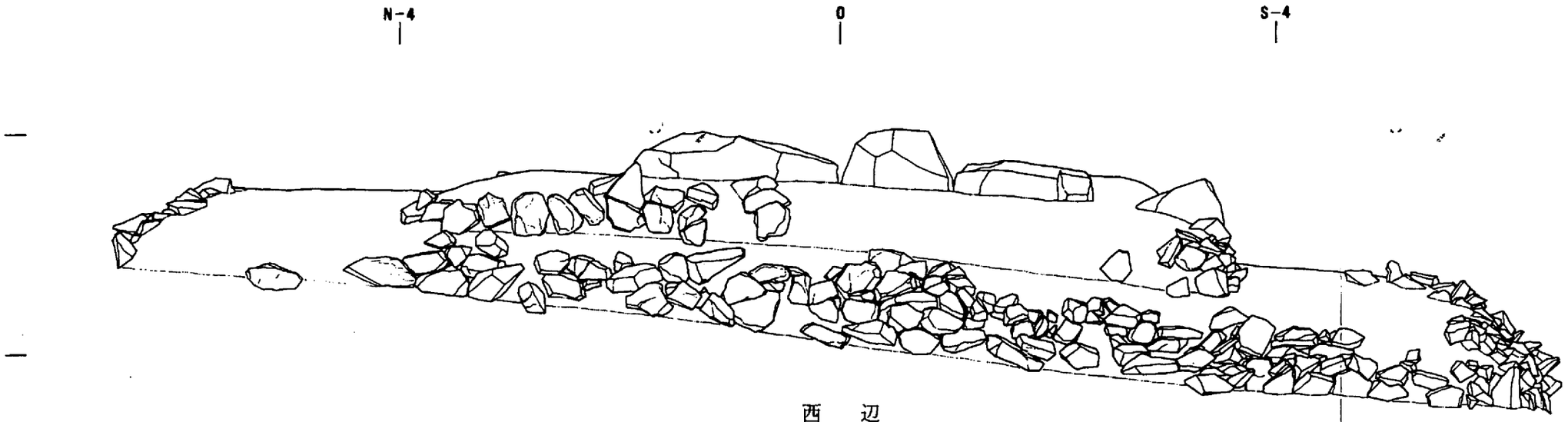
（1）墓壙

横穴式石室を納める墓壙は、地山を整形した墳丘基壇のほぼ中央に掘り込まれている。掘り方の上面で、南北10.5m、東西6.9 mの規模をもつ。玄室の納まる部分では隅丸方形の平面形となるが、この位置や規模が墳丘上段とほぼ一致していることは注意される。しかし墓壙の西側は2段に掘り込まれており、実際に石室が構築される部分は東西5.6 mを測る。深さは丘陵に近い北側で1mあり、50～60°の傾斜をもって掘り込まれている。これに対し2段に掘り込まれた西側では、傾斜が緩やかで20～30°を測る。

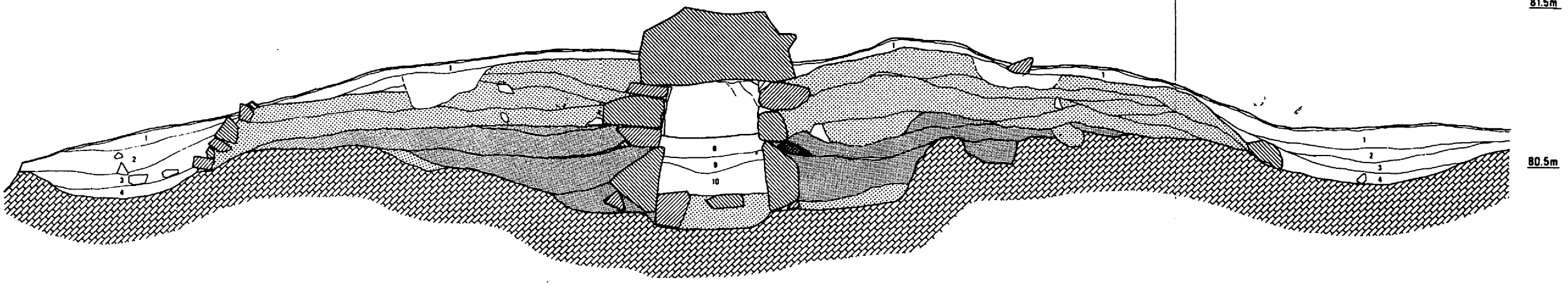
墓壙の中央には、長さ3.6 m、幅1.6 mの長方形となる敷石の据え方が掘り込まれる。深さは0.2 ～0.4 mで、南側がやや深くなっている。またその両脇には、基底に置かれた石材にあわせて据え方が設けられているが、いずれも深さ10cm前後と浅いなかで、玄門にあたる部分は30cmと深くなっている。この古墳の墓壙は、その中に納まる石室の規模からすればかなり大形で、石室石材と墓壙壁との間には1.5 mもの空間がある。このことは墓壙壁を利用して石材を簡便に積み上げていく他の多くの横穴式石室とは異なるところであり、石室自体が独立してその自重を支えるだけの堅牢さが要求されることになる。

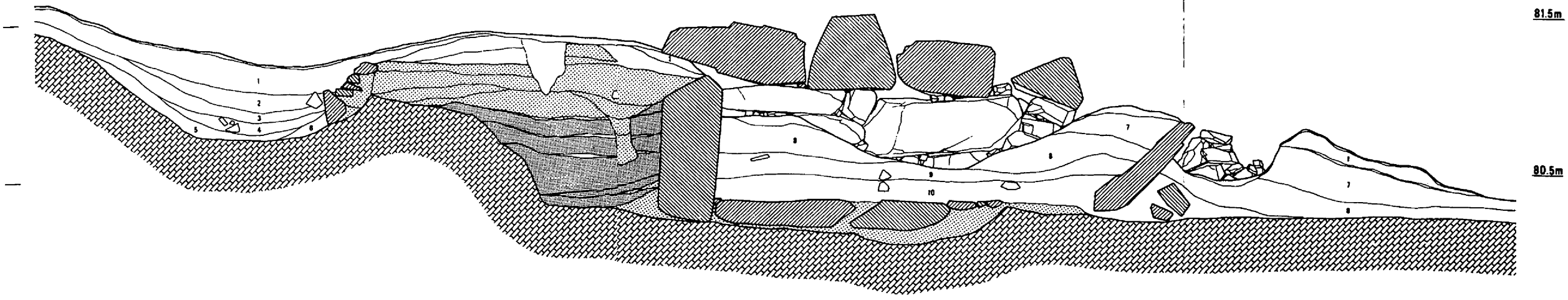


第5図　古墳側面図1（1／50）



第６図　古墳側面図２　　(1／50)





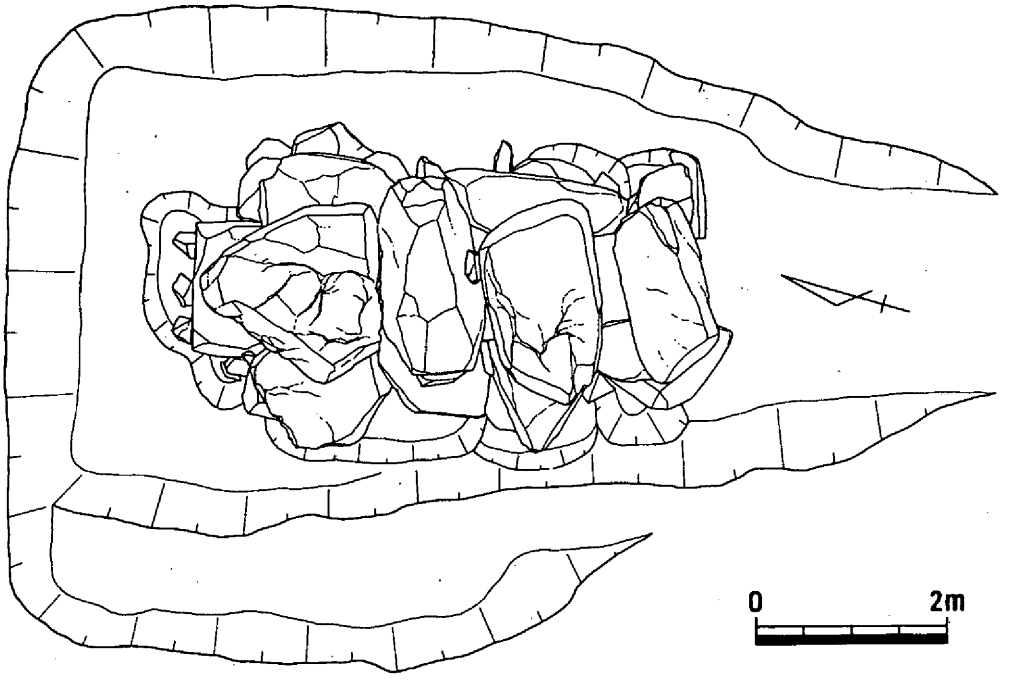
赤褐色土

灰褐色土

1. 赤茶褐色土
2. 明褐色砂質土
3. 褐色土
4. 明褐色土
5. 明褐色土
6. 赤褐色土
7. 暗茶褐色土
8. 茶褐色土
9. 赤茶褐色土
10. 褐色土

第7図　墳丘断面図　(1／60)

0　2m



第８図　横穴式石室上面図（1／80）

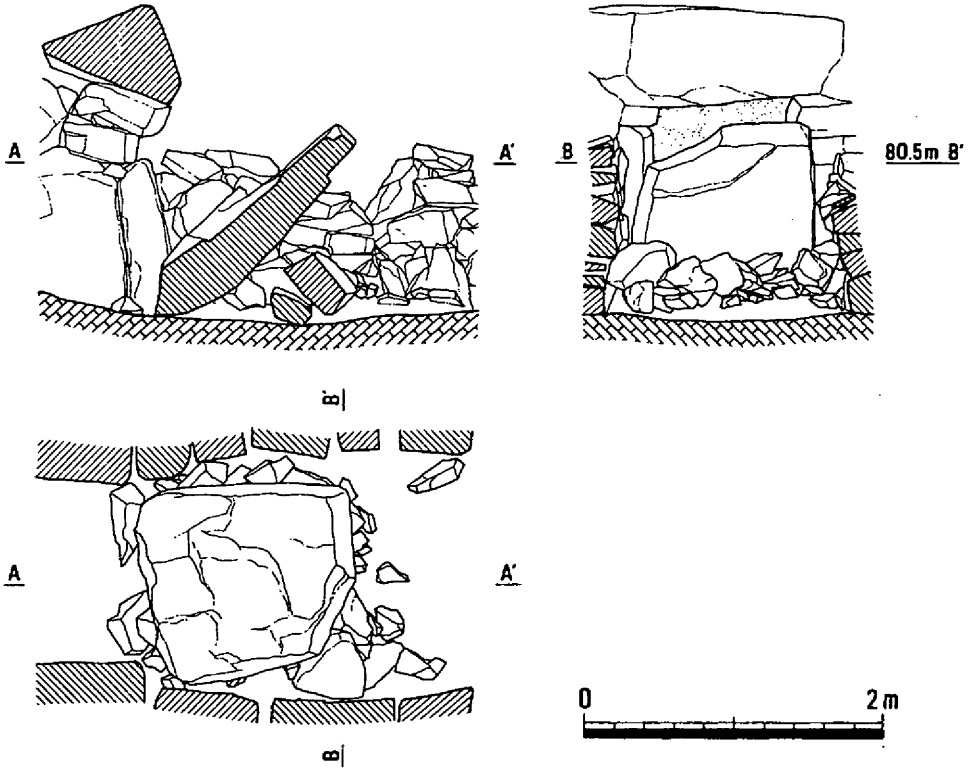
（２）横穴式石室

主体部は南に開口する小形の横穴式石室で、全長7.4 ｍを測り、主軸をＮ－24°－Ｅにおく。花崗岩の転石や割石を用いて構築されており、細長い玄室と幅広い羨道からなる。

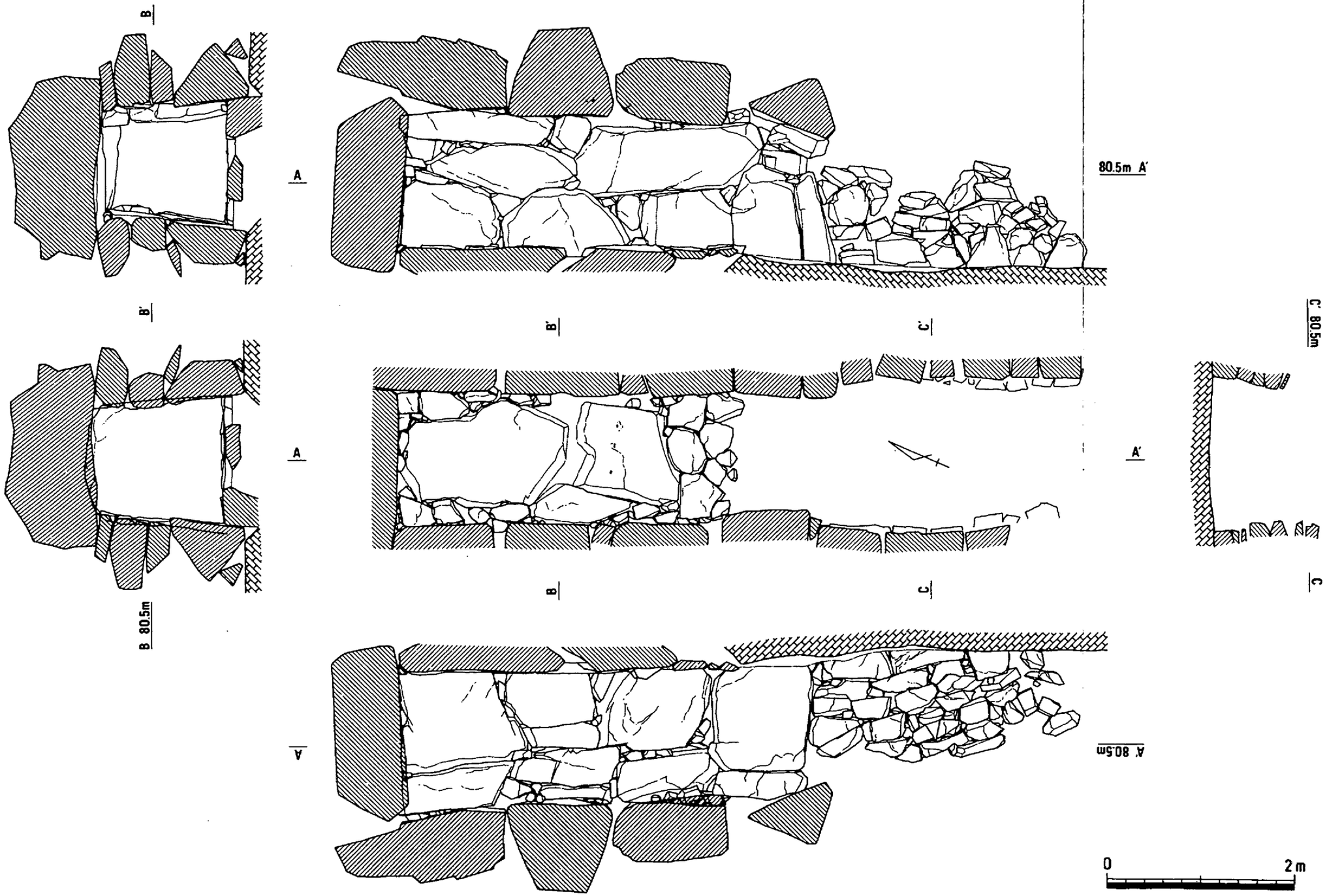
玄室は、長さが右側壁で4.7 ｍ、左側壁で4.4 ｍ、幅が奥壁で1.45ｍ、中央で1.35ｍ、開口部で1.2 ｍ、高さが奥側で1.5 ｍ、中央で1.4 ｍを測る。奥壁には、長さ1.8 ｍ、幅1.5 ｍ、厚さ0.7 ｍの１石を据えている。右側壁は、基底に長さ１～1.3 ｍ、幅0.8 ｍほどの石材を３つ据え、そのうえに長さ２ｍの石材を奥側に２段、前側に１段積み上げている。さらに開口部には長さが１ｍで、幅が0.7 ｍと0.3 ｍになる石材を組み合わせて立て、そのうえに長さ0.5 ｍ、幅0.2 ｍの石材を２段に積んでいる。壁面の傾斜は6.5°を測る。左側壁は基底に長さ１～1.3 ｍ、幅0.8 ～1.2 ｍの石材を３つ据えているが、高さの低い中央の石の上には幅0.3 ｍの石材を積んで他の石と上端をそろえている。そのうえには長さ１－1.2 ｍ、幅0.5 ｍの石材を積み上げるが、中央ではさらに幅0.2 ｍの石材を重ねて２段とし、高さを調節している。開口部には右側壁と同じく長さ1.2 ｍ、幅1.1 ｍの石材を立て、そのうえに幅0.3 ｍの石材を１段積んでいる。この部分は左側壁から10㎝ほどせり出しており、袖といえるほど明瞭ではないが、玄門を意識している様子がうかがわれる。左側壁の傾斜は７°である。天井部はほぼ水平であ

るが、奥壁よりがわずかに高くなる。４つの天井石は長さ1.8 ～2.2 m、幅0.9 ～1.8 m、厚さ0.6 ～0.9 mで、その重量は３～５ tある。床には、長さ1.25～1.8 m、幅１～1.25m、厚さ0.35mあまりの石材が２つ置かれ、その間に長さ0.3 ～0.5 mほどの平石を敷いている。このうち前側に敷かれた大形の石材には長さ３cm、深さ３cm程の矢穴が３つ残されていた。玄室の構築には、基本的に粗粒の花崗岩が用いられているが、壁面の間隙に詰める石材や小形の敷石には細粒花崗岩が使われている。

羨道は、長さが右側壁で2.65m、左側壁で2.7 mを測る。幅は奥側で1.5 m、中央で1.65m、入口で1.6 mを測り、玄室の入口から左右に広くなる。高さは右側壁で1.1 m、左側壁で1.2 mある。右側壁は、基底に長さ0.3 ～0.5 m、幅0.2 ～0.4 mの石材を６つ立て並べ、そのうえに長さ0.3 ～0.5 mの石材を３～５段積み上げている。基底石の上端に横目地が通るが、それよりうえは崩壊が激しいこともあり明確でない。右側壁は現状では内傾しているが、本来は垂直をなしていたものと思われる。左側壁は、基底に長さ0.5 ～0.8 m、幅0.2 ～0.3 mの石材を横長に据え、そのうえに長さ0.3 ～0.6 m、幅0.1 ～0.3 mの石材を４～６段積んで構築



第10図　閉塞施設平、断面図（1／50）



第9図　横穴式石室平・側面図（1／50）

している。右側壁のように広口積みになるものはなく、壁面には3～4段にわたって横目地が通る。土圧により上部がせりだしているが、右側壁と同様にほぼ垂直に築かれていたものと思われる。羨道は外護列石と一連のもので、石材も同じ細粒花崗岩が用いられている。

（3）閉塞施設

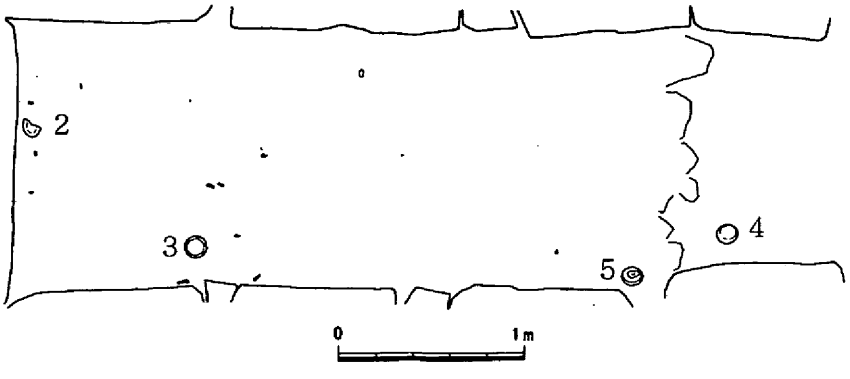
石室は一枚石を用いて閉塞している。盗掘にあたって引き倒されたのか、調査時には45°の傾斜をもって前方に傾むいていた。閉塞に使用されている石材は、長さ1.8 m、幅1.1 ～1.3 m、厚さ0.2 ～0.4 mの偏平な花崗岩である。上部を天井石にもたせ掛け、左右を玄室入口の両端に当てて閉塞したのち、その根元に人頭大の石を積み上げて固定している。羨道部は盗掘による攪乱を受けているため、閉塞後に埋め戻されていたかどうか明らかではない。

第5節　出土遺物

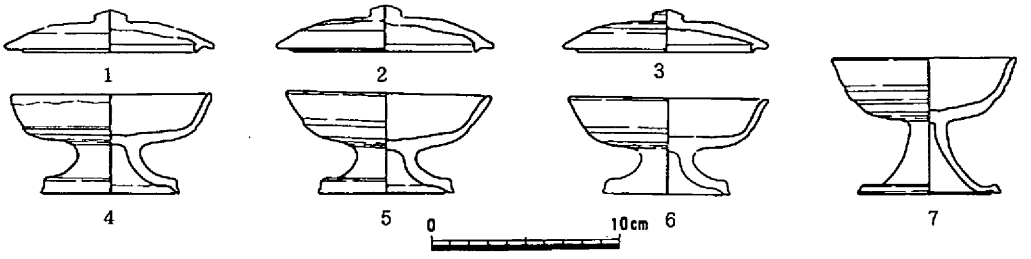
（1）遺物の出土状況

古墳に伴う遺物は主に石室内から出土している。蓋1は奥壁に接して出土した。2は左側壁の奥側で、内面を上にして出土している。高杯3は左側壁の入口側で脚を上にした状態で見つかっている。高杯4も3の近くで杯部をうえにして出土した。鉄釘は、玄室の奥側でまとまって見つかっている。これらは奥壁近くのものと、左側壁よりに集まるものにわかれるが、いずれも原位置を保つものではない。石室内からは、このほかに土師器の皿が1点出土している。

また羨道部の埋土からは鉄滓が3点出土している。



第11図　遺物出土状況図（1／40）



第12図　出土遺物実測図1　(1／4)

(2) 出土遺物

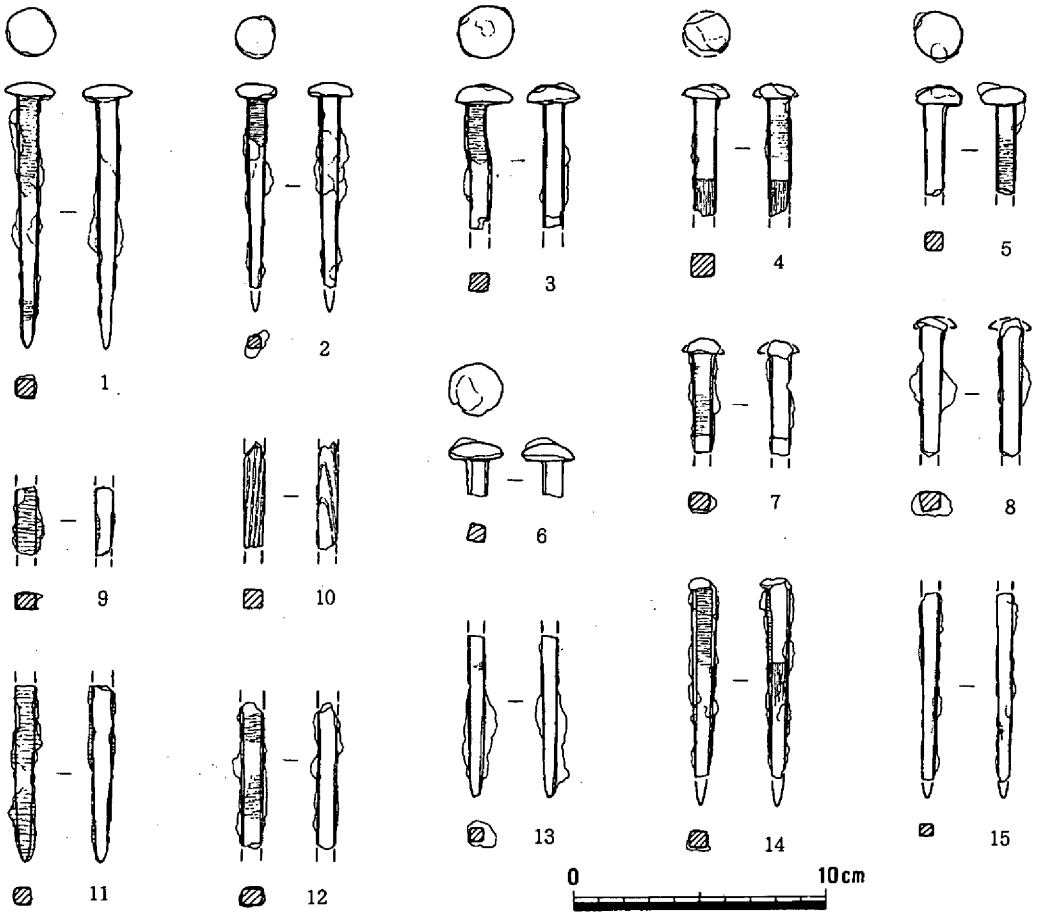
須恵器（第12図）

1～3は宝珠つまみをもつ蓋で、その色調や焼成から4～6の高杯と組み合うものと思われる。1は口径9㎝、最大径11㎝で、天井部を欠失している。灰褐色を呈し、胎土に1～2㎜の砂粒を含む。2は口径9.6㎝、最大径11.6㎝で、つまみを欠いている。天井部は左方向にヘラケズリし、内面中央にナデを施す。外面は淡灰褐色を呈し、胎土に1㎜の砂粒を含む。3は口径9.4㎝、最大径11㎝、器高2.3㎝の完形である。つもみは偏平で、かえりは短い。天井部は左へラケズリし、内面にはナデを施す。暗灰色を呈し、1～2㎜の砂粒を含む。

4の高杯は、口径10.5㎝、脚径7.2㎝、器高5.3㎝を測る。平らな底部から口縁部が斜め上方に立ち上がる杯部と下方にひろがる低い脚部からなる。口縁部は底部との間に鈍い稜をなし、脚端部は下方に拡張する。杯部の内面にはナデを施し、外面にはヘラケズリの痕を残す。外面は灰褐色を呈し、胎土に2㎜前後の砂粒を含む。5は口径10.8㎝、脚径7.2㎝、器高5.4㎝を測る。杯部は、口縁部が大きく開き、底部との間に凹線をめぐらす。脚部は低く、端部を下方に拡張する。杯部の内面にはナデを施し、外面を左方向にヘラケズリする。灰褐色を呈し、胎土に1～2㎜の砂粒を含む。6は口径10.6㎝で、杯部のみ残存する。口縁部は斜め上方に延び、底部との間に凹線をめぐらす。内面にはナデを加え、底部は左にヘラケズリする。外面は暗灰色を呈し、胎土に1～2㎜の砂粒を含む。7は口径9.8㎝、脚径7.7㎝、器高7.2㎝を測る。杯部は、底部から緩やかに内湾しながら立ち上がる口縁部をもつ。口縁部の外面には2条の凹線をめぐらし、底部をヘラケズリで調整する。脚部は軸部から下方へ大きく広がり、水平にのびる裾部はその端を斜め下方に引き伸ばす。他の高杯と異なり胎土は精良で、灰色を呈す。

土師器

石室の上層から出土したもので、口径9.1㎝、器高2.5㎝の椀である。外面にはユビオサエの痕を残し、底部中央が凹む。このほかにも墳丘周辺から高台付椀・小皿の小片が出土した。



第13図　出土遺物実測図２（1／3）

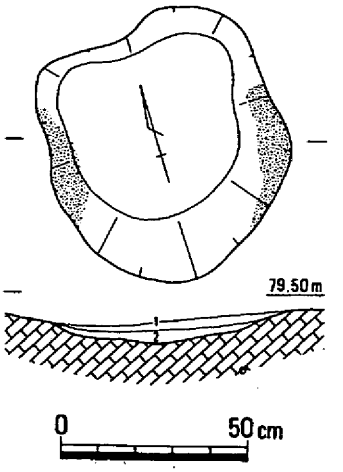
鉄器（第13図）

石室から10本分あまりの釘が出土している。完存するものは１のみで、全長10.5cmを測る。２は先端を欠いているが、９cm前後になるものと思われる。幅は８mmほどのものが多いが、２・９・12のように６mmあまりの細身のものもあり、全長がやや短くなる可能性がある。頭部を径1.7 ～２cmの円形につくる鋲頭で、田中彩太の分類によるＤ類に相当する。身には木質が部分的に遺存しており、打ち付けられた部位を想定することが可能である。それによると１・11・13は底板から側板に打ち付けた縦釘、４・９・10・14は小口板と側板をつなぎ留めた横釘と考えられる。しかし釘の本数はこの頃の木管としてはやや少なく、棺材の結合において主体的な役割を果たしていたかどうか疑わしい。棺材の幅は、４・７から3.2 cm、10から2.9 cmと推定され、その樹種についてはスギとの鑑定結果を得ている。

第６節　その他の遺構

（１）土壙

墳丘の南東で検出したものである。長さ0.7 m、幅0.65mの不整形で、深さ５cmの浅い皿状をなす。上部には炭や焼土が層をなして堆積し、下部には焼土面が部分的に認められた。上面から甕ないし竈とおもわれる厚手の土師器片が出土しており、古墳にかかわる遺構と思われる。

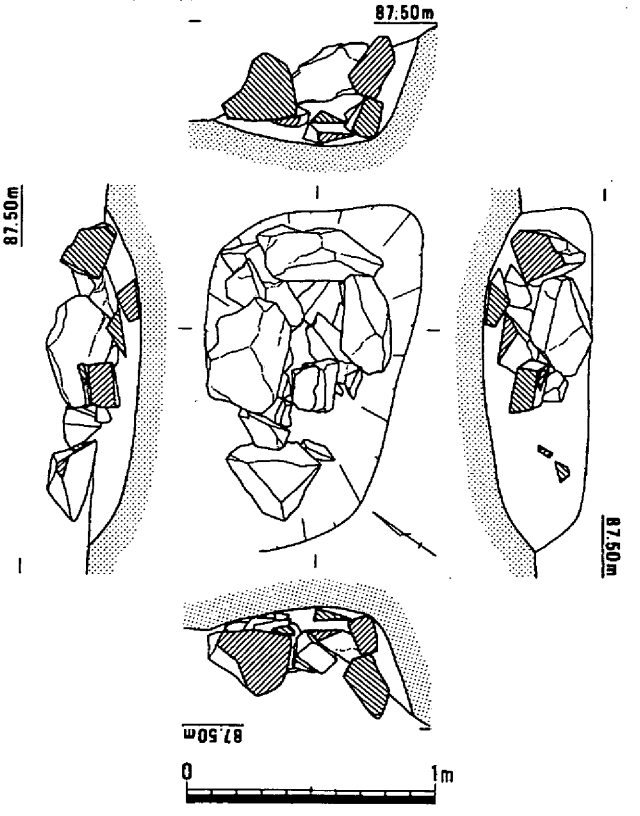


第14図　土壙平、断面図
(1／20)

（２）配石遺構

墳丘上段の北西隅の外護列石を壊してつくられている。長さ1.4 m、幅0.8 mの掘り方の中に、人頭大の石を組み合わせて長さ0.7 m、幅0.25m、深さ0.25mの囲いを設けている。

蓋石などはなく、内部に黒褐色砂質土が充満していたことから当初より開放していたものと思われる。遺物は出土していないが、石室や墳丘周辺から中世の土師器が出土していることからみてその頃のものである可能性が強い。



第15図　配石遺構平、断面図（1／30）

第3章　まとめ

立地

二子14号墳は標高80mの丘陵斜面に単独で築かれている。このような高所に単独で立地するものは、岡山市富原西奥古墳など終末期と呼ばれる7世紀中頃以降の古墳に特徴的に見られるところである。しかし他の多くの古墳が視界の閉ざされた谷あいに築かれているのに比べて、この古墳の場合は比較的眺望がよく、足守川の下流域に開けた平野を見下ろすことができる点で注意される。

墳丘

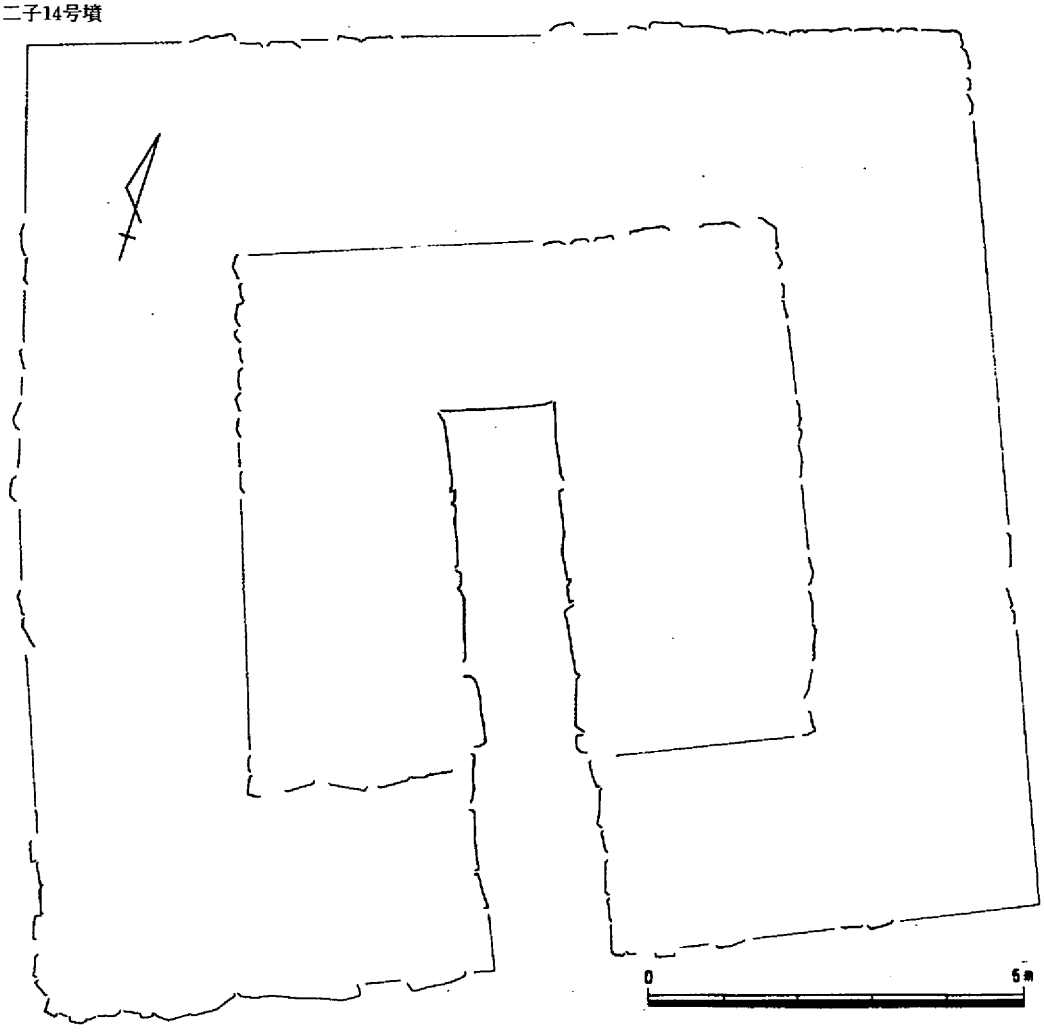
二子14号墳は南北12.6m、東西13.2mの方墳で、2段に築成されており、各段の周囲には外護列石をめぐらしている。このような構造をもつものとして県内では北房町定北古墳、大谷1号墳が知られている。定北古墳は、南北17.5m、東西14.5mの2段に築かれた墳丘をもつ。その周囲には低い基壇を設けて、南北24m、東西22mの3段築成のように見せている。各段には外護列石をめぐらしているが、横穴式石室の開口する下段は1.8 mもの高さに築かれている。大谷1号墳は南北10.5m、東西14mの方墳で、2段に築成された墳丘には外護列石をめぐらしている。下段の列石の高さは1.5 mあり、大形の石材を立て並べて築かれている。この二つの古墳はいずれも7世紀後半の築造であり、定北古墳が先行して築かれたことが明らかとなっている。また県外では兵庫県若狭野古墳、大阪府墓尾3号墳などが知られている。いずれも一辺15mあまりの方墳で3段に築成され、周囲に外護列石をめぐらしている。墓尾3号墳は出土遺物から7世紀前半でも中葉に近い時期の築造と考えられている。

このように7世紀前半から、2～3段に築成された外護列石をめぐらす方墳が各地で造営されており、7世紀にはじまる古墳の方墳化に伴って新たに創出された墓制であったことがうかがわれる。

横穴式石室

主体部の横穴式石室は全長7.4 mを測る。墓室は長さ4.7 m、幅1.45m、高さ1.4 mと小形で、奥壁には一枚石を立て、側壁は大形の石材を2段に積んで構築する。花崗岩の転石を利用しているためか壁面の凹凸が激しくやや粗雑な感じをうけるが、このように2段積みとなる石室は県内でもあまり見受けられない。床に敷かれた平石は、岡山県では6世紀後半以降の石室に一般的であるが、この古墳のように大形の石材を用いるものはやや新しい時期のものに多い。羨道は長さ2.7 m、幅1.6 mで、墓室の左右に取り付いている。羨道が墓室より幅広くなるも

二子14号墳



第16図　墳丘平面企画図（1／100）

のは、総社市長砂２号墳のほかに知られていない。これは墓室を一枚石で閉塞することと無関係ではなく、石棺式石室の影響がうかがわれる。

出土遺物

古墳に伴う遺物には須恵器と鉄釘がある。石室から出土した須恵器の蓋は、口径９～9.6 cm、最大径11～11.6cmと宝珠つまみをもつもののなかではやや大きい。これに対し器高は2.5 cmと低く、全体に偏平な感じをうける。つまみも偏平化し、かえりも短くなっている。宝珠つまみをもつ蓋を生産している牛窓町寒風古窯址群では口径７cmほどの小形になるものが多く、二子14号墳の蓋と同一法量のものではかえりを失っているものが見られる。古墳の出土例では、総社市板井砂奥15号墳のものに近く、久米町稼山古墳群の稼山５式に相当する。このような特徴をもつ蓋は、大阪府陶邑古窯址群の高蔵217 型式のなかでも新しい一群に含まれる。高蔵217

型式については7世紀前半の実年代が与えられており、この須恵器についても7世紀前半でも中葉に近い時期のものと考えられる。

鉄釘は長さ9～11cmを測り、頭部を鋲頭につくる。鋲頭の鉄釘は7世紀に出現するとされ、岡山県では他に倉敷市半俵4号墳、北房町大谷1号墳から出土している。半俵4号墳の鉄釘は長さ4cmで、7世紀末の須恵器を伴っている。大谷1号墳の鉄釘は長さ6cmで、双龍環頭大刀のほか7世紀後半の須恵器を伴っている。二子14号墳の鉄釘はこれらのものよりも長く、やや古い様相を示している。このことは7世紀中葉という須恵器の年代と矛盾しない。以上のことからこの古墳の築造は7世紀中葉と見て差し支えないものと思われる。

古墳の性格

これまで述べてきたように、二子14号墳は7世紀中葉に築かれた方墳である。このように一辺15m前後で、周囲に石を積み上げる方墳は畿内を中心とした各地で知られている。その一方で、畿内では奈良県石舞台古墳や岩屋山古墳のように一辺40～50mの斜面に石を貼る方墳も築かれている。こうした構造の違いは被葬者の属する階層の差に起因するものと考えられ、石舞台古墳や岩屋山古墳が皇族や上級官人の墓であるとすれば、その下位にあるこれらの方墳は、中・下級官人層の墓であった可能性が強い。

ところで二子14号墳の位置する足守川の下流域は、後の都宇郡にあたる。都宇郡は4郷からなる小郡であるが、津郡とも記されるように吉備の中央に位置する港津を抱えた交通の要衝であった。天平11年の備中国大税負死亡人帳によれば都宇郡中に津臣の名が見えるが、郡名を負う彼らがこの港津を拠点とし、そこに集積される物資の管理や輸送を通じて中央政権と結び付いたであろう事は想像に難くない。二子14号墳の被葬者もこうして官人化した在地の有力首長であり、地方に割拠する旧勢力を解体し、地方支配を推し進める動きの中で重要な役割をはたしていたものと思われる。

付章　二子14号墳の移築復元

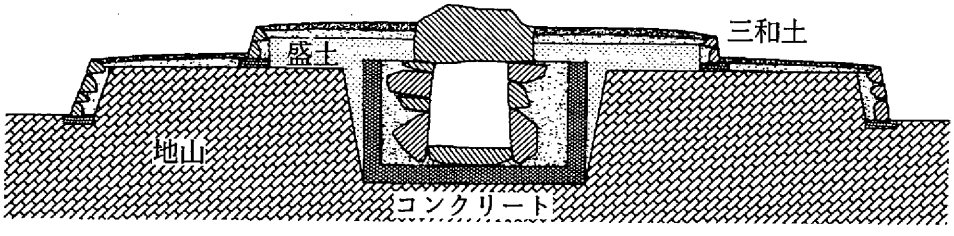
（1）移設の経緯

二子14号墳は、山陽自動車道建設に先立ち昭和61年５月から実施された発掘調査により、７世紀中頃に築造された、岡山県でも数少ない古墳であることが判明した。このため山陽自動車道埋蔵文化財保護対策委員会及び岡山県遺跡保護調査団より現状保存するよう強い要請があり、岡山県教育委員会は日本道路公団との間で協議を重ねた。しかし、現状での保存は困難な状況にあり、次善の措置として移築復元の提案がなされた。これをうけて、旧地権者である小田信夫氏より隣接する所有地の貸与をうけ、岡山県教育委員会の指導のもとに移築復元を実施することとなった。工事は、昭和63年７月12日に着工し、12月15日に完成した。完成後は倉敷市に移管され、史跡公園として一般に公開されている。

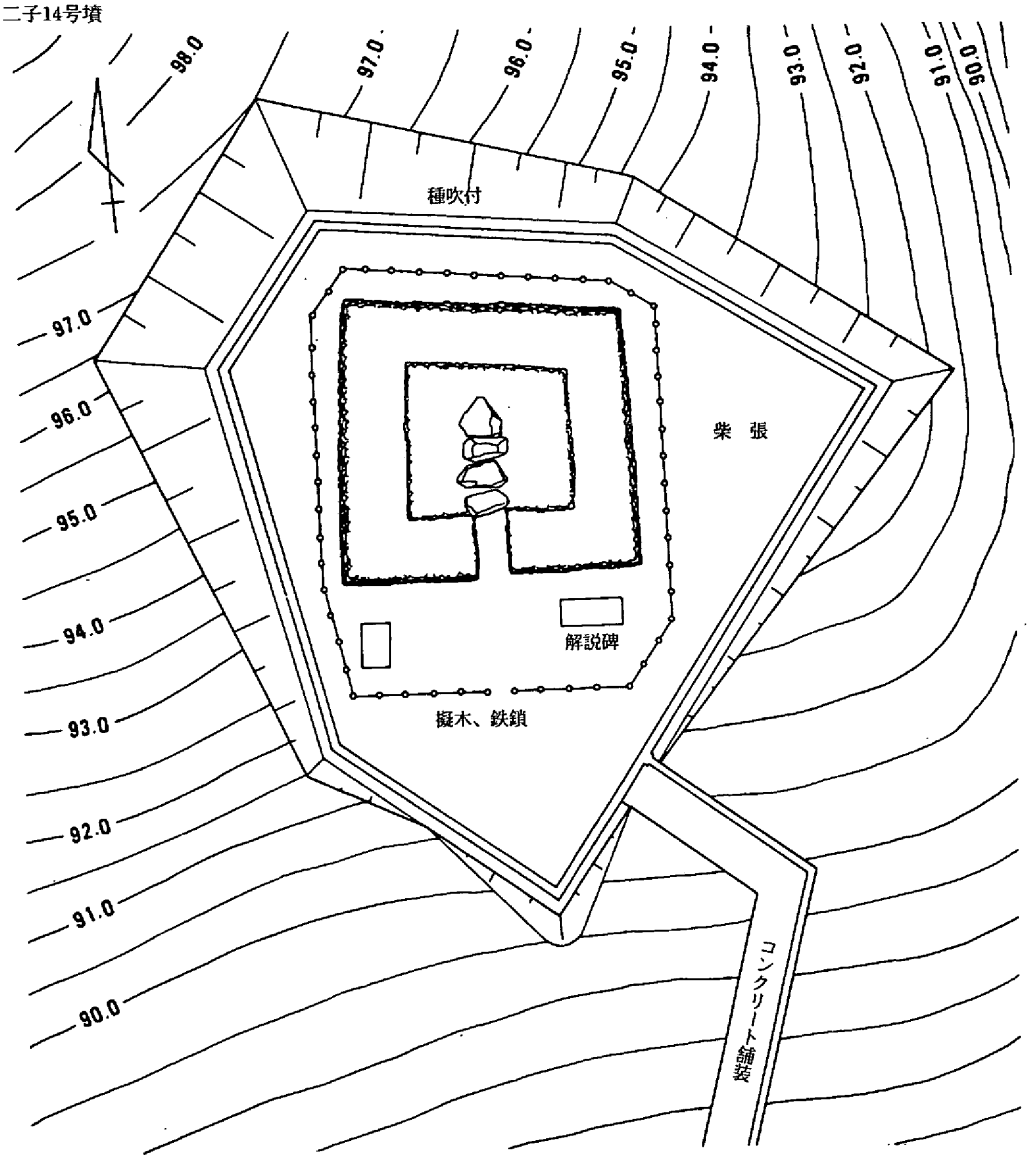
（2）工事の概要

基本方針

移築復元にあたっては奈良国立文化財研究所の指導を受け、調査の成果に基づいて築造当初の姿に復原することとした。このため、旧状を保つ部分についてはそのまま移築し、その他の部分はこれを参考にして復元した。ただし推定が困難な部分については、現状のままに留めることとした。外観の仕様は、古墳としての雰囲気を損なうことなく、かつ完成後の維持・管理等を考慮して検討を加えた。また周辺の整備も、古墳の外観や周囲の景観と調和するよう配慮した。



第17図　復元工事断面模式図



第18図　復元計画平面図（1／400）

古墳の解体

工事にあたっては、まず発掘調査により作成した実測図をもとにして、外護列石の石材に割り付けを行い、併せて番号を記入して取り外した。この後、墳丘の盛土を除去し、石室の石組および墓壙について調査を実施している。調査終了後、石室石材に割り付けを行い、石室の解体を実施した。石室には大形の石材が用いられていたため、その移動にあたってはクレーン車を使用した。この際、石室石材の重量を測定することができた。

古墳の復元

古墳の復元に先立って、移築予定地の造成を行った。予定地は南に下る急な傾斜地であり、

掘削が深くおよんだ北側では、固い基盤があらわれた。このため古墳の復元にあたっては、この基盤を方形に削り出し、墳丘下段に利用することとした。南北11m、東西12m、高さ１mの方形に削り出された基盤の中央を大きく掘りこみ、長さ６m、幅３mのコンクリートボックスを打設した。このなかに石室を組み上げ、背後にコンクリートを注入して固定している。外護列石も、下部をセメントで固めて基盤とした上に石材を積み上げ、背後をコンクリートで固定した。このとき、石材の遺存しない部分については同種の石材をもって補っている。墳丘の上面はソイルセメントで被覆したうえに、三和土を転圧して仕上げた。墳丘の頂部は失われていたが、推定復元が困難なため現状のままに留めることとした。この結果、露出することになる天井石については、漏水を防止するため周囲にコールタールを塗布している。また石室や外護列石の目地には三和土を充填している。

周辺の整備

古墳の前面には、長さ1.5 m、高さ１mの解説碑を設置した。古墳の周囲には、古墳を保護するため、擬木を鉄製の鎖でつないだ柵を設けている。古墳の背後にあたる法面は、景観を配慮して種子吹き付けとした。排水は、古墳の周りに若干の傾斜をもたせて、敷地境に設けた側溝に集水し、石室の下部にも暗渠を設けてこれと接続している。また古墳に至る歩道は、強度を考慮してコンクリート舗装としている。

（3）今後の課題

今回の移築復元工事は、現状保存が困難な状況の中でやむを得ず取られた措置であり、調査を担当した者としてはまことに遺憾に堪えない。もとより移築という行為によって遺跡のもつ価値が大幅に失われることは言うまでもない。また復元とは言え、どれほど築造当初の姿に再現できたかどうか疑問の残るところである。

しかし次善の措置とは言え、こうして古墳の移築復元が図られ一般に公開されたことは、遺跡の教育的活用という点でその意義はすくなからぬものがある。また、古墳の解体を通じて多くの知見を得ることができ、遺跡の復元・整備に関して貴重な経験を積むことができた。

今後は、移築復元された古墳の活用をいかに図っていくかが私達に残された課題である。最後に、古墳の移築復元について理解を示し、移転用地を快く提供された小田信夫氏をはじめ、この工事に尽力された多くの方々に感謝する次第である。

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告　81
山陽自動車道建設に伴う発掘調査
5
（本　　文）

１９９３年３月20日 印 刷
１９９３年３月31日 発 行

編集　岡山県古代吉備文化財センター
発行　日本道路公団広島建設局岡山工事事務所
　　岡山県教育委員会
印刷　岡山県農協印刷株式会社

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告　81

山陽自道車道
建設に伴う発掘調査
5

(表・図版)

1. 中山1、2号貝塚
2. 酒津八幡山平谷遺跡
3. 酒津一水江遺跡
4. 菅生小学校裏山遺跡
5. 三田散布地
6. 二子14号墳

1993・3

日本道路公団広島建設局岡山工事事務所

岡山県教育委員会

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告　81

山陽自道車道建設に伴う発掘調査 5

（表・図版）

1. 中山1、2号貝塚
2. 酒津八幡山平谷遺跡
3. 酒津一水江遺跡
4. 菅生小学校裏山遺跡
5. 三田散布地
6. 二子14号墳

1993・3

日本道路公団広島建設局岡山工事事務所

岡山県教育委員会

菅生小学校裏山遺跡各一覧表

表—4　建物・柱穴列一覧表
表—5　土錘一覧表
表—6　緑釉陶器一覧表
表—7　土器観察表
表—8　石器一覧表

表—4　建物、柱穴列一覧表

名　称	調査区	時　代	規　格	規　模　(㎡)		床面積(㎡)	棟方向	柱　間　(cm)		柱穴形状	備考
				桁　行	梁　間			桁　行	梁　間		
建物－1	1区	古代	2×2間	450	336	15.12	N36°W	215～235	158～178	方	
建物－2	1区	古代	2×1間	315	240	7.56	N37°W	155～160	240	円	
建物－3	1区	古代	3×2間	483	255	12.37	N 2 °W	150～183	135～147	円	
建物－4	1区	古代	3×2間	660	376	24.42	N38°30W	200～246	172～204	円	溝
建物－5	2区	古代～中世	3×2間	672	378	25.40	N 8 °W	219～231	183～195	円	
建物－6	3区	古代	3×2間	693	390	27.22	N18°W	207～258	162～204	円	
建物－7	4区	古代～中世	4×2間	387	294	11.38	E18°30′N	84～114	111～153	円	
建物－8	5区	古代～中世	3×1間	748	438	32.76	N16°30′W	234～264	429～447	円	
建物－9	5区	中世	3×2間	655	353	22.50	N19°30′W	206～229	158～189	円	
建物－10	5区	中世	3×1間	469	212	9.94	N25°30′W	153～162	123～189	円	
建物－11	5区	中世	2×1間	582	207	12.05	N11°30′W	282～300	207	円	
建物－12	5区	中世	2×1間	360	240	8.65	N 9 °W	180	240	円	
建物－13	8区	古代	5×2間	1113	450	49.68	N20°30′W	153～237	225	円	
建物－14	8区	古代	5×2間	1116	390	43.52	N21°W	216～225	192～198	円	
建物－15	8区	古代	5×1間	1170	360	42.12	N21°W	228～240	360	円方	
建物－16	8区	古代	3×2間	800	400	32.00	N17°30′W	251～279	195～205	方	
建物－17	8区	古代	4×2間	748	348	26.03	N13°W	174～202	171	方	
建物－18	6区	古代～中世	3×1間	474	312	14.79	E20°N	153～162	312	円	
建物－19	6区	〃	2×1間	327	234	7.13	N19°30′W	144～168	222～234	円	
建物－20	6区	〃	2×1間	453	171	7.75	N16°W	219～234	171	円	
建物－21	6区	〃	2×1間	459	177	8.54	E21°N	210～243	177	円	
建物－22	10区	〃	3×2間	956	390	36.09	N 3 °W	228～246	174～197	円	
建物－23	10区	古代～中世	1×2間	480	330	7.85	N32°W	471～480	165	円	
建物－24	10区	古代～中世	1×1間	275	180	4.85	N19°W	264～275	180	円	
柱穴列－1	2区	古代～中世	3間	666	—	—	N 7 °30′E	216～228	—	円	
柱穴列－2	5区	古代～中世	3間	765	—	—	N15°30′W	246～270	—	円	
柱穴列－3	5区	古代～中世	3間	699	—	—	N18°W	225～240	—	方	
柱穴列－4	6区	古代～中世	6間	1539	—	—	N 5 °W	216～399	—	円	
柱穴列－5	8区	古代	5間	1101	—	—	N22°W	216～225	—	方円	
柱穴列－6	10区	古代～中世	3間	790	—	—	N19°W	240～275	—	円	

表—5　土錘一覧表

遺物番号	計測最大値（mm） 長	幅	厚	重量（g）	胎　土	焼　成	色　調	残存率	備　考
1	66.0	50.0		155.3	0.5－5㎜長石、石英	良好	灰白色	小欠損	
2	62.0	45.0		146.8	0.5－1㎜長石	良好	灰白色	小欠損	
3	72.5	44.0		122.0	0.3－1.5㎜長石、石英、雲母	良好	灰白色	小欠損	
4	78.0	47.5		152.2	0.3－2㎜長石	良好	灰白色	完形	
5	81.0	46.0		153.8	0.5－1.5㎜長石、石英	良好	灰白色	小欠損	
6	71.0	45.5		138.0	0.3－1.5㎜長石、石英	良好	灰白色	小欠損	
7	74.0	40.0		124.1	0.5－1㎜長石	良好	灰白色	完形	
8	72.0	43.0		103.2	0.3－1㎜長石、石英	良好	灰白色	1／2	
9	68.0	45.0		121.0	0.5－1㎜長石、石英	良好	灰白色	完形	
10	69.0	44.5		123.7	0.5－1.5㎜石英、長石	良好	灰白色	完形	
11	65.0	45.0		117.4	0.3－0.7㎜長石、石英	良好	灰白色	完形	
12	67.5	43.5		116.4	0.5－1㎜長石	良好	灰白色	小欠損	
13	76.0	43.0		119.8	0.5－1.5㎜長石、石英	良好	灰白色	小欠損	
14	61.0	50.0		134.9	0.5－3㎜長石、石英	良好	灰白色	完形	
15	66.5	41.0		102.6	0.5－2㎜石英、長石	良好	灰白色	完形	
16	59.5	41.0		95.2	0.5－1.5㎜長石	良好	灰白色	完形	
17	70.0	40.0		101.0	0.5㎜－3㎜長石、石英	良好	灰白色	小欠損	
18	61.5	42.5		97.6	0.5－1㎜長石、石英	良好	にぶい橙	完形	
19	(40.5)	14.0		6.5	0.5㎜以下長石	良好	灰白色	2／3	
20	46.5	15.0		9.5	0.3－0.7㎜長石、石英	良好	灰白色	3／4	
21	49.0	20.0		15.3	0.3－1㎜長石、石英	良好	灰白色	小欠損	
22	52.5	20.0		18.4	0.5－1㎜石英、雲母、赤色粒	良好	にぶい黄橙色	完形	
23	54.0	21.0		19.6	0.5－3.5㎜長石、石英、雲母	良好	にぶい橙色	小欠損	
24	(56.0)	19.5		15.3	0.3－1.5㎜長石、石英	良好	灰白色	小欠損	
25	60.0	19.0		20.6	0.5－1㎜長石、雲母、赤色粒	良好	灰黄色	小欠損	
26	58.5	20.0		21.7	0.5－1㎜長石、雲母、赤色粒	良好	にぶい黄橙色	小欠損	
27	56.5	20.0		19.5	0.5㎜長石、石英	良好	にぶい黄橙色	小欠損	
28	60.0	23.0		25.9	0.5－3㎜長石、石英、雲母	良好	灰白色	小欠損	
29	59.0	20.0		21.8	0.5－1㎜長石、石英	良好	明褐灰色	完形	
30	65.0	19.5		23.4	0.5－2㎜長石、赤色粒、雲母	良好	灰黄色	完形	
31	(26.0)	21.5		9.8	0.5－1㎜長石、石英、雲母、赤色粒	良好	灰白色	1／3	
32	(35.0)	22.0		9.9	0.5－1㎜長石、石英、赤色粒、雲母	良好	灰白色	2／3	
33	52.0	41.0		104.1	0.3－1㎜長石、石英、雲母	良好	灰白色	完形	
34	81.0	34.0		86.2	0.3－1㎜長石、石英、雲母	良好	褐灰色	小欠損	
35	74.5	34.5		80.0	0.5－3㎜長石、石英	良好	灰白色	完形	
36	77.5	34.0		79.7	0.5－4㎜長石、石英	良好	灰白色	完形	
37	68.0	23.5	21.5	31.0	0.5㎜長石、石英、雲母、赤色粒	良好	鈍い黄橙色	完形	
38	(28.0)	8.0		1.5	0.3－0.7㎜石英	良好	灰白色	小欠損	
39	(17.5)	10.0		1.2	0.3－2㎜長石、石英、赤色粒	良好	浅黄橙色	1／3	
40	42.0	12.0		5.5	0.5㎜以下長石	良好	淡黄色	小欠損	
41	42.5	14.0		8.7	0.5－1㎜赤色粒	良好	にぶい橙色	完形	
42	51.0	18.0		7.4	0.3－1.5㎜石英、雲母	良好	にぶい褐色	1／2	
43	69.0	23.0	18.0	28.4	1㎜長石、石英、雲母	良好	にぶい黄橙色	完形	
44	(44.0)	16.5	14.0	14.2	0.3－0.5㎜長石、雲母	良好	にぶい黄色	2／3	
45	(26.0)	16.0	12.0	5.5	0.3－0.5㎜長石、雲母	良好	にぶい褐色	1／3	
46	(35.0)	11.0	11.0	5.0	0.3－0.5㎜長石、石英	良好	灰黄褐色	2／3	
47	38.0	9.0		2.8	0.5－1㎜長石、雲母	良好	灰褐色	小欠損	
48	37.5	12.0		4.6	0.3－1㎜長石、石英	良好	黄灰色	小欠損	
49	(38.0)	11.5		3.7	微砂	良好	灰白色	小欠損	
50	(54.0)	24.0		25.2	0.5－1㎜長石、石英	良好	にぶい橙色	小欠損	
51	(57.5)	16.0	14.0	15.7	0.3－0.5㎜長石、石英	良好	灰白色	3／4	
52	67.0	15.0	11.5	11.6	0.3－1.5㎜長石、石英	良好	灰白色	完形	
53	23.5	11.5		3.2	0.5－1.5㎜長石、石英、赤色粒	良好	浅黄橙色	小欠損	
54	51.5	15.0		7.8	0.5－1.5㎜長石、石英、赤色粒	良好	灰黄褐色	小欠損	
55	30.0	7.0		1.1	0.3－0.7㎜長石、石英、赤色粒	良好	灰白色	小欠損	
56	40.0	11.0		4.2	0.5㎜長石	良好	灰色	小欠損	

遺物番号	計測最大値（mm）			重量（g）	胎　土	焼成	色調	残存率	備考
	長	幅	厚						
57	30.5	10.0		3.2	0.5－1㎜長石、石英	良好	浅黄橙色	小欠損	
58	35.0	11.0		3.3	0.5－1㎜長石	良好	黒	小欠損	
59	30.0	8.5		2.1	0.5㎜以下長石、雲母	良好	褐色	小欠損	
60	26.0	9.5		1.6	0.3－1㎜長石、雲母	良好	黄灰色	2／3	
61	38.0	10.0		3.9	砂粒を殆ど含まない	良好	灰白色	小欠損	
62	38.0	9.0		3.0	0.3－0.5㎜長石、石英	良好	にぶい橙色	小欠損	
63	42.5	12.0		5.1	0.5－1㎜長石、石英	良好	橙色	小欠損	
64	46.5	13.5		6.9	0.3－0.7㎜長石、石英	良好	にぶい赤褐色	小欠損	
65	42.0	9.0		3.9	微砂、長石、石英、赤色粒	良好	にぶい橙色	完形	
66	52.5	11.0		5.8	0.3－1㎜長石、雲母、石英	良好	褐灰色	完形	
67	41.5	9.5		2.6	0.3－0.7㎜長石、雲母	良好	灰色	小欠損	
68	47.0	14.5		7.1	0.3－1㎜長石、石英	良好	にぶい黄橙色	小欠損	
69	46.0	13.0		7.5	0.3－2㎜長石、石英	良好	にぶい黄褐色	小欠損	
70	48.0	14.5		9.3	0.5－2㎜石英、長石	良好	灰白色	小欠損	
71	44.0	11.0		4.9	0.3－3㎜長石、石英、雲母	良好	にぶい橙色	小欠損	
72	46.0	11.5		6.4	0.3－0.7㎜長石	良好	褐灰色	完形	
73	44.0	11.0		5.5	0.3－3㎜長石、石英、雲母	良好	にぶい橙色	小欠損	
74	54.0	18.0		16.1	0.3－1㎜長石	良好	灰白色	小欠損	
75	(28.0)	12.5		3.6	0.3－0.7㎜長石	良好	にぶい橙色	1／2	
76	46.0	13.0		7.7	0.5－3㎜長石、石英、雲母	良好	にぶい橙色	小欠損	
77	52.5	16.0		12.5	殆ど砂を含まない	良好	褐灰色	小欠損	
78	57.0	18.0		14.7	0.3－0.5㎜長石	良好	黒灰色	小欠損	
79	51.5	14.5		9.3	0.3－0.7㎜長石、石英	良好	灰白色	完形	
80	(38.0)	20.0		11.5	0.5－0.7㎜長石	良好	灰白色	1／2	
81	(35.0)	23.0		11.8	0.5－1㎜長石、石英、雲母、赤色粒	良好	灰黄色	2／3	
82	55.5	20.0		18.9	0.5－1.5㎜石英、長石	良好	灰白色	小欠損	
83	68.5	21.0		24.5	0.3－1㎜長石、石英、雲母、赤色粒	良好	にぶい橙色	完形	
84	(57.0)	20.0		17.7	0.5－2.5㎜長石、石英、雲母	良好	にぶい黄橙色	小欠損	
85	(58.0)	19.0		18.3	0.5－3㎜長石、石英、雲母	良好	にぶい橙色	小欠損	
86	61.0	21.0		24.0	0.5－2㎜長石、石英、雲母	良好	灰白色	完形	
87	73.0	27.0		41.8	1㎜長石、雲母、黒色粒	良好	橙色	小欠損	
88	(63.0)	26.0		18.8	0.5－4㎜長石	良好	にぶい橙色	小欠損	
89	77.0	26.5		45.6	1㎜長石、石英、黒色粒	良好	灰白色	小欠損	
90	57.5	31.5		60.4	0.3－0.5㎜長石、雲母	良好	にぶい黄橙色	完形	
91	57.5	36.5		91.1	0.3－1㎜長石、石英	良好	灰色	完形	
92	64.0	40.5		117.2	0.3－0.5㎜長石、石英、雲母	良好	褐灰色	完形	
93	88.0	31.0		72.3	0.5－1.5㎜長石、石英、雲母、赤色粒	良好	灰白色	小欠損	
94	30.0	30.0		17.0	0.3－0.5㎜長石、赤色粒	良好	にぶい橙色	小欠損	
95	48.5	48.5		109.5	0.3－2㎜長石、石英	良好	灰白色	完形	
96	41.0	13.0		7.2	0.5－1㎜長石	良好	褐灰色	3／4	
97	(42.0)	12.0		5.3	0.5－1㎜長石、石英、赤色粒	良好	にぶい橙色	小欠損	
98	(44.5)	14.0	15.5	11.5	0.5－1.5㎜長石、石英、雲母、赤色粒	良好	灰白色	3／4	
99	(60.0)	17.0	15.0	19.8	0.5－1.5㎜長石、石英	良好	灰白色	3／4	
100	(49.2)	17.0	12.5	11.5	0.3－1㎜長石、石英、雲母	良好	灰白色	3／4	
101	(43.0)	12.0	12.0	7.4	0.3－2㎜長石、石英	良好	にぶい黄橙色	3／4	
102	(59.5)	13.5	11.0	10.1	0.5－1.5㎜長石、石英、雲母	良好	にぶい灰黄褐色	小欠損	
103	(40.0)	15.0	13.5	9.0	0.5－2㎜長石、石英	良好	灰色	3／4	
104	(63.5)	14.5	13.0	13.8	0.5－1.5㎜長石、石英	良好	褐灰色	小欠損	
105	(58.5)	12.0	11.0	10.4	0.3－0.5㎜長石	良好	淡黄色	完形	
106	(47.0)	13.0	11.0	7.3	0.5－1.5㎜長石、石英	良好	灰黄色	3／4	
107	(63.5)	13.0	10.5	11.2	0.3－0.7㎜長石、石英	良好	にぶい橙色	小欠損	
108	42.5	24.5	15.0	17.2	0.5－2㎜長石、石英、赤色粒	良好	褐灰色	1／2	
109	61.0	14.0	15.0	18.2	0.3－2㎜長石、石英、雲母	良好	黄褐色	小欠損	
110	80.0	17.0	16.5	24.2	0.5㎜長石、赤色粒	良好	灰白色	小欠損	
111	78.5	24.0	16.0	32.7	0.3－0.5㎜長石	良好	明褐灰色	小欠損	
112	75.5	21.0	15.0	32.9	0.5㎜長石、石英	良好	にぶい橙色	完形	
113	77.5	23.5	16.5	30.1	0.5－1.5㎜長石、石英、雲母	良好	にぶい黄橙色	完形	

表—6　緑釉陶器一覧表

番　号	報告書掲載遺物番号	出　土　地　点	部　　位	備考（産地他）
緑－ 1	990	3区包含層	口縁部－高台	京　都
緑－ 2	991	3区包含層	口縁部－高台	〃
緑－ 3	992	3区包含層	口縁部	〃
緑－ 4	993	3区包含層	口縁部	〃
緑－ 5	994	3区包含層	口縁部	〃
緑－ 6	995	3区包含層	口縁部	〃
緑－ 7	996	3区包含層	口縁部	〃
緑－ 8	997	3区包含層	口縁部	〃
緑－ 9	998	3区包含層	口縁部	〃
緑－10	999	3区表採	口縁部	〃
緑－11	1000	2区包含層・3区包含層	高　台	〃
緑－12	1001	3区包含層	糸切り底	〃
緑－13	1002	3区包含層・4区包含層	高　台	〃
緑－14	1003	3区包含層	高　台	〃
緑－15	1004	3区包含層・6区包含層	高　台	滋　賀
緑－16	1134	6区溝－19	口縁部	京　都
緑－17	1329	1区包含層	口縁部	〃
緑－18	1330	1区谷	口縁部	〃
緑－19	1331	1区谷	口縁部	〃
緑－20	1332	1区谷上層	高　台	〃
緑－21	1333	1区谷東	高　台	白色無釉陶器、京都
緑－22	1334	2区北・2区包含層・4区包含層	高　台	京　都
緑－23	1559	6区谷上層	口縁部	〃
緑－24	1560	6区谷上層	口縁部	〃
緑－25	1561	6区谷上層	口縁部	〃
緑－26	1562	6区谷上層	口縁部	〃
緑－27	1634	10区B谷C上層	口縁部	〃
緑－28	1635	10区B・谷C上層	口縁部	〃
緑－29	1636	10区谷C第3層	口縁部	〃
緑－30	1637	10区B谷CP2層	高　台	〃
緑－31	1638	10区B谷C上層	底部（線刻）	〃
緑－32	1639	10区谷	高　台	滋　賀
緑－33	1767	表採	口縁部	京　都
緑－34	1768	5区包含層	口縁部	〃
緑－35	1769	4区包含層	口縁部－高台	〃
緑－36	1770	5区包含層	口縁部	〃
緑－37	1771	11区南包含層	口縁部	〃
緑－38	1772	4区包含層	口縁部	〃
緑－39	1773	6区溝	口縁部	〃
緑－40	1774	11区包含層	口縁部	〃
緑－41	1775	2区包含層	口縁部	〃
緑－42	1776	11区包含層	口縁部	〃
緑－43	1777	5区包含層	高　台	〃
緑－44	1778	12区包含層	高　台	〃
緑－45	1779	5区包含層	高　台	〃
緑－46	1780	10区D包含層	高　台	〃
緑－47	1781	4区包含層	高　台	〃
緑－48	1782	4区包含層	高　台	〃
緑－49	1783	12区C包含層	高　台	〃
緑－50	1784	4区包含層	高　台	〃
緑－51	1785	4区包含層	高　台	〃
緑－52	1786	11区南第2層	底　部	〃
緑－53	1787	11区砂層・11区包含層	高　台	滋　賀

番　号	報告書掲載遺物番号	出　土　地　点	部　　位	備考（産地他）
緑－54	1788	11区拡張区砂層	高　台	滋　賀
緑－55	1789	2区北	高　台	無釉、滋賀
緑－56	1790	4区包含層	高　台	白色無釉陶器、京都
緑－57	1791	11区南第2層	高　台	美　濃
緑－58	1792	8区包含層	高　台	〃
緑－59		12区包含層	高　台	京　都
緑－60		12区包含層	体　部	〃
緑－61		4区包含層	体　部	〃
緑－62		T－18柱穴	体　部	〃
緑－63		11北岸包含層	体　部	〃
緑－64		10区谷C	体　部	滋　賀
緑－65		2区北溝－1	体　部	〃
緑－66		6区包含層下層	体　部	〃
緑－67		12区D包含層	体　部	〃
緑－68		4区包含層	体　部	京　都
緑－69		5区包含層	体　部	〃
緑－70		3区包含層	体　部	〃
緑－71		4区包含層	体　部	〃
緑－72		6区包含層	体　部	〃
緑－73		10区B溝－6	体　部	滋　賀
緑－74		12区包含層	体　部	京　都
緑－75		3区包含層	体　部	〃
緑－76		12区B包含層	体　部	〃
緑－77		11区南包含層	体　部	滋　賀
緑－78		2区北包含層	体　部	京　都
緑－79		5区包含層	体　部	〃
緑－80		6区包含層	体　部	〃
緑－81		3区包含層	体　部	〃
緑－82		6区包含層	体　部	〃
緑－83		3区包含層	体　部	〃
緑－84		4区包含層	口縁部	〃
緑－85		T－18包含層	体　部	〃
緑－86		3区包含層	体　部	〃
緑－87		6区谷上層	体　部	〃
緑－88		3区包含層	体　部	〃
緑－89		5区包含層	体　部	〃
緑－90		4区包含層	体　部	〃

表—7　土器観察表

挿図番号	器種	部位	文様	形態・手法の特徴		色調	胎土	備考
				内面	外面			
1	深鉢	胴部		ナデ	ナデ、ケズリ	黒褐色	1～2㎜の砂粒	土壙6
2	〃	〃		ナデ	ケズリ	灰黄褐色	0.5～1㎜の砂粒	〃
3	〃	頸部	爪形文（逆C字）	ナデ	ナデ	黒褐色	1～2㎜の砂粒	土壙3
4	〃	胴部	爪形文（C字）	ナデ	ケズリ	灰黄褐色	0.5㎜以下の砂粒	〃
5	〃	口縁部	刻目（V字）	ナデ	ナデ	黄灰色	0.5㎜以下の砂粒	〃
6		底部		条痕後ナデ	ナデ、ケズリ	暗灰黄色	0.5㎜以下の砂粒	土壙6
7	浅鉢	口縁部	突起	ケズリ後ミガキ	ミガキ	黒褐色	0.5～1㎜の砂粒	〃
8	〃	頸部		ナデ後ケズリ	ミガキ	浅黄色	1㎜前後の砂粒	土壙5
9	深鉢	胴部		ナデ	ケズリ	黒褐色	0.5㎜以下の砂粒	土壙2
10	浅鉢	胴部		ナデ	ナデ	暗灰黄色	0.5㎜以下の砂粒	〃
11	深鉢	胴部		ナデ	条痕、ケズリ	にぶい黄褐色	0.5～1㎜の砂粒	土壙1
12	浅鉢	口縁部		ナデ	ナデ	灰黄褐色	1～2㎜の砂粒	〃
13	〃	〃		ナデ	条痕	黄灰色	1㎜前後の砂粒	土壙1
14	深鉢	頸部	縄文（RL）	ナデ	ナデ	灰白色	0.5～1㎜の砂粒	灰褐色砂層
15	〃	口縁部	磨消縄文（LR）	ナデ	ナデ	灰色	1～1.5㎜の砂粒	
16	〃	〃	磨消縄文（RL）	ナデ	ナデ	黄灰色	0.5㎜前後の砂粒	灰褐色砂層
17	〃	胴部	磨消縄文（RL）	ナデ	ナデ	灰色	0.5～1㎜の砂粒	ピート層下層
18	〃	〃	磨消縄文？	ナデ		黒褐色	0.5㎜の砂粒	溝3
19	〃	〃	磨消縄文（RL）	ナデ	ナデ	黄灰色	0.5～1.5㎜の砂粒	灰褐色砂層
20	〃	〃	磨消縄文	ナデ？		褐灰色	1～1.5㎜の砂粒	ピート層下層
21		口縁部		ナデ		褐灰色	1～2㎜の砂粒	灰褐色砂層
22	鉢	〃	縄文	ナデ？	ナデ	黄灰色	1～2㎜の砂粒	灰褐色砂層
23	深鉢	胴部	磨消縄文	ナデ	ナデ	にぶい黄橙色	0.5～1.5㎜の砂粒	
24	〃	口縁部	沈線	ナデ	ナデ	灰褐色	0.5～3㎜の砂粒	溝3
25	〃	底部	磨消縄文（RL）	ナデ	ナデ	暗灰黄色	0.5～1㎜の砂粒	灰褐色砂層
26	〃	〃		ナデ	ナデ	灰オリーブ色	1.5～3㎜の砂粒	灰褐色砂層
27	〃	〃		ナデ	条痕	黄灰色	1㎜前後の砂粒	ピート層下層
28	〃	口縁部		ナデ	条痕	褐灰色	1～1.5㎜の砂粒	灰白色粘土層
29	〃	〃		ナデ	ケズリ	にぶい黄橙色	0.5～1㎜の砂粒	〃
30	〃	〃		ナデ	ナデ	灰白色	1～1.5㎜の砂粒	〃
31	〃	〃		ナデ	条痕	褐灰色	1～1.5㎜の砂粒	灰褐色砂層
32	〃	〃	刻目（ユビ）	ナデ	条痕	褐灰色	1.5㎜前後の砂粒	灰白色粘土層
33	〃	〃	刻目（D字）	ナデ	ケズリ	黒色	0.5㎜の砂粒	灰褐色砂層
34	〃	〃		ナデ	ケズリ	灰白色	1.5㎜前後の砂粒	灰白色粘土層
35	〃	〃		ナデ	ケズリ	灰黄色	1㎜前後の砂粒	〃
36	〃	〃		ナデ	条痕	灰白色	1㎜の砂粒	ピート層
37	〃	〃		ナデ	条痕	黒褐色	1～1.5㎜	ピート層
38	〃	〃		ナデ	条痕、ケズリ	灰白色	1㎜	〃
39	〃	〃		ナデ	条痕、ケズリ	にぶい黄橙色	0.5㎜	灰白色粘土層
40	〃	〃		ナデ、条痕	条痕、ケズリ	灰黄褐色	1～1.5㎜	〃
41	〃		刻目（V字）	ナデ	条痕、ケズリ	灰白色	1.5～2㎜	〃
42	〃			ナデ	条痕後ナデ		0.5～1㎜	灰褐色砂層
43	〃			ナデ	条痕後ナデ	褐灰色	0.5～1.5㎜	〃
44	〃			ナデ	条痕	明褐灰色	0.5～1㎜	ピート層
45	〃			ナデ	条痕	灰黄褐色	1～2㎜	灰白色粘土層
46	〃			ナデ	条痕、ケズリ	にぶい黄橙色	0.5～1㎜	ピート層
47	〃		刻目（V字）	ナデ	条痕、ケズリ	灰白色	1～1.5㎜	〃
48	〃		刻目（O字）	ナデ	条痕、ケズリ	灰白色	0.5～1㎜	灰白色粘土
49	〃	口頸部	刻目（V字）	ナデ	ナデ、ケズリ	黒色	0.5～1㎜の砂粒	灰褐色砂
50	〃	〃	刻目爪形（逆C字）	ナデ	ナデ	にぶい黄橙色	0.5㎜の砂粒	灰褐色砂
51	〃	〃	刻目（V字）	ナデ	ナデ、ケズリ	灰白色	1㎜の砂粒3㎜のレキ	灰白色粘土
52	〃	〃	刻目（C字）、ヘラ描突帯（C字）	ナデ	ナデ	黒色	1～1.5㎜の砂粒	ピート

挿図番号	器種	部位	文様	形態・手法の特徴		色調	胎土	備考
				内面	外面			
53	深鉢	口頸部	刻目（O字）、爪形（C字）、突帯（V字）	ナデ	ナデ、ケズリ	灰白色	1～2㎜の砂粒	灰褐色砂
54	〃	〃	突帯（D字）	ナデ、条痕	ナデ、ケズリ	灰褐色	1～1.5㎜の砂粒	灰白色粘土
55	〃	〃		ナデ、条痕	ナデ、条痕	褐灰色	1㎜の砂粒、4㎜のレキ	ピート
56	〃	〃		ナデ	条痕＋ナデ	黄灰色	0.5～1㎜の砂粒	灰褐色砂
57	〃	〃		ナデ	条痕、ケズリ	灰白色	1㎜前後の砂粒	灰白色粘土
58	〃	〃		ナデ	条痕	灰白色	0.5～1㎜の砂粒	ピート
59	〃	〃		ケズリ＋ナデ	条痕	黒色	0.5～1㎜の砂粒、2～5㎜のレキ	ピート
60	〃	〃		ナデ	条痕	灰白色	1～1.5㎜の砂粒	ピート、穿孔あり
61	〃	〃		ナデ	条痕	黒褐色	1㎜前後の砂粒	灰白色粘土
62	〃	〃		ナデ	条痕	灰黄褐色	0.5～1㎜の砂粒	灰白色粘土
63	〃	〃		ナデ	条痕	灰白色	1.5㎜の砂粒	ピート
64	〃	〃		ナデ	条痕	黒褐色	0.5～1㎜の砂粒	灰白色粘土
65	〃	〃		ナデ	条痕	黒褐色	1.5㎜の砂粒	ピート
66	〃	〃		ナデ、ケズリ	条痕＋ナデ	にぶい黄橙色	0.5～1㎜の砂粒	ピート
67	〃	〃		ナデ	条痕	褐灰色	0.5㎜の砂粒	ピート
68	〃	〃	突起	ナデ	条痕	黒褐色	0.5～1㎜の砂粒	灰白色粘土
69	〃	〃	刻目（V字）、突起	ナデ	条痕	褐灰色	1㎜の砂粒	灰白色粘土
70	〃	〃	刻目（V字）、突起	ナデ	ケズリ	黄灰色	0.5㎜の砂粒	灰褐色砂
71	〃	〃	刻目（O字）	ナデ	条痕	褐灰色	1㎜前後の砂粒	ピート
72	〃	〃	刻目（O字）	ナデ	条痕	灰黄褐色	1～2㎜の砂粒	灰白色粘土
73	〃	〃	刻目（D字）	ナデ	条痕	黒色	1～1.5㎜の砂粒	灰褐色砂
74	〃	〃	刻目（O字）	ナデ	条痕	黒褐色	0.5～1㎜の砂粒	灰褐色砂
75	〃	〃	刻目（D字）	ナデ	条痕	灰白色	1㎜前後の砂粒	灰白色粘土
76	〃	〃	刻目（O字）	ナデ	条痕	黒褐色	0.5㎜の砂粒	ピート
77	〃	〃		ナデ	ケズリ	黒褐色	1～1.5㎜の砂粒	灰褐色砂
78	〃	〃	刻目（V字？）	ナデ	ナデ	灰白色	1㎜の砂粒	灰褐色砂
79	〃	〃	刻目（V字）	ナデ	ナデ	黄灰色	1㎜前後の砂粒	灰褐色砂
80	〃	〃	刻目（D字）	ナデ	ナデ	灰黄色	0.5～1㎜の砂粒	灰褐色砂
81	〃	〃	刻目（V字）	ナデ	ナデ	黒褐色	0.5～1㎜の砂粒	ピート
82	〃	〃	刻目（V字）	ナデ	ケズリ＋ナデ	明褐灰色	0.5～1㎜の砂粒	灰褐色砂
83	〃	頸部	刺突	ナデ	ナデ	黒色	0.5～1㎜の砂粒	灰褐色砂
84	〃	〃	刺突	ナデ	条痕	明褐灰色	1.5㎜の砂粒	灰褐色砂
85	〃	〃	刻目（D字）、刺突	ナデ	ナデ	にぶい黄橙色	1㎜の砂粒	ピート
86	〃	〃	爪形（逆U字）	ナデ	ナデ	灰黄褐色	1㎜の砂粒	灰白色粘土
87	〃	〃	爪形（逆U字、逆C字）	ナデ	ナデ	灰白色	0.5㎜の砂粒	灰白色粘土
88	〃	〃	刺突	ナデ	ナデ	黄灰色	1㎜の砂粒	ピート
89	〃	〃	爪形（逆U字、逆C字）	ナデ	ナデ	灰黄色	0.5㎜の砂粒	灰褐色砂
90	〃	口頸部		ナデ	ナデ	黒褐色	0.5～1㎜の砂粒	ピート
91	〃	〃	爪形（C字、逆U字）	ナデ	条痕	灰白色	1.5㎜の砂粒	ピート
92	〃	〃	爪形（C字、逆U字）、突起	ナデ	条痕	灰白色	0.5～1㎜の砂粒	灰白色粘土
93	〃	〃	刻目（V字）	ナデ	ナデ	灰黄色	1㎜の砂粒	灰褐色砂
94	〃	〃	刻目（V字）	ナデ	ナデ	オリーブ黒色	0.5～1㎜の砂粒	ピート
95	〃	〃	刻目（D字）	ナデ	ナデ	褐色	1㎜の砂粒	ピート
96	〃		爪形（逆U字）	ナデ	条痕	灰白色	1㎜の砂粒	灰白色粘土
97	〃	頸部	爪形（逆U字）	ナデ	ナデ	黄灰色	1㎜の砂粒	灰白色粘土
98	〃	〃	爪形（逆U字、C字）	ナデ	ナデ	灰黄褐色	1㎜の砂粒	ピート
99	〃	〃	爪形（逆U字）	ナデ	ナデ	褐灰色	0.5～1㎜の砂粒	灰白色粘土
100	〃	〃	爪形（逆U字）	ナデ	ナデ	暗灰黄色	1㎜の砂粒	灰褐色砂
101	〃	〃	爪形（逆U字）	ナデ	ナデ	灰白色	1～1.5㎜の砂粒	灰白色粘土
102	〃	〃	爪形（逆U字）	ナデ	ナデ	灰白色	1.5～2㎜の砂粒	灰白色粘土
103	〃	〃	爪形（逆U字）	ナデ	条痕	灰白色	0.5～1㎜の砂粒	ピート
104	〃	〃	爪形（逆U字）	ナデ	条痕	褐灰色	1～1.5㎜の砂粒	灰白色粘土

挿図番号	器種	部位	文様	形態・手法の特徴		色調	胎土	備考
				内面	外面			
105	深鉢	肩部	爪形（D字）	ナデ	ケズリ	明褐灰色	1～1.5㎜の砂粒	ピート
106	〃	頸部	爪形（逆D字）	ナデ	ナデ	灰白色	1㎜の砂粒	灰褐色砂
107	〃	〃	爪形（D字）	ナデ	ナデ	黄灰色	0.5㎜の砂粒	灰白色粘土
108	〃	肩部	爪形（D字）	ナデ	ナデ、ケズリ	黄灰色	1～1.5㎜の砂粒	ピート
109	〃	口頸部	爪形（D字）	ナデ	ナデ	褐灰色	1㎜の砂粒	灰褐色砂
110	〃	頸部	爪形（逆C字）	ナデ	ナデ	灰白色	0.5㎜の砂粒	灰褐色砂
111	〃	〃	爪形（D字）	ナデ	条痕、ケズリ	黄灰色	0.5㎜以下の砂粒	灰褐色砂
112	〃	〃	爪形（D字）	ナデ	条痕	黒褐色	0.5～1㎜の砂粒	ピート
113	〃	肩部	爪形（D字）	ナデ	ナデ、ケズリ	灰オリーブ色	1～2㎜の砂粒	ピート
114	〃	〃	爪形（逆C字）	ナデ	ナデ、ケズリ	灰黄色	0.5～1㎜の砂粒	灰褐色砂
115	〃	頸部	爪形（逆C字）	ナデ	ナデ	灰黄色	1～1.5㎜の砂粒	ピート
116	〃	〃	爪形（逆C字）	ナデ	ナデ、ケズリ	浅黄橙色	1㎜の砂粒	灰白色粘土
117	〃	〃	爪形（逆C字）	ナデ	ナデ	灰白色	0.5㎜の砂粒	灰褐色砂
118	〃	肩部	爪形（逆C字）	ナデ	ケズリ	灰白色	0.5㎜の砂粒	灰褐色砂
119	〃	〃	爪形（C字）	ナデ	条痕、ケズリ	灰白色	0.5～1㎜の砂粒	灰白色粘土
120	〃	頸部	爪形（C字）	ナデ	ナデ	灰白色	0.5㎜の砂粒	灰白色粘土
121	〃	肩部	爪形（C字）	ナデ	ケズリ	褐灰色	1㎜の砂粒	灰白色粘土
122	〃	〃	爪形（C字）	ナデ	ナデ、ケズリ	浅黄色	1～2㎜の砂粒	溝3
123	〃	〃	爪形（C字）	ナデ	ナデ、ケズリ	灰オリーブ色	1～1.5㎜の砂粒	灰白色粘土
124	〃	〃	爪形（C字）	ナデ	ケズリ	灰白色	1㎜の砂粒	灰白色粘土
125	〃	〃	爪形（C字）	ナデ	条痕	灰黄色	0.5～1㎜の砂粒	ピート
126	〃	〃	爪形（C字）	ナデ	ナデ	黄灰色	0.5～1㎜の砂粒	灰白色粘土
127	〃	頸部	爪形（C字）	ナデ、条痕	ナデ、ケズリ	灰白色	0.5～1.5㎜の砂粒	灰白色粘土
128	〃	肩部	爪形（C字）	ナデ	ケズリ	灰白色	0.5～1㎜の砂粒	灰白色粘土
129	〃	頸部	爪形（C字）	ナデ	条痕、ケズリ	灰黄色	1～1.5㎜の砂粒	ピート
130	〃	肩部	爪形（C字）	ナデ	条痕	にぶい黄橙色	0.5㎜の砂粒	灰褐色砂
131	〃	〃	爪形（C字）	ナデ	ケズリ	灰黄色	1㎜の砂粒	ピート
132	〃	口縁部	キザミ目付突帯	ナデ	ナデ	にぶい黄橙色	1～1.5㎜の砂粒	
133	〃	頸部		ナデ	ナデ	灰色	0.5～1㎜の砂粒	灰褐色砂
134	〃	〃		ナデ	ナデ	黄灰色	0.5～1.5㎜の砂粒	灰褐色砂
135	〃	口縁部		ヨコナデ	ヘラミガキ	褐灰色	0.5～1㎜の砂粒	
136	〃	〃		ヨコナデ	ヘラミガキ	褐灰色	1.5～2㎜の砂粒	
137	〃	口頸部	刻目（V字）突帯（V字）	ナデ	ナデ	灰白色	0.5～1㎜の砂粒	溝－3
138	〃	口縁部	刻目（V字）突帯（V字）	ナデ	ケズリ	灰白色	0.5～1㎜の砂粒	灰褐色砂
139	〃	頸部	突帯	ナデ	ナデ	灰白色	1㎜の砂粒	溝－3
140	〃	〃	爪形（V字）	ナデ	ナデ	灰白色	1～2㎜の砂粒	灰褐色砂
141	〃	口頸部	刻目（V字）突帯（V字）	ナデ	ケズリ	灰黄色	1～1.5㎜の砂粒	灰褐色砂
142	〃	〃	刻目（V字）突帯（C字）	ナデ	ナデ	灰黄褐色	0.5～1㎜の砂粒	灰褐色砂
143	〃	口縁部	刻目（V字）沈線突帯（V字）	ナデ	ケズリ	灰白色	1.5～2㎜の砂粒	ピート
144	〃	〃	刻目（V字）沈線突帯（V字）	ナデ	条痕	灰白色	1.5～2㎜の砂粒	灰白色粘土
145	〃	〃	刻目（V字）突帯（D字？）	ナデ	条痕	灰黄色	1㎜の砂粒	灰褐色砂
146	〃	口頸部	刻目（V字）突帯（V字）	ナデ	ナデ	灰黄色	1～2㎜の砂粒	ピート
147	〃	口縁部	刻目（V字？）突帯（C字？）	ナデ	ナデ	灰黄色	1～1.5㎜の砂粒	灰白色粘土
148	〃	口頸部	突帯（D字）	ナデ	ナデ	灰黄色	0.5～1㎜の砂粒	灰褐色砂
149	〃	〃	突帯	ナデ	条痕	灰白色	1～1.5㎜の砂粒	ピート
150	〃	口縁部	突帯	ナデ	不明	灰白色	1㎜の砂粒	ピート
151	〃	〃	刻目（D字）突帯（D字？）	ナデ	不明	灰黄色	1～1.5㎜の砂粒	灰褐色砂
152	〃	〃	突帯（V字？）	ナデ	ナデ	灰白色	1～1.5㎜の砂粒	灰白色粘土
153	〃	頸部	爪形（逆U字）	ナデ	ナデ	灰黄褐色	1㎜の砂粒	灰白色粘土
154	〃	肩部		ナデ	条痕＋ナデ	オリーブ黒色	0.5～1㎜の砂粒	灰褐色砂
155	〃	〃		ナデ	条痕	灰白色	0.5～1㎜の砂粒	灰白色粘土
156	〃	〃		ナデ	ケズリ＋条痕	黄灰色	0.5㎜の砂粒	灰白色粘土

挿図番号	器種	部位	文様	形態・手法の特徴		色調	胎土	備考
				内面	外面			
157	深鉢	肩部		ナデ	条痕	灰黄色	0.5～1㎜の砂粒	灰褐色砂
158	〃	〃		条痕＋ナデ	ナデ、条痕	黒褐色	0.5㎜の砂粒	灰褐色砂
159	〃	〃		ナデ	ナデ、条痕	褐灰色	0.5㎜の砂粒	灰褐色砂
160	〃	胴部		ナデ	条痕	黄灰色	0.5～1㎜の砂粒	灰褐色砂
161	〃	〃		ナデ	条痕	灰白色	0.5～1㎜の砂粒	灰白色粘土
162	〃	〃		ナデ	条痕	灰白色	1～2㎜の砂粒	ピート
163	〃	〃		ナデ	条痕	褐灰色	0.5～1㎜の砂粒	灰褐色砂
164	〃	肩部		ナデ、ケズリ	ナデ	灰白色	0.5～1㎜の砂粒	灰白色粘土
165	〃	〃		ナデ	ナデ、ケズリ	灰黄褐色	0.5～1㎜の砂粒	灰褐色砂
166	〃	〃		ナデ	ナデ、ケズリ	灰黄褐色	0.5～1㎜の砂粒	灰褐色砂
167	〃	〃		ナデ	ナデ、ケズリ	灰白色	0.5～1㎜の砂粒	灰白色粘土
168	〃	〃		ナデ	ナデ	灰黄色	1～1.5㎜の砂粒	ピート
169	〃	胴部		ナデ	ケズリ	黒褐色	1～2㎜の砂粒	灰白色粘土
170	〃	〃		ナデ	ケズリ	褐灰色	1～1.5㎜の砂粒	灰褐色砂
171	〃	〃		ナデ	ケズリ	黄灰色	1～2㎜の砂粒	
172	〃	〃		ナデ	ケズリ	黄灰色	0.5～1㎜の砂粒	灰褐色砂
173	鉢			ナデ、ミガキ	ミガキ	褐灰色	1㎜の砂粒	ピート
174	〃			ナデ	ケズリ	淡黄色	0.5㎜の砂粒	灰白色粘土
175	〃			ナデ	二枚貝条痕	にぶい黄橙色	0.5～1㎜の砂粒	灰白色粘土
176	浅鉢			ミガキ	条痕？＋ナデ	灰黄褐色	1～1.5㎜の砂粒	ピート
177	〃			ナデ赤色顔料付着	ミガキ＋ナデ	黒褐色	0.5～1㎜の砂粒	ピート
178	〃			ナデ	ナデ	黄灰色	1㎜前後の砂粒	灰白色粘土
179	〃			ミガキ	ナデ、ミガキ	黒色	0.5㎜以下の砂粒	灰白色粘土ピート
180	〃	口縁部	突帯a	ナデ＋ミガキ	ナデ	褐灰色	0.5㎜以下の砂粒	ピート
181	〃	〃	突帯a	ナデ	ナデ？	淡黄色	0.5～1.5㎜の砂粒	灰白色粘土
182	〃	〃		ナデ	ナデ	灰黄色	1～1.5㎜の砂粒	灰白色粘土
183	〃	〃		ナデ＋ミガキ	ナデ＋ミガキ	灰黄褐色	1㎜前後の砂粒	灰白色粘土
184	〃		刻目（V字）	ナデ	ナデ	灰黄褐色	0.5～1㎜の砂粒	ピート
185	〃	完形		ヘラミガキ	ヘラミガキ条痕	褐灰色	1㎜の砂粒	不明
186	〃	口縁部		ナデ	ナデ、条痕	黒褐色	0.5㎜以下の砂粒	灰褐色砂
187	〃	〃	刻目（V字）	ミガキ	ナデ、条痕	黒色	1～1.5㎜の砂粒	灰褐色砂
188	〃	〃		ナデ	条痕＋ナデ	黒褐色	1㎜の砂粒	灰褐色砂
189	〃	口縁部		ミガキ	ミガキ	灰黄褐色	0.5㎜以下の砂粒	灰褐色砂
190	〃	〃	突起突帯a	ミガキ	ミガキ	灰白色	1～2㎜の砂粒	灰白色粘土（ピート上面）
191	〃	〃	突起突帯b	ナデ	ナデ	黒褐色	0.5～1㎜の砂粒	ピート灰褐色砂
192	〃	〃	突帯c	ナデ	ミガキ、ナデ	黒色	0.5㎜以下の砂粒	灰褐色砂
193	〃	〃	突帯c	ナデ＋ミガキ	ナデ＋ミガキ	黄灰色	0.5～1㎜の砂粒	ピート
194	〃	〃	突帯b	ミガキ	ミガキ、ナデ	褐灰色	0.5㎜以下の砂粒	灰褐色砂
195	〃	〃		ナデ＋ミガキ	ケズリ＋ミガキ	黒色	0.5㎜前後の砂粒	ピート
196	〃	〃	突帯c	ミガキ	ミガキ、条痕	黒褐色	0.5～1㎜の砂粒	灰褐色砂
197	〃	〃	突帯b	ミガキ、ナデ	ミガキ	褐灰色	0.5㎜の砂粒	灰褐色砂
198	〃			ケズリ＋ミガキ	ミガキ、条痕	灰黄褐色	0.5㎜の砂粒	灰褐色砂
199	〃	口縁部	突帯b	ミガキ	ミガキ、条痕	黄灰色	0.5～1㎜の砂粒	ピート
200	〃	〃		ミガキ	ミガキ	灰白色	1～1.5㎜の砂粒	灰白色粘土（ピート上面）
201	〃	〃		ナデ	ナデ	灰白色	1～2㎜の砂粒	灰白色粘土
202	〃	〃		ミガキ	ミガキ	灰白色	0.5～1㎜の砂粒	灰白色粘土
203	〃	〃		ナデ	ナデ	黄灰色	0.5㎜の砂粒	灰褐色砂
204	〃	〃		ミガキ	ミガキ	灰白色	0.5～1㎜の砂粒	灰白色粘土
205	〃	〃		ミガキ	ミガキ	灰白色	1.5㎜の砂粒	灰白色粘土
206	〃	〃		ミガキ	ミガキ	灰白色	1～1.5㎜の砂粒	灰白色粘土

挿図番号	器種	部位	文様	形態・手法の特徴		色調	胎土	備考
				内面	外面			
207	浅鉢	口縁部	突起あり	ミガキ	ミガキ	灰白色	0.5㎜以下の砂粒	灰白色粘土
208	〃	〃		ナデ	ケズリ＋ナデ	黄灰色	1～2㎜の砂粒	灰白色粘土(ピート上面)
209	〃	〃		ミガキ	ミガキ	黒褐色	0.5㎜以下の砂粒	ピート
210	〃	〃		ミガキ	ミガキ	灰白色	0.5～1㎜の砂粒	灰白色粘土
211	〃	〃	突起	ミガキ	不明	黒褐色	0.5～1㎜の砂粒	灰白色粘土
212	〃	〃	突起	ナデ	条痕	灰白色	0.5～1㎜の砂粒	灰白色粘土穿孔あり
213	〃	〃	突帯a	ミガキ	ミガキ	黒褐色	0.5㎜の砂粒	灰白色粘土
214	〃	〃	突帯b	ミガキ	ミガキ	黄灰色	0.5㎜以下の砂粒	灰白色粘土
215	〃	〃	突帯b	ナデ	ナデ	褐灰色	1㎜の砂粒	ピート
216	〃	〃	突帯b	ナデ	ナデ	黄灰色	1～1.5㎜の砂粒	灰白色粘土
217	〃	〃	突帯b	ミガキ	ミガキ	灰白色	0.5㎜以下の砂粒	灰褐色砂
218	〃	〃	突帯b	ミガキ	ミガキ	黄灰色	0.5㎜の砂粒	ピート
219	〃	〃	沈線突帯b	ミガキ	ケズリ＋ミガキ	灰白色	0.5㎜の砂粒	ピート
220	〃	〃	沈線突帯c	ミガキ	ミガキ	灰白色	0.5㎜以下の砂粒	灰白色粘土
221	〃	〃	突帯c	ミガキ	ミガキ	褐灰色	0.5㎜以下の砂粒	灰白色粘土
222	〃	〃	沈線突帯c	ミガキ	ミガキ	黒褐色	0.5㎜の砂粒	灰褐色砂
223	〃	〃	突帯c	ミガキ	ミガキ	黄灰色	0.5㎜以下の砂粒	灰白色粘土
224	〃	〃	突帯c	ナデ	ナデ	灰黄褐色	0.5㎜以下の砂粒	灰褐色砂
225	〃	〃		ミガキ	ナデ、ケズリ	褐灰色	1㎜の砂粒	ピート
226	〃	〃		ミガキ	ミガキ	褐灰色	0.5㎜以下の砂粒	ピート
227	〃	〃	突帯c	ミガキ	不明	灰色	0.5㎜以下の砂粒	灰白色粘土
228	〃	〃	突帯c	ミガキ	ミガキ	黒色	0.5㎜以下の砂粒	ピート
229	〃	〃	突起	ナデ	ナデ	灰白色	0.5㎜以下の砂粒	ピート
230	〃	〃	突帯c	ミガキ	ミガキ	オリーブ黒色	0.5㎜以下の砂粒	ピート
231	〃	〃		ミガキ	ミガキ	褐灰色	1～1.5㎜の砂粒	灰白色粘土
232	〃	〃		ミガキ	ミガキ	黄灰色	0.5～1.5㎜の砂粒	溝1
233	〃	〃	突帯c	ミガキ	ナデ	褐灰色	0.5㎜の砂粒	灰白色粘土
234	〃	〃	突帯b	ミガキ	ミガキ	褐灰色	0.5㎜の砂粒	ピート
235	〃	〃		ナデ	ナデ	黒褐色	0.5㎜の砂粒	灰褐色砂
236	〃	〃	突帯c	ミガキ	ミガキ	黒褐色	0.5㎜以下の砂粒	灰褐色砂
237	〃	〃		ナデ	ナデ、ミガキ	灰白色	0.5㎜の砂粒	灰褐色砂
238	〃	〃		ナデ	ミガキ	灰白色	1～3㎜の砂粒	ピート
239	〃	〃		ナデ	ナデ?	灰白色	0.5～1㎜の砂粒	ピート
240		底部		ナデ	ナデ、条痕	灰白色	0.5㎜の砂粒	ピート
241		〃		ナデ	ナデ、条痕	褐灰色	1～1.5㎜の砂粒	ピート
242		〃		ナデ	ケズリ、条痕＋ケズリ	灰白色	0.5㎜の砂粒	灰白色粘土
243		〃		ナデ	ナデ、条痕	灰白色	0.5～1㎜の砂粒	灰褐色砂
244		〃		ナデ	ナデ、条痕	にぶい黄橙色	1㎜前後の砂粒	ピート
245		〃		ナデ	ナデ、ケズリ	明赤灰色	1㎜前後の砂粒	灰褐色砂
246		〃		不明	ナデ、ケズリ	灰白色	1～1.5㎜の砂粒	灰白色粘土
247		〃		ナデ	ケズリ、条痕	灰白色	0.5～1㎜の砂粒	ピート
248		〃		ナデ	ケズリ、ケズリ	明褐灰色	0.5㎜の砂粒	ピート
249		〃		ナデ	ナデ、ケズリ	灰白色	1㎜前後の砂粒	灰白色粘土
250		〃		条痕＋ナデ	ケズリ、ケズリ	灰白色	0.5㎜の砂粒	灰褐色砂
251		〃		ナデ	ナデ、条痕	にぶい黄橙色	1㎜前後の砂粒	灰褐色砂
252		〃		ナデ	ナデ	灰白色	1～1.5㎜の砂粒	灰白色粘土
253		〃		ナデ	ナデ、ケズリ	灰白色	1㎜の砂粒	灰白色粘土
254		〃		ナデ	ナデ、ケズリ	灰白色	0.5㎜の砂粒	ピート
255		〃		ナデ	ナデ、ナデ	にぶい黄橙色	0.5㎜以下の砂粒	ピート
256		〃		ナデ	ナデ、ナデ	灰白色	0.5～1㎜の砂粒	溝1

挿図番号	器種	部位	文様	形態・手法の特徴		色調	胎土	備考
				内面	外面			
257		底部		ナデ	ナデ、ケズリ	にぶい黄橙色	0.5㎜の砂粒	ピート
258		〃		条痕？	ナデ、ケズリ	灰オリーブ色	1㎜の砂粒	灰白色粘土
259		〃		ナデ	ナデ、条痕	灰白色	0.5～1㎜の砂粒	灰白色粘土
260		〃		ナデ	ケズリ、ケズリ	浅黄色	0.5㎜の砂粒	灰白色粘土
261		〃		ナデ	ナデ、ケズリ	にぶい黄橙色	0.5～1㎜の砂粒	灰褐色砂
262		〃		ナデ	ナデ、条痕	にぶい黄橙色	0.5㎜の砂粒	灰白色粘土
263		〃		ナデ	ナデ、条痕	灰黄色	1～1.5㎜の砂粒	灰褐色砂
264		〃		ナデ	ケズリ、条痕	灰白色	0.5～1㎜の砂粒	ピート
265		〃		条痕	ナデ、条痕	褐灰色	0.5㎜以下の砂粒	灰褐色砂
266		〃		ナデ	ケズリ、ケズリ	灰白色	0.5～1㎜の砂粒	灰白色粘土
267		〃		ナデ	ナデ？、ケズリ	にぶい黄橙色	0.5～1㎜の砂粒	溝1
268		〃		ナデ	ケズリ？、ケズリ	灰黄色	1㎜前後の砂粒	灰白色粘土
269		〃		ナデ	ナデ、ケズリ	明褐灰色	0.5～1㎜の砂粒	灰白色粘土
270		〃		ナデ	ナデ、ケズリ	明褐灰色	0.5～1㎜の砂粒	ピート
271		〃		条痕＋ナデ	ケズリ、ケズリ	灰白色	0.5㎜の砂粒	灰白色粘土
272		〃		ナデ	ナデ、ケズリ	褐灰色	0.5～1㎜の砂粒	灰白色粘土
273		〃		ナデ	ケズリ、ナデ	にぶい黄橙色	0.5㎜以下の砂粒	灰褐色砂
274		〃		ナデ	ケズリ、ケズリ	灰白色	0.5～1㎜の砂粒	灰白色粘土
275		〃		不明（風化）	ナデ、ケズリ	灰白色	0.5～1㎜の砂粒	灰白色粘土
276		〃		ナデ	ナデ？、ケズリ＋ナデ	明褐灰色	1㎜前後の砂粒	溝1
277		〃		不明	ナデ、ナデ	褐灰色	0.5～1.5㎜の砂粒	ピート
278		〃		不明	ナデ？、ケズリ	灰白色	0.5～1.5㎜の砂粒	溝1
279		〃		ナデ	ナデ、ケズリ	灰黄褐色	1～2㎜の砂粒	灰褐色砂
280		〃		ナデ	ナデ、ケズリ	にぶい黄橙色	0.5㎜前後の砂粒	灰褐色砂
281		〃		ナデ	ナデ	にぶい黄橙色	0.5㎜の砂粒	灰褐色砂
282		〃		ナデ	ナデ、ケズリ	灰黄褐色	1㎜前後の砂粒	灰白色粘土
283		〃		ナデ	ナデ、ケズリ	灰白色	1㎜の砂粒	灰白色粘土
284		〃		ナデ	ナデ、ケズリ	灰褐色	1㎜前後の砂粒	灰褐色砂
285		〃		ナデ	ナデ、ケズリ？	橙色	1～1.5㎜の砂粒	灰白色粘土
286		〃		ナデ	ナデ、ケズリ	褐灰色	1～1.5㎜の砂粒	灰褐色砂
287		〃		ナデ	ナデ、ケズリ	灰黄褐色	0.5～1㎜の砂粒	灰褐色砂
288		〃		ナデ	ナデ、ケズリ	灰白色	0.5㎜の砂粒	灰白色粘土
289		〃		ナデ	ケズリ	灰黄色	0.5～1㎜の砂粒	ピート
290		〃		ナデ	ナデ、ケズリ	にぶい黄橙色	0.5～1㎜の砂粒	灰白色粘土
291		〃		ナデ	ナデ、ケズリ	にぶい黄橙色	1㎜の砂粒	ピート
292		〃		ナデ	ナデ、ケズリ	灰白色	0.5～1㎜の砂粒	灰褐色砂
293		〃		ナデ	ケズリ、ケズリ	灰白色	0.5～1㎜の砂粒	灰褐色砂
294		〃		ナデ	ナデ、ケズリ	オリーブ黒色	0.5～1.5㎜の砂粒	灰褐色砂
295		〃		ナデ？	ナデ、ケズリ	橙色	1～1.5㎜の砂粒	灰白色粘土
296		〃		ミガキ	条痕	黄灰色	1～1.5㎜の砂粒	灰褐色砂

挿図番号	種別	器種	出量（cm）			形態・手法の特徴	色調	胎土	備考
			口径	底径	器高				
297	弥生土器	甕				口縁端部丸くおさめる。口縁部ヘラミガキ。	茶褐色	0.5㎜以下の砂粒を含む一堅緻	
298	〃	〃				頸部に段。口縁部ヘラミガキ。	茶灰褐色	1.5㎜以下の砂粒を含む	
299	〃	〃				口縁端部やや凹む。口縁部ヘラミガキ。	茶灰色	0.5㎜以下の砂粒を含む一堅緻	
300	〃	〃				口縁端部外面ハケ状工具による横方向の調整のちヨコナデ。	淡黄灰色	5.0㎜以下の砂粒を含む	
301	〃	〃				外面肩部に段。	淡灰褐色	3.0㎜以下の砂粒を含む	
302	〃	〃				外面肩部2条のヘラ描き沈線。	茶褐色	2.5㎜～0.5㎜の砂粒を多く含む	
303	〃	〃				〃	淡褐色	3.0㎜以下の砂粒を含む	
304	〃	〃				外面肩部ヘラ描沈線1条、内外面ヘラミガキ。	淡褐色	1.5㎜以下の砂粒を含む	

挿図番号	種別	器種	法量（cm）			形態・手法の特徴	色調	胎土	備考
			口径	底径	器高				
305	弥生土器	壺				外面肩部多条のヘラ描沈線。	灰褐色	0.5㎜以下の砂粒を含む	
306	〃	〃				外面肩部ヘラ描沈線２条。	淡黄灰褐色	1.0㎜以下の砂粒を含む	
307	〃	〃				外面肩部ヘラ描沈線３条。	黒褐色	1.0㎜以下の砂粒を含む	
308	〃	〃				外面肩部ケズリダシヘラ描沈線。	淡灰褐色	1.0㎜以下の砂粒を含む	
309	〃	〃				〃	暗茶灰褐色	0.5㎜以下の砂粒を含む	
310	〃	〃				〃	灰褐色	2.0㎜以下の砂粒を含む	
311	〃	甕	24.0			口縁端部外側にキザミ目。体部上半に段。	淡茶灰褐色	1.0㎜以下の砂粒を含む	
312	〃	〃				わずかに外反する短かめの口縁。体部上半に段。	暗灰褐色	2.0～1.0㎜の砂粒を多く含む	
313	〃	〃				口縁端面にキザミ目。体部上半に段。	暗茶褐色	2.0～0.5㎜の砂粒を多く含む	
314	〃	〃				体部上半に段。	暗茶褐色	3.0㎜以下の砂粒を多く含む	外面煤付着。
315	〃	〃				口縁端部外面にキザミ目。	淡茶灰褐色	1.5㎜以下の砂粒を含む	
316	〃	〃				口縁部短かく外反。口縁端部外面タテ方向のハケ状工具のち、横方向のハケ状工具。体部上半に段。	淡茶灰色	2.5㎜以下の砂粒を多く含む	
317	〃	〃	28.4			口縁端部にキザミ目。体部上半に段。	茶灰褐色	5.0㎜以下の砂粒を含む	外面煤付着。
318	〃	〃				口縁端部外側にキザミ目。口縁下に段、刺突文連続。外面体部ヘラ描。	淡黄灰褐色	1.0㎜以下の砂粒を多く含む	
319	〃	〃				318 と類似。	褐色	1.5㎜以下の砂粒を多く含む	
320	〃	〃	29.2			口縁端部外側にキザミ目。口縁部オサエ、ヨコナデ。	淡茶灰色	1.5㎜以下の砂粒を多く含む	
321	〃	〃				口縁部下、ヘラ描沈線、段。その間に刺突文。	淡茶灰褐色	2.0～0.5㎜の砂粒を多く含む	
322	〃	〃				口縁部ヨコナデ、口縁部下に段。	暗茶灰色	2.0～0.5㎜の砂粒を多く含む	
323	〃	〃				口縁端部外側にキザミ目。	淡茶褐色	2.0㎜以下の砂粒を多く含む	
324	〃	〃				口縁部下ヘラ描沈線２条。沈線間に刺突文。	黒褐色	2.0㎜以下の砂粒を含む	
325	〃	〃	17.4			口縁端面にキザミ目。口縁部下ヘラ描沈線２条。	淡茶褐色	3.0㎜以下の砂粒を多く含む	外面煤付着。
326	〃	〃	24.0			屈曲気味に外反する口縁。端面にキザミ目。口縁部下ヘラ描沈線。	淡茶灰褐色	3.0㎜以下の砂粒を含む	
327	〃	〃	28.0			口縁部肥厚。口縁部下ヘラ描沈線２条。沈線間に竹管文。	茶灰褐色	2.5㎜以下の砂粒を多く含む	
328	〃	〃				口縁部端にキザミ目。	淡灰褐色	1.5㎜以下の砂粒を含む	
329	〃	〃				ゆるやかに外反する口縁。口縁端部にキザミ目。	淡茶褐色	2.0～1.0㎜の砂粒を多く含む	
330	〃	〃				短かく外反する口縁。	淡茶灰褐色	1.0㎜以下の砂粒を含む	煤付着
331	〃	〃				短かく外反する口縁。口縁部下ヘラ描沈線１条。	淡茶褐色	2.0㎜以下の砂粒を含む	
332	〃	〃				口縁部外反し、端部上方につまみだす。	灰褐色	1.5～0.5㎜の砂粒を多く含む	
333	〃	〃				口縁端部キザミ目。口縁部下ヘラ描沈線２条。	暗茶灰褐色	1.5㎜以下の砂粒を含む（他の土器に比べて砂粒少ない）	
334	〃	〃				口縁端面にキザミ目。	淡褐色	1.0㎜以下の砂粒を多く含む	
335	〃	〃				外面ヘラ描沈線２条。	灰褐色	1.0～1.5㎜の砂粒を多く含む	
336	〃	〃				口縁部わずかに外反。	茶灰色	2.5㎜以下の砂粒を含む	
337	〃	〃				口縁端部キザミ目。口縁部ヘラ描沈線２条。沈線間に刺突文。	淡茶灰褐色	2.0㎜以下の砂粒を含む	
338	〃	〃				外面ヘラ描沈線１条。	暗茶灰色	2.5～0.5㎜の砂粒を多く含む	
339	〃	〃				外面ヘラ描沈線１条。	淡茶灰褐色	1.5㎜以下の砂粒を多く含む	
340	〃	〃				屈曲気味に外に開く口縁。口縁部下タテ方向のハケメのち７条のヘラ描沈線。	黒褐色	2.0㎜以下の砂粒を含む	
341	〃	〃				逆「L」字口縁、口縁部下多条のヘラ描沈線。	淡灰黄褐色	2.0㎜以下の砂粒を多く含む	
342	〃	〃				〃	暗茶褐色	2.0㎜以下の砂粒を含む	
343	〃	〃				外面多条のヘラ描沈線。	灰黄褐色	1.0～2.0㎜の砂粒を多く含む	
344	〃	〃				外面細いヘラ描沈線５条。	黒灰色	2.0～1.0㎜の砂粒を多く含む	
345	〃	〃				外面多条のヘラ描沈線。	黒色	0.5～1.0㎜の砂粒を多く含む	
346	〃	底部		8.6		外面ヘラミガキ、ナデ。内面ナデ。	灰黄褐色	1.0㎜前後の砂粒を多く含む	
347	〃	〃		8.0		内面オサエ、ナデ。	明褐色	1.0㎜前後の砂粒を多く含む	
348	〃	〃		8.2		内外面ナデ。	灰黄褐色	1.0㎜前後の砂粒を多く含む	
349	〃	〃		8.0		〃	灰黄褐色	1.0～2.0㎜前後の砂粒を多く含む	
350	〃	〃		8.0		〃	灰黄褐色	1.0㎜前後の砂粒を多く含む	
351	〃	〃		8.4		〃	黒褐色	1.0㎜前後の砂粒を多く含む	

挿図番号	種別	器種	法量（cm）			形態・手法の特徴	色調	胎土	備考
			口径	底径	器高				
352	弥生土器	底部		7.2			にぶい黄褐色	0.5～1.0㎜の砂粒を多く含む	
353	〃	〃		8.0		外面ヘラミガキ、ナデ。	灰黄褐色	0.5～2.0㎜の砂粒を多く含む	
354	〃	〃		8.8		内外面、オサエ、ナデ。	浅黄色	1.0～2.0㎜の砂粒を多く含む	
355	〃	〃		9.2		〃	にぶい黄橙色	1.0～2.0㎜の砂粒を多く含む	
356	〃	〃		8.8		〃	灰黄色	1.0㎜前後の砂粒を多く含む	
357	〃	〃		8.0		〃	黄灰色	1.0～2.0㎜の砂粒を多く含む	
358	〃	〃		8.6		外面ナデ。	明褐灰色	1.0～2.0㎜の砂粒を多く含む	
359	〃	〃		8.0		内外面オサエ、ナデ。	明灰黄色	1.0～2.0㎜の砂粒を多く含む	
360	〃	〃		10.4		〃	〃	0.5～1.0㎜の砂粒を多く含む	
361	〃	〃		9.0		〃	灰黄色	1.0㎜前後の砂粒を多く含む	
362	〃	〃		7.8		〃	にぶい黄橙色	0.5～2.0㎜の砂粒を多く含む	
363	〃	〃		9.2		〃	灰黄褐色	1.0㎜前後の砂粒を多く含む	
364	〃	〃		10.6		〃	灰黄褐色	1.0㎜前後の砂粒を多く含む	
365	〃	〃		17.2		〃	にぶい黄橙色	1.0㎜前後の砂粒を多く含む	
366	〃	壺	22.8			口縁部端面に5条の凹線。	浅黄橙色	0.5～2.0㎜の砂粒を含む（赤色土粒、雲母）	
367	〃	〃	27.8			口縁部端面に6条の凹線。	黄橙色	0.5～2.0㎜の砂粒を含む（赤色土粒、雲母）	
368	〃	甕	14.8			肩部に櫛状工具による刺突文。	淡黄色	0.3～1.0㎜の砂粒を含む（雲母）	
369	〃	〃	16.8			外面体部ハケメ。内面オサエ、ナデ。	にぶい橙色	0.5～2.0㎜の砂粒を含む（雲母）	
370	〃	〃	23.5			外面頸部下ハケメ。	浅黄橙色	0.5～1.5㎜の砂粒を含む	
371	〃	〃	14.4			外面ハケメ。内面ハケメ、下半ヘラケズリ。	灰白色	0.5～3.0㎜の砂粒を多く含む	黒斑1ケ所
372	〃	〃	16.8			口縁部屈凹線。	淡黄色	0.5～1.0㎜の砂粒を含む（赤色土粒、雲母）	
373	〃	〃	17.0			〃	灰白色	0.5～1.0㎜の砂粒を含む	
374	〃	高杯	21.4			口縁部5条凹線。内面ヘラミガキ。	浅黄色	0.3～1.0㎜の砂粒を多く含む（雲母）	
375	〃	脚部		11.6		脚柱部ヘラミガキ、円孔。	淡黄色	0.5～3.0㎜の砂粒を含む	
376	〃	〃		12.4		内面ヘラケズリ	にぶい橙色	0.5～1.0㎜の砂粒を含む	
377		底部		6.1		外面ヘラミガキ。内面ハケメ、オサエ。	にぶい橙色	0.5～1.0㎜の砂粒を多く含む	底部焼成後穿孔
378	〃	〃		5.6		内面ヘラケズリ。	灰白色	0.3～2.0㎜の砂粒を多く含む（雲母）	
379	〃	甕	17.8			頸部から屈曲して「く」字の口縁部、端部肥厚。	橙色	0.5～3.0㎜の砂粒を含む(赤色土粒、雲母)	
380	〃	〃	15.0			外反する口縁部、端部肥厚。	浅黄橙色	0.5～2.0㎜の砂粒を多く含む	
381	〃	壺	14.0			外面ハケメ後ミガキ、口縁部に3条の沈線 内面ヘラケズリ	にぶい橙色	0.5㎜以下の砂粒	
382	〃	〃	20.1	7.3		外面ヘラミガキ、口縁・頸部に沈線 内面ヘラミガキ、ヘラケズリ	にぶい黄橙色	1～2㎜の砂粒	
383	〃	〃		9.2		外面ヘラミガキ、内面ヘラケズリ	淡黄色	0.5～3㎜の砂粒 角セン石含む	
384	〃	〃	18.8			外面タテハケ、口縁部に3条の沈線 内面ヨコハケ、ヘラケズリ	にぶい黄橙色	0.5～1㎜の砂粒	
385	〃	〃	16.0			外面ナデ、口縁部に6条の沈線、内面ヘラケズリ	にぶい黄橙色	0.5～2㎜の砂粒	
386	土師器	〃	23.1			外面ヨコナデ、内面ヨコナデ	灰白色	0.5～1㎜の砂粒 金雲母、角セン石含	
387	弥生土器	甕	16.0			外面ナデ、内面ヘラケズリ	灰白色	0.5～1.5㎜の砂粒	
388	〃	〃	17.0			外面タテハケ後ヘラミガキ、内面ヘラケズリ	にぶい黄色	1～3㎜の砂粒	
389	〃	〃	14.8			外面タテハケ、内面ヘラケズリ	にぶい黄橙色	2～4㎜の砂粒、金雲母含む	
390	〃	〃	15.6			外面不明、口縁部に2条の沈線	灰白色	0.5㎜以下の砂粒	
391	土師器	〃	18.8			外面ナデ、内面ナデ？	にぶい橙色	0.5㎜以下の砂粒	

挿図番号	種別	器種	法量（cm）			形態・手法の特徴	色調	胎土	備考
			口径	底径	器高				
392	土師器	甕	16.6			外面ハケメ、内面ヘラケズリ	にぶい黄橙色	0.5～1㎜の砂粒、角セン石含む	
393	〃	〃	13.6			外面ナデ、口縁部に7条の沈線、内面ヘラケズリ	灰白色	0.5～1.5㎜の砂粒、金雲母、角セン石含	
394	〃	〃				外面ハケメ、肩部にヘラ描、内面ヘラケズリ	灰白色	2～2.5㎜の砂粒	
395	〃	〃	14.6			外面ナデ、内面ヘラケズリ	にぶい橙色	1～2㎜の砂粒	
396	〃	〃	6.0			外面タタキ後ナデ、内面ナデ	にぶい橙色	1～2㎜の砂粒	
397	〃	〃		4.1		外面タタキ後ハケメ、内面ヘラケズリ	灰白色	0.5～3㎜の砂粒、角セン石含む	
398	〃	〃	14.6			外面タタキ、内面ヘラケズリ	灰白色	0.5～2㎜の砂粒	
399	〃	〃	14.6			外面タタキ後ナデ、内面ヘラケズリ	灰白色	0.5～1㎜の砂粒	
400	〃	〃	15.6	4.7		外面タタキ後ナデ、内面ヘラケズリ	暗灰黄色	0.5～2㎜の砂粒	
401	弥生土器	高杯	15.4			外面ヘラミガキ、内面ヘラミガキ	灰黄褐色	1～2㎜の砂粒	
402	土師器	〃	20.0			外面ヘラケズリ後ハケメ、内面ヘラミガキ	橙色	0.5～2㎜の砂粒	
403	〃	〃	20.4			外面ハケメ後ナデ、内面ハケメ後ナデ	灰黄褐色	1～2㎜の砂粒	
404	弥生土器	鉢	14.8	5.7		外面ハケメ後ナデ、内面ハケメ後ミガキ	灰白色	0.5～2㎜の砂粒	
405	〃	〃	13.8			外面ミガキ、内面ナデ	橙色	0.5㎜以下の砂粒	
406	〃	〃	14.7			外面ミガキ、内面ケズリ	橙色	0.5～2㎜の砂粒	
407	〃	〃	14.7			外面ケズリ後ミガキ、内面ハケメ後ミガキ	橙色	0.5～2㎜の砂粒	
408	〃	〃	40.4			外面ナデ、内面ヨコハケ	灰黄褐色	1～2㎜の砂粒	
409	〃	壺	14.3				灰白色	1～2.5㎜の砂粒（角セン石）	
410	〃	〃	17.3			外面ヨコナデ、口縁部に3条の沈線、内面ナデ	灰白色	0.5～1㎜の砂粒（角セン石）	
411	〃	〃	20.2			外面ヨコナデ、口縁部に3条の沈線、内面ヘラケズリ	灰白色	2～5㎜の砂粒（金雲母）	
412	〃	〃	19.4			外面ヨコナデ、口縁部に沈線、内面ヘラケズリ	灰白色	3～5㎜の砂粒（金雲母）	
413	〃	〃	13.0			外面ヨコナデ、内面ヘラケズリ	灰褐色	1～2㎜の砂粒（金雲母、角セン石）	
414	〃	〃	13.4			外面タテハケ、内面ヘラケズリ	灰黄褐色	0.5～1㎜の砂粒（角セン石）	
415	〃	甕	17.6			外面ヨコナデ、内面ヘラケズリ	灰白色	1～3.5㎜の砂粒	
416	〃	〃	15.0			調整不明、口縁部に沈線？	褐白色	0.5～2㎜の砂粒（金雲母、角セン石）	
417	〃	〃	12.6			外面タテハケ、口縁部に2条の沈線、内面ヘラケズリ	灰白色	1～3㎜の砂粒	
418	〃	〃	14.0			調整不明、口縁部に2条の沈線	灰白色	0.5～2.5㎜の砂粒（金雲母、角セン石）	
419	〃	〃	12.6			外面ヨコナデ、口縁部に2条の沈線、内面ケズリ	淡黄色	1㎜前後の砂粒（角セン石）	
420	〃	〃	13.8			外面タテハケ、口縁部に4条の沈線、内面ヘラケズリ	橙色	1㎜前後の砂粒（角セン石）	
421	〃	〃	15.0			外面タテハケ、口縁部に3条の沈線、内面ヘラケズリ	淡橙色	0.5～2.5㎜の砂粒	
422	〃	〃	14.0			外面ヨコナデ、口縁部に2条の沈線、内面ヘラケズリ	淡橙色	0.5～1㎜の砂粒	
423	〃	〃	14.6			内面ヘラケズリ	灰白色	1～2㎜の砂粒（角セン石）	
424		〃	13.0			外面ナデ、口縁部に沈線？、内面ヘラケズリ	にぶい黄橙色	1～3㎜の砂粒	
425	〃	〃	11.9			外面ヨコナデ、口縁部に沈線？、内面ヘラケズリ	灰白色	0.5～1㎜の砂粒（角セン石）	
426	〃	〃	7.5			外面ヘラミガキ、内面ヘラケズリ	灰白色	0.5～2㎜の砂粒（角セン石）	
427	土師器	〃	13.0			外面タテハケ？口縁部に8条の沈線、内面ヘラケズリ	灰白色	0.5～2㎜の砂粒（角セン石）	
428	〃	〃	13.0			外面タテハケ、口縁部に7条の沈線、内面ヘラケズリ	明褐灰色	2～3㎜の砂粒（金雲母）	
429	弥生土器	鉢	12.1			外面ヘラミガキ？、内面ヨコハケ	灰白色	1㎜前後の砂粒（角セン石）	
430	〃	〃	13.6			外面ナデ、内面ヨコハケ後タテハケ	明褐灰色	1～2㎜の砂粒	
431	〃	〃	13.6			外面ヘラミガキ、内面タテハケ	灰白色	0.5～3㎜の砂粒（金雲母、角セン石）	
432	〃	高杯	18.1			外面ナデ丹塗り、内面ヘラミガキ	橙色	1～2㎜の砂粒（金雲母、角セン石）	
433	〃	〃	23.4			外面ヘラミガキ、口縁部に3条の沈線、内面ナデ	淡橙色	0.5～2㎜の砂粒	
434	〃	〃	22.5			内面ヘラミガキ	橙色	1～3㎜の砂粒（角セン石、金雲母）	
435	須恵器	壺	12.0		16.8	外面平行タタキのち体部上半を螺旋状に沈線。内面ハケ状工具のちナデ。	暗青灰色	0.5～3.0㎜の砂粒を多く含む	
436	〃	甕	15.8		32.6	口縁部外反し、端部上下に肥厚。外面タタキ状圧痕。内面オサエ、ナデ。	灰色	2.0㎜以下の砂粒を含む	
437	〃	壺	11.2			口縁部直線的斜上方に立ち上がる。内外面ヨコナデ。	暗灰色	1.0㎜以下の砂粒を含む	
438	〃	〃				頸部に突帯、波状文。	暗黒灰色	1.5～1.0㎜の砂粒を多く含む	焼成不良
439	〃	把手付	9.5			口縁部細くおさめる。体部2条の突線。板状の把手。透し5ヶ所。	暗灰色	2.0㎜以下の砂粒を多く含む	

挿図番号	種別	器種	法量（cm）			形態・手法の特徴	色調	胎土	備考
			口径	底径	器高				
440	須恵器	高杯	16.1	10.8	12.5	脚端部上下の肥厚。脚裾部に突線。	暗茶灰褐色	1.0mm以下の砂粒を含む	
441	〃	甕				外面平行タタキ、内面無文当具（年輪）、ヨコナデ。	暗灰色	1.0mm以下の砂粒を少し含む	内面に指先2本の指紋、指紋の色は外面と同じ。外面に顔料か。
442	〃	器台転用鉢	43.0		20.9	口縁部大きく外反、端部上下に肥厚。外面突線間に波状文。体部下半平行タタキのち羽状に刺突列点文、波状文。	黒灰色	密白色微砂粒を少し含む（堅緻）	脚部破損後に杯部だけ転用。杯部破損部接合に漆を使用。
443	〃	甕				外面斜格子タタキのちヨコナデ。内面ハケ状工具による調整、ナデ。	暗灰色	0.5mm以下の砂粒を少量含む（精良、堅緻）	焼成良好。
444	〃	〃				外面タテ方向の平行タタキのちナデ。内面無文当具（年輪）のちナデ。	暗灰色	1.0mm以下の砂粒を含む	
445	〃	〃				〃	〃	1.0mm以下の砂粒を少し含む	910と同一個体
446	〃	鉢	2.2		4.2	内外面ナデ。底部ヘラケズリ、ナデ。	淡黄褐色	0.5mm以下の砂粒を含む（精良）	完形 黒斑1ケ所。
447	土師器	〃	2.2	3.0	5.0	内外面オサエ、ナデ。	淡褐色	0.5mm以下の砂粒を含む	黒斑1ケ所。
448	〃	〃	3.2		4.7	〃	暗灰黄色	2.0mm以下の砂粒を含む	〃
449	〃	〃	4.6		3.6	〃	暗灰褐色	1.5mm以下の砂粒を含む	
450	〃	〃	5.8		3.4	口縁部オサエ、ナデ。内面ユビナデアゲ、ナデ。	灰褐色	0.5mm以下の砂粒を含む	
451	〃	〃	6.4		3.4	内外面ナデ。	淡黄褐色	0.5mm以下の砂粒を少し含む（精良）	完形 黒斑1ケ所。
452	〃	〃	4.8		5.0	口縁部オサエ、ヨコナデ。内外面オサエ、ナデ。	淡黄灰褐色	0.5mm以下の砂粒を含む	
453	〃	〃	5.6		4.4	内外面オサエ、ナデ。	淡黄灰色	1.0mm以下の砂粒を含む	完形 黒斑1ケ所
454	〃	〃	4.0		5.0	外面ナデ。内面ユビナデ。	黒褐色	1.0mm以下の砂粒を多く含む	
455	〃	〃	5.6		4.9	内外面ユビナデアゲ。	淡黄褐色	1.5mm以下の砂粒を含む	完形 黒斑1ケ所
456	〃	〃	5.4		5.1	内外面オサエ、ナデ。	灰褐色	1.0mm以下の砂粒を含む	
457	〃	〃	5.6		4.2	〃	淡赤褐色	2.0mm以下の砂粒を含む	
458	〃	〃	5.9		5.0	口縁部オサエ、ナデ。外面ナデ。内面指ナデ。	灰褐色	1.5mm以下の砂粒を含む	完形 黒斑1ケ所
459	〃	〃	6.0		4.8	口縁部ヨコナデ。外面オサエ、ナデ。内面ユビナデアゲ。	乳黄褐色	1.5mm以下の砂粒を含む	黒斑1ケ所
460	〃	〃	5.8		5.7	口縁部オサエ、ナデ。外面ナデ。内面ユビナデアゲ。	淡黄白色	0.5mm以下の砂粒を含む	〃
461	〃	〃	4.8		5.8	〃	淡褐色	1.0mm以下の砂粒を含む	完形
462	〃	〃	7.4		5.3	〃	淡灰褐色	1.0mm以下の砂粒を含む	〃
463	〃	〃	7.4		5.0	外面オサエ、ナデ。内面オサエ、ナデ。	淡褐色	1.0mm以下の砂粒多し	黒斑1ケ所
464	〃	〃	7.2		5.5	体部円孔2ケ所。小円孔焼成前、大円孔焼成後。	淡灰褐色	1.5mm以下の砂粒を多く含む	完形 黒斑1ケ所
465	〃		7.0		3.8	外面ナデ。内面ユビナデアゲ。	黄灰色	0.5mm以下の砂粒を含む	完形
466	〃		7.2		4.4	〃	灰褐色	0.5mm以下の砂粒を含む	黒斑1ケ所
467	〃	鉢	9.2		4.7	〃	灰白色	0.5mm～4.0mmの砂粒を含む	
468	〃	鉢	8.0	4.5	5.0	平底。口縁部ヨコナデ。外面オサエ、ナデ。内面ユビナデアゲ。	淡褐色	2.0mm以下の砂粒を含む	
469	〃	〃	7.0		5.9	口縁部外面オサエ、ナデ。内面ユビナデアゲ。	灰褐色	1.0mm以下の砂粒を含む	完形
470	〃	〃	7.5		6.5	外面ナデ。口縁部内面ハケ状工具、ナデ。	淡黄白色	3.0mm以下の砂粒を多く含む	黒斑1ケ所。外面煤付着。
471	〃	小壺				外面上半ハケメのちナデ。下半手持ちのヘラケズリ。内面ユビナデアゲ。	淡黄褐色	2.0mm以下の砂粒を多く含む	黒斑1ケ所。
472	〃	〃	7.0		6.7	外面頸部に一部ハケメ。外面下半オサエ、ナデ。内面ユビナデアゲ。平底気味。	淡黄褐色	2.0mm以下の砂粒を多く含む	
473	〃	小鉢	9.4		6.7	口縁部外面オサエ、ヨコナデ。口縁部内面ハケ状工具のちヨコナデ。内面ハケ状工具のちナデ。	淡黄灰褐色	0.5mm以下の砂粒を含む	

挿図番号	種別	器種	法量（cm）			形態・手法の特徴	色調	胎土	備考
			口径	底径	器高				
474	土師器	小壺	8.6		7.5	外面細かいハケメ、オサエ、ナデ。口縁部内面ハケメ、ナデ。内面ナデ。	淡灰褐色	1.5㎜以下の砂粒を多く含む	黒斑1ケ所。
475	〃	〃	8.4		7.9	口縁部オサエ、ヨコナデ。	黄橙色	0.5㎜～2.0㎜の砂粒を含む	
476	〃	〃	7.6		8.0	口縁部オサエ、ヨコナデ。内面上半オサエ、ナデ。下半ヘラケズリ。	淡黄灰色	1.0㎜以下の砂粒を含む	
477	〃	〃	4.6		6.8	口縁部ヨコナデ。外面ハケメのちナデ。	灰褐色	2.0㎜以下の砂粒を含む	黒斑1ケ所。
478	〃	〃	6.8			口縁部ヨコナデ。内面ユビナデアゲ。	灰黄褐色	0.5㎜～3.0㎜の砂粒を含む	
479	〃	〃	8.5		8.2	口縁部オサエ、ヨコナデ。内外面ハケ状工具による調整ならナデ。	淡黄褐色	2.0㎜以下の砂粒を含む	
480	〃	〃	7.6		8.3	口縁部内面ハケ状工具、ナデ。内面ユビナデアゲ。	淡茶褐色	1.5㎜以下の砂粒を含む	
481	〃	〃	8.0		9.0	〃	淡茶灰褐色	1.0㎜以下の砂粒を含む	黒斑2ケ所。
482	〃	壺	9.0		8.1	外面頸部～肩部タタキ。内面ユビナデアゲ。	茶褐色	1.5㎜以下の砂粒を含む	完形。 煤付着。
483	〃	小壺	6.8			外面ハケメのちナデ、ヨコナデ。口縁内面ハケ状工具のちヨコナデ。内面オサエ、ヘラケズリ。	灰黄色	0.5㎜～2.0㎜の砂粒を含む	
484	〃	甕	9.2			口縁部、外面ハケメ。内面オサエ、ナデ。	黄灰色	1.0㎜以下の砂粒を含む	
485	〃	〃	9.4			外面ハケメ、ナデ。内面下半ヘラケズリ。	淡灰色	2.0㎜以下の砂粒を含む	
486	〃	(台付)		6.0		脚裾部内湾する。	灰褐色	0.5㎜以下の砂粒を含む	
487	〃	底部		4.0		平底。内面ユビナデアゲ。外面ナデ。	淡褐色	2.0㎜以下の砂粒を含む	
488	〃	小壺		6.4		平底。外面ナデ。内面ユビナデアゲ。	白褐色	1.0㎜以下の砂粒を含む	黒斑1ケ所。
489	〃	〃	6.0		8.5	口縁部ハケメのちヨコナデ。外面ハケメのちナデ。内面オサエ、ナデ。	淡黄灰色	1.5㎜以下の砂粒を含む	
490	〃	〃	6.0		7.5	口縁部内面ハケメのちヨコナデ。底部内外ヘラケズリ、ナデ。体部円孔1ケ所。（焼成前）	黄灰褐色	1㎜以下の砂粒を含む	
491	〃	〃	7.6		8.3	外面細かいハケメ、ナデ。内面ユビナデアゲ、ナデ。	淡褐色	2.0㎜以下の砂粒を多く含む	黒斑1ケ所。
492	〃	〃	7.7		8.2	外面体部、口縁部内鍔ハケメ、ヨコナデ、ナデ。内面オサエ、ユビナデアゲ。	淡褐色	1.0㎜以下の砂粒を含む	〃
493	〃	〃	7.8		8.6	内面オサエ、ユビナデアゲ。	乳褐色	2.0㎜以下の砂粒を含む	黒斑2ケ所。
494	〃		7.8		8.2	外面口縁～肩部ハケメ。口縁部内面ハケメ、ヨコナデ。内面ユビナデアゲ。	淡灰茶褐色	1.0㎜以下の砂粒を多く含む	黒斑1ケ所。 木葉痕（底部）
495	〃	小壺	7.6		9.8	口縁部ヨコナデ、外面ていねいなナデ。内面ヘラケズリ。	乳白色	2.5㎜以下の砂粒を含む	完形。
496	〃	〃	7.3		9.6	外面上半ハケメ、ヨコナデ。体部焼成前円孔1ケ所。	淡黄褐色	2.0㎜以下の砂粒を含む	
497	〃	〃	8.0		10.3	外面ハケメ、ナデ。内面ユビナデアゲ、ナデ。	灰白色	0.5㎜～3.0㎜の砂粒を含む	
498	〃	壺	9.5			内面オサエ、ユビナデアゲ。	黄橙色	0.5㎜～2.0㎜の砂粒を含む	
499	〃	〃	9.2		10.7	口縁部ヨコナデ。外面ナデ。内面オサエ、ユビナデアゲ。	乳褐色	2.0㎜以下の砂粒を含む	完形。 黒斑1ケ所。
500	〃	〃				内面上半オサエ、ナデ。下半オサエ、ヘラケズリ。	黄橙色	0.2㎜～0.5㎜の砂粒を含む	黒斑1ケ所。
501	〃	甕	9.8		8.8	外面ナデ、底部ヘラケズリ。口縁内面～体部上半ハケメ。	乳褐色	2.0㎜以下の砂粒を含む	外面煤付着。
502	〃	〃	9.4		10.8	口縁部内面ハケメのちヨコナデ。外面頸部～底部ハケメ、ナデ。内面ヘラケズリ。	〃	2.0㎜以下の砂粒多し	完形。 黒斑1ケ所。
503	〃	〃	9.1		11.4	外面体部タタキのちハケメ。口縁部内面ハケメのちヨコナデ。内面ユビナデアゲ。	淡褐色	1.0㎜以下の砂粒を含む	完形。 黒斑2ケ所。
504	〃	〃	9.2		12.4	面長の体部。口縁部、外面ハケメ。内面ヘラケズリ。	黄灰褐色	1.5㎜以下の砂粒を含む	煤付着。
505	〃	〃	10.6		8.6	口縁部、外面体部上半ハケメのちヨコナデ。内面ユビナデアゲ。	淡黄褐色	0.5㎜以下の砂粒を含む	黒斑1ケ所。
506	〃	壺	12.0		9.7	外面頸部から体部上半荒いハケメ。体部下半カゴメ痕。内面ユビナデ。体部下半焼成後の穿孔1ケ所。	淡乳黄褐色	2.0㎜以下の砂粒を含む	
507	〃	甕	10.4			外面ヨコナデ。内面横方向のハケ状工具による調整。	乳褐色	1.5㎜以下の砂粒を多く含む	

挿図番号	種別	器種	法量（cm）			形態・手法の特徴	色調	胎土	備考
			口径	底径	器高				
508	土師器	甕	9.8			長めの口縁部。口縁部ヨコナデ。	淡茶灰褐色	1.0mm以下の砂粒を含む	
509	〃	〃	10.6			口縁部内面ハケメのちヨコナデ。内面ヘラケズリ。	浅黄橙色	0.5mm～2.0mmの砂粒を含む	
510	〃	〃	9.6			口縁部ヨコナデ。	淡灰褐色	0.5mm以下の砂粒を含む	
511	〃	〃	9.0			口縁部内面ハケメのちヨコナデ。外面頸部ハケメ。	淡茶灰褐色	1.0mm以下の砂粒を含む	外面煤付着。
512	〃	甕	10.9			口縁部内面、内面上半ハケメ、オサエ。内面下半丸味のあるハケ状工具、ナデ。	灰黄褐色	0.5mm～2.0mmの砂粒を含む	
513	〃	〃	11.5		11.1	やや平底気味。外面、口縁部内面ハケメ。内面ユビナデアゲ、ナデ。外面体部に粘土紐痕。	淡褐色	1.0mm以下の砂粒を含む	完形。
514	〃	壺	8.6		12.9	外面荒いハケメ、ナデ、ヨコナデ。内面ユビナデアゲ、ナデ。	淡茶褐色	1.5mm以下の砂粒を含む	黒斑1ケ所。 外面煤付着。
515	〃	甕	11.3		10.7	外面ハケメ、ナデ。ナデヘラケズリ。	灰白色	0.5mm～4.0mmの砂粒を含む	
516	〃	〃	9.0		11.7	〃	淡褐色	1.0mm以下の砂粒を含む	完形。 黒斑2ケ所。
517	〃	〃	11.0			口縁部ハケメのちヨコナデ。外面ハケメのちナデ。内面上半ユビナデアゲ。下半ヘラケズリ。	淡黄灰褐色	2.0mm以下の砂粒を含む	黒斑1ケ所。 外面煤付着。
518	〃	〃	10.8		11.1	外面ハケメ。内面ヘラケズリ、オサエ。	淡灰褐色	3.0mm以下の砂粒を含む	外面煤付着。
519	〃	〃	9.8			口縁端部つまみだす。外面ハケメ、ナデ。内面上半ユビナデアゲ。下半ヘラケズリ。	淡褐色	1.0mm以下の砂粒を含む	
520	〃	〃	10.2		12.8	平底気味。外面ナデ。内面ヨコナデ。内面体部下半ハケ状工具、オサエ。	淡灰黄褐色	3.0mm以下の砂粒を多く含む	
521	〃	壺	10.0		12.4	内面オサエ、ユビナデアゲ。	灰白色	0.5mm～3.0mmの砂粒を含む	
522	〃	〃	9.7		12.6	外面肩部細かいハケメ、ナデ、ヨコナデ。外面肩部下ていねいなナデ。内面オサエ、ユビナデアゲ。	淡褐色	2.0mm以下の砂粒を含む	完形。 黒斑1ケ所。
523	〃	〃	10.0			口縁部ハケメのちヨコナデ。外面ハケメのちナデ。内面ハケ状工具。	灰白色	0.5mm～3.0mmの砂粒を含む	黒斑1ケ所。
524	〃	〃	10.6		14.7	外面ハケメのちていねいなナデ。内面ヘラケズリ。	〃	1.0mm以下の砂粒を含む	黒斑2ケ所。
525	〃	〃	10.8		14.7	〃	灰黄褐色	1.0mm以下の砂粒を含む	黒斑1ケ所。
526	〃	〃	10.4			外面ハケメのちナデ。内面肩部下ヘラケズリ。	淡茶灰褐色	4.0mm以下の砂を含む	外面煤付着。
527	〃	〃	9.8		13.7	口縁部ハケメのちヨコナデ。外面ハケメのちナデ。内面オサエ、ハケメ、ナデ。	灰白色	0.5mm～4.0mmの砂粒を含む	
528	〃	〃	11		14.1	口縁部ハケメのちヨコナデ。外面ハケメのちナデ。内面オサエ、ナデ。	灰白色	0.5mm～6.0mmの砂粒を含む	完形。
529	〃	〃				外面ハケ状工具のちナデ。内面上半ユビナデアゲ、下半ヘラケズリ。	浅黄色	0.2mm～3.0mmの砂粒を含む	外面煤付着。
530	〃	甕	12.0			内外面荒いハケメ、ナデ、ヨコナデ。	灰褐色	1.5mm以下の砂粒を含む	〃
531	〃	〃	12.6		13.4	内外面ハケメのちナデ、ヨコナデ。	淡黄灰褐色	2.0mm以下の砂粒を含む	〃
532	〃	〃	11.6			上方に立ち上がる口縁部。外面、口縁部内面ハケメ、内面オサエ、ユビナデアゲ。	淡黄灰色	1.0mm以下の砂粒を含む	
533	〃	〃	10.8		16.0	外面ハケメのちナデ。内面ヘラケズリ。	淡乳褐色	0.3～0.5mmの砂粒を多く含む	完形。 外面煤付着。
534	〃	壺	11.2			外面荒いハケメ、ナデ。内面上半ユビナデアゲ、下半ヘラケズリ。	淡茶灰色	1.0mm以下の砂粒を含む	
535	〃	〃	11.0			口縁部内傾気味に上方に立ち上がる。内面ハケ状工具、オサエ、ナデ。	灰褐色	1.5mm以下の砂粒を含む	
536	〃	甕	13.4	7.8	14.0	平底。内外面ハケ状工具のちナデ。	淡黄褐色	1.0mm以下の砂粒を含む	黒斑1ケ所。
537	〃	〃	10.6		15.0	平底。外面体部上半横方向にハケ状工具、ナデ、下半タテ方向のハケ状工具、ナデ。内面オサエ、ナデ。	淡赤褐色	1.0mm以下の砂粒を含む	
538	〃	〃	12.2		15.8	胴長の体部、平底気味。外面ハケメのちナデ。外面底部カゴメ痕。内面オサエ、ユビナデアゲ、ナデ。	淡褐色	3.0mm以下の砂粒を含む	黒斑1ケ所。
539	〃	底部				外面底部カゴメ痕、木葉底。内面オサエ、ヘラケズリ。	淡灰褐色	1.5mm以下の砂粒を含む	
540	〃	底部				外面ハケメ、ナデ、木葉底。内面ハケ状工具、ナデ。	灰褐色	0.5mm以下の砂粒を含む	
541	〃	〃				外面底部オサエ、ナデ、カゴメ痕。内面底部ヘラケズリ。	淡灰褐色	1.5mm以下の砂粒を含む	

挿図番号	種別	器種	法量（cm）			形態・手法の特徴	色調	胎土	備考
			口径	底径	器高				
542	土師器	壺	10.9			二重口縁。頸部から外傾して立ち上がり、さらに斜上方にのびる。口縁部内面ハケメのちヨコナデ。	灰白色	0.5㎜～2.0㎜の砂粒を少し含む	
543	〃	〃	13.8			二重口縁。口縁部ていねいなヨコナデ。内面粘土紐痕。	淡黄灰色	1.0㎜以下の砂粒を含む	
544	〃	〃	18.2			頸部から「く」字状に開き、さらに外反する口縁部。口縁端部上下の肥厚。内面ヘラケズリ。	淡黄褐色	2.0㎜以下の砂粒を含む	
545	〃	〃	21.4		39.8	二重口縁、口縁端部外側につまみだす。口縁部、外面ハケメ。	灰白色	1.0㎜前後の砂粒を含む	
546	〃	〃	18.4		21.6	口縁部大きく外反する。口縁部中位に突線状。口縁部内面ハケメのちヨコナデ。外面ハケメ、ナデ。外面底部カゴメ痕。	淡乳褐色	1.0㎜以下の砂粒を含む	
547	〃	〃	14.0			二重口縁。外面ハケメ、ヨコナデ。内面ヘラケズリ。	淡黄灰褐色	4.0㎜以下の砂粒を多く含む（シャーモット）	
548	〃	〃	17.4			口縁部ゆるやかに外反し、さらに斜上方にのびる。内面ヘラケズリ。	淡灰褐色	2.0㎜以下の砂粒を含む	
549	〃	鉢	16.2			口縁部肥厚。内外面ハケメ。	淡黄灰褐色	1.5㎜以下の砂粒を含む	
550	〃	壺	16.4			口縁部器壁厚い。口縁部内面ハケメのちヨコナデ。	淡灰褐色	1.0㎜以下の砂粒を含む	
551	〃	甕	14.0			頸部から外反し、さらに上方に立ち上がる口縁部口縁端部肥厚し丸くおさめる。	淡黄灰色	1.5㎜以下の砂粒を含む	
552	〃	〃	17.0			口縁端部外面２条の凹線。外面体部上半細かいハケメ。	淡黄灰色	2㎜以下の砂粒を含む（10㎜の石も含む）	
553	〃	〃	20.6			頸部から外反し、さらにゆるく外反する。端部外方向に肥厚。	淡乳褐色	2.0㎜以下の砂粒を含む	
554	〃	壺	15.2			頸部から外反し、さらに上方にのびる口縁。口縁端部肥厚。体部下半にカゴメ線痕。	明褐灰色	1.0～2.0㎜の砂粒を含む	焼成良好
555	〃	甕	15.4			頸部から短かく外反し、さらに斜上方に立ち上がる。口縁端部内側に肥厚。内面粘土紐痕。	淡茶褐色	1.0㎜以下の砂粒を含む	焼成良好（墳質気味）
556	〃	〃	14.8			「く」の字口縁。端部肥厚。	淡黄灰色	1.5㎜以下の砂粒を含む	
557	〃	〃	16.0		24.0	「く」の字口縁。端部内外に肥厚。外面ハケメ。内面ハケメ、ナデ、粘土紐痕。	にぶい黄橙色	1.0～2.0㎜の砂粒を含む（金雲母）	黒斑１ヶ所。
558	〃	壺	15.1		28.8	頸部から外反し、さらに外反する口縁。内外面ハケメ。	灰白色	1.0～2.0㎜の砂粒を多く含む（赤色土粒、雲母）	
559	〃	〃	15.8			端部丸くおさめる。外面口縁～肩部タテ方向のタタキのちヨコナデ。	淡黄灰褐色	3.0㎜以下の砂粒を含む	
560	〃	甕	15.2			頸部から短く外反し、くせをもって斜上方に立ち上がる。	淡黄灰色	0.5㎜以下の砂粒を含む	
561	〃	壺	14.4			「く」の字口縁、口縁部肥厚。口縁部、外面ハケメ。	淡灰褐色	1.0㎜以下の砂粒を含む	
562	〃	甕	17.2			外面ハケメのちヨコナデ。内面ヘラケズリ。	淡茶灰色	1.5㎜以下の砂粒を含む	
563	〃	〃	15.2			口縁部、外面ハケメ。内面ヘラケズリ。	淡黄灰色	1.0㎜以下の砂粒を含む	外面煤付着。
564	〃	〃	14.4			「く」の字口縁、端部外方向に肥厚。内面粘土紐痕。	淡茶灰色	1.0㎜以下の砂粒を含む	〃
565	〃	〃	15.2			口縁部、外面荒いハケメ。内面ヘラケズリ。	白褐色	1.5㎜以下の砂粒を含む	〃
566	〃	〃	15.0			口縁部、外面ハケメ、ナデ、ヨコナデ。内面ヘラケズリ。	淡黄灰褐色	0.5㎜以下の砂粒を含む（雲母）	〃
567	〃	〃	15.0			「く」の字口縁。端部内側に肥厚。外面ハケメ。	淡黄褐色	2.5㎜以下の砂粒を多く含む	黒斑１ヶ所。
568	〃	〃	16.2			内面上半ユビナデアゲ、下半ヘラケズリ。	白灰褐色	1.0㎜以下の砂粒を含む	
569	〃	〃	18.6			口縁部、外面ハケメ。内面上部オサエナデ、下部ヘラケズリ。	淡灰黄褐色	1.5㎜以下の砂粒を含む	黒斑１ヶ所。
570	〃	〃	17.6			「く」の字口縁。外面ハケメのちナデ。内面ヘラケズリ。	淡白灰褐色	1.0㎜以下の砂粒を含む	
571	〃	壺	16.4		30.5	口縁部ハケメのちヨコナデ。内面肩部ユビナデアゲ。	淡灰褐色	1.5㎜以下の砂粒を含む	外面煤付着。
572	〃	〃	15.0		30.0	口縁部ハケメのちヨコナデ。外面ハケメ。	淡褐色	5.0㎜以下の砂粒を多く含む	黒斑１ヶ所。
573	〃	甕	12.8		19.8	外面ハケメのちナデ。内面ヘラケズリ。	淡黄灰褐色	1.0㎜以下の砂粒を含む（赤色粒）	黒斑２ヶ所。外面下半煤付着。
574	〃	〃	16.6		25.6	口縁内側、外面荒いハケメのちナデ、ヨコナデ。	淡黄褐色	3.0㎜以下の砂粒を含む	〃
575	〃	〃	15.9		23.3	外面ハケメ。内面ヘラケズリ。	灰白色	2.0㎜前後の砂粒を含む（雲母）	完形。黒斑ｉヶ所。
576	〃	〃	15.6			口縁部ハケ状工具のちヨコナデ。	淡黄褐色	3.0㎜以下の砂粒を含む	外面煤付着。
577	〃	〃	17.6		28.0	口縁部、外面ハケメ、ナデ、ヨコナデ。	淡褐色	1.5㎜以下の砂粒を含む	完形。

挿図番号	種別	器種	法量（cm）			形態・手法の特徴	色調	胎土	備考
			口径	底径	器高				
578	土師器	甕	15.2		27.5	外面ハケメ、内面ヘラケズリ。	黄橙色	1.0～2.0㎜の砂粒を含む	
579	〃	〃	15.6		23.4	「く」の字口縁。口縁部肥厚。端面をもつ。外面ハケメ、ナデ。内面ヘラケズリ。	淡黄灰褐色	1.0㎜以下の砂粒を含む	黒斑小さく数ケ所。
580	〃	〃	15.4		20.6	外面ハケメ、ナデ。内面ヘラケズリ。外面体部下半にカゴメ痕。	にぶい橙色	1.0～2.0㎜（長石、石英、雲母）と1.0～3.0㎜位の（石英、赤色土粒）を含む	黒斑2ケ所。
581	〃	〃	13.9		21.6	外面ハケメ、ナデ。内面上部ユビナデアゲ、下半ヘラケズリ。	灰黄色	0.2㎜～5㎜のやや粒の大きい石英粒、やや多く他砂粒含	外面煤付着。底部に3ケ所支脚使用痕。
582	〃	〃	12.4			口縁部内面、外面ハケメ。	淡黄褐色	2.0㎜以下の砂粒を含む	外面煤付着。
583	〃	〃	14.2			口縁部ハケメのちヨコナデ。内面ヘラケズリ。	灰褐色	1.5㎜以下の砂粒を含む	
584	〃	〃	15.4			口縁部、外面ハケメ。	淡黄灰褐色	1.0㎜以下の砂粒を含む	
585	〃	〃	12.0			内面上部ユビナデアゲ、下半ヘラケズリ。	淡黄灰褐色	1.5㎜以下の砂粒を含む（雲母）	
586	〃	〃	12.1			外面全体に荒いハケメ、のち体部下半細かいハケメ。	〃	1.5㎜以下の砂粒を含む	外面煤付着。
587	〃	〃	16.0			口縁部、外面ハケメ。内面ヘラケズリ。	淡黄褐色	2.0㎜以下の砂粒を含む（雲母）	
588	〃	〃	15.2			内面上半ハケ状工具、ナデ、下半ヘラケズリ。	淡黄灰褐色	1.0㎜以下の砂粒を含む	黒斑
589	〃	〃	17.2			大きく外反する口縁。口縁部内面、外面ハケメ。	淡黄褐色	2.0㎜以下の砂粒を多く含む	
590	〃	〃	17.4			「く」の字口縁。内傾する端面をもつ。	淡灰色	3.0㎜以下の砂粒を多く含む（黒色粒多し）	
591	〃	鉢	11.8		7.3	短かく屈曲する口縁。	灰白色	0.5～2.0㎜の砂粒を少し含む	
592	〃	〃	13.0	4.2	8.5	平底。内面オサエ、ユビナデアゲ、ハケメのちナデ。	淡黄灰色	〃	木葉底。
593	〃	〃	12.0		5.6	内外面ハケ状工具のちナデ。	灰褐色	1.5㎜以下の砂粒を含む	黒斑1ケ所。
594	〃	〃	12.6			内外面ハケメのちナデ。	淡黄灰色	1.0㎜以下の砂粒を含む（雲母）	
595	〃	〃	13.4		7.8	平底気味。内面ユビナデアゲ。	褐色	1.0㎜以下の砂粒を含む	
596	〃	〃	13.2		6.0	外面　荒いハケメのちナデ。 内面　オサエ、ハケメのちヨコナデ。	淡灰褐色	2.0㎜以下の砂粒を多く含む （赤色粒）ザラメ	
597	〃	〃	11.0			内外面ハケ状工具のちナデ。	淡茶灰褐色	2.0㎜以下の砂粒を含む	外面煤付着。
598	〃	〃	11.4		4.2	外面　オサエ、ナデ、ヨコナデ。内面　ハケメのちヨコナデ。	淡褐色	0.5㎜以下の砂粒を含む	
599	〃	〃	11.6		5.8	口縁部ヨコナデ。外面ハケメのちナデ。内面ユビナデアゲ、ナデ。	淡茶褐色	1.5㎜以下の砂粒を含む	木葉底。
600	〃	〃		4.0		粘土紐巻き上げ痕（幅約2㎝、右回り）	乳白色	1.0㎜以下の砂粒を含む	木葉底。
601	韓式系土器	平底鉢	10.3	7.2	10.7	短かく「く」の字に屈曲する口縁。外面体部、底部格子タタキのちタテ方向のナデ。内面オサエ、不定方向のナデ。	暗茶灰色	1.5㎜以下の砂粒を含む	外面煤付着。
602	土師器	高杯形器台	20.5			器形は須恵器的。内外面ヨコナデ。底部内外面ナデ。脚部との接合面ヘラによる切り込み（須恵器的）	淡橙色	0.5～3.0㎜の砂粒を多く含む	
603	〃	高杯	16.2			形態、手法、須恵器的。内外面ヨコナデ。	浅黄色	0.5～2.0㎜の砂粒を含む（中）	
604	〃	〃	17	11.7	13.5	形態、手法、須恵器的。脚柱部内外面、杯部底部ナデ、他ヨコナデ。	淡黄色	0.5～3.0㎜の砂粒を多く含む	完形。
605	〃	〃				形態、手法、須恵器的。脚柱部ナデ。	黄褐色	1.5㎜以下の砂粒を多く含む	217と同一個体。焼成（堵質）
606	〃	〃		10.0		脚裾端部肥厚。脚裾部に稜線。内外面ヨコナデ。	〃	1.5㎜以下の砂粒を多く含む	
607	〃	〃				脚裾部に稜線。	白褐色	1.0㎜以下の砂粒を含む（雲母）	
608	〃	〃		12.2		内外面ヨコナデ。脚裾部に稜線。	淡黄褐色	1.5㎜以下の砂粒を多く含む	
609	〃	〃	15.0			脚部との接合面にヘラによる切り込み（須恵器的）	淡橙色	0.5～8.0㎜の砂粒を多く含む	
610	〃	〃	15.4			脚部との接合面にヘラによる切り込み。	浅黄橙色	0.5～2.0㎜の砂粒を多く含む	
611	〃	〃				脚部との接合面にヘラによる切り込み。	淡茶褐色	1.0㎜以下の砂粒を含む（赤色粒）	
612	〃	〃	15.7			内外面ヨコナデ。	浅黄橙色	0.5～3.0㎜の砂粒を多く含む	焼成良好（堵質）
613	〃	〃	13.8			口縁部短かく外反。内外面ハケメのちナデ。	浅黄橙色	0.5～5.0㎜の砂粒を多く含む	
614	〃	〃	14.4			口縁部短かく外反、口縁部ヨコナデ、内外面ナデ。	黄橙色	0.5～3.0㎜の砂粒を多く含む	
615	〃	〃	16.0			杯部稜線甘い。短脚。杯部外面下半、脚部ハケメのちナデ。	灰白色	0.5～2.0㎜の砂粒を多く含む（雲母）	

挿図番号	種別	器種	法量（cm）			形態・手法の特徴	色調	胎土	備考
			口径	底径	器高				
616	土師器	高杯	12.5	8.5	10.3	小型。短脚。	灰白色	2.0㎜以下の砂粒を多く含む（雲母）	
617	〃	〃	15.4	12.0	12.3	口縁部短かく外反。脚柱部外面ハケメのちヨコナデ。	浅黄橙色	2.0～3.0㎜の砂粒を含む	
618	〃	〃	15.5	10.0	12.2	杯部内湾。杯部内面暗文的ヘラミガキ。脚部３ケ所円孔。	淡橙色	微砂を含む	
619	〃	〃	15.4	10.4	13.3	杯部の稜線甘い。杯部内外面ハケメのちヨコナデ。脚部３ケ所円孔。	にぶい黄橙色	1.0～2.0㎜の長石、石英と4.0～5.0㎜の石英も多く含む	
620	〃	〃	22.0	14.1	16.1	口縁端部屈曲して外方向にのびる。杯部外面ハケメのち暗文的ヘラミガキ。脚部３ケ所円孔。	灰白色	微砂を含む	
621	〃	〃	19.2			口縁端部短かく外反。杯部内面ハケメ。脚部３ケ所円孔。	にぶい橙色	1.0㎜以下の砂粒を多く含む	
622	〃	〃	18.2			杯部内外面ヨコナデ。外面押圧痕連続。内面ハケメ。	赤色	1.0㎜以下の砂粒（雲母）	
623	〃	〃	17.0	11.4	15.1	杯部外面押圧痕連続。脚裾部「ハ」の字に開く。脚部３ケ所円孔。	淡橙色	2.0㎜以下の砂粒と3.0～5.0㎜の礫を多く含む	
624	〃	〃		14.2		杯部外面ハケメのちヨコナデ。脚部３ケ所円孔。	浅黄橙色	1.0～2.0㎜の長石、石英、雲母と3.0㎜ぐらいの石英を含む	焼成良好（堆質）
625	〃	〃	15.8			杯部稜線甘い。内外面ハケメ、ナデ。	灰白色	2.0㎜以下の砂粒を多く含む	
626	〃	〃	14.2			口縁部ヨコナデ。	灰白色	0.5～1.0㎜前後の砂粒（多）	
627	〃	〃	14.5			口縁端部短かく外反。	灰色	1.0㎜以下の砂粒を多く含む	
628	〃	〃	16			口縁端部短かく外傾。	灰白色	0.5～1.0㎜の砂粒を少し含む	
629	〃	〃	14.9			杯部口縁部ヨコナデ。	灰白色	0.5～2.0㎜の砂粒を多く含む	
630	〃	〃	19.2			口縁部短かく外反。	灰白色	2.0㎜以下の砂粒を大変多く含む	
631	〃	〃	22.0			杯部内外面ハケメのちヨコナデ。	灰白色	0.5～1.0㎜の砂粒を少し含む	
632	〃	〃	14.3			〃	橙色	1.0～2.0㎜の砂粒を含む（雲母、赤色粒）	
633	〃	〃				杯部内外面ヨコナデ。脚部内面ヘラケズリ。	黄橙色	1.0㎜以下の砂粒を含む	
634	〃	〃	15.6			杯部内湾。杯部外面荒いハケメのちヨコナデ。	灰白色	0.5～5.0㎜の砂粒を多く含む（雲母）	
635	〃	〃	16.1	12.3	13.5	杯部内面ハケメのちヨコナデ。脚部ハケメのちヨコナデ。	灰白色	0.5㎜以下の砂粒を含む	
636	〃	〃	17.9	10.8	13.3	脚部「ハ」の字に開く。脚部内面ヘラケズリ。	淡赤橙色	1.0㎜以下の砂粒を多く含む	
637	〃	〃	15.3	10.5	13.0	杯部口縁短かく外反。脚柱部から屈曲して脚裾部。	橙色	2㎜以下の砂粒を多く含む	
638	〃	〃	15.2	12.0	15.2	杯部口縁短かく外反。杯部内外面ハケメのちヨコナデ。	灰白色	1.0㎜以下の砂粒を多く含む	
639	〃	〃	18.3	13.4	16.5	杯部口縁ゆるやかに外反。	灰白色	0.5～3.0㎜の砂粒を多く含む	
640	〃	〃	13.2	11.4	12.3	杯部内外面ハケメのちヨコナデ。	灰黄褐色	2.0㎜以下の砂粒を多く含む	
641	〃	〃	14.8	11.1	12.3	〃	灰白色	2.0㎜以下の砂粒を多く含む	
642	〃	〃	15.2	10.3	13.0	杯部外面ハケメのちヨコナデ。	灰白色	1.0㎜以下の砂粒を含む（雲母）	
643	〃	〃	16.0			脚部内面ヘラケズリ。	橙色	0.5～3.0㎜の砂粒を多く含む	
644	〃	〃	15.6	11.6	13.5	杯部内面、脚部外面ハケメ。	灰黄色	〃	
645	〃	〃				内面粘土紐痕（杯部接合部から脚裾部に巻き上げ）	淡灰褐色	1.5㎜以下の砂粒を含む	
646	〃	〃		10.6		脚柱部中位に円孔１ケ所。脚柱部内面粘土紐巻き上げ痕。	白褐色	1.5㎜以下の砂粒を含む	
647	〃	〃		10.8		脚柱部細い。脚柱部から屈曲して脚裾部。	浅黄橙色	0.5～3.0㎜の砂粒を多く含む	
648	〃	鉢	24.6	15.2	17.2	平底、底部円孔多数。	灰白色	0.5～3.0㎜の砂粒を多く含む	
649	〃	〃	23.0			外面ヨコナデ。内面ヘラケズリ、ナデ。	黄橙色	〃	
650	〃	〃	20.6	8.3	19.3	口縁端面をもつ。外面タタキのちナデ。底部円孔を連続。	淡黄灰褐色	2.0㎜以下の砂粒を含む	黒斑１ケ所。
651	〃	〃	19.7	11.2	17.4	外面ハケメのちナデ。内面ヘラケズリのちナデ。底部円孔。	灰白色	0.5～1.5㎜の砂粒を多く含む（雲母）	
652	〃	〃	22.6			外面ハケメのちナデ、内面オサエ、ハケメのちナデ。	灰白色	1.0～2.0㎜の砂粒を含む	
653	〃	〃				口縁部外反する。内外面斜方向のハケメのちナデ。	乳褐色	1.5㎜以下の砂粒を含む	
654	〃	〃				外面タテ方向の細かいハケメ。内面ナデ。	淡黄灰褐色	2.0㎜以下の砂粒を含む	
655	〃	〃				口縁端部丸くおさめる。外面タテ方向のハケ状工具、ナデ。	暗灰褐色	1.5㎜以下の砂粒を含む	
656	〃	〃				口縁部端面をもつ。内面ヘラケズリのちナデ。	淡黄灰褐色	2.0㎜以下の砂粒を含む	
657	〃	〃				丸底。外面ハケメ、ナデ。内面ヘラケズリ、ナデ。底部カゴメ痕。楕円形の孔。	灰白色	0.5～2.0㎜の砂粒を多く含む	
658	〃	〃	22.1	12.0	20.6	外面上部(タタキ)のちナデ。内面オサエ、ハケメのちナデ。	淡黄色	0.5～3.0㎜の砂粒を少し含む	
659	〃	〃				把手、オサエ、ナデ。内面ヘラケズリ。	淡褐色	2.0㎜以下の砂粒を含む	
660	〃	〃				把手、オサエ、ナデ。	淡褐色	1.0㎜以下の砂粒を含む	
661	〃	〃				〃	暗灰褐色	1.0㎜以下の砂粒を含む	
662	〃	〃				〃	白褐色	1.5㎜以下の砂粒を含む	

挿図番号	種別	器種	法量（cm）			形態・手法の特徴	色調	胎土	備考
			口径	底径	器高				
663	土師器	甑				外面カゴメ痕。内面ヘラケズリ。	淡褐色	1.0㎜以下の砂粒を含む（シャモット）	
664	〃	〃				〃	黄灰褐色	1.0㎜以下の砂粒を含む	
665	〃	〃				〃	淡褐色	2.0㎜以下の砂粒を含む（赤色粒）	
666	韓式系土器	〃	25.4			外反する口縁。端部肥厚、外面荒いタタキのち螺旋の沈線。把手に切り込み。	淡茶黄褐色	1.0㎜以下の砂粒を含む	
667	土師器	甕	16.6		29.1	「く」字口縁。口縁部ハケメのちヨコナデ。外面ハケメ	淡灰褐色	2.0㎜以下の砂粒を含む	煤付着。
668	〃	壺	18.0			口縁部は、頸部から外反し、さらに内湾気味に上方に立ち上る。端部は外側に肥厚。内面ユビナデアゲ。	灰白色	0.5～2.0㎜の砂粒を多く含む	
669	〃	〃	11.0			内湾気味に斜上方に立ち上る。口縁部ハケメのちヨコナデ。外面ハケメ。内面ヘラケズリ。	灰白色	0.5～3.0㎜の砂粒を少し含む	
670	〃	甕	11.2			「く」字口縁。口縁端面をもつ。端部内側に肥厚。外面ハケメ。内面ヘラケズリ。	灰褐色	1.5㎜以下の砂粒を含む	
671	〃	〃	14.6			口縁端部は屈曲気味に外反。口縁部、外面ハケメ。内面上半ユビナデ。下半ヘラケズリ。	暗茶灰色	2.0㎜以下の砂粒を含む	
672	〃	〃	15.2			外反する口縁。口縁部内側ハケメのちヨコナデ。	灰褐色	2.0㎜以下の砂粒を多く含む	
673	〃	〃	13.6			「く」字口縁。端部やや肥厚。	淡白褐色	1.5㎜以下の砂粒を多く含む	
674	〃	〃	13.4			外反する口縁。端部丸くおさめる。口縁部、外面ハケメ。	黄褐色	2.0㎜以下の砂粒を含む	
675	〃	〃	13.6		21.8	口縁端部やや肥厚。口縁部、外面ハケメ。	淡黄灰褐色	1.5㎜以下の砂粒を含む（赤色粒）	
676	韓式系土器	長胴甕				外面格子タタキ。内面ナデ。	黒色	0.5～2.0㎜の砂粒を少し含む	1085と同一個体。
677	〃	〃				〃	黒色	0.5～1.0㎜の砂粒を少し含む	
678	〃	平底鉢				外面斜格子タタキ。内面ナデ。	灰色	0.5㎜前後の砂粒を含む	
679	〃	〃				外面格子タタキのちヨコナデ。内面ヨコナデ。	茶褐色	1.0㎜前後の砂粒を含む	
680	土師器	高杯	16.6			口縁端部で短かく外反。外面ハケメ、ヨコナデ。	灰白褐色	1.5㎜以下の砂粒を含む	
681	〃	〃	15.2			外面ハケメのちヨコナデ、内面ヨコナデ。	灰褐色	1.0㎜以下の砂粒を含む	
682	〃	〃	17.0			内外面ヨコナデ	暗茶灰色	1.5㎜以下の砂粒を含む	外面煤付着。
683	〃	〃	18.8			杯部の段は甘い。口縁端部上方に肥厚。	淡黄白色	2.0㎜以下の砂粒を多く含む	〃
684	〃	〃	21.2			外反する口縁。	淡黄色	1.0㎜以下の砂粒を含む	
685	〃	〃		12.6		脚柱部から屈曲して裾部。	淡白褐色	3.0㎜以下の砂粒を多く含む	
686	〃	〃				〃	淡茶灰褐色	1.5㎜以下の砂粒を含む	
687	〃	〃				〃	灰褐色	〃	
688	須恵器	平瓶				外面体部下半ヘラケズリ、ロクロ左回り。	灰白色	0.5～1.5㎜の砂粒を含む	
689	〃	壺	16.4			外反する口縁部、端面をもつ。外面肩部下にタタキ、沈線。内面当具痕、ヨコナデ、不定方向のナデ。	乳白色	0.5㎜以下の砂粒を少し含む（精良）	焼成瓦質気味。
690	〃	〃	18.0		23.4	外反する口縁部、口縁外面4条の突線、波状文。外面胴部、沈線の間に組紐文、底部平行タタキ。内面底部ナデ、オサエ。	黒灰～暗灰色	0.5㎜以下の白色微石粒少し含む（精良、堅緻）	40数破片各調査区より出土。
691	〃	直口壺	14.4			やや内傾する口縁部、端部は肥厚。外面肩部下を平行タタキ、肩部ナデケシ。内面不定方向のナデ。	茶褐色	1.0㎜以下の砂粒を含む	
692	〃	蓋	13.1		17.7	口縁部はやや屈曲気味に外に開く。端面をもつ。口縁端内側をオサエコム。内面ヘラ状工具で横方向に調整。口縁部は楕円形。	暗灰緑色	1.0㎜以下の砂粒を含む	
693	〃	〃				外面タテ方向の平行タタキ。	淡赤茶褐色	0.5㎜以下の砂粒を含む（精良、堅緻）	
694	〃	蓋				口縁内面ヨコナデ。天井部全面にヘラケズリのちナデ、天井部外側に沈線1条。	暗灰褐色	0.5㎜以下の砂粒を少量含む（精良、堅緻）	
695	〃	把手				ナデ	暗灰色	0.5㎜以下の砂粒を含む	
696	〃	高杯		10.6		脚部口縁ヨコナデ。口縁端部上下にやや肥厚。	暗茶褐色	1.5㎜以下の砂粒を含む	149と類似。
697	〃	鉢	20.0	11.2	12.8	外面頸部下タテ方向の平行タタキのちヨコナデ。体部最下部ヘラケズリ。内面タタキ、ヨコナデ。平底であげ底。	淡灰色	1.0㎜以下の砂粒を含む	
698	〃	甕	14.7			形態土師器。外面平行タタキ。内面当具痕。	淡茶灰色	2.0㎜以下の砂粒を含む	

挿図番号	種別	器種	法量（cm）			形態・手法の特徴	色調	胎土	備考
			口径	底径	器高				
699	土師器	壺	24.4			口縁部二重に立ち上る。突帯あり。内外面ハケメ。	淡黄灰褐色	3.0㎜以下の砂粒を含む	
700	〃	〃	27.0			〃	淡白褐色	2.0㎜以下の砂粒を多く含む	
701	手捏土器	鉢	4.6		3.9	口縁部内傾。内外面オサエ、ナデ。	暗茶褐色	1.0㎜以下の砂粒を含む	完形。
702	〃	〃	4.8		3.5	内外面オサエ、ナデ。	暗灰色	1.0㎜以下の砂粒を含む	
703	〃	〃	5.1		4.3	口縁部オサエ、ナデ。	淡灰褐色	1.5㎜以下の砂粒を含む	完形。
704	〃	〃	5.2		5.0	〃	灰褐色	1.5㎜以下の砂粒を含む	完形。
705	〃	〃	5.0		4.6	〃	灰褐色	1.5㎜以下の砂粒を含む	完形。
706	〃	〃	6.3		5.3	内面ユビナデアゲ、オサエ、ナデ。	淡褐色	1.5㎜以下の砂粒を含む	完形。 黒斑1ケ所。
707	〃	〃	6.2	—	5.6	〃	乳褐色	2.0㎜以下の砂粒を多く含む （石英多い）	完形。
708	〃	〃				〃	灰褐色	1.5㎜以下の砂粒を含む	
709	〃	〃	7.8		5.6	口縁部オサエ、ナデ。	褐色	3.0㎜以下の砂粒を多く含む	完形。
710	〃	〃	6.8		6.6	口縁部オサエ、ナデ。外面ナデ。内面ユビナデアゲ。	淡褐色	2.0㎜以下の砂粒を多く含む	完形。
711	土師器	小壺	5.8		8.0	磨滅不明。	淡褐色	3.0㎜以下の砂粒を多く含む	完形。 黒斑1ケ所。
712	〃	壺	11.8			口縁部ヨコナデ。	黄褐色	0.5㎜以下の砂粒を少し含む	焼成良好（堅質気味）
713	〃	小甕	10.0			内外面ヨコナデ。	淡褐色	1.5㎜以下の砂粒を多く含む	
714	〃	甕	11.6			「く」字口縁。	白褐色	2.0㎜以下の砂粒を多く含む	
715	〃	〃	15.6			口縁部は「く」字に屈曲し、さらに上方に立ち上る。	淡褐色	2.0㎜以下の砂粒を多く含む	
716	〃	〃	16.6			内外面ハケメ、オサエ。	淡黄色	0.5～4.0㎜の砂粒を多く含む	
717	〃	〃	13.2			「く」字口縁。内面ヘラケズリ。	淡黄灰褐色	1.0㎜以下の砂粒を含む	
718	〃	〃	13.0			「く」字口縁。口縁部ヨコナデ、オサエ。	淡褐色	1.5㎜以下の砂粒を含む	
719	〃	〃	13.4			口縁部に端面をもつ。口縁内外面ハケメ、のちヨコナデ。	淡褐色	2.5㎜以下の砂粒を含む	
720	〃	〃	13.2			外面　頸部下ハケメ、ヨコナデ。内面　ヘラケズリ。	淡黄灰褐色	2.0㎜以下の砂粒を含む	
721	〃	〃	15.2			外反する口縁部。口縁部内外面ハケメ、ヨコナデ。	淡褐色	1.0㎜以下の砂粒を含む	
722	〃	〃	18.4			外面頸部下ハケメのちヨコナデ。内面ヘラケズリ。	淡黄茶褐色	2.0㎜以下の砂粒を多く含む	
723	〃	高杯	14.4			内外面ハケメのちヨコナデ。	灰黄色	1.0～2.0㎜の砂粒を含む	
724	〃	〃		10.0		脚柱部短かい。内面ヘラケズリ。	浅黄橙色	0.5㎜前後の砂粒を少し含む	
725	須恵器	壺				外面タテ方向の平行タタキのち沈線。内面ナデ。	淡茶褐色	（精良、堅緻）	297～289と同一個体。
726	〃	〃				外面タタキ。	茶褐色	〃	290と同一個体。
727	〃	〃				外面タタキのち沈線	淡茶褐色	〃	〃
728	〃	〃				外面タタキ。	茶褐色	〃	〃
729	〃	〃				櫛描波状文。	暗灰色	1.0㎜以下の砂粒を多く含む	309、311同一個体。
730	〃	〃				肩部～頸部　沈線の下に櫛描波状文、上に櫛による刺突文。	淡赤紫褐色	〃	312、311同一個体。
731	〃	〃				体部　沈線の上下に櫛描波状文。	暗灰色	〃	312、309同一個体。
732	〃	杯身	10.9		5.2	口縁端部に面をもつ。内面ヨコナデのち仕上げナデ。	暗灰色	1.0㎜以下の砂粒を含む	
733	軟質土器	壺	11.0			口縁端部は端面をもつ。口縁部は、頸部から上方にやや外反して立上り、さらに屈曲して外縁にのびる。端部内面をオサエ凹む。外面肩部下斜格子タタキ。	淡褐色	2.0㎜以下の砂粒を含む（精良）	436と類似するが、胎土、口縁に相違あり。
734	〃	〃				肩部一体部斜格子タタキ。	黄褐色	〃	437と類似。
735	〃	〃				外面斜格子タタキ。内面ナデ。	褐色	1.0㎜以下の砂粒を少し含む（精良）	〃
736	手捏土器	小鉢	5.2		5.3	内外ともナデ。	淡茶褐色	1.0㎜以下の砂粒を含む	黒斑1ケ所。 完形。
737	土師器	小壺	8.0			口縁部肥厚気味。	淡褐色	1.5㎜以下の砂粒を含む	

挿図番号	種別	器種	法量（cm）			形態・手法の特徴	色調	胎土	備考
			口径	底径	器高				
738	土師器	甕	8.6		9.5	口縁部内外ヨコナデ。外面ナデ。内面ユビナデアゲ。	淡灰褐色	2.0㎜以下の砂粒を含む	完形。
739	〃	小壺	8.3			頸部直上に稜線をもち斜上方に立ち上る。	淡茶褐色	4.0㎜以下の砂粒を含む	
740	〃	鉢	9.8			外面　ハケメのちナデ。内面　ハケメ、オサエのちナデ。	淡灰褐色	1.5㎜以下の砂粒を含む	
741	〃	壺	11.2			「く」字の口縁部、外面肩部はていねいなナデ内面ヘラケズリ。	淡茶褐色	1.5㎜以下の砂粒を含む	
742	〃	甕	16.0			口縁部上方に立上る。口縁端部は端面をもち肥厚。外面肩部ハケメ。内面ヘラケズリ。	淡褐色	2.5㎜以下の砂粒を含む	焼成良好。
743	〃	〃	18.4			二重口縁。口縁端部は肥厚。	淡茶褐色	1.5㎜以下の砂粒を多く含む	
744	〃	〃	16.0			口縁端面をもち、横方向につまみだす。	灰褐色	〃	
745	〃	〃	13.6			口縁部は外反、器壁は薄い。	淡茶褐色	1.0㎜以下の砂粒を含む	
746	〃	〃	12.8			口縁部「く」字に外反、内面ユビナデアゲ一部にヘラケズリ。	淡褐色	3.0㎜以下の砂粒を多く含む	
747	〃	〃	16.2			口縁端部は丸くおさめ、その下を内外におさえている。	〃	1.5㎜以下の砂粒を含む	
748	〃	〃	16.0			口縁端部横方向に肥厚。	淡灰褐色	〃	
749	〃	小甕	11.6			外面肩部タテハケメのちナデ。内面ヘラケズリ。	淡赤灰褐色	2.5㎜以下の砂粒を多く含む（特に石英）	
750	〃	甕	14.4			口縁部肥厚。外面肩部細かいハケメのちナデ。	淡褐色	1.5㎜以下の砂粒を含む	
751	〃	〃	14.0			口縁端やや下方に稜線をもつ。内面オサエ、ナデ。	〃	〃	
752	〃	〃	13.6			口縁部大きく外反。外面肩部荒いハケメ。内面ヘラケズリ。	淡灰褐色	1.5㎜以下の砂粒を含む	
753	〃	〃	13.6			口縁端部内面オサエて凹む。外面肩部荒いハケメ。	淡茶灰色	4.0㎜以下の砂粒を含む	
754	〃	〃	14.0			口縁部肥厚気味、内面ヘラケズリ。	淡褐色	2.0㎜以下の砂粒を含む	
755	〃	〃	14.0			口縁部「く」字に開く。端部を丸くおさめる。	〃	1.5㎜以下の砂粒を含む	
756	〃		15.2			外面肩部荒いハケメ。内面ヘラケズリ。	淡茶褐色	2.0㎜以下の砂粒を含む	
757	〃	高杯	13.0			杯部内面ていねいなヨコナデ。	淡褐色	1.5㎜以下の砂粒を含む	
758	〃	〃	15.0			杯部外面ハケメのちヨコナデ。	淡橙色	0.5～1.0㎜の砂粒を含む	
759	〃	〃	15.2			器壁は全体に厚い。内外面ヨコナデ。	橙色	0.5㎜前後の砂粒を少し含む	
760	〃	〃	14.0			口縁端部短く外反。内外面ヨコナデ。	淡黄色	0.5～3㎜の砂粒を多く含む（雲母）	
761	〃	〃	12.7	11.4	13.0	脚裾部「ハ」字に開く。内面ヘラケズリ。	淡赤褐色	2.0㎜以下の砂粒を含む	杯部に黒斑1ケ所。
762	〃	〃	15.4	10.6		口縁端部短く外反。	灰白色	0.5～5.0㎜の砂粒を多く含む	
763	〃	〃	19.2			口縁端部外面に沈線状のもの。受部外面ハケメ。	黄褐色	1.0㎜以下の砂粒を含む	
764	〃	〃	21.0			杯部内面にハケメ。脚部内面ヘラケズリ。	淡茶褐色	2.0㎜以下の砂粒を含む	
765	〃	〃	20.1	16.0	13.0	杯部上部は大きく開く。脚端部に突線状。	淡褐色	1.5㎜以下の砂粒を含む	
766	〃	〃		9.6		脚部内面ヘラケズリ。	褐色	1.0㎜以下の砂粒を含む	
767	〃	〃		9.4		脚部外面ヨコナデ。内面ヘラケズリ。	淡黄色	1.0㎜前後の砂粒を多く含む（雲母、赤色土粒）	
768	〃	〃		10.0		〃	浅黄橙色	0.5～2.0㎜の砂粒を多く含む（雲母）	
769	〃	〃		10.4		脚裾部「ハ」字に開く。	赤褐色	1.5㎜以下の砂粒を含む	
770	〃	〃		10.8		脚柱部から脚裾部は屈曲する。	淡黄橙色	0.5～2.0㎜の砂粒を多く含む	
771	〃	〃		13.2		脚端部は端面をもつ。内面ヘラケズリ。	白褐色	1.0㎜以下の砂粒を含む	
772	〃	鉢	11.7			外面底部ハケ状工具による調整。	淡赤褐色	1.5㎜以下の砂粒を含む	
773	〃	〃	12.2		5.4	全体に器壁が厚い。外面ハケメのナデ。内面ナデ。	暗茶褐色	2.5㎜以下の砂粒を多く含む	
774	〃	甑	24.4			口縁部は端面をもつ。外面部分的にハケメ。内面粘土紐痕。	淡赤褐色	1.5㎜以下の砂粒を含む（赤色粒）	
775	〃	〃	20.4			口縁端部短く外反。外面荒いタテ方向のハケメ。内面、オサエ、ナデ、ハケ状工具。	白褐色	1.5㎜以下の砂粒を含む	体部に黒斑。
776	〃	〃	22.4			口縁部ゆるく外反。外面荒いハケメのちナデ。	白褐色	2.5㎜以下の砂粒を含む	口縁部黒斑。
777	〃	〃	20.0			〃	淡褐色	3.0㎜以下の砂粒を含む	
778	〃	〃	20.0			口縁端部は内側を細く、端面をもつ。把手接合部に一部ハケメ。大きな把手。	淡赤灰褐色	1.0㎜以下の砂粒を含む	楕円形の透し。
779	〃	〃				口縁部ヨコナデ。外面ナデ。内面ヘラケズリ。	淡乳褐色	2.0㎜以下の砂粒を含む	
780	〃	〃				口縁部外反。内外面ハケメ。	淡乳褐色	1.0㎜以下の砂粒を含む	
781	〃	〃				口縁部ヨコナデ。外面タテ方向のハケ状工具、ナデ。	灰黄褐色	1.5㎜以下の砂粒を含む	
782	〃	〃				把手オサエ、ナデ。	茶黄褐色	1.0㎜以下の砂粒を含む	

挿図番号	種別	器種	法量（cm）			形態・手法の特徴	色調	胎土	備考
			口径	底径	器高				
783	土師器	高杯				把手オサエ、ナデ。	暗灰褐色	1.0㎜以下の砂粒を含む	
784	〃	〃				〃	〃	1.0㎜以下の砂粒を含む	
785	〃	〃				丸底。外面ハケ状工具がタタキのちナデ。内面ヘラケズリ。	灰黄褐色	2.0㎜以下の砂粒を含む	
786	〃	〃				外面ハケメ、ナデ。内面ナデ。	〃	2.0㎜以下の砂粒を含む	
787	須恵器	壺	12.4		17.0	外面釉のため調整不明。肩部に沈線2条。内面凹凸有り、一部に当具痕。平底気味。	灰褐色	2.0㎜以下の砂粒を含む	
788	〃	〃				胴部最大径より下ヘラケズリのちヨコナデ。内面体部ヨコナデ、体部底部オサエ、ナデ。	暗緑灰色	0.5㎜以下の砂粒を含む（精良）	
789	〃	把手付椀	8.8			口縁端部短かく外反。外面3条の突線。把手断面円形か。	灰白色	0.5～2.0㎜の砂粒を少し含む	
790	〃	浅鉢	12.7	9.5	4.7	口縁端部短かく外反し肥厚。外面頸部～体部上半平行タタキのちヨコナデ。体部下半ヘラケズリ。	淡灰色	2.0㎜以下の砂粒を含む（黒色粒、雲母）	体部下半～底部煤付着。
791	手捏土器	釜	4.6		2.7	頸部をつまみ出して突帯。外面オサエ。ナデ。内面オサエ、ナデ。	淡黄灰色	0.5㎜以下の砂粒を含む	完形。
792	〃	〃	6.4		4.7	〃	〃	〃	
793	〃	〃	6.5		5.0	〃	〃	〃	
794	〃	鉢	4.8		3.1	内外面オサエ、ナデ。	黄褐色	1.0㎜以下の砂粒を含む	完形。
795	〃	〃	5.0		3.0	〃	淡黄灰褐色	0.5㎜以下の砂粒を含む	
796	〃	〃				内外面オサエ、ナデ。	茶褐色	1.0㎜以下の砂粒を含む	
797	〃	〃	4.4		4.4	口縁部ヨコナデ。外面オサエ、ナデ。内面ユビナデアゲ。	暗灰色	〃	完形。
798	〃	〃	4.6		3.9	〃	〃	〃	
799	〃	〃	4.0		3.8	口縁部オサエ、ナデ。内面ユビナデアゲ。	灰黄褐色	〃	完形。黒斑1ケ所。
800	〃	〃	4.8		3.6	口縁部オサエ、ヨコナデ。内外面オサエ、ナデ。	淡黄灰褐色	〃	完形。
801	〃	〃	4.2		4.7	口縁部オサエ、ヨコナデ。内面ユビナデアゲ、平底気味。	黒茶褐色	〃	完形。
802	〃	〃	5.8			内外面オサエ、ナデ。	淡黄褐色	〃	
803	〃	〃	5.0		4.9	口縁部オサエ、ナデ。内面ユビナデアゲ。	淡黄灰褐色	1.0㎜以下の砂粒を含む	完形。
804	〃	〃	5.6		4.9	〃	灰黄褐色	〃	
805	〃	〃	5.0		4.6	口縁部オサエ、ナデ。内面ユビナデアゲ。	淡白褐色	0.5㎜以下の砂粒を含む	黒斑1ケ所。
806	〃	〃	5.0		4.0	内外面オサエ、ナデ。	赤茶褐色	1.5㎜以下の砂粒を含む	完形。
807	〃	〃	6.0		3.0	口縁部ヨコナデ、オサエ。内面ユビナデアゲ。	淡黄褐色	〃	
808	〃	〃	5.8		5.0	内外面オサエ、ナデ。体部に孔1ケ所。	淡赤褐色	2.0㎜以下の砂粒を含む	完形。
809	〃	〃	5.3		5.6	口縁部オサエ、ナデ。内面ユビナデアゲ。	淡茶褐色	1.0㎜以下の砂粒を含む	完形。黒斑1ケ所。
810	〃	〃	4.9		5.0	〃	淡黄灰褐色	1.5㎜以下の砂粒を含む	
811	〃	〃	5.2		4.4	口縁部オサエ、ナデ。内面ユビナデアゲ。	淡黄灰褐色	2.0㎜以下の砂粒を含む	完形。黒斑1ケ所。
812	〃	〃	6.4		4.6	〃	〃	1.0㎜以下の砂粒を含む	黒斑1ケ所。
813	〃	〃	5.0		5.0	口縁部オサエ、ナデ。内面ハケ状工具によるナデアゲ。	〃	〃	黒斑1ケ所。
814	〃	〃	5.4		5.8	口縁部オサエ、ナデ。	淡褐色	〃	完形。
815	〃	〃	5.4		5.7	内外面、オサエ、ナデ。	〃	〃	完形。
816	〃	〃	6.2			口縁部オサエ、ヨコナデ。外面ナデ。内面ユビナデ。	〃	〃	黒斑1ケ所。
817	〃	〃	7.2		5.9	口縁部オサエ、ヨコナデ。外面ナデ。内面ユビナデアゲ。	淡茶褐色	〃	
818	〃	〃	6.0		6.0	口縁部オサエ、ヨコナデ。内外面ナデ。	〃	〃	
819	〃	〃	6.0		5.7	口縁部オサエ、ナデ。内面ユビナデアゲ。	淡褐色	1.5㎜以下の砂粒を含む	黒斑1ケ所。
820	〃	〃	6.1		6.3	〃	淡黄褐色	1.0㎜以下の砂粒を含む	
821	〃	〃	7.0		5.0	内外面、オサエ、ナデ。	灰褐色	〃	
822	〃	〃	7.2		6.1	口縁部オサエ、ヨコナデ。外面ナデ。内面ユビナデアゲ。	淡黄灰色	〃	
823	〃	〃	7.0	3.4	6.0	口縁部オサエ、ナデ。内外面ユビナデアゲ。	淡褐色	1.0㎜以下の砂粒を含む	完形。黒斑1ケ所。
824	〃	〃	7.2		6.7	口縁部オサエ、ヨコナデ。外面ナデ。内面ユビナデアゲ。	茶灰褐色	〃	
825	〃	〃	5.8		6.6	外面オサエ、ナデ。内面ナデ、底部は尖底。	黄灰色	〃	

挿図番号	種別	器種	法量（cm）			形態・手法の特徴	色調	胎土	備考
			口径	底径	器高				
826	手捏土器	鉢				底部は尖底。	淡褐色	1.0mm以下の砂粒を含む	
827	〃	〃	7.4		6.6	外面ナデ。内面ユビナデアゲ、下半ヘラケズリ。	淡黄色	〃	
828	〃	〃	5.6		4.8	口縁部、外面オサエ、ナデ。内面ユビナデアゲ。	灰褐色	1.0mm以下の砂粒を含む	
829	〃	〃	6.4			口縁部ヨコナデ。外面ナデ。内面ユビナデアゲ。	淡灰黄褐色	〃	
830	〃	〃	7.2			外面オサエ、ナデ。内面ユビナデアゲ、ナデ。	黄灰色	〃	
831	〃	〃		3.0		外面オサエ、ナデ。内面上半ユビナデアゲ、下半ヘラケズリ。	淡黄茶褐色	1.0mm以下の砂粒を含む	黒斑1ケ所。
832	〃	〃	8.0		6.6	口縁部オサエ、ヨコナデ。内面ユビナデアゲ。	淡黄褐色	0.5mm以下の砂粒を含む	黒斑1ケ所。
833	〃	〃	8.0		6.3	口縁部オサエ、ヨコナデ。内面ユビナデアゲ、オサエ。	淡黄灰褐色	1.0mm以下の砂粒を含む	完形。黒斑1ケ所。
834	〃	〃	9.2		6.8	〃	淡黄色	〃	黒斑1ケ所。
835	〃	〃	8.6		7.0	口縁部オサエ、ヨコナデ。外面ナデ。内面ユビナデアゲ、部分的にヘラケズリ。	淡黄色	1.0mm以下の砂粒を含む	
836	土師器	小甕	7.6	4.5	8.2	口縁部オサエ、ヨコナデ。外面オサエ、ナデ。内面ユビナデ。	〃	0.5mm以下の砂粒を含む	黒斑2ケ所。
837	〃	〃	8.0		8.5	口縁部オサエ、ヨコナデ。外面ナデ。内面ユビナデ。	淡黄褐色	1.5mm以下の砂粒を含む	完形。黒斑1ケ所。
838	〃	台付鉢	8.0	5.6	6.4	口縁部オサエ、ヨコナデ、外面ナデ。内面オサエ、ヨコナデ、内底部ヘラケズリ。	白褐色	〃	
839	〃	鉢	9.4	6.5	7.0	口縁部ヨコナデ。外面ナデ。内面ハケ状工具のちナデ。	淡黄褐色	0.5mm以下の砂精を含む（雲母）	
840	〃	小甕	8.2		7.0	口縁部ヨコナデ、外面ハケメのちナデ。内面ユビナデアゲ。	淡褐色	1.5mm以下の砂粒を含む	完形。黒斑1ケ所。
841	〃	〃	6.6		7.5	外面ナデ。内面ユビナデアゲ。	暗灰褐色	1.5mm以下の砂粒を含む	
842	〃	〃	8.2		9.4	口縁部ヨコナデ。外面ナデ。内面ユビナデ。	淡褐色	1.0mm以下の砂粒を含む	完形。黒斑1ケ所。
843	〃	〃	7.8			外面ハケメのちナデ。内面ヘラケズリ。	淡黄褐色	〃	
844	〃	〃	9.5		10.7	口縁部オサエ、ナデ。頸部に突帯。内面ユビナデアゲ。	乳白色	3.0mm以下の砂粒を多く含む	完形。黒斑2ケ所。
845	〃	小壺				外面頸部下ハケメのちナデ。内面ユビナデアゲ、オサエ。	灰褐色	2.0mm以下の砂粒を含む	体部に焼成後尖孔。
846	〃	小甕	8.0		9.2	外面口縁部ー肩部ハケ状工具のちヨコナデ。内面ヘラケズリのちナデ。	淡黄色	1.0mm以下の砂粒を含む	完形。
847	〃	小壺	6.2		8.0	口縁部ヨコナデ。外面ハケメのちナデ。内面オサエ、ナデ。	淡黄灰褐色	1.5mm以下の砂粒を含む	
848	〃	小甕	8.0	2.9	8.6	口縁部ハケ状工具のちヨコナデ。外面ナデ。	淡黄褐色	1.5mm以下の砂粒を多く含む	
849	〃	〃	8.2			外面頸部下ハケメのちナデ。内面オサエ、ハケ状工具のちナデ。	淡茶褐色	1.0mm以下の砂精を多く含む	
850	〃	〃	8.6			口縁部ハケメのちヨコナデ。外面ハケメのちナデ。	白褐色	〃	
851	〃	小壺	6.0		8.3	口縁部ヨコナデ。外面ナデ。内面ユビナデアゲ。	灰黄褐色	〃	黒斑1ケ所。
852	〃	〃	7.8		10.0	口縁部ヨコナデ。内面ユビナデアゲ。	白褐色	1.5mm以下の砂粒を含む	
853	〃	甕	8.3		10.9	外面ハケメ。内面ユビナデアゲ。	淡褐色	2.0mm以下の砂粒を含む	完形。黒斑1ケ所。
854	〃	〃	7.2		10.6	口縁部ヨコナデ。外面ナデ。内面ユビナデアゲ。	〃	〃	完形。黒斑1ケ所。
855	〃	〃	10.2		13.8	外面細かいハケメ、ナデ。内面ヘラケズリ。	淡茶黄褐色	1.0mm以下の砂粒を含む（黒色粒）	完形。
856	〃	〃	9.6		14.6	口縁部外反して端部やや内傾。外面細かいハケメのちナデ。	淡茶灰褐色	〃	黒斑1ケ所。
857	〃	〃	10.0		12.4	全体に器壁厚い。外面頸部下ハケメのちナデ。内面オサエ、ユビナデアゲ。	淡黄色	1.5mm以下の砂粒を含む	完形。黒斑1ケ所。
858	〃	〃	11.1			口縁部ヨコナデ。	灰褐色	0.5mm以下の砂粒を含む（雲母）	
859	〃	鉢	11.2			外面ハケメのちヨコナデ。内面ヨコナデ。	淡茶灰褐色	1.0mm以下の砂粒を含む	
860	〃	甕	17.4			肥厚した2重口縁。端部丸くおさめる。	淡灰褐色	1.0mm以下の砂粒を多く含む	
861	〃	〃	15.1			口縁部は頸部から外反してさらに上方に立ち上る。口縁端部は肥厚する。内面ユビナデアゲ。	淡黄灰色	1.5mm以下の砂粒を含む	

挿図番号	種別	器種	法量（cm）			形態・手法の特徴	色調	胎土	備考
			口径	底径	器高				
862	土師器	甕	14.8			口縁部は頸部から「く」字に外傾し、さらに斜上方に立ち上る。外面荒いハケメのちナデ。	淡灰褐色	1.5㎜以下の砂粒を含む	
863	〃	〃	16.4			二重口縁。口縁端部は端面をもつ。外面ハケメのちナデ。内面ユビナデアゲ。	灰褐色	4.0㎜以下の砂粒を含む	
864	〃	〃	16.8			二重口縁。外面タタキのちナデ。内面ユビナデアゲのちヘラケズリ。	淡黄褐色	2.0㎜以下の砂粒を含む	黒斑1ケ所。
865	〃	〃	16.6			口縁部内面、外面荒いハケメのちヨコナデ。	淡黄色	0.5㎜以下の砂粒を含む	
866	〃	〃	17.4			口縁部ヨコナデ。内面ヘラケズリ。	淡黄褐色	0.5㎜以下の砂粒を含む	
867	〃	〃	15.4			口縁端部肥厚、丸くおさめる。口縁部、外面荒いハケメ、ヨコナデ。	黄灰褐色	1.5㎜以下の砂粒を含む	
868	〃	〃	16.4			口縁部外面ハケメのちヨコナデ。	淡茶褐色	1.0㎜以下の砂粒を含む	
869	〃	〃	11.0			口縁外面、外面、荒いハケメ。内面ヘラケズリ。	淡茶褐色	1.0㎜以下の砂粒を含む	
870	〃	〃	13.6			口縁部は頸部から内湾して立ち上がり、端部で短かく外反。	白褐色	1.0㎜以下の砂粒を含む	
871	〃	〃	10.0			口縁部、外面ハケメのちヨコナデ。	白褐色	1.0㎜以下の砂粒を含む	
872	〃	〃	12.6			〃	淡黄灰色	1.0㎜以下の砂粒を含む	
873	〃	〃	15.2			口縁部は外反する。外面ハケメのちナデ。内面ヘラケズリ。	淡黄褐色	1.5㎜以下の砂粒を含む	
874	〃	〃	15.8			口縁部内面ハケメのちヨコナデ。外面荒いハケメののち体部上半を細かいハケメ。内面ヘラケズリ。	〃	〃	煤付着。
875	〃	〃	15.8		27.0	口縁部は外反する。口唇部内面凹む。外面ハケ状工具のちナデ。内面荒いハケ状工具、下半ヘラケズリ。	灰褐色	〃	黒斑1ケ所。
876	〃	〃	11.4			外面ハケメのちナデ。内面ヘラケズリ。	〃	〃	黒斑1ケ所。
877	〃	〃	15.2			口唇部内側を凹む。	淡黄灰褐色	〃	
878	〃	〃	15.6			端部外側に肥厚。外面荒いハケメのちヨコナデ。	淡褐色	1.0㎜以下の砂粒を含む	
879	〃	〃	16.0			口縁端部を丸くおさめる。口唇部内側をオサエテ凹ます。口縁部内側ハケメのちヨコナデ。	淡灰褐色	〃	
880	〃	〃	15.8			口縁部外面荒いハケメのちヨコナデ。外面頸部下細かいハケメ。	淡黄褐色	〃	
881	〃	〃	14.6			口縁部肥厚、端面をもつ。内面ヘラケズリ。	白褐色	〃	
882	〃	〃	17.2			口縁部は外反する。外面ハケメのちヨコナデ。	淡灰黄褐色	〃	
883	〃	高杯	14.0			口縁部はやや内傾して立ち上がり、端部で外反する。杯部内面ハケメのちヨコナデ。	淡黄褐色	1.0㎜以下の砂粒を含む	
884	〃	〃	15.6			口唇部内側をオサエ凹ます。	淡黄灰褐色	〃	
885	〃	〃	14.6			やや深い杯部。	茶褐色	3.0㎜以下の砂粒を多く含む	
886	〃	〃	16.4			口縁部はやや内傾して立ち上がり、端部で外反する。	淡灰褐色	1.5㎜以下の砂粒を含む	
887	〃	〃	16.8			〃	淡茶黄褐色	0.5㎜以下の砂粒を含む	焼成良好（断面瓦質気味）
888	〃	〃	15.4			内外面ヨコナデ。	淡褐色	2.0㎜以下の砂粒を多く含む（赤色粒、シャーモット）	
889	〃	〃	18.8			口縁部は内傾して外反する。	黄褐色	0.5㎜以下の砂粒を含む	
890	〃	〃	15.4	11.0	13.2	杯部口唇部内側オサエてやや外反さす。	淡黄褐色	1.5㎜以下の砂粒を含む	
891	〃	〃	16.4	10.8	11.5	杯部内面ハケメのちヨコナデ。脚柱部内面ヘラケズリ。	〃	〃	黒斑2ケ所。
892	〃	〃	18.8	13.0	14.7	杯部の径は大きい。口唇部内側をオサエて外傾する。	淡黄灰色	〃	
893	〃	〃	19.0			杯部口唇部外側をオサエ外反さす。杯部内外面ハケメのちヨコナデ。	淡黄褐色	〃	
894	〃	〃	20.0			杯部内面ハケメのちヨコナデ。	〃	〃	
895	〃	〃	18.4			脚柱部は太く、脚裾部に大きく広がる。	淡褐色	1.0㎜以下の砂粒を含む	
896	〃	〃		12.0		脚柱部は太く、脚裾部やや短かめ。	茶灰色	1.5㎜以下の砂粒を多く含む	焼成良好（埴質気味）
897	〃	〃				脚柱部内側に粘土紐痕残る。接合部から裾部へ巻き上げている。	淡黄灰褐色	〃	
898	〃	〃				杯部に段をもたない。	淡黄褐色	〃	
899	〃	〃		10.6		杯部に段をもたない。「ハ」字に開く裾部。	白褐色	〃	
900	〃	〃		10.6		脚部内面ヘラケズリ。	淡黄色	0.5～3.0㎜の砂粒を多く含む	
901	須恵器	つまみ				外面ヨコナデ。内面ヨコナデのち仕上げナデ。	暗灰色	2.0㎜以下の砂粒を多く含む	

挿図番号	種別	器種	法量（cm）			形態・手法の特徴	色調	胎土	備考
			口径	底径	器高				
902	須恵器	壺	9.5			口縁部やや内傾気味に立ち上る。口縁部外面2条の突線、突線の上下に波状文。	緑灰色	0.3～1.5mmの砂粒を少し含む	
903	〃	〃	11.0	—	15.2	内外面ヨコナデ。底部ヘラケズリ。	灰色	1.0mm以下の砂粒を多く含む	
904	〃	〃				内外面ヨコナデ。口縁端部細くおさめる。	暗灰色	1.0mm以下の砂粒を含む	溝－1の903と焼成、胎土類似。
905	〃	〃				外面底部手持ちのヘラケズリ。	暗灰褐色	0.5mm以下の砂粒を少し含む（精良、堅緻）	
906	〃	〃				口縁部～頸部　沈線の下櫛描波状文。	暗灰色	1.0mm以下の砂粒を多く含む	同一個体。
907	〃	〃				口縁部～頸部　沈線、波状文。	〃	〃	〃
908	〃	〃				〃	〃	〃	〃
909	〃	〃				頸部～体部　沈線により区画、沈線間に櫛描波状文、櫛による刺突文。	〃	〃	〃
910	〃	甕				口縁端部「コ」字状に端面をもつ。口縁部外面に断面三角形の突帯。口縁端部内面を指でオサエ凹む。	灰褐色	0.5mm以下の砂粒を少し含む	
911	〃	〃				〃	〃	〃	
912	〃	〃				口縁部2段に大きく外反。口縁端部は端面をもち上下にやや肥厚。	淡灰色	0.5mm以下の砂粒を含む（精良）	溝－1より体部出土。
913	〃	壺				口縁～頸部　櫛描波状文。	暗灰褐色	1.5mm以下の砂粒を多く含む	焼成やや不良。314、313と同一個体？
914	〃	〃				頸部　櫛描組紐文。	〃	〃	〃
915	〃	〃				〃	〃	〃	〃
916～925	〃	〃				外面タタキ、沈線。内面ヨコナデ、ナデ。	茶褐色	0.5mm以下の砂粒を含む（精良、堅緻）	299－911同一個体。
926	〃	無蓋高杯	11.6			立ち上りはやや外反する。口縁部は端面をもつ。杯部は深い。	暗灰色	1.0mm以下の砂粒を含む	
927	〃	〃	13.9			口縁端部は端面をもち外側横方向に肥厚。外面体部（ヘラケズリ）のちヨコナデ。脚部透し4～5。	暗緑灰色	0．5mm以下の砂粒を少し含む（精良、堅緻）	
928	〃	高杯		12.1		透しは3方。	灰色	0.3～0.7mmの砂粒を含む	
929	〃	把手付高杯	9.5			外面3本の突線、ヨコナデ。内面ヨコナデ、仕上げナデ。把手は板状。透しは4ケ所。	暗灰色	1.5mm以下の砂粒を多く含む	
930	土師器	鉢	12.0			口縁部は体部から屈曲する。	淡茶灰色	2.0mm以下の砂粒を含む	焼成は土師質。445と同形。
931	須恵器	脚部		13.4		内外面ともヨコナデ。外面体部タタキ、ヨコナデ。外面体部下部ヘラケズリ。内面ていねいなヨコナデ。	暗灰色	0.5mm以下の砂粒を含む（精良気味）	器種不明。
932	〃	器台				12本の波状文。	灰色	1.0mm以下の砂粒を少し含む	
933	韓式系土器	甕	11.4			口縁部外反し、さらに屈曲。外面肩部下斜格子タタキ。	褐色	1.5mm以下の砂粒を含む（精良）	軟質土器。
934	〃	壺				外面斜格子タタキ。内面ナデ。	黄褐色	1.0mm以下の砂粒を含む（精良）	927と類似。
935	〃	〃				〃	黄褐色	1.0mm以下の砂粒を含む（精良）	
936	〃	甕				〃	淡黄色	0.5mm前後の砂粒を少し含む	
937	〃	壺				〃	にぶい橙色	0.5～3.0mmの砂粒を多く含む	
938～943	〃	深鉢				外面格子タタキ、ナデ。内面ナデ。	淡黄橙色	1.0mm前後の砂粒を多く含む	380～499同一個体か。
944～951	〃	〃				外面　格子タタキ、ヨコナデ、ナデ。内面　ヨコナデ、ナデ。	淡黄色	〃	385～382同一個体か。
952	土師器	小鉢	2.8		2.4	内外面オサエ、ナデ。	淡灰褐色	0.5mm以下の砂粒を含む	完形。
953	〃	〃	3.4		2.0	〃	淡茶褐色	2.0 mm以下の砂粒を含む	完形。

挿図番号	種別	器種	法量（cm）			形態・手法の特徴	色調	胎土	備考
			口径	底径	器高				
954	土師器	小鉢	3.6		2.4	内外面オサエ、ナデ。	淡褐色	1.0㎜以下の砂粒を含む	完形。
955	〃	〃		3.6		〃	淡灰褐色	1.0㎜以下の砂粒を含む	
956	〃	〃	7.8		6.4	口縁部オサエ、ナデ。内面ユビナデアゲ。	乳褐色	1.5㎜以下の砂粒を含む	完形。黒斑1ケ所。
957	〃	〃	7.3		6.9	〃	淡褐色	2.0㎜以下の砂粒を含む	
958	〃	〃	7.2		8.2	口縁部ヨコナデ。外面ナデ。内面ユビナデアゲ。	淡黄褐色	1.0㎜以下の砂粒を含む（雲母）	
959	〃	〃	5.5		6.6	内外ともオサエ、ナデ、ヨコナデ。	淡黄褐色	3.0㎜以下の砂粒を多く含む	黒斑1ケ所。
960	〃	〃	8.9		7.8	内面体部上、ユビナデ、ナデ。内面体部下ヘラケズリ。	〃	〃	
961	〃	鉢	12.0		5.6	口縁部ヨコナデ。外面ナデ。内面ハケ状工具、ナデ。	灰褐色	2.0㎜以下の砂粒を多く含む	底部木葉底。
962	〃	壺	12.6			口縁部ヨコナデ。内面ヘラケズリ。	茶褐色	1.0㎜以下の砂粒を含む（赤色粒）	
963	〃	〃	10.5	5.6	13.1	口縁部ヨコナデ。内外面ハケ状工具、ナデ。平底気味。	淡茶灰褐色	1.5㎜以下の砂粒を少し含む	黒斑1ケ所。底部カゴメ痕？
964	〃	〃	11.4		15.4	口縁端部は端面をもち外側横方向に肥厚。外面ハケメのちナデ。内面ヘラケズリ。	淡褐色	1.5㎜以下の砂粒を含む	外面体部煤付着。
965	〃	高杯		13.0		口縁部は短く外反する。脚部端部は端面をもつ。	浅黄色	0.5～2.0㎜の砂粒を多く含む	他の高杯とはやや手法が異なる。
966	〃	〃	22.1	13.9	16.1	杯部内外面ハケメのちナデ。脚部3個の円孔。	淡橙色	0.5～5.0㎜の砂粒を多く含む	
967	〃	〃	13.1	9.7	12.0	杯部内外面ハケメのちヨコナデ、ナデ。脚柱部孔1個。	淡黄色	3.0㎜以下の砂粒を多く含む	
968	〃	〃	13.4			脚柱部内面ヘラケズリ。	〃	〃	
969	〃	〃		9.8		〃	灰白色	1.0～1.5㎜の砂粒を多く含む（金雲母）	
970	〃	〃				杯部と脚部接合部ヘラで切りこみをいれる。須恵技法。	淡茶褐色	1.0㎜以下の砂粒を含む	
971	〃	甑				把手部の内部空洞。	淡赤褐色	2.0㎜以下の砂粒を含む	
972	〃	〃				〃	淡褐色	2.0㎜以下の砂粒を含む（赤色粒）	
973	〃	〃				底部外面にカゴメ痕。	淡黄灰褐色	1.0㎜以下の砂粒を含む	
974	〃	壺	13.4		12.7	外面ヘラミガキ。内面ヘラ状工具によるナデ。	浅黄橙色	0.5～1.5㎜の砂粒を多く含む（赤色粒）	完形。
975	〃	椀	13.0	—	4.1	内面ハケ状工具による調整のちヨコナデ。	浅橙色	0.5㎜前後の砂粒を少し含む（雲母）	
976	〃	〃	13.8			口縁端部を丸くおさめる。内面ていねいなヨコナデ。	浅黄橙色	0.5～2.0㎜の砂粒を少し含む（雲母）	
977	〃	〃	14.6			〃	〃	〃	
978	〃	高杯	19.5			〃	〃	〃	
979	〃	〃	20.5			〃	橙色	〃	
980	〃	〃		11.4		器壁が全体に厚い。裾部は脚柱部から屈曲。	浅黄橙色	〃	
981	〃	〃		10.3		〃	〃	〃	
982	〃	〃		11.6		〃	〃	〃	
983	〃	椀	12.4	6.6	4.3	内面ヘラケズリ。口縁部ヨコナデ。	黄褐色	0.5㎜以下の砂粒を含む	黒色土器。
984	〃	〃	16.2			〃	〃	〃	〃
985	〃	〃		6.0		〃	〃	〃	〃
986	〃	〃		5.8		〃	〃	〃	黒色土器。
987	〃	〃		8.6		〃	〃	〃	〃
988	〃	皿	12.0			口縁部、内面ヨコナデ。底部ヘラ切り。	茶灰褐色	1.0㎜以下の砂粒を含む	
989	〃	台付蓋		18.6		杯部内面ていねいなナデ。	黄褐色	〃	台部に黒斑。
990	緑釉陶器	皿	10.5	5.6	2.8	口縁部短かく外反。端部やや厚い。内面に1条の沈線。	灰色	0.5㎜以下の砂粒を少し含む（精良、堅緻）	（釉－淡緑色）
991	〃	〃	11.0	6.0	2.2	口縁部外反し、丸くおさめる。	淡灰色	〃	（釉－淡黄緑色）
992	〃	椀	13.0			内外面ヨコナデ。	灰褐色	〃	（釉－淡黄緑色）
993	〃	〃				口縁端部短かく外反。外面下半ヘラケズリ。	灰色	〃	（釉－淡黄緑色）
994	〃	皿				内外面ヨコナデ。	灰色	〃	（釉－黄緑色）

挿図番号	種別	器種	法量（cm）			形態・手法の特徴	色調	胎土	備考
			口径	底径	器高				
995	緑釉陶器	椀				内外面ヨコナデ。	淡灰色	0.5㎜以下の砂粒を少し含む(精良、堅緻)	(釉－淡緑色)
996	〃	皿				外面下半ヘラケズリ。	淡灰褐色	〃	(釉－黄緑色)
997	〃	〃				内外面ヨコナデ。	淡灰色	〃	(釉－淡緑色)
998	〃	〃				〃	淡灰色	〃	(釉－淡黄緑色)
999	〃	〃				〃	灰色	〃	(釉－緑色)
1000	〃	椀		外8.0		内面ヘラケズリ。外面ヨコナデ。	灰色	〃	(釉－淡黄緑色)
1001	〃	〃		4.6		内外面ヨコナデ。底部糸切り。	乳黄褐色	〃	
1002	〃	〃		外5.6		内面ヘラミガキ。外面ヨコナデ。	灰色	〃	(釉－淡緑色)
1003	〃	〃		外7.8		外面ヘラケズリ、ヨコナデ。内面ヨコナデ。	灰色	〃	(釉－淡黄緑色)
1004	〃	〃		外7.2		高台部に段をもつ。内面に1条の沈線。	淡灰色	〃	(釉－緑色)
1005	硯	円面硯				透しあり。□か凸。	暗灰褐色	1.0㎜以下の砂粒を含む	
1006	〃	転用硯	13.8			壺の底部を利用。	暗灰色	〃	
1007	〃	〃				甕腹を利用。	暗灰褐色	〃	
1008	〃	〃				底部オサエ、ナデ。	灰褐色	2.0㎜以下の砂粒を含む	
1009	〃	風字硯				雑な整形。内外面オサエ、ナデ。	暗灰色	〃	
1010	〃	〃				内外面ナデ。	灰色	〃	
1011	土師器	椀	12.2	5.6	4.5	口縁部ヨコナデ。内面ていねいなナデ。	白褐色	0.5㎜以下の砂粒を含む	早島式土器。
1012	〃	〃	12.0	5.4	3.9	〃	灰白色	0.5㎜以下の砂粒を含む	〃
1013	〃	〃	11.4	5.4	3.8	〃	淡黄色	0.5～3.0㎜の砂粒を含む	〃
1014	〃	〃		5.4		内面ていねいなナデ。	灰褐色	1.0㎜以下の砂粒を含む	〃
1015	〃	〃		6.2		〃	淡褐色	0.5㎜以下の砂粒を少し含む	〃
1016	〃	〃		5.6		〃	淡白灰色	0.5㎜以下の砂粒を含む	〃
1017	〃	小皿	8.4	6.2	1.2	口縁部ヨコナデ、内面ヨコナデ、底部ヘラ切り。	淡黄褐色	1.5㎜以下の砂粒を含む	〃
1018	〃	〃	8.8	7.0	1.0	〃	淡褐色	1.0㎜以下の砂粒を含む	〃
1019	〃	〃	7.0	5.0	1.3	〃	淡黄褐色	1.0㎜以下の砂粒を含む(赤色粒)	〃
1020	白磁	碗				玉縁。	釉 透明 地 白色	緻密	12～13C。
1021	〃	〃				〃	釉 透明 地 白色	〃	〃
1022	〃	〃				〃	釉 透明 地 白色	〃	〃
1023	〃	〃		6.3		玉縁口縁でない高台。	釉 透明 地 白色	緻密	〃
1024	青磁	皿	10.5	4.8	2.3	内面櫛書き文。	釉透明の緑 地 灰色	〃	同安窯系12～13C。
1025	青白磁	合子身	5.7	7.0	3.5		釉 透明うす青色 地 白色	〃	〃
1026	土師器	椀				内面ヘラミガキ。	にぶい橙色	0.5～2.0㎜の砂粒を含む（雲母）	黒色土器
1027	〃	〃				〃	にぶい橙色	0.5㎜前後の砂粒を少し含む（雲母）	〃
1028	〃	〃		6.5		〃	浅黄橙色	0.5～2.0㎜以下の砂粒を多く含む(黒色粒)	〃
1029	〃	甕		8.2		内面ヘラミガキ	浅黄橙色	0.5～1.0㎜の砂粒を少し含む	〃
1030	須恵器	〃				内外面タタキ。	暗灰色	1.0㎜以下の砂粒を含む	

挿図番号	種別	器種	法量（cm）			形態・手法の特徴	色調	胎土	備考
			口径	底径	器高				
1031	須恵器	甕				1.0㎜以下の砂粒を含む	暗灰褐色	1.0㎜以下の砂粒を含む	
1032	土師器	高杯		10.2		杯部内面ていねいなナデ。	浅黄橙色	0.5～2.0㎜の砂粒を少し含む	
1033	須恵器	甕				内外面タタキ。	黒灰色	1.0㎜以下の砂粒を含む	
1034	〃	杯蓋	17.1		3.6	内面ヨコナデのち乱ナデ。	灰白色	1.0㎜前後の砂粒を多く含む（黒色土粒）	
1035	〃	〃	16.4			内面ヨコナデのち仕上げナデ。	灰色	1.0㎜前後の砂粒を含む（黒色土粒）	
1036	〃	杯身		外12.1		〃	灰色	1.0㎜前後の砂粒を含む（雲母）	
1037	〃	〃			4.5	〃	〃	0.5㎜前後の砂粒を含む	
1038	〃	〃	12.3			〃	灰色	1.0㎜前後の砂粒を多く含む	
1039	〃	〃	12.4	8.6	4.1	底部ヘラケズリ。	灰白色	1.0㎜前後の砂粒を多く含む（黒色土粒）	
1040	土師器	甕	23.8			口縁部ハケメ。内面ヘラケズリ。	にぶい橙色	1.0㎜前後の砂粒を多く含む（赤色土粒）	
1041	〃	高台付皿	22.8			口縁部内側に丸くおさめる。底部手持ちのヘラケズリ。	淡茶褐色	1.0㎜以下の砂粒を含む	丹塗土器。
1042	須恵器	杯蓋	17.8			天井部ヘラケズリ。	淡灰褐色	0.5㎜以下の砂粒を含む	
1043	〃	杯身	13.8			内外面ヨコナデ。	淡灰褐色	1.0㎜以下の砂粒を含む	
1044	〃	〃	15.2	外11.4	4.1	〃	淡灰褐色	1.0㎜以下の砂粒を含む	
1045	〃	〃	16.0			外面体部下半ヘラケズリ。	淡灰色	1.5㎜以下の砂粒を含む	
1046	〃	高杯	16.6			杯部内面ヨコナデのち仕上げナデ。	暗灰色	1.5㎜以下の砂粒を含む	
1047	土師器	椀		8.4		長石ヘラミガキ。	淡赤褐色	0.5㎜以下の砂粒を含む	黒色土器。
1048	須恵器	杯蓋				碁石状のつまみ。	灰色	0.3～1.0㎜の砂粒を少し含む	
1049	〃	〃				〃	灰色	微砂、精良を少し含む	
1050	〃	〃	19.8			天井部は低い。口縁端部肥厚。	灰白色	0.3～1.0㎜の砂粒を含む	
1051	〃	杯身		外6.0		小型品。内面ヨコナデ。	灰色	0.3～1.5㎜の砂粒を含む	
1052	〃	〃		外10.1		内面ヨコナデのち仕上げナデ。	灰白色	0.3～1.5㎜の砂粒を多く含む	
1053	〃	〃		外9.0		ふんばり気味の高台。	灰白色	0.3～0.7㎜の砂粒を含む	
1054	〃	〃	16.0	外11.5	4.2	杯部は、やや外反して上方に立ち上がる。	灰色	0.5～1.0㎜の砂粒を含む	
1055	〃	〃	9.4		3.4	底部未調整。	灰白色	2.0㎜前後の砂粒を含む	
1056	〃	〃	13.1		4.3	〃	灰白色	2.0㎜前後の砂粒を多く含む	
1057	〃	〃	18.2		5.7	口縁部端面をもつ。外面底部ヘラケズリ。ロクロ左回り。	灰白色	0.5～3.0㎜の砂粒を多く含む（雲母）	
1058	〃	〃	9.7	外6.2	8.9	外面最下部ヘラケズリ。ロクロ左回り。	青灰色	1.0㎜前後の砂粒を含む	
1059	〃	高杯	12.0			口縁部肥厚、端部を丸くおさめる。	灰色	0.5～3.0㎜の砂粒を多く含む	
1060	〃	〃				脚柱部に1条の沈線。	灰色	0.5～2.0㎜の砂粒を含む	
1061	〃	〃		8.3		脚端部内側につまみだす。	灰白色	0.5～1.0㎜の砂粒を含む	
1062	〃	〃		9.2		低脚。脚端部両側に肥厚。	灰色	0.5～2.0㎜の砂粒を含む	
1063	〃	〃		7.4		脚柱部沈線1条。	灰色	0.5～3.0㎜の砂粒を多く含む	
1064	〃	長頸壺				肩部下半に凹線、凹線の間に櫛状工具による連続刺突文。体部平行タタキ。	灰色	0.5～2.0㎜の砂粒を含む	
1065	〃	〃	15.0			頸部1条の凹線。	灰白色	0.5～2.0㎜の砂粒を含む	
1066	〃	〃				内外面ヨコナデ。	明青灰色	0.5㎜前後の砂粒を含む（黒色土粒）	
1067	〃	高台付平瓶				体部最大径部に凹線2条。肩部に円形の貼り付け。	灰白色	2.0㎜以下の砂粒を含む（精良）	
1068	〃	平瓶				小型品。ロクロ左回り。	灰色	2.0㎜以下の砂粒を含む	
1069	〃	鉢	21.8			体部下半ヘラケズリ。	灰色	0.5～3.0㎜の砂粒を多く含む	焼成瓦質気味。
1070	〃	甕	15.0			口縁部外反し、端部上方に肥厚。	灰色	0.5～2.0㎜の砂粒を少し含む	
1071	〃	甕	20.4			外面平行タタキのちカキ目、ヨコナデ。	灰色	0.5㎜前後の砂粒を少し含む	
1072	〃	〃	17.0			外面平行タタキのちカキ目、ヨコナデ。	青灰色	0.5～6.0㎜の砂粒を少し含む	

挿図番号	種別	器種	法量（cm）			形態・手法の特徴	色調	胎土	備考
			口径	底径	器高				
1073	須恵器	甕	27.4			「く」字口縁。外面平行タタキのちカキ目。	灰白色	0.5 ～2.0 mmの砂粒を少し含む	
1074	〃	〃	16.6			外反する口縁部。端部上下に肥厚。	灰色	0.5～3.0mmの砂粒を多く含む	
1075	〃	〃	19.2			〃	灰色	0.5mm前後の砂粒を少し含む	
1076	〃	鉢	12.8		28.0	口縁部肥厚。外面平行タタキのちカキ目。	灰色	0.5～2.0mmの砂粒を含む	
1077	土師器	杯				内面に暗文。	黄茶褐色	0.5mm以下の砂粒を少し含む	丹塗土器。
1078	〃	〃				〃	淡黄灰褐色	0.5mm以下の砂粒を含む（精良、堅緻）	〃
1079	〃	〃				〃	淡茶褐色	0.5mm以下の砂粒を含む（精良）	〃
1080	〃	皿	10.3		2.3	口縁部、内面、オサエ、ヨコナデ。	浅黄橙色	0.5～2.0mm長石、石英、金雲母、角閃石を多く含む	
1081	〃	〃	9.8		2.3	内外面オサエ、ナデ、ヨコナデ。	淡褐色	1.0mm以下の砂粒を含む（赤色粒）	
1082	〃	〃	18.4	14.2	2.0	〃	浅黄橙色	0.5～2.0mmの砂粒を少し含む	
1083	〃	椀	10.2		3.3	〃	灰白色	0.5～2.0mmの砂粒を多く含む（雲母、黒色粒）	
1084	〃	〃	10.0		4.2	口縁部ヨコナデ。外面ナデ。	淡褐色	1.0mm以下の砂粒を含む（赤色粒）	
1085	〃	〃	9.8		4.4	〃	淡赤褐色	1.0mm以下の砂粒を含む（赤色粒）	
1086	〃	〃	11.7			内外面ヨコナデ。	灰白色	0.5～2.0mmの砂粒を少し含む（黒色粒）	
1087	〃	〃	11.4		3.6	内面ハケメのちていねいなヨコナデ。	淡褐色	1.0mm以下の砂粒を含む	
1088	〃	〃	11.8		3.6	内外面オサエ、ナデ、ヨコナデ。	淡褐色	1.0mm以下の砂粒を含む（雲母）	
1089	〃	〃	12.0		4.9	〃	灰白色	0.5～4.0mmの砂粒を多く含む（雲母、黒色粒）	
1090	〃	〃	12.6		5.4	〃	浅黄橙色	0.5～3.0mmの砂粒を多く含む（雲母、黒色粒）	
1091	〃	〃	13.8		5.9	〃	浅黄橙色	0.5～3.0mmの砂粒を含む	
1092	〃	〃	14.6		6.2	〃	淡黄色	0.5mm前後の砂粒を少し含む	
1093	〃	高杯	14.6			口縁端部短かく外反。外面ハケメのちヨコナデ。内面ていねいなナデ。	浅黄橙色	0.5～2.0mmの砂粒を多く含む	
1094	〃	〃	13.4			内面ていねいなヨコナデ。	淡褐色	1.0mm以下の砂粒を含む	黒斑1ヶ所。
1095	〃	〃	14.2	10.2	9.9	杯部内面ハケメのちていねいなヨコナデ。	浅黄橙色	0.5～2.0mmの砂粒を少し含む	
1096	〃	〃	14.3			〃	浅黄色	0.5～6.0mmの砂粒を少し含む	
1097	〃	〃	14.4			内外面、ナデ、ヨコナデ。	にぶい橙色	0.5mm前後の砂粒を少し含む	
1098	〃	〃	13.7	10.8	9.6	杯部内面ていねいなナデ。	灰白色	0.5mm前後の砂粒を少し含む（雲母、黒色粒）	
1099	〃	〃	12.9			〃	浅黄橙色	0.5mm前後の砂粒を少し含む	
1100	〃	〃	13.6	9.5	9.1	杯部内面ハケ状工具のちていねいなヨコナデ。	浅黄色	0.5mm前後の砂粒を少し含む	
1101	〃	〃		9.4		脚柱部内面ヘラケズリ。	浅黄橙色	0.5～2.0mmの砂粒を少し含む（黒色粒）	
1102	〃	〃		5.3		〃	灰白色	0.5～4.0mmの砂粒を少し含む	
1103	〃	甕	16.6			口縁部外反し、さらに上方につまみだす。外面ハケ状工具、ナデ、オサエ。	黒灰色	1.5mm以下の砂粒を含む	
1104	〃	〃	14.0			口縁部は短かく外反。端部は丸くおさめる。外面ハケメ、ナデ。	にぶい黄橙色	0.5～2.0mmの砂粒を多く含む	
1105	〃	〃	18.0			口縁部は大きく外反。	灰白色	0.5～1.0mmの砂粒を多く含む	
1106	〃	〃	16.8			口縁部器壁厚い。外面オサエ、ナデ。	にぶい黄橙色	0.5～2.0mmの砂粒を多く含む	
1107	〃	〃	17.4			口縁部はゆるやかに外反。体部は下膨れ。外面ハケメ、ナデ、オサエ。	にぶい黄橙色	0.5～3.0mmの砂粒を少し含む	
1108	〃	壺	21.2			口縁部は大きく外反。内面頸部ハケメ。内面下部ヘラケズリ。	灰黄褐色	0.5～2.0mmの砂粒を多く含む	
1109	〃	甕	24.6			口縁部大きく外反する。外面ハケメ、オサエ、ヨコナデ。内面ハケ状工具、ナデ。	浅黄色	0.5～2.0mmの砂粒を少し含む	
1110	〃	〃	22.4			「く」字口縁。口縁部ハケメのちヨコナデ。外面ヘラケズリ。	浅黄色	0.5～2.0mmの砂粒を多く含む	
1111	〃	鍋	24.0			口縁部大きく外反。外面荒いハケメ。内面ナデ。	灰黄褐色	0.5～1.0mmの砂粒を多く含む	

挿図番号	種別	器種	法量（cm）			形態・手法の特徴	色調	胎土	備考
			口径	底径	器高				
1112	土師器	甕	25.8			「く」字口縁。外面ヘラケズリ。	灰褐色	0.2㎜前後の砂粒を少し含む	
1113	〃	〃	25.8			口縁部、外面ハケメのちヨコナデ。内面ヘラケズリ。	茶褐色	1.0㎜以下の砂粒を含む（雲母）	
1114	〃	〃	27.6			口縁部大きく外反。外面ハケメ、オサエ、ヨコナデ。	にぶい黄褐色	0.2～3.0㎜の砂粒を多く含む	
1115	〃	〃	24.2			外反する口縁部。口縁部内面ハケメ、ヨコナデ。	淡橙色	0.5～3.0㎜の砂粒を含む	
1116	〃	鍋	25.8		19.4	内外面オサエ、ナデ。口縁部ヨコナデ。外面部分的にハケメ。	黒褐色	4.0㎜以下の砂粒を含む	
1117	〃	〃	25.2			外面ハケメ。内面ヘラケズリ、ハケ状工具、ナデ。	灰黄色	0.5～5.0㎜の砂粒を含む	
1118	〃	鉢	28.8			外面荒いタテハケ。内面板状工具によるナデ。	灰白色	0.5～2.0㎜の砂粒を含む	
1119	〃	鉢	18.4			内湾する口縁部。内面オサエ、ナデ。	赤橙色	0.5～2.0㎜の砂粒を多く含む	
1120	〃	〃	15.6	8.0	17.5	内湾する口縁部。内外面ハケ状工具、オサエ、ナデ。底部内外オサエ。	茶灰褐色	1.0㎜以下の砂粒を含む	製塩土器。
1121	須恵器	円面硯	12.1			凸形の透し、表面に線刻。	明青灰色	0.3～2.0㎜の砂粒を少し含む	
1122	〃	蓋	17.1			口縁部短かく外反。ロクロ右回り。	灰白色	0.5～2.0㎜の砂粒を少し含む（黒色粒）	
1123	〃	杯身	14.4			内外面ヨコナデ。	灰白色	0.5～2.0㎜の砂粒を多く含む	
1124	〃	〃				〃	灰色	0.5～2.0㎜の砂粒を少し含む	
1125	〃	甕	15.2			口縁端部を肥厚。外面平行タタキ、のちカキ目。	灰色	0.5～3.0㎜の砂粒を少し含む	
1126	〃	鍋	20.2			口縁部肥厚。外面2条の凹線。	灰色	0.5～3.0㎜の砂粒を多く含む	
1127	土師器	高杯	12.8			内外面ていねいなナデ、ヨコナデ。	にぶい橙色	0.5～2.0㎜の砂粒を少し含む	
1128	〃	〃		10.6		脚裾部は内湾気味。	淡橙色	0.5～2.0㎜の砂粒を少し含む	
1129	〃	〃		10.2		脚裾部に未通の円孔1ケ所。	浅黄橙色	0.5㎜前後の砂粒を少し含む	
1130	〃	〃		9.8		脚柱部下部に未通の円孔1ケ所。	浅橙色	0.5～2.0㎜の砂粒を多く含む	
1131	〃	〃		12.8		脚柱部外面ナデ、内面ヘラケズリ。	にぶい橙色	0.5㎜前後の砂粒を少し含む	
1132	〃	椀	15.4			内外面ていねいなナデ、ヨコナデ。	にぶい橙色	0.5㎜前後の砂粒を少し含む	
1133	〃	〃	15.2	—	6.3	〃	浅黄橙色	0.5㎜前後の砂粒を少し含む	黒斑1ケ所。
1134	緑釉陶器	〃				内外面ヨコナデ。	淡灰緑色	（精良、堅緻）	（釉－淡緑色）
1135	土師器	〃		7.6		内面ヘラミガキ。	にぶい橙色	1.0㎜前後の砂粒を含む	黒色土器。
1136	〃	〃		10.2		〃	赤橙色	1.0㎜前後の砂粒を多く含む	〃
1137	須恵器	杯蓋				外面ヘラケズリ、内面ヨコナデ、仕上げナデ。	灰白色	1.0㎜前後の砂粒を含む（雲母）	
1138	〃	杯身		外10.4		〃	灰白色	1.0㎜前後の砂粒を多く含む	
1139	〃	〃		外10.0		〃	灰白色	1.0㎜前後の砂粒を含む（黒色粒、白雲母）	
1140	〃	〃	15.3	外11.4	5.2	〃	灰白色	1.0㎜前後の砂粒を含む（雲母）	
1141	〃	〃		5.9	2.6	内外面ヨコナデ、小型品。	灰白色	1.0㎜前後の砂粒を含む	
1142	須恵器	こね鉢	16.8			体部から口縁部は、やや内湾気味に立ち上がる。口縁部端面をもつ。	灰色	0.5～2.0㎜の砂粒を多く含む	
1143	〃	甑		13.2		外面下半ヘラケズリ。内面ヨコナデ。	灰白色	1.0㎜前後の砂粒を含む	
1144	土師器	甕	23.8			「く」字口縁。	橙色	1.0㎜前後の砂粒を多く含む（雲母）	
1145	〃	甑	23.6			外面、ナデ、ヨコナデ。内面ヘラケズリ、オサエ、ナデ。	灰白色	1.0㎜前後の砂粒を多く含む	
1146	〃	椀		7.8		内面ヘラミガキ。	赤褐色	1.0㎜前後の砂粒を含む	
1147	須恵器	杯蓋	8.9		2.8	宝珠つまみ。ロクロ左回り。	灰色	2.0㎜前後の砂粒を少し含む（雲母）	
1148	〃	〃	9.2		3.0	〃	灰色	0.5㎜前後の砂粒を少し含む	
1149	〃	〃	10.0			ロクロ左回り。	緑灰色	0.5㎜前後の砂粒を少し含む	
1150	〃	〃	10.0			内外面ヨコナデ。	灰色	0.5～2.0㎜の砂粒を少し含む	
1151	〃	〃	15.0	3.3		擬宝珠つまみ。内面ヨコナデのち仕上げナデ。	灰色	1.5㎜以下の砂粒を含む	
1152	〃	〃	15.4	2.4		〃	暗灰色	2.0㎜以下の砂粒を多く含む	
1153	〃	〃	15.8	2.6		擬宝珠つまみ。内面ヨコナデのち仕上げナデ。ロクロ左回り。	灰色	0.5～2.0㎜の砂粒を多く含む	

挿図番号	種別	器種	法量（cm）			形態・手法の特徴	色調	胎土	備考
			口径	底径	器高				
1154	須恵器	杯蓋	16.7	3.2		擬宝珠つまみ。内面ヨコナデのち仕上げナデ。ロクロ左回り。	淡灰色	1.0㎜以下の砂粒を少し含む（黒色粒）	
1155	〃	〃				〃	灰白色	0.5～2.0㎜の砂粒を含む	
1156	〃	〃	15.4			〃	灰色	1.5㎜以下の砂粒を含む	
1157	〃	〃	17.6			口縁端部丸くおさめる。	淡灰褐色	1.0㎜以下の砂粒を含む	
1158	〃	〃	16.8			口縁端部わずかにつまみだす。	灰白色	2.0㎜以下の砂粒を含む	
1159	〃	杯身	10.3	外 7.2	3.4	小型品。内面ヨコナデ、仕上げナデ。	淡灰褐色	1.5㎜以下の砂粒を含む（黒色粒）	
1160	〃	〃	13.2	外 10.6	3.7	口縁部やや外反気味。ロクロ左回り。	暗灰色	1.5㎜以下の砂粒を含む	
1161	〃	〃	13.0	外 9.0	3.6	口縁部斜上方に立ち上がる。	灰褐色	1.5㎜以下の砂粒を含む	
1162	〃	〃	13.5	外 10.6	3.9	〃	淡白灰色	2.0㎜以下の砂粒を含む（黒色粒）	
1163	〃	〃	14.5	外 9.8	4.6	〃	淡黒灰色	1.5㎜以下の砂粒を含む（黒色粒）	
1164	〃	〃	15.4	外 11.0	4.8	〃	黒褐色	2.0㎜以下の砂粒を多く含む	
1165	〃	〃	15.4	外 10.2	5.0	内面仕上げナデ。ロクロ左回り。	暗灰色	1.5㎜以下の砂粒を多く含む（黒色粒）	
1166	〃	〃	15.8	外 11.2	4.5	内面仕上げナデ。底部ヘラケズリ。	淡黒褐色	2.0㎜以下の砂粒を多く含む	
1167	〃	〃	16.9	外 11.9	4.9	内面仕上げナデ。ロクロ左回り。	灰色	1.5㎜以下の砂粒を含む	
1168	〃	〃	14.2	外 10.8	5.1	内面仕上げナデ。底部ヘラケズリ。	淡灰褐色	1.5㎜以下の砂粒を含む	
1169	〃	〃	14.3	外 9.0	6.7	杯部深い。口縁部ゆるく外反。	暗灰色	0.5㎜以下の砂粒を含む（黒色粒）	
1170	〃	〃		外 11.6		内面ヨコナデ、仕上げナデ。	淡黒色	1.5㎜以下の砂粒を含む	底部外面ヘラ描。
1171	〃	〃		外 8.6		底部ヘラケズリ。ロクロ左回り。	淡灰褐色	2.0㎜以下の砂粒を含む（黒色粒）	底部外面ヘラ描。
1172	〃	〃	21.4	外 12.8	4.4	内湾する体部、口縁部上方に立ち上がる。高台端部外方向に肥厚。	淡灰褐色	2.0㎜以下の砂粒を含む（黒色粒）	
1173	〃	〃	22.4	外 13.2	4.4	〃	淡褐色	1.5㎜以下の砂粒を含む	
1174	〃	〃	23.8	外 13.8	5.2	〃ロクロ左回り。	灰白褐色	3.0㎜以下の砂粒を含む	
1175	〃	〃	10.4			底部ヘラオコシのちナデ。	淡灰色	1.0㎜以下の砂粒を少し含む	
1176	〃	〃	11.6		4.0	〃	暗灰色	2.5㎜以下の砂粒を多く含む	
1177	〃	〃	12.0	6.9	3.8	〃	灰白色	0.5～1.0㎜の砂粒を含む	
1178	〃	〃	13.4		4.3	内面ヨコナデ、仕上げナデ。底部ヘラケズリ、ナデ。	灰白色	1.0～2.0㎜の砂粒を多く含む	内面「女」墨書。
1179	〃	〃	13.0	10.4	4.2	〃	灰白色	0.5～2.0㎜の砂粒を少し含む（雲母）	
1180	〃	〃	13.4	8.8	3.9	ロクロ左回り。	灰色	0.5～5.0㎜の砂粒を多く含む	
1181	〃	〃	13.0	6.0	4.3	底部ヘラケズリ、ロクロ左回り。	灰白色	0.5～2.0㎜の砂粒を含む	
1182	〃	〃	13.2			内外面ヨコナデ。底部ヘラケズリ、ナデ。	白褐色	1.0㎜以下の砂粒を含む（黒色粒）	
1183	〃	〃	13.4		4.2	口縁部短かく外反。底部ヘラオコシ、ナデ。	白褐色	1.0㎜以下の砂粒を含む	
1184	〃	〃	13.8	9.0		底部ヘラケズリ、ナデ。	灰白色	0.5～2.0㎜の砂粒を少し含む	
1185	〃	〃	16.0		4.9	底部ヘラケズリ、ロクロ左回り。	暗灰色	2.5㎜以下の砂粒を含む	
1186	〃	〃	18.4		5.0	内面ヨコナデ、底部乱ナデ。底部ヘラケズリ、ロクロ左回り。	淡灰色	1.5㎜以下の砂粒を含む	
1187	〃	高杯	16.4	11.9	11.4	杯部内面ヨコナデ、仕上げナデ。	黒灰色	1.5㎜以下の砂粒を含む	

挿図番号	種別	器種	法量（cm）			形態・手法の特徴	色調	胎土	備考
			口径	底径	器高				
1188	須恵器	高杯	13.8	11.2	10.3	杯部内面ヨコナデ、仕上げナデ。	黒灰褐色	2.5㎜以下の砂粒を含む	
1189	〃	〃	15.8	10.6	10.0	〃	暗灰色	1.0㎜以下の砂粒を含む	
1190	〃	〃	13.4	10.8	10.1	外面1条沈線。	灰褐色	1.5㎜以下の砂粒を含む	
1191	〃	〃	12.2			底部ヘラケズリのちヨコナデ。ロクロ左回り。	暗灰色	1.5㎜以下の砂粒を含む	
1192	〃	〃				脚部内外面ヨコナデ。	黒灰色	1.0㎜以下の砂粒を含む	杯部内面に有機質付着。
1193	〃	〃		11.0		短脚。杯部内面ヨコナデ、仕上げナデ。	黒灰色	0.5㎜以下の砂粒を含む（雲母）	
1194	〃	〃	16.8	10.6	7.5	短脚。杯部外面沈線1条。	暗灰色	4.0㎜以下の砂粒を含む	
1195	〃	〃		9.0		短脚。	黒灰色	1.0㎜以下の砂粒を含む	
1196	〃	〃		8.6		〃	黒褐色	1.0㎜以下の砂粒を含む（雲母）	
1197	〃	脚		4.1		体部外面2条の沈線。体部下半手持ちのヘラケズリ。	淡灰色	2.0㎜以下の砂粒を含む	
1198	〃	〃				頸部、体部に沈線。底部ヘラケズリ。	暗灰褐色	5.0㎜以下の砂粒を含む	
1199	〃	短頸壺	4.7		7.2	外面体部下半ヘラケズリ。	灰白色	0.5～5.0㎜の砂粒を少し含む	
1200	〃	〃	6.6			外面肩部沈線1条。	灰色	0.5㎜前後の砂粒を少し含む	
1201	〃	こね鉢				底部ヘラ先デ刺突。	灰色	0.5～2.0㎜の砂粒を少し含む	〃
1202	〃	短頸壺	11.6		13.6	肩部に沈線1条。体部ヘラケズリ。ロクロ左回り。	灰色	1.0㎜以下の砂粒を含む（黒色粒）	頸部にヘラ描。
1203	〃	〃	9.2			内傾する口縁。体部下半ヘラケズリ。	暗灰色	0.3㎜以下の砂粒を含む	体部にヘラ描。
1204	〃	把手付短頸壺	12.2		22.4	外面体部下半平行タタキのちヨコナデ。	灰色	2.0㎜以下の砂粒を含む	
1205	〃	広口壺		外16.0		大きく外反する口縁。	灰色	0.5㎜前後の砂粒を少し含む	
1206	〃	広口壺		10.5		大きく外反する口縁。外面体部下半手持ちのヘラケズリ。	灰白色	0.5～2.0㎜の砂粒を少し含む	
1207	〃	長頸壺				内外面ヨコナデ。	灰白色	0.5～1.0㎜の砂粒を少し含む	
1208	〃	〃				頸部沈線1条。	灰白色	0.5～1.5㎜の砂粒を含む	寒風産？
1209	〃	〃				〃	灰色	0.5～2.0㎜の砂粒を多く含む	
1210	〃	〃	11.0	8.7		〃	灰色	0.5～2.0㎜の砂粒を含む	
1211	〃	〃	12.3	外12.2	25.4	頸部沈線2条。頸部と肩部の間に突線。	灰色	0.5～2.0㎜の砂粒を含む	
1212	〃	〃				肩部～体部に沈線2条。頸部沈線2条。	灰白色	0.3～1.5㎜の砂粒を少し含む	
1213	〃	〃				肩部に沈線2条。沈線間に櫛状工具による連続刺突文。	灰色	0.5～1.0㎜の砂粒を含む	
1214	〃	〃		外11.2		肩部に沈線1条、櫛状工具による連続刺突文。	明青灰色	0.3～3.0㎜の砂粒を含む	
1215	〃	〃		11.1		肩部に沈線2条。沈線間に櫛状工具による連続刺突文。体部カキ目。	灰白色	0.5㎜前後の砂粒を少し含む	寒風産？
1216	〃	〃	13.9	13.0	34.9	頸部、肩部に沈線。肩部櫛状工具による連続刺突文。体部平行タタキのちヨコナデ。	灰色	0.5～4.0㎜の砂粒を多く含む（黒色粒）	
1217	〃	壺		外10.8		内外面ヨコナデ。	灰白色	0.5～2.0㎜の砂粒を少し含む	
1218	〃	広口壺		外10.4		大きく外反する口縁。	青灰色	0.3～1.0㎜の砂粒を少し含む	
1219	〃	短頸壺	12.4	12.2	19.1	体部下半ヘラケズリ。	灰色	0.5㎜前後の砂粒を少し含む	
1220	〃	壺		11.8		内外面ヨコナデ。	灰色	0.5㎜前後の砂粒を含む	
1221	〃	〃		13.2		外面格子目タタキのちヨコナデ。	暗青灰色	0.5㎜前後の砂粒を少し含む	
1222	〃	甕	13.6			口縁部ヨコナデ。	淡灰褐色	1.5㎜以下の砂粒を含む	
1223	〃	〃	21.2			外面平行タタキのちカキ目。	灰色	1.0～2.0㎜の砂粒を含む（黒色土粒）	
1224	〃	〃	20.6			〃	灰白色	1.0㎜前後の砂粒を少し含む	

挿図番号	種別	器種	法量（cm）			形態・手法の特徴	色調	胎土	備考
			口径	底径	器高				
1225	須恵器	甕	20.0			内面タタキのちヨコナデ。	灰色	1.0㎜前後の砂粒を含む（黒色土粒）	
1226	〃	〃	28.3			口縁端部端面をもち内、外に肥厚。	暗緑灰色	1.0㎜前後の砂粒を含む	
1227	〃	〃	28.4			〃	白灰色	0.5～2.0㎜の砂粒を少し含む	
1228	〃	〃	18.4			大きく外反する口縁。	淡黄色	0.5～4.0㎜の砂粒を多く含む	
1229	〃	〃	17.4			〃	灰白色	0.5㎜前後の砂粒を少し含む	
1230	〃	〃	16.4			外面タタキのちカキ目。	灰色	0.5～1.0㎜の砂粒を含む（黒色土粒）	
1231	〃	〃	23.0			口縁端部内側に肥厚。	暗赤灰色	1.0㎜前後の砂粒を多く含む	
1232	〃	〃	23.6			内外面ヨコナデ。	灰白色	1.0㎜前後の砂粒を含む。（黒色土粒）	
1233	〃	〃	24.0			口縁端部折り込み。	灰色	1.0㎜前後の砂粒を含む（黒色土粒）	
1234	〃	〃	21.0			口縁端部内傾する端面。	灰色	0.5～3.0㎜の砂粒を少し含む	
1235	〃	〃				口縁部に波状文。	灰色	1.0㎜前後の砂粒を含む	
1236	〃	〃				〃	暗灰色	1.0㎜前後の砂粒を多く含む	
1237	〃	〃	22.6			大きく外反し、さらに上方に肥厚する口縁部、内面同心円タタキ、内面下半平行タタキ。	淡灰白色	1.5㎜以下の砂粒を含む	
1238	〃	双耳付鍋	23.0			外面体部沈線3条。内面同心円タタキのちヨコナデ。	黒灰色	1.5㎜以下の砂粒を含む（黒色粒、雲母）	
1239	〃	〃	27.6			内外面タタキのちヨコナデ。	黒灰色	1.0㎜以下の砂粒を含む（雲母）	
1240	〃	〃	34.0			体部外面沈線1条。	暗灰色	1．0㎜以下の砂粒を含む	
1241	〃	双耳付鍋	28.4		25.5	外面平行タタキ。外面肩部カキ目。	黒灰色	1.5㎜以下の砂粒を含む	
1242		甑	22.0	13.8	20.2	外面体部沈線2条。	灰白色	0.5～2.0㎜の砂粒を多く含む	
1243	〃	〃	28.0	15.2	27.7	体部下半格子タタキ、のちヨコナデ。	黒色	0.5～1.5㎜の砂粒を多く含む	
1244	〃	〃	33.5	15.6		外面体部下半ヘラケズリ。	灰白色	0.5～2.0㎜の砂粒を含む	
1245	土師器	杯蓋				内外面ヨコナデ。	淡茶褐色	1.5㎜以下の砂粒を含む	丹塗土器。
1246	〃	杯				〃	褐色	0.5㎜以下の砂粒を少し含む（精良、赤色粒、雲母）	〃
1247	〃	〃				〃	淡褐色	1.0㎜以下の砂粒を含む（雲母）	〃
1248	〃	皿	13.6	11.4		口縁部、内面ヨコナデ。	褐色	1.0㎜以下の砂粒を含む（赤色粒）	丹塗土器。
1249	〃	台付皿		13.2		内面ていねいなヨコナデ。仕上げナデ。外面底部手持ちヘラケズリ。	赤褐色	1.0㎜以下の砂粒を少し含む	〃
1250	〃	皿	9.5			口縁部ヨコナデ。	淡黄褐色	1.0㎜以下の砂粒を含む	
1251	〃	〃	9.6		2.0	〃	淡灰褐色	1.0㎜以下の砂粒を含む（赤色粒）	
1252	〃	〃	20.6			口縁部ヨコナデ。内面ハケメのちナデ。	にぶい橙色	1.0㎜前後の砂粒を多く含む（赤色土粒、雲母）	外面底部に巻き貝痕。
1253	〃	〃	24.2	20.0	3.0	口縁部ヨコナデ。内面オサエ、ナデ。	黒褐色	0.5㎜以下の砂粒を少し含む	〃
1254	〃	〃	10.2		2.2	〃	褐色	2.0㎜以下の砂粒を含む（赤色粒）	
1255	〃	杯	12.0		2.7	口縁部ヨコナデ。底部オサエ、ナデ。	淡茶褐色	2.5㎜以下の砂粒を含む	
1256	〃	皿	12.4		1.4	〃	淡赤褐色	1.5㎜以下の砂粒を含む（赤色粒）	
1257	〃	〃	12.8		1.8	口縁部ヨコナデ。底部ヘラケズリのちナデ。	淡黄褐色	3.0㎜以下の砂粒を多く含む	
1258	〃	杯	12.4		3.1	口縁部ヨコナデ。	黄褐色	1.5㎜以下の砂粒を含む（赤色粒、雲母）	
1259	〃	〃	14.4		3.1	内面ていねいなナデ。	淡黄灰色	0.5㎜以下の砂粒を含む（精良）	
1260	黒色土器	高台付椀	13.6			内面ヘラミガキ。外面ヨコナデ。	淡黄橙色	0.5～2.0㎜の砂粒を少し含む	
1261	〃	〃	18.0	9.2	6.1	内外面ヘラミガキ。	淡灰褐色	1.0㎜以下の砂粒を含む	
1262	〃	〃		7.4		内面ヘラミガキ。	淡褐色	1.0㎜以下の砂粒を含む	
1263	〃	〃		8.0		〃	淡赤褐色	1.0㎜以下の砂粒を含む	
1264	〃	〃	13.6	6.3	5.0	内外面ヘラミガキ。	黒灰色	1.0㎜以下の砂粒を含む	
1265	土師器	鉢	11.6		3.9	内面ていねいなナデ。外面ナデ。	淡赤褐色	0.5㎜以下の砂粒を含む（精良気味）（雲母）	黒斑1ケ所。
1266	〃	〃	11.0		4.1	〃	淡黄灰色	1.0㎜以下の砂粒を含む	
1267	〃	〃	10.8		3.6	内面ていねいなナデ。外面ナデ。	淡赤褐色	0.5㎜以下の砂粒を含む	
1268	〃	〃	10.6		3.6	〃	淡赤褐色	1.0㎜以下の砂粒を含む	
1269	〃	〃	12.6		4.4	口縁部ヨコナデ。内外面オサエ、ナデ。	淡黄褐色	1.0㎜以下の砂粒を含む	黒斑1ケ所。

挿図番号	種別	器種	法量（cm）			形態・手法の特徴	色調	胎土	備考
			口径	底径	器高				
1270	土師器	鉢	11.2			外面体部下半オサエ、ナデ。内面ていねいなナデ。	淡黄灰褐色	1.0㎜以下の砂粒を含む	
1271	〃	〃	11.0		3.6	内面ていねいなナデ。	黄灰褐色	1.0㎜以下の砂粒を含む（精良気味）（赤色粒）	
1272	〃	〃	12.0		4.1	内外面ヨコナデ。	淡灰黄褐色	1.0㎜以下の砂粒を含む（赤色粒）	
1273	〃	〃	11.4		3.8	口縁部ヨコナデ。内面ていねいなナデ。	淡赤褐色	1.5㎜以下の砂粒を多く含む	
1274	〃	〃	11.0		5.3	〃	黄褐色	1.5㎜以下の砂粒を含む（赤色粒）	黒斑1ケ所。
1275	〃	〃	10.6		4.8	〃	淡赤褐色	0.5㎜以下の砂粒を含む	
1276	〃	〃	11.0			口縁部ヨコナデ。内外面オサエ、ナデ。	淡赤褐色	1.0㎜以下の砂粒を含む（赤色粒）	
1277	〃	高杯	20.6			杯部口縁部、外面ヨコナデ。内面ヘラミガキのちヨコナデ。	橙色	1.0㎜前後の砂粒を含む（雲母、赤色土粒）	
1278	〃	〃	20.3			〃	茶黄褐色	1.0㎜以下の砂粒を含む（精良気味）（赤色粒）	
1279	〃	〃	21.3			〃	橙色	1.0㎜前後の砂粒を含む（赤色土粒）	
1280	〃	〃	20.6			内外面ヨコナデ。	浅黄橙色	1.0～2.0㎜の砂粒を含む（赤色土粒、雲母）	
1281	〃	〃	22.6			〃	浅黄橙色	0.5㎜前後の砂粒を含む（雲母、赤色土粒）	
1282	〃	〃	24.5			口縁部、外面ヨコナデ。内面ヘラミガキ。	にぶい橙色	1.0㎜前後の砂粒を含む（赤色土粒）	
1283	〃	〃	25.1			内外面ヨコナデ。	にぶい橙色	0.5～1.0㎜の砂粒を含む（赤色土粒）	
1284	〃	〃	23.4			杯部内面ていねいなヨコナデ。	淡赤褐色	1.5㎜以下の砂粒を含む	
1285	〃	〃	23.5	11.1	8.9	杯部内面ヘラミガキ。外面ヨコナデ。	淡黄褐色	0.5㎜以下の砂粒を含む（雲母、黒色粒）	
1286	〃	〃	15.2			〃	淡黄褐色	1.0㎜以下の砂粒を含む（精良気味）（雲母）	
1287	〃	〃	15.8			〃	黄褐色	1.0㎜以下の砂粒を少し含む（赤色粒）	
1288	〃	〃	14.4	10.0	9.7	脚部内面ヘラケズリ、他ヨコナデ。	にぶい橙色	1.0㎜前後の砂粒を含む（赤色土粒、雲母）	
1289	〃	〃	14.4	10.0	9.7	〃	淡赤褐色	0.5㎜以下の砂粒を含む（雲母、赤色粒）	
1290	〃	〃		10.2		〃	淡赤橙色	0.5㎜前後の砂粒を少し含む（雲母、赤色土粒）	
1291	〃	高杯		10.6		〃	淡橙色	1.0㎜前後の砂粒を少し含む	
1292	〃	〃		13.4		脚端部ヨコナデ、内面ナデ。	黄褐色	0.5㎜以下の砂粒を含む（精良気味）（雲母）	
1293	〃	〃		8.8		〃	淡橙色	0.5㎜前後の砂粒を少し含む	
1294	〃	〃		12.6		杯部内面ていねいなナデ。	淡赤褐色	0.5㎜以下の砂粒を少し含む（精良気味）（赤色粒）	
1295	〃	〃		9.6		脚柱部内面ヘラケズリ。	淡橙色	0.5㎜前後の砂粒を少し含む	
1296	〃	〃		12.4		〃	淡橙色	0.5～1.0㎜の砂粒を少し含む（赤色土粒）	
1297	〃	〃		10.6		〃	淡橙色	0.5㎜前後の砂粒を少し含む	
1298	〃	かまど	20.7			外面ハケメ、ナデ。内面ヘラケズリ。	にぶい橙色	0.5～2.0㎜の砂粒を多く含む（金雲母）	
1299	〃	甕	20.0			大きく外反する口縁。外面タテ方向のハケメ。内面ヘラケズリ。	浅黄橙色	0.5～3.0㎜の砂粒を多く含む	
1300	〃	〃	17.1			内外面ヨコナデ。	灰色	1.5㎜以下の砂粒を含む	
1301	〃	〃	17.4			外反する口縁。端部肥厚。	赤褐色	1.5㎜以下の砂粒を含む	
1302	〃	〃	19.0			ゆるやかに外反する口縁。外面ハケ状工具のちナデ。	淡黄灰色	1.0㎜以下の砂粒を含む（雲母）	
1303	〃	〃	25.2			外面荒いハケメのちナデ。内面ヘラケズリのちヨコナデ。	淡茶灰褐色	3.0㎜以下の砂粒を多く含む	黒斑1ケ所。
1304	〃	〃	21.2			外反する口縁。外面タテ方向のハケメ。	黄橙色	0.5～2.0㎜の砂粒を多く含む（雲母）	
1305	〃	〃	25.4			口縁部内面、内外面ハケメ。	茶褐色	2.0㎜以下の砂粒を含む	
1306	〃	〃	25.8			内面ハケメ。	茶黄褐色	1.5㎜以下の砂粒を含む	
1307	〃	〃				頸部内外面ヨコナデ。	淡黄色	0.5～5.0㎜の砂粒を多く含む	
1308	〃	〃				外面平行タタキのヨコナデ。内面同心円タタキのちヨコナデ。	黄橙色	0.5～2.0㎜の砂粒を多く含む	
1309	〃	かまど				〃	淡黄色	0.5～3.0㎜の砂粒を多く含む	
1310	〃	〃				外面平行タタキ、内面同心円タタキ。	浅黄橙色	0.5～3.0㎜の砂粒を多く含む	
1311	〃	甕				ゆるやかに外反する口縁。口縁部ヨコナデ。外面平行タタキ。	浅黄橙色	0.5～3.0㎜の砂粒を多く含む	
1312	〃	〃				外面頸部下平行タタキ。	灰褐色	0.5～3.0㎜の砂粒を多く含む	
1313	〃	〃				外面平行タタキ、内面同心円タタキ。	黄橙色	0.5～3.0㎜の砂粒を多く含む	

挿図番号	種別	器種	法量（cm）			形態・手法の特徴	色調	胎土	備考
			口径	底径	器高				
1314	土師器	甕				外面平行タタキ、内面同心円タタキ。	褐色	0.5～5.0㎜の砂粒を含む	
1315	〃	〃				〃	浅黄橙色	0.5～5.0㎜の砂粒を多く含む	
1316	〃	〃				〃	にぶい橙色	0.5～3.0㎜の砂粒を多く含む	
1317	〃	〃				〃	にぶい橙色	0.5～5.0㎜の砂粒を多く含む	
1318	〃	〃				〃	明褐色	0.5～3.0㎜の砂粒を多く含む	
1319	〃	〃				〃	黄橙色	0.5～3.0㎜の砂粒を多く含む	
1320	〃	〃				〃	黄橙色	0.5～2.0㎜の砂粒を多く含む	
1321	〃	〃				〃	にぶい橙色	0.5～3.0㎜の砂粒を多く含む	
1322	〃	〃				〃	黄橙色	0.5～3.0㎜の砂粒を多く含む	
1323	〃	〃				〃	浅黄橙色	0.5～3.0㎜の砂粒を多く含む	
1324	〃	〃				〃	浅黄橙色	0.5～3.0㎜の砂粒を多く含む	
1325	〃	〃				〃	にぶい褐色	0.5～3.0㎜の砂粒を含む	
1326	〃	かまど				〃	浅黄橙色	0.5～7.0㎜の砂粒を多く含む	
1327	〃	〃				〃	浅黄橙色	0.5～3.0㎜の砂粒を多く含む	
1328	〃	〃				〃	浅黄橙色	0.5～7.0㎜の砂粒を多く含む	
1329	緑釉陶器	皿				口縁端部やや外反。	釉（淡緑色）淡灰色	（精良、堅緻）	
1330	〃	〃				〃	釉一（淡緑色）	〃	
1331	〃	〃				内外面ヨコナデ。	釉（淡黄緑色）灰褐色	（精良、堅緻）	
1332	〃	椀		5.6		〃	釉	〃	
1333	〃	〃		6.0		内面ヘラミガキ。	内外一釉ハクリ	0.5㎜以下の砂粒を少し含む 精良に近い	
1334	緑釉陶器	椀		8.0		内面沈線1条。	釉（淡黄緑色）	0.5㎜以下の砂粒を少し含む	
1335	白磁	碗				玉縁。	釉（明緑色）地 白色	緻密	12～13C。
1336	〃	〃				〃	釉（黄）地 白色	〃	〃
1337	〃	〃				〃	〃	〃	〃
1338	〃	〃				立ち縁。	白色	〃	〃
1339	〃	皿				口ハゲ。	釉 透明 地 白色	緻密	13～14C中頃。
1340	〃	碗				反り縁。	釉 黄 地 灰白色	〃	12～13C。
1341	〃	〃		8.0		削り出し高台。（玉縁）	白色	〃	〃
1342	〃	皿				平底、口ハゲ。	白色	〃	13～14C中頃。
1343	青磁	碗	14.7			鎬蓮華文。	釉（緑）地白色	〃	龍泉窯系。
1344	〃	〃					釉（緑）地 白色	〃	同安窯系。
1345	〃	〃				画花文。連弁なし。	〃	〃	龍泉窯系。
1346	〃	〃				鎬蓮華文。	釉 明緑色 地 白色	〃	〃
1347	〃	〃	14.1				釉（緑）地 薄いグレー	〃	明。15～16C前半。
1348	青磁	皿		6.4		櫛書き。	釉（明緑色）地 浅黄橙色	〃	同安窯系12～13C。

挿図番号	種別	器種	法量（cm）			形態・手法の特徴	色調	胎土	備考
			口径	底径	器高				
1349	青磁	碗				画華文、蓮弁なし。	釉（緑） 地 浅い橙色	緻密	龍泉窯系。
1350	〃	碗					釉（白） 地 白色	〃	
1351	〃	〃		5.5		削り出し高台。	釉(明緑色) 地白色	緻密	
1352	瓦	丸瓦				凸面ヘラケズリ（面取り）、凹面布目。	暗灰褐色	0.5㎜以下の砂粒を含む	
1353	〃	〃				凹面縄目。	黒褐色	0.5㎜以下の砂粒を少し含む（精良）	
1354	〃	〃				凹面布目。	暗茶色	3.0㎜以下の砂粒を含む	
1355	〃	〃				凸面ナデ。凹面布目。	〃	0.5㎜以下の砂粒を含む	
1356	須恵器	風字硯				内面、底部オサエ、ナデ。側壁外面ヘラケズリ。	暗灰色	0.5㎜以下の砂粒を含む	
1357	〃	〃				側壁、底部ヘラケズリ。内面ナデ。	灰色	0.5㎜以下の砂粒を少し含む（精良、堅緻）	
1358	〃	杯身	9.3			底部ヘラオコシのちナデ、他ヨコナデ。	灰色	1.0～2.0㎜の砂粒を多く含む（黒色土粒）	
1359	〃	〃	9.6		3.5	〃	灰色	2.0㎜前後の砂粒を含む	
1360	〃	〃	10.1		4.1	〃	青灰色	2.0㎜前後の砂粒を多く含む	
1361	〃	〃	11.2			〃	灰白色	1.0～2.0㎜の砂粒を多く含む （黒色土粒、雲母）	
1362	〃	〃	9.9		3.0	〃	灰白色	1.0㎜前後の砂粒を含む	
1363	〃	〃	10.5		3.7	〃	灰白色	2.0㎜前後の砂粒を含む	
1364	〃	〃	10.6			〃	灰白色	1.0～2.0㎜の砂粒を含む（雲母、黒色土粒）	
1365	〃	杯蓋	20.4		3.5	外面天井部ヘラケズリ、ヨコ充内面ヨコナデ仕上げ充	灰白色	2.0㎜前後の砂粒を含む（雲母）	
1366	〃	〃	14.8		3.2	外面天井部ヘラケズリ、ヨコナデ。内面ヨコナデ、仕上げナデ。ロクロ左回り	白褐色	1.0㎜以下の砂粒を含む	
1367	〃	〃	14.8		2.6	〃	暗灰色	0.5㎜以下の砂粒を含む	
1368	〃	〃	14.2		2.9	〃	暗灰色	1.0㎜以下の砂粒を多く含む	
1369	〃	〃	15.8		3.5	〃	灰色	1.0㎜以下の砂粒を含む（黒色粒）	
1370	〃	〃	16.0		3.9	外面天井部ヘラケズリ、ヨコナデ。内面ヨコナデ、仕上げナデ。	暗灰褐色	1.0㎜以下の砂粒を含む	
1371	〃	〃	16.2		3.2	〃	暗灰色	2.0㎜以下の砂粒を含む	外面天井部ヘラ描。
1372	〃	〃	15.4		3.2	〃	淡灰色	0.5㎜以下の砂粒を含む	
1373	〃	〃	15.8		2.7	〃	暗灰色	1.0㎜以下の砂粒を含む	
1374	〃	〃				〃	白褐色（緑釉）	0.5㎜以下の砂粒を含む （精良）	寒風産？
1375	〃	〃	17.6		3.4	〃	暗灰褐色	1.0㎜以下の砂粒を含む（褐色粒）	
1376	〃	〃	18.8		3.3	〃	黒褐色	3.0㎜以下の砂粒を含む	
1377	〃	〃	16.8		2.1	〃	淡灰色	2.0㎜以下の砂粒を含む	
1378	〃	〃	17.0		2.4	〃	灰褐色	1.0㎜以下の砂粒を含む	
1379	〃	蓋	11.0		4.0	宝珠つまみ。外面天井部ヘラケズリ。	灰白色	2.0㎜前後の砂粒を少し含む	
1380	〃	〃	13.5		4.7	擬宝珠つまみ。内面ヨコナデ、仕上げナデ。	灰色	2.0㎜前後の砂粒を含む（雲母）	
1381	〃	〃	8.4			口縁端部内外に肥厚。	淡灰褐色	1.0㎜以下の砂粒を含む	
1382	〃	〃	8.8			〃	淡灰褐色	1.0㎜以下の砂粒を含む	
1383	〃	〃	8.5		3.7	天井部やや丸味をもつ、ヘラケズリ。口縁部短かく外反。	緑色	1.0㎜前後の砂粒を含む（黒色土粒）	
1384	〃	杯身	12.8		3.9	底部ヘラケズリ。	灰白色	1.0㎜前後の砂粒を含む（黒色土粒）	
1385	〃	〃	12.2		4.4	底部ヘラオコシ、ナデ。	灰白色	1.0㎜以下の砂粒を含む	
1386	〃	〃	12.8		4.3	底部ヘラケズリ、ナデ。	暗緑灰色	2.0㎜以下の砂粒を多く含む	
1387	〃	〃	12.7		4.3	底部ヘラオコシ、ナデ。	灰色	1.0㎜前後の砂粒を多く含む（黒色土粒）	
1388	〃	〃	11.8		4.5	底部ヘラケズリ、ナデ。ロクロ左回り	灰色	0.2～3.0㎜の砂粒を多く含む	
1389	〃	〃	12.3			底部ヘラケズリ、ナデ。	灰色	1.0～2.0㎜の砂粒を含む（黒色土粒）	
1390	〃	〃	12.2			底部ヘラオコシ、ナデ。	暗灰色	1.5 ㎜以下の砂粒を含む	

挿図番号	種別	器種	法量（cm）			形態・手法の特徴	色調	胎土	備考
			口径	底径	器高				
1391	須恵器	杯身	13.5		4.5	内湾して立ち上がる口縁部。	灰白色	1.0～2.0㎜の砂粒を多く含む	
1392	〃	〃	12.9		5.2	底部ヘラケズリ、ナデ。	灰色	1.0～2.0㎜の砂粒を多く含む（雲母）	
1393	〃	〃	13.8		5.0	〃	灰白色	1.0～2.0㎜の砂粒を含む（雲母）	
1394	〃	〃	13.9		4.5	口縁部外反。底部ヘラケズリ、ナデ。	灰白色	1.0～2.0㎜の砂粒を含む	
1395	〃	〃	15.2			底部ヘラケズリ、ナデ。	灰色	1.0～2.0㎜の砂粒を多く含む（黒色土粒）	
1396	〃	〃	16.5		4.2	底部手持ちのヘラケズリ。	灰色	1.0～2.0㎜の砂粒を多く含む（黒色土粒）	
1397	〃	〃	15.2		5.4	底部ヘラケズリ、ナデ。	灰白色	1.0～2.0㎜の砂粒を多く含む（黒色土粒）	
1398	〃	〃	16.8			内外面ヨコナデ。	淡灰色	1.0㎜以下の砂粒を含む	
1399	〃	〃	22.3		6.2	大型品。底部ヘラオコシ、ナデ。	灰白色	1.0～4.0㎜の砂粒を含む（黒色土粒）	
1400	〃	〃	13.8			丸味をもつ底部。直線的立ち上がる口縁。底部ヘラケズリ。ロクロ左回り。	灰白色	1.0～2.0㎜の砂粒を含む（黒色土粒）	
1401	〃	〃	13.3		5.5	底部ヘラオコシ、ナデ。	暗灰色	2.0㎜前後の砂粒を多く含む	焼成瓦質。内面ヘラ描文字。
1402	〃	〃	13.4		5.5	〃	暗灰色	2.0㎜前後の砂粒を多く含む	〃
1403	〃	〃	15.5		6.2	底部ヘラケズリ、ロクロ左回り。	灰色	1.0～2.0㎜の砂粒を含む	外面底部ヘラ描。
1404	〃	〃	10.7	外6.6	5.0	小型品。底部ヘラケズリ、ロクロ左回り。	暗灰色	1.5㎜以下の砂粒を含む	
1405	〃	〃	10.0	外7.3	4.4	小型品。口縁端部やや外反。	灰白色	1.0～2.0㎜の砂粒を多く含む（雲母）	
1406	〃	〃	10.1	外5.8	4.1	小型品。底部ヘラケズリ。ロクロ左回り。	暗灰褐色	1.0㎜以下の砂粒を含む（黒色粒）	
1407	〃	〃	—	外6.0		小型品。内面ヨコナデ、仕上げナデ。	淡灰色	1.0㎜以下の砂粒を含む	
1408	〃	〃	—	外7.4		内面ヨコナデ、仕上げナデ。	白灰色	1.5㎜以下の砂粒を多く含む	
1409	〃	〃	12.8	外9.2	4.3	〃	灰色	0.5㎜以下の砂粒を含む（黒色粒）	
1410	〃	〃	13.6	外9.2	4.2	〃	灰色	1.0㎜前後の砂粒を含む（黒色土粒、白雲母）	
1411	〃	〃	13.4	外10.4	4.0	〃	暗灰色	1.0㎜以下の砂粒を含む	
1412	〃	〃	12.8	外9.0	4.8	底部ヘラケズリ、ロクロ左回り。	灰褐色	2.0㎜以下の砂粒を含む	
1413	〃	〃	13.5	外11.3		〃	灰色	1.0㎜前後の砂粒を多く含む（黒色粒）	
1414	〃	〃	13.8	外9.9	3.8	底部ヘラケズリ、ロクロ左回り。	白褐色	2.5㎜以下の砂粒を含む	
1415	〃	〃	13.7	外9.8	4.4	〃	白褐色	2.5㎜以下の砂粒を含む	
1416	〃	〃	14.2	外10.6	3.8	底部ヘラケズリ。	暗灰緑色	0.5㎜以下の砂粒を含む	
1417	〃	〃	14.5	外11.0	4.4	底部ヘラケズリ、ロクロ左回り。	灰白色	1.0㎜前後の砂粒を多く含む	
1418	〃	〃	15.4	外11.0	4.3	口縁部やや外反。	暗灰色	1.5㎜以下の砂粒を含む（黒色粒）	
1419	〃	〃	15.6	外12.9	4.6	内面仕上げナデ。	灰色	砂粒ほとんど含まない。黒色粒を少し含む	
1420	〃	〃	16.3	外10.8	4.6	内面仕上げナデ	灰色	1.0㎜以下の砂粒を含む（黒色粒）	
1421	〃	〃		外11.8		〃	灰褐色	1.0㎜以下の砂粒を含む（黒色粒）	

挿図番号	種別	器種	法量（cm）			形態・手法の特徴	色調	胎土	備考
			口径	底径	器高				
1422	須恵器	杯身	－	外 11.6		底部ヘラケズリ。	白褐色	0.5㎜以下の砂粒を含む（黒色粒）	
1423	〃	〃	－	11.8		〃	灰色	2.0㎜以下の砂粒を含む（黒色粒）	
1424	〃	〃	17.5	11.6	5.0	底部ヘラケズリ、ロクロ左回り。	暗灰褐色	2.0㎜以下の砂粒を含む	
1425	〃	〃	13.5	外 11.2	5.0	〃	黒褐色	3.0㎜以下の砂粒を含む	
1426	〃	〃		外 11.6		内面仕上げナデ。	灰白色	1.5㎜以下の砂粒を含む（黒色粒）	
1427	〃	〃	17.2	外 11.7	5.0	内湾気味に立ち上がる口縁。	灰色	1.0㎜前後の砂粒を含む	
1428	〃	〃	18.4	外 14.0	4.8	底部ヘラケズリ、ロクロ左回り。	暗灰色	1.5㎜以下の砂粒を含む	
1429	〃	〃	14.2	外 8.6	7.3	杯部深い。底部ヘラケズリ。	灰白色	1.5㎜以下の砂粒を含む	
1430	〃	〃		外 10.8		底部ヘラケズリ。	灰白色	1.0㎜前後の砂粒を含む（黒色土粒）	外面底部ヘラ描。
1431	〃	高杯	16.4	11.3	13.4	杯部内面ヨコナデ、乱ナデ。	灰白色	2.0㎜前後の砂粒を含む	
1432	〃	〃	15.6	13.2	11.5	杯部内面ヨコナデ、仕上げナデ。	灰色	1.5㎜以下の砂粒を含む（赤色粒）	
1433	〃	〃		12.0		〃	暗灰色	1.0㎜以下の砂粒を含む	
1434	〃	〃		11.0		〃	黒褐色	1.0㎜以下の砂粒を含む	
1435	〃	〃		9.7		短脚。脚部ヨコナデ。	淡灰色	1.0㎜以下の砂粒を含む	
1436	〃	〃		7.9		杯部底部ヘラケズリ。	暗灰色	1.0㎜以下の砂粒を含む	
1437	〃	〃	8.8	7.8	8.8	杯部底部ヘラケズリ。脚柱部沈線1条。	暗緑灰色（白褐色－釉）	3.0㎜以下の砂粒を含む	
1438	〃	〃		8.0		〃	灰褐色	1.5㎜以下の砂粒を含む	
1439	〃	平瓶	7.0			外面沈線1条。	暗灰色	1.5㎜以下の砂粒を含む	
1440	〃	口縁部	7.6			内湾気味に立ち上がる。外面沈線2条。	暗灰色	1.5㎜以下の砂粒を含む	
1441	〃	〃	10.4			内外面ヨコナデ。	黒褐色	0.5㎜以下の砂粒を含む	
1442	〃	短頸壺	5.5		6.1	口縁部短くやや外反。	灰白色	1.0～2.0㎜の砂粒を多く含む（黒色土粒）	外面体部ヘラ描。
1443	〃	壺		7.2		外面底部手持ちのヘラケズリ。	暗灰色（一部釉）	2.0㎜以下の砂粒を含む	
1444	〃	長頸壺		外 12.8		外面体部下半ヘラケズリのちヨコナデ。	灰白色	1.0～2.0㎜の砂粒を含む（黒色土粒）	
1445	〃	短頸壺				外面肩部沈線1条。	暗灰色	2.0㎜以下の砂粒を含む	
1446	〃	長頸壺				頸部沈線2条。	暗灰色（白灰褐色－釉）	0.3㎜以下の砂粒を含む	
1447	〃	〃				頸部沈線1条。	灰色	1.5㎜以下の砂粒を含む	
1448	〃	壺		外 11.6		外面体部下半ヘラケズリ。	暗灰色	2.0㎜以下の砂粒を含む	
1449	〃	〃		外 14.0		外面体部下半ヘラケズリ。ロクロ左回り。	暗灰色	1.5㎜以下の砂粒を含む	
1450	〃	長頸壺		19.2		外面体部下半ヘラケズリ、ロクロ左回り。内面底部手持ちのヘラケズリ。	灰色	1.0～3.0㎜の砂粒を含む（黒色土粒）	
1451	〃	壺底部	－	11.4		底部ヘラオコシ。内外面ヨコナデ。	暗青灰色	1.0～2.0㎜の砂粒を含む	外面体部下半ヘラ描。
1452	〃	壺	12.6			口径小さく外反する口縁。	淡灰色	1.5㎜以下の砂粒を含む	
1453	〃	甕	10.0			口縁端部上方につまみ出す。（横瓶か）	灰色	1.0㎜以下の砂粒を含む	
1454	〃	〃	36.8			頸部に波状文2帯。	灰色	1.0㎜前後の砂粒を含む（雲母）	
1455	〃	〃	18.8			外面タタキのちカキ目。	灰白色	1.0～2.0㎜の砂粒を含む（黒色土粒）	

挿図番号	種別	器種	法量（cm）			形態・手法の特徴	色調	胎土	備考
			口径	底径	器高				
1456	須恵器	甕	21.2			外反する口縁。	灰色	1.0～2.0㎜の砂粒を含む（黒色土粒）	
1457	〃	〃	21.3			口縁端肥厚。	灰色	1.0㎜前後の砂粒を多く含む（黒色土粒）	
1458	〃	〃	19.3			口縁端部肥厚、内側につまみだす。	灰色	1.0～2.0㎜の砂粒を含む（雲母）	外面頸部にヘラ描。
1459	〃	〃	26.0			口縁端面をもつ。	暗灰色	1.0㎜前後の砂粒を含む（黒色土粒）	
1460	〃	〃	28.3			〃	暗灰色	1.0～2.0㎜の砂粒を多く含む（黒色土粒）	
1461	〃	〃	27.9			外面タタキのちカキ目。	灰色	1.0～2.0㎜の砂粒を含む（黒色土粒）	
1462	〃	〃	16.2			〃	灰色	1.0～2.0㎜の砂粒を含む（黒色土粒）	
1463	〃	〃	22.0			口縁端面をもつ。	灰色	1.0㎜前後の砂粒を含む（黒色土粒）	外面頸部にヘラ描。
1464	〃	〃	22.6			口縁部折り込み。	灰色	1.0～2.0㎜の砂粒を多く含む（黒色土粒）	
1465	〃	〃				口縁部櫛描文。	暗緑灰色	1.5㎜以下の砂粒を含む	
1466	〃	〃				外面平行タタキのちヨコナデ。内面同心円タタキの中央に「十」字形。	灰褐色	2.0㎜以下の砂粒を多く含む	
1467	〃	〃				〃	灰色	〃	
1468～1474	〃	〃				外面平行タタキ。内面体部下半同心タタキ。上半同心円タタキのち平行タタキ。同心円タタキの中央「米」字形。	暗緑灰色	0.5㎜前後の砂粒を含む	1468～1474同一個体。
1475	〃	横瓶	13.1			口縁部ヨコナデ。	灰白色	1.0～2.0㎜の砂粒を含む（黒色土粒）	
1476	〃	鍋	33.4			体部沈線２条。	黒褐色	2.5㎜以下の砂粒を含む	
1477	〃	鉢	35.2			内湾気味に立ち上がる口縁。内面同心円タタキのち仕上げナデ。	黒褐色	1.5㎜以下の砂粒を含む	
1478	〃	甑	26.0	16.6	25.5	外面体部上半沈線２条。	黒褐色	1.5㎜以下の砂粒を含む	
1479	〃	〃	26.0			外面沈線２条。	黒褐色	1.0㎜以下の砂粒を含む	
1480	〃	〃	26.0	18.0	24.0	外面体部沈線２条。	黒褐色	3.0㎜以下の砂粒を含む	
1481	〃	〃		15.6		内外面体部下端ヘラケズリ。	淡褐色	1.5㎜以下の砂粒を含む	
1482	〃	〃		14.6		内面体部下半ヘラケズリ。	淡灰色	1.0㎜以下の砂粒を含む	
1483	〃	〃		1.3	4.3	３面ヘラケズリ。	黒褐色	0.5㎜以下の砂粒を含む	
1484	〃	〃		1.5	2.2	側面ヘラケズリ。	黒灰色	1.5㎜以下の砂粒を含む	
1485	土師器	杯蓋				内外面ヨコナデ。	淡茶黄色	0.5㎜以下の砂粒を少し含む（精良）	丹塗土器。
1486	〃	杯				口縁部短かく外反。口縁部、内面ヨコナデ。	淡褐色	0.5㎜以下の砂粒を含む	〃
1487	〃	皿				口縁端部段をもつ。	褐色	1.0㎜以下の砂粒を含む（赤色粒）	〃
1488	〃	杯	15.6		3.4	外面底部ヘラケズリ、ナデ。	白褐色	1.0㎜以下の砂粒を含む（精良）	〃
1489	〃	〃	16.8			口縁端部短かく外反。口縁部ヨコナデ。	褐色	0.5㎜以下の砂粒を少し含む（堅緻気味）	〃
1490	〃	杯身	16.6			底部手持ちのヘラケズリ。	淡褐色	1.0㎜以下の砂粒を含む	〃
1491	〃	〃	19.0			〃	淡褐色	0.5㎜以下の砂粒を少し含む、精良気味	〃
1492	〃	〃	15.8			口縁端部内側に段。内面に暗文。	淡茶黄褐色	0.5㎜以下の砂粒を含む（雲母）	〃
1493	〃	杯		10.0		底部ヘラケズリ、ナデ。	淡褐色	2.0㎜以下の砂粒を含む	〃
1494	〃	高台付皿	23.6	13.2	4.8	口縁端部内側に沈線。内外面体部ヘラミガキ、ヨコナデ。内面に暗文。	淡黄灰色	1.0㎜以下の砂粒を含む（精良気味）（雲母）	〃
1495	〃	杯				底部ヘラケズリ。	淡褐色	0.5㎜以下の砂粒を少し含む（精良、雲母）	〃
1496	〃	〃				内外面ヨコナデ。	淡茶灰褐色	1.0㎜以下の砂粒を含む（黒色粒）	〃
1497	〃	〃				〃	淡褐色	0.5㎜以下の砂粒を含む（雲母）	〃
1498	〃	〃				〃	淡褐色	0.5㎜以下の砂粒を少し含む（赤色粒、精良）	〃
1499	〃	〃				〃	淡褐色	1.0㎜以下の砂粒を少し含む（赤色粒）	〃
1500	〃	皿				〃	淡褐色	0.5㎜以下の砂粒を含む（精良）	〃
1501	〃	〃				〃	淡褐色	0.5㎜以下の砂粒を含む（雲母）	〃
1502	〃	杯高台		外8.0		〃	白褐色	0.5㎜以下の砂粒を少し含む（精良）	〃
1503	〃	杯	9.9		2.9	〃	淡黄褐色	（精良）	
1504	〃	〃	13.2			底部ヘラケズリ、ナデ。	淡赤褐色	（精良）	
1505	〃	杯身	12.4		3.1	底部ヘラケズリ、ナデ。	淡黄灰色	1.0㎜以下の砂粒を含む（赤色粒）	丹塗土器。

挿図番号	種別	器種	法量（cm）			形態・手法の特徴	色調	胎土	備考
			口径	底径	器高				
1506	土師器	杯身	12.6	8.4	2.7	口縁内側沈線1条。	淡褐色	0.5㎜以下の砂粒を少し含む（精良気味）	丹塗土器。
1507	〃	皿	15.0			〃	淡茶褐色	1.0㎜以下の砂粒を含む（赤色粒、雲母）	〃
1508	〃	〃	17.8			内外面ヨコナデ。	淡褐色	0.5㎜以下の砂粒を含む	〃
1509	〃	〃	17.2	15.2	1.7	底部ヘラケズリ。	褐色	0.5㎜以下の砂粒を少し含む	
1510	〃	杯	13.6			口縁端部内側に沈線。	淡赤褐色	0.5㎜以下の砂粒を多く含む 赤色粒（精良気味）	
1511	〃	〃	11.0		3.2	内外面ヨコナデ。底部ナデ。	淡赤褐色	1.0㎜以下の砂粒を少し含む	
1512	〃	〃	11.1		2.8	〃	淡黄褐色	0.5㎜以下の砂粒を含む	
1513	〃	〃	12.2		2.9	〃	淡赤褐色	2.0㎜以下の砂粒を含む（赤色粒）	
1514	〃	〃	12.8		5.1	〃	淡赤黄褐色	0.5㎜以下の砂粒を少し含む、精良（赤色粒）	
1515	〃	皿	13.0		1.4	内面仕上げナデ。	灰白色	0.5㎜以下の砂粒を含む	
1516	〃	椀	10.0		4.0	口縁部、内面ていねいなナデ。	茶褐色	0.5㎜以下の砂粒を少し含む（精良に近い） （赤色粒を多く含む）	
1517	〃	〃	11.2			〃	淡褐色	0.5㎜以下の砂粒を少し含む(赤色粒を多く含む)	
1518	〃	〃	12.0		4.2	〃	淡赤褐色	1.0㎜以下の砂粒を少し含む	
1519	〃		11.4	5.8	4.3	口縁部ヨコナデ。	褐色	1.0㎜以下の砂粒を含む	黒色土器。
1520	〃		15.0	7.8	6.0	〃	褐色	1.5㎜以下の砂粒を含む（雲母、赤色粒）	〃
1521	〃	高杯				脚柱部ヘラケズリ面取り（9面）	〃	0.5㎜以下の砂粒を含む（精良気味）	丹塗土器。
1522	〃	〃				〃	〃	0.5㎜以下の砂粒を少し含む（精良気味）	〃
1523	〃	〃				〃	淡褐色	1.5㎜以下の砂粒を含む	〃
1524	〃	〃	13.8			内面ていねいなナデ。	淡赤褐色	0.5㎜以下の砂粒を少し含む 赤色粒を多く含む	
1525	〃	〃	14.0	10.4	10.0	杯部内外面ヨコナデ。	淡褐色	2.0㎜以下の砂粒を含む	
1526	〃	〃		10.0		脚柱部内面ヘラケズリ。	淡赤茶褐色	0.5㎜以下の砂粒を少し含む（精良、赤色粒）	
1527	〃	〃		11.2		〃	淡赤褐色	1.5㎜以下の砂粒を含む	
1528	〃	〃		9.4		〃	淡茶褐色	1.0㎜以下の砂粒を含む（赤色粒）	
1529	〃	〃		8.6		〃	淡赤橙色	0.5㎜前後の砂粒を少し含む	
1530	〃	甕	14.6			口縁部外面ハケメ。内面オサエ、ナデ。	茶灰色	3.0㎜以下の砂粒を多く含む	
1531	〃	〃	20.0			外面ヘラ状工具、ハケメ、ナデ。	淡褐色	1.5㎜以下の砂粒を含む	
1532	〃	〃	18.7			内面ヘラケズリ。	灰褐色	2.0㎜以下の砂粒を多く含む	
1533	〃	〃	22.0			〃	淡褐色	1.5㎜以下の砂粒を含む（雲母）	
1534	〃	〃	21.0			肥厚する口縁。内面ヘラケズリ。	淡褐色	1.0㎜以下の砂粒を多く含む（赤色粒）	
1535	〃	〃	23.0			口縁部ヨコナデ。	灰褐色	2.0㎜以下の砂粒を多く含む	
1536	〃	〃	26.0			〃	淡茶灰色	1.0㎜以下の砂粒を含む	
1537	〃	〃				内面ヘラケズリ。	淡褐色	1.5㎜以下の砂粒を含む（雲母）	
1538	〃	〃				内外面荒いハケメ。	暗灰色	1.5㎜以下の砂粒を含む	
1539	〃	把手付鍋	23.8			口縁部内面、外面ハケメ。	褐灰色	1.0㎜前後の砂粒を多く含む （赤色土粒）	
1540	〃	甑		12.0		外面荒いハケメ。	黄茶褐色	1.5㎜以下の砂粒を含む	
1541 〜 1555	〃	甕				外面平行タタキ。内面同心円タタキ。	淡黄褐色 黄橙色	0.5〜3.0㎜の砂粒を多く含む	
1556	〃	甑				外面平行タタキのちハケ状工具。	浅黄橙色	2.5㎜以下の砂粒を含む	
1557	〃	〃				口縁部ヨコナデ、内外面タタキ。	浅黄橙色	0.5〜3.0㎜の砂粒を多く含む	
1558	〃	〃				〃	淡黄色	0.5〜4.0㎜の砂粒を多く含む	
1559	緑釉陶器	椀				内外面ヨコナデ。	釉（濃緑色） 暗灰色	（精良、堅緻）	
1560	〃	〃				口縁端部外に開く。	釉（淡黄緑色） 淡灰褐色	（精良、堅緻）	
1561	〃	〃				〃	釉（緑色） 暗灰色	（精良、堅緻）	

挿図番号	種別	器種	法量（cm）			形態・手法の特徴	色調	胎土	備考
			口径	底径	器高				
1562	緑釉陶器	椀				口縁端部外に開く。	釉(緑色) 灰色	（精良、堅緻）	
1563	白磁	碗				玉縁。	釉 透明 地 白色	微密	12～13C。
1564	〃	〃				〃	釉(白色) 地 白色	〃	〃
1565	〃	〃				玉縁でない口縁部をもつ高台。	釉(緑色) 中 白色	〃	〃
1566	瓦	平瓦				凸面縄目。	淡灰色	0.5㎜以下の砂粒を含む	
1567	〃	丸瓦				〃	灰色	1.5㎜以下の砂粒を含む（長石）	
1568	陶硯	円面硯				長方形透し（10単位）	青灰色	0.5～2.0㎜の砂粒を少し含む	
1569	〃	風字硯				内外面ナデ。	灰色	1.0㎜以下の砂粒を含む	
1570	〃	〃				敷居有り。	灰色	1.0㎜以下の砂粒を含む	
1571	須恵器	杯蓋				碁石状のつまみ。	黒褐色	2.0㎜以下の砂粒を含む	
1572	〃	〃				〃	暗灰白色	1.5㎜以下の砂粒を含む	
1573	〃	杯身 (高台)	18.0	外 9.2	2.6	輪状のつまみ。口縁端部肥厚。内面ヨコナデ、仕上げナデ。ロクロ左回り。	淡灰褐色	2.0㎜以下の砂粒を含む	
1574	〃	〃	13.6	外 10.4	4.0	内外面ヨコナデ。	白褐色	1.0㎜以下の砂粒を含む	
1575	〃	〃	12.4	外 10.0	3.6	〃	暗灰色	2.0㎜以下の砂粒を含む	
1576	〃	〃	18.0	外 12.2	4.6	やや大型品。内面ヨコナデ、仕上げナデ。	淡灰褐色	2.0㎜以下の砂粒を含む	
1577	〃	杯身	17.9	外 13.4	5.9	内外面ヨコナデ。	灰白色	0.3～2.0㎜の砂粒を少し含む	
1578	〃	〃	16.8	外 10.1	6.3	口縁部直線的に斜上方に立ち上がる。	灰色	0.3～2.0㎜の砂粒を含む	
1579	〃	高杯	12.8			内面ヨコナデ、仕上げナデ。	灰褐色	2.0㎜以下の砂粒を含む	
1580	〃	〃				杯部外面ヘラケズリ、内面ヨコナデ。	淡灰色	1.5㎜以下の砂粒を含む（石英、長石）	
1581	〃	〃		9.8		脚端部肥厚。内面しぼり痕。	灰色	2.0㎜以下の砂粒を含む	
1582	〃	長頸壺	11.4			大きく外反する口縁部。	灰白色	0.5～3.0㎜の砂粒を多く含む （雲母）	
1583	須恵器	長頸壺				頸部に2条の凹線。	灰白色	0.5～1.0㎜の砂粒を少し含む	
1584	〃	短頸壺	6.7		7.7	やや内傾する口縁部。肩部下半に1条の凹線。ロクロ右回り。	灰白色	0.5～3.0㎜の砂粒を含む	
1585	〃	器台	7.8	7.2	4.1	口縁部から下方に垂れ下がり。内外面ヨコナデ。	灰白色	0.5～2.0㎜の砂粒を多く含む	用途不明。
1586	〃	甕	33.2			口縁端部上方に肥厚。	灰色	0.5～2.0㎜の砂粒を多く含む	
1587	亀山焼	〃	32.6			外面格子タタキ。内面ハケ状工具、ナデ。	灰色	2.5㎜以下の砂粒を含む	
1588	須恵器	把手付鍋				把手上面に3本のヘラによる切り込み。	暗灰色	0.5㎜以下の砂粒を含む	1717と同一個体。
1589	土師器	杯	12.0	9.1	3.1	内外面ヨコナデ、底部ヘラ切り。	淡黄褐色	0.5㎜以下の砂粒を含む（赤色粒）	丹塗土器。
1590	〃	〃				〃	淡黄褐色	0.5㎜以下の砂粒を少し含む（雲母）	〃
1591	〃	〃	13.8	9.0	3.7	〃	にぶい黄橙色	微砂を含む	〃
1592	〃	〃	14.8			内外面ヨコナデ、底部ヘラ切り。	にぶい橙色	0.5～1.0㎜の砂粒を少し含む （雲母）	〃
1593	〃	皿	15.6	13.0	1.5	口縁部ヨコナデ、底部ナデ。	橙色	0.5㎜前後の砂粒を少し含む （雲母、赤色土粒）	〃
1594	〃	杯	11.6		4.3	口縁部ヨコナデ。外面底部ヘラケズリのちナデ。内面ハケメのちていねいなヨコナデ。	淡茶褐色	0.5㎜以下の砂粒を含む	
1595	〃	〃	11.4	8.5	3.2	内外面ヨコナデ。	にぶい橙色	0.5～5.0㎜の砂粒を多く含む	

挿図番号	種別	器種	法量（cm）			形態・手法の特徴	色調	胎土	備考
			口径	底径	器高				
1596	土師器	椀	14.3			口縁部ヨコナデ。外面オサエ、ナデ。内面ヘラミガキ。	にぶい黄橙色	（微砂を含む）	黒色土器。
1597	〃	〃		高台 6.5		〃	淡黄色	0.5～3.0㎜の砂粒を多く含む	〃
1598	〃	〃		高台 9.6		〃	にぶい黄橙色	0.5～2.0㎜の砂粒を少し含む	〃
1599	〃	〃		高台 8.0		内面ヘラミガキ。	浅黄橙色	0.5～2.0㎜の砂粒を多く含む（雲母）	〃
1600	〃	〃		6.3		〃	淡黄色	0.5～3.0㎜の砂粒を多く含む	〃
1601	〃	〃		6.9		〃	浅黄橙色	微砂を含む	〃
1602	〃	皿	9.4	6.8	1.4	口縁部、内面ヨコナデ。底部ヘラ切り。	浅黄橙色	微砂を含む（赤色土粒）	
1603	〃	〃	8.1	6.4	1.7	〃	淡赤橙色	0.5～2.0㎜の砂粒を少し含む	
1604	〃	〃	6.8	5.0	1.2	〃	浅黄橙色	0.5～2.0㎜の砂粒を少し含む	
1605	〃	小皿	8.2	6.3	1.4	口縁部ヨコナデ。内面仕上げナデ。	淡褐色	1.0㎜以下の砂粒を含む	完形。
1606	〃	椀	15.0			内外面ヨコナデ。	にぶい橙色	0.5～1.0㎜の砂粒を含む	
1607	〃	〃	16.6	外 11.1	5.2	〃	にぶい黄橙色	0.5～2.0㎜の砂粒を少し含む	
1608	〃	皿	14.0	12.2		〃	にぶい橙色	微砂を含む	
1609	〃	〃	12.0	9.4	1.5	〃	橙色	0.5～3.0㎜の砂粒を少し含む	
1610	〃	椀	11.0		3.6	外面オサエ、ナデ。内面ていねいなナデ。口縁部ヨコナデ。	浅黄橙色	微砂を含む（雲母、赤色土粒）	
1611	〃	〃	14.0			〃	浅黄橙色	0.5～2.0㎜の砂粒を多く含む（雲母）	
1612	〃	〃	14.2	6.4	5.0	〃	浅黄橙色	0.5～5.0㎜の砂粒を含む	早島式土器。
1613	〃	〃	13.0	6.8	4.2	〃	淡黄色	微砂を含む	〃
1614	〃	〃	13.4	5.6	5.2	〃	淡黄色	0.5～2.0㎜の砂粒を少し含む	〃
1615	〃	〃	12.1	5.4	4.1	〃	淡黄色	0.5～1.0㎜の砂粒を少し含む	〃
1616	〃	皿	12.2	6.6	4.0	〃	白褐色	1.0㎜以下の砂粒を含む	〃
1617	〃	椀	11.5	11.5	3.6	〃	灰白色	0.5～2.0㎜の砂粒を少し含む	〃
1618	〃	杯	10.4	5.0	3.0	口縁部、外面ヨコナデ。内面ナデ。	浅黄橙色	0.5～1.0㎜の砂粒を少し含む	
1619	〃	高杯	26.0			口縁部ヨコナデ。外面オサエ、ナデ。内面ていねいなヨコナデ（ヘラミガキ）。	にぶい黄橙色	0.5～1.0㎜の砂粒を含む（雲母、赤色土粒）	丹塗土器？
1620	〃	かまど	26.2	47.7	40.1	内外ハケメ。把手付。	にぶい橙色	0.5～2.0㎜の砂粒を多く含む	
1621	〃	甕	21.9			「く」字口縁。外面荒いハケメ。内面ハケメ、オサエ、ナデ。	淡黄色	0.5～2.0㎜の砂粒を多く含む（赤色土粒、雲母）	
1622	〃	長胴甕	16.0		30.0	外反する口縁部。外面荒いハケメ。内面上半ハケ状工具によるナデ。下半ヘラケズリ。	淡灰黄色	2.0㎜以下の砂粒を含む	
1623	〃	甑	26.0	10.6		口縁端部短かく外傾。内外面荒いハケメ。	黄灰色	0.5～3.0㎜の砂粒を多く含む	
1624	〃	甕				外面平行タタキ。内面同心円タタキ。手法は須恵器的、焼成土師器仕上り。	茶黄褐色	3.0㎜以下の砂粒を含む	
1625	〃	鍋	35.4			口縁部屈曲して外傾。内外面荒いハケメ。	にぶい黄橙色	0.5～2.0㎜の砂粒を多く含む	
1626	〃	〃	33.6			〃	黄褐色	1.0㎜以下の砂粒を含む	
1627	〃	〃	34.8			外面荒いハケメ。内面細かいハケメ。	茶灰褐色	1.0㎜以下の砂粒を含む	
1628	〃	〃	39.2			外面体部上半オサエ、荒いハケメ。下半細かいハケメ。内面細かいハケメ。	黄褐色	1.0㎜以下の砂粒を含む	
1629	〃	〃	38.4			外面および内面上半荒いハケメ。内面下半細かいハケメ。	黄灰褐色	1.5㎜以下の砂粒を含む	
1630	〃	〃	41.2			内外面ハケメ。	黄褐色	0.5㎜以下の砂粒を含む	
1631	〃	〃（足）				三足、断面四角形。	〃	0.5㎜以下の砂粒を含む	
1632	〃	〃				三足。断面円形。	茶褐色	1.0㎜以下の砂粒を含む	
1633	〃	〃				〃	茶灰色	0.5㎜以下の砂粒を含む	

挿図番号	種別	器種	法量（cm）			形態・手法の特徴	色調	胎土	備考
			口径	底径	器高				
1634	緑釉陶器	椀				内外面ヨコナデ。	内外－釉 淡灰褐色	（精良、堅緻）	
1635	〃	〃				〃	内外－釉、 淡緑色 淡灰色	〃	
1636	〃	〃				〃	内外－釉、 淡黄緑色 淡灰褐色	〃	
1637	〃	〃		6.3		内面沈線１条。	内外－釉、 緑色 灰色	0.5㎜以下の砂粒を少し含む 精良に近し	
1638	〃	〃		5.8		内外面ヨコナデ。	内外－釉 灰色	精良、堅緻	底部ヘラ描。
1639	〃	〃		8.4		底部糸切りのち貼り付け高台。	内外－釉、 緑色 灰色	〃	
1640	白磁	碗				玉縁。	白色	緻密	12～13Ｃ。
1641	〃	〃				〃	釉　透明 地　白色	〃	〃
1642	〃	〃	12.6			〃	釉　透明 地　白色	〃	〃
1643	〃			5.9		玉縁でない。	釉透明 地　灰白色	〃	〃
1644	〃	〃		6.1		〃	釉　透明、 薄い 地　白色	緻密	〃
1645	〃	〃				反り縁。	白色	〃	〃
1646	〃	〃	13.4			〃	白色	〃	〃
1647	〃	皿	11.0			口ハゲ。	釉　黄 地　灰白色	〃	13～14Ｃ中頃。
1648	〃	小壺		2.9			釉　青 地　白色	〃	12～13Ｃ。
1649	青磁	碗				画花文。蓮弁有り。	釉　緑色 地　うすいグレー	〃	〃
1650	〃	〃		5.6		画花文、蓮弁なし。	釉　緑色 地　白色	〃	
1651	〃	〃		4.5		鎬連華文。	釉　緑色 地　白色	〃	龍泉窯系。
1652	白磁	水注		6.5			釉　緑色 地　白色	〃	12～14Ｃ中頃。
1653	青磁	皿	9.7		2.2	櫛描なし。	釉　透明の緑色 地　灰色、白色	〃	同安窯系。
1654	青白磁	合子身	5.8				釉　緑色 地　白色	緻密	12～13Ｃ。
1655	陶硯	風字硯							
1656	須恵器	杯蓋	16.4		3.2	口縁部短かく屈曲し、外反する。内面ヨコナデ、仕上げナデ。ロクロ左回り。	灰白色	1.0～3.5㎜の砂粒を多く含む	
1657	〃	〃	16.8			〃	褐灰色	1.0～2.0㎜の砂粒を含む	

挿図番号	種別	器種	法量（cm）			形態・手法の特徴	色調	胎土	備考
			口径	底径	器高				
1658	須恵器	杯蓋	16.7		3.6	全体的器壁が厚い。口縁部肥厚。	灰色	1.0～3.0㎜の砂粒を多く含む	
1659	〃	〃	16.3		2.8	口縁部肥厚、内面ヨコナデのち乱ナデ。ロクロ左回り。	灰色	2.0㎜前後の砂粒を含む	
1660	〃	〃	15.6		3.6	口縁部肥厚。内面ヨコナデ、仕上げナデ。	灰白色	0.5～2.5㎜の砂粒を含む	
1661	〃	〃	14.9		1.2	天井部水平、器高は低い。ロクロ左回り。	灰色	0.5～5.0㎜の砂粒を多く含む	
1662	〃	杯身	14.4			大きく外反する口縁部。外面に凹線1条。ロクロ左回り。	灰色	1.0㎜以下の砂粒を含む	
1663	〃	杯身高台	10.0	外6.8	4.4	小型品。口縁部ゆるやかに外反。	灰色	1.0～2.0㎜の砂粒を含む	全体に煤付着。
1664	〃	〃	13.2	外8.8	4.3	ふんばり気味の高台。	灰白色	0.5～2.0㎜の砂粒を少し含む	外面に黒斑。
1665	〃	〃	13.4	外10.5	4.5	内面ヨコナデ、仕上げナデ。	灰白色	0.5～2.0㎜の砂粒を多く含む	
1666	〃	〃	14.6	外9.9	4.4	体部～口縁部ゆるやかに内湾して立ち上がる。内面仕上げナデ。	灰白色	0.5～1.5㎜の砂粒を含む	
1667	〃	〃	15.0	外11.4	4.9	全体的に器壁厚い。内面ヨコナデ、仕上げナデ。	灰白色	1.0～4.0㎜の砂粒を含む	
1668	〃	杯身高台付	16.4	外12.6	5.0	ふんばり気味の高台。内面ヨコナデのち仕上げナデ。	灰白色	0.5～2.0㎜の砂粒を含む	
1669	〃	〃	16.8	外11.6	5.5	〃	灰白色	0.5～2.0㎜の砂粒を含む	
1670	〃	〃	17.5	外11.4	6.4	〃	青灰色	1.0～3.0㎜の砂粒を少し含む	
1671	〃	〃	13.6	外8.6	7.4	体部から口縁部は直線的に立ち上る。杯部は深い。	明青灰色	1.0～2.0㎜の砂粒を多く含む	
1672	〃	杯身	12.6	5.4	3.4	底部は平たい。口縁端部は短かく外反する。内面ヨコナデ、仕上げナデ。	淡灰褐色	1.5㎜以下の砂粒を多く含む	完形。
1673	〃	〃	5.9	5.4	4.0	外面底部ヘラケズリ。	灰白色	0.5～1.0㎜の砂粒を含む	
1674	〃	〃	12.4		4.3	底部ヘラオコシ、ナデ。	灰褐色	2.0㎜以下の砂粒を含む	
1675	〃	〃	12.2		4.1	体部から内湾し、さらに上方に立ち上がる。	灰色	0.5～3.0㎜の砂粒を多く含む	
1676	〃	〃	6.7	8.3	4.4	〃	灰白色	1.0～2.0㎜の砂粒を含む	
1677	〃	〃	13.5	6.1	5.7	体部から内湾しながら口縁部に立ち上がる。底部手持ちのヘラケズリ。	暗灰褐色	1.0～2.0㎜の砂粒を多く含む	
1678	〃	〃	15.4		5.1	体部からゆるやかに口縁部外反する。底部ヘラケズリ。	暗灰色	〃	
1679	〃	〃	15.9	10.4	6.2	〃	灰色	0.5～1.0㎜の砂粒を含む	
1680	〃	〃	11.9		4.5	口縁部短かく外反。底部ヘラオコシ。	灰白色	1.0㎜前後の砂粒を含む	内面底部にヘラ描『九』。
1681	〃	高杯	15.2			内外面ヨコナデ。底部ヘラケズリ。	灰色	3.0㎜以下の砂粒を多く含む	
1682	〃	〃	16.4	11.5	9.5	脚端部上下に肥厚。	灰色	2.0～3.0㎜の砂粒を少し含む	
1683	〃	〃	17.8	12.0	10.0	脚端部短かく外反。	灰色	0.5～1.5㎜の砂粒を多く含む	
1684	〃	台付盤				杯部内面ヨコナデ、仕上げナデ。外面ヘラケズリ。脚部径大きく、短脚。	暗灰色	1.0～3.0㎜の砂粒を多く含む	
1685	〃	〃				〃	暗灰色	2.0㎜以下の砂粒を含む	
1686	〃	小甕	3.1	5.6	5.9	外面体部下半～底部手持ちのヘラケズリ。	灰色	0.5～1.0㎜の砂粒を含む	
1687	〃	〃	8.2			外反する口縁。端部肥厚。	灰色	1.0㎜以下の砂粒を含む	
1688	〃	杯身	－	6.3		外面体部下半ヘラケズリ。	灰白色	1.0㎜前後の砂粒を多く含む	1058と同形か。外面天井部『×』のヘラ描。
1689	〃	壷	8.0		3.5	口縁部細くつまみだす。天井部ヘラケズリ、ナデ。	灰色	0.5～3.0㎜の砂粒を多く含む	寒風産？
1690	〃	壷				肩部1条の凹線。外面体部下半～底部ヘラケズリ。	緑灰色	2.0㎜以下の砂粒を含む	
1691	〃	〃	－	4.8		〃	灰色	〃	
1692	〃	〃				頸部に1条、肩部に2条の凹線。	青灰色	2.0㎜以下の砂粒を多く含む	

挿図番号	種別	器種	法量（cm）			形態・手法の特徴	色調	胎土	備考
			口径	底径	器高				
1693	須恵器	平瓶				内外面ヨコナデ。	灰色	1.0㎜前後の砂粒を含む	肩部にヘラ描の線刻。
1694	〃	〃	14.0	15.4	16.1	外面に釉。口縁部2条の凹線。肩部に2条の凹線。	青灰色	0.5㎜以下の砂粒を多く含む	
1695	〃	鉢	19.2			口縁部内湾し、端部丸くおさめる。	灰色	0.5㎜以下の砂粒を少し含む（精良）	
1696	〃	こね鉢	16.2		13.0	底部ヘラオコシののちヘラ先で刺突。	灰白色	0.5～1.0㎜の砂粒を多く含む（黒色土粒）	
1697	〃	甕	17.8			口縁部上方に肥厚。	〃	〃	頸部にヘラ描「へ」。
1698	〃	壺or甕	19.0			外反する口縁。	灰色	1.5㎜以下の砂粒を含む。（石英、長石）	
1699	〃	甕	17.6			外反する口縁。端部上下に肥厚。	灰色	1.0㎜前後の砂粒を含む	頸部にヘラ描「n」。
1700	〃	〃	22.0			外面平行タタキのちカキ目。	灰白色	1.0㎜前後の砂粒を含む	
1701	〃	〃	20.4			〃	灰色	0.5～2.0㎜の砂粒を多く含む	肩部にヘラ描きの線刻。
1702	〃	壺甕	16.4			〃	灰白色	1.5㎜以下の砂粒を含む	
1703	〃	甕				口縁部折り込み。外面波状文。	灰色	1.0㎜前後の砂粒を含む	
1704	〃	〃				外面頸部線刻。	灰色	0.5～1.0㎜の砂粒を含む	
1705	〃	〃				外面カキ目。内面タタキのちヨコナデ。	灰白色	1.0㎜前後の砂粒を含む	
1706	〃	〃	45.5			口縁部上半に2条波状文帯。外面平行タタキ、カキ目。	灰色	0.5～3.0㎜の砂粒を多く含む	
1707	〃	横瓶	11.8			口縁部下半に1条の沈線。	灰白色	1.0㎜の砂粒を含む	
1708	〃	甑	26.8			外面体部中位に沈線2条。体部下半ヘラケズリ。内面ハケ状工具によるナデ。	灰色	0.5～1.0㎜の砂粒を含む	
1709	〃	〃		外15.3		外面体部下半ヘラケズリ。	灰色	0.5～2.0㎜の砂粒を含む「雲母」	
1710	〃	壺				外面格子タタキのちナデ。 内面同心円文中央に星形。	黒褐色	1.0㎜以下の砂粒を含む	1710、1711と同一個体。
1711	〃	〃				〃	黒褐色	1.0㎜以下の砂粒を含む	
1712	〃	〃				〃	灰色	1.0㎜以下の砂粒を含む	
1713	〃	〃				外面平行タタキ。内面同心円文中心に十字形。	黒褐色	0.5㎜以下の砂粒を含む	
1714	〃	〃				外面平行タタキ、内面同心円タタキ。	褐灰色	1.0㎜前後の砂粒を含む	1468と同一個体。
1715	〃	〃				内面同心円タタキ、中央に5角形の星形。	黒褐色	1.0㎜以下の砂粒を含む	
1716	〃	双耳付鍋	34.0			外面体部に1条の沈線。外面タタキのちヨコナデ。	灰色	0.5～2.0㎜の砂粒を含む（雲母）	
1717	〃	鍋				内外面オサエ、ナデ。把手内側に3条のヘラによる切り込み。	暗灰色	0.5㎜以下の砂粒を含む	909と同一個体。
1718	〃	壺				内外面ヨコナデ。肩部に突帯。	灰色	0.5～1.0㎜の砂粒を含む	
1719	〃	双耳付短頸壺	15.0	14.0	19.4	平底（あげ底）	灰色	3.0㎜以下の砂粒を少し含む（精良）	
1720	土師器	皿				内外面ヨコナデ。	淡黄灰色	0.5㎜以下の砂粒を含む（精良、雲母）	丹塗土器
1721	〃	〃				〃	淡茶灰褐色	0.5㎜以下の砂粒を含む（雲母）	〃
1722	〃	〃	19.5			〃	褐色	0.5㎜以下の砂粒を含む（精良）	
1723	〃	〃	22.4			口縁部ヨコナデ。外面ナデ。	にぶい橙色	0.5～1.0㎜の砂粒を少し含む	
1724	〃	〃	23.0	15.2	3.2	あげ底。口縁部ヨコナデ。内外面オサエ、ナデ。	にぶい黄橙色	0.5～1.0㎜の砂粒を少し含む	
1725	〃	〃	24.0	16.0	3.1	〃	浅黄橙色	0.5㎜前後の砂粒を含む（赤色土粒）	
1726	〃	鏡	13.8			〃	灰白色	0.5㎜前後の砂粒を少し含む	
1727	〃	〃	13.2	8.0	5.6	高目の高台。内外面ヨコナデ。口縁部ハケ状工具のちヨコナデ。	にぶい黄橙色	0.5～5.0㎜の砂粒を含む	溝－1出土。

挿図番号	種別	器種	法量 (cm) 口径	底径	器高	形態・手法の特徴	色調	胎土	備考
1728	土師器	高台付椀	16.0	6.6	4.4	口縁端部肥厚。口縁部ヨコナデ。内面ていねいなナデ。	灰白色	0.5 ～1.5 ㎜の砂粒を含む	早島式土器。
1729	〃	〃	13.8	5.9	4.8	〃	灰白色	1.0～1.5㎜の砂粒を含む	〃
1730	〃	台付皿	14.2	7.0	2.4	内外面ヨコナデ。	灰白色	0.5～1.0㎜の砂粒を含む（金雲母）	
1731	〃	皿	8.1		1.9	〃	黄褐色	1.0㎜以下の砂粒を少し含む	
1732	〃	椀	14.8			内面ヘラミガキ。	灰白色	0.5～1.0㎜の砂粒を含む（金雲母）	黒色土器。
1733	〃	〃	16.0			〃	灰黄褐色	0.5～1.5㎜の砂粒を含む（金雲母）	〃
1734	〃	〃	15.2			〃	淡黄色	0.5～1.5㎜の砂粒を多く含む	〃
1735	〃	高台付椀		8.0		内外面ヨコナデ。	にぶい黄橙色	0.2㎜前後の砂粒を含む（金雲母、赤色土粒）	
1736	〃	〃	14.2	7.6	4.9	〃	浅黄橙色	0.5～1.0㎜の砂粒を多く含む（金雲母）	
1737	〃	〃		7.9		内面ヘラミガキ。	灰白色	0.5～2.0㎜の砂粒を多く含む（金雲母）	黒色土器。
1738	〃	〃		7.6		〃	灰白色	0.5～1.0㎜の砂粒を含む（金雲母）	〃
1739		〃		7.4		〃	灰白色	0.5～2.0㎜の砂粒を多く含む	〃
1740	〃	高杯				脚柱部面取り（8面）	黄褐色	1.0㎜以下の砂粒を含む（精良）	
1741	〃	〃	21.4	14.6	10.0	杯部内面ていねいなヨコナデ。脚裾部内湾気味。	浅黄橙色	0.5～3.0㎜の砂粒を含む（雲母）	
1742	〃	甕	14.2			口縁部オサエ、ナデ。内面下半ヘラケズリ。	にぶい橙色	0.1～3.0㎜の砂粒を含む（雲母）	
1743	〃	〃	20.6			口縁部外反。外面ハケメ。内面ヘラケズリ。	灰白色	1.0～1.5㎜の砂粒を多く含む（赤色土粒、金雲母）	
1744	〃	〃	20.2			口縁部器壁厚い。内外面ハケ状工具、ナデ。	浅黄橙色	1.0～1.5㎜の砂粒を多く含む	
1745	〃	鍋	32.2			内外面ハケメ、ナデ。	にぶい橙色	1.0～2.0㎜の砂粒を含む	
1746	〃	壺	23.6			大きく外反する口縁。内面ヘラケズリ。	灰白色	1.0～2.0㎜の砂粒を多く含む	
1747	〃	鉢	20.8			片口。外面荒いハケメ、ナデ。内面ナデ。	にぶい黄褐色	0.5～1.0㎜の砂粒を多く含む（金雲母）	
1748	〃	〃	16.4	3.6	10.3	口縁部ヨコナデ。	灰白色	0.5～1.5㎜の砂粒を多く含む（金雲母）	
1749 ～ 1766	〃	〃				手法須恵器的。外面平行タタキ、内面同心円タタキ。1760は、頸部内外面ヨコナデ。	淡黄色	0.5～3.0の砂粒を含む	
1767	緑釉陶器	椀					内外－釉（淡緑色）灰色	（精良、堅緻）	
1768	〃	〃					釉（淡黄緑色）	（精良、堅緻）	
1769	〃	〃	11.4	外5.6	3.6		釉（黄緑色）	0.5㎜以下の砂粒を少し含む（精良に近い）	
1770	〃	〃					釉（淡黄緑色）	（精良、堅緻）	
1771	〃	〃					釉（淡黄緑色）	〃	
1772	〃	〃					釉（淡緑色）淡灰色	〃	
1773	〃	〃					釉（緑色）	〃	
1774	〃	〃					釉（黄緑色）	〃	
1775	〃	〃					釉（淡緑色）	〃	
1776	〃	〃					釉　黄緑色	〃	
1777	〃	〃		6.0			釉　淡緑色	0.5㎜以下の砂粒を少し含む（精良に近い）	
1778	〃	〃		6.3			釉　黄緑色	0.5㎜以下の砂粒を含む（精良に近い）	
1779	〃	〃		5.8			釉淡緑色	（精良）	
1780	〃	〃					〃	0.5㎜以下の砂粒を少し含む（精良に近い）	
1781	〃	〃		6.6			釉（淡黄緑色）灰色	（精良）	

挿図番号	種別	器種	法量（cm）			形態・手法の特徴	色調	胎土	備考
			口径	底径	器高				
1782	緑釉陶器	椀		7.4			釉(淡緑色)	1.5㎜以下の砂粒を含む	
1783	〃	〃		7.4			一釉(灰色)	(精良、堅緻)	
1784	〃	〃					淡灰褐色	(精良、堅緻)	
1785	〃	〃					釉(淡緑色)	〃	
1786	〃	〃		4.0			釉(淡緑色)	0.5㎜以下の砂粒を含む	
1787	〃	〃		6.6			釉(緑色)	(精良、堅緻)	
1788	〃	〃		7.4			釉(濃緑色)	〃	
1789	〃	〃					淡灰色	〃	
1790	〃	〃		6.0			乳白色	〃	
1791	〃	〃		4.6			釉（緑色）	〃	
1792	〃	〃		7.4			釉 緑黄色	0.5㎜以下の砂粒を含む（精良）	
1793	白磁	碗	14.8			口縁端部短かく外反。	釉(緑色) 地 白色	緻密	12～13C。
1794	〃	〃	16.9			口縁端部外方向に肥厚。	釉 透明 地 灰白色	〃	〃
1795	〃	〃				口縁端部丸くおさめる。	釉 白色 地 白色	〃	〃
1796	〃	〃				口縁部反り緑。	釉 透明 地 白色	〃	〃
1797	〃	〃				〃	釉 透明で黄味 地 灰白色	〃	〃
1798	〃	〃				〃	釉 透明で黄味 地 白色	〃	〃
1799	〃	〃				〃	釉白色	〃	〃
1800	〃	〃				内面櫛描。	釉白色	緻密	〃
1801	〃	〃				口縁端部上方につまみだす。	釉 透明 地 明灰色	〃	〃
1802	〃	〃	15.5			玉縁。	釉 透明 地 白色	〃	〃
1803	〃	〃				〃	釉 透明 地 白色	〃	〃
1804	〃	〃				〃	釉 黄味がかった透明 地 白色	〃	〃
1805	〃	〃				〃	釉 透明 地 白色	〃	〃
1806	〃	〃				〃	釉 透明 地 白色	〃	〃
1807	〃	〃				〃	釉 透明 地 白色	〃	〃
1808	〃	〃				〃	釉 透明 地 白色	〃	〃
1809	〃	〃				〃	釉 透明 地 白色	〃	〃
1810	〃	〃				〃	釉 黄味がかった透明 地 白色	〃	〃
1811	青磁	〃				玉縁でない口縁の高台。	釉が薄い透明の緑 地 白	〃	

挿図番号	種別	器種	法量（cm）			形態・手法の特徴	色調	胎土	備考
			口径	底径	器高				
1812	白磁	碗		5.1		玉縁でない口縁の高台。	釉 透明 地 灰白色	緻密	12～13C。
1813	〃	〃		4.3		〃	釉 なし 地 白色	〃	〃
1814	〃	〃		5.6		〃	釉 なし 地 灰白色	〃	〃
1815	〃	皿		6.0		内面1条沈線。	釉 透明 地 白色	〃	〃
1816	〃	〃	10.3	2.8		口縁部細い。	釉 黄味がかった透明 地 灰白色	〃	〃
1817	〃	蓋	2.5			小型の蓋。	釉 透明 地 白色	〃	〃
1818	〃	合子蓋				（上物）花文。	釉 透明 地 白色	〃	12～14C。
1819	青磁	碗				立ち縁。	釉 透明の緑 地 白色	〃	明15C～16C前半。
1820	〃	〃				内面画花文。	釉 透明の緑 地 灰白色	〃	龍泉窯系。
1821	〃	〃				〃	釉 透明の緑 地 薄いグレー	〃	〃
1822	〃	〃				外面鎬蓮華文。	釉 透明、明緑色 地 白色	〃	〃
1823	〃	〃				〃	釉 透明の緑 地 薄いグレー	〃	〃
1824	〃	〃	19.0			画花文、雷井有り。	釉 透明の緑 地 灰色	緻密	12～13C。
1825	〃	〃	15.8			〃	釉 透明の緑 地 灰色	緻密	〃
1826	〃	皿		4.8		櫛描。	釉 透明の緑 地 灰白色	〃	同安窯系。 12～13C。
1827	〃	〃	9.0			櫛描不明。	釉 透明の緑 地 白色	〃	〃
1828	青白磁	合子身	3.9	3.8	2.1		釉 うす青色 地 白色	〃	12～13C。
1829	瓦	平瓦				凸面荒い平行タタキのちナデ。	白褐色	5.0㎜以下の砂粒を多く含む	
1830	〃	〃				凹面布目。	淡灰褐色	1.0㎜以下の砂粒を含む（赤色粒）	
1831	〃	丸瓦				凸面面取り、ナデ。凹面布目。	黒褐色	2.0㎜以下の砂粒を含む	
1832	〃	〃				凸面ナデ、凹面布目。	暗灰色	3.0㎜以下の砂粒を含む	
1833	〃	平瓦				凸面縄目のちナデ。	〃	1.0㎜以下の砂粒を含む	

挿図番号	種別	器種	法量（cm）			形態・手法の特徴	色調	胎土	備考
			口径	底径	器高				
1834	瓦	丸瓦				凸面面取り、ナデ。	淡灰色	0.5㎜以下の砂粒を含む	
1835	須恵器	円面硯				方形の透し（10単位位い）	灰白色	0.5～1㎜	
1836	須恵器	円面硯				弓形の透し。	明青灰色	0.5～0.7㎜少	
1837	〃	風字硯				外面ヘラケズリ、ナデ。内面ナデ。	灰色	0.5㎜以下の砂粒を含む	
1838	〃	〃				内外面ナデ。	〃	1.5㎜以下の砂粒を含む	
1839	〃	〃				内面ヘラ状工具、オサエ、ナデ。	暗灰褐色	1.0㎜以下の砂粒を含む	
1840	〃	〃				獣線外ヘラケズリ、ナデ。	淡灰色	1.0㎜以下の砂粒を含む	
1841	〃	〃				内外面ナデ。	〃	2.0㎜以下の砂粒を含む	
1842	〃	〃				外面ハケ状工具、ナデ。内面ナデ。	灰褐色	1.0㎜以下の砂粒を含む	

表—8　石器一覧表

図	番号	遺物	出土地区	遺構	材質	最大長 mm	最大幅 mm	最大厚 mm	重量 g	備　考	時　期
22	1	石錐		ピート層	サヌカイト	28.8	28.3	7.1	4.11	Ⅰ　完形	
25	2	石匙		〃	〃	68.0	34.0	9.0	20.06	Ⅱ　〃	
35	3	打製石包丁	12区B	〃	頁岩	88.0−	46.0	10.5	55.55	ほぼ完形	
40	4	スクレイパー		〃	サヌカイト	84.1	−54.2	8.5	31.86	Ⅰa	
41	5	〃		〃	〃	108.5	47.0	9.0	49.94	〃　ほぼ完形	
39	6	〃		〃	〃	70.0	51.6	9.5	36.83	〃　完形　表面に磨耗痕	
	7	〃		〃	〃	−92.0	86.0	18.5	90.24	〃　ほぼ完形	
	8	〃		〃	〃	60.0	−45.0	5.0	20.81	Ⅰ	
	9	〃		〃	〃	−72.5−	52.0	7.0	28.34	Ⅰa	
	10	〃		〃	〃	45.5	37.0	10.0	21.70	〃　完形	
	11	〃		〃	〃	39.0−	24.5	8.5	7.73	〃	
	12	〃		〃	〃	93.0	54.0	6.5	43.00	〃　完形	
	13	〃		〃	〃	49.5−	35.0	11.0	20.78	〃	
	14	〃		〃	〃	43.5	54.5	5.0	15.67	〃	
	15	〃		〃	〃	−37.5	−34.0	5.0	5.56	Ⅰ	
	16	〃		〃	〃	12.5−	−33.0	9.0	3.95	〃　小片	
	17	〃		〃	〃	−29.0	25.5	6.0	4.70	Ⅰa　小型	
42	18	〃		〃	〃	70.1	45.5	11.0	36.60	〃　ほぼ完形	
	19	〃		〃	〃	−56.0−	37.5	7.0	15.29	〃	
55	20	〃		〃	〃	92.5	51.5	11.0	49.48	Ⅰb　ほぼ完形	
	21	〃	12区BA	ピート層（−10cm）	〃	89.5	44.5	9.5	39.43	〃　完形に近い	
	22	〃		ピート層	〃	−40.0−	54.0	13.0	40.28	〃	
	23	〃		〃	〃	−45.5−	31.5	10.0	14.94	〃	
	24	〃		〃	〃	−28.0−	38.0	6.0	9.83	〃	
	25	〃		〃	〃	−56.0−	32.0	10.0	19.01	〃	
	26	〃		〃	〃	−55.5−	38.0	10.0	27.00	〃	
	27	〃		〃	〃	−63.5−	32.0	5.0	11.21	〃	
	28	〃		〃	〃	−40.0	42.0	11.5	19.63	〃	
	29	〃		〃	〃	−50.5−	−33.5	6.0	10.68	〃	
	30	〃		〃	〃	−23.0−	−24.5	3.0	2.30	〃　小型	
	31	〃		〃	〃	−56.0	44.0	9.0	23.20	Ⅰ	
	32	〃		〃	〃	−10.5−	56.5	7.0	6.19	〃　小片	
	33	〃		〃	〃	74.0−	−34.0	9.0	20.10	〃	
	34	〃		〃	〃	−51.0−	−43.5	10.5	16.66	〃　表面刃部に磨耗痕	
	35	〃		〃	〃	−58.0−	−32.0	6.0	15.70	〃	
	36	〃		〃	〃	−39.0−	−36.0	5.0	5.20	〃　小片	
	37	〃		〃	〃	−27.0	−27.0	12.0	6.33	〃　〃	
	38	〃		〃	〃	71.5	−30.5	10.0	14.29	〃	
	39	〃		〃	〃	35.0−	−30.0	5.0	4.18	〃	
	40	〃		〃	〃	−20.5	−40.5	6.0	5.48	〃	
	41	〃		〃	〃	−46.0−	−58.0	24.0	29.02	〃	
	42	〃		〃	〃	50.0	−40.0	6.0	12.54	〃	
	43	〃		〃	〃	−26.0−	−19.0	4.0	1.88	〃　小片	
	44	〃		〃	〃	34.5−	−26.0	6.0	5.92	〃	
	45	〃		〃	〃	−25.0−	−25.0	5.0	3.43	〃　小片	
	46	〃		〃	〃	−31.0−	30.0	6.0	5.28	〃	
58	47	〃		〃	〃	74.6−	51.8	14.0	36.03	Ⅱa	
56	48	〃		〃	〃	−75.8	33.5	10.5	19.95	〃	
	49	〃		〃	〃	−32.0	39.0	7.0	9.16	〃	
	50	〃		〃	〃	−49.0	−55.0	11.5	35.96	〃	
	51	〃		〃	〃	−79.0−	38.0	27.0	31.00	〃	

図	番号	遺物	出土地区	遺構	材質	最大長 mm	最大幅 mm	最大厚 mm	重量 g	備考	時期
	52	スクレイパー		ピート層	サヌカイト	−64.0−	62.0	13.0	34.80	Ⅱa	
	53	〃		〃	〃	62.0	38.0	18.0	19.97	〃 ほぼ完形	
	54	〃		〃	〃	−33.5−	27.5	6.5	5.77	〃	
	55	〃		〃	〃	43.0−	−18.0	4.5	3.82	〃	
61	56	〃		〃	〃	−33.0−	46.0	10.0	16.59	Ⅱb	
	57	〃		〃	〃	25.0−	35.5	8.0	7.50	Ⅱb？	
	58	〃		〃	〃	36.5	39.5	7.5	8.95	Ⅱb 裏面磨耗	
	59	〃		〃	〃	32.5	−27.0−	5.5	6.46	Ⅱ	
	60	〃		〃	〃	−34.0	23.0	6.0	4.44	〃	
	61	〃		〃	〃	−73.0	73.0	26.0	69.01	〃	
	62	スクレイパー片？		〃	〃	−21.0−	46.0	5.0	4.43	Ⅰ？	
	63	スクレイパー		〃	〃	−29.0−	41.0	5.0	7.23	背部片	
	64	〃		〃	〃	−26.0−	33.0−	6.0	5.19	〃	
63	65	楔形石器		〃	〃	19.0	24.5	5.5	3.24	Ⅱ	
	66	石核？		〃	〃	57.0	36.0	12.0	31.05		
	67	楔形石器？		〃	〃	30.5	30.5	8.0	8.84	Ⅱ ほぼ完形	
	68	不明石器		〃	〃	−22.5−	23.5	7.0	4.43		
	69	〃		〃	〃	−30.0−	23.5	6.0	4.76		
	70	〃		〃	〃	−28.5−	−23.5	7.0	3.79		
	71	〃		〃	〃	−16.0−	24.0	5.5	2.23		
	72	〃		〃	〃	36.0−	27.0	9.0	9.23		
	73	〃		〃	〃	45.0	55.5	10.0	17.91	完形	
	74	〃		〃	〃	−29.5−	21.0	5.0	4.24		
	75	〃		〃	〃	−32.0−	32.5	7.5	7.03		
	76	石器片		〃	〃	−40.0−	45.0	6.0	14.17		
	77	〃		〃	〃	−44.0−	20.5−	9.0	5.23		
	78	不明石器		〃	〃	−34.0	28.0	6.0	5.83		
	79	石器片		〃	〃	−36.0	−43.0	9.0	11.80		
	80	〃		〃	〃	30.0−	−28.0	8.5	8.86	表裏面に磨耗痕 石庖丁？	
	81	〃		〃	〃	−26.2	22.0	4.8	3.30		
	82	R. F.		〃	〃	42.5	29.0−	6.5	8.95		
	83	〃		〃	〃	62.0	31.0	11.0	19.02		
	84	〃		〃	〃	50.0	34.0	16.0	26.70	完形	
	85	石器片		〃	〃	63.0	31.5−	18.0	17.59		
	86	R. F.		〃	〃	60.0	33.5	9.5	16.48	ほぼ完形	
	87			〃	〃	74.5−	18.5	11.0	12.90		
	88	〃		〃	〃	−20.0−	−34.0	6.0	4.66		
	89	〃		〃	〃	18.5−	27.0	6.0	4.58		
	90	石器片		〃	〃	76.5	−43.0	7.5	27.79		
	91	〃		〃	〃	83.0	55.0	9.0−	44.75		
	92	U. F.		〃	〃	60.0	36.0	4.5	10.79		
	93	〃		〃	〃	−44.0	60.0	7.0	17.01		
	94	〃		〃	〃	45.0	38.0	8.0	16.37	ほぼ完形	
	95	〃		〃	〃	75.0	60.0−	10.0	35.36		
	96	〃		〃	〃	44.0	36.0	6.0	9.48		
	97	〃		〃	〃	−60.0	50.0	10.0	27.29		
	98	〃		〃	〃	−38.0	37.5	4.5	5.62		
	99	〃		〃	〃	−29.0−	67.0	8.5	12.01		
	100	〃		〃	〃	36.0	−25.0	5.0	3.77		
	101	〃		〃	〃	−31.0−	−35.0	4.5	3.98		
	102	〃		〃	〃	56.0	79.0	18.0	61.86		

図	番号	遺物	出土地区	遺構	材質	最大長㎜	最大幅㎜	最大厚㎜	重量g	備考	時期
	103	U. F		ピート層	サヌカイト	−40.0	32.5	9.0	13.20		
	104	〃		〃	〃	−23.5	34.0	6.0	3.77		
	105	〃		〃	〃	−27.0	−25.0	9.5	4.15		
	106	〃		〃	〃	−34.0	20.5	4.5	3.50		
	107	〃		〃	〃	40.0−	53.0	9.5	15.51	ほぼ完形	
	108	〃		〃	〃	47.5	44.5	8.0	10.98		
	109	石核	12区B	〃	〃	113.0	98.0	54.0	515.33	完形	
	110	〃		〃	〃	101.0	95.0	22.0	208.79	〃	
	111	〃		〃	〃	84.0−	95.0	22.0	155.93		
	112	〃	12区B	〃	〃	52.5−	75.5	12.5	47.63		
	113	〃		〃	〃	46.0	52.0	16.0	36.87	完形	
	114	〃		〃	〃	58.5	30.0	11.5	19.46	〃	
	115	石核？		〃	〃	43.5−	−34.0	17.0	23.81		
	116	〃		〃	〃	52.0	30.0−	14.0	18.82		
	117	〃		〃	〃	35.5	28.0	9.5	11.96	ほぼ完形	
	118	〃		〃	安山岩	54.0	68.0	25.5	91.64		
	119	R. F.		〃	〃	101.0	50.5	16.0	99.70	完形	
89	120	砥石	12区	〃	砂岩	385.5−	113.0	83.0	5250.00		
99	121	石錘	12区B	ピート層下層	結晶片岩	109.5	71.0	15.0	170.12	Ⅰ 完形	
106	122	〃	〃	ピート層	安山岩？	108.5	90.5	26.5	379.47	〃 〃	
94	123	〃	〃	ピート層下層	〃	84.0	74.5	22.1	192.38	〃 〃	
95	124	〃	12区B	ピート層	細粒花崗岩	87.0	70.5	24.5	215.84	〃 〃	
	125	〃	12区D	〃	石英斑岩	104.0	−90.0	32.0	374.78	〃 やや欠損	
	126	〃	12区B（A）	ピート層（−30cm）	結晶片岩	48.0−	67.0	11.0	54.42	Ⅰ？ 1/4残存	
112	127	〃	12区B	ピート層	流紋岩	78.5	84.5−	30.5	239.67	Ⅱ	
118	128	敲石	〃	〃	花崗斑岩	115.5	−77.0	66.5	703.92	Ⅰ 1/4残存	
	129	〃	〃	〃	半花崗岩	−75.0	85.0	25.0	221.96	Ⅰ	
	130	〃	12区B（A）	ピート層下層	流紋岩	−94.0	37.0	35.5	153.89	Ⅱ	
	131	〃	12区B	ピート層	花崗斑岩	81.0	81.0	67.0	531.51	Ⅰ 完形	
	132	〃	12区B	ピート層（−15cm）	石英安山岩	99.0	53.5−	51.0	342.61	Ⅱ	
	133	磨石	〃	ピート層		54.0−	99.0	52.5	342.61		
	134	〃		〃	流紋岩	−58.0−	45.5−	21.0	66.50		
18	135	石錐	2区北		サヌカイト	14.0−	− 9.5	2.8	0.31	Ⅱ	
14	136	〃	1区包		〃	−27.5	21.0−	5.0	2.00	Ⅱb ほぼ完形	
15	137	〃	〃		〃	−24.5−	16.5−	3.2	0.90	〃	
16	138	〃	〃		〃	−23.0	−23.0	4.0	0.96	〃 完形に近い	
21	139	〃	〃		〃	18.5	14.0	3.5	0.59	Ⅵb ほぼ完形	
13	140	〃	5区		〃	−19.0−	−12.0−	3.5	0.66	Ⅱa	
17	141	〃	2区北		〃	−20.0−	−19.0−	3.5	0.98	Ⅱ	
20	142	〃	〃		〃	19.0	12.0−	2.4	0.45	Ⅳa	
12	143	〃	12区B	包含層	〃	−31.5	15.0−	4.5	1.88	Ⅰa or Ⅱa	
19	144	〃	11区北岸		〃	−20.0−	17.0−	5.0	1.92	Ⅲ	
10	145	〃			〃	−28.5	16.5−	3.6	1.36	Ⅰa	
11	146	〃	12区		〃	−32.0	−24.5	5.5	3.37	〃 ほぼ完形	
	147	〃	11区	包含層	〃	27.0	20.0	4.0	2.26	〃 〃	
	148	〃	12区	溝−1下層	〃	−24.0	25.5	5.5	4.51	〃 やや大型	
	149	〃	1区	谷（東）	〃	28.5−	−22.0	6.0	2.29	Ⅰb	
8	150	有舌尖頭器	11区	溝−1	〃	−41.0−	20.5	7.6	6.87	舌部欠損	
7	151	尖頭器	〃	溝−1下層	〃	84.0	25.5	8.8	19.59	完形	
	152	尖頭器未製品	12区D	包含層	〃	86.5	33.5	10.5	28.60		

図	番号	遺物	出土地区	遺構	材質	最大長 mm	最大幅 mm	最大厚 mm	重量 g	備　考	時　期
30	153	石槍状石器			サヌカイト	91.0−	34.5	11.5	42.46		
29	154	〃	〃	灰褐色砂	〃	82.5−	32.0	7.5	21.70		
4	155	ナイフ形石器	11区	溝－2	〃	−69.5	22.5	11.5	18.08		
3	156	〃			〃	−55.0−	19.5	9.0	9.62		
1	157	〃	6区	トレンチ	〃	−24.5−	12.5	6.0	1.73		
2	158	〃	12区C	包含層	〃	−34.5−	15.0	5.0	2.07		
5	159	翼状剥片	7区	〃	〃	42.0	27.0	11.0	11.04		
6	160	翼状剥片石核？	2区南	〃	〃	34.5	24.5	16.0	12.81		
26	161	石匙			〃	78.5	48.5	8.5	32.70	Ⅱ　ほぼ完形	
	162	〃			〃	55.0−	43.0−	9.0	17.21	Ⅰ	
27	163	〃			〃	41.0	−49.5−	7.0	12.73	〃	
28	164	〃			〃	−36.0	−71.0−	11.0	21.97	〃	
36	165	打製石包丁	11区南	黒色土	〃	109.5	47.5	13.0	78.69	抉り　表裏に磨耗痕 完形　表面に一部珪酸付着	
31	166	〃	12区		頁岩	74.7	47.0	9.8	48.53	ほぼ完形　抉り	
32	167	〃	12区C	包含層	〃	76.7	31.2	8.5	34.58	〃　抉り	
34	168	〃	12区	溝－1下層	〃	90.0	47.0	12.5	73.79	表裏に自然面残存	
33	169	〃	〃	包含層	〃	79.0	43.0	11.0	51.55	抉り　裏面に磨耗痕 完形	
	170	〃	11区	南黒色土	〃	77.0	47.0	12.0	48.47	2片接合	
	171	〃	11区S	溝2	〃	−区51.0	40.5	11.0	30.59		
37	172	石包丁未製品	12区B		粘板岩	92.5	−52.0	12.0	65.89	2片接合	
	173	石包丁未製品片？			安山岩	48.0	32.0	7.0	12.65		
24	174	石錐	1区	包含層	サヌカイト	57.0	32.0	5.0	9.35	Ⅱ　完形	
23	175	〃	12区B	〃	〃	57.5	26.0	8.9	11.79	〃　ほぼ完形	
	176	スクレイパー	11区南	溝－1下層	〃	57.0	44.5	6.0	14.09	Ⅰa	
	177	〃	12区B	包含層	〃	58.0	39.0	12.5	17.64	〃	
38	178	〃	〃	灰白色砂粘土	〃	−71.0−	33.3	9.0	24.07	〃	
46	179	〃	12区	溝－3	〃	−64.0−	35.0	5.3	14.01	〃	
	180	〃	〃	包含層	〃	−62.0	31.0	8.0	19.72	〃　ほぼ完形	
	181	〃	12区D	灰褐色砂	〃	79.0	54.0	8.0	53.13	〃	
44	182	〃	10区	谷C	〃	−42.5	26.0	8.0	8.21	〃	
	183	〃	11区南	黒色土	〃	41.0−	38.5	5.0	11.74	〃　ほぼ完形	
	184	〃	11区	包含層	〃	34.0−	28.5	6.5	7.04	〃	
	185	〃	3区	〃	〃	33.0−	35.5	7.5	7.25	〃	
	186	〃	12区B	灰褐色砂	〃	45.5−	29.0	5.5	9.91	〃	
	187	〃	11区南	第2層	〃	−34.5−	49.0	8.5	12.39	〃	
51	188	〃	〃	砂層	〃	55.5	49.5	9.5	21.94	〃　表面に磨耗痕　ほぼ完形	
	189	〃	12区B	包含層	〃	33.0−	−18.5	5.5	3.84	〃　小片	
48	190	〃	11区南	〃	〃	81.5	40.5	9.0	36.63	〃　完形	
49	191	〃	6区	トレンチ	〃	84.5	45.0	15.0	77.71	〃　石核転用　完形	
	192	〃	12区	包含層	〃	60.0	37.0	10.0	24.29	〃	
	193	〃	11区	溝－1下層	〃	70.0	50.5	7.5	28.59	〃　完形	
	194	〃	11区S	砂層	〃	80.0	−55.5	8.5	38.10	〃	
	195	〃	1区	黒色土	〃	43.0−	−42.0	4.5	9.99	〃	
47	196	〃	6区	谷	〃	73.5	31.5	9.0	16.90	〃　完形	
	197	〃	12区	包含層	〃	−70.0	51.5	11.0	35.47	〃	
	198	〃	〃	溝－1下層	〃	73.0	46.0	15.0	31.91	〃　ほぼ完形	
	199	〃	11区	トレンチ黒色土	〃	−70.0−	42.5	20.0	38.95	〃	
	200	〃	10区	谷－C	〃	56.0	34.0	6.0	13.72	〃	

図	番号	遺物	出土地区	遺構	材質	最大長㎜	最大幅㎜	最大厚㎜	重量g	備考	時期
	201	スクレイパー	12区C	包含層	サヌカイト	−67.0	36.0	11.0	28.08	Ⅰa	
	202	〃			〃	72.0	47.0	10.0	38.32	〃	
	203	〃	11区S	砂層	〃	62.0	56.0	7.5	27.05	〃	
45	204	〃	11区	溝−1下層	〃	48.5	40.5	5.5	12.43	〃 ほぼ完形	
	205	〃	12区	〃	〃	48.0	31.0	5.5	8.37	〃 〃	
	206	〃	12区B	包含層	〃	57.0	65.0	13.5	43.97	〃	
	207	〃	11区南	〃	〃	60.0	36.0	5.5	17.38	〃	
	208	〃	11区S	黒色土	〃	39.0	33.0	6.0	7.62	〃	
	209	〃	6区	谷（上）下層	〃	67.0	44.0	8.0	23.88	〃	
43	210	〃	11区南	第2層	〃	56.0	56.0	7.5	25.19	〃	
	211	〃	10区	谷−C上面	〃	51.0	43.0	8.0	21.25	〃	
	212	〃	〃	谷−C	〃	22.0	24.5	8.0	5.40	〃 小型	
	213	〃	12区B	包含層	〃	80.0	45.0	11.5	33.28	Ⅰb	
53	214	〃		表採	〃	64.0−	44.5	10.0	31.25	〃	
	215	〃	12区	包含層上層	〃	−53.0−	47.0	7.5	22.40	〃	
	216	〃	12区C	包含層	〃	52.0−	37.5	11.0	25.36	〃	
	217	〃	11区S	黒色土	〃	42.0	36.0	7.5	16.43	〃	
54	218	〃	12区B	灰褐色砂	〃	−57.0	33.5	9.5	19.22	〃 表裏面に磨耗痕	
	219	〃	〃	包含層	〃	58.5	32.0	7.0	18.75	〃 〃	
	220	〃	12区	〃	〃	−42.0−	29.5	4.5	6.73	〃 〃	
	221	〃	1区	谷（東）	〃	−41.5−	30.0	9.0	5.12	〃 〃	
	222	〃	2区南	包含層	〃	42.0−	−31.0	10.0	10.63	〃	
	223	〃	11区南	溝−1上層	〃	72.0	40.5	10.0	27.41	〃	
	224	〃	12区B	溝−1	〃	136.0	87.5	22.0	214.99	〃	
	225	〃	12区B	包含層	〃	−31.5	37.5	5.0	8.14	〃	
	226	〃	11区南	黒色土	〃	−36.5	30.5	9.0	8.31	〃	
	227	〃	12区B	灰褐色砂	〃	−22.0	54.5	10.0	12.20	〃 小片	
	228	〃	12区	溝−1下層	〃	−30.0−	54.0	8.0	15.31	〃 〃	
	229	〃	〃	包含層	〃	21.0	39.0	8.0	6.03	〃 〃	
	230	〃	11区S	トレンチ	〃	−17.0−	38.0	5.0	2.30	〃 〃	
	231	〃	12区	溝−1下層	〃	19.0−	53.0	13.0	13.07	〃 〃	
	232	〃	11区	黒色土	〃	32.5	29.5	6.0	5.92	〃	
	233	〃	11区南	溝−1上層	〃	−38.0−	30.0	9.0	9.75	〃	
	234	〃	11区		〃	−24.0	22.0	6.5	3.11	〃 小型	
	235	〃	6区	土拡	〃	−94.0	48.0	15.5	60.07	Ⅰb？	
50	236	〃	11区	溝−1	〃	42.5−	26.0	4.5	5.88	Ⅰb	
	237	〃	12区B	〃	〃	−47.0	−42.0	5.0	8.31	Ⅰb？	
52	238	〃	11区南	黒色土	〃	−30.5	29.5	6.0	5.70	Ⅰb	
	239	〃	〃	溝−1下層	〃	27.0−	25.5	5.5	4.11	〃	
	240	〃	12区	〃	〃	−45.0	−30.0	10.0	11.61	〃	
	241	〃	6区	谷上層	〃	30.0−	32.0	9.0	10.17	〃	
	242	〃	12区C	包含層	〃	83.0	46.0	12.0	42.73	Ⅰ	
	243	〃	1区	包含層（南）	〃	−54.0	−39.0	10.0	24.97	〃	
	244	〃	11区南	黒色土	〃	−52.0	44.0	8.0	22.79	〃	
	245	〃	12区	溝−1下層	〃	−58.5−	−40.0	7.5	12.90	〃	
	246	〃	11区	溝−2	〃	−35.0−	−44.0	7.0	11.42	〃	
	247	〃	11区南	第2層	〃	−30.0−	−37.5	8.0	12.00	〃	
	248	〃	2区北	包含層	〃	35.0−	−39.0	7.0	10.84	〃	
	249	〃	6区	〃	〃	−53.0	−30.0	15.0	16.04	〃	
	250	〃	〃	包含層	〃	45.0−	42.0	7.0	13.35	〃	
	251	〃	11区北岸		〃	−66.5	34.0	11.0	23.49	〃	
	252	〃	6区	包含層	〃	−23.5−	−34.0	9.0	9.02	〃	

図	番号	遺物	出土地区	遺構	材質	最大長 mm	最大幅 mm	最大厚 mm	重量 g	備考	時期
	253	スクレイパー	12区B	包含層	サヌカイト	−76.0	−34.0	11.0	30.36	〃	
	254	〃	10区B	谷−C第2層	〃	65.0	51.5	9.0	25.09	〃	
	255	〃	2区	包含層（北）	〃	−23.5−	39.5	11.0	5.80	〃 小片	
	256	〃	12区	溝−1下層	〃	−26.5−	28.5	5.0	4.32	〃 〃	
	257	〃	11区	黒色土	〃	31.0−	−32.0	9.0	7.55	〃 〃	
	258	〃	〃	溝−1	〃	−31.0−	32.0	6.0	5.42	〃 〃	
	259	〃	1区	谷（東）	〃	−25.5−	23.0	9.5	5.87	〃 〃	
	260	〃	11区	溝−1	〃	52.5	−12.0	4.0	2.48	〃 〃	
	261	〃	11区S	砂層	〃	−30.0−	−32.0	5.0	5.37	〃	
	262	〃	12区		〃	−33.0	−30.0	6.5	7.54	〃	
	263	〃	11区	溝−2	〃	25.0−	32.5−	4.5	2.67	〃 小片	
	264	〃	〃		〃	−50.0−	31.0	5.5	6.80	〃 〃	
	265	〃	12区	包含層	〃	−14.0−	−42.0	5.5	4.36	〃 〃	
	266	〃	11区南	溝−1上層	〃	−35.0	−28.0	7.0	4.44	〃 〃	
	267	〃	1区	包含層（南）	〃	−53.0	−22.0	4.0	6.22	〃 〃	
	268	〃	11区S	第2層	〃	−34.0−	−42.0	10.0	11.94	〃	
	269	〃	11区	溝−1	〃	−63.0−	−35.0	7.5	9.53	〃	
	270	〃	6区	包含層	〃	−36.5	−28.0	5.5	5.12	〃	
	271	〃	12区		〃	35.0−	25.0	7.0	5.23	〃	
	272	〃	11区		〃	25.0−	24.0	7.0	5.10	〃	
	273	〃	12区B	灰褐色砂	〃	46.0	24.0	5.0	5.99	〃	
57	274	〃	12区	包含層	〃	−82.5	60.0	16.5	62.40	Ⅱa	
	275	〃	12区B	〃	〃	65.0−	42.0	6.0	18.02	〃	
	276	〃	6区	包含層（下）	〃	45.5	53.0	13.0	34.56	〃	
	277	〃	12区B	溝−1	〃	105.0	71.0	19.0	174.16	〃	
	278	〃	12区D	包含層	〃	80.0	60.5−	11.0	72.50	〃	
	279	〃	3区	谷	〃	−71.0	65.5	15.0	59.06	〃 石核転用	
	280	〃	11区	包含層	〃	41.0−	45.0	10.0	19.99	〃	
	281	〃	12区A	落ち込み	〃	−63.0−	49.0	10.0	32.36	〃	
	282	〃	12区B	灰褐色砂	〃	126.0	75.0	18.0	150.80	〃	
	283	〃	12区	包含層	〃	−57.0	35.0	5.0	12.50	〃	
	284	〃	〃	〃	〃	−46.0−	−30.0	7.0	10.40	〃	
	285	〃		表採	〃	−35.0	22.0	5.5	4.19	〃	
	286	〃	12区B	灰白色砂粘質土	〃	49.0	35.0−	6.5	12.48	〃	
	287	〃	11区	溝−1	〃	39.0−	36.0	10.0	11.92	〃	
	288	〃	12区B	包含層	〃	46.0	33.0	5.5	7.43	〃	
60	289	〃	11区	包含層	〃	57.5−	−46.5	9.0	16.27	〃	
	290	〃	12区B	〃	〃	33.0	26.0	5.0	4.06	〃	
	291	〃	11区	谷上層	〃	62.0	33.0	10.0	16.13	〃	
	292	〃	〃	溝−1	〃	−40.0−	−34.5	5.5	8.18	〃	
	293	〃	3区		〃	32.0	32.0	5.5	6.51	〃	
	294	〃	10区B	谷−C上層	〃	71.0	39.5	8.5	22.58	〃	
	295	〃	12区D	包含層	〃	−28.0−	33.0	8.5	5.85	〃 小型	
59	296	〃	12区	溝−1下層	〃	88.0	27.0	10.5	24.00	〃 完形	
	297	〃	〃	包含層	〃	70.8−	29.0	8.2	21.22	Ⅱb	
62	298	〃	6区	〃	〃	76.0	31.5	9.5	21.48	〃 ほぼ完形	
	299	〃	7区	谷	〃	−58.5−	28.0	8.0	17.19	〃	
	300	〃	12区	溝−1下層	〃	−54.0−	37.0	6.5	12.95	〃	
	301	〃	〃	〃	〃	−38.5−	31.5	7.0	10.32	〃	
	302	〃	6区	溝	〃	53.0	36.0	15.0	25.57	〃	
	303	〃	2区	包含層	〃	27.0−	40.0	8.0	6.52	〃	

図	番号	遺物	出土地区	遺構	材質	最大長㎜	最大幅㎜	最大厚㎜	重量g	備考	時期
	304	スクレイパー	11区北岸		サヌカイト	46.0	31.0	8.0	11.17	Ⅱb？	
	305	〃	10区B	谷C	〃	21.0	27.0	5.0	2.90	〃	
	306	〃	6区	包含層（下）	〃	−53.0	29.0	6.0	10.29	Ⅱ	
	307	〃	12区B	灰褐色砂	〃	−42.5−	−35.5	8.0	12.72	〃	
	308	〃	11区	溝−1	〃	−37.5	−42.5	8.0	13.19	〃	
	309	〃	11区南	砂層	〃	36.0−	−42.0	9.0	12.96	〃	
	310	〃	11区	黒色土	〃	−41.5	−45.0	8.0	16.31	〃	
	311	〃	12区D	灰褐色砂	〃	29.0	29.0	7.5	6.78	〃	
	312	〃	12区B		〃	51.0	35.0−	9.0	10.72	〃	
	313	〃	11区	溝−3	〃	−33.0	−38.0	11.0	13.70	〃	
	314	〃	12区	溝−1下層	〃	−18.5−	−24.5	5.0	2.52	〃 小片	
	315	〃	11区南	黒色土	〃	30.0−	−37.0	11.0	8.96	〃	
	316	〃	11区	溝−2砂層	〃	33.0−	45.0	7.0	5.71	〃	
	317	〃	10区	谷−C上面	〃	26.0	34.0	8.0	4.25	〃 小片	
	318	〃	11区	黒色土	〃	40.0−	−35.0	23.0	14.13	〃	
	319	スクレイパー？	？	？	〃	−23.5	23.5	7.0	5.02	小片	
	320	〃	11区南	黒色土	〃	−23.0−	39.0	10.0	9.13	〃	
	321	〃	4区	包含層	〃	99.0	64.5	12.0	85.21	刃部を欠く	
	322	〃	6区	溝	〃	60.0	37.5	12.0	24.93	背部片？	
	323	〃	1区	包含層（南）	〃	46.0	66.5	13.0	37.19	〃	
	324	〃	12区B	包含層	〃	−39.0	−18.0	8.0	4.65	〃	
	325	〃	12区D	落ち込み	〃	38.0	25.5	6.0	6.82	小片	
	326	石包丁未製品？	11区S	砂層	緑色片岩	104.0	58.0	10.0	99.36		
9	327	石鏃	1区	包含層	サヌカイト	21.0	17.0	3.0	1.01	Ⅰa ほぼ完形	
64	328	楔形石器	12区B	溝−1	〃	31.0	30.0	10.5	10.36	Ⅰ	
	329	楔形石器？	〃	〃	〃	40.5	−21.0−	10.0	12.41	〃	
	330	〃	〃	斜面堆積	〃	30.0	−29.0−	9.0	8.82	〃	
	331	〃	11区	トレンチ黒色土	〃	30.5	−41.0	10.0	13.80	Ⅱ	
	332	不明石器	12区	溝−3	〃	35.0−	29.5	10.5	11.09		
	333	〃	11区南	溝−1上層	〃	30.5−	22.0	7.5	5.58		
	334	〃	3区	包含層	〃	28.5	28.0	6.0	6.25		
	335	〃	12区	〃	〃	27.5	24.5	8.0	7.0		
	336	〃	〃	灰褐色砂	〃	46.5	32.0	7.0	6.5		
	337	〃			結晶片岩	56.5	34.0	15.0	37.20	石錘か？	
	338	石器片	12区	包含層	サヌカイト	−27.0	31.5	7.0	6.71		
	339	〃	12区B		〃	−18.0−	21.5	4.0	1.83	鏃？	
	340	〃	〃	溝−1	？	−25.5	−24.5	4.5	2.26		
	341	R．F．	12区	溝−1下層	サヌカイト	91.0	65.0	18.0	65.40		
	342	〃	11区	溝−1	〃	71.0	56.0	11.0	42.60		
	343	〃	2区	包含層	〃	38.0	40.0	12.0	18.96		
	344	〃	12区	溝−1下層	〃	76.5	77.0	10.0	72.13		
	345	〃	〃	包含層	〃	29.0	58.5	20.5	39.54		
	346	〃	〃	溝−3	〃	29.0	16.0	6.0	3.18		
	347	〃		表採	〃	33.0	36.5	5.0	6.62		
	348	〃	1区		〃	33.0	21.5	5.0	3.44		
	349	〃	12区	砂層	〃	52.5	45.0	8.5	14.73		
	350	〃	12区E	黒灰色砂質土	〃	35.0	24.0	6.0	4.76		
	351	〃	11区南	黒色土	〃	69.0	51.0	18.5	69.75		
	352	〃	12区	溝−1下層	〃	25.0	28.0	5.0	4.37		
	353	石核	12区D	落ち込み	〃	180.0	172.5	70.0	1227.05	原材に近い リタッチあり	

図	番号	遺物	出土地区	遺構	材質	最大長 mm	最大幅 mm	最大厚 mm	重量 g	備　考	時　期
	354	R．F．	11区南	黒色土	サヌカイト	49.4	32.9	5.3	10.09	ほぼ完形	
	355	U．F．	6区	谷	〃	41.2	24.2	7.5	7.03	〃	
	356	〃		溝－1	〃	130.0	100.0	34.0	263.26	〃	
	357	〃	12区	包含層	〃	34.0	41.0	7.0	9.85	〃	
	358	〃	〃	溝－1	〃	59.5	79.5	6.0	27.99	〃	
	359	〃	〃	〃	〃	69.0	54.5	10.5	41.73	〃	
	360	〃	12区B	〃	〃	95.0	65.0	16.0	89.39	〃	
	361	〃	6区	谷（上）下層	〃	80.0	42.0	8.0	22.39	〃	
	362	〃	12区B	灰白色粘土	〃	69.0	41.5	10.0	30.29	〃	
	363	〃	12区	包含層	〃	50.0	41.0	11.5	17.85	〃	
	364	〃	〃	溝－1下層	〃	118.0	92.0	23.5	263.05	〃	
	365	〃	〃	〃	〃	88.0	79.0	20.0	75.85	〃	
	366	〃	12区C	包含層	〃	41.0	30.0	6.0	6.54	〃	
	367	〃	12区B	黒色土斜面堆積	〃	71.0	58.0	8.0	22.57	〃	
	368	〃	?		〃	37.5	36.0	9.0	7.69	〃	
	369	〃	12区	溝－1下層	〃	38.0	29.0	7.0	8.46	〃	
	370	〃	12区B	溝－1	〃	9.0	62.0	11.5	4.62	縦長剝片	
	371	〃	1区	谷（東）	〃	34.5	24.5	4.0	3.42		
	372	〃	11区	黒色土	〃	43.0−	39.0	5.5	7.29		
	373	〃	12区		〃	29.0	28.0	4.5	4.15		
	374	〃	11区S	第2層	〃	46.0	22.0	9.0	5.91		
	375	〃	12区	溝－1下層	〃	62.0	66.0	16.0	54.01		
	376	〃	6区	谷	〃	27.0	47.0	6.0	8.52		
	377	〃	12区	溝－1	〃	142.5	73.0	21.0	207.79		
	378	〃	〃	溝－1下層	〃	129.0	47.5	11.5	84.39		
	379	〃	11区	包含層	〃	−59.0	75.0	12.0	60.92		
	380	〃	12区B		〃	52.0	68.0	11.5	34.12		
	381	〃	1区	谷（東）	〃	53.0	39.0	11.0	16.35		
	382	〃	12区B	溝－1	〃	54.0	55.0	12.0	25.88		
	383	〃	12区D	灰褐色砂	〃	44.0	37.0	6.0	8.33		
	384	〃	12区	溝－3	〃	37.0	28.0	9.0	9.54		
	385	〃	12区	溝－1下層	〃	58.0	65.0	12.0	45.21		
	386	〃	12区B	灰褐色砂	〃	39.5	37.5	7.0	10.36		
74	387	石核	11区		〃	257.5	218.0	40.0	2750.00	原材に近い	
72	388	〃	〃	溝－1	〃	106.0	238.0	52.0	1184.53	交互剝離	
	389	〃	12区B	〃	〃	142.0	109.0	24.0	356.99	〃	
	390	〃	11区南	黒色土	〃	95.0	70.0	18.0	132.52	〃	
	391	〃	1区	包含層（南）	〃	80.0	46.0	12.0	42.11	〃	
	392	〃	12区B	灰褐色砂	〃	65.5	56.5	15.5	59.24	〃	
	393	〃	12区D	〃	〃	86.0	55.0	12.5	52.10	〃	
	394	〃	11区南	黒色土	〃	107.0	95.0	13.0	129.54		
	395	〃	11区	拡張区	〃	133.0	128.0	63.0	992.63		
	396	〃	〃	北岸	〃	108.0	83.0	17.0	175.05		
	397	〃	?	溝－1	〃	125.0	111.0	25.0	446.98		
	398	〃	〃	〃	〃	125.0	86.0	21.0	236.40		
	399	〃	〃	〃	〃	180.0	91.0	20.0	250.44		
	400	〃	12区	溝－3	〃	97.5	64.5	10.0	72.96		
	401	〃	6区	包含層（下）	〃	117.0	105.5	37.0	488.21		
	402	〃	11区南	溝－1上層	〃	108.0	52.0	22.0	169.56	折断面を打面	
	403	〃	2区北	包含層	〃	81.0	36.0	17.5	58.65	〃	
	404	〃	11区南	南トレンチ	〃	73.5	58.0	27.0	129.21	〃	

図	番号	遺物	出土地区	遺構	材質	最大長㎜	最大幅㎜	最大厚㎜	重量g	備　考	時　期
	405	石核	6区	包含層（下）	サヌカイト	71.5	62.5	15.5	83.20		
	406	〃	12区D	落ち込み	〃	60.0	55.0	13.0	41.89		
	407	石核片	12区B	包含層	〃	44.0	27.0	11.0	17.21	交互剥離	
	408	石核？	1区	谷土手7、8層	〃	71.0	66.0	17.0	73.67		
	409	石核	11区南	第2層	〃	34.0	31.5	19.0	18.92		
	410	〃	〃	黒色土	〃	47.0	41.0	7.0	14.15		
	411	〃	11区拡張区	包含層	〃	56.0	46.0	20.0	54.28		
	412	〃	12区	〃	〃	34.5	33.0	16.0	21.54	交互剥離	
	413	〃	11区南	黒色土	〃	47.0	46.0	18.0	34.71		
	414	〃	11区	溝－1	〃	53.0	27.0	15.0	20.37		
	415	〃	〃	？	〃	37.0	34.5	9.0	13.25		
	416	〃	12区E	黒灰色砂質土	〃	58.0	41.5	13.5	40.50		
	417	〃	12区	溝－1上層	〃	55.5	52.0	15.0	52.00		
	418	〃	12区D	灰褐色砂	〃	64.0	47.0	12.0	46.39		
	419	〃	11区南	第2層	〃	51.0	33.0	9.0	17.64		
	420	〃	1区	包含層（南）	〃	48.0	42.0	8.5	19.59		
	421	〃			〃	57.0	37.5	19.0	31.60		
	422	〃	12区	溝－1下層	〃	47.0	33.0	15.0	16.61		
	423	〃	11区南	溝－1上層	〃	45.0	32.0	10.0	16.01		
	424	〃	11区	西壁砂層	〃	35.0	30.0	12.0	9.45		
	425	〃	11区南	黒色土	〃	40.0	35.0	14.0	20.77		
	426	〃	12区B	包含層	〃	33.0	29.0	16.0	21.12		
	427	〃	11区S	黒色土	〃	50.5	29.5	14.0	15.89		
	428	〃	6区	落ち込み	頁岩？	47.0	27.0	15.0	14.85		
	429	〃	12区B		サヌカイト	34.0	33.0	9.5	13.62		
	430	石核片		灰白色粘土（ピート上面）	〃	62.0	21.0	15.5	19.81		
	431	〃	〃	落ち込み	〃	53.5	17.5	10.0	12.25		
	432	石核片？	11区	溝－1	〃	37.0	22.5	9.5	9.08		
78	433	石棒	11区南	黒色土	結晶片岩	－61.5－	－30.3－	13.5	36.62	小片	
69	434	打製石鍬	6区	谷（中）下層	サヌカイト	116.0	48.0	18.0	107.91	ほぼ完形　表裏磨耗痕	
70	435	〃	7区	谷	〃	131.5	48.5	21.0	128.33	〃	
71	436	〃	6区	谷（上）下層	サヌカイト	－121.0	50.0	16.0	119.19	〃	
68	437	〃	11区	砂層	凝灰岩	116.5	38.0	17.0	106.63	完形	
	438	〃	〃	〃	〃	95.0	54.0	14.0	94.87		
	439	打製石鍬未製品？	11区S	黒色土	安山岩	70.5	53.0	18.0	69.91		
67	440	有肩石斧	2区南	包含層	サヌカイト	50.0	56.5－	12.7	37.48	ほぼ完形	
66	441	〃	2区北	〃	〃	91.5	－93.5	19.2	126.44	〃	
65	442	〃	8区	〃	〃	－66.0	62.5	13.0	54.92		
76	443	小型方柱状片刃石斧	12区B	灰褐色砂上面	頁岩	127.8	18.7	12.2	52.42	完	
77	444	太型蛤刃石斧	6区	包含層（下）	細粒閃緑岩	92.0－	70.5	56.3	527.53	1/4残存　基部残	
75	445	乳棒状石斧	12区	砂層	結晶片岩	147.0	50.0	33.5	384.10	完形	
82	446	砥石	12区B	灰褐色砂	砂岩	60.5	49.5	17.5	94.24	完形、小型	
79	447	〃	11区南	溝－1下層	流紋岩	43.5－	34.5	17.0	35.73	小型	
81	448	〃	1区	谷	〃	55.0－	34.8	27.5	71.67	〃	
80	449	〃	6区	溝	凝灰岩	44.0－	27.0	26.5	34.77	〃	
84	450	〃	3区南端	包含層	細粒砂岩	－70.0	45.5－	34.0	61.28	〃	
	451	〃	11区	北岸	凝灰岩	62.5	42.5	33.5	120.83	〃	
	452	〃	〃	砂層	流紋岩	44.0	43.5	12.5	16.40	〃	

図	番号	遺物	出土地区	遺構	材質	最大長 mm	最大幅 mm	最大厚 mm	重量 g	備考	時期
83	453	磁石	11区	溝－1	珪化木	80.0−	37.5	13.8	42.55	小型	
86	454	〃	12区D	包含層	砂岩	102.0	62.0	52.5	275.68	ほぼ完形、小型	
	455	〃			凝灰岩	72.0	44.0	28.0	85.73	〃 〃	
	456	〃	6区		半花崗岩	−66.0−	58.0	32.5	90.17		
	457	〃	10区D	包含層	細粒砂岩	66.5−	40.5	42.5	131.70		
88	458	〃	11区南	黒色土	流紋岩	− 175.0	41.0	36.0	376.48	若干欠損	
87	459	〃	11区	溝－1下層	珪化木	− 172.5	−72.0	18.5	282.1		
85	460	〃	10区	谷上層	細粒砂岩	−94.5	−87.0	41.5	266.89	工具痕あり	
	461	〃	4区	包含層	結晶片岩	62.0	55.0	14.0	77.25		
	462	〃	11区	溝－1（一括中）	流紋岩	46.0−	48.5	54.0	148.01		
	463	〃	〃		半花崗岩	109.5	89.0	61.0	599.10	大型	
	464	〃	6区	包含層（下）	〃	−105.0−	−84.0−	36.0	290.42	〃	
	465	〃			〃	70.0−	105.0	53.5	488.15	〃	
	466	〃	11区12区B	溝1砂層黒色土	砂岩	−98.0−	53.5	56.0	415.86	〃	
	467	〃	11区南	黒色土	半花崗岩	133.0−	111.5	83.0	1529.07	〃	
	468	〃	11区	溝－2	安山岩	200.0	113.0	66.0−	2055.69	〃	
	469	〃	6区	包含層（下）	半花崗岩	151.5−	107.0−	71.5	1391.87	〃	
	470	〃	11区	溝－3	砂岩	148.0	102.5	70.0	1547.54	〃	
	471	〃	12区	包含層	流紋岩	−117.0−	−100.0	87.5	770.42	〃	
	472	〃	12区C	〃	細粒花崗岩	119.5	115.0	78.0	1393.92	〃	
	473	〃	11区	溝－2砂層	両雲母花崗岩？	194.0	− 133.0	92.0	3,750.00	〃	
	474	〃	6区	包含層（下）	細粒両雲母花崗岩	76.0−	−47.0−	41.5−	172.71	475と同一個体か？	
	475	〃	〃	〃	〃	−88.5−	−54.0−	52.5	239.45	474と同一個体か？	
91	476	石皿	3区	谷	砂岩	175.5	128.5−	54.0	1522.63	完形に近い	
100	477	石錘			石英斑岩	94.0	68.5	25.5	228.55	I 完形	
96	478	〃	12区D	灰褐色砂	流紋岩	94.0	60.0	36.0	263.15	〃 〃	
102	479	〃	12区	包含層	石英安山岩	155.0	94.5	30.0	660.65	〃 大型	
105	480	〃	〃	溝－1下層	石英斑岩	103.0	90.0	27.0	360.26	〃	
104	481	〃	12区	溝－1下層	細粒花崗岩	92.5	77.0	23.5	235.87	〃 完	
101	482	〃	〃	溝－1	半花崗岩	94.5	83.5	32.0	336.01	〃 〃	
98	483	〃	6区	包含層（下）	石英安山岩？	101.0	70.5	15.5	169.55	〃 〃	
103	484	〃	12区D	包含層	安山岩	103.5	89.5	24.5	306.19	〃 〃	
	485	〃	12区	砂層黒色土	細粒閃緑岩	90.0	75.0	24.0	233.30	〃	
	486	〃	12区D	灰褐色砂	結晶片岩	107.0	78.0	17.0	223.65	〃 完形	
	487	〃	12区	包含層	安山岩	104.0	89.5	27.0	417.81	〃 〃	
	488	〃	11区	砂層（溝3）	安山岩	105.0	77.0	20.0	245.97	〃 〃	
	489	〃	12区B	灰褐色砂	流紋岩？	99.0	65.0	19.0	191.99	〃 〃	
	490	〃	12区D	包含層	砂岩	80.0	63.5	23.5	171.42	〃 ほぼ完形	
	491	〃			安山岩？	93.0	70.0	23.0	252.93	〃 〃	
	492	〃	11区南	溝－1上層	花崗斑岩	103.5	85.5	23.0	295.04	〃 完形	
	493	〃	12区	〃 下層	半花崗岩	87.5	60.0	13.0	71.70	〃 〃	
93	494	〃	11区	溝－1	石英安山岩	80.0	42.0	19.5	96.86	〃 〃	
	495	〃	3区	谷	安山岩	80.0	48.0	19.0	94.43	〃 〃	
	496	〃	11区、拡張区		石英安山岩	103.0	80.0	25.0	313.74	〃 〃	
92	497	〃	12区D	灰褐色砂	蛇紋岩？	57.5	44.5	20.5	81.72	〃 小型完形	
	498	〃	10区	谷－C	細粒花崗岩	90.0	72.0	16.0	148.67	〃 〃	
	499	〃	12区B		安山岩	82.0	60.5	24.0	123.66	〃 ほぼ完形	

図	番号	遺物	出土地区	遺構	材質	最大長㎜	最大幅㎜	最大厚㎜	重量g	備考	時期
97	500	石錘	10区	谷－C上面	流紋岩	79.5	68.5	21.5	161.16	I 完形	
	501	〃	12区B	溝－3	安山岩	110.0	100.0	27.0	425.05	〃 〃	
	502	〃	12区	溝－1	石英斑岩	80.5	78.5	30.0	303.15	〃 〃	
	503	〃	〃	〃	〃	103.0−	94.0	19.5	259.34	〃 〃	
	504	〃	12区B	灰白色粘土	流紋岩	102.0	92.5	41.0	553.93	〃 〃	
	505	〃			石英斑岩	69.0	64.5	21.5	133.86	〃 〃	
	506	〃	〃	灰白色粘土	石英安山岩	79.0	77.0	37.5	276.57	〃 〃	
107	507	〃	6区	包含層（下）	安山岩	73.0	73.5	13.0	115.65	〃 薄手、完形	
	508	〃	11区	砂層	花崗斑岩	84.0	81.5	28.0	269.29	〃 完形	
	509	〃			安山岩	98.0−	57.5−	20.0	103.42	〃	
	510	〃	12区	灰白色砂質土	結晶片岩	−67.0	65.0	16.0	133.31	〃	
	511	〃	6区	谷－C（下）	安山岩	57.0−	−65.0	23.0	86.68	〃	
	512	〃	12区B	灰褐色砂	結晶片岩	56.0−	76.0	25.0	125.84	〃	
	513	〃			安山岩	65.5−	54.0	22.5	73.67	〃	
	514	〃	12区	包含層	安山岩	−73.0	94.0	27.5	239.17	〃	
	515	〃	6区	落ち込み	結晶片岩	92.0	89.5	22.0	235.85 II 完形		
	516	〃	12区B	灰褐色砂	〃	67.0	72.5	14.0	101.98	〃 〃	
109	517	〃	11区南	黒色土	石英斑岩	75.5	100.0	28.0	295.27	〃 〃	
110	518	〃			〃	73.0	93.0	39.0	379.74	〃 〃	
108	519	〃	12区D	包含層	石英安山岩	61.3	49.0	22.0	93.94	〃 小型 完形	
	520	〃	11区S	黒色土	細粒花崗岩	72.5−	70.0	18.0	144.54	〃	
111	521	〃	12区D	灰褐色	石英斑岩	82.5	79.5	26.5	271.34	〃 完形	
	522	〃	10区	谷－C溝2	石英斑岩	79.5	70.5	24.0	209.11	〃 〃	
	523	〃			安山岩	80.0	59.0−	18.5	122.19	〃 片残存	
114	524	〃	12区B	灰褐色砂	結晶片岩	91.0	82.5	21.5	221.66 III 完形		
113	525	〃	12区D	〃	石英安山岩	63.5	79.0	21.5	155.20	〃 〃	
115	526	凹石	11区南	溝－1下層	両雲母花崗岩	149.0	100.5	48.0	964.53	凹み2ケ1対 完形	
116	527	〃	12区B	灰褐色砂	石英安山岩	99.0	80.5	57.0	654.14	完形	
117	528	〃	11区		石英斑岩	114.0	98.5−	45.0	724.05		
	529	〃	〃	溝－3砂層	安山岩	119.5	99.0	47.0	839.93	完形	
	530	〃	7区12区	谷溝3	砂岩	87.0	50.0−	43.0	277.71	2片接合 割れた後、火を受けている	
	531	〃	11区拡張区		閃緑岩	124.5	99.0	46.0	896.95	凹み浅い 完形	
	532	〃	11区S		安山岩	118.0	81.0	35.0	562.85	完形	
119	533	敲石	1区	谷	閃緑岩	110.5	85.0	62.3	900.54	I 凹石的 完形	
	534	〃	3区	〃	〃	115.0	98.0	51.5	850.80	I 完形	
	535	〃	11区S	砂層	石英斑岩	114.0	91.0	69.0	1011.28	〃 〃	
	536	〃		表採	細粒閃緑岩	104.0	81.0	55.5	659.86	〃 〃	
	537	〃	12区D	包含層	石英斑岩	144.0	105.0	34.0	830.49	〃 〃	
	538	〃	11区	谷	しそ輝石閃緑岩	91.5−	−91.0	69.0	831.77	〃	
	539	〃	12区D	包含層	安山岩	100.0	86.0	75.0−	943.19	〃	
	540	〃	1区	谷	石英安山岩	77.0−	−100.0	67.0	657.75	〃	
	541	〃	12区C	包含層	石英安山岩	80.0−	95.0	62.5	526.97	〃	
	542	〃			流紋岩	115.0−	108.0	50.5	870.76	〃	
	543	〃	2区	包含層	石英斑岩	92.0	−84.0	50.0	420.41	〃	
	544	〃	12区B	石列	流紋岩	− 136.0	108.0−	71.5	1017.88	〃	
	545	〃	6区	谷（中）下層	安山岩	56.0−	−100.0−	43.0	318.67	〃	
	546	〃	12区E	包含層	玢岩	−86.0	−65.0	65.0	578.17	〃	
	547	〃	12区B		流紋岩	100.0−	69.5−	37.0	270.88	〃	
	548	〃	11区	溝－2砂層	安山岩	91.0−	92.5−	33.0+α	264.60	〃	
	549	〃			安山岩	74.5	58.5	22.0	137.37	〃 やや小型、完形	

図	番号	遺物	出土地区	遺構	材質	最大長㎜	最大幅㎜	最大厚㎜	重量g	備考	時期
	550	〃			細粒花崗岩	94.0	65.0	34.5	292.77	Ⅱ 完形	
	551	〃	12区	包含層	半花崗岩	125.0−	77.0	53.0	860.41	Ⅲ	
	552	〃			細粒閃緑岩	147.5	41.5	28.0	282.06	Ⅱ 完形	
120	553	〃	3区		細粒花崗岩	123.5	43.0	34.5	280.62	〃 〃	
	554	〃	12区	包含層	閃緑岩	98.0	31.5	28.0	127.24	〃 〃	
	555	〃	8区北	〃	結晶片岩	98.0−	38.5	23.0	150.40	〃	
	556	〃			流紋岩	85.0−	46.0	40.0	250.48	〃	
	557	敲石&磨石	12区B	灰褐色砂	閃緑岩	108.5	95.0	87.0	1250.94	Ⅰ 完形	
	558	〃	5区	包含層	石英斑岩	66.0	61.0	52.5	308.09	〃 〃	
	559	〃	12区C	〃	石英斑岩	116.0	76.0−	74.5	946.58	〃	
	560	〃	11区S	黒色土	花崗岩	−54.0−	98.0	73.0	486.07	〃	
	561	〃	11区		石英安山岩	117.0	96.8	58.5	1004.64	Ⅱ 裏面中央に敲打痕 完形	
	562	〃	6区	谷（中）下層	花崗岩	118.0	92.5	55.5	907.49	〃 完形	
	563	〃			斑糲岩	93.0	71.5	50.5	591.87	〃 〃	
	564	〃			石英斑岩	85.5	64.5	44.0	332.53	〃 〃	
	565	〃	11区	溝−1	細粒花崗岩	111.5	81.0	53.5	695.77	〃 やや欠損	
	566	〃	4区		普通輝石安山岩	115.0	101.0	54.0	866.75	〃 〃	
	567	〃			半花崗岩	94.0−	50.0−	48.0	294.48	〃	
	568	〃			細粒閃緑岩	71.0−	−90.0−	63.5	542.03	〃	
	569	〃	12区D	包含層	石英斑岩	84.0−	135.0	32.5	463.92	〃 やや偏平	
	570	〃	12区B	〃	〃	130.0	−80.0	41.0	630.74	〃 〃	
	571	石皿	4区		細粒閃緑岩	220.2−	−120.5−	66.0	3000.00		
90	572	〃	5区		〃	−199.0−	−117.5−	59.5	2026.90		
	573	〃	11区	溝−3	砂岩	91.0−	−87.0−	55.0	677.54		
	574	台石	12区B		安山岩	210.0	110.5	71.0	3000.00	完形	
	575	〃			安山岩	190.0	170.2	46.5	2200.00		
	576	スクレイパー	12区	溝−1	サヌカイト	122.0	107.0	29.5	282.23	Ⅰa 完形	
	577	〃	12区	溝−1下層	〃	−33.5−	41.5	11.0	17.81	〃	
	578	〃	〃	〃	〃	116.0	62.0	20.0	140.18	Ⅱb 縦長剥片を利用 完形	
	579	石器片	〃	〃	〃	−17.0−	22.0	6.0	2.99		
	580	〃	〃	〃	〃	24.0−	17.0	4.0	1.75		
	581	〃	〃	〃	〃	24.5−	31.5	7.0	4.50		
	582	R．F．	〃	〃	〃	149.5	112.0	22.0	308.69	完形	
	583	〃	〃	〃	〃	107.0	123.5	22.5	287.70	ほぼ完形	
	584	〃	〃	〃	〃	123.5	105.0	21.5	281.93	〃	
	585	〃	〃	〃	〃	144.5	86.0	26.0	287.64	完形	
	586	〃	〃	〃	〃	104.0	74.5	17.5	134.18		
	587	〃	〃	〃	〃	117.0	94.0	15.0	131.05	完形	
	588	〃	〃	〃	〃	103.5	69.0	23.0	174.05	〃	
	589	〃	〃	〃	〃	121.0	75.0	19.0	179.59	ほぼ完形	
	590	〃	〃	〃	〃	96.5	55.0	22.5	76.85	〃	
	591	〃	〃	〃	〃	63.0	85.0	13.5	103.56	〃	
	592	〃	〃	〃	〃	113.0	98.0	23.0	183.48	〃	
	593	U．F．	〃	〃	〃	71.5	76.0	10.0	53.72	〃	
	594	〃	〃	〃	〃	104.0	108.0	21.0	233.12	〃	
73	595	石核	〃	〃	〃	133.5	145.0	39.0	752.53	ほぼ完形	
	596	〃	〃	〃	〃	152.5	97.0	22.5	339.68	完形	
	597	〃	〃	〃	〃	124.0	122.0	26.0	458.09	ほぼ完形	
	598	〃	〃	〃	〃	69.5	64.5	24.0	107.49	完形	
	599	〃	〃	〃	〃	89.5	60.5	19.0	75.93	〃	

図	番号	遺物	出土地区	遺構	材質	最大長 mm	最大幅 mm	最大厚 mm	重量 g	備　考	時　期
	600	石核	12区	溝1－下層	サヌカイト	125.0—	98.0	27.0	244.48		
	601	〃	〃	〃	〃	129.0	100.0	22.0	283.01	ほぼ完形	
	602	〃	〃	〃	〃	—99.0	80.0	18.0	141.83		
	603	〃	〃	〃	〃	95.0	74.0	23.0	147.55	完形	
122	604	双孔円盤	〃	溝－1		52.0		6.5	22.09		
123	605	剣形模造品	10区	谷－C		49.0	21.0	5.5	5.40		
124	606	装身具	12区	包含層		30.0	28.0	5.5	5.86		
125	607	双孔円盤	〃	〃		26.0		3.5	3.04		
126	608	鏡形模造品	〃	〃		42.0		11.0	21.40		
127	609	管玉	11区	溝－2		21.5	9.0	10.0	3.20		
128	110	硯	〃	包含層						一部	

※計測値の“—”は、計測値を石器の正位置としてみた場合の欠損部の位置を示す
※備考欄の“Ⅰａ、Ⅰｂ”等は各石器の形態分類を示す。

(第5章　第3節　石器　参照)

図版1

(1)中山貝塚遠景（南から）　(2)貝散布状況　(3)貝塚内の貝類　(4)対策委員会　8／8

図版 2

中山１、２号貝塚

①T－8　②T－9　③T－10　④T－12

図版３

①１号貝塚

②２号貝塚

③４号貝塚

①１号貝塚出土遺物

②２号貝塚出土遺物

③４号貝塚出土遺物

図版 1

①酒津八幡神社正面　②同背面　③上酒津墓地内建物跡

①酒津八幡山平谷遺跡全景（川から）

②同（山上から）

図版 3

①古墳状の高まり　②作業風景　③T－1　④T－2

①T－3　②T－4　③T－5　④T－6

図版5

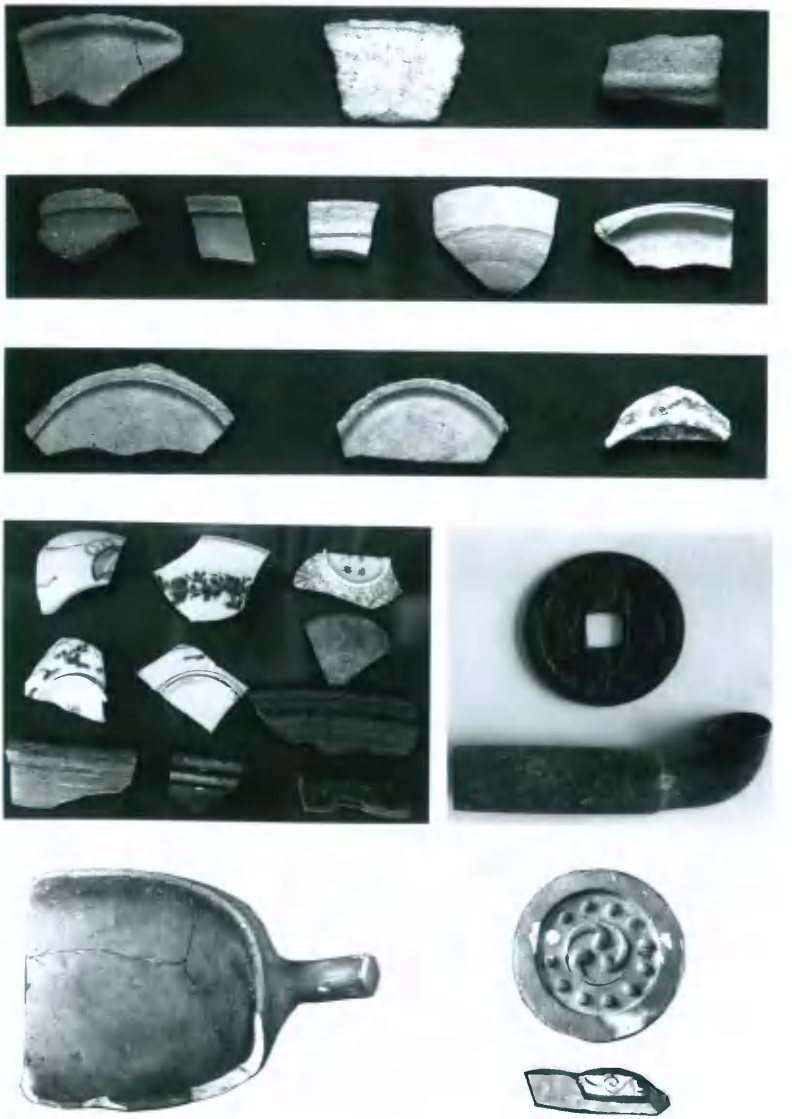
①T－7　②T－8　③T－9　④T－10

①T－11　②T－12　③T－13

①建物群と水路　②SB－1

①SB－2　②SB－3　③SC－1　④SC－2

①SD－1　②SD－2　③SK－1



G－6他出土遺物

SK－1　出土遺物

①酒津一水江遺跡　②T－1大溝断面　③T－1畔平面　④T－1畔・大溝

図版 2

①T－2　②T－3・4　③T－5・G－5　④T－11

①T－6掘削作業　②T－6　③T－7　④T－8

図版 4

出土遺物

1．遺　跡　遠　景　（東から）

2．第1次調査地遠景　（北から）

図版2

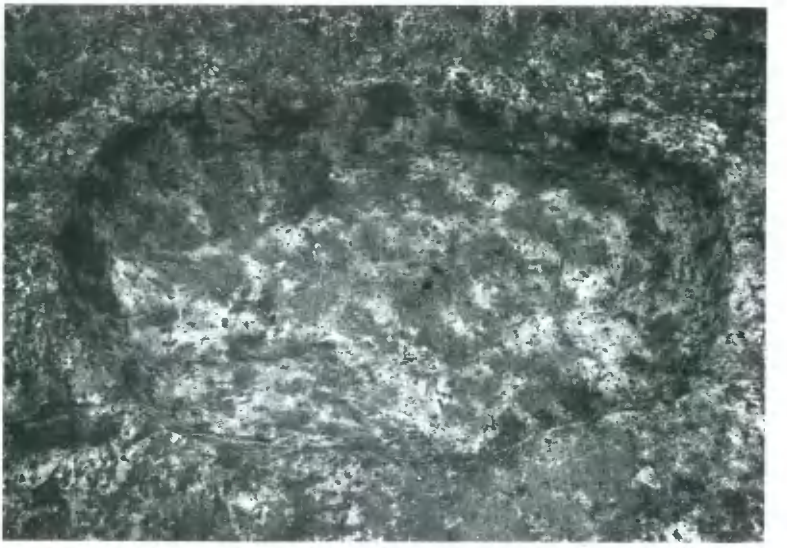
1．丘陵上第1次調査状況（北から）

2．第1次調査状況（北東から）

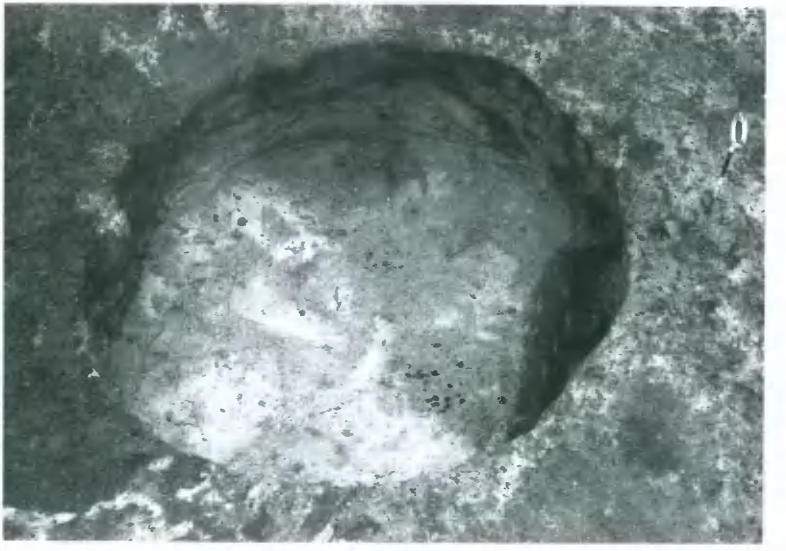
1．縄文時代　土壙検出状況（南から）

2．土壙－5　　（南東から）

図版 4



1．土壙－6　　（南東から）



2．土壙－2　　（南東から）

1．調査区西端　微高地下り（南から）

2．落ち込み　木器出土状況（西から）

図版6

1．溝－1　　（南から）

2．溝－1　土層断面（南から）

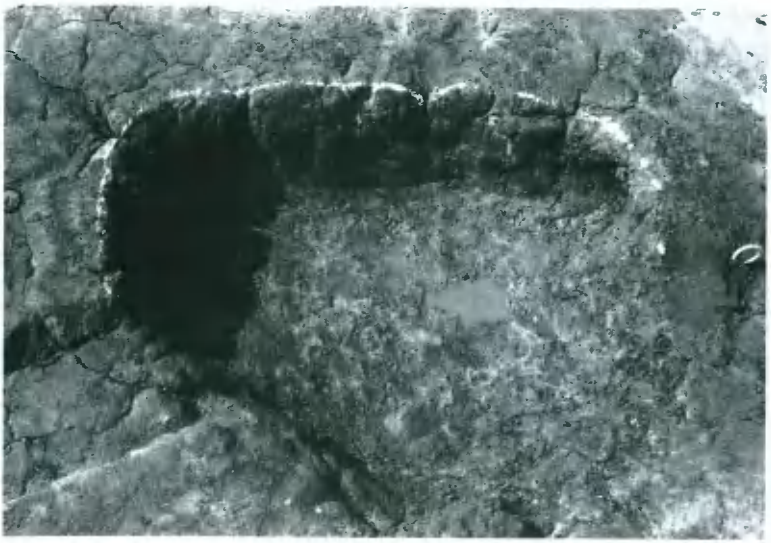
1．溝－1　木器出土状況（南から）

2．溝－1　遺物出土状況（南西から）

1．窯址及び焼土土壙１～４　（北から）

2．窯址及び焼土土壙１～４　（南から）

1．焼土土壙－1　　（南から）



2．土壙－21　　（南東から）

1．谷A周辺　　（南東から）

2．谷A土層断面　（東から）

1．谷－B　（北東から）

2．谷－B土層断面　（北東から）

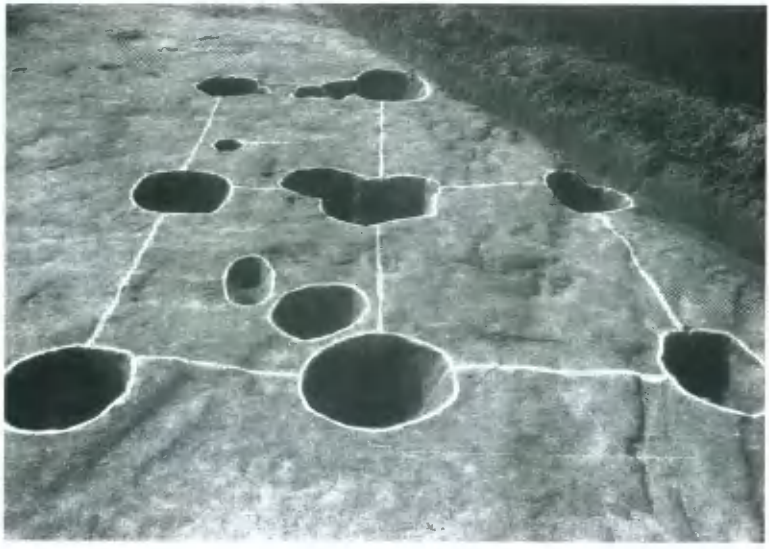
図版12

1．谷－C　周辺（東から）

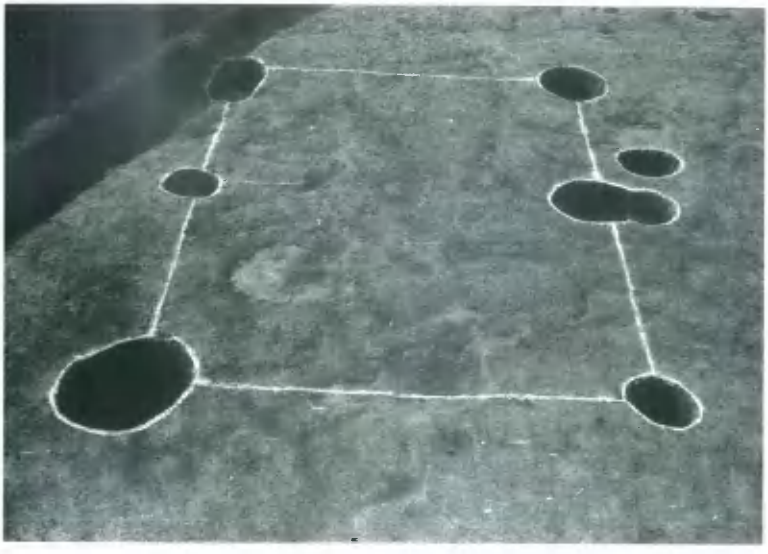
2．谷－C　土層断面（東から）

1．建物－3、4周辺（南から）

2．建物　1～4　周辺（北西から）



1．建物－1　　（南東から）



2．建物－2　　（南東から）

1．建物－3柱穴内土器出土状況　（南から）

2．建物－6　周辺　　（東から）

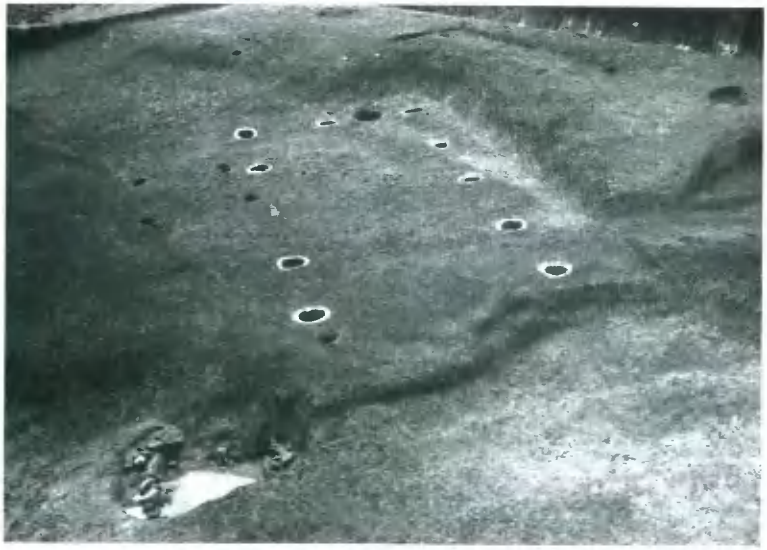
1．建物－9～12　周辺　（北から）

2．建物－9～12　周辺（東から）

1．建物ー17～21　周辺（南から）

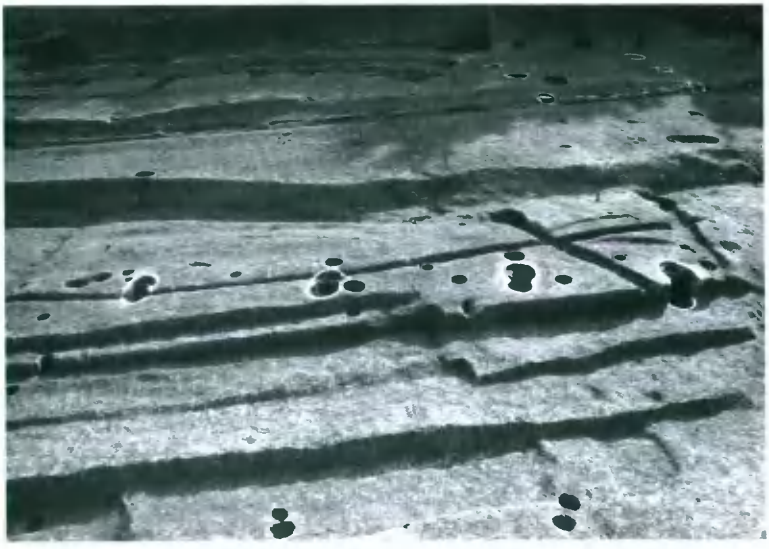
2．建物ー17～21　周辺（北東から）

1．建物ー18～21　周辺（北東から）

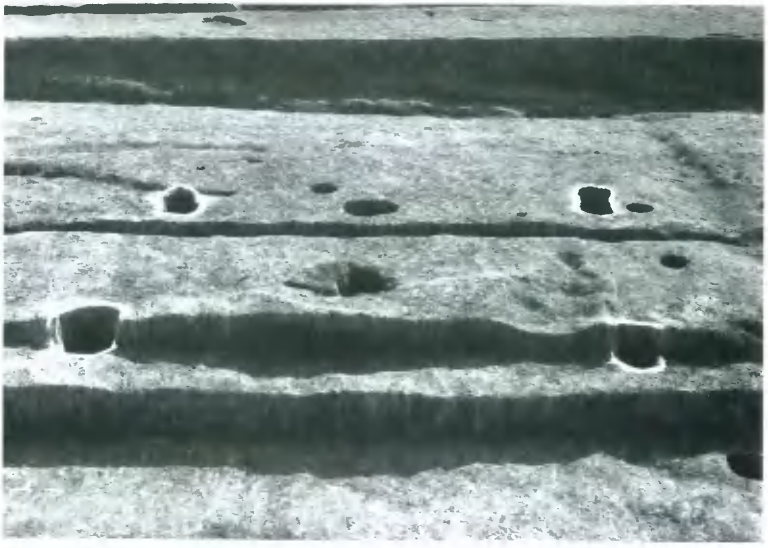


2．建物ー22、井戸ー4　周辺（北から）

1．建物ー23、24　周辺（北西から）



2．建物ー23　柱穴列ー6　周辺（東から）



1．建物ー24　カジ炉　（北東から）

2．カジ炉　（北東から）

1．井戸－1　　（南西から）

2．井戸－2　　（東から）

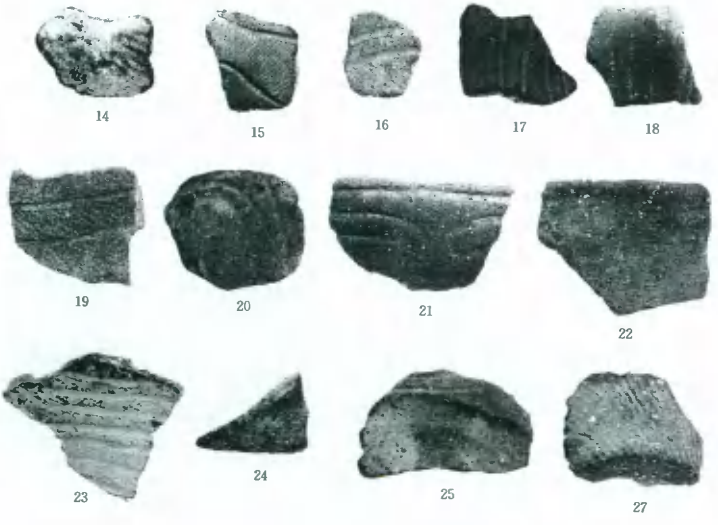
1．井戸－3　（東から）

2．井戸－3　（東から）

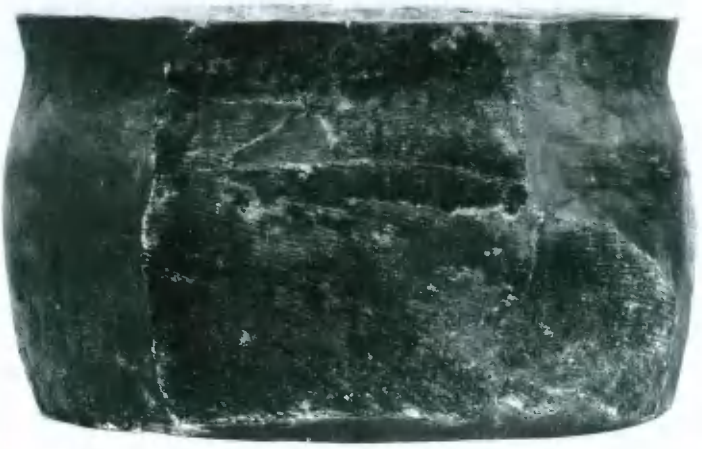
1．溝2、3　（北から）

2．溝4、5　（南東から）

1．遺構出土の縄文土器



2．後期以前の縄文土器

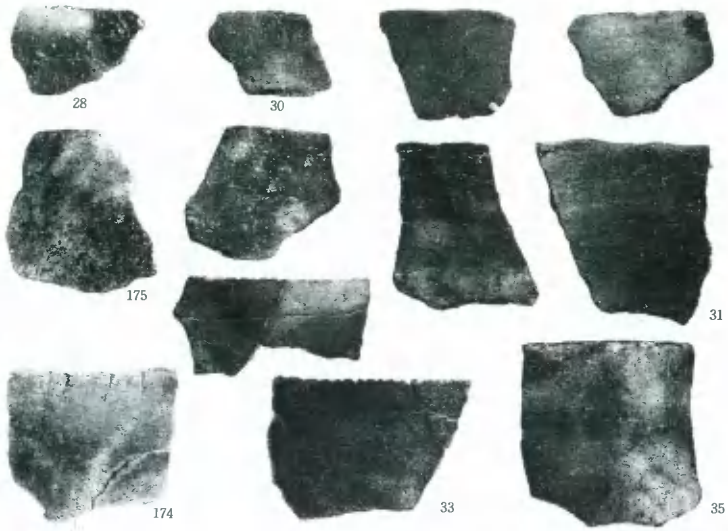


42

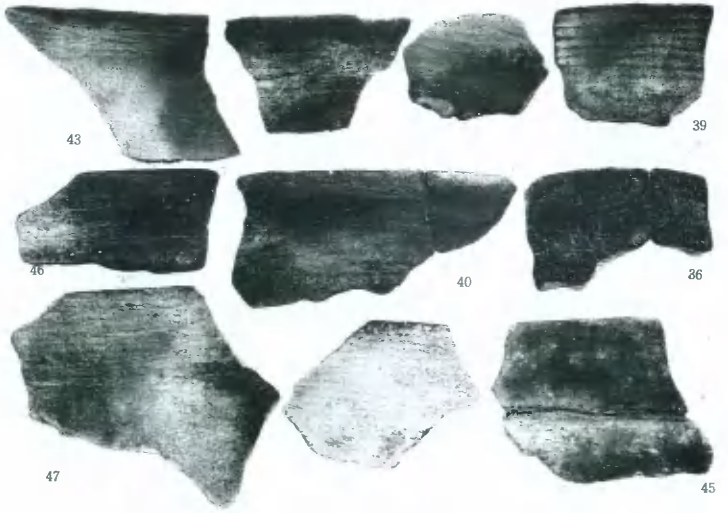
1．深鉢B類

185

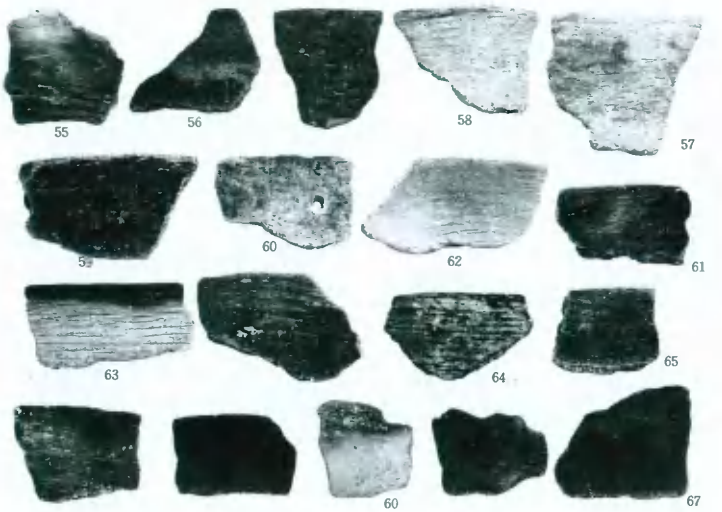
2．浅鉢B類



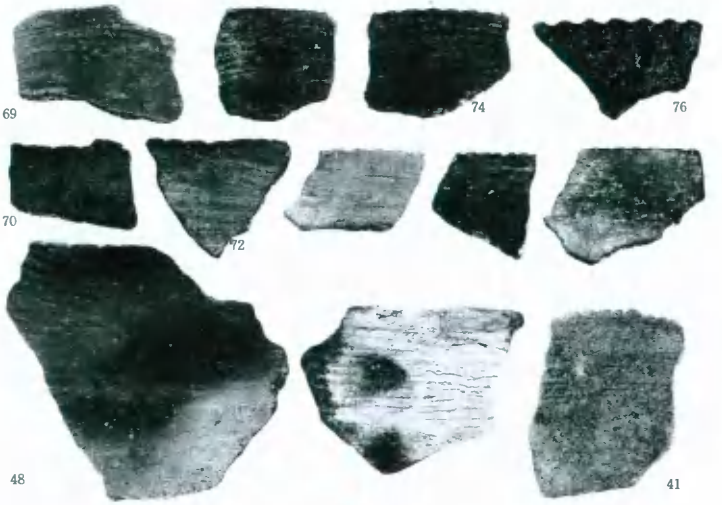
1．深鉢口縁部 1



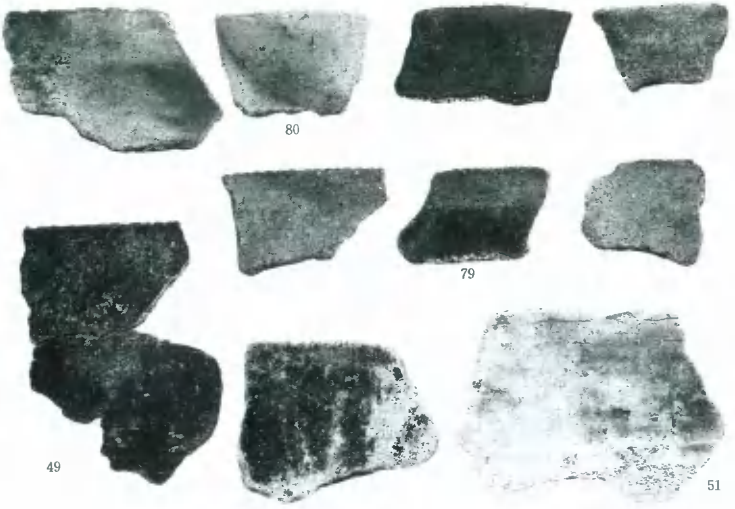
2．深鉢口縁部 2



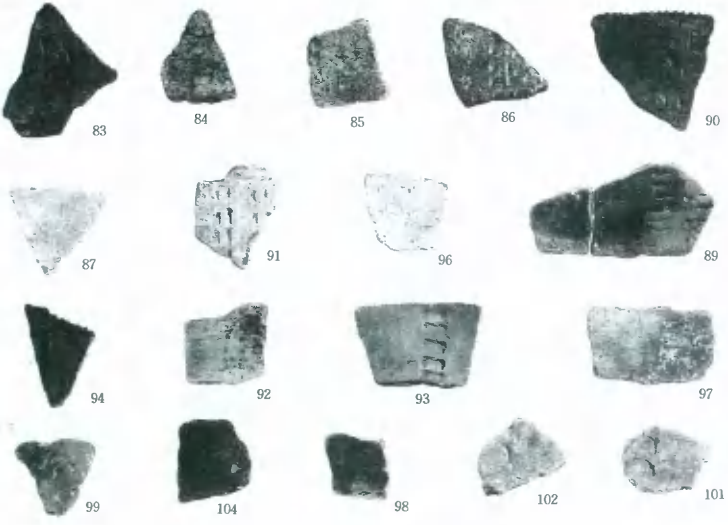
1．深鉢口縁部 3



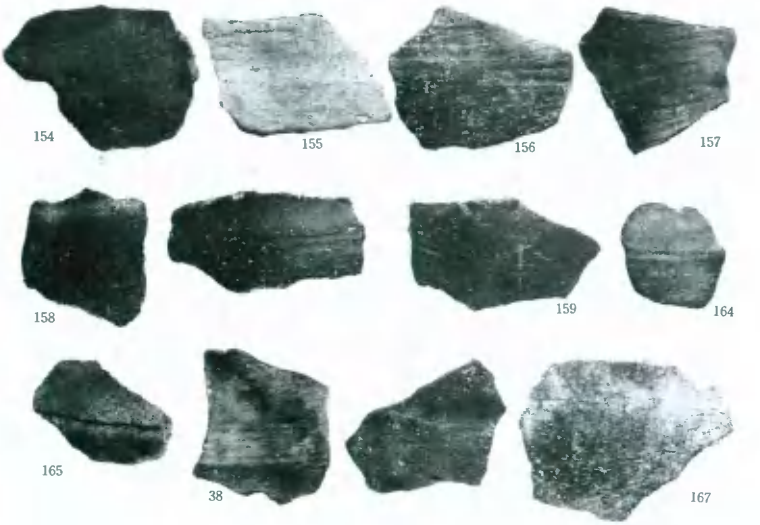
2．深鉢口縁部 4



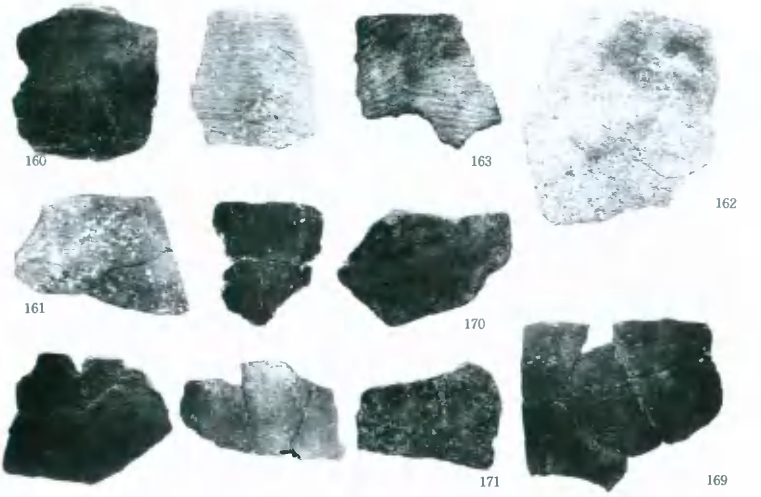
1．深鉢口縁部 5



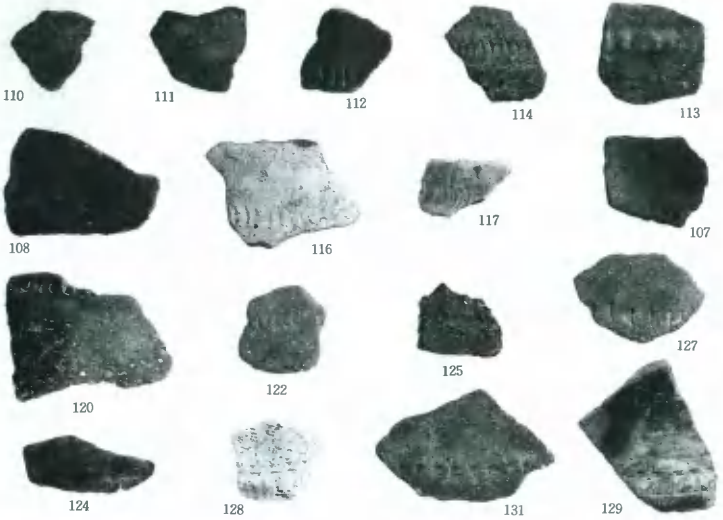
2．深鉢文様（爪形文）


154
155
156
157
158
159
164
165
38
167

1．深鉢頸部

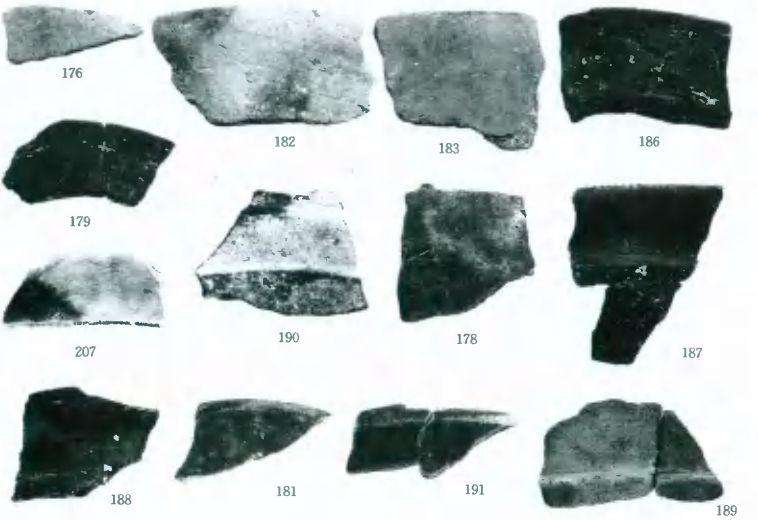

160
163
162
161
170
171
169

2．深鉢胴部

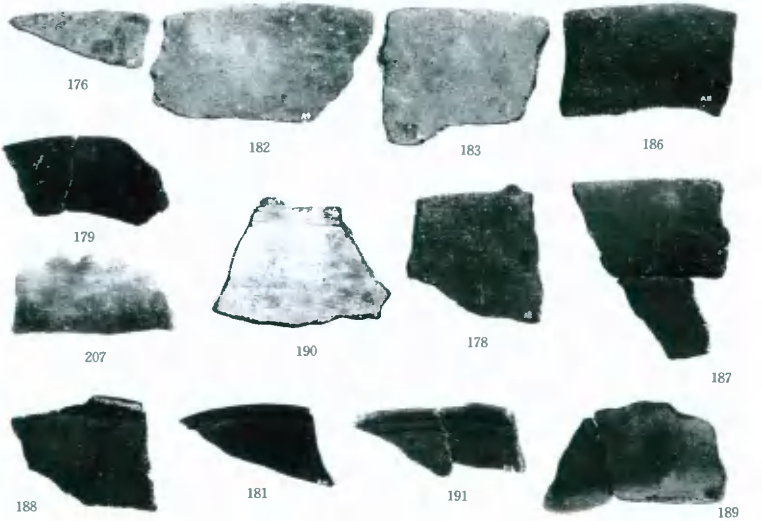


1．深鉢文様（爪形文）

2．深鉢文様（突帯文）

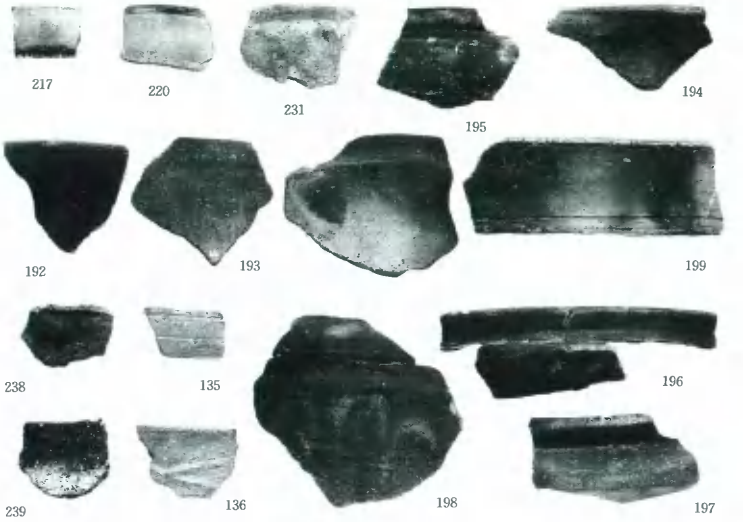


1．浅鉢口縁部１（表）

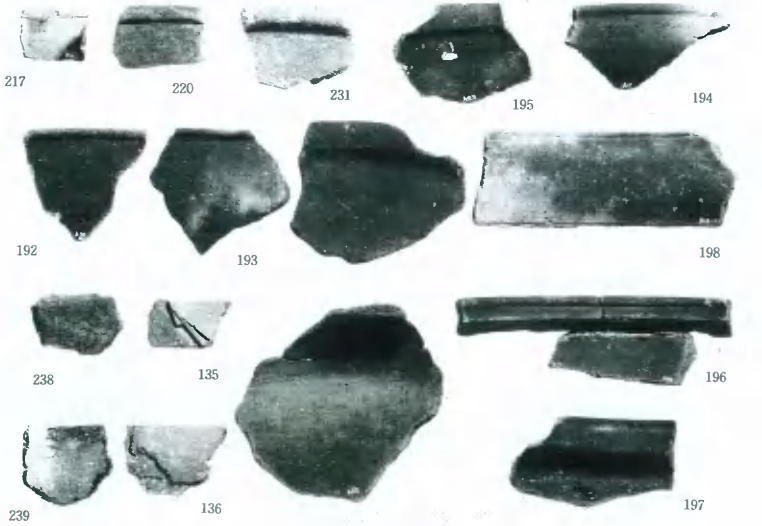


2．浅鉢口縁部１（裏）

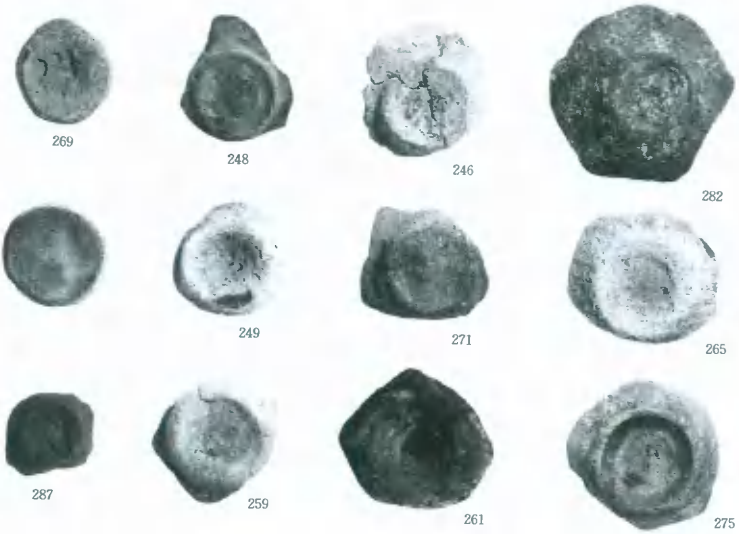
図版32



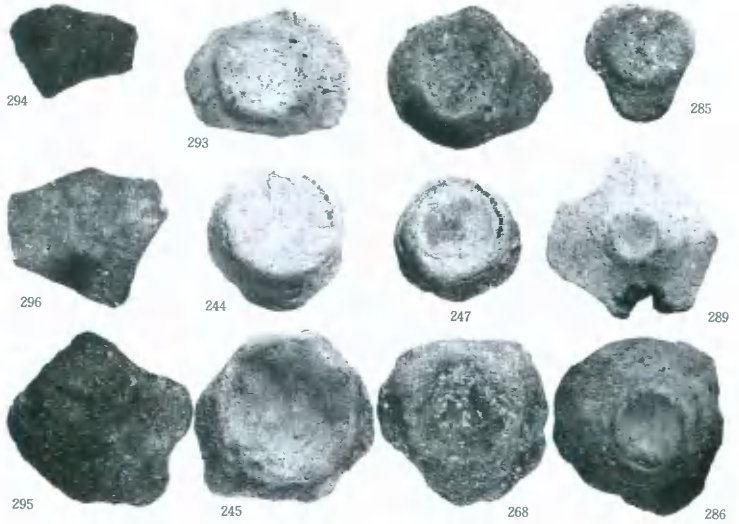
1．浅鉢口縁部２（表）



2．浅鉢口縁部２（裏）

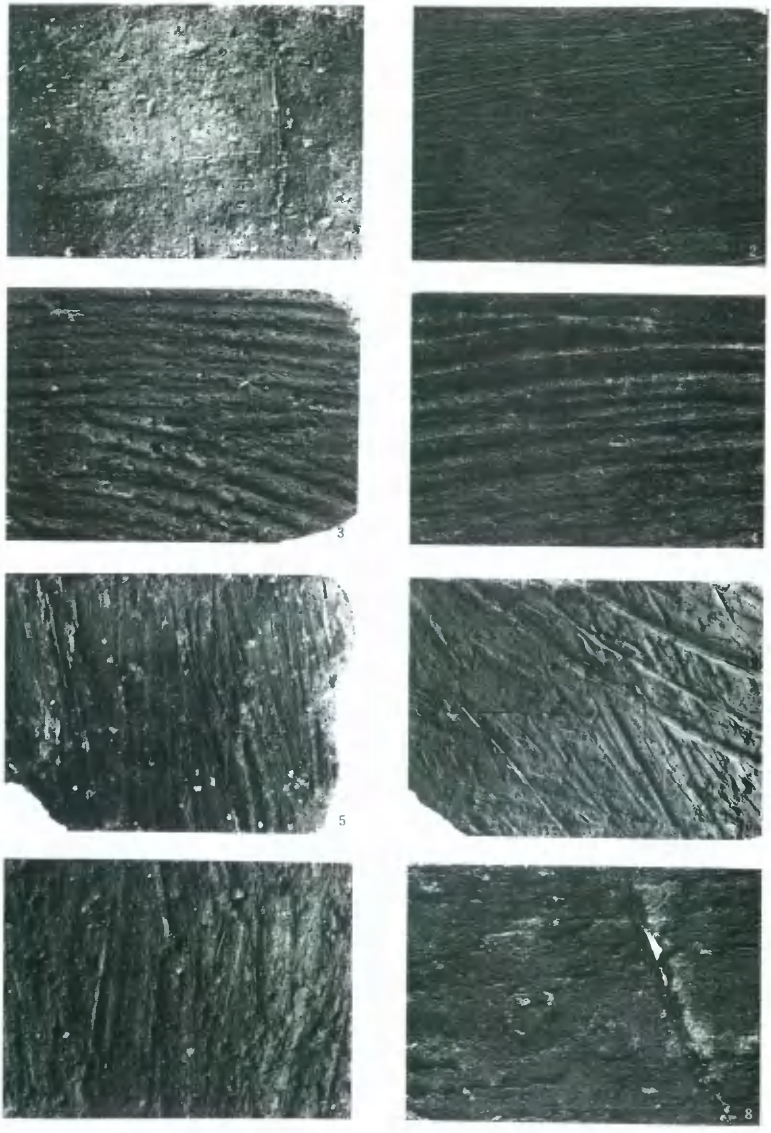

269
248
246
282
249
271
265
287
259
261
275

底部 1

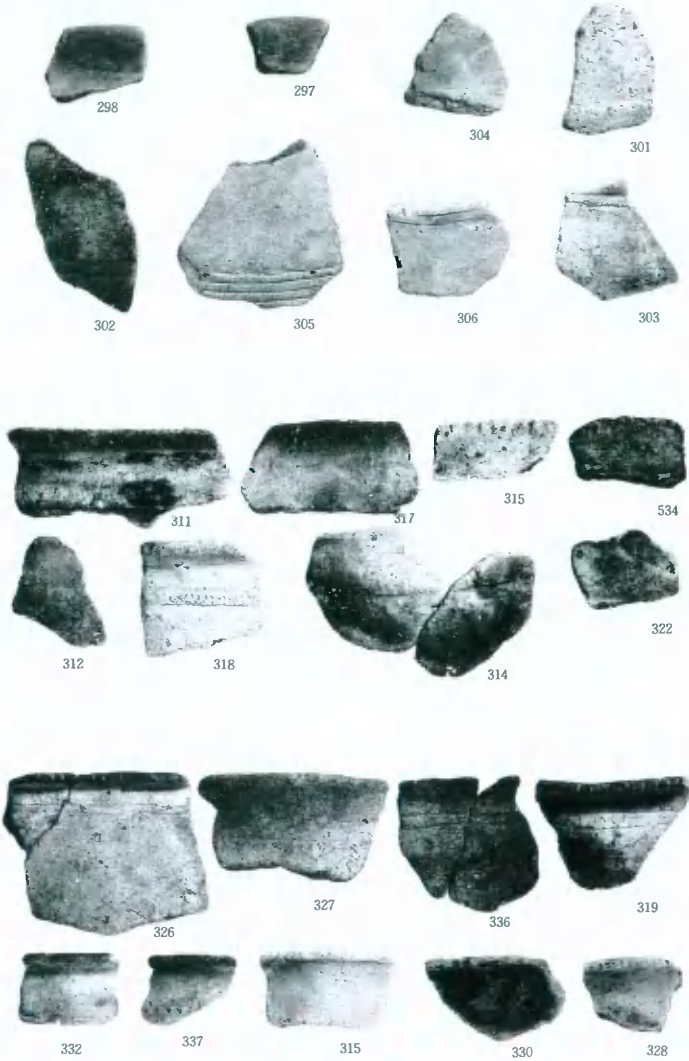

294
293
285
296
244
247
289
295
245
268
286

底部 2

図版34



1．ナデ　2．巻貝条痕　3・4．二枚貝条痕　5・6．条痕　7・8．ケズリ　縄文土器の調整


298
297
304
301
302
305
306
303
311
317
315
534
312
318
314
322
326
327
336
319
332
337
315
330
328

弥生時代前期

図版36

382

395

399

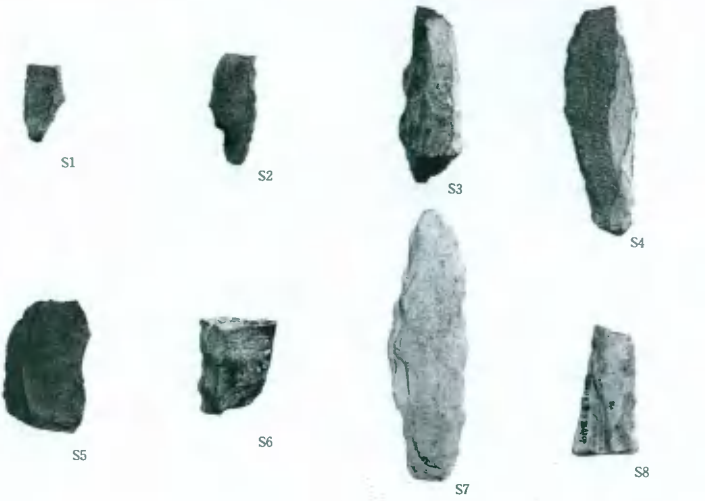
401

389

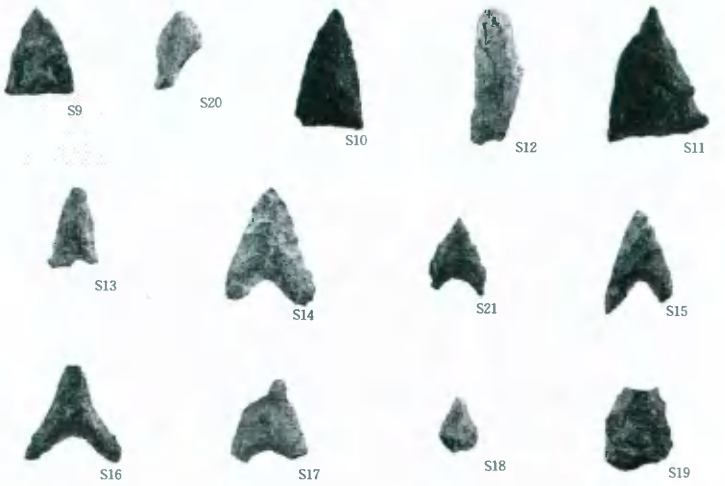
403

404

弥生時代～古墳時代

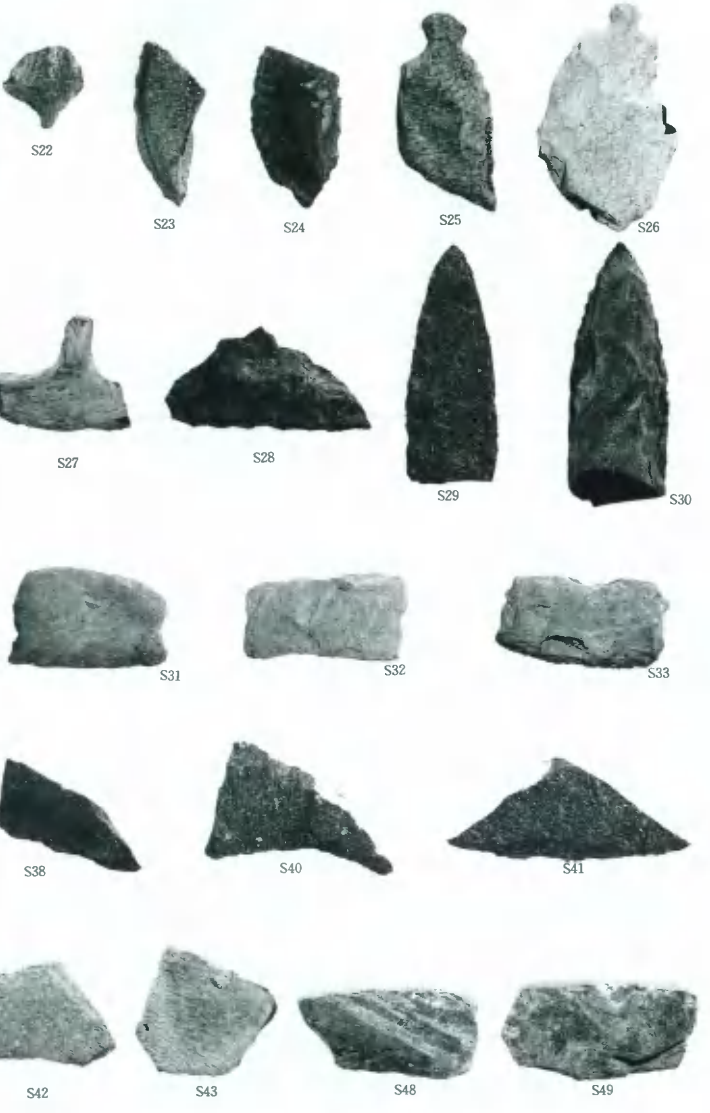

S1
S2
S3
S4
S5
S6
S7
S8

石器


S9
S20
S10
S12
S11
S13
S14
S21
S15
S16
S17
S18
S19

石器

図版38

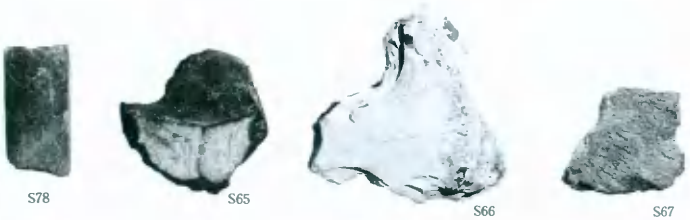

S22
S23
S24
S25
S26
S27
S28
S29
S30
S31
S32
S33
S38
S40
S41
S42
S43
S48
S49

石器

S50 S51 S53 S55

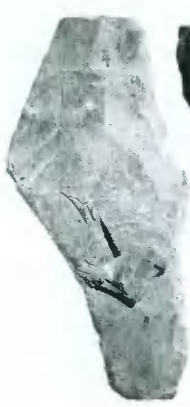
S56 S58 S59 S60

S61 S62 S63 S64

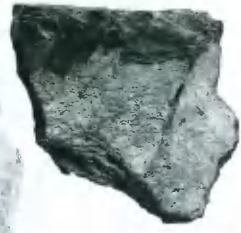

S78 S65 S66 S67

S68 S69 S70 S71

石器



S72



S73

S74

S75

S76

S 77

S79

S87

S88

S82

S86

石器

S108
S109
S110
S113
S114
S92
S93
S96
S97
S98
S99
S102
S103
S115
S116
S117
S119
S120
S121

石器

435

436

437

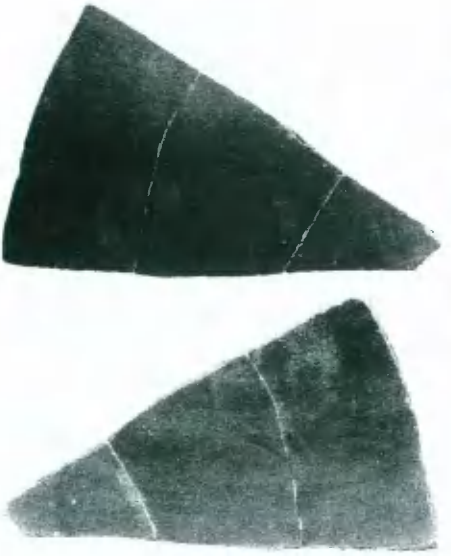
438

440

439

439

溝－1　出土土器

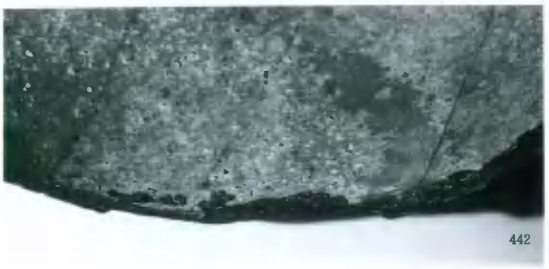


441-A

444
445

442

442



442

442

溝－1　出土土器

446

447

448

453

454

453

452

455

457

469

464

462

470

473

501

495

491

493

溝－1　出土土器

481

506

499

489

492

497

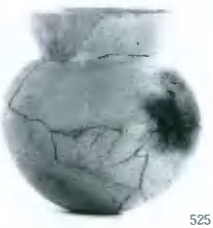
490

496

520

535

522



525

溝－1　出土土器

536

538

542

543

547

545

546

550

溝ー1　出土土器

573

579

581

575

574

558

577

溝ー1　出土土器

571

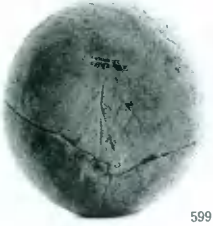
572

592

594

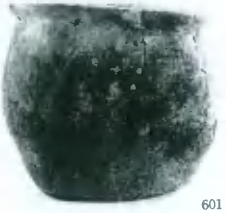
593

599

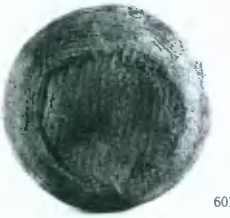

599

600

溝一1　出土土器


601

602


601

602

604

609

610

609

溝－1　出土土器

616

618

620

623

635

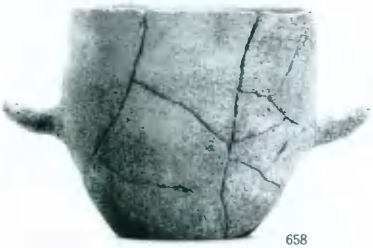
637

636

638

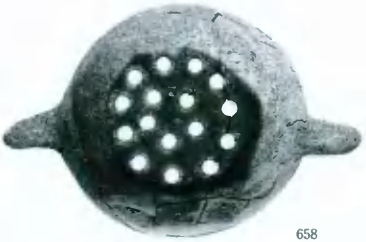
溝ー1　出土土器

651



658

651



658

666

666

666

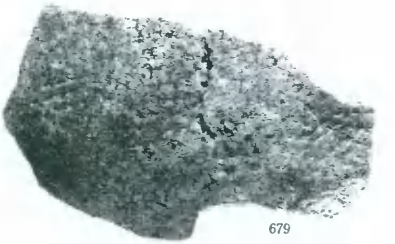
溝－1　出土土器

668

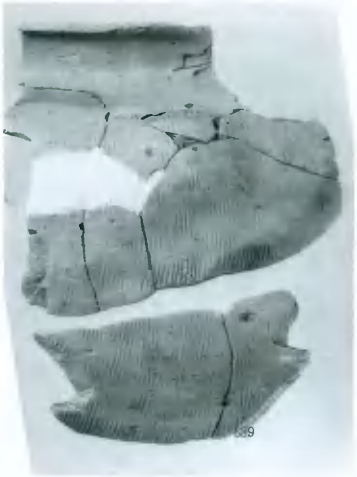
675

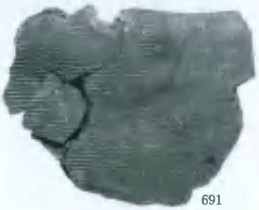
676
677

667


679

落ち込み－1　出土土器


689


691

690

697

695

谷－A（古墳時代）出土遺物

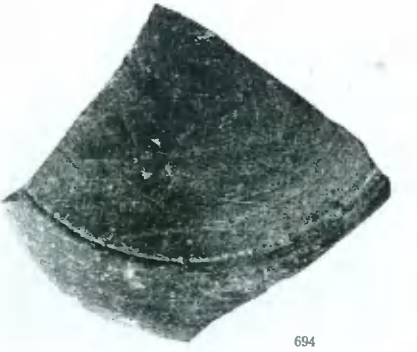
692

698

698

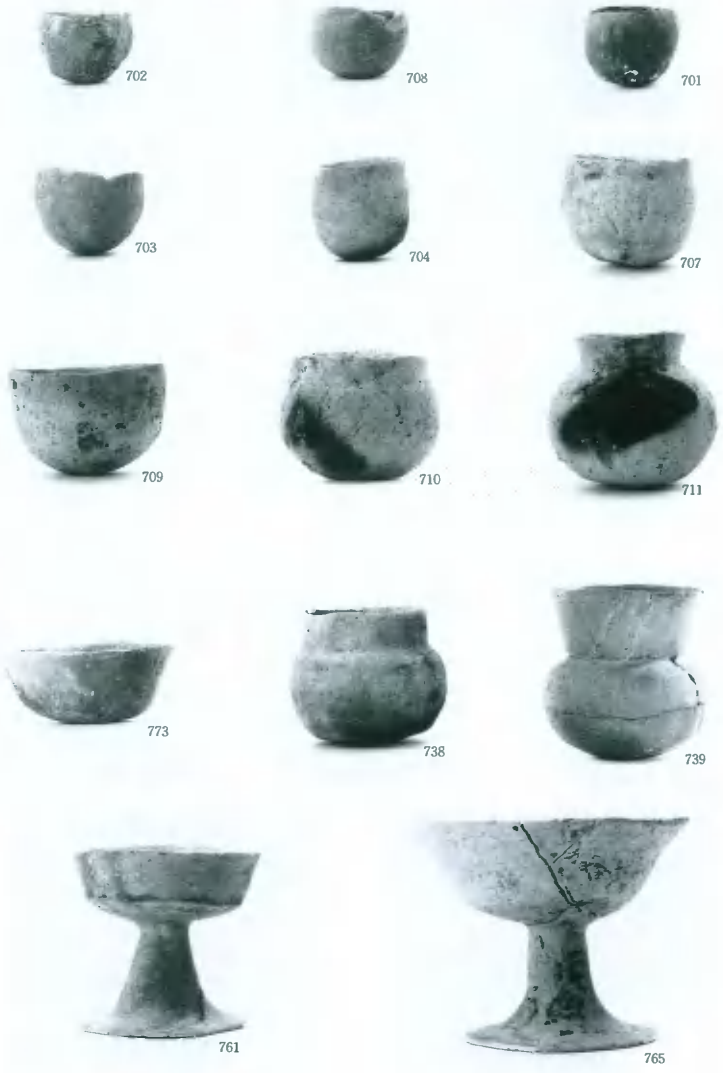
692

692



694

谷ー A （古墳時代） 出土遺物



谷ー A （古墳時代） 出土遺物

788

790

791

792

793

813

824

825

838

808

845

853

844

谷－C（古墳時代）出土遺物

855

864

860

856

862

874

875

谷ーC（古墳時代）出土遺物

890

886

892

887

885

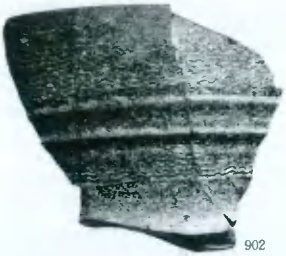
891

897

896

897

谷ー C （古墳時代） 出土遺物


902

903

910

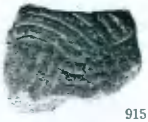
911

929

929

926

914

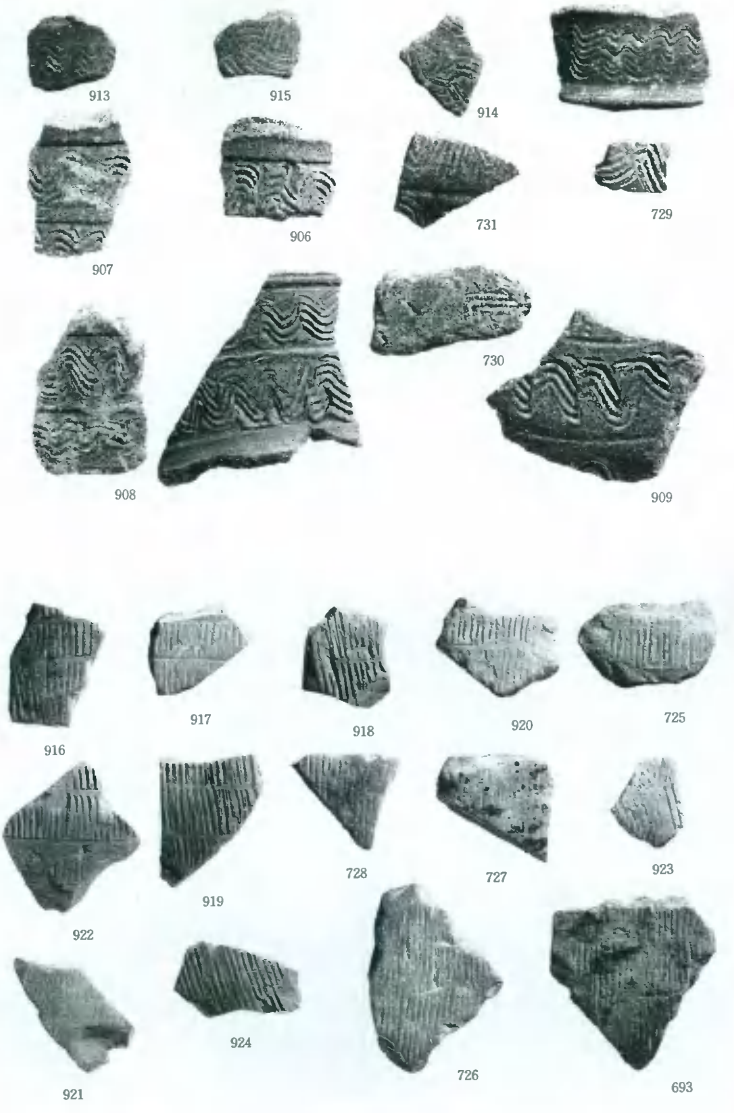

915

930

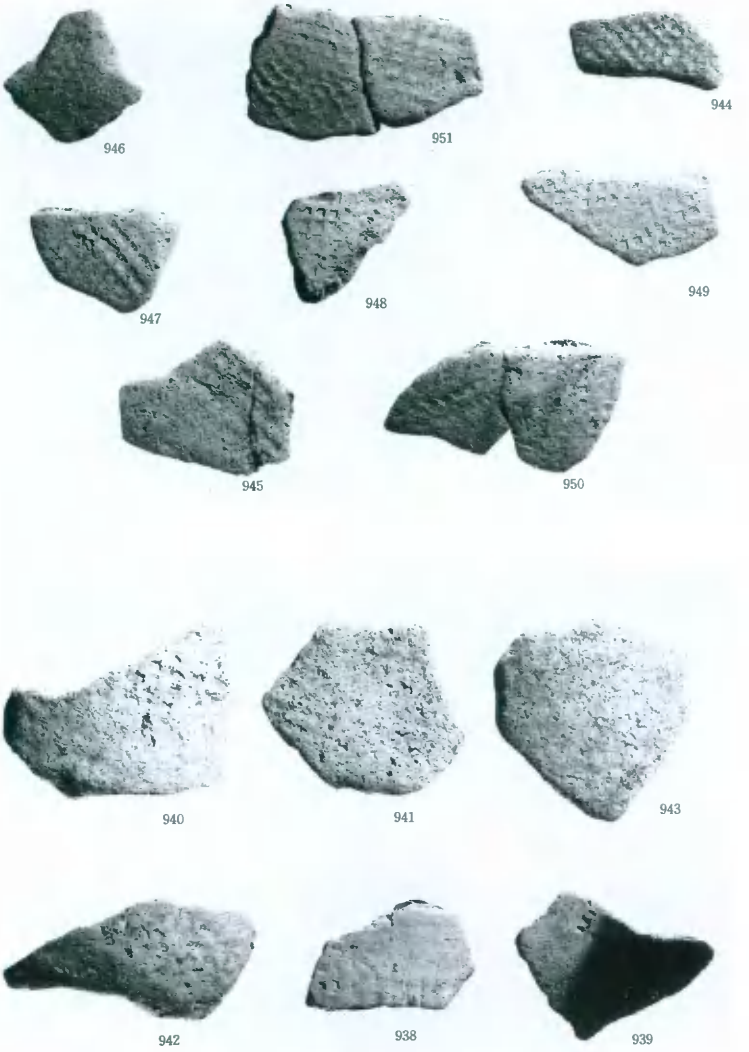
971

972

各調査区（古墳時代）出土遺物



各調査区（古墳時代）出土遺物



各調査区（古墳時代）出土遺物

S 126

S 122

S 125

S 124

S 123

C2

C3

C4

各調査区（古墳時代）石製品、土製品

374

1071

1034

1044

1129

1130

1055

1057

1058

1069

1067

1068

1076

1076

溝－2　出土遺物

1083

1087

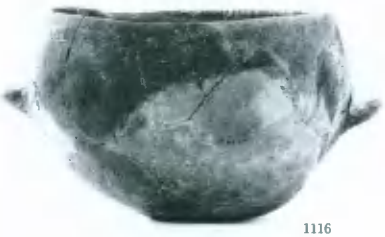
1084

1088

1095

1107

1098


1116

1120

溝一2　出土遺物

図版66

1148

1151

1154

1153

1165

1167

1173

1169

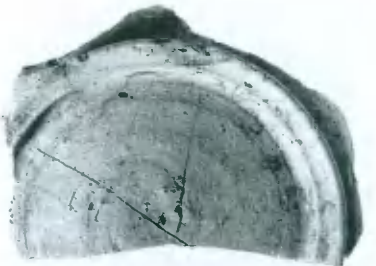
1174

1175

1172

1185

谷一A　出土遺物


1171

1170

1178

1192

1184

1194

1192

1197

1198

1199

谷一A　出土遺物

1202

1205

1219

1218

1211

1210

谷一A　出土遺物

1255

1258

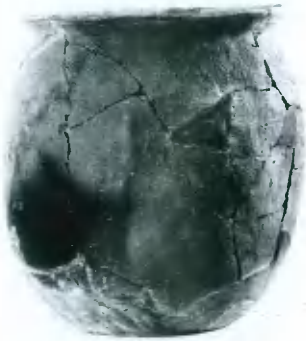
1253

1272

1261

1264

1285


1303

1288

谷ー A　出土遺物

図版70

1362

1359

1365

1366

1369

1376

1375

1372

1368

1380

1379

谷一B　出土遺物

1396

1394

1397

1393

1399

1400

1401

1490

谷一B　出土遺物

1405

1404

1418

1409

1415

1425

1414

1412

1428

1416

1429

谷一B　出土遺物

1431

1432

1442

1458

1465

1463

1451

1477

谷－B　出土遺物

図版74

1494

1491

1505

1503

1512

1514

1514

1521

1522

1519

1520

1539

谷－B　出土遺物

1584

1574

1716

1588

1616

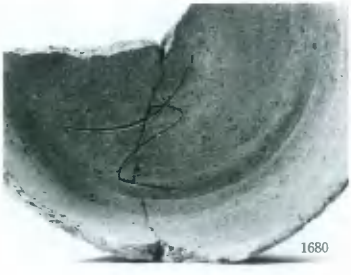
1622

1613

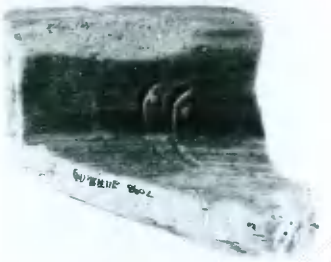
1620

1620

谷－C　出土遺物



谷ーB　出土遺物



1704

1697

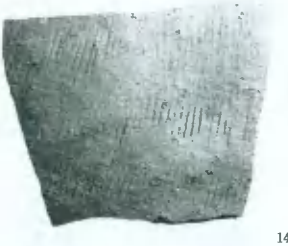
1701

1705

1694

1719

各調査区出土遺物



1466

1712

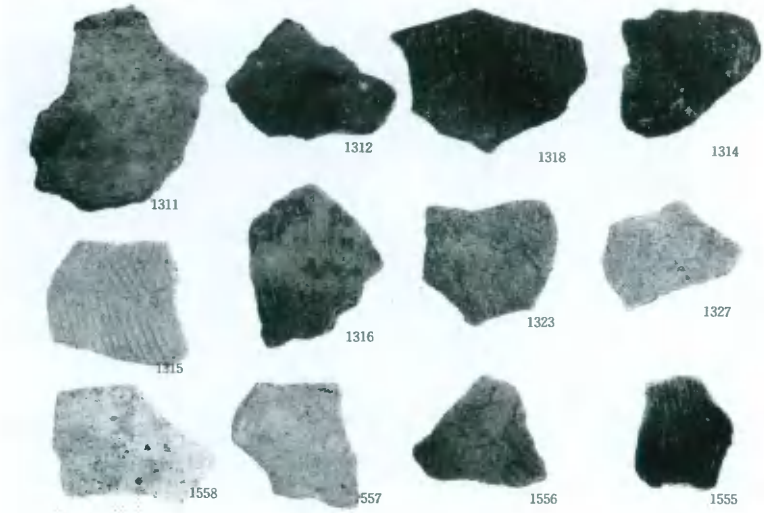
1467

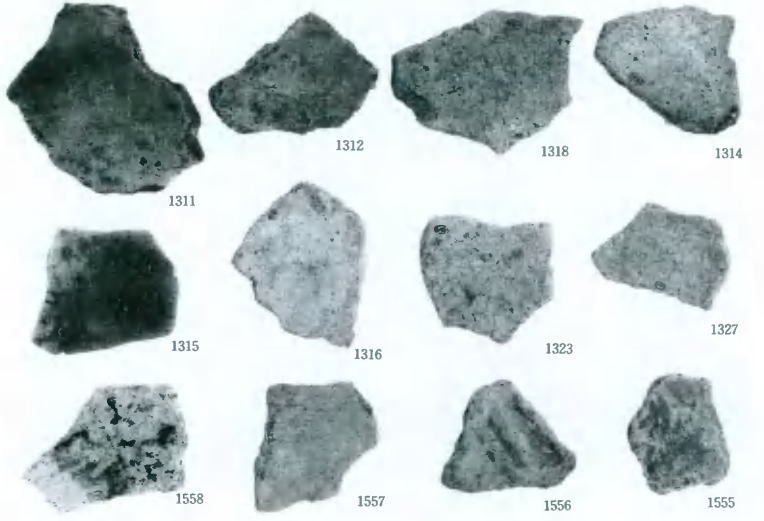
1466

1712

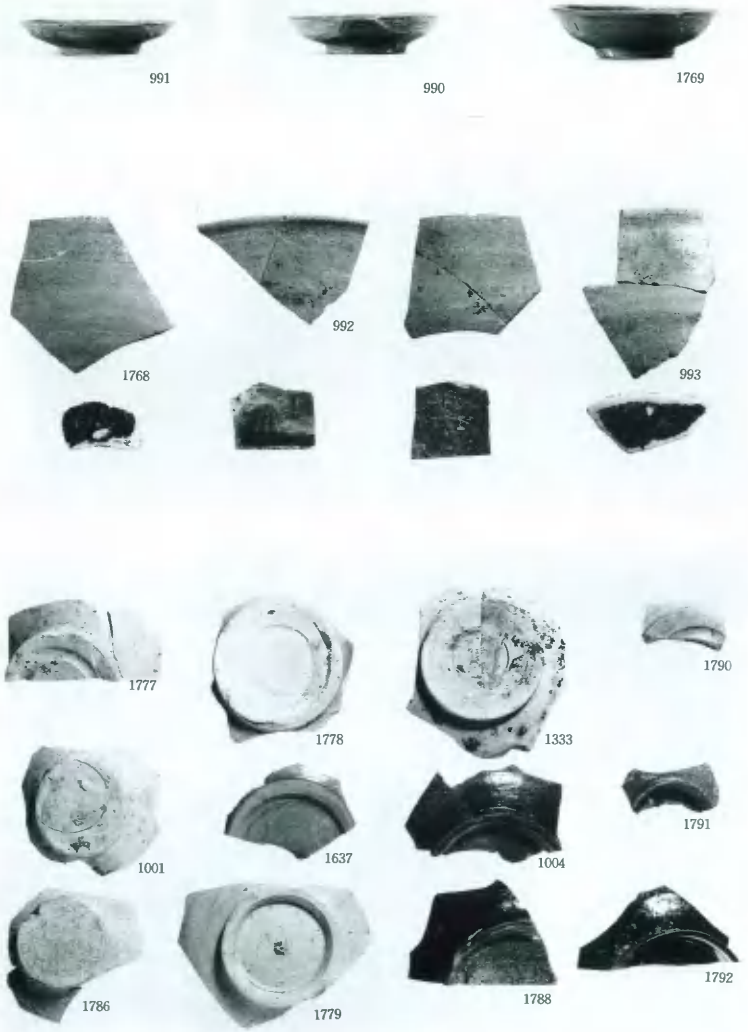
1467

各調査区出土遺物


1311
1312
1318
1314
1315
1316
1323
1327
1558
1557
1556
1555

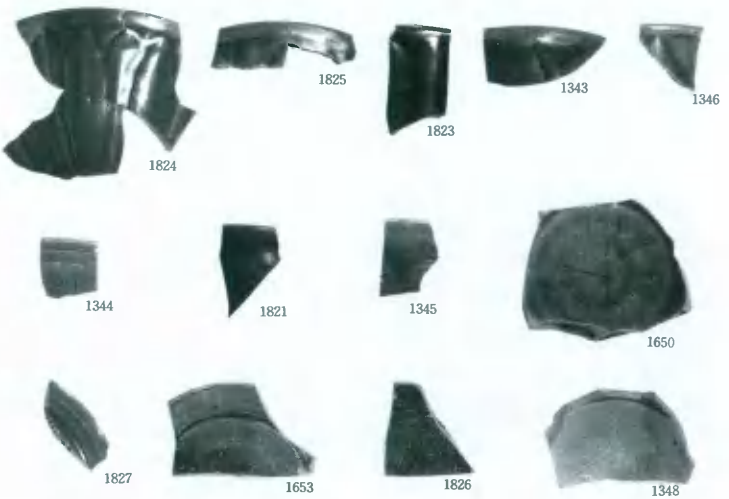

1311
1312
1318
1314
1315
1316
1323
1327
1558
1557
1556
1555

各調査区出土遺物

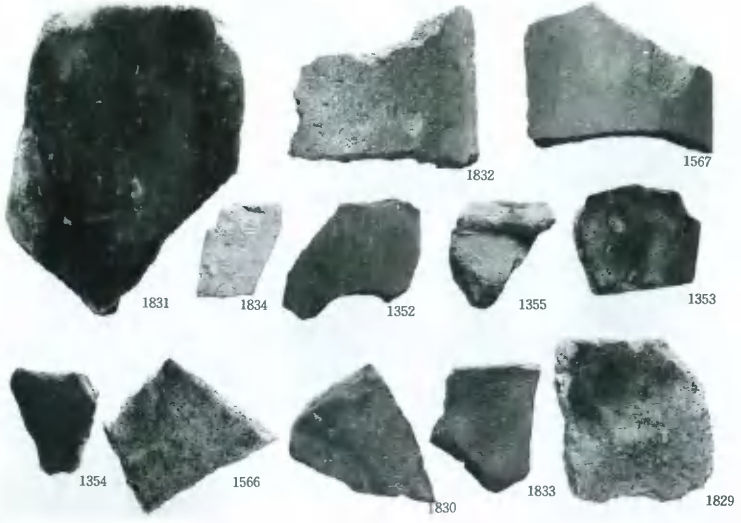

991
990
1769
1768
992
993
1777
1778
1333
1790
1001
1637
1004
1791
1786
1779
1788
1792

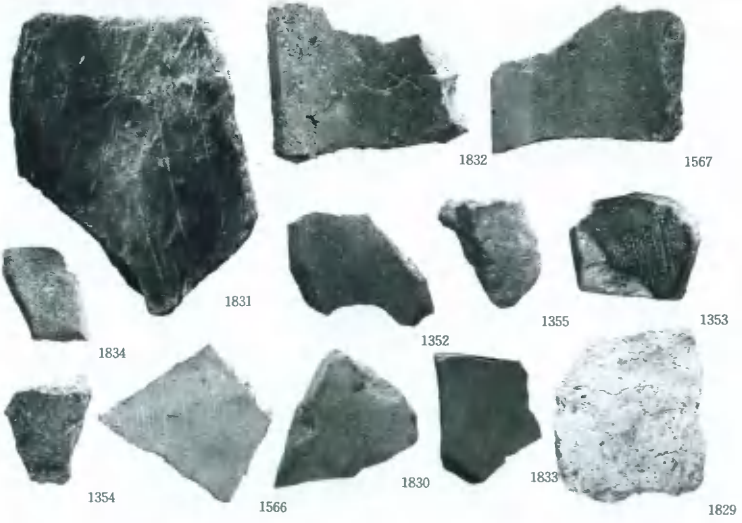
緑釉（各調査区）

1　白磁（各調査区）

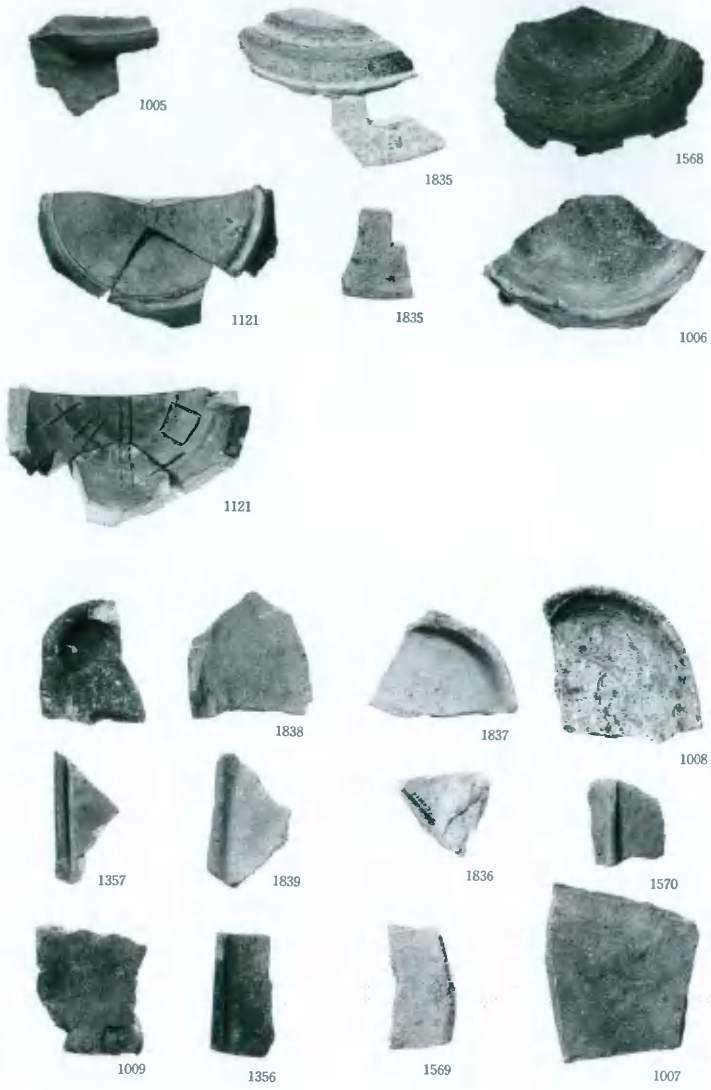


2　青磁（各調査区）

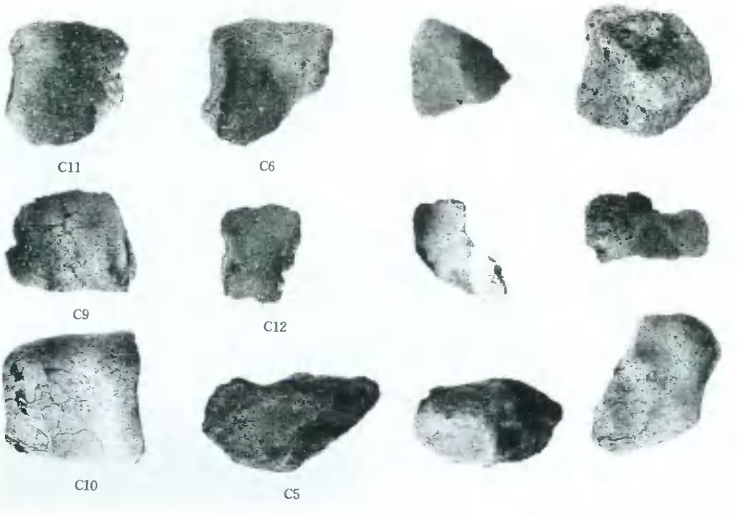

1832
1567
1831
1834
1352
1355
1353
1354
1566
1830
1833
1829

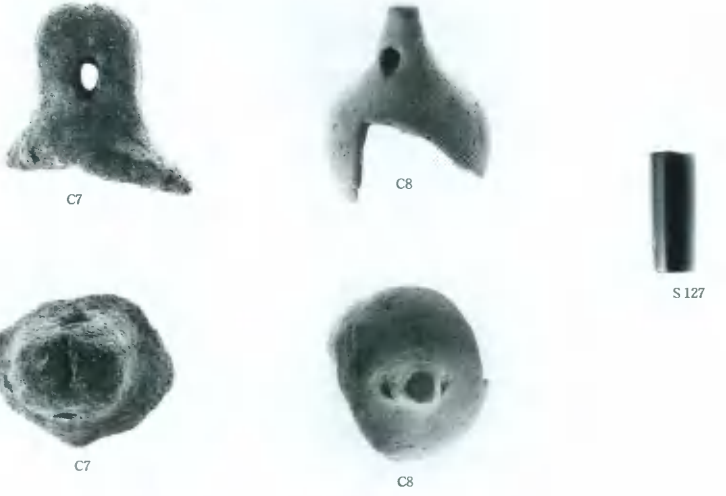

1832
1567
1831
1834
1352
1355
1353
1354
1566
1830
1833
1829

瓦　（各調査区）


1005
1835
1568
1121
1835
1006
1121
1838
1837
1008
1357
1839
1836
1570
1009
1356
1569
1007

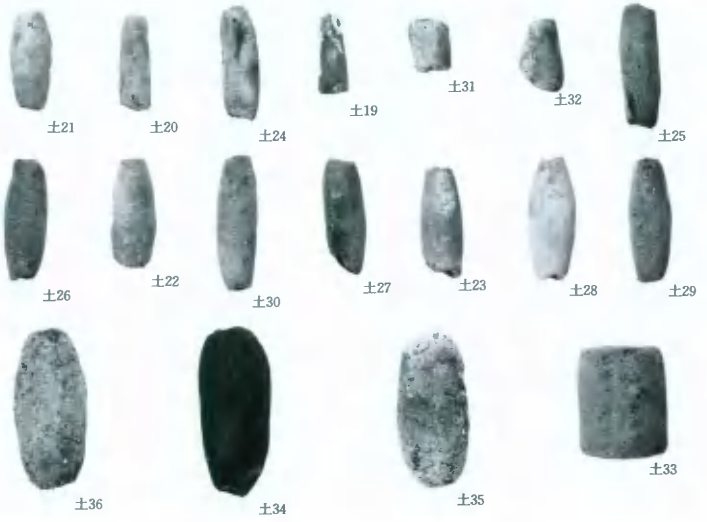
陶硯（各調査区）





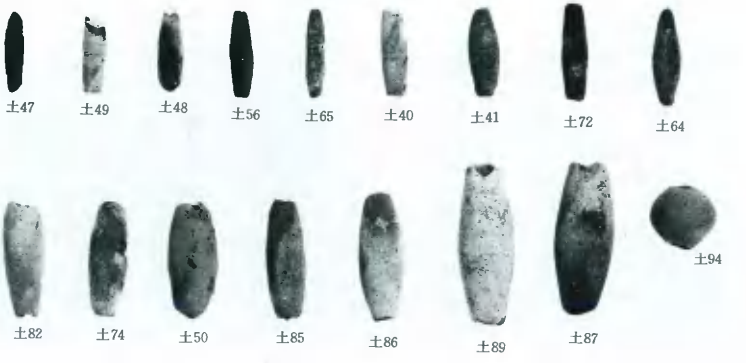
羽口・土製品・石製品（各調査区）

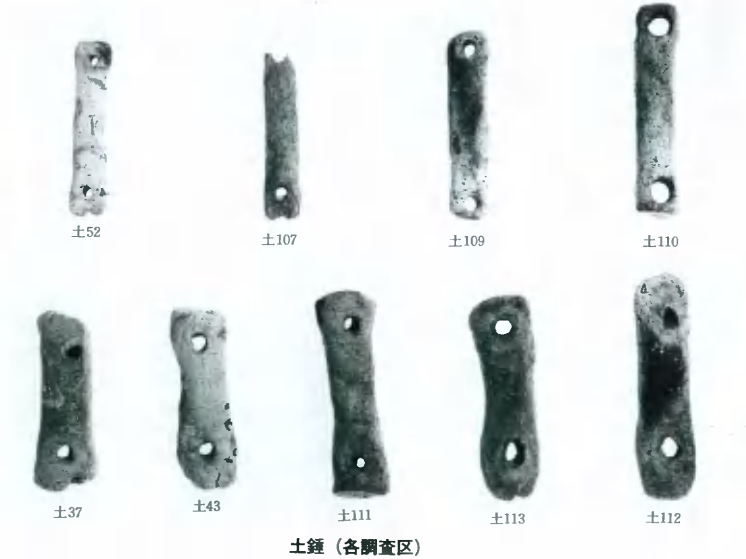
1．土錘（弥生前期）



2．土錘（溝－1）

図版86


土47
土49
土48
土56
土65
土40
土41
土72
土64
土82
土74
土50
土85
土86
土89
土87
土94


土52
土107
土109
土110
土37
土43
土111
土113
土112

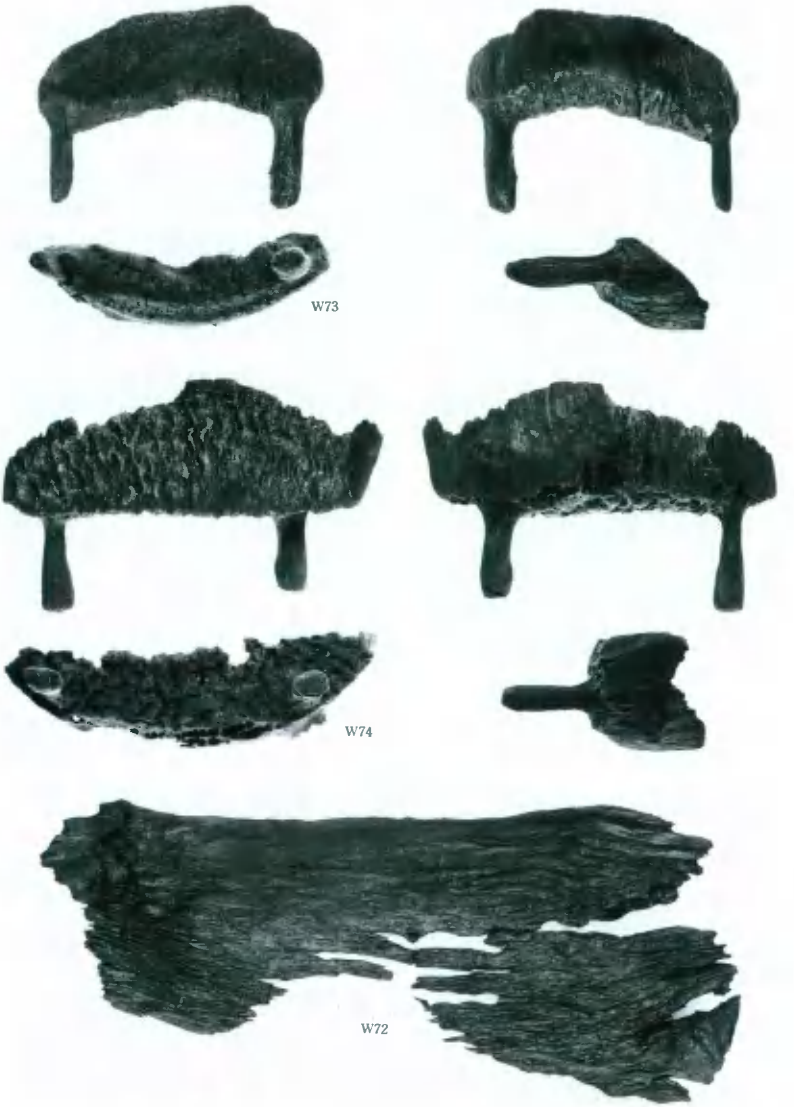
土錘（各調査区）

土壙、杭列出土木器

溝－1出土木器

溝－1　出土木器

落ち込み－１．谷－Ｃ出土木器



溝－１、２出土木器

W67

W69

W68

W70

W66

W71

溝－１、２出土木器

溝－１、２、出土木器

W56

W56

W56

W60

W59

W58

井戸－1遺構出土木器

井戸一３・包含層出土木器

1．調査時の状況

2．古墳全景（南から）

1．石室内部

2．左側壁

3．右側壁

1．墳丘断ち割りの状況

2．石室の石組み（南から）

1．石室の石組み（南西から）

2．石室の石組み（北西から）

1．墓壙全景（南から）

2．掘え方の状況

1．石室内の遺物出土状況

2．石室内の遺物出土状況（部分）

1．開口部の須恵器出土状況

2．骨蔵器の出土状況

1．木棺墓の検出状況

2．木棺墓の遺物出土状況

1．解体工事風景

2．調査参加者

1845

1846

1843

1848

1852

1849

1851

1850

古墳にともなう遺物

図版106

1853

1858

1854

1857

1855

1856

古墳にともなう遺物

石室再利用時の遺物

図版108

1863

1864

1886

1899

1891

1892

1895

1898

1897

1894

1887

1896

石室再利用時の遺物

1881

1883

1885

1882

1877

1884

石室再利用時の遺物

1879

1878

1880

I33

I32

I35

I34

I40

I27

I28

I23

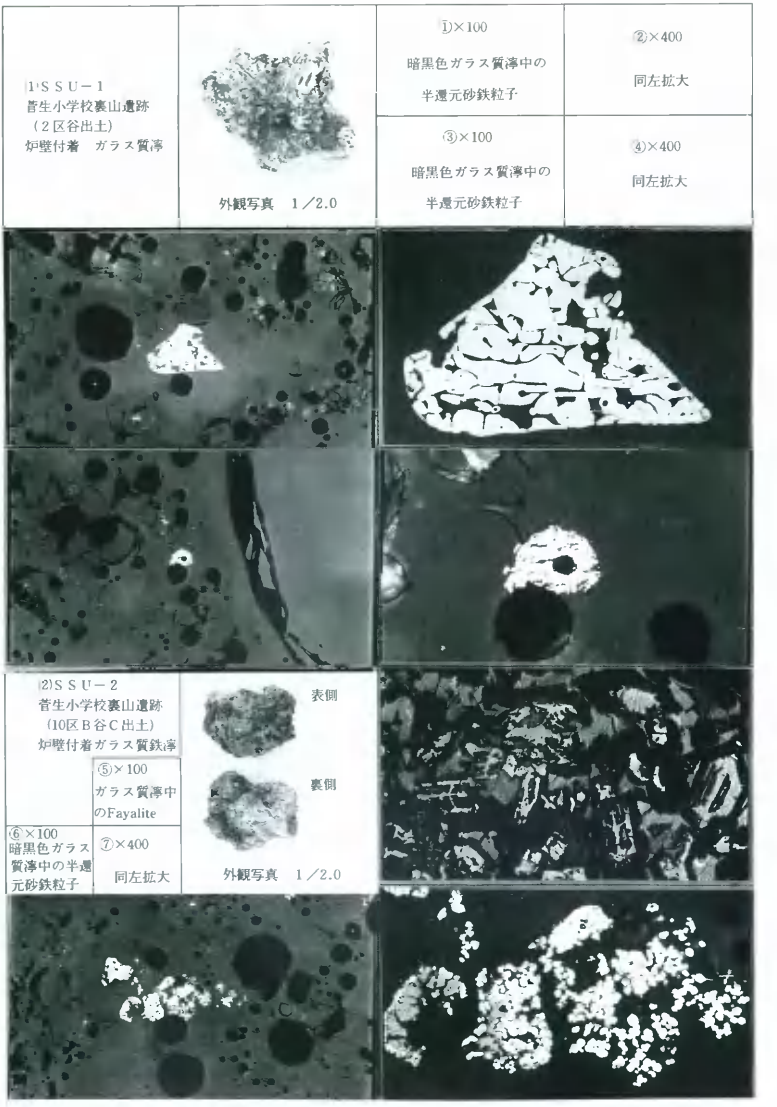
I24

I26

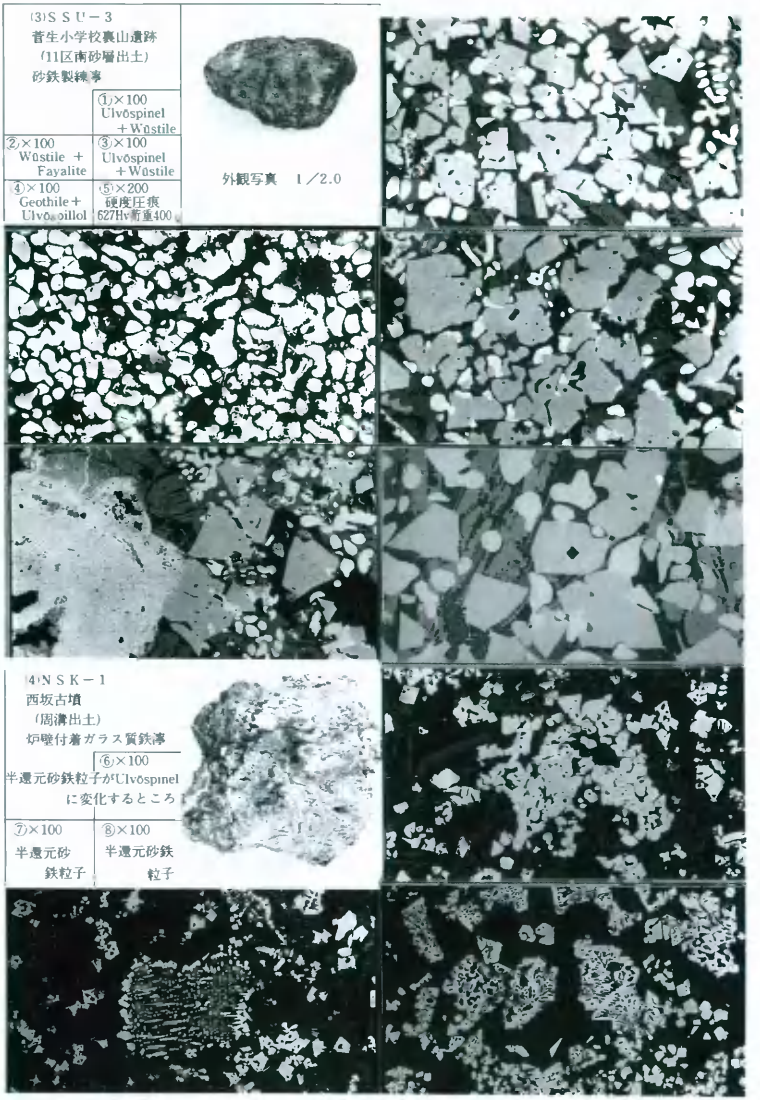
I25

I22

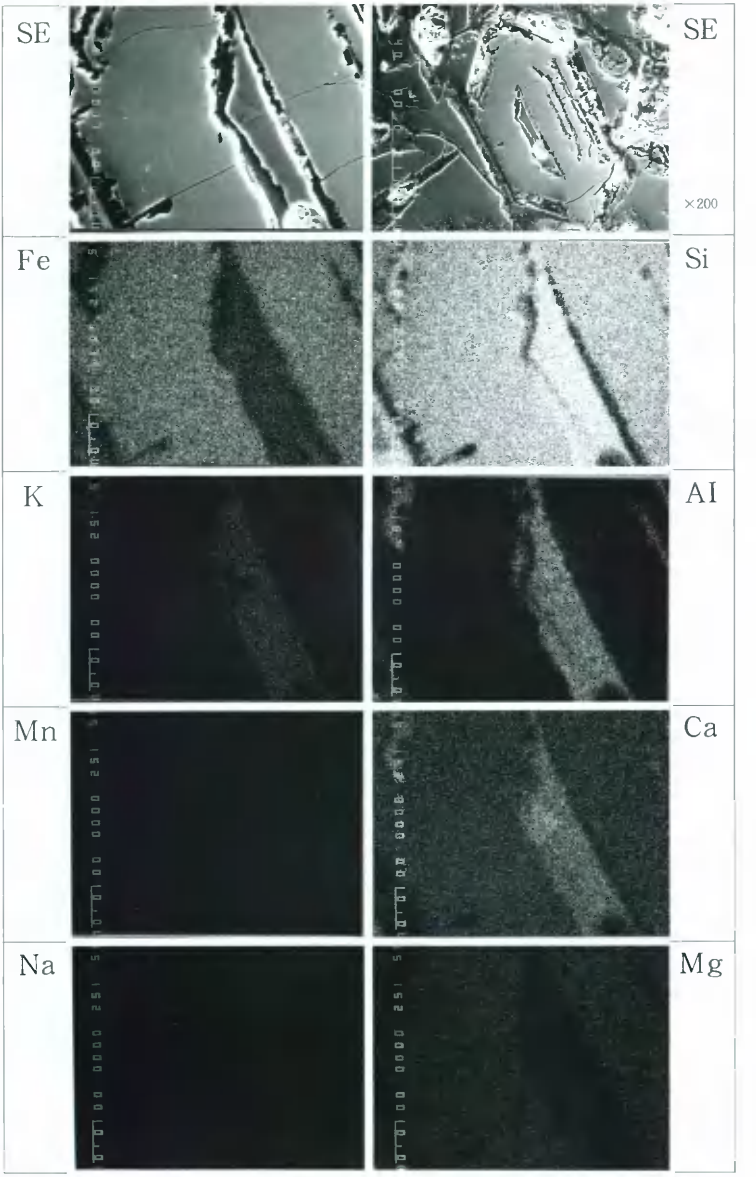
石室再利用時の遺物ほか



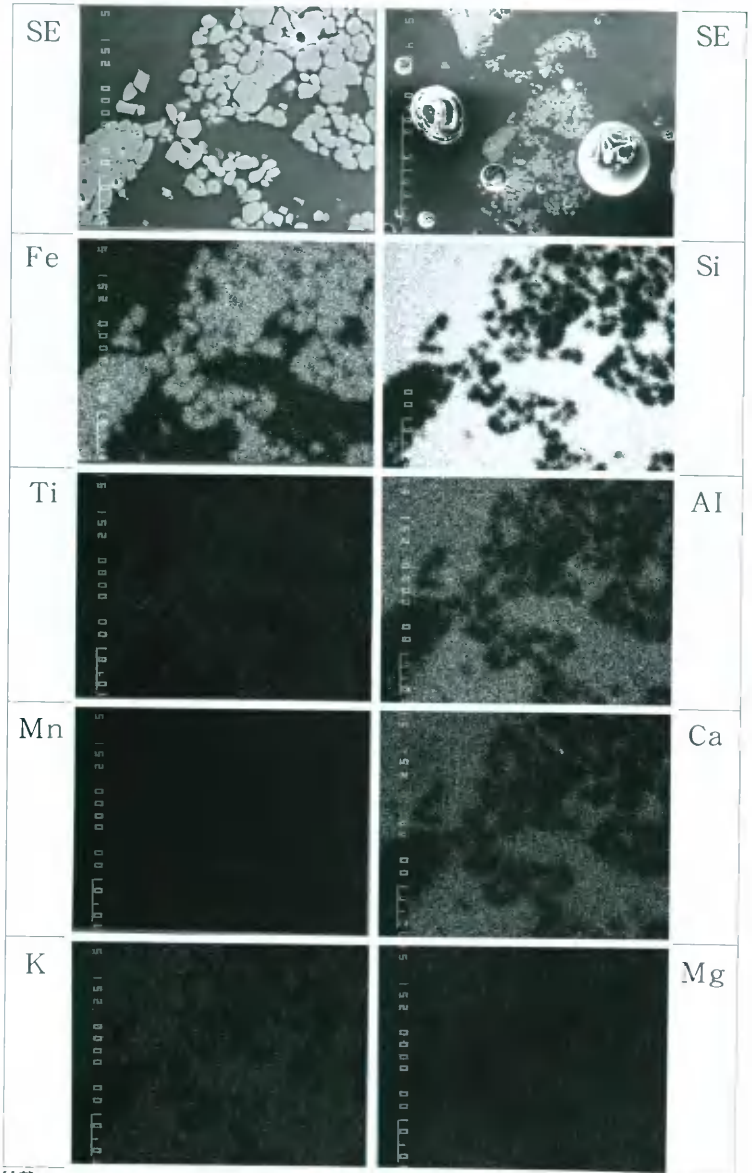
付載３　Photo. 1　炉壁付着ガラス質鉄滓の顕微鏡組織



付載3 Photo. 2 鉄滓の顕微鏡組織



付載３　Photo. 3　菅生小学校裏山遺跡出土炉壁付着ガラス質鉄滓（ＳＳＵ－２）の特性Ｘ線像　×1500縮少0.7



付載３　Photo．４　菅生小学校裏山遺跡出土炉壁付着ガラス質鉄滓（ＳＳＵ－２）半還元砂鉄粒子の特性Ｘ線像×1500縮少0.7

図版115

1．a・bオニグルミ核（12区溝３×1.5）、2．コナラ属果実（10区谷Ｃ井戸１×３）、3．コナラ属殻斗（同×６）、4．カナムグラ種子（同×６）、5．カラマツソウ属果実（同×６）、6．ウメ核（10区谷Ｃ井戸２×３）、7・8．モモ核（12区溝３×1.5）、9．サクラ属核（10区谷Ｃ井戸１×６）、10．カラスサンショウ核（10区谷Ｃ井戸２×６）、11．ノブドウ属種子（10区谷Ｃ井戸１×６）、12．ブドウ属種子（同×６）、13．メロン仲間種子（同×３）、14．ヒョウタン類種子（同×３）、15・16．オオムギ胚乳（同×６）

図版1

1．遺跡の近景（東から）

2．遺跡の近景（西から）

1．トレンチ1

2・トレンチ2

図版3

1．トレンチ3

2・トレンチ4

1．トレンチ4

2・トレンチ5

図版1

1．古墳からの眺望

2．調査前の状況

1．古墳全景（南から）

1．古墳全景（北から）

図版 3

1．古墳全景（東から）

2．古墳全景（西から）

1．下段の外護列石（南辺）

2．下段の外護列石（西辺）

図版5

1．下段の外護列石（南西隅）

2．下段の外護列石（北東隅）

1．上段外護列石（北東隅）

2．上段外護列石（南西隅）

図版 7

1．閉塞施設（南から）

2．閉塞施設（東から）

1．羨道左側壁

2．羨道右側壁

図版 9

1．横穴式石室

2．遺物出土状況

1．周溝内の配石

2．配石遺構

図版11

1．石室解体風景

2．石室解体風景

1．復元後の古墳（南から）

2．復元後の古墳（北西から）

図版13

古墳出土の土器

1．古墳出土の土器

2．古墳出土の鉄器

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告　81

山陽自動車道建設に伴う発掘調査

5

(表・図版)

１９９３年３月20日 印 刷
１９９３年３月31日 発 行

編集　岡山県古代吉備文化財センター
発行　日本道路公団広島建設局岡山工事事務所
　　岡山県教育委員会
印刷　岡山県農協印刷株式会社